

【完結】 コケダマですが、 なにか？

あまみずき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蜘蛛世界に蜘蛛子のためのヒロインキャラを追加して、ヒロイン属性オリ主と蜘蛛子のW主人公モノ。

——授業を上ので聞いていたら、突然の激痛と暗転。気付けば苔玉のような魔物に。

そんなコケダマが絶望と狂気に向き合いながらも突き進み、とある蜘蛛と共に過酷な世界を生きていく。

その果てに、二人は「神髓」へと至るだろう。

目次

エルロー大迷宮

1	転生そしてコケダマ (22/03/25加筆)	1
2	森羅万象の実力と罫 (22/04/11加筆)	14
3	はぐれたコケダマ	23
蜘蛛1	決死の攻防戦の乱入者	32
4	(二人で) 進化するよー!	41
5	灼熱の中層へ	50
6	ナマズいるならウナギもいるよね	60
7	不思議な進化先	69
蜘蛛2	コケちゃんについて	79
8	クイーンと火龍	91
9	管理者	103
10	禁忌LV10	112
蜘蛛3	どうして仲間と争うんですか?	121
蜘蛛4	正気に戻って	130
おまけ1	設定ですが、なにか?	138
新たな世界へ		
R1	悪夢と亡霊	146
11	それぞれの宿敵	157
12	苔VS地龍	168
13	私たちの戦いは、これからだ?	176
14	外に出るぞー!	186
15	蜘蛛の王	196
16	蛾の羽撃きは異世界で竜巻を引き起こすか?	204

17	神仰	214
蜘蛛5	魔王	225
18	王と魔王	233
19	人形遊び	242
蜘蛛6	人形遊び()	250
20	追いかける者たち	259
21	ザトナの子の悲劇	268
22	敵意の墮天使	276
23	殴りアイの大喧嘩	287
おまけ2	So I'm a Config, So what?	299
旅の始まり		
24	よい道連れは、悪魔の所業	307
血1	旅は憂いもの辛いもの	315
25	可愛い子には服を着せよ	324
26	旅の恥はかき捨て	333
王1	悩める魔王	342
王2	悩める者達、少女は1人蚊帳の外	352
勇者1	人の正義、魔の正義	362
27	旅に出ると性格が現れる	372
28	ゆつくり行くほど遠くへいける	384
幕間1	苔・白	393
幕間2	他者視点ズ	402
神と人と		
29	風蝕の荒野	412

30	人魔龍妖	421
31	高度三千Gフリート攻略戦	429
32	天使再臨	439
33	新たな力、失った力	451
蜘蛛7	凍てつく山脈、凍てつく苔	460
蜘蛛8	震える私、狂える鬼くん	468
蜘蛛9	目覚めた龍、覚醒めた力	477
34	眠っていた時間、眠っていく魂	486
35	向き合う想い、向き合う自分自身	496
鬼1	劍神 敬意於其刃矣	506
魔族領と戦争に向けて		
挿話1	執事から見た彼女たち	516
36	つかの間の休息	529
鬼2	黒鉄縄抱刀解受苦処	538
37	次なる目標	547
38	未来へ向けて	557
蜘蛛9・25	記憶の中の故郷へ1 (22/07/08挿話)	566
蜘蛛9・5	記憶の中の故郷へ2 (22/07/08挿話)	578
587	蜘蛛9・75 記憶の中の故郷へ3 (22/07/08挿話)	
勇者2	引き継がれるモノ	605
幕間3	天体観測	616
幕間4	ハロウィン	626

血2	吸血鬼のあり方 (22/06/19挿話)	635
血3	ソフィアとして生きる (22/06/19挿話)	643
39	そして、戦争へ	652
40	そして、戦火は巡る	660
41	そして、暗闘は始まる	669
42	そして、勇者は地に墜ちる	678
S1	追悼	688
学園と暗躍		
43	反省会議	697
44	回想録：敗北者の慟哭	706
45	回想録：帝国の皇子	717
S2	不穩	727
S3	転落	737
帝1	黒幕の実働役というお仕事	749
聖1	夢見る乙女	758
S4	脱出	767
S5	慈悲	777
46	非公式会談	789
竜1	フェイルーン	798
S6	迷宮	805
S7	踏破	816
K1	転換	827
鬼3	心鬼身責	840
S8	脱出	848
S9	禁忌	859

蜘蛛10 システムについて復習しよう

蜘蛛11 システムに喧嘩を売ろう

蜘蛛12 かつての自分たちと戦おう

滅び墜ちるエルフの里

47 決戦前

48 狼煙を上げろ

49 神格到達者

S10 旧交

S11 急転

S12 窮境

50 闇に酔う

蜘蛛13 死へと堕ちた乙女

51 終戦：王に寄り添う者達

再会する転生者たち

52 黎明の始まり

S13 真相

53 私の本質は

蜘蛛14 無知の虜囚たち

54 死に掛けの星

55 聖女と翠星と、白蜘蛛と

56 説明会の終わり

57 残された者達の決断

58 変革の兆し

59 黒の過去語り

60 白翠の救済案

870

883

897

911

923

934

945

953

963

976

986

997

1011

1022

1033

1044

1055

1065

1076

1089

1100

1109

1120

61 彼の元へ黄泉還れ、我らが愛しき人よ

大厄災 | G i g a n t o m a k h i a |

大厄災 | 始まり |

準備段階 | 帝国 |

準備段階 | クニヒコ・アサカ |

準備段階 | 教皇 |

準備段階 | 魔族 |

準備段階 | シュレイン |

準備段階 | シュレイン2 |

準備段階 | シュレイン3 |

準備段階 | ギュリエ・サリエル |

準備段階 | アリエル・白織 |

翠魔 | C o r r u p t i n g S p i r i t s |

大厄災 | 開戦 |

翠魔ケルベロス

翠魔ステュクス・カロン

翠魔ニユクス

転生者たち

地獄の門番、死界の川 | 決着 |

冥府の魔精 | 決着 |

魔神ペルセポネ

翠の芽吹く星

白糸が織りなす想い

翠魔レルネー | 1 |

抗う人類、舞う天月

1132

1235122512161207119711861175116411541143

135113441336132613141304129412871277126612561250

翠魔レルネー

— 2 —

翠魔レルネー

— 3 —

紡いでゆく、翠白の報恩譚 — Eleusis —

苔よ森よ、真理たれ

天照らし紡げ白蜘蛛の恩返し

虚言弄す闇黒の遊技盤

我こそ冥界支配せし邪神なり

最終決戦 — 白恒織星・天廻翠星・未確法則 —

生命芽吹け翠の星、天地紡ぎし再誕する楽園

天廻翠星は再誕する

エピローグ

あとがき

エルロー大迷宮

1 転生そしてコケダマ（22／03／25加筆）

翠が舞い、吹き荒ぶ閃光の弾幕。

それを掻い潜り、純白の線が空を走る。

光の差し込まない巨大過ぎる洞窟のような場所で、魔物としか言いようの無い地球上のどの生物とも当てはまらない怪物同士が争っている。

耳を劈くような絶叫を上げ、削り合う魔物たち。

その攻撃その一撃一閃が、命を容易く奪うような苛烈さを宿しつつも、何故か怖いよりも哀しいと感じてしまうような、悲壮と嘆きに満ちた戦い。

場面が移り変わる。

今度映っているのは、魔物では無い。

けれど、人でも無い。

言うなれば、半人半虫といったところだろうか。

二人の人外は、お互いに殴り合う。

それは泥臭いような、けれど真に相手を想うからこそその、美しくて綺麗な戦い。

また移り変わる。

先程の二人が、互いに信頼しあいながら、共に戦う。

場所や距離なんて、関係無い。

彼女が戦うから、私も退かずに戦う。

信頼で結ばれた絆は、二人を同じ目標へと引っ張っていく。

そして自らの影と向き合い、駆け抜けた道の先。

二人は、再び対峙する。

片方は白、もう片方は翠。

その時こそが、因果と宿命が絡まる終着点。
運命の糸を紡ぎ、辿り着いた未来とは……

「さあ唱え、訴えろ。激情を融解させ、叛逆の祈りを紡ぐのだ、白蜘蛛よ。

祝福とその愛で、暗闇の世界を癒やすのだ、翠の乙女よ。

全ては、■■■■を再誕させんが為に——」

窓の外に浮かぶ雲を眺めて、似たシルエットを探しては想像を膨らませる。

あれは犬かな？　あれは顔かな？　あれはもふもふしてて気持ちよさそうだなあ。

教壇では古文を音読して解説している先生が、小さな身体で精一杯興味を持ってもらえるようにコミカルに動いて頑張っている。

それでも授業を真面目に聞いているのは一体何人いるのやら。

私も窓の外に意識を飛ばしているの、不真面目な一人。

私、苔森こけもり 真理まりは退屈から、興味を引かれてしまった雲探しに意識を飛ばしていた。

雲、雲、雲、蜘蛛……

先生が保護した教室の隅で巣を作っている綺麗な白い蜘蛛が目に入り、じつと観察する。

あの子もつと近くで見たいなあ。

でも巣が高すぎて、私の身長では遠くからしか見ることができない……あんまり成長しない我が身が憎たらしい。

でも小さいからこそ、地を這う小さきものや細かいものにも気付けるのが、良いところであると私は思っている。

だれも見向きもしないような小さな植物や苔が、様々なかわいさを持っているのを知っているのは私だけの特権である。

そう思いたい。

はああ。

早く帰ってコレクションを愛でたいなあ。

拾った綺麗な石、押し花、テラリウム、そしてまんまる可愛いコケダマたち。

あまり知識は無くとも、その見た目に惹かれて育てている日々の癒やしたち。

そんな取り留めない思考をグルグルさせていると、目を眩ませる白き閃光と一瞬の衝撃と激痛が突き抜けた。

今までの人生で一度もなく、そしてこれからも感じることはないであろう痛み。

それは私という人間が死んだ痛みだった。

痛い……あれ？ 痛くない？

さっきのは、一体何だったのか？

あれはまるで、全身がバラバラになったと錯覚するような、全身くまなく痛くないところなんて何処にも存在しない、恐ろしい痛みだったと記憶がフラッシュバックする。

今は痛みも何も感じないけど、真っ暗で何も見えずドロドロのコールタールの中にいるような感覚。

それになんだか、身体は全然動かせないし、周りを囲まれていて小さな箱の中に閉じ込められているみたいだった。

これはいつたい？ ここはどこだろう？
この場所を冥界とするのなら、今こうして意識や感覚があるのも変な話だろう。

もしかして私は、あの時に酷い重傷を負っていて、ここは最先端の医療技術によって作られた機械の中であるとか？

そうだとしたら一命を取り留めたけど、いままでずっと昏睡状態に陥っていて、そして今意識が目覚めたのかと。

それにしては伝わってくる身体感覚というモノがなにかおかし

いのが気になるし、意識を集中させると葉っぱが擦れるような、サワサワザワザワという音が聞こえる。

最先端の医療が行われる場所に植物があるの？

そんな違和感を憶えつつも、どうにか動けないかと曖昧な感覚を頼りに藻掻いていると、ナニカが割れるような音ともにひんやりした空気に晒された。

外！ 出られる！

ナニカの外にはモサモサした緑でさらに覆われていて、ナニカから出てきたとき溢れたベトベトした液体で濡れた体は、まるで身を振るようにしか動かず普通では無い。

けれど、そんな事は意図的に無視して、外にある緑のモサモサをくつつき絡ませながら、なんとか脱出した。

光だ！ 動ける！ 生きている！

そして目の前に広がる光景に絶句した。

見渡す限り、ノソノソと動く大小様々なコケダマのような緑の塊、塊、塊……

薄暗い洞窟の中に、まるで山のような大きさのコケダマもあれば、小さいものでも大型犬程度はありそうなコケダマもいる。

そして、薄い翅を羽ばたかせて、何故か宙に浮いているコケダマも。よく見ると頭と思われる部分には、隠れていて分かりづらいけれど虫のような複眼と口がある。

そして今、私のすぐそばから飛び出し、苔のようなモノを絡ませる丸々とした芋虫が、視界一杯に映り込んできていた。

そしてそれは、今の私の状況と同じみたいで……

どうやら私、虫に、それもコケダマのような生き物に転生してしまっただけみたいです。

孵化して一時間くらいたった頃。

卵から出てきたときに絡みついていた液体が乾燥しきり、それはこ

の芋虫のような体に苔を定着させるための接着剤の役割をはたして、芋虫の体と苔が一体化したことを本能的に理解した。

このまま成長すると、苔で全身を覆われてコケダマもしくはマリモといった外見になるであろうことは、簡単に予想がつく感じである。

正直、もふもふモサモサした見た目は中身が虫であるとしても、けっこう可愛いと思ってしまったのは紛れもない本心だった。

……ただ、それが自分自身の姿でもある事に、複雑な心境も抱いていた。

転生、それも人外で虫だなんて、気落ちしてしまうのも無理も無いだろう。

けれど、落ち込んでいてもしようがないと様々な感情に蓋をして、現在を把握するために思考と観察に、時間を費やしていた。

まだ生まれたばかりでロクに動けない私は、ひたすら周囲を観察して視線を巡らせる。

実は私がいたところは、巨大な山のようなコケダマの背中の上で、私たち生まれたばかりの幼虫や卵を、自分自身の苔に匿うことで守っているみたいだった。

私の兄弟姉妹たちは、そんな慈愛に満ちた家主さんの一部である苔を、恩など知らないとばかりにムシャムシャ食べているようだけど。

まあ、そんな姿を見ていた私も、幾らか空腹を感じていたので、実際に食べてみた。

鼻に抜けるような強烈な爽やかさと、少しピリピリする刺激的なお味。

めちやくちや強烈なミント？

お口直しや眠気覚ましには良いけど主食として飽きそうだなあ。

そう思う味だった。

そして周囲には子育てをしているコケダマを守るように、無数のコケダマが壁となって展開し巨大な群れを作りながら、ゆっくりと洞窟の中を移動していた。

洞窟、……そう、ずうーと洞窟の中である。

何故か、殆ど光が無い洞窟の中であるにも関わらず、周囲をきちんと見て認識することが出来ているけれど、目に映るものはほぼ全て岩、岩、岩……

岩しか見当たらない！

変化がなさすぎて、退屈である。

せめて、どんな材質なのか鑑定できればいいんだけどなあ。

そんなことを、苔をムシヤムシヤ食べつつ思ったら、頭の中に突然女性の声が響いた。

《熟練度が一定に達しました。スキル「麻痺耐性LV1」が「麻痺耐性LV2」になりました》

《現在所持スキルポイントは70000です。

スキル「鑑定LV1」をスキルポイント100使用して取得可能です。

取得しますか？》

んむうつ!?

不意打ち気味に聞こえた声にビクリとし、軽く飛び跳ねる。

とはいっても、フカフカの苔に力を吸収されて、少しも動かなかつたけれど。

えーと……、取得する、で。

《鑑定LV1》を取得しました。残りスキルポイントは69900です》

おおー……

ゲームみたい……、いや転生して、こんな地球の何処にもいなさそうな生き物に生まれ変わった時点で、なんでもありなのかもしれない。

常識は捨てたほうがいいのかも？

というわけで、早速鑑定とやらを試してみる。

《岩》

んん??

もう一度。

《壁》《壁》《岩》

あれ？

なら兄弟姉妹たちに。

《虫》《虫》《苔》《虫》

ええー????

全然、何一つ！ 分からないじゃないですか!!??

あれから一週間くらい過ぎて。

太陽のない洞窟では一日の感覚も曖昧だけど、たぶんそのくらいは経過したと思う。

気持ちの整理もまだ付いていないけれど、今が大事と先送りにする事で心を安定させて、魔物としての日々を過ごしていた。

さすがにLV1では、まともな情報を教えてくれないみたいで、何度か使い続けることで、ようやくちゃんとした名称を教えてくれるようになった。

そして、スキルポイントを使ってもう一回もう一回と取得することで、レベルを上げることが出来るのに気づき、その時には「鑑定LV4」だったのを、何度も何度も取得する事で熟練度を嵩増しさせて「鑑定LV10」まで一気に上昇させた。

レベルが最大！ これで鑑定の真の力を発揮できる！

そうして正真正銘、本来の力となった鑑定の力を見てみると。

《スモールコケダマ（苔森 真理）》 LV1

ステータス

HP：46／46（緑）

MP：84／84（青）

SP：54／54（黄）

：54／54（赤）

平均攻撃能力：24

平均防御能力：46

平均魔法能力：52
平均抵抗能力：46
平均速度能力：30
スキル

苔鎧LV1 麻痺攻撃LV1 麻痺耐性LV3 暗視LV10
視覚領域拡張LV1

鑑定LV10 n%1||W 森羅万象LV1
スキルポイント：59300

称号
なし》

あんなに不親切だった鑑定が、こんなにも好意的に、沢山の情報を教えてくれた。

そして、鑑定した内容をさらに鑑定することも出来るので、細かく見ていくと……

《麻痺攻撃：攻撃に麻痺属性を付与する》

うん、読んでそのままの意味。《麻痺耐性》も字のごとく。次へ。

《暗視：光源がなくとも視覚が働くようになる》

《視覚領域拡張：可視光域を広げる》

こちらは、暗いところでもよく見えるようになると。

詳しくは分からないけれど、もつと色んな光が見えるようになるスキルみたい。

なんというか、どんなに暗かろうがきちんと視認できるという感じだろうか。まあ次。

《n%1||W：鑑定不能》

分からないのなら、飛ばすしか無い。

……次っ！

《森羅万象：数限りなく無数に存在する一切の物体と現象を把握する》
んんー??

説明しているようで、まったく説明になっていない内容。

あっ、概要が見れる。なににな……

『魔力感知・術式感知・物質感知・気配感知・危険感知・動体感知・熱

感知・反応感知・空間感知さらに魂魄の感知をも複合するスキル。範囲・対象を任意で指定することができ、それに合わせて情報量と精度が変化する。広く浅くまたは狭く深くと望んだものを知ることが出来る』

なんだか、凄いスキルみたいだった。

つまり、このスキルがあれば周囲のことなら何でも把握することが出来て、そしてそれを鑑定すれば、基本的に分からないことは無いってことなのかな？

さっそく後で使ってみることにするけど、その前にお待ちかねのメインディッシュ。

自分の種族について、見てみよう。

『スモールコケダマ：コケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の幼体。その身に纏う苔は天然の鎧である』

コケダマ種とは？

『コケダマ種：体表に特殊な苔を纏うことで、防御と抵抗に優れた天然の鎧を着込む芋虫型の魔物。その苔は内部の芋虫と一体化しており成長に合わせ苔も進化する。優れた魔法薬の原料になるほか、新鮮な苔は魔力を溜め込む性質がある。なぜかどんなに成長しても中身は芋虫のままであり、成虫へと変化した姿を確認した者はいままで誰もいないらしい。』

エルロー大迷宮の個体は、厳しい生存競争に適応したのか、常に群れを作って集団で行動し、麻痺毒を獲得している』

……ふむふむ、なるほど。

それにしても、まんまな種族名である。

たしかに見た目はもう、楕円形のコケダマかマリモで、虫要素どこ？って感じ。

虫っぽい部分なのは、わずかに見える眼と口、それに飛行している個体のトンボのような薄い翅くらい。

初見でなら絶対、虫じゃなく植物の魔物と勘違いするような見た目だ。

そんな見た目をしているからなのか、どれもこれも可愛く思えて仕

方がなくて、あのもふもふに飛びついたら気持ちいいのだろうかあと考えてしまう。

冷静な部分がおかしいのではないかと告げつつも、一切コケダマたちに嫌悪感を抱かず逆に大きな親しみを憶えていることに、これも同族ゆえの親近感なのかと不思議な驚きと納得を感じていると、さらに気になる情報が。

『エルロー大迷宮：ダズドルディア大陸とカサナガラ大陸を地下で繋ぐ世界最大の迷宮』

そこらへんにある壁を鑑定する。

『エルロー大迷宮の下層の壁』

思いがけず今いる場所が分かってしまいました。

さらに詳しい現在地の把握と地名の調査を脳内することリストに追加しておいて、気になっていた同族さんたちも鑑定してみよう。

まずは家主さん。

〈アークコケダマ LV34

ステータス

HP：4366 / 4366 (緑) +1200

MP：7022 / 7022 (青) +1200

SP：4582 / 4582 (黄) +1200

：4582 / 4582 (赤) +1200

平均攻撃能力：2710

平均防御能力：4861

平均魔法能力：5320

平均抵抗能力：5068

平均速度能力：1782

スキル

HP 高速回復LV4 MP 高速回復LV8 MP消費緩和LV8

SP 高速回復LV2 SP消費大緩和LV1

魔力精密操作LV1 大魔力撃LV1 魔力付与LV9 魔闘法

LV6 気闘法LV6 竜力LV8

鎧の才能LV5 霊装苔LV3 麻醉合成LV3 強麻痺攻撃L

V10 猛毒攻撃LV6
 強睡眠攻撃LV5 強酸攻撃LV4 破壊大強化LV2 打撃大強化LV4 斬撃強化LV6
 貫通大強化LV1 衝撃大強化LV4 大地強化LV2 水流強化LV1 暴風強化LV1
 状態異常大強化LV2 空間機動LV7 命中LV10 回避LV10 確率大補正LV2
 魔力感知LV10 術式感知LV10 危険感知LV10 気配感知LV10 動体感知LV9
 大地魔法LV3 水流魔法LV1 暴風魔法LV1 外道魔法LV10 麻痺魔法LV10
 治療魔法LV5 飽食LV2 破壊大耐性LV3 斬撃大耐性LV3 貫通大耐性LV4
 打撃大耐性LV6 衝撃大耐性LV3 大地大耐性LV1 状態異常大耐性LV8
 腐蝕耐性LV7 外道耐性LV5 苦痛無効 痛覚大軽減LV3 暗視LV10 視覚領域拡張LV7 視覚強化LV10 千里眼LV3 聴覚強化LV7 嗅覚強化LV2
 触覚強化LV8 連携LV6 統率LV6
 天命LV1 天魔LV3 天動LV1 富天LV1
 剛力LV8 城塞LV3 天道LV4 天守LV2 縮地LV8 禁忌LV7
 スキルポイント：34300
 称号
 悪食 血縁喰ライ 麻痺術師 魔物殺し 魔物の殺戮者 魔物の天災 竜殺し 人族殺し 覇者 率いるもの《
 ……強い。

桁違いのステータスもそうだけど、スキルの種類が多いこと多いこと。

隅から隅まで全部のスキルを鑑定するのは、なかなか大変そうな感

じだった。

ほかに、いろんなコケダマのステータスを覗き見たけど、ここまで強いのは群れの中では、家主さん一人だけだった。

家主さんのステータスやスキルと比べて大体六割程度のグレーターコケダマさんたち、平均速度能力が飛び抜けて高く宙を飛べるウイングドコケダマさんたち、状態異常に特化して色鮮やかな見た目のポイズン・パラライズ・スリープ・アシッド……コケダマさんたち等々。

そんな強そうで頼もしき同種系統の仲間たちと、生まれたばかりの私を比べる。

……いずれ強くなれるのかもしれないけれど、今の私はとてもひ弱だなあと思う。

とはいっても、私と同時期に生まれた幼虫は、もつと弱いけれどね。

謎のスキルもスキルポイントも無い、本当の本当に初期値って感じ。

さーて、どうすれば強くなればいいのかなー？

そんなこと考えつつも、身体はひたすら苔を食べ続ける。

参考になる先達さんたちからスキルを知ることが出来る、成長するとどんな姿になるのかも見てわかる、強くなる方法は無数にありそうだけど私にはたくさんさんのスキルポイントというアドバンテージもある。

よし！ がんばるぞー、おー！

心の奥底で胎動する陰に蓋をしながら、空元気だとしても心の表層では私は明るく叫んでいた。

その作り物の感情で今を塗り潰し、本当の問題からは目を逸らしながら。

《熟練度が一定に達しました。スキル「麻痺耐性LV3」が「麻痺耐性LV4」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「毒耐性LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「睡眠耐性LV1」を獲得しまし
た》

《熟練度が一定に達しました。スキル「酸耐性LV1」を獲得しまし
た》

2 森羅万象の実力と罫（22 / 04 / 11 加筆）

考えを巡らせること、しばらくして。

場所は変わらず、家主さんこと巨大なコケダマの背の上。

既に何日か経過して、考えるだけの時間は腐るほどあり、おおよそステータスなるものの意味を理解した。

基本はゲームなどで見るキャラクターの能力を数値化したものと一緒に。

何故こんなものがあるの？という疑問は、現状では見当もつかないので考察などは後回しにし、理解出来た性質をそういうものだと受け止めて考えていこう。

まずHP、これは個々が持つ生命力を表している、読みはヒットポイント。

これがゼロになれば、恐らくだけど死亡する事になる。

数値の増減に、外傷の有無だけでは無く出血や病気なども含まれるのかは不明だけど、常に気を付けておくべき内容なのは間違いない。

MP、読みはマジックポイントで、魔力を表しているらしい。

魔力は魔力としか出ず、その正体については鑑定でも知ることは出来なかった。

ただ、物語の設定にならうのであれば、多分魂の力とかと呼べるものだろう。

SP、スタミナポイント。

数値が二種類あつて、黄色の数値は瞬発的な運動などで消費するSPであり、要はどのくらいで息切れするのかという目安の数値。

赤色の数値は、満腹度というか貯蓄してある体力の事らしい。

つまり食べれば増えて、減っていけば餓死までどれくらいという値である。

そして、五つの項目。

攻撃、防御、魔法、抵抗、速度と分類されて表記されている数値は、いわゆる得意分野や能力がどれだけ秀でているのかを明確に示す項目だった。

攻撃が高ければ、それだけ物理攻撃で与えるダメージが大きくなり。
防御が高ければ、それだけ物理攻撃で受けるダメージが少なくなる。

魔法が高ければ、魔法を扱うにあたって基準の出力を満たせる事を示している。

抵抗が高ければ、それだけ魔法による攻撃から受けるダメージが少なくなり、特殊な攻撃などでも、この数値が身を守るのに影響しているらしい。

速度が高ければ、全力で動いた時の速さの平均値も高くなる。

計算式はまだ良く分かっていないけれど、黄色のSPが満タンの状態から全力疾走して尽きた時に移動した距離と速度を想定して、数値が算出されているのではないかと思う。

スキルとは、いわゆる特殊能力。

名前の通り、このスキルがあればこんな事が可能ですよという指標であり、自動的に効果を発揮しているものもあれば、任意で使うものもある。

暗視とか耐性とかは自動で付けっぱなしになっているし、一応オンオフが出来るみたいだけど、特にメリツトが無いので常時オンの状態で良いと思う。

鑑定は、任意で使うスキルの筆頭とも言える。

使おうと思ったら、説明しがたい感覚だけれど発動させているっていう感覚があり、その感覚を元に自分の意志で操作している感じ。

他にも称号などもあり、そっちは何かしらの効果と、称号の獲得時にスキルが貰えるという内容らしいけれど、今は置いておこう。

うーん、……よしまずは手持ちを把握しておかないとね！

というわけで、なんだか凄そうなスキル、《森羅万象》を使ってみよう。

《森羅万象》起動！

ん？ え、いたい????

いたっ、くうああああああああ、頭がああ……………

《熟練度が一定に達しました。スキル「外道耐性LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「気絶耐性LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「森羅万象LV1」が「森羅万象LV2」になりました》

……はっ、気絶してた!?

なにが起きたのか、よく憶えていない。

けれど、色々な情報が一気に頭に流れ込んできて理解する前に意識が飛んだような……

気絶する寸前にスキルをOFFにしたのかそれとも自動で止まったのか、今はあの膨大な情報が止んでいる。

だけど、処理しきれないほどの雑多で莫大な情報が使うたびに毎回襲ってくるとなると、とてもじゃないけれど使えないスキルになってしまうんだけど……

ん？ なにか増えている。

《外道耐性：外道属性に対しての防御能力が増加する》

さらに鑑定つと。

《外道属性：魂を直接犯す属性》

こわっ！

なにこれ、ヤバそうなことしか書いていないのですけど。

これを取得したのは《森羅万象》を起動してからなので、つまり使うと魂にダメージ負っていたということに……？

封印する……？

いやでもなあ……うーん。

？

？

《「外道耐性LV10」を取得しました。残りスキルポイントは548

00です》

《条件を満たしました。スキル「外道耐性LV10」からスキル「外道大耐性LV1」に進化しました》

？

《外道大耐性LV10》を取得しました。残りスキルポイントは50300です》

《条件を満たしました。スキル「外道大耐性LV10」からスキル「外道無効」に進化しました》

？

《「気絶耐性LV10」を取得しました。残りスキルポイントは45800です》

《条件を満たしました。スキル「気絶耐性LV10」からスキル「気絶大耐性LV1」に進化しました》

ヨシ！

もういつかい挑戦してみる！ 起動！

……ッ。

………すごい。世界って、こんなにも、緻密で複雑な。

まだ頭痛は結構するけれど、気絶大耐性もあって耐えられる。

それでも偏頭痛を酷くしたような痛みを感じるけど、気を失うこと無くいられる。

この痛みは、膨大すぎる情報を処理できないから感じる痛みであって、今自分の魂に悪影響から守る力が貼り付けられており、それによってダメージが無効化しているのがわかる。

そして、私の周囲に居るコケダマたちの動き、空気の流れ、熱、気配、どこまでも続いているかのような広大な迷宮、空間のゆらぎ、そして魔力。

ほとんどの情報を処理できていないけれど、世界と一体となったかのような感覚は、ちっぽけな私が世界の真実を解き明かしたかのような、そんな全能感を与えてくれる。

……楽しいなあ。

《熟練度が一定に達しました。スキル「森羅万象LV2」が「森羅万象

LV3」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「集中LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「並列思考LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「演算処理LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「苦痛耐性LV1」を獲得しました》

？

？

《熟練度が一定に達しました。スキル「森羅万象LV9」が「森羅万象LV10」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「神性領域拡張LV1」を獲得しました》

ずううううと、スキルを使い続けて世界と一体になる感覚に浸っていたら、いつのまにかLV10まで成長していて他にもいくつかスキルが増えていた。

しかもだいたい時間が経っていたみたいで、群れの現在位置が元いた位置からかなりの距離進んでいる上に、SPの赤ゲージが枯渇寸前になって今0に、あっHPが急速に減り始めてきた。

慌てて目の前の苔を食べ始めたけど、その間も膨大な情報が流れてきて意識が溶けて引っ張られそうになるので、一時的に切って思考をクリアにする。

危なっ、転生して1月も経たないうちに餓死で死亡とか、冗談にも程があるよ。

大急ぎで食べ進めて回復させつつ、自分に鑑定をかけて変化したスキルを見る。

増えたりしたのは「集中LV4」「思考加速LV3」「並列思考LV3」「演算処理LV3」に「苦痛耐性LV2」「神性領域拡張LV1」の6つで、他にも「森羅万象LV10」「気絶大耐性LV2」と、かなり

スキルの欄が充実していた。

新たに増えたスキルを確認しつつモシヤモシヤ食べていると、群れの移動が止まっていて先頭の方から激しい轟音と衝撃波が響いてきた。

さすがにここから直接見ることができそうにないので、森羅万象をつかって確認する。

んーつと？

猿、猿、数え切れないほどの猿。

それと、おつきい猿が少し。

めちやくちやいっばい居る猿の巨大な群れが、正気を失った様子で我が身を顧みず襲いかかってきていた。

その鬼気迫る様子は恐ろしいものだけど、しかし前面に並んだコケダマたちの防壁を突破できてはいなかった。

密集陣形で隙間なく洞窟の横幅を埋めるグレーターコケダマが猿たちの猛攻を防ぎ、上空ではウイングドコケダマたちが飛び回って攪乱しつつ魔法や状態異常をばら撒いている。

なんとか抜けてきた個体も、内側で待ち構えている色鮮やかな状態異常特化のコケダマたちになすすべなく討ち取られていく。

それは堅牢な城塞のようであり、全てを飲み込む津波のようで。

そして、家主さんであるアークコケダマの魔力が高まるのを感じると、壁を作っていたコケダマたちが左右に移動し道を空け、射線を通す。

空いた隙間に猿たちが押し寄せてくるが、そこはすでに死地が確定している場所であった。

大地魔法が突き上げ串刺しにし、水流魔法のウォーターカッターが胴体を泣き別れにさせ、暴風魔法が運良く生き残ったものを逃さず刈り取っていく。

そんな血しぶき吹き荒れグロテスクな暴虐の嵐を目の当たりにして、私は興奮を抑えられそうになかった。

すごい！　すごい！　すごおいいっ!!

魔力が流動し形を変化させ、魔法という現象を何も無かった場所か

ら生み出す。

それは世界を書き換える技であり、あるがままを受け入れるしかない世界というものを望むままに彩れる、神秘の御業。

それに魅せられた私は、漂う饅えた血の匂いも、ぬらぬらした内臓の色も、風前の灯火となった命が消えていき魂が世界に溶けていくのを感じつつも、心には歓喜しか存在していなかった。

これ欲しい、これがあれば、世界が、私の手で。

そんな妄想と憧れがドンドン膨らんでは、私の心に強く刻まれていく。

自分自身の願いと夢を理解し、憧憬のまま進みたい目標が私を染めていく。

《熟練度が一定に達しました。スキル「欲求L V 1」を獲得しました》
小さなコケダマの身体で喜びを表現しつつ陶酔し浸っていると、戦いは終わっていて僅かに麻痺で自由を奪われた瀕死の猿が多少の残っているだけとなった。

すると、すでに死んだ猿を他の大きなコケダマたちが食べ始めているが、なぜかまだ息のある猿を1箇所を集め始めた。

そしてその近くに家主さんが伏せると、なんとなく意図を察した。これは未熟な私たち幼体への餌だと。

すでに、少しずつ背中中暮らしている同居人たちがゆっくりと動き出して、地面に降りようとしているのを捉えており、私も急いで続く。必死になって動いたのが功を奏したのか、ほとんど一番に到着することができたが、S Pの黄色も赤色もかなり危険な状態。

そして勢いそのまま痙攣する猿に齧りつく。

私が噛み付いても一切抵抗できず、ただ震えるしかできない猿に少し可愛そうだと思ってしまうけど、生きるためと思って力を込めて食い千切る。

決して美味しいとは言えずむしろ不味い味だけど、何度も何度も必死に食らいつく、そして――

《経験値が一定に達しました。個体、スモールコケダマがL V 2になりました》

《各種基礎能力が上昇しました》

《スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「苔鎧LV1」が「苔鎧LV2」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「麻痺攻撃LV1」が「麻痺攻撃LV2」になりました》

《スキルポイントを入手しました》

身体の皮が剥がれていく。

それに合わせ、まだ中途半端にしか覆われていなかった苔の鎧が一気に全身を覆い尽くすように増えていく。

減っていたHPも最大まで回復し、ほんの少し身体が軽くなる。

それを感じつつも、食べるのをやめない。

ただ勢いそのまま突き動かされるように食べ続け、明らかに今の私より大きい猿を骨まで残さず喰らい尽くすと、そのままフラフラとまだ誰も食べていなくて息がある猿に近づく、そして――

《経験値が一定に達しました。個体、スモールコケダマがLV3になりました》

《経験値が一定に達しました。個体、スモールコケダマがLV4になりました》

《経験値が一定に達しました。個体、スモールコケダマがLV5になりました》

《各種基礎能力が上昇しました》

《スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「苔鎧LV3」が「苔鎧LV4」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「麻痺攻撃LV3」が「麻痺攻撃LV4」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「麻痺耐性LV3」が「麻痺耐性LV4」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「毒耐性LV1」が「毒耐性LV2」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「睡眠耐性LV1」が「睡眠耐性LV2」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「酸耐性LV1」が「酸耐性LV2」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「過食LV1」を獲得しました》
《スキルポイントを入手しました》

あははっ、あははははっ
ひたすら食べる。

今自分が何をしているかも曖昧なまま、酔って惚けた心で食べ続ける。

そうでなきや、自分自身のナニカが溶けて壊れてしまうようで。

まだ受け入れるには早すぎるナニカが、私自身を壊してしまわないように、今は酔い痴れたまま食べ続ける。

見るべきでは無い事は、識るべきでは無い事は、忘却の彼方へと沈んでいく。

そして、周囲には血痕しか残らず口の周りを血で濡らした私と兄弟姉妹しかいなくなったとき、ようやく意識が少し戻る。

まだ少し夢現な状態だけど、兄弟姉妹たちが家主さんへと帰っていき苔の斜面を登っていくのを見て、私もぼんやりしたままついていく。

ふわふわモコモコで登りづらい苔山の頂上に辿り着けば、疲労が一気に押し寄せてきた。

ああ……、私、殺した。そして食べちゃった。

事実を今になって理解するものの、なぜが私の心はあまり痛まず、ただ喜びの境地にいた。

それは空腹を満たしたことによる満悦か、それとも心の防衛本能が見せる幻の快楽か。

そんなことを思っていると、全ての幼体を乗せた家主さんが進み始める。

そうして、暗い洞窟の中進み続ける群れを眺めて、私は思う。
もつと力を——と。

3 はぐれたコケダマ

家主さんの背に乗り、のんびりまどろみながら自堕落なヒモ生活を送って、数日が経過した。

その間にも狩りは行われ、何度か戦闘になったりしたけれども、なかなか私たちに生きたまま回ってくる獲物はいなかった。

そのせいでLVは上がっていないけれど、ただ闇雲にレベルを上げて後で後悔することが無いようにできたので、まあヨシと考えよう。

というわけで、新たに取得したスキルを、どうぞ！

《スモールコケダマ (苔森 真理) LV5

ステータス

HP : 52 / 52 (緑)

MP : 1102 / 1102 (青)

SP : 59 / 59 (黄)

: 59 / 59 (赤)

平均攻撃能力 : 29

平均防御能力 : 68

平均魔法能力 : 1068

平均抵抗能力 : 68

平均速度能力 : 48

スキル

HP 自動回復 LV1 MP 回復速度 LV1 MP 消費緩和 LV1

SP 回復速度 LV1 SP 消費緩和 LV1

状態異常強化 LV1 魔力操作 LV2 魔闘法 LV1 魔力撃LV

V1 魔力付与 LV1 麻痺攻撃 LV3

睡眠攻撃 LV1 毒攻撃 LV1 酸攻撃 LV1 苔鎧 LV3 鎧

の才能 LV1 立体機動 LV1 隠密 LV1

集中 LV10 思考加速 LV1 予見 LV1 並列思考 LV3

演算処理 LV3 記憶 LV2

命中LV1 回避LV1 鑑定LV10
光魔法LV1 水魔法LV1 風魔法LV1 土魔法LV1 治療魔法LV1

物理耐性LV1 状態異常耐性LV4 酸耐性LV2 気絶大耐性LV2 苦痛耐性LV2 外道無効

暗視LV10 五感強化LV1 視覚領域拡張LV1

身命LV1 天魔LV10 瞬身LV1 耐久LV1

強力LV1 堅牢LV1 天道LV10 護符LV1 縮地LV

1

欲求LV1 過食LV1 神性領域拡張LV1 森羅万象LV1

0 n%1||W

スキルポイント：7200

称号

なし

MPと平均魔法能力を強化するスキルを最大まで取得して、その他はレベルアップ時にボーナスが入るようになるまでLVを上げる。

そのおかげで、平均魔法能力は四桁と飛び抜けて高くなり、MPの総量もこのレベルではありえない数値になっている。

できれば平均攻撃能力を上げる上位のスキルを取りたかったけれど、なぜか強力を取得するのに必要なポイントが2000で消費するポイントの総数が膨れ上がってしまうので、最初の段階であるスキル《強力》をLV1取得するだけに留めるしか無かった。

他のスキルでは、200とか300で取れたのに……

魔法などの必要ポイント数でわかったことだけど、どうにも適性みたいなのがあるらしく、光や水に土などが少なくてすみ、逆に闇や火それと氷は完全にダメみたい。

必要ポイント10000とか要求されると、取得するのはさすがに厳しいものがある。

……全属性とか使ってみたかったなあ。

あとは、有用そうなスキルを一通り沢山選んで取得して下準備の出来上がりつと。

多少スキルポイントを残したけど、それでも四万ほどあったポイントが一気になくなってしまう。

ほかに気になるスキルもあったけれど、今は様子見にする。

念話とか、今持っても使いみちなさそうなのとか。

一部怪しげなスキルとかも……

他に気づいたことといえば、鑑定の実行にはリスクがあるということを知ったこと。

何度も何度も群れのコケダマたちに鑑定をかけていたけれど、使うたびになんだか掛けた相手が不機嫌そうになって警戒していて。

あれ？ って疑問に感じ始めた頃に家主さんからお叱りの声が。

いや鳴き声とかそういう音があったわけではなく、なんとなくだげど怒っているイメージの思念が飛んできたので、それからは不必要な使用を自重している。

そして今は、魔法を扱うための魔力操作の練習中。

森羅万象のおかげで、情報量は膨大だけど魔力について緻密に把握できるので、魔力を流し込む感覚や魔力を纏い留める感覚を、しっかりと憶えようと努力しているとところである。

さて、今日も一日修行、しゅぎよう……、ん？ とても強い反応が1つ、いや2つ。

アークに匹敵するかどうかといった反応が、群れの進行方向の先にいることに気づく。

それは森羅万象のバカみたいに広い感知範囲だから気づけたことで、群れの個体はおろか家主のアークさんでも、まだ気づいていないみたい。

そして、そのまま群れは止まることなく進んでいくので、強い反応との衝突は必然で。

ガアアアア————ツツ!!!
意識が一瞬漂白される。

洞窟内に反響する、ただただ煩いだけの咆哮で、私の心は押し潰されるような重圧を錯覚して、考えも感情も何もかも吹き飛んでしまっ

た。

な、に……？

《熟練度が一定に達しました。スキル「恐怖耐性LV1」を獲得しました》

心が悲鳴を上げているのに、意識は失えない。

それはきつと「気絶大耐性」のおかげで、けれどそれは何も見なかったことにして逃げることを許さなくて。

私は、目の前で繰り広げられる戦いを、瞳と魂に焼き付けていた。紫色の重厚な巨体をもつドラゴンが、その太い四肢と身体を生かしてあらゆる魔法と攻撃を弾き返す。

白色をした引き締まりスラリとした肉体のドラゴンが宙を駆けて、両腕の刀のようなブレードで隙をみせた相手を容赦無く叩き落とししている。

そんな崩れることなき城塞と吹き荒ぶ白刃の嵐に、群れみんなは臆することも退くこともなく突撃していった。

僅かな時間しか持たないのに、前線に出て身体を張って攻撃を受け止めるグレーター。

掠っただけで真つ二つか四散しかねないのに、隙間を縫うように飛び回るウイングド。

常に隙を伺い、前線の壁が空いてしまうとすぐさま飛び出して穴を埋めつつ状態異常に侵そうとする色とりどりのコケダマたち。

互いに一歩も退かない死闘。

死ぬとわかっていても飛び込む献身。

私は思わず、怒らせてしまうことを知っていながら「鑑定」を使っていた。

——あれが《地龍》

——あれが、強者の力。

《熟練度が一定に達しました。スキル「欲求LV1」が「欲求LV2」になりました》

さすがに仲間が次々やられているのを見過ごすことはできないのか、家主さんのアークコケダマが今迄見せていなかった速度と空間機

動を駆使して突撃する。

急な加速に、振り落とされそうになりながらも必死でしがみつく。兄弟姉妹たちは戦闘が始まった時点で既に深く苔のなかに潜り込んでいて、ただ呑気に表層で突っ立ったままだったのは私だけだった。

そして、その巨体を生かして仲間の盾となる。

重傷のグレイターを後ろに下げて、自身は魔力を滾らせて威圧していた。

アークがついに出てきたのを見て、地龍たちは警戒をあらわにする。

そして、アークほかコケダマたちも様子を窺うように睨み合う。

さつき見たステータスでは、地龍とアークコケダマは同等もしくは地龍のほうがやや低い感じであるけど、地龍は二体一組で互いに連携し合い隙がなく、アークほかコケダマの群れは単体では地龍からすればなんとかなる程度の相手であろうとも、群れ全体でみれば地龍が勝利する可能性は非常に少ないだろう。

ほんの一瞬の睨み合い、けれど何倍にも感じられた時間が流れる。

そして、ついに状況が動き出す。

紫色の地龍が大地魔法で壁と足場を作りつつ、後退する。

そしてその間を駆けて、牽制に重点を置くような動きをする白い地龍。

そんな地龍に対して、魔法の雨あられを降らせ続けるアークとコケダマたち。

私は、一瞬も見逃さないように隠れることなく見続けていたのが悪かったのか、身を挺して守るアークに白い地龍のブレードが迫ってきていることに気づくのが遅れた。

そのブレードの軌道はアークコケダマの上部を狙った動きで、お互いこのままの動きではほんの僅かに掠めるだけに留まる一撃であったが、隠れることもせず逃げ出すことを忘れていた私には、あまりにも致命的な刃が迫っていた。

風音と爆発音が消える――

見えている世界の色彩が消える――

感じられる情報が純化して、迫りくる刃の動きと反応のみ感じるようになる――

そしてそれは、私のストレスを通り過ぎていった――

――ツ!!

宙を転がる。

上下が目まぐるしく入れ替わり、視界が意味を持たなくなる。

けれど飛び抜けた感知能力によって、自分と周囲の状況は問題なく把握できて。

運良く直撃を避けられたものの、通り抜けた風圧で私は吹き飛ばされアークコケダマの背中から突き落とされたことを理解して、けれどそれに反応して対応する前に暗い地面が迫っていた。

――ぐううえつツ。

勢いよく硬い岩肌と激突し、そのままゴロゴロと転がって洞窟の壁際まで滑っていく。

そして、壁にぶつかって上空に一度大きく跳ね上がった後、ゆつくり地面に落下する。

あ、うううつ……ツ。

《熟練度が一定に達しました。スキル……

頭の中に声が何度も響く。

けれど、私はそれをきちんと認識できずに痛みで意識が溶けそうになるも、ギリギリのところで繋ぎ止められる。

ぼんやりしたまま周囲を把握すると、地龍とアークコケダマたちは、互いに痛打を与えられずに戦い続けていた。

少しずつ退いていく地龍たちは、障害物を作りつつドンドン距離を離していく。

そして群れの仲間をやられた怒りからか、追撃を続けるコケダマたち。

地龍とコケダマの群れはドンドン離れていき残されたのは、すでに死んでしまったコケダマと、自力で動けないほど瀕死になったコケダ

マだけだった。

そして私も取り残された側で……

イツ、たああツ、いつ……、いたいよおつツツ……

激痛が絶え間なく襲う。

身体の一部が欠けてしまったような喪失感に苛まれる。

けれど、意識は消えず死を間近にして雑念が消えていき澄み渡っていく。

いまだ効果は低いとはいええ、治療魔法をいままで最も美しくそして素早く組み上げると、自分へ何度も掛け続ける。

そして、まだ息があるけど瀕死の、仲間である、コケダマへと這いずってゆく。

残りHPが2桁を割りそうなコケダマを見上げ、私は――

《経験値が一定に達しました。 個体、スモールコケダマがLV5からLV6になりました》

？

《経験値が一定に達しました。 個体、スモールコケダマがLV8からLV9になりました》

《各種基礎能力値が上昇しました》

《スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました》

？

《条件を満たしました。 称号「悪食」を獲得しました》

《称号「悪食」の効果により、スキル「毒耐性LV1」「腐蝕耐性LV1」を獲得しました》

《「毒耐性LV1」が「状態異常耐性LV4」に統合されました》

《条件を満たしました。 称号「味方殺し」を獲得しました》

《称号「味方殺し」の効果により「外道攻撃LV1」「禁忌LV1》

《条件を満たしました。 称号「血縁喰らい」を獲得しました》

《称号「血縁喰らい」の効果により、スキル「外道魔法LV1」「禁忌LV1」を獲得しました》

《「禁忌LV1」が「禁忌LV1」に統合されました》

《熟練度が一定に達しました。「禁忌LV1」が「禁忌LV2」になりました》

——ふふふっ、あはは、あははははハハははははハははははははははははハははははハハはは

《熟練度が一定に達しました。スキル「欲求LV2」が「欲求LV3」になりました》

痛みが消えた身体を確認しつつ、周囲を森羅万象で把握する。

食べるのに時間をかけすぎていたのか、もう生きているコケダマは私しかいなかった。

そして群れも、感知範囲の端ギリギリまで進んでいて追いかけるのは無理な距離にいた。

私は、——ただ何をするでもなく、今喰らい尽くした仲間の死骸の前で、微動だにしなかった。

——アああ、また食べちゃった、今度ハ、仲間だったのにネ。

私は、口に残る青臭い苦さと酷い臭い体液の味を感じつつ呆然としていた。

そこに広がる千切れた苔と濁った黄色い液体は、私がやったことを世界に示していて。

周囲に転がる息絶えたコケダマの光なき目は、私を批難しているように……

《熟練度が一定に達しました。スキル「過食LV2」が「過食LV3」になりました》

ふふっ、あハは、ごめんネみんな、でもみんな一緒だよ？
みんなは私だから……

仲間で、兄弟で、家族だからこそ、強く咀嚼して血肉に変える。

忘れない、忘れない、わすれないワスレナイ、忘れないから……

《熟練度が一定に達しました。スキル「欲求LV3」が「欲求LV4」になりました》

だから……、私は強くなるよ、みんなの分まで。

外道無効でも防ぐことが出来ない傷が、私の魂に刻まれていく。

それは、私のナニカを取り返しのつかないほど壊したけれど、私に飽くなき狂熱と苛烈な想いを与えていた。

全てのコケダマの死骸を喰らいつくして佇む私は、悲しみの中で決意と誓いを捧ぐ。

私は、生きるよ。

みんなのぶん、より強く、より長く、より多くを手にするから……
そして私は進み始める。

酸鼻な光景を後にして、歩いていく。

少し離れた場所で戦いが起きているのを察知した。

それは、たくさんの猿の集団が、一匹の小型な蜘蛛の魔物を襲っているものだけど、優勢なのは蜘蛛の方だった。

どっちが勝つにしても構わない。

私は、強くならなくちや。

私は、——私は、——私、は、ツ、ヨ、クツ。

思考は冷静に、けれど熱に浮かされた心のままに私は進む。

自分が、これからどんな道を進んでいくのか、何も知らないままに。地獄の果実を食べた少女は、涙と共に穢れに縛られていくのであつた……

蜘蛛1 決死の攻防戦の乱入者

——いつけええつつ!!!

ありったけの力を込めて、張り巡らせた糸に操糸のスキルを流し込む。

私は、足を胴体を全力で握り潰そうとする猿を引き摺って、断崖絶壁の岩壁を駆けていた。

ただでさえ無茶をしているのに加え、僅かな隙でも飛び掛かってくる猿が折角レベルアップで治ったばかりの身体を傷つけ、HPを急速に削り取っていき激痛が走る。

けど、止まるわけにはいかない。

止まってしまえば、待っているのは蹂躪され惨めな死体に成り果てるだけだ。

そして出っ張った岩を利用して急激なUターンをし、その勢いと遠心力で私を掴んでいた猿たちを振り払って糸にて拘束し、そのまま地面に叩きつけるように引つ張りながら飛び降りる。

それと同時に私は、操作できる限界まで掌握した糸に、指示を与えた。

——壁との粘着を放棄しろ、と。

私の指示通り、糸は重力に引かれ落ちていく。

絡みついた無数の猿どもを巻き込んで。

轟音を立てて、一種の質量攻撃となった糸と猿の塊がその重量をもつて岩壁をも削りつつ、地上にいた猿をも巻き込みながら崩れ落ち、土煙を上げて押し潰していく。

一つ崩れればその左右の壁も引き摺られて崩れていき、連鎖的に被害が拡大していく。

それを、すぐさま簡易ホームまで駆け登り戻った私が、鳴り続けるレベルアップのアナウンスを聞きながら見下ろしていた。

うつひやあー……、あれだけ倒せばそりゃあレベルも上がるよね。

けれど、それで倒せたのは群れの一部でしかなく、まだまだ猿の大群は残っていて戦いは一時の小休止も挟まらず、終わっちゃいない。

増援が止むことなく今も増え続けているし、しかも中には不味い奴らもいる。

《バグラグラッチ L V 3》《バグラグラッチ L V 4》《バグラグラッチ L V 6》

鰐のような長い口にギザギザの鋭い歯が何本も見える、猿の倍ありそうな巨猿。

あの猿の種族名、アノグラッチと似た名前。

——こいつら、猿の進化系だっ！

くそ、どうする？

今も猿は圧倒的な個体数の差で、身を挺して粘着糸を潰しながら登ってきているし、巨猿の方は何メートルもある岩を軽々持ち上げて振りかぶろうとしていた。

うわっ、危なっ！

トンはあるような岩を姿勢が揺らぐことなく放り投げてきて、恐ろしいスピードと質量を持って簡易ホームに突き刺さる。

なんつうパワーしてんのよ。

しかも身を隠せる足場も無くなったし、どうすれば……

焦りを感じつつ頭をフル回転させていると、突然一条の光線が後方の猿に突き刺さった。

光に貫かれ胴体に風穴が空いた猿は、私が初めて猿を仕留めたときと同じように断末魔を上げて崩れ落ち倒れ伏す。

それを皮切りに、猿たちの半数が私を無視して光が飛んできた暗闇の向こうへ走っていく。

光無い迷宮で目が眩むような光は、一射ごとの間隔は早くないものの絶え間なく降り注ぎ、複数の猿をまとめて殺害していく。

すでに何十と撃たれ、そして何十も暗闇の向こうに猿が消えて行ったというのに、光線は止まることなく正確に猿を撃ち抜いていた。

猿が段々と減っていくのを見過ごせないのか、巨猿の一匹が私から謎の光の主へと、ターゲットを変えて向かっていき闇に紛れて見えなくなった。

群れの半数が新たな敵に向かっていったため、猿が壁を登ってくる

ペースが大きく下がり、対処に余裕が出来る。

そのため残った二匹の巨猿の動きを見逃すことなく注意することが出来た。

助走をつけて飛び上がり、百メートル近い大ジャンプをしてきた巨猿に投網を投げつけて軌道をずらして岩壁に叩きつける。

その顔面に蜘蛛毒を注ぎつつトドメを行い、並行して糸の準備をする。

大きく迂回して壁を登り私の背後をとって不意をつこうとしていた巨猿に、振り向きざまに糸を巻き付ける。

そして動けなくなった巨猿の大口に、蜘蛛毒を無理やり飲み込ませていく。

《経験値が一定に達しました。 個体、スモールタラテクトがLV8からLV9になりました》

ふう、危ない危ない。でも残念だったな！ 私には見えていたぞ！

流れるようなカウンターを決めて内心ドヤりつつ、周囲の状況を確認する。

数が足りないせいか思うように進めない猿たちは、巨猿がいなくなったせいなのか迷いが見られ連携もガタガタになり大混乱していた。

残りの数も、今までからすれば大したこと無い数しか残っていないくて、進むか退くべきか戸惑い精細を欠いている。

そして動きの止まった猿は、狙い撃つには絶好の獲物でしかなかったように――

バタリ、バタリと、僅かな生き残りも倒れていく。

逃げ場を潰すように飛んできた光線によって動ける猿は急速に数を減らし、残っているのは糸に拘束され身動きできず、迫りくる死神に抗えない哀れな猿だけになった。

目に映る範囲で動く猿の姿がなくなり一息つくと、今度は私目掛けて光線が飛んできた。

ちよつ、あぶ――

見た目レーザーみたいだけど、あくまでそれっぽいで速度は視認できる範囲だ。

見えた瞬間にはもう当たっているなんてことは無いので、ギリギリで避けつつ走る。

けれど、どんなに不規則に方向転換や加速減速をしても、光線は正確に私を狙って追いかけてくる。

まるでこちらの動きを読まれているんじゃない、つてくらい私の真後ろに着弾し続ける光線に恐怖で背筋が凍る。

幸いなことに、連射性能はさつきまでと同じで早くは無く、また厚みのある岩なら貫通する事も無く防げそうなのがわかった。

ずっと走り続けSPが限界に近づいた私は、光線が飛んできても防げるように、壁が崩れ落ちた時に、地面へ落下した巨岩を盾にして様子を探る。

すると何故か光線が飛んでくることが無くなったけど、その下手人の姿はいまだ確認できず、いつ再び襲い掛かってくるか分からないこの状況では、猿のトドメを刺して回り、安心して減ったSPを補給するための食事をする事も出来やしない。

耳を澄まして集中すれば、何かが這いずるような音が聞こえ、その小さな音はゆっくりと此方に向かってきていた。

そして、這いずる擦過音が意識しなくても聞こえる距離になった時、私は細心の注意を払って、顔を遮蔽から出して向こう側を覗く。

そして一瞬見えた緑色の塊に、鑑定をかけた。

《スモールコケダマ (苔森 真理) LV9

ステータス

HP : 52 / 52 (緑)

MP : 504 / 1102 (青)

SP : 36 / 59 (黄)

: 59 / 59 (赤) +28

平均攻撃能力 : 33

平均防御能力：76
平均魔法能力：1080
平均抵抗能力：76
平均速度能力：52
ステータスの鑑定に失敗しました》
ちよっ!?! なにこの極端で高いステータス!?
しかも、種族名の隣に日本人らしき名前が表示されてるし!
私は驚きのあまり、うかつにも顔を出したまま一瞬呆然としてしまった。

慌てて身体を引つ込めるけど、その明らかな隙に攻撃が飛んでくることはなかった。

そのことに疑問を憶えつつ、私は岩の向こうの気配に気を配った。そして、どうするか非常に悩んだ。

あー、どうしょ。

もしかしたら、もしかしたらだよなー……

頭によぎった考えは、十中八九間違っではないかと直感している。私自身が蜘蛛蜘蛛であるように、向こうにいるアレも、私と同じ転生者である可能性は非常に高いと思う。

ならば会話……は無理そうだけど意思疎通が出来る可能性がある、……のだけど、向こうが答えてくれるかわからないという不安がある。

なぜなら私は蜘蛛だし、向こうもなんかマリモ?みたいな見た目しているしで、そもそも両方、声出せるの? って感じだし。

まあ、声出せるとしても、私筋金入りのボツチだし会話はちよつと……

それにしても、苔森 真理? こけもり……こけもり……

なんか、そんな名字の子いたような覚えがあるけど、思い出せない。いや、クラスの顔は全員わかってはいるけど、誰がどうとかは全然記憶に残ってないんだよね。

興味なかったっていうか……

そうやって、うだうだ悩んでいると、頭に直接声が響いてきた。

『あなた……、なにもの？ 変わった魂している……っ！』

驚いて身体が跳ねるけど、必死に抑え込む。

『攻撃したりしないから、出てきて欲しいな？』

頭の中に直接、日本語で語りかけられる。

その声は、いつものアナウンスの声とは別物であり、そして前世の学校でいつか聞いた覚えのあるような声だった。

——っ、くうう、覚悟を決めろ、女は度胸！

私は、そつと前脚を伸ばし岩の外に出す。

そして、ちよつと前脚を上下に振ってみて数秒待ち、なにもなかったことを認識してから勇気を振り絞って岩陰から外に出る。

正直、さつきまで猿と命懸けの死闘を繰り返して来たとは想像もできないほど、弱々しい雰囲気になっちゃってプルプル震えちゃっているけど、仕方ないんじゃない！

ステータス的にも不利だしポッチは声かけられると機能不全起こすんだから！

心と頭の中がグチャグチャになりつつ恐る恐る歩き、目の前の緑色の球体と向かい合う。

『ねえ、あなた、名前は？』

震える前足で、地面に文字を書き込む。

『……え？ 若葉 姫色!? 若葉さん!? え、ほんと??』

向こうが凄く戸惑っているようだけど、私も別の意味で逃げたくて辛い。

『え……う？ でも……、蜘蛛……、中身が……、いや……、んん……??』
とぎれとぎれに言葉が流れ込んでくる。

まあ、そうだよね。

クラス随一のポッチが蜘蛛になつてりや、そりや戸惑うよね。

『………あつ、ごめんね私のことを言っただけ。私は、苔森真理だよ。よろしくね若葉さん』

よろしくという意味を込めて、大きく頭を上下に振る。

『それにしても、若葉さんは話せないの？ あつ、これは念話っていう

スキルを使って話しているんだよ!』

この頭に響く声のカラクリを教えてもらったけれど、スキルポイントが足りなくて習得できないことを伝える。

『そうなんだ……。うーん、不便だけどそれじゃあ仕方ないね』

そう言つて彼女は考え込むような雰囲気を見せる。

『……まずは、周囲の安全と、生き残りの猿を片付けようか。それからゆっくりお話ししよう!』

片付けは賛成だけど、お喋りは勘弁してええ……

そうして私たちは、残った猿たちを一匹残らず刈り取ったのだつた。

その後は、転生してから現在までの経緯を伝え合い、互いの生まれからの苦勞に共感し合い、お互いのステータスやスキルを教え合ったりした。

ハードモード越えてナイトメアとかKMD蜘蛛マストグイだった蜘蛛生だったけれど、彼女の方も大概ハードな状況だったみたい。

それでも、生まれたばかりのとき安全に過ごせていたとか、スキルポイントが万で有ったとか、羨ましいにも程があるぞ!

そんな、不公平な神様の仕打ちに内心で憤慨しながら、私は考える。

この迷宮で、一人で生き抜くのは大変だ。

だからこそ、仲間が多いほうがリスクを下げられる。

そのためなら、誰かと一緒に行動するのも悪くないって思える。

会話も、私が話せないから向こうから一方的に喋りかけてきてくれて、私は頷くか否定するだけでいい。

なんだ、それだけならシンプルでいいじゃないか。

そう思い、私は隣を見る。

私より少し大きいくらい、丸々モサモサした苔の塊が揺れている。

その頼もしい能力に期待しつつ、私は決意する。

必ず生きてこの大迷宮から……。いや、必ず二人で生きて脱出しやるんだと気持ちを新たにす。

そう、隣のコケダマ……コケちゃんと呼ぼうか。コケちゃんに決意を伝える。

『あはっ、いいね。ならずつと一緒だよ、若葉さんも仲間だから……』

なんだか少しテンションがおかしくなっているけど、互いに辛い思いばかりしてきたのだから、気持ち上げていかない大変なのは同じなのかも。

あと、若葉さんって呼ばれるのなんだか落ち着かないから、これからは蜘蛛子って呼んで欲しい。

『うんっ！ よろしくね、蜘蛛子ちゃん！』

聞こえる声は、とても明るくて、ここが暗い地の底にある迷宮であることを、忘れさせるような声であった。

さしあたっては、強くなるために進化、からかな？

——陰鬱な長い廊下を歩く。

俺の前方に小柄な背丈ながらも、この城で誰よりも強い存在が上機嫌で歩いていた。

そんな少女の姿をした存在こそが、今の我らの主である魔王様だ。

「あつ、バルトじゃん。どうしたのそこで？」

ある意味見た目通り、もしくは魔王らしくない気安い口調で、俺に話しかけてきた。

「会議の準備中です。魔王様」

「あつはっはー！ いつもすまないねー、バルトくん」

そういう魔王様は、微塵もすまないとは思っていないような雰囲気

で、俺に毎回仕事を押し付けてくる。

まあ、このような態度はもう慣れたが。

「それで、魔王様はどちらに」

「んー？ あー、あの子の様子を見に、ね」

魔王様が言うあの子とは、どちらであろうか。

「あ、白いのじゃないほうね」

あの方が。

「いつもあんななのに、瞑想しているときはすっごく静かでき。あの瞬間だけは世界が塗り替わっているように感じるよ」

あの方も、大概問題を起こす側であるから、想像もつかないのだが。

「バルトも一度見てみると良いよ。あの子の魔力操作は芸術だから」

そう言う魔王様は、どこか遠くを見つめるような瞳で、ポツリと呟く。

「あの子も、もっと自由でいいのに私たちの都合に巻き込んでしまっている……」

一瞬陰が差したかと思えば、次の瞬間には彼女は明るく振る舞う。

「さーて、今日も面倒なお仕事をしますかー」

そして、俺の横を魔王様を通り過ぎていく。

その事実にも、内心気付かれないように息をつく。

また憂鬱な日々が続いていく、と。

4 (二人で) 進化するよー!

仲間が、できた――

私と同じくらいの大きさをした真っ白な印象を受ける蜘蛛。

その中身は、前世でクラスメイトだった若葉^{わかば} 姫色^{ひいろ}さんだという。正直、信じられないって気持ちでいっぱい。

だってクラスの中で誰よりも綺麗で生きている世界そのものが違うのではって思うほど、持っている雰囲気や気配などが違って見えたのが彼女だったから。

けれど、違和感については今は置いておく。

そんな彼女が現在は蜘蛛であり、私もコケダマのような虫の類に生まれ変わっているのだから、神様というのがいるのなら残酷にも程があるよね……

今こうして遠い目で考えに耽っているのは、簡単には登れなさそうな岩肌の高所に巣を作って糸に包まり、今は蜘蛛子^{くまこ}って名乗っている若葉さんが進化している最中だからなので……

蜘蛛子ちゃんは現在、念話を取ることが出来ないみたいで、筆談などでしか意思疎通することが出来ないために、なかなか時間が掛かったけれど互いに知っていることの情報を共有できた。

それによると、進化するときには強制的に眠りについてしまい無防備になってしまうので、周囲の安全の確保と、進化後にはSPがほとんど空っぽになっているから食料の確保も必須だということを教えてくれた。

なので、今現在私は周囲の警戒と、二人でトドメを刺して回った猿の回収作業をしているところである。

周囲の安全に関しては、ついさつきまで猿の大群がいたからなのか数百メートル単位の距離で誰もいなくて、警戒すべき相手も森羅万象で知覚できる範囲の末端のほうにしかない状況なので、基本安全だとおもう。

それよりも猿の死骸を集めることのほうが大変で、とつても重労働。

蜘蛛子ちゃんみたいに糸を操って纏めることが出来ないから、基本身体で押していくしか方法がない状況に陥っていた。

いや魔法を使って動かすのも考えたけど、今のスキルではロクに動かせないかボロボロに傷つけてしまうかの二択しか選択肢が無くて、地道に頑張つて運ぶしか無かったからなのです……

そうして蜘蛛子ちゃんが進化に入ってから1時間くらい過ぎた頃。糸を裂く音の後、クルクル回転しながら蜘蛛子ちゃんが降りてきた。

空中で宙返りを何度も鮮やかに回転した後、軽やかに着地すると高らかに前足を掲げたポーズを決めていた。

『おお〜ぱちぱちぱち……、進化できたの?』

まるでサムズアップのように力強く前足を揺らし、頭を前後に大きく揺らす蜘蛛子ちゃん。

そんな蜘蛛子ちゃんは、身体の黒い部分と赤紫色の模様が増えて少し禍々しくなった気がする。

『鑑定するね』

——グッ!

いいよー! そんな副音声が聞こえた気がした。

《スモールポイズンタラテクト L V 1 名前 なし

ステータス

HP : 56 / 56 (緑)

MP : 1 / 56 (青)

SP : 56 / 56 (黄)

: 1 / 56 (赤)

?

スキルポイント : 200

称号 : 恵食 血縁喰ライ 暗殺者 魔物殺し 毒術師 糸使い 無

慈悲 魔物の殺戮者》

おおー種族名が変わってる。

ステータスは微増みただけど、スキルが全体的に上がっているみ

たい。

それに、聞いたとおり進化後はSPがゴツソリ減ってしまうのは本当みたいだった。

ん？ 蜘蛛子ちゃんが何か書いてる……

「カンテイ 使われると こんな感じなんだ」

ああ……

『私も蜘蛛子ちゃんに使われて、初めて鑑定される側の不快感を知ったよー』

なんというか、無遠慮に身体の内側を触られているような、鳥肌が立つようなゾワゾワした嫌な感覚がするようなんだよね。

そりゃあ、掛けられた側はイライラするだろうし、あの時怒られたのも仕方ないと思う。

私が過去に立ち帰っている僅かな間に、いつの間にか猿の死骸を糸で引き寄せていてその筋肉質で硬そうなお肉に齧りついている。

そして私の意識が戻ってきたのを横目で確認した蜘蛛子ちゃんは、前足で地面を指す。

そこには――

「シンカ していいよ コケちゃん」

蜘蛛子ちゃんは、前足を何度も何度も高く上げて喜んでいるような応援しているようにも見える変な動きで、私の進化を勧めている。

私もLV10となって進化出来る状態だったのは伝えてたけど、そんなあつさり……

あと、コケちゃんって私のことかな？ まあたしかにその通りの見た目だけど……

《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。》

・コケダマ

・スモールパラライズコケダマ

・スモールスリープコケダマ

《

いっぱいあるなあ。》

『ねえ、蜘蛛子ちゃん。進化ってどれがいいの?』

そう語りかけると、食事を止めて少し間が空いた後、返事してくれた。

「希少種 一択」

そうは言っても――

《スモールパラライズコケダマ：進化条件：一定以上のステータスを持つコケダマ種、「麻痺術師」の称号：コケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の希少種の幼体。非常に強力な麻痺毒を持つ》

《スモールスリープコケダマ：進化条件：一定以上のステータスを持つコケダマ種、「睡眠術師」の称号：コケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の希少種の幼体。非常に強力な催眠作用を持つ》

二つあるみたいなんだけどねー。

条件の二つの称号は、猿と戦っていたときに麻痺や睡眠に毒など状態異常を含んだ攻撃を、近づいてきた猿に対してばら撒き続けていたときに獲得していたみたい。

あのととき私は状態異常を仕込んだ鎧と砦を築いて押し寄せてくる猿を迎え撃ち、私本体には一切触れることができずにバタバタと打ち倒していった。

称号を獲得する条件の「一定量使用する」は、限界まで広範囲に仕込んで汚染地帯を作り上げたからというのと、おこぼれを貰っていた頃の累計で達成したのかも。

それで進化先の三種類なんだけど、コケダマは身体が大きくなる通常の進化となる、耐久力などステータスは高くなるけど特にスキルが増えるわけでもない感じ。

実際群れの中にも少ないながら居たけれど、あまり強くなって立場も弱そうな感じだったのを、ぼんやりとだが憶えている。

あとの二つのパラライズ・スリープについては、それぞれの成体が活躍しているシーンは印象に残っているので、間違いなくこの二つが最適なのだと理解していた。

さて、どっちにしようかな……

……うん、決めた。

『蜘蛛子ちゃん、進化するね』

《個体スモールコケダマがスモールパラライズコケダマに進化します》

そう決めた途端、耐え難いほどの眠気が襲ってきて意識がぼやけていく。

これは……、たしかに危険……だ……ね……

霞む視界に蜘蛛の前足を振って、いつてらっしゃいと言っているかのような蜘蛛子ちゃんを映しながら、私は深い闇に堕ちていった。

んんっ……、あれ、私、何して……

ああ……、進化を選んで突然眠くなってそのまま……

まだぼんやりする頭を叩き起こして全身に力を入れて伸びをする。

ほんの一瞬だけ膨張したコケダマの肉体と苔を感じつつ、周囲を確認する。

気づくと、蜘蛛子ちゃんが猿の死骸を一か所に集め終わっていて、うず高く積まれた猿山の上でポリポリ手足を齧っていた。

そして綺麗に食べられた骨が、転がりながら降ってきた。

私が始めたのに気づいた彼女は、食べかけの猿の腕を持ちブンブンそれを振っている。

森羅万象を起動し直して周囲数百メートル以上ぎつと探るも、危険はなさそうなのを確認して、自分自身へと鑑定をかける。

《スモールパラライズコケダマ (苔森 真理) L V I

ステータス

HP : 72 / 72 (緑)

MP : 42 / 1352 (青)

SP : 71 / 71 (黄)

: 1 / 71 (赤)

平均攻撃能力 : 34

平均防御能力 : 82

平均魔法能力：1130
 平均抵抗能力：82
 平均速度能力：57
 スキル
 HP自動回復LV2 MP回復速度LV3 MP消費緩和LV3
 SP回復速度LV2 SP消費緩和LV2
 状態異常強化LV2 魔力操作LV4 魔闘法LV2 魔力撃LV2
 魔力付与LV3 麻痺攻撃LV8
 睡眠攻撃LV4 毒攻撃LV3 酸攻撃LV3 外道攻撃LV2
 麻醉合成LV3 催眠薬合成LV2
 苔鎧LV6 鎧の才能LV2 立体機動LV3 隠密LV2
 集中LV10 思考加速LV3 予見LV3 並列思考LV5
 演算処理LV6 記憶LV4
 命中LV3 回避LV2 鑑定LV10 念話LV1
 光魔法LV4 水魔法LV3 風魔法LV3 土魔法LV3 治療魔法LV2 麻痺魔法LV2
 睡眠魔法LV2 外道魔法LV3 物理耐性LV2 状態異常耐性LV5 酸耐性LV3
 腐蝕耐性LV2 気絶大耐性LV3 恐怖耐性LV3 苦痛耐性LV5 外道無効
 暗視LV10 五感強化LV3 視覚領域拡張LV2
 身命LV2 天魔LV10 瞬身LV2 耐久LV2
 強力LV3 堅牢LV2 天道LV10 護符LV2 縮地LV1
 1
 欲求LV5 過食LV4 神性領域拡張LV1 森羅万象LV1
 0 禁忌LV3 n%1||W
 スキルポイント：7000
 称号
 悪食 味方殺し 血縁喰らい 麻痺術師 睡眠術師 無慈悲 魔物殺し

おおー、かなり変わってるー……

ステータス的にはそこまで変わったわけではない——それでも蜘蛛子ちゃんよりは全体的に高めだ——けれど、スキルの成長が著しい。

ほとんどのスキルがLV1つ分は上がっているし、進化前に多数増えたスキルもあつてか、鑑定で表示されて並んだ情報量が大きく増えている。

進化で見たこと無い真新しいスキル等々が増えたりはしていないようだけど、確認がまだだったスキルの説明について見る。

《麻醉合成・MPを消費して麻醉薬を精製、カスタマイズする。合成できると、MPを消費して麻醉薬を精製、カスタマイズする。合成できる麻醉薬はレベルによって異なる》

《催眠薬合成・MPを消費して催眠薬を精製、カスタマイズする。合成できる催眠薬はレベルによって異なる》

ここらへんは、称号によって追加されたスキル。

麻痺魔法や睡眠魔法についても、名前の通りのスキルだったから割愛。

そして次は、いつのまにかLVが上がっていた謎のスキル。

《欲求：強い欲望を示すスキル。経験値吸収能力が微増》

説明だけではよく分からないけれど、よりレベルが上がりやすくなる効果と、回収範囲と効率が良いくなるスキルみたい。

——強くなれるなら、何でも良いカナ。

説明の通りなら強い欲望に反応してスキルが成長するみたいだから、その想いを胸に抱き続けていけばいいはず。

そう、強さというのは鮮烈に思い出せる。だから——

《熟練度が一定に達しました。スキル「欲求LV5」が「欲求LV6」になりました》

——フフふつ、そうだね、そうそう……。忘れない、忘れたりなんかしてたまるもんか。

この悔しさと絶望と不安に、狂おしい憧れは絶対忘れない。

胸の奥に暗い炎を再び灯して心を焦がれさせる。

そして私は沈み込んでいた意識を外界に向け直した。

すると目の前に蜘蛛子ちゃんがいて、猿の死骸を突き出していた。まるで、食べないの？　つて言っている感じで猿を突き付きながら首を傾げている。

そうだった、進化後はSPが空っぽで餓死寸前になるんだったね。ありがたく受け取って食べ始める。

そして自分の体積以上あるのに何故かお腹に収まっていく、いつもの食事光景を作っていると、蜘蛛子ちゃんが変わらずに私をジツと見つめていた。

『……あー、もしかして……、うん鑑定していいよー』

伝わったことに喜びを感じたのかガッツポーズのような動きをする蜘蛛子ちゃんを横目に私は食べ続ける。

途中で、気持ち悪い不快感が襲ったけど、抵抗せず素通りさせた。

これなら抵抗力などで妨害されずに見えるはずなので、蜘蛛子ちゃんにもステータス情報が共有できたはず。

そういえば、進化した後の見た目を確認していなかった。

自分の姿を見れるような鏡も何も無いので、森羅万象の感知能力を上手く使って視界の外の情報を拾い集めて姿を確認する。

身体の大きさ自体は特に変わっていなくて、蜘蛛子ちゃんとあまり差の無い大きさ。

背丈は一メートルくらいかな？　長さはもうちよつとある感じ。

けど重要なのはそこではなくて、色合いがガラリと変わったのが大きな変化だと思う。

今までは深い緑色をしたモサモサした苔を纏っていたけど、進化をしてからは鮮やかな黄緑色をしていてかなり派手というか目立つ感じになっている。

そして苔の質も良くなったみたいで、ゴワゴワしていた感じだったのがとてもフワフワとした、綿毛のような柔らかい質感に変わっているみたい。

なんとというかぬいぐるみ屋さんにも置かれていても違和感ないような、どちらかと言うとカワイイ印象の、魔物っという感じのしない見た目をしている。

そんな、今度は黄緑色の綿あめとかそんな感じに進化したのを確認している、私の上に蜘蛛子ちゃんが乗っかってきた。

そしてフワフワした苔に身体を埋めるように身体を揺らしていた。蜘蛛子ちゃんが乗っかってても大して重くは感じないけど、そのフワフワを私自身は感じられないのが少し妬ましいと思う。

ある意味私の体の一部なので、それがどれだけフワフワなのかわかってはいるけど身体にくっついてるので、それは飛び込み埋もれる感覚とは別物だと思っている。

そんなことを思い蜘蛛子ちゃんに注意を向けると、埋もれた体勢でピクリとも動かないでいた。

羨ましい………と思っていたら、どうやらそうじゃなかったみたいで。

足先がピクピク痙攣して泡を吹き、まるで陸に打ち上げられて瀕死になった魚のような……

……あつ、麻痺攻撃。

『く、蜘蛛子ちゃあーん!!』

急いで振り落として様子を確認するけど、痺れて動けないだけでH Pとかは全然減っていないかったのが幸いだった。

蜘蛛子ちゃんが元に戻ったのは、それから十分くらい経ってからだった。

5 灼熱の中層へ

なんだかんだあって、現在中層攻略に向けて準備中の私と蜘蛛子ちゃん。

進化した事は良いものの、その後に見つけた上り坂とその先のエルロー大迷宮中層を前にして、私たちは足踏みをしている最中であつた。

エルロー大迷宮の中層は、ドロドロの溶岩が川のように海のように広がる灼熱の地獄であつた。

一応足場となる地面もあるけれど、地面も空気も暑いを通り越して熱くてHPが削られていく程だし、なにより私たち二人とも火に弱すぎるという弱点があつたため、対策を考えるために下層に戻つてレベル上げをしつつ、下層と中層とを行ったり来たりの繰り返しの日々だつた。

私は、ちよつとしたことですぐ引火してしまい火達磨になつてしまふ弱点。

蜘蛛子ちゃんは、常に垂らしてしまう蜘蛛糸に引火して導火線のようになつてしまい、そのため糸全般が基本的に使用不可という状況になつていた。

私の場合、水魔法で常に自分を濡らしていれば発火を抑えられるけど、その分鈍重にもなる上に消耗も激しい。

蜘蛛子ちゃんの場合は、蜘蛛糸を適時切り離していれば問題ないけど、糸が使えない以上遠距離攻撃の手段を失つてしまつている。

蜘蛛子ちゃんは代わりにの遠距離攻撃として魔法を使いたいらしいけど、魔力の感知というものが出来ないそうで……

原因は探知という、私が所持している森羅万象と非常によく似たスキルを扱いきれない事によるもので、出来ない理由はあの頭痛と処理しきれない膨大な情報量によるものだろう。

情報量については、私もまだまだ扱いきれていなくて殆どを受け流すしか出来ていないけれど、思考加速などのスキルを上げていけば多

少しは改善できそうな感じがしていた。

しかし、それ以前の問題として、外道無効がなければロクに扱えない程の頭痛と負荷が掛かってくるのが根本の原因だと私は思っている。

なので探知を使うには外道耐性を上げるべきなのを教えて、魔法……と言うより遠距離攻撃は主に私が担当することになった。

耐性を上げるために影響が少なそうな外道魔法を選んで、空いた時間とかに蜘蛛子ちゃんへ掛けようか提案したけれど、それは流石にと断られちゃった。

……まあ、私もどうかしてると後で思ったけれど。

代わりに別のスキルを取得して、どうにか頑張るらしい。

そして私は、あまりにも普段の移動速度が違いすぎるという問題を解決するために、自分で自分に魔法をぶつけることで、吹き飛びながら転がって移動する手段を思いつき、なんとか形になったところである。

丸まり膨らんだ身体はその体積と面積に対して比較的軽く、風の影響を受けやすいフワフワの苔に覆われているので、そこに風魔法を自分自身に向けて撃ち込むことで、面白いように吹き飛んでいく。

丸まって吹き飛ばされると、目が上下左右グルグル回って視覚がほぼ使えなくなるけれど、その代わりに周囲を森羅万象の感知能力で補って位置の把握と調整を行い、蜘蛛子ちゃんについていける程度には速度の差を縮められたと思う。

まあ、無理矢理移動している訳だから小回りが利かず、中身はシエイクされるのでかなり気持ち悪くなるというデメリットもあるのだけれど、それには頑張って耐える。

移動手段を確立した私は蜘蛛子ちゃんと一緒に、周囲の狩れる魔物のみに狙いを定めて強襲して殲滅するのを繰り返してレベル上げをしつつ、同時並行で火耐性などのスキル上げも行っていた。

私たちが狩れる魔物はというと、大抵毒持ちという非常に苦い味をした相手しかいないけれど、食料の限られる迷宮では贅沢言える状況ではないので我慢して食べ続ける。

『こんなのしか無いなんて辛いね』って蜘蛛子ちゃんに言ったとき、もつと酷い味に出会った事があるかのような遠い目をしていたのが気になった。

……それはきつと好奇心は猫をも殺すような、知るべきでは無い事なのだろう。

またあるときは、私が纏う苔そのものを齧られたことがあった。神経が通っている訳でもないので痛くもないし、少量だけなら減っても少しずつ元に戻るの、あまり気にはしていないけれど最初はかなりビツクリした。

たぶん私の苔には麻痺属性が多分に含まれているので、それを食べた蜘蛛子ちゃんが痺れていたけれど、それによって麻痺耐性のレベル上げが出来るなら良い方法なのだと言得は出来る。

しかし、突然噛みつかれるのは心臓に悪いどころでは無いので、めっちゃ怒ったけれど。

——具体的には、そのまま麻痺漬けにして動けない蜘蛛子ちゃんを延々ド突き回す、オシオキをした。

けれど、その後も何度も何度も齧られるので、今は諦めてされるがままにしてる。

大抵毒持ちなど美味しくない魔物を食べた後に齧られるので、一度『私の苔、美味しいの?』と聞いたけれど、首を傾げて何分か悩んだ後「キツイミントみたいな味」と答えてくれた。

……お口直しとか、そういうことなの?

そうしてレベルが幾らか上った頃、事件は起きた。

そろそろ本格的に中層の攻略を行おうとしていたとき、アイツがやって来たのだった。

『地龍カグナ』

あのとき群れと戦いになった、地龍の片割れ——

私が私で無くなるような凍え崩れていく恐怖と、それすらもドロドロに溶かす暗い怒りが、私の心を塗りつぶしながら荒れ狂う。

思考が溶けながら感覚が研ぎ澄まされ色が消えていこうとしたとき、蜘蛛子ちゃん在必死で蜘蛛の巣から飛び退き離れようとして、それと同時に魔力の高まりを感じた。

そして蜘蛛子ちゃんが走り出し、私も慌てて防御の体勢をとったとき蜘蛛子ちゃんの巣が地龍のブレスによって爆発した。

土魔法で壁を作り衝撃に備えたものの、直撃では無いにもかかわらず大きく吹き飛ばされて何度もバウンドした身体が痛みを訴える。

けれど、偶然にも蜘蛛子ちゃんと同じ方向に飛ばされたので、その勢いのまま自分自身に風魔法を当てて、さらに加速し蜘蛛子ちゃんに追いつく。

追いついたとき驚いたような反応をされたけど気にせず、転がり走り続ける。

今にも背後からブレスが来ようとしている中、それを気にして足を止めてしまつては今度こそ粉々に粉砕されて死んでしまうだろう。

そのまま私たち二人は、地龍から追い出されるようにして中層へと進んでいく。

崩れ落ちる下層への通路を感じながら灼熱のマグマ満ちる場所へと進み続け、私たちはもう帰れないのを心のどこかで感じながら、焼け焦がす新たな地獄へと足を踏み入れるのだった。

なし崩し的に中層攻略を余儀なくされた私たちだけけど最初に来たときと比べ、だいぶ余裕のある状態でマグマだらけの中層を進んでいた。

一番始めに来たときは暑すぎて常にHPが減り続ける状態だったけれど、今ならHP自動回復と火耐性LV1のおかげでギリギリ回復が上回るくらいには状況が良くなっていた。

逃げるときに負ったダメージは治療魔法で回復させることで元に戻したけれど、今後HPの回復にはレベルアップするかMPを消費しての治療しかないので、消耗しすぎないように注意しないといけない

ね。

そう話し掛けながら、二人でトボトボ進んでいると。

《エルローゲネラツシュ LV5

ステータス

HP : 159 / 159 (緑)

MP : 145 / 148 (青)

SP : 145 / 145 (黄)

: 116 / 145 (赤)

平均攻撃能力 : 83

平均防御能力 : 81

平均魔法能力 : 79

平均抵抗能力 : 77

平均速度能力 : 88

スキル

火竜LV1 命中LV2 遊泳LV3 炎熱無効

》

ここに初めて来たときに発見していた、タツノオトシゴのような魔物と遭遇した。

大きさは私たちよりもだいぶ大きいけれど、ステータスやスキルなどは圧倒的に低くて、魔法を数回撃ち込むだけで倒せるほど弱いけれど、マグマの中にいるから引き籠もられると厄介な相手。

すぐに魔法の構築を始めたけれど、それは横に出された蜘蛛子ちゃんの前足によって遮られる。

そしてそのまま蜘蛛子ちゃんは、ゆっくりタツノオトシゴに近づいていく。

タツノオトシゴは迎撃として火の球を口から吐き出してくるけれど、それを蜘蛛子ちゃんはギリギリ……いや余裕だからこそ、スレスレで回避し続けている。

どうやらあの火球はMPを消費するみたいで、蜘蛛子ちゃんは相手のMPが尽きるまで耐久戦をするつもりみたい。

そしてMPが無くなったタツノオトシゴは、潜って逃げるでもなく

そのまま陸上に登ってくる。

そして突進してきたけれど、……それは非常にゆっくりとした動きの突進だった。

私が普通に這う方法で移動するときの全力より、ちよつと速い程度ではない突進は、蜘蛛子ちゃんにとつては止まって見えるようなもので、あっさりとは留めていた。

ただ突き刺した足先が熱くて火傷したらしく、バタバタ振り回して冷まそうとしていたので治療魔法を掛けてあげながら、今しがた倒したタツノオトシゴを見る。

マグマ地形と私たちの弱点になる攻撃を使う相性が悪い相手でも、こうして地上に誘き出せば、なんとかかなりそうだと、そう思った。

そうして未だ高温を発するタツノオトシゴの死骸に対し、MPに余裕があったので水魔法で冷水をブツ掛けてみるものの周囲の環境もあつて殆ど冷えないので、食べられる温度まで自然と冷めるのを待つしかないみたい。

そうして冷めるまで待っている間に襲ってきた他のタツノオトシゴを相手しつつ、ようやく最初に倒したタツノオトシゴが食べられる温度になった。

蜘蛛子ちゃんは基本倒したら必ず何でも食べるみたいで、今まではマグマに沈んでしまつて回収出来なかつた初戦のタツノオトシゴ以外は、苦かろうが不味かろうが全部残さずに必ず食べているみたい。なので私も倣つて、残さず食べることにするけど。

『うーん……、硬くて微妙……』

尋常じゃなく硬くて弾力もあるので口の中でギチギチ軋んで噛み切るのも一苦勞だし、味も苦くはないけれど美味しさの欠片もない、ゴムの塊みたいな感じ。

でも、生きるために食べなくちゃ。

倒した数だけ、食べた数だけ強くなれると信じて、頑張るしかないのだから。

そうして中層探索を進めること数日くらい。

なかなか休むことが難しい環境のため疲労と寝不足を感じつつも、今日も今日とて進み続ける。

流石に寝不足によるパフォーマンスの低下は厳しく、気絶したりとかは無いとはいえ魔法の構築に影響が出始めたので、睡眠耐性が含まれている状態異常耐性をいくらか上げつつ、さらには周囲の岩と同化するような休憩場所を構築して休む技術が向上しているのを感じていた。

ときには岩をくり抜いて入口に薄い岩を張り付けたり、岩石を複数作って視線を絶つようにはしてみたり、何もない見晴らしのいい場所では穴を掘って隠れたり、私も必要だからやっていることなだけ、なんだか蜘蛛子ちゃんが毎回期待しているような目をしていて、便利な子扱いされているような気がして少しモヤツとする時がある。

今は、足場の悪い中層でも蜘蛛子ちゃんに追いつくため、小刻みに跳ねながら移動している。

マグマが流れる中層で前のように転がると、そのまま落下しポチャンしてしまう可能性が非常に高いので、最小の威力でふんわり浮かすように風魔法を当てたり、飛びすぎたり勢いが付き過ぎているときは、新たにスキルポイントを使って取得した、重魔法という重力を操る魔法によって調整していた。

森羅万象によって非常に高精度な情報を把握できるからこそ、なんとか成立している曲芸みたいなものだけど、こういうことをやっているから器用で便利な子扱いを、蜘蛛子ちゃんから認識されているような気がする。

そうしていると森羅万象が、まだ見たこと無い新手の気配を察知した。

しばらくしてマグマから顔を出したのは、ずんぐりとした巨大なナマズのような魔物だった。

《エルローゲネセブン LV7

ステータス

HP：461／461（緑）

MP : 2 2 3 / 2 2 3 (青)
SP : 2 1 8 / 2 1 8 (黄)
: 4 5 1 / 4 6 6 (赤)

平均攻撃能力 : 3 6 8

平均防御能力 : 3 1 1

平均魔法能力 : 1 6 1

平均抵抗能力 : 1 5 8

平均速度能力 : 1 5 5

スキル

火竜LV2 龍鱗LV1 命中LV8 遊泳LV7 過食LV3

炎熱無効

》

おおー大きい……、けれど家主さんや地龍と比べたら大したこと無い程度の大きさしかない。

ステータス的には私たちよりも全体的に高いけれど、私は魔法が、蜘蛛子ちゃんは速度が非常に突き抜けている。

さらに今まで見てきた普通の魔物はスキルを少ししか持つておらず、一部の例外を除いて見た目通りのシンプルな攻撃や技しか使っていないということに気付いていた。

そう考えると家主さんと呼んでいたアークコケダマさんは大量のスキルを所持していて、多彩な魔法を使い分けていたことから相当例外中の例外だったことに改めて気付き、家主さんは凄かったのだと感嘆する。

見えている範囲では問題なく戦えるだろうと思った私は、蜘蛛子ちゃんに一言声をかける。

『ねえ、いけると思うけど戦ってもいい？』

少し首を傾げた後、蜘蛛子ちゃんは大きく頷いた。
そして私は誘き寄せるために、威力を落とした魔法を当てて怒らせつつ下がっていく。

マグマや火球を飛ばしてくるものの、最近グングン成長している土魔法で壁を作って防ぎつつ、ナマズが登ってくるのを待つ。

ナマズもタツノオトシゴと同じようでもPが少なくなると地上に登ってくる習性のようで、ようやく引きずり出せたと思ったときに、もう一つ反応が近づいてきているのに気づいた。

『蜘蛛子ちゃん、後ろ気をつけてー』

蜘蛛子ちゃんの後ろ側からマグマを裂いてあらわれるナマズ。

事前に警告して気づけたからなのか、マグマから飛び出した勢いそのまま大口を開けて飲み込もうとするのを、冷静に回避する蜘蛛子ちゃん。

そしてもう一度大きく口を開けて噛みつくこうとしているナマズの喉奥に、蜘蛛子ちゃんは猛毒を放り込んだ。

猛毒を飲み込んでしまったナマズは、巨体を大きく振って苦しげにのたうち回る。

鑑定で見たときに毒耐性などのスキルは持っていないだったので、耐性も無しに危険極まる下層で磨き上げられた蜘蛛子ちゃんの毒を受けては当然無事では済まず、現在急速にHPが減少しているだろう。

そして、たつた今陸に登りきつた最初のナマズは、同種の惨状を見て怯えたような素振りを見せていた。

ゆっくり後退りして逃げようとしているので、急いで手加減抜きの本気の魔法を叩き込む。

手加減を止めた私の魔法はナマズの身体とHPをドンドン削っていくけど、思ったよりダメージの通りが悪いのを感じる。

このままだと逃げられると思えば威力と数を増やして仕留めることに成功したけれど、私はナマズに魔法が当たる直前で威力が弱まっていったことに疑問を抱いていた。

そして後ろでは痙攣するナマズに止めを刺している蜘蛛子ちゃんを確認しながら、瀕死のナマズにもう一度鑑定をして原因に気づいた。

龍鱗、特殊な鱗で魔法の力を阻害する効果のスキル。

私の主な攻撃手段である魔法を打ち消してくる能力だった。

この龍鱗というスキルを知った私は、もしこれの上位のスキルを持った相手と戦うことになった場合、このままでは太刀打ちできない

予感をヒシヒシと感じていた。

すでに瀕死のナマズには過剰の威力の魔法を構築する。

そしてそれを全力で強化し圧縮し、多量のMPを注ぎ込んだ魔法をナマズに撃ち込んだ。

全力の魔法に撃ち抜かれたナマズは、頭部を大きく抉られて頭蓋骨の中身を爆散させて絶命していた。

それを無感情な瞳で見ていると、横から蜘蛛子ちゃんに身体を突付かれていた。

そして、今殺したナマズを指差していた。

——ああ、このままだと沈んちやうからね。

土魔法で地面を動かして引き上げつつ、私は確かな手応えを感じていた。

阻害されても、それを上回る威力で穿けば魔法は通ると。

そして周囲の安全確認をした後に、ナマズが冷めて食べられるようになるまで二人して、真夏の炎天下に晒されたアスファルトのような岩肌に蹲って休む。

待つ間、先程の戦闘を振り返りながら、お互い深く深く思考へと耽っていく。

けれど、互いの胸の内は違った想いを抱えながら——

6 ナマズいるならウナギもいるよね

私たち二人、それぞれ倒したナマズを並べて、もうすぐ食べられるまで冷めてきたころ。

蜘蛛子ちゃんが倒したナマズは、毒合成で作り出した蜘蛛猛毒を飲み込ませて仕留めたため非常に綺麗な死骸だけど、私が仕留めたナマズは最後の一撃で頭が吹き飛んだ為、かなりグロテスクなことになっていた。

そして私たちは、冷めるまでの待ち時間で別々のことをしていたのだった。

蜘蛛子ちゃんは中空を見ながら考え込んだり小刻みに前足を動かしていることから、鑑定を見ているのだと思う。

そして私は、魔力操作を鍛えつつ魔法の検証を行っていた。

あのナマズ、どこか間抜けな感じもするけど実は火竜に属している魔物で、そして竜あるいは龍という種族は、私にとって厄介なスキルを獲得するらしい。

龍鱗。

このスキルのせいで魔法の効果が弱められてしまい、十全に威力を発揮できないことに危機感を覚えていた。

私のメインウェポンは魔法による攻撃に偏っているので、もしそれが完全に無効化されるような相手だと、何も出来ない無力なコケダマでしかなくなってしまうから。

ならどうするのかと言うと、あまり出来ることは少ない。

強力な麻痺攻撃というスキルを持っているけど、蜘蛛子ちゃんと違って私は素早く動けないし、近接攻撃が体当たりと噛みつきしか方法が無いのでは、接近戦は分が悪いにも程があると思う。

蜘蛛子ちゃんよりは防御力抵抗があると言っても殆ど誤差みたいなもので、攻撃が直撃したら危険なのは変わらないのに回避は絶望的。

となると魔法以外の遠距離攻撃を開拓獲得することだけど、取得可能な候補にそれらしいものは見つからないし、可能性がありそうなもの

は苔を千切って飛ばすことくらいしか思いつかない。

ただ、千切るのはいいけれど飛ばす手段が無いので、殆ど無意味でしかない。

今更だけど私の見た目は楕円形の黄緑色をした苔の塊に見えるけれど、本体はそれよりも一回り二回り小さな芋虫なので、投げたり出来るような腕も手もない身体であることを改めて認識する。

今ではだいたい慣れたこの身体も、転生した最初の頃は大いに混乱して違和感に苛まれていた。

全身をくねらせて這いずることしか出来なくて、手足のない感覚は今でも人間だった時の記憶と食い違って辛く思う時がたまにある。

そんな時に魔法による移動方法を思いついたのは、まさに救いだっただ。

これなら自分の身体をあまり意識しなくて済むので、ただ魔法に集中していればそれだけで余計な意識を飛ばし、魔法で私の全てを満たすことができるから。

……やっぱり、私には魔法しかない。

何をどうしたって、私が出来るとは魔法しかないのだから無効化されようが何だろうが、それを強引にでも突破出来る力を手に入れるしか無いのだと、私は魂に誓った。

少し力を込めすぎたのか構築中の魔法が軋むけれど、すぐに修正して石弾を生成する。

質量を伴った攻撃だからか阻害を受けにくい土魔法だけど、それでも龍鱗によって威力は落ちてしまうだろうし、下層にいた地龍は大地無効というスキルを持っていた。

これは土魔法とその上位の大地魔法を完全に無効化してしまうスキルだと思われる。

なら、それ以外の属性でかつ龍鱗を突破できる魔法を扱えるようにならないと、あの地龍に勝つことは到底不可能だと感じていた。

そう思い、今私にできる最高を求めて、限界まで同時展開したり術式が壊れるギリギリまでMPを込めてみたりして、突破口を模索したりしてみる。

あまりにも集中しすぎたのか、色々とスキルのレベルが上がったア
ナウンスにも気づかず、またもう既にナマズが食べられるようになる
まで温度も下がっていて、蜘蛛子ちゃんが一心不乱に食いついていた
事にも気付かずに、ただ只管に没頭していた。

そしてあつという間に一匹を食べ終えて、私が倒したナマズをチラ
チラ見て、そーつと盗み食いしようとしていたのに漸く気付き、没頭
しすぎた意識を現実に戻す。

『……蜘蛛子ちゃん??』

ギクリと、油の切れた機械のようにぎこちなく振り向く蜘蛛子の口
には、溢れんばかりのヨダレが垂れ流されていた。

バツの悪そうな雰囲気を出しているけど、それでもヨダレは溢れて
止まっていないし物凄く名残惜しそうな気配も隠せてはいなかった。

『……そんなに美味しかったの？ ナマズ』

すると、残像が見えるほど頭を振り、続いて蜘蛛の身体なのに凄く
コミカルな動きで全身を使って喜びを表現していた。

『うーん……、まあちよつとなら食べてもいいよ』

そう許可をだすと、八つの目をキラキラさせて一目で喜んでいると
わかるオーラを纏いながら、ナマズへと齧りついていた。

そして物凄い勢いで食べ始めるので、私の分が無くならないうちに
私もナマズに齧りついた。

すると――

――ツ！ おいしいっ!?

まともなお肉の味を感じたのは転生してから初めてのことと、それ
まで硬い苦いと食事とすらも言えないナニカでしかなかった行為が、
本来の形で幸福感を得られることに感動する。

お肉は弾力ある淡白な白身魚のようで、それ自体の旨味は程々でク
セがない。

けれどそれを補うかのような濃厚な脂が全身に詰まっていて、一緒
に食べることによって上質な美味しさが口いっぱい広がる。

弾力あるお肉はモチモチとした食感を伝え引き締まっております、硬す
ぎず柔らかすぎない感触は、食べているという実感をより強く感じさ

せる。

いまだに火傷しそうなほど熱を帯びたお肉は、アツアツでジュシーなのにプリプリの刺し身の味わいを見せ、熱とともに旨味が広がるのに食感は柔らかい不思議な食感を与えてくれる。

気づくとナマズを大きく抉るほど食べており、如何に一心不乱で食べていたのか漸く気付く。

そして蜘蛛子ちゃんは、ちよつとならと言ったのに既に三分の一もナマズを食べ尽くしていて、もう残りわずかしかなマズのお肉は残ってはいなかった。

『あつ、ちよつ、食べすぎ！』

急いで食べ進めるものの、結局蜘蛛子ちゃんが六割近く食べたので、私としては少々不満が残る結果となってしまっていた。

『……………蜘蛛子ちゃん』

お腹いっぱいといった様子で、ひっくり返って膨らんだお腹を擦っていた蜘蛛子ちゃんに対し、怨嗟を込めた念話を送る。

するとビクリとして硬直している蜘蛛子ちゃんに、勢いをつけてのしかかる。

体格差等は殆どなく私自身の重さもあまり無いけれど、勢いよく押し潰したことで苦しそうにえずく蜘蛛子ちゃん。

そんな蜘蛛子ちゃんに対してさらに力を加えてのしかかりつつ、念話を送る。

『くーもーこーちゃん？？ 流石にあれば食べ過ぎじゃない？？』

一応悪かったと思っているのか目を逸らす蜘蛛子ちゃんだけれど、それでもナマズの大部分を持っていかれたことには変わりが無いので、オシオキすることにした。

雰囲気の変化に気付いたのか必死で逃げようと藻掻くが、もう遅い。

——強麻痺攻撃い！

そこからは、動けない蜘蛛子ちゃんに対しランダムなタイミングで外道魔法LV1の不快感を叩きつけるだけのオシオキ。

不定期に襲う不快感に、動けないながらも身を振らせて悶える蜘蛛

子ちゃんを見下しつつ、森羅万象の感知範囲を広げる。

そうして、無数のタツノオトシゴと数が少ないながらも危険そうな魔物を除外しつつ、ナマズの位置を探る。

大抵はマグマの奥深くに隠れているので目視できない位置にいても、森羅万象の感知能力の前には、そんなものは関係ない。

そもそも、この高性能な感知能力のおかげで目視せずとも魔法を当てられるのだから、その程度の隠密なんて無駄でしか無いのである。

そして近場に潜むナマズの位置を全て憶えた頃、麻痺が解けついでに麻痺耐性と外道耐性などのレベルが向上した蜘蛛子ちゃんがグツグツとタリしていた。

そんな疲労困憊な蜘蛛子ちゃんに対し、容赦なく告げる。

『ナマズ狩りに行くぞー！』

元気が無いものの、ナマズ狩りには賛成なのか力なく前足を上げる蜘蛛子ちゃんを見て、流石に私もやりすぎたと感じたので、治療魔法を掛けてあげて甲斐甲斐しくお世話してから私たちは狩りへと動き出した。

復活した蜘蛛子ちゃんと一緒にマグマに潜むナマズを釣り上げて、絶滅する勢いで狩り尽くしていくこと、既に数日くらいも経過していた。

ナマズの刺し身。

ナマズのマグマ焼き。

ナマズの香草（苔）まぶし……………蜘蛛子ちゃん??

そんな様々な食べ方を楽しみつつ私たちは中層を進んでいく。

見つけたナマズは一匹も逃さず狩り尽くしながら。

ああ、ナマズうまあーい、なあ……………アア…………

そうしてナマズ狩りに励み、お互いLV9とLV8まで上がって進化目前になった時。

なぜか、同じだけの魔物を倒しているのにレベル差が出ていて、そ

れが蜘蛛子ちゃんの《傲慢》というスキルによるものだとは知った頃に。私たちの前に、新たな敵が立ち塞がった。

《エルローゲネレイブ LV2

ステータス

HP : 1001 / 1001 (緑)

MP : 511 / 511 (青)

SP : 899 / 899 (黄)

: 971 / 971 (赤) +57

平均攻撃能力 : 893

平均防御能力 : 821

平均魔法能力 : 454

平均抵抗能力 : 433

平均速度能力 : 582

スキル

火竜LV4 龍鱗LV5 火強化LV1 命中LV10 回避L

V1 確率補正LV1

高速遊泳LV2 炎熱無効

生命LV3 瞬発LV1 持久LV3 強力LV1 堅固LV1

過食LV5》

ウナギみたいな頭と身体に、頑強そうな鱗と短い手足が生えた見た目といった感じの魔物。

そして名前をさらに鑑定してみると、中位の竜に属していて雑食性で他の魔物を好んで食べるという情報が。

私には森羅万象という感知能力があるので、いち早く気づいて距離を取ってから鑑定を仕掛けることに成功したけれど、鑑定のデメリットである不快感を与える性質によってウナギが周囲を警戒している。

そうしてウナギが私たちの事を探している間に、どうするべきか相談し合う。

『どうしようか?』

蜘蛛子ちゃんは強さをみて悩んでいるようだけど、私としては今の実力でどこまで通用するのか試したい気持ちがあった。

『私としては、戦ってみたい』

その言葉で覚悟を決めたのか、蜘蛛子ちゃんも戦うことに賛成してくれた。

そして簡単な作戦を立ててから、攻撃を仕掛けに動き出す。

まずは私が陣地構築をして厚みのある遮蔽物を複数作る。

そして私たちは即席の岩場に身を潜めて、いまだ遠くで警戒しているウナギを狙撃した。

高速で頭にブチ当たった光線は、威力を大きく減少させて小さな傷程度に留まり、痛痒を与えることは出来たが、結果としてはウナギを激怒させるに留まる程度だった。

『ただの魔法じゃ、この程度しかっ……！』

最近あまり使っていないかった光魔法では威力不足なのがわかったけれど、あくまでこれは確認。

本番はこれからだ。

『なら、これはどう!?』

再びウナギの頭に当たった魔法は、相手を大きく仰け反らせてHPを削る。

それは、出来る限り圧縮し密度を高めた岩の砲弾を高速で射出する、私が今使える手札の中で、障害スキル持ちの相手でも攻撃を通せた一撃だった。

魔法ではダメなら質量攻撃で。

物質的な実体などが存在する魔法は、魔法としての威力が減ろうとも物理的な破壊力までは減少しないので、その重さと速度が充分乗った一撃はウナギの表皮を大きく切り裂いて確実なダメージを与えていた。

そしてこの一撃で片目を潰せたのか、頭部を大きく振り回しデタラメに火球をバラ撒いて弾幕を張って、自らを傷付けた敵を炙り出そうと大暴れするウナギ。

蜘蛛子ちゃんに身を出さないように警告しつつ、次弾を構築する。

高密度の岩弾を作るには少し時間がかかるし、それを高速で撃ち出すためにも大量のMPを消費するけれど、そのぶん威力は折り紙付き

となる。

大暴れして振り回す頭部は狙撃するのが難しいので、胴体に狙いを変え捕捉し撃ち抜く。

命中して鱗を削り飛ばし、内部の肉までズタズタにしながら砲弾は砕け散った。

この一撃でようやく攻撃されてきた方角が理解できたのか、身体を左右に振って狙いを定めにくいようにしながら高速でマグマの海を泳いでくる。

そうなるの外すことはなくても、角度が浅くて弾かれる砲弾が出てくる。

さらにウナギはマグマの中を予想以上に速いスピードで泳いでくるので、近づかれるまでに当てるのが出来たのは数回だけだった。

『蜘蛛子ちゃん、来るよー!』

そして私たちがいる岩場までやって来て、その巨体で片っ端から岩を砕き遠くの岩場には火球を乱射するウナギ。

しかし私たちを探すためにマグマから出て、陸上に向かって来たのはこちらの狙い通り。

『蜘蛛子ちゃん、お願い!』

身を隠していた岩場から飛び出し、至近距離に張り付く蜘蛛子ちゃん。

蜘蛛子ちゃんは、巨体から振るわれる肉弾戦を紙一重で避けながら、私が傷つけた鱗が無くなり肉がむき出しの傷口へと毒液球を投げつける。

むき出しの傷口から染み込む毒はウナギのHPを急速に削り始め、ウナギはみるみる動きの精細を欠いていく。

ときには火を吹いて振り払おうとするけど、それは私が顔面に岩をぶつけることで向きを反らして阻止する。

火球ブレスが使えないウナギは、代わりに自身に炎を纏うことで蜘蛛子ちゃんと付着した毒液を引き剥がすが、すでにMPが切れかかっており一度全身を燃え上がらせたならそれで残り全てのMPを使い切ってしまった、満身創痍のウナギが消えていく炎の中で苦しそうに

蹲っている。

すでに死にかけてであるが闘志は衰えておらず、ウナギは私たちを睨みつけると急速にHPを回復させていく。

それに驚くけれど、そのカラクリの種が火竜のスキルにある生命変遷によるものだど気づいて、すぐさま追撃を加える。

まだダメージが抜けきらないうちにトドメを刺さないと、再び巨体で暴れだすので折角有利な岩場が破壊されてしまうし、もしかしたら私たちを無視してマグマに逃げられるかもしれない。

私たちは、示し合わせた訳では無いにも関わらず同時に攻撃を仕掛け、私は手足を潰して機動力を奪い、蜘蛛子ちゃんは上空へ飛び上がりウナギの顔面に猛毒を雨あられと降り注いだ。

その猛攻には、流石に死にかけだったウナギが耐えることが不可能だったらしく、あっという間にHPが尽きて崩れ落ちる。

そして確実に倒したことを証明するように、レベルアップの通知が複数鳴り響き、レベルが上限に達したことで進化可能になったことを知らせてくれた。

『……ふうー、お疲れさま蜘蛛子ちゃん』

勝利の余韻を感じながら、私は劳いの声をかける。

それに、前足を振って答える蜘蛛子ちゃんを見て、どっと疲労感が込み上げてくる。

そして、なんとかあったものの自身の力量不足を強く実感していた。

——まだまだ、足りないなア、と。

7 不思議な進化先

ウナギを倒した後、一息ついて次の進化に向けて確認をする私と蜘蛛子ちゃん。

蜘蛛子ちゃんは早々に進化先を決めたみたいだけど、私の場合はまたもや進化先が複数出てきたことで、そこからどれを選ぶべきか悩んでいた。

《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。》

- ・ パラライズコケダマ
- ・ ソーサリーコケダマ
- ・ ウイングドコケダマ
- ・ マユ・マリ

前回は三つで今回は四つも進化先が並んでいるので、上から順番に見てみようと思う。

《パラライズコケダマ：進化条件：スモールパラライズコケダマLV10：コケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の希少種の成体。非常に強力な麻痺毒を持つ》

これは麻痺属性に特化したまま成体となって、ステータスが上昇する感じだと思う。

しかし、成体になるということは身体が大きくなる事なので、今までみたいに隠れたりする事が出来なくなるし、マグマに満ちた中層で大きくなると燃える危険性が高くなるので微妙だと思う。

《ソーサリーコケダマ：進化条件：一定以上の平均魔法能力を持つコケダマ種、魔法系スキル所持：説明：魔法に精通するコケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の希少種。知能が高く魔法を操ることに長けている》

こっちは魔法特化な進化先。

私のメインウェポンの魔法が強化されるだろうからアリかもしれないけど、これも成体にあたる可能性があるので大型化してしまうかもしれない。

それに知能が高いというのもどれだけ高くなるのかわからないの

で、結果的に微妙な進化となるかもしれない。

《ウイングドコケダマ：進化条件：一定以上の平均速度能力を持つ小型コケダマ種：説明：コケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物が飛翔能力を獲得した希少種。高い移動能力を持ち空に羽ばたく》

こっちは群れにもいたので、進化先の姿について既に知っていた。今よりやや大きくなり、薄い翅が苔の合間からニョキツと生えていて、それを使ってまるで風船みたいにフワフワ飛ぶことが出来る種族だったはず。

もちろん戦闘時には縦横無尽に高速移動も出来ていたので、低かった機動力が大幅に良くなるのは簡単に予想出来る。

ここまでは、どの候補にもコケダマの名前が入っているので、得意なこととは違えどコケダマ種に連なる種族に進化するのが分かる。

しかし最後の種族は、謎に包まれた説明しか書いていなかった。

《マユ・マリ：進化条件：一定以上のステータスを持つ小型コケダマ種：説明：繭になる。苦難に耐え忍び遂に進化するとき、その身は生まれ変わるだろう》

ただ、繭になるとしか進化先の情報が載っていないくて、どんな能力を持っているのかとか重要な情報が一切乗っていないのが不安に感じる。

しかし説明に『苦難に耐え忍び遂に進化するとき、その身は生まれ変わる』とあるので、さらに次の進化では非常に強力な進化をするところが期待できそうな予感がしていた。

さすがに簡単には決められないので、それぞれの進化先とその説明を、蜘蛛子ちゃんにも伝えて相談をする。

私にも選ぶのが難しいと思った進化先について、蜘蛛子ちゃんもかなり悩んだみたいで一時間位話し合うことになった。

——主に蜘蛛子ちゃんが考え込む上に、向こうは筆談でしか意思疎通出来ないので返事が遅いのもあるけれど。

大きくなる可能性のある進化はナシ。

飛行能力は魅力的だけど下層の強者たちに対抗するには、より強い進化先に進まなくちゃ勝負にならないので、進化のルートが止まるかもしれないウイングドコケダマもナシとなった。

そして最終的に、私は謎だらけだけど、さらなる進化に期待を込めてマユ・マリに進化することを選んだ。

なにかあつたら助けてほしいとも、予め蜘蛛子ちゃんにお願いをして、私たちは進化を始める。

倒したウナギの死骸でシエルターを作り上げて、身の安全と食料を確保してから、私たち二人は互いに眠りについた。

そして――

《個体スモールパラライズコケダマがマユ・マリに進化します》

？

《進化が完了しました》

《種族マユ・マリになりました》

？

《熟練度が一定に達しました。スキル「欲求LV9」が「欲求LV10」になりました》

《条件を満たしました。スキル「欲求LV10」からスキル「渴求LV1」に進化しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV3」が「禁忌LV4」になりました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV4」が「禁忌LV5」になりました》

《進化によりスキル「繭」を獲得しました》

《スキルポイントを入手しました》

？

目が覚めた時、感じたのは初めて意識を取り戻したときのような何かに包まれているような感覚だった。

そして今回は、意識はあれど身体を動かす感覚は、何一つとして感

じられないものだった。

何も見えない溶けた視界は自分がどこにいるのかも把握できず、肉体からの感覚は全て機能していないように感じる。

普通の五感に頼れないので、森羅万象を起動し直し状況の把握に努めた。

そして状況を理解した時、なるほどこれは苦難どころではない状態だと気づいて、何故か分からないけれど可笑しくて笑ってしまいそうな、渴ききつた気持ち湧き起こっていた。

《マユ・マリ（苔森 真理） L V 1

ステータス

HP：486／486（緑）

MP：1／2745（青）

SP：1000／1000（黄）

：1000／1000（赤）

平均攻撃能力：10

平均防御能力：636

平均魔法能力：2982

平均抵抗能力：636

平均速度能力：0

スキル

HP 高速回復 L V 1 MP 高速回復 L V 2 MP 消費大緩和 L V

1

SP 回復速度 L V 8 SP 消費緩和 L V 8 状態異常強化 L V 6

魔力精密操作 L V 2

魔闘法 L V 9 魔力撃 L V 9 魔力付与 L V 10 魔法付与 L V

1

気闘法 L V 1 気力付与 L V 1 強麻痺攻撃 L V 4 昏睡攻撃 L

V 1 毒攻撃 L V 9

酸攻撃 L V 9 外道攻撃 L V 8 麻酔合成 L V 8 催眠薬合成 L

V 6

霊装苔 L V 1 鎧の才能 L V 7 立体機動 L V 6

隠密LV8 迷彩LV1 無音LV1 無熱LV1 無臭LV1
 集中LV10 思考超加速LV1 予見LV8 並列意思LV1
 高速演算LV2 記憶LV9
 命中LV10 回避LV4 確率補正LV1 鑑定LV10 念
 話LV4
 光魔法LV7 水魔法LV9 暴風魔法LV1 大地魔法LV1
 重魔法LV7
 治療魔法LV6 麻痺魔法LV4 睡眠魔法LV4 外道魔法L
 V5
 物理耐性LV4 光耐性LV6 水耐性LV8 暴風耐性LV1
 大地耐性LV1
 重耐性LV6 火耐性LV3 状態異常大耐性LV1 酸耐性L
 V6
 腐蝕耐性LV4 気絶大耐性LV4 恐怖耐性LV8 苦痛無効
 痛覚軽減LV6 外道無効
 暗視LV10 五感強化LV5 視覚領域拡張LV4
 身命LV5 天魔LV10 瞬身LV4 耐久LV4
 剛力LV1 堅牢LV6 天道LV10 護符LV6 縮地LV
 5
 渴求LV1 過食LV8 繭 神性領域拡張LV4 森羅万象L
 V10
 禁忌LV5 n%1||W
 スキルポイント：5800
 称号
 悪食 味方殺し 血縁喰らい 麻痺術師 睡眠術師 無慈悲 魔
 物殺し 魔物の殺戮者》

スキルが多数成長しているし見慣れないスキルも結構増えている
 けど、なによりも目につくのは極端すぎるステータスの数値。

MPと魔法能力が飛び抜けているのは前からそうだったけれど、そ
 の数値が元の倍近くまで増えている。

さらにHP・防御・抵抗もMP・魔法と比べたら低いけれど、進化前の100越えた程度であった数値からは想像もつかないほど成長している。

しかし、その代償とでも言うような、攻撃能力と速度能力の極端な欠如という、致命的な弱点のあるステータス配分になっていた。

一先ずステータスのことは置いて、現在の見た目について確認する。

私が進化した後の姿は、深い緑色をしたフワフワな繊維質の繭になっいて緻密な糸の隙間から苔の一部がはみ出して姿を覗かせているのが伺える。

大きさとしては、元のスモールパラライズコケダマよりも一回り小さくなっいて、蜘蛛子ちゃんのお腹と同じか少し大きい程度に縮んでいた。

しかしそんなコンパクトな繭の内部には何も無く、ドロドロの液体と高濃度の魔力がゆらゆらと蛹と化した身体の甲殻内で渦巻いているだけだった。

今の私の身体は液体状に溶けきっいて、感覚器官の何もかも無くなったからこそ五感の殆どが感じられなくなっいているのだと、否が応でも理解させられた。

そして現在の肉体は液状であり、繭には手足も何も無い楕円の球体であることから、ステータスの平均速度能力が0という数値が偽りなものだと実感してしまっうのだった。

……大まかな身体についての把握をしたので、改めてスキルを確認する。

なぜか進化後であるのにも関わらずSPが最大値に回復している原因もここにあるだろうから。

《霊装苔：魔力を帯びた苔。MP・平均防御能力・平均抵抗能力にスキルレベル×10分のプラス補正》

いままで特に効果のなかつた苔鎧に効果がついてMPと防御抵抗に補正が掛かるようになつた。

成長補正などは無いもののステータスを増やしてくれるスキルは

重要なので価値はかなり高くなったと思う。

《渴求：強い渴きのような欲望を抱く者を示すスキル。経験値の回収能力が増加する》

レベルを上げやすくしてくれるスキルがさらに強化されたみたい。前の欲求は効果が微増だったのに対し、こちらは増加と説明が変わっている。

けれど、これでも蜘蛛子ちゃんが持っている《傲慢》のほうが、圧倒的に性能が上みたい。

ほかには、迷彩・無音・無熱・無臭といった隠密系統のスキルが複数追加され、SPを消費して強化する能力の気闘法や気力付与といったスキルも追加されていた。

そして最後の追加スキル。

《繭：取得時にSP全回復。SPの消費速度を超緩和。食事不可になる。次に進化した際このスキルは消失する》

進化してもSPが最大値で残っていたのは、この繭というスキルの効果によるものだった。

普通は進化した後はMPとSPが空っぽになっているものだけれど、このスキルによってSPは全回復してSPの消費速度も物凄く減らしてくれているみたい。

だけど、デメリット効果として食事が不可能になる効果も付いている、進化するまでは一切SPを回復させることが出来ないことを表していたのだった。

つまり今の私とは、身体を作り直す段階のまま形態が固定されていて、ここからさらにレベルを上げて今あるSPが尽きる前に次の進化にこぎつけないと、餓死してしまうという事なのだと理解してしまった。

最適の選択と違って決めた進化だけれど、とんでもない地雷が埋められていた進化先でもあり、説明が言う通りに苦難に満ちた道のりを乗り越えなければならなかったらしい。

自分自身のことを確認していたら、先に進化していた蜘蛛子ちゃん

が鋭くなった鎌のような前足にウナギの切り身を突き刺したまま立っていた。

そして私を鑑定して、どういう状況なのかを理解したみたい。そんな蜘蛛子に、さっそくお願いをすることになる。

『私を背負って、戦ってくれる……っ。』

蜘蛛子ちゃんは少し考えた後頷いて、蜘蛛糸で私と彼女自身の身体を結び貼り合わせて簡単には落ちたりしないようにして、私を背負った。

しかし、このままでは糸などが直ぐ燃えてしまうので、私は水魔法で常に水流を循環させ続けて繋いだ糸を湿ったままにする。

本来なら、そんなことをしていると他の魔法の構築とかが覚束なくなるけれど、今の私たちなら不可能じゃない。

——維持をお願いね。

——任せて、私。

並列意思LV1、もう一つの自分自身の意識を脳内に、いや魂に追加するスキル。

このスキルによって精神だけで発動できる能力は分担して扱えるようになった。

私の意識が二人分になるこのスキルは、魔法に関しては手数がそのまま二倍になったようなもので、MPの総量こそ変わらないものが出るのが大きく広がった。

一人は、水魔法による冷却と魔法付与で火の抵抗力を与える魔法も、糸と私に蜘蛛子ちゃんにも加え続ける。

そしてもう一人は、索敵と魔法の援護に集中する。

結果的に、少し重くなったものの高機動高回避を持っていた蜘蛛子ちゃんに、強力な遠距離攻撃が自動で発動する私が乗った、移動砲台が出来上がった。

——動けないけど索敵と魔法は頑張るね。

え？ いつの間にも外道無効を？ 忍耐？ なら探知が使えるようになったね。

もう使った？ 凄いやね、あの感覚――

蜘蛛子ちゃんは新たに忍耐という特殊なスキルを獲得していて、その時に一緒に外道無効も手に入れていたみたい。

なので、蜘蛛子ちゃんも索敵出来るようになったけれど、目は多いほうが良いので私も森羅万象での感知警戒は怠らないようにする。

魔法という分野では、ついさつき魔力を感じられるようになった蜘蛛子ちゃんに負けるわけにはいかないので、全力で支援をしたいと思う。

それからは、食べることが出来なくなった私の分まで蜘蛛子ちゃんがウナギを食べけると、再び広大な灼熱の中層を進み続けていく。

背中に繭を括り付けた蜘蛛は、代わり映えしない迷宮を歩み続ける。

マグマに照らされた、その姿はどこか楽しげでありながら使命感に満ちた決意を感じられるようだった。

そして、その背で揺られる私は、今まで避けていた選択を取ろうと
していた。

今まで怪しい文面で、取得を避けていたスキル。

《強欲(500)・神へと至らんとするn%の力。他者を殺害した際、対象のステータス・スキル・スキルポイントをランダムで奪う。また、Wのシステムを凌駕し、MA領域への干渉権を得る》

蜘蛛子ちゃんが持っている《傲慢》と《忍耐》と同じ類のスキル。

謎の説明文と、非常に強力な効果を持つスキル。

初めて見つけたときは、怪しげな文章から取得を見送って避けていたスキルだけど、今となつては蜘蛛子ちゃんに置いて行かれないためにも必要なスキルで。

だから――

《強欲》を取得しました。残りスキルポイントは5300です》

《渴求LV1》が「強欲」に統合されました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV5」が「禁忌LV6」になりました》

《条件を満たしました。称号「強欲の支配者」を獲得しました》

《称号「強欲の支配者」の効果により、スキル「鑑定LV10」「征服」を獲得しました》

《「鑑定LV10」が「鑑定LV10」に統合されました》

——これでいいはず。

《強欲の支配者：取得スキル「鑑定LV10」「征服」：取得条件：「強欲」の獲得：

効果：HP、MP、SPの各能力上昇。自身の持つ神性領域を拡張する。精神系スキルの熟練度＋補正。支配者階級特権を獲得：説明：強欲を支配せしものに贈られる称号》

《征服：強欲発動時、対象の魂全てを吸収する。またその他に——》
鑑定がすでにLV10で持っていたため、称号の効果で贈られてきたけれど溢れてしまった力が、形を成すことなく混ざり合って消えてしまった。

実質称号でのスキル獲得が一つしか出来なかったため、内心かなりの落胆を感じる。

どうせなら、新たなスキルが欲しかったなと——《ジジッ》

他に得られそうな、怪しげなスキルは表示されていない。

なら、今はこのスキルを使いこなすしかない。

まだ足りない。

もつと力を得なくちゃ。

じゃないと、じゃないと、じゃないと……………

……………私は生きなくちゃならないのだカラ。

蜘蛛2 コケちゃんについて

おはようございます！

いやまあ光源がマグマの中層で、時間なんてわからんけど。

いやー二人いると片方見張りしつつ進化出来るから、進化の時の安全確保がダンチだわ。

コケちゃんは魔法を器用に使うから、休憩場所の確保が難しい場所でも即席で身を隠せる場所を作れるし、水魔法や治療魔法も使えるので中層の敵が使ってくる火の攻撃に対しても打ち消せるわダメージを負っても回復出来たりするというのは、心強いことこの上ないね。

あの転がって移動する方法は体張りすぎていてドン引きだけどさ、それを実現させるには精密な魔法の技術あつてこそだろうし、それが味方として力になってくれているのは頼もしすぎる。

というか、森羅万象ズルすぎっ！

何よ、制御の利く探知って。

デメリットを埋めて有り余るほどの有能スキルじゃん！

こちらら初期スキル、脚早くするだけの韋駄天じゃぞ!?

まあ、それはそれとして……

今思うと、最初の進化は気を失つちやうのもMPとSPも無くなつちやうのも知らなかったし、しかも種として最弱ステータスと、なにげに最も危険だったんじゃない？

今は無防備な進化中を守ってくれる仲間もいることだし、寝込み中に襲われる心配はご無用ってね！

まあ一人ではどうしようもない相手だと厳しいかもしれないが。

さて、コケちゃんはどこかなつと……いた。

私が進化に入ったときと同じ場所で、殆どその場から動くこと無くジツとしていた。

コケちゃんが動いてないってことは、何もなかったのかな？

感知能力で言えば、コケちゃんのほうが圧倒的に優れているから、何かあればすぐ気づくだろうし。

『……あつ、起きた？ 蜘蛛子ちゃん』

私の進化が完了した事に気付いたコケちゃんは、此方を見ていないにも係わらず、すぐさま念話を飛ばしてきた。

早い、気付くのが早いって。

突然脳内に語りかけられるのは、最近は多少慣れたものの結構ドキつとしてしまう。

気をしっかり保っている時なら平気だけど、不意打ちで声をかけられると頭が真っ白になるのは変わってない。

だからフリーズして反応できずに、ずっと待たせちゃうときが多々あるけれど、そんなときでもコケちゃんは気長に待っていてくれる。

どう返したらいいのかとか、待たせている罪悪感とかで、思考がフリーズし続ける悪循環に陥るときもあつたけど、そんなときでもコケちゃんは待つてくれた。

たぶん十分とかそれ以上待たせたはずなのに、途中で怒ったりとか呆れたりせず、私が返事するまで辛抱強く待つてくれたことに驚きしかない。

前世でクラスメイトに話しかけられたときも、同じようにフリーズして何も反応を返せ無くなって、そうしていると勝手に相手が怒ったり避けていつて私の前からいなくなつちゃうのに。

それでも、コケちゃんはずつと待つてくれている。

思い返すに、私とコケちゃんの接点というものは殆ど無くて、インドア派で野外活動をサボっていた私に、ちよつとちよつかい掛けてきたくらいしか、出来事がなかつた気がする。

ぼんやり憶えている記憶だと、彼女は自分の好きなことには全力で、そのためなら周りを気にしないタイプだったと思うから、良い意味でも悪い意味でもちよつと浮いている感じだったかな？

まあ彼女の場合は、人当たりは良いほうだったからマシなほうで、私みたく悪目立ちするような浮き方の人間とは別物だけど。

……て、回想している場合じゃなかった。

こうして私が過去に意識を飛ばしていても、コケちゃんは変わらず待つていてくれるのだから、ほんととコミュ障の私にはありがたい存在

だと思うよ。

進化したことで変化していた鋭い鎌のような前脚を振って返事をする。

念話を習得できないって以前そう話したから、言葉で返さなくても文句も何も、言われたりする事は無い。

正直それにはコミュ障的に、とつても感謝しているしありがたく思っている。

それに甘えて、実は念話取得可能なのにずっと念話出来ないから話せないと偽って、この関係をズルズルと引き伸ばしているのは私のエゴでしかない。

でも自ら声を出す勇気を私は持っていないから、後ろめたさを感じながらもこの嘘を明かすことはない。少なくとも今はまだ……

見張りをバトンタッチして、コケちゃんが進化に入った。

進化中は身体が作り変わるわけだけど、その進化途中の姿はそれぞれ種族固有のものみたい。

私の場合はレベルアップのときにように脱皮しながら姿が変わっていくらしくて、古い皮が何度も何度も剥がれては消えていくらしい。

そしてコケちゃんの場合は、一回り苔が膨らんで完全な球体になると、その内部にて身体が作り変わっているみたい。

前は緑色の苔が剥がれたと思ったら、内側からド派手な黄緑色が出てきたときはビックリしたものだよ。

そんな進化だけど、今回はどうなるかわからない。

コケちゃんから進化先について相談を受けた時は、テンパってなかなか返事が出来ていなかったと思うけど、ゆっくり一つずつ聞いていって候補を絞っていった。

——ゆっくり聞いてくれたともいう。

まず大きくなる進化は無いでしょ。

こんな足場の悪い環境で大きくなったら動きにくくなるし、池ポチャならぬマグマポチャしちゃうし。

飛行能力を獲得出来る進化は魅力的だったけれど、進化ツリーがどうなっているのが分からないから敬遠した。

その時強くても、次の進化が微妙とか進化が打ち止めだった場合取り返しがつかないからね。

コケちゃんがいた群れには、そこから進化したっぽい種族はいなかったらしいし。

それで最後に残ったマユ・マリという進化先なんだけど……

明らかにデメリット多めの進化だと思うが、説明からして次の進化があることは確定していたし生まれ変わるなんて書かれるほどの進化が待っているとしたら、将来性に賭けてみるのも悪くないだろうし。

さて、コケちゃんが進化するまで、ウナギを捌くとしますかー。

おお!! この鎌みたいな前脚、すっごい斬れ味してる!

鱗と肉の間にスツと入っていつて。鱗剥ぎがサクサク進んでいく。

さて、お先にいただきまーす。

っ!?! ウナギも、うまあーい!

一応コケちゃんの分として半分ほど残してウナギを食べ終えた頃。

取得可能一覧から、忍耐というスキルを見つけて獲得し、禁忌のレベルが上がrittつも外道無効という欲しかったスキル最上に位置するものを偶然獲得して喜びに浸り、ようやく探知が使えるとウキウキしていた。

半分ほど残ったウナギの誘惑に耐えつつ周囲の警戒をしていると、コケちゃんの進化が終わったみたいで丸々膨らんでいた苔の塊がポロボロと崩れ始めた。

急速に枯れて崩れていく苔の中から出てきたのは濃い緑色をした繭玉で、その大きさは元のコケちゃんからだいぶ小さくなっていった。

私とコケちゃんの大きさは、ドッコイドッコイの大ききでしかなかったけれど、今はあまりにもコケちゃんが小さくなってしまった。

下層にいたタニシ虫よりは大きいくらい？

その程度しかないから、大抵の魔物から簡単に踏み潰されそうなか弱い姿に見えてしまうけど、ステータスを見たことで考えを一転させる。

なにこの極端なステータス!?

魔法とMPはわかるけどHP防御抵抗も高く、私のステータスの倍以上ある。

けど攻撃と速度が死んでいるどころじゃない値で、正直もしかしてやっちまったんじゃない？

そう思ってしまった。

けど、そのあと聞こえた声には私は悔やんでいる場合じゃないって気付いてしまったんだ。

『私を背負って、戦ってくれ……うっ』

その声色は今まで聞いたことがない響きで、隠しようもない不安が滲んで震えていた。

いつもは空元気のような明るい口調で話しかけて来るのに、今回はか細くて悲痛な音色だったから。

その声には、チクリとした痛みを感じた。

私が！ 私が、選べたのに！ 軽い気持ちで辛い道へと進ませたのに！

けれど、私はそれを言葉にすることは出来ない。

もし念話が使えたって、私はその一部ですらまともには伝えられないだろう。

それが確信出来るからこそ、私はこの思いをどうすることも出来ない。

そんな意気地なしの私は、心に痛みを抱えつつも頷くしかない。するとコケちゃんは、こんな私に対して万感の思いを込めて言う。

『……ありがとうっ！』

……私は何も言わずに彼女を背負う。

何も強化していない糸だとすぐ燃えちやうからダメなんじやって思ったけど、コケちゃんが私の糸に燃えないように魔法を掛け続けて

くれるので、私は絶対に落とさないようにしっかりと包んで、縛り括り付けていった。

そして食べることが出来なくなったコケちゃんの分も食べきって、私は歩き始めた。

——私が守ってあげないとね。

せめて次の進化まで助けなくちゃ、背中に感じる重みに私はそう決意した。

さて、道中なんやかんやあったものの歩き続けマグマの湖といった場所に到着した私たち一行。

並列思考が進化して並列意思になり、私の頭の中が賑やかになったりだとか。

探索の道中で探知と鑑定がLV10になって、なんか無いかなーって愚痴ってたら、上位管理者Dなるものが《叡智》というスキルを私に送りつけてきた事だったり。

そのことで、よくよく考えたらこの世界って変じゃね？ って気づいて怖くなったり。

でもそんなのがいるとしてウジウジしても、私は何にも出来ないから今を生き抜くしか無いって奮い立ったり。

そうやって考え込んでいたら、しおり糸に火が着いていて身体に引火しそうになっていたけど、コケちゃんが水を降らして防いでくれていたとか。

なかなか私が思考に没頭したまま戻らないから、水を思いつきりぶっ掛けられたとか。

何があつたのか気づいたコケちゃんが《叡智》というスキルをみて、その能力にブチギレて嫉妬し、『ズルいズルい……』としか言わなくなったり。

……魔法主体のコケちゃんのお株を奪うようなスキル性能だったしね。

試しに魔法を使ってみたら、その魔法の精度にまたもや拗ねてしま

い、『私なんて、いらぬ子なんだ……』と面倒くさい女ムーブに陥った、コケちゃんの怨嗟の声を聞き続けることになったりとか。

忍耐を獲得して取得可能になった、邪眼系スキルを試してみたりとなどなど。

実に様々なことがありました……

主に私が原因な気がするけど、気にしちやあいけないとき。

私は、過去は振り返らない女だから……フツ。

ともあれ、進むにはマグマに浮かぶ小島に飛び移って行かないとダメみたいだから気をつけてジャンプしていく。

そろそろ次のご飯になるのがないかなーと探していると、コケちゃんが警告してきた。

『前方五百メートル先のマグマ、強い魔物の気配とウナギが五匹、それと沢山のタツノオトシゴの群れ。気をつけて』

すぐさま隠密を発動して気配を殺し、集中する。

とくに何も無いように見えるけど、中層の魔物はマグマに潜むので目視は当てにならない。

私も叡智に統合された探知を使うものの感知能力としてはコケちゃんのほうが上なのか、大きな気配は感じ取れたがタツノオトシゴなど細かい情報までは把握しきれなかった。

さすがに群れを相手にするのは危険すぎると思つて迂回を考えたけれど、奴らの目の前を通らないと先に進めないため、戦いは避けられそうになかった。

私は危険を承知の上で、進むことを決意する。

そして一歩また一歩と進んでいき、そいつはマグマから顔を出した。

エルローゲネソーカ、真つ当な竜らしい厳つい顔に、東洋の細長い龍を思わせるようなフォルムの火竜の上位種。

しかも統率と連携のスキル持ちで、次々と配下のタツノオトシゴを呼び寄せていた。

これは、まずいかも……

そう私が思っているとコケちゃんは言った。

『タツノオトシゴは任せて！ 蜘蛛子ちゃんは火竜に集中して！』

私の周囲に術式が展開されたと思っただらすぐさま発動して、顔を出したばかりのタツノオトシゴたちの肉体を弾け飛ばしていく。

呼ばれたと思っただら、訳もわからないまま何も出来ず死んでいくタツノオトシゴたちに哀れみを覚える。

しかし、そうしなければ危険なのは理解しているので、むしろドン数を減らしてくれると助かるのが本音だ。

タツノオトシゴが役立たずなので、ウナギと火竜だけがブレスを吐いてくるけど面制圧される程ではないからギリギリ避けられる。

しかし狭い足場は私が十分逃げ回るには不足で、段々と端に追い詰められる。

そして左右にも後ろにも進めなくなった時、火球が襲う。

その攻撃に私は大きく飛び上がり、高熱を感じながらも飛び越えて勢いのまま天井に糸を伸ばして張り付く。

張り付いた私たち目掛けて火球が二方向から襲ってくるも、片方は相方を信じて任せ、私は正面の火球に最大量の毒合成で作り上げた猛毒の巨大な水玉を叩きつけた。

毒液の塊と火球は、互いに爆散し僅かに蒸発せず残った毒液が雨となつて火竜たちに降り注ぐ。

私の蜘蛛猛毒は微量であっても致命的なダメージを与えるから、ポップするたびキルされ続けているタツノオトシゴや、運悪く口に入ってしまったウナギのHPを大きく削っていき、その生命を終わらせていく。

いい調子！ このまま行けば勝てる！

そう思ったことが悪かったのか、レベルアップ時の脱皮に足を取られた。

——やばっ!? 落ちるっ！

踏ん張りが利かず重力に引かれて離れていく足場と、それをチャンスと見た火竜の炎が飛んできた。

避けられない！

『蜘蛛子ちゃんは傷つけさせない!』

突然横合いから強風が吹き荒れ、小さな私たちの身体をブレスの効果範囲から押し出していく。

そして、吹き飛ばされた先にはマグマの中に浮かぶ島があって、そこにクルクル回りながら落ちていく。

体勢を整えて着地すると、視界に映ったのはほぼ全滅したタツノオトシゴと重傷のウナギ四匹、そして闘志を滾らせる火竜一匹の姿があった。

ウナギは五匹いたはずだけど、一匹は毒で死んだみたい。

そしてウナギは今もお続く魔法の掃射でガンガンHPを削られているからで、その身体はボロボロになっている。

降り注ぐ弾幕からの損傷を無視してウナギの一匹が突っ込んできたけど、死にかけのウナギなど恐れることは無く、軽やかに躲して腐蝕攻撃を纏わせた鎌で一閃。

前脚一本を失ったものの、ウナギの身体を容易く引き裂いて絶命させる。

失った前脚にコケちゃんが慌てて治療魔法を掛けてくれるけど、その前にレベルアップの回復で元に戻った。

さて後は四匹。

なら邪眼の出番!

……と思いきや激怒したコケちゃんの猛攻によってウナギが早々に沈み、残すは火竜一匹だけになったけど、本気になっていろいろな魔法やスキルを当て続けたコケちゃんにより、様々な状態異常に侵された火竜は一步も動くことが出来ずに、その巨体を痙攣させていた。

……やっぱ状態異常はつよいわー。

そしてその矛先となったことがある私は、動けない恐怖に震えているだろう火竜に合掌した。

どうか、あまり苦しまずに逝けますように、と。

そして、陸地に引き上げたウナギや火竜を前に、コケちゃんは言った。

『試したいことがあるんだけど、いい?』

もちろん構わないよ。

『《強欲》発動……成功、さらに《征服》発動……失敗？』

なにやらコケちゃんがスキルを発動させると、今しがた止めを刺した火竜から光が飛び出して、それがコケちゃんに全て吸い込まれていった。

すると急激にコケちゃん存在感というか内包するエネルギーみたいなものが高まって増えていくのを感じた。

それに驚いていると、コケちゃんは凄く嬉しそうな底抜けに明るい声で喋った。

『でも、うん……よしっ、これなら……、これならもつと強くなれるっ！』

とても可愛らしい口調なのに、なぜか背筋が凍るような寒気を感じたのは、私の気の所為なんだろうか……

そして、鳴り響くレベルアップと称号獲得のアナウンスを聞きながら、私はまあいつかと適当に流していた。

コケちゃんの本当の状態に気づかないまま私は呑気に、強くなったら魔王なんて名乗るのもアリかもねと気楽に思っていた。このときはまだ……

「それでは、会議を始める。バルト」

「はっ」

魔王様の開催の声。

それに答えて、俺は会議を進行させる。

「まず各方面の報告から聞こう。第一軍から順に報告を」

いつもの流れ通り、現在の活動状況を聞いていく。

「……お声が掛かれればいつでも進軍可能です。以上となります」

「第二軍も同様です。もう少し時間を頂ければ、裏工作が実を結ぶかもしれません」

「だ、第三軍……、全て順調だす」

「第四軍、問題ありません」

「第五軍、異常なしです。魔王様」

「第六軍、滞りなく遂行中だよ」

「……………」

「はあ、ブロウ」

「……チツ、第七軍、問題ねえ」

我が弟ながら毎回空気を悪くするのは止めて欲しいのだが。

しかし、兄としての俺より魔王様の側近としての役目に徹する。

「第八軍、何も問題ないよ」

いろいろと問題がある奴だが、会議中はまともに合わせてくれるので大丈夫だ。

問題なのは次の奴らだ。

「第九軍も問題なく進軍可能だ」

鎧、肌、髪、全て黒い。本名すらわからず、ただ、黒と呼ばれる男。

「第十軍、問題なし」

「付け加えることは無いよ。全て順調に進行中」

対照的に、全てが白い少女。この女も素性が不明で、白とだけ呼ばれる。

着ているローブも肌も髪も、病的なほど白い、瞼を閉ざした女。

その隣には、口数が少なすぎる白と常に行動を共にしている非常に小柄な少女。

深緑のローブと魔女帽を被りポリウムのある髪が身体の大半を覆い隠している幼い女。

主に白が言葉足らずで報告がままならない時、口を出していつも説明を補っている。

正直、毎回最初から貴女が話して欲しいと思うのだが……

彼女もまた、名前さえわからず、見た目ゆえか、苔と呼ばれる。

魔王様が幹部に招き入れた三人。

素性はわからない。だが想像はできるし、その不気味さを恐ろしく感じている。

「うんうん、順調だね」

各自様々な色を浮かべる魔王軍幹部の顔を眺めて、ご機嫌そうに宣言する。

「じゃあ、戦争を始めようか」

8 クイーンと火龍

《条件を満たしました。称号「竜殺し」を獲得しました》

《称号「竜殺し」の効果により、スキル「生命LV1」「竜力LV1」を獲得しました》

《条件を満たしました。称号「恐怖を齎す者」を獲得しました》

《称号「恐怖を齎す者」の効果により、スキル「威圧LV1」「外道攻撃LV1」を獲得しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「魔王LV1」を獲得しました》
？

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV6」が「禁忌LV7」になりました》

？

火竜を倒した私たちは迷宮脱出のため、上層に向けて移動を続けていた。

あれからというものの、私は使えるときには強欲を発動させて、少しずつだけ魂を蓄えるようにしていた。

強欲は発動できる距離に制限があるみたいで、距離が遠くなればなるほど奪い取れる魂の力が減っていくみたい。

そして強欲を使うと蜘蛛子ちゃんに経験値が殆ど入らなくなるみたいでもあるから、使用出来るタイミングは限られていて、近い距離で私が倒した魔物にのみ強欲のスキルを使っていた。

……とはいえ、それもなかなか上手くいっていないのが、現在の状況で。

新たに獲得した称号「恐怖を齎す者」。

周囲に恐怖の効果をバラ撒いてしまおう、ONOFFの切り替えが出来ない称号。

これを私と蜘蛛子ちゃん両方で獲得したため、中層の魔物が私たちを見ると、いや私たちを目視する前から逃げ出してマグマの海に潜ってしまうので、殆ど狩りが出来ないでいた。

どれだけ隠密を行っても近づけば気づかれて逃げるので、運良く陸上が上がっている魔物に対し超遠距離から狙撃して、気づかれる前に仕留めるのが最近の私たちの狩りの内容である。

おかげで、私も「暗殺者」の称号を獲得したし、確実に当ててるため予見から未来視に進化したりだとか、高速演算がカンストしたりだとか、先に気づくため感知できる距離に特化した森羅万象の運用方法を編み出したり等々、必要に迫られたことで様々なスキルの活用方法を編み出す事に、頭を悩ませていた。

そのぶんスキルのレベルはドンドン上昇していくので、少なくとも悪いことばかりでは無いのが救いなのかもしれない。

蜘蛛子ちゃんは、獲物が減って悲しんでるように見えるけど、主に食べられる相手が減った事に大きく悲しんでいるような気がしていた。

前世のイメージからは思いつかないような、食い意地張った生き方しているからねえ……

……前世か。

私も大分、魔物としての自分に染まってきているのを感じていた。転生した初期のころは、慣れない身体に四苦八苦していたけど、今は人じゃない身体に拒否感や違和感を覚えなくなってきた。

それに生々しい血や死骸を見ても気持ち悪さを覚え、それが食料にしか思えなくなったのは、確実に前世から私に変質していつてる証明だと思う。

たまに自分が自分で無くなるような強い衝動に襲われて、気持ちが悪風のように荒れ狂う時もあった、平静を保てず無性にイライラしちゃう時もある。

その時私は、すぐに念話を切って魔法の操作に集中する。

じゃないと、蜘蛛子ちゃんにイライラをぶつけてしまいそうで怖かったから。

私がしていることは、触れたくないものに蓋をして先送りしているだけで、決してこの気持ちが消えることは無いと理解しているけど、今は理解したくなかった。

——前世の記憶が薄れてきていることを。家族の顔がボヤケていることを。

進行方向に大きな縦穴を感知して、そこに近づいていたとき。

その縦穴の上方から、正気を失いそうなほど恐怖を呼び起こす気配が降りてくる。

——息が詰まる。胸が痛い。心が悲鳴を上げている。寒い。感覚が消えていく。

なのに、意識を逸らせない。

注意を逸した瞬間に死が迎えに来るようで、一瞬たりとも気を抜くことを許さない。

『と、止まってツツ!!』

絶叫するような念話に、不思議そうに足を止める蜘蛛子ちゃんだけれど、遅れてその気配に気づいたのか、その身体がガクガク震え身を縮こませる。

そして縦穴から姿を顕したのは、途方も無いほど巨大な蜘蛛のバケモノだった。

その脚は高層ビルの如く、太くて長い。

そして重量が想像できないほど肥大化した胴体と頭部。

蜘蛛子ちゃんと同じ種族の魔物だとは思えないほど、そのバケモノは圧倒的に恐ろしい存在感を纏っていて、意識を向けられていないというのに近くにいる事実だけで、ただただ逃げたくて自殺する事が助かる方法なのだと考えてしまうほど。

縦穴の壁面を砕きながらゆっくり下へと進んでいく巨大な蜘蛛は、広大なはずの縦穴をその巨体で殆ど占領している。

一メートルを越えていそうなツルつとしたレンズのような眼球は、ただ大迷宮の下層へと向いていて、私たちに気付いていないのか目を向ける価値も無いと捨て置かれているのか。

私たちは目をつけられないように息を潜め岩陰で怯えているというのに、そのバケモノに対して喧嘩を売りに行くような存在がいた。

今まで中層で見た中で、一番大きな身体に大きな翼をした火竜、いや火龍。

骨を翼膜で覆うコウモリのような翼で飛行しながら蜘蛛のバケモノに近づき火球を浴びせ、背後に無数の魔物を率いて援護射撃をさせながら無謀にも襲いかかっていた。

火龍の巨体が高速で宙を駆け、無数の火球が弾幕を作りその全てが直撃しているにも関わらず、攻撃に曝されている蜘蛛のバケモノからすれば、どの攻撃にも大した痛痒を感じてはいないように見えた。

そしてたった一度の反撃で、争いが終わった。

一筋の黒い閃光、そして一拍遅れて衝撃波が吹き荒れた。

小柄ゆえ魔物としては体重が軽い方である私たちは目が潰れるような光量の爆発に押し出され、ゴロゴロと転がりながら何メートルも弾き飛ばされる。

そのままマグマに落ちることはなかったものの、ただの余波だけでHPが減っている。

ひっくり返った体を起こした蜘蛛子ちゃんが爆発の中心地に目を向けると、そこには途方も無いほど巨大なクレーターが広がっていた。

そこにいたはずの魔物の大集団は跡形もなく消え去っていて、何も無くなったクレーターには、少しずつマグマが流れ込んで新たなマグマ溜まりになろうと流動している。

目障りな相手を消滅させたことに満足したのか、再び縦穴の奥へと降りていく蜘蛛のバケモノ。

その姿に、私は恐怖で気が狂いそうになりつつも、安堵と同時に怒りも感じていた。

運良く巻き込まれずに済んで生き残れたことに、安堵を。

何も出来なくて弱い自分に嘆きを、遙か高みにいるバケモノの強さに憤懣を。

恐怖を塗りつぶすような暗い怒りに、意識が蝕まれていく。

柔らかく脆い心を溶かして、深い奥底へと引きずり込んでいく。

それは、弱い私を守るため。

それは、弱い私が生き延びるため。

——それは、弱い私が壊れてしまった最後の悲鳴だったのだろう。

蜘蛛のバケモノが縦穴の奥底へと消えて気配も薄れた頃、悲痛な咆哮が響き渡った。

新たに出来たマグマの海から姿を現したのは、蜘蛛のバケモノと対峙していた火龍の姿であり、その片翼を完全に潰されながらも大爆発を生き延びて怒り狂っていた。

傷だらけの体が急速に修復されていき、根本からボロボロになった片翼を除いて傷一つ無い肉体に戻っていく。

そして近くにいた私たちに、怒りの矛先を向けてきた。

威圧の力を乗せた咆哮。

その轟音を耳にした私たちは覚悟を決めて、スキルを全力で起動させていく。

蜘蛛子ちゃんは、邪眼と魔闘法・気闘法に竜力を。

私も魔闘法・竜力に加えSPを消費する理由から避けていた気闘法まで起動し、森羅万象の感知能力を最大まで高めて、些細な情報も見逃さないように思考を高速で回転させていく。

レベルが上ってLV4まで高まっていた並列意思を全て同調集中させていき、より高度な魔法構築に専念していった。

そして戦いの火蓋が切られる——

《火龍レンド》 LV20

ステータス

HP : 3520 / 3701 (緑)

MP : 2744 / 3122 (青)

SP : 3698 / 3698 (黄)

: 1634 / 3665 (赤)

平均攻撃能力 : 3281 ▪

平均防御能力：3009
平均魔法能力：2645
平均抵抗能力：2601
平均速度能力：3175

スキル

火龍LV1 逆鱗LV8 HP高速回復LV3 MP回復速度LV6 MP消費緩和LV6

魔力感知LV5 魔力操作LV4 SP高速回復LV1 SP消費大緩和LV1

魔力撃LV4 火炎攻撃LV9 火炎強化LV7 破壊強化LV6 斬撃強化LV2

貫通強化LV2 打撃大強化LV2 連携LV10 指揮LV2 立体機動LV4

命中LV10 回避LV10 確率大補正LV5 気配感知LV10 危険感知LV10

熱感知LV3 飛翔LV7 高速遊泳LV10 火魔法LV4 斬撃耐性LV1 貫通耐性LV1 打撃大耐性LV1 炎熱無効

状態異常耐性LV1

身命LV5 魔蔵LV4 瞬身LV5 耐久LV5 剛力LV5 堅牢LV5 道士LV4 護符LV3 縮地LV5 飽食LV2

スキルポイント：30050
称号

魔物殺し 魔物の殺戮者 率いるもの 龍 覇者

戦いは避けられないと感じた時点で鑑定した相手のステータスは、私たちより格上でスキルの数も今までの魔物より遥かに多かった。

火龍の平均速度能力が蜘蛛子ちゃんを上回っているため逃げるのも難しく、高い平均抵抗能力とより強力な魔法阻害効果を持つ逆鱗によって、私の魔法攻撃も殆ど通らないかもしれない。

けれど、ここで逃げる訳にはいかない。

生まれながらの強者に、持たざる者の絶望がわかるはずがない。無力に嘆き、影に怯え、渇きに苦しむ人生など知りもしないだろう。

——だから私は奪う。

より強き者から奪い喰らうことで、私はもっと強くなれる。

だって私は、強欲だから。

この手に力を握り絞めないと、怖くて仕方がないから。

だからね、恨めしい龍さん。

あなたの全て、私にちょうだい——？

火龍が炎の弾丸を吐き出す。

軽めの様子見な攻撃として繰り出されたものであっても、私たちに致命の一撃になり得る攻撃を、蜘蛛子ちゃんは全力で跳躍して回避する。

私も魔法で火球を迎撃するものの、威力が弱い魔法では打ち消せずMPを多量に使わなければならないので、ジワジワとだけMPが目減りしていく。

そして弾幕を張り私たちの視線を塞ぐことで隠した、次の一撃が来る。

距離を詰めてきた火龍の巨大な尻尾が、炎を纏って鞭のように叩きつけられた。

これも蜘蛛子ちゃんは何とか躲すものの、掠めた炎が私たち二人を焼く。

すぐさま水魔法と治療魔法で、消火と回復を行うけれど、その分MPの消費が加速する。

しかも攻撃はこれだけで終わらず、叩きつけから回転しての振り回し、回転からの爪の横薙ぎ、振り抜いた体勢からの体当たり、密着した位置からの振り払いと振り下ろしの剛爪の連撃。

その悉くを辛うじて回避する蜘蛛子ちゃんに、余波を防ぐことで精一杯になる私。

しかし全ての攻撃を回避したことで、火龍は手強い相手だと警戒したのか、距離をとって此方の様子を窺う。

その際に回復を行うものの、現在の状況はジリ貧へと追い込まれていくようだった。

近距離攻撃は火龍の火炎纏によって、全身が燃え上がっているので触れることが出来ず、蜘蛛子ちゃんがすれ違いざまにカウンターを仕掛けることも不可能で。

遠距離からの魔法も、逆鱗のスキルと纏う火炎で大きく威力が減衰してしまい、僅かなダメージしか与えられない。

僅かに通ることに希望を掛けて、術式の強度を高めた麻痺魔法を連続して発動し続けるけれど、状態異常耐性と種族柄の抵抗力によって掛かる気配は、未だ手応えすら感じられない。

距離をとっていた火龍は片翼が潰れているというのに、その巨体を空中に浮かばせようとする。

そして空中に浮かび上がった火龍の口から、漏れ出る光。

蜘蛛子ちゃんが膨大な毒液の球体を作るのを見て、意図を察した私はさらに毒液を包み込むように水球を重ね合わせ、大質量の液体を作り上げると、二人してその液体の中に潜り込んだ。

極大のブレスが大地を這いずり回る。

恐ろしいほど広範囲に広がった灼獄のブレスは、地面を全て溶かし尽くして岩盤をマグマの海に作り変えていく。

それは毒液と水の塊にも襲いかかり、一瞬で蒸発させていく。

しかしその一瞬の時間を確保したことで、私たちは天井まで移動することで危機を脱することに成功した。

眼下は火の海、私たちを追いかけて飛翔する火龍に、逃げ場が無くなる私たち。

しかし、まだ諦めるには早すぎる。

『足場は私が用意するっ！ 飛んで蜘蛛子ちゃん！』

火龍の炎弾が襲ってくる。

背後で爆発を感じながら、落下先を予測する。

そして噛み付いてきた火龍の顔に魔法を連射することで、目眩ましして回避し交差する。

交差した先にはマグマの海しがなく、それ落ちる前に水魔法が進化

した水流魔法と重魔法を組み合わせ、崩れること無く空中に浮かぶ水鏡の足場を作り上げる。

重力で加速した体重を撓むこと無く支えた水鏡を、私は空中に大量に作り上げる。

火龍が爪を振るうだけで体当たりするだけで崩れてしまう脆いものだけど、壊されるたびに新たに作り直して足場を絶やさせない。

そして第二ラウンドの空中戦が幕を開けた。

火龍が水鏡を砕きながら、私たちに迫る。

それを蜘蛛子ちゃんは、ときに飛び跳ね、ときに糸を伸ばして自身を引き寄せたりと、縦横無尽に駆け回ること、速度は高いものの小回りが利かない火龍を翻弄する。

しかしこのままでは地上での戦いの焼き直しで、未だ火龍に有効な一撃を与えられない。

それに焦りを感じ始めた時、蜘蛛子ちゃんは目の前に小さな毒の球体を作る。

そしてそれを何度も火龍にぶつける。

効果が無いにも関わらず、毒液は火龍の纏う炎にぶつかり蒸発していく。

それを見て、私は蜘蛛子ちゃんが何をしてほしいのか察した。

『……わかった！ 特大のを作るよ。けど足場が作れなくなるから、気をつけて』

私の声に頷く蜘蛛子ちゃん。

限りのある足場を壊されないように、ギリギリまで火龍を引き付けてから回避するようになった蜘蛛子ちゃんを見つても、私は特大の魔法の構築に集中し始めた。

生成する量は最大。

ただただ莫大な質量で洗い流すための魔法を。

それを確実に当てるために、極限の集中で火龍の動きを予測する。火龍と蜘蛛子ちゃんの動きがゆっくりとなる。

けれど私の思考と構築は高速で駆け回り、敵が避けようの無いタイミングで魔法が発動する。

——潰れる

まるで津波のような水魔法が発生した。

溢れ出した津波は火龍を飲み込み、その身体を膨大な水圧と質量で押し潰していく。

火炎纏が押し寄せる水を蒸発させるものの、燃え盛る炎では津波には対抗できないように、その身に纏う炎を引き剥がす。

そして大量の水が全身を強かに打ち据えたことで、体勢を崩し動きが硬直したまま火炎を纏っていない火龍が水の中から現れると、蜘蛛子ちゃんは足場を蹴って飛び降りる。

危険を察知するも衝撃が抜けきらず僅かに身じろぐしか出来ない火龍に、死を纏った鎌が振り下ろされた。

腐蝕属性が付与された一撃は、火龍の顔面を大きく消し飛ばして両目と角までも潰す。

失明し平衡感覚を失った火龍は、ゆらりと錐揉みしながらマグマに落下していった。

頭部が消し飛んだものの火龍の生命力は凄まじく、今の一撃ですらHPを完全には削りきれず、ギリギリで踏み堪えている。

即死しなければ、龍は生命変遷によって急速に回復を行える。

だからこそ確実に仕留められる追撃の準備を始めようとしたけれど、それより先に蜘蛛子ちゃんの魔法が発動するのが早かった。

深淵魔法、——地獄門。

私には適性がない闇の魔法の最上位魔法で、魂ごと破壊する威力を持つ恐ろしい魔法。

超高難度のそれを空中戦を行う以前から構築を続けていて、いつでも発動できるように待機していたらしい蜘蛛子ちゃんは、火龍がマグマに落ち動けないでいるこのチャンスまで機を待ち続け、今発動させたのだった。

火龍が落下した場所に、ポツカリと黒い穴が空く。

それはあらゆる光を飲み込み、そこだけ落とされた染みのように景

色を歪ませる。

世界に空いた黒は、マグマを空気を光さえ飲み込み、急速に周囲を引き込みながら広がったと思ったら突然収束して跡形もなく消え去った。

後に残ったのは陥没した地面、そして肉が削げいたるところで骨が露出しているズタズタの火龍だけだった。

まだ生きてる……ッ！

けれど、耐えきるだけで限界だったのかHPMPSPどれもが底についている火龍は、一歩足を踏み出したものの、そのまま崩れ落ちた。もはや死ぬのは時間の問題となった火龍に対して、私たちは近づく。

私たちが近づいてきているのを感じ、最後の最後で肉体の限界を超えて動き噛みつきを繰り返すものの、ヒラリと避けてその顔に止めを撃ち込む。

蜘蛛子ちゃんは腐蝕攻撃を。

私は圧縮した魔法を。

死にかけて守りも無くなっていた火龍に連続で叩き込まれた一撃一撃は、その頭部が跡形もなく消し飛ぶのと同時にHPが0になる。

そして――

？

《経験値が一定に達しました。 個体、マユ・マリがLV19からLV20になりました》

《条件を満たしました。 個体、マユ・マリが進化可能です》

？

《条件を満たしました。 称号「龍殺し」を獲得しました》

《称号「龍殺し」の効果により、スキル「天命LV1」「龍力LV1」を獲得しました》

私たちは生き残った。

今度は逃げるのではなく、その生命を引きずり落とすことで、私たちは一つ絶望を乗り越えたのだった。

アハハッ。また生き延びれた、また強くなった。

また――

マタ――

まだ――、マダ――強くなれる。

――

――

――

アハハッ♪

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV7」が「禁忌LV8」になりました》

9 管理者

深淵魔法で大きく陥没した地面にマグマが流れ込み、私たちと火龍をも纏めて飲み込もうとしていたので、急いで高台へと火龍ごと運んで避難する私と蜘蛛子ちゃん。

そして蜘蛛子ちゃんは食べるために鱗を剥がしに取り掛かり、私はレベルが上限に達したことで進化可能になったので、進化先について確認しようとした時のことだった。

森羅万象の感知内に、空間の歪みが発生する。

それは未知の感覚だったけれど、これが転移の際に発生する空間の変調だと直感で理解した。

何かが何者かが、この場所に転移しようとしている。

けれど、それを察知したからといって妨害が可能なスキルは持っていないし、この構築スピードでは何かをしようとしても先に転移が完成する。

なら出てきた瞬間に攻撃を叩き込めるように、待ち構えるのが最善策と判断した。

思考超加速によって引き伸ばされた時間で結論を導き出し、現実ではコンマ一秒も経っていない刹那で思索を終えると、その数コンマ後には魔法を描き出す。

そして空間が裂け形容しづらい色彩の空間の向こう側から、長身の男性に見える何かが現れた。

黒い鎧、黒い髪、浅黒い褐色の肌……黒い印象で統一された色彩だが、唯一その目だけは煌々と紅く鋭い眼光を瞳に宿している男の人。ただそこに佇んでいるだけなのに、格の違いを思い知らされる。

その身に宿る力が違う、内包する魂の質が違う、存在している次元が違う――

当人は何もしていないのに、ただ纏う気配だけで周囲を跪かせ支配するような圧が振り撒かれていた。

その気配は当然私にも作用していて、迎え撃つために用意した魔法が気付くと霧散し跡形もなく消滅していた。

そしていくら集中しても、体外に放出された魔力を操ることが一切できなくなり、短いながらも深く寄り添っていた魔力の感覚が、私の意思に殆ど答えてくれない。

この不可解な現象を引き起こしているのであろう黒い男は探るような雰囲気滲ませていたが、敵意や害意といった威圧する感じはしないのが気になった。

だからなのか逼迫した危機感は憶えないけれど、なぜだろう身に覚えのない感情が胸の内にあるのを感じている。

それが何なのか分からないけれど、あまり良い感情では無いのは理解できた。

そしてそれは、初めて会った相手に抱くような物では無い、そんな複雑極まるような気持ちだと思っただ。

何故だろう。

妬ましく羨ましいのに、この人がとても哀れに見えてしまうのは――

知らない感情に戸惑っていると、その黒い男はゆつくりと口を開いて声を発した。

私たちが知らない言葉を。

「*****、*****?*?*?*?」

それが言語であることは理解できる。

法則性のある発音のニュアンスと言い回しが、決められた形式に則って文章を作っていることが理解でき、それが英語のような発音と文体を成しているが、その単語の意味などが全く分からないため、言語なのだとは理解できるけれど、意味は内容は欠片も分からない。

思わずといった様子で蜘蛛子ちゃんは首を傾げていたけれど、それで急に言葉が理解出来るはずもなく。

「*****、+++++++、+++++++?*?*?*?」

黒い男の人は、何度も私たちに語りかける。

けれど、この世界の言葉を理解していない私たちは、ただ頭を悩ませるしか無いわけで。

思い切って日本語で念話を送ってみるもの。

『あー、えーと。こんにちは……？ はじめまして、日本語分かりますか？』

「*****!? *****? *****? *****?」

私たちが彼の言葉が分からないように、黒い男の人も私たちの言葉が分からないようだった。

そして黒い男の人が眉を顰め、難しい顔を浮かべる。

私たちもどうすれば良いのか途方に暮れて、彼とにらめっこをしていると。

感知に予兆も何もなく、突然何かが落下して地面とぶつかり、乾いた音を響かせた。

そこに落ちていたのは、前世では見慣れた物であるけれど、この世界では存在していないだろうと思っていた文明の利器である、スマホだった。

いつの間に!?

さつきまで欠片たりとも存在してなかった筈だし、転移で出現したとしても予兆も何も感じられなかったのに!?

『もしもし。こちら管理者Dです』

そしてスマホの画面が光るとともに、そこから二重になった声が聞こえてきた。

片方は日本語で、もう片方は多分この世界の言葉で、スマホから声が聞こえる。

その声に私と蜘蛛子ちゃんは驚きを隠せなくて、そしてそれは黒い男の人にとつてもビックリなことのように、何かを言いながら彼はスマホを拾い上げて耳に当てる。

「*****?!」

『はい。Dです。蜘蛛さんと苔さんは、ちよつと待っててください』

そして黒い男の人とスマホの声の主は、この世界の言語で会話し始めた。

言葉の意味が分からない以上、何を話しているのかは全然理解できないけれど、スマホから聞こえる不気味なほど感情が読めない女性の声は何かを言うたびに、黒い男の人が苛立ちを表したり、不機嫌そう

な表情をしたりと、終始スマホの声の主のペースで話が進み、最後には溜め息を吐いて黒い男の人はスマホを地面に置くと、来たときと同じように空間を歪め転移して去っていった。

『お待たせしました、蜘蛛さん苔さん』

黒い男の人の話が終わり、この場には私たちと怪しげなスマホだけになると、そのスマホの声私たちに語りかけてきた。

そしてスマホの主と彼と話していた内容について、大雑把過ぎるほどぎっくりと説明する。

『彼には話をおきましたので、今後あなた達に自ら関わることはないでしょう』

……それで、あなたは誰？

『Dです』

なにも言っていないし念話もしてないのに、思い浮かんでいたことの返事が来た。

『ええ。あなた達の心を読みました。……しかし私とお二人それぞれの思考を読むのは問題無いのですが、蜘蛛さんと苔さんがお互いの考えを共有出来ていないのは、説明が二度手間になって少々面倒ですね』

それは……、そうかもしれない。

未だに蜘蛛子ちゃんは念話が出来ないので、きちんと会話したことなんて一度も無いのだから。

『なので、僭越ながらこのときだけお互いの考えが分かるようにしてあげましょう』

え？ どうゆうこと？

——うええ!? マジで!? プライバシーの侵害だ！

っ!? 頭の中に知らない声が響く。

その声はハイテンションな調子で、捲し立てるように騒ぎ立てていた。

——あつ、ちよつ、待って。もしかして聞かれてる？ あつ待ってなんか恥ずかしい。待って待って、本当はこんなに話せないの……うう。

騒がしい声は混乱しすぎて早口気味にグルグルと回って、その声と一緒に強い不安と羞恥の感情が流れ込んできた。

——っ！ そんな、どうしよう、どうしたら。

——ううう、つらい……、逃げたい……、消えたい……

この声は……、蜘蛛子ちゃん？

なんか予想していたイメージとは全然違う。

けれど、迷宮で一緒に過ごしてきたコミカルに動き回る蜘蛛子ちゃんとは、なぜかシツクリくるような、そんな何か驚くけれどこれが正しかつたって感じる不思議な感覚。

私が驚きで思考が硬直し、蜘蛛子ちゃんが慌てふためき感情がグチャグチャになっていっているのを、共有された意識でお互いに感じしていると、少しだけ忘れかけていたスマホから盛大な笑声が聞こえてきた。

『ぶふうっあっはははは!!』

その笑い声は、今までの平坦な感情のない声とは違って、心から喜悅を楽しんでいるような音色をしていた。

『いやー、予想していたとはいえ傑作ですね。普段はあんなにハイテンションでバカ……ポンコツやかかしている内面が苔さんに知られちゃって、ねえどんな気分ですか？ どんな気持ちです？ 蜘蛛さん??』

普段からということとは、蜘蛛子ちゃんは普段からあの調子の内面だったのかな。

そして、そのことを知っているということは私たちの行動をずっと見てきたということ。

『さすがにずっとは見えていませんし、普段から心までは読みませんよ。それに監視していると言うよりは、観戦しているの方がしつくりきますね』

——でもそれって、要はストーカーじゃん。

あっ、蜘蛛子ちゃんが復活した。

『そうですね。あなた達は見えていて飽きませんから』

——D、その名前「叡智」を獲得した時に聞こえた名前なんだけど。『ええ。あれは頑張っている蜘蛛さんへのご褒美です。有効活用して

いるようで何よりです』

突然「叡智」なんていうズルいスキル蜘蛛子ちゃんに与えたのは、お前かっ！

『その通りです。自分の存在価値が揺らいで嫉妬のあまり刺そうかと考えていた苔さん』

うえっ!?! バラさなくてもいいのに!?!

——ひえ。

意識が繋がっているせいで、思ったことが偽ることも出来ずに相手に直接伝わってしまうので、その時私が嫉妬にかられて突拍子もない事を考えていたことが紛れもない真実である事を、蜘蛛子ちゃんに知られてしまった。

それを知ってしまった蜘蛛子ちゃんは、どこか私に対し警戒して、信頼と不信の入り混じった気持ちと感情を抱いているのが伝わってきた。

今は、そんな事考えていないからねっ!?!

けれど今はそんな気持ちが欠片も無いと言うのに、警戒心を解いてくれない蜘蛛子ちゃんの心の壁が、私の心にチクチクと鋭い痛みとともに刺さる。

なんで……

『夫婦漫才はもう充分楽しめましたし、質問に戻りましょうか』

あっ……

——あ、はい。

『もう察していると思いますけど、私の目的はただの娯楽です』

散々引つ掻き回して笑い転げているような相手だしね……

——私たちのことを玩具か何かだと思いやがってええ。

『それ以上の意味や目的なんてありません。なにせ、私は世界最悪の邪神ですから』

本当なの？

——荒唐無稽なのに嘘をついている感じが一切しないわ。

『本物ですよ。邪神だからこそ、人の藻掻き苦しむ様を見るのが楽しみなのです。丁度、さっきのように』

それは趣味が悪いと思う。

——私も同感だね。

『失礼な。もつと恥ずかしい秘密バラしてもいいんですよ?』

それはご勘弁を!

——すみませんでした!

『よろしい。では次で最後にしましょう』

最後の質問……

——なら、聞くべきなのは。

そうだね。

『決まりましたね? その質問の答えはノーです。私はその世界から見れば部外者です』

——どういう意味?

『質問はおしまいですよ。それに、ここから先を教えてくださいましたら、つまらなくなってしまうですから』

この先も私たちのことを、弄ぶというの。

『ええ。ですからこれからも精々足掻いて私を楽しませてください。その先に、あなた達が求める答えがあるかもしれないよ?』

——この、好き勝手言っつて!

『では、また』

まっつて、もし、もしだけどあなたは——

その瞬間、世界が止まる。

あらゆる情報が断ち切られ、自分がどこにいるのかも分からなくなる。

さつきまで心が繋がっていた蜘蛛子ちゃんの気配も感触も無くて、ポツンと光のない宇宙に一人放り出されたように感じていた。

『それは、まだ内緒です。だからあなたも秘密にするんですよ? 約束です』

スマホ越しに感じていた気配とは格が違う存在感に魂を握られて、私は何も考えられずただ約束というものを迫られ、それに肯定するか出来なかった。

約束を受け入れた私の魂に、小さな鎖が埋め込まれる。

その感覚を、本能よりもなお深い、魂が感じる根源の感覚に刻まれていくのを憶えながら私の意識は現実へと引き戻された。

気がつくともスマホは何処にも見当たらず消失していて、ここには私と蜘蛛子ちゃんに火龍の死骸しか存在していない。

私たちの思考を共有させていたDという管理者かつ邪神がいなくなつたことで、蜘蛛子ちゃんとの繋がりも無くなつており、思念が伝わることも流れ込んでくることも無くなっていたけど、それに私はどこか寂しさを感じていた。

蜘蛛子ちゃんは、さつきのことか尾を引いているのか念話をいくら送つても無視するように振る舞うので、返事してくれるまでしつこく語りかけるものの、やりすぎて逆効果になつたのか、私を下ろして岩陰に隠すと火龍を食べることに没頭していった。

そして火龍を食べ終わるまで、一切念話にも反応せず魔法で注意を引こうとしても、頑なに無視され続けた。

『本当ごめん！ やりすぎたって謝るから！ だから無視しないで！ 置いてかないでよおお!!』

最後には泣きが入っていた私の謝罪にも、蜘蛛子ちゃんは答えなかつた。

けれど食べ終わってから、ちゃんと背負い直してくれたので、見捨てる気は元から無かつたのが分かつて心底ホツとした……

そして火龍を食べ終わった蜘蛛子ちゃんは再び私を背に乗せて進んでいく。

前回の火龍との戦いでスキルが成長したことで、より多くの情報が処理できるようになつたので森羅万象の感知範囲を広げられるだけ広げてみたところ、中層から上へと登る長い通路があるのに気付いて、蜘蛛子ちゃんも新たなスキルである千里眼によってその位置を把握したらしい。

あと少しの距離で——それでも何十キロメートルは離れているのだけれど——上層に到着できるので、私の進化は後回しにし道中で狙撃し半殺しにした魔物の止めを蜘蛛子ちゃんに譲ることで、蜘蛛子ちゃんもLV20に到達し、二人とも進化可能状態のまま上層へと進んでいた。

そしてようやく灼熱の中層からお別れの時間が迫っていた。

『ようやくだねー』

感慨深く頷く蜘蛛子ちゃん。

さよなら、中層。

はじめまして——

ただいま——

——上層！

10 禁忌LV10

狩る。

仕留める。

そして溜め込む。

上層にやって来た私たちは次の進化に向けて、必要な準備に取り掛かっていった。

中層への入口に近い場所に、ちょうど良さそうな広場があったので、そこに蜘蛛子ちゃんが糸を張り巡らせて巣を作り、その中に上層で倒した魔物を積み重ねておくことで、進化後にSPが枯渇していても直ぐ補給できるように食糧を蓄えていた。

蜘蛛子ちゃんが作り上げた拠点には、光源が殆ど無い迷宮では目視するのがほぼ不可能なほど細い糸で網を張り巡らせており、その網には石片を貼り合わせて作った鳴子まで結ばれていて、何かが接触した時に音を鳴らす仕掛けも組み合わされた、本格的にも程がある仕様だった。

一応、一部蜘蛛子ちゃんを通れるくらいの隙間は空いているけど、その位置は天井付近だったり網の中央だったり、蜘蛛子ちゃん以外の存在がどこにも引つかからずに通るのは不可能な構造をしていて、同じ小柄な蜘蛛の魔物とかでなければ突破は容易では無いだろう。

拠点の中央には、私から採った苔をカーペットのようにぎっしりと敷き詰められていた。

これは霊装苔がLV8になったときに使えるようになった増殖という技で、繭から見えていた苔を爆発的に増やすことで巨大な球体になった私から、蜘蛛子ちゃんが苔だけを鎌で刈り取って集めたもので、私がいつでもフワフワの苔を大量に生産出来るようになったから作った物である。

この深緑色のカーペットは、私の所持しているスキルの性質をいくらか自由に付加されているので、多少は燃えにくく吸音性や防臭それに軽い安眠作用のある、優れた寝具となっていた。

そんな苔はなんと！

食べることも可能で、脳天に直撃する爽やかさとともに多量に含まれ蓄えられた魔力が、MPを回復してくれる薬草でもあった。

……前に自分で自分の苔を食べたときと味が変わっていないければ、そんな味だと思う。

むしろ変に味を変えてしまうだろう状態異常属性を付加させてないので、何も味がしないのかもしれない。

結局は進化して食事が可能になってから自ら食べてみて確認するか、今も時々齧ってくる蜘蛛子ちゃんしか知らないことである。

蜘蛛子ちゃんは上層に来てからというもの、神経を張り詰めなくちやいけなかった下層や中層の反動からか、苔に埋もれて怠けることが多々あって、今も八本の脚をぐでーえと伸ばして緊張感の無い姿を晒している。

蜘蛛をダメにする苔……？

すぐそばに、生産者の私がいるんですけど？ もっと周りを気にして??

まあ、それだけ気を許しているとも言えるのから、良いのかな……

私を乗せた蜘蛛子ちゃんが疾走し、危険な気配を察知して逃げ出そうとしていた魔物に鎌を振り下ろす。

スキルで特殊な効果などを加えず強化した身体能力だけで振るつた刃は、私たちより遥かに低いステータスしかない魔物を、薄紙を引き裂くかのように両断した。

上層の魔物は、下層のステータスとスキルによる地力の暴力や、中層の相性不利による厄介さが無いので、脅威と感じられる魔物はおらず簡単に狩ることが出来ていた。

なので、近場の魔物を片っ端から狩り続けたところ、付近から魔物の気配が一切消えてしまったみたいである。

ただただ魔物を狩り尽くしたという意味ではなく、私たち二人が持っている「恐怖を齎す者」の威圧効果で、ここに拠点を作ってからというもの直ぐに魔物が周囲から逃げ出していったので、とくに何

もしなくとも勝手に居なくなり辺りは静けさに満ちていた。

一応、蜘蛛子ちゃんの数なら逃げて追いつけるので、私が感知し位置を教え蜘蛛子ちゃんが遠くまで逃げ出す前に接近して仕留めるのを繰り返すことで、少しずつ食糧を確保している。

ただ魔物が逃げ出して拠点の遠くにしかいないので、どうしても持ち帰る手間が大きいのが問題だったのだけれど、蜘蛛子ちゃんが空間魔法で長距離転移出来るようになっていたので持ち帰るのも帰還するのの一瞬で済むようになった。

私も便利そうだと思うたけれど空間魔法の適性は高く無い様で、5000ポイントも要求された上に取得したもののスキルレベルの上昇が遅々として進まないの、蜘蛛子ちゃんのように使えるのは当分無理そうだった。

そして今、恐竜みたいな丸っこい頭部にずんぐりとした胴体の地竜を、あっさり仕留めたところである。

ステータス的には中層のウナギ程度でしかないの、マグマに逃げ込まれることなど地形の不利が無いのであれば、正面から戦っても余裕の一言であった。

耐久やスタミナこそ高いものの、それだけでは火龍すら倒した私たちの猛攻の前にはただの的でしかないの。

そして今倒した地竜によって十分な量を確保できたので、それを転移で拠点に持ち帰ろうとしたとき、森羅万象が新たな気配を感知した。

その反応の正体に気付いた時、私は見捨てるという選択は選べなかった。

『蜘蛛子ちゃん、蜘蛛子ちゃん。今すぐ向かって欲しい所があるんだけど』

一先ず他の魔物などに横取りされないように地竜の死骸を糸で包み、魔法で作った岩を貼り付けてカモフラージュすると、私たちは走り始める。

何を見つけたのかを説明しながら、私は蜘蛛子ちゃんに方向を指示する。

そうして駆けつけた場所には、下層でも見かけた蛇から冒険者らしき六人組が逃げ隠れしている場面だった。

状況を見るに、冒険者が蛇の魔物に見つかつたけれど、あの冒険者たちでは手に負える相手ではなくて逃げ出したけれど、それを追って蛇がしつこく付け回しているんだと思う。

ときに囷を、ときに石を投げて注意を逸し、ときに他の魔物に擦り付けようとしたりと、知恵を駆使して逃げ続けているけど蛇はその巨体で瞬く間に距離を詰めるので、振り切ることが出来ずにいた。

あの程度の強さの蛇から逃げ出すしかない冒険者の強さに、私は悪い意味で衝撃を受けていた。

下層ではどちらかと言うと食われる側の蛇が上層では強者で、その程度の蛇が幅を利かせているのだから上層はなんてヌルいのだろうと思っていたのに、その下層では雑魚な相手に必死に逃げるしかない冒険者の強さになんとも言えない気持ちが始まっていた。

このまま放っておいたら、確実に追いつかれて蹂躪されるのが目に見えているので、余計なことかもしれないけど助けてあげたいと思う。

そのことを蜘蛛子ちゃんに話すと、面倒くさそうにだけ肯定してくれたので、早速行動に移すことにした。

天井付近を歩いて蛇の頭上に向かう。

その間に冒険者の一人が蛇に追いつかれて、その巨体で弾き飛ばされた。

強かに壁に打ち付けられた冒険者は、片腕が曲がっちゃいけない方向に捻じ曲がっていて皮膚を突き破って骨まで見えていた。

目の前で無関係な他人だろうと誰かが死ぬ光景を見たいとは思えないので、取り返しのつかない犠牲者が出る前に、私たちは動いた。

立体機動が進化して空間機動になった蜘蛛子ちゃんは、火龍戦でやったような空中に足場を作り飛び回るスキルを使って、重力と足場を蹴り飛ばす勢いをも加えて目にも止まらない速度で、蛇の頭上から不意打ちで鎌を突き刺し一撃で絶命させた。

鈍い音をたてて倒れる蛇から蜘蛛子ちゃんは鎌を引き抜き、周囲を

確認する私たち。

冒険者たちは、突然私たちが乱入して一瞬で蛇を仕留めたことに困惑と恐怖を感じているようであった。

今まで休む暇なく命の危機だったのに対し、それが急に倒れたと思つたら更に危険な存在が現れたのだから、その反応は当然と言えば当然何でしょうけど。

蛇は蜘蛛子ちゃんが全部やってしまったので、私はこのままでは道案内して救助をお願いしただけになるので、腕がグチャグチャになっていて今後の冒険者人生が閉ざされそうな人に治療魔法を掛けることにした。

中層では何度も何度も使っていたスキルはLV10まで成長しており、欠損ですら時間をかければ治すことも可能なので、まだ腕が残っている複雑骨折なんてちよちよついと骨を正しい位置に戻してくっつけければ、……はい完成。

変にくっつかないように反対側の腕の構造を見本にして整えたので、新しい皮膚や出血の汚れで差異はあるけれど、以前と変わらない動きが出来る腕に戻せたと思う。

私は、それを確認して満足したけれど、蜘蛛子ちゃんは彼らが落としたドライフルーツらしきものに興味を引かれていた。

乾燥クリクタの実……？ 甘味？

それを嬉しそうに拾い集める蜘蛛子ちゃん。

窮地を救って治療してあげたとはいえ、許可なく持つてくのは窃盗じゃないかと思いつつも、何も言わずに黙認した。

……私も食べてみたいからね。

私の分も確保してねー。

そして助けたお代として充分な量の乾燥フルーツを拾った後、蛇ごと拠点に転移して地竜の方も回収すると、私たちは進化に移った。

今回は私が先に進化することになった。

いつまでもデメリットの多く自力では動けないマユ・マリでいるのはリスクが高いので、周囲の安全は蜘蛛子ちゃんが確保している間に、さっさと進化して自由に移動できるようにしたい。

……さて、もう何度も確かめたけど、改めて進化先について確認しようかな。

《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。》

・ アーケインコケダマ

・ ラピッドグラス

・ モフ・モス

また進化先が三つと、複数の候補が出ていた。

順番に内容をおさらいする。

《アーケインコケダマ：進化条件：一定以上のステータスを持つコケダマ種、魔法系スキル複数所持：説明：魔法に精通するコケダマ種がさらに知識を蓄えて神秘に至った個体。高度な魔法を息するように操る》

以前に候補としてあったソーサリーコケダマの進化系のようで、叡智を獲得した蜘蛛子ちゃんは様々な種族の進化ツリーの情報を知ることが出来るようで、それによると二段階上の魔法系最上位の進化系に間を飛ばして進化するらしい。

ただ、ここで進化が打ち止めになり魔物の進化段階にはまだ上があるらしいので、候補としては無いものであるけど。

《ラピッドグラス：進化条件：一定以上のステータスを持つ特定のコケダマ種：説明：飛翔能力を持ったコケダマ種がさらに速度を極めて神速に至った個体。その疾走を止められるものはいない》

こっちは飛べるコケダマであるウィングドコケダマの最終形態。なぜか翅もないし速度が今0なのに、進化候補に並んでいる。

これも間を飛ばして最後の打ち止めまで進化するけれど、アーケインと同じ段階なのでやっぱり候補からは外れている。

そして最後の本命。

《モフ・モス：進化条件：マユ・マリLV20：説明：霊験あらたかな苔を纏う蛾型の魔物。長き雌伏を経て今翅を広げる》

進化条件にマユ・マリからしか進化が出来ないと書かれ、説明にも曖昧な内容しか載っていない種族。

しかし、進化段階はアーケインやラピッドグラスと同等なのに、さらに上があるらしい魔物で、その先の情報は叡智にも載っていないかつたらしい。

……改めて叡智は、ズルいと思う。

進化先の情報も知れるなんて。

そしてその叡智にも載っていない進化があるらしい進化系統なら、期待も自ずと高くなる。

すでに準備は終わっていて、いつでも良い状況なので、さっそく進化することにしよう。

『それじゃあ、お先に進化するね蜘蛛子ちゃん』

私を拠点の中央に下ろして、離れていく蜘蛛子ちゃん。

そして少し進んだ後振り返り、前足を振って良き進化をと祈ってくれる。

それじゃあ、進化開始——

意識が深く沈み込む……深く、深く……

許されざる深淵を引き込みながら、私は溶けていく……

《個体マユ・マリがモフ・モスに進化します》

？

《進化が完了しました》

《種族モフ・モスになりました》

？

《進化によりスキル「繭」を失いました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV9」が「禁忌LV10」になりました》

《条件を満たしました。禁忌の効果を発動します。情報をインストール中です》

《インストールが完了しました》

？

禁忌、とは……。

………こんな、こんなのもつて無いよ。

酷い、ヒドイ……

どうしてこんな。

まるで冥界のようで。

イヤだよ死にたくない。

この世界を、こんなふうにした奴が憎い。

許せない、許せない、ユルセナイ……

……殺す。

殺してやる、何もかも。

それで世界が救われるなら、いくらでも殺してやる。

大事なものは傷つけさせない、奪わせない。

そのためだったら何だってする……

たとえこの手で大事なモノを壊すとしても……

自分で自分を殺すようなこともだって、何だってやってやる……ッ

!!

この力を、本物に変えてやるッ!! そのためならッ!!

———みんな死ねばいいのに。

《熟練度が一定に達しました。スキル「怒LV5」が「怒LV10」になりました》

《条件を満たしました。スキル「怒LV10」からスキル「激怒LV1」に進化しました》

視界が紅く染まる。

そして、私は抑えきれぬ怒りに飲まれて意識を失った。

荒れ狂う怒りに、今まで抑え込んでいた魔物の本性の枷が外れてい

蜘蛛3 どうして仲間と争うんですか？

あー、甘いよ、今世で初めての甘いものだよー。

私は、コケちゃんに言われて向かった場所にいた冒険者(仮)を蛇から助けて、その対価として貰っていった干し柿みたいな果物を全力で味わっていた。

乾燥しているから少し硬くて水分を奪われるし、渋みや雑味も多くて前世の品種改良が繰り返し返されていった品種とは比べ物にならないけど、それでも甘い味がするのは至福の一時である。

荷物から零れ落ちて何個か転がっていたのを集めたこの乾燥クリクタの実だけど、そんなに数はないし、コケちゃんの進化お祝いに残しておきたいから、味見で食べている分も含めて、ゆっくりじゅくと味わって食べる。

でも、あー、手が勝手にー

気をつけないと、そのまま一瞬の内に全部食べてしまいそうになりながらも、一片の欠片も無駄にしないように仄かな甘さを噛み締めていると、危機感知が特大の警鐘を鳴らした。

周囲から上層の魔物は残らず姿を消していたし、此処から近くの中層の入り口や縦穴には強大な魔物はいなかったはず。

それにここには私とコケちゃんしかいなくて、コケちゃんは進化のため眠りについていたはず。

なのに危機感知は、そのコケちゃんに対して強く反応していて、危機感知は留まることを知らずにドンドンと膨れ上がっていく。

何故、コケちゃんに危機感知が反応しているのか戸惑いながらも、私は何が起きても良いように警戒して身構える。

そしてコケちゃんの進化が完了したのか、繭が割れて溶けていくとそこから美しい緑色の模様を持った丸っこくてフワフワしてそうな、一匹の蛾が這い出して来た。

それは畳まれていた翅を広げると、劈くような音色で叫び狂った。

「———シュー、イ、イ、イ、アア、a、アアア、ア、アアツツ!!!」

おおよそ正気とは思えない様子で絶叫し続けるコケちゃんを見て、驚

きと警戒をしつつ鑑定を掛けてみる。

そして、そこに表示された内容に絶望した。

《モフ・モス（苔森 真理） LV1

状態異常：狂気

ステータス

HP：2348 / 2348（緑）

MP：1 / 6834（青）

SP：2840 / 2840（黄）

：1 / 2840（赤）

平均攻撃能力：1238

平均防御能力：4062

平均魔法能力：6920

平均抵抗能力：5284

平均速度能力：3206

スキル

HP 高速回復 LV4 MP 高速回復 LV8 MP 消費大緩和 LV

6

SP 高速回復 LV1 SP 消費大緩和 LV1 状態異常大強化 L

V2 魔力精密操作 LV10

魔法付与 LV4 大魔力撃 LV3 魔力付与 LV10 魔法付与 L

V4 龍力 LV2

気闘法 LV3 気力付与 LV2 強麻痺攻撃 LV8 昏睡攻撃 L

V3 猛毒攻撃 LV1

強酸攻撃 LV1 外道大攻撃 LV1 麻醉合成 LV10 催眠薬

合成 LV8

神霊苔 LV1 鱗粉 LV1 鎧の天才 LV1 立体機動 LV9

飛翔 LV1

隠密 LV10 迷彩 LV3 無音 LV3 無熱 LV2 無臭 LV

2

集中 LV10 思考超加速 LV6 未来視 LV4 並列意思 LV

5

高速演算LV10 記録LV4
 命中LV10 回避LV5 確率補正LV3 鑑定LV10 念話LV5
 光魔法LV10 聖光魔法LV3 水魔法LV10 水流魔法LV3
 風魔法LV10 暴風魔法LV6
 土魔法LV10 大地魔法LV6 重魔法LV10 引斥魔法LV1
 治療魔法LV10
 回復魔法LV2 麻痺魔法LV8 睡眠魔法LV5 空間魔法LV2
 外道魔法LV10
 物理耐性LV5 聖光耐性LV1 水流耐性LV1 暴風耐性LV4
 大地耐性LV4
 重大耐性LV1 火耐性LV5 状態異常大耐性LV3 強酸耐性LV1
 腐蝕耐性LV6 気絶大耐性LV5 恐怖大耐性LV1 苦痛無効
 痛覚軽減LV9 外道無効
 暗視LV10 五感大強化LV1 視覚領域拡張LV5 望遠LV1
 天命LV3 天魔LV10 瞬身LV6 耐久LV6
 剛力LV3 城塞LV1 天道LV10 天守LV1 韋駄天LV1
 魔王LV3 飽食LV1 激怒LV1 強欲 征服 羨望LV3
 暴君LV1
 神性領域拡張LV6 森羅万象LV10 禁忌LV10 n%l
 || W
 スキルポイント：1300
 称号
 悪食 味方殺し 血縁喰ライ 麻痺術師 睡眠術師 無慈悲 魔物殺し 魔物の殺戮者
 強欲の支配者 竜殺し 恐怖を齎す者 龍殺し 狂乱の主
 恐ろしいまでの高ステータス。

現時点の私のステータスを全て上回る数値は、あの苦行な種族を進化の途中に挟んだだけあってトンデモなく高く、あの時の火龍すらLV1の段階で越えていると言えた。

それにスキルも今まで一緒に鍛えてきたから知っていたけれど、こちらの魔物とは一線を画する種類と練度がずらりと並ぶ。

いつもなら頼もしいと感じていたコケちゃん的能力だけど、今はこれら全てが恐ろしくて仕方がない。

状態異常：狂気。

何故かは分からないけど、今のコケちゃんは明らかに正気じゃない。

その証拠だと言うような、新たに狂乱の主なんて物騒な称号が追加されているし、怒が激怒に、そして前々から怪しいと思っていた禁忌がLV10になっていた。

まさか禁忌をカンストさせると発狂する？

くそ、だとしたら罫にも程があるぞ、邪神Dめ！

すでに私も禁忌はLV9で、次に進化すると確実にLV10になる。

そうになったら、二人仲良く狂っておしまいつてか？

ふざけんな！

私は好き勝手生きるって決めたんだ！それがこんなところで呆気なく。

まだ外の世界を見ていない、まだ美味しいものだって食べてない、

まだやってみたいことは沢山あるというのに。

まだ……、コケちゃんともちゃんと話せてないのに。

認めない。

ここで終わりだなんて認められるものか。

禁忌のカンストで狂うとしても、それでずっと狂ってしまう訳では無いはずだ。

どうにかして正気に戻せるはず。

その方法は分からないけれど、やるしかない。

それに二人とも狂って理性の無い魔物が二匹生まれましたって、あ

のDからしてみればこれほどつまらない展開も無いだろうし、何かあるはず。

でなきや……、こんなにあんまりだよ。

加速した思考の中そう結論し、進化したばかりで動きの鈍いコケちゃんに向けて駆け出す。

進化した直後でMPとSPが枯渇している今こそが、ステータス的に劣っている私に対抗できる唯一のチャンスだ。

正直私からコケちゃんに攻撃しても、殆ど効果が無いと思う。

今でこそ、星魔と魔導の極みでコケちゃんを越える魔法能力を得ていたけど、元々は状態異常に特化した戦法を得意としてきたし、今でもそう。

けど、コケちゃんも状態異常に高い適性を持っていたしそれに合わせて耐性も成長していた。

状態異常大耐性LV3。

ここまで成長していると最大威力の蜘蛛猛毒ですら効きが悪いだろうし、そもそもHPを削って殺すようなことは論外だ。

なら麻痺にすればいいと思うけど、麻痺に関してはコケちゃんのほうが得意である。

故に麻痺が通るはずないし、私が少しずつ獲得している幾つかの邪眼系スキルは状態異常耐性で防げるので、ほぼ役に立たないだろう。

なら魔法の場合はどうなのかというと、こっちも厳しい。

コケちゃんの抵抗能力がとて高くて今の私の平均魔法能力を上回っているし、なにより厄介なスキルがある。

《神霊苔・神秘を宿した苔。MP・平均防御能力・平均抵抗能力にスキルレベル×100分のプラス補正。接触した魔法の効果を少し阻害する》

今まではコケちゃんのMPと耐久性能を引き上げるだけのスキルだったのが、竜種がもつ龍鱗と似た魔法を阻害する効果も持つようになっていた。

その性能は龍鱗からすれば凄く弱いみたいだけど、元から高い抵抗

に合わせて追加で阻害されれば全力で放った魔法でさえ、かすり傷一つ与えられないだろう。

だとしたら、残された手段は一つ。

私が生まれたときから頼りにし、今でも主武器として愛用している蜘蛛の糸しか勝機は掴み取れない。

狂ったように哭き続けるコケちゃんが、接近する私に気付く。

急速に回復し始めているMPが増える前に決着をつける！

そう思っただけで仕掛けるけれど、コケちゃんは新たに得た翅を使ってヒラリと躲す。

空中に飛翔したコケちゃんは、私と同等の速度を活かして糸の網から掻い潜る。

くっそ、速い！

今まで私と対峙した敵もこんな気持を味わったのだらうと思うような回避能力で、どれだけ糸を飛ばしてもカスリもしない。

ヒラリと一回羽撃くだけで空中を滑るように一瞬で移動するコケちゃんの軌道は、ときに緩やかなカーブを描き、ときに鋭角にピンボールみたく乱反射する。

そして翅が羽撃く度に、その怪しげな模様をした緑色の翅からキラキラと光が舞い散り反射するのが見えた。

その光はコケちゃんの翅から舞い散る鱗粉のようで、一回その鱗粉と接触してしまいそれが強力な状態異常属性を含んでいることに気付いていた。

今までずっとコケちゃんと過ごしてきたので、苔の一部を食べたりずっと接触状態で背っていたりと、私の耐性も高レベルまで成長しており殆ど影響されずに済んだけれど長時間浴びた場合は、流石にどうなるか分からない。

そんな逃げて距離を取ろうとするコケちゃんと、追いかける私という構図が続いていたけれど、それは長く続かなかった。

僅かでも糸に触れて動きが止まれば、そのまま全身を拘束できるのに当たらない。

その事実には焦り始めていた私は、コケちゃんのMPが既に充分回復しているのに、気付くのが遅れた。

コケちゃんの周囲に、無数の魔法が展開される。

危機感が示すまま全力で離脱する私に対して、ロクに狙いもつけず放たれた魔法の弾幕が迫る。

その精度は普段のコケちゃんの魔法とは比べ物にならないほどお粗末なモノだったけれど、そこに込められた威力と物量は桁違いだ。

進化によって跳ね上がった平均魔法能力で放たれる魔法は、私を簡単に消し飛ばしかねない威力を持っていて、それが息つく暇も無く雨あられと襲ってくるので、回避に全力で意識を傾けるしか無い。

狙いが雑なことで隙間が多く、そこに身体を捻じ込みながら避け続けていると、ほんの一瞬だけ弾幕が止んだと思ったら、私の身体は大きく吹き飛ばされ宙を舞っていた。

弾幕で姿が見えなくなつた一瞬に急速に接近され、速度の乗つた体当たりを食らつたのだろう。

周りの岩が線となつて流れていく風景の向こうで、崩れた体勢を整えるコケちゃんを見ながら、私は硬い地面にぶつかつてゴロゴロと転がっていく。

うかつだつたと猛省しながらも、私は吹き飛ばされた方角を理解して、流れに逆らわずに転がり続ける。

そして最初のマイホームの位置まで戻され、溜め込んでいた食糧の地竜と蛇の死骸にぶつかり、漸く動きを止める。

身体のいたる所が痛むけど、そこまで酷い訳ではないしHPもあまり減っていない。

あの体当たりは割と全力でぶつかつてきた感じだつたけれど、私が地面から脚が離れていて空中にいた事、コケちゃんの身体がかなり柔らかな苔で覆われていて衝撃がそれに吸収され殆ど伝わらなかつたということもあるが、何より一番の原因はコケちゃんの平均攻撃能力だろう。

唯一1238と低めのステータスをしている平均攻撃能力から考えられるのは、それほど力は強くないということ。

なら糸で捕らえた場合、無理矢理引きちぎって外すことは出来ないということ。

力で拘束を解けないなら糸を壊すしかないけど、私の糸の弱点である火はコケちゃんには使えないし、なによりコケちゃん自身が火にとっても弱いから燃やそうにも燃やせない。

そんなことをしたら、あつという間に火達磨になって自爆してしまふからだ。

しかし、このままじゃ糸で捕らえることすら無理そう。

コケちゃんが速すぎるし、罨を張ろうにもそんな隙がない。

どうすれば……

足元に転がる魔物の死骸が目映る。

それを見て脳裏に過ぎったのは、博打にも程がある考えだった。

やっぱり、私もするしか無いか……

翅を羽撃かせ高速でこちらに飛んでくるコケちゃんの姿を確認する。

その動きと軌道を見ては、私は操糸と空間魔法に全神経を傾けて集中する。

そしてマイホームの外周に張り巡らせた糸を掌握すると、コケちゃんがやって来るのを待った。

布を引き裂くような聞くに堪えない声を叫びながら飛び込んでくるコケちゃんが、マイホームに入ってきたところで、待機していた操糸と魔法を発動させる。

マイホームの全ての出口が何層にも重なった蜘蛛の巣で塞がれる。

それには出来る限りの魔法抵抗力を高め簡単には壊されないようにして、コケちゃんの逃げ場を塞ぎ、周囲の洞窟から隔離させた。

そして同時に起動した空間魔法の転移は、私と魔物の死骸ごと少し離れたエルロー大迷宮の上層へと飛ぶのだった。

蜘蛛4 正気に戻って

糸を張る。

速度を優先して多少作りが荒くなるけど、今は時間が無いから仕方ない。

私はコケちゃんを置いてマイホームから逃げ出し、溜め込んでいた食糧ごと地竜を仕留めた場所まで転移すると、そこに急ピッチで簡易ホームを作っていた。

そして、適当に張ったせいで出入り口が無くなった簡易ホームの中で、私は世界に訴え掛ける。

《個体ゾア・エレがエデ・サイネに進化します》

フツと意識が遠のいていく……

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV9」は「禁忌LV10」になりました》

《条件を満たしました。禁忌の効果を発動します。情報をインストール中です》

《インストールが完了しました》

……そっか、これを知っちゃったのかコケちゃん。

胸糞悪い。

むかつく、むかつく。

禁忌、なるほどね、確かにこれはこの世界の住人にとっては禁忌だろうし、本来関係ないのに今この世界で生きている私たちにも無理矢理科された重荷に怒りがこみ上げる。

この世界が、既に詰んでいて崩壊寸前だなんて誰が思いつく。

あいつ、なんでこんな世界に私たちを放り込んで生まれ変わらせたんだ。

転生させられるにしても、危機に瀕していない他の世界とか元の世界で、何もかも忘れて生まれ直したほうが何倍も良かった。

ステータスやスキルなんてものが、盛大に仕組みられた世界を救済するためのシステムだなんて、誰が気付ける？

そして私たちは、そのシステムに縛られている。

この世界に繋がれている以上、このままでは遅かれ早かれ滅びに巻き込まれるのは免れないし、何かしら行動しないと待っているのは、世界もろとも消滅する運命だ。

大量虐殺して捧げる……あの黒い男、管理者ギユリエディストデイエス、長いし言いづらいなギユリギユリでいいや、そいつが絶対阻止する。

それ以外……、強くなるしかない。

この世界から与えられた仮初の力を、本物にして越えるしかない。

Dよ、こうなるって知っていて、こんなシステムを与えた世界に放り込んだのか？

結局は、あいつの思い通りに動いてやるしかない。

それは私に止めどない怒りを湧き上がらせて、新たなスキルが追加されるほど。

癪だけど、その通りに動いてやる。

そうするしか道が無いと理解できるから、その掌で踊ってやる。

けど今は、そんな世界を救うことよりも世界を越えることよりも、大事なことがある。

私は目の前の地竜に喰らいつく。

進化したてで、減ったSPを急いで補給し、瞬く間にその巨体を腹に収める。

その間に、私は今まで少しだけ使わずに残して溜めておいたスキルポイントと進化したことで増えた分を全て使い切って、あるスキルを二つ取得する。

そして食い終わると同時に、構築していた長距離転移を発動させる。

——待っててコケちゃん、私が必ず。

そして食い荒らされた地竜を残して、私は姿を消した。

全ての出入り口が塞がれ巨大な繭となっていた迷宮の一角にて。

先程転移した蜘蛛が殆どの食糧を持って転移したので捕食できるものが僅かしか無く、飢餓に苛まれながら、何とか脱出しようと思われた一角に魔法を狂ったように打ち続ける魔蛾。

その背後に突如現れたのは、腹部の半分が黒く染まり、その模様が鬼面のような骸骨に見える、悍ましい気配を纏った蜘蛛の魔物。

その蜘蛛は先手必勝と言わんばかりに、その腹部の糸疣から蜘蛛糸を放つ。

狂気に落ちて理性を失ったものの、その代わり研ぎ澄まされた本能が危機を鋭敏に察知して糸の範囲から飛び退く。

しかし、不意打ち気味に放たれた糸の網から全て逃げ切ることは出来ず、片翅の一部に蜘蛛糸が貼り付き、離れようとした魔蛾の姿勢をグラつかせる。

暴風と重力を操り、なんとかバランスを保ってそれ以上蜘蛛糸に付着するのを阻止すると、魔蛾は自らに対して魔法を撃って絡みついた翅をズタズタにしながらかきちぎり脱出する。

翅の一部を失い、少々姿勢が不安定になりながら広間の中央を飛ぶ魔蛾に対して、地に脚をつける蜘蛛は八つの瞳が輝き闘志を張り巡らせながら見上げていた。

——コケちゃん、戻ってきて。

私は、空中を舞うコケちゃんに対して糸を放つ。

それは以前の焼き直しのように見えたが、結果は少し違っていた。前回まではどれだけ先読みしても余裕を持って避けられていたのに、今はあとちよつとのところまで迫っている。

それは、片翅の一枚が無くなって上手く飛べなくなっているのもあるけれど、一番は私の速度が以前とは桁違いに速くなっているから

だ。

進化したことで私の平均速度能力は6000近くにまで上昇しており、コケちゃんの速度を大きく引き離していた。

それにより、一瞬で背後に回り込んだり逃げたコケちゃんに追い続けることが可能になっていて、避けにくい位置から次々と糸を放つことで、あと一歩まで追い詰めている。

しかしコケちゃんも上手いもので、どれだけ糸を放つてもギリギリのところまで避けられるので、決着には至らないものの回避に集中させて、反撃が出来ないほど追い詰めることには成功していた。

背後から拡散する糸の網を飛ばす。

——跳ねるように飛び上がり上空に逃げられる。

上空に浮かぶコケちゃんにマイホームの天井にまで飛び散った糸を操作して覆いかぶさるように引き落とす。

——直角を描いて軌道を変更し、落ちてくる網の範囲から脱出された。

逃げるコケちゃんに追いつき横薙ぎに糸を右から左からと振るう。

——高度を瞬時に変えて縄跳びのごとく足元と背中を掠めながらコケちゃんはやり過ぎす。

このまま、コケちゃんのSPが切れて動きが止まるのが先か、私の集中力が途切れるのが先かという勝負になれば、殆ど食事の出来ていなかったコケちゃんの方が先にバテるので、確実に勝ると踏んでいた。

しかし、そう簡単には終わってくれないようだ。

コケちゃんが片翅を犠牲にして、糸を受ける。

それに驚きつつも、すぐさま追加の糸で雁字搦めにしようとするが、その前にコケちゃんの魔法が発動する。

暴風が吹き荒れ私を吹き飛ばし、絡みつこうとしていた追撃の糸も遠くへ飛ばされていく。

空中で姿勢を整えると、私は糸の上にしっかりと着地する。

そして広間の中央には、片翅に糸が貼り付き地面から動けなくなつたコケちゃんが怨嗟に満ちた狂気を撒き散らしながら、無数の魔法を

構築していた。

そして僅かな隙間も無いような激しい弾幕が放たれた。

私は、マイホームの外周を走りながら回避する。

決して近づけてなるものかと執念さえ感じさせる魔法の津波は、少しでも速度を緩めると蜂の巣にされてバラバラになった私が地面を転がることになるだろう。

そして近づけば近づくほど密度の増す弾幕の前では、うかつな接近は命取りになるため、慎重にコース取りをして逃げ道が塞がれないように走り抜ける。

迫りくる弾幕の嵐と、ときどき進行方向の先に偏差射撃して飛んでくる魔法も避けながら、私は少しずつ仕込みを組み立てていた。

それに気付かれないように上手く立ち回りながら走り続け、それを発動する機会を伺っていた。

その時がくるまで瞳を輝かせながら一瞬の隙も見逃さないように睨み続けていると、遂にそのチャンスがやって来た。

急激にコケちゃんの動きが鈍る。

糸に囚われていても荒々しく暴れまわっていたのに、今は身じろぎ一つするのも億劫に見える。

身体を支えられなくなったコケちゃんは、力なく倒れ込んでいき地面に崩れ落ちる。

地に伏せたコケちゃんはスキルの維持すら困難になり、強化されたステータスが下がっていき構築中の魔法も霧散して消えていく。

それを見て私は、逃げ回りながら仕掛けていた罠を起動する。

壁面や天井に張り巡らせた無数の糸が、いたるところでピンつと張り詰め、それが広間の中心に向かって殺到する。

すでに動くことも魔法を使うことすら口々に出来ないコケちゃんには、避けることも防ぐこともかなわず、無数の糸で縛られ空中に磔になる。

吊るされたコケちゃんはグツタリとしながらも、いまだ狂気に囚われており譫言のように悲鳴を上げている。

——ようやく捕らえた。

私が今まで戦闘が始まってからずっと仕掛けていたのは、怠惰と呪怨の邪眼。

進化した後、すぐ獲得したスキルをぶつつけ本番で使うという無茶に、もしかしたら望んでいた効果が出なくて失敗する可能性が高かったはずなのに、私は貴重なスキルポイントを捧げて、結果その賭けに勝った。

怠惰の効果は、HPやMPとかSPなどが減少する速度を大きく引き上げるスキル。

いつもよりMPの消耗を早くする、いつもよりSPが減りやすくして息切れさせる。

そんな効果を受け続けたコケちゃんは、MPが回復する速度よりも早くMPを使い切ってしまった魔法が使えなくなった。

食事が出来ていなかったから、元々少なかったSPも餓死寸前まで一瞬で消費しきっていた。

それに呪怨の邪眼を八つ同時起動でほぼ常に掛け続けたことで、状態異常大耐性があっても貫通させて少しずつ効果を浸透させていったし、特にMPを集中して奪い続けたので桁外れのMP量があっても枯渇させるのにさほど時間は掛からなかった。

そして今もMPが回復しないように掛け続けて、反撃を封じる。

私は宙吊りになったコケちゃんに向かって歩いていき、あと一步の距離まで近づいた。

そして――

鎌を大きく振りかぶって飛び、その側面をコケちゃんの頭に向けて叫びながら振り下ろした。

『もどつて……、こおおーいっ!!』

もう一つ新たに取得したスキル、念話でコケちゃんに思いつきり呼びかけながらぶん殴る。

振り抜いた鎌の拳は、コケちゃんの頭を大きく揺らして意識を強烈に揺さぶる。

そしてコケちゃんの意識が飛ぶ寸前、状態の欄から狂気が消えて纏う気配がいつもの憶えがある柔らかな雰囲気に変わる。

『あり……が、と……う……』

最後の最後で正気を取り戻したコケちゃんから声が届くと、そのまま眠りに落ちていった。

地面に降り立った私は振り抜いた姿勢のまま、ほんの少しそのままだった。

ゆっくり前足を戻すとコケちゃんを吊るす糸を緩めて、そつと降ろしてあげた。

そしてコケちゃんが地面に伏せると、私もその隣に倒れ込んだ。

——あ、危なかつたなあ。

進化して抵抗も上がったとはいえ一発でも当たっていけば、やられていたのは私の方だったし、綱渡りの展開がずっと続くのは精神的にキツイものがある。

今回、魔法に一切当たること無く正気に戻せたのは、コケちゃんが精神系スキルの殆どを上手く機能させられなかったのが大きい。

私より遙か上の思考超加速や未来視なんて持っているのに狂っていたから使えていなかったし、並列意思もまとめて狂ったことで主導権の混乱が発生して、どこかぎこちない動きを見せるときもあった。

だからこそ隙も多くて魔法を避けきれたし、反撃させずに攻撃を仕掛けられた。

そう振り返った私は、怠惰を始め複数のスキルを切っていく。

このままだと、コケちゃんが餓死して死んじやいそうだし、私自身も糸を大量に作り続けたのでSPがかなり減って大変なことになっている。

——こんなことで死にかけるなんて、ないわー。

わけも分からず笑いが込み上げて来て、それに任せて薄く笑う。

ゴロリと姿勢を変えた時、あるものが目に映る。

それを私はなけなしのSPを消費して引き寄せると、それを半分に分割して片方をコケちゃんの口当たりに突っ込む。

ストロー状の口の下に、もう一つ噛み切る構造の口があったのでそこに押し当てると、少しずつ噛んで飲み込んでいくので、それを確認すると私ももう半分のを食べ始める。

口の中に甘さが広がるが、その甘さはさつき食べていたものより強く、とても甘くて美味しいと感じられた。

ははっ、とんだ進化お祝いだね。

そして私も釣られるように意識を失って眠りについた。

荒れ果てた巣の中で、二匹の魔物が眠る。

穢れなき白の蜘蛛

柔らかな緑の魔蛾

それは世間では危険度Sオーバーと認定される恐ろしき魔物であったが、今この瞬間だけは誰にも侵されてはならない聖域の主のようであった。

おまけ1 設定ですが、なにか？

——《コケダマ種の進化ツリー》——

スモールレッサーコケダマ ↓ レッサーコケダマ*

↓ スモールコケダマ

スモールコケダマ ↓ コケダマ

↓ スモールパラライズコケダマ (黄色)

↓ スモールスリープコケダマ (水色)

↓ スモールポイズンコケダマ (紫色)

↓ スモールアシッドコケダマ (赤色)

コケダマ ↓ グレーターコケダマ ↓ アークコケダマ ↓

クイーンコケダマ*

スモールパラライズコケダマ ↓ パラライズコケダマ ↓ グ

レーターコケダマ

↓ ソーサリーコケダマ

↓ ウイングドコケダマ

↓ マユ・マリ

ソーサリーコケダマ ↓ ウィザドリーコケダマ ↓ アークイ

ンコケダマ*

ウイングドコケダマ ↓ ハイウイングドコケダマ ↓ ラピッ

ドグラス*

マユ・マリ ↓ アークコケダマ (一段回飛ばして進化)

↓ アークインコケダマ* (一段回飛ばして進化)

↓ ラピッドグラス* (一段回飛ばして進化)

↓ モフ・モス

モフ・モス ↓

↓

????? ↓

特殊：ヒカリコケダマ

*マークは、ここで進化が止まるのを表しています。

そして、進化先は登場していない分も含めて最終形態まで決まっています。

そして本文で紹介していない種族の説明。

《スモールレッサーコケダマ：説明：劣化したコケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の幼体。産卵スキルを持つコケダマ種の上位種から生まれるが、そもそも産卵スキル持ちのコケダマがいないので現在どこにも生息していない種族。普通に交配して卵を産むほうが強い個体が生まれやすいので、元が弱い以上わざわざ劣化したコピーを作ろうとはしないのが主な理由。そもそも迷宮外では産卵スキルを獲得するほど強くなれないのでレッサーが生まれる可能性は、ほとんど存在していない》

《レッサーコケダマ：進化条件：スモールレッサーコケダマLV10：説明：劣化したコケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物の成体。スモールレッサーコケダマと同じ理由で、現在どこにも存在していない。元が弱い種のさらに劣化した種が生き残って進化出来るはずもないので過去この世界に誕生したレッサーコケダマは数えるほど。元々進化前の個体数も少なすぎるので、こういう進化があるかもしれないと考えられているが人族が観測したことは無い》

《ウイザドリーコケダマ：進化条件：一定以上のステータスを持つコケダマ種、魔法系スキル所持：説明：魔法に精通するコケダマ種が研鑽を経て進化した個体。高度な知性を持ち複数の魔法を同時に操る》

《ハイウィングドコケダマ：進化条件：一定以上のステータスを持つ特定のコケダマ種：説明：飛翔能力を獲得したコケダマ種が進化した個体。高い移動能力に磨きがかかり高速で飛び回る》

《アークコケダマ：進化条件：一定以上のステータスを持つコケダマ種：説明：コケダマ種と呼ばれる芋虫型の魔物が経験を積み重ね巨大化した個体。非常に高い耐久力と魔法能力を持つ》

《ヒカリコケダマ：進化条件：迷宮に生えるヒカリゴケを取り込んだ状態で進化する：説明：全身が発光する苔で覆われたコケダマ種。光魔法の適性が増え魔法能力も高まる。しかし戦闘能力は進化前と殆ど

変わらないので強さはまちまち。元々気性がおとなしく無害な魔物なので迷宮の外ではタイムしたコケダマ種にヒカリゴケを植えつけて進化をさせ、光源として育てる人もいるらしい》

原作には影も形も存在していない、完全オリジナル？の種族と、その進化系。

本来は気性も穏やかでヒツソリ隠れて生きる種族の魔物だけど、進化を重ねることでトンデモなく強くなるルートが隠されている種族。

正統進化ではドンドン身体が大きくなり、アホみたいな耐久性と種族柄MPが有り余るので、魔法や魔闘法をバンバン撃ちまくる、魔法重戦車といった代物になる。

主人公のいたアークコケダマが本気を出した場合、迎撃にて誰も近づけないハリネズミと化し、それを潜り抜けて接近しても分厚すぎる苔で威力の殆どを吸収されて本体には一切ダメージが入らないといった状況になるだろう。

中距離では魔法の弾幕、近距離に張り付いても巨体で転がり押し潰される、遠距離では高威力の狙撃と隙がない。

他にも、魔法特化と飛行能力を獲得した種が存在している。

しかし魔法特化は、精神系のスキルが増えたり並列意思を獲得したりして魔法が使いやすくなるのがメインで、耐久力や物理攻撃力は劣る性能になる。

飛行能力を獲得する進化系統は、今までのそのそ這いずるしかなかったコケダマ種が高速で移動できるようになるけれど、耐久は幼体と殆ど変わらないので当たったら終わりの紙装甲高機動。

戦闘機のように飛び回り魔法もしくは状態異常をバラ撒きをする。

コケちゃんが進んだ繭ルートは、進化する前に餓死するか他の魔物に襲われて次に辿り着くことがほぼ不可能な厳しすぎる進化の系譜。

繭スキルという特殊なスキルを進化時に獲得し、それによって餓死を遅らせることが出来るが、餓死するその前に進化しないといけない。

進化時にSPが全回復するが、このときのSPの最大値は進化前のSPや過食飽食のストックに左右される。

進化前にたくさん食べておけばそれだけ猶予も伸び長く生きられるけれど、普通の魔物は転生者のように簡単にレベルアップ出来ないで、LV20も餓死する前に上げられない。

それに平均速度能力も0になるので自分の身体に頼らない移動手段を持っていないと、ひたすら他の魔物が来るのを待つ事しかレベルを上げる手段が無くなるのも、進化出来ない大きな要因である。

それを乗り越えて進化した場合は、溜めに溜め込んだリソースで進化するので、段階を飛ばした進化をしたり、元の種族とはかけ離れた種族へと進化出来る。

苦行にも程がある繭形態を乗り越えて進化した個体は、蛾の姿をした魔物に進化出来る。

ある意味コケダマ種の成虫形態ともいえるが、たどり着いた個体は過去に一匹しかおらず、また迷宮の外に出なかつたので人族はコケダマ種の成虫が存在していることを知らない。

群れの次期女王として生まれたコケダマが偶然特殊進化のルートに入り、そのまま群れを率いて獲物を献上させ続けた結果進化し、最初のモフ・モスが誕生した。

この個体によって迷宮でのコケダマ種の地位が確立し、簡単には滅ぶことのない一大勢力を築き上げた。

進化する前の特徴に大きく影響を受けて進化後の能力が変わるので、過去の個体は統率特化で個としての強さは高くなかつた。コケちゃんの場合は魔法での戦闘がメインだったので魔法関係が高く成長した、戦闘力特化型に進化した。

もし罨や毒殺を極めたマユ・マリがいたとして進化した場合、僅かでも吸い込めば即死する鱗粉を風に流して使う個体が生まれるだろう。

その場合誰にも気付かれること無く、国や都市が一夜にして何個も滅びることになる。

蛾をモチーフにしているので、自分より強い飛行生物のほかに、蜘蛛

蜘蛛の巣にかかっているイメージから蜘蛛が天敵であると設定されている。

蜘蛛子戦でもあったように蜘蛛糸を自力で剥がすのが困難であり、コケダマ種が火属性に非常に脆いので、着火すると糸を焼き切る前に自分が焼死する。

力づくで剥がそうにも、平均攻撃能力（ようは筋力）が高くないので引きちぎれない以上、自傷して無理矢理脱出するしか方法がない。

進化前のコケダマ種なら苔の鎧で全身が覆われているので、一部を剥がせばすぐ抜け出せるのに対し、モフ・モスでは苔で覆われているのは胴体だけなので翅が貼り付くとうしろもどうしようもない。

全部の翅が千切れてしまえば飛ぶことも出来ず、ただ地面で這いつくばるしか無い。

過去に生まれたモフ・モスの最後は、運悪くクイーンに遭遇して逃げる事が出来ずに糸に囚われて死亡。それでも群れを逃して種を繋いだので無駄な犠牲ではなかった。

なんとなく種族名も可愛い感じが出せて、気に入っている名前たち。

見た目も一見もふもふで虫らしい要素がどこにもないので嫌悪感も湧きにくい。

そんな種族の魔物が進化すると、とんでもない化物（でも見た目は可愛い）になるのは、とても良いなって。

今後の進化をお楽しみを！

——《スキル》——

《苔鎧・霊装苔・神霊苔》

コケダマ種の種族スキル。

初期は特に効果もないけれど、進化していくごとに強力な効果を得る。

霊装苔ではMPと耐久と抵抗に大きな補正が追加され、神霊苔ではそれに加え限定的な龍鱗の効果も得る。

苔に接触した魔法の影響を打ち消し阻害することが出来るが、自分に触れないと魔法に影響を与えないので、接触させずに手前で消滅させるといったことは出来ない。

コケダマ種の苔は魔力と非常に親和性が高く新鮮な苔は魔力を溜め込む性質がある。

そのため優れた魔法薬の原料として使用されるほか、武器には向かないものの防具に加工すれば、抵抗に優れ魔力タンクとして使用できる服が出来上がる。

ただし防具の場合、霊装苔以上のスキルを持つコケダマ種から取れた苔でなければならぬので、地上の個体からそれらを作るのは不可能に近い。

《鎧の才能》

剣の才能、盾の才能、体術の才能など、○○の才能があるなら、鎧の才能だって存在してもおかしくないよねって生まれたスキル。

正直ハイリンスさんが持っていてもおかしくないのだけれど、ステータスの低い人族が重い装備を着けて直接攻撃を受けるより身軽に回避してダメージを受けない戦術のほうが、危険が少なくなると考えるので取っていないのでしよう。

上位スキルに、鎧の天才などもある。

《引斥魔法・回復魔法》

上位のスキルや途中のスキルが見つからないので、創作した魔法。引斥魔法は重魔法の進化先。

回復魔法は、治療魔法と奇跡魔法の中間。

他にも、麻痺魔法の進化で静止魔法。

光魔法の最上位で深淵魔法相当にあたる、極光魔法とか考えているけれど文中に出すかは不明。

《繭：取得時にSP全回復。SPの消費速度を超緩和。食事不可になる。次に進化した際このスキルは消失する》

特殊な進化であるマユ・マリに付随するスキル。このスキルによって進化後にSPが0になり食事ができず餓死することはないが、SPが尽きる前に進化できなければ餓死してしまう。進化してマユ・マリ

から脱すれば、このスキルは消失して食事できるようになるが、そもそも進化にたどり着けない。

《欲求・渴求：強い欲望を示すスキル。経験値吸収能力が微増・増加》
何が何でも手に入れたくて仕方がなくなる精神汚染を引き起こす。

それは強い動機となるが、そのための過程に倫理を踏み外したり命を掛けたりすることに、なんら躊躇いがなくなる。

欲求・渴求は、ある意味傲慢の下位互換。

傲慢系統の成長ブーストとは違い、あくまで回収効率を良くするスキルで受け取れない分は霧散して世界に還元されます。

コケちゃんの強くなりたい精神性と摩耗していない魂だからこそ、集めた経験値を十全に回収できるだけ。

《森羅万象：数限りなく無数に存在する一切の物体と現象を把握する》
下記にて説明。

——《称号》——

《麻痺術師・睡眠術師》

毒術師があるなら他の状態異常を使い続けた結果得る称号もあるはずと作られた称号。

得られるスキルも、毒術師の別バージョンの状態異常スキル。

—— 苔森 真理 KOKEMORI MARI ——

PROFILE

クラス全体と広く関係がある。小柄で明るい言動から愛でられている、だが自由気ままな行動についていけない人がおらず、深い交流を持っているクラスメイトは少ない。若葉姫色に対しても、ちよつかいやイタズラを仕掛けていた強者。自分の心に素直すぎるほどであり、幼少期は非常に手のかかる子だったとか。

転生後は、エルロー大迷宮の下層でコケダマ種の幼体からスタート。

下層に数えるほどしかないコケダマ種の群れのうち、一番規模の大ききなところに生まれるものの、迂闊さから群れからはぐれてしまう。そのあと精神が溶けかかっていたときに蜘蛛子と出会い、人間性を再び繋ぎ合わせ一緒に行動することになる。

「固有スキル」 森羅万象

超強化された「探知」。

魔力・術式・物質・気配・危険・動体・熱・反応・空間を感知するのに加え、魂の状態すら見ることが可能。

使用時に多少補助が入るとはいえ、「探知」同様、外道属性のダメージが入る。

ただ、知りたい情報の取捨選択を細かく指定してピックアップできるので、魔力感知のみ起動させることが可能であり、その場合は魔力に関してのみとんでもない精度と範囲の情報が流れ込むことになる。

しかし、それでも膨大な情報を処理するのは難しく、最大で発動すると魂に重篤なダメージを負いかねない危険なスキルでもある。

魂を詳細に理解することや把握することすらも可能、しかし今はただ魂を見抜けるだけのスキルであるが……？

「Dからの一言」

知りたがりで割と非常識なところがある、あなたにはこのスキル。好奇心のままに無駄にちよっかい仕掛けてくる恐れ知らずなあなたには、何でも知ることのできるスキルを与えましょう。使いこなせるならね。

新たな世界へ

R1 悪夢と亡霊

「いやー、実にいい戦いでしたねー。

これには、なにかご褒美を考えないといけませんね。何にしましよ
う悩みますね」

？

暗闇の中。

光る物といえどヒカリゴケの仲間が発光する性質を持つ鉱物しか存在しない、僅かな光源が点在するのみのエルロー大迷宮の上層にて。

ランタンや松明を手に持った、兵士や案内人などの熟練の気配を感じさせる40人ほどの集団が、周囲を警戒しながら暗闇の中を進んでいた。

「ブイリムス、ちよつと休まんか」

「さつき休憩したばかりではありませんか」

儂ら帝国から派遣された部隊を率いることになったブイリムスとかいう若造が、儂の火急で非常に重要な提案を、取り付く島もなく切って捨てさる。

「もう1時間前じゃ」

「たった1時間前です」

髪も白く染まり皺も増えた老骨には、代わり映えのしない洞窟を1時間も歩き通すのは、身体にこたえるのじゃ。

いやはや歳は取りたくないのう。

あいたたつ、昨日痛めた右足がっ。

「昨日は左足を痛めたとおっしゃってましたよ」

「うぐつ?」

「いきますよ、ロナント様」

後続の兵士達も疲れておろうと、わざわざ儂の名演技を披露して休

ませてやろうと思ったのに、容易く看破しおって。

可愛げがない。

ならば、次はこうじゃ。

「やっぱ、あれか？ 早く帰って生まれたばかりの我が子の顔が見たいんか？」

「そういうわけでは」

「あ、それにあれか、カミさんにも会いたいか？」

「ロナント様！」

流石に身内のことをイジられると、我慢できず反応したか。

儂の知り合いは多いからのお、色々と入ってくるのじゃ。

それに顔を合わせた後に本人からも聞いたしの。

「そう怒るでないわい」

「もう少し緊張感をお持ちください！ 我々に命じられたのは、ただの探索ではありません！」

眉を顰めて鋭い目つきになったブイリムスは、語気を強めて皆に言い聞かせるように叫ぶ。

「最近、このエルロー大迷宮内の多くの魔物がその生息域を離れ、出入り口に押し寄せてきているため大陸の危険度が増している。原因はおそらく、いくつかの冒険者のパーテイの報告にある蜘蛛の魔物と姿を確認出来ていない何か。その危険度はAもしくは最悪のSランク」
儂は事前に調べておった知識とブイリムスから聞いた説明を、記憶の奥底から引っ張り出して思い返す。

幼体と大して変わらぬ大きさの蜘蛛の魔物、しかしその脅威と強さは比べ物にならないモノを持っているだろうと言われている。

一目見ただけで全滅の未来が見え死ぬことを覚悟したという、それほどの恐怖と脅威を感じたと言われているの。

しかし、あくまでそこいらの冒険者の力量で全滅を覚悟したと感じただけであろうし、儂ならばどうとでもなろう。

他には、どうやらその蜘蛛の魔物、気まぐれで人を助けたこともあるようじゃの。

目撃は最初、運悪くエルローバドラードというでかい蛇に見つか

り逃げ回っていた冒険者が、突然その蜘蛛の魔物が現れて大蛇を仕留めた後、怪我を負っていた冒険者を治療して去っていったという、なんとも馬鹿らしい話じゃ。

魔物というものは大抵考える頭なんぞ持つておらず、恵まれたステータスにかまけて魔法のマの字も知らんような奴らばかりじゃ。

そのような輩が、人助けじゃと？

冗談にも程があるわい。

もう一方の何かは、そもそも目撃した人が欠片もおおらず危機感を感じたときには意識を失って、いつの間にか迷宮の隅に寄せられて倒れていたという話ばかりじゃ。

気づいたときにはすでに遅く、身体が動かなくなると同時に強制的に眠らされる。

そして目覚めると通路の死角や隅で転がっていて、いくつか荷物が無くなっているのだと言う。

主に、食糧の類が少しばかり減っていて、中には財布が無くなっていたと報告していた奴もおおらしいの。

それに意識を失う前に怪我を負っていた冒険者が目覚めた時、どこにも傷跡がなかったとも言われておる。

こちら人も人助けする魔物なのでは？ と囁かれているが真偽は怪しいのう。

じゃが、もし2体ともその話が真実なら、相当賢いと言えよう。

魔法の真髄も理解していないような存在じゃが、伝説に名を連ねる魔物に相当するのは違いないじゃろう。

ならば儂の偉業に新たな歴史を加えるのも悪くはないか。

「わかつとる、わかつとる。それを討伐しろと言うんじゃろ」

どんな魔物であろうと、帝国一と言われた儂の力ならば勝てる。

儂はキリつとした表情を作り、不安にかられておろう皆に向けて言った。

「何が来ようと儂がいれば安泰よ。大船に乗ったつもりで構えておれ」

「ロナント様……」

ブイリムスが強張った表情を緩める。

気を許した今この瞬間こそ、チャンスじゃ！

「だから、ちよつとは休まんか？」

「だめです」

「またもや切り捨ておった。」

「……うむ、ケチじゃのう」

そうして案内人の先導のもと、騎士を率いて先に進みおった。

しばらく歩いて、目撃情報があったという場所に辿り着いた儂らじゃが、そこには分厚く張られて道を塞ぐ蜘蛛の糸があった。

一目見てわかるほど幾重にも乱雑に重ねられた網の目は、ここから先へ進むことを拒んでいるように見えた。

「運が悪いとはこのことです。我が子が生まれたと知らされたのに、その子の顔を見る暇もなく、こうして暗い洞窟の中にいるんですから」

そうブイリムスが愚痴っておる。

その意見には賛成じゃが、ならもう少し皆を労ってくれんかのお。

「ふむ。話に聞いておった場所はここで間違いないんじゃないかな？」

「はい、その通りです」

目の前に広がる大通路の一角を覆い隠す蜘蛛の巣は、端が焦げたように変色していたり剣が貼り付いたまま宙に浮いているものの、大半が頑丈さを保っていることを示す純白の色合いをしていた。

「蜘蛛の巣を燃やそうとはしなかつたんですか？」

「それが松明程度の火力では燃えなくて、焼き切ることも叶わずなるほどのお、燃えぬ糸か。」

「では火力を上げるのはどうかの」

「ロナント様？」

いぎ、我が炎の真髄。はああっ！！

「ちよつ、待つ、ロナント様！」

手始めに下級の魔法で焼いてみたが、なるほど燃えんな。

ならもう少し強火ならどうじゃ？

「ふんんっ!」

「うわっ!」

火力をさらに上げた魔法は蜘蛛の糸を焼き溶かしていき、一度火がついた糸は次々と燃えて大穴を広げていく。

その勢いをドンドン強くして通路を塞いでいた糸が跡形もなく燃え尽きるほどに。

「あちゃあ、強くしすぎたわ」

幸いなことに、その奥に蜘蛛の魔物の姿はおらんかったので、いきなり戦闘とはならずすんだがの。

「やってしまったの」

「ええ、しかしどうやらここは放棄されていたみたいですね」

燃え盛る火炎で照らされた通路の奥には、食い尽くされた残骸が転がっているのみで、その主の気配は欠片もなかった。

「これは地竜の死骸か? こっちはエルローバドラードの牙?」

火が着いて巣の状態が変わってしまったが、内部には食べられず残したと思われる硬い部位の残骸以外には何も無いように見えるの。

「見事に何も無いのう」

残骸の劣化具合から、長いこと使われていない形跡が見受けられる。

「ええ、どうやら巣の場所を移したようですね」

「そうか。では、虱潰しに探すしかないのう」

「ですね」

放棄された巣の跡を隈なく調べた後、儂らは探索を再開した。

「むうっ?」

「ロナント様?」

なんじゃ、今の気配は。

「どうかなされました?」

「……いや、なんでもない気の所為じゃ」

そうして儂らは、奥へと進んでいった。

その背中を見つめる黒い双眸に気づくこともなく。

そして音もなく羽ばたき影に紛れて飛び去っていった。

数日を掛けて周囲を探索したものの手がかり一つ掴めずにいた儂らは、中層に続く道のある場所へ向かっていった。

「蜘蛛の魔物という火に弱いはずです。ですがあそこまで燃えにくい糸を作る個体なら、中層でも活動できてもおかしくありません」
「なるほど」

エルロー大迷宮の中層といえば、マグマが溢れる灼熱の地獄と言われておる。

さすがの儂も、中層で長時間活動など不可能であろうな。

そうして中層に続く道を進んでおると、先頭を歩いておった案内人が不自然な格好で藻掻いておった。

「なんだこれ、動けないっ?」

「待て!」

儂は光に反射した僅かな兆候を見逃さず、近づこうとしたブイリムスの肩を掴んで止める。

「光を当ててよく見よ。非常に見えにくいのが、糸が張り巡らせておる」

さて、巢を見つけたのならやることは一つじゃな。

「かなり熱いかもしれんが我慢せよ?」

先程の巢で必要な火力は理解しておる。

故に丁度燃えるギリギリで焼き払おうとしたが、どうやらこちらの糸は更に燃えにくいようで、なかなか火が着かんの。

「もう少し火力を上げるか」

ほんの少し力を込めて火炎を噴き上げると、糸に次々と火が着いていき、一度燃えると連鎖して燃え広がる性質なのか、通路の奥までどんどん延焼していった。

「あちゃあ、またやってしまったの」

「……ロナント様」

呆れた表情でブイリムスが儂を批難する。

「仕方なからう、細かな調整は難しいのじゃぞ?」

「わかりましたから、警戒して進みますよ」

そして奥へと進み中層の入口付近まで来た時、それを見つけた。

「あれはアークタラテクトの死骸？ それにこれは何だ？」

無残に食われた跡が残る危険度オーバーSの魔物の死骸とその取り巻きと見られるタラテクト種の死骸が複数。

それに一緒に延焼に飲まれて殆どが灰になっていたが、柔らかな緑色の何かが広場の中央に敷き詰められていた。

運良く燃えなかったそれを拾い上げると、極上の手触りを持った苔であることがわかった。

「ほう。鑑定石か」

「ええ、ロナント様も鑑定を？」

「そうじゃ、レベルは8じゃな」

《神霊苔：コケダマ種が纏う極上の質感を持つ極めて希少な苔。魔力伝導性と貯蓄性に極めて優れ、魔法薬の素材としては最上級のものとなる。生成できるコケダマ種の数極めて少ないため、入手は極めて困難。品質Sオーバー》

なんじゃこれは!?

蜘蛛の魔物の巣にはあるはずの無いものが無造作に転がっていた。

隣にいるブイリムスも驚愕しておる。

このような素材、見たことも聞いたこともないぞ。

儂は燃えなかった分を集めるのを兵士に指示して、周囲を警戒する。

この神霊苔なる物も気になるが、アークタラテクトの死骸がある以上、ここの主はそれ以上の存在であるのは確実となった。

であるならば、まともに対応できるのは儂か、そのブイリムスだけ、それ以外の兵には荷が重すぎるだろうて。

せめて、無駄死にはせんよう気をつけて欲しいものじゃ。

そして集まった一袋に収まる程度の苔を受け取ったとき、今回の異変の元凶が転移してきおった。

「ブイリムス……家主のおかえりじゃ」

それに疑問を持ってしていると、突如背後から恐ろしい気配が近づいて来ているのに気づいた。

中層から、なんとという気配じゃ!?

目の前にいる蜘蛛の魔物と同等、いやそれ以上の恐ろしさを感じさせる魔物がこちらに向かって移動しておる。

その速度はあまりにも速く、こちらが大規模転移を完成させる前に気配の主は、ここにやってくるだろう。

そうならば前後から挟まれて下がれる場所も無くなる。

儂に出来るのは一刻も早く転移を完成させることのみ。

逸る気持ちを押さえつけて、術式の構築に集中する。

じゃが、好奇心が勝ったのか儂は振り返って見てしまった。

暗闇に浮かぶ亡霊のような影を。

背後から魔物が現れたことで、残り少ない兵士の何人かが新たに現れた魔物に立ち向かっていった。

しかし、ただそこに浮かんでいるだけだというのに近づいた兵士達がバタバタと倒れていく。

死んではおらんようだが、近づくと訳も分からず倒れる以上回収も出来ん。

『*****!! *****! *****! *****!?!』

『*****! *****! *****! *****!』

『*****:***** ***** ***** ***** ***** *****!』

なにやら念話をしているのを傍受すると、今まで動けなくするだけで命は奪わなかつた背後の魔物が、一瞬で魔法を構築し兵士達を刈り取っていく。

なんと恐ろしい速度と密度で魔法を構築するのだ!?

瞬く間に、高度な魔法を組み上げて射出する。

その速度は蜘蛛の魔物に引けを取らず、一発一発に込められた魔力と威力は桁違いで、高く圧縮されておる。

蜘蛛の魔物が芸術的な完成度で魔法を組み立てるのだとすれば、こちらは圧力と熱で精錬された宝石のよう。

限界まで高められた魔法が開放される時、その弾丸はどんな守り

も容易く貫くであろうという気迫を感じ取れる。

そして暗闇の奥から羽ばたいてきたのは、見たことのない蛾のような魔物であった。

緑色の体毛に全身を覆われ、柔らかく丸いシルエットをしておるが、その気配は決して可愛らしいものではない。

鳥の羽のような触覚の下にある眼は光を全く反射せず、そこだけ世界から塗りつぶされたような虚無を感じさせる。

全く音をたてずに羽ばたく翅には怪しげな模様が走っており、まるで魔法陣のような複雑な図形を描いておった。

そして転移が完成する直前、ブイリムスが身を挺して蜘蛛の魔法を反らしてくれたおかげで、儂の空間転移が完成する。

そして転移で飛ぶ寸前、儂は背後にいた蛾の魔物に好奇心ゆえ鑑定を掛けてみた。

《モフ・モス LV21

ステータス

？

《鑑定が妨害されました》

こやつもかっ！

蜘蛛の魔物と同等、いやそれ以上のスキルを持つておった蛾の魔物も途中で鑑定が妨害される。

しかし僅かに見れたスキルには、無数の上位の魔法スキルが並んでおり蜘蛛の魔物より多彩な魔法の数々を高度に操れることを示しておった。

それに神霊苔のスキル。

まさかこやつの物か？

腰に括り付け、一緒に持ち帰ることに成功した革袋1つ分の苔。

それは、この探索隊唯一の成果であったが、その対価はあまりにも大きかった。

これが、人族で最強の魔法使いと言われた儂が何も出来ず逃げ帰り、あまりにも苦すぎる苦渋を味わった事件じゃった。

儂が持ち帰った情報から、あの方々の情報が広まり。

それぞれ、迷宮の悪夢、迷宮の亡霊と名付けられ、恐れられるようになったという。

結局、儂は全ての責をブイリムスに押し付けて1人のうのうと罰にもならん軟禁をされることになったが、その間持ち帰った苔の研究をしておいた。

それによって出来上がった代物はとんでもなく、なんと若返りの薬とMPの最大値を増加させる薬が出来ておいた。

正直、これを公表するととんでもない事態が巻き起こることが簡単に予想できたので、研究資料は破棄、実物も一部を除いて儂自ら飲み干して処分した。

衰えていくばかりであった魔力が滾り、あれだけガタのきておった腰や足が軽やかになったのは驚いたが、若返った肌質を誤魔化すのが大変じゃったわい。

じゃが、これで若い頃と同じように動ける。

待っていてください、お方々！

今、儂が参りますぞ！

11 それぞれの宿敵

私が禁忌によって暴走し、狂気に堕ちてしまった事で蜘蛛子ちゃん
と戦う事となり。

その激闘の末、蜘蛛子ちゃんが一発キツくぶん殴ってくれたことで
正気に戻れた、あの一日から何週間も過ぎた頃。

私たちは、お互いに別々に行動して、各自のレベル上げに勤しんで
いた。

今までは一緒に行動していたけれど、それはお互い弱くて危険が多
かったのもあるし、私が途中から自力で動けない状態になっていたの
も、一緒にいる大きな理由だった。

しかし今ではそこらの魔物では相手にならないほどの強さを得て、
私の場合では危険そのものは森羅万象で接近する前に察知、蜘蛛子
ちゃんは空間転移という反則技にて逃げ回れるので、私たちはお互い
に一人でも問題無いと考え、別行動することにしたのである。

それに加え、私の持っているスキル「強欲」は、倒した相手の魂――
つまり経験値を奪うスキルであり、そして禁忌がカンストしたこと
で流れ込んだ知識とともに、支配者権限というものがあることを、読
み解いた情報から理解した。

そのため情報に従い支配者権限を確立させれば、使おうとしても何
一つ反応しなかった「征服」スキルが使えるようになり。

これによって倒した相手から魂の力全てを奪えるようになったた
め、私が強欲のスキルを使えば蜘蛛子ちゃんには一切経験値が入らな
くなるからというのも、私たちが別行動でなければならぬ理由に
なっていた。

そうして、私たちは今日も離れて戦い続ける。

お互いに信じつつ、無事を祈りながら――もっと、まだまだと、力を
求めるために。

正気に戻ってからというものの――

今までは魔法の制御に専念させて何も考えないようにしていた並列意思たちと本体の私の意思に加えて、魔物の本能というものが上手いこと混じり合ったのか、理性と本能的な部分を上手く使い分けられるようになっていた。

そのため、危険の感知や身体の動かし方というものが反射的に理解できるようになったし、魔法の構築や計算も無意識で完了させられるレベルに、頭と身体の使い方というものが変化していた。

そのことに思うところは少しあるけれど物凄く便利になったことに変わりなく、どんなに複雑な魔法でも気軽にバンバン撃ちまくれるようになったのだから、まあ良いことだと思う。

そして今、中層に戻って火耐性を炎熱無効にすべく魔物を狩り続け、強欲で魂を奪い持っていたスキルごと取り込むことで、なかなか上がらなかった火耐性が一気に無効へ進化。

火属性が苦手で着火すると燃え上がる性質だったのに、今では火強化とか火攻撃なんてスキルも獲得して、それなりに使い熟せるようになっていているほどだった。

もし、蜘蛛子ちゃん以外の蜘蛛から襲われたとしても、糸を燃やして逃げるのが可能になったので、どうも私の天敵っぽい蜘蛛の魔物にも対抗できる手段が増え、これも良いことで……

唯一悪い事があるとすれば、征服込みでの強欲には取り込んだ相手と精神が混ざり合うリスクが高いという、隠れた罠があったことくらいだった。

最初に取り込んだ相手が、単純な本能しか無いような弱い魔物だったから良かったものの、もし知能の高い上位竜とか龍種の魂を取り込んでいた場合、私という自我がどうなっていたか分からなかっただろう。

取り込んだその一瞬、絶命する寸前の記憶や感情も流れ込んできて、その魔物の本能が侵食してきたような感じがしたけれど、大部分

は外道無効で弾かれたし残滓も本能部分が吸収合一。

結果的には、自分自身に殺されるといふ臨場感たっぷりの恐怖映像を見るはめになっただけで、それ以外には特に何も影響が無いまま済んで安堵で胸を撫で下ろした。

——けれど、少しだけ怖くなった。

しかし強欲を封印してしまうのは、惜しすぎるほどメリットがあるので、なんとか影響を少なくできる方法を考えた結果、こんなやり方を考えついた。

まず魂吸収専門の受け皿となる並列意思を用意しそこで倒した相手の魂を保管、本能や記憶など混線してしまう部分は、外道魔法で並列意思ごと巻き込んで分解、浄化。

その魂が保持する力とスキルだけに魂を浄化してから取り込むことで、私自身に余計なナニカが混じることなく安全に力を増やせるようになった。

これも森羅万象によって、魂についての把握が可能だからこそその方法。

魂を取り込む際に一旦保存したり分配出来るのも不要な部分を除去出来るのも全て、魂の存在を感知し理解できるからこそ、それらを扱う感覚も開花し憶えられたという訳である。

ただ、これでも完全なノーリスクという訳ではなく、取り込んだ直後は酔ったようにドロドロに意識が酩酊し、抗うことすら出来ずに惚けちゃうのが欠点。

戦闘中に意識が飛ぶなんて危険にも程があるので、途中で倒した相手に強欲を使っても一旦保管担当の並列意思にストックし私全体として取り込むのを後回しにすることで、戦闘中に複数の魂を取り込んでも問題なく戦闘を続行したままでいられるようには出来た。

けれど、溜め込んだ分の魂が後で一気にくることになるから、戦闘後はいつも長時間グデグデに酔っ払ってしまうように……

——そして今。

マグマから無理矢理引きずり出して、強麻痺と昏睡が付与された鱗粉が降り注ぎ魔法弾の雨霰を浴びて息絶えたウナギとナマズの死骸が転がる岩場の、その中央にて私は魂吸収の酔いから醒めるまで、苦悶しながら耐え凌いでいるのであった。

あああ……きもちわるい……

苦痛無効とかでは防ぎようの無い、魂に直接伸し掛かってくる気持ち悪さ。

なので、時間を掛けて馴染ませ落ち着くのを待つしか方法が無く、ひたすら不快感の波が収まるのを、吐き気を我慢しながら待ち続ける。

……吐いたところで、身体自体は至って健康そのものであり。

気持ち悪さの軽減には、全く意味が無いのが辛かった。

本来は繭など糸を溶かすためにある分泌液を、口端から漏らしながら呻く。

そうしていると次第に段々と落ち着いてきたので、次の獲物を探すべくふらつく身体に活を入れ動き出そうとしたとき、蜘蛛子ちゃんから念話が繋がってきたのだった。

『コケちゃん！ マイホームが燃えている！ すぐに来て！』

え!? なんで!?

『うん分かった、すぐ向かう！ 待ってて！』

空間魔法の熟練度がようやく上がり、なんとか空納を使えるレベルまでになっていたので、陸に上げたまま放置していたウナギとナマズを異空間へと収納する。

この空納という魔法は、ゲームとかであるような何も持っていないように見えて無数のアイテムを持ち運べる機能を現実のものにするこゝとが出来る魔法で、まだ私が入れられる容量は少ないけれど蜘蛛子ちゃんなら、とんでもない量を収めることが出来るらしい。

容量ギリギリで魔物の死骸を詰め終わると、私は翅をはためかせて飛び立つ。

蜘蛛子ちゃんなら空間転移で直接現地へと移動出来るけど、私には未だ使えないので直接飛んでいくしか方法が無かったから。

幸い、上層までそんなに遠くないので時間も掛からずに辿り着けるだろう。

……しかし、思う。

最近何度も襲撃されているよね、上層の拠点。

しばらく慣らし運転として上層にて狩りをしていた頃は、うっかり鱗粉の状態異常に冒険者さん達を巻き込んでしまい動けなくさせてしまったけれど、その時は周囲の魔物を狩り尽くして安全を確保してあげたし、お代として少しばかり荷物の中身を貰ったりしたけれど、そこまで悪い事していないよね？

なのに、その冒険者達が拠点までやって来て何やら騒いだ後逃げていったりとか、私がない時に蜘蛛子ちゃんの多分親戚にあたるアークタラテクトという魔物とその取り巻きが襲ってきていたらしいと、最近では静かだった上層も騒がしくなってきたと感じていた。

そのたびに拠点を修理し直してはいるけれど、先日のアークタラテクトが襲撃してきたときにはメチャクチャに破壊されちゃったので、完全に一から作り直す羽目になったのは記憶に新しい。

そして今回は、拠点到火が着いているとのことなので、火炎には非常に弱い糸と苔では全焼してしまったのは確かだろうなあ……せつかく最高の寝具が完成したと思ったら、それも燃えてしまっているんだらうか。

——蜘蛛子ちゃんが糸でカバーを作り、そこに私が最高の苔を詰め作った布団のような物も。

少し気分が下がりながら飛び続けていると、いつの間にか上層への入り口を越え拠点まで戻ってきていた。

そこでは蜘蛛子ちゃんが騎士らしき人と次々召喚される魔物を邪眼や魔法で殺して無双しているシーンが広がっていた。

——そして燃え尽きて黒焦げになった糸と苔の残骸が転がっていた光景も。

『ああああ!! 拠点が全焼しているう! なんてことをお!!』

『コケちゃん! こいつら敵! やっちゃって!』

『許さない……私の大事なものを壊した奴らは、許さない!!』

憤激のまま我を忘れた私は、鱗粉を吸い込んで倒れていた騎士に魔法を撃ち込む。

そして魔物を狩るのと同じように冷酷に、人の姿をした相手の命を奪っていった。

——そのときは怒りに吞まれていて人殺しだとか何も気にしていなかったけれど、時間が経って冷静になってからも罪悪感とか嫌悪感などを、私は全然と言っていいほど覚えなかった。

その人らしくない感性に驚きつつも、その理由については本能が訴える声で納得へと至った。

あくまで前世の倫理が人殺し、つまり人が人を殺すという同族殺しを忌避していたのであって、今のだいぶ魔物よりに染まってきた私には、この世界の人は罪の意識を感じるような対象ではなくなったというだけのこと。

自分以外の生き物を可愛いと思う親愛や殺したく無いと思う忌避感、自分という種から近い相手であるからそう思うのだと、いつか前世で見た事がある。

なら私にとつての仲間とは同族とは、きっと……

どうにも私たちは、人基準でも強くなりすぎていたらしい。

戦いとも呼べない蹂躪、牽制程度の魔法ですら容易く絶命させられるほどに強さのレベルが離れていて、最初に感じていた怒りが霧散してしまいうくらいに呆気ない。

気付けば、残るは鎧を着ていない男の人と魔法使いらしき初老の男性のみになっていた。

蜘蛛子ちゃんが暗黒槍で二人を貫こうとするものの、若い方の男の人が身を挺して庇う事で初老の魔法使いを守り、その稼がれた僅かな間隙によって転移魔法は発動し、二人は重傷を負いつつも感知不能な場所まで逃げられてしまった。

彼らが転移で逃げる寸前に鑑定らしき不快感が襲ってきたので、普段は蜘蛛子ちゃんと情報共有出来るように妨害を切っていた支配者権限を起動させて、仕掛けられた鑑定を阻止する。

あー……幾つか情報が知られちゃったかも？

多少不便だとしても、今後は常に妨害かけておくべきなのかなあ？

そう思いながら、あたりを見渡すと私の魔法に穿かれ悲惨な姿になった騎士の死体がいくつつか、蜘蛛子ちゃんの方では傷は一つ無いもののHPを吸いつくされて絶命した騎士の死体や魔物の死骸が複数と、容赦無く暴れた故の凄惨な現場が広がっていた。

『……やりすぎたかなー？』

『正当防衛です！ これは正当防衛であることを主張します！ コケ裁判長！』

その後は後片付けをしたり拠点の再建をしたりして安全を再度確保した後、それぞれ狩ってきた獲物を取り出して一緒に食事をしながら、人を狩った後だと言うのにお互い気にも留めず他愛ない話をまったり語り合う。

蜘蛛子ちゃんは倒したものは何でも食べるというポリシーを人も適応していて、騎士から綺麗に鎧を剥がして食べていた。

その姿に対して特に感じるものも無いし、ちよつと貰って食べてみたけれど美味しくも不味くもないという感想だけで、そんなに嫌悪感はないものあまり良い気分では無いので貰った分だけ食べて、残りは全て蜘蛛子ちゃんにあげた。

集めた甘味や保存食に金貨銀貨などのお金は、壁に穴を空けてその奥にしまい込み岩で密閉して塞いでいたことで火に飲まれて燃えることもなく無事だった。

ほつとくと蜘蛛子ちゃんが勝手に食べつくしちゃうので、奥深くに埋めて蜘蛛子ちゃんでは取り出せないようにしていたのが功を奏した形である。

——そして、改めて敵影がないか周囲の安全確認を終えて。

戦闘中にて強欲で捕らえた騎士の魂。

それを取り込もうとしてみたら、そのあまりの濃さにドロドロに酔ってしまった。

『うへ？ あははははっ？ * * * * *、 * * * * *、ううくぐすつ
……』

『おーい、コケちゃーん？ 大丈夫かー？』

あはは、地面が焦げ臭い。

手足が動かない意識が消える、その後に一瞬の激痛、そして何も感じなくなる。

うぷっ、気持ち悪い……

怖い、暗闇の恐怖恐ろしい気配、無力で足が震える、次々浮かぶ顔、走馬灯……

イタイ、コワイ、ニゲタイ、シヌ、シヌ、シヌ、シヌ……ダレデモ
イイ、タスケテクレ……

魂に刻まれタ、断末魔。

キョウフの象徴。

——闇に羽撃く、朧気な魔物の影。

………ああ、うえ、うぐうううつ。

………混じって、いたかも。

きちんと魂の浄化をしきれていなくて、私が殺した騎士の最期の記憶とか感情が流れ込み、吸収する時の酩酊も合わさり、かなり気持ちと精神がメチャクチャになっていたと思う。

そこからどうにか復帰してこれたけれど、未だ脳内では記憶と情報が乱反射を繰り返して深刻な頭痛を引き起こしており、脳に直接ガラス片でもブチ撒かれたような酷い気分だった。

『ううん……きもちわるい、きぶんわるい………』

『大丈夫？ お肉食べる？』

そのチョイスはないでしょ蜘蛛子ちゃん……

そう思いつつ顔を向けると、大量の水が降ってきた。

『わぷっ』

『目が覚めた？』

身体についた水滴を振り払うと、ようやく気分が普通に戻ってきた

ので起き上がる。

そして翅を揺らして僅かに残った水も落とすと六つの脚を動かして蜘蛛子ちゃんと向き合う。

『いち、おう………なんとか、ね………』

『ふーん………』

そっけない言い方だけど、こちらをチラチラ確認して意識を傾けている以上、なんだかんだ心配してくれているのがわかる。

あの時から蜘蛛子ちゃんは念話を取得して会話できるようになったけれど、元々喋るのが苦手な雰囲気は変わらず、こうして話しかけてくれるのも珍しい方で。

それでもだいたい距離が縮まった感じがするし今までは口クな会話もなかったのだから、私たちの関係性は大きく前進していると思う。

……さて、これからどうしよう。

『これからどうする？』

『……レベルも上がったし、アラバに挑むことにする』

あの地龍のことだね。

私は転移が使えないので、縦穴に飛び込むか蜘蛛子ちゃんにくっついて一緒に転移しないと下層に行けないので、毎回蜘蛛子ちゃんと一緒に降りては一緒に探索していた。

その時にエルローバラギツシュという蛇が進化したと思われるコブラみたいな大蛇がいて、その大蛇の攻撃を物ともせず一方的に狩っていたのが、アラバという地龍である。

蜘蛛子ちゃんと地龍アラバとは浅からぬ因縁があるようで、戦場とする場所を作るのに協力はしたけれど、戦い自体は一人で戦いたいらしい。

私にも、倒すべき相手がいる。

だから、その気持ちは痛いほど共感出来るので、私は不安を胸にしまってその想いを尊重する。

『そっか………、わかった。なら私はもう一方の地龍たちと戦おうと思う』

蜘蛛子ちゃんが因縁を乗り越えるなら、私も戦わないといけないよ

ね。

下層を探索していたときに発見した地龍はアラバだけでなく、私が群れから逸れることになった原因の、カグナとゲエレという地龍も見つけていた。

なら私も——その二匹へと立ち向かうべきで。

『カグナとゲエレは私が倒す。蜘蛛子ちゃんが因縁と向き合うなら、私も倒さなきゃいけない相手がいるんだから』

『……大丈夫？』

蜘蛛子ちゃんが心配そうに聞いてくるけど

『そっちこそ大丈夫？ 一体だけとはいえ強さとしてはアラバのほうがいい一回りも二回りも強いよ』

『たぶん大丈夫』

『……ならいいけど』

とくに気負っている気配もなくさらりと蜘蛛子ちゃんと言う。

『私の方も大丈夫、二体同時でも勝算は充分あるし』

こちらも驕りだとか見栄を張っている訳でなく、冷静に考えた上で勝てる見込みがあるからこそその発言であり、私の口調も平静のままに語る。

『だから心配しないで。蜘蛛子ちゃんも気をつけて』

『……りよーかい』

お互いの無事を祈りつつ、私たちは次なる戦いへの準備を始めた。

『あつ、一応前にも言ったけど、コケダマの群れを見つけても襲わないでね』

下層で探索しているけれど、未だに元いた群れを見つけれず痕跡も見つかっていない。

あの地龍二体と戦っても、被害は出ていたけれど常に優勢に戦っていた群れが全滅しているなんて思えないので、今もどこかで集団で過ごしているのだと思う。

そして私は、どうするかはまだ決めかねているけれど、もう一度会いたいと感じていた。

だから、もし蜘蛛子ちゃんが遭遇しても何もしないで欲しいとお願い

いしていた。

『憶えてるよ』

『うん……。それじゃあ、またあとで』

『また後で』

そして私たちは、別々の方向へ進んでいった。

お互いに秘めたる覚悟を、背負いながら……

12 苔VS地龍

ふわりふわりと音も無く飛び続ける、柔らかかそうな翠の塊。果ての見えぬ暗闇の中を進むのは、緑色をした一匹の魔物。

幾何学的な模様を描く翅を羽ばたかせ、丸々とした胴体を空中に浮かべ滑るように移動する。

その頭部では楕状の触覚が周囲を警戒するようにピクピクと動き、光を反射しない複眼が代わり映えのない暗い洞窟の岩肌を見通していた。

はあ……、ああ言ったけれど心配だなあ……

蜘蛛子ちゃんと別れて、私は私自身との因縁ある相手である地龍力グナと地龍ゲエレのいる場所へと向けて飛び続けていた。

この二匹の地龍は決まった範囲を縄張りとして、その範囲内から外に出ることは稀であるので、その場所に向かえば確実に居ることが分かっている。

なので、その縄張りの中心に向けて移動している訳だけど気分は落ち込んだまま、なかなか元に戻らなかった。

……今は蜘蛛子ちゃんの心配より、自分のことに集中しなくちゃ。頭を振って、気持ち切り替える。

さすがにこんな状態では、勝てるものも勝てなくなりそうなので、これからの戦いに向けて意識を整えていく。

魔力の感知と操作は問題無し、ステータス増強系のスキルも十全に起動中、並列意思による思考拡張も安定して同期している……

あとは……覚悟だけ、かな。

しかし、その覚悟がなかなか決まらず、ウジウジと気持ちを迷走させながら私は飛んでいた。

そしてもう少しで縄張りの端に到達するといった所で、とある集団が感知に引っかけた。

これって……

もう少しで到着するというのに、進路を変えて高速で飛翔してい

く。

感知したその集団——というか群れは、憶えある気配ととてもよく似ていて、逸る気持ちを抑えられずに限界まで加速した。

そして結構な距離を飛び続け、ようやく目視できる距離まで近づくと、懐かしい緑色の塊が複数密集し、ゆるく隊列を作って進んでいた。急停止を掛けるものの勢いが付きすぎており、止まらない。

少し距離をとって確認するはずが、だいぶ近い距離まで進んでしまい、ほんの十数メートルしかない距離で、私とその群れは向かい合った。

羽ばたきを数回、勢い余ってバランスの崩れた姿勢を立て直す。

そしてその緑色の群れ、つまりコケダマ種の群れを確認すると、どうやらこの群れは私が元いた群れとは違うみたいだと、ようやく気付いた。

しかも私は元のコケダマ種から大きく進化して、まったく違う見た目になっているのだから警戒され攻撃されるかもしれないと今更ながら気付き、じつと相手の出方を伺ったけれど、その群れのコケダマたちはどうにも変な反応をしていた。

警戒はしているけれど敵意というものは無く、なんとなくだけ困惑しているような気配を感じられる。

そして群れの前方に並んでいたコケダマたちが甲高いキューキューといった鳴き声を上げると、それに合わせて群れ全体から同じような声が無数に響き渡った。

その声には私も困惑して何をどうするべきか迷っていると、前方にいたコケダマたちが左右に別れ、奥から群れのリーダーらしき巨大なコケダマが現れた。

私と群れのリーダーであるコケダマが向かい合い見つめ合う。

そして何かを伝えようと、リーダーのコケダマは大きく一鳴きした。

キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン……………

その声は洞窟を反響して遠くまで響き渡り、至近距離で浴びた私の感覚器官を揺らしに揺らして、少しその場から吹き飛ばされた程だった。

た。

キーンとしてグワングワンする頭を押さえながら再びリーダーを見ると、何かを訴えているように見えた。

『……ごめんね。何を伝えたいのかわからないけれど、今はやるべきことがあるの』

そうだ、今はあの時の因縁に決着をつけに行かなくちゃならないんだ。

未だに何か念話にも似た思念が送られてきているのを感じるけれど、その内容を上手く理解できないので、首を振って振り払う。

そして後ろ髪を引かれながら、私は群れから離れていった。

『……またね』

そうして私は元いた道へと羽ばたき戻っていった。

暗闇に消えていく小さな影を見送るコケダマのリーダーは、その姿が見えなくなるまで動かずに長々と見続け、そして望遠を使っても見えなくなるとようやく動き始めた。

一つ群れ全体に向けて命令を下した後、大きく空気を吸い込みもう一度迷宮全体に響き渡るように叫ぶ。

そして小さな影が消えた方向とは別の道へと進み、それに続くように群れもまた、迷宮の奥へと消えていった。

そしてエルロー大迷宮の下層に一定の間隔で声が響き渡る。

何かを呼んでいるかのような声が、何度も……何度も……

長い距離を往復して地龍の縄張りの境界線まで戻り、その中に踏み入って飛び続ける。

準備はできている。

身体は万全。

あの群れと会ったことで原点を思い返し、精神も研ぎ澄まされた。ならば後は戦うだけ、そのための覚悟は出来上がった。

広くそして深い縦穴の底で私はスキルと称号の威圧を全開にして、この縄張りの主たちに向けて盛大に喧嘩を売りつける。

何もない空間にて待つこと少し。

全身の毛が逆立つような気配が、大通路の奥から重低音を響かせて歩いて来た。

怖い、けど憧憬の念を感じる相手。

最初の恐怖、最初の憧れ、最初の絶望……、死の実感を教えてくれた最初の敵。

それが暗闇から姿を現した。

鋼のような肉体、揺るぎなき眼光、輝くような紫と白の二体の龍。

その威圧感は憶えている。

その強さはよく知っている。

逃げ出したいほど怖いのに、泣きたくなるほど震えるのに、何故だろう狂いそうなほど心が滾って仕方がない。

ああ、きつともし私が人の姿だったとしたら、その顔は口が耳まで裂けるような笑みを浮かべている筈だ。

地龍カグナ、地龍ゲエレ。

私の死、その象徴。

今、それを越えるべく貴方達を滅ぼす。

お久しぶりです、……そして死ね。

前足に鱗が逆立って出来たと思われるブレード状の刃を持つゲエレが空間を跳ねながら走り出す。

その奥では、一歩ずつゆつくりであるが重圧を掛けながらカグナが近づいてくる。

それを私は空中を飛翔しながら一定の距離を保って下がり続ける。

そして術式が碎けるギリギリまで魔力を圧縮して流し込んだ魔法を乱射する。

使う魔法は二体の地龍が耐性を持たない聖光魔法の聖光槍。

眩いほどの光が圧縮された槍は、接触する直前で僅かに威力を削がれるものの、頑強そうな鱗を貫いて内側の筋肉まで突き刺さった。

血が吹き出し痛みに僅かに顔を顰めているものの、傷はそこまで深

くなく逆に戦意を高めて地龍らは襲い来る。

引き締まった細身な体躯のゲエレは、曲芸染みた動きで魔法の射線から逃れつつ、距離を詰めて爪を振るう。

その巨体と鈍重さゆえに魔法の弾幕を避けることが出来ないが、持ち前の耐久力でHPを削りながらも、軽く開いた口腔の奥に光を灯してブレスを放つカグナ。

それらの攻撃を、私はヒラリヒラリと舞うようにして回避する。

ブレスの予兆から発射までの僅かな時間で余裕を持って射線から離れる。

急接近しては連続して襲い来る爪とブレードの嵐は、高速で飛び回って近づかせず接触しそうな程近づかれた一撃でも、風と重力の結界を張ることで私自身が吹き飛ばすことで触れさせない。

本能が告げる危機感に従って身体を動かし、加速した思考で極限まで引き伸ばされた時間を使って、次なる魔法を組み上げる。

この魔法は本来の魔法単体では起こせない現象を、複数の魔法を複雑に組み合わせることで、無理矢理引き起こす技術。

「大地」「水流」「引斥」、——マッドスライド！

あまりの難しさゆえ、並列意思の何人かで同時に制御しなければ発動すらままならない大規模な魔法は、その難しさに見合った効果をこの場に引き起こした。

一定の距離を保っていたことで地龍たちを縦穴の中央付近まで誘い込み、避けることを難しくしてから放った魔法は、有り余る暴威を振るう。

ただし、それは地龍に対してでは無いけれど。

硬く圧縮されているはずの岩盤が液状化する。

魔法で再現された、私の意に従う土石流。

そしてそれは高速で流動し始め地龍たちの脚を飲み込みながら、この広間全体に広がっていく。

空間機動を持つゲエレは呑み込まんとする地面から飛び上がり宙に逃げるが、それを追いかけるように泥が津波となって襲いかかる。

泥は液状化した地面のどこからでも隆起して、逃れるように高く跳

んでも形を蛇のように変えて引きずり込もうと追いかける。

移動に適したスキルを持たないカグナは少しずつ泥の中に沈み込んでいき、その巨体で藻掻くものの抜け出せずじまい。

土魔法で周囲の泥を操作して逃げようとするが、カグナの魔法のレベルが低く、そしてこの泥には水流属性と引斥属性(重属性の上位)が複雑に絡み合っているのです、私から支配権を奪い取ることが出来ずに成すすべなく沈み込んで巨体の半分が埋まり込んだ。

それ以上は地龍のスキルなども含めた必死の抵抗で沈み込むのを防ぎ、少しずつ抜け出そうとしているカグナ。

急激に周囲の泥への干渉力が増してきていることから再度鑑定を掛けると大量のスキルポイントの殆どを消費して「大地魔法」「地裂魔法」「水魔法」「水流魔法」「重魔法」を獲得し更に「光耐性」なども獲得していた。

そしてそれらを駆使して絡みついた泥を引き剥がし、硬い足場を作り上げて抜け出してくる。

この魔法でゲエレは捕らえることが出来ずともカグナは完全に無力化できると思っていたけれど、この状況に合わせてスキルを獲得し完全にメタを張られるのは私の心に衝撃をもたらした。

くうっ、そんなのってありなの!?

一瞬制御が緩んだ隙にゲエレも泥の範囲から逃れて、縦穴の壁面に爪を喰い込ませて広間の外周を走り続ける。

そして壁から壁へと縦穴の底に近づかないように飛び跳ねて両腕を振るう。

それを避けると、今度は下からブレスが飛んできて回避の隙を突こうと何度も何度も連射性を意識した砲撃が繰り返される。

水平軸はゲエレ縦軸はカグナの攻撃が襲いかかり厳しい三次元の戦闘を強いられるが、森羅万象の感知能力を引き上げ本能が示す直感のままにギリギリで回避する。

かなり苦しいもの戦況を高速で理解し、次の作戦を一瞬の内に考えて動き出す。

カグナを捕らえることに失敗したが、未だ縦穴の地面は底なしの沼

になっていて自由に動くにはまだ時間が掛かるのが予想されるので、今はゲエレを先に仕留める。

そのために襲いかかる攻撃を避けながら縦穴の上空に向けて高速で飛翔する。

私を追いかけてゲエレが喰らいつくが、自身の周囲しか地面を掌握していないカグナでは小さくなる私たちを見上げるしか無いようだった。

それでも狙いをつけてブレスを撃ってくるが遠く離れた高空では、注意を切らさなければ避けるのは容易い。

そして、私とゲエレの空中戦が開始される。

縦穴の天井へ向かう私に対して、空間機動を駆使して駆け上がるゲエレ。

飛翔しながらも高密度の魔法の槍を降らせ続けるけれど、ゲエレもスキルポイントを消費し耐性スキル系を強化してダメージを減らしながら多少の傷は物ともせず追いつがる。

しつこい！ これならどうっ!?

暴風と引斥を組み合わせ、局所的な下降気流を無数に作る。

その流れに飲まれ距離が離れるものの、一度見た攻撃は喰らわないとばかりに、風と風の隙間を潜り抜けて飛び跳ねる。

これで動きを封じられるとは思っていない。

しかし、時間と距離は稼げた。

「水流」「引斥」――

吹き荒れる風が障害物となって進路を制限され、私に向かって飛ぶかかり周囲には風の壁があつて逃げ場のない状況に飛び込んでしまったゲエレの身体に私の魔法が貫く。

――ウォーターカッター！

小さな線、しかし速度と圧力が桁違いに高められた水流は、大きく開かれた顎から喉奥深くまで貫き、分厚い肉と鱗を貫通して巨体の向こうの岩肌を傷つける。

貫通はしたものの、このままでは小さな傷でしか無く射線は動かすことが出来ないので薙ぎ払うことは出来ない。

だけど、この魔法はある程度長く発動し続けるようにしてある。なら、空中で飛びかかるために加速し動き続けている相手に対しては、足場もなく重力に引かれている相手に対しては、この魔法を使つた場合どうなるのかは、それは酷く単純なことで。

ゲエレの身体が真つ二つに引き裂かれる。

自身の速度と慣性で次々と傷口が広がり、そのまま顎下から股下まで綺麗に直線で斬られたゲエレは一瞬でHPが消し飛び、HP高速回復でも地龍のスキルである生命変遷でも間に合わない勢いで数値が目まぐるしく減り続ける。

内臓と膨大な血液を撒き散らしながら落ちていくゲエレに対して、私は聖光槍を撃ち込み追撃する。

即死クラスの一撃を与えても、油断せず確実に息の根を止める。

それは中層で戦つた火龍から学んだことで、龍の生命力ならどれほど瀕死に追い込んでも、しぶとく生き残る強さを知っており、それに敬意を払っているからこそその容赦の無さである。

そして身体の前面が大きく裂かれ、その身に光の槍が無数に突き刺さつたゲエレは受け身も取れずに沼地に叩きつけられる。

泥を巻き上げて崩れ落ちた相方の凄惨な死体に、悲痛な叫びを上げるカグナ。

その叫びは長く長く響き渡り、暗闇に木霊する。

少しずつ高度を落とす私に向かって、隠しきれぬ赫怒を滲ませて睨むカグナ。

残るはカグナただ一匹――

そして再び地上付近での戦いが始まった。

その叫びを遠くで聞きつけた何か動き出すのに気づかないまま。

13 私たちの戦いは、これからだ？

打つ、射つ、撃ち続ける。

すでに制御を離れた泥沼は、瞬く間に強度を取り戻し、荒々しく隆起しては無数の尖塔となる。

そしてそれらは、カグナが一步踏み出すごとに爆散し無数の飛礫となって空中にいる私に襲いかかった。

隙間なく迫る散弾の雨に対して私は魔法で迎え撃ち、弾幕を抉じ開けつつその奥にいるカグナへと何度も何度も魔法を叩き込む。

しかし序盤には効果のあった圧縮した魔法も、今では跳ね上がった耐性によってかすり傷程度にしかならず、ならばゲエレを倒したウォーターカッターの一撃を放つても動かなければ点の攻撃でしかないので身体を貫通されつつもジツと耐えて最小限のダメージで受け止められるし、急所を狙えば強引にでも避けてしまう。

何度も攻撃したことによって元々高かった耐性が更に上がり、このペースだとじきに貫通すらしなくなるだろうと、ひしひし予感する。予想以上に苦戦を強いられている戦いだけど、すでに十分な戦果は上げておりカグナの平均速度能力なら、撤退しようとするれば逃げられるだけの余裕があった。

けれどそれでは煮え切らないにも程があり、そんな中途半端な結果などカグナも望んでいないように見えるし、私もそう思っている。

だからこそ今も意味のない攻撃を続けながら、突破口を模索すべく深く観察している。

どの属性の魔法も単独では効果がない。

その城塞のような巨体にダメージを与えられる複合魔法は、欠点に気づかれて有効的ではない。

なら新たにカグナに通用するだけの方法を思いついて、それを実行するしかないのだけれど、その方法がなかなか思いつかず戦況は硬直していた。

出来るだけ耐性を上げないように飛礫の迎撃だけに留め、カグナ本体には魔法を当てないように立ち回りを変える。

ダメージを与えなくなったことで全快までHPが回復されるけれど、無駄に耐性を付けさせて後々一切攻撃が通らない状況を避けるためには仕方ないこととして相手の回復に目をつぶる。

そして迎撃だけで逃げ回るしか選択肢のない私に向かって、ゆっくりと迫り大地に向かって爪を振り下ろすカグナ。

速度の高くないカグナでは決して私を捉えることは出来ないのだけれど、捲れ上がった岩を高速で弾き飛ばすことで、私が休む暇を与えない。

SPの総量としては私とカグナの間で大きな差は無いものの、常に飛び続けて回避する私と、あまり動かさず要所要所で力を振るうカグナとは、先にスタミナ切れになるのは私の方だった。

そうして延々と続くような鬼ごっこを繰り返していると、こちらに迫りくる強大な反応を感知した。

その速度は先程倒したゲエレより少し遅い程度であったが、流れるような身のこなしで曲がり角を曲がり難所であろう場所を軽やかに踏破する。

そんな動きの良さによって一切減速することなく疾走する存在は、あつという間にこの広間に辿り着く。

巨体をしなやかに畳むことで衝撃を逃して着地したのは、新たな3体目の地龍であった。

カグナのように巨体でもなくゲエレのように細身でもない、力と速度を両立した頑強な体躯の龍。

地龍フイト。

レベルやステータスなどは、カグナとゲエレの2体より低いもののバランスよく纏まっており、魔法に関する能力でいえば両者を上回っていた。

しかしカグナより脆くゲエレより遅いのであれば攻撃が通ると思いい、一旦カグナへの優先順位を下げてフイトに相対する。

そうして放った魔法の槍衾だったけれど、フイトは殺傷範囲を見極めスリスリと通り抜けていき、私に向かってブレスを放つ。

多少様子見の一撃だったことは認めるけれど、それが掠りもしない

で抜けられるなんて思っておらず、私は驚きながらブレスを避けてフイトを見る。

ブレスを放った後すぐさまカグナの側まで下がり、私を注意深く警戒する姿を見て、脅威度を大幅に引き上げる。

能力的には今は劣るものの、その動きが身のこなしがセンスが良いい。

ほんの僅かな動き方の違いで、決して油断できない相手だと強く感じさせる。

そしてカグナが動くと同時に、私の隙をつくように飛礫の裏からブレスを放ってきたり迎撃して目眩ましされたらうタイミングで死角から襲いかかってきたりと、こちらがされて嫌な事を的確に狙ってくる。

その攻撃の全ては、視覚に頼らずとも詳細に把握できる高い感知能力のおかげで不意を突かれずに回避をしつづけることが出来ていたが、ただでさえ硬くて有効打を見いだせずにはいた悪い状況から、さらに巧みな動きで翻弄する相手も加わって形勢はドンドン悪くなる一方だった。

反撃する隙が見当たらない……っ！

迎撃や牽制の魔法は問題無く操れるけれど、龍種特有のスキルである逆鱗の守りを突破できる魔法を構築する余裕がない。

いや正しくは構築できても、隙を晒す事になったり正確な狙いをつけられないと言った感じで使えないといった感じだ。

カグナに対しては牽制の魔法も、本命の強力な魔法すら確かなダメージを与えるのは難しい状況で、放つ攻撃には必殺の威力を含んでいる。

フイトに至ってはカグナを盾にするような動きすら見せて、確実に当てられる明確な隙を晒そうともしない。

それゆえ逃げ続けることは出来ても、勝機を見出すのはあまりにも苦しかった。

打つ手が……、なにも、ない……っ？

高速で思考を加速させるも、焦りが焼き付いた頭では、全てをひっ

くり返す打開策を見つけるのは不可能であった。

そしてほんの一瞬、コンマ数秒にも満たない意識の空白が生まれると、その明確な隙を見逃さずフイトが迫り爪を振るう。

前方には鍛え上げた刀剣のような爪、背後に逃げようにも広間の壁が近くあまり下がることが出来ない。

なら左右に逃げようにも、それを狙うようにカグナがブレスを待機させて狙っている。

迫りくる脅威に思考速度がさらに一段上がって、世界の動きがより緩慢にスローになっていく。

すでにどう動こうが被弾は避けられない状況。

なら出来るだけダメージを抑える選択をするしかない。

右へ向かって全力で飛ぶ。

それによって斬撃の殺傷圏から抜け出すものの、その動きを狙ってフイトの背後からブレスが迫り避けられずに直撃する。

荒れ狂う大地属性と純粹なエネルギーの奔流に飲まれる前に、私はスキルを起動して衝撃に備える。

そして私は紫電を放つ閃光に飲み込まれていった。

カグナが全力で放つブレスは、空間を埋め尽くさんとばかりに広がり一部フイトを巻き込みながら放たれた破壊の嵐は射線のあらゆるものを砕きながら突き進む。

おなじ地龍であるフイトには大地無効のスキルを持っており、その威力の大部分を無効化していた。

それでも無効化しきれない純粹なエネルギーがフイトの身体を焼くものの、その程度の負傷なら龍種の生命力で耐えきる事ができた。

そして暗闇を照らし続けた光の線が消え、淡い燐光のみが空气中を漂い土煙が立ち込めて視界を塞ぐ向こうにて、私は重傷を負いつつも生き延びていた。

グツ……ゲホツ、ゴハツツ……、カヒゅツ……

衝撃が内臓まで通り酷く痛めた身体が、ドロドロの体液を吐き出す。

あまりにも不味い味を感じつつも、激痛で飛びそうな意識を繋ぎ合わせて鋭く睨む。

私の周りには炭化しボロボロに崩れていく苔が何層にも積み重なってブレスの威力を物語っていたが、私自身には身体の内側がズタズタになったものの、目に見えた傷は一切負っていなかった。

ブレスが直撃する寸前、私は身を包む苔を急成長させて幾重にも重ねることで身体全体を覆い隠し、ダメージの大部分を苔に肩代わりして貰ったのである。

そこに高い大地耐性と神霊苔の能力である魔法を阻害する効果、ブレスも魔法の一種であるためその威力を減少させる効果がある——を加えて威力を弱めていたが、それだけでなく魔神法と闘神法に龍力さらに激怒も一瞬使いステータスを大幅に高めて防御と抵抗を増やすことでギリギリのところまで耐えきることに成功していた。

しかしそれでもHP半分は消えて無くなり、後ほんの少しだけブレスが長時間続いたのなら耐えきれずに蒸発していたかもしれないかった。

その事実が背中がゾワリとするけれど、今この瞬間に息をしているのが全てだった。

だけど、ああ……次は無さそうだと感じた。

全力のブレスで仕留めきれず私がまだ生きているのを認識した地龍たちは、すぐさま追撃に移る。

その攻撃は幾らか避けられるだろうけど、何手か先では詰む未来が見えた。

ダメージの残る身体では避けられず被弾してそのまま引き裂かれる。

上空に飛んでもブレスと魔法の弾幕を対処しきれず消滅。

逃げようにも反応が悪くなり飛んでいる最中の翅を消し飛ばされ墜落。

そんな光景が浮かんだものはまだ身体は動く。

なら最後までしぶとく足掻いてみせるとしよう。

痛む身体を押して残り少ない魔力を振り絞って、私は空へ羽ばたい

た。

——ああ、でも、蜘蛛子ちゃんとの約束、破っちゃうのかな。

そんなことが頭をよぎるが、迫りくる死の足音は止まりそうになかった。

せめて……、刺し違えてでも……

死力を振り絞って最後の一撃を放とうと準備し始めた時、無数の方角から甲高い鳴き声が響き渡る。

それは何度も反響して幾重にも折り重なり、高低様々な音色が合わさって輪唱しているように感じた。

突然の音に攻撃を止めて距離を取り、周囲を警戒する地龍たち。

私も驚きながらも、距離があいて攻撃が止まっているこの間に自分に治療魔法を掛けることで傷を癒やす。

そして十全に動けるようになるまで身体を修復する時には、この縦穴のある広間に繋がる大通路の全てから地響きが鳴り渡り、無数の影が津波のように迫ってきていた。

この声って……

響き渡る声の音色と移動する際の擦り合うような音は、ついさつき聞いたばかりであり、とても懐かしく憶えのあるものだった。

音色の違う鳴き声が響き渡る。

そのうちの1つは、聴いたことも無いはずなのに何故かとても切なくて、なのに嬉しいという気持ちが次々と湧き上がってくる。

そして暗闇の奥から土煙を上げて緑の大群がやって来た。

キユオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

キユウウウウウウウウウオン!!

クワアアアアアアオオオオオオオツツ!!

空気をビリビリ揺らす咆哮が広間に乱反射する。

大通路からなだれ込むように押し寄せて、相当広いはずの広間を埋め尽くさんとばかりに密集するコケダマたちの群れ、群れ、群れ。

そのなかには私が家主さんと呼んでいた、他の個体より一際大きな巨体をしているコケダマの姿もあった。

あつ……家主さん。それに群れのみんなまで……

コケダマの津波は私のところまでやって来て、その巨体で私の姿を隠すように広がり、それ以外は広間の中央にいる地龍たちを包囲するように並んで牽制し合っている。

そして広間の外周に並んだコケダマたちが集中砲火で地龍たちを攻撃する。

無数の魔法や状態異常の攻撃が四方八方から襲いかかり、逃げ場のない攻撃が地龍たちに叩きつけられていく。

しかし高い抵抗と耐性によって効果が無く、煩わしそうに振り払いながら弾かれていた。

だが釘付けにすることは出来ていて、その間に私の近くへと家主さんや他の群れのリーダーが集まってきて地に伏せる。

そして彼らコケダマの主たちから強い想いが伝わってきた。

……私に？ それで、……いいの？

私は、その想いを受けとって答えることにした。

そう思った時、彼らの意思が明確な意味を持って伝わるようになった。

オウ！

ワレラガアルジ！

アタラシイジヨオウガ、カエツテキタ！

言葉が、想いが、濁流のように流れ込んでくる。

それは確かな言語ではないものの、伝えたいことを想いに乗せて渡すことで言葉として認識できる、コケダマたちの言葉。

そしてそれを一身に受けた私とコケダマたちの間で確かな繋がりが生まれたのを感じた。

みんな、攻撃を目眩まし重点に――

そう願っただけで、地龍たちを攻撃していたコケダマたちが動きを変えらる。

地面に向けて魔法を撃つことで煙を立てる。

顔に土や水などの魔法を当てることで視界を塞ごうとする。

私が思ったとおりに彼らが動く。

それは自由に動く手足のようであり、自分と彼らの魂が深く混ざり

あつたような感覚。

その感覚に驚きと戸惑いを覚えていると、いい加減苛立ちが限界を迎えたフイトがブレスの予兆を灯した。

——口をふさいで！

その指示に魔法が得意なコケダマたちが同時に魔法を構築して、下からは土槍上からは空気の大槌で挟み込み、無理矢理口を閉じさせる。

暴発して周囲に散ったブレスは家主さんが前に出て、その巨体でみんなを庇い守った。

フイトのブレスは防げたものの、今度はカグナが全力のブレスを放つ溜めに入っていて、このままでは大きな被害が出る予感がした。

私はそれを見て、威圧系スキルを全開にして狙うべき相手は私だと主張し、他のコケダマたちは射線上から離れるように指示した。

比較的小さなコケダマたちは素直に下がってくれたけれど、今まで群れの主をしていた強いコケダマたちは離れようとしなかったので、強く命令してお願いした。

——他のコケダマたちを守ってあげて。

そのお願いに渋々受け入れて離れていく。

そして私とカグナとの間に何も居なくなつた時ブレスが放たれた。迫りくるブレスに向けて私は飛び込んだ。

コケダマたちみんなが来てくれたから、時間は充分すぎるほどあつた。

だからその間に新たにスキルを獲得するだけの余裕も、魂を取り込むときの僅かな隙を埋めるだけの時間を稼いでくれた。

そして荒れ狂う破壊の光を突き抜けて、大きく口を開けたカグナの眼前まで辿り着く。

ダメージは負つたものの、その影響はさつきと比べてかなり少ない。

その理由は、新たに獲得した「龍結界」のスキルと「大地無効」。

龍結界は魔法を阻害する空間を作るスキル、そして大地無効はゲエルの魂を取り込んで手に入れた。

コケダマたちみんなが時間を稼いでくれたから戦闘中に取り込めた。

その効果を発揮して、ブレスの殆どを無効化してカグナに迫る。そして大口を開けたままブレスの硬直で動けないカグナに飛び込み、口蓋から脳天に向けて魔法を放つ。

「水流」「引斥」、——ウォーター、カッター!! 六連!!

口内から叩き込まれた水流の針は、肉と頭蓋を貫通して脳を切り裂く。

それを少し威力を犠牲にして同時発動させた水針が連続して襲いかかることで、回復不可能なダメージを与える。

そして脳を破壊されて意識を失い崩れ落ちるカグナはそのHPを回復させることもなく死を迎えた。

一瞬の内にカグナがやられ驚きと怒りに染まったファイトは、無理をしてブレスを越えたせいで浮かぶのがやっとの私に向けて爪を振るおうとする。

それには避けられず剛爪で引き裂かれるかと思われたが、間に巨大な影が挟まり止まる。

分厚い苔の鎧を大きく切り裂かれつつも受け止めた家主さんは、そのまま体重を乗せた体当たりを行う。

それをヒラリと躲し、バックステップを何回か行って離れていく。

そして地に伏し崩れ落ちたゲエレとカグナの亡骸を悲しそうに見た後、私たちを苦々しく睨むファイト。

その睨み合いは数秒続き、フツとファイトの戦意が消えた。

そして2体の龍の亡骸へ深く頭を下げた後、大地を強く蹴って宙を駆けて迷宮の奥へと消えていった。

静寂が、岩と緑で埋め尽くされた広間に訪れる。

——勝った？

キュオオオオオオン!!

キュウウウウウウウウ!!

クワアアアアアアアアアッ!!

オウガカツタ! アルジバンザイ! アラタナジヨオウノ、シヨウ

リワイワエ!

歡喜の音色は、長く長く木霊して響き渡る。

新たな主を迎え入れた群れたちの喜びを伝えながら……

《条件を満たしました。称号「率いるもの」を獲得しました》

14 外に出るぞー！

書きかけの文章が置いてある……

《迷宮の悪夢および迷宮の亡霊に関する報告書》

迷宮の悪夢（以下、悪夢と呼称）とは、推定危険度神話級とされる蜘蛛の魔物のことであり、同じく迷宮の亡霊（以下、亡霊と呼称）も、推定危険度神話級とされる蛾の魔物である。

悪夢の最初の目撃情報は、王国暦841年エルロー大迷宮にて目撃された。

エルロー大迷宮にて魔物の活動が活発になる事象が発生し、オウツ国は同盟国であるレングザンド帝国に事態の解決を依頼。

その要請を受け派遣された帝国の騎士団が、調査中に分厚く張られた蜘蛛の巣を発見。

これを焼却しようとしたものの蜘蛛の巣は燃えることなく通路を塞ぎ、また塞がれた通の奥から恐ろしい気配と戦闘音が聞こえたため、一時調査を断念し撤退。

後日、再度確認しに向かうと悪夢と遭遇。

その場にいた騎士団長と案内人の判断により、交戦せずにくささま撤退した。

この時点までは亡霊の直接の目撃情報は無く、それからしばらくして不可解な事件が迷宮上層にて発生するようになった。

探索中の冒険者が危険を感じすると同時に昏倒させられ、目が覚めると何故か通路の隅などに移動し、荷物の一部が無くなっているという報告が多数上がるようになった。

この現象に対し、迷宮には姿の見えない亡霊がいるという噂が広がり、亡霊という呼び名が生まれた。

そのころ悪夢と接触した同騎士団長は、すぐさま本国に応援を要請。

帝国は要請を受け、召喚士ブイリムス含む精鋭部隊を派遣した。

精鋭部隊は蜘蛛の巣を焼き払い、さらに深く探索し悪夢を発見交戦するも、部隊はブイリムス氏と■■■■氏を残して全滅。（文の一部

が塗りつぶされている)

その悪夢と交戦中にて、中層へと続く方向の通路から亡霊が出現する。

騎士数名が対処に当たるが原因不明の昏倒で近づくことすらままならず、その後亡霊が放った魔法により死亡した。

このとき確認された姿から蛾の魔物であることが判明し、また鑑定を行い得られた情報によると、この蛾の魔物はコケダマ種に属する魔物であることが判明した。

今まで不明だったコケダマ種の成虫形態が判明したものの、何故エルロー大迷宮に現れたのか何故悪夢と協力するような行動をしていたのか一切不明であり、未だ亡霊には謎が多い。

その後、悪夢と亡霊は、エルロー大迷宮の外に出現。

オウツ国のエルロー前砦を破壊し、しばらく行方をくらませる。

？

降り注ぐ太陽、澄み渡る青空、鮮やかな自然の色彩、……そして煙を上げる建物の残骸。

慌ただしく走り回る人の喧騒と怒号と悲鳴を無視して走る。

今、私と蜘蛛子ちゃんは全力で自らのやらかしから逃亡中です。

しばし時間を戻して迷宮の下層にて……

それぞれ宿敵の地龍と戦い勝利を収めて数日後。

私は地龍カグナ・ゲエレとの戦いで共に戦ったコケダマたちと親睦を深め、それぞれの群れの主や配下のコケダマたちと交流して改めて彼らのことについて理解し、それぞれの群れ全てを一つにした新たな群れの主として、私が担ぎ上げられ就くことになりました。

その事は別に嫌という訳では無いけれど、予定していた迷宮の外へ行くという目的を実行しづらくなったのは確かで、彼らに外に出たいと伝えると何度も引き止められて、なかなか離れることが出来ずに戸惑っていた。

そうしている間に蜘蛛子ちゃんもやって来て、それを敵だと判断したコケダマたちが殺気立ち、あわや一触即発といった雰囲気にもなったりしたけど私が間を取り持ち、お互い顔合わせをして敵じゃないと理解して貰えてなんとか一段落。

そして私が離れるのをなかなか諦めない彼らに対して、なんとか妥協案を模索した結果、何日かに一回ここに転移で戻って来て様子を見ることで、漸く納得してくれました。

地龍戦後のレベルアップでようやく空間魔法の長距離転移が使用可能になり、蜘蛛子ちゃんに頼らなくても自力でこの場所に戻ることができるが可能になったので、なんとか受け入れられた様子。

それからは下層で狩りをしつつ、元リーダーたちに転移用のマーキングを施した苔を植え込んだり、彼らの名前を考えて名付けてあげたりと、色々することに。

頭を悩ませて名前を考え、家主さんにはレウキ、他の群れの元リーダー三人にはそれぞれファイノ、エレクトラ、イアンテと名前を付けてあげた。

その結果「命名」なるスキルを獲得することになり、名前を付けたコケダマたちが特に何もしていないのに少しでもステータスが強くなっていたり、より深く強い魂と魂の結び付きが私とコケダマたちとの間に結ばれたりもした。

それらから命名スキルの有用性を理解し、なんとか群れ全員に名前をつけてあげたいけれど、生まれたばかりの子も含めると何百と数があるので全員にちゃんとした名前を与えるのはかなり時間が掛かりそうである。

とりあえず中核の子たち数十名には名前をつけてあげたけど、そこで名前のネタが切れてしまい、とりあえず他の子には待ってもらおうことに。

必死に名前を考えているけれど変な名前や手抜きなどはしたくないので、結果的に凄く悩むことになっているのは自業自得かもしれない。

しかもエルロー大迷宮に生息するコケダマの群れは、他にも四から

五ほどこいみたいで、いずれ彼らと接触した場合そのまま私たちと合流することになって、その際にも再び名前をつけてあげなきやいけない未来が高確率で予想されていたのだった……

そうして私が頭を悩ませている間、蜘蛛子ちゃんがマーキングしていた上層の拠点を襲った騎士らが迷宮から脱出したらしく、その結果外に出るための道順を理解したとのことで、ようやくこの迷宮から外に出られる目処が立ったらしいとの事。

それにしてもいつの間になんかことを仕込んでいたのか。

空間魔法のマーキングは、結構手間を掛けないといけないというのに、戦闘中に仕掛ける余裕があったとは。

改めて蜘蛛子ちゃんの凄さと空間魔法の適性に驚きを感じて尊敬する。

そう言ったら、何故か目を逸らされたけれど。

照れている？ いやなんか違うようにも見えるけれど……

そうして迷宮の外に出た私たちは、降り注ぐ日差しを浴びるのと同じ時に迷宮の出口を取り囲む高い砦と、武器を向ける衛兵らの熱烈な歓迎を受けることに。

砦の上から飛んでくる攻撃に対して、蜘蛛子ちゃんが反射的に撃ち返した一発の魔法で、頑丈そうな砦が原型を留めないほどの大爆発が発生し、砦が次々と崩壊して土煙がモウモウと立ちこめる廃墟になってしまうという、結果的にとんでもない大惨事を引き起こしまったのであった。

迷宮での日常から考えると手を抜きに抜きまくった攻撃で阿鼻叫喚の地獄絵図となり、二人してポカーンと呆然、その後顔を見合わせ『とりあえず逃げよう』で意見が一致したので、現在人目につかないように全力で犯行現場から脱出して、人気のない場所を選んでひた走っていた。

『いやー、あれは事故。私何も知ーらないっ』

『事故って言うには、大事になりすぎていると思うけど……』

緩やかな起伏の山々と、その森の中を進む私たち。

砦跡の周囲には平原が広がっており、一方には中世っぽい作りの人間の街、もう一方には森と山があった。

魔物の姿である私たちでは街に入ってもあまり意味がないので、自然の恵みに期待できる山のほうに進み探索していた。

『攻撃されたら、つい反撃しちゃうよね？ 当たり前のことだもん、私悪くないもん！』

『まあ、わかるけれど』

『なので、私は犯人ではありません！ 勝手に砦が崩壊したんです！』
『……それは無理があるんじゃないかなあ』

蜘蛛子ちゃんは決して認めようとしないので、これ以上の追求をしても何も良いことがないので話題を変えることにする。

『ようやく外に出られたんだし、色んな所を探索してみない？』

『賛成！ 美味しいもの食べたい！』

即刻返事が返ってくるけど、内容は食べ物に関しての欲求に塗れていた。

『山の幸、山菜、キノコ、果物、ジビエ……』

『あるといいねー』

前にも思っただけれど、蜘蛛子ちゃんは本当に食事に関しては情熱とつか掛ける熱意が凄くて、美味しいもののためなら何でもするような覚悟を感じられる。

その証拠に定期的なナマズ狩りを実行したりとか、私が拾って集めてきた冒険者の食糧を盗み食いすることに執念を燃やしたりなど、変な方向でアグレッシブな時がある。

『うおおおー！ 美食が私を呼んでいるぞー！』

『んー……、こっちに果物っぽい。向こうにキノコがあるよ。動物は……、逃げていくね』

『なんだって!? こうしちゃいられん逃げられる前に今すぐ狩るぞ、コケちゃん！』

『あつ、待って速っ!?』

一瞬で姿を消した蜘蛛子ちゃんを追いかける。

そして私たちは人の気配がない山奥へと進んでいった。

そのころ崩壊した砦跡にて。

無事だった衛兵が救助活動を行い崩れた城壁を片付けている時、迷宮の地下深くに潜む怪物が重すぎる腰を上げて動き出そうとしていた。

『とつたどー！』

『やっと追いついた……』

この山に住んでいた動物が遠くに逃げる前に1万近い平均速度能力と感知能力を駆使して追いかけて、なんとかイノシシみたいな生き物を仕留めた蜘蛛子ちゃん。

その追跡劇は凄まじく、すでに全力で逃げ出して泡を吐きながらも足を止めなかったイノシシに追いつくと両手の鎌を居合のように構えて一閃。

勢いのままイノシシを通り過ぎて残心を決めると、イノシシの頭と胴体の位置がゆっくりとズレていき、頭が地面に滑り落ちても残った胴体だけで数メートル走り抜けた後ようやく崩れ落ちた。

綺麗に切断された断面から大量に血を吹き出して土を真っ赤に染める中、蜘蛛子ちゃんは硬派な雰囲気を作るところ言った。

『ふっ、またつまらぬものを斬ってしまった……』

『……』

ツッコまないからね。

『一応途中で果物回収してきたし、少し早いけど食事にしようか』

『おにくー！ くだものー！』

蜘蛛子ちゃんは手際よく解体すると、食べやすい大きさにカットする。

私は中層の魔物から獲得した火攻撃を付与した苔を並べ、土魔法で作った鉄板モドキを上に敷いて即席のホットプレートを作る。

そして青空の下、血が滴るほど新鮮なお肉を使った野性味溢れるBQを始めた。

『はっっ、はっっ。うまー！』

『臭みはあるけど、ジューシーでおいしいねー』

淡白なナマズと違いガツンとくる臭みと旨味の暴力は口内を蹂躪し、粗食に慣れた舌をメタメタに蹂躪する。

こつてりした味に飽きが来ても、瑞々しい果物を頬張れば爽やかな甘さとともにサツパリ洗い流され、再びお肉に食指が伸びていく。

『ねえ、蜘蛛子ちゃん』

『んー、なーにー?』

次々とお肉を焼き、それを食べながら私は、蜘蛛子ちゃんへと問いを投げ掛ける。

『システムって、どう思われているんだろうね』

『システムと言っても……、禁忌に書かれている役目こそが、真実なんじゃ……』

『その禁忌を知らない人から見て、どう思うのかって話だよ』
『それは……』

数ある雑談の一つとして、この世界に住む存在が禁忌から教えられる真実について何も知らない場合、どういう風にシステムとか、スキルやステータスについて考えているのだろうか、小さな疑問を呈した。

それに対し蜘蛛子ちゃんは、こう答えた。

『やっぱり、このアナウンス的な天の声。これについて何かしらの伝説とか宗教とか、あるんじゃない? これが神の声だー、なのだーって。あと他には、レベルとかスキルとかも、神の恩恵だの何だの言ってると思う』

『確かに、ありえそう』

不思議な声と、力がある。

なら、それを崇める何かが出来ていてもおかしくないは無い。

『私たちには、鑑定というスキルがあるから自由にステータスとかを確認出来るけれど、普通なら聞こえてくる声頼りになってしまいうし、その重要性和信仰具合は非常に大きいと、私も思うよ』

それこそ、その神の声を聞くためだけにある、宗教とかも……

『私としては、ステータスやスキルとかで個人の能力が可視化出来

るってどこに注目するよ。数値によって優劣がハッキリと示されるし、能力主義とか実力主義とかが流行っていそう』

それと、数値で明確に示されるって事は、努力の可視化もしているって事。

私だって魔法を鍛えて、その成果がスキルのレベルアップで返ってきた時には、物凄く達成感や世界から認められているという承認欲求が刺激された事が、数多くあるから。

『なるほどなー。確かにメチャクチャ強い奴とかは、崇められてそう。それこそ、勇者とか魔王とか』

『居ない……とは言えないんだっけ』
『うん』

その二つの役は、システムからも特別らしいというのは、私も禁忌を見た以上知っていた。

『会ったことも無い奴、考えても仕方ない。食べよ、食べよっ！』

『うん、そうだね……食べよっ、蜘蛛子ちゃん！』

そうしてイノシシ一頭分のお肉が残り僅かになる頃、小さな地震を感じた後ゾクリと心臓を鷲掴みされるような特級の危険を感じた。

それに直ぐ反応した体は、考えるよりも先に行動を起こした。

すぐさま食事を放棄して飛び出す。

蜘蛛子ちゃんも少々名残惜しそうにしながらも全て置いてきて、私たちは一目散に逃げ出す。

だけど危機感が増々強くなり、背後の遙か彼方から強大な力の高まりを感じた。

反射的に方向転換し全力で真横に高速飛翔すると、数瞬のちドス黒い激流が通り過ぎ、それが消えると森と山が跡形もなく消し飛んでいた。

あれは地龍も使っていたブレスと同じ攻撃、だけど威力が桁違いに高い！

感知範囲を拡大し、遙か遠く何十キロメートルも離れた場所にいる存在を認識した。

そこにはかつて中層を進んでいた時遭遇した最強の蜘蛛の魔物、ク

イーンタラテクトの姿があった。

なんでこんな所に!?

強くなった今でも到底敵いそうにない相手を認め、急いで逃げようと考えた時ふと気づいた。

あれ? 蜘蛛子ちゃんはどこ?

いつの間にか隣に蜘蛛子ちゃんの姿はなく、一人で長い距離を飛び続けていたことに今更ながら気づき、慌てて蜘蛛子ちゃんの反応を探す。

すると、私とは正反対の方向に蜘蛛子ちゃんは退避しており今なお走り続けてドンドン距離が離れていく。

反転して蜘蛛子ちゃんを追いかけようとしたとき、再び危険感知が騒ぐ。

クイーンタラテクトの行動とブレスの予備動作を認識し、未来視で見えた光景を瞬時に理解すると、全力で空中に飛び上がり急上昇して退避する。

二度目の破壊の奔流が光る。

横薙ぎのブレスが山ごと消滅させ一筋の線を刻みつける。

それを遥か上空で見ていると、ジャンプしたクイーンタラテクトが蜘蛛子ちゃんが逃げた方向に着地し、大地に降り立った巨体が局所的な地震を発生させた。

そして追いつくのも難しいスピードで蜘蛛子ちゃんとクイーンタラテクトの鬼ごっこが始まった。

蜘蛛子ちゃんを狙って数えるのも億劫になるほどの魔法が降り注ぐ。

それをなんとか回避し続ける蜘蛛子ちゃんだけど、速度差から距離が刻一刻と縮まっていく。

必死に飛ぶけれど距離が遠すぎる。

なんとか注意を引こうと攻撃を放つものの、最初から眼中に無いと無視され相手にされない。

なんとか念話圏内まで近づくと蜘蛛子ちゃんから念話が飛んでくる。

『転移で！ 逃げる！ 大丈夫！ 逃げて！』

とぎれとぎれで、必死さが滲んだ叫びが脳内に響く。

その直後、クイーンタラテクトが三度目のブレスを放つ。

そして蜘蛛子ちゃんのいた場所にブレスが炸裂し跡形もなく消し飛ばした。

『っ!? 蜘蛛子ちゃん!?』

ギリギリのところまで転移したのを感知していたものの、ブレスに飲み込まれていく景色を見るのは、あまりにも心臓に悪い光景だった。

蜘蛛子ちゃんがなんとか逃げ切るのに成功したけれど、今度は私が最大級のピンチに陥っていた。

ゆっくりと巨体向きを変え、無機質な無数の眼が私を見る。

そして目についた邪魔な虫を追い払うように乱雑に魔法が放たれた。

15 蜘蛛の王

恐ろしい量の魔法が降り注ぐ。

視界を埋め尽くす黒い弾丸は空色が1黒色が9と、空いている空間を探すのも一苦勞な程の圧倒的な物量で襲ってきた。

高速飛翔で隙間に身体を振じ込み、慣性を空間機動や引斥魔法で無理矢理切り返す。

迫りくる弾幕を回避しつつ、なんとか距離を取ろうと逃げ出した私は、まるでシューティングゲームの機体のようなスレスレの行動を余儀なくされていた。

殺意や圧といったものは蜘蛛子ちゃんが転移で居なくなると少し薄れたものの、今度は私を決してどこにも逃さないと言わんばかりに執念深く追いかけてきていた。

蜘蛛子ちゃんを追いかけていたときはタメの長い極太のブレスを撃ってきたけれど、私を追いかける今は、とにかく私が他に何も出来なくさせるように間隔を極端に短くした連射型のブレスを何度も何度も撃ってくる。

威力を上げるタメが無く回数と速度を意識したブレスであっても、内包された破壊力は凄まじく一度でも直撃すれば身体の殆どを消し飛ばされ、飛べなくなった私に無数の魔法が襲いかかり欠片も残らず消滅させられると予想される。

——空間の把握を飛ばして長距離転移の構築開始、転移先は蜘蛛子ちゃんが飛んだと見られる上層拠点、魔力の注入充填完了、転移元の座標情報を空欄のまま発動待機中。

必死になって飛び回り命がけの逃亡劇を繰り広げながら、並列意思複数人掛かり全力で空間魔法を構築し、長距離転移の準備を進めていた。

蜘蛛子ちゃんほど得意じゃないので術式自体の構築はどうにかなくても、どうしたって座標計算や空間指定に手間取ってしまう。

ましてこんな高速で移動しながら戦闘中での転移など、目まぐるし

く自分の位置が変わり、とてもじゃないが使用すること自体が不可能な難易度だった。

——移動中の座標指定と計算を破棄、東側1キロメートル先の山頂を転移元として指定、座標情報取得成功、計算を開始……

どうあがいても逃げ回りながら自分自身の位置を基準にして飛ばうとすれば、計算が間に合わず転移自体が不発に終わるか、変に転移して身体がバラバラになるか予期せぬ場所に飛ぶことになるだろう。

なので自分自身を基準にするのではなく、予め指定した位置で空間と空間を繋げる計算を行い、その場所にピタリと重なった瞬間に転移を発動させる方法に切り替えた。

——計算完了、転移元と転移先の空間を接続可能、術式に代入完了、発動待機状態で維持。

あとは、その場所に辿り着ければ！

加速減速、上下左右、縦横無尽に飛び回って逃走する。

未来視で見える僅かな活路にコンマ数秒以内に潜り込まないと蜂の巣にされる、そんな命の危機を何十何百と繰り返して距離を稼ぎ続ける。

あまりにも集中を要することを繰り返しているため気が緩む暇すら無く、精神は極度に高まって風の境地に至るほど。

雑念が消え去り、もはや思考して動いているのか反射的に動いているのかわからないほど、高速で思考が回転し意識が澄み渡っていく。そしてあと数メートルといったところで、背後から糸が迫る。

目に見えないほど細く、けれど強度はどんなワイヤーよりも強靱な蜘蛛の糸が無数に広がって私を包み込もうと空中に拡大していく。

このままでは目標の座標から数センチずれた位置で捕まり、待つているのは逃げる事が出来ずに死ぬ未来だろう。

ほんの数センチ、されど途轍もなく遠い数センチを稼ぐため、私はスキルを使った。

糸があと少しで私に触れそうになるその瞬間、全身が炎に包まれる。

燃え盛る火の玉となった私に触れた糸は、焼け焦げ変質することで

粘着力を失い、薄皮一枚程度の僅かな距離を詰めることが出来ないでいた。

そしてたった1秒にも満たない時間を稼いだことで、私は転移が可能な位置に到着した。

燃え盛る私を見てクイーンタラテクトが糸に火耐性を付与する僅かなタイムラグの間に、長距離転移を発動しその場から忽然と姿を消した。

最後の最後で獲物を取り逃がしたクイーンタラテクトは、しばし呆然と動きを止めた後、荒々しく脚を踏み降ろす。

爪先を叩きつけられた山頂は大きく抉られて標高を減らし、すり鉢状のクレーターを作り上げた。

また1つ地形を大きく変えたクイーンタラテクトは、巨体をエルロー大迷宮のある方向に向けた後、地響きを立てながら地下深くに帰っていった。

クイーンタラテクトから九死に一生を得て、上層の拠点に逃げ帰った私を待っていたのは、無数の蜘蛛の軍勢だった。

瞬時に状況を把握、集中を維持しつづけ攻撃用の魔法構築に意識を切り替える。

周囲には数え切れないほどの無数の蜘蛛と、一際大きな白い大蜘蛛が3体いた。

蜘蛛子ちゃんが倒したのか蜘蛛軍団の一部は既に事切れていて死骸を晒しているが、大部分は健在であり地面が見えないほど埋め尽くしていた。

空間を歪めて拠点の天井付近に転移した私は重力に引かれてゆっくりと落下し姿勢を整えようとしている最中で、この転移した瞬間に攻撃をされていたら為す術もなくやられていたかもしれない。

けれど蜘蛛たちの視線は、ある方向を向いたまま固定されており、転移した瞬間の私に気づいたのは誰もいなかった。

その方角は中層へ続く道で、探知範囲を伸ばすと蜘蛛子ちゃんが白

い大蜘蛛5体とマネキンみたいな何かと戦っていた。

明らかに死にかけていてピンチだと思っただけ、私が声を掛ける前に再度白い大蜘蛛ごと転移して消えてしまい、また離れ離れになってしまう。

今度は中層に飛んだみたいで、ギリギリ空間の揺らぎから位置を特定できたけど念話を届けるには遠すぎる距離なので連絡する手段がなかった。

そして目標を失った蜘蛛たちがようやくやく私の存在を感知し、無数の感情の籠もっていない瞳が私を射抜く。

——あれおかしいな？ ついさつき似たような光景を見たばかりなんだけど。

身体のコに氷を入れられたような悪寒を感じて飛び跳ねる。

なるべく上空を確保するように立ち回り、四方八方から変則的な軌道で襲い来る糸に対処する。

クイーンタラテクトの糸と違って、ここにいる蜘蛛の糸なら火耐性が無い個体が大多数なので簡単に燃やして抜け出すことが可能であり、物量で攻められない限り糸で囚われることなく立ち回れる。

しかし直接物理攻撃されると地龍並みのステータスに押し潰されることになるので、とにかく距離を取り続けないと危険極まりない。

しかも蜘蛛子ちゃんと戦っていたマネキンも向かってきていて、強さとしてはそれが一番高くて煩いほど警鐘を鳴らしていた。

ここから別の場所に繋がる通路には糸が張り巡り網となつて何重にも塞がれていて、ここから転移以外で脱出するのは不可能と見た私は、再度転移するための時間稼ぎに集中した。

変則的だけど、火に弱いならこうすれば——

「神霊苔・増殖」「鱗粉」「技能付与・火攻撃」——燃え盛る苔と粉塵を大量にばらまく。

「暴風」「引斥」——私の周囲を除いてあらゆるものを吹き飛ばす竜巻を作る。

——呑み込んで燃え上がれ、ファイヤーストーム！

荒れ狂う旋風に常に新鮮な空気を送られた火種は、たちまち嵐全体

に燃え広がり周囲のものを焼き尽くしながら押し広がつていく火災旋風を展開する。

その颯風は私を捕らえようとした糸を焼き尽くし、外側に向けて強力な圧力が加わる風の防壁によって近づくこともままならない。

発動する寸前に直接噛みつきこうとしていた白い大蜘蛛は燃え盛る嵐に飲み込まれ、高速で叩きつけられる炎弾と風刃に一瞬でズタズタにされ、僅か数秒で数千のHPが消し飛んでは削り取られていく。

龍種と比べて、魔法を阻害するスキルなどを持たない蜘蛛は非常に魔法の通りが良いので、一切減衰されずに突き刺さった魔法は容易く外皮を貫通して柔らかな内部を破壊する。

それによって簡単に急所までもが撃ち抜かれ、ロクに抵抗することも出来ずに絶命した。

うねり揺らめく灼熱の風は巻き込んだ物を燃え上がらせ、新たな炎弾を生み出すと次々と外側に向けて弾いていく。

近づかずに暴風に飲み込まれない位置に居ても、逆巻く暴威は容赦なく弾丸を装填しては狂ったように乱射する。

どこに飛ぶか術者である私にもわからないけれど、それ故に対処が困難な攻撃が次々と襲いかかるので、白い大蜘蛛やマネキンはともかくそれ以下の弱い蜘蛛は次々と焼き潰されて消し炭になっていく。

誰も近づけず何も攻撃が飛んでこない嵐の眼にて、並列意思の半数が複合魔法の制御に回り、残りの並列意思で転移を組む。

今度は移動すること無くその場で転移を行うので、速い速度で計算し終わり構築が完了する。

その頃マネキンが身体が燃えてドンドン炭化していくのに強引に炎の壁を突破しようとしているので、完全に抜け出して攻撃される前に転移を発動させる。

そして私が転移で掻き消える瞬間、術式の制御を大幅に乱して暴発する勢いで魔力を流し込み、そして手放した。

誰もいない空を切るマネキンの一撃。

それが振り下ろされた瞬間、円を描いていた炎の流れが歪む。

そして、——大爆発した。

ト、ゴオオオオオオ、オオオオオン!!!

無差別に猛火が撒き散らされ急激に膨張した火炎と衝撃波によって、さらに多くの蜘蛛らが灰になっていく。

その中心にて、こんがり芯まで焼かれた白い大蜘蛛の死骸が崩れ落ちるなか、爆心地のド真ん中にいたマネキンは原型を留めないほど黒く炭化し、その内部から手のひらサイズの蜘蛛が転げ落ちる。

灼熱を帯びる地面をバウンドする小さな蜘蛛は、僅かに痙攣した後ピクリとも動かなくなり、地を舐めるように這い寄ってきた炎に飲み込まれていった。

溶岩溢れる中層の一角。

そこに数分前と同じように空間を裂いて転移する緑色の魔物。

すぐさま周囲を確認して何も危険がないことを確認すると、ホッと一息ついた。

——なんとか生き延びたっ!?

1時間にも満たない時間で何度も死神の鎌が振り下ろされ、それを紙一重で躲し続けて逃げ切ることに成功した瞬間、ドツと疲労感が押し寄せる。

身体的な疲労はスキルによってすぐに消えていくけれど、精神的な疲れは消してくれないので、酷使した頭脳と精神を休めるために少しずつ感覚が鈍麻していく。

けれど休むには、まだ早い。

度重なる脳の酷使に頭痛がするけれど、それを無視して広大な距離を探索する。

蜘蛛子ちゃんの反応を捉えると座標を把握、3度目の転移を実行する。

周りを気にすること無くゆっくりと組み上げて中層の中心部へ転移する。

上層からも下層からも遠く離れたこの場所なら、なるほど安全かもしれない。

そしてようやく私たちは合流した。

『やっと合流できた……』

『おー生きてたかー、コケちゃんー。無事逃げ延びて何より』

軽いっ！ 蜘蛛子ちゃんも死にかけていたというのに、なんて軽い調子でのんびりしているの蜘蛛子ちゃん。

白い大蜘蛛のマグマ焼きを背景にグツタリ伸びている蜘蛛子ちゃんは、いかにも疲労困憊といった様子で寝そべっていた。

というかクイーンタラテクトとの逃亡はともかく、上層での戦いに関しては蜘蛛子ちゃんも私がいたことに気づいていてもおかしくないのに、さつさと転移して1人逃げるわ、戻ってきて援護するとかも何もなく、こうして休んでいるわと、自由すぎません……？

ゆっくりと降下して蜘蛛子ちゃんの正面に降り立つと、私も翅を折りたたんで地面に突っ伏した。

鉄板のような熱さが伝わってくるけれど炎熱無効を獲得した以上、熱いと感じるだけで特に問題は発生しないので、前脚をまっすぐ正面に伸ばして腹ばいになる。

『上層で戦っている時気づいていたでしょ、なんで無視してさつさと消えちやうの』

『あー、それはですなー、えーと……。ぶっちゃけピンチすぎて自分が生き残ることしか頭にありませんでした！ ハイ』

言いよどんで口ごもる蜘蛛子ちゃんだけど、最終的に開き直って潔く白状した。

『……はあ、まあ何とかなつたから良いけど。死んじやったら意味無いからね』

『ほんとごめん、次からは気をつけるから』

両手の鎌を重ね合わせ誠心誠意謝っているように見えるけれど、たぶんこれからも同じような事があった場合、またやらかすのではないかと不安に感じた。

『それで……、なんであの蜘蛛たちは私たちを襲ってきたの？』

『ギクっ』

ジツトリとした情念を込めてドスの入った念話を送る。

私からの念話にビクリと身体を震わせた蜘蛛子ちゃんは、ぎこちな
い仕草で目を逸らそうとするも、何も話そうとしない。

『……ねえ、……ねえ、……ねえ、……ねえ?』

『ヒイイっ?! あわわわわ……』

何度も何度も圧を掛けながらジリジリと近づく。

やがて迫りくる重圧に耐えきれなくなったのか、一体何をやらか
していたのか馬鹿正直に全てゲロった。

そして……

『……んー、とりあえず不問!』

『許されたっ!』

まさか、あのクイーンタラテクトから精神支配の攻撃を受けてい
て、反撃として逆にクイーンタラテクトの魂を食べようとしていたな
んて、思いつかないでしょう。

だから突然上層には姿を見せないアークタラテクトが襲ってきた
り、地上に出た私たちを追ってクイーンタラテクトが外に出てきたり
と、不可解な行動に対しての説明がたった。

蜘蛛子ちゃんがやった諸々について色々考えたけれど、結局は不問
に決定した。

無効化出来ているとはいえ精神支配がずっと続くのも問題だし、蜘
蛛子ちゃんとクイーンタラテクトとの間には魂の繋がりがあって、そ
れをどうにかしないことには自由も安全も無いのであれば、結局何か
しらの対策や行動をするしかないのも事実であったから。

そうしている間に回収していたアークタラテクトなどの魂の洗浄
と吸収が終わると……

《経験値が一定に達しました。 個体、モフ・モスがLV29からLV3
0になりました》

《条件を満たしました。 個体、モフ・モスが進化可能です》
アナウンスが私の進化を告げた。

16 蛾の羽撃きは異世界で竜巻を引き起こすか？

クイーンタラテクト襲来、上層での待ち伏せ戦から何とか生き残り、一息ついた頃。

私たちが襲った蜘蛛たちが簡単にはやって来ることが出来ない、中層の奥深くにて。

『あつ、進化出来る』

『おおつ、また一緒。これは運命かもしれないねー？』

私たちは度重なる激戦を潜り抜けたことで、前回の進化から大して時間も経っていないというのに次の進化を迎えていた。

上位種に進化してレベルが上がりにくくなっているのに関わらず、こうして再び進化出来るようになるのは、強くなっても次から次へと新たな強敵が絶え間なく現れて、その度に戦わざるを得ない状況に毎度毎度巻き込まれているからだと思う。

今回は蜘蛛子ちゃんが引き寄せてしまった事件だったけれど、今後何かしらのことが立て続けに巻き起こりそうなのを予感していた。

嫌な予感、当たってばかりだからなあ……

嫌な信頼を憶えるようになった私の直感が外れたことは今のところ一度も無いのは、果たして良いことなのか悪いことなのか。

周囲の安全確保は威圧系スキルを2人して同時に使うと魔物が1匹残らず逃げていくし、余程強いそれこそクイーンタラテクトだとかそれに匹敵する龍種だとか、それくらい強いレベルでなければ私たちに襲いかかる気概のある魔物はおらず、それゆえ周囲は酷く閑散としていた。

さて、まずは確認からと。

《進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。》

・ モフ・モフラス

・ マホビナ・ラスコヴニク

》

また複数。

数は2つだけだけど、この神話級と呼ばれる段階で進化先が別れる

となると慎重に熟考して選ばないといけない。

ここまで来ると次の進化なんてものは無くなるらしいので、ここで選んだ種族がこれから死ぬまですっと付き合っていく身体となるのである。

まず上から。

《モフ・モフラス：進化条件：モフ・モスLV30：説明：原初の姿を取り戻し神秘の苔を纏う魔蛾。羽ばたき一つで世界を書き換える》

……説明は説明しないことが義務か何かなのだろうか。

はつきりしたことは何も書かず内容を推察するしか無い文章に、もはや驚きも何も感じなくなってきた。

うーん、順当な上位種になる進化かな？

進化条件が種族指定でLVのみであることから、それ以外に考えられない。

名前も殆どそっくりだし、説明にも魔蛾って書かれている。

次は？

《マホビナ・ラスコヴニク：進化条件：一定以上のステータスを持つ特定の魔物、神霊苔スキル所持：説明：秘密を暴き黄金を錬成する魔法の薬苔。その身は神秘そのものであり星と混じり合う》

……ん？ どうゆうこと？

えーつと、ちゃんとよく考えてみよう。

まず何に進化するか。

これは、詳細はわからないもののコケダマ種では無くなるっぽいかな？

説明には苔しか生き物と呼べる名前が書かれていないので、種族が植物系の魔物に変化するのかもしれない。

しかし植物系の魔物なんて今まで見たこと無いし、この世界にどんなのが存在しているのか未確認である以上、何になるのか未知数だった。

——コケダマ種は見た目植物だけど、中身は虫なので。

他には、星と混じり合うという文。

星と混じり合うってことは、それだけ大きな力が使えるようになる

かもしれない。

だがよく考えて欲しい、今のこの星の状態を。

禁忌がLV10になったときに知った情報から、この世界が今どんな状況に置かれているのかを、忘れたわけじゃない。

むしろ忘れられるなら何も知りたくなかったっていう情報ばかりであるので、その名の通り禁忌の内容である。

あれから大分経って情報や感情の整理が片付いてきたので、やるべきことは物凄く単純なことであることに、ようやく理解した所だ。

結局やることは今と何も変わらない。

この世界が、こういうモノであるならば、それに従って為すべきことを為せば良い、それだけなのだから。

……話を戻さないよ。

結局の所この星の状態が良くないのに星と混じり合うということ、その悪い状態の星と繋がってしまうということだと考えられる。

そんな悪い状態の相手と繋がった場合、ロクに力を得られないどころか逆に私から星にエネルギーを吸い取られてしまう可能性もあるってことである。

そうなった場合、進化して強化どころか大幅な弱体化を強いられることになるので、あらゆる意味で博打が過ぎるこの進化先はボツにするしかなかった。

なので、進化先はモフ・モスの正統進化モフ・モフラスに決定した。

進化先が決まったので蜘蛛子ちゃんに伝えると、蜘蛛子ちゃんは既に最初から決まっていたらしく、私が選ぶまで待っていてくれたみたいだ。

『さて、今回は私から先に進化するよー。周囲の警戒ヨロシクう！』

『りよーかいだよ、蜘蛛子ちゃん』

前回私が先に進化して結果とんでもない事態になったので、再び同じことが起きる可能性を考えて何かあったとしても対処できるように蜘蛛子ちゃんが先に進化する。

ただまあ、あれは禁忌という爆弾が起爆したから発生したことだと思うし、今回は大丈夫だと思いたい。

やらかした私が言っても、説得力の欠片も無いけれどね。

そして蜘蛛子ちゃんが進化し始めたけれど、様子がおかしい。

『お？ おんやー？ どういうこっちゃ……』

『蜘蛛子ちゃん!? どうかしたの!?!』

慌てて声を掛けるけれど、何か悪い状況というわけでは無いらしい。

『いやさ、いつものように意識が薄れないというか、眠くならないんだよねー』

『……それって』

蜘蛛子ちゃんが持っているスキルを思い出す。

たしかその中には……

『もしかして睡眠無効かな？ これがあるから進化中に眠らなくてもいいとか』

……なるほど、睡眠に関することなら無効化できるスキルがあるからこそ、進化時の強制睡眠を無視できるという訳だったのか。

そういえば……、睡眠は状態異常耐性に含まれているのだけれど、今の私のスキルのレベルはと言うと。

「状態異常無効」

こうである。

状態異常大耐性LV8を持っていたカグナや、さっき倒したアークタラテクトなどは自身が猛毒を使う関係で状態異常耐性もよく育っており、それら諸々を吸収した私の耐性は無効化にまで成長していた。

他にも色々と吸収しているので、どんな魔物でも育っている耐性系のスキルなどのレベルは急速に上昇し続けており、この魔物がよく使ってくる属性の耐性などは、無効あるいはその寸前まで強化されていた。

状態異常や属性耐性のレベルは非常によく成長したものの、何故か物理耐性は遅々とした上がり幅でしか増えてくれないので、未だ大耐性にも至っていないけれど。

自分より上のスキルレベルの相手を吸収しても殆ど成長しないのは謎でしか無い。

状態異常無効なら私も眠ること無く進化できると思うので、蜘蛛子ちゃんに一言かけてから私も進化に移った。

『ん、おーけーおーけー。もうすぐ終わるし、やっていいよコケちゃん』

『それじゃあ、始めるね』

《個体モフ・モスがモフ・モフラスに進化します》

？

《進化が完了しました》

《種族モフ・モフラスになりました》

《各種基礎能力値が上昇しました》

《スキル熟練度進化ボーナスを取得しました》

《条件を満たしました。称号「覇者」を獲得しました》

？

無数のスキルがレベルアップしたことを知らせるアナウンスが続く。

そして……

《進化によりスキル「乱魔の鱗粉LV1」「死滅の鱗粉LV1」を獲得しました》

《「鱗粉LV7」が「乱魔の鱗粉LV1」「死滅の鱗粉LV1」に統合されました》

《進化により鱗粉系スキルが解禁されました》

《スキルポイントを入手しました》

無事何事もなく進化が終わりました。

襲撃も暴走も何もなく、ただ進化する際に身体の内側からバキバキ鳴り響いて自分が作り変わっていく鈍い音だけが感じられる長い時間だった。

さて、ステータスの確認をしましょうか。

《モス・モフラス（苔森 真理） LV1

ステータス

HP：4579 / 4579（緑） +1500

MP：17577 / 24973（青） +0

SP：3561 / 3561（黄）

：1118 / 3561（赤） +0

平均攻撃能力：2183

平均防御能力：20261

平均魔法能力：26390

平均抵抗能力：23428

平均速度能力：8174

スキル

HP 高速回復 LV10 MP 高速回復 LV10 MP 消費大緩和

LV10 魔力精密操作 LV10 SP 高速回復 LV10 SP 消費大緩和

LV10 状態異常大強化 LV10 貫通大強化 LV4 衝撃大強化 LV4

破壊大強化 LV3

打撃大強化 LV3 斬撃大強化 LV1 暴風強化 LV2 水流強

化 LV1 大地強化 LV2

光強化 LV4 火強化 LV3

魔神法 LV6 大魔力撃 LV10 魔力付与 LV10 魔法付与

LV6 龍力 LV9

龍結界 LV3 闘神法 LV1 気力付与 LV10 技能付与 LV

2 強麻痺攻撃 LV10

昏睡攻撃 LV6 猛毒攻撃 LV2 強酸攻撃 LV2 外道大攻撃

LV4 火攻撃 LV2

麻酔合成 LV10 催眠薬合成 LV10 神霊苔 LV3 乱魔の

鱗粉 LV1

死滅の鱗粉 LV1 鎧の天才 LV2 体術の才能 LV7 剣の才

能LV3 空間機動LV3
高速飛翔LV2 高速遊泳LV3 念力LV5 投擲LV2 射
出LV5
隱密LV10 迷彩LV7 無音LV10 無臭LV6 無熱LV
V4
集中LV10 思考超加速LV8 未來視LV5 並列意思LV
10 高速演算LV10
記錄LV10 統率LV3 連携LV1 命名LV2
命中LV10 回避LV10 確率補正LV5 鑑定LV10
遠話LV1
光魔法LV10 聖光魔法LV6 水魔法LV10 水流魔法LV
V10 蒼海魔法LV1
風魔法LV10 暴風魔法LV10 嵐天魔法LV1 土魔法LV
V10 大地魔法LV10
地裂魔法LV1 重魔法LV10 引斥魔法LV5 治療魔法LV
V10 回復魔法LV4
麻痺魔法LV10 睡眠魔法LV7 空間魔法LV10 次元魔
法LV1
外道魔法LV10 毒魔法LV8 雷魔法LV5 水魔法LV3
火魔法LV3
影魔法LV2
物理耐性LV9 聖光耐性LV6 水流耐性LV6 暴風耐性LV
V9 大地無効
重無効 炎熱無効 狀態異常無効 酸無効 暗黒耐性LV7 雷
耐性LV3
腐蝕耐性LV7 氣絶大耐性LV6 恐怖大耐性LV3 苦痛無
効 痛覚大軽減LV4
外道無効
暗視LV10 五感大強化LV6 視覚領域拡張LV7 千里眼
LV4
天命LV6 天魔LV10 瞬身LV8 耐久LV8

剛力LV5 城塞LV5 天道LV10 天守LV5 韋駄天LV4

魔王LV4 飽食LV5 激怒LV1 強欲 征服 羨望LV3
暴君LV2

神性領域拡張LV7 森羅万象LV10 禁忌LV10 n%1

II W

スキルポイント：3820

称号

悪食 味方殺し 血縁喰ライ 麻痺術師 睡眠術師 無慈悲 魔物殺し 魔物の殺戮者

強欲の支配者 竜殺し 恐怖を齎す者 龍殺し 狂乱の主 率いるもの 覇者》

久々にじっくり確認したけれど、沢山スキルが増えて物凄くゴチャゴチャしており、非常に見づらい感じです。

その原因は主に、征服によって十全に使えるようになった強欲スキルのせいですが。

殺害した相手の魂を丸々支配して自身のステータスに加えることが出来るスキルなので、倒した相手を持っていたスキルなども、そのまま入手したりすることが出来その結果こんな数えるのも億劫な量のスキルが並ぶようになっていました。

——強欲入手以前からでも結構多かったですけど。

んーと……

ようやく水属性風属性土属性の最上級魔法が解禁されて、さらに難度が高くなるものの高威力や広範囲などの必殺技とも言うべき大技が使えるようになったことが1つ。

ようやく空間魔法が成長しきって、次元魔法が派生したことが2つ目。

とはいえ空間属性に求めているのは転移と空納なので、ただの攻撃スキルとしてはイマイちな性能しかない空間系は使わないかもしれない。

他と組み合わせれば何とかなるかな？

3つ目は強欲でスキルポイントも溜まっていく一方だったので、適性が無くて手を出しづらかった魔法スキルや属性強化のスキルなど補助的なスキルもまとめ取得していて、それらも全体的に成長していた。

私が魔法を憶えれば憶えるほど、蜘蛛子ちゃんはそれを見て自力でスキルを獲得するので、スキルポイントに余裕のある私が切っ掛けとなるスキルを集めるべきだと思うから色々と手を出して集めているのです。

称号、覇者の獲得が4つ目。

また威圧系の称号が増えてしまい、ますます格下狩りが難しくなっていく。

どうにか抑え込む方法を見つけないと面倒なことになりそう……
最後、新たに進化で獲得したスキル、乱魔の鱗粉と死滅の鱗粉について。

元々あつた鱗粉のスキルがこの2つのスキルに統合されて、本来スキルレベル10で獲得していただろう拡散力や視認性の変化などの追加効果なども最初から出来るようになっていた。

何かしら他のスキルと組み合わせ使用しなければ、何の効果もなただけの粉が舞い散るだけのスキルだったけれど、これからは最初から何かしらの効果が付いた状態がデフォルトになり、さらに色々効果を重ねられるみたいだった。

ここまでは良いけれど、問題なのはこの後です。

乱魔、死滅。

この名前に凄く見覚えがある。

そう、蜘蛛子ちゃんが持っている邪眼系スキルに同じ名前前のスキルがあるのです。

乱魔は魔法妨害、遠距離から近づくことも無く攻撃する邪眼とは相性が良くなって、しかも阻害効果も微妙な性能しか発揮出来なかったハズレ枠と言っていた邪眼の鱗粉版。

こちらは邪眼とは真逆の近距離にしか効果がなくて単体ではなく

空間全域に妨害をバラ撒く、いかにも相性の良さそうな組み合わせのスキルだった。

妨害効果は殆どないに等しい微弱な性能だけど、龍結界や神霊苔など他にも魔法対策のスキルは充実しているので、それを後押しする感じの使い方になりそう。

次、一番の問題児枠の死滅の鱗粉。

このスキルはまだ試していないものの使うとどうなるかは、蜘蛛子ちゃんが何度も身を持って示してくれていたので、下手に触らず放置している。

死滅、つまり腐蝕属性の鱗粉を扱えるようになるスキルで、腐蝕属性が何なのかは非常によく知っている。

対生物特効で、使用すれば使った本人も自爆して大ダメージを負う諸刃の剣。

蜘蛛子ちゃんが腐蝕属性の攻撃を使うたび、毎回鎌が無くなったり眼が潰れたり、使用するに当たってかなりの覚悟がいるスキルだけど、それだけの価値があるほど得られるリターンが大きい強力な属性でもある。

使いこなせれば確実に武器になるので、いつかちよつとずつ試してみても練習しよう。

スキルやステータスの確認が終わり、蜘蛛子ちゃんも新たなトンデモスキルを手に入れていて、それらにお互い驚いていると、突然私たち以外の声が聞こえた。

『そろそろお互いの確認は済みましたか？ もしもし、Dですー』

いつかと同じ光景の、ここにあるはずのないスマホが地べたに転がっていた。

17 神仰

『もしもし、聞こえてますよねー？ 無視は悲しいです』
いつの間にか私たちの間の地面にスマホが落ちていた。

その前世でよく見た至ってシンプルなデザインは、とにかくこの世界にある物としては可笑しい不釣り合い極まる物体であった。

目の前に落ちているスマホを見てみると、向かいの蜘蛛子ちゃんは頭の耳？を抑えてイヤイヤと身を振らせている。

まるで、嫌なことは何一つ聞きたくない駄々をこねる子供のよう
に。

『ああ、何ということでしょう。』

苔さんは話を聞いてくれているというのに蜘蛛さんは無視するなんてー、およよー。あらら？ 私の手にはなぜか蜘蛛自爆ボタンがー
ー』

『ごめんなさい許して！ 押さないで！ ていうか何そのボタン!?』
蜘蛛子ちゃんは飛び跳ねて姿勢を正し、地面に頭を打ち付ける勢いで平身低頭した。

『冗談ですよー、そんなものありません。ボタンなんて無くても蜘蛛をきつたない花火に変えることくらい出来ますから』

スマホから聞こえる声には一切メリハリというものが感じられず、全てが冗談にも聞こえるし、全てが本気であるかもしれないという、薄ら寒い怖さのある音が流れ続けていた。

『ええ……ええー、えええ??』

『ご安心を、こんなに面白可笑しい人材を無駄に散らすようなことは、いたしません』

全く声の調子が揺らがないから、どこまでが冗談なのかわからなくて凄く困る。

私がそう思っている間に、蜘蛛子ちゃんは全力でゴマすりをしていて、なんとか機嫌を取ろうと必死になっていた。

『冗談ですよ。 冗談』

『冗談に聞こえないって……』

『よく言われますね』

一連のやり取りが一段落して、蜘蛛子ちゃんは急激に精神的疲労が襲い掛かったことでグッタリしていた。

『えーと、それでDさん。何の用で声を掛けてきたのですか？』

私がそう誰にあてるでもなく念話に乗せると、スマホの向こうから返事が返ってきた。

『単なるお祝いですよ。蜘蛛さんが不死に至ったのと、苔さんが実に懐かしい生き物の姿へと進化したことへのお祝いです』

蜘蛛子ちゃんの不死も凄いことだけど、私の姿？

改めて進化後の自分の姿を確認すると——全体的に濃い翠色なのは変わらないけれど翅の模様が変化していて、上下左右ともに白線が二重に入っており外側の白線には、光の加減で鮮やかに蒼く燐光を帯びていた。

上翅の方には目玉模様のような白と黒の部分もあり、その中心にも煌めく蒼の輝きが灯っていたのであった。

『……ほわあ。改めて見ると物凄く綺麗な姿。私自身のことなのに』

『でしょー？ その姿は、遥か昔にこの星に生息していた希少で、全宇宙的に見ても珍しい生き物の姿を模しているんです』

翅を傾けたり小刻みに震わせたりしながら確認していると、向こうにいる邪神様はこの姿の由来について説明しだした。

『私も認める美しい見た目と本来ありえないような特異性に、随分驚いたものです』

『その生物……その蛾は、どうなっちゃったの？』

『残念ながら絶滅してしまいました。私がコレクションする前だったのに、しょんぼりです』

その声には本気で残念そうな気持ちが込められており、この姿……というかその滅んでしまった蛾に対しての思い入れが強いことを伺わせた。

『その特異性ってなに？』

『それは秘密です』

私がボカされていたところに触れるとクルリと声の調子を入れ替

えて、何でもなかったかのように秘密だと言う。

『何度も聞こうとしても無駄ですよ。教えないと言ったら、教えないのです』

あらかじめ先読みしていただろう内容を突きつけられて、口を噤んでしまう。

『むう……』

『ねえ、邪神サマよ。この不死って……なんでこんなスキル作ったのさ？』

不満に全身を逆立てて膨らんでいた私を押しつけて、蜘蛛子ちゃんが割り込んでくる。

『人は満たされると最終的に何を目指すと思います？』

そして管理者Dは、ごくありふれた醜くて罪深い人の業を語りだした。

満ち足りた者が、もっと欲しいと欲望の手を伸ばすのは永遠なる命である。

それが行き着く先は、決して手が届くこと無く途中で力尽きてしまい積み上げてきた犠牲の全てがシステムのために還元される、効率的で無慈悲な仕組みをスマホの主は懇切丁寧に説明した。

『……あいかわらず性格の悪いことで』

『邪神ですの』

平坦な声なのに、語尾にハートマークでもついているようなゾツとする台詞が聞こえてきた。

『じゃあなんで私ポンと手に入れちゃった訳？』

『ザナ・ホロワは、元々不死の魔物という設定ですから』

そして蜘蛛子ちゃんが辿った進化の道筋について説明をし――

腐食攻撃という耐性ないまま使用しただけで死ぬようなスキルを持ちつつも、進化しただけでは耐性を持たないままで。

使えば相手を殺して自分も死ぬという、そのままでは次の進化など到底不可能な要素を乗り越えなければ、進化できずに死んでしまうことを饒舌に語りだす。

『……なので、まさか本当に進化してしまう個体が出てくるとは予想

していませんでしたけどね。おめでとうございます、あなたは世界で唯一のユニークモンスターになりました。

あつ、ついでに苔さんも同じく世界で唯一の魔物でしたので一緒にお祝いしますね。わああ、ぱちぱちぱち〜』

なんとも飄々として軽い感じであるし蜘蛛子ちゃんのついでだとしても、祝つてくれるのであるならば、一応素直に受け入れることにする。

隣の蜘蛛子ちゃんは、あんまり嬉しくないようだけど。

そして私たちは、様々なことを聞いたり聞かされたりした。

不死のこと、禁忌のこと、蜘蛛子ちゃんが無自覚のままやっていたシステムに想定されていない魂への攻撃方法のこと、他にも転生者がいるのかどうかということ、管理者についてのこと、神について……スマホ向こうに居るDの目的のこと。

『結局、あんたの目的って、何?..』

『言っただけですよ、娯楽だと』

蜘蛛子ちゃんがズバリと気になっていた核心に触れた。

そしてそれが、裏表のない純粹な欲望と悪意のためであることを、私たちに言い聞かせるように呟いた。

『でも今日は気分がいいので、それなりにサービスして色々とレクチャーして差し上げましょうか?..』

『おお! マジっすか、じゃあ何で私たちこの世界に転生したの?..』

『それは私も気になっています』

二人して光ったまま動かない画面を映すスマホを覗き込む。

『ご説明しましょう! ——まずあなた達は地球の日本で死にました。ここまでは分かっていますよね?..』

『ああ、うん。やっぱり死んでたのかー』

『……ぼんやりとだけ憶えている。酷く痛くて恐ろしい感覚だった』

その無慈悲に突きつけるDの言葉に、忘れかけていた記憶が蘇ってくる。

胃がひっくり返りそうな気持ち悪さが身体を侵していき、喘鳴が漏

れだす。

『続けますよ？ その死因なのですが、先代の勇者と魔王が関係しています』

記憶の奥底に封印していた感覚に、思わず身体が震えてくる私の様子を無視し、彼女は話を進めようとする。

『両者ともに次元魔法の使い手であり、かなりの天才でした。彼らは次元魔法を改変し、世界の壁を越える魔法を編み出してしまったのです』

淡々と語りつつも僅かに驚きを滲ませた声で話し続ける。

『なにそれ、すっこ。そんな事出来るの？』

蜘蛛子ちゃんが思わず口を挟んだ。

『ええ、出来ますよ。その苔さんがやっているように改変自体はやろうと思えば出来る——その程度のことではありません。』

しかしシステム外の技術に対してシステムの補助は働きませんので、補助に慣れてしまった住人である彼らには、そんな壁を越えるような高度な術式は制御できませんでした。結果術式は暴発。

しかも次元を越える際にM A領域を一部破壊、世界の壁を越えた先の地球の日本のある高校の教室で爆発してしまったのです』

私たちが転生した原因、そしてそれによって齎された被害の大きさを知った。

地球側ではあの後どうなったのか分からないけれど、こちらの世界でもM A領域の破壊、つまりこの世界にとって極めて大事な部分を壊すという、とんでもない被害を及ぼしていた。

『なんてはた迷惑な』

『まったくです。その勇者と魔王のせいで、私は作ってから放置していたそっちの世界のシステムを点検し直す羽目になってしまいましたよ』

さらりと重要そうな事を呟く管理者D。

『作って放置！ 製作者の怠慢！』

『えっ、ちよつとまって……この世界のシステムってあなたが作ったんですか!?!』

突然の暴露に、驚きを隠せず声の上擦る。

『あら、言っていないでしませんでしたっけ?』

『初耳ですよっ!』

私の抗議に悪びれずに言う。

『まあ良いじゃないですか。私はシステムを提供しましたが、あくまで部外者でしかありません。その世界を管理するのは、その世界の管理者の役目です』

そう言っつて部外者であることを強調するけど、よく考えると矛盾していることに気付く。

『とか言いつつ、この頃結構干渉してんじゃん』

『仕方ありませんので。』

彼らの暴走が原因とはいえ結果的に何の罪もない高校生たちが死んだ上にシステムに巻き込まれてしまいましたから。私も原因の一部ですしシステムの構築者として最低限のフォローをしておくべきかと』

『原因の一部? あとやっぱり教室にいた他のみんなもその時に……』

私は、あの時同じ教室にいたクラスメイトや先生の顔を思い浮かべた。

『ええ、転生者についてはさつき話しましたね? 私はその時死んだ人の魂がシステムに逆流してしまい、その世界で転生することになってしまいました。』

そのままでは分解されてしまう魂を保護し、記憶や元の魂の力をそのままにこの世界を生きていけるように、特別なスキルⁿを付与¹しました。あとは適性を見て適当なスキルを一つずつプレゼントして、なるべく魂の波長に近い種族に転生出来るように二十六人を斡旋しました。これでも最低限のフォローはしてあげたと思っっていますよ?』

うん? あの教室に居たのは先生も合わせれば二十七人。

その人数と合っていないような……

『一人足りなくないですか?』

『ああ。それは私ですわね』

『お前かい!? あんたあの教室にいたの!?!』

蜘蛛子ちゃんが飛び跳ね、彼女があの教室にいたことに驚いていた。

『はい、だからあの魔術が教室に開通してしまっただんですよ』

やっぱり無関係な部外者とは言えないよね、それ。

『ちなみにあんたの名前は?』

『それは秘密です』

蜘蛛子ちゃんが不満と文句を垂れていると、突然ウインクした顔文字のようなイメージが脳内へ飛んできた。

驚いて周囲を確認するものの何もなく、蜘蛛子ちゃんは相変わらず不機嫌そうに地面にの字を描いている。

すると、私だけがスマホを見ているタイミングで一瞬だけ、さっきの顔文字と同じものが画面に映った。

……言おうと思っても、言えないのだから気にすること無いのに。

『まあ私のことは置いといて——システムの最高管理者である私があの場に居たから、あの事故は起きてしまったんです。なので責任をとって、こうしてそちらの世界に干渉しているわけですよ』

話の流れを切り替えて、今もなお此方の世界に干渉して様子を見ていることの理由を語りだす。

『けど、叡智とかのスキルはどうなのよ』

『あれは、あの時にも言ったようにご褒美ですよ。』

——そうそう、せっかくですしご褒美が蜘蛛さんだけにしか与えていないのは不公平ですよ。どうせなら苔さんにも差し上げたいんですけど、お恥ずかしながらこれだという良い案が思いつかなくて。なにかご希望はありますか?』

そう言っつて、私に対して質問を投げかける管理者Dの声。

蜘蛛子ちゃんが貰えるのなら出来る限り吹っ掛けると囁し立てているけれど、喧しく思ったのかDさんの『自爆』という一言で黙らされていた。

私は深く悩んで、答えを決めた。

『出来るなら……。出来るなら神に成れるような、そこに至るまでに

必要な力を導いてくれるような、そんなスキルが欲しいです』

小さな声で、けれど言葉に尽くせない思いを込めて告げる。

『ほう？ それはどうしてですか？』

『この滅びかけの世界から一人だけ逃げ出したい訳ではありません。私は大切なモノを守るためなら何だって捧げてみせます。だからそのための力が欲しい、それではダメですか？』

そう言ってみれば、スマホの向こうから驚いているような慨嘆する声が聞こえ、隣にいた蜘蛛子ちゃんも、思いもよらぬと呆然とし言葉も出せないようだった。

『……ふむふむ、これはちよつと驚きましたね。まさかこんなに真摯な願いで神になりたいと言われるとは』

再び聞こえてきた声には、呆れているようなあるいは痛快だと言っているような、そんなどちらとも判別がつかないような声色を滲ませた返事が聞こえてきた。

『——わかりました。ならば、こういう感じでやってみましょうか』

そうしてDから指示を受けて、その通りに行く。

『そうですね、何か祈ってください。深く強くスキルが取れるほどの思いを込めて』

言われた通りに私は祈る。深く深く、この世界に身を捧げた女神と電話越しの向こうにいる邪神に対して、祈りを捧げた。

今なおシステムに繋がれその身を犠牲にしながらも世界を救っている女神と、スマホの向こうに世界を隔てた先にいる邪神の、前世でよく知っていて記憶に残っているその顔を思い浮かべた。

そして祈る。

ああ、どうかお願い——こんな願いを抱く私を糧として、世界へ救いを導いてほしい……

そして、さしたる時間もすぎない内に——

《熟練度が一定に達しました。スキル「祈祷LV1」を獲得しました》

『よし。それをこうして、ちよちよつとすれば……』

《要請を……位管理者D……》

《管理者サ……却下……要請……》

《上位……Dが……リエ……請を……下しま……》

何度も何度もノイズに満ちた声が響く。

それはどこか悲鳴のように、跡切れ跡切れに消えていく。

そして――

《要請を上位管理者Dが受諾しました》

《スキル「神仰」を構築中です》

《構築が完了しました》

《条件を満たしました。スキル「神仰」を獲得しました》

《「祈祷LV1」が「神仰」に統合されました》

《条件を満たしました。称号「神仰の支配者」を獲得しました》

《称号「神仰の支配者」の効果により、スキル「魔法付与LV10」「解脱」を獲得しました》

《「魔法付与LV6」が「魔法付与LV10」に統合されました》

私の願いを受けたスキルが構築され、それを獲得する。

そして、それによって得たモノは、確かに私の願いを叶えるのに必要なモノだった。

『いやー、少し疲れしました。余計な手間が増えてスムーズに行きませんでしたよ』

その声には、一仕事終えた疲労と達成感を帯びさせていて、わざわざ手間暇掛けてくれたことに感謝した。

『いや構いませんよー。これからどうなるか面白そうですし、期待してますから』

『コケちゃん鑑定してもいいかな？　するよ？　――勝手にするね』
私が許可する前に、蜘蛛子ちゃんが勝手に鑑定を実行する。

まだ鑑定妨害を掛けたままなのに、叡智の解析能力と権限で無理矢理突破し、ステータスを読み取られていくけれど、望んだ結果が得られなかったみたいで首を傾げていた。

『あれ、なんで!?　叡智様の力でも読み取れない!?』

『当然です。知られては少々困る情報を与えたのですから、プロテクトは嚴重に掛けますよ』

私からは問題無く、スキルの情報とその内容が閲覧できているけれど、蜘蛛子ちゃんからは何が書いてあるのか欠片も理解できないように、厳しく遮断されているようだった。

『もちろん獲得した本人にも、内容を口外することを禁ずる制約が掛かるようにしましたから。苔さんに聞いても無駄ですよ。何かあっても話すことも伝えることも出来ません』

ふと試しに、念話で蜘蛛子ちゃんに冒頭にある、さわりの一文を伝えようと思ひ浮かべる。

けれど思ひ浮かべて蜘蛛子ちゃんに語りかけてみようとしたが、蜘蛛子ちゃんは一切何も反応を返さない。

まるで私が何も喋っていないかのように。

『……おーい、コケちゃん急に黙り込んでどうしたの?』

蜘蛛子ちゃんが心配そうに私を小突く。

それを見て、掛けられた制約の強さを、身を持って理解した。

『ううん、何でも無いよ。色々凄いものだったから驚いちやって』

『ほおー?』

このくらいボカした事なら言えるみたい。

そして私は蜘蛛子ちゃんの質問を躲し続けていると、ほんの少し仲間はずれにされていたスマホから不満げな声が聞こえてきた。

『私がいること忘れてませんか? これは蜘蛛自爆ボタンを押して、お邪魔虫を排除するしかありませんね』

強権を持ち出して、無理矢理に話を引き戻したDは、再び質問と説明を受け付けていった。

管理者を敵と見ている勢力の存在、転生先が相性であり大半が人族に転生していたこと、それをさらに深く追求してみると一部は変な転生先になるように適当に処理を施したということ、最後の最後に——他の転生者はまだ赤ん坊が殆どであるということ、最後の最後に——自身は現代日本の快適な環境で優雅に暮らしていることをこれでもかと言うほど煽られて……

『まあ冗談はこれくらいにして、あなた達のこれからを期待していますよ。特に蜘蛛さんは彼女に勝てることを祈ってます。願わくばもっと私を楽しませてくださいね』

『いつか、そのツラ引っぱたいてやるからなー！』

蜘蛛子ちゃんが前脚上げたポーズで威嚇して怒りを顕にしている。

そしてスマホに視線を戻すと最後に一言残して消えていった

『では、また』

フツと、最初から何もなかったかのように痕跡も残さず消える。

結構長々とお喋りしていて、いつの間にかかなりの時間が経過していたことに気付いた。

蜘蛛子ちゃんは怒り滾らせながらも緊張から解放され脱力するといった、絶妙に矛盾したことをだらけきった姿勢にて、イライラを表現していた。

私は何も無くなった地面を見て目を閉じると、蜘蛛子ちゃんとの話を切って、誰にも聞かれないように、そつと心のなかで呟く。

若葉

またね、——さん。

——はい、ではまた。

脳内に響いた声は、不思議と酷く綺麗で楽しげな音だと、そう感じた。

蜘蛛5 魔王

コケちゃんとは別れて数日が経った。

別に喧嘩したとか意見の相違とかがあった訳ではなく、別行動したほうが良いとお互いが思ったから、今こうして私一人で行動している訳だ。

進化したあの後、私たちは中層でマザーとその配下に対しての作戦を練るため籠もっていると、コケちゃんのほうに救援要請が入った。

私たちが対策を考えている間にマザーは迷宮に戻り、配下の蜘蛛たちにある命令を下したみたい。

それは下層に生息しているコケダマ種の群れを散発的に襲撃し、けれど全滅させることはなく常に少しの出血を強いる程度の攻撃を繰り返して、ずっと群れの近くにアーク級の蜘蛛を付かず離れずの距離で貼りつかせるという、コケちゃんに対して効果的な嫌がらせを実行してきたのだ。

コケちゃんが統率した群れは度重なる襲撃に対処が出来ないと助けを求め、私たちはすぐさま駆けつけたんだけど、私の姿をみるや一斉にコケダマたちを無視して襲いかかってきたんだよね。

しかも隣のコケちゃんすら無視する勢いで。

まずは引き離すべく距離を稼ぎながら戦っていたんだけど、次々と増援がやって来るは上層で戦ったパペットの別個体すら集まろうとするわけで、大騒ぎ。

コケダマたちを気にしながら戦うコケちゃんと、そんなの関係ないと駆け回る私では、段々と距離が離れていって、結果的に私が引きつけるだけ惹きつけて、コケちゃんとも群れとも距離をとったところで転移を使って逃走した。

一応引きつける前に作戦を伝えてから離れたけど、私が居なくなっただけからは襲っていた蜘蛛は全て私の追撃について行って、ガランと静寂に包まれたらしい。

それからは私を見失った蜘蛛たちが戻ってきたらしいけど、包囲するだけで近づいてこず、ずっと監視してくるようになったとのこと。

それは相当強かったパペットタラテクトすら例外ではなく、それだけマザーの警戒の高さが伺える。

コケちゃんをずっと群れに貼り付かせて、私と一緒にさせないための作戦だとわかったけれど、それをどうにかするには私たち2人の力を合わせても難しいと感じた。

コケダマらを攻撃されればコケちゃんは無視することが出来ないし、もし見殺しにしたとしても戦っている最中に包囲されて、今度こそ逃げられない密度の敵と戦うことになるだろう。

そうなるとうしろも無いし、コケちゃんだけなら蜘蛛たちは襲ってこず移動しても道を空けて進路を譲るので、コケちゃんのほうは監視には刺激を加えず群れを維持するための狩りを行って、他にも襲われているかもしれないコケダマたちを回収しに行くと言う。

私は、そんなコケちゃんの負担が下がるようにマザーと人形蜘蛛を避けて、その他蜘蛛軍団にゲリラ戦を仕掛けることにした。

主に上層に隠れ潜んでは隙を見せたやつを各個撃破していき、常にコケちゃんとは遠く離れた所で姿を現していく。

そうすることで貼り付いている人員を割いて広範囲をカバーしなければ私を捕捉出来ないし、それだけ私の対処に余力を削がれればコケちゃんに掛かる負担も減るだろうと思ったから。

そう言うことを私たちはときどき話し合いながら、離れ離れで各自出来ることを行っていた。

え？ 念話じゃ遠く離れたコケちゃんと会話出来ないって？

引き離された後、頑張って念話のレベルを上げて遠話に進化させたんだよ。

そのために適当に集めて動けなくした関係ない魔物たちに、鬼のような念話を掛け続けてレベル上げをした。

どうせ会話できる知能の無い魔物だしね。

何度も鳴り響く念話受信であいつら外道耐性獲得していたけど、気にしない気にしない。

最後にはみんな仲良く、私のお腹の中に行ったし。

そんなわけでマザーの手駒とハイドアンドシークしながらブツ殺

していると、灼熱すぎて誰もやって来なかった平和な中層にやって来たんだ、マザーが。

まったく、そんなに私のことが好きか。

熱心なストーカーからは逃げるに限るので、コケちゃんにマザーのことを伝えてから旅に出ることにする。

『……わかった、出来る限り大通路に近づかないように気をつけるね。蜘蛛子ちゃんも気をつけてね』

『りよーかい。なんか良いものあったら転移で送るから、期待しててね』

とりあえず最初は上層に行つて、マザーの置き土産を処理してからだけどね。

蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛……

イヤー、これ集合体恐怖症にはきついっしょ。

一体何匹産んだのやら。

そしてそれを鼻歌を歌いながら刈り取っていく私。

よわつちいなあ。

この貧弱な蜘蛛から強くなった私が、如何に規格外かよく分かる。

こんな吹けば飛ぶような雑魚から進化できるのって、ほぼいないでしよ。

それこそゼロが何個も並ぶような確率を乗り越えた先に、ようやく1匹進化とかそんなレベル。

そんな悲しい宿命を背負った弟だとか妹だかに同情するけど、容赦はしない。

プチプチ潰れていくスモールタラテクトを虐殺していると成体のタラテクトとかが駆けつけるけど、人形蜘蛛レベルで無いのなら等しく始末する。

だつてねえ。

グレーター程度では私の相手が務まるかギリギリというレベルだから、それ以下の蜘蛛なんて幾ら集まっても怖くもなんとも無い。

アークタラテクトですら、転移を組む時間さえあれば封殺できちゃうのだから私を止めるには……、ほら来た。

凄まじいスピードで向かってくる人間大の強者の反応。

明らかに以前見た冒険者や騎士とは別物の動きをするので、一発で特定できちゃう人形蜘蛛。

もしかしたら、そんな動きができる人間がいるかもしれないけど、あの精鋭っぽそうな人ですらアレだから、この世界はきつと人に優しくない世界だと思う。

まあ人の悲しい宿命も私には関係ないので、さっさと逃げることにする。

じゃあな！ マザーにパペット！ それに1人で勝手にすまないコケちゃん！

今、私は再び外へ旅立つのだ！

そして私は迷宮の外を歩き回って転移可能範囲を広げながら、ときどき迷宮のどこかに転移しては通り魔活動を行い、捕まる前にさっさと転移で遠く離れた外に逃げるとい生活の繰り返しだった。

マザーが再び外に出てくることは無いと思っていたけど、人形蜘蛛はいつでも襲ってくるのかわからないので、周囲の警戒は常にしていた。

上層で戦った個体と下層に出てきた個体は別個体であり、上層の方ではコケちゃんが戦った後に反応が消失したので、多分撃破出来たんだと思う。

なのに、下層にも現れたってことは他にも複数あの人形蜘蛛がいるってことで、それがあと何体いるのか強さはどれほどなのか、まったくわからないのが痛いところだね。

だからこそ周囲の警戒は怠れないし、もしそれが束になって襲ってきたらどうしようもないので、常に位置取りに注意しながらチクチク嫌がらせをしていた。

迷宮の外でも突然、「人形蜘蛛 が あらわれた！」ってされてもおかしくないの、なかなかゆっくり休むのが難しいけれど、それでも途中で見つけた甘味や食材を美味しくいただきながら、私はようやく海まで辿り着いていた。

一応巻き込んだら悪いと思うので、人がいそうな場所を避けて森の中をずつと歩いてきたけれど、それらに出会うこと無く海岸線へと辿り着いた。

今はそれに沿って進んでいるけど、片方見晴らしのいい海であるので、多少は警戒が楽になり、砂浜とか切り立った崖や岩場に小さな足跡をつけながら私は進む。

なんとかマザーの精神を削りきれば私たちの勝ち。

私が捕まり死ぬ、もしくははなりふり構わなくなったマザーがコケちゃんを襲って死んじやつたら、それも負けになる。

唯一の懸念事項である、コケちゃんの安否に不安が募るけれど、コケちゃんが見捨てられない以上意地でも離れないだろうし、こればかりは何が起こるかわからない。

そのためには、一刻も早くマザーを撃破するのも大事だけど、コケちゃんに負担が行かないように挑発し続けるのが一番かな。

そうして私はテクテク歩く。

毎日ときどき迷宮のいたるところに顔を出し、常に居場所を攪乱しながらアークタラテクトなども狩りつつ戦力を削っていく。

そして迷宮の外では、それなりに警戒していたけど、のんびりと景色を楽しみながら歩いていく。

「^{後少}***……………」

ザバーン、ザプーン。

輝く太陽。

爽やかな海の香りが胸を刺激する。

なら出すとこ出して海に飛び込む、生足魅惑の蜘蛛がプカリプカリ。

たわわになったお腹を海に浮かべ流される蜘蛛は、本物の鯉……もとい恋が出来るのか。

ああ、今どこから私の魅力に釣られてきた、水竜の煩い叫び声が……

——やかましいんじやい！

今まさに大口を開けて噛みつきこうとしていたサメみたいな水竜に魔法を撃ち込む。

幾度となく襲ってきて、そのたび全てを返り討ちにしてきた私の周囲には、無数のサメの死体とドス黒い血の海が広がっていた。

はあー、ないわー。

どうにも私の蜘蛛ぼでは水に浮いて沈まないもので、どうあがいても不格好な犬掻き泳法しか選択肢がなく、それすらまともに水を掻けなくて殆ど流されているのと変わらない泳ぎ方だった。

一応頑張れば潜れるし高速で水面を進めるけれど、気を抜けば急速浮上するわ、水面泳ぐより空間機動で水面走ったほうが速いわで、コレジャーナイ感がすごいんだけど。

しかも海にいと、威圧も使っているのに何故か襲われる。

あきらかに格上で敵いそうなのに、そんなの関係ないと襲いかかってくる姿は、いつかの猿を彷彿とさせる。

こいつらも特定の条件で、自身の命すら惜しまず襲いかかる習性があるみたいで、それは海に浮かんでいることが条件だった。

海に浮かんでいるものなら何でも襲いかかるみたいで、海の領域に部外者が踏み入るとたちまち集まって来て群がろうとしてくる。

しかも血の匂いにも引かれるのか、1匹殺せばさらに遠くからも集まってくるという悪循環。

こりや海水浴なんて出来んわな。

どうせなら、マザーのことが終わったらコケちゃんとのんびり海を楽してみたかったけれど、こんな血腥い海水でキヤツキヤなんて出来るわけ無いでしょう。

それにコケちゃんのほうも泳げるか怪しい身体だしね。

あんな比重の軽そうな身体に、空気を含んだ柔らかい苔で覆われているコケちゃん。

そんな身体で海に入ったらどうなる？ 私と同じ、いやそれ以上の

泳げなさだろう。

コケダマ時でも水に浮かぶはずだし、ほぼ球体で全身隈なく覆われている以上もつと酷い絵面になりそうだ。

いや海をプカプカ浮かぶマリモと考えれば、意外とアリなのでは？ そんなしようなないことを考えながら海を漂っていると何度もサメに襲われるので、適当にぶつ放してから陸に上がった。

はあ、散々な海水浴だったよ。

塩気でベタついた身体を、水魔法を頭から被ることで洗い流していると、最近存在を忘れかけていた並列意思から連絡が繋がった。

『今すぐ逃げろ！　そしてコケちゃんにも連絡しろ！』

なんだって？　周囲にはマザーや人形蜘蛛の姿なんて無く、見渡せる周囲には一切の生き物の気配すら無いのに。

『連絡している暇は無い！　けど、簡単に言うとな今そつちに化物が向かっている』

マザーより上!?

『いいから、さっさと逃げろ！　そしてすぐ連絡するんだ、この世界には魔——』

空気が一瞬無くなる。

轟音が鳴り響き衝撃波が私の身体を突き抜けて、それだけで大ダメージを負って海岸線を転がる。

「*****」

何が起きた？

まるでミサイルが打ち込まれたかのような土煙を、ただ着地しただけで引き起こした存在の人影が、巻き上がって漂う土砂のスクリーンに映る。

転移、じゃない。

ただの移動で私の感知範囲外から一瞬でやって来た相手は、その勢いのまま着地しただけであり、そこに攻撃の意思を乗せなくとも周囲を更地に変える程度には破壊力を宿していた。

《鑑定が妨害されました》

ええい、叡智様、突破しろ！

18 王と魔王

『贖え、贖え、贖え……』

大地が荒廃していく。

空気が澱み、海が枯れて生物には適さない環境に穢れていく。

天変地異も生温いような大災害が世界各地で起こり、人も動物も魚も鳥も虫も植物も、別け隔てなく皆死んでいく。

そして、最後には星が砕けて――

『神、とは……』

『システム……、星の再生……、女神を生贄に……、魂を……』

……また、気絶していたの、かな？

私はDから受け取ったスキル「神仰」の内容を知り、そのために必要な能力を鍛えるために、自分の身体も顧みずに修行をしていた。

その過程で何度も死にかけてし、何度も気絶するほどの苦痛を味わったけれど、そこまでして得られた成果は、切っ掛けを掴めそうかどうかという程度だった。

むずかしいなあ……

元々、そういうものが無いのが当たり前だったから感覚を掴むのに苦労するし、この世界に来てから知って憶えたことも、実はほんのごく一部しか扱っていなかったことに、改めて目指すべきものの高さを思い知った。

私は家主さん改めレウキさんの背の上から身体を起こす。

周囲には私を心配して寄り添ってくれているコケダマたちの幼体が密集していた。

キュウー キュウ？ キュキユー キュー キュ キュー キュー

キユーー！

私が起きたことで一斉に鳴きだすコケダマたち。

心配掛けたことを詫びるように、彼ら一人ひとりに寄り添って翅で包み込んで撫でてあげると、とても喜んでいる思念が伝わってきた。

それを見て羨ましそうにしている成体のコケダマたちもいるけれ

ど、そんなことで近づいたらレウキさんに怒られるのがわかっているのか、遠巻きに見つめているだけだった。

私は再び周囲の状況を確認するため感知範囲を広げる。

群れの外周から500メートルほど離れた場所に、ポツポツとアークタラテクトやグレータータラテクトの反応を確認できる。

それらは距離を保ったまま一切こちらには近づいてこず、群れ全体が少しずつ動くのに合わせて、ジツと見つめてくるだけだった。

距離の変化はなし、アークは2匹ほかはグレーターが10匹ちよつと、パペットタラテクトはいない……と。

私たちを監視しているタラテクトらの動きが無いことを確認して、息をつく。

最初に蜘蛛子ちゃんと来たときは、パペットやアークなど強力な相手が多数潜んでいたけれど、蜘蛛子ちゃんと別れて私が群れの守護で留まり、蜘蛛子ちゃんは迷宮のあちこちに転移しながら攪乱を続けていると、広範囲に突然現れる蜘蛛子ちゃんを探すべくここにいた大多数の蜘蛛らが監視を止めて散らばっていき、残ったのは僅かな数だった。

パペットすら離れていき蜘蛛子ちゃんを追跡しているようだけど、普段は迷宮の外にいる蜘蛛子ちゃんを見つけられずにいて、かなりの量の蜘蛛を薄く広く配置して犠牲を覚悟で位置を探しているみたい。

そのため私たちコケダマの監視に割く蜘蛛が足りず、私たちが戦えば勝てる、けど群れにいくら犠牲も出る程度の絶妙な数だけ残して、姿を消していった。

流石に全方位から一斉に攻撃されると、被害無く戦うのは間違いない無理だったから、この采配には舌を巻くしか無い。

今日も変わらず監視しかしてこない蜘蛛らを見て、私は再び深い瞑想に入り込んでいく。

全ては切っ掛けを掴まなければ始まらないから。

……そして、後ほんのちよつとで触れそうで触れられないところで一旦休憩に入った。

一部だけスキルの補助を使ってズルをしているというのに、目標は果てしなく遠くて挫折そうになる。

けれど、諦めるわけには行かない思いがあるので、少しずつでも進んでいくしかない、わかっているのだから。

蜘蛛子ちゃん、コケダメたち、それと転生しているクラスメイトたちもかな？

私が大事なのはそれだけで、その他に関しては結局の所どうでもいい。

けれど、出来るのなら見捨てたくないのも事実で、出来る限り助けられるように頑張る、そのために力を得る、そして神様になる。

それが全てだし、それだけでいいのだから。

翅を震わせて凝り固まった身体を暖めて伸ばすと、私はステータスを開く。

そしてスキルのリストをゆっくり眺める。

そこに載っているスキルを見て私は、何度目かわからないため息を吐いた。

《人化(100000)…………》

《不死(100000)…………》

……これは、まだまだ獲得するのは難しそうだ。

途方も無い要求ポイントに目眩がしそう。

だけど不可能とは思えないのもまた事実で、実際征服込みの強欲でスキルポイントを貯め込んでいる強い魔物を狩り続ければ、いつかは達成できそうなレベルの要求ポイントでしかないのだから。

改めて謎のスキルこと、七大罪のスキルと対になっている七美德のスキルの異常さに、何も言えなくなる。

私の強欲。

蜘蛛子ちゃんの傲慢、忍耐、怠惰。

効果に差はあるけれど、どれも非常に強力な能力を有していて本当に可笑しいと思わざるを得ないスキルだと感じる。

叡智と神仰については別枠っぽいのでカウントしていないけど、これらも異常なのは変わりないスキルなので、これらも全部引つくるめ

た支配者スキルとは一体何なのか怪しく思う。

禁忌の獲得も充分ハイリスクだけど、それだけでは無い気がする。私の強欲の場合は取り込んだ魂の影響を受けて精神が崩壊する危険性があるし、蜘蛛子ちゃんのほうも何かしらのリスクがあるはずなんだけど……

特に影響を受けて無さそうなんだよね、4つも支配者スキル持っているのに。

本当に不思議でしか無い蜘蛛子ちゃん。

最初に会ったときはとても小さなモノだったのに、今では私と遜色ない、いや強度でいえば私より勝っているモノに変化していて、蜘蛛子ちゃんの異常性を表しているようだった。

……蜘蛛子ちゃんは、蜘蛛子ちゃん。

それだけで、良いと思う。

深みに嵌ってドンドン落ちていきそうだった気持ちを振り払い、前を向く。

今私たち群れ全体としては、最後のコケダマの群れと合流するため出来る限り狭い通路を選んでエルロー大迷宮の下層を進んでいた。

これまでに合流したコケダマの群れは3つ、残りの2つは向こうでそれぞれ合流したらしく1つの群れとなって集まっていたので、私たちはそこに向かい襲っているだろう蜘蛛らを追い返さなければいけないのであった。

それにしても最近蜘蛛子ちゃんから念話来ないなあ。私から掛けても反応ないし……

全体的に移動速度に優れないコケダマたちなので非常にゆっくりとした歩みであるものの、道中で邪魔をしてきた蜘蛛以外の魔物を蹴散らしながら進み、ついに全てのコケダマたちと合流した。

そこまでの間に、私がカバール出来る範囲を越えて注意が向いていない群れがあったり、大通路を進まなければならずクイーンタラテクトと遭遇する可能性が高い道も通ったというのに、蜘蛛らは一切直接的に群れに干渉してくることはなく遠巻きに見つめてくるだけであっ

た。

色々と隙をわざとも含めて多く見せたのに、何事もなく辿り着けたことに少し不安に思ってしまう。

気のせいだといいのだけど……

そう思ってしまう時点で、嫌な未来は確定していると予感してしまっただけ、そのときはそのときでしかない、諦めにも似た覚悟をしておく。

最後の群れと合流した私たちだけ一応はやることであって、私たちを見てすぐ合流という訳にはいかなかった。

まずは、その群れを取り囲んで襲ったりしている蜘蛛らを蹴散らして追い払う。

基本的にグレーター程度のそこそこ強いのと成体のタラテクトしか襲いかかる役目を背負っていないので、私個人や総数がとても膨れ上がった群れなら簡単に追い払える。

そうして追い払った後は、それぞれの群れのリーダーから私のことを認めてもらわなければならぬ。

最初の、私が元いた群れを含む3つの群れは共に地龍と戦い、そこで力を示したことでそのまま認められて群れの主へと望まれた形だけど、他の群れから認められるには何かしらの能力を示さなければならなかった。

リーダーと戦うこと、統率能力を示す、傷を癒やしてあげる……等々、何かしらのことをして主に相応しいと証明する必要があった。

それらも大事で重要だったけれど、彼らから認めてもらうために一番効果が高かったことは……

トウー、ラー、ラーラーラッラー、ラー、ラー……

全ての群れの中心で唄う私。

それを静かに聴いている無数のコケダマたち。

このときばかりは蜘蛛らも静かに耳を澄ましている、それだけ種を越えて認められているってことだけど、事あるごとにせがまれるようになったのは嬉しいけれど少し大変。

いやそれ以前にどうやって歌っているんだって思うけれど、魔物だ

からか発声器官というものも一応あったし、虫の中には翅を使って音をだす種類もいたのでそれっぽいことも出来なくはなかった。

波の音のような静かなけれど心安らぐような音色を翅で奏で、口では遠くまで響き渡るような澄んだ高音を唄う。

それは岩だらけで広大な迷宮に反響して響き渡り、乱反射した余計な音はコケダマたちの吸音性の高そうな身体に吸い込まれていく。

何もなく光すら無い暗闇の世界が、このときだけはたった1人が美しく唄うためのコンサートホールになる。

そして最後のサビに入り、高らかに歌い上げてフィナーレを迎えた。

ラアアア、ラアアア……………

キューキュー!! キュオー! キュウウ! クワアアアツツ!!

一斉に歓喜の思念が沸き起こるコケダマたち。

それは濁流のように押し寄せてくるものの、嫌な気持ちは欠片もなかった。

私はお辞儀のように、くるりと一回転して翅をヒラリと揺らす。

それに、より気持ちが高まりはしやぎだすコケダマたちだったけれど、聞こえてきたアナウンスに私は耳を奪われた。

《条件を満たしました。称号「王」を獲得しました》

《称号「王」の効果により、スキル「召喚LV1」「眷属支配LV1」を獲得しました》

……………えっ?

自分を鑑定すると、確かに称号の欄に「王」と追加されていた。

そして周りを確認すると新たに加わった仲間を歓迎するように、コケダマたちが仲良く交流していた。

それを見て、システムとしてもコケダマたちから見ても、私が王として認められたことを理解した。

——やっぱり、なんとしても。

彼らを眺めながら、改めて決意を胸に灯すと、どこからか手を叩く音が聞こえた。

パチパチパチパチ……と乾いた音が鳴り響く。

こんな音を出せる存在は、コケダマたちにも周りを囲む蜘蛛らにも出せはしない。

音が聞こえてきた方向へ向くと、蜘蛛らが圧倒的な上位者に対して敬意を示すように道を空けながらひれ伏し、その間から小さな靴音をたてながら黒い髪の少女が歩いてくる。

黒髪に白のメッシュが入った少女は、どちらかと言うと小さい背丈で華奢な体つきなのに、一目見ただけで震えが止まらない。

突き刺さってくる悪寒で全身が逆立つ。

こんな迷宮の奥底でなければ、どこかの街にいそうな可愛らしい見た目ののに、何故かこんな化物が蠢く魔境にいるほうが相応しいと思ってしまう。

それほどまでに、目の前の少女から感じる隠された気配に戦慄した。

私が怯えて身を竦めていると、決死の覚悟を持ったコケダマたちが私と少女の間に立ち塞がる。

せめて、ほんの僅かな時間さえ稼げればいいと命を投げ出す意思をもって立ち向かうコケダマたちに私は一瞬声を出せなかった。

恐怖に震え悲鳴を上げる心では、僅かに反応が遅れ静止を願うのが遅れてしまう。

そして急速に接近した自滅覚悟のコケダマは捨て身の体当たりを行っただが、少女が片手を前に出し軽く押すような動きで何倍もの大きさを持っているコケダマの動きを止めてしまった。

掴まれて身動きが取れず逃れようとするコケダマを、そのまま軽いボールでも持つているかのように遠くへ放り投げた。

私の真横を通って後方へと転がるコケダマは、そこまで大きなダメージを負っていないけれど、ただの片手で圧倒した実力に警戒心が高い高まる。

なんとか正気を取り戻して覚悟を決めた私は、これ以上無駄な犠牲が出ないように襲いかかろうとしていたコケダマたちを止める。

そして私と少女が見つめ合うこと、一瞬あるいは悠久にも思える時

間を憶えた時、少女が口を開いた。

「*****、*****」

……言葉がわからない。

「いまだこちらの世界では、言葉を使う相手と会ったことは数えるほどで、それも相手から一方的だったり戦闘時に叫んでいただけで、私たちと直接会話して理解しあう機会なんて欠片もなかったので、わかるはずが無いのだけど……」

何も反応を返さないのはよくないと思うので、目の前の少女に念話を繋げる。

『えつと……はじめまして、こんにちは？』

日本語で語りかける。

通じないだろうと思いつつ語りかけた言葉に対して、少女は驚いたような反応をした後しばらくして何か失敗したことを悔やんでいるようなポーズをとった。

「*****、*****、*****、*****、*****？」

少女が何か捲し立てるように言う。

それは私に対してではなく自分に言い聞かせるような言い回しだった。

そして何度か言葉を吐き出すと、口を噤んで数秒黙り込む。

少女は一度深く瞼を閉じると同時に威圧感の全てを消し去り、ゆっくり目を開いて私に優しく語りかけた。

その内容は結局わからなかったけれど敵意というものは感じられず、何度か小さな声で言葉を言った後、背を向けて去っていった。

無防備に背中を向ける少女だったけれど、私は何もせず見送った。もし何かをしたとしても通用する未来が一切見えず、それで怒らせてしまえば今度こそ私たち全員が死んでしまう予感がしたから。

そして少女が片手をあげてそつと振り下ろす。

それを合図に私たちの周囲を取り囲んでいた蜘蛛たち全てが引き上げていき、後には私たちコケダマの群れのみが、ポツンと残されていた。

痛いほどの無音が広がる。

結局、一体何だったのかまるでわからずに全てが終わっていた、そんな空気が流れていた。

そして私はゆっくり崩れ落ちた。

キュー!?! キュー キュー! キュキュー! キュウー!

.....

霞む意識のなか、柔らかな感触が無数に私を包み込んだことを、憶えていた。

19 人形遊び

謎の少女がやって来てからしばらくして。

蜘蛛らが引き上げて誰もいなくなったけれど、再び現れたり突然襲撃してくる可能性も考えて、私はコケダマたちと一緒に警戒を続けながら過ごしていると、私たちを訪ねてきた者がいた。

ゆっくり一歩ずつ歩いてくる白い身体の人形。

その背後には、同じく白色の巨大な蜘蛛が2匹。

先頭を歩く人形には真っ白な旗が握られていて、他の腕には何も持っていないと示すように大きく腕を広げていた。

背後の巨大な蜘蛛も敵意が無いことを示すためなのか、分厚い前脚の爪を上に向けて両手を上げているようなポーズだった。

そして群れまで後少しのところ、そのポーズのまま微動だにせず立ち止まった。

私たちは姿を見せてから最大限の警戒をずっとしていたけれど、何時間経とうとも一切動くこと無く、そこに立ち続けているのを見て、私は恐る恐る近づいてみた。

引き留めようとするコケダマたちの制止を振り払って向かい合うと、目の前の人形はペコリとお辞儀をして、再び微動だにしくなつた。

私は戸惑いながらも一切反応を見せない人形と蜘蛛を見て、しばらく警戒したものの結局何もしてこないことがわかり、仕方なくそこにいることを認めた。

そうしてパペットタラテクト1人とアークタラテクトの2匹が、群れの隅に居着くことになった。

人形と蜘蛛がやって来て数日。

新たに加わった群れのリーダーにも名前を与えて、メリテ、イア、ロデア、カリロエ、それに副リーダーの子にも、メロ、ティケ、オキロエ、ロド、プルト、ガラク、パラス、アルテと、それぞれ突然脳裏

に浮かんだ名前を元に付けて回った。

アークのほうは片方ずつ時々起き上がっては離れていき、何か獲物狩ってきて食事をしていることがあるけれど、パペットのほうは食事すら一切せずに体育座りの姿勢のまま、何日も何日も動くことはなかった。

それを見て私は空納にしまっていた食糧を取り出して近づいていく。

特に何もしていない、ただ適当に切り分けただけの美味しくない魔物肉だけど、何も食べずにジツとしているのが、なんとなく不憫に見えるから。

そしてお肉を抱えたまま羽ばたいて人形の前に浮かぶと、6本の脚で掴んでいたお肉を差し出した。

それを見た人形はオロオロと戸惑っているように見えて、受け取るべきか迷っているような素振りを見せた後、長い時間を掛けてようやくちよこんと手を伸ばして受け取った。

……不気味なマネキンなのに、なんか可愛く見える。

受け取ったのはいいものの、そこからどうしたらいいのか迷っている様子なので、食べてもいいと、お肉と口を交互に指差した。

そうすることでようやく、これが自分に向けて贈られた食糧だと理解して、乱雑に切り分けた魔物肉を掴んで引き千切り小さくすると、人形の口に当たる部分を大きく分離するように開いて、その中にお肉を押し込んでいく。

腕が喉奥深くまで差し込まれていて凄く変な光景なのだけど、なぜかコミカルでクスツとするような印象しか感じられなかった。

感知能力を高めて内部を覗く。

すると人形内部にいる本体の小さな蜘蛛——それでも地球基準だと大きめの蜘蛛が喉を通って本体まで届いたお肉を受け取るとチマチマ齧って食べ始めていた。

自分の身体より大きなお肉にしがみついて少しずつ削り取って食べていく姿を見て、少し多かったかなと思いつつも、可愛いペットとかに餌付けをしているような気持ちになっていた。

そして残すこと無く全て食べ終えたものの少し苦しそうに膨らんだお腹を抱えている人形蜘蛛の本体を見て、私は離れることにした。彼？もしくは彼女が、ふわりと羽ばたいて飛んでいく私の姿をぼんやりと眺めているのを背で感じながら、私は群れの中心に戻っていた。

そして再び一人になった人形蜘蛛は、さつきと寸分変わらない体育座りのポーズに戻ると、また同じ姿勢のまま動くこと無く停止し続けた。

その内部では、本体の蜘蛛がソワソワと群れの奥へ視線を向けていた。

再びさつきの子がやって来ることに、心の奥底で期待をしながら。

群れの中心に戻った私は、周囲の警戒を引き続き指示した後、瞑想に没入していった。

いまだ「神仰」が教えてくれた入り口にすら立てていなかったけれど、ようやく1つの成果が表れようとしていた。

息を大きく吸って集中する。

空気の流れとともに、自分の内側、魂にある力を、自分本来の感覚で掴んでいく。

そして揺れ動く力に触れると、それを乗せて言葉を吐き出す。

トウー……

——土よ。

力を乗せて発した言葉は、形を成し組み上がり繋がりあって、世界に創造による変化を齎した。

目の前の真っ平らな何も無い地面、それが僅かに盛り上がっていき小山を作っていく。

ジワジワと土塊が動いていき、ほんの握りこぶし程度の土の塊が出来上がったとき、私の胸中に襲来したのは表現できないほどの、とても大きな歓喜であった。

……つつ!! やつつつ、たあああああああああああつ!!!!

初めて、初めてスキルの補助なしでの魔法、いや魔術が成功した。今までは、スキルの補助つまりこの世界を覆うシステムから手助けをしてもらって魔法とかを扱っていたけれど、本来それは歪なもの。そこから真に迫るには、自力で魔力いや魂のエネルギーかな？ それを操れるようになり、魔術という形へと昇華出来なければ、何の意味もないことを知ってしまった。

だからこそ、この世界に転生してから獲得したスキルを封印し、ひたすら自分の魂を理解し把握するための拷問のような修行を行って、今その神秘に指が触れたのを感じたのだった。

ハッ、ハアツ……、すうう……、ふう、良しっ。

高ぶった気持ちを落ち着かせて、再び自らの深淵に触れる、そしてそれを活動させる。

もう一度もう一度と、同じような土塊を作り上げて、それが何十個にもなったとき集中力の限界が来て、前のめりにフラリと倒れ込んだ。

土の小山の山脈に突っ込み土煙を巻き上げた私を、慌てて心配し寄り添うコケダマたちに包まれながら、私は緩やかな喜びに浸りながらまどろんでいた。

これで、ようやく進める……

届いた神秘を忘れないように、思い返しながら自分の魂にそつと触れる。

夢うつつでコケダマたちに運ばれていると、頭の中に声が響いた。

《熟練度が一定に達しました。スキル「神性領域拡張LV7」が「神性領域拡張LV8」になりました》

《条件を満たしました。スキル「神仰」の第二段階が解放されました》
……なんて酷いスキルなんだろう。

安らぎに浸っていた心が強制的に追い立てられる。

その内容を読んでしまった私は、再び覚悟を迫られた。

……それでも私はやるって最初に決めたこと。

なら、そのための犠牲も全て背負って進むしかない……

新たに示された使命に、どんよりとした気持ちが流れ出しながら私

は想った。

どうか、犠牲になった人にも救いのある未来を迎えられる、そんな世界を描きたいと。

さつきまでの歓喜が一気に消え失せた心を抱えたまま起き上がる。急に雰囲気が変わった私を不安そうに見つめるコケダマたちに、何でも無いよと撫でて安心させると、私は飛び上がった。

その身体にシステムが与えるものとは、別の力を纏わせながら。少しずつ、ゆっくりでも置き換えていかないとね……

そして羽ばたきながら何度目かわからない念話を繋げようとする。

……また、繋がらない。

いったい蜘蛛子ちゃんは何処で何をしているのだろうか。

最初は応答しない感じだったけれど、今はそもそも繋がりがすらしな
い。

どうも距離が離れすぎて、今の遠話でも繋がらない距離にいるのか、もしくは異空間？

異空間や空間魔法に関しては、飛び抜けて上手い蜘蛛子ちゃんなら、可能なのではと思いついたことだけど、連絡出来ず確認しようもないので結局何もわからないまま。

そうして群れの中央で魔術の感覚を高めている時に、再びあの少女が疲労と焦燥を顔に滲ませてやって来た。

少女に気づいたパペットとアークは大慌てで彼女の元に向かい、背後に控えるように身を縮こませた。

頭を抑えながらイライラした雰囲気撒き散らしながら歩いてくる少女は、私の前に来ると、ドカリと荒々しく座り込んだ。

そして何か語りかけてくるけれど、やはり内容はわからないので、言葉と念話の会話は成立していないまま。

私は、頭を抑えながらブツブツ呟き続けている少女の前に降り立ち、土魔法で地面を柔らかな土質にして滑らかな平面を作った。

それを見て警戒を見せる少女だったけれど、私がそこに無数の線を刻んでいくのを見て意図を察して、凜猛そうな笑みを浮かべた。

頭痛が酷いのかギラギラと瞳を輝かせながら、私と少女は絵での会話を始めた。

何度も何度も、描かれては消して、新たに描いていく。

全て絵と簡単な記号しか使えず、微妙にこちらとあちらではニュアンスが異なる記号で意味が伝わっていないようにも感じたこともあったけれど、何度も何度も描き重ねていくとで、お互いに思っていること考えていることが理解し合えていく。

そして……

私は、この世界に転生してきた元人間であること、この下層で蜘蛛子ちゃんと出会い、一緒に過ごしてきたこと、いろんな戦いを経験して生き残り進化してきて今の姿があること。

こうして再びコケダマたちみんなと出会って、私が主として王として祭り上げられたこと。

禁忌でこの世界の真実を知り、憂いていること……

そのほか言えるようなことは、色々と描いて全部話した。

目の前の少女からは、彼女がクイーンタラテクトの親であり、彼女はクイーンからの助けを求める声に応じて動き、蜘蛛子ちゃんを殺そうとし一度は確実に蜘蛛子ちゃんを殺したこと。

これには私も怒りがこみ上げて睨みつけてしまったけれど、彼女はそれを当然のことだと受け止めて流し、話を続けた。

殺したけれど蜘蛛子ちゃんは何故か死んでいなくて——たぶん不死のスキルのおかげで、生き残り今もおクイーンと配下の蜘蛛を襲っているらしい。

それを確認しに来た彼女も、蜘蛛子ちゃんからの魂への直接攻撃を受けるようになってしまい、今もこうして凄く苦しそうに頭を抑えていた。

何とか止めるために殺したい、けれどどんなに手を尽くしても捕まえられない。

なら、一緒にいた私から蜘蛛子ちゃんを止められないか、連絡などが出来ないか、僅かな希望を掛けてやって来たみたいだった。

目の前の少女の魂を見る。

そこには限界ギリギリまで張り詰めた魂に無数のスキルが貼り付いており、その上を這いずる白い蜘蛛の姿が見えた。

その蜘蛛は彼女の魂に取り憑き、今にも崩れそうな魂に虫食いと足跡を刻みつけていた。

言葉でしか聞いていなかったからどんなのか知らなかったとはいえ、これは酷すぎる手段だよ、蜘蛛子ちゃん……

彼女の魂に喰らいついた白い蜘蛛は、魂を貪り溶かしながらも蜘蛛自身も溶けていき、少しずつ彼女と蜘蛛が混じり合って境界線が崩れていくようであった。

——私の外道魔法では、蜘蛛子ちゃんを取り除けないし、彼女の魂を傷つけてしまう。

目の前に見えるのに、何も出来ない無力さに打ちひしがれる。

私が彼女にしてあげられることは何もなく、唯一出来ることは蜘蛛子ちゃんと連絡をとって、どうにか止めさせ和解させるしか方法がなかった。

目の前の少女の悲痛な姿に悲しみを覚えていると、今まで何度も連絡しても繋がらなかった蜘蛛子ちゃんから念話が来た。

それに応答すると、彼女は念話が来ていることを察知したのかムクリと頭を上げて、耳を澄ませていた。

『コケちゃん！ 無事?!』

『そっちこそ、今まで何度も連絡したのに一切出なくて、どうしてたのや?!』

互いに怒鳴り合うように会話が始まる。

『すぐそこに魔王がいる！ 早く逃げてコケちゃん!』

『何のことかわからないよ、蜘蛛子ちゃん！ 何で出なかったの!?!』

『いいから早く! ……いやまさか』

『蜘蛛子ちゃん……?!』

蜘蛛子ちゃんの言葉が止まる、そして。

『くそっ！ 魔王め！ コケちゃんに何をした!?!』

『えっ、あの、蜘蛛子ちゃん……?!』

『そこにいるんだろう!?! コケちゃんを人質にしたって私は止まらな

いからな！』

『あ……』

『絶対、あんたを喰らいつくしてやる、絶対にだ！　そのために人形蜘蛛、マザー、最後にはあんただ』

『蜘蛛子ちゃん……』

『首を洗って待っている、絶対に許さないから』

そうして蜘蛛子ちゃんとの念話が途切れた。

私から何度も何度も繋げようとしても、途中で絶ち切られて蜘蛛子ちゃんに届かない。

どうして、こんなことに……

失意に俯く私を見て、彼女は優しく私を撫でる。

そこには憐れみとか同情など、一つの言葉で表現できないような悲しみを浮かべていて、彼女自身も泣きそうな顔に見えた。

私がそつと彼女の頬に触れると、堪えていたものが溢れて崩れていく。

涙は流していない、けれど噛み殺した嗚咽は暗い闇の中に静かに溶けていった。

蜘蛛6 人形遊び(一)

生きてるって素晴らしい……

魔王が襲って来て粉々に粉碎されてから、何日経過したのかわからないけれど、少なくとも意識が戻ってから数日が経過した頃。

不死の効果でHPが0になっても死ぬこと無くHP高速回復によつて、海に飛び散った破片からジワジワと修復されていき、なんとか頭だけ復活したことで私は意識を取り戻した。

それからは大挙して襲いかかる水竜を返り討ちにし、それらを全て倒していると水龍までやってきて、なんとか逃げ回りながら引き撃ちすることで撃破しレベルアップ。

それによつて、ある程度身体がニヨキニヨキ生えてきて修復されたことで全身の復活に目処が立ち、残りの部分には治療魔法を掛け続けることで少しずつ再生させて、ようやく身体が元の状態に戻ることが出来たのだった。

身体が元に戻った私は長い海での漂流を経て、何日かぶりの陸地に足をつける。

やっと動けるようになった、地に足がつくって大事だったんだな。

頭だけ海に浮かび、自由に動くことも出来ず漂うのみの生活は充分すぎるほど味わったから、もう一回体験させられるのはノーセンキューで。

それにしても、だいぶ流されちゃったな。

叡智様のマップ機能によると、私は波に流され続けてエルロー大迷宮から遠く離れた場所まで漂流していたらしい。

そのせいで、遠話の通話可能範囲を越えてコケちゃんと連絡が取れないまま過ごすことになり、コケちゃんの方は無事かどうか気が気じゃなかった。

一応マーキングしておいた反応は消えていないから生きてはいるのだろうけれど、現在何をしているのかとか、細かい情報までは把握出来ないのが叡智様の限界だ。

それでも充分すぎるほど便利なので文句は無いんだけど、今この状況では不安しか感じられなかった。

バラバラに粉碎して私を殺したと思った魔王は、その後マザーの様子を確かめるためにエルロー大迷宮に向かった。

そしてマザーの様子から私がまだ生きていることに気づくんだけど、その後の行動が問題だった。

なんと魔王は迷宮の下層にいたコケちゃんの元に向かっていき、直接接触をして来たのだった。

その時の私は、なんとか頭が復活して意識を取り戻したばかりだったから、転移して駆けつけても何も出来ない状態だったし、念話も届かなくて大いに焦った。

結局は何もコケちゃんに危害が加えられた様子はなく、そのまま魔王は離れていったけれど、しばらくしてからコケちゃんの周囲に人形蜘蛛の反応が増えていた。

私を追いかけ回していた個体の奴が、常にコケちゃんの周囲に離れること無く居座っていて、どうにもコケちゃん自身もそれによって動くことが出来無さそうな感じだった。

危険がそばにいるものの一応は無事であることが確認できたので、私はそのまま漂流しながら身体を修復し、魔王とコケちゃんの動向に注意を払いながら遥か遠くへと流されていき、転移先の候補を増やしていくのであった。

そして今、身体が完全復活して自由に動けるようになり、海の方も私が暴れすぎたのか水龍に執拗に狙われるようになってきたので、追い立てられるように陸地へと上がっていた。

さーて、魔王は今何処にいるのかなーと。

ふむ、現在は海上を移動中と。

私を吹き飛ばした現場を調べて海に逃げたと確信し、そこから海上を風潰しに探し回っているようだった。

そこから私が何処に流されたかはわからないようで、地道に足を使って探している。

まあその足が、音速を軽く突破して走り回っているんですけどね。

しかし、今なら迷宮には魔王はいないし、人形蜘蛛もコケちゃんについているから安全にマザーの配下を潰し回れるチャンスだった。

よし、一刻も早くコケちゃんを解放するために、私、張り切っちゃうぞー。

そして迷宮に転移した私を待っていたのは、私が一度も見たことも鑑定もしたことがないマーキングされていない人形蜘蛛の集団だった。

待ち構えていた人形蜘蛛らは、武器を手に襲いかかる。

ぐわー！　なんでー!?

そして私はコケちゃんに連絡する暇なく、命からがら逃げたしただった。

実際不死がなかったら死ぬレベルの怪我を負いつつも、なんとか全員を鑑定してマーキングを施し、意識が無くなる前に転移で遠く離れた海上に逆戻りしたのであった。

ああ、また首だけになっちゃった……

ときに森のなかを、ときに再び海を漂い、魔王からの追跡から逃れながら、再び蜘蛛のゆつくり生首生活を送ることになる私。

2度目の生首にも慣れたもので、治療用と迎撃用のMPの振り分けも上手く見極めて運用し、比較的早くに身体の修復を終えたのであった。

……ゆるさん、ゆるさんぞー、人形どもめ、お前らなんか私の経験値にしてやる！

そうして私は人形蜘蛛を倒す方法を考え、そのための準備をするのであった。

……コケちゃんのことを忘れるくらいには熱中して。

追跡する魔王と人形蜘蛛4体から逃げ回りながら、マザーの配下をちよつとずつ削っていきアークやグレーターの撃破数は相当の数に上った頃。

私はわざと袋小路の小部屋へと追い込まれていた。

ここに追い込まれるまでに私は人形蜘蛛の近くを走り抜け、それに

釣られて複数の人形蜘蛛が追いかけるように仕組み、結果コケちゃん
のところにいた人形蜘蛛は引き付けられなかったものの、迷宮の防衛に
回っていた5体と、それに迷宮入り口周辺を搜索していた1体が私が
追いかけてつこを演じている間に戻ってきて加わり、合計6体の人形蜘蛛
が私を追いかけて、まんまと罠に誘い込まれたのだった。

ふふふ、そーれ！ 大地魔法！

唯一の出入り口を塞ぐ。

それによつて私も出られなくなったけれど、それは人形蜘蛛らも同じこと。

これにより小部屋は分厚い岩壁によつて密閉された。

さあ？ 海水浴はいかがかな？

人形蜘蛛らが行動を見せる前に、私は空納に仕舞い込んだ膨大な量の海水を解き放った。

津波のように水を吐き出しながら、空気は吸引することで小部屋を減圧し気圧などが変わらないようにしていく。

それによつて瞬く間に水位が上昇し、小部屋全体を海水で埋め尽くしていく。

大量の海水に飲み込まれた人形蜘蛛らは押し寄せる水流と高すぎる浮力によつて、まともに泳ぐことも出来ずに、洗濯機に入れられた洗い物のように藻掻いていた。

前に海で泳いだときに気づいたことだけど、私の身体はものすごい浮力がある。

水に潜ろうとしても簡単に浮き上がってしまうほどの、中身全部空気なのではつくらいに、水とは相性が悪い。

なら他の蜘蛛の魔物もどうなのか調べてみた所、案の定浮き上がった。

となれば私よりも小さい人形蜘蛛の本体も浮いてしまうだろうと考え、今回の作戦を仕掛けたのだった。

内部にまで海水が浸透して、本体が呼吸も出来ずに藻掻いている。水に濡れてしまい糸の操作も鈍くなり、精細な動きは見る影もない。

常に水流を操ることで、体勢を整えようとしても目まぐるしく変わる上下に平衡感覚を失って、ロクにバランスを取ることも出来ていない。

それを私は小部屋の水底から魔法を人形蜘蛛らに放ちつつ眺めていたのであった。

一応高いコストを払って遊泳のスキルを獲得していたけれど、今私が水底に貼り付いていられるのは、あらかじめ仕込んでおいた糸を自分で絡ませて浮かないようにしているからだ。

床に薄く張られた糸に自ら踏み込み、触れた瞬間にその部分だけ粘着力を復活させて貼り付く。

踏み込むときに浮き上がってしまうけれど、それは遊泳のスキルでカバーして底から離れないようにして自由に水中を歩けるようにした。

強制的に天井に貼りつかされて、水流によってもみくちゃにされた人形蜘蛛らは手に持った武器が味方に当たって同士討ちも起きていたが、それだけでは決定打にはならず、私に向けて反撃の魔法を放ってきた。

それも予想済み……あいたつ、ちよつ、痛いってば！

いくら水底を動けるからって、全て避けられるほど自由に動けるわけではないから、何発か貰ってしまう。

けど、これでいい。

このまま私を狙ってパニックになってもらい、小部屋からの脱出を忘れてもらう。

そら、流木と軽石の追加じゃー！

私はさらに空納から、水に浮く物体を取り出して渦巻く水流の中に投げ込んだ。

水流に乗った障害物は勢いよく人形蜘蛛らに当たり、何度も何度も姿勢を崩させて対処させるべきことを増やし思考力を奪っていく。

完全にパニックに陥った人形蜘蛛の本体らは、空気を無駄に消費して吐き出しながらメチャクチャに暴れまわる。

それによつて人形のほうも手足をデタラメに振り回すけれど、その

動きは緩慢で力が上手く伝わっていなかった。

そんな動きでは、天井や壁など小部屋の破壊もままならず、周囲も確認せずに振った武器は味方の身体に叩きつけてしまうのであった。そして溺れ苦しむ人形蜘蛛らの姿を眺め、抵抗が弱々しくなっても容赦なく追撃を撃ち込み、ピクリとも動かなくなるまで攻撃を続けた。

レベルアップの通知が鳴り響き、念の為6体全部を1つずつ鑑定してみても、全て死体となつていることを確認した。

ステータスが高くとも、実力を発揮できなければこんなものか。

あれだけ厄介だった敵が、こうもあっさり殲滅されてしまうのを見て、相性や戦術によるハメ技の強力を改めて理解した。

今回は私が嵌めた側だけど、それを相手にもやられる可能性もあるわけで、魔王や他の相手に対しても油断しないように気をつけねば。

残りの敵は、人形蜘蛛4体に、マザー、魔王。

もう少し、もう少し待っててね、コケちゃん。

魔王が引き返してくるのを感じ取り私は、長距離転移でその場を後にした。

「クッソツッ……!!」
「*****!!」

転移先を増やすべく迷宮の外を散策していると、整備された街道に出してしまい他に避けようもないので、仕方なく人目につかないように街道沿いを進んでいた。

多少人に目撃されるかもしれないけれど、魔王から逃れるための避難先候補は増やすに限るので、ヒツソリコソコソと歩いていった。

今までは人気のない山や森ばかりだったから人の多い場所に潜伏しているなんて、魔王もすぐには思いつかないかもしれないし。

んー？ 前方で何か起きてる。

人通りが少なくて発見されることなく進んでいたけど、ついに人と出会ってしまった。

馬車と、それを囲むように複数の人がいるんだけど、どうにも様子がおかしい。

あれ、護衛じゃなくて盗賊？

馬車の周囲を取り囲む人たちは、4人が護衛で6人が盗賊のようで、馬車の内部にも3人ほど乗っていた。

こう見ると人数としては馬車のほうが多そうに見えるけど、1人はいかにも夫人って感じで戦いの経験なんて無さそうだし、もうひとりには赤ちゃんだ。

なので、実質戦えそうなのは馬車にいる男性も含めて5人だけであり、人数的にも戦力的にもかなり不利な状況だった。

あー、護衛やられた。

仕方ない、助けるとするか。

あんな赤ん坊が襲われているのに、見て見ぬ振りするなんて気分が悪い。

助けるのは面倒だと感じるけどさすがに可愛そうだと思うし、人間って経験値美味しいから悪いことしているやつを殺しても文句は無いよね？

私は経験値が美味しい、相手は迷惑な犯罪者が消えてハッピー。

よし、理論武装完了、いくぞー。

そして盗賊を軽く殲滅して、ついでに護衛の人にも治療魔法を掛けてあげたところで、馬車の中なら出てきた存在に目が点になった。

この赤ちゃん、私と同じ転生者だー!?

そして再びの転生者格差に打ちのめされて、私は逃げるように走り出した。

スキルとかスキルポイントとか生まれとか、どうしてみんな私よりいいもの持つてるのさ、ずるくなーい!?

強がりながら、私は再び街道を走り抜ける。

しばらく心で涙を流しながら進んでいると、大きな街に辿り着いていた。

……とりあえず近くの森に潜みますか。

再び私は迷宮に戻ってきた。

人形蜘蛛の半数を殺つたことで人手が足りなくなり、いまだ私の居場所を捕捉出来ない魔王は見当違いな所を搜索していた。

残りの人形蜘蛛らは全てコケちゃんの周囲に配置し、各個撃破されないように連携を取りつつ、持ち場から一定距離離れないように立ち回っていた。

このせいで人形蜘蛛を殺ることは難しくなっていたし、コケちゃんにも近づけなかった。

もたついている間に魔王も戻ってきて転移で逃げ出したけれど、その魔王がコケちゃんの元に向かっているのを見て、私は長らく大事なことを忘れていたことに気づいた。

……あつ、コケちゃんと一回も連絡とってない。

最初に連絡しようと迷宮に来た時は待ち構えていた人形蜘蛛に追い詰められて、連絡なんて取る暇なくボロボロにされて逃げ出し、その後は人形蜘蛛を殺るためにあれこれ策を考えながら身体の修復をしていたから、念話圏外をずっと彷徨っていた訳だしね。

人形蜘蛛を殺つた後も連絡する余裕はあつたとはいえ、魔王が引き返してきていたから直ぐに転移して離れちゃったし、私元々長らくボツチだったから会話しないのが普通なのでコケちゃんがない状況にも慣れてしまい、わざわざ連絡するということが億劫になつてしまっていた。

再び魔王がコケちゃんに接触していたので、私は気になり念話が届くギリギリの位置に転移してコケちゃんに繋がった。

『コケちゃん！ 無事!?!』

『蜘蛛子ちゃん!?!』

念話は何の問題もなく繋がった。

けれど、コケちゃんの様子がおかしく感じた。

なんか、やけに苛立っているような……?!

『そっちこそ、今まで何度も連絡したのに一切でなくて、どうしてたのや?!』

怒鳴るように返事が返ってくる。

そのことに不審に思いながら、私は伝えるべきことを言った。

『すぐそこに魔王がいる！ 早く逃げてコケちゃん！』

『何のことかわからないよ、蜘蛛子ちゃん！ 何で出なかったの!?』

『いいから早く!』

鈍い反応にイライラが募る。

私が伝えたいことは理解せず、質問ばかりが飛んでくる。

『……いやまさか』

私はふと頭を過ぎった悪い予想に取り憑かれた。

『くそっ！ 魔王め！ コケちゃんに何をした!?!』

『えっ、あの、蜘蛛子ちゃん……?』

コケちゃんが戸惑っている。

けれど、私は脳裏に浮かんだ予想を真実だと思い込み、激情のまま叫んだ。

『そこにいるんだろう!? コケちゃんを人質にしたって私は止まらないからな!』

『あ……』

『絶対、あんたを喰らいつくしてやる、絶対にだ！ そのため人形蜘蛛、マザー、最後にはあんただ』

『蜘蛛子ちゃん……』

コケちゃんの声が途切れていく。

『首を洗って待っている、絶対に許さないから』

一方的に宣戦布告を叩きつけて私は念話を切った。

コケちゃんから伝わるのを阻止するために念話のパスも繋がらないように完全に断ち切って。

そして私は、より苛烈に蜘蛛を殺り続け、魔王が不在の際にマザーまでも魂を喰らい尽くして滅ぼしたのだった。

20 追いかける者たち

蜘蛛子ちゃんと喧嘩別れのような絶交をしてから1週間以上経過した。

その間に蜘蛛子ちゃんは場所や時間を問わずに暴れまわり、迷宮内での蜘蛛の魔物の数は著しい減少傾向にあった。

そのことに頭を悩ませた少女——なんと魔王様らしい彼女は、私の周囲に生き残っているパペットタラテクトを全て集結させ何があっても撃破されないように集団行動を徹底させていた。

私はそんなパペットたちを連れてエルロー大迷宮の外に飛び出し、蜘蛛子ちゃんを捜索することになった。

なぜ私とパペットたちが一緒に行動しているのか、なぜ魔王様が私の勝手な行動を許しているのか、なぜ私がコケダマたちと離れ離れに行動しているのかとか、色々疑問はあるだろうけど順を追って説明していこうと思う。

あの後、魔王様から簡単な言葉や単語などを教わった。

それ自体は本当にシンプルなもので、自分やあなたとかの主語、よく使う動詞や名詞だけ教えられて、彼女は最低限の意思疎通が出来る程度には会話が出来るようになったらしい。

けれど私は、その予想を遥かに超える習得速度を見せ、いまだ片言ながらもおおよその会話が可能になる程度には、この世界の言葉をごく僅かな短期間で習得した。

記憶力が上がり忘れなくなる記録というスキルもあるし、集中や並列意思などのスキルの補助もあって学習能力は前世より格段に優れていたのもあって、言語の基礎などはすんなりと習得出来てしまった。

それだけでも簡単な会話はできるほどだったけれど、私が言語を理解できるようになった一番の要因は、以前上層の拠点を襲撃された際に取り込んだ人間の魂の記憶だった。

あの時は魂の洗浄が中途半端であり、取り込んだ際に記憶が混濁して混じり合い酔ってしまったけれど、その時にこの世界の言語につい

ての知識も一緒に取り込んでいたようだった。

その知識は使う機会もなく記憶の奥底に沈んでいたけれど、魔王様から言語の基礎を教わったことで眠っていた知識が蘇り、この世界で広く使われている人族語について知らぬ間に殆ど理解できるようになつていた。

結果的に魔王様とそれほど不自由なく会話出来るようになった私は、改めてお互いの実情を打ち明け合い、こちらから魔王様に対して協力を願い出た。

私は蜘蛛子ちゃんの暴走を止めたい、魔王様は蜘蛛子ちゃんという異分子を殺したい、けれど一度肉体を粉々に消滅させても蘇ってきたことから一筋縄ではいかない相手と認識していて、私も蜘蛛子ちゃんを殺そうとする事には猛烈に反対したので、一先ず和解の道を模索してくれるようお願いをした。

……ただ、蜘蛛子ちゃんが複数のパペットたちやクイーンタラテクトを殺害してしまったことよって、その道も厳しいものになつてしまつているけれど。

彼女ら——蜘蛛の魔物たちは全員メスらしい——を殺された魔王様は強い怒りを滲ませていて、とてもじゃないが許すことなど出来ない状態に陥って荒れ狂っていた。

それなりに彼女らと過ごしてきて、蜘蛛たちにも個性や愛嬌があることを知ってしまった私としても、蜘蛛子ちゃんの所業については素直に認められない気持ちを抱いていた。

そしてクイーンが殺害されたことを知り確認するために戻つてきた魔王様は、エルロー大迷宮の最下層で地龍の長とその取り巻きに足止めをされて、動くことが出来ない状況に陥っていた。

地龍らは蜘蛛子ちゃんを新しい風として期待しており、そのために蜘蛛子ちゃんを滅ぼそうとする魔王様に敵対するらしい。

そして新しい風の中には私のことも含まれていて、私が自由に動くこと自体は制限するつもりが無いということも彼らの口からハッキリと聞いた。

そうして魔王様は地龍らと戦うことになり最下層から動けなく

なったため、私は魔王様から預かったパペットたちと共に、蜘蛛子ちゃんを追うために迷宮の外に出てきたのだった。

本当は、パペットたちは監視役で、まだ警戒されているのかもしれないけれど、彼女から預かった以上、きちんと引張っていききたいと思っていた。

彼女たちをこれ以上殺されるわけには、いかないのだから。

大多数のコケダマたちは、クイーンがいた最下層の広場に残って貰い、あの場所を守ってもらうようお願いをした。

あの場所は極めて重要な意味を持つ場所であり、禁忌などから知った情報から推察すると、自ずと何があるのか理解していたため、守るための門番としてコケダマたちに残ってもらうように指示を出していた。

魔王様と地龍らは戦いながら遠くまで移動しているの、あの場所は空白地帯になってしまい、まず誰も来ることはない場所とは言え、あそこを守る存在が誰もいない状況はよくないと思い、コケダマたちをそこに配置した。

実力的にも色々と不安だけど、コケダマ種は基本的に速度が遅いから搜索に連れていけないというのも、置いてきた大きな理由だった。

必要な時は新たに獲得した召喚を使えば距離を無視して呼び出せるし、身軽な人員で揃えたかったのも本音だった。

そして迷宮の外で久々の陽の光に眩しさを全身で感じたら、私たちは蜘蛛子ちゃんを探すために行動を開始した。

—— 召喚、クリュー、ネイラ、アカスタ、アドメテ。

私はさっそく召喚を使って最下層にいた群れから、飛行能力を持つコケダマたちを呼び出した。

群れの中でも速度に秀でた個体の4人は、名付けしたことと合流するまでの戦いで進化しており、全員が飛行型コケダマの最上位種ラピッドグラスで揃えられていた。

呼び出したコケダマたちは私の周りをクルクル飛び回ると、私の正面に一列になってホバリングをし、指示が下されるのを今か今かと

待っていた。

私は彼らに地面に降りてきてもらうように指示をし、その場で待機してもらう。

地べたに伏せてもらったコケダマたちの背に、パペットたちを乗せる。

お互いに、特にコケダマたちは嫌そうにしているけれど宥めて回ること機嫌を直してもらい、私たちは空から蜘蛛子ちゃんの痕跡を探った。

遙か空高くへと加速し飛翔する私たちは、遮るものの無い上空1500メートル近くまで浮かび上がると、その高度を維持して飛び続ける。

構造的に私やコケダマたちでは高度を上げ続けるのはかなりキツイので、引斥魔法や風魔法などで補助を加えながら飛び、辿り着いた高空から万里眼で四方を見渡す。

同じようにパペットたちも落下しないように身を乗り出して、遠くを確認していた。

くう、空気も少し薄いけど、それよりも寒い……っ。

地上と比べて半分になった気温が、身体を蝕んで芯まで凍えていく。

迷宮の中では知ることの出来なかつた、この身体の意外な弱点を知り他のコケダマたちも辛そうにしているの、なるべく早くに手掛かりを掴めるように集中して遠くを見る。

そして軍勢というべき大集団の人達が複数の場所で見つかり、その流れがある1か所に向かっていることに気づいた。

南西、距離150キロメートルくらい先の平原地帯。

そこに向かって結集している各軍勢は、集団ごとに鎧の形状や色彩が異なっていて、それぞれ別々の所属であることが察せられた。

もし、蜘蛛子ちゃんなら――

禁忌を知ってしまい現在経験値を求めて暴走している蜘蛛子ちゃんなら、こういう時どう動くか、それを考えてみた結果、ほぼ確実に戦場に顔を出す可能性が高いと予測した私は、進路を平原へと向ける

ように指示した。

目指す場所を見つけた私たちは、徐々に高度を落としながら飛びやすい高さまで滑空する。

そして他の人らに見つかって騒ぎにならないように地面ストレスを飛びながら平原へと向かった。

蜘蛛子ちゃんと会ったら、私は――

私は、内心の迷いを先送りにしながら、ただ飛び続ける。

どちらもよく知っているが故に、どちらに味方するかを決断出来な
いまま。

森の木々を掠めるようにして飛ぶこと数時間。

そろそろコケダマたちにも疲労が見え始め何処かで休憩を挟もうと考えていると、前方に平原へ向かう軍勢の1つを発見し、このまま進めば衝突する可能性が高いと判断して、その集団から1キロメートル離れた森の中に降り立って休むことにした。

私は空納から魔物肉を取り出すと、長時間飛行して減ったSPを補給させるために全員に配った。

魔物肉を受け取ったコケダマたちは、私から貰ったこと自体が嬉しいのか、大して美味しくないお肉でも喜んで食べていた。

それをパペットたちもジーッと眺めているものだから彼女たちにも少しだけお肉を配り、各自それぞれ自由に身体を休めていた。

私も自分の分のお肉を取り出し、それを食べながら軍勢の様子を万里眼で伺う。

その集団の鎧は白色が基調で、所々に法衣にも似た装飾を付けた人が何人かいて、近くの兵士や騎士たちを指揮していた。

ある場所では、集団で祈りを捧げるように同じポーズで聖句のような台詞を唱えており、全体的に宗教っぽさのある一団だった。

そんな集団も、ちょうど休憩を挟むタイミングだったのか、足を止めて全体の動きが停止すると、周辺の土地を整備し始めていた。

私は、これならちよつと迂回すれば避けられたかなと思いつつ、軍勢の隅から隅まで見渡した。

すると、その集団には似つかわしくない幼い少年が1人混じっていることに気づき、その男の子が集団から少し離れた木陰に歩いていくと、そこに生えていた大樹に背を預けて大きなため息を吐いて座り込んでいた。

少し気になった私は、感知能力を高めて男の子の姿を見る。

鑑定をしなくてもおおよそのステータスを正確に測れる高精度な感知が伝えることが真実なら、その少年が今までで見てきた人間の誰よりも高いステータスを宿していて、明らかに普通の子供ではないことを強く感じていた。

その男の子のことがどうしても気になった私は、休憩や食事に夢中になっていて私に意識が向いていない隙にこの場から抜け出して、彼の元に飛んでいった。

迷彩がLV10になり派生した隠蔽など隠密に適したスキルを総動員して、コケダマやパペットたちにも、人の集団らにも見つからないように姿を隠しながら飛ぶ。

そして、少年が寄りかかる大樹の上に止まると、彼に向けて念話を繋げた。

『……こんにちは』

「っ!？」

突然脳内に響いた声に驚いて、少年は腰の剣に手をかけながら周囲を見る。

けれど頭上には注意が向いていなくて、必死に探すものの私の姿は発見できずにいた。

『ごつち、上、だよ』

「……喋る、魔物だつて?..」

私の姿を捕らえた瞳は、不安に満ちた表情ながらも強い芯のある光を宿していた。

そして剣に手を掛けたまま、私の一挙一動を見逃さないように神経を張り詰めていた。

『怖がらないで。私は、君と、話がしたいだけ、だから』

「魔物が人族と会話をしたいだなんて……」

少年は警戒を解くことはなかったけれど、戸惑いながら会話を続けてくれるようだ。

「あなたは、いったい……う？」

『私は、……まだ、ただの魔物。それだけ』

その質問には上手い返し方が思いつかなくて、はぐらかすような言い回しになってしまい、それを誤魔化すように、今度は私から質問をした。

『君は、なぜこんな所に、1人でいるの？』

「僕は……」

そして少年は、己の悩みや不安を少しずつゆっくりと吐き出していった。

流されるまま戦場に行くことを決めてしまったこと。

そこでは少年の存在は、やたら祭り上げられるけれど彼本人ではなく肩書を見られているようであること。

その肩書が勇者であり、その大きさに戸惑いと不安を感じていること。

そして周囲の人達との距離感に悩み、肩書の重さで押しつぶされそうになって抜け出してきたのだと言う。

それを聴いて私は、慰めにもならないと思いつつ口を開いた。

『勇者の、ことは、よくわからない。けれど、君が悩んでいることを、今ここで、聴くくらいは、してあげられる』

『私は、君が悩んでいることが、間違いだとは、思わない。勇者の、肩書には、それだけ重い意味が、あるのだと思う』

『なら、少しは休んで、ゆっくり考えるのも、大事だと思うよ』
私が言えることは、ただの逃避でしかなかった。

けれど、思いつめていた少年の顔からは強張りが取れていて、ほんの少しだけ気持ちが悪くなったように感じた。

「休んでもいいと、立ち止まってもいいと言うんですか？」

『そう』

そして私は、そつと後押しをする。

『ゆっくり考えて、君が信じたことを、そうありたいと願ったことを、

進めばいいと思う』

君が正しいと信じた道を進んで欲しい。

それがどんなに苦しいものだとしても、自分の正しさを嘘にしてはいけないのだから。

……これは、近い未来に罪を背負うことになる私に対しても、言つた言葉だった。

そして私は片側だけ翅を開くと、翅の1枚を根本から切り落とした。

切り離された翅は、重力に引かれて少年の目の前に落ちていき、彼は突然の私の自傷に驚きながらも、ふわりふわりと落ちてきた翅を受け止めていた。

『それを、あげるよ』

私は回復魔法を多重に発動させることで、根本から失った翅を目に見える速度で再生させていく。

1分も経たない内に翅の全てを修復させると、私は4枚の翅を震わせて飛び立つ準備をする。

『あげられるものが、そんなのしかないけど。でも、休んでもいいんだって、忘れないで』

そして私は木々に紛れながら少年の元から飛び立った。

姿の消えていく私に向かって、少年は翅を握りしめながら叫んだ。

「僕はっ！ 勇者ユリウス！ いつかこの名に恥じないように正しい道を探し続ける！」

少年の、ユリウスの声が木霊する。

「だから——」

その声は言い切ること無く途切れていく。

けれど、そこに弱々しさは無く、強い決意を感じられた。

『またね』

最後に一言だけ告げて、私は転移で姿を消した。

私と少年2人きりの大樹から、私がいなことに気づいたみんなが大慌てで混乱している森の中へと一瞬で移動する。

大樹の根本に佇む少年は、手に持った翅を眺めて空を見る。
そこには何もなかったけれど、頭上の緑の隙間から差し込む光の線
が、少年を優しく照らしていた。

21 ザトナの悲劇

先回りして平原地帯へ辿り着いた私たちは、戦場となる場所から少し離れた所に潜伏して戦争が始まるのを待ちつつ、ジツと息を潜めていた。

パペットたちを背に乗せて頑張つて運んでくれたコケダマたちは、一旦エルロー大迷宮の最下層に長距離転移で送り返していた。

それなりに大きく——グレータータータラテクトと同じくらいのワゴン車サイズはあるので、姿を隠せる木々などが少ないこの場所では、どうしても目立ってしまうからであった。

そして身を隠して待つこと僅か数日、戦争が始まった。

轟音、爆音。

荒々しい鬨の声と、劈くような悲鳴が鳴り響く。

もはや何処から聞こえてくるのか分からない程に、平原全体が荒れ狂い喧騒に満ちていた。

大人数が一斉に大地を駆ける足音の、重苦しい地響きが聞こえる。

前線でぶつかり合う兵士達の鋭い剣戟の金属音が木霊し、また一人また一人と鈍い湿った音をたてて崩れ落ちていく。

戦場に光芒が瞬けば、破壊力をもった超現象が発生し、人々を軽々と吹き飛ばしては命を奪っていく。

それを私は、遙か上空に浮かびながら見下ろしていた。

隣には、空間機動で足場を作ったパペットたちが並んでいる。

そして戦場の一角で、人の魔法能力では不可能な大規模破壊の爆発が起きると、その中心に蜘蛛子ちゃんの姿を確認した。

『見つけた……。パペットたち、少し待機、私が道を作る』

私は暴風魔法の広範囲殲滅術式を複数起動させる。

この魔法の威力自体は龍種に通用するほどの力は無けれど、戦場にいる人族の命を刈り取るには充分すぎるほどの破壊力を秘めていた。

——ごめんね。

私は、私自らの目的のために、人族の命を積極的に奪っていく。

《第二段階：人族1万人分の魂を生贄に捧げ、器を形成せよ》

これが神仰に指示された任務であり、これから私が行わなければならない虐殺の指示書だった。

そのおびただしい数を満たすには戦場に集まった兵士達はうつつけであり、平時にこの数を達成するためには、戦いとは無関係な人々も殺さなければならぬと覚悟していた。

だからこそ今この瞬間こそが、最大で最良の機会とも言える。

——嵐天魔法、龍風、多重起動。

無数の竜巻が、戦場を縦横無尽に暴れ回る。

地上に顕現した風の龍は無形の爪と牙を振るい、私と蜘蛛子ちゃんとの間にいた人間を血煙に変えて何も存在しない空間へと塗り潰しながら進んでいく。

《生贄の魂 4367/10000》

そして突き進む狂風は蜘蛛子ちゃんも巻き込んでいくが、それを蜘蛛子ちゃんは簡単に打ち消してノーダメージで砂埃の中に立っていた。

この程度なら、蜘蛛子ちゃんにも簡単に対処出来るよね。

離れ離れの間になくなった蜘蛛子ちゃんの力量を上方修正して、私たちは騒然とする戦場を飛び越えて、遠く離れた地面にポツンという白い影の元に向かう。

蜘蛛子ちゃんは慌てた様子で転移を発動させようとしているけれど、そうはさせない。

防がなければ大ダメージを負う威力の魔法を、容赦なく撃ち込み続ける。

予想通り、転移の構築を止めて回避と相殺に蜘蛛子ちゃんが集中しなければならなくなった間に、私たちはドンドン距離を詰めていく。そして距離が縮まると、いくつかのスキルを起動させる。

——乱魔の鱗粉、龍結界。

魔法を阻害する効果を発揮するスキルの射程圏内に蜘蛛子ちゃんを捉えると、私たちは逃さないように周囲を囲む。

そして一触即発の睨み合いになると私たちは口を開いた。

『……久しぶり、蜘蛛子ちゃん』

『ステータス的には正気……みたいだね、コケちゃん』

最初はお互い探り合うような雰囲気から始まる。

『どうして魔王なんかと一緒にいるのさ！』

蜘蛛子ちゃんが叫ぶ。

それに私は淡々と答えた。

『前に蜘蛛子ちゃんから魂への攻撃について聞いたけれど、それが本当はあまりにも悍ましくて嫌悪感を抱いてしまう方法だったことを、直接見て知ってしまったからかな？』

『んん……？』

蜘蛛子ちゃんは首を傾げている。

まあ、こればかりは魂の状態を見ることが出来なければ分からない感覚だと思う。

『だから私は蜘蛛子ちゃんを止めるために行動して、自分の意志で魔王と一緒にいることを選んだんだよ』

『……コケちゃんが正気で、あの魔王に協力しているのはわかった。けどー！』

戸惑いながらも私の立ち位置を理解した蜘蛛子ちゃんは、割り切れない感情を乗せて吠える。

『あいつは私のことを殺そうとしたし、一回粉々にされた！ なら戦うか逃げるかのどっちかしか無いじゃないか！』

蜘蛛子ちゃんは怒りを滲ませて極端な考えを言う。

『彼女は一度は対話を試みた、それを切り捨てたのは蜘蛛子ちゃんの方でしょ！』

『言葉が理解できないんだから、そんなのわかる訳ないでしょう!？』

お互いに叫び続ける。

そして――

『『こんの、わからず屋めっ!』』

すれ違う想いを燃料に戦意を滾らせ、互いの背後に術式を編む私たち。

それが爆発する寸前になった時、私たちは空間が揺らぎ誰かが転移してくるのを察知した。

この感覚は、あのときの黒い男の人の魔術……？

けれど空間を飛び越えて顕れたのは黒い男の人ではなく、今まさに渦中の人として言い合っていた魔王様その人だった。

「お楽しみの中にごめんね」

突然現れた魔王様は、*「日本語」*で語りだす。

横目で見た魔王様の魂は、もはや最初に出会った頃とは別物に変質していて2つの魂が溶け合い融合した結果、元々の魔王様とも蜘蛛子ちゃんの並列意思とも違う、別人とも言える魂に形と性質が作り変わっていた。

もう、あの時の魔王様は……

纏う雰囲気が変わってしまった魔王様は、私たちを結ぶ線が三角形を描くように間に立つと、以前の神経質そうな口調とはまるで違う、親しみを感じさせる柔らかな口調と笑顔で、ドロドロの想いを吐き出した。

「コケちゃんには悪いけど、とりあえずその異分子には一回死んでもらうわ」

彼女は蜘蛛子ちゃんに宣戦布告を突きつける。

顔には笑顔を浮かべているけれど、その瞳は笑ってはいなかった。

そしてお互いに譲れない想いを胸に抱き、私たちは動き出した。

魔王様が目にも留まらぬ速さで動き、蜘蛛子ちゃんに踵を振り下ろす。

それを蜘蛛子ちゃんはギリギリのところまで躲して魔法を構築しようとするが不発に終わり、それに戸惑っていると魔王様が踵を打ち付けた地面が爆散して、その衝撃によって吹き飛ばされていく。

魔王様が動き出した時に上書きするように展開された神龍結界が、さらに空間を塗り潰すことで魔法が殆ど発動できないレベルまで阻害する。

私は、魔王様の神龍結界には出力で負けているけれど対抗スキルと

して龍結界と神霊苔の2種類を発動して中和することで魔法への干渉力を維持する。

蜘蛛子ちゃんも対抗して龍結界を張るけれど1種類のみかつ、展開したそばから魔王様の暴食によって食い尽くされて効果を発揮できずに消滅していた。

魔法という遠距離攻撃を封じられた蜘蛛子ちゃんは防戦一方であり、回避するのにも全力を出さなければ一瞬で捕まり、そのまま止めまで持っていかれそうな猛攻に手も足も出せずにいた。

私はそれを上空から眺めながら、蜘蛛子ちゃんも魔王様も両方射程範囲に入っている高範囲かつ高威力の魔法を構築し始める。

2人とも巻き込むつもりで魔法を組み立てるが魔王様には耐性で無効化されてしまうだろうし、蜘蛛子ちゃんにしてもこの程度では瀕死にもならず不死のスキルを持っているから肉体的にいくら致命傷を負っても問題はないと判断して、遠慮なく魔法を眼下に撃ち込む。

パペットタラテクトたちは魔王様が現れた時にすぐさま戦場から撤退していて、魔王様なりに巻き込んでしまわないように命令したためだった。

太陽を背に私は戦場全域を確認して、この場にいる人族の人数と位置を把握していく。

そして、空高くから不可視の刃を振り下ろした。
物体を切り裂く力を帯びた無数の風が、戦場の至る所に落ちていく。

それは戦場を高速で動き回る蜘蛛子ちゃんと魔王様には殆ど当たること無く、ただその周囲にいたけれど運良く2人に巻き込まれること無く生き延びた兵士達の命を容赦無く摘み取っていく。

《生贄の魂 6674／10000》

《生贄の魂 8918／10000》

《生贄の魂 9710／10000》

2人が暴れまわるたびに、私が無慈悲に命を刈り取っていくたびに、戦場から人の気配が消えていき、十万近くいた兵士の姿が疎らにしか姿を確認できなくなっていく。

そして残り僅かな人影すら逃さず両断すると、ついに指示された条件を満たした。

《規定の魂を確認しました》

《熟練度が一定に達しました。スキル「神性領域拡張LV8」が「神性領域拡張LV9」になりました》

《条件を満たしました。スキル「神仰」の第三段階が解放されました》
《第三段階：大切なモノを自らの手で捧げ、神に相応しき魂を創造せよ》

《経験値が一定に達しました。個体、モフ・モフラスがLV48からLV50になりました》

《条件を満たしました。個体、モフ・モフラスが進化可能です》

無数のアナウンスが響く。

それを意識の片隅で聞いていると、荒れ果てた戦場で対峙している蜘蛛子ちゃんと魔王様のほかに、見覚えのある綺麗な青い服を着た少年が2人に向かって叫んでいた。

あの子は……

私は高空から急降下して加速する。

そして2人とユリウス少年との間に私が降り立つと、私は念話で蜘蛛子ちゃん魔王様両方に語りかける。

『彼は……、私が、引き受けます』

そして私が彼を引き受けようとした時、頭上から巨大な火炎と岩石の雨が、私たち全員押し潰そうと落下してきていた。

『くう……っ！』

私は、ユリウス少年を無理矢理抱え込むと、全力で離脱する。

腕の中で彼が暴れるけれど、麻痺と睡眠の状態異常を押し付けることで強制的に静かにさせる。

だけど耐性なんて無いはずなのにユリウス少年は数秒だけ耐えようと、その間に掠れた声で呟く。

『どうして……、あなたが……』

『……これが、私の信じた、正義だから』

そう答えると今度こそ眠りに落ち、力なく身体を弛緩させてダラリ

と手足が伸びる。

火災は、魔王様の神龍結界に阻まれて掻き消されるだろうけど、実体を持った岩石は破壊力を持ったまま重力に引かれて落ちてくる。

それを避けながら安全圏まで彼を運んでいると、背後で非常に高度な魔法が構築され、今まさに蜘蛛子ちゃんに向けてそれが発動されようとしていた。

——深淵魔法!? 待ってっ!? その魔法は!!

ユリウス少年を抱えているため引き返すことが出来ない私は、それが蜘蛛子ちゃんを飲み込み欠片も無く消滅させていくのを見ていることしか出来なかった。

気絶したユリウス少年を戦場から遠く離れた安全な場所に寝かせてきて、私は大魔法がいくつも炸裂した爆心地へと戻ってきた。

そこには大きく抉れたクレーターの中央で砂塵を弄ぶ、寂しげな魔王様の姿があった。

その姿を見た私は激昂し、聖光魔法を乱射しながら襲いかかった。

『どうしてっ! 蜘蛛子ちゃんを殺したっ!』

蜘蛛子ちゃんには、それだけの事をしでかして殺意を向けられるだけの理由があったとは言え、いざ殺されたとなるとそれを認めることが出来ずに、感情がグチャグチャに荒れ狂って自分が抑えられなくなる。

それを魔王様は甘んじて受けるものの大したダメージにもならず、すぐさま治療しては軽く腕を振りながら拳を握る。

その瞬間に私の身体に目に見えない無数の糸が絡みついて拘束し、私を大地に引きずり落とした。

すぐさま燃やそうと炎を纏うが切れること無く健在であることを確認すると無意味な炎をすぐに消して、腐蝕属性のスキルである死滅の鱗粉を躊躇なく使う。

代償として、翅の大半が消し飛び胴体にも重篤なダメージを負ったものの糸の拘束から抜け出すことに成功した私は、目の前にいる少女を強く睨んだ。

「落ち着いて話を聞いて欲しいな」

魔王様は、日本語でそう呟く。

「どうにもあの異分子、君が蜘蛛子ちゃんと呼ぶあの個体は深淵魔法を食らったというのに、まだ死んでいないみたいでさ、あれだけ強大に成長した存在を殺した時に感じる感覚が全く無い」

魔王様は砂地となった地面に座り込むと、瞳に怯えを滲ませて身体を震わせた。

「それに今の私はゴチャ混ぜになった結果、魔王アリエルであり若葉姫色の一部でもある。だから君のこと……コケちゃんのことを殺したくない傷つけないっていう気持ちも湧き上がっていて、これが短い期間ながら一緒に過ごしたアリエルとしての気持ちなのか、それとも二人三脚で生き延びてきた若葉姫色としての気持ちなのかも、自分ではわからない」

膝を抱えて背中を丸める彼女は、ここではない何処かを見ながら喋り続ける。

「混ざりすぎた私は、元体担当として本体たる彼女を殺すのも気が引けるし、アリエルとしても得体が知れない彼女が怖くて仕方がない」
「だからさ……、もうどうしようもない私は、あの異分子と敵対するのを諦めて手を組むしか方法が残されていない訳なんだよ」

遠い目をして話し続ける彼女を見て、私は振り上げた拳を向ける先を見失う。

「というわけで！ 敵対する理由が無くなった私は、これから彼女と交渉して味方に引き入れる、それが出来なくても相互不干渉の関係を構築出来るように頑張らないといけない訳で……」

突然明るく振る舞いだした彼女は、無理矢理笑顔を浮かべて笑う。

あまりの痛々しさに、私自身も胸が痛くなる。

完全に戦意を失った私を見て、彼女はこう言った。

「とりあえず、一緒に来てくれるかな？ コケちゃん？」

私は、ただ頷くしか出来なかった。

22 敵意の墮天使

あの後、荒廃した戦場から見つからないように離脱した私たちは、先に撤退していたパペットタラテクトたちと合流して山の奥深くへと登り、戦場だった場所の様子がギリギリ見える切り立った崖の上に腰を下ろして佇んでいた。

「だいぶ人族が死んだかな？　これで少しでもシステムの足しになればいいけど……」

『……そう、ですね』

遠く離れたこの場所からでも、乾いた土の匂いと血と臓物のキツイ臭気を感じられる。

夕暮れの斜陽に照らされた大地は、土の茶色も血の赤も等しく暗い茜色に染め上げていた。

「思うんだけど、どうやって生き延びたんだろうねー」

『それは……、私にも分からないです』

魔王様は、ポツリと疑問を口にする。

不死のスキルを持っていても殺すことが可能な方法は主に2種類あって、魂そのものを破壊する外道魔法の破魂、魂を分解してシステムに還元させる深淵魔法の全般が、システム内で不滅を約束されていても問答無用で殺害する例外中の例外だった。

それが直撃して跡形もなく体は消え去ったというのに、どんな方法で蜘蛛子ちゃんは生き延びたのか私には皆目見当がつかなかった。

「あー、そうそう改めて君のことをコケちゃんって呼んでもいいかな？　あの蜘蛛ちゃん……若葉姫色ちゃんの呼び方も考えないといけないかなー？」

『……えーと、私の名前はそれでもいいですけど、蜘蛛子ちゃんは蜘蛛子ちゃんだから……若葉さんという呼び方はちよつと……』

「……うん？」

魔王様が首を傾げているけれど、そこは私の中で譲れないポイントだった。

「あ、あとさー、魔王様なんて仰々しい呼ばれ方されると何かむず痒い

と言うか……、もつと砕けた風に呼んでくれると嬉しいな、アリエルとか」

頬を指で掻きながら彼女は苦笑する。

『では……アリエルさん、と』

そう言うと、アリエルさんは軽く微笑む。

「さて、これからどうしようか？ 蜘蛛ちゃんの居場所もわからないし、ぶっちゃけ出来ることなんて今は無いし」

『それなんですけど……進化が出来るみたいなので、その間守ってほしいかな、と』

戦闘途中で聞こえたアナウンスの記憶と、ステータスに表示されている進化可能の文字。

そこに示されていたのは全く別系統への進化であり、人型になれるかもしれない可能性だった。

「なるほど？ 一応鑑定してもいいかな？」

『どうぞ。鑑定妨害も外しますので……』

支配者権限の妨害機能をオフにする。

そして私のステータスを見たアリエルさんが驚いていた。

「うっわ、なにこの龍種の長に匹敵するステータス。しかも、強欲の支配者!? 取っちゃダメなスキル筆頭じゃん……。一応外道無効があるとは言え、こんなの持っているのに随分正気を保っている方だよ本当。しかも見たこと無いスキルもあるし、なにこの文字化け、鑑定不能……?？」

ブツブツと呟き続けるアリエルさん。

それを無視して、私は空納に入っている残り僅かとなった食糧を全て取り出す。

進化した際にはMPとSPがゴツソリ持っていかれてしまうけれど、根本的に種族が変わる場合では、どんな影響が発生するのか不明だったので用意できるものは全て出しておく。

そして進化可能の項目へと注目した。

《マステマ：進化条件：特定の種族の魔物 LV50、強欲または勤勉もしくは節制スキルを所持：説明：混ざりあい堕ちた模造の堕天使。

敵意と憎悪を司り悪霊を率いる者なり》

説明文には何やら恐ろしげで意味深な内容が書かれているけれど、それら一切を無視して進化の選択肢を決定する。

……いまさら、こんなことを一々気にして、立ち止まってなんかいられない。

やることは、これからも沢山あるのだし、力を得られるのなら善悪なんて問わないのだから。

進化が開始されると、私の身体は苔に包まれていく。

それはどんどん膨らんで一人が入れるほどの巨大な苔玉になると、その中心にいた私の意識が少しボンヤリし始めて、身体が末端から形を失って苔と一体になっていく。

微睡むような感覚に身を任せていると元々の蛾のような肉体が全て溶けて消えてしまい、なのに意識は保ったまま球体の中を漂っていった……

——苔の塊をまるで子宮とみなし、その中心に新たな身体が形成され始めると急成長していき、人のシルエットを象っていく。

身体を丸めたまま、ゆらゆらと苔のクッションの中に浮かぶ、人のように人ではない姿。

そしてある程度の大きさ、未だ幼さの残る年頃くらいの体にまで成長すると揺り籠は崩れ落ち、空いた隙間から光を浴びながら外気に触れると、一匹の魔物は新たな姿へと生まれ変わって一人の少女へと姿を再誕させたのであった。

重力に引かれて地面に墮ちる。

剥がれ落ちた苔が地面を覆っていたので背中に当たる感触などは痛くなかったけれど、手足の感覚が覚束無い。

長いこと忘れていた、人間の形をした手足を動かす感覚に脳が戸惑い、その齟齬を埋めるための調律作業に、私は地面に寝転んだまま四苦八苦していた。

そして仰向けで空を眺めながら、そつと顔に触れる。

黒く染まった指先の硬い感触が頬に突き刺さるけれど、手のひらに柔らかな皮膚の感触が返ってきて顔のパーツを確かめていく。

……うん、人の顔、だと思う。

何度か瞬きをして半目だった瞳から瞼をきちんと開くと、私は両肩の2本と首裏から伸びる2本の合計4本ある腕で上体を起こす。

他にも、いくつか前世とは違う感覚があるけれど、それらは一旦置いて私はアリエルさんが呟いた言葉が気になって視線を向ける。

コレー

「……そんな、お母さん？ ■■■ちゃん？ 嘘、ありえない……」

唾然とした表情で此方を見る彼女の顔には信じられないという感情がありありと浮かんでいた。

視界に映る、毛先に向かつて薄い金色から濃い緑色へとグラデーションする非常に長い髪を片手で掬い指でなぞりながら、私はアリエルさんに顔を向け質問をした。

「……………アアー、んんっ……………アリエルさん、それって……………どう、いう意味ですか？」

声の出し方を忘れかけていたせいで声帯が強張っていたけれど、数回発声練習をすると感覚を掴み直して、ゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

んんー？ 口内の作りが違う？ 舌の感覚に違和感が……

コレー

「いや、一見似ているけど違う。■■■ちゃんはもうっ！ それにまだサリエル様は……………ツ!!」

私を置いて、狂乱するアリエルさん。

まるで知ってはいけないナニカを知ってしまった時のように、視線が泳ぎ頭を掻き毟って讒言を叫び続けていた。

私はふらつきながら立ち上がると、硬質な外骨格に包まれている虫のような足先で、しっかりと地面を踏みしめながら歩き、この小さな細い身体でアリエルさんを抱きしめた。

あばらの浮いた貧相な胸だけど、焦点が合わず内面に潜ったまま戻れなくなっているアリエルさんの頭を抱きかかえて優しく撫でる。

ステータスの差から一度振り払われそうになるけれど、なんとか耐

えて優しく包み続けること、十数秒。

落ち着きを取り戻したアリエルさんは、少し赤くなった顔で私を引き剥がした。

「もう大丈夫、というか裸っ！ そんな格好で抱きつかないでよ、こっちまで恥ずかしくなる！」

頭を振り雑念を追い出したアリエルさんは、頭痛を堪えるように額を押さえながら私を指差す。

視線を下げると、首元の緑のフサフサで見えづらいけど一糸まとわぬ瘦せぎすの身体が映った。

「ああ、ほんとうだ。どうしよう……っ？」

全裸だと言うのに大して感情が揺さぶられること無く、平然としたまま自分の身体を見下ろす。

単に、今この場所にはアリエルさんたちしか居ないからなのか、それとも人としての感性が摩耗していたからなのか。

それは分からないけれど、今は取り敢えず確認を優先していった。前世と同じ、あるいはそれ以下に小さくなった気がする薄い胸や、脇腹、腰などを触っていく。

肩から伸びる腕は人に近い肌だけど、肘から手首にかけて苔で包まれている。

もう一方の背中の腕は全体が苔で覆われていて、内部の硬い感触から虫としての手足に近い構造だと感じられた。

それと……左の脇腹に稲妻みたいな傷跡の凹みがある？

首裏に手を回すと、増えた腕だけではなく他にも感触がある。

足首まである髪に完全に隠れていたけれど四枚の翅も健在で、肩甲骨と首との中間から生えており、そこにあると理解すれば自由に開いたり閉じたりが可能で、そのたびに髪を大きく揺らした。

おしりの方からは尻尾みたく、以前の腹部にあたるものが尾底骨周辺から繋がって背後に伸びており、短い柔らかな毛並みと弾力のある中身の感触が指先に返ってくる。

アリエルさんと並んで立っていると、目線の高さがほぼ同じで自然と瞳が交差する。

若干、そう若干僅かだけど、私のほうが、身長がつ、低いような気がしたッ。

……今世も、また低身長なのお??

地味に、今までで一番精神ダメージを受けた気分になり、どんより落ち込む。

ふと、自身の顔が気になった私は鏡になるものがないか考える。

鏡……水鏡……、向こう側が透けてきちんと映らない……、凹凸のない金属質の土壁を重ねてみれば……、うん、いい感じかな。

品質は低いものの、即席にしては上等な鏡を作り上げると、そこに映った顔を見て少し驚く。

……目元や表情の薄さで印象が異なるけれど、前世の顔と良く似ている。

前はパッチリしていた目が眠たげなタレ目気味になっている変化はあるけれど、その他のパーツは前世と同じ、いや左右の歪みといったズレも無くなっているようで、無表情染みた顔も合わせり人形みたいな顔つきだった。

鏡に映った瞳は光を反射しない煤のような墨色で、黒目の中には青白い円環が2本刻まれており、それが拡大と収縮を繰り返して、まるでカメラのレンズのような瞳だと思った。

耳の上あたりからは触覚だったものが横に伸びながら垂れ下がっていて、元々の触覚の形状からオレンジ色の鳥の羽を飾りにして留めているようだった。

頭上には、ぼんやりと光る光輪が浮かんでいて、その形はまるで翅を広げた蛾のような虚像が投影されていた。

手で触れてみようとするも実体が無いようで、伸ばした手は宙を切ってすり抜ける。

口を開いて口腔内を確認すると下顎のところに異様に長い舌が収められていて、紙でできた笛のおもちやみたいにクルクルと伸びている。

舌の先端には小さな穴が空いていて、そこから空気を吸い込めることからストローみたいな構造だと理解した。……あっ、これ口吻が変

化した部分なのか。

そんなことを裸のまま気にせず確認作業を続けていると、顔面めがけて布の塊が押し付けられた。

「わぶ……」

「早くっ、服を着ろー!」

渡された布を広げると、巨大な白の無地の一枚布で、急遽アリエルさんが糸を操作して作ってくれたみたいだった。

長くて重たい髪と四枚の翅を巻き込まないように、背中から翅などは外に出すようにして身体に巻くと、とりあえず一応は全身隠すことが出来たが、手で抑えていないと簡単に肌蹴てしまいそうだった。

「あー、何処かで服を買わないとダメかな、これは」

額を指で押さえ、唸るアリエルさん。

アリエルさんと同じくらいの小さな少女が、一枚布を巻いただけでその下は全裸。

たしかにこの格好はよろしくないなど、私も思った。

「近くに街とかは?」

「んーと、ここからならケレン領の中心が近いかな?」

顎に手を当てながら上空に視線を彷徨わせるアリエルさん。

「では、行きましようか」

「そうだねー、それがいつか!」

アリエルさんが歩きだすと、身を寄せ合って座っていたパペットタラテクトたちも起き上がって彼女の後についていく。

私も後を追い、ついていくけれど、まだ慣れない二足歩行よりも空を飛んでいる方が楽なので、ふわふわ浮かびながら追いかけた。

そうして私たちは移動を開始して、黄昏に染まる戦場跡地が地平線に消えて見えなくなるまで、ただただ進み続けるのであった。

あつ、そうだステータスの確認……

《マステマ LV1 名前 コケ(苔森 真理)

ステータス

HP : 15367 / 15367 (緑) +1700

MP : 9428 / 47519 (青) +0

SP : 12804 / 12804 (黄)
 : 818 / 12463 (赤) +0
 平均攻撃能力 : 8141
 平均防御能力 : 45566
 平均魔法能力 : 52411
 平均抵抗能力 : 46451
 平均速度能力 : 48599
 スキル
 HP 超速回復LV4 MP 高速回復LV10 MP 消費大緩和LV10
 魔力精密操作LV10 SP 高速回復LV10 SP 消費大緩和LV10
 状態異常大強化LV10 貫通大強化LV6 衝撃大強化LV6
 破壊大強化LV5
 打撃大強化LV5 斬撃大強化LV4 暴風強化LV10 水流強化LV10 大地強化LV10
 聖光強化LV7 火強化LV4 雷強化LV8 闇強化LV2
 魔神法LV10 大魔力撃LV10 魔力付与LV10 魔法付与LV10 神龍力LV3
 神龍結界LV1 闘神法LV8 気力付与LV10 技能付与LV5 強麻痺攻撃LV10
 昏睡攻撃LV10 猛毒攻撃LV6 強酸攻撃LV5 外道大攻撃LV10 火攻撃LV3
 麻酔合成LV10 催眠薬合成LV10 神霊苔LV10 乱魔の鱗粉LV5
 死滅の鱗粉LV3 鎧の天才LV4 体術の天才LV1 剣の才能LV4 空間機動LV10
 高速飛翔LV10 高速遊泳LV4 念力LV10 投擲LV4
 射出LV10
 隠密LV10 迷彩LV10 隠蔽LV3 無音LV10 無臭LV10 無熱LV6

集中LV10 思考超加速LV10 未来視LV7 並列意思LV10 高速演算LV10
 記録LV10 軍師LV1 連携LV4 命名LV5 召喚LV4 眷属支配LV2 帝王
 命中LV10 回避LV10 確率大補正LV10 鑑定LV10 遠話LV4
 光魔法LV10 聖光魔法LV10 極光魔法LV2 水魔法LV10 水流魔法LV10
 蒼海魔法LV4 風魔法LV10 暴風魔法LV10 嵐天魔法LV6 土魔法LV10
 大地魔法LV10 地裂魔法LV10 重魔法LV10 引斥魔法LV10 治療魔法LV10
 回復魔法LV10 奇跡魔法LV1 麻痺魔法LV10 睡眠魔法LV10 空間魔法LV10
 次元魔法LV4 外道魔法LV10 毒魔法LV10 雷魔法LV10 雷光魔法LV4
 氷魔法LV5 火魔法LV5 影魔法LV10 闇魔法LV3 物理大耐性LV2 聖光耐性LV9
 水流無効 暴風無効 大地無効 重無効 炎熱無効 狀態異常無効 酸無効
 暗黒無効 雷光耐性LV1 腐蝕大耐性LV3 氣絶無効 恐怖大耐性LV7
 苦痛無効 痛覚無効 外道無効 暗視LV10 五感大強化LV10 知覚領域擴張LV10
 万里眼LV3 天命LV10 天魔LV10 瞬身LV10 耐久LV10 剛力LV9
 城塞LV10 天道LV10 天守LV10 韋駄天LV10 大魔王LV1 飽食LV7
 激怒LV3 強欲 征服 羨望LV3 神仰 解脱 魂魄召喚LV1
 神性領域擴張LV9 森羅万象LV10 禁忌LV10 n% l
 ll W

スキルポイント：187690

称号

悪食 味方殺し 血縁喰らい 麻痺術師 睡眠術師 無慈悲 魔物殺し 魔物の殺戮者

強欲の支配者 竜殺し 恐怖を齎す者 龍殺し 狂乱の主 率いるもの 覇者 神仰の支配者

王 魔物の天災 人族殺し 人族の殺戮者 人族の天災

》

……うわああ。

ちよつと言葉に出来ないステータスとスキルの数々が、そこにあった。

《操魂：支配下にある魂を管理し、操作できる》

《魂魄召喚：支配している魂に依代を与え、現世に呼び出す》

……これは、強欲で貯め込んだ魂を使えと言うことなのかな。

けれど、既に漂白した魂では対象に選ぶことが出来ないみたいで、今は使えないみたいだった。

そして、いつの間にか名前の欄が追加されていて、コケという名前になっていなのにも気付く。

「……アリエルさん」

「んー？ 何だい？」

私は、さつきアリエルさんが呟いた、名前について思い浮かべる。

「さつき、私のことを■■■■って……」

「ああ、気にしないで。ずっと昔の、家族の姿が重なっただけだからさ」

その悲しげな、過去を偲ぶかのような声に、何となく察した。

少しだけ、私の愛称と音の感じが似ていたその名前。

その人は、一体どんな人だったのだろう。

気になりつつも、私はそれを問うことはしなかったのだった。

そして、日が落ち空に複数の月が浮かぶ時間にケレン領の領都に

やって来た私たちを待っていたのは、煌々と燃え盛る街の姿だった。

23 殴りアイの大喧嘩

あちこちで怒号と悲鳴が聞こえる街に突入した私たちは、この街の中心にある領主の館に向かって走っていた。

一時は、この街を避けて別の街に行くか火事場泥棒でもして衣服などを拝借しようか考えていたけれど、アリエルさんが街の中に姿を隠して動くエルフの姿と領主の館に何故かいた蜘蛛子ちゃんを発見したことで、市街地と郊外を区切る城壁を飛び越え密集する建物の屋根を走りながら、街の中心部へと向かっていった。

「おまえたち、街にいるエルフを殺せ。いけっ！」

アリエルさんが命令を下し、散開して街の中へ走っていく人形蜘蛛たち。

瞬く間に建物や路地裏の影へと溶け込み姿を消していく。

私はアリエルさんの背を追いかけながら質問をした。

「蜘蛛子ちゃんのこととはわかるんですけど、エルフとは一体？ どうして敵対するんですか？」

「ん？ ああそっか、まだあいつらのこと知らないみたいだね」

足を止めること無く、大通りに差し掛かって足場が途切れた何も無い空間を軽々と飛び越える。

そして屋根に敷き詰められた瓦を踏み砕きながら着地して、アリエルさんは答える。

「後で詳しく教えるから、今はついてきてっ！ とりあえず敵だっということー！」

「……わかりました」

頷く私は纏う布の端を風圧ではためかせながら、速度を上げたアリエルさんに追い継ぐ。

そして大きく跳躍したアリエルさんは領主の館の柵も庭も飛び越えて、盛大に館を破壊しながら内部に突入した。

大穴の空いた屋根から埃が吹きがって、白い煙の向こうに人影らしきものが浮かんでいる。

私もその穴を潜り抜けようとしたけれど、庭の半分には差し掛かった

あたりで突然風や重力の制御が出来なくなり高速飛翔のスキルも消失して、芝生や生け垣に顔面から突っ込みながら墜落した。

「ふっ!!」

速度が乗ったまま落下したことで、土を巻き上げながら庭園を転がる。

髪の毛や肌に泥や枝葉が絡まってグチャグチャになり、叩きつけられた額が裂けて血がドロリと瞼の上に垂れてくる。

……あれ？ 本来この程度ではかすり傷も負わないのに？

血を拭って立ち上がるけれど、身体能力を底上げしていた術式が乱れ深海の底に沈んでしまったかのように身体が重い。

魔法、スキル、ステータスが正常に機能していない。

システムの補助が消えた？ なら……

独力での魔力操作で術式を再現し掛け直すけれど、肉体の内側で組み上げた魔術は効果を発揮するが、大気中には身体の外部に対しては、術式での干渉が一切出来なかった。

低下した筋力や強度を再現した術式で引き戻すけれど、それでも8割ほどにしか戻っていないように感じる。

並列意思を総動員して8割までしか力が使えず、主力だった魔法も使用不可……

この不可解な状況に関してよくわからないけれど、危険度レベルを最大まで引き上げて警戒し、落下した時にはだけた布を巻き直して正面玄関からドアを直接殴り飛ばして強引に乱入する。

……殴った衝撃で少し手の皮が捲れてしまった。

防御力は外界に触れている表皮に作用するから、減少の影響が強いみたいだ。

「……アリエル、か？ それに他にも新手……なっ!？」

拉げてパラパラと木片が舞い散るドアの残骸の向こうには、決めポーズをしているアリエルさん、何故か頭が無いけれど蜘蛛子ちゃんらしき白い半人半蜘蛛、部屋の隅で赤ちゃんを抱えている血まみれの従者らしき人、そして私を見て驚愕の表情を貼り付けている金髪の男性がいた。

その男性は右腕が巨大な金属の塊に置き換わっていて、表皮が削ぎ落とされた顔面からは金属で出来た骨格とレンズの眼球が見えた。

エルフというよりサイボーグと言ったほうが正しい姿の男性がたたらを踏んで数歩さがり、目を大きく見開く。

「馬鹿な、その姿！ ……いや違う、似ているだけか。とうとう寂しくて、こんなものすら作ったかアリエル」

「あんたには言われたくないねー。それにこの子に関しては私が関与した訳じゃ無いからね」

「ほう？」

私を置き去りにして話は進み、エルフの顔がこちらを向いて機械の眼球がギョロリと私を値踏みする。

その視線に言いようのない不快感と気持ち悪さを憶えながら、状況は進んでいく。

「なに視線逸らしてんのさ、こっちを見ろ」

アリエルさんが、床を踏みつける。

それだけで建物全体が崩れてしまいそんなほど強烈な、局地的地震を力技で引き起こす。

吹き荒れる覇気と威圧は、冷たくその男に突き刺さり、余波を浴びただけで背筋が凍る。

「……………こちらは本物か」

「当然、最初からわかってるでしょ？ さあ、どうしてここにいるのか吐け、ポティマス」

アリエルさんが、そのエルフの男性をポティマスと呼び、怒りを滲ませて睨みつける。

空気が重く淀みドロドロとした重圧が室内を満たして、息が詰まるような錯覚を感じる。

「ふむ。その女には興味を惹かれるが、これではいささか分が悪いな」

「あんたの好きにはさせないし手を出すのを許すと思う？ それより目的を吐いてもらおうか？ それとも強制的に吐かされたい？」

「どれも断る」

そしてポティマスと呼ばれたエルフがアリエルさんに襲いかかるが、無造作にアリエルさんが腕を振るうと、彼の胴体を吹き飛ばして頭部のみの生首にする。

カーペットの上を転がるポティマスの首は、胴体がないというのに意識を保ったまま声を出す。

「このボディでも貴様には通用しないか。しかし惜しいな」
「いつかあんたの本体にも同じ目に遭わせてやるよ」

深い憎悪と敵意を乗せて、呪いの籠もった声を吐き出すアリエルさん。

そして首だけになったポティマスに歩いていき……

「出来るものならやってみるがいい、小むすッ」

言い切る前にアリエルさんはポティマスの頭を踏み潰して、執拗に磨り潰した。

「ふんっ。……さて、その蜘蛛ちゃん」

完全にスクラップになるまで踏み砕いたアリエルさんは、こつそり逃げ出そうとしていた蜘蛛子ちゃんを引き止めて、話し合いのテーブルへと引きずり込んだ。

いつの間にか修復していた蜘蛛子ちゃんの顔は色彩が真っ白であることを除けば、前世で色々と有名だった若葉さんと同じ顔だった。

そしてアリエルさんが蜘蛛子ちゃんに停戦と和解を申し込み、さらに踏み込んで手を組むことを提案して片手を差し出すと、その手を蜘蛛子ちゃんは握り返したのであった。

私は……、それに口を挟むこと無く、ここでは何もせずじつと大人しくしているのであった。

遠くで燃え盛り、人も営みも何もかもが燃え尽きようとしている、死にかけの街が見える。

それを小高い丘から眺めている私たちの姿が、そこにあった。

エルフに襲撃されていた従者の人と赤ちゃんも一緒に並んで立っていて、その腕に抱かれている女児が実は私と同じ転生者で元クラス

メイトの根岸さん、今はソフィア・ケレンという名前の彼女が、従者のメラゾフィスの腕に抱かれていた。

……クラスメイトだったことは憶えているのだけれど、あまり記憶には残っていない。

んーと……、たしか……、あんまり目立たない暗い人だった……、ような……。

記憶の彼方に溶けて薄れている前世の事を思い出そうとするけれど、とくに親しいわけでもなく深い関係があった記憶も無いので、無理に思い出す必要も無いと判断して思考を打ち切る。

すでに遠い昔だと思えてしまう記憶から現実に戻ってきた私は、ソフィアさんが住んでいた屋敷から、サイズも合わないし身体の構造的にも無理矢理着た形だけど侍女の服を拝借してそれを纏い、同じ様に眼下の街を見下ろしていた。

「もういいのかい？」

視線を逸らして街に背を向けたメラゾフィスさんにアリエルさんが声を掛ける。

彼は覇気のない声で答えるけれど、瞳の奥にはギラギラした決意が見えた。

「ええ。……遅くなりましたが、助けをいただきありがとうございます。……」

「いいってことよー。まあ蜘蛛ちゃんの事のついでに、ね」

丁寧に礼を言っ頭を下げるメラゾフィスさんだったけれど、疑念の気配を隠せていなかった。

「……失礼かもしれませんが、あなた方は何者なんでしょうか？」

「私は魔王アリエルう。で、こつちがこの頃君らが神獣様と言っ祭り上げていた、蜘蛛の魔物が進化した姿だよー。そしてこつちが、最近知り合ったコケちゃんっ！」

アリエルさんが私たちの事を紹介する。

驚愕を浮かべるメラゾフィスさんとは対象的に、蜘蛛子ちゃんは話自体は聞いているようだけど表情を一切変えずに一步引いた距離を保ったままジツとこつちを見てた。

「はじめまして？ 今世ではコケって名前になりました？」
「……」

若干疑問形になりながら答える私と、口を開かない蜘蛛子ちゃん。
……さつきから念話でも口頭でも、一言すら声を出していない。

そしてアリエルさんが私たちの関係と、エルフとの因縁を語り始めた。

「……という訳でエルフと族長のポティマスは、この世界一のゴミクズだからね。見つけたら始末しとかなきゃ。見たでしょ？ あの異質なモノ。尤も、さつき壊したあれは遠隔操作で操っている人形みたいなものだから、潰したところでまた湧いてくるんだけどねー」

アリエルさんは、エルフと機械技術の関係、この世界の成り立ちの触りの部分を説明する。

そう……、アレがこの世界を壊そうとした元凶なんだね……

胸の奥に暗い怨嗟が燃え広がるのを感じながら、私はアリエルさんの話に関心入っていた。

そして話は転生者のことになり、私と蜘蛛子ちゃん、そしてソフィアさんに共通する前世の事をメラゾフィスさんに説明していった。

「では改めて、前世では苔森真理という名前でした。……喋らないみたいだから私が言うけど、そしてこっちが若葉姫色の記憶を持っている蜘蛛子ちゃん」

蜘蛛子ちゃんは何も言わないので、私がかわりに紹介する。

そして、まだ赤ちゃんなので声帯などが未発達で喋れないソフィアさんが念話を獲得したことで私たち全員に語りかけてきた。

『あなた、苔森なの……？ その、雰囲気全然違うし、顔の印象もちよつと違うから、すぐにはわからなかったわ……。でも、そうね言われればたしかに……』

「うん、そうだよ？ まあ印象変わったなって、私でも思っているから気にしないで」

メラゾフィスさんに抱えられたソフィアさんが驚いている。

似ているところはあっても全てひっくりくるめたら別人に見える姿な

のは私も感じていることだし、そんな反応だったとしても不思議ではない。

そしてソフィアさんがメラゾフィスさんを吸血鬼にしてしまった事を懺悔して、それを彼は謝るのは私の方だと、むしろ守る力を貰えて感謝していると伝え、今後変わることも無い主従の誓いを彼は宣言したのであった。

「うんうん、いい話だあー。君たち、私のもとに來い！ 私が責任持つて保護してやる！」

スイッチが入ってしまったアリエルさんは、号泣しながら2人を勧誘して共に行こうと言う。

そしてみんなで魔族領へ行くことに話が決まったところで、私はゆっくりと蜘蛛子ちゃんの元へ向かった。

「……」

「……っ」

無言で見つめ合う、私と蜘蛛子ちゃん。

視線を逸らすことも無くまばたきすら僅かに見つめる私と、視線が泳ぎ続ける蜘蛛子ちゃん。

「……蜘蛛子ちゃんとアリエルさんとの間で話が纏まったのなら、もうこれ以上喧嘩している理由はないよね？」

『そう、だねー……』

「なんで念話？」

人型の部分を得て口もあるのに、何故か念話で返事をする蜘蛛子ちゃん、

『や、ここには他に人もいるし……、なんか、ちよつと、ね？』

「まあ、いいけど」

蜘蛛子ちゃんが、そういう性格なのは知っていたから軽く流す。

「じゃあ……、私たちも仲直りしよう？」

そう言っ私は、左手を伸ばして目の前に差し出す。

ちよつと首をかしげながらも蜘蛛子ちゃんは手を伸ばして、私と握手するために手を握った。

私と蜘蛛子ちゃんの手が重なった瞬間にステータス強化のスキル

や魔術を多重起動して、蜘蛛子ちゃんを周辺への被害や影響が少ないだろう山奥へと力いっぱい投げ飛ばした。

不意打ちで投げられた蜘蛛子ちゃんは、目を丸くしたまま抵抗できずに空高くに打ち上げられて、勢いよく飛んでいく。

そして体勢を整えられる前に、私はアリエルさんたちに一言告げてから追撃に移った。

「ごめんなさい、アリエルさんは2人を守ってて。私は蜘蛛子ちゃんとオハナシしてくるので！」

「えっ、ちょっ!?!」

慌てて引き留めようとするアリエルさんの手を避けて、私は空中にいる蜘蛛子ちゃんに追いつき、勢いを乗せた蹴りで地面に叩き落とされた。

木々をなぎ倒しながら墜落した蜘蛛子ちゃんを追って森に着地すると、お返しとばかりに黒紫の槍が飛んでくる。

それを避けること無く受けて、直撃した部位から血が吹き出す。

ダメージに顔を顰めながらも、治療を掛けること無く進み続ける。

急所となる攻撃だけは防ぎつつも回復もせずに血を流しながら歩く私に、驚愕と戦慄の表情を浮かべる蜘蛛子ちゃん。

そして手が届く範囲になると、蜘蛛子ちゃんの顔を思いつきリグーで殴った。

「ぐっふッ!?!」

今はステータス強化を解いて通常時の筋力でぶん殴ったので、吹き飛ばすことはないものの蜘蛛子ちゃんの間部分が大きく背を逸らして空を見上げる。

「——来い! 戦場での続きだっ! お互いハイ仲直りなんて、納得出来てないでしょう!?!」

両手を構えて、私は宣言する。

それを聞いた蜘蛛子ちゃんは、瞳に闘志を宿して殴り返してきた。

「ぐっッ!?!」

「そっちがその気なら……、ヤツてやるよ、オラー!!」

頭上から振り下ろすように拳が叩きつけられ、地面に膝をつく。

蜘蛛型の足を払いつつ、回転の勢いを乗せてアッパーを顎に撃ち込む。

強制的に上を向かされても蜘蛛子ちゃんは正確に私の位置を捕らえて、鳩尾に拳をめり込ませてくる。

「がッ、ぐう……、全然痛くないよ？　それで終わりかーッ!!」

「どっちも痛覚無効持つてんだから、痛い訳無いじゃん!!」

お互い声を枯らして叫びながら、殴り合う。

遠心力を乗せた裏拳が耳と顎を揺らして鼓膜を破壊する。

お返しの肘鉄は鎖骨にぶち当たり、ミシミシと嫌な音が鳴る。

「蜘蛛子ちゃんは、いつも話を聞かないッ!」

「しるかー!　向こうから勝手にやって来るのが悪いッ!!」

打撃音で怒りを、身体が軋む音で悲しみを伝えながら、愚直過ぎる会話は繋がっていく。

「いっつもそう、私が待つか折れて合わせている。たまには周りのことも考えろ!」

「勝手に突っ走って、勝手に厄介事抱えて、何の説明もなく私を巻き込むなッ!!」

「言葉が少ないんだよッ!　ちゃんと喋れ!　このコミュ障めッ!!」

握った手の骨はヒビ割れ、裂けた皮から血が溢れて真紅に染まるが、振りかぶる腕は止まらない、止めるところなんて出来ないから。

「ふっざけんなアッ!　なんだよそれ!?　全部私が悪いってか!?!」

「勝手に騒いで、勝手に怒って、勝手に消える……、私からすりゃあ、あんたの方が勝手だよッ!!」

「コミュ障なめんなッ!　私にだって、意地と誇りがあるっつーの!!」

もはや何を言っているのかお互い理解せずに、叫びながら殴り合う。

溜め込んでいた感情が、言葉が、想いが、制御できずに溢れて流れ出す。

「そうだね、面倒事はいつも勝手に、向こうからやって来る。……でも、それとこれは別！ 訳も分からず置いていかれた私の怒りを思い知れエツ!!」

より激しく、空気を引き裂く衝撃波を撒き散らしながら響く打撃音。

「悲しかったッ！ 苦しかったッ！ 隣に誰もいない1人ぼっちの絶望が、どれほどか想像出来るッ!？」

悲鳴のような声をあげて、感情を乗せた拳を打ち付ける。

その拳を、蜘蛛子ちゃんは正面から向かい合って受け止める。

「ぐうッ……、クソッ、私が悪かったッ！ でも、そう想っていたのが自分だけだと思うなアツ!!」

ストレートの拳が頬を殴りつける。

「私だって、心配で不安で……、何も感じていなかった訳じゃないッ!!」

涙を溢れさせながら蜘蛛子ちゃんは慟哭する。

ああ、そうだね。

結局のところ、想いは同じなのはわかっていた。

けれど、馬鹿みたいに一度ぶつかり合わないと収まりがつきそうに無かったんだ。

だから――

「こんのおお、大馬鹿のわからず屋めっツ!!」

交差した拳が、お互いの顔面をぶち抜いた。

どちらも本気の本気で殴りつけた一撃は、殴られた衝撃で爆発でも起きたかのように吹き飛び、地面に線を引きながら2人とも転がって脱力した。

満天の星空のほかにチカチカとした閃光と目眩を感じながら、私は口を開いた。

「……あはは、引き分け……かな？」

今までの激情が嘘のように、朗らかに私は言う。

「……いや、私の勝ちだね。まだやれるよ私は」

そう言いながら立ち上がろうとする蜘蛛子ちゃんだったけれど、脚

はふらつき痙攣していた。

「負けず嫌いなんだから……もう」

呆れた声で返事をするけど、私も限界で起き上がれないので反論できそうになかった。

「……満足？」

「うん、満足。ありがとう蜘蛛子ちゃん」

仰向けのまま、感謝を述べる。

全てが全て無くなった訳では無いけれど、今はとてもスッキリしていた。

それを呆れた表情で見つめてくる蜘蛛子ちゃんの視線を感じながらも、私は笑った。

「ふふ、ははっ、あははははははっ！」

「……………くふ、ふふッ」

痛めた内臓が軋みつつも盛大に笑う私に釣られて、蜘蛛子ちゃんも軽く吹き出して笑う。

そして一頻り、2人して笑い合っていると私は呟く。

「ねえ、いい喧嘩だったね……」

口角が自然と上がってしまう表情で、星空と覗き込んでくる蜘蛛子ちゃんを見る。

「私は、もうゴメンだね。全身ボロボロで泥まみれで最悪にも程があるっーの」

ジツトリとした目で、つれないことを言う蜘蛛子ちゃん。

まあ、こんなの頻繁にやってたら色々とシヤレにならないからね……

なぎ倒されメチャクチャに荒らされた木々と地面を見て、尋常ではない周囲の被害を認識すれば、やっぱり喧嘩は良くないと、私もそう思った。

そしてその後は、2人して仲良くアリエルさんに怒られ、急いでここから逃げ出すのであった。

道なき道を大慌てで駆ける私たちの表情には、もう蟠りも不信も浮かんではいなかった。

山脈の稜線から朝日が登り始め眩しい日差しに照らされながら、私たちは新たな同行者たちと共に、次なる旅へと走り続けるのであった。

光差し込まぬ大迷宮の最下層にて、緑色の球体たちと、1人の少女が向かい合う。

「ごめんね……ッ」

少女は手をかぎす。

すると、周囲にいた彼らの瞳から生気が失われて物言わぬ物体になっっていく。

《条件を満たしました。スキル「神仰」の第四段階が解放されました》

《第四段階：器を満たし、流出させよ。それをもって神とならん》

《条件を満たしました。称号「味方の殺戮者」を獲得しました》

少女は再び腕を振るう。

すると魂を失っていた身体に命が吹き込まれ、再び以前と変わらぬ肉体と魂をもって動き出す。

突然の意識の消失に疑問を浮かべる彼らに、少女は優しく抱きついて撫でていく。

訳も分からずにいた彼らは、泣きながら強く抱きしめる少女に対して変わらぬ親愛の気持ち伝えていった。

それを大きな感謝でもって受け取りつつも、少女はひたすら内心で後悔と痛嘆に苛まれながら、謝り続けるのであった。

おまけ2 So I'm a Config, So
what?

——《コケダマ種の解説》——

モフ・モス ↓ モフ・モフラス

↓ マホビナ・ラスコヴニク*

モフ・モフラス ↓ マステマ*

モデルの生き物たち（虫注意、でも可愛いから調べて欲しい）

カイコガ、リンゴドクガ、アカヒゲドクガ、ウスタビガ。

スズメガ系統、ウンモンズズメ、オオスカシバ。（ラピッドグラス系
統のモデル）

苔玉、マリモ。（コケダマ種全般のモデル）

《モフ・モフラス：進化条件：モフ・モスLV30：説明：原初の姿を
取り戻し神秘の苔を纏う魔蛾。羽ばたき一つで世界を書き換える》

正統進化。

進化時獲得スキル、「乱魔の鱗粉」「死滅の鱗粉」、他〇〇の鱗粉系ス
キル解放。

コケダマ種の羽化ルートでの最終進化系。

クイーンタラテクトやザナ・ホロワと同格であり、傾向的には魔法
寄りのステータスになる。

この段階だと防御・魔法・抵抗・速度どれも途轍もなく高いので、空
飛ぶ戦車とも重装甲爆撃機とも言えるステータスを発揮する。

しかし相変わらず攻撃だけは低いので肉弾戦は苦手。

過去この種族に到達した個体はおらず、ザナ・ホロワ同様ユニーク
モンスターに認定される。

以前にいたモフ・モスが相性の不利でクイーンにやられてしまった
が、それがなくとも進化は厳しかったであろう。

隠し条件で、魔蛾の因子の覚醒度合いが求められるので実質的な要

求ステータスや魔力操作能力には非常に高いものが設定されていた。コケちゃんは、それを強欲によるステータスブーストと、一時も休むこと無い魔法行使の経験で覚醒めさせ、進化条件を知らず識らずのうちに満たしていた。

大きさとしては、翅を除いた本体部分が大型犬くらいの大きさであり、アニメ蜘蛛子より一回り小さいくらい。

翅片側の横幅で1.5メートルくらい、合わせて3メートルちよつと。

翅の縦幅は一番細い根本部分でタブレットほどで、一番広い先端付近で幅1メートルくらい。

《マホビナ・ラスコヴニク：進化条件：一定以上のステータスを持つ特定の魔物、神霊苔スキル所持：説明：秘密を暴き黄金を錬成する魔法の薬苔。その身は神秘そのものであり星と混じり合う》
超特殊進化。

この世界の星の状態では、この進化は罨。星と一体となるとはシステムと一体になることであり、進化すれば魂をギリギリまでシステムに吸われ、残った肉体と魂の残骸は、ただひたすらリソースを作り続けて捧げる装置となる。

本来であるならば溢れる星のエネルギーを吸収して奇跡を起こし、代わりに星にとって必要なエネルギーへと変換して星を循環させる、世界樹のような役割の亜神に相当するものである。

つまり本来神話級なんて目じゃないバケモノ。
スラブ神話の不思議な力を持った植物が元ネタ。

あらゆる鍵の開け閉めができる力を持ち、鉄を金に変える錬金術の素材。しかし、存在を確認できる生物は僅かしかない。

マホビナ（セルビア語で苔）・ラスコヴニク（スラブ神話の魔法のハーブ）

《マステマ：進化条件：特定の種族の魔物LV50、強欲もしくは勤勉もしくは節制スキルを所持：説明：混ざりあい堕ちた模造の堕天使。

敵意と憎悪を司り悪霊を率いる者なり」

特殊進化、人化達成。

しかし見た目は、緑色のもふもふした髪を靡かせ手足など四肢は苔に覆われている。

首元がもふもふした襟巻きを付けているように見えて、その背中側から2本の複腕と大きな翅の4枚が生えている。

こめかみの上あたりから頭の横に鳥の羽のような触覚がある。

黒目はモスアイという特徴から光を一切反射せず、ドス黒く濁っているように見えるカメラアイ。

骨盤あたりから尻尾が生えているように、太くて短い腹部部分が繋がっており、それは短い毛に覆われているので、知らなければただの尻尾のように見える。……けれど、獣人なんていない世界だから、見られれば一発で人外認定されます。

先端に産卵孔があるのでそこから卵を作れるものの、コケちゃん自身が産卵スキルに積極的ではないので使うことは無い。無いと言ったら無いのです。普段は、膨らんだシルエットのスカートを履いて隠している。

手足や胴体が恐ろしいほど細くて折れてしまいそうな見た目。

両脚は太もものあたりから黒く染まり、そこから下が硬質な外骨格に覆われた虫脚になっている。

ストロー状の長い舌が、下顎の空間に渦を巻いた状態で口の中に収められている。すごく伸びる。

元の苔森真理の姿のほかに、女神サリエルの面影も引き継いでいる。

種族の基盤が天使であるため。システムがコピーしたサリエルの情報をもとに身体が作られた。

しかし人の魂と現地の魔物の性質も混じっているため、本来の天使とは全くの別物。

まさしく造られた偽物の天使と言える存在。

旧約聖書偽典「ヨベル書」に出てくる悪魔あるいは墮天使より設定を拝借。

《なんで魔王様がコケちゃんを見て動揺したのか》

システム内における墮天使という種族は、天使であるサリエルの情報をコピーして改変を加えたD謹製？天使とも言える種族。

そしてコケダマ種は、遙か昔システム稼働初期に生きていたキメラの1人に血縁を遡れる種族。

植物と蛾（こつちのは普通の蛾）の要素が強く発現して生まれた少女（異形より）から、魔物としての始祖種族が生まれ、システム由来でDが仕込んでいた魔蛾と交配して世代を重ねていった種族。

色々混じったせいで本来持っていた因子を殆ど発揮できなくなっているけれど、潜在能力は非常に高いものを脈々と受け継いできた。

キメラの少女から、植物＋蛾＋人＋真なる龍。

そこにシステム由来の魔蛾が混じって、複雑になりすぎた血が力を発揮できないまま種を繋ぐ。

けれどそこから能力を覚醒させたコケちゃんが生まれ、墮天使へと進化したことにより、さらにサリエル様の因子も混ざって誕生したのが、今作のマステマという種族である。

神霊苔が魔法阻害効果を持っているのは、キメラの少女ひいては彼女が生まれる際に混ぜられた真なる龍の因子によるものである。

《コケダマ種の解説》

システム由来の魔蛾は、元々この世界固有の珍しい生き物だった蛾の姿をシステムが再現して、魔物として蘇らせた存在。

本来の希少な蛾は、最初期の崩壊時以前に絶滅している。

Dも認める美しい見た目と特異性に、ちよつと惜しいと思つてしまった存在。

なぜか神でもなんでも無く魔術も使えないのに、星と共生関係にありMAエネルギーを独力で循環させていた生き物だった。

そして、生態が星に依存していたので星が死にかけて崩壊のカウントダウンが始まったときに、僅かな生き残りもなく絶滅した。

星全体に薄くエネルギーが満ちているからこそ生きていられたの

であり、流れが大きく乱れて極端に薄くなったり濃くなったりすれば適応できずに死んでしまう。そして大崩壊によって世界全体でMAエネルギーが不足したので、痕跡すら残さず消滅した。

その星の特定の場所のみからエネルギーを吸収できるように特化していたため、ほかの世界や星に連れて行っても死ぬだけであり、保護するのは難しい性質だった。

コケダマ種はそれらの原種の因子を組み込んだ魔物と、孤児院のキメラの分体の魔物が混じり合った結果出来た、メチャクチャ複雑怪奇な血統を受け継いでいった魔物の種族。

魔蛾＋（植物＋蛾＋人＋龍）＝コケダマとかいう、奇跡の産物。

内包する因子が凄いかわりに、引き出せないお互いに打ち消しあっ
てしまい、とても弱い力しか発揮できないデメリットも抱えている。
相殺のデメリットによって成体になれないので、幼形成熟すること
で（幼虫の形態のまままで生殖出来るようにして）子孫を残してきた。
（成体に至れたコケちゃんだけど幼形成熟の特徴を持っていたコケダ
マから進化したので、つまり大人の身体へと成長する可能性は……）
豆知識として、コケダマが卵から孵った時に苔を与えず、そのまま
成長させようとしても死んでしまう。

これはコケダマ種が苔と共生関係にあるからである。

本体は苔に栄養を吸わせ、苔も本体に栄養を渡している。

そのため、苔を失ったコケダマは栄養不足に陥り死んでしまうので
ある。

ポテイマスは、ただ見た目が綺麗なだけの生き物が神に近かったこ
とを知らない。

僅かなMAエネルギーの乱れでドンドン死んでいくので、MAエネ
ルギーの存在に気づいて本格的に使用し始めた時点で絶滅しており、
調査のしようも無かった。

魂のない死骸や標本からは判別できる要素は消えてしまうので、剥
製を眺めても何も出てこないだろう。

——《コケちゃんの現在の精神汚染》——

窃盗に忌避感がない。

普段は盗むなんて事はしないけれど、対価となるものがあればそれを置いて勝手に持つていこうとするし、持ち主がいらないのなら回収しているだろう。

記憶の忘却。

前世での記憶が薄れていて重要ではない記憶はかなり臆気であり、しかも気にも留めていない。

感情摩耗。

前世での明るさとか澆刺さが無くなっている。しかし奥底には激情が眠ったままなので、爆弾が埋まっているのに誰も気づいていない。

《コケちゃんの人化イラスト》

いちまいえー

せつていぐあー

——《スキル・称号》——

《神仰：神へと至らんとするn%の力。D謹製「神の基本講座お試し版」へのアクセス権を獲得し、神性領域の拡張と調整を行う。また、Wのシステムを凌駕し、MA領域への干渉権を得る》

《解脱：一時的にシステムサポートを受けなくする》

《神仰の支配者：取得スキル「魔法付与LV10」「解脱」：取得条件：「神仰」の獲得：

効果：MP、魔法、抵抗の各能力上昇。魔法系スキルの熟練度に＋補正。支配者階級特権を獲得：

説明：神仰を支配せしものに贈られる称号》

Dが要望に応じて作った特殊スキルであり今まで存在しなかったスキル。

もし正規ルートで取得するならば「祈祷」「鑑定」「禁忌」などが条件となる。

祈祷系スキル最上位。

神に至るため器の強化と調整を行っていき、神性領域をドンドン拡張していくが、最後の最後で仕上げとして、その人にとって大切なものを生贄に要求される。

判定基準が、その人にとっての想いの強さなので、魂の大きさや量は関係ない。

絶望や悲しみが大きい相手ほど生贄にふさわしい。ここで狂わなければ神に至るための準備が完了する。後は神にふさわしいエネルギーを取り込むことのみで、器を満たせば神となる。

禁忌を知る、神についての概要を知る、逃れられない役目を知る、大切なものを犠牲にする、エネルギーのための虐殺をする、そこまでやってようやく神になれる、殉教と背信の血塗られた道を歩まされるスキル。

七元徳から、対神徳。「信仰・希望・愛」の3つ。信仰↓神仰。

他に枢要徳の、「知恵・勇気・節制・正義」もある。叡智は知恵に相当しているのかなと？

《神仰から課される任務一覧》

《第一段階：独力での魔力感知と魔術を使用し、血潮を活動させよ》

《第二段階：人族1万人分の魂を生贄に捧げ、器を形成せよ》

《第三段階：大切なモノを自らの手で捧げ、神の魂を創造せよ》

《第四段階：器を満たし、流出させよ。それをもって神とならん》

エイヴィヒカ……んんツ、カバラの流出論から。

ちなみに、まだまだ非公開の効果は「神仰」に隠されていますよ。

《乱魔の鱗粉・死滅の鱗粉》

邪眼系スキルの鱗粉版。

遠距離からの不可避の攻撃から、近距離で空間全体に作用する方向性に変化している。

細かい粒子に接触することで効果を発揮するが、空中に漂う鱗粉どうしが結びついて結界の性質を持っているので、触れていなくても影響を与えられる。

《操魂》

魂を操るスキル。

マステマ専用とも言える取得の難しいスキル。

支配下にある魂を、自由に奪ったり改変することが可能。

その力は眷属支配下にある魂にも適応される……

《魂魄召喚》

支配下にある魂を、依り代を与えることで召喚するスキル。

通常では召喚可能なキャパは総量の10%。

儀式召喚（自分の身体を捧げて呼び出す場合）でのみ、その制限を越えられる。

マステマの悪霊（堕天使）の助命を願い許された数が、10分の1であったため。

コケちゃんの取り込んだ魂の総量は漂白した分も含めると相当の数に登るので、コケダマ種全て合わせても10%に届いてはいない。

旅の始まり

24 よい道連れは、悪魔の所業

《現在所持スキルポイントは1178390です。スキル「不死」をスキルポイント100000を使用して取得可能です。取得しますか？》

《「不死」を取得しました。残りスキルポイントは1078390です》

……みんなのためにも、私が死ぬわけには、いかないから。
？

お昼寝日和だと言わんばかりの穏やかな光と空気に満ちた道なき道を進む私たち。

見上げた空は木々の枝葉によるカーテンで包まれていて、その隙間からは澄み切った空の美しいセレストブルーが顔を覗かせていて、心地よい日差しが私たちを包んでいる……はずだけと。

「ひゅー、ひゅー……ッ」

約1名、その幸せを享受することが出来ずに、地獄のような責め苦で死にそうになっている幼子が強制的に地面を歩かされていた。

『こけ、もりい……たすけ……』

本来親の腕に抱かれて庇護されるべき赤ちゃんが、私に助けを求めて悲痛な念話を繋げる。

その声に対し、私は自分の熟練度上げも兼ねて、そつと奇跡魔法で体力を回復させてあげた。

『ちっ、がああーうッ！』

「……ごめんね、後々のソフィアちゃんの為だから」
うん。

わかっているけど、やっていることは非常に合理的で効果的な修行方法だから、いつかソフィアちゃんも無駄では無かったって思える日

が来るから……

そして私は、白ちゃんがソフィアちゃんを糸で縛り操り人形にしているのから目を逸らした。

白ちゃんとは蜘蛛子ちゃんのこと、この白という名前はアリエルさんが蜘蛛子ちゃんにつけたあだ名のようなものであり、蜘蛛子ちゃん自身も別に好きでも嫌いでもない心底面倒臭そうなどといった感じだったけれど、その呼び方が私たちの中で定着したので私もそう呼ぶようになった。

アリエルさんから呼ばれると微妙に嫌そうなのに、私からだど平気そうなのは少し不思議かな？

ついでにソフィアちゃんの呼び方も、さんからちゃん付けに変えていた。

親しみを込めてのちゃん付けなのに、子供扱いするな！とソフィアちゃんは怒っているけど。

まあ幼児の身で怒っても可愛いだけだし、ちょっとその反応が面白く感じてすらいるから、悪いけど無視しようと思っていた。

隣で繰り広げられる女児虐待の数々と助けを求める絶望した瞳を無視しながら、私は腕に抱えた生まれたばかりのコケダマに優しく頬ずりをした。

喧嘩のときに見るも無残にボロボロになったツギハギだらけの侍女服と私の頬に挟まれた小さなコケダマはクネクネと暴れるけれど、それはもつと抱きしめて欲しいという意思の表れだった。

この子は新たに生まれてきたコケダマたちの最初の子で、今は眷属支配のパスが繋がっているけれど、少し前までは私との繋がりもなく魂の定着しきっていない卵でしかなかった。

私は新たな生命のこの子に祝福をと、「メント」と名前をつけてあげた。

ほかにも身体を包む苔を私自身の苔から分けてあげたり等、ちょっと過剰にお祝いをプレゼントしすぎたのか、生まれたばかりなのにスキルなどがやたら充実しているコケダマが誕生してしまったけれど。

「メントは普通に育つてね……、えっ？ アレでもいいの？ 本当に？」

なぜか、あの拷問的修行法をやりたいと言っているメントに驚きを隠せずに何度も確認するけれど、その度に返ってくる答えは同じで決意は堅そうだった。

試しにダメージを最小限に押さえた魔法を、うっかりで殺してしまう事がないように気をつけながら慎重に当たてみるけど、もっとと言わんばかりに頑張つて耐えていた。

……本当、無理はしないでね。

私は修行している面々に対して僅かでもダメージが入ったら回復を掛けてあげながら、私たちはサリエーラ国の首都へと向かっていた。

目的は、まだ身の振り方を決めかねているソフィアちゃんとメラゾフィスさんが、何を選んでもいいように、とりあえず首都に向かってそこからどうするか決めるといふものだった。

ついでに生活必需品なども買い揃えるために、規模が大きい首都に向かうという理由もあった。

そして食事で休憩となり、長時間幼児の身で歩き通しだったソフィアちゃんが糸から解放され、顔面蒼白で気絶し倒れ込もうとしているので、地面に激突する前にそつと念力で受け止めた。

空中に不自然な体勢で浮かんでいるソフィアさんは、泡を吹いて意識が飛んでピクリともしないけれど、一応生命反応はしっかりしている。死ねることは無い、……と思いたいなあ。

メラゾフィスさんが気絶したソフィアさんを介抱していると、白ちゃんは料理の準備を始めていて、手早く糸で小枝を集めると元々発火しやすい性質である糸ごと火を着けて燃やすことで簡単に焚き火を作り上げると、空納からフライパンや魔物肉などを取り出して豪快にお肉を焼いては調味料をぶっ掛けるだけの、あまりにも女子力の欠片もない料理を作っていた。

いやまあ、旅の空だから凝ったものは作れないにしても、それは無

いでしょ。

毒持ちの魔物肉を焼き上げて適当に調味料を掛けただけの、白ちゃんの料理とも言えないナニカがソフィアちゃんとメラゾフィスさんに振る舞われると、今度は自分用の普通のお肉を焼き始めていた。

気絶から復活したソフィアちゃんは、手元にある毒々しい色のお肉と今焼いている赤色のお肉を見比べて、羨ましそうな悲しそうな表情で視線を行ったり来たりしていた。

『……ねえ、これ食べなきゃダメなの?』

「毒耐性や悪食の称号のためにも、食べたほうがいいから……」

毒耐性などは私もレベル上げのサポートが出来るけれど、悪食に付属する腐食耐性は先に獲得しておかないと即死の危険性が常に付きまとうし耐性上げも出来ないから、無理してでも頑張ってほしい。

そういつた修行内容に関しては白ちゃんから何をするつもりなのか聞き出して、それを私から2人に説明していたのだけれど、メラゾフィスさんには不服だったらしい。

「白様、お嬢様にもまともな食事を出してはいただけませんか?」

自分のためではなくソフィアちゃんのために、白ちゃんに意見するメラゾフィスさん。

けれど声を掛けられた白ちゃんは、これまで一緒に過ごしてきた経験から、内心テンパっているのが予想できるので、背を伸ばしてメラゾフィスさんの肩を叩く。

白ちゃんから私に視線が移ったメラゾフィスに、ソフィアちゃんから念話が飛んできて窘められる。

『メラゾフィス、これも必要な事よ。かまわないわ』

そう言っただけで黙々と、毒入りステーキを食べ続けるソフィアちゃん。

その姿に何も言えなくなったのか、メラゾフィス自身も諦めて毒々しいお肉を食べ始めた。

しかしその顔には処理しきれない感情が煮詰まって、暗くて陰しい表情をしていた。

「ほい、コケちゃん」

白ちゃんは焼き上げた普通のお肉をパンと野菜で挟むと、それを私とアリエルさんに手渡ししてくれた。

私は焼き立てで熱を持ったそれを両手で受け取った。

「ありがとう、白ちゃん」

軽く微笑んで感謝を告げると、白ちゃんも笑い返してくれた。

アリエルさんにも同じ様にパンを配ってお礼を言われるけれど、白ちゃんはそれを素っ気なくスルーして、自分の分のパンに齧りついた。

……うーん、この対応でも白ちゃんとしてはマシな方だし、複雑な関係だから口を挟みづらい。

いまだに蟠りが残る白ちゃんとアリエルさんの関係性だけど、下手に掻き回して大惨事になるよりは時間が解決させてくれるのを待つほうがいいと思った。

もし2人が喧嘩でもした場合、被害が以前の比では済まされず、どさくさに紛れて今度こそお互いに確実に殺そうと動きかねない危うさを感じられたから。

そんなどこかギスギスした空気が流れる息が詰まるような休息の時間にて、私は気になっていた話を聞くためにアリエルさんに質問をした。

「ねえアリエルさん、ポティマスの正体、その真実を教えてくださいませんか」

「クズ野郎」

「そういうのではなく」

「……むうう」

一瞬で嫌悪感がありありと浮かんだ表情になったアリエルさんが反射的に答えるけれど、そういったはぐらかした答えが知りたい訳ではないので再度質問するけれど、アリエルさんはどう答えるべきか、迷っているような思案顔だった。

「はあ、みんな気になっているみたいだし、話しておくべき事なんだけど……」

盛大に溜息を吐いたアリエルさんは、一拍おいてから告げた。

「ただし、これを聞いたら後戻りは出来ない。あいつはただの悪党なんかじゃないし、私が言うのもなんだけど世界の敵みたいな奴だ。ポティマスの正体を全部知ったら、もう平穩に暮らすことは出来なくなる。……イヤ、出来るけれど、きつとしこりとなって心の奥底に残り続けると思う。」

当たり障りの無いことは前にも言ったけれど、聞きたいのはそんなのじゃ無いでしょ？ それでも全部を知りたいなら、その覚悟を決めてから聞いて欲しい。特にソフィアちゃんとメラゾフィスくんにはまだ引き返せるチャンスがある、それを充分に考えてから決めて。

……私はちよつと席を外すから」

そう言つてパンを持ったまま、森の中へ消えていくアリエルさん。その背中には深い哀愁と怒りが滲んでいて、彼女にとつても簡単に説明できないような重さを感じられた。

残された私たち4人は顔を見合わせると、輪になって話し始めた。『ポティマスって、あいつのことよね？ あの機械の身体以上にヤバイ秘密があるの？』

「そうだね、まず前提知識として、私が禁忌のレベルが10になったときに知った事を教えるよ」

私は禁忌の情報の中から、機械技術とこの世界の成り立ちに関する話を抜粋して2人に説明した。

禁忌で知った内容は大雑把で最低限必要な情報しか載っていないかったけれど、それでもヒントとなる出来事と原因は説明されていたから。

この世界は遙か昔に、地球よりも進んだ技術で発展していた世界だったこと。

そのときに開発された技術で人々は取り返しのつかないことをし、崩壊への道を辿ったこと。

その技術が星を破壊して滅びに向かっていた時、この星にいた女神を生贄にして今の世界に繋がり、こんなステータスなどがある世界が出来上がったこと。

そして、この星を滅ぼした技術に繋がる機械技術は徹底的に排除さ

れて姿を消していったのだろうと、私自身の解釈も含めながら説明をしていった。

そんな異端とも言える機械技術を今でも手にしているエルフについては、様々な解釈が出来るそうだけれど、確かに言えることは一つだった。

「あれは、本来あつてはならないモノなのは確実だと思う」

「……あーあ、そこまで喋っちゃうと私が黙っていても意味無いじゃん」

振り返ると、頭を掻きながら複雑そうな表情で私たちを見つめるアリエルさんの姿があった。

「改めて聞くけど、本当にいいんだね？ 聞いたら戻れないよ？」

最後の念押しで警告をするけど、私たちの意思は纏まっていた。

「教えて下さい」

『私からもお願いするわ』

「……私からもお願いいたします」

「……」

私たちの顔を見渡して覚悟のほどを感じ取ったアリエルさんは、一度深く目を閉じると語りだした。

「ポティマス・ハアイフェナス、それがあいつの名前。でもってエルフの族長……まずは基本的なことから説明しようか」

そして、まず最初に普遍的なエルフについての基礎知識から始めると、次に機械技術について詳しくないメラゾフィスさんのために機械とはなにかを簡単に説明して、それをエルフは唯一有して維持していることを説明した。

そしてその技術を利用して、この世界の裏で暗躍しているのがエルフで、その技術はこの星を滅ぼしたものと同一技術で成り立っていることを語ったのであった。

「……と言ったところさ。つまりこの世界は遙か昔、地球より発展していて、けど過ちを犯し滅びの道を辿った。そのときに技術は失われ、エルフ以外は衰退の一途を辿った。けれど技術を維持したエルフは今でも星を滅ぼした技術を持っていて、今もなお星に負担をかける

禁忌を握っているって訳さ」

肩をすくめて脱力するアリエルさんは、自嘲のような笑みを浮かべる。

そんな彼女に私は、核心に迫る質問をした。

「その技術とポティマス、その関係性はもしかして……」

その質問に笑みを深くすると、前髪をかき上げながら凄絶な笑みを浮かべた。

「……その技術を生み出したのが、ポティマス・ハアイフェナス。あいつが全ての元凶だよ」

瞳の奥にドロドロとした宿怨を湛えたアリエルさんが、この世界の真実の一端をここに語った。

『スキルを取るぞー！』

『ここからここまで、全部だ！ 全部のスキルちょうだい！』

『イヤ、全部はムリだって』

『魔法はコケちゃんからコピったから、余裕があるね』

『ここにポイントがあるじやろ？ それを、こうじゃ！』

『うーん、この』

『スキルポイントは犠牲になったのだ……犠牲の犠牲にな』

『どうすんのさ、この微妙なスキルの数々』

『知らん！』

『これももうわかんねえな』

『駄目だこいつら、早くなんとかしないと……』

？

血1 旅は憂いもの辛いもの

私の名前は、ソフィア・ケレン。

こことは違う世界から転生してきた転生者で、裕福な貴族の娘として生まれた。

前世の名前もあるけど、割愛するわ。

あまり前世の自分のことには、いい思い出が無いもの。

美形の両親から愛情を注がれ立派な屋敷で優しい人達に囲まれ、不安はあったけれど次第に割り切って、このまま幸せな人生を歩めると漫然と思っていた、それなのに……

本当、あまりにも呆気なく何もかも失ってしまい、残ったのは私自身とメラゾフィスだけ。

笑っちゃうわ、何もかも空虚で心が追いつかない。

それは、前世と今世では過ごした年数が違うのもあるし、今世で生きていく実感が得られる前に全て無くなってしまったから、ということもあるわね。

そんな私は理由は分からないけれど、窮地を救ってくれた若葉、アリエルさん、苔森の3人と、メラゾフィスを加えた5人で旅をするこ
とになったわ。

若葉姫色という人間の第一印象は「人生勝ち組」。

まあ、これはクラスの全員が同じ様に感じていたと、私は思うわ。

こんな美人が存在するなんて信じられなかったわ、嫉妬してしまう
ほどに。

それほどまでに彼女は神秘的で、そして醜い感情を抱くほど羨まし
かったわ。

そんな彼女もこの世界に転生していて、なぜか人外になっていた
わ。

人外でも美しきは相変わらずでムカつくけど、それよりも白が強制
した仕打ちに怒っているわ！

なんなのよ、私まだ赤ちゃんよ!! どうして延々と歩かされている

のかしら!?

苔森が理由を説明してくれたけれど、納得したからと言って感情を抑えられる訳じゃないわ。

そうそう、このメンバーで転生者はもう1人いるわ、それが苔森。前世の彼女は若葉ほどではないけど可愛い容姿をしていて、好き勝手に動いているのに許されるような、可愛い正義を体現しているような人間だったわ。

いつのまにか居なくなつて好きなことに夢中になつているのに、大して怒られることなく上手く世間を渡り歩くといった、問題にならない範囲を無意識で見極めてストレスを歩ける少女だった。

だけど、今の苔森は……、別人ね。

中身が違うと言う訳ではないのよ?

間違いなく前世で一緒だったクラスメイトだと、確信しているわ。人外の要素もあるけど、姿も似ている……、というかもつと綺麗になつている気がするわ。

小柄な体躯も相まって、まるで妖精か作り物めいた人形みたい。

けれど、そうね……、見た目の変化もそうだけど、目が違うわ。

彼女も人外として生まれ白と生死の境を何度も彷徨つてきたのは聞いたけれど、白からはそんな雰囲気は一切感じられない自然体なのに、苔森からは暗い闇を無理矢理に閉じ込めているような、危うい色を感じられたわ。

だって彼女、前世での天真爛漫な笑顔、一切しなくなつているのだから。

微笑むような軽く笑う表情、私は知らない。

あんな顔、見たことなかった。

あんな……、目が笑つてないってハッキリ感じる、濁つた笑顔を。

私でもそう思うのに、白はおかしいと思わないのかしら?

ずっと一緒にいたんでしょう? まあ人の姿を得たのは、つい最近らしいから魔物の表情なんてお互いわからなかったって言うのも、あるかもしれないけど。

それでも前世を知っていれば、あの違和感に気づかないなんてありえない事だと思うのだけど、どうして白は何もしないのかしら。

こうやって苔森のことを考えているけれど、実際に私がなにか出来ることは存在しない。

結局本人から話を聞いたからと言って、私が苔森が感じてきたことの欠片でも完璧に理解出来るとは言えないし、前世での私は人とは距離を置かれるタイプの人間だったから、こういう時どうすればいいのか、わかるわけ無いじゃない。

危ういと感じている、けれど私では対処出来そうにない。

そう思った私は人生経験豊富そうなアリエルさんに、このことを話した。

「え、ッ？ 元々あんな感じじゃなかったの!？」

『ええ、前世は今とはまるつきり違う性格だったわ』

私たちは、街の中に通行料を払って何事もなく入り、買い出しを終えると大きな宿の上等な一室を確保して、その居間のソファに腰掛けながら会話をしていた。

内容は、もちろん苔森のこと。

「私が初めて会った時はお互い言葉が通じなかったから詳しくはわからなかったけれど、雰囲気は今と変わらなかったはずだよ。つまり……」

『それ以前に、性格が変わるほどの何かがあった。ということですね』
私はプライベートの漏洩だと思いつつも、アリエルさんに前世での苔森の性格や雰囲気について説明していた。

一応、考える頭は多いほうがいいと思つてメラゾフィスも部屋に招いて聞いてもらっていた。

「たしかに苔様には、影のある雰囲気を感ぜられますが理性的であり、この面々の中でしたら比較的マトモな方かと思つていました……」
『メラゾフィス。それは、私たちはマトモでは無いと言いたいのかしら』

「すみません、失言でした。そのようなつもりで言ったわけではありません」

私とアリエルさんの鋭い視線が突き刺さると、メラゾフィスは身を強張らせながら謝罪した。

「それほど過酷な環境だったというのもあるけれど、一番はステータスを見せてもらった時に確認したスキルの影響もあると思う」

『それって、なんですか?』

「強欲、それに禁忌LV10」

そしてアリエルさんは支配者スキルという、七大罪系スキルと七美德系スキルについて、説明をし始めた。

それらのスキルには持ち主の精神に影響を与え変質させてしまう効果があり、初代保持者の性格にちなんだ精神的影響を受けることを懇切丁寧に説明してくれた。

「というわけで、七大罪系スキルは上げてはいけないものだど理解したかな? 羨望娘ちゃん?」

『えっ、……これダメなやつですか』

「そうです。理解していると思うけど、それは嫉妬系のスキルだよ。上げないように気をつけて」

私のスキルを鑑定したアリエルさんが、持っているスキルを見て釘を刺してきた。

「その中でも特に危険なのが、傲慢系、憤怒系、そして強欲系だね」
『強欲って』

「そう、今コケちゃんが持っているのがそれ。しかも憤怒の1つ下の激怒付きで」

アリエルさんは表情を曇らせながら続ける。

「憤怒系は発動させると暴れたくなる、そして時間が経つほど症状が酷くなるという、まあわかりやすい精神汚染だね。一度使えば怒りに汚染された精神は脆くなって理性を失う」

『でも、苔森は……』

「うん。今まで怒っているところなんて見たこと無いし、あまり影響は受けていないのだと思う。それに精神汚染の影響を最小に減らす外道無効も持っていたしね」

精神汚染を防ぐには外道耐性を伸ばすのがいいと知ったけれど、も

うーつがまだだった。

「強欲系は、まあ、本当に碌でもない精神汚染を受ける」

『それって、なんですか……』

「記憶喪失、それに倫理観の崩壊」

……えっ？

「信じられない？ でも私は強欲を獲得して破滅していった保有者たちを知っている」

アリエルさんは遠い目をしながら語る。

「自分の欲望に関する記憶以外がドンドン消えていって、自分の欲求以外何も考えられなくなり、最後には自分が何を求めていたのかすら、忘れてしまうんだよ」

嘘つ、だって苔森は前世のこと、ちゃんと語ってみせたじゃない。

「外道無効で影響が少ないのもあるけど、記憶に関しては記録というスキルで先に保護されていたんだろうね。だから憶えている、けれどどこか他人事じゃなかった？」

『そう言えば……』

多少は思い当たる節があるかもしれない。

今世での出来事には実感の籠もった重さが言葉に宿っていたけれど、前世での話になると関心が薄いというか淡々とした喋り方だった気がしてくる。

「最後、禁忌についてだけ……、前に話したよね？ この世界の真実」

『ええ……』

とんでもない内容だったわ。

いまだに私もメラゾフィスも消化しきれない、重すぎる真実を知ってしまった。

「禁忌にはね、レベルを最大まで上げると世界の真実を強制的に頭に叩き込まれると同時に、贖罪を迫る思念が聞こえるようになって、それは決して消えることが無いんだよ。」

寝ても覚めても四六時中、毎日、毎日ずっと……永遠に」

私が黙り込んでいると、アリエルさんは指先を私たちに向けた。

「ちよつと方向性は違うと思うけど、こういうのがずっと続くって思ってくれたらいいよ」

すると、黒板を引つ掻いた音を聞いた時のような耐え難い不快感が突然襲ってきて、数秒間続いたらフツと消えた。

鳥肌が立った肌に嫌な汗がベタつく。

メラゾフィスが青い顔を蒼白まで変えて歯を食いしばっているのだから、私の方も酷い顔をしていると思う。

今ので、外道耐性を獲得しましたって声も聞こえだし、ちよつとシヤレにならないわよ。

「さすがに今掛けた外道魔法の不快よりはマシだけど、常に気持ち悪さが消えないのだから精神を磨り減らすだろうね」

これが、毎日、ずっと……？

息も絶え絶えの私たちにアリエルさんは話し続ける。

「とまあ、支配者スキルの危険性と禁忌をカンストさせたときの不快感、わかって貰えたかな？」

そう穏やかに笑う彼女に、初めて私は魔王と呼ばれるだけの怖さを理解した。

ベッドに身を預けたお嬢様は、静かな寝息を立てている。

夜行性の吸血鬼とはいえ、これまでの旅を考えると幼い身に掛かった疲労は相当なものだろう。

故に、深い眠りに落ちたお嬢様の安眠を妨げないように、私はそつと寝室から出た。

どうして、こんなことになったのか。

亡くなったお嬢様の両親を思い、失ったかけがえのない親友と初恋の人を想う。

どんなに嘆いてもお二人が生き返ることは無い。

私に出来るのは、お二人から託されたお嬢様を全力でお守りすることのみ。

ただ、それだけなのだが……、私には乗り越えなくてはならない問題がある。

寝室のドアを閉め、居間に入るとアリエル様が椅子に座ってくつろいでいた。

「ソフィアちゃんは寝た？」

「はい。久しぶりの屋根のある部屋での就寝ですので、ぐっすりと眠っておられます」

旅にはつきものの野宿であるが、白様と苔様が用意してくださった敷物によって、快適な休息を取れるのには感謝している。

あのような極上の手触りと柔らかさを持った敷物を瞬く間に1から作り上げた時には、驚きで声が出ませんでした。

「そう。それじゃあ、メラゾフィスくんは、これからお出かけかな？」その言葉に、私は一瞬思考が硬直してしまった。

「あれ？ 行かないの、吸血しに」

触れられなくなかったところを突かれ、私は押し黙る。

私はお嬢様に血を吸われることによって、吸血鬼となった。

「そうしなければ生き残ることは出来なかったですし、感謝もしている。」

だが、不満は無くとも、不都合や不安はある。

吸血鬼の弱点。

私は、血を飲まなければ生きていけない身体となった。

それだけではなく、日の光を浴びれば肌が爛れ、他にも様々な弱点がある。

真祖であるお嬢様には、それらの不都合は苦としないが、その眷属として生まれ変わった私にはお嬢様ほどの耐性が無い。

これまでの道中ではフードで日差しを遮り、魔物の血を口にするこ

とで誤魔化してきたが、所詮その場しのぎでしかなかった。

この身に合うのは、人の血だ。

魔物の血では命を繋げても力を発揮できない。

苔様から血を分けて貰ったが彼女の正体は魔物である、むしろ強力

過ぎる魔物の血ということで拒絶反応が出るほどに相性が悪かった。

残りのお二人も似たようなものだし、お嬢様からは論外である。

故に、このままでは遠くないうちに人間だった頃と同じか、それ以下に力を発揮できずに弱体化してしまうだろう。

それでは、お嬢様をお守りすることなど出来ず、血を吸わねばいけないとわかっているのだが、どうしても人を襲って血を吸うという行為に忌避感を覚えてしまい、お嬢様をお守りする使命感と外道な行為に対する嫌悪感がせめぎ合って、行動に移せずにいた。

「行かないのなら何のために、この街に寄つたのかわかんないんだけどなあ」

アリエル様のぼやきが、私を責め立てているように感じる。

彼女はつまり、私に血を吸わせるために街に寄つたのだと態度で示していた。

物資の補給など、あくまでついで。

本命は、私のためだと、そう言うのだ。

「しかし、人を襲うなど……」

そこまでしてもらっておきながら、私には一步を踏み出す覚悟が出来なかった。

「気持ちにはわからなくもないけれど、どっかで覚悟を決めないと、ドン辛くなるだけだよ？　　こういうのは早いうちに経験しないと、

先延ばしにするほど踏ん切りがつかなくなるよ？」

その言葉は正しい。

このままでは、いつまで経っても前には進めない。

しかし、人間として生きてきた心が、吸血鬼としての生き方を否定する。

私は、開けば何が飛び出すかわからない口をキツく嚙んで、逃げるように外へと飛び出した。

血を吸われ呆然とする女性に、魔眼の催眠の力で今夜あったことを忘れるように暗示を施して、私は逃げるように真夜中の人通りのない路地を駆けていた。

そして、いつのまにか宿に戻っていた私は、ベッドで眠るお嬢様の姿を見た瞬間、力なく崩れるように座り込んで懺悔した。

お嬢様を守るために罪を犯す私のことを、お許しください。初めての人の血は、陶醉するほどの甘美なものでした。

そのまま、全てを吸い尽くしてしまいたい衝動に駆られてしまうほどに。

私は、自分が恐ろしい。

あのまま衝動に任せていたら本当に女性の血を吸い尽くしてしまいそうで、私の知らない自分が暗い欲望に狂喜していることが信じられなくて。

これが、吸血鬼として正しい在り方なのか。

人を襲い、血を啜る。

できるのか？ 私に？

だが、やらねばならない。

不満は無い、無ければならないのだ。

そうでなければ、お嬢様が救われない。

誰が、お嬢様をお守りする？

私だ、私がお嬢様を守ると誓ったのだ。

その誓いを、私が破ることは無い。

ですが、今夜は、今夜だけは……、弱い私をお許し下さい。

跪いて身体を震わせる私は、ひたすら女神様とお二人を想い、祈り続けるのであった。

25 可愛い子には服を着せよ

ぐつぐつ、ことこと……

両手には包丁やお玉などの調理器具。

背中の腕には、塩や貴重な香辛料などの調味料を掴んだまま待機。

地球では見たこと無い、記憶にある野菜とは見た目と味が一致しない食材に悪戦苦闘しながら、大鍋を掻き混ぜて煮込み続ける。

うん。

調味料が希少だから薄味だけど、ちゃんとバランス良く味を引き出せている気がする。

お玉でスープを一掬いして味見すると、横から期待に満ちた5対の視線が見つめてくる。

それぞれ仕草に差異はあっても何を考えているのか明白な5人から、無言の催促がずっと続いているので、私は納得できる味になってきたところで白ちゃんに声をかける。

「白ちゃんー。おさらー」

「っ！ よし来たー！」

空納からスープを入れるのに適した深皿を人数分取り出した白ちゃんから、それを念力で受け取って空中に並べると、1つずつ熱々の液体と具材を注いでいく。

最後に仕上げとして、左腕の苔に酸属性を付与してピリピリする酸味を帯びるようにする。

それを、少量千切って浮かべたら完成です！

「出来たよー」

「スープだあー!!」

「……ッ！……」

普段の無表情っぷりが嘘のように破顔する白ちゃんと、無言ながらも大はしゃぎした動きで歓喜を表現するパペットタラテクトたち、5人合わせて料理出来ない腹ペコ組が大事そうにお皿を受け取っている。

そしてお肉の扱いでは一流の腕前になりつつある白ちゃんから、マ

ンガ肉と呼ばれるような巨大な骨付き肉を交換するように受け取ると、私たちは焼き肉パーティーを始めた。

ポヤポヤした顔でスープを飲み、蜘蛛型の口でお肉を食べる白ちゃん。

よく考えたら液体であるスープをどうやって飲むのか疑問だったがけれど、上手く糸に染み込ませ伝わらせる事で本体に流し込むパペットタラテクトたち4人。

同じようなポーズで並んで食べているから、まるで年の離れた長女と妹4人といったイメージが頭の中に浮かんだ。

「ねえねえ、長女の白お姉ちゃん」

「だれがお姉ちゃんじゃい。むしろ私が末っ子か姪っ子のはずでしょ」

「では、末っ子か姪の白ちゃんから見て、パペットたちの姿はどう思う？」

「……ううむ、もつと良く出来るはず」

というわけで、マネキン姿でしかないパペットタラテクトらの、美容改造施術が始まった。

白ちゃんがお手本として服の実物を作り、私は糸を使えるわけではないので形がおかしいところを指摘して手伝ったりしていると、シンブルなノースリーブの服を着た一目見ただけで少女だと理解出来るマネキンが4体並んでいた。

この段階でもだいたい雰囲気が出てきたけれど、まだまだ無機質な人形感が強いので、さらに手を加えていく私たち。

髪？ 鬘を被せよう！ いや直接植え付けてみるのも……

顔はどうしよう？ うーん土台から加工しないと、んん？ この身体系で出来ているみたい？

肌の質感を再現した！ おー凄いモチモチ。

眼球を作った！ ……え？ 元々糸だよね？ どうやって作ったの？

主に白ちゃんが動き回って改造を施していき、私はデザインの発案や調整をしながらサポートに回って一晩丸々時間を使い施術を施す

こと数時間。

そして朝日が登る頃には……

「おかしいなー？ いつのまにか別嬪さんが増えているぞ？」

街から帰ってきたアリエルさんは、本当に予想外の出来事に困惑していた。

みんなの視線が向かう先には可愛らしい顔立ちの少女が4人いて、よくよく見れば違うとわかるけれどパツと見では人間に見えるパペットタラテクトたちが、おしゃれに変わった自分の姿を喜び楽しんでいるのが映っていた。

白ちゃんが一晩で作って見せました。

いや本当凄い事をたった一晩で白ちゃんはやってのけた。

だから……、白ちゃんのほうも見てあげて。

自分の服装も変わっているのに全く気づいてもらえないから、拗ねちゃっているから……

結局かなり後になってから服装に触れられたので、微妙に不機嫌な白ちゃんをそつと宥めると、私たちは出発の準備を始めるのであった。

旅を再開した私たちは、日中に休み夜中に進んでいくというサイクルで日々を過ごしていた。

昼間はメラゾフィスさんが弱って動けないので、その間にエルロー大迷宮に帰ってコケダマたちの様子を確認する。

そして傷ついた子がいれば回復して回り、スキル上げなど修行方法が無茶じゃない範囲で教えていき、ときどき狩りなどを手伝ったりしてから、向こうの荷物に入れておいたマーキングを目印に転移して戻る。

日が暮れば歩きはじめ、ソフィアちゃんがヒーヒー言っても強制的に修行をさせられながら、街道を外れた山道などを進む日々となっていた。

そして今日は……

「自分に攻撃魔法を撃ち込んで、魔法スキルと耐性スキルを上げる訓練をします」

『馬鹿じゃないの!? あんなの死んじゃうわ!?』

先程、うっかり白ちゃんに触れてしまった事で手首から先が消し飛んでしまったソフィアちゃんが無理だ不可能だと泣きわめきながら駄々をこねているので、さっきの事故の原因と訓練の必要性について懇切丁寧に説明した。

『わかったわ。……イヤ、やっぱりこれオカシイって!? めっちゃ辛いんだけど!』

自分に撃ち込んだ魔法に悶絶するソフィアちゃんに、私は複数の苔玉を連ねて結んだ数珠みたいなブレスレットを着けた。

『あの? これは何かしら? ピリピリしたり気持ち悪い感じがしたり。かといえれば身体の調子が良くなったりして、もの凄く変な感じなんだけど』

「それは技能付与と魔法付与で、「毒攻撃」「麻痺攻撃」「酸攻撃」「睡眠攻撃」「不快」「回復魔法」を付与させた状態異常耐性とかを上げるための修行用魔法道具かな?」

技能付与は所持しているスキルを道具や武器などに付与させるスキル。

魔法付与は魔法を物体に込めて、使い切りの魔法を発動できる道具にしたり、魔法道具と呼ばれるMPを込め続ければ半永続的に使える便利な道具を作るためのスキルだと知った。

その上手な使い方をアリエルさんから指導を受けることで憶えた私は、自分が纏う苔が付与するための触媒に最適な性質を利用して、何度も練習を繰り返して無数の失敗作の果てに出来上がった完成品をソフィアちゃんの腕に取り付けたのであった。

失敗作も使い物にならない品だからという訳ではなく、ただ単純に効果が強すぎて今のソフィアちゃんが着けると死にかねないから失敗作という、しょうもない理由でボツになっていた。

『ちよつ、これ……、気持ち悪くて吐きそうなんだけど、取っちゃダメ

なのこれ?』

「頑張つて。後で属性耐性上げ用のも作るから、そっちも着けてね」

『なにこれ、外れなっ、イツ!? うぷツ……』

「あつ、メラゾフィスさんの分もあるので、どうぞ」

「……ありがとうございます。失礼、お嬢様が大変なことになってるので横を通りますね」

青い顔で首元を吐瀉物で汚したソフィアちゃんの背中を擦るメラゾフィスさんから目を逸らすと、何故か白ちゃんもアリエルさんも目を逸らしていた。

「……なに?」

「ないわー」

「白ちゃんも大概だと思つていたけれど、こっちもヤバかったか……」

私は首をかしげるけれど、余計に視線を逸らされるだけだった。

便利だと思うのに……、ちゃんと安全のために自動回復効果もついているのに。

旅を続けること数ヶ月くらい。

何度か街に寄つては進むのを繰り返していくうちに、人間関係も変化していった。

白ちゃんとアリエルさんとは最初のギスギス感が薄れてきて、短めのコミュニケーション程度なら取れるような関係に。

とはいえ軽口や牽制しあいが無くなった訳ではないので、その度に関に入つて空気が悪くならないように掻き回さないといけないので、少々気疲れする。

ソフィアちゃんからはトゲトゲしく反抗的だったのが比較的素直になり、文句を言いつつも修行に積極的になって、人との距離感も模索しているようだった。

かわりにメラゾフィスさんが日増しに表情が曇っていくのが心配だったけれど。

そのため辛気臭い表情が常に浮かぶ彼に対して、白ちゃんがイライラしたり、ソフィアちゃんも彼とどう接していいのか悩んだり、微妙な空気になっていた。

パペットたちは幾度もの改造を経たことで、見た目だけなら何処からどう見てもただの女の子にしか見えず、触った時の感触も少し違和感はあるけど人肌に近い柔らかさを持つようになっていた。

姿形がはつきりして個性も明確に表現するようになったパペットたちは、勝手に白ちゃんが名前を付けようとしていたのをアリエルさんが慌てて止めて、次の日にはそれぞれ名前がついていた。

しつかり者だけど美味しいところは逃さず抜け目ない、澁刺そうな顔のアエル。

気弱で何をするにしても迷ってしまい助け舟がないと動けない、ぼんやり顔のサエル。

ときどき不自然に動きが止まったり変な行動をする不思議ちゃんな、微笑み顔のリエル。

お調子者でジツとしていられない見た目通りの子供っぽい活発さの、笑顔のフィエル。

それが、ただの人形から個性を獲得した彼女たち4姉妹の名前だった。

彼女たちはアリエルさんが召喚で呼んだり戻したり繰り返していたのだけれど、今では常に4人全員が呼び出されたまま、一緒に旅に同行していた。

そんな問題だらけな旅の途中だったけれど、その間にも無数のモノ造りをしていった。

いわゆる魔剣とよばれる特殊な効果を持った武器を制作してみたり、いい加減サイズの合わないボロボロの服でいるのも良くないと思っただので、白ちゃんに協力を仰ぎつつ神織糸を織り交ぜながら布を作って結果異常な耐久性を持った服が出来上がったりと、様々な装備品が出来上がっていた。

『翠苔の翹旗杖：』

攻撃力：9413

耐久力：99999

特性：「魂喰」「破魂」「外道属性」「自動成長」「自動修復」

『翠苔の魔女服』

攻撃力：13

耐久力：99999

特性：「魂喰」「ダメージ吸収」「魔法吸収」「魔力貯蓄」「自動修復」
そこらの金属などよりも遥かに強度が高い自分自身の身体を利用して、苔や髪の毛を編むことで布地を作ったり、翅を根本から切り取ってそのまま取り付けたり布の裏地にして貼り合わせたりして装備品を作った結果が、このようなおかしな性能を持った品々が出来上がっていた。

旗杖は、持ち手を白ちやんの脚の一本を芯にして持ちやすく加工し、先端に鎌の先端と4枚の翅を繋ぎ合わせて隙間を苔で埋めた、翅がはためく私の身長よりも巨大な杖。

付与された特性から見て分かる通り、普通に振るうと危険極まりない破魂の性質が宿っていて、また攻撃した相手の魂を削り取って吸収する「魂喰」という効果も付与されているので、普段は旗を巻きつけて封印させておかないと危なっかしくて使えない代物になっていた。

魔女服のほうは、バツサリ切り落とした私の髪と白ちやんの神織糸を織り合わせて黒く染めた布に裏地として翅を。パッチワークのように貼り合わせて縁取りに苔をファーのように並べた、広い鏢の魔女帽とAラインの足元まで覆うローブ合わせてワンセットの服である。

こつちにも「魂喰」の特性が付与されているけれど服自体に攻撃性能は無いので、メインとなる効果は受けた攻撃をMPに変換して貯蓄する機能だった。

補足として、一時的に髪が短くなったけれど切り落とした瞬間から少しずつ伸び始め、数分後には同じ長さの髪に戻っていたので、私はこの先ずっとロングヘアが固定されることを自覚した。

魔法とかスキルを使えば、そんなに汚れないし洗うのも簡単だから平気だけど、前世でこの髪型だったら、ケアや手入れがとてつもなく大変だったと思う。

武器と服が完成すれば、やることは1つ。

蜘蛛の大鎌を装備した白ちゃんとの模擬戦が勃発した。

クルクル手元で回転させて変則的な斬撃を繰り出す白ちゃんの攻撃を、こちらも同じ様に中程を持って杖を回転させることで鎌を弾き、弾いた衝撃と遠心力を乗せて旗布を束ねた穂先で横薙ぎを叩きつける。

それを鎌のカーブで受け流す白ちゃんは掬い上げるように弧を描くと、地面ごと斬り上げる。

斬撃を回避し素早く引き戻した旗杖を一回転させ旗布を一部展開させる。

遅れてやってきた土砂を広げた旗布でまとめて吹き飛ばし突きの型に戻そうとするが、その前に白ちゃんの大鎌が首の真横にあった。

「……参りました」

「49戦中42勝3敗4引き分け。ふふん、圧倒的なパワーには小細工など通用しない!」

「それ、アリエルさんと模擬戦しても言える?」

「……ふひゅうー、ひゅうー」

「口笛吹けてないよ」

日々の日課に模擬戦が追加された私たちは、街に行つたアリエルさんと吸血鬼主従の買い出し班が帰ってくるまで、こうして鍛錬や修行に時間を使うのだった。

ストレス発散には無心になれる運動が効果的なのは、前世でもこちらでも変わらない事実なので、たまにはガス抜きをしないと2人とも参ってしまいそうだからね。

そうして時間を潰していると、帰ってきたアリエルさんが普段出さない、あるモノを食事に持ち出してきた。

「じゃじゃーん! 今日気分を変えて、お酒行ってみようー!」

今まで街を覗いたときに酒場などで冒険者や肉体労働者などが浴びるように飲んでいたことで、お酒があることは知っていたけれど、それを買ってくるとは思っていなかった。

だって、見た目的にお酒飲んで問題無さそうなの、メラゾフィスさんしかいなかったの。

「というわけで、ほい。白ちゃんとコケちゃんにも、ほい」

えっ、私たちにも？

手渡されたお酒が入ったコップを眺めていると、白ちゃんは数秒眺めると躊躇なく飲み干した。

なんか色々悪いことしている気分だけど、飲酒程度とは比べ物にならない事を行ってきたので、今更かと思いい私も口をつけた。

あつ、甘い……飲みやすくて……、頭のおくがふわふわしてきた……か、も……？

なん、か……、からだあ……かる、く……て、きもち、いい？

そしてわたしはりせいがとけていくのをぼんやりとかんじたずなをてばなした。

あはは〜？ たましいのひかり、きれい……

26 旅の恥はかき捨て

お酒を飲んじやったコケちゃん私は、ふわふわした気分のままお酒を飲んでいきます。

両手でコップを持ってクピクピのむ姿は、たいへん愛らしいものです。

さて、コケちゃん私がお酒を飲んで意識がポヤポヤしているとき、ほかの人は何をしていたのでしょうか？ 見てみましょう。

「まだまだあるからねー。ジャンジャンいこー！」

まおう少女アリエルちゃんは、お酒をコップに入れるとすぐ一気飲みして、あっという間にお酒が入った樽を空っぽにしてしまいました。

くれぐれもよい子のみんなは、一気飲みをしちゃダメですよ？ 急性アルコールなんたらで危ないのです。

そしてアリエルちゃんは、1樽目を空っぽにすると2樽目のお酒を開けました。

そう、アリエルちゃんはお酒を樽で、それも何個もいっぱい買ってきたのです。

こんなにあつては飲みきれません。
そう思うのがふつうですが、なんとアリエルちゃんが1人で樽いっぱいに入ったお酒を飲み干していたので、たぶん大丈夫なんでしょう。

「ふふっ、ふふふ……」

白ちゃんは、お酒が入ったことで気分が良くなっているようです。

アリエルちゃんに対抗してか早いペースでお酒を飲む白ちゃんも、ドンドン樽のなかみを少なくしていきます。

けど、アリエルちゃんほどお酒になれていないのか、お顔が真っ赤です。

おめめをグルグルさせた白ちゃんは、お酒の力かテンションが高くなっているようです。

「キュー……」

あらあら、コツソリお酒を飲んでみたソフィアちゃんはひとくち飲んだだけで倒れちゃったようです。

ちっちゃい子がお酒を飲んだらダメなのが、はつきりわかりますね。

「う、ひつく、ううう……ッ」

おや、メラゾフィスくんが泣いています、どうしたのでしょうか？

どうやら彼は、人間としてのあり方と吸血鬼のあり方とで、悩んでいるようです。

それがお酒の力によって、出てきちゃったのでしよう。

そんなメラゾフィスくんを見た白ちゃんは、無理矢理メラゾフィスくんにお酒を飲ませます。

お酒を飲まされて慌てるメラゾフィスくんを、ケラケラ笑う白ちゃん。

わるい子です。

「ゲホッ、ゲホッ！」

メラゾフィスくんが怒っています。

睨まれた白ちゃんは、のほほんと笑っています。

「うん、そっちの方がいい顔だー。ウジウジしてるよりよっぽどマシ」

「あなたに……、何がわかるッ！」

メラゾフィスくんが大声で叫びます。

「何もかも失って、その上吸血鬼になってしまった私の気持ちだが、あなたにわかるか!？」

メラゾフィスくん、迫真の叫びです。

それに答える白ちゃんですが……あつ、どこいくのコケちゃん!?

コップのお酒が無くなってしまったコケちゃん私は、一滴も残ってないコップを悲しそうに見つめますが、樽の中にはいっぱいお酒が入っていることに気づくと、フラフラと立ち上がります。

アリエルちゃんは、言い争う白ちゃんとメラゾフィスくんか、それとも身体を右へ左へユラユラさせてお酒の樽に向かうコケちゃんか、どっちを見るか迷っているようです。

「あはは〜、よいしょおー！」

お酒が入った樽のそばに来たコケちゃん私は何ということでしょうか、
とつても重そうな樽の1つを両手で抱えて運んでいきます。

その樽を元いた場所まで持つてくると、蓋をちっちゃなおてで何
度も何度も叩いて強引にこじ開けます。

「えいつ、えいつ」

かわいいセリフに反して叩かれた樽からは、ちよつとシヤレになら
ない音が聞こえます。

そして蓋が開いた樽に抱きつくつとフチにあたまを乗せて、樽の中
になつがーい舌を垂らして入れると、ちうちうお酒を吸い始めました。

「ちゆうう………。ちぱつ、おいしく、あはは〜」

息継ぎのために口を開くと、ふだんの落ち着いたしゃべり方とはち
がう、鈴を転がすような幼く甘い声がコケちゃん私の口から響きまし
た。

そして再び樽の中に舌を入れると、その独特の作りになっている舌
をストローのようにしてお酒を飲み始めるのでした。

「えへへー、ちゆうう……」

「どうする？」

「死ねない！ 私は、お嬢様のためにも、まだ死ぬわけにはいかない
！」

おや、どうやら白ちゃんとメラゾフィスくんとの言い合いも、大詰
めに入っていたようです。

首元に鎌を突きつけられたメラゾフィスくんは叫びます。

その答えに満足したのか、白ちゃんは鎌を下ろしてニツコリ笑いま
す。

「生きる意味とか、誇りとか信念があるなら何迷う必要があんの？」

吸血鬼になったらそれに影響あんの？ ないならそんなの些事だよ
些事、くだらない」

白ちゃんはメラゾフィスくんの悩みを一刀両断したようです。

メラゾフィスくんは白ちゃんの言葉に核心を突かれ、呆然とうなだ
れていました。

崩れ落ちるメラゾフィスくんとは対照的に、白ちゃんは気分良くお酒を飲み始めるのでした。

「吸血鬼じゃなかったらいいの?」

「おや? コケちゃん私が会話に入ってきました。

「どうやら一部しか聞いていないようです。

「えっ……? いや、私は吸血鬼になったことに文句などございませぬ。ただ血を吸うことに罪悪感を覚えていただけで……、それももう、白様の言葉で目が覚めました」

メラゾフィスくんは憑き物が落ちた顔で、自分自身のことを笑います。

けれど、コケちゃん私は今の言葉も半分しか聞こえていなかったように……

「血を吸わなくても済むなら、それでいいの?」

「え、……ええ、そうですね?」

メラゾフィスくんが困惑しています。

まばたきせずジッと見つめるコケちゃん私は瞳孔の開いた瞳を輝かせ、再び確認します。

「なら、メラゾフィスは血が必要で無くなればいい、そう思っているんだよね?」

「いえ、私はもう……」

「待っててっ!」

メラゾフィスくんの答えをヘンに受け取ったコケちゃん私は、走り出します。

背後では、メラゾフィスくん以外のみんなも困惑しているようです。

そして酔っ払ってしまいスヤスヤ眠るソフィアちゃんのそばにしゃがみ込むと、ジツと彼女を見つめます。

しゃがんだ姿勢からピクリとも動かないコケちゃん私は、その瞳にどうやらソフィアちゃんの魂を映しているようです。

魂を把握する力を最大限発揮して、ソフィアちゃんの魂に結びついた力を紐解きます。

そして関係ないスキルや称号の術式の中から、お目当ての術式を見つけ出します。

見つけた術式を、本能に近い幼い思考ながらも研ぎ澄まされて純粹になった演算能力で、記憶し脳内に構築を再現していきます。

けれど、最後の1ピースが上手く見えません。

このままでは術式が完成しない、そう思ったコケちゃん私は眠っているソフィアちゃんの胸に指を突き立てました。

「えいつ」

「すうすう……ッ!? ぐふッ!?」

「お嬢様!? 苔様なにを!」

「ちよっ、コケちゃん!」

「うっわ……」

なにやら後ろが騒がしいです。

でも、そんなことコケちゃん私は聞こえていません。

ソフィアちゃんの心臓に触れた指から最後の1ピース、真祖の術式をコピーしました。

そして血を吐くソフィアちゃんの胸から指を引き抜くと、青い顔をしてヒューヒューか細く息をするソフィアちゃんに癒やしの奇跡を掛けてあげます。

「これでよしー つぎ〜」

片手を血で染めたコケちゃん私はメラゾフィスくん私に近づきます。

返り血に染まって笑顔を浮かべるコケちゃん私に、メラゾフィスくんは足が下がってしまいます。

何故か逃げていくメラゾフィスくん私にコケちゃん私は首を傾げると一気に近づいて押し倒し、メラゾフィスくん私に馬乗りになります。

大人の男の人が痛み私に情けないうめき声を上げていると、お腹に乗ったコケちゃん私が天真爛漫な笑顔で言います。

「えへへー、さきつちよだけ、一瞬でおわるから〜」

「苔様!? おやめ下さい!」

なにやら勘違いしたメラゾフィスくん私が暴れています。

けれど悲しかな、コケちゃん私とのステータス差は圧倒的なのです。

「えいつ」

「ぐうツ!？」

血塗れの指をメラゾフィスくんの心臓に突き立てます。

そして――

「術式複製……転写、転写……転写……、えらー、劣化、一部失敗、修正……、修正……」

コケちゃん^私がブツブツ呟きながら、メラゾフィスくんの魂にさつき憶えた術式を書き込んでいきます。

強制的に魂に術式を刻まれているメラゾフィスくんは、あまりの激痛に泡を吐いて狂ったように暴れます。

それを足で押さえつけながら刻み続けるコケちゃん^私の術式はちよつと劣化してしまい、システムも突然起こったバグを修正するために、メラゾフィスくんに新たな称号を与えました。

「んー？ 始祖？ まあ、いつか!」

とりあえず目的の効果を与えることに成功したコケちゃん^私は、気絶したメラゾフィスくんの上からどいて、胸に空いた傷を治療します。

気絶しているメラゾフィスくんを突つつくコケちゃん^私に、突然の凶行で動くことが出来なかった2人の視線が突き刺さりります。

アリエルちゃんは、あんぐり大きく口を開けて。

白ちゃんも半目で、ないわーと言っています。

そしてメラゾフィスくんに術式を刻みつけて疲れたのか、フラフラとお酒の樽まで戻ってくると、それに抱きついて眠ってしまいました。

「ひゅぴー、くぴー……」

独特の寝息を立てて眠るコケちゃんを見て、残された2人は困惑した表情で顔を見合わせると、完全に酔いが醒めた頭を抱えるのでした。

ええ……。

なにこれ、どうすればいいの？

私は2樽分も酒を飲んだというのに、ついさつき起きた出来事で一気に酔いから醒めてしまい、片手で押さえた頭が二日酔いとは違う頭痛を訴えているのに、気が滅入りそうになっていた。

出来事を順番に整理すると、このようになる。

まず私と張り合うようにお酒を飲んでいた白ちゃんが酔っ払うと、ハイテンションになって誰とでも喋るようになり、メラゾフィスくんに絡みだした。

無理矢理酒を飲ませる白ちゃんにキレたメラゾフィスくんは、その勢いのまま白ちゃんに食って掛かり、吸血鬼になってしまった私の気持ちかわかるのか、と叫んだんだよね。

で、白ちゃんはそれがなんだと、こちとら一回死んで全て無くして、その上蜘蛛だよ？ 吸血鬼なんてちよつと不便で血を吸わなくちゃいけないだけじゃん？ と論破した。

それを聞いたメラゾフィスくんは言葉を失い何も言えないでいる間に、白ちゃんが次々と喋ってソフィアちゃんにも同じことが言えるのか、ソフィアちゃんが前を向いているのにお前はどうかんだと論じて、そんなに嫌なら死ねばいいと鎌を突きつけた。

本気の本気を示すように威圧を開放して選択を迫る白ちゃんに、顔を青くしたメラゾフィスくんは震えながらも、死ねない、お嬢様のためにも死ぬわけにはいかないと、意地を見せた。

その答えに満足した白ちゃんは鎌を下ろして笑い、答えがあるなら迷うことは無いと、そう言い切ってメラゾフィスくんの悩みを断ち切ってしまったんだよ。

呆然とするメラゾフィスくんだったが、その顔には今までの苦悩は消えていて彼の中で一つの答えが生まれたのを感じた。

ここまでだったら、白ちゃんが悩みを解消させたこと以外には納得できる、いい話だったなーで終わるんだけど問題はこのことから。

いままで大人しく静かに……、いや酒を樽で持っていき力づくで蓋

を抉じ開けて飲んでいたので静かとは言えないのだけれど、会話にも参加せず1人で飲んでいただけだったコケちゃんが、急に白ちゃんとメラゾフィスくんの会話に混じってきたんだよ。

で、コケちゃんはメラゾフィスくんに、吸血鬼じゃなかったら良かったのか？ 血を吸う必要が無くなればいいのか？ と聞いたら困惑するメラゾフィスくんの反応を無視して1人で納得をし、ソフィアちゃんの元に向かうとしゃがみ込み彼女をジッと見続けた。

数分そのまま動かずにいて不思議に思っていると、突然コケちゃんはソフィアちゃんの胸に指を突き立てる凶行に及んだ。

激痛で目を覚ましたソフィアちゃんは暴れるけれど、それを押さえつけて何かを見続けるコケちゃん。

その行動に驚愕した私たちはコケちゃんを止めるために動こうとしたけれど、その前にコケちゃんは指を引き抜き傷跡もなくソフィアちゃんを治したけれど、凶行はそれだけで終わらなかった。

なんと今度はメラゾフィスくんに馬乗りになり、抵抗する彼を押しさえつけるとソフィアちゃんの血で染まった右手を彼の心臓に突き立てた。

明らかに普通の苦しみ方ではないメラゾフィスくんを無視して、無機質な声色で跡切れ跡切れに呟き何かを行うコケちゃんに、私と白ちゃんは気圧されて飲み込まれてしまい動くのが遅れてしまった。

そうして私たちが手をこまねいている間にコケちゃんはメラゾフィスくんに何かを施すと、気絶した彼を治療して離れると、酒樽の元に戻って抱きしめると寝息を立て始めたのであった。

一先ず寝落ちしたコケちゃんが何かしないか注意を払いつつ、気絶したメラゾフィスくんの状態を確認すると、以前には無かった称号とスキルが増えていた。

《始祖：取得スキル「不死体LV1」「視覚強化LV1」：取得条件：自力で吸血鬼になること：効果：吸血鬼のマイナス効果を半減する：説明：吸血鬼の祖たるものに贈られる称号》

おかしい。

メラゾフィスクくんはソフィアちゃんから血を吸われたことで吸血鬼になったのだから、この条件を満たしているはずが無く達成は不可能なはずなのに、何故か始祖の称号を所持していた。

そのほかにはメラゾフィスクんに異常は見られず、気を失っていること以外には何処にも問題は存在しない健康体だった。

その後もソフィアちゃんの状態を確認したり色々あったけれど、ソフィアちゃんとメラゾフィスクんの2人には、それ以外に異常は無くてむしろ過剰なまでの治療魔法で細かい傷まで完全に治されていた。

これ以上は調べようにも私の手に余ると判断した私は、再び酒を飲み直すのであった。

はああ……白ちゃんだけでも悩みの種なのに、問題がまた増えた……

荒々しくコップを酒樽に入れて掬うと、私は浴びるように一気飲みをするのであった。

「コケちゃん、昨日のことだけど……」

「忘れて下さい……っ」

ぼんやりと憶えている昨夜の記憶に、私は羞恥のあまり誰の顔もまともに見ることが出来そうになかった。

なんでっ、あんなっ！ 言動をっ!?

昨日の記憶に赤面しながら、私はメラゾフィスさんに施した術式のことを考える。

何をやったのか理解は出来るけれど、それを素面の状態で再現するのは自分でもよくわからない感覚が思い出せず抜け落ちているせいで、同じことをもう一度やるのは不可能だと感じていた。

あの、魂に直接触れていた感覚は、いったい……？

自分が行ったことに疑問を持ちながらも、私は1つ思うことがあった。

もう！ 二度とっ！ お酒は飲まないっ！

王1 悩める魔王

「ほんとに、それでいいの?」

『はい、よく考えた末に出した答えです』

「メラゾフィスくんも、同じ答えかい?」

「はい。……私は、お嬢様のいる場所こそが私の居場所だと、もう迷うことなく言えますので」

街に入る前、ソフィアちゃんとメラゾフィスくんから聞かされた決断に、私は少し考え込む。

内容は、二人がこれからどうするかの話で、予定より早い段階で答えが決まったようだった。

「もうすぐサリエーラ国の首都だけど、引き返して魔族領に行く。この決断で間違いないんだね」

『ええ、私たちは知った、いえ知りすぎてしまった。だからこそ、この国に残ってポティマス影に怯えるよりも、アリエルさんたちと一緒に戦うことを選びます。それに……』

「それに?」

『い、いえ。きゅ、吸血鬼として生きてくんですから、人族の世界では生きづらいと思うので』

……まあ、距離感については私が注意すればいいか。

あきらかに言葉にしている感じがあるのを見抜きつつ、私は二人の答えに返事をする。

「わかった。それじゃあ、この街でやることやったら魔族領に向けて出発しよう!」

まだ不安がある関係だけど、最初の頃と比べればかなり良くなってきているのだから、問題があればその都度私がお節介を焼いてあげればいい。

これからも一緒に同行するって言うのだから、機会はいくらでもある。

にしてもメラゾフィスくんの悩みを解消させたのが白ちゃんというのが、なんだか納得出来ないけれど。

私と融合した体担当の記憶を辿れば、不思議なことに人の機微とか感情を鋭く察していたりするので、空気を読む能力自体は高いことがわかるんだよね。

ただ相手のペースに合わせられないから、コミュニケーションを取るのを拒絶しているけれど。

会話を拒絶しているのに察するのは上手い、だから大事なことだけ手を差し伸べて上手く好感度を稼いでいき去っていく。

もしかして白ちゃんって、人たらしの才能があるんじゃないかなろうか。

パペットタラテクトが全員たらしされた時には、本気で頭を抱える羽目になったけれど。

いや、それ以前にコケちゃんに全員たらしされていたか。

パペットタラテクトたちが二人になついている時点で、敵対したとして戦いを渋るのが目に見えているし、コケちゃんやソフィアちゃんを人質や盾として持ち出しても効果的では無いだろうし。

転移で行ったことのある場所なら何処へでも瞬時に行ける白ちゃんに対して、私が追いつく事ができる手段はない。

コケちゃんも転移が可能だけど白ちゃんと敵対したら確実に離れていくだろうし、よくて中立で何もせず見守るだけ、けれどほぼ確実に白ちゃんの側について私と敵対すると確信していた。

今は友好的に接してくれているコケちゃんだけど、それは敵対したら敵わないと理解しているからこそその行動で、いざ私と白ちゃんが敵対した時どちらにつくかと言われれば明確に私では無い。

そんな転移持ちの相手二人と争うことになれば、私自身は負けなくても私以外が全滅する。

それは敗北以外に何と言える？

初手でコケちゃんを仕留めて排除したとしても、それは火に油を注ぐだけの行為であり、それを行ったら最後、私を確実に殺すまで止まらない復讐鬼を生み出すだけだ。

最悪が別の最悪になるだけで、なにも変わっちゃいない。

まあ、コケちゃんを殺すのも一筋縄ではいかないと理解しているか

ら、白ちゃんに邪魔されたり転移で逃げられたりで勝算は低いけど。
……ここまでは戦力的な意味で戦いたくない理由。

コレー

私には違うと理解していてもサリエル様と■■■■ちゃんが似ている彼女と戦うなんて、ましてや殺すなんてこと出来そうになかった。身長も体格も違う、色彩や髪の長さも違う、性格も雰囲気も微妙に違うというのに、どうしてもコケちゃんを見ると二人を思い出してしまう。

そのたびに胸を締め付けられる想いで一杯になり、それを表に出さないようにするのに毎回苦労するよ、ほんと。

その理由は、彼女の種族について調べてみたら納得したけれど。

コレー

■■■■ちゃんの子がサリエル様と同じ天使になる、か……運命の悪戯に喜ぶべきか嘆くべきか、わかんないや。

システムが作り出した紛い物だとしても、彼女は二人の面影を引き継いだ。

私は、二人に手を掛けることなんて出来るのだろうか。

片方は最期を看取った、もう片方は救うために魔王という最後の足掻きを決意したのに？

……やっぱ、無理かもしれない。

私は自分の弱い心を自嘲して、改めて敵対ではなく懐柔の方針で接することを再確認した。

白ちゃんもコケちゃんも敵としては極めて厄介だけど、味方であるのならこれ以上なく頼もしい相手なのだから。

ここにいる吸血鬼主従に優しくするのも、二人を取り込むための一環。

二人が気にかける相手に私も優しく接すれば、印象が良くなるだろうという打算。

そんな薄汚れた厚意だけど、吸血鬼主従らにとっては救いであったはずだ。

家族を失い帰る場所も無くして襲撃者に怯える彼らにとっては藁

にもすがる思いだっただろう。

そこに付け込んで利用している訳だから私は途中で見捨てたりせず、この先もずっと世話を焼いていく、それが私がソフィアちゃんたちに支払うべき対価なのだから。

一緒に来るといふのなら、とことん付き合ってもらおうか。

私にもやることがあるのだから、そのために利用できるものは全て使わせてもらおう。

「アリエル様、外郭の門に着きました」

「おっと。それじゃあ、街の中に入ろうか」

メラゾフィスくんを声を掛けられたことで、思ったより思考に没頭していたことに反省しつつ、私たちは通行料を門番に支払い門を潜った。

人が多い通りを歩きながら、私は周囲を見回しながら二人に言った。

「さて、ご飯を食いたいけれど、どうしようか?」

もうすぐ夕食時という頃合いで、本日最後の仕事に忙しく動く人が多い街中を見渡すも、近くには料理店も酒場も見当たらなかった。

うーん……、街に寄ったときは、その街ならではの料理を食べるのが楽しみなのにな。

「この街には以前来たことがあります。お勧めの店があるのですが、そこでいいでしょうか?」

「おお! 任せた!」

メラゾフィスくんのおすすめですと!? これは弥が上にも期待が膨らんじやうなー。

案内するメラゾフィスくんについて行きながら、さつきまでの悩みなど頭の片隅に追いやって、私は何が食べられるのかワクワクしていた。

お肉? 野菜? 川魚かな? いや特産の酒に合わせた一品だろうか。

まだ見ぬ料理に早くも涎が口に溜まり始め、思わず笑みが浮かびさうだ。

やっぱり、思うまま食べたいものを食べられるって、最高だよな。

路地を進み段々と人通りが少なくなつて閑静な住宅街といった場所からさらに狭い路地へと進むと、看板も何もないただの住居にしか見えない建物の前に辿り着き、メラゾフィスくんは迷うこと無くその建物の扉を開いた。

ほう、隠れ家的料理屋ですか……、たいしたものですね。

中に入ると、結構気を遣って整えているだろう上品な内装が映つた。

これはさらに期待が高まったかも。

「へえー。よくこんなお店知ってたね」

「旦那様がここの領主と懇意にしています、その領主様に教えていただいたのです」

なるほど、領主様のお墨付きつてことか。

高まる期待に胸を躍らせながら席に座つてメラゾフィスが注文するのを聞きていると、私は探知が捕らえた店に近づく老人の存在に気づくと警戒を高めた。

やれやれ、なんの用だか。

まあ十中八九、この二人と白ちゃんのことだろうけど。

……コケちゃんの事はまだ知らないはずだけど、こいつの情報網ならもしかしてがあるか？

メラゾフィスくんの説明を聞きながら内心を隠そうとしたが、そいつが店内に入りその如何にも腹に一物抱えていますって澄まし顔を見たことで、笑みが消え睨むような目つきになってしまった。

ちつ、せつかくの食事が台無しじゃないか。

「久しぶりだね」

空いているのにわざわざ隣の席に座ったこいつに内心で舌打ちしつつ私は言う。

再び笑みを浮かべ直して親しげに、けれど背後に隠した片手ではナ

イフを握るような信用と疑心が入り混じった関係のこいつに語りかける。

「そうですね、お久しぶりです。それとも初めましてと言うべきでしょうか？」

私が変わったことはお見通しってか？ 気に食わないね。

「どつちでもいいんじゃない？」

ぶつきらぼうに、どうでもいいことのように、私は答えた。

「で、何の用？ 神言教教皇のあんたが、わざわざこんな場所まで」

神言教教皇ダステイン。

それが、隣に座っている老人の正体だ。

奥から注文を取りに店主が出てきたことで一旦会話が止まるも、奥に店主が戻ったことで、再びいけ好かないこいつとの会話が始まった。

「護衛も無しに、よく私の前に顔を出せたね？ ここは敵国だということに」

「なに、私の顔など知られておりませんし、心配はご無用です。あなた相手では護衛がいくらいても足りませんし、あなたがその気なら犠牲が私一人で済む分、このほうが良いのですよ」

今の私が死んでも次のダステインが生まれるから関係無い、とでも言いたいのかこいつは。

その理由に思い当たり、怒りよりも呆れが浮かんだ。

支配者スキル、節制。

死んでも記憶を継承して転生する効果のスキルを持っているこの男にとって、死はただの区切りでしかないのだから。

あまりにも軽い命ゆえに、こうして私に会いに来たのだろう。

ただ、自分一人だけ犠牲になるのが最も効率的だという理由だけで。

「あなたを相手に腹の探り合いをしても仕方ありませんし、単刀直入に行きましょう。要件は三つ。一つ目は女神教から手を引いて欲しいということ。二つ目はエルフに関する情報を提供して欲しいということ。三つ目はそちらの二人についてです」

……ふうん？ 街の外に居る、もう二人については知らないみたいだね。

白ちゃんは街に入れないから見られてないとして、コケちゃんは基本白ちゃんと一緒にお留守番するか、一人で勝手に街に侵入して買い物するかのどっちかだったから、私との関係性に気づいていないみたいだね。

余計な情報を与えないために気を配りつつ、私は口を開く。

「じゃあ、一つ目から順番にいかがか」

「一つ目ですが、オウツ国はさらなる侵攻を計画しております」

「なっ!？」

メラゾフィスくんが驚きの声を上げる。

だが、ダステインはそれを無視して話を続けた。

「もちろん神言教も、それに助力することになっております。ですの
で、あなたにサリエーラ国側で参戦されると困るのです」

なんとまあ……、こいつらしい陰湿なやり口なこと。

大義は我らにありつてか？ 勇者まで担ぎ上げて本気で女神教を潰すつもり気なんだろうね。

「ずいぶんそっちに都合がいい提案だね?」

「都合がいいついでに、もう一つ二つ提案させて頂ければ、此度の戦の原因となった迷宮の悪夢と呼ばれている白い蜘蛛の魔物を引き渡していただけたらと思います。それと同じく戦場に姿を表した迷宮の亡霊と呼ばれる蛾の魔物の情報もあればそちらもお聞かせ頂ければ」
節制の名が呆れる強欲っぷりだね。

思わず反応しそうになっていたソフィアちゃんに注意しつつ、私は答える。

細かい理由とか、面倒な腹の探り合いを何度か挟みながらも、結論はこうである。

「あれは私の配下じゃない、まあそのぐらい察していただろうけど。あれに関しては決着がついている。そして迷宮の亡霊については今何しているのか私も知らない、別に敵対していた訳でもないから殺す必要も無かったし。その呼び方だって今知ったよ」

事実をぼかしつつも嘘偽り無く答える。

白ちゃんが配下じゃないのは本当。

決着についても不死の秘密もわからず敵対が愚策である以上、融和策で取り込むことにしたし。

コケちゃんこと迷宮の亡霊も、今街の外で何しているか知らないし、敵対する気も殺す気も無いのは最初に出会ったときから変わっていない、呼び名だって今知ったことなのも本当だし。

ほら、嘘はついていないでしょう？

「アリエル様がそうおっしゃるのであれば私から言うことはありません。ただ、一つだけ気になるのは、今後サリエーラ国にどのような影響を及ぼすかということです、あなたを含めて」

「私はこれ以上サリエーラ国で何かするつもりとかは無いです。ちょうど帰ることが決まっていたし、余計なちよつかいが無ければ何もしないさ、何も、ね。よかったね、入れ違いにならなくて」

皮肉たつぷりの言葉にも、この男には何処吹く風と涼しい顔して受け流され会話は続く。

「それはそれは。ご安心を、私どもからお心を煩わせることは致しませぬ」

「信用できないな。手綱を握るのに失敗したことは？」

「手綱はしっかり握られておりました。しかし横から邪魔者が出てきたのは事実、そこは詰めが甘かったと素直に謝罪しましょう」

「ふうん。今回は本気なんだ」

「今回も、です。本気でなかったことなど一度もありませんから」

あの別働隊も計画の内、けれどポティマスの介入を許したのは此方の不手際だったと。

「それで不安要素になるのが、私とあれと、ポティマス……、あと迷宮の亡霊ってどこか」

「左様」

わざわざ私に確認しに来るほどの計画が進行中か。

ソフィアちゃんたちには悪いけど、この国欠片も残らず滅ぶでしょうね。

「二つ目はアリエル様にはサリエーラ国に加担する意思は無いと受け取りましょう。二つ目エルフについてですが、三つ目にも関係しているので合わせて話しましょう。そちらのお子様は一体何者なのか？」

ダステインがソフィアちゃんに向けて鋭い視線を送る。

それを遮るようにメラゾフィスくんが立ち上がり、視線を向けられたソフィアちゃんも戸惑っているようだった。

……まずいな、こいつも転生者の存在に気づいている。

「もちろんソフィア・ケレンなどという名前を聞いているのはありません。彼女の中身についてです。あなたには前世の記憶があるのではありませんか？」

ソフィアちゃんの表情が大きく変わる。

それを見てソフィアちゃんが転生者だと確信したダステインも、苦悩に満ちた表情に変わった。

「まさかと思いました。こんなことが。システムにバグが？」

「へいへーい？ 戻ってこーい一人で勝手に話を進めんな」

こうなると面倒臭い事この上ないし話が飛ぶので、さっさと引き戻す。

「失礼致しました。この悪癖だけは何度生まれ変わっても直らないものです」

「考え過ぎはいかんと思うよ。私が言えた義理でもないけど」

今の私なら気楽に考えられるけれど、昔の私だったら絶対悩むだろうからね。

「システムは正常に作動している。そこは安心していいよ」

そう答えたとき、ちょうど料理が運ばれてきてテーブルに次々と並び始めた。

「続きは、食後にしようか」

並んでいく見た目にも美味しそうな鮮やかな料理たちを見て、私は無理矢理だとしても話を一旦打ち切らせた。

折角の美味しそうな料理を前に面倒事を持ち込むのもナンセンスだしね。

美味しい料理は温かいうちに味わうのが一番！ お残しは厳禁つてね！

では、いただきます！

そして誰も喋ること無く重苦しい空気が充満した、無言の食事会が始まった。

……この空気では美味しさも半減かな、後でもう一度来よう。

白ちゃんの一部と融合する前から食事には一家言ある私は、そう決意したのだった。

王2 悩める者達、少女は1人蚊帳の外

「ごちそうさまでした！」

メラゾフィスくんがおすすめしてくれたこのお店の料理はどれも絶品だったけれど、空気が悪かったせいで十全に楽しめたとはいえない食事だったかな。

空になったお皿を店主が回収していき最初と同じ何もないテーブルに戻れば、それが再開の合図となった。

「じゃあ、続きをしようか。システムは現在ちゃんと正常に作動している。けど、イレギュラーな事態が起きたのは確かだね」

誰も口を開かず沈黙が流れそうだったので、先立って話を切り出す。

それを皮切りに、ダステインも口を開く。

「システムが正常に作動しているというのは、本当のことですか？」

「それは保証するよ。むしろ過去一番安定しているかもね」

それが原因で魔王として動き始めた訳だったけれど、魔王の受諾から承認され滞りなく就任までシステムの処理が行われたし、こっちに来る以前にニアからギユリエ呼んで聞いてみたけれど、何も問題は無いって言ってたしね。

なんか大きな問題があれば、あのギユリエが直接動いているはずだし。

「MAエネルギーが急激に減少したのに、ですか？」

先代のやらかし、か……

「うん。それは確かに意図していないものだったんだろうけど、システムの作動には問題無いよ。作動には、ね」

「つまり作動には問題が無くとも、根本的な問題があるということですか」

「これまで長年掛けて積み上げてきたものが一瞬でパーだよ？　これが問題じゃないと？」

「確かに。それは由々しき大問題でしたな」

私とダステインが揃って溜息を吐く。

こいつと一緒にだと思われたくないが、こればかりは内心が一致するので仕方ない。

「まあ、その話は一旦置いておこう。私たちが何をどうこうしたところで、すぐ何とかなるような話じゃないし。あんたが今気にしてんのはサリエーラ国の事についてでしょ？」

ダステインは何も言わないが、目がそうだと告げていた。

私は一拍置いて、話すべき事と話すべきでは無い情報を精査すると語り始める。

「1つ目の今後の動きはさつき言った通り、私はこの子たちと一緒に連れて帰り保護する。この国に長く留まる気は無いよ。邪魔も加勢もすることは無い。私たちが去った後で戦争でも何でもすればいいさ」

私の発言に、ソフィアちゃんたちがショックを受けたような表情をする。

自ら国を離れる選択をしたとはいえ、私の突き放すような言い方に對して思う所が無いといえは嘘になるでしょうね。

けど私個人としても、何もかも忘れて女神様女神様と祈るだけの連中に情などありはしない。

滅ぼされるなら、どうぞご自由にな。

少しでも魂をシステムに捧げて、贖罪を果たすといい。

それで許されるはずも無いけれど。

「2つ目、エルフについて。私もこれについてはよくわかっていない。ただ、この子と同類の人間を狙っているって事くらいはなんとなくわかるよ。操り人形とはいえポティマス本人が出てきたんだから相当気合入ってんでしょね」

転生者は人間以外の種族にも生まれている事を伏せつつ、エルフどもについて話す。

白ちゃんやコケちゃんという事例を知らなきや普通思いつく訳無いでしょうけれど、伏せられる札は見せないに越したことはない。

「あれが何やら動いていたのは察知し警戒しておりました。その上であのように好きに動かされたのは痛恨の極みであり、アリエル様に始末

をつけて頂いたことに感謝しております。しかし、どうせでしたら奴らの死体だけではなく、戦闘の痕跡なども消しておいて貰えていたら、より感謝出来たのですが」

痕跡……、ああアレか。

「そういえば銃とか持ち出していたね。そっかそっか、そこまで気が回らなかったよ。ありがとう」

「いえいえ。そちらは我々のほうで処理しておきましたので、ご心配なく」

とか言いつつ、貸し1つですなつてこいつの態度が示していた。

そんなの知らん、全部ポティマスが悪いんだからあいつに請求しとけ。

「何処からか情報が漏れていたようです。ケレン領領都への奇襲作戦に便乗されてしまいました」

「つまり、情報戦で負けた訳だ」

ダステインの失点を厭味つたらしく突いて指摘する。

「その通りでございます。こちらも諜報には力を入れておりますが、どうしてもエルフの情報網に遅れを取ってしまうのが現状です」

「何とかならない?」

「動いてはおりますが、成果は芳しくありません」

ダステインの口から最近の表側のエルフの動きについて話を聞いた。

あいつらは何も知らずに世界平和とか掲げているから、題目だけはお綺麗なんだよなー。

「女神教なんかよりも先に、エルフの弾圧をしておくべきだったね」

「まさにその通りですな。しかし神言教の基礎を作り上げた頃にはもう、エルフは既に盤石の立場を築いておりました。今回の件もそうです

すが、我々は常に後手に回らされていますな」

「知ってる」

稼働初期からこうなるように、すぐさま仕込みを浸透させられた結果が現在の状況である以上、気づいた時点でもう手遅れだったのは非常に苦い記憶としてちゃんと憶えているとも。

「あいつが良からぬことをしてんのは確実だろうね。あの、ポティマスだし」

「そうですね。なにせ、あの、男ですからな」

「……3つ目ね。この子についてだけど、何も詳しく教える気は無い」
ダステインが目を鋭く細める。

「そうですか。それは残念です」

「私が保護すると決めた。ならエルフに利用などさせない」

「それはあなたが利用するためでは？」

「できるならするとも。けど、それは本人の意思を最優先にして決めることだよ」

たとえ将来、戦いを拒否したとしても見捨てないとも。

「なるほど。ただ前世の記憶を持つだけ、という訳では無いのですな」
ちよつとあからさますぎたか。

だが、これで私の庇護下であると宣言されたソフィアちゃんに、ちよつかいを掛けてくることは無くなったはずだ。

「私から話すことはそんなところだね。あとは君からなんかあるかい？」

私はソフィアちゃんとメラゾフィスくんに視線を送る。

今まで話の内容についていけずに蚊帳の外で黙っていてくれたけど、このタイミングが言いたいことと言える最後のチャンスだろうか。

『メラゾフィス、言いたいことがあったら言って』

ソフィアちゃんがメラゾフィスくんだけに聞こえるように念話を送る。

だけど、感知系を高め念話に熟練した使い手には盗聴も難しくないので、ダステインにも聞かれているだろうけど。

「……此度の戦争、発端はオウツ国ではなく、神言教が裏で手ぐすねを引いて戦争に焚き付けた。そういうことではありませんか？」

メラゾフィスくんが重い口を開く。

ああ……、彼には気になるよね。

ダステインは肯定も否定も何も答える気が無いようだ。

それが答えだと、こいつは示してんだろうなあ。

「そうだよー。そもそもオウツ国なんていう吹けば飛ぶような国が、勝ち目なんか無い戦争に単独で踏み切る訳ないじゃん」

隣のこいつが言わない以上私が説明する。

それを聞いたメラゾフィスくんは、ただでさえ悪い顔色をさらに暗くして激昂した。

「神言教はッ！　そこまで女神教を敵視しているということですかッ！」

怒りに呼応して瞳が紅く輝いている彼は、鋭い歯を剥き出しにして吠える。

一般的には神言教と女神教は険悪な仲。

だが、それだけじゃないんだよなあ。

「残念ながら、隣のこいつはそんな単純な理由で動いている訳じゃ無いんだよなー。そもそも信心深い訳でも無いし、むしろ逆に神を売った裏切り者のような奴だし」

あの時はそうするしか無かったとしても、やったことを認められる訳ではない。

「私が犯した罪は忘れたことなどありません。その罪故にこの椅子に座っているのですから。しかし裏切り者呼ばわりは少々酷いものではありませんか？」

「あの時は全てが罪人だった、私も同じ。まあ、一番の裏切り者はポティマスの方だけだね」

「違いますな」

その罪は今も続いている。

無関係なのは、そのソフィアちゃん含む転生者たちだけで、その彼ら彼女らも私たちの贖罪に巻き込んでしまっているけれど。

「脱線しましたな。まあ私の思想などこの際どうでもよいことです。個人の思惑など全ては結果を前にして大した意味など持ちませぬ故。そうあるべきなのです」

その達観とも超然ともしたダステインの姿に、メラゾフィスくんは握りしめた拳を緩めて肩を落として椅子に深く沈み込んだ。

「いいの？ それだけで？ 何だったら今この場でこいつを殺しても誰も文句は言わないよ？」

たとえば、それがほぼ無意味だとしても、2人の鬱憤が晴れるのなら私は喜んで手伝うとも。

「……いえ。ここで彼を殺しても無意味な気がします。きつと、そんなことをしても時代の流れは変わりません。それに、彼は死んでも己のしたことを反省も悔いたりもしないでしょう。そんな輩を殺したところで、旦那様や奥様を始めとしたケレン領の犠牲者の無念が晴れることも、ましてや重さを思い知らすことも出来ないでしょうし。……あなたの死では、軽すぎる」

……言うじやないか、メラゾフィスくん。

彼の言葉は、知らないはずのダステインの本質を突いていた。

いつ死んでもいいと思っっている人間の、軽すぎる命の価値を見抜いていた。

死んでもいずれ蘇る人間の命に、たいした価値なんて何もないってことを。

その言葉を受け取って硬直しているダステインの姿を見て、私は笑いを堪えきれずに吹き出してしまった。

「ふっ、くくくふ……、軽いつてさ。あんたの死は、軽い、だつてさ」これは効くだろう。

なんせ、こいつは同じようなことを何度も繰り返してきたのだから。

それが無意味だと、いらないと、罵倒すら無く守るべき存在から突き返されるのは、きつと想像していなかったんじゃないかな。

「……ええ。殺される覚悟はしていましたが、そう言われるとは思っていませんでした」

さつきまでより、一回り小さく見えるダステインは口を開いた。

「軽い……、ですか。ええ、まさにその通りでしょう。私の命は、軽い、軽すぎる。この命1つであなた方への謝罪にしようとしたこと深く詫びねばならない。申し訳ありませんでした」

ダステインは深々と頭を下げた。

全て背負い込むこいつが、ここまでするほどメラゾフィスキンの言葉は届いたんだろう。

それはきつと、こいつに支払える最高のものを引き出せたってことでもある。

誇れよ、メラゾフィスキん。

わからないと思うけれど、これはそれほどの事だ。

「お互い難儀な役割を背負ったもんだ」

ダステインの覚悟と背負った物の片鱗が見えて動揺している2人から、隣のこいつに視線を移す。

私は一線を越える覚悟を最近になってから背負ったけれど、こいつはずーっと昔から、それこそあの時から背負い続けているんだろうな。

いや、比較なんて最初っから無意味だったかな？

比べられるようなものでもないんだし。

「さて、話すことも無いっしょ。私らはここらへんでお暇するよ。あつ、詫びるならここのお勘定お願いねー。じゃあ行こうか」

そう言っただけ席を立つと、メラゾフィスキんもソフィアちゃんを抱えて席を立つて追従する。

私は入り口の扉に手を添えたが、それを押して外に出る前に頭だけ振り返って、今もなお深々と顔を伏せたままのダステインに向かって言った。

「ああ、そうそう。サリエーラ国にかまけているのもいいけどさ、魔族の警戒もしたほうがいんじゃない？ ……今代の魔王、私だからさ」

そして反応を見ること無く、肌寒い夜空の下へと建物を後にした。

……まあ、カッコつけているけど、2人を宿に置いてきたらまた会うんだよなあ。

ああ、憂鬱。

また1つ、進展と不安要素が増えた2人の邪魔をしないように宿か

ら出た私は、さつき歩いた道をなぞるように進むと、ご飯を食べたお店を越えて歩き、とある一軒の酒場に足を踏み入れた。

「待ったかな?」

「……いい、いいえ」

うん? さつきの言葉が堪えたとしても引きずり過ぎじゃないかな。

顔色が悪いを通り越して土気色になっているダステインと向かい合うように腰掛けた。

「どうしたのさ。そこまでショックだった?」

「いえ……、確かに久しぶりに胸が痛くなりましたが、このくらい珍しくも何ともありません」

すでに栓が開けられ瓶の中身が半分近くも減っている酒を、ダステインは自分のコップに注ぐと、それを一気に煽って飲み干した。

珍しいな、酒好きのあんたがこんな勿体ない飲み方するなんて。

「少し前、……そう、あなた方が店を後にして私も店を出たすぐのことです」

そう前置きすると、ダステインは語りだした。

「示し合わせた訳ではありませんが、あなたがもう一度来ると確信して丁度いい場所を探している時です。私の視界にある少女の姿が映ったのです」

……ん?

「鍰の広い帽子に丈の長いローブとマントと、よくある魔法使いの風貌でしたが、彼女のその顔が問題だったのです」

あつ、これもしかして……

「髪色も瞳の色も違うのですが、よく似ていたのです……彼女の顔が、あの方に。」

何故? 他人の空似だとしても、今私の前に現れるなんて……。そんなことサリエル様は望んでいないと、そう仰るのですか……」

ヤツベ。

コケちゃんが勝手に街中出歩いたりするの、何の注意も払ってなかったわ。

どうやら、また勝手に散歩に出掛けていたコケちゃんを遭遇したらしいダステインの様子を見て、私はどう切り出すべきか悩んだ。

私との関係を匂わせないようにするには……

「……サリエル様とは何の関係も無い他人の空似。たぶんそうなんだろうけど、一応何処で会ったか教えてくれる？ もしあいつ関係だったら気になるし」

「あまり……、慌てておりませんか？ アリエル殿」

気づくの早いでしょ!?

内心の混乱っぷりを隠してポーカーフェイスを維持する。

「ふむ。こんなサリエル様と何かしら関係ありそうな内容なのに反応が薄いと、すでに知っていますね？ あれほど彼女を慕っていたあなたがこのような話を聞いたのならば、居ても立っても居られないでしょうに」

「私のことは、どうでもいいでしょ!?!」

凶星だけどさあつ！

知らなかつたら、突撃してたかもしれないけどさあつ！

「それに鑑定を妨害してみせた……ならば支配者……、アリエル殿が既に知っているのに警戒していないとすれば……ポティマスの手の者ではない……」。彼女、あなた側の存在ですね？」

あーあ、バレちゃったよ。

「そうだと云ったら？」

「色々伺いたいのですが、教えてはくれないでしょう。しかし、彼女がポティマスの非道な実験で生み出された子ではないと良いのですが」「安心して。あの子とあいつは、全くの無関係だから」

まあ、血縁を辿ると無関係では無いんだけどね。

「それを聞いて安心しました。大まかですが彼女の實力も相当なものだと感じましたし、あなたが付いているのでしたら、この世界で一番安全でしょう」

「私が危険な所に連れ回すかもよ？ それはどうなのさ」

「守るでしょう？ あなたでしたら」

よく知っていることで。

私は此方側に用意されたコップに入っている酒ではなく、残り3分の1となった酒瓶を荒々しく掴んでラツパ飲みをした。

「ああ……。仕方ありませんね、もう1つ頼みましょう」

伸ばした手を宙に彷徨わせるダステインは、その手で上げ直してウエイターを呼ぶと、追加の酒を注文した。

そして私たちは、お互いの愚痴を言い合いながら雑談を重ねて、私は魔王として宣戦布告したり、ダステインの不死性から白ちゃんの不死のヒントに気づくと、そのデタラメさに改めて諦めるしかないという事実打ちのめされたりで、愚痴を吐き出してスッキリするより心労がより増えて暗澹たる気持ちになるという、苦々しい散々な酒の席だった。

勇者Ⅰ 人の正義、魔の正義

『あんたらのせいでッ!』

『出ていけ! ここは俺たちの街だッ!』

僕たちを責める、卑劣な手段で街を焼かれた人々の顔が浮かぶ。

『ひ、ひいいいつツ!』

『に、逃げッ……ギヤアア!』

目の前で、僕よりも大きく鎧も着ていた兵士や騎士たちが嘘みたいに吹き飛ばされ、大半が見るに堪えない姿に変わっていく。

その地獄のような光景の中心には、無機質な印象を与える白い蜘蛛と、綺麗だけど妖しく輝いて怖気が走る深緑の蛾の姿。

震える身体を抑えつけて、剣を構える。

そして……

『……これが、私の信じた、正義だから』

『ごめんね……』

全身の筋肉が勝手に収縮して、雷魔法を受けた時のように跳ね起きる。

視界に映る見覚えのある部屋の内装を見て、僕は大きく息を吐いた。

夢、だったか……

安堵の息をつくのと同時に、部屋に置かれた机の上にある僕の剣とマフラー、そして鮮やかな翠の翅が瞳に映った。

窓から差す陽光に照らされた、それを見つめる……

僕はベッドから起き上がると側の靴に足を入れ、机の側に向かい両手を広げた幅ほどもある翅をそつと撫でる。

正義って、何なのだろう……

僕は戦場での凄惨な悪夢と、暮らしている街を壊されて亡霊のような顔を浮かべる人々を見て、正義とは何か考えるようになった。

最初は、何も考えず勧められるまま今回の戦争に参加しただけだっ

た。

まだ子供だけれど、僕は勇者に選ばれた。

僕は実力的にもまだまだだけど、周囲の人たちは早いうちに戦場の空気を体感したほうがいい、勝ち戦だから危険は少ないので丁度いいと、誰もが口を揃えて言った。

そうして参加した戦争で、僕は彼女？に出会い、そして地獄を見た。実際に経験した戦場は、あんなにも命が軽くて簡単に人が死ぬんだと、思い知らされた。

僕の母上は弟であるシュレインを産んでから体調を崩され、亡くなってしまうた。

とても悲しくて、喪失感が僕の心を埋め尽くした。

だからこそ、誰かが死ぬということの重さを良く知っていた。

なのに、あの戦場では死が溢れていた。

怖かった。

逃げ出したかった。

だけど、僕は立ち向かった。

だって勇者だから。

無我夢中で走り悪夢の前に飛び出したけど、何も出来なかったと思う。

その時は使命感と恐怖で板挟みになり、自分が何をしているのかよくわかってなかったから。

恐怖で白く焼け付いた記憶では、この後大魔法が撃ち込まれたらしい。

僕が飛び出したことで、時間が稼げたって。

だけどそれは僕をも巻き込む範囲と威力を持っていたはずで、僕は迫りくる死の雨に呆然として避けることなんて出来るはずも無かった筈だ。

死神が降りて来るのを見ているだけだった僕を救ってくれたのは、戦場に立つ前の道中で出会い不安に押し潰されそうだった僕の背を押してくれた、けど地獄を作った元凶でもある魔蛾だった。

彼女……念話の声色から彼女と判断するけど、その蛾の魔物である

彼女に掴まれて大魔法の範囲から連れ出されたような気がする。

疑問形なのは、掴まれ宙に浮くと同時に急激な負荷が身体に掛かったところで、記憶が途切れているからだ。

そのあと戦場の片隅で目を覚ました僕は、不思議と全く痛みが無い身体で大地を歩き生き残った人たちと合流すると、手荒い歓迎で生存を祝われそして色んな人から褒められた。

さすが勇者だ。

あなたのおかげで悪夢と亡霊は滅びた、と。

何もしてない。

僕は何も出来なかった。

そう言いたかったけど、僕は口を開くことは無かった。

だって彼らの目には怯えが見えたから。

空元気だとしても偽りだとしても、あの魔物たちが死んだと危険は去ったと、そう思わなければ壊れてしまおうと感じたから。

本当は戦いが始まる前彼女に貰った翅が帰還したときに見つかり、それは大魔法で弱った魔蛾を僕が止めを刺して戦利品として持ち帰ったのだと、そう誤解されてしまった。

違うと言える雰囲気では無かった。

否定したけれど、ご謙遜をと、勇者様は謙虚であると、まともに取り合ってくれず無理を通せば熱狂が恐怖に変わりその矛先が僕に向かっていただろう。

戦場では何も出来ていなかった、なら他は？

僕は窓の外を見た。

そこには破壊された街の壁と崩壊した建物の数々が映っていた。

この光景を作り出した、そうなった原因の一端を僕は知らずに担っていた。

この街を襲った軍は、僕が味方していた軍ということになる。

部隊が違うから、所属が違うから、国が違うからと目を逸らしても現実として街は襲われ、そこに暮らす人々の生活を奪った事実は変わらない。

そして僕が立ち向かった魔物のうち、悪夢はこの街を守るために

戦っていたという。

誰かを殺すことは悪いこと。

誰かを守るのは良いこと。

なら、正しかったのはどっちだったんだろう。

マフラーの装飾として新たに縫い付けられた翅を眺めると、僕は装備を着込んで腰に剣を吊るし首に白と翠のそれを巻き付けると、部屋を後にした。

片方のマフラーの端に根本を結び繋ぎ合わせた翅は、フワリと僕の背で揺らめいていた。

破壊され最低限の補修がされた門を潜る。

僕は日課となった街に害になりそうな魔物の討伐を終え、街に帰還していた。

とある一件で出会ったオーレルという帝国人の少女に、僕は被害者であるこの街の人たちに何をしてあげられるのか呟いたところ、「魔物でも狩ればいいんじゃないっすか？」と彼女に言われ、その理由を聞き目からウロコが落ちる思いだった。

魔物によって傷ついた壁を壊されるかもしれないと、恐怖に怯える住人の不安を取り除く。

それは勇者というより冒険者の仕事みたいだと彼女は言うが、僕はそういうあり方も勇者として正しい行いだと感じた。

困っている人の助けになる。

誰かのために、手を差し伸べる。

魔物にも言い分はあるのかもしれない。

だけど、だからといって今にも襲いかかろうとしている相手を前に何もしないのも、それは違うのだと感じていた。

誰かを傷つけるものから、無辜の人々を守る。

母上。

僕は、正しい勇者の姿をしていますか？

母上の言う通り、立派な勇者様でいられていますか？

正しくある。

その答えは、今も見つかりません。

「おいつすー、勇者様。お疲れつす」

憶えのある独特な口調の声が聞こえた。

「やあ、オーレル」

さっきの話に出てきた僕と同年代の少女は、周囲の帝国兵の隙間を軽やかに抜けてくると、僕に持っていた果物を差し出してきた。

「お疲れの勇者様に、アタシが特別に施しをやるつすよー」

やる気や敬意が感じられない碎けに碎けた口調だけど、僕はこの少女が確かな優しさを持っていることを知っていた。

その証拠に、周りの帝国の人たちの中にはその果物が握られていて、オーレルが壁の修復に当たっていた彼らに差し入れを持ってきていたことが見て取れるから。

「ありがとう、受け取るよ」

僕はその厚意を受け取り、口に含んだ。

美味しい果実だ。

「この街には果物が多いんだね」

「ああー。なんか神獣様とかいうのが果物好きで、新しい事業として栽培を始めたところがあつたらしいつすよ？ で、今がその収穫期第一弾なんだとか」

思わず口に含んだ果物を吹き出しそうになる。

強い自制心と顎に力を入れて堪えたが、一歩間違えば目の前にいるオーレルを果肉と果汁濡れにするとところだった。

神獣様とは、あの蜘蛛の魔物のことだ。

それが果物を好んでいたって？

魔物にも会話出来るような存在だっている。

それは神話にも語られているし、真実だと証明もされている。

なにより、少し前に実体験としての経験もある。

だからこそ、その神獣様こと迷宮の悪夢も高い知能を持っていても

おかしくない訳で、好き嫌いがあるのも想像が難しいけれど理解出来なくもない。

だけど、あんなに恐ろしい魔物が果物好きというのは、ちよつとギヤップが大きすぎた。

噓せそうになりながら口の中身を飲み込むと、駆け寄ってくる男性の姿を見つけた。

「勇者様！　こんなところにいらっしやっただんですか!?!」

そう叫ぶ彼は、服装から見て神言教の兵士だと理解した。

「困りますよ、今日は出立式だつて説明していたじゃありませんか」
兵士の彼が困り顔で言う。

それは僕も聞かされていて、出席するように言われていたけど……
「僕も言ったはずだよ。それには出席しないし、今後の進軍にもついて行かないって」

キツパリと断る。

もう決めていたことだ、僕はこれ以上この戦争について行く気はない。

僕では止めることは出来ない、けど加担することもしない。

この街に残り、復興を手伝っていこうと思う。

それが、大人や周りに振り回されず、僕自身が考えて選んだ選択だった。

説得しようと頑張る彼の姿に少し申し訳なく感じるけれど、自分の意見を変える気は一切無い。

決して折れることは無いんだと、再度言葉にしようとした時、遠くから尋常では無い怒号と悲鳴が聞こえた。

弾かれたように飛び出して街の通りを駆け抜けると、辿り着いたのは門にほど近い出立式の会場だった。

慌ただしく混乱の最中に飛び込んだ僕は、地位の高そうな兵士に声を掛けた。

「何があつたんですか!?!」

「勇者様!?!」

僕に気づいた兵士が悲鳴のように叫ぶ。

「悪夢です！ 悪夢の大群が攻めてきたんです！」

悪夢……？ それも大群だった？

その名前に無意識に震える。

そして大群という意味を、すぐ理解した。

門の向こうに映った景色は、大地を埋め尽くすほどの白い蜘蛛の大群が津波のように押し寄せてくる光景だったからだ。

呆然とする僕の耳に、怒号が響き渡った。

「門を閉めろ！」

「遠距離攻撃が出来るものは街壁を登れ！」

「ここは危険です。勇者様はすぐに街中に退避を！」

最後の言葉を聞いた時、反射的に振り返り叫んだ。

「僕も戦います！」

そこにはオーレルとよく一緒にいた帝国のティーバ騎士がいて、彼は僕の肩を掴み引き止める。

「なりません！ あなたはまだ幼い。こんなところで死んではなりません」

その言葉と瞳に灯った覚悟に、理解した。

この人も前の戦場を経験して恐ろしさを知りながら、それでもなお勝ち目が無いと理解して悪夢に立ち向かおうとしているのだと。

「それでも！ 僕は戦います！」

よくわからないけれど、あれは止めなきゃならないと直感していた。

あれは、この街を守っていた悪夢とは違う。

あれは、この街に災厄をもたらす悪夢だと、なぜだか理解した。

手を振り払って、壁の上に登る。

見下ろした光景は、あまりにも絶望的だった。

もう既に壁の近くまで蜘蛛の大群が迫っている。

兵士たちが弓や魔法で攻撃を加えているけれど、万を越えるような物量を前にしては焼け石に水だった。

苦勞して1匹を倒しても、その穴が地平線まで埋め尽くすほどの数

によって埋められてしまう。

恐怖が湧き起こる。

けど逃げる訳にはいかなかった。

僕の背後には、この街の人が、そしてあの独特な口調の少女が、守るべき人がいるのだから。

その想いを胸に立ち向かうが戦況は絶望的で、また1人また1人と蜘蛛たちに飲まれていく。

悲鳴や断末魔がいたるところから聞こえる。

それを気にする暇もなく、僕のところにも蜘蛛たちが押し寄せる。

「あああああッッ!!」

口から出るのは、鼓舞か悲鳴か。

僕はただ、無我夢中で剣を振り回すしかなかった。

飛びかかってきた蜘蛛の目を切り裂く。

噛みつこうとした毒液が滴る顎に剣を突き刺し、そのまま振り抜いて口から引き抜く。

飛んできた糸を回避し、出来無さそうな時は魔法をぶつけて軌道を逸らす。

休む暇など無い。

一瞬でも気を抜いたら、死が待っている。

もはや反射で動き、鉛のような腕と脚を酷使して蜘蛛を切り払う。

また1つ、切り抜けた。

腕に力が入らない。

また1つ、切り抜けた。

膝が笑う。

また1つ、切り抜けた。

握りしめた手の感覚が無い。

また1つ、切り抜けた。

足首を痛めて激痛が走る。

一体、いつまで……

終わりになき戦いに、意識が霞む。

運がいいのか偶然か、思ったより負傷は少なく軽い傷はいつのまに

か癒えて無茶しても動ける。

けれど生命力は残っていても、身体を動かすための体力が既に限界だった。

不意に膝が折れる。

姿勢を崩し明確な隙を見せる僕に、複数の蜘蛛たちが襲いかかる。

1匹は対処できても、その間に別の方向から攻撃されて終わる。

こんなところであつ……

迫る蜘蛛を前にしても、僕が思うのは死の恐怖ではなく何も出来ないことへの無念さだった。

どうか……、少しでも逃げる事が出来た人がいますように。

祈りつつ最後の1太刀を浴びせようと剣を構えると、突然横合いから無数の炎が降り注ぎ兵士を避けて蜘蛛のみを焼き尽くしていった。燃え上がる蜘蛛たちを見て、勢いを取り戻した兵士たちが押し返していく。

僕はその光景に一瞬だけ呆然としてしまい、その隙を突かれ襲ってきた蜘蛛の対処に遅れる。

慌てて反応するも、牙はすぐ目の前に迫っていた。

間に合わないッ。

ゆっくり見える景色の中、牙が首に届く寸前で火球が目の前を通り過ぎた。

肌が焼ける熱量を一瞬感じると、近くに蜘蛛の姿は無かった。

「よう頑張ったのう。あとは儂に任せよ」

乾燥した眼球が捕らえたのは、初老に差し掛かるような見た目ながらも、内側に溢れんばかりの活力を漲らせたような力強い目をした人だった。

そして限界を越えていた身体が膝を突き、力が抜けていく。

視界が霞んで暗くなつていく。

それに抗うものの、意識はドンドン落ちていく。

その狭間に、僕はこの人に想いを託した。

どうか、後を、お願いします……

そして僕は、果てなき深淵へと意識が落ちていくのを感じたのだっ

た。

27 旅に出ると性格が現れる

『ギュリギュリに邪魔されたー!』

『そりゃあ、地龍狩り尽くされて卵にもロックオンしてたら黙ってないよね』

『ぐぬぬ……、あれ? あの変態いなくね?』

『他には、もつと下層にコケダマ種が集まっているけど、手を出すのはマズイよなあー』

『強さ的には配下の蜘蛛でも善戦出来そうだけど、こっちも仕掛けたら裏ボス出現ってね』

『コケちゃんガチギレ不可避』

『ギュリギュリも居るし、となると下層から撤退すべきか?』

『つってもどうするよ。この大所帯を食わせていくには、良い狩場なくね?』

『あるじゃん。無駄にいっぱい数が多くて、経験値も多いのが』

『ああ、なるほど』

『そろそろ、本格的に行動する頃合いか』

『それじゃあ、始めようか』

『『『『『『『人類殲滅計画、その第一歩を』』』』』』』』』』

誰も見ていない事を確認してから、路地裏から転移して帰る。

目の前には、より人間らしく自然にするためにパペットタラテクトたちの改造に勤しむ白ちゃんの姿があった。

「ただいまー。お土産買ってきたよー」

「おおう、おかえりー」

白ちゃんのいる街の郊外に戻ると、私は偽装用に履いていた靴を脱ぐ。

無数の節に分かれた硬質な黒色の足元を見られたら人じゃないのがバレてしまうので靴を履いていたけれど、根本的に構造や形状が人

のそれとは掛け離れているので、靴を履くと違和感が凄くて歩きづらくて仕方がない。

なので街中に入る時以外は基本的に素足で過ごしていて、関節が多くて柔軟な足先はどんな形状の足場でもきちんと捕らえ、太さのある丈夫な枝なら指先だけで掴まりコウモリみたいに逆さ吊りも出来るほどである。

「私は脱いだ靴を空納にしまうと、反対に買ってきた物を取り出して並べていった。」

「結構大きな街だったから屋台みたいなのもあったよ。といつても基本的に串焼きみたいなものしか無かったけれどね」

「なるほどねー。まあ、これはこれで」

使い捨ての容器などが無いためか、主に売っているのは調達が容易な木製の串に肉や野菜などを刺した物が殆どだった。

紙袋の類も見かけなかったし、そういう事情から売っている料理の種類も少なくて買い食い文化はあまり発展していないようだった。

そういえば帰る直前で鑑定らしき感覚を覚えたけれど、それを行ったらしき怪しい存在は見つけられなかった。

ステータスが高い人などの反応は無いし、エルフラしき影も何も無い。

体調が悪そうな老人は見つけたけれど、それは違うと思うし。

……こつそり回復魔法を掛けておいたけれど大丈夫かな？

「あー。私も街に入りたいなー」

「姿を消すスキルとかあれば、こつそり？」

「……迷彩鍛えたらいけるか？」

白ちゃんが真剣に街に入る方法を検討していると、空間の歪みを察知した。

転移？ この構築の速さと綺麗さに思い当たるのは、1人しかいない。

「久しいな」

鍛え上げられた細身の長身と、それに一体化したような黒い鎧を纏う男の人。

以前は名前も知らなかったけれど、今は禁忌やアリエルさんから彼のことについて知っている。

管理者ギユリエイストデイエス。

この世界を管理する、神の1人。

その彼が突然現れ、周囲のパペットたちに緊張が走った。

白ちゃんも、表情を消して観察するような視線を送っている。

「あまり時間が無いので本題だけ話そう。そっちの蜘蛛の方、君の分身が暴れているので何とかしてくれ」

その彼、ギユリエさんが発した言葉は、思いも寄らない内容だった。

「え？ なにそれどういう事？」

「見せたほうが早いな」

そう言つてギユリエさんは腕を軽く振ると空中にスクリーンのようなものが出現して、そこにはソフィアちゃんが住んでいた街と押し寄せる数え切れないほどの白い蜘蛛の大群が映っていた。

そして街を蹂躪させないと壁の上で戦う人たちの姿も。

「見ての通りだ。これが君の意思によるものでないのなら止めてきて欲しい」

ギユリエさんはさらに、これが白ちゃんの意味による行動なら此方も相応の対応に出ると、圧を強めて不穏な気配を漂わせる。

その一触即発の空気に白ちゃんの方を盗み見ると、表情を変えず無表情を貫いているけれど内心では盛大に混乱していることが感じ取れた。

それにしても分身つて何？

そんなの見たことも聞いたことも無いのだけけど？

眷属化しているコケダマたちからは、最近下層での魔物の数が少なくて食糧確保に困っていると報告がきていたけれど、もしかしてこの蜘蛛たちが原因？

もしこの蜘蛛たちと下層で遭遇していたとしても、以前蜘蛛とは敵対しないようにと言っていたから報告に上がらなかったのかもしれない。

「止めてきます」

白ちゃんが真面目な口調で、そう言った。
いつもと違う堅い声色なので、それだけ重く受け止めているように感じる。

「そうか。……頼んだ」

転移の構築を始めた白ちゃんを見て、ギユリエさんは安堵の表情を浮かべた。

そして少し離れて木に寄り掛かると、腕を組んだままジツと動かなくなつた。

それを見ていたら斜め上から手が差し伸べられた。

白ちゃんが手を伸ばしている。

私は背を伸ばして掴もうとするけど、その前に視界の端にいた子たちに気づいた。

「一緒に行く?」

そう言うと、彼女たちはお互いに顔を見合わせて同時に頷いた。

そうして白ちゃんの手を取ると、私たちはサリエーラ国の中心からケレン領まで転移した。

転移して誰もいなくなつた空間では、黒い龍が複雑そうな瞳でずっとある一点を見つめていたのであった。

景色が切り替わりすぐに位置を確認すると、ここは街から遠く離れた蜘蛛の群れの背後みたいだ。

姿を見せるわけにはいかない白ちゃんとか、本気で戦う時は隠し腕を出す必要のあるパペットのことを考えれば、この場所がちょうどいいのかもしれない。

そしてさらに感知範囲を広げると、他とは違う9つの隔絶した強さの蜘蛛の存在を見つけた。

白ちゃんは無言でそこに向かっていくけど、私はパペットたちに待機と一言告げて追いかけた。

「へい貴様ら、どういう了見だ?」

普段他に誰かがいる時とは違い、スラスラ流れるように喋る白ちゃ

ん。

この蜘蛛たちは白ちゃんの並列意思らしいので、自分自身と会話するようなものだから例外中の例外なのだろう。

『げっ!? 本体! もう嗅ぎつけてきたのか!?!』

分体の蜘蛛の一体が念話で、驚愕をあらわにする。

「どういふつもりでこんな事しかしている訳? ギュリギュリが私らのところに文句言いに来ただけど?」

苛立ちを乗せて白ちゃんが、分体の蜘蛛たちに言う。

『ええー』

『ギュリギュリも動きはええーな』

「すぐこれを止めてくれないと殺されそうな勢いだっただんですけど! というか止めろし。何してくれちゃってんのホント?」

静かにイラつきを高めていく白ちゃんとは対照的に、分体の蜘蛛たちはお互いに顔を見合わせてそっちの方が理解できないと態度で示していた。

『えー。だって人族とか全部ぶっ殺したほうがいいじゃん』

『……は?』

『そうだ、そうだー』

『それで理解しない、そっちの方が意味わからん』

分体の言葉に呆然とする白ちゃん。

そしてヒートアップする分体の蜘蛛たちを見て、おおよそ理解した。

「意見の食い違いが起きてる?」

『……あー、そうみたい』

そう言うのと、白ちゃんは鎌を握り直した。

「もうこいつらは私じゃない」

「なら戦うの?」

「もう他人だ。止めるには殺すしか無い」

そう告げると、蜘蛛たちが騒ぎ出す。

『血迷ったか!?! 本体!?!』

『そっちも2人とはいえ、こっちの9体とやり合うつもりか!?!』

私たちの会話を聞いて、戦闘態勢を取り出す蜘蛛たち。

「迷惑かけてんだから、潰すの当たり前でしょーが」

「白ちゃんがそれでいいのなら、私も容赦無く殺せばいいのかな？」

「ん、それでいいよ」

方針を理解して、私も旗杖を空納から取り出す。

『私らに勝つつもりか？』

『本体とはいえ、容赦はせんぞー！』

空気が張り詰めていく。

「白ちゃんの分体たちもわかっているよね？　こんな事しても根本的な解決策にはならないって」

「言うだけ無駄さ、コケちゃん」

私の発言を止めて、蜘蛛たちに鎌を突きつける白ちゃん。

「身体に教え込まなきゃ、わかりはしないって」

私は白ちゃんの顔を見る。

そして走りだしていった白ちゃんは鎌を振りかぶって、分体の一体に振り下ろした。

その後姿を見て、すぐ翅を展開して飛翔し後を追いかける。

「せいー」

『あぶなっ！』

「ちっ、避けんなー！」

『そう言われて従う奴おりゅ?!』

白ちゃんと接敵した分体らは、お互いに罵り合う。

「恨みは無いけど、死んでもらうね」

『くっそ、情報無いから何してくるかわからん！』

『基本は一緒だ！　なら魔法封じが重要！』

『よっしや、合わせろ！　いくぞー！』

私と対峙した分体らは、一斉にスキルを発動させる。

『『『神龍結界！』』』

「っ！　ならこっちも……」

魔法の力を減衰させるスキルに対抗して、こちらも同種のスキルを発動させる。

だが、白ちゃんと同等の相手が4体となると、こちらからの魔法は効果が殆ど無くなっていた。

『ふはははー！… これでコケちゃんは何も出来まい！』

『油断すんなー！ 進化で何獲得してるのかわからんのだぞー！』

向こうでも神龍結界が発動されたのか9体分の阻害効果により、自分の周囲でしかまともな威力の魔法が発動出来なかった。

「……うん」

『どうだー！ このまま遠距離で颯り殺しにしてやる！』

『魔法が使えないのなら、その分を別の方に回すだけだよ』

そして私は、空間機動の足場が粉々に砕けるほどの踏み込みで分体の1つに接近した。

『……は？』

「まずは1匹」

分体の蜘蛛らが反応出来ない速度で急接近すると、旗杖の封印を解いて現れた薙刀のような穂先で脳天から胴体まで穿いた。

そして周囲が対処に動かれる前に、細切れになるまで切り裂いた。

『そんな馬鹿なっ！ 速ええッ！』

『魔王並の速度ッ！ 魔法型だったコケちゃんが！』

私のステータスの急変に大混乱する分体たち。

やったことは単純。

ただ有り余る魔力を、身体能力強化の魔術を体内に構築して注ぎ込んだだけ。

放出系の魔法やスキルが無意味だったという抗魔術結界の対策として考えていた技の1つである。

「ふっー」

『ぐうッ!? 武器にも気をつけろ！ 痛覚無効貫通して激痛が走る

！』

『嘘おっ！』

たぶんこれは魂喰の効果で、スキルごと魂を削っているのかもしれない。

ちよつと、後で白ちゃんにどんな影響が出るのかわからないので魂

喰だけ再封印する。

『動きが止まった!』

『何してるんだ?』

『アレをやる! 蜘蛛たち、時間を稼げっ!』

離れて1つ翅を巻き直すと、その間に戦っていた分体たちが深淵魔法の構築を始めていた。

そして時間稼ぎのためか、分体たちが産んだと思われる無数の蜘蛛たちが襲いかかってきた。

「ヤバイ、あれは止めないと」

「ん、白ちゃん」

いつのまにか近くに白ちゃんが来ていた。

「今のを止めるだけなら、大丈夫だよ」

「じゃあ、任せた!」

「うん、勿論。任せてっ」

任せられたので、私は旗杖を片手で逆手に持ち、半身になって全身の筋肉を引き絞った。

『あつ、ヤバイ。逃げ……』

「ふっ!」

槍投げの姿勢から放たれた旗杖は、大気の壁を突き破って深淵魔法を構築していた分体に直撃し、巨大なクレーターを生み出した。

穂先が直撃した分体はその衝撃により一瞬で粉々になり、余波だけで近くにいた分体らにも浅くはない傷を与えていた。

「おー、マジヤバクネ? え? こんなにステータス高かったけ、コケちゃん?」

「……何も言えない。見て憶えて」

制約に引つかかるため説明は出来ないけれど、見られる分には問題無いらしい。

そして無手となった私に、チャンスだと一斉攻撃を仕掛けてくる分体らと蜘蛛集団。

遠距離から分体の魔法が飛んできて、すぐ近くには蜘蛛の群れ。

「次はこいつらか」

「この子たちも倒すの?」

「襲ってくるなら仕方ない」

そして私たちは背中合わせで構える。

「カモン! ベイビーズ?」

「さあ、来いっ!」

襲い来る蜘蛛らを蹴散らす。

ときに殴り、ときに蹴り上げ、ときに投げ飛ばす。

身体の大きい白ちゃんの動きを妨げないように、走り回って死角側をカバーする。

「いいねー! 動きやすい!」

「油断しない!」

「そんなこと言わずにさ。ノってるかい? コケちゃん?」

「さあ、ねっ!」

自分の背後を気にせずに暴れまわれる白ちゃんは段々テンションが上がっていき、派手な大技を繰り出したり大声で叫びながら攻撃したりしていた。

分体らから飛んできた魔法は、対抗スキルも展開してかつ身体能力強化の魔術によって抵抗なども上がった私が叩き落とし続けた。

「でやあああッ! ふう。キリがねーな、こいつら」

「また深淵魔法を発動させようとしてる」

「メンドーくさいなあもー。借り物のくせに……ん?」

「どうしたの?」

突然白ちゃんが黙り込むと、その数秒後に分体側で騒ぎが起こつた。

『えっ!』

『なんで!』

『何をしたのッ!』

分体らが準備していた深淵魔法は霧散し、それだけでなく纏っていた様々なスキルが消失しているようだった。

その元凶であろう白ちゃんに目を向けると、白ちゃん自身も同じ様にスキルが消えていた。

「何したの?」

「ただスキルをオフにただけ。それにつられて、あつちも使えなくなつた」

白ちゃんは、のんきにそう言った。

なるほど、スキルを使えなくしたから分体からもスキルを使うことが出来なくて混乱していると。

「じゃあ、残りを私が片付ければいいのかな?」

「そそ、お願い。あつ、これ持つてく?」

そう言つて白ちゃんは、白い大鎌を渡してきた。

「ありがとう。すぐ終わらせる」

「遠慮せず、ギツタンギツタンにしていいからねー」

受け取つた大鎌を手に、私は駆け出す。

同じ長物とはいえ、まるつきり重心などが違う武器をステータスの高さで強引に振るい、分体らを斬り裂いていく。

散解して逃げていく分体らを1匹ずつ仕留めていくけれど、別々の方向に逃げられると多少追いつくのには時間が掛かる。

そしてなんと、パペットたちが自発的に足止めとして立ち向かい頑張つていてくれた場所に辿り着くと、引き剥がすように大鎌を当てて上空に分体を弾き飛ばすと、私は連撃を繰り返した。

上空にいる分体に嵐魔法の単体技を連続して当てる。

高威力の風槍に強制的に錐揉みさせられて身動きが出来ない分体に、跳び上がつて斬りかかる。

風槍が当たらないルートを飛翔し、追従する大鎌の刃が1本ずつ脚を切り飛ばしていく。

繰り返すこと8回、鋭角な軌跡を描いて白刃が交差すると全ての脚を失い身動きできずに落ちてくる分体の蜘蛛の姿。

そして落下地点に先回りした私は斬り上げの構えを取り、地面に激突する寸前に鎌の先端で再び空中にかち上げ、ゆつたりと浮かんだ蜘蛛に大鎌を振り下ろして両断し止めを刺した。

『そんな……、こんな殺られ方なんてええ……』

「……………これでお終いつと」

「お、お疲れーコケちゃん……。えげつないコンボで、我が分体ながら同情するよ」

全ての分体を倒した私に、白ちゃんは旗杖を持って歩いてきた。そして私たちは無言で見つめ合うと、そのまま何も言わずにお互いに武器を投げ合い交換した。

「……うん、こっちのほうがシックリ来る」

「よっ、はっー！　っと、私も同じくー」

白ちゃんは手元に戻ってきた大鎌を回転させ、感触を確かめていた。

私も軽く旗杖を手元で回すと、手に吸い付くような身体の一部であるような一体感を再確認した。

その間にパペットたちも戻ってきて、近くに来るとグツタリと力なく崩れ落ちていた。

どうやら、白ちゃんの分体相手では少々荷が重すぎたみたいだった。

纏う気配が変わりスキルを元に戻したらしい白ちゃんが残った蜘蛛たちを見て呟く。

「さて。しかしどうするか、こいつら」

「どうするの……、うん？　街のほうから強力な魔力の反応あり。獄炎魔法の範囲魔法だと思う」

白ちゃんが蜘蛛たちを見ている時に、遠く離れた街から1人の術者が高度な魔法を組み上げているのを察知した。

その人物をよく見ると、以前上層で拠点を襲撃してきた部隊にいた初老の男の人だと気づいた。

やっぱり生き延びていた、千切れた腕も元に戻っているみたい。

だからといって何かをする理由は現時点で無いので、白ちゃんに視線を戻すと残った蜘蛛たちを対象に転移の魔法を構築していた。

術式を読み解いて目的を察すると、私はその転移が終わった後に必要な転移を準備し始めた。

「アリエルさんたちがいる街への転移は私がするね」

「りよーかい。爺、私、コケちゃんの順ね」

そして街のほうから獄炎の火が発動し、大地を焼き尽くして迫ってきた。

けれど炎は何もないところを焼き、そこに居るはずだった無数の白い蜘蛛たちは白ちゃんの転移でエルロー大迷宮に送られていたのであった。

そして白ちゃんによる蜘蛛たちの転移が完了次第、私の転移が発動してケレン領の郊外から姿を消して元の場所である森の中へと帰ったのだった。

28 ゆっくり行くほど遠くへいける

事件の首謀者である白ちゃんの並列意思らを倒し、パペットたちもちゃんと回収して元の場所に転移すると、ギユリエさんは変わらず同じ場所にいた。

「終わったか」

私たちは頷くと、それを確認したギユリエさんは軽く頷いてそこから何も言わず無言が続いた。

木々の間を吹き抜ける風の音だけが、私たちの耳に響く。

……えっと、それだけ？

ギユリエさんは何も言わずに立っているだけで、沈黙で空気が重くなる。

私は白ちゃんに顔を向けると、白ちゃんも同じ気持ちだったのか視線が重なる。

パペットたちは互いに寄りかかって休んでいるし、白ちゃんは基本喋らないので……

「ほかに、何かありますか？」

私がギユリエさんに声を掛けた。

このまま居心地の悪い感じが続くのは、誰にとっても歓迎してない事だろうし。

「……いや、とくにはもう用は無い。だが、そうだなアリエルの顔でも見ておこうと思っている」

少しだけ顔をこちらに向けると、ギユリエさんは感情が読めない声色で淡々と答えた。

そして背後の木に体重を預けると、言葉を続けた。

「あいつが戻ってくるまでしばらく居させてもらおう。私のことは無視していい」

そう言うと、再び微動だにせず黙り込んでしまった。

どうしようかと悩んでいると、背後から私を呼ぶ白ちゃんの動きを察した。

軽く一礼してから離れると、小声で白ちゃんが語りかけてきた。

「どうするよ、あれ」

「どうするって、アリエルさん来るまで帰らないんじゃない？」

「ええー。メツチャ居心地悪いんだけど、あれ。邪魔なんで帰ってくれないかな」

「うーん……」

「聞こえてるぞ。その白いの」

声を潜めてヒソヒソ話をしていると、白ちゃんのセリフを咎めるギユリエさんの声。

ギクリと身体を強張らせてぎこちない動きの白ちゃんに合わせて振り返ると、姿勢は変わらないまま片目だけ開けて冷たい視線をこちらに向けていた。

2人して冷や汗が出るのを感じると、私は出しっぱなしで放置されていた串焼きなどの料理が目映った。

そういえば買ってきたものを食べる前にギユリエさんが現れて、白ちゃんの分体を阻止しに出発したのだった。

「えーと……、何か食べますか？」

少々強引でも空気を変えるために私はそう提案した。

すると……

「……いたどころ」

ギユリエさんは短く答えると、寄りかかっていた木から離れて地面に腰を下ろした。

そして冷めてしまった料理を温め直したり新たに料理を作ったりして全員で食事をしたけれど、私が何を言ってもギユリエさんはそっけなく返事するだけで、なんとなく避けられているような気がし、食事が終わってからのというものの会話が一切無いまま長い時間が過ぎた。

ギユリエさんのことを努めて意識の外に置くようにして、白ちゃんとパペットたちと共に何とも言えない空気で時間を潰していると、2日目の夜、ようやくアリエルさんたちが帰ってきた。

「イヤー、遅くなっちゃった。ごめんごめん」

アリエルさん、この空気なんとかしてください。

避けられているし踏み込もうにも踏み込むべき隙が一切見えなくて、どうしようもなく打つ手が無いと思っていたところに、待ち焦がれていた状況を打破できる人が来てくれた。

けれど、アリエルさんはギユリエさんのことを思いつきり無視して進むと、背負っていた大樽を地面に置いた。

すでに匂いで気づいているけれど、大地に接した衝撃で樽の中身の香りがふわりと漏れる。

またお酒かあ……

前回の失態を思い出して複雑な表情が浮かんでしまっけれど、アリエルさんは蓋を開けて酒盛りを始めた。

ギユリエさんも合わせてお酒を大量に飲み始めたし、白ちゃんも負けじとそこに参加しました。

どうしようかな……

あれ？ メラゾフィスさんこれは？ 果物？

ああ、飲めない組のための物ですか。

身の置き場所を考えているとメラゾフィスさんから大量の果物を受け取り、それがお酒がダメな人向けの物だと理解した。

受け取ったそれでジュースを作りソフィアちゃんにも配るけれど、それでは満足できずソフィアちゃんは前回同様盗み飲みをして、一口でダウンしていた。

私は前回の反省から決してお酒に近づかず、巻き込まれないように端の方でひっそりとジュースを味わった。

チビチビと外から眺めるだけで退屈な時間だろうと思っていたけれど、そんな思いはジュースを作り始めて味見をした時には一切無くなっていた。

なぜだろう、果物をジュースにするとやたらと凄く美味しく感じる。

その違いは口に含んだときとストロー状の舌で直接吸ったときとは大きく異なり、長い舌の中を甘味と酸味が勢いよく流れていく感覚は、脳がしびれそうなほど心地よかった。

なんだかイケナイことをしている感覚……

この感覚も魔物のときの性質が影響しているのかなと思ったり、もし花の蜜とかを吸ってみたらどうなるのかなとか考えてみると、色々考えを巡らせながら至福に浸っていると、すぐ目の前に白ちゃんが居た。

その両手には、お酒がなみなみ溢れんばかりに注がれたコップが。あの？ 白ちゃん？ その手に持っているのは？

あっ!? 待って！ 飲まないから！ 私はいらない！ いらないから！ ちよ、ダメ……

むぐつ……!? んむううゝツ!!??

……あははく？ クラクラあするうゝ。

喧騒が広がる混沌とした光景から視線を逸らす。

止める暇なく白ちゃんに酒を飲まされたコケちゃんの動向には注意を払う必要があるものの、私は目の前の無愛想な男に対して質問した。

「で、ギユリエは何しに来たのさ?」

私の問いに、こいつは相変わらずぶっきらぼうに答える。

「その白いのに用があつて来た。ついでに貴様の顔を見ておこうと思つてな」

「ふーん?」

ギユリエの視線の先には白ちゃんがいた。

また私の知らない所で、何かやらかしていたのかな。

そう考え、やりそうな事をピックアップしていると、その白ちゃんが会話に混じってきた。

「コケちゃん以外に、そんな呼ばれ方されるのは心外だにやあー」

「あははく、うゝ……」

酔っ払って顔の赤い白ちゃんと、蜘蛛型の背にうつ伏せで乗っかりグツタリしているコケちゃんの姿がそこにあった。

その普段の印象とは全く違う言動にギユリエは驚愕の表情を浮かべていた。

「あー、白ちゃん酔うと誰とでも喋れるようになるっぽいよ?」

「そ、そうか……」

驚くよねー、この変化。

そのギユリエの反応を見て白ちゃんが声を上げて笑う。

「ちなみに笑い上戸っぽい」

「見ればわかる」

そのギユリエの視線だけど、こいつの視線はもうひとつの方にも向けられていた。

「で、コケちゃんの方は酔うと幼児退行して、何するかわかんないから要注意ね」

「……うむ」

なにやら複雑な表情を浮かべるギユリエ。

まあ、気持ちはわからんでもない。

こいつがどんな想いでサリエル様と接し尽くしてきたのを考えれば、コケちゃんの容姿に複雑な感情を抱くだろうし。

あつ、別に変な意味じゃないよ?

こいつが懸想しているのはサリエル様ただ1人だろうし。

けど、どこか面影がある彼女に対して何も感じないなんてことは出来ず、突き放して距離を取ることで内心を押し殺しているのだろうと察した。

難儀だねー、こいつも。

思わず生温かい目を向けると、明らかに不満げなギユリエの顔が映った。

これはイジれるネタが増えたかな?と思っていると、白ちゃんがメラゾフィスくんを吹き飛ばし笑い転げていた。

「ぶっははは!!」

「あー、死んだ?」

「いや、気絶しているだけで命に別状は無さそうだ」

とりあえず、吹き飛ばされたメラゾフィスくんを私は介抱して治療

する。

メラゾフィスくんを吹き飛ばした当人は、高笑いしたまま酒を呷っていた。

コケちゃんのほうは……、あっ起きた。

「ぷはは、あだ!?!」

「むうう、お酒え！ お酒持ってこーい！ それとくだものお！」

「うぐつ、ととつ、りよーかい！ わかったから引っ張らないでつてば！ 首グキつていった！」

「あはは、すすめえ〜」

白ちゃんの背中に跨り髪を手綱のように引っ張るコケちゃんは、そのまま白ちゃんを連れて離れていった。

あんなことされても白ちゃんは怒らないあたり、白ちゃんとコケちゃんの間には相当な信頼関係があるのだろうと感じられた。

そして向こうに酒樽まで持っていく、いつのまに買い込んでいたのか大量の料理と食材を並べてパペットタラテクトらも巻き込みながら盛大に宴を始めていた。

「はああ……」

「苦労しているようだな」

「まったくだよ」

とか言いつつも口元に笑みが浮かぶあたり、私もこの騒がしさを嫌とは思っていない自分がいるのを自覚していた。

「で、白ちゃんに用って何さ?」

向こうに問題児たちが行ったので、改めてギュリエに問う。

すると、ギュリエの口から語られたのは、ある意味予想通りの内容だった。

「あれの分身体が暴走していたので、それを本人らに止めさせた」

「やつぱ分身体がいたかー。ん? 本人ら?」

「ああ。その白いのと人形どもに、それに……あいつの偽物もな」

「その呼び方はどうかと思うなー」

酔って意識が飛んでいるからこっちの会話に向こうは気づいてないと思うけど、一応ギュリエに注意しておく。

「そうだな、すまない」

「あの子とサリエル様は別人。だけど彼女も一人の意思ある人間だよ。不用意な言動で傷付けるのは私が許さないから」

「……ああ」

謝罪を口にしたギユリエは遠い目をして手に持ったコップの水面を眺めていた。

過去に意識を飛ばしているだろうこいつを引き戻すため、私は話を続けた。

「それで、結局なにがあったのさ？」

「……白いのの分身体の目的は、人類皆殺しだったそうだ」

「ほう」

突拍子も無い案だが、まあ悪くないね。

こいつが黙ってないでしょうけど。

「そして、分身体が暴走した原因は、おそらくクイーンタラテクトの魂を吸収したことだ」

なるほど。

私に体担当を送り込んだのもクイーンを踏み台にしたからだし、その踏み台となったクイーンは白ちゃんに魂を食われたけれど食った側にも影響は何かしらあったのか。

「……アリエル。貴様は人類を滅ぼしたいほど憎んでいるか？」

ギユリエは、今更なことを問いかける。

「憎いさ」

当然だろう？

サリエル様を生贄にした連中が、のうのうと暮らしているのが憎い。

そんな連中が生きている世界が憎い。

今もなお、サリエル様を苦しめて生きながらえているこの世界が、憎くて仕方がない!!

煮えたぎる激情を叫ぶと、手に持っていたコップが砕け散っていた。

粉々になった破片とアルコール臭のする液体が、キツく握り締めた

手を汚す。

私は一息吐いて気持ちを落ち着けると続けた。

「けど、そんなことサリエル様は望まない。だから今までずうっと我慢してきた。ギユリエだってそうでしょ？」

「そうだな、その通りだ」

「ねえ……今でも変わることも無く、ギユリエはサリエル様の事が——」
「バツカでー」

突然向こうで酒盛りをしていた白ちゃんから声が上がる。

反射的に私たちは顔を向けると、白ちゃんはそのまま語りだした。他人のために自分がしたいことを遠慮するなんてバカだと。

自分がしたいことをしないなんて、ありえない。

他人が何を言おうと、一番大事なのは自分が何をしたいのか、と。そう言うと、再び白ちゃんは酒を浴びるように飲み始めた。

その言葉に耳が痛かった。

結局私もギリギリになってから動き出したのだから、白ちゃんの言うバカの1人なんだろうと、そう思った。

「はは。私たちも白ちゃんみたいに自己中であれたら楽だったかもね」

乾いた笑いがこぼれる。

自嘲が浮かぶ私に対して、ギユリエは納得がいった表情をしていた。

「そうか、似ているんだな」

「何が？」

私が質問するとギユリエは白ちゃんとDとの関係性について語った。

Dとかいう神については、ギユリエが以前に口をこぼしたこの世界の上位の管理者であるという情報しか知らないけど、なるほどね似ているのか。

こっちはDとかいう神と。

で、あつちはサリエル様か……

因果なものだと私は笑うと、その間にギユリエと白ちゃんは言葉を

交わして思想や意見をぶつけ合っていた。

そこに出ていた言葉に、私は考えを巡らせる。

私の誇り、か……

そんなこと、あの無機質な部屋から助け出された時から変わらな
い。

それだけを胸に、ずっと生き恥も絶望も飲み込んで生きてきたのだ
から。

必ず助け出します、だから待っていて下さい……サリエル様^{お母さん}。

祈りを胸に、決意で身体を満たして瞼を開くと、相変わらず混沌と
した景色が広がっていた。

「おなじやーっす！ 先輩！ ケラケラケラ……」

「……こいつは何を言っているのだ？」

「さあ？ 白ちゃんの考えていることは全くわからんって」

「あはは。じょうずにやめましたあ、にがっ……」

でもまあ、たまにはこういう時間も悪くないかな。

サリエル様、いつか貴女も一緒にこうして騒げたら、きっと楽しい
と思いますよ。

バカ騒ぎの中でも変わらない鉄面皮と淡々とした声がありありと
浮かびながら、私はこの空想が現実になることを、ただ願うのだった。

「なあ、アリエル」

ふと、ギユリエが私に向かって言う。

「もし、その緑のほうに神になろうとしていたら……止めてくれ」
表情を硬くしたギユリエは、そう呟いたのだった。

幕間1 苔・白

——ブレスの検証。

スキルには、1つのスキル内で様々なパターンで現象を発動させられるものがある。

代表的なのが魔法スキルであり、レベルごとに効果や性能が違う魔法が1つに収められている。

まあ、今となつては普通の魔法スキルは無駄が多いことを理解したので、後々自分なりの魔術として理解し組み直す必要があるけれど。

物理現象で再現できそうな魔法は後回しにして、目下空間魔法の理解を深めて魔術化が目標。

他にも身体能力強化も、システム側のステータスと干渉して効率が悪いし改善点も多い。

それはともかく。
魔法スキル以外にも複数の効果を持つスキルがあつて、今回検証するのは神龍力というスキル。

ステータス上昇、魔法の効果を減少させるなど、龍がもつ力を再現させるスキルと言つてもいい。

これらの能力を素で保持している龍とは強力な存在だけど、他にも龍と言えばこれと言う非常に有名な技があるのはご存知だろうか？

そう、ブレスである。

祝福じゃなくて息吹のほうね。

口から破壊力を持った息や炎などを吐き出す攻撃方法。

ドラゴンが出てくるアニメやゲームとかでは、ビームみたいに色んな物を破壊しているアレ。

もちろんこれも神龍力で再現することが可能で、本家本元に比べると劣化品ではあるけど使った本人のステータスに威力が左右されるので、今の私や白ちゃんが使つたとんでもない威力になる。

そしてブレスの属性も、使った本人の得意属性で発動されるらし

い。

白ちゃんは、紫色混じりの黒い奔流といった見た目の闇属性。

私の場合だと、夜空のような漆黒の下地にオーロラのような極彩色が揺らめくような、幻想的だけど何処か不気味な印象を受けるブレスが発動した。

どうやら私のブレスは外道属性らしくて、そのまま何も意識せずに発動して撃つと破魂の効果が乗ったブレスが吐き出されるらしい。

あきらかに封印確定の技なので、なんとか破魂の効果を消そうと努力した結果、破魂のかわりに幻狂の効果が発動するブレスを撃つことが出来るようになった。

……まあ効果特性を変えるのに結構集中力を使うし、そもそもブレ自体が普通の魔物相手ではオーバーキルなので、結局あまり使わないことになると思うけれど。

高威力の大技としては優秀だけど、手数や範囲では魔法を使ったほうが効果的だし扱いやすい。

格下相手なら鱗粉系のスキルだけで何もさせずに完封出来ちゃうし。

そういえば私のブレスを見た白ちゃんが、

「玉虫色……、テケリリ？　宇宙的恐怖？　イアイア？」って言っていたけれど、どういう意味だったのだろうか？

あとで聞いておこう。

あと他には私の場合だと飛行中にブレスを発動する練習もしてみたけれど、空中でブレスを発動させると反動で大きく位置が動いてしまうので、同時に姿勢制御も全力で行わないと狙った場所を安定して攻撃出来ないのが問題だった。

緊急回避的に移動目的で使うのも悪くはないけれど、攻撃としても使えるように飛行能力の向上は必要かな。

下手に撃って錐揉み回転し墜落することになるのは、1回だけでいいので。

白ちゃんがブレスを使う場合だと、人型と蜘蛛型の2つの口から同時にブレスを吐くことが可能なので絵的にもすごくカッコイイと思

うのだけど、それを言ったら微妙な表情をしていた。

なんでも見た目が美しくないとのことらしい。

実にファンタジーしてて、カッコイイと思うんだけどなあ。

結局ダブルブレスは、意地でも見せてはくれなかった。

——コケの魔道具店。

「虫指に魔蛾の翅、21センチ。貪欲に取り込み解き放つ」

私は出来上がった杖を眺めながら、そう呟いた。

素材は自分自身であり、用意するときだけ毎回少し勇気がいるけれど、すぐ元通りに出来るので掛かる費用は自分の魔力と体力だけ。

お値段プライスレス。

費用がかからない意味でも、価値がつけられない意味でも、どっちでも。

「いや、それまともに使えるのコケちゃんだからね？ 何この性能の杖、ピーキーすぎる」

杖を鑑定したらしいアリエルさんが、呆れと感嘆の混じった表情で杖を評価する。

杖の芯である翅に魔力などを溜め込む性質があるので、あらかじめチャージをしておけば少ない魔力で高威力の魔法などを連発出来るのが、この杖の利点である。

まあ、私以外が持った場合、強制的に魔力を吸われてしまうし貯め込む許容量が多いからこそ、魔力が足りない人が持つと一瞬で魔力を食われ魔力欠乏に陥り干からびかねないのが欠点だけど。

「単純に魔力電池以外にもこういう使い方も出来るよ」

そう言っただけ杖に魔力を流し込み同調させて、芯材を対象にスキルを発動させる。

分離したとは言え、元は私の翅である芯が死滅の力を帯びた鱗粉を内部で生成していく。

そして杖を何も無い場所に向けて振ると、先端から腐食属性を帯

びた弾丸が発射された。

「あばだ……」

「ストップ!! 何とんでもない物作ってんのさ!」

「これで私のも作ってくれる?」

「もちろんいいよー」

アリエルさんのツツコミをスルーし、私は期待に満ちた目をしている白ちゃんから白い脚の一本を受け取って、これをどう加工するべきか考える。

攻撃性能を求めて闇属性と腐食属性を全面に押し出すか、それとも空間魔法を補助する道具として制御の基点となる空間指定に特化した性能にすべきか……

大鎌が完全に攻撃力特化だから、ここは補助に長けた杖にするのがいいかな。

どんな完成図がいいのか白ちゃんと相談していると、アリエルさんが激怒し肩を震わせ息を荒く吐きながら会話に混じってきた。

「ゼーっ、はああ……。もう出来上がった杖については今更言っても仕方ないから置いとくけど、他にも何か作ってるのがあったら出しなさいー!」

背後にオーラが見えて空気が震える音が聞こえそうなの、というか実際に威圧を解放されて物理的にも圧力が掛けられるほど怒られたので、素直に今まで作ってきたものを見せた。

「ふむ、耐性訓練用の拷問道具の数々に……。これは鑑定石の類似品かな? 込められたレベルも高いし、かなり実用的。で、これはコンロ?」

積み上がった無数の魔道具を瞬く間に仕分けしていくアリエルさんは1つ残らず全てチェックを終えると、最後にこう言った。

「そこまで変なのは多くなかったけれどダメな物もあつたから、こつちのは処分ね」

「そんない!」

たしかに失敗作ばかりだけど、面白いと思って残っていたのに。

どれもこれも手間暇掛けて作った作品の数々が、無造作に投げられ

山となる。

「あの杖はギリセーフとしても、こっちの銃っぽいやつはアウトだし。それに何これ？ 腐食攻撃を発生させる包帯って……、耐性あげる前に着けた人が死ぬわ、こんなの」

そう言つて次々握りつぶされて粉々になつていく魔道具たち。

その包帯作るのが凄く大変で、付与が酷く難しく何度も材料の翹が塵になり私自身も何度も指が消し飛びながら作り上げた、文字通り血が滲むような超大作なのに、ああ……

私はアリエルさんの手によつて塵になつていき、再利用も出来ないように焼却処分される魔道具たちを呆然と眺め、静かに涙するのだつた。

——髪型いじり。

旅の道中ではそう頻繁には行わないけれど、身体を清めるのも大事ななこと。

浄化といった一回魔法を使えば洗淨完了みたいな便利なものは無いので、水魔法で水を用意しては身体を洗うといった、基本的には前世とそう変わらない内容である。

というか旅の最中でも水の確保に困らず身体を洗えるのだから、魔法があるだけで相当旅が快適に進められているので非常に便利である。

人型になつてから髪がとて長くなつたので、少しでもしやがんだりすると地面に付いてしまい汚れる機会も多いので、魔法で手軽に洗えるのは大変助かっている。

今日も汚れを水流で洗い流し、濡れた髪はそよ風を制御して乾かしている、背後に白ちゃんが居た。

「ん、なに……？ おお……？」

白ちゃんは、ほぼ乾いていた私の髪を手にとると素早く手を動かしていき、しばらくすれば太く束ねた大振りの三編みが背中で揺れている。

た。

「おおー、白ちゃんとお揃いだ」

「ふふん、どうだー。他にも試していい？」

「いいよー」

基本的に髪型はそのまま降ろしていただけたので、纏めてあるのは新鮮だった。

髪がバラけず1つに束ねてあって首周りや背中がスッキリしているけれど、纏めているとなんか締め付けられて息が詰まるような感じがして落ち着かない。

そして、ポニテ、ツインテール、ハーフアップ、おだんご、おきげ、などなど色々と髪を弄られ、同じ様に白ちゃんの髪型も弄ったりしたけれど、結局どつちも普段の髪型が落ち着くということで元に戻したのだった。

それからしばらくして、白ちゃんの髪型弄りの熱は私だけに留まらず、その矛先はパペットたちに向かい複雑怪奇な髪型を施しては、彼女たちに変なインスピレーションを与えるのであった。

——産卵スキル取らないの？

ある日、スキルについて情報共有をしていた時のこと。

突然白ちゃんから、こんなことを言われた。

「コケちゃんも元々の種族が虫だし、産卵のスキル取れると思うけど、獲得しないの？」

「えっ……？」

そして産卵スキルの効果と有用性についての説明を聞いたけれど、それでも私としては取得するのは遠慮したかった。

「いや、だって……、結婚とかもそういうことも無しに子供作るって……、ちよつと……」

産卵スキルで生み出されるのが自分自身のクローンみたいなものだとしても、私自身が卵を産むことになるのは、さすがに心理的抵抗

が大きかった。

以前の蛾の姿だったのなら、まだ抵抗はそこまで無くて取得したかもしれないけれど、今は人型になった上にこの体格だよ？

それだと絵面的にかなりマズイことになるのではという思いもあつた。

私自身の身体の構造的に尾底骨付近から太く生えている尻尾みたいな腹部、この末端にある部分からだと思うけれど、アリエルさんとそう身長や体格の変わらない私が？ 卵を産む？

……それはちよつと、犯罪チックではないかなあ。

指を突き合わせ視線がものすごく泳ぎながら言う、白ちゃんもそれがどういう意味かを理解し顔が赤くなっていた。

「ちよつ、おまつ！ それは私が性に奔放なアレだと言いたいのか!？」
「誰もそこまで言つてない!」

ギヤーギヤー言い合い、そのまま掴み合いの喧嘩なつて互いの頬を抓り合う。

無意味な争いを数分間繰り広げ、赤くなつた頬を擦りながら息を整える。

「ゼエー、ゼエー……。ともかく！ 取得する気は無いからね!」
焼けるように熱い顔を冷ましながら、私は白ちゃんに向かって叫ぶ。

同じ様に肌が淡いピンク色に染まつた白ちゃんも、私に向かって不穏な事を叫んだ。

「そこまで拒絶されると、意地でも首を縦に振らせてやる」

突然白ちゃんの指先から糸が飛び出してきて、私に向かってくる。それを回避しようとするが距離が近すぎたので避けきれず、盾にした左腕に糸が絡みついた。

すぐ断ち切ろうとするけれどその前に白ちゃんが動く方が速くて、急激な引き寄せる力によって投げ出された私は瞬く間に腕ごと身体を縛り上げられ、宙吊りのミノムシとなった。

「ぐうっ……」

「別にそつちの気は無いけど、折角だ。覚悟しろよおー？ ふうう〜」

「うひっ!?!」

ニヤニヤと嗜虐的な笑みを浮かべた白ちゃんが、耳にそつと顔を寄せて息を吹きかける。

至近距離で熱気を帯びた空気が耳を撫で、近い位置にある触覚も微風に細かく揺らされて、首筋から背骨を通り抜け全身が鳥肌立つようなゾワゾワが走る。

「んなっ!?! や、やめっ!?!」

「ほれほれー?… (こ)はどっじゃー」

「んっ、くう……」

片手で首筋をなぞるように撫でられながら、もう片方は耳たぶの溝を掘り起こすように揉まれる。

強張った首の筋肉を爪で突付かれ引つ掻かれ、耳元ではガサゴソとやけに大きな音が至近距離で鳴らされる。

その刺激が加わる度に反射的に身体が強張り身を振るものの、糸に縛られた状態では首を左右に揺らすか足をバタつかせることしか出来ない。

暴れば暴れるほど糸は食い込み、腕や翅などに強い圧力が掛かってくる。

「ふふ、ふふふ……。ちよつとヤバイなこれ、楽しくなってきたかも」

「うううっ!?! ふううううう、ツツ!?!」

歯を食いしばり声を出さないように堪えるものの白ちゃんは容赦無く指先で刺激してくるので、焼け付く熱が蓄積していき汗が吹き出して肌を流れる。

ワンピースの内側で、腰から生えた腹部がブワつと膨らんでは収縮して波打つのを、幾度も繰り返していた。

私は、このままではマズイと本能的に悟った。

私は…… 受け入れる。

》拒否する。

触れようとしてきた指が接する前に、私はスキルを発動させた。

腐食の力が荒れ狂い、自分ごと糸を断ち切る。

自爆攻撃である腐食攻撃は私自身にも牙を剥くが、以前に耐性を高

めるために修行をしていた事もあり肌などが酷く爛れる程度で済み、全身から血を流しつつも自由を手に入れた。

血まみれになりつつも糸から抜け出した私は、急速に飛び退いて大きく距離を取り10メートル以上離れたところで叫んだ。

「はあつ、はあツ！ な、な、何してくれるんですか!?! このバカー!?!」
語彙力が小学生並になり、白ちゃんを罵倒する。

この後、地図を書き換えなくちやいけないような規模の、ガチで本気の喧嘩をした。

幕間2 他者視点ズ

——蜘蛛 魔法？

うがー！

真似出来んっ!?

今私が試していたのはコケちゃんがやっていたような、スキルに拠らないステータス強化の魔法を再現することだった。

何かしらの魔法が体内で展開し発動されているのが確認出来るけど、その術式がスキルに拠るものとは少し違う独自のもので大まかには意味は理解出来るけれど、それをいざ再現しようとするとシステムのサポートも利かず全て自力で構築しなければならず、そしてさほど難しくない内容なのに構築が完了しても何も発動せずに霧散してしまった。

なんというか、何かが足りていない気がする。

必要な要素が抜けているというか、省略されている？

この術式は、コケちゃんに最適化されているから私には使えないというか、術式に必要な何かが足りなくて何かが余分といった感じだ。たぶんその原因となっている部分は、核たる中心の未知の術式だと思う。

叡智でも感知出来ない何かからエネルギーを引き出して直接術式に流し込んでいるコレは、指定している対象の位置が私では合っていないくて何も掴めずに空振りしているような、そんな空虚な反応だった。

うーん、叡智様でも把握出来なくてエネルギーを持った存在……

……あつ、魂のことか、これ。

考えれば当然のことだったけれど、スキルは魂に貼りついた術式だ。

システムから補助されているけれど、そのスキルを維持するには土台がいる。

そのための魂であり、そしてそれをスキルを鍛え上げて成長させ死

んだ時に拡張された分の魂を回収されるのが、この世界の人々に科せられた贖罪でもある。

まあ罪云々については今は置いて、必要なのは魂に関するところ。

この魂についてだけど、スキルを書き込む土台であると同時にエネルギーを貯め込む器でもあるのではないかと私は考えた訳だよ。

H P S Pは肉体に依存したステータスだとして、じゃあM Pは何処から来ているのかと考えると、それは魂からなんじゃないかと思う。

もちろん大気中にも魔力と呼べるものが漂っていたりするけれど、その量は基本的に少なく私の膨大なM Pを賄うには到底足りない濃度しか、大気中には存在していない。

そんな微量の魔力しかない場所でバカスカ魔法を撃ってM Pを消費しても、星魔の効果の通りに瞬時にM Pは回復される。

しかも大気中の魔力には殆ど影響されず与えずに。

他にもスキルの中には何のコストも支払っていないのに効果を発揮するスキルもあって、じゃあそのコストは何処から賄っているのってなると、やっぱり魂からしか無いのよ。

つまり！

魔法やスキルなどの術式は魔力によって編まれていて、その魔力は魂に由来するもの。

その余剰分がM Pであって、コストが無いスキルも余剰分を知らず識らずのうちに使われて起動していると、そう私は解釈した。

となると、私がすべきことは中心の術式を私の魂に合わせたものに書き換えることだけど、原因がわかったところで改善出来るかと言うと、そうではない。

魂ってなんだ？

いや、並列意思どもをマザーの魂に送り込んだことから、魂についてはある程度理解出来るんだけど、自分自身の魂に干渉するのにどうすればいいのか、全くわからなかった。

あの時はマザーからの眷属支配による干渉で魂に絡みついたパスを理解し、逆に魂を送り込むことで乗っ取る発想に至ったけれど、こ

れは魂をそのまま移動させているだけであり眠っている力を引き出すなどのことは一切していない。

だから魂の存在は把握出来るけれど、それを操る術となるとお手上げとなるのだ。

叡智様も魂のこととなるとサポート対象外で、全く教えてくれないからね。

ぐぬぬ。

おのれDめ、変な制約コケちゃんに掛けおって。

それが無かったら、こんなに苦労することなく情報共有出来るというのに！

それとなく聞き出そうとコケちゃんに仕掛けたこともあつたけれど、いつの間にか手元にスマホがあつて『イエローカード』と聞こえた次の瞬間には消えていた出来事から、聞くことは止めた。

怖いっつーの！

ホラーか、いや存在自体がホラーだったわ、あいつ。

そして今日も、魂の何かしらを掴むために試行錯誤を繰り返すのだった。

うおおー！ 唸れ我が魂っ！ ……ダメか、はあ。

——血 癒やしが欲しい。

癒やしが欲しいわ、切実に。

そう思ったのは一度や二度ではなく、ほぼ毎日そう感じているのは白からの修行という名の拷問のせいかしら。

最近では自力で結構な速度で走れるようになったし、耐性系スキルも上がってちよつとやそつとの状態異常など効かない身体になつたわ。

私は何を目指しているのかしら？ 人外かしら？ 元から人外だったわ。

……そういえば耐性上げの仕組みを作ったのは苔森が原因だった

わね。

あの拷問具もアップグレードされて今も両手首に複数個着けているけれど、既にこの気持ち悪さにも慣れたもの。

悪い意味で、この酷い環境に適応しちやっっているのが悔しい。

まあ、そんな訳で日々辛い修行を繰り返しているのだけど、さすがに修行漬けでは気が滅入るといふもの。

それを解消するために、街に寄った時には思いっきり羽根を伸ばしたり、空いた時間では存分にメラゾフィスに甘えてみたりと、ストレス発散を行っているけれど足りないと感じる時もある。

メラゾフィスから好きなだけ血を吸えれば最高なのだけれど、以前貧血にしまった負い目もあるし何よりまたメラゾフィスを倒れさせることになったら、アリエルさんにこっぴど絞られるのが目に見えているわ。

だから吸血するのは控えているけれど毎日ストレスは溜まる一方で、他にも癒やしとなるものが欲しかったわ、例えばもふもふとか。

そんな事を呟いたところ、思わぬところから返事があった。

「もふもふとはちよつと違うけれど、あの子たちを呼んでみようか？」
そうして出てきたのは、いつか苔森が抱えていた魔物……の巨大版だった。

ちよつと、でかくない？ 一軒家サイズはあると思うのだけれど。

そう私が言うと、苔森が答える。

これでも中間サイズで、もつと大きいのも居るけどスペースが無いから呼べなかつた、と。

しかもこれだけ威圧感のある魔物が、白と苔森が生まれたというエロロー大迷宮では大して強くない中間層の魔物だと言う。

魔境すぎない？ そこ？

改めて2人が過ごしてきた環境を知り、私は畏怖した。

そりゃあ、毎日こんなやそれ以上と戦っていたら、強くもなるわね。

それはそれとして、私が癒やしが欲しいと言って呼ばれたこの魔物グレーターコケダマというのらしいけれど、可愛いかしらこれ？

いや、以前に馬車の中から見た魔物のときの白の姿からすれば、丸っこくてだいぶ可愛らしいと思うけれど、それでも強さの違いによる圧迫感で全然可愛いとは思えないのだけれど？

白や苔森にアリエルさんとかでは強さの桁が違いすぎて、感覚が麻痺して正確に差というものを理解出来ないけれど、この魔物の強さだとギリギリ理解出来る範疇であり、それを感じ取ってしまうからこそ素直に可愛いとは思えなかった。

だってこれ、今の私より何十倍も強いのだもの。

そうして躊躇っていると苔森はそれを遠慮していると勘違いしたのか、無理矢理この潰れた緑色の球体みたいな魔物に私を乗せようとしてきた。

抵抗虚しく猫みたいな運ばれ方で魔物の背中に降り立ったけれど、足が深く沈み込む感触で評価を一転させた。

あ、あら？　悪くないわね？

そうして促されるまま寝転がると、水気を帯びた苔で少しひんやりするけれど全身柔らかい感触で包まれ、無重力とまではいかないけれど水面に浮かんでいるかのような抵抗感のなさ。

思っていたもふもふとは違うけれど、こういうのも悪くないわね。

隣にメラゾフェイスも呼んで一緒に寝転び、ちよつとした天体観測をした。

こういうときも身体の大きさからハブられる白に、ざまあと思ったのは内緒よ？

—— 従 戦闘訓練

裂帛の声とともに剣を振るう。

しかしその銀閃は瞬時に差し込まれた旗杖によって弾かれ、流される勢いで手元から剣が抜けてしまいそうになる。

それを耐えるのではなく、敢えて脱力し流れに乗ることで次の攻撃に繋げ、様々な角度から無数の軌跡を描く連撃を繰り出す。

しかし、そのどれもが弾かれ流され、まともに入った斬撃は一つも無い。

僅かな気の緩みから姿勢が崩れると、その隙を叱咤するかのよう
に反撃が叩き込まれ、私は地に伏し土を舐めることになった。

「ぐっ……」

「そこまで。少し休憩したら、次は白ちゃんとメラゾフィスくんだね」

「ふう、ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

訓練相手の苔様から手を借り立ち上がると、互いに礼を行う。

作法こそ見たこと無い形式で適当なものであるが、模擬戦を行った後はこうしてお互いの健闘を称えるのが、毎回のルールとなっていた。

しかし、手加減されてこれか……

私は様々な方向から攻めたのにも関わらず、苔様は一步も動いていないというのに有効打を当てられなかった事に、忸怩たる思いを抱く。

いや、当てられるだけ白様との模擬戦よりはマシか。

白様との戦いとなると、いくら振ったところで全て回避され虚無感を覚えるほどの圧倒的な差を見せつけられるのだから。

それを思えば、全く通用していないとしても攻防が成立する苔様との模擬戦は、剣のつなぎ方を確かめる良い機会であり、そして硬く防御に秀でた相手を想定した訓練として最適であった。

端まで歩み木に背を預けて座り込むと、私は考えを巡らせる。

吸血鬼としての在り方も大分慣れてきたものだ。

最初こそ忌避感を覚えていた吸血行為も、今ではただの作業と割り切って手早く済ませられるようになり、必要最低限の量を奪っては後処理もスムーズである。

いつのまにか増えていた《始祖》の称号によって、血の消費速度も緩やかになり必要な吸血回数も少なくなっていたが、お嬢様の気分転換なども兼ねて街に寄る間隔は以前と変わっていない。

その度に血のストックを補充するので消費より溜め込む量の方が

多いが、溜め込んだ血を消費してステータスを強化する強血のスキルなどもあるので、多い分には問題は無かった。

経緯はともかく、苔様には感謝すべきですね。

始祖を得る切っ掛けとなった出来事はあまりよい記憶ではありませんが、こうして日中の不快感も和らいでいますし、お嬢様への暴挙もお嬢様本人が詳しく憶えておらず気にしないと言った以上、私からは何も言うことはありません。

たとえ、そのことに私が僅かなしこりを抱えていても、だ。

結果的に良い方向に向かい、そして主が良いと言うならば黙って従うのが従者というもの。

だが、お嬢様が道を違えようとしている時は身を挺してでも正すのも従者としてあるべき姿だ。

頭を振って思考を切り替える。

しかし、ステータスは上がったものの剣の腕は一向に変わりませぬね。

素振りを日課としても上達は遅々として進まず、理解していたとはいえ自身の才能の無さに苦いものが込み上げる。

どう足掻こうと剣技では先が見えている以上、模索すべきは吸血鬼としての力を組み合わせた、新たな戦い方を見つけることかもしれないね。

そして物は試しと次の白様との模擬戦で、私は魔法スキル何でもありで挑んだが何一つ掠らせることが出来ず、大鎌の背に叩きのめされ再び地に伏せるのだった。

「ぐう……ッ。まだまだ、次こそは掴んでみせる」

悔しさをバネに、私は努力を続けるのであった。

— ?
????

暗い夜道の中、アスファルトの上を幽鬼のように歩く小さな女性が
いる。

元は可愛らしい童顔も相まって年齢よりもかなり若々しく見えて
いた彼女だったが、今では目も落ち窪み濁りきった濃い隈を浮かべて
いて、一縷の希望も見いだせないような光無き瞳をしていた。

彼女はとある酷い事件によって心を病むほど憔悴し、今日は隔週で
通う事になっている精神科に行き診察を受けた後に処方箋を貰い、誰
もない自宅に帰る途中だった。

彼女に纏わる人生について語ると、それは世間一般的には悲劇と称
されるような、あまり良くない出来事の連続でした。

彼女は小柄で幼い印象を受ける風貌でしたが優れた知性を宿して
いて、その頭脳を活かし都会の大きな会社へと就職しました。

独り立ちをし実家を離れて暮らし始めた彼女は、仕事の関係で知り
合った男性に恋をしました。

その人は、いわゆるエリートで人当たりもよく仕事の成績も優秀
で、出来ないことは何も無いと讃えられるほどの超人でした。

プライベートも精力的で、何度か話している内にデートのお誘いも
よく来るようになり、まんざらでもなかった彼女はそのまま付き合う
ことになりました。

しかし悲劇は彼と付き合ったことから始まります。

その男性は甘い言葉で耳に心地よく飾り立てますが本心は獣その
もので、実はこの時点でも関係を持っていた女性は複数いて、過去も
含めれば恐ろしい数の女性が毒牙に掛かっていました。

そんな男の本性を知らずに強引に迫られ続け、結果彼女は1人の子
供を身籠りました。

彼女は嬉々として妊娠を報告しますが男からは冷淡にあしらわれ、
そこから不信を抱いた彼女はついに男の本性を知ってしまうのでし
た。

悲しみに暮れる彼女は男と別れ、お腹に宿っていた子を墮ろす選択

肢は愛情深い性格だった彼女には選べず、1人の女の子を産みました。

彼女は仕事をテレワーク中心に変えて、ときどき両親や知人を頼りながらも仕事と育児の両方を頑張って成立させ、愛情を深く注ぎながら娘を育てました。

その子は母親と非常に良く似て、何処か夢見がちであり性格が彼女の幼少の頃とそっくりであったため、危なっかしくて絶対に父親とは会わせられないと彼女は思いました。

そんな悲しい経緯から産んだ子供でしたが、彼女は愛娘に溢れんばかりの愛情を与えて、小さなマンションの一室で仲睦まじく平穩に暮らしていました。

この頃が彼女にとって一番幸せな時間でした。

自分とそっくりな娘が身に覚えのあることをやらかすたびに共感性羞恥と懐かしさを覚え、自分の記憶をもとに毎回優しく説教をしては仲直りするのだが、この家での日常でした。

今では娘も成長し、自分と同じくらいの身長にまでなった娘と並ぶと、彼女のかなり若く見える容姿も相まって姉妹か双子のように見えて、ある夏の日お揃いの麦わら帽子を被って出掛けていると母娘共々ナンパされかけるほどであった。

そんな仲の良い家族でしたが、ある日を境に一変し彼女は1人になりました。

温かな団欒に満たされていたマンションの一室は薄暗くなり空気が淀み、2人して協力しながら賑やかに家事をしていた部屋も掃除も疎らでホコリが溜まり静寂に包まれています。

鍵を開けて室内に入った彼女は、滑り落ちるようにカバンをフロアリングに置くと、部屋の明かりも着けること無く奥へと進みます。

乱雑に置かれたカバンは倒れて、そこから溢れた紙袋には無数の薬品名と「苔森照^{テル}」と書かれた患者名が並んでいました。

そして彼女は娘の部屋に入り、娘が育てていた観葉植物やテラリウムなどに一通り水をやると、同じ部屋にあるベッドに潜り込み冷たい毛布にくるまって、静寂の中ただ身体を丸めるのでした。

深い森の中を歩く少女は、突然立ち止まった。

そして、ぽつりと呟く。

「なにか……、大切な何かを、忘れているような気がする……」

少女は、心に去来した寂しさを不思議に思いつつ、空を見上げる。

澄んだ空には雲一つない寒々とした青が、何処までも広がっていたのだった。

神と人と

29 風蝕の荒野

ソフィアちゃんたちが魔族領に行くことを決めて、カサナガラ大陸北部にある魔族領を目指し、大陸を北上しはじめてから一年近くが経った。

それまでの道中は基本的に平和そのもので、大きな出来事と言える事も魔物の領域といえる辺境を通った時に襲撃してきた、大型の魔物との戦闘だけだった。

その魔物はメラゾフィスさんの練習相手として活用され、逃げようとしても白ちゃんやアリエルさんに私なども含めた面々に蹴り戻されるので、悲壮な覚悟を漂わせてメラゾフィスさんと死闘を繰り広げたのだった。

そして今は、地平線まで続く岩と砂しか見えない荒野を私たちは進んでいる。

ここは鳥と爬虫類の中間のような生き物が無数に飛び交う荒野。

風を司る竜、あるいは龍が支配する領域だった。

荒野に入る前にアリエルさんが、ここを通るだけと伝えていたおかげで監視と警戒で済んでいるけれど、それが無かったら襲撃が休む暇無しでやってきそうな危険地帯を私たちは進んでいた。

「ラーラーラー、ラ〜ラ〜」

「「「「らーらーらー、ら〜ら〜」」」」

砂利を踏む足音の他に、高い声の合唱が重なり合う。

私が音階を奏で、そこから一拍置いてからソフィアちゃんとパペツトたちの歌声がメロディーをなぞって荒れ地に大きく響き渡った。

なぜ荒野を合唱しながら歩いているのは発声練習のためで、パペツトたちは疑似声帯が白ちゃんによって搭載されたけれど扱いが難しく不慣れであり、ソフィアちゃんのほうは今まで念話に頼り切りだったせいで声帯が未発達で舌っ足らずのままだったため、それらを改善するために発声練習が行われるようになったからである。

これはステータス訓練的にも効果的らしく、大声を叫びながら歩くことで負荷が増しているので停滞していたステータスの上昇率も引き上げられ、合わせてスキルのレベルも上がり続けていた。

メラゾフィスさんもステータスを高めるための訓練に参加しているが内容はソフィアちゃんたちとは違っていた。

一步を踏みしめるたびに、硬い岩盤のような地面に足跡が刻まれる。

重い足音で地面を陥没させながら歩いているのは、メラゾフィスさんに対して白ちゃんが邪眼で重力を倍増させているからだった。

ソフィアちゃんとは違って、これくらい負荷を掛けないとステータスが上がらないためであり、そのおかげで順調に伸び続けていた。

そのかわりと言っているのかわからないけれど、私や白ちゃんのレベルやスキルの方は全く変化がなくて、既に大半のスキルやステータスが高レベルまで上がっている私たちでは、そう簡単には成長しなくて能力そのものを発展強化させる方向では頓挫している状況だった。

魔物などを狩るにしても旅をしている現時点では機会も少なく、それに神仰から要求されているエネルギー量は数年どころか百年単位での、気の遠くなるような長期間の計画を立てなければ達成不可能な膨大で桁違いのエネルギーが要求されている。

なので、現時点で焦ったりしても意味がないと割り切って、魔術の習熟や持っている力を上手く使えるようにするなど技量を高める方向で鍛錬を重ねて修行に励んでいた。

この身体は不老に等しい。

ほかのみんなも、似たようなもの。

だからゆつくりと力を蓄えていき、ゆくゆくは……

そして今現在は、感知系統の能力をスキルに頼らない感覚に落とし込むため、瞑想のような訓練を行いながら歩いていた。

基本は魔力感知……、術式で探るか強化した感覚で探るかの違いはあるけど、どちらも高精度で魔力を把握出来なければ、地形の把握も生物の把握も上手く行かない……、あれ？

自己に没入しすぎていたからか地下の空洞に気づくのが遅れ、それ

を知らずにメラゾフィスさんが薄くなった地面に足を踏み込もうと
しているのに、注意するのが遅れた。

「メラゾフィスさん、すとっ……」

慌てて声を掛けようとしたが一步遅く、メラゾフィスさんが地面を
崩壊させ空洞へと落ちていくのを見送ることしか出来なかった。

落下したメラゾフィスさんは傷一つ無くて無事だったけれど、そこ
に集まってくる無数の反応があった。

人ほどの大きな蟻が無数、どうやらここは蟻の魔物の巣だったらし
い。

強さ的には大したこと無くて、メラゾフィスさんでも問題無く対処
出来そう。

地面に空いた一メートルちよつとの穴からパペットたちが降りて
いって戦い始めているし、すぐ蟻が殲滅されて終わるだろうと、私自
身が何かする必要も無いと感じた。

けど、奥に何かあったらという可能性を潰しておくために確認はし
ておこう。

私は久々にスキルとしての感知能力、《森羅万象》を全力で拡大させ
て地下深くまで搜索する。

最近は独力での魔力感知を身体に覚え込ませるために、必要な時以
外は使っていないかったけれど、使い方自体は忘れていないし、むしろ
魔力感知を自力で出来るようになったからなのか処理効率が上がって
精度と範囲が更に広がっていた。

無数の横穴縦穴を網羅していき女王蟻の居場所も把握出来たけれ
ど、そこから更に地下に違和感を憶える場所が浮かび上がる。

私は白ちゃんとアリエルさんに言う。

「白ちゃん、アリエルさん。この蟻の巣の地下を探知してみてくださいま
せんか？　なんか変なものがあるような気がします」

そう告げると、アリエルさんは何もわからなかったみたいだけど、
白ちゃんは違和感に気づいたみたいだった。

「コケちゃん」

「見つけた？」

頷く白ちゃん。

そして私たちは、残っていた蟻を排除しながら奥深くへと進み、土魔法でトンネルを掘りながら地下深くへと進むと、やがて見えてきたのは高度な精錬加工技術によって造られたと感じる巨大な金属製の扉だった。

「これって……」

「ああ、お手柄だよコケちゃん。これは文明衰退前に造られた施設だ」私の言葉にアリエルさんが答え、そして目の前の扉を無理矢理抉じ開けて侵入していった。

扉を破壊したからなのか、劈くような警報が施設内に鳴り響く。

早足で進むアリエルさんを追いかけていると、音を立てて壁の一部がスライドし銃口のような物が現れてこちらを狙っていた。

私は守りを、白ちゃんは攻撃の魔法を構築させようとしたが、それより先にアリエルさんが全ての銃口を指から伸ばした糸で破壊していた。

思わず白ちゃんと顔を見合わせると、私たち二人はそつと魔法を掻き消したのだった。

それからは障害を物ともせず進むアリエルさんを先頭に、中心に戦鬪力の低いソフィアちゃんやメラゾフィスさんを置いて守る布陣で進んでいると、怪しげな行き止まりに辿り着いて、そこから壁をアリエルさんが壊すと隠しエレベーターを発見した。

位置的におかしいと思うと、アリエルさんが説明した。

普段は土の中に埋まっただけで、必要な時には土をドロドロに溶かして地上に出てくるらしい。

無駄しか無いような機能だけど、設計にはポテイマスが関わっているらしく、この施設への警戒を私は一層強めた。

反対側の壁を壊してさらに進むと、同じような通路が続いていた。けれど長さはあまり無くて、少し歩くと壁一面が扉となった突き当りに辿り着いた。

アリエルさんがこれまでと同じ様に抉じ開けるために扉へ近付くと、自動でスライドし開いた。

その現象に驚いて硬直する私たちだけ、突然開いた理由は扉の向こうにあった。

無機質な金属の装甲とレンズがこちらを覗く。

いかにも兵器といった形状のロボットが数え切れないほど並び、銃口をこちらに向けていた。

キヤタピラの上に人間くらいの大きさの胴体部分と大きな銃火器。

それらが一斉に光を放ち、銃口からエネルギー弾が迫る。

大半はアリエルさんが撃ち落としているけれど、防ぎきれなかった分がこちらにやってくる。

パペットたちは手持ちの武器で撃ち落とし、白ちゃんは隙間だらけの弾幕など軽く避けていた。

となると危ないのはソフィアちゃんたちなので、私は彼女らの前に立ち腕を前に向ける。

「動かないでいてね」

「ひややあああああツツ!? っ、苔森!？」

これくらいの威力なら余裕で防げる。

腕に纏う苔を増殖させ、前方に壁のように展開する。

緑の壁となった苔の盾は光弾を全て受け止め防ぎ、背後に居る私たちには微風一つですら影響が届くこと無く聳え立っていた。

視界が塞がれてしまうけれど、そこは視覚に頼らない感知で補い向こうの様子を確認する。

すると背後を気にしなくて良くなったアリエルさんが大暴れして、次々とロボットらを破壊して回っていた。

討ち漏らしはパペットたちが隠し腕も使った本気の戦闘形態で破壊していき、途中で背後の隠し扉から襲ってきたロボットも、速攻で私が撃ち抜いて破壊した。

戦力外だったソフィアちゃんらは例外として、結局白ちゃんは位置取りが悪くて何もせずに殲滅が完了して戦いが終わってしまった。

大鎌を構えたままスクラップしかなかった空間を眺め、そつと鎌を下ろす白ちゃんは無表情のままだったけれど、確実に内心不満を抱えていそうだった。

一瞬静寂が訪れるが、特大の危機感が広間の奥から突き刺さる。その脅威という魔弾は、一番奥まで進んでいたパペットタラテクトのサエルに照準が合わせられ向かってくる。

咄嗟に展開していた苔の盾をさらに伸ばして細長くし、距離を稼いでサエルちゃんを突き飛ばす。

緑の奔流に押し出されるサエルちゃんだったが、僅かに間に合わず轟音とともに光の砲弾が飛来して閃光が宙を走った。

サエルちゃんの左腕の肘から先が全て砕かれ吹き飛ぶ。

伸ばした苔も私の防御が反映されているにも関わらず消し飛ばし、いくらか威力が下がった光弾が施設の床に当たって消滅した。

「……ッ！ サエル！」

「む……」

アリエルさんが、衝撃で動けずにいるサエルちゃんを抱えて救出する。

その間に白ちゃんは奥から姿を表した巨大な砲塔を乗せた戦車に向かっていき、魔法を放つ。

しかし放たれた暗黒槍は戦車の表面で掻き消され、装甲に傷一つ付ける事無く消失した。

あれは、あの時と同じ結果？

効果範囲が空間全域か表面だけかの違いだけど、あれでは魔法や魔術での攻撃は相性が悪い。

「コケちゃん！ サエルとソフィアちゃんたちをお願いっ！」

私が観察している間に隣にアリエルさんが居て、左腕全てが半壊したサエルちゃんを置いて再び戦車へと向かった。

戦車には砲弾で負傷しなかったアエル、リエル、フィエルちゃんらが張り付き、四つある機銃に対処しながら戦っていた。

物理攻撃なら抗魔術結界を無視して損傷を与えられるはずだけど、パペットらの攻撃では戦車の装甲を切り裂くことが出来ず火花を散らして弾かれていた。

「アリエルさん！ 機銃は防げるけれど、砲弾はギリギリ！ こっちに向けさせないで！」

「りよーかいッツー！」

そして戦線に復帰したアリエルさんは、一瞬で接近すると砲塔を蹴りぬいて拉げさせた。

……そうすれば二度と撃てないとはいえ、力技すぎる行為に私は啞然とした。

ここまで活躍が全然無かった白ちゃんが、せめて止めだけでもと禍々しいオーラを大鎌に纏わせ戦車に振るった。

背後から飛び掛かる白ちゃんを迎撃すべく高速で回転する戦車だったけれど、白ちゃんは機銃を切り払いながら接近し、その勢いのまま大鎌が装甲に触れると障子に穴を空けるかのように安々と突き刺さり戦車自身の回転機動も加わって被害が広がり、あっさりとスクラップとなった。

しかも、それだけに留まらず金属である戦車が塵となって崩れていき、腐食属性で撃破したときと同じ様子で崩壊した。

「あつれー?」

「……なんで?」

「これは、また……」

三者三様に呆然とする。

白ちゃんは驚き、私は疑問、アリエルさんは残骸を見てドン引きしていた。

パペットたちやソフィアちゃんらも、全員表情が強張っていた。塵となった戦車の残骸を眺める私たち。

負傷したサエルちゃんだったけれど、左腕が急に無くなったことで重心が崩れてバランスを失い動きがぎこちなくなっていたけれど、感覚を修正して一人で立ち上がり走れるくらいには復活していた。

片腕が使えなくなつたから攻撃力が下がってしまったけれど、大きなダメージも無く本体の蜘蛛は無事で戦力的にもすぐ復帰出来そうであり、私は軽い被害で済んだことにホッとした。

「うーん。思った以上にここはやばそうだねー。サエルも負傷して左腕半分無くなつちやったし、ソフィアちゃんとメラゾフィスくんは安全のために地上に戻ってたほうがいいかも」

その言葉に反論する者は誰もいない。

さすがにソフィアちゃんたちでは、ここでは戦力外であり自力で自分を守るだけの力が足りていない以上、さらに奥まで探索するのについて行くのは厳しいと感じた。

それを感じ取っているのかソフィアちゃんらは何も言わない。

一旦引き返そうと結論が纏まりかけた瞬間、施設が大きく揺れる。

大地震のような揺れが私たちを襲い、白ちゃんやアリエルさんは身体能力で強引に耐えているが、ソフィアちゃんやメラゾフィスさんは手について座り込んでいる。

パペットたちも耐えきれずフラフラしていた。

サエルちゃんがバランスを崩して床に倒れそうになる。

片腕が半分欠けていることで姿勢が安定しないサエルちゃんを、私は掴んで空中に引っぱり上げて抱きかかえる。

揺れが始まった瞬間から私は飛翔を発動させて空中に退避していたので、この謎の地震の影響を受けずに状況把握に務めることに専念出来ていた。

天井や壁の照明が赤く変わって点滅しだした。

危機感がジワジワと高まってきて、冷たい針の感覚が背中に走る。

「なんか、やばげ?」

全員が、それを感じていた。

「前言撤回! みんなで逃げるよっ!」

アリエルさんがソフィアちゃんとメラゾフィスさんをファイヤーマンスキャリーして駆ける。

私はサエルちゃんを抱えたまま、来た道を反転して飛ぶ。

それを追いかけるパペットたちだったが、今も続く振動でフラつき速度が出せていない。

「白ちゃん!」

私の視線で意図を察してくれたのか、残りの三人を抱え込む白ちゃん。

長い通路を抜け、エレベーターの部屋や機銃の壁を疾走する。

途中で大きな揺れが発生し、背後から爆炎が迫ってくる。

さらに加速して、駆け抜ける私たち。

そして古代文明の施設を抜け、蟻の巣を駆け上り、地上へと飛び出した。

急いで穴の周囲から離れると、轟々と燃え盛る火柱が地面を爆発させて噴き上がった。

なんとか全員無事に脱出できたことに安堵するが、それは一瞬で無くなった。

遙か遠く視線の先の荒野、そこには桁違いの特大の火柱が上がっていて、その爆炎は宇宙にまで届きそうなほど高く伸びている。

その爆炎の中をスケールが違いすぎてゆっくりに見えてしまう何かが、宙へと登っていった。

そして何かが上昇して消えていくのと同時に炎は沈静化していくが、残った広大な空洞から黒い影が現れる。

それは、一言で言えばUFOで。

端から端までの全長が何千メートルとありそうな、鋭角な尖塔が幾本も聳え立つ超超巨大な円盤型の飛行物体が悠然と空に浮かんでいた。

「なに、あれ……」

不意に口から漏れ出た言葉は、私たちの総意と同じものであった。

30 人魔龍妖

ヒリヒリとした空気が草一つない荒野に充満する。

今、この荒野には私たちがアリエルさん魔王の陣営のほかに、三つの勢力が勢揃いしていた。

それらは全て、トップの意思一つで世界の趨勢を左右することが出来る能力を持った、国家すら歯牙にかけない集団あるいは個人だった。

一つは、どこかの街の中で会ったことがあるような老人が率いる、人族最大の宗教である神言教の教皇ダスティンと怪しげな風貌の護衛複数。

豪華な法衣を纏って微笑みを浮かべているけれど、その裏に非道も辞さないような未恐ろしさを感じる気がする。

もう一つは、管理者であり神でもあるギユリエイストデイエスが統率する龍の一族。

龍自体も単独で国を滅ぼせる能力を持っているけれど、この黒い鎧を着込んだ男の人はそれすら越えた世界を管理する側という頂点に在る存在である。

そして最後が、禁忌の機械技術を今も使い続けているエルフの族長ポティマスと護衛のエルフ。

全ての元凶。

禁忌の罪は元を辿れば全てこの男に原因が集結する、世界を破滅させる引き金を引いたくせに、今もなお世界を蝕む寄生虫だ。

彼らは火柱が立ち上ってUFOが出現すると僅かな時間でここに転移してきて、本来は私たちが監視するために人員を配置していたところ、今回の大事件を認識した事で急いでここまで転移して来て、あれをどうにかするために協力を申し出てきたのだった。

最初にダスティン教皇が現れアリエルさんに協力を申し出て、その後ギユリエさんが現れた。

人の手に余るものであり、自身が対処すべき案件だと言いなながら、それだけなら良かったのだけれど、そこに転移してくる新たな反応

を察知した。

転移してきたのは世界に害を与える影響全ての元凶であるポティマスで、殺気や威圧を毛ほども気にせず歩き、この兵器の詳細を開示して設計図を見せながら性能を説明し始め、それが対龍兵器として設計され神としての龍が近づくと自動的に、GMA爆弾という大陸を吹き飛ばす規模の爆弾が投下されるということを説いた。

GMA爆弾とはMAエネルギーを利用した兵器で、その破壊力の源泉は星の生命力そのもの。

星の生命を貪ったそれが最大で爆発すれば星が吹き飛ぶほどだけどあくまで理論値。

現時点では大陸一つが無くなる程度だと言うけれど、それだけでも星に致命的な被害とダメージになってしまうと感じた。

しかも話はそれだけで終わらなくて、宇宙空間まで届きそうな火柱の中を進んでいた歪な暗影がGメテオという、人為的に巨大隕石を落とすとかいう頭が可笑しい思想で造られた兵器も存在している事だった。

それらどちらも、このクズエルフが考えた設計図が基になっていると聞いて腸が煮えくり返りそうだけど、GMA爆弾に対処出来るのがコイツしかいないので、唇を噛み締めながら殺意を我慢して共闘することになった。

宇宙空間まで到達したGメテオに対処するのは、宇宙でも活動出来る神であるギユリエさん。

残りは荒野に浮かぶUFO、正式名称Gフリートと、そこから吐き出された夥しい数の兵器軍団に対処することになった。

心臓付近がジクジク膿んだような灼熱を訴える憎悪を無理矢理仕舞い込んで、私は極めて理性的に語り合いに参加し、視線に殺意を乗せるだけに抑えて大人しく作戦立てに混じった。

そして対処する担当が、地上は神言教が率いる人族精鋭三万、パペットたち、エルフの戦力。

空中はヒュバンという風龍の長が統率する龍と竜の群れ。

Gフリートに突入する部隊が、白ちゃん、アリエルさん、ポティマ

スとなった。

そして私の担当場所なのだけれど……

「私は空を担当するよ」

白ちやんが裏切り者っ、といった表情で見つめてくる。

一番責任が重いのは内部へ突入して爆弾処理する班だから、そのプレッシャーでそういう表情になっているのだろう。

だけど、私の役目もそれはそれで重要だから代わってあげることが悪いけど出来ない。

あの諸悪から内部突入班に名前が上がらなかつたというのもあるけど、今なお空に浮かぶ無数の黒点が増え続けていることから、誰かが制空権を確保し続けなければならぬと感じていた。

あれが自由に動き回つたら地上の軍勢に甚大な被害が出るし、もし包囲を抜けて人里に一機でも到達してしまえば大惨事が予想されるからだった。

風龍たちもいるけれど強力な個体と言えるのは数が少ないだろうし、確実に途中で手が足りなくなりそうで撃ち漏らしが出そうだったからという理由もあった。

なので、そう白ちやんに説明していると、向こうでは話は纏まつたとアイツが流れを仕切り出し作戦内容に関する話を進めていた。

「では、私もいったん戻る。行動は私とダステインが戻ってきてから始めよう」

そう言うと、ポティマスは護衛のエルフと共に転移していった。

アイツが消えた空間を睨んでいたのは私だけではなく、アリエルさんやダステインさんも渋い顔をして虚無を見ていた。

「私も動こう。ヒュバン！　このことは任せる。アリエルに従い、全面的に協力しろ」

『へへーっ！』

三下感のある喋り方の風龍の長に指示を下して、転移を発動させ消えるギユリエさん。

荒野に残ったのは私たち魔王サイドの面々と、風龍だけだった。

「よし。今のうちに来ることはやっておこう」

遠くに機械の軍勢を見ながらアリエルさんは言う。

「白ちゃん！ ソフィアちゃんとメラゾフィスくんを安全な場所へ。その後はサエルの修理」

テキパキと指示を下していき、白ちゃんも頷く。

ソフィアちゃんとメラゾフィスさんも異論は無いようだった。

「コケちゃんには空の偵察をお願い。あと無理しない範囲で戦力も確認してきて」

私も頷く。

「私は一回地上の部隊を確認した後、準備に入る」

そうアリエルさんが言うと、私たちは各自行動を開始した。

『お、俺は……？』

「さっさと風龍とか、配下集めてこいっ！」

『あ、あいあいさーっ!!』

アリエルさんに蹴り飛ばされることで風龍の長が空に飛び立ち、散り散りになっていた龍たちをここへと集め始めた。

——決戦の時はすぐそこに迫っていた。

今までののは、嵐の前の静けさでしかないと予感が肌をなでていた。

おおよそ二時間ちよつと経った頃。

ソフィアちゃんたちをエルロー大迷宮に避難させた白ちゃんはサエルちゃんの修理を終わらせ、応急処置という事で肘から先の質感がいかにも義手って感じの腕になってしまったけれど、機能的には元通りの状態へと壊れていた三つの腕を治していた。

その後は地下の遺跡に再び潜って武器を作っていたらしく、パペツトたちが無骨な鉄塊といった見た目の鈍器を装備していた。

私の分もあるらしいけど、ゴツくて重い金属の塊は持っている重量が安定しないので、たぶん使わないことになるけど、一応ありがたく受け取った。

それに、さっきあれらに効果的な方法を確認できたからね……

そして、アリエルさんがクイーンタラテクトを四体も召喚して最高

戦力を総出しにしているのと、風龍の長が下位の竜も含めて八千もの群団をかき集めてきた事で、私も戦力を呼ばなければという使命感と義務感に襲われた。

そして、その想いのまま私は呼びかける。

「みんなに願う……、私たちのために戦ってくれる？」

——召喚、上位種のコケダマたち全員。

両手を掲げて術式を構築する。

今までにない大規模な召喚で制御に大半の意識を割く必要があったけれど、失敗する事は無いと確信していた。

背後に巨大な魔法陣が浮かびだす。

それはゆつくりと回転しながら拡大を続け数百メートルもの大きさに巨大化すると、遠く離れた空間と今この場所とを繋げた。

空中に描かれた魔法陣の向こうが見えなくなり暗闇が魔法陣に滲み出す。

そして暗闇の向こうから、私の眷属たちが姿を顕しやって来る。

さあ、おいで——、共に戦おう、世界のために——

魔法陣に緑色の塊が浮かび上がる。

それはゆつくりと膨らんでいき、魔法陣から次々と苔の球体が距離と空間を越えて進軍する。

私の左右に分かれて並ぶコケダマたちは、お互いの巨体で押し潰さないように間隔を取りながら密集する。

そして全てのコケダマたちを呼び出したことで役目を終えたと判断された召喚の魔法陣が荒野の空に消えていった。

……あれ？ 全ての、コケダマたち？

どうやら、巨体を誇るアークやグレーターの子たちの苔に、小さなコケダマたちも貼り付き潜り込んで、こっちまで来てしまったようだった。

来てしまったものは仕方ないと割り切って、逆にその手法から運用方針を思いついた。

大型のアークやグレーターを砦とし、その背中や苔内部に砲手とし

て無数の小型のコケダマたちを乗せた移動要塞としての戦い方を、私は思念伝達して共有し指示を与えていく。

そう、みんな集まって……、防御は土魔法で物理的に壁を作って……

翹持ちの子も、今回は魔法攻撃中心で、飛ばずに戦って……

そして並ぶ、ボコボコと肥大化したコケダマの集合体が四十体。

その大きさはクイーンタラテクトと比べると半分程度だったけれど、緑色の城壁と化した威容は頼もしく、手数では圧倒的な恐ろしいほど桁違いの魔法が掃射される地上戦艦たちだった。

ただまともに動けるのはアークを核にした城塞だけであり、グレーターが複数で集まった城塞は殆ど動けないので、それらはクイーンタラテクトたちの背後に着くように指示した。

荒野に並ぶ、クイーンタラテクト、風龍、コケダマたち。

種も見た目も全然違う巨大な群れが争うこと無く荒野に佇む姿は、とても重厚な圧迫感を放っているように感じた。

「お待ちせしました。神言教戦力三万。馳せ参じました」

「どうやら、私が最後だったようだな」

そして神言教三万の人族の軍団と、ポティマスが連れてきた機械の兵士二千が加わって、全ての勢力の戦力が揃ったのだった。

「じゃあ、私と白ちゃん、あとついででポティマスがアレに突撃するって事でOK?」

「ああ」

作戦の最終確認が始まる。

Gフリートへの侵入方法は、非常に怪しい気配のする巨大なバズーカを使って外壁に穴を空けて侵入するらしい。

それは白ちゃんが運んで使用することになったけれど、なんとも言えない嫌な予感がヒシヒシと肌を刺しているので、白ちゃんにそつと警告しておく。

「アレには気をつけて。嫌な予感がずっとする」

「ん……、りよ」

短い返事を聞いて、私も答える。

「露払いは任せて。道中の戦闘機らは私が全滅させて、安全なフライトにしてみせるよ」

「んふっ。おーけー、任せた」

軽く笑いを吹き出しながら、優しげな声で白ちゃんは返事を言った。

そして白ちゃんは風龍の長に乗り、アリエルさんとポティマスも風龍の背中に乗って出撃寸前の状態になると、ダステインさんが話題を変える。

「では、地上のことは私が纏める形でよろしいでしょうか？」

「いいんじゃない？ て言っても、それぞれ好きにやらせた方が良い気もするけどね」

「同感だ。それぞれ戦い方も戦力も違いすぎる」

たしかに、そう思う。

コケダマたちは、人族の言葉がわかっている訳じゃないし。

私とコケダマたちの会話では、思念のイメージを送って情報をやり取りしているから、人の言語なんて使っていない。

それでもニューアンスや雰囲気で、ある程度言葉の内容を察することは出来るけれど。

「一応クイーンやパペットたちには、あんたの言うことを聞くように言っておくけど、あんま期待しないでね」

「同じく。命令権は渡しておくが、実際に聞くかどうかは現場の判断に任せる」

「あの子たちは人族語で命令されても理解できないから個々の判断で動くけれど、察してフォローするようにお願いしておくね」

出来る限り譲歩したけれど、私が直接指揮しなければ正確に命令が伝わらないので、あの子たちが自由に動いた方が戦術的にも良いと思った。

「それで構いません。あくまでも私がするのは細かな調整くらいで、現場では各々の裁量で動いてくださったほうが良いでしょう」

ダステインさんは、気分を害した様子もなく穏やかに頷く。

そして、敵勢力の地上兵器総数が十万ほどであることを確認し、こ

ちら側が布陣する位置も共有していく。

アリエルさんがそれぞれ順番に確認をしていきダスティンさんや風龍には念押しして、ポティマスには釘を刺して、最後には私たちにも告げる。

「白ちゃん。もしかしたら一番危険な役かもしれないけど、頼んだ」

小さく頷く白ちゃん。

「コケちゃん。私たちがスムーズに進めるかどうかは君に掛かっている。矢面に立たせちゃうけど、お願い力を貸して」

私は、瞼をゆつくり閉じながら深く頷いた。

言われずとも、この世界を滅ぼされるわけにはいかない。

コケダマたちや、ソフィアちゃんたち、みんなのために。

「さて、行くかうか。白ちゃん、世界を救いに」

「ははっ。柄じゃないけど、りよーかいだよ。コケちゃん」

私たちは空に浮かぶ黒き影を眺め、遙か過去からの災厄との戦いに挑むのだった。

31 高度三千Gフリート攻略戦

——耳を聳ろうするような風切り音が、煩うるく耳じ朶だを叩く。

気温10度以下、体感温度ではもっと低くてマイナスの温度を感じさせる大気の壁が、髪の間を吹き抜けて高速で流れては後方へ置き去りにする。

気温については、服に火魔法を付与することで高高度での環境でも体温を維持できるように熱を発生させ、薄い空気はステータスの高さと同復能力によって強引に耐えていた。

飛翔によって強引に押し通られた空気の悲鳴が、耳元で轟々と甲高い叫びを壊れた楽器のように合奏を奏でている。

『敵機、確認っ！ 数十秒後には接敵開始いー』

『予定通り、私が先行するね』

念話で並走する白ちゃんと白ちゃんを背中に乗せている風龍に告げる。

この環境では直接声に出しても風切り音で雑音がかなり多くなるので、いくら聴覚強化を持っていても直接音で情報をやり取りするのは不適格だった。

『それじゃあ。見せて貰おうか、マステマの性能とやらを』

『ふふ、了解』

『……あのさー。俺っちのこと無視して、二人だけの空間作らないでもらえます？』

折角の戦闘前の緊張感を語らいで楽しんでいたのに、それを邪魔するように口を挟んできた風龍を無視して、私は戦闘態勢に移行した。

白ちゃんのセリフから、ならここは私も合わせて答えるのが良いと感じながら。

『確かこんなセリフだったかな……。それじゃあ、苔森真理、出撃するっ』

——重力制御、空気抵抗制御、空気圧縮！ 解放っ！

今回は、全力でスキルの力を利用する。

独力での魔術は実用的なのが身体強化しかない現状、空中戦で有効

な攻撃手段はスキルと武器を駆使した攻撃しか無いのだから。

ここで手を抜いては被害が増える一方だろうし、地上のコケダマたちも心配だった。

私は自分自身の重さを極限まで軽くし、正面には風の錐を展開して受け流した空気は背後に噴射することで、空気の壁を何枚も貫くような加速をする。

そして旗杖を掴む手以外の三つの腕それぞれには、いつの日にか制作した短杖と同じ形状の物が一本ずつ手に握っていた。

高速飛翔によって視界が高速で移り変わりながら、敵の位置を捕捉していく。

知覚、肉体制御、魔法、それぞれに分担させた並列意思を最大まで同調させて、空間全ての存在を把握する。

脳内にて、擬似的なリーダーが浮かび上がり、敵機体をロックしていく。

『最初っから本気で行くよッ！』

敵戦闘機Gトライの抗魔術結界に接触しないように、スレスレで空中を飛び回りながら三つの腕を同時に別々の方向へと動かし、死滅の鱗粉が充填された短杖から腐蝕弾を乱射する。

それは弾速も遅く射程も短くてデタラメに撃っているように見えるが、一発たりともターゲットから外すこと無く、Gトライの装甲を穿いて次の瞬間には最前線にいた戦闘機全てが塵となった。

『さっすがー』

『俺っちより速い……』

白ちゃんたちが感心しているけれど、これで撃破出来たのは見えてる範囲で全体のパーセント程度の量でしか無かった。

しかも、撃破したそばから次々と増援の機体がGフリートから放出されていた。

『俺らもやるぜー。お前ら！俺たちは風で墜落させるぞ！合わせろお!!』

風龍たちが大規模な風魔法を構築しているのを見て、私は後方へと下がる。

余裕を持つて退避すると、風龍それにアリエルさんや白ちゃんも合わせた乱気流を操る魔法が、恐ろしい規模のダウンバーストを発生させた。

スーパーハリケーンもかくやと言わんばかりの暴風圏は、内部にいたGトライに直接傷を付ける事は出来ないけれど飛行するために必要な要素である揚力を失わせ、機体コントロールを喪失したGトライがグラリと傾いて錐揉み回転しながら墜落していった。

そしてそのまま荒野に墜ちていく機体は、重力と降下風によって加速したまま硬質な岩盤に衝突したことで、酷く損壊し二度と飛べない状態へとされるのだった。

だけど相手も馬鹿ではないようで再び追加された機体からは動きが変わり、一網打尽にされないように急接近してきて乱戦に持ち込もうとするようになり、そうなるとう味方も巻き込んで墜落させかねない大規模な魔法は使えなくなってしまった。

そうなるとう龍たちは近接戦闘を仕掛けなければいけなくなり、上位の龍はともかく能力が劣る竜では連射される光の弾丸に撃墜されて死亡する個体も始めていた。

今はまだ生物的な小回りの良さで、すれ違いざまに斬りついたり死角に潜り込んでエンジンなどを破壊して墜落させることが出来ているけれど、生物である以上スタミナの問題が付き纏うため、長引けば長引くほど此方側が不利になりそうだった。

『数が減らないっ！』

『ちっ、竜が邪魔。一旦仕切り直すか？』

『畜生め！ 連中しつこく喰らいついて来やがるッ！』

白ちゃんの近くを飛行しながら近づいてくるGトライを撃墜していく。

現在はドンドン高度が上がり、三千メートル以上の高空で戦闘を繰り広げていた。

最初はもう少し低い高度で戦っていたのに、こちらの大多数が風をつまみ空気を使った攻撃手段がメインであることに気づき、その効果を減少させるために空気の薄い場所へと誘導されていった結果がこ

の状況だった。

『くそッ、こうなりやイチかバチかだぜ。俺様の覚悟見せてやんよッ！』

そして今、白ちゃんを乗せている風龍が決死の覚悟を持ってGフリートまで送り届けようと宣言している最中に、私たちの念話に割り込む声が聞こえた。

『へい。カッコつけてるとこ悪いけど、面倒くさいから私が先行して道作るね』

アリエルさんの声が聞こえた途端、前方でGトライが爆散や墜落する機体が次々と表れ、その間を高速で跳ぶ黒い人影が敵の機体を足場にも、空をピンボールのように跳ね回っていた。

『……』

『べーわ、ええ……』

『……風龍、乗り捨ててる』

私たちは、なんとも言えない空気を感じながら、アリエルさんの後を追いかけた。

アリエルさんの活躍によって乱戦状態から脱した私たちは、追加された増援が出るたびに初手で大規模な風の魔法を当てることによって総数を減らした上で乱戦に持ち込ませないように立ち回ること、優勢に戦闘を進めることが出来ていた。

しかもGトライの数も段々と減ってきて戦う竜たちにも余裕が現れ始めているが、私にはこれが誘いのように思えてきた。

瞬間、冷たさが全身を突き抜けた。

ここは危険だと直感が叫ぶ。

『全員、中央から離れて!!』

『総員全力回避ッ!!』

私と白ちゃんが同時に叫ぶ。

広域かつ不特定多数に対して白ちゃんが念話で叫ぶという、性格からしてありえないような行動を目撃して私は驚くが、そのおかげか半数以上の竜が生き残ることに成功していた。

だが、それでも被害は甚大だった。

『くっ……』

『ちいッ！』

『ああ、クソッ！ やられた！』

私たちが歯噛みしていると、再び念話が外から繋がった。

『白ちゃん！ あの戦闘機は私たちがなんとかするから、白ちゃんは円盤の主砲をどうにかして！』

『白いの。敵主砲に向けて私が預けたものを使え。それで破壊出来るはずだ』

アリエルさんと同時に、粘着質なポティマスの声も念話に割り込んできた。

苦い感覚が湧き起こるが、先にアリエルさんが質問した。

『それだと私たちが侵入出来なくなるじゃん』

『安心しろ。Gフリートの主砲を破壊して有り余る程度の威力はある。敵主砲ごと外壁を破壊する程度の威力は、な』

あのバズーカなら問題無く破壊出来るらしいけど、なんだか含みのある言い方だった気がして、不安でしかない。

『りよ』

白ちゃんが短く了承の返事をした。

『りよ？』

『了解したってさ』

アリエルさんが、理解出来ていなかったらしいポティマスに説明してフォローしていた。

なぜだかコイツに対しては無性に不快感が湧き起こるので、自分が抑えきれなくなりそうなので会話するのも出来るだけ避けたかったので、先にアリエルさんが対応してくれているのは私的にとても助かっていた。

『おうおう。じゃあ、あの主砲に向けて飛ばせば良いんだな？』

私たちの会話を聞いていた風龍の長ヒュバンが確認してくる。

それに頷いて答える白ちゃんを首を背に回して視認し、合点を得たと風龍の長は気合いを露わにした。

『よっしやー！ しっかり掴まってるよーっ！』

加速し始める風龍の姿を確認して、Gトライが複数こちらに向かってくる。

『ちいッ!』

『そのまま気にせず進んで』

『私に任せてっ!』

ここからは正真正銘、後先考えない全力の全力でいく。

そのためにスキルポイントを消費してまで腐蝕耐性を無効にまで強化させたのだから。

『さあ、いくよッ』

全身に腐蝕の力を纏いながら突撃する。

仄暗い粒子が尾を引きながら空中を鋭角に乱反射し、今度は直接翅で切り裂く攻撃も交えながらGトライを破壊しつつ高速飛翔する

抗魔術結界に触れても、スキルが消失する前に全身の腐蝕鱗粉が先に機体を消滅させる事で影響を受ける前に効果を消し飛ばしながら通り抜け、超々高速飛行を維持し続ける。

ここでの推進力は、結界範囲外で空間機動の足場を蹴り抜きながら跳ぶ脚力による物理的な加速がメインであり、もしスキルを掻き消されても影響が少ない移動方法に切り替えて空を駆ける。

周囲の機体を殲滅すると、私は今まで鱗粉をチャージし続けた旗杖に魔力を過剰に注ぐ。

『消し飛ベッ!!』

片手の短杖を口に啞えて、旗杖を両手で持つ。

そして切っ先をGフリートに向けて、臨界寸前まで溜め込んだ力を解放する。

先端の刃から古代兵器に特攻性能を持つ腐蝕属性の砲撃が放たれる。

暗黒色の鱗粉が魔力の奔流に絡み取られながら混ざり合っただけとなり、極太のビームのように戦場の空を荒れ狂い破壊を撒き散らした。

それは道中のGトライを消し飛ばしながら直進しGフリートまで到達するけど、装備されている抗魔術結界の影響範囲の厚さが違いす

ぎて、途中で推力となつていゝる魔力を全て打ち消されて表面を撫でることしか出来ていゝなかつた。

死滅鱗粉を撃ち切り旗杖から黒線は消えていくが、崩壊の暴風は表面を僅かに消滅させた程度でGフリートの分厚く巨大な外壁を破壊することは出来ていゝなかつた。

『白ちゃん！』

『言われなくてもっ！』

だが、これで障害は無くなつた。

そして空白地帯を高速で駆け抜けながらバズーカを取り出した白ちゃんは、その巨大すぎる砲身を構えてGフリートに狙いを定める。

Gフリートの主砲至近まで到達した白ちゃんだったけれど、私たちは迂闊にもそれが誰に渡されたものか、この瞬間には忘れてしまつていたのだつた。

白ちゃんが持つバズーカから光が溢れる。

それは筒の先端から主砲へと光線を放ち、説明通りGフリートの主砲を容易く破壊したけれど、その破壊の光は使い手にも襲いかかろうとしていた。

慌てて白ちゃんが風龍を蹴り飛ばして彼を遠ざけたけれど、そのぶん逃げるのが遅れた白ちゃんが光に飲まれて上半身が吹き飛ばされていくのを、Gフリートの抗魔術結界の外で見ていた。

『ッ！ 白ちゃん！』

重力に引かれ自由落下していく白ちゃんの進路を予想して、影響範囲外の場所へと先回りする。

そして落下していく白ちゃんと相対速度を合わせて接触すると、人型のみならず蜘蛛型にも酷いダメージを負つた白ちゃんに奇跡魔法を掛けていく。

途中から白ちゃん自身も自分へと魔法を掛けて治療していき、ほんの僅か数十秒程度で消失していた人型部分すらも完全に傷一つ無い状態へと再生した。

『大丈夫ッ!?!』

『あー、うん。問題無し、たぶん』

そして治療がおおよそ完了してきたことで私が重力制御して落下を止め、白ちゃんも空間機動で足場を作りGフリートから数百メートルちよつと落下した位置で静止していた。

『大丈夫かッ!?』

そうしていると風龍のヒュバンもやってきて、彼は再度白ちゃんを背中に乗せた。

そして心配し錯乱する彼を正気に戻して、さっきバズーカによって外壁に空いた大穴を指差し、そこに行くように白ちゃんは指示した。

私は便乗する形で風龍の背に乗り、途中まで一緒について行くことにした。

抗魔術結界の中では私は滑空するような飛行方法しか取れないので、風龍のようにスキルや魔法魔術に頼らない純粋な飛行能力では劣ってしまうので、結界を抜けるのは彼の背に乗って突破したほうが楽だったので。

『よっしゃ、行くぞー！ しっかり掴まってくれよな、お嬢さん方！』

そして今現在上空にてGフリートに乗り込もうとしているクソエルフの姿を認識しながら、私は白ちゃんにそつと耳打ちした。

「とりあえず、替えの服着よう?。」

「あつ」

人型全てが消滅していたので当然着ていた服も消し飛び、そこから再生したので今の白ちゃんは上半身裸の状態だった。

白ちゃんは急いで空納から予備の服を取り出して着替えながら、私たちはGフリートの内部へと侵入したのだった。

Gフリート内部へと辿り着き、そこで待っていたアリエルさんと悪びれる様子のないポティマスを見つけ、そこから謝罪も何も一切無いクズエルフと風龍のヒュバンが口論になり白ちゃんが大鎌で斬り掛かったところで、アリエルさんからストップが入った。

今は我慢する状況と言うアリエルさんに白ちゃんも一旦矛を収め

たけれど、余計な一言を言って怒りを買ったポティマスが一瞬の内に地面にめり込んでいた。

ダメージは最小にして殺さないように、だけど地面にめり込むほどの力で押さえつけるといふ、高度な拘束術をアリエルさんはポティマスに掛けて背中を踏みつけていた。

そして結局真の協力などコイツとは不可能だと再確認し、アリエルさんがついでに私たちもヤツを踏むかと聞いてきたので、白ちゃんは背中と頭を、私は冷やややかな眼をしながら旗杖の石突部分で何度も頬をブツ叩いてやった。

地面に抑えつけられ屈辱に震えるポティマスだったけれど、その後白ちゃんが行ったヤツの尻に脚を突き刺すという所業に、全員が強いショックを受け空気が一変した。

アリエルさんは大爆笑。

白ちゃんもニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべていたし、それを見ていた風龍らは顔を青くしてドン引きしていた。

私も堪えきれずに忍び笑いが吹き出してしまったので、かなり溜飲が下がる気持ちだった。

「殺す。貴様は必ず殺す。それも私が考えつく限り最も惨たらしい方法でな……ッ」

拘束から脱出したポティマスが恥辱と憤怒に震えながら、そう宣言していた。

笑いの坩堝から復活したアリエルさんが、真面目な表情だけど微妙に口元が歪んでいて完全には笑みを隠しきれしていない表情で、何処かに吹き飛んでしまっていた話を仕切り直した

今までの戦況から私も内部に誘われたけれど、私は直感が訴える予感に従い、それを断った。

「私は、このまま外でGトライとGフリートの武装を潰して回ります。……それにまだ何かがあるような気がするんです」

そして、引き留めようとしている白ちゃんの手から逃れて私は大穴に向かうと、小さく手を振りながら虚空へと身を投げて、爆音響く空へと舞い戻ったのだった。

「うん、勿論……分かっているよ。だから——」
白ちゃんは、白ちゃんにしか出来ない事を。
そして、私は——

32 天使再臨

「むっ。少し構造が設計図と違ってっているな」

「はあー？ ポテイマスくん。タダでさえ戦闘では役立たずなのに、案内すら満足に出来ないのお?？」

「問題無い。反応は中心部を指したままで、主要な通路の配置も同じままだ」

「チツ……」

「……」

こちら爆弾処理班、空気が険悪です。

ボスケテ……

苔纏う彼ら彼女らは、比較的最近にようやく誕生した新たな王の命を受け、交わした約束を忠実に守りながら、襲い来る鋼の怪物と戦っていた。

決して無理をしない。

防御を最優先。

地形操作での足止めから、質量による物理的な攻撃による撃破。

個々によつて技量や適性に違いがあるものの、全体的に種の傾向として土の属性には高い親和性を持っているので、誰一人として苦とすること無く荒野の岩盤を操って生命を感じられない外敵を狩っていた。

——キュルルウ。

統率能力に優れた個体が目標を指示し、それに合わせて無数の大小さまざまな緑色の球体が魔法を構築していき、協力して巨大な岩石を操作し金属の集合体を押し潰していった。

反撃として飛んできた光の砲弾は、何層もの岩盤を隆起させて盾にすることで威力を大幅に減衰させることで、無効化あるいは軽微なダメージに抑え込んでいた。

しかし、それでも重傷を負う個体もそれなりに出てくるが、そうし

た個体は中心部の個体と入れ替わるように苔の奥深くまで潜り回復に努めて、代わりに表面に出てきた個体が戦闘を引き継いで魔法を構築し始めるのであった。

かつて遙か昔に身を挺して我らを守護した先代の王の仇である蜘蛛と同種の存在が、極大の黒いブレスを放ち鋼の怪物を蹂躪している。

その姿に彼ら彼女らは思うところがあるが、状況からして対立している場合ではないし何より王から命じられた共闘して戦うという指示に背く気は、誰一人として欠片も持っていないかった。

蜘蛛のブレスに平然と耐えて進む巨大な鋼の怪物は、直接魔法を当てても効果が無い厄介な敵であったが、横合いから大質量の岩で押し倒したりや、妨害の影響外の地面をくり抜き鋼の怪物自身の自重によって地表を崩壊させることで深い穴の底へと落下させて破壊したりなど、様々な手法で危険極まりない強敵を撃破し続けていた。

単純な破壊力や戦闘力に欠ける彼ら彼女らであったが、統一された意思と行動によって常に相手を手玉にする戦法を選択し続け、個にして群という力を最大限発揮して圧倒的戦果を上げていた。

それを脅威と判断した空を飛翔する鋼の怪物が急降下してくるが、それが彼ら彼女らに牙を剥く前に小さな影が交差して黒き魔弾を撃ち込む。

それに触れた鋼の怪物は、鈍い色をした翼と肉体が粉塵となって風に流されていった。

——キュー！

——キユキユー！

——クルルウウウウ。

鋼の怪物を一瞬で消滅させた我らが王に、彼ら彼女らは快哉の鳴き声を上げた。

高空を四枚の翅で駆ける王は、上空を鬱陶しく飛び回る鋼の鳥を次々と鉄クズあるいは塵埃へと変えながら、頭上の安全を確保してくれていた。

そして彼ら彼女らの周囲や、遠くで戦う小さく弱い生物の頭上付

近も掃討すると、大地を埋め尽くす鋼の怪物らの後方へと飛翔し、その上空から死の気配がする苔の塊を無数に投下した。

味方といえる存在が一人もない場所に落とされた緑の球体は、地上を進む鋼の怪物からの迎撃によって幾つかが蒸発するが、それをすり抜けて鋼の怪物に接触した苔の塊は内包した腐蝕の属性を周囲に撒き散らしながら爆発した。

爆発に巻き込まれた鋼の怪物らは、空の怪物と同様に肉体が塵になり、龍のように魔法を無効化してくる大型の怪物までもが消滅して円形の空白地帯を生み出していた。

——キュイ!

——キューキューキュー。

——キュー、キュー、キュー!

王の奮戦に勇み立つ彼女らは、蹂躪を免れ接近してきた小型の怪物らを息の合った魔法構築により岩石流のような隙間無き石礫の弾幕で圧殺することで、接近すら許されなかった鋼の怪物が歪んだ甲殻から火花を吹き出しながら爆発していった。

それらの戦果を空から見続けていた王から、喜びに満ちた応援と微かな心配の気持ちが届いてきて、より一層期待に答えるべく大胆にかつ慎重に戦闘を続けるのであった。

「馬鹿な……ッ。」

グローリア? いや、しかし、設計図は渡っていないはず。しかもこの構造配置は……」

「ポテイマス、説明求む」

「最悪だ。まさかこんなことになるうとは……」

「おい。一人で納得してないで説明しろって」

「私たちは、ここに何を求めてやってきた?」

「げ……」

「ふっ。どうやらそっちの白いのは気づいたようだな」

「だから何だって……」

「爆弾」

「え、っ?」

「貴様らの予想通りだ。さらにだ、この部屋の周囲の小部屋、そこにも微弱だが同様の反応がある」

「……」

「そこにあるのはミサイルだな。今はGフリートのバッテリー替わりだが弾頭にGMA爆弾が搭載されているようだ。カビの生えた骨董品だが有用性は今も変わっていない、厄介な」

「さ、作戦タイムツ!!」

Gフリート内部のGMA爆弾を白ちゃん、空中のGトライと残存しているGフリートの武装を私が破壊あるいは無力化を約束して分かれた私は、再び光弾飛び交う空中へと身を投じていた。

最初に確認した事は、破壊した主砲と同等の武装がGフリートに残っていないか確かめる事で、主砲と同じ超大型サイズの砲塔は無かったけれど、円盤上部に中型サイズの砲身が何本か突き出ているのを視認した。

射角から地上に向けることは出来ない和理解していたけれど、安全のために全てを破壊して沈黙させていった。

腐蝕属性を纏ったままの体当たりや、魔術での強引な身体強化で弱体化を振り切りながら物理的に破壊したりと、消耗の大きい力技を使って抗魔術結界の内にある砲身を使用不能にして回った。

そして脅威となりうるGフリートの武装を潰し終えれば、地上にて奮戦しているコケダマたちの援護に向かった。

コケダマたちは最初に交わした約束の通りに安全を第一に立ち回って、脱落者や犠牲を出さずに機械兵や戦車を岩の濁流で粉碎し、終始優勢で戦況をコントロールし続けていた。

けれど、活躍すれば活躍するほど兵器群からは脅威と認識され、対処が難しい頭上から戦闘機が襲いかかろうとしていたので、爆撃や光弾による攻撃をされる前に超高速で飛翔して追いつき破壊して、その

まま風龍たちと一緒に制空権の確保に尽力していった。

アリエルさんの配下である、クイーンタラテクトやパペットタラテクトたちの脅威となりそうな上空の戦闘機を破壊したり、ついでに人族の騎士たちのほうも掃除したりして安全の確保に努め、ときには後方に位置する機械兵へと増殖させた苔に腐蝕属性を目一杯詰め込んで頭上で切り離し、擬似的な爆弾を投下させて一掃したりしていると、戦場の反対側で迎撃行動をしているポティマスが連れてきた機械兵と既に破壊された残骸が目映った。

主にアエルちゃんが指揮してパペットたちが厄介な戦車型をエルフ側へと押し付けていた事で、互いに損傷しあい破壊された残骸が辺り一面に転がっていたけれど、その中には機械しか無かったはずなのに、妙に生々しい赤と濁ったクリーム色が見えた。

Gフリートから出てきた機械兵には無くて、ポティマスの機械兵には在るその物体を見て、私は無意識のうちに奥歯を噛み締めて軋んだ音を奏でていた。

「胸糞悪い……」

燻る苛立ちと不快感に顔を顰めながら、しつこく襲い来る光の弾丸を避けながら飛ぶ。

先程見えたのは、色合いや形状からみて人間の脳のように、それがポティマスの機械兵の中から出てきたという事実には、煮えたぎるような憤懣が湧き上がる。

平然と生命を材料にする所業に怒りを憶える。

だけど、私も魂を喰らい弄んでいる状態なのを思い出し、苦々しい感情に口元を歪めながら逃避するように空を駆けた。

表面上は何も変わっていないなくても……

みんなを、この世界での家族を殺して魂を食べた私に……、糾弾出来るような資格は無い。

私は、永遠に冥府に縛られ続けるのが、相応しいというのに……

『そこで大人しくして下さい』

「……わかった」

『良いお返事です。さあ、最後まで見守りましょう?』

「外部から干渉? いかん!」

「まさか爆発する!?!」

「Gフリートが遠隔操作でロックを解除しようとしている。しかも同時進行で、もう一つのGMA爆弾にも航行のためのエネルギーを注入している。くそっ! 手が足らんっ!」

「何とかする方法は!?!」

「駄目だ。間に合わん」

「ちよっ!?! 白ちゃん何食べてんの!?!」

「……だが、もう一つの方はどうにもならん。既に発射された」

襲い来る戦闘機Gトライの射撃を回避して返り討ちにしながら、ときどき地上へ爆撃支援をして大幅に兵器群を破壊し続けていたけれど、吐き出された総数が桁違いだったため地上にも上空にもまだまだ大量の機械が進軍を続けていた。

最も優先すべき脅威として集中砲火を受けつつも、全てを回避しながら後方の地上兵器群を爆撃していると、Gフリートの円盤中心部から白煙が吹き上がり何か飛び出そうとしていた。

それが何であるか理解する前に、私は反射的に大気突き破りながらGフリートへ向かった。

あれは、絶対に阻止しなくてはならないモノだと魂が訴えかけて、システムの限界に迫る速度で閃光と灼熱を放つ開口部へと向かう。

轟音を立てて顔を覗かせていく筒状の物体を見て、私は一切減速すること無く追い続ける。

天へと加速して登っていくソレに必死で喰らいつき、まだ初速を稼ぐ段階であったことが幸いし先端付近の段差に手を掛けることに成功した。

内部に恐ろしいエネルギー量を誇る球体の存在を格納したミサイ

ルに。

だけど、私一人の重量と抵抗なんて存在しないかのように、Gフリートの円盤中央部から爆煙を吐き出しながらミサイルが天へと発射された。

吹き荒れるGと風圧に全身を叩きのめされ、ミサイルに施されている抗魔術結界にステータスを削がれながらも、掛けた指を金属板にめり込ませて振り落とされないように耐え続ける。

私は身体を動かせる余裕のあるうちに、旗杖を金属板の合わせ目に突き刺した。

抗魔術結界によって外部に放出操作する能力は使えないけれど、この状況で唯一使える身体強化を限界すら越えた暴走状態で稼働させ、魂をも削る勢いでミサイルの装甲を穿った。

だがこの時点でミサイルは成層圏にまで到達し、あと僅かな時間で宇宙への境界すら越えそうな勢いだった。

先程までの高度とは比べ物にならない極限環境に全身が悲鳴を上げる。

身体がバラバラになりそうな負荷も強化された肉体強度でなら耐えることが出来ていたけれど、何処まで持つか限界が何時なのか一切予測がつかなかった。

旗杖を強く握りしめて落とされないように、ミサイルの奥深くに喰い込ませる。

すると、旗杖の穂先が何かに当たり、旗杖を通して莫大なエネルギーが流れ込んできた。

津波のように押し寄せるエネルギーが意識を押し流そうとするのを、今までの経験から得た魂の操作術を応用して受け流していく。

急激に増大していく器の中身によって希釈されていく自分の魂を、並列意思が繋ぎ止め身代わりとなって消失していきながら、それでも溢れるエネルギーは自らの魂に繋がる経路を通して無数に分散させていった。

そうして時間を稼ぐことが出来た自我は、周囲のエネルギーを自分の色彩で塗り潰していく。

最初は小さなシミでも押し流されなだけで領域を塗り潰してしまえば、後は自らが望むようにエネルギーの流れを作って誘導していき色を染めていくだけ。

その染められた星空のようなエネルギーは、パスを通じて無数に繋がる眷属たちと喰らってきた無垢な魂をも、主の色に染め上げていく……

荒ぶる奔流を制して意識を覚醒させた私は、身体を超速で再生させる。

すでに高度はシステムとの繋がりを断ち切る高さまで上昇していて、つい先程まで失明失聴凍傷窒息等々、致命的な損傷によって全身ボロボロで死ぬ寸前だったけれど、流れ込んだエネルギーを一部だけでも支配したことで、神の領域に指を掛けていた。

そして今、旗杖が刃を喰い込ませているモノがGMA爆弾ということを理解し、そのエネルギー総量の把握と、それが爆発した際の被害を直感で感じ取ったことで私は旗杖を力強く握りしめた。

エネルギーを取り込む感覚と流路は出来ている。

だから後は、余すこと無く喰らい尽くすだけ。

これが爆発すれば、みんなが幸せに生きること、ただ平穩に過ごすことも出来なくなる。

——だから。

「奪い尽くせッ！ 《魂喰》 イイツツ!!」

ミサイル内部のGMA爆弾に、私は旗杖を深く突き刺した。

その衝撃によってミサイル本体の動力部までも破壊され、極光煌めく無限の宙の領域で眩い恒星が輝き黒の世界へと消えた。

《システム再接続》

《熟練度が一定に達しました。スキル『神性領域拡張LV9』が『神性領域拡張LV10』になりました》

《条件を満たしました。神化を開始します》

？

《スキルを還元します》
《ステータスを還元します》
《称号を還元します》
《スキルポイントを還元します》
《経験値を還元します》
《D 謹製『神の基本講座』にアップデートします》
《神化を終了します。これ以降システムサポートを一切受けられませんが、ご利用ありがとうございます》

「ああ、本当に、素晴らしい」

「蜘蛛さんのように、突拍子も無い行動によって偶然神への切符を手に入れるのでは無く、自らの力と意思によって神の領域を抉じ開けるとは……」

「私からの贈り物によって、受け入れる素養が作られていたとは言え、それはまだまだ不完全な物で耐えられる筈の無いものでした」

「それなのに、偶然に偶然が重なって必要なピースが手元に揃っていた。いや、それは必然だったのかもしれないね」

「あなたは全てであり、全てはあなたである。覚醒めた時には驚くでしょうが、何も心配ありませんよ。あなたの家族は常にあなたと共に在るのですから」

「ようこそ、神の領域へ。歓迎しましょう、麗しき乙女よ」

「何か果物でも用意しましょうか、柘榴なんてどうですか？ ああいや、蜘蛛さんと同じ様に名前を付けてあげましょう」

「『翠星』。凶兆に囚われし宙を駆ける者、あなたの新たな名前は翠星です」

「ふふふ……。いつかあなたが私のもとに来る日を楽しみにしていますよ」

宇宙から墮ちる小さな影がある。

それは、地上に居る存在と惹かれ合うように惑星の自転や風の影響を受けること無く、始まりとなった鉄屑散らばる荒野へと真っ直ぐ落ちる。

その落下地点には煌めく燐光を纏う苔の塊らが集まり、その身を混じり合わせ溶け合っけいき、一つの存在へと成ろうとしていた。

そして全ての苔が一つの塊に成ると、その身体を空へ宙へと伸ばしていき小さな影を愛おしそうに迎えに行く。

その姿は、まるで天に登る龍のようであり形状こそ不格好であるものの先端は龍の頭部を模し、小さな影を巨大な顎の中へと迎え入れた。

小さな影と一つになった苔の塊は急速に縮小して行って、最後には中心に直径数メートルの苔玉が淡い光を放って静かに眠り続けるのであった。

溶けるような深い微睡みの中から目を醒ます。

何かを内側に仕舞い直したような感覚を憶えながら、私は瞼を開けた。

目に映ったのは岩肌の色、それと暗い闇の世界。

一瞬違和感を憶えるけれど、何度かまばたきをすれば正常に荒野の風景が目に映った。

デコボコした岩盤にうつ伏せで倒れ込んでいるのに気づき、肘で支えながら上体を起こして周囲を確認する。

背中にあるはずの翅と複腕の感覚が無い。

いや、本来は人の身体には存在しない器官だけど、いつもそこにあった慣れ親しんだ重さと質感を感じられない。

「コケちゃん!？」

声が聞こえた方向に顔を向けるとアリエルさんがいて、その後ろにはギユリエさんが、もっと奥にはソフィアちゃんとメラゾフィスさんの姿が見えた。

「こつちも目を覚ましたか」

「ギュリエー！ もっかいあっち向け！」

「……わかった」

ギュリエさんが肩を落として物悲しそうな背中を見せていた。

「とりあえず服着て。立てる？」

「……ええ、はい」

差し出された手に私は手を重ねると、アリエルさんは勢いよく引つ張り上げようとした。

しかし……

「……はあッ!？」

「え……?？」

アリエルさんが掴んだ私の手に力が加わると、触れていた手と手の部分が苔となって崩れ落ち、アリエルさんは予想していた反発が無くて姿勢を崩したたらを踏んでいた。

私は翠色の断面を見せる手首を眺める。

さつきまで感覚はちゃんと手の感触を認識していて、手首から先が苔となって消失しても痛みも何も無いけれど、一時的な手の感覚の喪失を実感していた。

周囲が驚きで固まる中、私は元の手の姿をイメージすると瞬時に元通りの手が再生していた。

「……こ、コケちゃん?？」

「あつ、はい。大丈夫みたいです。……なるほど」

私は再びアリエルさんの手を取って立ち上がった。

今度は身体が崩壊しないように、人の身体のような結合力と構造を意識しながら。

「えっと、こっちは白ちゃんよりマシみたいだね……。これをマトモと言えるかどうかだけど」

「白ちゃんが、どうかしたんですか?？」

「おーけー。全部説明するからついて来て。あつ、自力で歩ける?？」

「だいじょうぶ……ぶ、です」

虫の指先ではなく、人の五本指になっていた両足でフラフラと姿勢を保つ。

途中足の強度が不安定になってバランスを崩しかけるけれど、感覚で修正して歩いていく。

足元に擦り寄る翠色の塊の感触に、その時初めて気付きながら。

「コケちゃん、それは？」

「えーと……、みんな？」

その翠色のコケダマを抱えると、そのコケダマは一瞬で私の全身を覆い次の瞬間には私は以前と同じ形状の魔女帽と服を身に纏っていたのだった。

「ええ……」

「……私の眷属支配にあった子たち。全てが私の中にいる……、そんな感じがする」

そしてテントの中で白ちゃんと一緒に事件の顛末を聞いて、あの騒動から一月以上経過していたことに、驚きを感じながら教示されて。

さらに私たちの身体が生物の域を越え、神に至っていることを知ったのだった。

33 新たな力、失った力

暗い果ての見えぬ闇の中。

湿った空気が肌を撫でるそこに、私はいた。

周りには、大きさまざまなコケダマたちの姿。

ここでは各自が自由な姿を取れるからなのか、翅を持っていなかった子が宙に浮かんでいたり、逆に大きかった姿をしていた子が小さくなっていたり、一部は魔蛾の姿を取っている子もいた。

その黒色と翠色しかない世界で、私はみんなと対話していた。

彼ら彼女らは私が入り込んでしまったコケダマたちで、私はこうして話をするために魂の奥底、精神世界とも言うべき場所まで意識を沈み込ませ、みんなと考えや想いをわかり合うために言葉を交わしていた。

内容は、こんなところに閉じ込めてしまっていることに対する謝罪。

ここに至るまでに様々な事があつたけれど、結果としてみんなは私と1つになってしまい、この世界では自由に過ごせているようだけど、全てが私の支配下になってしまった。

それは肉体であり、自由であり、魂すらもだけど、よくよく考えればそれらは全部が全部、私と1つになる前から私自らこの手で全て奪ってしまったモノで、全ては今更でしか無いけれどみんな一人ひとりに対して、私はこうして謝って回っていた。

なのに、みんなはその事に対して一欠片すらも悪感情なんて思っていないくて、むしろ私と一緒に過ごせるようになって嬉しいとすら答えてくるほどで……

この場所は過ごしやすい。

ここなら自由に動けて安全。

外だつて私を通して見る事が出来るし、呼ばれば外に出ることだつて出来る。

そう言つて、むしろ私の方を心配してくる程なので、私は罪悪感を抱えながらも、こうして時々精神の奥底へと訪れてはみんなと触れ合

うのだった。

それは誰からも罰を与えられない私からみんなに対して、せめてもの償いと想いながら。

そうしていると、現実での肉体の方が揺さぶられているような感覚が襲う。

私は、短く別れの言葉を交わしながら、意識を表層へと引き戻した。

かなり荒っぽい揺らし方で目が醒める。

すると目の前には、子供っぽい性格でやんちゃなフィエルちゃんの顔がドアップで映っていた。

そのまま数秒間ほど、にらめっこが続くけれど思っていた反応では無かったのか落胆した様子でフィエルちゃんが離れていき、白ちゃんにちよっかいを掛けに行つて頬を突付き始めていた。

周囲を確認すると、どうやら街の中に入っていたようで人混みの喧騒が聞こえており、今は宿に向かっている最中だと理解した。

「いそげー。白ちゃんがアレなことになる前に宿に入れるぞ」

メラゾフィスさんが御者をしている外から、アリエルさんの声が聞こえる。

ここはアリエルさんが購入した大型で内装がしつかりとした、まるでキャンピングカーのような馬車の荷台の中で、この馬車はある一件から弱体化した私たちのために購入した物だった。

そして話題となつている白ちゃんを見ると、痙攣して死にかけている様子が目に映った。

以前作つた最高級の柔らかさと肌触りのマットを何重にも重ねて衝撃を極力殺すようにした寝台の上で、青白い顔をして寝込んでいる白ちゃんは防寒仕様の服の下に地肌が一切見えない真っ白のボディスーツのような物を着込んで吐き気と戦っていた。

そんな白ちゃんをフィエルちゃんはグワングワンと掻き回す勢いで頭を撫でているので、危険域に白ちゃんが突入する前に止めに入

た。

ファイエルちゃんの肩を掴んで引き剥がし、そのまま隣に来ていたアエルちゃんに引き渡す。

お説教はアエルちゃんがしてくれるとして、私は白ちゃんに声を掛ける。

「大丈夫？」

「む……り、ぽ……」

息も絶え絶えの白ちゃんを見て、私は寝台の隣に座って何かをすることもなく、これまでの過去を思い返す。

あの事件から2年くらい経った。

その時の出来事によって私たちは普通の生物の域を越えて、私と白ちゃんは神となった。

神というのは、膨大なエネルギーを宿したものという定義らしくて、それによれば私たちは神に当てはまるけれど、神となった事によってこの世界を覆っていたシステムの法則から除外されて、今まで私たちに力を与えてくれていたスキルやステータスの恩恵を受けられなくなってしまった。

そのためギリギリ魔術を再現できる私はともかく、白ちゃんのほうは殆どの力を失って一部の力を除き、虚弱そうな見た目通りの身体能力しか発揮出来ない状態となっていた。

その一部の力というのは糸を生み出し操る能力で、私が白ちゃんの魔力と魂に干渉しながら刺激を加えてみて、色々実験をしていたときに偶然使えるようになったものである。

酷い車酔いと片頭痛が発生しているような気分と訴える白ちゃんに対して、ニューヨークを守護する親愛なる隣人みたいに手首とかから糸が出せないかと言ってみると、意識が飛びかけて朦朧としている白ちゃんが試した次の瞬間には手から糸が飛び出していた。

それからは糸に関してだけは自由に使えるようになったらしくて、それ以外では今も全く成果が無いけれど、糸で自分を操ることで少ない体力を補うことは出来るようになっていた。

白ちゃんが着ている純白のボディスーツもそれを補助する大事な装備品で、これのおかげで弱い肌を守ったり本来の力より何倍もの筋

力を発揮したりとパワードスーツのような物と化していた。

それでも以前のステータスのほうが圧倒的に上であるし、あくまで補助だから肉体強度を越えた動きをすれば骨折など大惨事になってしまうという、虚弱体質をどうにかするため苦肉の策としての装備品だった。

私の方も以前から大幅に弱体化していて、スキルによる思考超加速や並列意思によってなんとか成立していた魔術が軒並み使い物にならなくなり、使えることは使えるけれど1つを構築するのに数十分必要で、酷ければ数時間を掛けても作れず不発に終わるなど、術式を編み込む速度と精度が見る影もなくガタ落ちしていた。

そのため術式はわかるし最初の起動も構築も出来るのに、途中で集中力が切れて接続もできずに霧散して発動出来ないでいるという、もどかしくて不甲斐ない結果に終わっていた。

構築速度や精度は練習あるのみだけど、並列意思で術式を分担して多重に組み合わせてきた構築能力が全て1つの思考能力で発動させないといけなくなったので、その負担が重く押し掛かり魔術を1つ扱うのに充分余裕を持った時間と集中力がなければ満足に使えない状態だった。

そう思いながら私は右手を変異させる。

苔に覆われた手首と黒ずんだ指先に変わった右手を見て、すぐ人の手に戻る。

こんなふうに関心意識しなくとも自分の身体の形状を自由に変える事が出来て、以前の半人半虫のマスタマの姿や魔蛾の姿コケダマの姿にも変身することが出来た。

これらの能力は無意識で発動出来るからこそ、自由自在に扱うことが出来るけれど、変えられるのは姿のみで、スキルの補助がなければ飛ぶこともまともに動くことすら出来ないのだから、現時点では変身する利点は何1つなかった。

他には苔の集合体という肉体構造のため急所が存在せず、振動や衝撃という物理的なダメージを殆ど受け付けないという利点もあるけれど、弱点も存在していた。

これから赴く場所では、その弱点で致命的な影響を受けそうなので対策を準備しているけれど、どうなるかは全くわからず少しだけ不安を感じていた。

馬車の揺れを体内の苔が全て吸収しながら思考に没頭していると、私の腰に腕が回される。

その先を見ると白ちゃんが寝込みつつも腕を伸ばしていて、その手に掴まれた私は意外と強い力で引き寄せられて白ちゃんの胸元に抱きかかえられた。

「あのー？ 白ちゃん？」

「抱きぐるみ……」

「ああ、はいはい仕方ないなあ。もう……」

こうしてダウンして気が弱っている白ちゃんに抱えられるのは初めてでは無いので、このまま宿に着くまで、もしくは気が済むまで白ちゃんの抱きまくらになることにした。

後頭部に、私には無い圧倒的な質量が押し付けられて密着する。

そして私も瞼を閉じて、ほんの少しの時間だけ横になって眠りに浸るのであった。

馬車が宿に到着して部屋に入る。

グロッキー状態の白ちゃんでは自分を糸で操作して歩くのも不可能なので、メラゾフィスさんにお姫様抱っここの状態で部屋に運ばれ、少しベッドの質に不満があるのかモゾモゾしていたけれど、すぐ小さな寝息を立てて眠っていた。

寝室には直射日光は差し込まないし今の時刻は真夜中だけど、一応全てのカーテンを締め切って隙間無い状態の部屋の中で、私たちは今後の予定について話し合っていた。

「私らは、明日冒険者ギルドに行つて情報収集した後必要な物を揃えに行く。コケちゃんは？」

「私は白ちゃんと一緒に居ます。表面上は問題無くても中身を見られたら人外なのがバレますし、多少マシとはいえ大分弱くなっちゃつて

いますし」

「おーけー、アエルとサエルを残しておくから待機していてね」

軽く予定を打ち合わせた後、私たちは各自の寝室へと向かった。

部屋割りには、その時々で変わるけれど主に私と白ちゃん、ソフィアちゃんとメラゾフィスさんが同じ部屋になることが多く、護衛として誰か1人につきパペットたち1人が一緒の部屋に割り振られていた。

そしてアエルちゃんとサエルちゃんが部屋の隅で座り込んだまま顔を伏せているけれど、これは彼女らが人形の身体であり本体の蜘蛛は人形内部で休んでいるので場所を選ぶ必要がなく即応性のために部屋全体を見渡せる場所で休んでいるだけである。

そして私も、あまり眠る必要は無いけれど夜の時間帯は活力がなくなるので、いそいそとベッドに入って横になる。

私の場合だと、正体が人の姿を模した苔の集合体という存在なので、多少の陽射しと水気がないと元気が出ない。

白ちゃんの場合だと、ステータスの恩恵が無くなって判明したけれど見た目通りアルビノだったらしく、肌を焼く日光は致命的。

なんだかんだ対照的なのに、良くここまで仲良く付き合ってきたと、そう思いながら私は瞼をゆっくり閉じて意識を沈めていく。

眠りの時間は、みんなと話す貴重な時間と思いつつ、微睡みの中へと堕ちていった。

カーテンの隙間から部屋に朝日が差し込み、薄暗く寝室を照らしていた。

その変化に私は目を覚ますと、まだ眠っている白ちゃんを起こさないように、そつと時刻などを確認した。

まだ早朝で誰もが眠っている時刻だけど、パペットたちは状態異常無効化を持っていたので睡眠が不要で寝ずの番をしていたから私が起きたことにすぐ気付いて顔を上げていたけれど、私は指を立てて唇の前に置き、静かにするようにジェスチャーしてそつと部屋を出た。

ついて来たアエルちゃんと一緒に宿屋の一階にある食堂で時間を

潰していると、じきにアリエルさんやソフィアちゃんたちも起きてきて予定通りに彼女らは街中へと出かけると、日が昇ってから何時間も経った頃ようやく白ちゃんが起きてきた。

サエルちゃんに身だしなみを整えられたらしく、薄く化粧をして綺麗に纏め上げた三編みを首に巻いた普段のスタイルの上に、日光を防ぐためのローブを被った状態で出てきた。

目元には、マジックミラーのように片方からのみ光を通す白い布が巻かれている。

神化してから白ちゃんの瞳は、眼球内に5つの瞳孔がある重瞳になっていたので、紅い虹彩の中に黒い点が5つ浮かんでいるという、近くで見ると明らかに異形の瞳となっていたので、糸が使えるようになってからは毎回こうして人前に出る時は目元を隠していた。

こんな見た目もあつてか、白ちゃんは盲目で病弱なご令嬢ではないかという憶測が囁かれていて私やパペットたちは身の回りの世話をする侍女らではないかという噂もあつた。

パペットたちとかは多少は正しくもあるのですが私は何も反応せずにしたけれど、白ちゃんとしては令嬢扱いについては納得がいかならないらしい。

性格的に、そういうタイプじゃないからね、白ちゃん。

背後にサエルちゃんを連れながら食堂の入り口に立っている白ちゃんは、食堂の隅に居る私たちの姿を見つけるとこちらへ向かおうとしたけれど、食堂入り口近くにいた冒険者らしき男性2人組にフードを剥ぎ取られて顔を晒していた。

「おおっとー！」

……マズイかも。

急いで席を立て白ちゃんのもとに向かう。

「おおっ！ 別嬪さんだねー！」

そう言いながら肩に腕を回そうとしてきた冒険者を、白ちゃんは避けるけれどステータスのない身体では完全には避けられず肩を掴まれた。

「その布の下は、どうなっているのかな〜？」

そう言つて目元の布に手を伸ばす冒険者の男をみて私は蹴り掛かる。

「白ちゃんに触るなっ！」

困っている白ちゃんの姿を見て湧き上がった感情に従い、数瞬の迷いも無く飛び出す。

当然、私も基本的に見た目相応の速度しか出せないのので軽く避けられてしまうけれど、白ちゃんから引き剥がすことは出来ていた。

「あつぶないなあ。別嬪さんのお付き？ もっと成長してから相手してやるよ、ガキ？」

「フーッ……」

白ちゃんと冒険者の男の間に立って睨みつける。

見下したような目でジロジロと舐め回すように私を見る男に、言いようのない嫌悪感が湧く。

こういう人を人と思っていないような他人をオモチャにする存在に、ドス黒い怒りが荒れ狂って精神を焦がしていく。

ポテイマスにも感じたような湧き上がる怒りに、私はふと疑問を持つ。

……なんで私、こんなに怒っているのだろう。

「ぐらー！ 何やってんだい!？」

睨み合っているとビリビリ響く叫び声が聞こえ、食堂の奥から恰幅の良い貫禄のあるおばちゃんが出てきた。

冒険者の男2人よりも大きな体格と横幅のおばちゃんは、その身体で圧を掛けながら冒険者2人を威圧して睨む。

「他のお客に迷惑を掛けるようなら出ていってもらおうよ！」

「あ、その、すみません……」

「あたしに謝ってどうすんだい！ 謝るんならそつちの子らに謝りなっ！」

「は、はいいい！ すいませんでした！」

一気に酔いが醒めたらしい冒険者2人は、私らに頭を下げると逃げるようにそそくさと食堂から出ていってしまった。

「まったく。これだから冒険者っていうのは。悪かったね、お嬢ちゃ

んたち」

「……いえ。助けていただき、ありがとうございます」

気持ちを沈めて感謝を述べると、白ちゃんも大きく頷いて気持ちを示していた。

そして愚痴で気になる内容を呟いているので、私は質問してみるとおばちゃんはこう言った。

「もちろんお喋りは大歓迎さ！ それよりご飯食べに来たんだらう？ そっちのお嬢ちゃんは。来な、騒がせちゃった詫びに安くしとくよ！」

白ちゃんが目隠しの裏で目を輝かせているのを幻視しながら、私たちはおばちゃんに連れられてカウンター席に案内されていった。

……なんで、ああいう人間が嫌いなのだろう。

思い出せない何かに、小骨が引つかかったような気持ちになりながら、私はおばちゃんが料理を作ってくるのを待った。

蜘蛛7 凍てつく山脈、凍てつく苔

ムグムグ……

いかにも庶民的で大衆向けな、量を重視しているけれど豪快ながら美味しく味付けされた料理を食べ進める。

隣では飲み物だけ頼んだコケちゃんが、おばちゃんに対して質問していた。

「なんでも、この街の近くにオーガが出てるらしくてね。で、何人も冒険者が返り討ちにあってるんだってさ。それで近隣の街や村からも冒険者を集めてるってわけ。怖いねえ」

「オーガ、ですか？」

「そう、おかげで討伐に行ったものの帰ってこなかった冒険者も大勢いて、面倒事が山積みさ」

ふうん？

人族の領域でもオーガはそこら中で目撃されて、普通に対処出来る程度の強さしか持っていないはずんだけど、冒険者を何人も返り討ちにしたって事は、ここに出没している個体は特異な存在みたいだね。

私やコケちゃんみたいに、魔物って時々妙に強いのが現れるからそのパターンなんだろうけど、うちの面子からするとオーガがいくら強くても、ステータス1万オーバーの人形蜘蛛たち果てには魔王っていう最強戦力も控えているからね。

仮に遭遇しても問題無いっしょ。

「他に知っていることは、ありませんか？」

「そうさねー……。そのオーガが魔剣を持っている噂とか、討伐が完了されるまではオーガがいる方面の街道は封鎖されるとか、そんなくらいかね」

「封鎖？」

んん？

封鎖って、もしかして？

「ああ。といっても封鎖されるのは魔の山脈方面だから、物流とかに

はあまり影響しないのが幸いさね」

「……」

「……」

横目でコケちゃんを見ると、目が合った。

そっかー、魔の山脈封鎖かー。

予定では少しでも気温の高いこの夏の時期に、極寒の地である魔の山脈を攻略するはずだったんだけど、この分だと足止めくらう……のかなあ？

いやさ、バレないようにコツソリ封鎖を抜ければオーガが出ても魔王がどうにかするだろうし、問題無いんじゃないかって。

そう思っただけけど、コケちゃんは質問を続ける。

「その封鎖はいつ解除されそうですか？」

「冒険者が返り討ちにあつたから、今度は帝国軍が出張ってくるらしいわ？　だから、それまでは封鎖が解かれることは無いんじゃないかしら」

「そうですか」

「けど、そっちには魔の山脈しか無いわよ？」

「いえ、何処に行くにしても旅をする上では危険を前もって察知することは大事ですから」

「なるほどね。なら安全が確認されるまでウチに居てくれてもいいのよ？　また面倒起こったら、あたしがキツチリ締めておくから」

「あはは……。そのときは、よろしくお願いしますね」

ふーん……

まあ、なんとかなるっしょ。

そんな風に気楽に考えながら料理を食べ進め、途中で胃の容量の限界に達し食べたいのに身体は食べるのを拒否して目の前のご飯を食べきれないという最悪の悲劇に直面し、激闘を繰り広げるものの半分以上残った料理に敗北を喫し、涙ながら残ってしまった料理を同じメニューをすでに完食していた人形蜘蛛たちに差し出して譲るはめになったのだった。

うう……ううう、ああアアんまりだアアア……

食べることに制限の無い人形蜘蛛たちに羨ましさを感じる。

思い返せば人形蜘蛛との関係性も殺し殺されの関係から始まったんだと考え、なんだかんだ私も向こうも禍根を破り捨ててお互い絆されてきているように思いながら、魔王たちが帰ってくるのを待った。

で、帰ってくるなり魔王から衝撃の事実が伝えられた。

「……そういう訳で、オーガが退治されるまではここで大人しくしている。みんな全員、なるべく目立たないようにして欲しいんだけど、大丈夫？」

「ええ」

「わかったわ」

「わかりました」

「ん……」

「「「(うくくく)」」」

数日ほど足止めが決定し、それが解除されるまで待機することになったけれど本番は次だった。

「結論から言うと、ついさつきエルフの一団に襲われた」

この2年間、不気味なほど沈黙を続けていたポティマスからの刺客が現れ、転移誘拐などという効果的だけどポティマスには中途半端な手口という、モヤモヤと謎が残る襲撃について聞かされたのだった。

うーん、結局なにがしたかったのか、わからんね……

みんなして頭を抱えつつも私たちは封鎖が解けるまで宿屋に引きこもり、何事もなく数日が経ち街道の封鎖が解かれると、満を持して魔の山脈へと向かうのであった。

結局オーガは討伐されずに魔の山脈へと逃げ込んだという情報にフラグを憶えながらも、主要な街道から逸れて整備が減って少し荒れている道を進みながら、長閑な高原地帯と針葉樹林を視界に収めつつ麓にある廃村に到着した。

街から出るときも道中を進んでいるときも、何かしら起きるんじゃないかと警戒していたけれど何一つ起きること無く、ここまで平和に辿り着いてしまつて正直拍子抜けしてしまつた。

しかし、そんな感想も廃村についた途端に吹っ飛んだ。

打ち捨てられた家屋、傷だらけの外壁や火がついて全焼したであろう炭の山、そしてあちこちに残る赤黒いシミ。

いかにも惨劇の跡つて感じだけど、それを気にするメンバーは誰もいないんだよな。

「ふむ。とりあえず無事な家で一夜を明かそうか」

風雨が凌げるなら、事故物件だろうが何だろうが構いやしないのが、うちらクオリティ。

私以上に寒さに耐性の無いコケちゃんなんか、雪と氷河で覆われた魔の山脈に入る前から顔以外に地肌が見えない完全防寒しているのに、小刻みに震えているからね。

コケちゃんの特異な身体だけど、苔の集合体ということで物理耐性に含まれるような、刺突斬撃などは全くと言っていいほど影響を受けないけれど、寒さつまり凍えるような低温だと簡単に凍りついてしまい、機能不全を起こして崩れてしまうらしい。

以前に確認した際には細心の注意を払つて指先のごく一部にとどめたので、もし全身が凍結した場合の検証が出来ておらず、どうなるかわからないので寒さ対策はかなりの重装備となつていた。

現にほら、防寒具の隙間から見える髪も萎れていて口数も私並に減っているのが、寒さとの相性の悪さを如実に証明していた。

「ねえ。古い血と新しい血の臭いがあるのだけど、どういふことかしら？」

む？

吸血つ子が血の臭いを嗅ぎ分けたようだけど、古い血は犠牲になつた村人だとして、新しいのは誰のものだ？

「ああ、気付いた？ この臭いはエルフの血だね。あいつら、きつとこの廃村で待ち構えてたんでしょ。けど、何かに襲われて壊滅した。まあ、きつとこつちの方向に逃げ出したつていうオーガが犯人だろう

ね」

あのエルフどもがオーガに負けたって？

それってかなりヤバイことなんじゃって思ったけど、それにしては周囲の建物が残っている事に疑問を感じた。

魔王や人形蜘蛛が本気で暴れたら更地になるのが普通だし、2年前のときののような兵器でも持ち出していたら、同じく跡形もなく廃村が吹っ飛ぶだろうと予想出来るのに、ここは原型をとどめて残っている。

ということは、それ以下の常識的な戦闘が行われてエルフが壊滅したということ、つまり兵器の1つも無しにエルフどもが待ち構えていたということになる。

うーむ？ 何がしたかったのか、全然わからん。

そんな戦力では足止めにすらならないのは、あいつの方もわかってるはずなのに。

「周囲にはエルフの気配も、オーガの気配も無い。もうここは安全そうだし、とりあえずはここで一晩明かして明日から本格的に魔の山脈攻略を始めよう。ゆっくり休めるのは今日が最後だから、しっかり英気を養うようにね」

なにやら煮え切らない曖昧な態度を取る魔王に何かを隠していると感じながらも、結局それらを私たちに告げることは無くコケちゃんも寒さで沈黙していたため、何も言わないなら聞かない方がいいと判断して、今晚の宿を探し休息を取るのであった。

木々の姿も消え高山植物の草原も越えて、雪と氷と岩しか無い領域に突入した私たち。

標高の低い所を選んで通っているはずなのにすでに寒く、数日もすれば色彩すら無くなって極寒の吹雪の中、氷河と岩山の上を歩くことになっていった。

多少は自分の糸で編んだ服でカバー出来ても根本的に体力の無い私や、ドンドン冷え込む寒さで全く動かず反応もなくなってきたコケ

ちゃんは、馬車の中で待機となっていた。

まさにお荷物。

しかし、歩かずとも辛い。

寒い！

熱を発するカイロのような魔石や、こうなることを見越して残しておいたコケちゃんの魔道具の一部を使っても、なおキツイ寒さに毛布を抱き寄せて震えることしか出来ない。

あまりの寒さにコケちゃんが凍って彫像のようになってしまい一時騒然としたけれど、どうやら仮死状態のまま安定しているらしく、嚴重に毛布で包み保護した上で馬車内に固定し魔の山脈を越えた後に解凍することになっていた。

私も全身を毛布で包んでいるのだけど、外側の毛布が凍りついてバリバリ音を立てているのは、異常な気温としか言いようがない。

酔う！

馬車でそのまま通れるような道はすでに何処にも無いので、私たちが乗せたまま馬車はアエルが背負って運んでくれています。

そのためメツチャ揺れるんだけど、これでも相当気を遣って慎重に運んでくれている。

他の人形蜘蛛だったら、中身のことなんて考えずに運んで大変なことになっていた筈だし。

でも多く雪が積もれば屋根が抜けてしまうので定期的に振り落とす必要があり、その度にブルンブルン大きく揺らされて中の私はシェイクされて気持ち悪くなる。

寒さマジ辛い、揺れマジ酔う。

歩けるなら外で自分の足で地面を踏みしめて歩きたい。

もしくはコケちゃんみたいに仮死状態になって、意識飛ばしたまま魔の山脈を越えて、その後を起こしてくれないかな……

そんな事を考えながら外の会話を盗み聞きし、異常気象の原因となっていそうな氷龍を怒らせたであろうオーガに恨み辛みを募らせ、寒さと気持ち悪さに耐えていると魔王の乙女らしからぬ叫びが聞こえてきた。

ており間一髪で回避していた。

平地とかでは馬車を引く役目だった地竜2匹もリエルとフィエルに抱えられて被害を免れてる。

コケちゃんの姿は見えないけれど、馬車の中にガツチガチに固定していたから多分無事。

あれ？

なんでみんなの状況を見上げるような形で把握しているん？

私、空中。

上、馬車合体アエル。

下、雪崩。

あ、そっかー。

私、反動で馬車の外に投げ出されたと。

で、重力に引かれて落ちていき、凍えて手が動かず糸を出す余裕の無い私。

だあーずうーげえーでえー!!

「サエル！ カバー！」

サエルが救助に動くもの一瞬遅く凍った毛布を失いながら雪崩に巻き込まれた私は、再度救助に飛び込んだサエルに掴まれた腕がヤバイ感じの痛みを憶えたり、遅れて到着した吸血つ子とメラが空中からサポートに入るものの雪崩で流されてきた猿に吸血つ子がぶつかり、その衝撃で再び雪崩の中に突っ込んで飲み込まれていく。

魔王の救援は!?

雪崩に飲み込まれる寸前に猿の大群に飛びかかられている魔王の姿を目撃し助けは来ないと理解すると、白から黒へと暗くなる視界と意識の中で、馬車に残ったコケちゃんは無事であろうと思いつつながら真つ暗闇へと沈み込むのであった。

蜘蛛8 震える私、狂える鬼くん

笹島くん……？

雪崩に飲み込まれた私たちは無事と言っていないのかわからないけれど生き残り、吸血つ子が臨時に作った氷魔法のかまくらに避難して救助を待っていた時に、事件は起こった。

身を過ぎった悪寒にいつの間にか手元にあつて触れていた白い大鎌を反射的に構えると、爆音とともに吹き飛ばされて極寒吹雪く雪山に放り出された。

咄嗟に構えた大鎌が防御となり勝手に大鎌がバリア的な何かを張ってくれたおかげで、多少痛い程度で氷のかまくらが真つ二つにされるような攻撃から生き残ることが出来たのだろう。

向こうにかまくらを真つ二つにした犯人が佇んでいたんだけど、半裸というか腰回りの部分だけボロ布で隠した男の人が刀を振り抜いた体勢で立っていて、その顔に私は驚愕した。

前世の記憶にある顔と、その男の人の顔は、角が生えていたり髪色が違っていたりしたけれど、同じような特徴と共通点が数多く重なり見覚えのある顔だった。

前世でクラスメイトだった笹島京也くん。

どうして暴れているのかは不明だけど、前世と顔が同じなのは生まれが魔物で進化の果てに人型を獲得したことで前世の顔になったのだと予想出来た。

目の前の彼を取り敢えず鬼くんと呼ぶことにして、その鬼くんこそが麓の街での一連の騒動を引き起こした原因であり、現在氷龍が異常気象を発生させるほどの何かをやらかした、特異オーガだと確信した。

しかし、私が鬼くんについて気づき制止の声を掛ける前に、吸血つ子の一声によりサエルが突撃していった戦闘を開始した。

普通に考えればミンチ、良ければ瀕死になっているだろう姿を幻視したが、なんと鬼くんは両手に持った刀でサエルの剣戟を防ぎきっていたのだった。

それには驚いたけれど、サエルからの攻撃に反撃するだけの余裕は鬼くんにはなく、じきに攻撃を見切ったサエルに負けるはずだと思っ
た。

鬼くんについてどうするべきか考えていると、吸血つ子が血気盛んに闘志を燃やしているのも、もしかして鬼くんの正体に気付いていないのかと思い、声に出して説明する。

「笹島くん」

「……は？」

どうやら正解だったらしく、吸血つ子は何言っただこいつという胡乱な瞳を向けて来た。

「笹島京也くん」

再度鬼くんに向けて指を指し、その名前を吸血つ子に告げる。

にしても説明するのは毎回メンドイ。

コケちゃん相手なら大体察してくれるし上手く補完してくれるから、気楽なだけだな。

「ガアアアアアア！」

その名前を言ったことで反応したのか、喉を枯らし血を吐くような鬼くんの咆哮が響き渡った。

人の叫びとは思えない、鬼の絶叫。

その突然の爆音に、対峙していたサエルがビクリと身体を震わせて硬直した。

隙を見せたサエルに鬼くんは右手の刀に炎を纏わせて振り下ろし、それをサエルが避けたことによって空を切った一撃が地面に叩きつけられ、轟音を伴う衝撃波と炎が広がる。

サエルと打ち合えるほどのステータスから齎された衝撃は予想を超える地形破壊を引き起こし、刀がめり込んだ地面を中心に亀裂が広がっていく。

その亀裂は深く広範囲に渡って拡大していき断面から覗く氷しか見えない壁面によって、ここが氷河で出来た氷の大地だったことに気付いた。

運良く私や吸血つ子が居る場所には亀裂が来ることはなく無事

だったが、サエルが亀裂によって出来たクレバスに飲み込まれていく。

それだけなら空間機動のスキルによって何も無い場所であろうと空中を蹴ってすぐ復帰してくるはずだったけれど、鬼くんの雷を纏った刀による追撃によって眩い閃光と雷鳴とともにクレバスに落下していった。

底が見えないクレバスに落ちていったけれど、雷の直撃も戦車の時のように耐性を無視する攻撃ではなくシステムの範囲内にある攻撃なら、雷耐性や万越えの魔法抵抗力によって大幅に軽減しているだろうから多分サエルは死ぬことはないだろう。

けど、それも無傷とはいかないだろうし、クレバスを登って戻ってくるのにどれくらいの間が掛かるのか不明。

今この場において私たちの最大戦力が一時的に居なくなつた事實は、牙を剥き出しにした咆哮と狂い啼く殺意によって私たちに叩きつけられた。

「ガアアアアアアアツ!!」

ピンチだ、これ。

「なるほどねー」

『ほんに人間というものは碌でもないことをする。あれでは小僧が激怒しても仕方なからうに』

氷龍の長であるニアアから、例のオーガが進化した鬼人について聞き、碌でもない過去の仕打ちと復讐を果たして人族から敵視されるようになった経緯を知つたのだった。

それにしても、性格の悪いコイツが憐れんでいるのと、ギユリエからその鬼人に対して直接殺害を行つてはならないという命令に疑問を憶え、それが繋がる前にニアアから声を掛けられた。

『ところで、急いでいるのではなかったのかえ?』

「ああ、そうだった」

雪崩に飲まれ流されていった4人を搜索しなくちゃ。

とくに白ちゃんは弱体化しているし、早く見つけないと手遅れになつてそうだった。

なんとなく悪運発揮して生き延びていそうだけど、それでも早く回収するに越したことはない。

「アエル」

情報料代わりにニアに酒の入った樽を渡そうとアエルに指示をし、背負っていた馬車をアエルが下ろすと、幌の中から何か飛び出して雪崩が流れていった方に向かって飛んでいった。

『なんじゃ？ 今のは』

「まさか……」

私は急いで荷台の中を確認するものの、予想していたそれとは違い寝台に固定され保護した時と変わらず凍りついたままの彼女はそこで眠っていたけれど、巻きつけた毛布の一部が内側から食い破られたような裂け方をしていることに気付いた。

『どうしたのじゃ？ そんなに慌てて』

「いや、なんでもない。ああ、それとこれは情報料つてことで」

多少雑に置いてしまつたけれど酒樽をニアに渡し、私は飛び出していった影を追った。

『……？ まあ、おおきになあ〜』

疑問を感じつつも目の前に酒に嬉しそうな声を上げるニアを背にしながら、雪崩が通り過ぎた後の山肌を駆け出していった。

咆哮を叫びながら迫る鬼くん。

それを迎え撃った吸血っ子とメラが、空気を揺らす鈍い轟音を立てながら戦っている。

私？

もちろん逃げますが、なにか？

ハッキリ言つて役立たずで足手まといにしかならない私が居ると、戦闘の余波にも気を使わないといけなくなるし、それでは吸血っ子やメラが本気を出して戦うことが出来なくなるので、邪魔にならないよ

うに戦闘の中心から距離を取るのが一番だった。
決して我が身可愛さに逃げ出した訳ではない。
無かったら無い。

素の筋力ではどんなに頑張っても稼げる距離はたかが知れているので、衣服として着込んでいる糸そのものを操作することで、不格好な操り人形と化した私はひたすら走る。

ふっ、ここで吸血つ子を散々歩かせた経験が役に立つというもの……

あつ、やっぱ無理。

関節と筋肉メツチャ痛い。

背中に強い風圧を感じながら走り、なんとか戦場から多少離れたところまで来て一安心する。

ここもホントは安全では無いんだけど、無理矢理動かされて悲鳴を上げる身体と刺すような空気の冷たさによって喉と肺をやられて、とてもシンドイ。

まずい、このままでは第二の氷像が誕生してしまう。

神になったとしても肉体構造は眼以外人間とさして違わない私は寒すぎれば低体温症になるし、そのまま限界を超えた場合コケちゃんのように仮死状態になって死なずに済むかどうか確証を持ってない以上、凍死しないに期待するのは不安でしか無かった。

だからこそ早めに安全確保して何とかしなきゃいけないんだけど、鬼くんを退けるには吸血つ子たちでは少々実力が足りていなかった。

二年間もの旅の間中ずっと鍛えて強くなってきたとはいえ、サエルと打ち合える鬼くん相手では勝負を決める決定打が足りていなかった。

「ガアアアアアアアア！」

絶叫しながら目の前の存在に襲いかかる鬼くん。

その見るからに理性を無くしていますって状態に、心当たりがあった。

怒あるいは激怒のスキル。

使うとステータスが大きく底上げされるが、代わりに理性を失って

いき暴走するスキル。

それによって暴走するとどうなるのかは、以前にも見たことがある。

目に映ったものの全てを破壊しようと暴れまわり、呼びかけにも一切答えなくなる。

あのかきはぶん殴って狂気から引き戻すことが出来たけれど、どうにも鬼くんの場合だと痛打を与えることすらも難しそうな状況だった。

「くうー！」

「ぐっふっ」

こつちに吹っ飛んできた吸血つ子と衝突して、そのままゴロゴロと雪と氷の上を転がる。

鑑定不能の謎強度を持つ糸によって作られた服により傷は無いものの、防ぎきれず貫通してきた衝撃に呻き声が出てしまう。

内臓にくる気持ち悪さに喘いでいると、鬼くんと戦って出来た傷を目に見える速度で治していく吸血つ子の姿が映った。

愛用の大剣を馬車の中に置いてきたせいで、攻めにも守りにも不利な状況を強いられているのに構わず突撃しようとする吸血つ子の服を掴んで引き止る。

「何よ!? 今忙しいのー！」

「鑑定」

「はあ!? ……あっ」

苛立った叫びを上げる吸血つ子に鑑定をするように言うと、完全に忘れていたのか気づいたとばかりに短く声を上げた。

鑑定さんを蔑ろにした事に憤りを憶えるが押し殺し、怒の系列のスキルがないか探させる。

そして吸血つ子に鑑定させた結果、憤怒という七大罪系スキルに属するスキルが見つかった。

ちよつとこれは想定外。

サエル相手にも戦えるほどだから上位スキルの激怒に進化してても不思議じゃないと思っていたけれど、それが憤怒という最上位に位

置いてそんなスキルだったのならステータスが超大幅に強化されていてもおかしくなかった。

しかし、憤怒によつて暴走しているのなら憤怒を封じてしまえばいい。

思いついた対処法を伝えると、吸血つ子は目を輝かせて勝ち筋を見つけたとばかりに、再び戦場へと突撃していった。

戦闘狂のきらいがあつて負けず嫌いな性格の吸血つ子は戦うことそのものが好きらしく、勝つか負けるか不明だった天秤が勝ちの方へと傾いてきたことで、闘いを楽しむ方にシフトしてきているように思えた。

なんとなく調子に乗っているようにも見えて嫌な予感がヒシヒシするけれど、それは吸血つ子の慢心した戦い方だけではなく、他にもバキバキという不穏な音がそこら中の地面から聞こえてくるからだった。

氷河が崩壊しかかっていることに焦りを憶え、全身に激痛が走る身体へ鞭打つて立ち上がると、大鎌を杖代わりにしてヨロヨロと避難し始める。

「かはっ!？」

吸血つ子の掠れた声に振り向くと、鬼くんの刀に胴体を貫かれた吸血つ子と両腕を無くして地面に倒れているメラの姿があつた。

死ぬ寸前、もしくは一日一回だけ死を免れることが出来る不死体のスキルによつて死亡を免れているとは思うけれど、気を失つて戦えなくなつた吸血つ子たちを鬼くんは雑に転がすと、こつちに視線を向けてきた。

まっず……ツ。

私が反応出来ない速度で鬼くんが迫り、雪を巻き上げながら目の前に立つて刀を振り上げる。

風圧によつてフードが脱げて視界が広がるものの、それで鬼くんの動きが見えるようになる事は無く右手の炎を纏つた刀が振り下ろされるのを、私は認識することが出来なかつた。

「ガアアアアアア!!」

「おっッ!？」

再び吹き飛ぶ私。

また大鎌がバリアでも張ってくれたのか鬼くんの刀に斬り裂かれることは無く、勢いよく水平に弾き飛ばされて空中を木の葉のように舞うことになったが、今の一撃で致命傷を負うこと無く生き延びていた。

しかし、このままでは地面に叩きつけられて死。

それを運良く乗り越えたとしても追撃の構えを見せてる鬼くんの攻撃を防ぐことが出来ずに死。

どうあがいても詰みであると、死が目前に迫っているからなのか全てがスローモーションで認識出来る超加速された思考の中で冷静に周囲を観察していた。

走馬灯のように記憶と感情が溢れ、流されていく。

こんなときに思うのは、死にたくないという原初の本能と打つ手が無いという悔しさだった。

まだ、諦めたくないというのに……ッ!

しかし身体は言うことを聞かず、もうすぐ岩壁に叩きつけられて汚いシミになるのだと想像したとき、超加速された体感時間の中でも高速で動き私を追い越していった影が視界の端に映った。

それはシルエットこそ見たこと無いものだったけれど、その色合いはとても良く知っているものだった。

「ぐうっー」

何かに接触し肺の中の空気が強制的に吐き出されるが、その衝撃は岩壁に叩きつけられたものにしては非常に弱くて軽く、まるで柔らかいものに受け止められたような感触だった。

というか、そのまんまだったみたいで。

「クルアアアアアアッ!!」

柔らかかな体毛を持つ蛾ともとれるし、シルエット的には蜻蛉のようにも見える、けれどその頭部はまさしくドラゴンとも言うべき魔物が、私を守るように優しく包み込み鬼くんに怒気を滾らせて咆哮していた。

「コケちゃん……?」

しかしその問いに返事は無く、ただ唸り声を鳴らしながら鬼くんをジッと見つめていた。

翡翠色をしたドラゴンのような魔物は、体長の3分の2をしめる長い尾で器用に私を背後の岩陰に隠すと、鬼くんに向かって対峙し蛾のような翅を大きく広げて威嚇しながら荒々しく吠える。

「クウウルルアアアアアアツツ!!」

それが癩に障ったのか、今までにない剣幕で鬼くんも咆哮した。

「ガアアアアアアアツツ!!」

そして私の大鎌と似た形状の角を額に持つドラゴンは、鬼くんへと向かって戦いを始めた。

蜘蛛9 目覚めた龍、覚醒めた力

「ガアアアアアアッ!!」

「クルアアアアアアッ!!」

白銀と薄墨色の雪山に、猛り狂う怪物らの咆哮が響き渡る。

片方は抑えようのない怒りに飲まれ正気を失い、ただただ目についたモノへと襲いかかるだけの人の姿をしているだけの理性無き鬼。

もう片方は呼びかけにも何にも答える事は無いけれど、その身を盾にして戦闘の余波を一切背後に通さないように刀を全て受け止めつつも戦い続ける、義憤を瞳に灯した六脚四翅の尾長龍。

その闘いを眺めていると復活した吸血つ子がメラを支えながら此方側へとやって来て、吸血つ子が耳がキーンとする程の大声で叫んだ。

「ねえー！ あれは何!?!」

そんなの、こつちが聞きたい。

しかし、あの翅の模様には見覚えがある。

その白と蒼の線が走る翅を羽撃かせて鬼くんの刀から放たれた炎と雷を掻き消し、ふわりと宙に浮かびながらあらゆる攻撃を無効化していく翡翠色のドラゴンについて、姿形こそ違えど思い当たる存在が一人いた。

まさか、コケちゃん?

大きさこそ五メートル程度の小型の龍といった感じだけど、首周りに厚みのあるフサフサの毛や6本という脚の本数、そして幅広の四枚翅。

これだけの特徴が揃っていれば、ほぼ間違いなくコケちゃんと関係があるのは明白なんだけど、あんな姿は見たことも聞いたことも無いし、それにこちらを守るように動いているけれど何も言葉を発さないのが気がかりだった。

「ねえ、ちよつと聞いている!?!」

「お嬢様……、今は退避を、氷河が崩れかけ……ごふッ」

「メラゾフィス!?! すぐ治療を!?!」

内臓にもダメージが蓄積していたのか血を吐き出したメラに、吸血つ子が淡い緑色の光で魔術陣を作りそこに魔力を流し込んで治療魔法を発動させて、メラの負傷を治していく。

そつちになにかあれば私のこととかは全部眼中に無くなるのですか、そうですか……あれ？

術式が見えている？

目隠しの布を取って、まじまじと吸血つ子が構築している術式を見つめる。

寒さで目元の薄い皮膚が痛みを憶えるけれど、確かに術式と魔力の流れがこの目に映っていた。

てことは……

見える、わかる、この身にあふれるエネルギーの存在が、きちんと見える！

手のひらを広げて、その上にエネルギーを集める。

自らに宿るエネルギーを認識したことでそれを操作する感覚も思い出したのか、今までうんともすんとも言わなかったエネルギーが私の意思に従って動き出す。

まずはさつき見た治療魔法で、いろんな骨にヒビが入っているだろう自分を治療していく。

それから極限環境に耐えるために、防御力などステータス系を高める術式を組んでいく

それらは、きちんと私が思い描いた通りに効果を発揮して、全身の痛みが消えていき寒さも我慢すれば耐えられるくらいには平気になった。

「戻った」

無意識に口に出てしまう。

思い返せば、鬼くんの攻撃を受けた二回目のときに思考時間が引き伸ばされているような感覚がしていたし、その状況でも周囲の地形や鬼くんの動きがハッキリ見えていたことから、命の危機に瀕したこと
で眠っていた力が目覚め、力が使えるようになったのかもしれない。

あるいは、大鎌の力を短期間で何度も使うことになったから、それ

がトリガーになったとか。

だが、理由がなんにせよ、私は！ 今！ 力を取り戻した！

まだまだ操作も鈍く以前の自由に自由自在とはいかないけれど、それでもお荷物だった状況から自分の身を守る程度には急成長した。

「何か言った？ ……ちよつと待って、なんで平然と魔法使えるようになったているの!?!」

メラの治療に専念していた吸血つ子が、魔術を使っている私に気付いて驚きの声を上げる。

それについて何と言おうか脳内で言葉を選んでいると、足元の振動がさらに大きくなっていく。

今まで激しい戦闘が何度も繰り広げられていても持ちこたえていた氷河が、ついに限界を迎えて本格的に崩壊しようとしている。

氷河の表面を覆っている雪が爆発するように巻き上がり、その下から底に行くほど濃くなる水色の亀裂が何箇所も周囲に現れる。

クレバスの底に氷と雪が流れ込んでいき、今いる場所も崩落寸前で一刻の猶予も無かった。

「ちよつ!?!」

「ぐっ……」

鬼くんとの戦闘ですでに疲労困憊で気絶寸前だった吸血つ子たちを引つ掴み、強化した身体能力のゴリ押しで崩壊する氷河から抜け出す。

落下中の氷を足場に次から次へと跳び移って崩落危険域から脱出すると、吸血つ子たちは完全に意識を失っていて、ダランと力無く手足を揺らしていた。

鬼くんとあのドラゴンはどうなったのか視線を巡らせると、崩落した氷河の向こう岸で今もなお激しく戦っていた。

ピントを合わせるような感覚で万里眼が発動し、速すぎる動きは思考速度が加速していくことで認識出来るようになっていく。

鬼くんは両手の刀をステータスの高さで無理矢理振り抜いているような力任せの大振りや翡翠色のドラゴンに何度も斬撃を浴びせるけど、翡翠色のドラゴンの防御を貫くことは出来ず僅かな傷も高速で

再生されて何一つ有効打になっていない。

翡翠色のドラゴンの方も攻撃手段は噛み付きと額の角を使った頭突き、前方の腕で行う切り裂きや尻尾での薙ぎ払いなど特殊能力など一切使用しない肉弾戦のみで戦っていて、速度こそ速くても防いだり回避出来る程度の攻撃であり、鬼くんからの攻撃を受け止めて防ぐことを重視した動きのせいかな積極的に攻撃に移らないこともあり、鬼くんの方にも傷は見当たらない。

お互いに千日手に陥っており、状況的に翡翠色のドラゴンの方がやや有利か。

行動や能力の制限を取り払って戦えば、確実に翡翠色のドラゴンが勝つだろう。

というか、翡翠色のドラゴンは身体強化と飛翔以外何も使っていない？

いや、もしかしてそれしか使えないのか？

あれがコケちゃんだとすれば、あのドラゴンはシステムの補助を受けていないのだからスキルも何もかも全て自力で発動させるしかないので、身体強化だけで構築リソースが限界になり原始的な攻撃方法しかとれないのだと推察出来る。

構築速度が遅くて使えなかっただけで、神になってもコケちゃんの方ではエネルギーの感知などは問題無く出来ていたみたいだし、少しの時間だけなら発動可能で、それが彼女の限界だった。

だからこそ、あの膠着した戦況であり、それが推理を裏付ける証拠だと思った。

そう考えを巡らせているとクレバスに落ちたサエルが戻ってきており、丁度いいと気絶している吸血っ子たちをサエルに預けると、空間機動の魔力で足場を作る術式を記憶から引っ張り出す。

実験的に地表から数センチの所に一つ作り、乗って体重を掛けてみる。

うん、多分問題無いでしょ。

ならば――

渡された吸血っ子たちを守るべきか最初に魔王から言われた命令

に従うべきなのか、わからなくなつてオロオロ迷っているサエルを横目に私は断崖へと駆け出した。

よっ！ とっ！ はっ！

因幡の白兔ならぬ雪山の白蜘蛛となつて、鰐の代わりに魔力の足場を飛び跳ねていく。

そして巨大な渓谷となつていた氷河を渡りきり対岸へと辿り着く。目の前で繰り広げられる戦いを瞳に映しながら、雪が積もる岩肌へと着地する。

着地の衝撃で雪が舞い上がり、雪の白煙が薄れるのに合わせてゆっくり姿勢を正していく。

そして煙が消え背筋を伸ばしたところで、大鎌を鬼くんへ向ける。力が使えるようになってすぐと、なんとも現金なモノだけと言わせてもらおう。

さあ、リベンジといこうか！

「ガアアアアアアアア！」

憤怒の炎に焼かれて荒れ狂っている鬼くんが吠える。

先程の焼き直しのように振るわれる刀目掛けて、大鎌を叩きつける。

「ガアッ!？」

鬼くんの左手から刀が弾け飛んだ。

雷を放つ魔剣がクレバスに落ちていき見えなくなる。

刀を一本失った鬼くんは残った炎の魔剣を両手で構え直し、乱入してきた私を見る。

「ッ!？」

すると一瞬鬼くんの動きが止まる。

目を見開いて怒りが消失した瞳で私を穴が空くほど見つめるけど、そのあきらかな隙を翡翠色のドラゴンが見逃すことは無く、横薙ぎの爪が叩きつけられて大きく吹き飛ばされた。

もしかして今、私のことがわかっていた？

スキルを封印させる効果を持つ吸血つ子の妬心スキルによって、不完全ながら理性が戻っていたのかもしれないけれど、雪の中から飛び

出してきた鬼くんの目は再び怒りで塗り潰されていた。

「ガアアアアアアッ!!」

「クルアアアアアアアッ!!」

悲哀と赫怒に満ちた慟哭と、擦過音混じりの甲高い咆哮がぶつかり合う。

そこに踏み込もうとすると、翡翠色のドラゴンが私を庇うように動いて近くに寄り添い、背後に私を隠そうとする。

「……大丈夫。信じて」

聞こえているかわからないけれど、私は翡翠色のドラゴンに声を掛ける。

すると、翡翠色のドラゴンは私を見つめていた瞳をゆっくり閉じて威圧を解くと、再び眼光強く瞼を開いた。

そこに宿るのは信頼であり、誰かを守ろうとする想いが、重なった視線から伝わってきた。

残った刀で袈裟斬りにしようとしてきた鬼くんを、翡翠色のドラゴンは身体を回転させて非常に長い尻尾を鞭のようにして叩きつけて強制的に距離を取らせると、その勢いのまま尻尾で私を包み衝撃も無のまま器用に運んで背中に乗せた。

そして私が頭と胴体の間に跨がると、軽く喉を鳴らし笑うように音を鳴らした。

「龍騎士ってことね」

「クルウアアアアアアッ!!」

左手に大鎌を持ち直し、右手は糸を操って手綱を作り上げそれを結びとしっかりと掴む。

「ガアアアアアアアアアッ!!」

何度打ちのめされても憤怒に身を焦がし、視界に映すもの全てを破壊するまで何度でも何度でも立ち上がり続ける、光を失った狂える鬼が吠える。

どうしてそうなったか知らないけどさ、今ゆっくり眠らしてやるよ。

翡翠色のドラゴンに跨がった私と、鬼くんが対峙する。

先に動いたのは鬼くん、だけど先手を取ったのは私たちで全力を出した翡翠色のドラゴンの速度に鬼くんは全く対処できず、そのまま横合いから殴り飛ばした。

急激な加速に身体が持つていかれそうになるけれど、身体強化の術式はコケちゃんが使っているのを散々見てきて自分でも出来ないか試行錯誤していた。

その最後のピースも神となって理解し感じられるようになったかには、出来て当然の技として自分自身に掛けられる。

速度こそ尋常では無いけれど軌道はわかりやすいシンプルな曲線で動いてくれるため、風圧とか遠心力に耐えられるなら乗りこなすのも難しくない。

アラクネのときも、実質蜘蛛型の乗り物に乗っていたようなものだしね！

しかしこれ、私が乗っている意味ある？

大鎌振るうより先に殴り飛ばされちゃ、すること無いんだけど。

仕方ないので捕縛を目的として糸を飛ばし、鬼くんを拘束しようとする。

分厚い雪に轍を作りながら転がる鬼くん糸が絡まり、手足の自由を奪っていく。

これで終わりかなと思ったが、魔剣が生み出す炎によって斬れないはずの糸が焼け落ちていく。

あつ、しまった!? 火には弱いままだった私の糸！

だかしかし、こつちはいくらでも糸を出せる。

けれどそつちはMPがいくら残っているかな？

感覚的でしか無いけれど、サエルや吸血つ子たちと戦い続け、戦う以前にすでにポロポロで消耗していたことから考えると、残りのMPはごく僅かしか残っていないと感じられた。

全身痛々しい火傷と凍傷の痕で赤黒くなった肌を晒す鬼くんは、憤怒に侵されたままだけど瞳の奥には怯えと恐怖が揺らいでいるような雰囲気刀を構えていた。

そろそろ限界かなと推察すると、私はドラゴンの手綱を引いて鬼く

んの周囲を走らせる。

狙いが定まらず視線を左右に振る鬼くんに対して、私は粘着性を持たせた捕縛糸を何度も放つ。

大鎌を掴んだまま親指で人指し指を弾き、そのたびに左手から糸を撃ち込む。

その糸を鬼くんは炎を纏った刀で斬り捨てて対処しようとするけれど、四方八方から飛んでくる糸全てを斬ることは出来ず、段々と糸が絡みついて動きが鈍っていく。

自分の身体を焼きながら刀を振るうけれど、限界は刻一刻と間近に迫っているように見える。

そしてついに、鬼くんは刀を地面に突き刺しガクリと項垂れ膝立ちになった。

すかさず糸を撃ち込み全身に糸を絡ませるが、それにもピクリとも反応せず刀に手を掛けたまま寄り掛かり、祈るように顔を俯かせているのを見てついに気絶したのかと思った。

私たちは疾走を止めて静止し眺めるけれど、それでも鬼くんは指一つ動かさない。

終わったと感じると、戦闘時の緊張感が無くなり全身が力無く脱力して倒れ込み、私は目の前にあるドラゴンの頭を両腕で抱きかかえた。

「……疲れた」

「クルルウウ……」

顔の真横に真っ白い刃のような湾曲した鋭利な角があるけれど、正面と先端付近にしか刃が無いように見えるから側面に居るぶんには問題無し。

柔らかい毛に顔を埋めてだらけていると、急激な魔力の高まりを感じた。

ガバッと慌てて顔を上げると、鬼くんが刀に全魔力を注ぎ込み刀身が白熱するほどの熱量を溜め込もうとしているのが見えた。

臨界寸前となった刀は眩い光を放ち、刀が刺さった氷河は沸騰して水蒸気が噴き上がり、周囲に急速に冷却された水分が粒となってダイ

ヤモンドダストが淡く煌めく。

そして劫火が解き放たれ、目に映る視界全てを焼き尽くした。

爆風が吹き荒れ、水蒸気爆発も起きたのか膨張した大気の壁が私たちを押しつけていく。

私は落ちないようにしがみつくだけだったけれど、爆風も衝撃波も4枚の翅を何度か羽撃かせて受け流した翡翠色のドラゴンは体勢を立て直し、空中にゆったりホバリングする。

爆風が通り過ぎ風が収まった頃合いで瞼を開くと、爆心地となった場所が蒸気立ち込める大穴と化していて、何処にも鬼くんの影形すら見えなかった。

……死んだ？ いや逃げられたか。

死亡確認は吸血つ子のレベルを見ればわかると考え、けれど予感ではあの大爆発でも生き延びているだろうという確信が浮かんでいた。

私は見えなくなった鬼くんの搜索を諦め、吸血つ子たちの方へ向かった。

そして向こう岸には気絶している吸血つ子たちの隣に魔王が居て、そこに降り立つと何があったのか事情をしつこく問い詰められた。

グルグル脳内巡る内容からどう返答すべきか困っていると、翡翠色のドラゴンが少しずつ縮んでいき同色の燐光を放ちながらアエルが持つ馬車に入っていくと、光がパツと消えた。

正面に立つ邪魔な魔王を押しつけて馬車を確認したけれど、そこには凍りついたまま静かに眠るコケちゃんしか居なかった。

あのドラゴンは、本当にコケちゃんだったのか……？

胸に過ぎるこのモヤモヤが何であるのか、わかりそうになかった。

34 眠っていた時間、眠っていく魂

いつの間にか意識を失っていて、気付いたら魔族領に到着していました。

とりあえず、おはようございます。

最後の記憶は寒さに震えながら馬車の中で横になった記憶で、次に目を覚ました時には火魔法で私を温めるアリエルさんの姿が目映っていました。

しかも予定より早く到着したらしく、山脈の道中で白ちゃんが魔術を操るようになったことが大きな影響を与えたいらしいです。

眠っていた間に何があったのかは、アリエルさんたちから聞くことが出来ました。

魔の山脈攻略中に身体が凍りついて仮死状態になっていたとか、氷龍が起こしていた吹雪の事や面倒臭い性質を持っている例の猿に襲われて雪崩に巻き込まれたりだとか、さらに麓の街で聞いていた特異オーガがクラスメイトの転生者だった事とか、そのオーガが進化した姿である鬼人に雪崩に流された後襲われて、それを謎のドラゴンと一緒に白ちゃんたちが撃退した話とか……

私が意識を失っている間、実に様々なことが起きていたらしく、全てを詳細に聞き終わるまでに数時間くらい掛かったと記憶しています。

その中でも特に気になったのは2つ。

まずは転生者について。

その転生者は笹島京也くんらしく、顔が前世と同じだったらしい。久々に前世について記憶を掘り起こしたけれど、思い出せるのは男子の中では小柄だった事とか何かを押し殺して少し壁を作っているような雰囲気だったような気がしていた事。

だけど、特別交流があった訳でもなくクラスメイトの1人でしか無かったので、知っていることなんて名前と外見と雰囲気くらいしか思い出せなかった。

もうひとつは謎のドラゴンの事。

外見的特徴や状況証拠などから私に関係する存在らしいけど、思い当たるようなものが一切何も浮かばず記憶にも無い。

けど、それが私から生まれ、そして私に戻ったらしいとなると、一番怪しいのは精神世界内部にいるコケダマたちの事になる。

……もしかしたら、自分自身の精神世界について私は全然理解出来ていないのかもしれない。

私がいかなど話していると感じていたのは上辺だけで、相手をきちんと見ずただ一方的に想いをぶつけるだけの一人芝居でしかなく、本当は、ちゃんと向き合ってすらいない……？

真実に迫る何かに指を掛けたような、何か重い扉のようなモノが開きかけているような、そんな奇妙な感覚を憶え、私はそれを見つげようと深く集中しようとした時、馬車の外から声がした。

「アリエル様、見えてきました」

「おっけー。みんなー、もうすぐ街につくよー」

どうやら、魔族領に入って初めて人がいる街に到着したらしい。

最近では馬車に酔いかけると白ちゃんが外に出ていってしまうので、少し寂しさと退屈を憶えていた馬車の中から顔を出す。

それに合わせてパペットたちも一緒に顔を出そうとしたので、串に刺さった団子のように馬車の縁に顔が並ぶ。

遠く背後には聳え立つ断崖絶壁の岩肌と、その奥に万年雪が積もる魔の山脈。

そして前方には、この世界特有の魔物の脅威に対抗するための城壁に囲まれた都市が見えた。

そして門を守る衛兵らを見て、街中を進みながら街並みや暮らす人々を眺めていると、私たちはある気持ちを共有していた。

「なんか、とくに何も変わっていない？」

「むうう……？」

「思っていたのと違うわ」

目に映る街並みは人族の領域である帝国の北部の街とほとんど一緒で、街中の道行く人からも人族しかいないように見えるし、天気や気候も北国な感じがするだけで至って普通だった。

「ふふ、驚いたかい？ 詳しいことはあの城の中で話そうか」

アリエルさんが示した城に到着すると、門番の人とアリエルさんが数回言葉を交わし渋い表情を浮かべる門番の横を通り過ぎて、城の一室へと案内された。

案内されたその部屋は、装飾こそ微妙に違う感じがするけれど基本的に人族の建物と同じような作りの部屋で、そこで私たちは共通認識について擦り合わせた。

「人族も魔族も、外見だけじゃ判断が出来ない。なんせ姿形は全く同じだからねー」

ソファにゆったり座ったアリエルさんが、イタズラ成功って顔でそんな事を言った。

魔族語について一通りみっちり教えてくれたけど、魔族そのものや文化などについて詳しく教えてくれなかったのは、この瞬間の為にワザと説明していなかったらしい。

白ちゃんが批難するような顔でアリエルさんを見ていて、それにアリエルさんが反応し軽く牽制しあう一幕もあつたけれど、話は続く。「見た目が同じって、じゃあ、人族と魔族って何が違うんですか？」「いろいろ違うよ。まず最大の違いは寿命の長さ。魔族は人族よりも長い寿命を持つ。まあエルフほどじゃないけどね」

エルフ、か……、まともに戦えない今では、会いたくないなあ。

私とソフィアちゃんが同じような感情で顔を顰めた。

「魔族の中で、違いとかはあるのですか？」

「そんなのないよ？ 公爵とか貴族がいたり、それを支える平民がいたりするけど、種族としては基本ほぼ全て一緒の単一種族だよ。まあ魔王に関してだけは例外なんだけどね」

衝撃の事実。

魔族といっても、いろんな種類がいる訳では無いらしい。

「耳とか角とか羽とか尻尾とかは!？」

「だから無いって。もしそういうのを持っているのがいたら、それは魔族じゃなくて全く別の種族だよ。途中で会った鬼人とか以前のコケちゃんとか、そういう感じ。けど絶対数が少なすぎてほぼ存在しな

いと思っていいよ。子孫を残そうにも相手がいないから増えることも無いし」

ソフィアちゃんがアリエルさんに詰め寄るが返ってきた答えは、ファンタジーな人種がこの世界には殆ど存在しないという夢も希望も無い事実だった。

「ああ、龍だけは例外だったね。あいつら一応人化も出来るから」
そういえば取得しなかったけど、人化というスキルがあったのを思い出した。

莫大なスキルポイントを要求されていたし、その前に進化して人に近い姿になったから必要無くなったんだよね。

さすがにあの要求ポイントだと普通に長年貯めていっても足りないだろうし、龍だと人化を獲得しやすいのかもしれない。

他にもアリエルさんは、ステータスの伸び方が人族より良いことや、人口と出生率が低くて人手不足に陥りやすく今の魔族はシャレにならないほど人口が減っていることなどを説明した。

そのようにワインで口を潤しながらアリエルさんが語り続けているとき、途中で部屋の外に複数の人の気配を察知した。

感知出来るものや感知可能な範囲が減ってしまったけれど、魔力や術式とか空間それに魂魄と、システムの補助を受けなくなっても何故か森羅万象のスキルと同じようなことを無意識に張り巡らせているので、今扉の前に立った初老の男性とお付きの人らの存在を認識することが出来た。

それにしても、魂の力が本人の強さに繋がるこの世界で、初老の男性の魂の大きさと強度は相当なものだと感じた。

大体の人は魂が弱って磨り減っているのに、この人の魂は摩耗があまり見られない。

たぶん強度がかなり高いほうなのだと思う。

「入ってきたらー？」

アリエルさんが少し大きな声で扉の向こうにいる人らに呼びかけた。

すると数秒経ってから返事があって、軍服みたいな服を着た人らが

入ってきた。

そして最も高級そうな装飾の多い服を着ている初老の男性がアリエルさんに跪いて話し始める。

「お戻りになるのを我ら一同、お待ちしておりました」

「うん。ただいまー」

風格のある初老の男性の口上に対して、アリエルさんの口調はとても軽いものだった。

そのせいか、お付きの人らが僅かに気配を揺らがせたのを感じ取ってしまう。

そしてアリエルさんはわざと反感を買うような振る舞いで初老の男性について説明した。

「ご紹介に預かりました、アーグナー・ライセップと申します。以後、お見知りおきを」

ここを治める領主で辺境伯らしいアーグナーさん……、様……、いや、アーグナー卿は私たちの方を向き、ピシッと背筋が伸びた動きで浅くお辞儀をした。

眼光鋭い外見からも滲む内面の性質からも優秀そうな印象を受ける人であり、それと同時に狡猾な腹黒さも持ち合わせているように感じた。

「それで？ 何の用？」

「はっ！ 魔王様がこの地にお戻りになられたと聞き、急ぎ挨拶に参った次第です。おくつろぎのところお邪魔を致しまして申し訳ありませんでしたが、忠実な臣下として顔を見せないのも、不敬かと思いついて馳せ参じました」

アリエルさんに向き直り、ほぼ一息で丁度いい速度を保ちながら一気に語る。

地味に高度な発声技術を目の当たりにし、しかしそれを受けたアリエルさんは尊大な態度で話を続けて、無理矢理アーグナー卿に時間を作らせ予定をねじ込ませた。

「わかり申した。では、明日の昼のお食事の後でいかがでしょう？」

「いいよー。じゃあ、その時間にね」

その後はふてぶてしい態度を演じるアリエルさんがお酒とおつまみを要求して、それにイヤな顔一つせず対応するアークナー卿のやり取りがあった後、彼らが退室して私たちだけになる。

「……権力と暴力を併せ持った人がどうなるのか、思い知ったわ」
ソフィアちゃんが少し軽蔑したような口調で呟いた。

わざとだとしても、あからさますぎる振る舞いには、私も少しやりすぎではないかと思う。

「ふふふ。そこに財力もプラスすれば、この世で出来ないことは少ないと断言しよう！」

高級そうなワインを次々と空にしていくアリエルさん。

旅の途中でも、パペットたちを召喚するついでに最も信用と価値が高いアレイウス金貨の袋の山を持ってこさせていたアリエルさんが言うと、冗談でもなんでも無く真実だと感じた。

その黄金の財力でソフィアちゃんの大剣も買ったんだよね……
メラゾフィスさんが不満げなソフィアちゃんに、アリエルさんの行動を解説した。

それに合わせてアリエルさんも、そうする理由を説明する。

「つまり、わざと嫌がられることをして、敵を焙り出しているってことですか？」

「少なくとも、さつき挨拶に来た中で何人かはそういうのがいたね」
気配だけではなく、手とか身体に出してしまった人も何人かいたので、効果自体は抜群なのがタチが悪いところだった。

自分を餌に叛意のある者を釣り出す。

それにアークナー卿は引つ掛からなかったけれど、部下の人らが悪感情を見せている時点で減点であり、部下がそうであるなら上も何か抱えているはずと確信しているような語り口だった。

けれど、傍若無人に振る舞うのは別の目的もあるように思えた。

「そういう訳で、遠慮せず好き放題するのだー！」

また一つ、ワインを一気飲みしておつまみを食べるアリエルさん。

「……結局それが一番の目的なんじゃないんですか」

「そうだけど、……それだけって訳じゃないんだよ、ソフィアちゃん」

アリエルさんは自分の口で話す気が無いみたいだから、少し離れて話す。

メラゾフィスは気付いているみたいで、アリエルさんの給仕を続けていた。

「アリエルさんは魔王。魔族は魔王の命令には逆らえない、それは権力的な意味でも暴力的な意味でもあるけど、システム的にも絶対逆らえないようになってるんだよ。……そして思い出して、禁忌の内容を。内容は以前にも説明したはずだよ、そして何をどうすれば効率が良いのかも」

「……あつ。もしかして、そういう事なの？」

枯れてしまったシステムに、エネルギーを注ぐ。

そのエネルギーがシステムに還元されるのは生き物が死んだ時で、そのためには生命が数え切れないほど死ぬような戦争が必要で、その地獄のような戦争を引き起こすのが魔王のアリエルさんであり、贖として生命を捧げることになるのは魔族らだった。

「それじゃあ、仲良くしてたら辛いわね。生贄か……、恨まれるわよね……」

理解したらしいソフィアちゃんが、聞こえないようにボソツと呟く。

面倒見の良いアリエルさんが必要以上に魔族らに感情移入しないためにも、悪役を演じることで残された人らが恨みを向ける矛先を用意するために、そして嫌われることで自分を罰するために。

難儀な立ち位置にいるのに心根が優しすぎて痛みを抱え込んで、でもだからこそ世界を救済する王なのだと、私は改めて思った。

禁忌について何も知らない、ただ巻き込まれるだけの魔族や人族には最悪の暴君でしかないけど真実を知っている私たちは、数少ない味方としてアリエルさんを支えていきたいと思う。

「白ちゃん？ お酒は二十歳からだだよ？」

「ぐぬぬ……」

部屋の隅で話している間に、向こうでは白ちゃんとアリエルさんが酒瓶を巡って視線をバチバチさせ、一触即発の睨み合いを繰り返して

いた。

酒瓶に手を伸ばした白ちやんと、腕を掴んでそれを止めるアリエルさん。

「ダメなものはダメ。ならぬものはならぬのです。いくら力を取り戻したといっても、虚弱なのは変わってないんだからさ」

「……ッ！」

ギリリと軋む音が鳴った。

それと同時に白ちやんの顔が苦々しく歪んで、数秒後振り払うように白ちやんが手を下げた。

「わかればよろしい」

そう満足げな表情を浮かべるアリエルさんだった。

けど、ほんの一瞬だけ、刹那すらよりも短い時間、空間の歪みが酒瓶周辺に発生した。

「さて、残りを……、あれ？」

アリエルさんが視線を酒瓶に向けるけどテーブルの上には何もなく、消えた酒瓶はいつの間にか白ちやんの手に収まっていて、取り返される前に中身を直接飲んでいった。

「あっ!?! いつの間!?!」

そして白ちやんがお酒を飲んだということとは……

「あー。幸せえええ」

惚けきった調子の声が呑気に歌う。

瞳を文字通りグルグルと回転させて、普通の眼球では黒目にあたる部分で、虹彩だけ白目が無い小さな5つの瞳がメチャクチャに揺れ動いている。

視線を一点に固定していればそこまで変に見えないけど、こうして動いていると異形感が強くて不気味な印象を与える瞳だったことを久々に思い出した。

1年半近く目隠し状態だったから、白ちやんこんな眼だったの忘れかけていた。

「ったく、ないわー。まおーも硬いんだよー、お祖母ちゃん属性ださんでいいっつーの」

あつ、ヤバイ。

かなり酔ってるし、キレてる、これ。

「うりゃ。静止の邪眼！　ずっと私のターン！」

暴走する白ちゃんを止めようとしたアリエルさんが空中で時間が止まったように静止し、躍動感溢れる彫像になると白ちゃんはベシベシ叩いて大笑いしていた。

「はっはっはーっ！　まおーすらも私には敵わないのだー！」

アリエルさんがやられたことでパペットたちも制圧に動いたけれど、一瞬で行動不能にされて糸で宙吊りにされていた。

「ちよ!？」

「ストップ！　刺激しないで……」

動こうとしていたソフィアちゃんとメラゾフィスさんを押し留め、私はゆっくり近づく。

慎重に、言葉を選んで……

「白ちゃん？　お酒は静かに飲もう？」

「コケちゃんも飲もう！」

「むぐう!？」

一瞬で目の前に転移して酒瓶を口に突き込まれた。

問答無用すぎ……る……、あつ、私も……酔ったら……

意識が霞んでいくけど、その感覚はより深く深淵へと誘うような、甘く苦い真なる深域へと引きずり込まれる蜜の味だった。

そして落ちていく、墜ちていく、墮ちていく。

精神の深い奥底へと沈み込み外界と感覚が切り離され、私の魂と意識は全て内海の底へと潜っていった……

……………

物質の世界では、金と翠の髪を持つ少女が受け身を取ること無くカーペットに倒れ込む。

「およ？　コケちゃん、大丈夫……!?!　ねえ、ちよつと？　なんか返事してっば!?!」

瞳を見開いたまま呼吸も意識も無くした少女を前に、白い少女は慌てふためく。

酔いに浮かされつつも正確無比に治癒の奇跡を施すが、倒れた少女はピクリとも動かなかった。

35 向き合う想い、向き合う自分自身

水底のような晦冥を落ちていく。
空と呼べる方向には無数の光があり、それはまるで満天の星が瞬く夜空のよう。

揺蕩う光は緩やかに光量を変え、様々な色合いを見せている。
沈み込もうとしている深淵には目を凝らしてよく見ると泡のようなものも浮かんでいて、一部が砕けた泡と無数の色彩を見せる水沫が、墨汁のような闇の中で宝石のように煌めいていた。

深海のような世界を潜り続ける少女は、微睡む意識から抜け出し瞼を開いていく。

……ここは？

果てすら見えない世界で周囲を認識した私は、ここが精神世界の中でも一層深い領域である事をぼんやりと感じ取り今もなお何かに誘われるようにして、重苦しく押し潰され縛り付けられるような魂の最深部へと引きずり込まれていた。

そして泡沫が浮かんでは消えていく領域まで沈み込むと、泡の中に映った世界に目を見開いた。

白雪が覆う峰々を朝日が照らし、光の加減で青みがかった茜色とラベンダーのような青紫で塗り潰された大自然のキャンバスがあった。

何処までも続く緩やかな丘陵と背丈の低い緑に覆われた草原に吹き抜けた風が、波の曲線を描き頬を撫でては空へと消えていった地平線があった。

白い石を無数に組み上げて作られた街並みと、入り組んで迷路のようになっている細く狭い路地を歩く人々の姿があった。

荒涼とした生命の感じられない岩肌と、太陽を覆い隠すような黒き鋼と無数の暴威の影が終末を齎そうとしている景色があった。

復興半ばで破壊と略奪の傷跡が痛々しく残る街に、白い怪物が全てを喰らい尽くす災禍のように押し寄せる動乱があった。

大地が捲くり上がり乾いた枯れ草と土埃が舞う戦場と、生命を散らしながら刃と刃をぶつけ合う兵士らを見下ろす視点があった。

太陽の光が差し込むことはない地の底で、無数の蜘蛛に襲われ慌てふためきながら迎え撃つ状況があった。

翼のない龍らを死闘の果てに打ち倒し、離れ離れになっていたこの世界の家族と再会して想いと心を交わす情景があった。

小さな蜘蛛と二人三脚で苦難と試練を乗り越えていき、熱波が沸き立ち灼熱の溶岩が流れ続ける火口の底のような大空洞があった。

暗黒の世界から仕切る壁を割り開いて緑の中から這い出し、この世界へと産まれ落ちた光景があった。

そして突然真下に発生した泡に触れると――

不意に視界が切り替わる。

穏やかで平和な陽射し、少し濁っているようなちよつと重たい空気が、自動車のエンジンが重低音の唸りを上げ、街を歩く人々の雑踏が聞こえる。

カツカツと音が聞こえてそつちに目を向けると、岡ちゃんが黒板に古文の解説を書き連ねているところで、それを真面目に見ている人は周囲を見渡しても少なかった。

視線を下げると1人用の机の上にノートと教科書が広げられていて、右手には淡い色合いをした細いシャープペンが握られていた。

「……………」

思わず声が出る。

だけど、それに反応した人はいなくて授業は何事もなく進んでいく。

視界に映る両腕は紺色のブレザーと白いブラウスの袖で包まれていて、胸元に手を伸ばすと指先に触れたりボンタイが小さく揺れるのを感じた。

「はいはい。注目ですよおー？ 教科書37ページ1行目からあー、そうですねえー、授業中にスマホ覗いている漆原ちゃんに訳してもらいましょうー」

「うえっ!?!」

黒板の方から教室に声が響くと、名前を呼ばれた漆原さんが慌てた様子でスマホを隠そうとしている姿が映った。

「他人事では無いですよー、夏目くん。漆原ちゃんが答えられなかったら次は夏目くんの番ですからねえー?」

隣で同じようにスマホを弄っていたらしい夏目くんにも矛先が向かい、教室に控えめな笑い声が広がった。

「はいはい。静粛にいい。漆原ちゃん答えをどうぞおー」

結局答えることが出来なかった漆原さんと夏目くんの反応に、再び笑いが起こって弛緩した空気が漂う。

「うーんどうしましょ……。窓の外ばかり見てぼーとしている苔森ちゃん、ちゃんと聞いていますかあ? ついでに答えてもらいましようお」

「え? ……えつと、えーと」

手元にある教科書に視線を巡らせるけれど、内容が全くわからない事より並んだ文字に懐かしさを憶えてしまい、何故だか知らないけれど涙が滲んだ。

「……えつ、苔森ちゃん!? どうかしましたか?! 何処か体調でも悪いのですか?」

ポタポタと零れ落ちる雫は教科書に染み込んでいき、ページが水分でふやけてデコボコしていくのを、滲んで揺れる視界に映っていた。

騒然とするクラスメイトの忍び声が、耳に入っては通り過ぎて流れていく。

そして揺れる瞳とまばたきの度に頬を伝う涙に戸惑っている時、教室内に眩い光が溢れた。

オレンジ色の夕日が差し込む住宅地、その中でも比較的新しく高級そうな印象のマンションの外廊下にて、ある一室の扉前に私は立っていた。

「あつ……」

ふらりと倒れ込むように数歩進み、玄関ドアに手が触れた。

ドアに付いている装飾の段差を指でなぞり、表札は空白で何も書かれていないけれど一緒に並んでいる部屋番号を見て、胸が苦しくなり息が詰まる。

肩にはスクールバッグの重さが押し掛かっている、そのバッグを開きゴチャゴチャしている中身の中から、小さなキーホルダーが結ばれている鍵を取り出した。

震える手で、それを鍵穴に差し込む。

軽く手首を回して捻ると、カコンと軽い音が鳴った。

鍵を引き抜きドアノブにそつと手を添えると、ゆつくりと引いていく。

暖かい空気が隙間から溢れながら扉が開かれると、ドアの向こうには平穏で満たされた部屋が。

「あつ、おかえり真理——」

小さな女性は優しく微笑んだ。

「お母さあ……ッ」

伸ばした手の先には、暗闇しか無かった。

「うう……、つううう、ああああああ……」

黒い水面へと膝から崩れ落ちて、泣き叫んだ。

忘れていた。

気付かなかった。

思い出せなかった。

どうして今まで忘れていたのだろう。

私がこの世界にいるということは、向こうに私はいないということに。

あの部屋に帰ることはもう出来なくて、そこでお母さんは一人になっっていることに。

膝をついた水面の揺れが収まり、私の姿を写す。

その姿は金色の髪と灰色の瞳をしていてローブと三角帽子に身を包んだ少女が、涙で顔をクシャクシャにしながら、こちらを見返して

いた。

これが、今の私……

日本人離れした髪の色、少し異質な瞳の模様、綺麗すぎて作り物めいて見える肌の質感。

人形じみたズレや歪みのない顔が溢れる涙に濡れて、不安そうな表情を浮かべている。

面影はあっても、私はもう苔森真理という日本人じゃない。

ここにいるのは、ただの魔物だ。

こつちの世界の家族ですら、殺して食べて奪い尽くすような、そんな悪い魔物だ。

『そうだよ、あなたは非情で恥知らずな悪い魔物』

突然聞こえた声に目を見開く。

水面に映る顔が、口元を大きく歪ませてこちらを見ていた。

「え？」

瞬間、水面から飛沫を上げて腕が伸び、首元を掴まれた。

「ツ!? ……あが、あつ、ぐうう!？」

首筋に細い指が食い込み、一瞬だけ意識がボヤけてしまう。

そしてそのまま恐ろしい力で投げ飛ばされて、水面に無数の波紋を散らしながら何度もバウンドして転がった。

水音と冷たい感触はするもの的一切濡れることのない水から身体を起こして、腕が現れた場所に視線を向ける。

そこには、モノクロで色味のない影のような私自身が立っていた。

もう1人の私は手からモヤを溢れ出させて旗杖を作り出し、それを正眼に構えると正面から突撃してきた。

顔を狙う一撃に首を傾げることで躲して、続く連撃はいつの間にか手に持っていた旗杖で捌いていく。

『みんな殺しちゃった、みんな食べちゃった。そうでしょう!?!』
もう1人の私が叫ぶ。

『許してくれる優しさに甘えて、目を逸らしているだけでしょう!?!』

核心を抉る言葉が、私を責め立てる。

そして旗杖からの攻撃も一層激しくなる。

『本当は都合良く丸く収まって、何も問題無かった、ああ良かったって思っているくせにっ!』

「ちがっ! 私ほ……っ」

罰せられないといけないのに。

糾弾されないといけないのに。

『嘘つき! 逃げてるくせに、向き合おうともしないくせに!』

「そんなこと、ない……っ」

向かい合おうと思った、ちゃんと見ようと思った。

自分が間違っていたって悟ったから。

『そんなこと、いまさら!』

「わかってる!」

私がしたことを罰するのも糾弾するのも、誰もいない。

それに甘えて全て忘れるのは、とても楽で簡単な事だということも。

『なら!』

ガードした旗杖ごと大きく空へ打ち上げられる。

それを追って、もう1人の私は翅を広げて飛翔してくる。

「けど! それに囚われて拒絶し見て見ぬ振りをするのは、もっと間違っている!」

高速で迫る突進から翅を羽撃かせて回避し、空を駆ける。

暗闇に光の軌跡を2本描きながら、私たちはぶつかり合う。

「私は、みんなと向き合わなければ……。みんなの想いを受け入れ、認めなければならぬんだ」

そうだ、私は……。彼ら、彼女ら、全員と、真っ直ぐ向き合わない
と。

見下しも傲慢も自惚れも無く、対等に。

『そんなの……っ!』

そうだよ、結局は全部私のエゴだったよ。

「だからこそ、全ての気持ちも受け入れなきゃ」

私は、もう1人の私からの攻撃を抵抗すること無く受けて、水面へと叩き落される。

「くう……。彼ら彼女らみんな全員と、もう一度ちゃんと顔を合わせ
て分かり合うんだ」

身体を起こすけれど、そこから離れること無くただ膝をついて座り
込む。

『そんなの、どうなってもいいのにつ!!』

「それだけじゃない……」

分かり合うのは、受け入れるのは、それだけじゃない。

もう1人の私が、旗杖を首元に突きつける。

「泣くのも、悲しむのも、怒るのも、苦しむのも全て、全部全部私の心
確とした眼で、もう1人の私を見上げる。

忘却していた想いも記憶も感情も、全部私そのもの。

そこにいたのは、出口の見えない世界に取り残された、泣きじゃく
る迷子の私だった。

「だから、君も受け入れなくちゃ」

もう1人の私が旗杖を取り零して崩れ落ちる。

それを優しく受け止めて、言葉が続ける。

「一緒に行こう。私たちにだって、まだ、やれることは沢山あるから
……」

薄れゆく私を抱きしめて、呟く。

「おたかだえり……私」

影が1つに重なった瞬間、暗い世界が眩い星の輝きによって照らさ
れていった。

城の一室にて、倒れた少女の目を覚まそうと白い少女が手を尽くし
ている。

彼女は自らの邪眼によって時を止めていた相手にも助けを求め、必
死になって救いの手段を模索していた。

けれど何をどうしても効果がなく、このままずっと目を覚まさない
のかという気持ちで胸が一杯になり、その感情についてどうしたらいい

いのかわからず戸惑いで頭が真っ白になっていた。

「コケちゃん……」

「白ちゃん、落ち着いて」

非常に珍しいしおらしい雰囲気の白の様子に、魔王もどう声を掛けるべきか決めあぐねていた。

ソファに寝かされている少女は、胸が上下することも無く、ただ虚空を見つめている。

「ねえ、大丈夫かしら……。戻ってくるわよね？」

「私には……。申し訳ありません、何もわからないとしか」

「いえ、いいのよメラゾフィス。あの2人に任せるしか無いわ」

吸血鬼の主従は、何も出来ないことに歯痒さを憶えつつも、ただ見守っている。

痛いほどの沈黙が訪れた時、死んだように眠る少女から淡い光が溢れ出した。

「一二っ!?」

室内を飛び交う蛍火に視線を奪われた隙に、少女の身体が重力の軛を断ち切り浮かび上がった。

ゆつくりとソファから天へと昇り、身体を半回転させてこちらを見下ろす姿勢となる。

そして開いたままの虚ろな灰色の瞳が青白く輝きだし、少女の周囲に光の環が無数に踊れた。

手首や足首などに多く密集する光の環は、よく見るとそれが非常に細かい魔術陣が密集して光の帯のように形成されているものだと気付いた。

頭上には巨大な光輪が輪転していて、ギザギザの歯車のような、けどよく見ると6枚の花弁の花をモチーフにしたパーツが無数に組み合わさって、まるで花冠のような造形の光が浮かんでいる。

浮遊している少女の変化はそれだけに留まらず、背中から燐光で描かれた翅が宙に伸びる。

消えていた風切り羽根のような触覚が、再び顔の横に1つ2つと生えていき最終的には三対六枚の鮮やかな橙色が揺らめいた。

ふと、光の翅が羽撃く。

「《魂よ——》」

花びらのように鱗粉が舞い散り、室内が幻想的な燐光で満たされていく。

「ぐうっ!？」

「メラゾフェイス!？」

「だ、大丈夫です、お嬢様。何か不調という訳ではなく急に力が沸き起こって……。少しでも気を抜いてしまうと、溢れて出てくる全能感に酔ってしまいそうです」

燐光を浴びたメラゾフェイスが高鳴る心臓と滾る身体を抑え込むために膝をついて蹲る。

この瞬間、何が起こったのかを正確に理解出来るのは魂を見ることが出来る存在だけで、柔和な青白い光はメラゾフェイスの摩耗した魂に浸透すると傷つき弱った部分を修復し、本来在るべき魂の形へと回帰させたのだった。

その光は魂が喰われ混じり合ってしまった魔王にも降り注ぎ、分離することは既に不可能だったけれど魂の融合で歪になつていた継ぎ目と傷跡を馴染ませていき、ギリギリまで張り詰めていた器の容量にもほんの僅かな余裕を与えていった。

やがて燐光は収まって虚空へと消えていき、宙に浮かぶ少女の周りを公転する光の環がゆっくりと縮んで彼女の身体へと沈み込んで溶け合つて混ざり合つていく。

頭上の光輪も円環を狭めながら圧縮されていき1つの光になると、少女の左の側頭部に寄り添い白い花卉を6つ持つ花となり、花飾りのように少女の黄金の麦穂のような髪を彩っていた。

そうして全ての光が収まっていくと、少女の身体が重力に引かれて落ちようとする。

それを慌てて受け止めた白い少女は、彼女が安らかな顔で眠り呼吸をしていることに安堵して、そのまま抱きかかえるように倒れ込んだ。

「……はは、心配したんだよ」

「すう……、くう……」

人騒がせなんだから、もう。

ほんと、付き合わされる身にもなれって……

ハハツ……っ、ないわー。

少女の頬に涙が流れ落ちる。

それは、誰が流した涙だったのだろうか――

鬼1 劍神 敬意於其刃矣

極寒の地で、氷が砕ける。

捲れ剥がれた皮膚から血が流れ、氷柱が抉り裂いた肉が生々しい華を晒す。

灼熱煌めかす白刃を片手に、剥がれ落ちた血の華を獄氷に融かし、遺骸の塔を焼け爛れた激情のまま積み上げる。

忠節誓いし主上に足止めと誘導を命じられた氷と冷気を纏いし龍と竜らは不殺という難題を抱えつつも立ち向かうが、ただ目の前に居たという理由だけで狂える劍鬼の瞋恚を宿した眼に止まり、戦いに挑んだ全ての存在が紅蓮の血風を撒き散らして白雪へと沈んだ。

燃え盛る憤怒の炎に魂すら焦がした鬼は、反比例するが如く人間性を凍てつかせて擦り減らし、茫洋とした意識のまま進み続ける。

其の眼に映すは、撃砕すべきものの敵影のみ。

嗅ぎ分けるのは、根絶すべきものの死臭のみ。

耳朶じだに触れるは、滅殺すべきものの絶息のみ。

鬼哭啾々。

何故戦っているのかも、わからない。

何故歩いているのかも、わからない。

何故、生きているのかすらも、わかりはしない。

屈辱に狂いながら全てを失った小鬼は、その手と口を鮮血で染めて鬼となり、妖刀に命を啜らせ続けた忘我の極みに鬼人へとなり果て、行く宛も帰る場所も無い彷徨うだけの幽鬼となった。

狂える鬼は山脈を荒らしつつ立ち塞がるモノを斬殺しながら少しずつ山を降りていく。

何度、獣を斬っただろう。

何度、竜を斬っただろう。

そして龍すらも何度も斬り捨て、今新たに襲ってくる氷龍も刀の錆にすべく地を駆ける。

殺意と激憤を撒き散らして鬼は刀刃を振るい、目の前に居る氷龍を叩き斬らんとする。

押し押せる吹雪、襲いくる氷柱、氷雪交じりし息吹の大奔流。

次々と迫るそれらの攻撃は大自然の脅威を彷彿とさせるものだったが、狂える鬼は刀一本と己が身体のみで捌いていく。

人外の膂力で振り抜かれる灼熱の刃は獣の如き荒々しきで吹雪を割り、その奥にいる氷龍を割断せんと爆炎を吹き上げて斬りかかる。

眼前の死地へと躊躇なく飛び込み、力技で活路を開き続ける狂気の沙汰に氷龍は慄いてしまい、この一瞬の迷いが戦いの趨勢を決定づけてしまった。

一手、二手、三手……

天秤が傾いていく。

鬼は血を流すものの、それより多くの血を氷龍に流させ、さらに筋を断ち骨をも砕く。

抗う力を削がれ大きな隙を晒した氷龍は、喉笛に喰らいついた高熱放つ凶刃によって、その命脈が断ち切られた。

「ガアアアアアアアア！」

剣鬼が咆える。

それは目障りだった邪魔者を排除した喜びの声か、それとも死ねなかつた事への哀しみか。

龍が息絶えたことで、鬼の身体が光に包まれる。

その光が消えた頃には先程までの負傷は何処にもなく、肉体的には最善の状態近くまで生命力が復活し気を溢れさせていた。

己が斬り殺した氷龍の死骸を見る剣鬼は、耳を打つ言の葉に反射的に視線を向ける。

「ままならぬものよな」

そこには、龍と呪いの気配を宿した武具を身に纏う、1人の老人が立っていた。

その男は老いてはいるが、その身が放つ剣気は抜き身の刃が首筋に添えられているかのよう。

遠くの地平にある小さな村落を背後に、その老人が狂える鬼の前に立ち塞がった。

「ガアアアアアアアッ!!」

新たな敵の姿に、狂奔する剣鬼。

「剣神、レイガー・バン・レンジザンド。参る」

老人が、己が号を名乗り上げる。

それは相手が聞いていないかと思いつつの独り言であったが、然と剣鬼の耳に届き茫漠とした意識へと浸透していった。

血が滾る。

肉が踊る。

目の前の怨敵を撃滅せよと、咆哮する。

生命を燃やせ。

気力を尽くせ。

死に場所は此処にあり、剣神の誉れを見せようぞ。

鬼人と剣神の神楽。

今よりこの地にて、修羅の舞が開演するのだ。

初めに剣鬼が動く。

先の声は認識した、だが全ての精神を憤怒で塗り潰される狂える鬼は、それらを討ち滅ぼすべき雑音だと迷妄し刀剣を振るう。

剣鬼が振るうは、一振りの刀。

本来剣鬼は二振りの刀を持っていたが、轟雷秘めし魔刀はその手を離れ氷河の奥深くへと埋もれてしまった。

残る魔刀は猛火を秘めしもので、その刀身は数多の酷使によって刀身が溶けかけていた。

たった一本の刀を握りしめて振るうは、守りを捨てた剛の剣。

化け物としての膂力を存分に振るい全てを攻めへと変じたその鬼剣は、何の技巧も精緻も見られない一撃でさえ必殺と化す。

対するは閻龍の足曳の呪いが籠もりし呪剣。

この剣で斬られたものは根源からの弱体を免れず、元となった閻龍の力も備わったこの剣は魔性の術理ですら斬ることが可能だった。

剣神が振るうは、守りの型。

それも、ただ時間を稼ぐことのみを目的とした死士の剣。

劍神の手によって静と動が流麗に繋がり水のように振るわれる利劍は、圧倒的に劣っている身体能力でありながらも鬼劍を受け流し、致命の刃から紙一重で逃れ続ける。

「ガアアアアー！」

焦れた劍鬼が叫喚する。

ただ喉で掻き鳴らした空気の振動が、劍神の身体を打ち据える。

咆哮によって僅かに硬直した劍神へと、狂える鬼は刃を振り下ろす。

空を斬ったはずの刃先から、煌々と烈火を吹き出しながら。

「やはり魔劍か」

狂える鬼が持つ武器を、劍神は正しく見定める。

細身の刀身が僅かに溶け落ちていようとも、その魔鋼に目立った傷というものは見られない。

であるならば、尋常ではない硬度を持ちつつ、自ら修復する魔劍であるということ。

武器の破壊も容易ではないと再認識し、劍神は狂える鬼の身のこなしに視線を巡らせる。

暴走しているように見えるが、斬るときには刃を立てる、鏢に指を添え柄頭から少し離して握るなど、基本中の基本は理性無き状態であろうとも押さえていた。

劍捌きこそ素人のような力任せで稚拙なモノではあるものの、劍の術理を多少理解しつつ魔劍の力を使っていることに、劍神は警戒を高める。

ただ力任せに暴れてくれた方が、まだやりようがある。

ただ畜生同然に成り果てていれば、まだ活路を導き出せたというものの。

だが現実として、劍鬼は完全に獣に堕ちたようには見えない。

その厄介さに、ありとあらゆる不条理を想定しつつ劍神は挑み続ける。

肉体性能の差によって、ただの乱舞が神速の閃光となって振り抜かれる。

人界にて剣技最強と謳われた男でさえ、目で捉えるのは辛いものがある。

しかし、身体の動きを見極め、剣の切先を先読みすることで、鬼剣をいなし続ける。

剣鬼が炎を纏おうとも、呪剣と同じ力を持つ鎧の力によって剣神は強引に突破し打ち消す。

それに驚愕して勢いが弱まった狂える鬼の剣舞を掻い潜り、鬼の身体に一太刀が入る

だが、浅い。

肉どころか皮すら斬れず、堅いものに刃が触れそのまま滑り落ちる。

しかし、足曳の呪いは剣鬼の身へと確実に侵蝕した。

目には見えずとも、剣鬼を覆う身体強化の術理が僅かに弱まっている。

そのことに、斬り続ければいずれその皮膚を裂けるまで脆弱になると思われるが、剣神の胸裏に浮かぶは諦念だった。

儂の勝ち目は、——無い、な。

幾百幾千もの刃を当てようとも、そこから剣鬼の生気を削りきれんかは未知数で。

対する鬼はただ一撃、老いた男へと当てさえすればいいのだから。

刹那の内に鎬を削り続ける戦いで、永劫にも等しい闘争をこなさねば勝機は掴めない。

いや、そもそも剣神に勝機は最初から存在しているのか不明というもの。

だが、それは剣神にとっても初めから判りきっていたこと。

一縷の希望を見いだせるだけでも僥倖と言えよう。

剣神の目的は、変わらない。

ただ時間を稼ぐ、それだけだ。

龍のような人外の巨体では、止めることすら叶わなかった。

高空を飛翔していれば、刃を届かせることすら容易では無かっただろう。

しかし、剣鬼は人型で、大地に脚をつけており、技巧は未熟としか言いようがない。

だからこそ、身体能力に大きく水を開けられている剣神が時間を稼ぐことが出来る、最良の相手と言えた。

狂える鬼が飛び掛かりながら刀を打ち下ろした。

事実爆発としか言いようのない現象が、鬼気と爆炎を宿した魔刀によって引き起こされ、地面が爆ぜた。

撒き散らされた衝撃波を受け流しつつ、剣神は呪剣を胸へ引き戻し構える。

僅かな勝機に縋りつつ、不退転の覚悟で出来る限り時間を稼ぎ続ける。

それが剣技最強、剣神と号された者の、全てを懸けた最後の一幕と信じて。

「――いざ尋常にッ」

「――ッ！」

再び刃が交錯する。

「勝負ッ！」

「ガアアアアアアアアアアアツツ!!」

対峙する彼らは、お互いに殺気を滾らせ、手に持つ白刃を振るった。

何度曙光が照らされ、何度帳が降りたか。

無駄を省き自我を削り、ただ闘争に生きる存在として純化していった剣神。

老いと泰平の世に錆びついた老剣は、さらなる飛躍へと至り剣気だけで斬撃が飛び、実体の無い業火ごと虚空を断ち斬った。

理性を失い猛り狂っていたはずの剣鬼は、今は叫ぶことなく冷徹に刃を振るう。

憤怒に吞まれつつも極まった苛立ちは逆に冷静さを与え、戦いを通じながら剣神の術理を盗み、己が血肉へと溶かし込んで自らの剣を洗練させていった。

這いずる炎は、渦を巻いて肌を焦がし。

大地へと叩きつける一撃は、轟音とともに目に見えぬ打撃となって襲いかかった。

しかし、剣鬼の刃は一度たりとも直撃することは無かった。

防ぐ、放たれた逆巻く火炎は最も薄い場所を見極めて斬り裂いた。

防ぐ、迫る大気の壁も剣気を込めた一太刀によって叩き割った。

防ぐ、全てを断ち切らんとする鬼剣も、流れを変えられては届くことは無い。

だが決して無傷とはいかず、死闘を続けた剣神は重度の火傷を負い、聴覚にも異常が起きていて腕の骨が軋みを上げている。

剣神が身に纏う閻龍の鎧も、長きにわたる戦いによって原型を失い、力を無くしていた。

だが鎧を犠牲にすることで剣鬼を消耗させ、魔力が底をついた剣鬼は魔剣の力を引き出すことも放たれる火炎も操ることはもう出来ない。

空納が付与された小袋には詰められるだけの回復薬が収められていたが、積み重なる負傷を治療するために飲み込み、何日にも渡る戦いで生じた渴きと飢えを誤魔化すために1つ残らず飲み干してしまっていた。

だが、それでも人である剣神では、魔性に属する剣鬼に届かなかった。

終わりの時が刻々と迫る。

人の身であれば、鬼より先に肉体の限界を迎えてしまいがゆえに。

動いたたびに筋肉が断裂し、骨がヒビ割れ砕けた音が、鈍く鼓膜へと直接響いてくる。

肺腑に肋が刺さり掛かっているのか、呼吸のたびに激痛が走り口の中に血の味が広がる。

視界も白く霞んで、まともに見えるのは半分にも満たない。

未だ、二本の脚で立ち続けているのが信じられないほどの満身創痍だった。

もはや奇跡は無く、死を待つのみ。

だが、劍神の胸中は不思議と清々しく晴れ渡っていた。削いで、削いで、削いで……

余計なもの全てを戦いには無用と削ぎ落とし、ただ純粋な劍氣へと変じさせた。

平和への夢や責任も、争いへの疑念もなく、死への恐怖すらも無い。ただ、己が持ちうる全ての要素を、劍へと捧げて振るった。

そのことに劍神は、喜びを噛みしめる。

結局、劍に生き、劍に死ぬ。

そういう生き方こそが、劍神にとっての生涯だったのだと満ち足りた笑みを浮かべる。

もはや一歩も動けず死を待つ劍神に、鬼人は沈黙を保ち仕掛けることはなかった。

先程まで劍風吹き荒れ苛烈な攻防が繰り広げられたのが嘘のように、双方微動だにせず対峙していた。

奇妙な静寂が周囲を包み込む中、鬼人は構えを解き、ゆっくりと頭を下げた。

完全に正気に戻った訳ではない、禍々しき想念が消えた訳ではない。

けれど確かに其処には、狂える悪夢から目覚めた一人の少年がいた。

「劍技最強の証、劍神の称号。お主に託す」

頭を下げる鬼人へと、劍神と呼ばれた男は名を譲り渡す。

湧き上がる激情を抑えつつ、鬼人は頭を上げた。

そして鬼人は刀を構える。

ただ一人の老人へと戻った男も、最期の氣力を振り絞って劍を構える。

これが最期、武の極致、これ一振り、我が人生の集大成。培った技術、その全てが鬼人に引き継がれる訳ではない。

しかし、この戦いで魅せた輝きは、確かに鬼人の胸へと届いていた。

そして全てを乗せた全身全霊の一撃は――

「見事」

老いた男の剣が砕け、胴を大きく引き裂く切創が、夥しいほどの血を撒き散らした。

だが――

「貴方も、見事だった」

鬼人の刀が、半ばから折れた。

振り抜かれた鬼人の刀は剣ごと目の前の男を斬り裂いたものの、その一太刀で限界を迎えた刀は宿した神秘が失われて、ただの鉄屑へとなってしまうた。

――喋ることが出来たのか。

出来ることならもつと語らい剣を交えたかったと惜しみつつも、この結末に満足しながら剣の神と謳われた男は、その生涯に幕を閉じた。

袂を分かち離れ離れになった親友へと祈りを託しながら逝った男の顔は、後悔など何一つ無いと言うような穏和な表情をしていた。

「……貴方に、敬意を」

鬼人は、男の遺体の側に壊れた剣と刀を並べる。

そして彼を殺したことで生命の位階が上がり、淡き光とともに戦いの中で失った生氣魔力技力、これら全てが満たされていく。

鬼人は彼の最期を汚さないように、静かに立ち去った。

不思議と凧いだ気持ち数が数日続き、鬼人は何かに憑かれたかのように無我の境地で二振りの刀を己が異能にて作り上げた。

陽焰煌めかす赫灼の刃と、妖雷瞬く蒼天の刃。

雑念の混じり気もなく、純化した想念から現出した、祈りの結晶。

「命名――炎刀老陽、雷刀若陽」

この刀を見るたびに、最期まで誇り高くあつた貴方を思い出す。

この刀を見るたびに、未熟な僕が貴方に追いつくための光を照らし出す。

奥底から湧き上がる想いを文字にして、刀に銘を刻む。

そして二振りの霊刀を手にとった鬼人は、再び侵蝕してきた憤怒に自己を溶かして歩き出す。

けれど、怒りに吞まれつつも両手に握りし陽光が、鬼人の願いを繋

ぎ止め続けた。

——誇り高く生き、そして死ぬ。

どうやって、何のために、それは未だ判らないけれど、鬼人はそれを探すべく、ただ歩いた。

魔族領と戦争に向けて

挿話1 執事から見た彼女たち

こんばんは。

わたくし、フィサロ公爵家にてお仕えする執事長であります。

自画自賛になりますが、長らく公爵家に仕え、執事長の役職を拝命し、それに恥じることもない優秀な働きをしてきたと思っております。

執事として屋敷の管理を任されたり主人の身の回りのお世話など、表の仕事もこなし。

そして公爵家をお守りする血腥い裏の仕事も、何度も経験しております。

ええ、そうでございます。

魔王城のある周辺一帯を統治しているフィサロ公爵家には、敵が非常に多いのです。

同じ魔族ですら政敵はおりますし、人族の精鋭が潜入している事もしばしばでございます。

故に、主人がお帰りになる家を守るために私たち執事にも、それ相應の能力が求められるという訳になります。

私も先代の頃から幾度となく賊を退け、同僚や先輩それに後輩ですら殉職していくような中で、私はこの歳になるまで公爵家にお仕えしつつける事が出来ております。

何処の手からの刺客にしても、この魔族領の中核とも言うべき地に潜入して来るのは、かなりの手練れに限られてきますので、毎度ヒヤヒヤすることになるのですが。

しかし、その幸運も尽きたのかもしれない。

再度申しますが、私はフィサロ公爵家に仕える執事長です。

魔族が魔王に従うのは当然のことではありますが、私が第一に優先すべきものはフィサロ公爵家になるのです。

であるならば、現在公爵家に寝泊まりしていらっしやる方々につい

て、素性を調べないという択を選ぶわけにはいきますまい。

それが、たとえ魔王様のお供の方々だとしても、異質だと理解していても、です。

ですが、しかし……

優秀と自負しておりました私でも死を覚悟するほど、彼女たちは外れているのでございます。

深更、大小浮かぶ月々が闇を薄明かりで照らす頃。

普通であれば人々が寝静まる時間帯ですが、私が眠りにつくことはありません。

厳しい訓練を経て睡眠無効のスキルを得てからというもの、夜の時間も貴重な活動時間となりまして、私が最後に眠ったのは何時だったのかすら思い出せないほどです。

訓練などをしていないにも関わらず、睡眠無効を会得してしまうほど激務に明け暮れるバルト様のためにも、私がこの公爵家にいる方々について見極める必要があるというもの。

数日前、公爵邸を訪れたのは九人。

魔王アリエル様。

引き絞られた鋼線の如き長身のメラゾフィス様。

目を瞞るような美貌をフードにて隠されて過ごしている白様。

何処かお人形のような、白様とは違う非人間的な美しさと可憐さを合わせ持つコケ様。

見た目は幼いですが、妖しげな雰囲気を滲ませているソフィア様。

長女気質であろう真面目な印象を受けるアエル様。

物静かで自己主張が殆ど見受けられないサエル様。

表情や視線などから何を考えているのか、全く読み取れないリエル様。

自由奔放な振る舞いで、活動的な性格であることが推察できるフィエル様。

そのうち当家で滞在していらっしゃるのは魔王様とメラゾフィス

様にアエル様を除いた、計六人となります。

私は明かりも持たずに、建物の隅々に至るまで熟知した公爵邸の中を見回ります。

暗視のスキルをも持つ私に明かりは必要なく、そうでなくともこの公爵邸のことでしたら、目を閉じていても何があるのか正確に当てる事が出来るでしょう。

暗闇の中を歩き、異常がないか順次点検していきます。

そして広大な敷地を誇る公爵邸に相応しく、無数の客室が並ぶ区画へと辿り着きました。

口に渴きを憶え、自然と喉が動き唾を飲み込む。

決して足を止めることはせず内心の緊張を隠しながら、いつも通りに見回りをしている体で通路を進みます。

気配の無い三つの客室は素通りします。

現在公爵邸には六人の客人が寝泊まりしておりますが、そのうちお三方は与えられた客室にいることはなく使用すらしていないようで、常に残りのお三方の側に片時も離れずにいるようです。

誰もいない客室を通り過ぎれば、ちゃんと客人が滞在している客室へと到達します。

気配感知のスキルを駆使すれば、室内に二つの気配があることがわかり、片方は部屋の隅の床に座ったまま微動だにせず、もう片方は部屋の中央の椅子に腰掛けておるようです。

やはり、今夜も寝ていないのかと、私は沈鬱としたやるせない気持ち湧き上がります。

こんな深夜にも関わらず寝ていない彼女たちもまた、睡眠無効のスキルを保持していらっしやるのでしょうか。

あの幼さで、どうしたら睡眠無効のスキルを獲得するのか、まるで理解が及びません。

普段でしたら客室の主が起きていることを確認して通り過ぎるだけなのですが、少し冒険を試してみなければ情報を得られないと思い、客室の扉の前へと行きます。

軽く、ノックすれば――

「あら？ どうぞ」

「……失礼致します」

部屋の中から入室を許可する返事をいただき、音を立てぬように静かに扉を開けて入ります。

暗いままの客室でしたが、部屋の中央にあるテーブル席に座るソフィア様と、隅の床に蹲るようにして座るサエル様の姿がありました。

「いつもは素通りするのに、今夜はどうしたの？」

手元にて、何か球体が連なって環になったような物を転がしているソフィア様が問います。

やはり気取られていましたかと、納得の気持ち浮かびます。

気配は消していたのに筒抜けになっていた様子から、ソフィア様が見た目通りの存在では無いと漠然と理解してしまいます。

それほどのスキル、睡眠無効や感知系のスキルなど、見た目通りの年齢では得られるはずが無いのですから。

しかし、そのように想像は出来ても、彼女が一体どのような存在なのか予測不可能なのですが。

見た目通りの年齢であるか、あるいは幻想種と呼ばれる伝承に現れる存在なのか。

魔王様は最古の神獣と神話で語られる存在であり、遥か古の時代から生きる幻想種であります。

その存在こそが、伝説でしかなかった吸血鬼や龍人などの幻想種が存在している可能性を示しています。

聞いたところによると、魔王様は蜘蛛に由来する幻想種なのか。

となれば、魔王様がお連れしてきたソフィア様も、幻想種である可能性も充分考えられます。

しかし、現実的に考えれば伝説に語られるような希少な存在である幻想種が、そう何人もいると考えにくいのも、また事実。

それに、幻想種らしき存在と言えるのは、他の人物のほうが可能性

が高いのですから。

結局、ソフィア様の真相はわかりません。

それを調べるのが私の役目ですが、動きを把握されている以上、下手なことはせずに気長に情報を引き出すしかないでしょう。

「失礼致しました。見回りにしているこの時間帯に、ソフィア様方はいつも起きていらっしやるようでしたので、気になりました」

「ええ。寝たい気分の時には寝るけれど、最近はそんな気分じゃないのよねえ」

おや、どうやら寝たい時には寝るようです。

しかし、ソフィア様が眠っていたとしても、もう一人は寝ないでしょう。

部屋の隅にて微動だにせず、こちらをジッと見つめてくるサエル様。

正真正銘、文字通りの意味での人形の身体を内部から動かしているお方です。

ここ数日の調査にて、わかったというか見せつけられまして、正体を把握しました。

サエル様、リエル様、フィエル様はパペットタラテクトという魔物のようです。

名前や背丈など特徴の共通点から、アエル様も同じ魔物でしょう。その正体は小さな蜘蛛の魔物で、目に映る少女の姿は擬態です。

人と見分けがつかないほど精巧に出来た人形を内部から操って動かしているようで、表情の変化などや僅かな手足の動きの違和感に気付かなければ、見分けるのは困難でしょう。

魔王様の眷属ということで、蜘蛛の魔物というのは納得するべき事柄であります。

しかし、正体がわかったからこそ、恐ろしくもあるのですが。

「ごめんなさいね。その子、一応私を護衛するのが任務だから。あなたみたいに信用が出来ない人には警戒を解かないのよ」

「こちらこそ、申し訳ありません。こんな夜更けに淑女の部屋に踏み入るのは常識外れでした」

はつきりと、信用できない、警戒していると告げられます。

これには、そう言われても仕方ないことでしよう。

警備上致し方無いとは言え、気配を消して夜な夜な巡回をしている人間のことを察知しているのであれば、気になるでしょうし警戒もする、至極当然の事です。

「私は公爵邸の警備のため、この時間帯に見回りをしております。今後もこの時間帯に通りがかりますが、どうかお気になさらぬようお願いいたします」

「ええ。あなたが妙な動きをしなれば、ね」

これ以上は、無駄に刺激するだけです。

下手な行動は逆効果だということが知れただけでも、よき成果だと思えます。

夜は睡眠を取るべきだと、少しばかりの忠告をして部屋を出る。

ソフィア様が夜中に何をしているのか存じませんが、もし見た目通りの年齢であるならば、成長のためにも睡眠を取るほうが良い筈です。

彼女たちが公爵家に仇なすならば覚悟を決めますが、そうでないならば敵認定されない範囲で調べることにしましょう。

次の部屋は、白様の客室です。

気配を探ってみると、白様は寝ているようですが、そのすぐ側で起きている気配があります。

しかもこちらに気付いたのか、客室の壁越しにこちらを見ているような体勢です。

その影は片手を真っ直ぐ頭上に伸ばして、こちらに向けて手を降った。

……完全に気付かれていますね。

ソフィア様だけでなくパペットタラテクトたちにも気付かれていますと再確認しながら、私は何事にも気付かなかったようにして白様の客室を通り過ぎる。

白様の客室には、先程の行動から考えるにフィエル様がおられたの

でしょう。

彼女は、なんとというか見た目通り子供っぽい気質のようで、ある意味とてもわかりやすいです。

対して白様についてですが、こちらは一番素性が知れません。

いつも瞼を閉じており、その瞳を見たことはありません。

そのため、服装も相まって全身白いとしか言えない印象を受けます。

魔王様がお連れした中で、メラゾフィス様に次いで年齢が上だと思えますが、こちらについても実年齢が見た目通りなのかわかりません。

花盛りのうら若き少女といった外見ですが、それより年齢が下に見える魔王様の例もありますし見た目の年齢があてになるとは言い難いです。

その白様ですが、報告によると食事の時間などから生活リズムは不規則のようで、部屋から出ることも稀のようです。

客室の入り口や窓に白い壁を作り室内に誰も入れないようにする徹底ぶり、内部の様子は給仕を担当している使用人たちにもわからないようです。

なので、接触する機会が一番低いお方でもあります。

……花摘みに部屋を出る姿さえ目撃した人がいない謎については、偶然と考えましょう。

姿などを隠せるスキルなどがあると考えるほうが自然でしょうし。

明確に此方との接触を避けている雰囲気もありますので。

最後は、コケ様の客室です。

この方が、最も人では無いことが感じ取れ、そして正体が一切わからない人です。

今夜何度目かの気配感知を行います。

すると客室の中に、数え切れないほど無数の気配が浮かび上がります。

その中心は窓際にいる人型の影で、そこだけ何千何万と数え切れな

いほどの気配が折り重なっているように見えます。

そして部屋の様々な場所にも、蝶あるいは蛾型か楕円の球体型のどちらかで、複数の気配を感知しました。

……相変わらず、得体のしれない異質な気配です。

まるで何かが寄り集まって少女の姿を取っているだけのよう、そんな異様で奇怪であるとしたか表現出来ないような気配を幾重にも纏う、ただの少女とはとても言えない人型のナニカ。

それが、このお方について最初に受けた印象です。

しかし、人影の気配は一つ？ まさか!?

「っ!」

悲鳴を上げなかったことを、自分で自分を褒めたいほどです。

突然、私のすぐ目の前に黒い何かが降ってきて、空中で静止しています。

手の平大の大きさの蜘蛛が、目と鼻の先に触れ合う寸前の距離にいたのです。

思わず反射的に一步下がり、そつと距離を取ります。

それに反応して、私の目では見えないほどの極細の糸を手繰り天井へと蜘蛛が登っていきます。

そして、天井には此方を虚ろな目で見つめ大きく口を開けたままのリエル様の姿がありました。

あれは人形、あれは人形っ!

少女の口から内部へと入り込もうとする蜘蛛や、首が逆方向に回転する瞬間など、そう自己暗示しないと不気味でしょうがない光景が続きます。

そのことに、脳では理解していても生理的に抑えられない怖気と戦っていると声が聞こえた。

「リエルちゃん、そこまで。戻ってきて」

その声が扉の向こうから響くと、リエル様は瞬時に身体の状態を元に戻して客室の中へと入っていききました。

「すみません、驚かせたみたいで」

客室から無数の気配を周囲に纏いつつ、コケ様が現れる。

そのお姿は、帽子こそ被っていないものの、普段のローブ姿だった。「いえ、お気遣いなく……」

前日も前々日にも、リエル様は夜中にこの場所を通り掛かるたびに現れては、毎回意図や意味のわからない行動をしてくるのです。

そのため毎回心臓に悪いですが、多少は経験済みなので耐性が出来ていると信じています。

「……顔色が悪いです。少し休んでいきませんか？ 元はそちらのですが、お茶でも淹れますよ」

……これは、チャンスかもしれません。

向こうから誘われたのであれば、自然と話を聞き出せるのかもしれない。

「どうぞ、こちらへ。リエルちゃんには後で言っておきます」

誘われるまま、客室へと足を踏み入れる。

客室内に入るとリエル様の視線と共に、無数の視線が部屋中から向けられたのを感じた。

「……っ」

全方向から見られているような感覚に、背筋から冷たい汗が流れたような気がします。

「みんな——」

瞬間、視線の圧が急激に減りました。

幾らかは私を見ているようでしたが、それでもさつき迄とは格段に数が減ったように思えます。

「大丈夫ですか？ いままで余計に体調を悪くしたら、ごめんなさい」「……大丈夫です」

この程度の体調の悪さなど、この機会を逃すことに比べれば、どうということもありません。

「《光よ——》、《来たれ、手元へ——》、《水よ——》、《熱せよ——》」

コケ様が短く言葉を発すると、部屋の天井付近に淡い光の光球が浮かび室内をボンヤリと照らしだした。

そして、部屋の棚に仕舞われていたティーカップなどの食器類やティーキャディなどが独りでに浮かんで窓際のテーブル席に並んで

いき、置かれたティーポッドから湯気が立ち上った。

これは……、魔法でしょうか？ 見たことも聞いたことも無い発動方法です。

「さて、おもてなしは初めてだけど、淹れてみようかな……」

「失礼、少々口を挟んでもよろしいですか」

差し出がましいとは思いますが、淹れ方についてレクチャーを交えながら指導する。

水の温度、容器の温度、入れる量について、蒸らし時間、注ぎ方など、基本中の基本とも言えることを説明しながら、すぐ実践させて淹れさせていく。

これも執事として表側の仕事で必要になる技能ですからね。

わたくしでも教導することが出来る程度には、造詣が深いと自負します。

そして――

「おいしい……」

「それは何よりです」

私たちはテーブルに向かい合って座り、お茶を口に運んでいた。

私の指導に対してコケ様の物覚えが良く、打てば響くような上達速度で良くなっていくものですから、少々熱が入ってしまいました。

そのおかげで、それなりに合格点を上げられるような、上々のお茶が入りました。

「調子も戻ったようで、良かったです」

「おっと」

目的を忘れて熱中していたようです。

反省せねばなりませんね。

「少し質問しても、よろしいですか？」

「はい、どうぞ」

いきなり切り込むのは良くないでしょう……、では。

「こちらでの生活は、いかがですか？」

「とても快適です。今まで旅の空でしたので、それと比べたら当然ですけどね」

ふむ、なるほど当然ですね、であるなら――

「いつから旅を？」

「うーん……、数年も前からと。アリエルさんに拾われてここまで来た形です」

「そうですか」

これ以上詳しく聞くと怪しまれるでしょうか？　なんにせよ魔王様が魔族領に不在中に彼女らを集めたのは間違いなさそうです。

「では何かご不満な点などは、ございますか」

「私としては………。あつ、そうだ。窓から見える庭についてなんですが、手を加えてもいいでしょうか？」

「それは……」

少々即答しかねる質問ですね。

「しかし、何のために？」

「ここにいる、みんなのためにも自由に過ごせる場所が外にもあると、嬉しいなと思ひまして」

そう言つてコケ様は部屋のいたるところに視線を向ける。

その先には、あの小さな気配がいた。

「無知を承知で伺いますが、あれらはコケダマ種でしょうか？」

「……そうですね、そうなると思ひます」

図鑑でしか見たことがありませんが、深い緑色の楕円の球体はコケダマ種と呼ばれる魔物の特徴と酷似しているように見える。

人族領の木々の多い森とかに生息している魔物らしいですが、魔の山脈に阻まれてか魔族領には全く生息していない魔物です。

しかし、それではわからない魔物が、もう一つ。

「こちらのは？」

「……こつちも元はコケダマ種で、成虫に羽化するとこの姿になります」

少々間があったが、コケ様は質問に答える。

ふむ、少し誤魔化していますが、概ね真実を話していらつしやるのでしょうか。

しかし、コケダマ種は弱い魔物と言われていて、進化した姿など記

録に無いのですが。

「それなりに素直に開示したので、庭についても色良い返事がもらえる」と嬉しいのですけど」

「おや、それはどういうことでしょうか？」

探っていたことに、気付いていたようです。

「ここまででしょうかね。」

「んー……。腹芸は難しくて面倒だと感じますね。そう思いませんか？」

「それは同感ですな。ですが、そもいかなのが大人の世界というものです」

私は席を立つ。

そして一礼して部屋を去ることにした。

「ティーカップなど新しいのをお持ちしましょうか？」

「いえ、お気持ちだけ。……そうですね、忘れないうちに、もう一度淹れてみようと思うので」

「畏まりました」

そして客室から退室して扉を閉めようとした時、隙間からコケ様の姿を確認すると、その足元の影が龍を形取り鋭い眼光で睨みつけているのを認識してしまいました。

魂を鷲掴みされたような恐怖が全身を突き抜け、恥も外聞もなく逃げ出したい衝動を何とか押し殺して、そつと扉を閉めました。

あれと目があつた瞬間、生きた心地が致しませんでした。

やはり彼女も本質は、人では到底理解出来ない範疇の存在なのでしよう。

いつの日か、気まぐれに殺されるかもしれない。

それは彼女たちと付き合っていく上で、いつまでも危惧しつづけることでしょうか。

とりあえず今夜は無事乗り切れました。

バルト様には、ありのまま報告すると致しましょう。

「よくやった爺や。だが、なあ……」

「何でしょう、バルト様？」

「爺やの報告書なんだが、途中からホラー小説か何かにか見えないのでが？」

「奇遇ですな。私も書いてて同じような気分でした」

「……そうか」

「メント、さつき睨んで脅かしてたよね？ それはダメなことだよ」

「クルアアア……」

「もうちよつと我慢してね。庭を使えるようになったら出してあげるから」

「クルアツ！」

「しーっ。夜中だから静かにね」

36 つかの間の休息

久々の、ゆったりとした時間。

魔族領に来るまでの旅路では、こうしてゆっくり腰を落ち着けるタイムニングなんて殆ど無かったので、肉体的にも精神的にもリラックスした日々を過ごしていた。

まあ、平穩ではあつたけれど静かであつたとは、決して言えないものだつたのですが……

ここで寝泊まりするようになってから数日後のお昼頃、急に部屋の外が騒がしくなった。

そのときの私は、扱い方が変化した魔術の制御訓練と、今までずっと私の魂と深く同化していたコケダマ達みんなを外に出せるようになっていたので、部屋の中なら自由に出てきてもいいよと、そうお願いして皆と過ごしていた。

コケダマ達のことなのだけれど、神化したときに複数の魂が融合して一つになっていたのが結構沢山おり、元々エルロー大迷宮に居たときの総数と比べると全体の四分の一以下になっていたのに気付いた。

これには非常に驚きが走り、やっぱり神化してからの数年間みんなのことを、全然何も見えていなかったと深く深く落ち込んだ。

けれど、コケダマ達みんなから励ましてもらつたり、融合したといつても記憶や意識なども引き継いでいるので、実質ほとんど変わっていないというのもあり前向きに捉える事とし、改めて向き合つた。

その彼ら彼女らなのだけれど、決まつた固定の姿というものは無いらしく気分で自由に姿を変化させられるので、精神世界でも外に出ている時でも必要に合わせて、身体の大きさとか形態とかを調整出来るみたいである。

個々で好みもあるので大体は特定の形態を維持しているけれど、サイズとかを抜きにした場合、コケダマ形態、翅持ちのコケダマ形態、魔蛾形態、そして妖精形態のどれかを形どる模様。

妖精形態とは何？と思うけれど、これはマステマのときの私の姿がそのまま小さくなったような形態と思ってくれるのが、一番わかりや

すいと思う。

いくらか顔付きなどが違っているの、そのまま私をコピーした姿とかでは無いんだろうけど、何とも言えない気恥ずかしさが湧くので人前ではその姿で外に出ないで欲しいと、みんなにお願いしていた。されど、そんな誤魔化しも延々と先延ばしには出来ないだろうから、やがては何かしら次の対応を考えなければならぬかも……

ただ唯一の例外なのが、メントを筆頭とした複数のコケダマたちと旗杖が融合した翠龍だった。

以前白ちゃんを助けた翠色のドラゴンとはこの子のことで、旅の途中で新たに生まれたコケダマたちから私が纏う苔を分け与えた子たちが中心となって旗杖を核の一つに融合したらしい。

中核となっている意識からこの子のことはメントと呼ぶとして――

このメントだけは、姿が固定されているので出てくる時にも五メートルほどの大きさまでにしかなさくならず、いくら広い客室と言っても翠龍の身体では窮屈だし調度品とか壊してしまう可能性がある。

なので、部屋の外にある庭を使わせてもらえないか、執事長さんと交渉したりもしていた。

普段メントは龍形態だけど旗杖として武器の姿にもなれるらしく、質量とか構造とかは全くの謎でしかないけれど、肉体が圧縮されて旗杖になった時にも意識はあるらしい。

一応旗杖の翅部分を使い飛ぶことが出来るらしいけど、それは非常時の緊急手段としてなので、私が武器として使うとき以外は旗杖形態にはなりたくないらしい。

それにしても、コケダマ形態を好むのは長く生きたコケダマたちで、魔蛾形態や妖精形態を好むのは生まれたての若いあるいは幼いほうのコケダマたちが多いのは、やっぱり自己認識が強く影響されるかなのかな。

そして魔術について。

あの日に起きた精神世界深層での一件から、不思議なことに自由に

扱えるようになっていた。

ただ、自由に使えるようになったと言っても、ほんのちよつとしたことで勝手に魔術が発動しかねない不安定な状態になった、というのが正解なのだけれど。

以前魔術が使えなかったのは、構築しようとしても時間が掛かり途中で霧散してしまうからで、そのため非常に単純な魔術しか扱えなかった。

その問題を解決したのが、常時術式の欠片を分担して内側に展開しているという方法だった。

ある意味コケダマたちみんなが並列意思の代わりで、あらゆる魔術に対応出来るように術式の基を常に用意しておくことで、重要な構築の段階が最初から終わっているの。後は必要な要素だけを接続して組み合わせるだけになり、発動速度に関しては恐ろしいほど高速化した。

これが出来るようになったのは、ちゃんとコケダマたちと向き合つて心を通わせ、真実みんなと魂を共有するようになったから。

つまり神化した頃の頃は、私一人分の神に満たないスペックの魂だけで魔術を使おうと四苦八苦していた訳で、この今の状態こそが私という神本来のスペックだったという訳になる。

例えるなら、周囲に広い机や電卓などの便利なツールがあるのに、ちっちゃな机でペンもノートも無しに暗算を繰り返していた、ということになるのかもしれない。

まあ、そのときの経験が魔術を接続させる作業を高速化させているので、まったくの無駄だった訳じゃないんだと、そう思いたいな。

その代わりに、簡単な魔術だと無意識に発動してしまう事になったのは、ある種当然の帰結なのかもしれない。

常に術式が用意してあつて維持し続けているので、明かりが欲しいとか思うと勝手にエネルギーを消費して魔術の光球を作ってしまうので、それを制御するためにも意識の切り替えを行う何かが必要だった。

それが、詠唱を交えた自己暗示による魔術の発動方法である。

あえてキーワードを設定しておくことで必要ない時に暴発することを防ぎ、エネルギーを不用意に無駄遣いしないように、練習に練習を重ねていた。

もちろん詠唱なんかしなくても魔術は発動可能だし、身体強化などは常時維持しているように、必要に合わせて方法を使い分けている。転移とかなど難しい魔術になると意識していても発動が大変なので、逆にワンセットに構築手順を纏めて、それを詠唱で呼び起こす自己暗示を組む方が発動が簡単になるかもしれない。

そういった、個別のやり方や適したやり方の模索は、多分ずっと続くことになるだろう。

現時点でのエネルギーの回復手段が、私たちみんなの魂から溢れた余剰分を回収する以外に方法が無い事もあって、貯蓄は出来るだけ節約するに越したことはない。

本来ならば、神格は星のエネルギーを集めて使用するので、多少の消費なんてあまり気にしないのだろう。

けれど、システムに管理されているこの星では、星から直接的にエネルギーを集めることなど、状況的にも心情的にも出来やしないので。

……太陽とか別の星から、エネルギーを集めることは出来ないのかな？

まるで太陽光発電や光合成のように。

あと得意な魔術も私と白ちゃんではまるつきり違うようで、私の場合は外道属性と呼ばれていた魂に干渉する魔術が、白ちゃんの場合だと空間と闇それに腐蝕属性の魔術が、意識せずとも簡単に構築出来る魔術になるらしい。

それ以外の魔術に関しては術式をちゃんと知っていれば使えるけれど、難易度が格段に変わってくるので、私だと闇魔法とかは使えないし、白ちゃんだと外道魔法の再現なんて不可能みたい。

他に私が得意そうな魔術だと土と水に関する魔術や、何故かはわからないけれど腐蝕もギリギリ使えるかもしれない。

非常に危険だから、腐蝕属性を扱うのは安全策を何重にも準備して

から練習しよう……

まあ、それはそれとして——脱線した話を戻そう。

この公爵邸にお世話になってから数週間が経過し、その間にあった大きな出来事といえば、まずこの当主であるバルト卿の弟である、ブロウが襲来したことだろう。

なんで敬称を付けないのかは、まあこれから説明する内容で追々理解してもらおうとして——

急に部屋の外が騒がしくなつて何事かと確認しに行くと、白ちゃんの客室の扉が大きく開け放たれていて、入り口を塞いでいた糸の壁が燃え尽きていた。

それをやった犯人がブロウらしく、私が部屋の外に出た瞬間が、そのブロウがメイドさんたちに連行されていく光景の時だった。

その時は執事長が深く頭を下げて謝罪することで一先ず騒ぎが治まったのだけど、それから何日か置きにブロウが、白ちゃん目当てで会いに来るようになった。

その時々で何かしらの贈り物を白ちゃんへ持つてくるけれど、その大半は私とソフィアちゃんやんでシャツアウトして、ブロウ本人はお帰りいただくよう追い返すのが日常になった。

私たちが結構強引に追い返したり白ちゃんからも一切相手にされていないというのに、それでもめげずに何度も何度もやって来るブロウには、一周回って逆に尊敬するけど。

他には、アリエルさんが指示して公爵家が手配したのだろう座学やマナーの教師から、ソフィアちゃんたちと一緒に勉強会や教養の訓練とかもしたりした。

ブロウが糸の壁を破壊したことが、結果的に白ちゃんを部屋から引き釣り出す切っ掛けとなり、私とソフィアちゃんに引き摺られるようにして、嫌々でも勉強会に参加させるようにした。

本気で嫌な時は白ちゃんお得意の転移で逃げるけれど、そうでない時は生活習慣の改善も兼ねて引っ張つても強制参加させた。

白ちゃんとしては必要なければ怠けたいんだろうけど、私としてはマナーとかダンスって興味を惹かれるし楽しんで勉強しているから、スタンスが相容れないのはわかっているんだけどね……

白ちゃんの部屋が解放されてからは誰かの部屋に集まってお茶会することが恒例となり、今日も全員集まって午後のティータイムを行っている時に、珍しい人物がやってきた。

「頼みたいことがある」

空間転移で室内に直接やって来たのは、荒野での大騒動で神へと至った時以来、顔を合わせる事が無かったギユリエさんだった。

今日はパペットたちシスターズが給仕をしていて、白ちゃんが固まっている間にフィエルちゃんが椅子を用意し、リエルちゃんがお茶を注いで、サエルちゃんはオロオロしていた。

白ちゃんとサエルちゃんについては、いつものことなのでギユリエさんが席についたところで、私はお菓子を差し出しつつ話を切り出した。

「頼みとは何ですか？」

優雅にお茶を飲むギユリエさんは一口含んで飲み込み、ゆっくりと口を開いた。

「頼みというのは他でもない。君らが魔の山脈で遭遇した転生者。……彼を、止めて欲しい」

「詳しいオハナシを伺いましょうか?」

やたら乗り気で物騒な光を瞳に灯しながら、ソフィアちゃんがギユリエさんに続きを促す。

一瞬ギユリエさんが視線を彷徨わせると、安堵したような雰囲気です小さく呟くのが聞こえた。

「……………これならば、許容範囲ということ、か」

何も感知出来なかったけれど、もしかしたら今の瞬間Dさんの干渉

があつたのかもしれない。

常には無いらしいけど、この世界のことを自由に見聞きしているらしいので、このお茶会にも用件があれば、またスマホが突如現れるのだろう。

そしてギユリエさんが幻術の魔術を使い空中に映像を浮かべて、魔の山脈を映した俯瞰図を表示させると、それを使って説明し始めた。「君らと交戦した後、彼は魔の山脈を彷徨った後に、この地へと辿り着いた」

ギユリエさんが示したのは、半円状をしていた魔の山脈に半分囲まれて残りは海岸と、人族領域にも魔族領にも属していないような空白地帯とも言える場所だった。

「この地は……、私が目意した、魂の休息所だ」

うん？ 気になる単語が。

「言葉が足りなかったな。システムによるエネルギーの回収方法は知っているな？ あれは確かに効率だけ見れば画期的だが、……問題が無い訳ではない。……それが、魂の経年劣化だ」

ギユリエさんが顔を顰めながら言う。

この話を理解出来たのは私と白ちゃんだけで、それがどれほど深刻な問題なのか予想がついた私は思い悩んだ。

システム内の魂は転生者を例外として、この星から出ていくことも入ってくることも無い。

そして死ねばシステムに育てたステータスやスキルなどを徴収されて魂が削られていく。

それが繰り返される訳だから、禁忌のログからシステム稼働から何年経っているかも考えると、酷使された魂のいくつかは崩壊寸前あるいは崩壊した魂もあるかもしれない。

世界の循環に乗って新たな生命として誕生することも無い、無に融け消える完全な消滅。

それを回避するための場所が、この休息所と呼ばれる場所なのだろう。

けど、結局は時間を掛けて自然治癒に任せるだけの対症療法なわけ

で、根本的には……

……もしかしたら。

「……今の言葉だけで理解したか。話が早くて助かる」

ギユリエさんは本当は隠したかったとも言いたそうな、あまり歓迎していない雰囲気を漂わせているけれど、私はもしかしたら力になれるかもしれないという気持ちと、アリエルさん魔王陣営側に居る立場としてはどう動くべきなのか、板挟みの気持ちに悩んでいた。

それにしても、この俯瞰図に映っている街や村の影からすると、相当な人数がこの場所で暮らしていることがわかり、それだけこの世界が危機に瀕しているのが明確に現れていた。

「この地にいる人々はその殆どが戦えない。そこに、憤怒のスキルで正気を失った彼が到着すればどうなるか。……わかるな？」

傷も癒えないままシステムの転生が行われれば、今度こそ消滅しかねない。

それを阻止したいと、ギユリエさんは頭を下げてでも私たちにお願いに来たのだろう。

彼本人が動かない理由については……

「私はDとの約定により、転生者に手を出すことが出来ない。しかし、この事態を放置することもまたよしとはしない。君らに頼むのは、私の代わりに彼を止めることだ」

やっぱり。

少ししか話した事がないけれど、なんとなくでわかる範囲から考えれば、Dさんの好みは物語性のある展開が繰り広げられる事で、強大な力を持ったギユリエさんが一方的に終わらせる展開は、NGという事なんでしょう。

なんだっけ……。いわゆるチート物って感じの力量差だとダメで、強さが伯仲する展開ならアリという感じなのかな？

「受けてくれるだろうか？」

けど、それなら私と白ちゃん両方が動くのはNG判定が出そうだけど、どうなんでしょう……

「もちろんよー！」

私たちが悩んでいる間に、ソフィアちゃんが先に答える。

最近戦う機会が減っていたから身体を持って余して戦闘意欲がかなり高まっていたソフィアちゃんが食い気味にギユリエさんへと身を乗り出していた。

それには白ちゃんも反対では無いようで、それなら私としても参加せざるを得なかった。

「助かる。では、早速だがこれから向かおうと思う。準備はいいか？」
すぐ出発することに、ソフィアちゃんと私が驚きの声を上げる。

「ああ、出来るだけ急ぎたい。現地まで私が転移で送るし、帰りも同様なので旅道具も必要無い。戦闘に必要な物だけを用意して欲しい。準備ができ次第、出発する」

そうして、ギユリエさんがDの意向に配慮した結果パペットたちを留守番に残して、私たち三人は魔の山脈の空白地帯へと向かったのだった。

鬼2 黒鉄縄抱刀解受苦処

以前の緑豊かな森と営みが感じられた村の民家などが見る影もなく荒れ果てた荒野で、わざわざ山脈から降りて僕を追いかけてきたらしいドラゴンを迎え撃つ。

ドラゴンが発生させたのだろう吹雪で建物が凍りつき、僕が操っている炎と雷の周囲だけ消し炭となって焼け落ちる。

堅い相手には弱いところを突くべしと、皮膜を斬り裂いて飛べなくし、ドラゴンの口に炸裂剣を飲み込ませて着実に負傷を与えて血を流させていく。

そしてついに、全身傷だらけになって動きが停止したドラゴンに対して止めを刺そうとした時、僕の目の前に誰かが立ち塞がった。

小さな女の子、深緑の少女、白い少女。

まあ、誰でもいいか。

生きるために、邪魔なモノは全部ナニモカモ排除スルだけだ……

その顔に見覚えがあっても、鬼人は止まらない。

ただ猛り狂い沸騰する憤怒のまま、今認識した人型へと刀を振るうだけだった。

まずは——、最も気味が悪い気配からだ。

「——シィッ！」

中心にいた深緑の少女へと一瞬で距離を詰めて、業火を纏わせた刀を叩きつける。

左右を別の少女で塞がれ、反応が一拍遅れた相手の肩口へと刀が喰い込む。

「うぐッ!?!」

そして刀が半ばまで通ったところで、炎刀に魔力を込めて内側から火葬の華を咲かせる。

「きやあああ、あ、あ、あああああッツ!?!」

だが——

——手応えが無い?

た。

罅割れた大地から、爆炎が噴出する。

その噴火の如き灼熱は糸を瞬時に焼き尽くし、周囲一帯を資格無き存在が踏み入ることを拒絶し灰と炭へと焼却させる領域へと変じさせる。

突き刺した炎刀から手を離す。

マグマのようになった大地から刀を引き抜いても地獄は維持されるが、核としてその場に残しておいたほうが、効果が高い。

それに――、かの剣神の技は刀一本の方が、やり易い。

ただ斬り殺す、それだけを憤怒に乗せて放出し、刃は冷たく無心のまま振るう。

雷の魔刀のみを手に、熱波を裂きながら再び現れた小さな少女と斬り結ぶ。

「ちいッ！ やり辛いッ……!!」

周囲には殺意と憤怒が満ちている。

けれど僕が振るう刃には、それが無い。

見当違いな所に注意が逸れ、反応が遅れる小さな少女へと魔刀が吸い込まれるように命中する。

しかし、雷電の刀身がその身を両断することは出来なかった。

服が斬れない……、あの糸と同じか。

この少女は冷気を纏っている、燃やすのも簡単では無いだろう……なら。

服で守られていない部位を狙って刃で斬りつけるものの、肌に浮かんだ鱗のようなもので守られ浅くしか斬り裂けない。

しかも相手の体重が軽いものだから斬撃を当てても吹き飛んでしまい、刃が深くまで喰い込まず水のように逃げられてしまう。

「あー！ もうっ！ チクチク、チクチク……痛いじゃない！ このッ！」

なかなか決着がつかないが、この小さな少女の脅威度は其処まで高くない。

血のような紅い液体を操って攻撃してくるけれど、その大半が地獄

の釜の底ともいうべき環境によって蒸発していくので、僕の身体に届くことは少ない。

触れば肌や刀が溶けるけれど、それなら接触しなければいいだけの事だ。

なら、他の存在はどうだ？

白い少女は少し離れた位置から、こちらの様子を伺っている。

変質した地面との境界ギリギリまで近づき、それ以上は踏み入ってこない。

火に耐性が無いのか、それとも何か準備をしているのか……

深緑の少女は止め寸前まで追い込んだドラゴンを、黒い鎧を着た男と共に治療していた。

初手の一撃が思いの外効いていたのか青白い顔で荒く呼吸をしており、左腕はダラリと脱力したまま動かすことが無い。

新たに現れた黒い鎧の男が何者なのかわからないが、こちらに加勢する気は無いようだ。

傍目に見れば鍛え上げられた肉体を持つだけの普通の男だが、本能が彼を危険だと到底敵わないような存在であると煩く叫んでいた。

そちらに関しては注意を払いつつも動きがあるまで放置することを決め、まずは目の前の小さな少女を斬ることを優先して戦闘を続行する。

この少女を片付ければ、次は――

何をすれば最短で詰ませられるかを計算しながら刀を振るい徐々に追い込み始めたその時、白い少女の口からボソリと音が呟かれた。

「……上に、跳べ」

その声に危機感を憶え、念力で炎刀を回収しつつ小さな少女と共に上空へと跳び上がる。

次の瞬間には、超高熱を内包していた大地が数メートル単位でゴツソリ抉り取られ、何処までも均一で水平な底面をしている、非常に不自然な隕石痕が出現した。

「死にいいねえええっ！」

空を蹴って斬り掛かってきた小さな少女を両手に持ち直した刀で

受け止めるものの、踏ん張りの利かない空中では勢いを受け流すことも出来ず、剥き出しの岩盤へと墜落した。

「ガアアツ!」

背から全身へと伝播した衝撃で肺の空気が押し出され、呻きが漏れる。

熱せられた大気で未だに周囲は高温を保っているけど、先程までの問答無用で蒸発させるような圧倒的熱量は跡形もなく、この場所から消失していた。

——ヤラレタ。

それと同時に、これまで受けた屈辱と鬱憤を晴らすかのように、噎せ返るような濃い血の匂いを漂わせた津波が襲いかかってきた。

雷炎を叩きつけて散らそうとするが先程までとは別物と言っている体積によつて、消し飛ばして蒸発させても次から次へと隙間無く空間を埋め尽くすかのように迫ってくる。

蠢く触手のように、朱い海は形状を変化させる。

触れれば溶け落ちる強酸が一瞬の内に伸縮して槍となり剣山となり、薙ぎ払いの軌道を描く一撃は鞭のよう。

それが前方と左右から間断なく襲来するのだから、堪ったものじゃない。

唯一後方から朱い液体が来ることは無いとは言え、砕けて撒き散らされた飛沫が肌に触れれば、その皮膚と肉を凍てつかせて爛れ溶かす。

一気に形勢が逆転して小さな少女が優勢となり、少女は気炎と血を滾らせた。

「ほらほらアツ! さっきまでの威勢はどうしたのよおツ!? 死ね! 死んじやええツツ!!」

大剣を振るうと同時に朱海を纏いながら苛烈に連撃を行う小さな少女の攻勢に、避けることだけで精一杯となる僕。

反撃しようにも強酸の血を纏っていることから、無策で突撃すれば返り討ちに遭う。

また1つ避け損なった液体が肌に貼り付き、煙を上げて内側の肉ま

で焼こうとする。

それを放置すれば、鮮血色の氷塊となつて延々と肉体を溶かそうとしてくるので、凍りつく前に肉ごと焼いて蒸発させる。

酸と氷で焼かれるよりも、自らの火で炙ったほうが傷は浅い。

そのことが無意識の内に脳裏に浮かび上がり理解することで、常に最適解を選択し続ける。

一斉に押し寄せる朱の津波から、ほんの一瞬生まれた隙間に身体を潜り込ませて回避する。

避けきれない飛沫は炎刀が放つ灼熱の結界にて消し散らし、触れさせない。

——次デ、決メル。

敢えて使わず温存しておいた技力を爆発的に消費して肉体性能を引き上げる技を、何の前触れもなく発動させる。

急に動きの速度が変わったことで、虚を衝かれた小さな少女へと肉薄する。

朱い防壁を力技で貫通させ、最短距離で詰め寄り刀を振るう。

「——シッ」

「あがあッ!？」

右手の刀は朱海を穿った勢いのまま突きを放ち、深々と胴体へ刀身が突き刺さった。

そのまま片足を胴体に向けて蹴り込み、勢いと体重を乗せて刀を引き抜くついでに吹き飛ばす。

そして地面を転がって動きが止まった瞬間、左手の刀は今まさに刃先を地に滑らせるようにして斜め下から斬り上げる軌跡を描きながら、その細い首を飛ばすべく閃光を走らせる。

——しかし、雷鳴瞬く魔刀が首飛ばしを実現することは無かった。

白刃が空を斬る。

確かに目測違わず斬り掛かったはずだが、その場には誰もいない。空振った雷刀が紫電を撒き散らして一直線に突き進むが、その先にも誰もいない。

「う……、ぐっ……、あれ？ え？」

この魔刀では勢いを殺すことも、宙に浮かぶことすら出来ない。ならどうするか、その答えは轟雷となつて怒槌イカツチが大地へと墜ちたことで示された。

耳が痛いほどの爆音と共に地面が爆ぜる。

その衝撃波は、空中にいた鬼人の身体をも浮き上がらせるほどで、この瞬間一時だけ速度が無となり、その間に体勢を整えて新たな陥没痕が生じた地へと土煙を巻き上げながら着地した。

「——シィイ」

滾る憤怒が、擦過音を立てて口から漏れる。

まだまだ、まだ終わっていないと、激情が唸りを上げて内面にて燃え盛り爆発する。

そして粉塵によつて塞がれた向こう側を見通すべく、邪魔な土埃を吹き飛ばそうと刀を振るい、白い少女の鮮やかな紅色の瞳と視線が合った。

「……終わり」

刀を振り切つた体勢で直ぐには動けないその僅かな隙に、白い少女の眼が妖しく輝く。

「——ッ!?!」

両手両足が全て、巨大な歯車に押し潰されたかのように振り切られる。

咄嗟に指先で弾いたことによつて二本とも刀は無事だが、肩や太腿など根本から潰されたことで、支えを失つた身体は地に伏し身動き一つ取れなくなつてしまつた。

両腕と両足が欠損したことによつて、それと繋がっていた太い血管が剥き出しとなり、噴き出す血液が瞬く間に血の池を作り出して、急速に僕の意識を刈り取っていく。

溢れる血を止めようにも、これまでの戦いで気力も何もかも出し尽くしていた肉体は、僅かな傷さえ塞ぐことすら出来ない状態だった。

満身創痍、もはや此処まで、死在るのみ——

だが……、これでようやく眠れると、心の何処かで安堵する僕が居た。

これも因果かと、自嘲する。

誰かを傷つけ誰かを殺すことしか出来ない僕は、その宿命に縛られたまま最期は誰かに殺されるのがお似合いだと、何も変われなかった自分を嘲笑いながら全て無意味だったと謳いながら地獄に堕ちる。

そして溶けるように意識が闇へと消える瞬間、柔らかな光と共に澄んだ声が耳に届いた。

「死なせない……、憤怒は私が……する……、だから……〈光在れ―
―〉」

ああ、何故だろう。

これで狂った悪夢は終わりだと、もう悲憤に呪われることも無いのだと――

そう思えるような暖かい安らぎが僕を包み込み、そして深い微睡眠へと沈んでいった。

37 次なる目標

縦長の大きな窓から陽射しが入り、室内を明るく照らしている。天井にも精緻な装飾が施されているのを見上げながら、私は豪華な作りのベッドに伏せつたまま横になり、酷い倦怠感と靄がかかるような頭痛にうなされ一人寝込んでいた。

前回の戦闘は、迂闊としか言い様のない醜態だった……

打撃や斬撃などが効かない身体構造の特異性に甘えて、それなりの強化しか施さずに戦場に出てしまった砂糖よりも蜜よりも甘すぎる油断により、手酷くしっぺ返しを食らってしまった。

いくら刃物などで物理的に斬られたり砕かれようとも、一欠片すら痛くも痒くもない。

とはいえ旅の途中にて魔の山脈で全身が凍ったように、身体全体に作用する攻撃ではダイレクトに影響を受けることを、攻撃を受け激痛に打ちのめされたその時まで完全に失認していた。

そのため、肉体丸ごと燃やすような爆炎を受けたことで久しく感じていなかった激痛が肩口から走り、真っ先に戦場から脱落して戦えなくなってしまったのが、あの戦いでの一部始終だった。

痛み自体は攻撃を受けた次の瞬間には消え去り、千切れた左腕も高速で再構築されたので、実質ほんの少しエネルギーを失っただけで尾を引く悪い影響は何も無くてすんだ。

だけど、それでも痛みのショックから完全に復帰するまでには、戦闘が全部終了してしまう程の時間が過ぎてしまったのだった。

結局あの戦いで出来たことと言えば、後方に下がり自分自身の回復に努めるのとギユリエさんと一緒に氷龍の長ニアを治療する事しかしていないので、戦闘自体には何の役にも立てていない。

一応何もしなかった訳ではなく、戦いが終わった後。

魂に関連する案件として、奥深く根付いていた憤怒スキルの分離と汚染除去、そして封印処置は私が行った。

けれどそれも簡単とは言えず完全に取り除くと魂の崩壊に繋がるので、精神汚染が酷く進行している部分は周囲と軽く馴染ませるだけ

に留め、これ以上他に汚染が広がらないように憤怒の術式がある魂の表層だけ隔離させる形で、なんとか封印を施せた。

いつの間にかソフィアちゃんが嫉妬というスキル封印に特化した支配者スキルを獲得していて、そちらでも憤怒のスキルは封じられるけれど嫉妬自体にも精神汚染のリスクがある。

憤怒を封印し続けるということは嫉妬が常時使用され続けるということでもあるので、精神汚染の悪影響が引き起こされるのを懸念して、スキルの封印は私の役目だと多少強引にでも引き受けて実行した。

その諸々の代償として今こうして寝込んでいるのだから、さすがに無茶をしすぎたかもと、今になって大いに反省しているのだけれど……

ほとんど感覚的に魔術を発動し続け、自分でもどうやったのか完璧には把握出来ていない。

それでも、結果的に悪影響などは一切出ない形で憤怒の封印することに成功している。

けれど、やっぱり魂に干渉する魔術の負担は大きく、ほぼ未知の術式を一から手探りで組み続け脳が焼き切れそうなほど酷使したことにより、代償として甚大な疲労感に襲われていた。

……気怠い、……しんどい、………寂しいな。
そろそろ止めよう。

思考がメチャクチャで、上手く考えが纏まっているのか自信が持てない状態だと自分でも思う。

横向きになって枕に顔を埋める。

瞼の裏側に浮かぶのは、前世の記憶。

この世界に転生してから何年が経っただろう。

一日の時間や一年の日数などが前世と此方では若干違う以上、多少ズレはあるだろうけど、既にもう五年以上は経過している。

それだけの時間、向こうも同じように時間が流れていたら？

高校以前の別の学校へ行った友達とかは、すでに成人式などを迎え

ているだろう。

私の知らない流行やブームなどがあって、新しい何かが生まれているのかもしれない。

そして……一人取り残されたお母さんは、どうしているのだろうか。体調を崩していないかな、心を病んではないかな、病気にはなっていないだろうか……

一人で、大丈夫なのか……

煩悶が胸裡をぐるぐる巡る。

わりとマザコンだと言われても仕方ないと、自分でも思っている。

一杯迷惑を掛けて一杯お手伝いもして、あのマンションにて二人支え合って暮らしてきたから、正しく気持ちを言葉にするのは難しいけれどお母さんの事は、とつても大好きだったから。

お母さんの過去はあんまり詳しくは教えてもらっていないけど、ちよつとは知っている。

その中には私の父親についての話もあって、能力的には凄い人だとしても人格面ではクズとしか言いようのない男だと思つたのを憶えている。

女の敵だと言えるような好色な男で、お母さん以外にも複数の関係を持つていたらしく――

だからこそ私の嫌いな男性像というものが、人を喰い物にするような、相手を尊重せず物か何かだと思つているような存在が、心の底から大嫌いである。

魔の山脈麓の街で出会つた酔っぱらいの冒険者に苛立つたのは、この価値観のため。

そして出会つた初期からポティマスに対して深い憎悪と殺意を抱いたのも、この考えが無意識に警鐘を鳴らしていたからだと思う。

それにしてもアリエルさんからポティマスの所業などを聞く前から、ケレン領で一目見た時から強い殺意が湧き上がっていたので、この深々と重すぎる憎しみは強欲を獲得した初代の人が抱いた恨みつらみの感情なのかも。

――アイツが憎い、こんな身体にしたアイツが憎い、この世界を壊

したアイツが憎い。

私の、私達の大切な……■■■■様の覚悟を利用しようとしたアイツが憎い。

今なら思い出せる、自分を染め上げようとしてきた、悲痛なまでの感情と記憶。

この嘆きに塗り潰されて何もかも忘れてしまう。

それこそが——強欲の精神汚染。

二度とは元には戻らないと泣きながらも、それが救いになると信じて身も心も魂さえも擦り切れようとも、諸悪の元凶を滅ぼそうと死ぬまで探し続けた人の一生。

胸が、ずきりと痛む——

この人の最期は、抜け落ちてしまう記憶の中でも消えず残った憎しみと、ある人への感謝だけを心にずっと抱いたまま、道半ばで死ぬ記憶だった。

こぼれ落ちた雫で少し濡れてしまった枕から、顔を上げる。

涙を拭えば、目の前には澄んだ蒼穹を切り取る窓からの景色。

——望んだ未来は、とても近いもの。

なら、その想いも一緒に背負っていけるはず。

ベッドから身体を起こして、掛け布団の上で両手を握りしめた。

お母さんの事は、もの凄く心配。

だけど、私に出来ることは何も無い。

なら、向こうの安息を祈って、私は今この世界で生きていく。

この世界を救って、平穩に暮らせる世界を存続させる。

それが、私の願い。

この世界に生まれ落ちてから、何度行ったのかわからない決意を、深く魂に刻みこんだ。

そのためにもまずは、戦鬪の勘とかを取り戻さないと……

「おきたー」

「あるじ、へいきいー?」

「あるじさまー、だいじょうぶうーっ」

左右それに真上から、幼い口調の声が聞こえた。

視線を向ければ、妖精形態のコケダマたちが浮かんでいた。

「むうう、また勝手にその姿で出てきて……カリユ、テュクス、ラニア」
とくに妖精の姿を好み性格も気まままで時々お願いを無視して勝手に行動している問題児三人が、私を覗き込むように心配するようにベッドに寄り添っていた。

「でも、ありがとう。もう平気だよ」

そつと手を伸ばして、近くに居たカリユの頬に指を添える。

するとカリユは抱きかかえるように右手に絡みつき、テュクスとラニアも右腕にしがみついた。

「まったく、わるい子たちなんだからー」

「二にへへー」

そのまま右腕を引き戻して、三人とも抱きかかえる。

いつの間に憶えたのか言葉を話せるようになっていた三人は、発音はたどたどしいけれど会話の内容などはきちんと理解しており、魂の繋がりを利用した思念共有をせずとも、言葉で正確に指示が伝わるほど。

そして智能もコケダマたちの内でも際立って高く、空気を読んで姿を隠したり、今みたいに私が怒らない範囲で自由行動していたりもする。

部屋にある装飾の配置を自由に変えていたりするし、お菓子をコツコツり食べていたりもするし、魔術で姿を隠して見つからないように公爵邸を探検していたりもしている。

なんと言うか、狡賢いというかお願いの隙間を突くのが上手い三人だった。

……もしかして私の真似をしているというか、元々の気質が私とそっくりなのでは？

脳裏をよぎった考えに、一概にそれは違うと否定できない自分があった。

それはそれとして、私の不調がコケダマたち全員に伝播したり影響していなかった事に、改めて安堵していると、客室のドアが開いた音

が聞こえた。

「苔森、起きているかしら……。あら？」

「あつ」

「「あつ？」」

ノックせず入ってきたソフィアちゃんの視線が、私の顔へそして三人の妖精へと向かい、また私へと戻った。

「……ねえ、それ」

「《戻れ——》」

「「きやあー」」

強制的に精神世界へ引き戻して、三人とも取り込む。

そして何事も無かったかのように、ソフィアちゃんに向き合う。

「えつと、何か用？」

「さっきのが気になるんだけど……。ああ、いいえ、あいつが目を覚ましたから呼びに来たのよ」

歯切れ悪くソフィアちゃんが言う。

「あいつって？」

「笹島よ。今はラースって名乗っているらしいわ」

どうやら彼も無事目を覚ましたらしい。

両手両足が完全に潰れた状態だったけれど、治療魔法などがあるので肉体の怪我などは問題無いはず。

懸念だったのは精神状態だったけれど、この様子なら正気に戻っていきそう。

「わかった。それじゃあ会いに行くよ」

「そうね。……で、さっきの何？」

隠し事は許さないと、鋭い目つきでソフィアちゃんが睨んでくる。目を覚ましたときに一悶着あったのか、非常に不機嫌な気配を隠そうともせず漂わせていた。

「……出てきてもいいよ。カリユ、テユクス、ラニア」

「「わあーいーっ」」

一度見られてしまったのは仕方ないと諦念を混ぜながら呼びかけると、髪の毛内側から滲み出るようにして、三人の妖精が出てきた。

それを見たソフィアちゃんは、眼を丸くして驚いた表情を浮かべていた。

「わあお、へえ……可愛いじゃない。ねえ、一人くれないかしら？」

「ダメ、ですっ！」

「「やあー」」

私と妖精三人して拒否する。

それを受けて慥然ぶぜんとした不満顔を、ソフィアちゃんは浮かべた。

そして笹島くんことラーズくんの部屋に行く道中にて、三人について散々質問をされた。

広い意味ではどうかわからないけれど狭義の意味では私の子供とかでは無いとか、他にも妖精の姿を取れるのは何人かいるけれど最も活動的なのがこの三人だとか、暇潰しに貸して欲しいとかは三人の気分次第でなら構わないとか、そんな事を話しながら進み部屋の前へと辿り着いた。

「そういえば。さつきは隠したけど、今は隠したりしないの？」

「もうソフィアちゃんにバレちゃったのなら、いざれ白ちゃんやアリエルさんとかにもバレるし、それならもう隠さなくてもいいかなって……」

「それもそうね」

あの戦いの後、白ちゃんは何も言わずに突然何処かへと転移していき未だ帰ってきてないので、何をしているのか何処に居るのかも不明で、少々心配。

そして目の前にある扉をノックして、中から返事があつたので入室する。

部屋に入ると、ベッドに寝たまま首だけこちらに向ける、緑と白のツートンカラーをした髪色の青年がいた。

「や、やあ。こんな格好で失礼するよ。……苔森さんで、いいよね？」

記憶の顔と比べて幾らか精悍な顔付きになっていたけれど、確かにクラスメイトだった笹島京也くんの顔が、目の前にあった。

「うん、そうだよ。そっちは笹島くん、今はラーズって呼べばいいのかな？」

「……そうして欲しい」

私も色々名前はあられるけれど、基本的にコケと、それだけで良いと伝えた。

あの神として与えられた名、翠星という名はそれだけで特殊な意味を持つているので、普段から名前として使うのは適さないなので、名字を縮めた名こそが此方の世界での私の名前である。

祝福であり呪いでもある、それがDさんから与えられた神名に付随している力だから。

「では、コケさんと」

「……ずっと名字で呼んでたけど、私も変えるべきかしら？」

「ソフィアちゃんは、そのままでもいいよ」

そして自己紹介が終われば、ここに至るまでの各々の経歴を話し始めた。

私たちはラーズくんの身に起きた大まかな出来事を知っていたけれど、それでも本人から実感の籠もった悲劇を聞かされれば胸を打たれ同情もしたし、ラーズくんから見れば私たちの事は何一つ知らないだろうと、全部話せば長くなりすぎるので内容を掻い摘んで、私と白ちゃんの事について語ったりした。

「白さんとコケさんも魔物で、生存競争としてはもつと過酷な環境で暮らした？ それに戦争？ 神だって……？ ごめん、情報量がありすぎて理解出来ない」

「改めて聞くと、頭可笑しいんじゃないかしら。内容もだけど、それを乗り越えたつてどこも」

「……決して、嘘偽りは言っていないからね」

頭痛を堪えるかのように顔を顰めるラーズくんだったけれど、一度頭を大きく振って意識を切り替えると、私の方を向いて申し訳無さそうな表情で口を開いた。

「臆気だけど、僕が何をしたのか憶えている。その中で僕がコケさんを傷つけたのも記憶にある。だからこんな事では到底足りないだろうけど、言わせて欲しい。本当に悪かった、申し訳ない」

伏せられる前の瞳には、深い後悔と自責の念が宿っていた。

「ふんっ！ 到底許されるような……」

「いいよ、許す」

「苔森ッ!？」

驚愕の表情を貼り付けて、私を見る二人。

たしかに酷い目にあっただけれど、それは私自身の怠慢が原因だったし、その結果足りないものを見つめ直す良い機会にもなった。

だから、気にしていない、そう伝えると――

「……あんた、いつか損するわ。絶対にね」

「すまない、ありがとう……」

ソフィアちゃんからは呆れの感情が、ラースくんからは深々と感謝の言葉を述べられた。

それを軽く受け流して、話を続ける。

「それに、やるべきことは沢山あるってわかったからね。その内の一つで戦うための力を取り戻すためにも、ラースくんには相手になって貰わないと」

「あら？ それ良いわね。私もあんたのこと一発殴りたかったのよ。もちろん手加減するわ。当然よね？ ふふふ……」

妖しげな微笑を浮かべるソフィアちゃんに、それを見て冷や汗を掻いているラースくんを視界に映しながら、私は今後の予定に思考を巡らせた。

アリエルさんにも、あの魔の山脈にある空白地帯についてや、そこに行つて魂の治療かつ魔術の修行に行きたい事も伝えないと。

あの地はギユリエさんの管轄だし、成功すれば多大な恩を売ることも出来る。

それらの調整のためにも、一度しっかりと相談する必要があると思うから。

「ところで……、その帽子の上のは、何？」

「……………説明するね」

もう隠さないと決めただけど、まだまだ気持ち的には完全に割り切つてはおらず。

ほんの少し口籠りながら、ラースくんにも私の眷属、コケダマと魔

蛾それに妖精たちについて、きちんと説明した。

38 未来へ向けて

あれから一年ちよつとの時間が経過して――

ラーズくんが目覚めて数日経っても白ちゃんは帰ってこず、待つているのも時間の無駄と考え、その間にアリエルさんと相談し私はあの空白地帯へと行くことにした。

ギユリエさんが言うには狭間の国と呼ばれるあの場所は、魂が劣化し寿命を迎えようとしている人が住んで、争いの無い穏やかな暮らしをしているらしい。

魂が限界を迎えれば、崩壊して消滅する。

そして消滅してしまうと、ただのエネルギーとなって無に帰し、転生も何もかも出来なくなる。

そうなれば、システムに縛られて魂の総数が基本的に増えたりしないこの世界では、次第に生命が産まれなくなり、星の再生に必要なエネルギーを回収する前に生き物が存在しない惑星になってしまうだろう。

しかも狭間の国には規模の大きい街もあるようだし、それだけこの世界が危機に瀕しているのは明白で、ギユリエさんが言うには既にもう世界は詰んでいる状況だった。

このままではアリエルさんが魔王として細く長く活動しても、MAエネルギーは足りない。

回収途中で崩壊する魂が急増し、先細りしながら世界が自滅する未来しか無いという。

その未来を少しでも回避するため、私が打った手は魂の延命。

崩壊寸前の魂を再度転生出来るように修復して、魂のストックを減らさせない方法。

傷つき擦り切れた魂を強制的に癒やしてスキルを育成出来るようにし、次の人生では折角治した魂をもう一度酷使して貰い、延々とエネルギーを生み出し続ける地獄の輪廻に送り出す。

マツチポンプだと思うのなら、いいさ批難も啜うも好きにすればいい。

死んでも贖い続けるこの世界の住人に訪れる終焉を私は決して許さず、再び果ての見えない贖罪の道へと引き戻すのだから。過酷な運命を強いる事に覚悟を決め、私は一人旅立った。

ラースくんが来て一ヶ月後には私は公爵邸を後にして、ギユリエさんと共に狭間の国へ再び足を踏み入れた。

ギユリエさんとの交渉では、アリエルさんの行動を一切妨害しない事の確約と、魂を治療した人の割合に応じて、私に対し何かしらの協力を約束するという事で決まった。

ラースくんの憤怒を封印した時の魔術を見ていて、私なら治療する事も不可能では無いと思ったからこそその決断だったらしい。

報酬については、私個人としては必要だと思う物は特に無く今回の事は出来そうだと思ったから申し出たに過ぎないけれど、ギユリエさんとしては返しきれないほどの大恩だったらしい。

サリエルが理想とした世界、それを守れるのなら。そう、彼は言った。

廃村の場所になら自力で転移して移動する事も出来たけれど、やろうとしている事は現地の住民からの理解があったほうがスムーズに進むので、ギユリエさんからの紹介という形をとって狭間の国に住む人達と接触した。

ここでの肩書は、特殊な技能を持つ外から来た治療術士で、未知の魔物を率いる魔物使い。

一つの村や街の住人全ての魂を治療し終われば、メントに乗って次の村や街へと移動する生活を続けていたのもあって、旅の魔女様あるいは旅の聖女様なんて噂が広がっていた。

魂の修復や治療には相応の時間が掛かるし、消耗も結構大きい。だから、一日で治療出来るのは数十人程度までが限界で、住人全員となると村で一ヶ月、街規模になると数ヶ月以上滞在して治療して回った。

それに魂の治療と比べれば圧倒的に簡単な、外傷や病気など身体的

な治療も片手間で引き受けていたので、そちらで呼ばれて引つ張りだこになった時もある。

当然引き留められた事も何度もあって、その度にちよつとしたドラマやお別れの宴会など、語り尽くせないほどの思い出が増えた。

こんな平和な交流と人間関係、生まれて初めてかもしれない……

それに最初からコケダマたちを連れていることが伝わっていたので、魔蛾や翅持ちのコケダマの姿なら制限を付けずに自由にさせたい、場所に余裕があれば街中でもメントも呼び出したまま旅をした。

カリユ、テユクス、ラニアの三人も、もう色々キツパリ諦めて隠すことを止めた。

そうするとイタズラも増えたけれど、それよりも三人の有能さに驚く日々だった。

三人それぞれ単独で魔術を発動出来るのは知っていたけれど、カリユは治療に、テユクスは水と植物に、ラニアは魂に関わる魔術を高度に扱えて、私が魂の治療に専念出来るように色んな場面でサポートしてくれた。

軽傷ならカリユが引き受けて、土地や水の異常ならテユクスが、そしてラニアは私の補助として魂の治療を共に行った。

世話好きで甲斐甲斐しく癒やして患者に好かれるカリユ。

気が強くて感情がハッキリしており、やや男性嫌いの気があるテユクス。

一番イタズラ好きで、遊ぶことが大好きなラニア。

それに加えて、非常に素直で純粹に甘えるメントも入れたコケダマたちみんなでの旅は、世界の延命かつ修行の名目で来たはずなのに、気がつくとき此処での旅を心から満喫している私があった。

ときどき様子を見に、あるいはお酒を飲み、氷龍のニアさんが人化して来ることもあって、静けさとは無縁の旅だったと思う。

それにしても、人化した姿は綺麗ではあるけれど気怠げな雰囲気拭えないせいで、残念な印象しか感じられない人、もとい龍だと思っただけだった。

定期的に、一ヶ月に一度の間隔の近況報告にて、私は公爵邸に帰ってきた。

発動まで時間が掛かるけれど転移が使えるのなら距離の制約なんて無いも同然なので、一日ほど魔族領に滞在しては、再び狭間の国へと戻り魂の治療をする日々。

適性の問題で白ちゃんのように一瞬で発動出来ないことで事前準備なども大変であり、最初は自力で転移を行っていたけれど、最近では子蜘蛛の分体を白ちゃんが付けてくれたので、それを使って白ちゃん本人を呼び運んでもらう事もあった。

まあ……白ちゃんの都合がつかない時は、普通に自分で転移を構築しているけれど。

ラースくんは公爵邸に来て半年後には魔族軍に入り、そこで活動している。

魔族語も憶えて、それからは自分にも出来ることは何なのか、日々自問自答しながら探しているみたい。

ソフィアちゃんは、家庭教師から教養の授業を受ける日々は変わっていないくて、もうじき学園に入学するらしい。

毎回会ったときには嫉妬の影響がないか目を光らせているけれど、元々の気質と精神汚染の波長が非常に良く似ているので侵蝕度合いを正確に把握するのは難しく、外道耐性もすでに高めな事もあって明確な大問題が起きない限りは封印せず、ただ経過観察するに留まっていた。

ソフィアちゃんと嫉妬の相性が良すぎて元々の魂と汚染の境界線を定めるのも難しく、憤怒の時のように切り分けが簡単にはいかないだろうという予感がある。

そして支配者スキルの封印となると私の負担も大きいという事も、封印していない理由だった。

ソフィアちゃんの機嫌の乱高下に付き合わされている、公爵邸の用人たちや白ちゃんには少し悪いかと思うけれど。

そして白ちゃん。

何処かから帰って来てからというものの、得意分野である空間魔術をもっと深く発展させたり、さつき言った蜘蛛型の分体をバラ撒いて諜報網の構築に熱心に勤しんでいたらしい。

その張り巡らされた形無き蜘蛛の巣で集めた情報には、アリエルさんに対して反乱を企てている軍団の情報などもあつたらしく、私が居なかつた間に速やかに反乱軍は鎮圧されていて、その話を聞いたのは全て終わった後の事だった。

北の街へと集結中に反乱を察知され籠城を選択した反乱軍。

即断即決で討伐に出撃した正規軍には、メラゾフィスさんとアエルちゃん、それにラーズくんも参加して、裏から白ちゃんとソフィアちゃんも暗躍していたので、どうあがいても反乱が成功する可能性はゼロだと言える状況だったらしい。

けれど、不穏な影は憑き纏うもので……

反乱軍にはエルフが加担していて、銃器と抗魔術結界で武装したサイボーグ兵が複数。

そして……、エルフとして生まれた転生者。

クラスの担任だった先生、オカちゃんこと、岡崎先生が居たらしい。そこらへんの一部始終はラーズくんから聞いたことで、先生は魔王に囚われた転生者を救う為に戦っているとか、エルフは転生者を保護しているという事を話したとのこと。

その時は取り逃がして見失ったけれど、後から色々な面から考えて先生を確保することはせず、人族領へと安全に通り返けられるようにお膳立てして、先生には何もせず逃がすことになった。

私が一連の騒動で唯一参加した部分は、人魔緩衝地帯から先生が逃げ進むのを遠くから見届け、先生の魂を確認する事だけだった。

そして、間違いなく先生にも、ポティマスの支配の根が絡みついているのを確認した。

……取り除けはすると思う。

だけど、数時間は掛かる作業になるだろうし、その間にもし乗っ取りが実行されたら先生の意識が死んでしまう。

そのため、白ちゃんに出来ること出来ないことを説明して、結局何

もせずに先生が通り過ぎるのを見送った。

その他は、白ちゃんと魔王がダスティン教皇つまり神言教に、先生の事を見逃すようにと伝えに行つて、何故かエルフを打倒することで話が纏まったという事もあったらしい。

口約束だったらしいけど後には引けなくなり、これからは本気でエルフひいてはポティマス殺害を目標に行動することになった。

……まだまだ、正面から戦うには実力も何もかも不安がある。

けれど、いつかは滅ぼすべき相手だった、それが早まっただけ。

いつか来るハッピーエンドを目指して、歩いているのは私たちみんな同じ。

世界に次が無い？　こんな途中で終わるのなんて、私は認めない。ただもう一度、あの大切な日々が続くように、守りたいだけなんだから。

そして今、私と白ちゃんにアリエルさんの三人で、魔王城の地下へと向かつていた。

とても長い階段を降りて、何も無い小部屋の壁にアリエルさんが触れると、異空間にある小部屋と魔王城にある小部屋の壁が空間を超えて繋がり、隠された場所が顕になった。

そこに私たちが進むと、部屋の中央に居た存在が語りかけてきた。

「ヨウ、キョウダイ」

洒落たスーツを着ている黒い鱗の龍人が、台座らしき物に座つて私たちを出迎えた。

「誰がいつ、あんたの兄弟になつたって？　私の兄弟はあの孤児院のみんなだけしかないよ」

「ツレナイコト言ウナヨ。遺伝子上八、一応兄弟ダロ？」

アリエルさんと龍人が、お互いに挑発するような言い回しで会話している。

知らない内容に興味が惹かれるけれど、今回の目的では無いのでグツと堪えて話を進めさせる。

「……アリエルさん」

「ん？ ああ、そうだった。ギユリエを呼んで貰える？ 話したい事があるから」

「マスターヲカ？ 緊急カ？」

「緊急の案件ではないけれど、重要な案件。ギユリエも交えて話す必要がある」

「ワカッタ。少シ待テ……」

そして目の前の龍人は、瞼を閉じた。

念話中の龍人に代わってアリエルさんが、眼前にいる龍人について説明した。

闇龍レイセ、最古の龍の一体。

その姿は、非常に人に近い身長と体格だった。

そして空間が揺らぎ、ギユリエさんが現れた。

「話があると聞いてやって来た」

「ああ、まず最初に私たちはエルフを滅ぼすことにした」

アリエルさんが前置きとなる内容を話始めた、そして……

「そして、エルフを滅ぼしても戦争を行い続けても、それだけじゃ足りないのはわかっている」

「……そうだな、そちらの苔のおかげで救われた魂は多い。だがいずれそれも限界を迎えるのは確実だ」

一瞬重苦しい空気に包まれる。

それを断ち切るように、アリエルさんの声が響いた。

「だから、普通じゃないやり方をするつもり」

「……どういう事だ？」

「……システムを、破壊すれば、いい」

アリエルさんの言葉を、白ちゃんが引き継いだ。

そして、予め意見を共有していた内容を、私たちはギユリエさんに説明した。

「待てっ。理論上は確かに可能だろうが、システムを破壊するなどDが許すはずがない」

そう。

私たちはシステムに干渉して、複雑で不要な機能を廃止し、その分のMAエネルギーを星の再生に充てることにした。

けれど、一番の懸念事項と言える相手については、白ちゃんが強く断言する。

「問題無い」

確信を持つて白ちゃんは、Dからの干渉は無いという。

私も白ちゃんの考えには賛成で、これしか無いような状況で変な邪魔をするのは無粋だと、そう思っているのだと信頼にも似た感覚を憶えていた。

「しかし……」

「私も、問題無いと思います」

「絶対、大丈夫」

それでも洩るギユリエさんに白ちゃんの鋭い指摘が飛び、そのまま言いくるめられて押し黙ったギユリエさんは、最終的に神としての力を使わないけれど、可能な限り全面的に協力する事を約束した。

ある意味吹っ切れたのか、明るい表情を浮かべて私たちと手を結ぶギユリエさんの瞳には、熱意が再び灯ったように見えた。

そしてレイセさんを連れて、約束を履行すべくギユリエさんは小部屋から消えていった。

そしてその後、私は白ちゃんから何やら怪しげな羊皮紙で装丁された分厚い本を受け取った。

「これは？」

「Dから、ユケちゃんへって……」

何故白ちゃんがDからの贈り物を持っているのかわからないけれど、私宛という事なので慎重に受け取り軽く表紙に触れると、本に施された封印が解けた気がした。

そつとページを捲ってみると、見たことの無い文字だけど何故か内容が読めてしまう文章の列がズラツと並んでいて順に視線をなぞらせれば、この本には何が記されているのかを理解した。

「これは……、詩集^{ウタ}？」

謎の贈り物に混乱していると、帰ろうとしていたアリエルさんを白

ちゃんが呼び止めて、転移の準備を始めていた。

そこに私も呼ばれたので、誘われるまま転移の術式範囲に入る。

そして私たちは小部屋でもなく、魔王城の何処でもない、もつと遠い地の底の果てへと跳んだ。

私は、蹲る。

幾何学模様を描く、巨大な魔術陣が床や壁それに天井にまで広がる部屋の中で、脳裏に叩きつけられた情報に目眩がし、堪えきれず膝をついた。

根を張るように、左脇腹からジワジワと焼けるような痛みが侵蝕する。

白ちゃんとアリエルさんが心配している中で、私は……

光の枷に幾つも縛られ、宙に吊るされている女性の前で、ポツリと眩く。

「管理者権限付与……、そして……、残り時間は」

強制的にシステムに捧げられるまで……、残り、十二年。

そう、冷たく脳裏に語りかけられた。

蜘蛛9. 25 記憶の中の故郷へ1 (22/07/0
8挿話)

……私は、また間違えたのかもしれない。

ほんの少し、心が痛みを訴えているのを感じる。

システム中枢で崩れ落ちたコケちゃんの姿が、網膜に鮮明に焼き付いていた。

一つ、大きな溜息を吐き出して、気持ちを切り替える。

やめやめ、過ぎたことを後悔しても何も解決しないんだから。

もつと建設的なこと考えよう。

そうだね……まずはコケちゃんに手渡した本。

あれがどういいう経緯で私の手に渡ってきたのか、最初から振り返ることから始めようか――

窓を覆うブルーシートの隙間から、微かな月明かりが差し込む室内。

スプーンとかでゴツソリ抉られたような合成樹脂の床。

机も椅子も、何もかもが消え失せた室内は不気味な静けさを湛えており。

壁際の壊れた黒板や用具入れの残骸で、ようやく此処が教室であると認識出来る有様だった。

此処で、あっているはず……だよな？

それら普通の人間なら真っ暗闇で何も見えないだろう室内を、透視

と暗視の魔術をつかいないながら視認し、私は転移が成功したことに内心で小さく喜んだ。

そして、周囲の状況を透視で確認し誰も見ている人が居ないことを確かめてから、建物の外へと転移する。

降り立ったアスファルトの道路で、靴が乾いた音を鳴らした。

振り返れば何の変哲も無い、くすんだ白い外壁。

何処にでもありそうな構造で、少し古臭い感じの校舎。

そう——此処は平進高校。

転生者たちが前世で通っていた高校で、異世界からの攻撃が炸裂した、全てが始まった場所だ。

ゆえに今、私は——地球という星の、日本という国にいたのだった。

暴走してた鬼くんを叩きのめして確保した、あの日。

ギョリギョリから、お前は己よりも空間魔術に素養があると言われ、それならこの星から出るのも容易いだろうなど、言外に出て行けと言われたこと。

そして予告もなく私の脳内へ語りかけてきたDから『早く私に会いに来てくださいね』と実質的に脅されたことから、こうして地球へとやって来る運びとなった。

いや、まあ……こういう発想が全く無かったとは言えない。

神化してシステムという閉じた牢獄から解放された私は、やろうと思えばあの星から出ていく事だって、一応のところ可能だったのだ。

私の転移は、行きたい場所を思い浮かべれば発動できる。

そこに重い制約や複雑な条件などは無い。

空間指定にまつわる諸々の過程をすっ飛ばしているかのような、そんな容易さで行使可能だ。

座標とか把握してれば宇宙を越えて別の惑星へだって行けるはずだし、観測用魔術を開発すればもう何時でも何処でもひとつ飛びだ。

距離の壁など、私には障害にすらなりはしない。

だから、あの星から逃げ出すということは、まず一番始めに思いつ

いた事だとも。

あんな死にかけの星で頭を悩ませながら居残るより、何処か別の星にて安穩と暮らせるのなら、そっちの方が断然良い。

誰がわざわざ、究極的には放っておいてもいいゲキムズ難題を、心身苦勞して解決に奔走せねばならないというのか。

……そう、私個人としては思うんだけどね。

対してコケちゃんの方は、どうやらこの問題に真剣に向き合っているみたいなんだよ。

見捨てれば良いのに。

コケちゃんの大切な家族とやらは、自分の魂の中に居るでしょ？

なら、家族だけなら何処へでも一緒に連れていけるじゃん。

そう思うけど、口にしない。

だって、それを言ったら……致命的な仲違いが起きそうな予感があるから。

どうにもコケちゃんは、世界という大きな括りで見ている気がする。

眷属のことだけではなく、それらが住む世界ありきというか。

そこに住まう皆、魔王とか吸血つ子とか、鬼くんとかも含めて……

みんなが全員、生きるためには——星の存続が第一っていう感じかも。

だから見捨てろなんて言ったら、絶対に喧嘩になる。

間違いない。

まあ、そんなだから私としても、限界ギリギリまで出来る限り手を貸すさ。

本当に星がどうしようもなくなった時、その時に他所へ移住すればいいだけの話。

故に、さつきまでの話をひっくりかえした結論として、星からの脱出は最終手段として取って置き、それまではコケちゃんと一緒に頑張ろうと思っていた訳なんよ。

親友がやるって意気込んでるのだから、私もやるとも。うん。

——意図的に、地球のことは除外していた。

こうしてDから呼ばれるまで、私は地球になら記憶の情報から転移可能であると、考えないようにしていたんだ。忘れたフリをしてでも……

その理由は、怖かったから。

此処に来れば、顔を背けていた真実を否認なしに直視するハメになるからだ。

だから理由を付けて、引き伸ばしていた。

まだ魔術が……まだやるべき事があるから……まだ星を救ってないから……

まだ、まだ、まだ………まだ、私は地球に行くべきじゃない。

そう思い続けていたけれど、誤魔化すのも遂に限界だ。

Dから呼び出された以上、無視したら何されるか予想も付かないという恐怖があり、仕方なしに地球へとやって来たのが、今回の経緯である。

ああーヤダなあー、行きたくないなあー。

うじうじグチグチと、日本の街並みを散策する。

平進高校は駅の割と近くに建てられているので、少し歩けばそこは駅前の賑やかな通りに出る。

夜中とはいえ、飲食店などが煌々と営業しており、人通りはそこそこ多い。

すれ違いざまに、何人か私のことをチラ見してくる人もいたが、声を掛けられないうちに足早にスルーしていく。

まあこの見た目だし注目集めるのも仕方ないけど……服装のことじゃないよ？ 白髪がね？

服装自体は、現代日本にいても浮かないようなシンプルな白パーカーと黒パンツにしている。

いつものファンタジーなローブ姿じゃあ、目立つでしょうに。フードを被って、視線を遮る。

今の私ってほら、戸籍も身分証明も無く、地球外からの不法滞在者みたいなものだし。

警察呼ばれたりだとか面倒事はご遠慮したい。
排気ガスの鼻を刺す臭いと、微かに交じる美味しそうな料理の匂いがする。

向こうの、野性味溢れる自然の香りと闘争と血腥さが溢れるそれは、大違いの空気。

なんというか、淀み弛んだ平和ボケの空気である。

本当に違う星、違う世界なんだなあーと、改めて感じた。

空に浮かぶ月は一つだけだし、目に映る景色は何もかもが違う。

記憶にある故郷は此処のはずなのに、何故か馴染めそうにない疎外感を憶えてしまう。

それは、この身体が向こうで生まれ育ったものだからなのか、それとも本当は……

飲食店の看板を見ていると空腹が刺激されて入りたくなるけど我慢して、駅前のコンビニへ足を踏み入れる。

店員の視線を無視し、雑誌のコーナーへ。

そして週刊誌を手に取り、パラパラと捲って号数や日付を確認する。

……ちよつと驚いたな。なんとなく街の雰囲気から察していたけれど。

あつちではもう地球換算で五年以上経過しているのに、此方ではまだ半年程度の時間しか過ぎていなかった。

時間の流れが、思いつきり違うらしい。

相対性理論？ 世界線の違い？ 次元の隔たり？ ループ量子重力理論??

いや、まあ何となく言ってみただけなんだけどね。

魂だの魔術だのがあった世界で、人間の学問である物理学とか量子力学とか何処まで正しいものなのか、よく分からないし。

しかし、半年かあー。

読んでいた雑誌を棚に戻す。

別の雑誌も流し読みすれば、こちらも示す日付は同じもの。どうりで記憶にある景色と、殆ど変わりが無い訳だよ。

五年も経てば、少しは変化があってもおかしくないのに、何も変わっていないのが逆に違和感が浮き彫りになるもの。

長居は無用なので、そそくさと何も買わずにコンビニから出る。ん？ 何か面白い食いでもしないのかつて？

無一文なんだよ、それがなにか？

向こうじゃ味わえないスナック菓子見てると、食欲我慢するのも大変なんだよ。

それにしても……問題無く魔術が使えているな。

この不気味な眼球を晒すわけにはいかないから、透視とか暗視とか万里眼とか普通に使ってし、短距離転移も違和感なく発動する。

そもそも、此方では魔術が使えないのであれば転移の座標指定すら不可なので来れない訳だし、こうして無事到着している時点でそれは無いという事なんだけどね。

魔術の基本はザックリ言えば、魂に溜めたエネルギー、それを術式に構築して変換を経ることで発動だから、貯蓄が十分であれば周辺環境に左右されたりはしない。

だから極論すれば、使い方さえ知っていれば人間だって魔術は使えるはずなんよ。

向こうの人がシステムの補助ありきだけど、魔法やスキルを使っているように。

でも此方には魔術の痕跡が欠片も見当たらない。

魔力感知が特殊技能だとしても、歴史上何人かは魔術に触れた存在がいるはずだ。

それなのになんで発展しなかったのかは、私は知らない。

Dとか何者かとか、裏で糸を引く存在がいるのかもしれないけれど、知る由のないことだ。

帰宅ラッシュで混み合う駅前から抜け出し、人波を避けるようにして住宅街へ。

人もまばらとなり、店の替わりに住宅が。

そこから、更に奥へと歩みを進める。

足取りも重くなり、溜息が零れる。

それでも止まること無く進み続け、ゆっくり歩いてても二十分も掛からない程度の距離を歩けば、もう着いてしまった。

たどり着いた場所は、住宅と住宅の陰にひっそりと建つ、一軒家。表札に示された文字は、若葉の二文字。

半年経過しているのに、何も変わっていない佇まいが不安を煽っていく。

唾を飲み込みながら門を開けて、玄関の前まで行く。

横に置いてある植木鉢、そこに植えられた観葉植物の根の隙間を探る。

そうすると、記憶通りに鍵が隠されてあった。

その鍵を使って、玄関のドアを解錠する。

家の中に入れば、照明が落とされて暗く、静まり返った廊下が広がっていた。

記憶にある通りに、すぐ近くに二階へと上がる階段と、その横に一階の奥へと続く廊下。

迷いなく、二階へと登っていく。

そして、ある一室の扉を開ければ――

「乙女の部屋にノックも無しなんて、なんてデリカシーが無いのでしょうか。マナーのお勉強はサボらず受けましょうね。……………さてと。いらつしやい、それともお帰りなさいと言ったほうが良いでしょうか? ——ねえ、白織?」

PCのファンが奏でる鈍い風切り音。

薄暗い室内を照らすモニターには、ゲームのフィールドとキャラクターが映っており、そこにはハゲた渋いオヤジのキャラクターが敵の攻撃を華麗に躲していた。

それを操作するコントローラの軽い操作音が響き渡り、それを握る黒髪の少女は此方を振り向きもせず、滔々と呟いたのだった。

「……………覗き魔が乙女だった? 笑わせる」

「手厳しいですね」

吐き捨てるように返事をすれば、柳に風とばかりに感情の籠もらない声。

そうして、ハゲオヤジのキャラクターが敵モンスターを撃破し、クエストクリアの表示が大きく映し出されると、少女はコントローラを置いて此方へ振り返った。

そのモニターの逆光に照らし出された顔は、色合いこそ違えど私と瓜二つ。

「初めまして……で良いのかな？ 本物の若葉姫色さん。それともDと呼んだほうがいいかい？」

私は白髪赤目、向こうは黒髪黒目で髪を下ろしているという違いはあるものの、それ以外はほぼ同じ背格好と容姿。

あとは、被る表情の質が異なるくらいか。

何処までも虚無で、見てるだけで底知れない不安に襲われるような、そんな無表情。

「ようこそ、私の身代わりさん。歓迎しますよ、盛大にね」

私のオリジナルたる存在は、その台詞とは裏腹にゾツとするほど無機な、歓迎の言葉を述べた。

——この真実を知るのが怖かった。

自分が紛いものの偽物であるという、その真実が。

その後、Dと一緒に一階の食卓に降りてカップラーメンをご相伴に預かったり、なんやかんや対戦ゲームで競い合ったり、私何しに来たんだっけ？ っと思うような、トラブルらしいものも無い拍子抜けする時間を過ごした。

そこで、そのまま一泊することとなって、両親が寝起きしているとこの設定の空き部屋に、糸で即席のマイルームを作り、布団を敷いて天井を眺めている始末。

……本当に、何やってんだか。

目的自体は、最初の段階でもう達成していると言っても良い。

Dに会うことが目的であり、それ以上は別にDを無視して帰還して

も良かったのだ。

そうしなかったのは、まだ何か引つかかっているからか……
Dとしばらく対面して観察をし、分かったことがある。
いや、分からないという事が分かったとでも言うべきか。

この時間に至るまで食事をしたりゲームをしたりなど、それなりに出来事があったというのに、Dの無表情はピクリとも動かなかつたのだ。

私も人のことと言えるタイプじゃないけど、それでもコケちゃんや魔王相手なら、少しは口角とか動いたりする。

そしてDは、こんな私以上の無表情さで、まるで極限まで美を迫及しただけの能面を貼り付けているかのような、そんな不気味さがある。

感情の機微など欠片も感じ取れず、そんなもの無いのではと思うほど、気味が悪い。

実物を見れば見るほど、その不可解さと異質さが浮き彫りになるようだった。

人はどう取り繕うとも、少なからずその本質が見え隠れするものだ。

台詞回しや口調の強弱、身振りや視線などの所作……

そうしたものを重ね合わせれば、自ずと見えてくるものがある。

それがDとなると、途端に分からなくなっていく。

戯けたような飄々とした言い回しをしたと思えば、賢者のように思慮深い発言だつてする。

長い年月をかけて洗練されたような気品さもあれば、無垢な少女のような仕草も交じる。

兎にも角にも、真意を読み取るのが困難なのだ。

あれらが演技なのか、それとも素なのか、何一つ読み取れはしない。まるで、人でないナニカが人の行動を真似て、そういうフリをしているだけのよう。

そんな風にしか、見えなかった。

……無理して理解するもんじやないな、コイツは。

考えれば考えるほど、ドツボに嵌まっていく感じだろう。そうなると余計分からなくなっていく、真実とは程遠いものしか見えなくなっていく。

なら、何が気掛かりなのか。

私が——若葉姫色の偽物、Dの身代わりだという事は、実物を見た以上揺るぎない。

Dの存在を認識した時期や、声を交わしたファーストコンタクトについては、エルロー大迷宮の中層にて起きた出来事に集約される。

そこから、何度か要素所で干渉してきたけれど、その度に私は得体の知れぬ嫌悪感が込み上げていたのだ。

どうしても相容れないような、そんな拒否感。

その理由に思い至ったのは、神化してからのこと。

GMA爆弾などというエネルギーの塊を喰らったことで、私の魂は変革し神格へと至った。

その時に、魂に染み付いた異物に気付いた。

それは魂の根幹を為す、神性領域にあった。

神性領域が何であるのかは、説明すると長いから省略。

要は人格とか自我、エゴやイドといった本質を司る部分とだけ憶えてもらえばいい。

そこにあつたものが、私を呑み込み塗りつぶして、私は若葉姫色という存在になっていたのだ。

若葉姫色という記憶。

それが、もともとの私を押し潰し、自分が若葉姫色であると思いついでいた原因だ。

それが意味するものは——私は記憶を持っているだけの、全く違う存在であるということ。

気付いてしまえば、これまでの疑問や違和感がするりと融解していった。

『名前なし』と、表示されていたこと。

人族の両親から生まれた吸血っ子や同じ魔物生まれの境遇なコケちゃんには、前世の名前が表示されていたのに、私にはいつまで経っても『名前なし』だったこと。

初期のスキルポイントが低かったことも、私が人ではなく生物の格が低い生き物だったから。

高次の思考を持たず、本能で生きる矮小な存在が、元々の私であるから。

そしてDが語った、教室で爆発が起き巻き込まれた生徒たちを転生させたという説明も。

どう考えても、クラスの中にDに該当するような異質な存在など居なかった。

自分自身だと思っていた、若葉姫色を除いて。

記憶を掘り返せば、ところどころ無視できないレベルの矛盾や欠落があった。

顔どころか両親が存在していた場面すら浮かばない。

自分のことを最底辺と自己評価しながら、容姿は美人だと自覚している。

性格にしても、記憶の姿と転生後の現状では剥離が甚だしい。

——そうして、Dの正体と、私は自分が何だったのかを自覚した。

理解した瞬間、分離する——若葉ではないナニカの視点。

人より高い位置から定点カメラのように見下ろす光景。

しかし、それらは自己よりも巨大であり、自身は小さな存在でしかない小さき者の視界。

男子から叩き潰されそうになり、それをオカちゃんが止めて助けてくれた事。

教室の隅で放され、そこからずっと同じ場所に逗留り続け、獲物が掛かるのを待つだけの日々。

周りは自分よりも遥かに大きな人間たちに囲まれて、殆どの人間から疎まれ気味悪がられ、いつ気まぐれから殺されてもおかしくない状況。

オカちゃんが巢に乗せた小虫に齧り付き、必死に生にしがみついて

いた——教室の中で最底辺の矮小な存在。

その最後、爆発で途絶する間際に映っていたのは……自身を見上げる小柄な少女の顔で。

……私は、そのような蜘蛛だった。

蜘蛛9・5 記憶の中の故郷へ2 (22/07/08
挿話)

翌朝、若葉宅にて。

焼いたトーストと冷凍食品を温めた現代らしい朝食を頂いて、二階の部屋に入った途端。

向こうから話を振ってきた。

「このまま遊んでいるだけでも私としては一向に構わないのですが……折角ですので此処まで来たあなたには、最初から詳しく教えましょう」

ゲーミングチェアに腰掛け足を組んだDは、如何にも優雅な風格を醸しながら、そう話し出す。

私は立ったまま、顎の動きで続きを促す。

「始まりはご存知の通り、勇者と魔王の次元魔法が此方の世界に干渉したことです」

たしか、先代の勇者と魔王が次元魔法を改変して、空間を越えて何かしようとしたところ失敗、その暴走した魔法がDつまり若葉姫色のある教室で炸裂したって話だ。

そこで犠牲となり消し飛んだ生徒と教師を、向こうで転生させたのがDである。

「転生者の皆さんは、私に巻き込まれた形です。

私が青春高校生ごっこをしていたばかりに、罪のない一般人が犠牲となってしまう。その責任を取るために、彼らには多少の優遇措置を与えてあげた。世界に転生して頂きました。不幸な事故でしたが、きちんと転生先を斡旋して責任を果たしましたので」

——そちらの方が面白そうだと思っただのも否定はしません。

そう付け足されたのも、聞き逃さなかった。

というか、青春高校生ごっこって……何だよそれ。

そんなものの為に高校に潜入していたDに、巻き込まれた無関係な転生者たち……

乾いた嘆息しか出て来ないよ。

しかもどちらかというと、責任より面白そうという理由が主体に見えるのだから酷いものだ。

「しかし、此処で一つの問題がありました。私の柩をどうするのかという事です」

Dの柩？

「偽装は完璧です。若葉姫色という存在は戸籍上実在する人物となつていますし、それは魂の管理でもちゃんと存在していることになっています」

また新情報が……

魂の管理なんてよく分からないけれど戸籍と同列に語っていることから、魂そのものにも記録や管理が何処かで為されているということなのか？

……マジで有り得そうなのが、笑えないし恐ろしいわ。

「私の部下たちは優秀ですし、魂の流れに少しでも違和感があれば即座に駆けつけてきます。そうなれば折角私が仕事をサボ……こほん、後学のために一般人の生活体験をしているのが、強制終了されてしまいます。それでは困りますので」

……サボリが目的で高校生活していたと言うのか、この邪神は。

家出娘かなにかか、あんたは。

しかも多分トップだろうあんたが、仕事ほっぽり出して抜け出し人間ごっことか、色んな方面で迷惑ばら撒いて、可哀想な存在作り出してるとるんじゃん。

転生者しかり、Dの部下しかり……ほんと、ないわー。

「あの教室で死んだことになっているのは、合わせて二十七人。

しかし、私はこの通り爆発を防ぎきって傷一つ無いですし、私自身があちらの世界へお邪魔する訳にもいきません。かと言って何も対策をしないとあれば、私は見つかってしまいます。

部下の目を誤魔化せる、あちらの世界で転生してもらう人間一人分の魂が必要でした。そこまで言えばそれが誰なのか——もうお分かりですよね？」

……それが、私ってことね。

細々とした因果は脇に置いて誕生理由が、Dが連れ戻されたくないからという、それだけの理由で選ばれた身代わりが教室にいた蜘蛛で、私だったと。

はああ……しょもな。

自分のことだというのに肩を落として溜息しか出ないあたり、どれだけ心底くだらないと感じているのか、良く分かる。

「これでもなかなか苦労したのですよ？　ただの蜘蛛の魂を人間に偽装するために色々工夫を凝らし、万が一のため人間としての若葉姫色の記憶を捏造して埋め込んだりと。

まあ、魂の総量を人間並みに盛るのは面白みに欠けるので、蜘蛛のそのまま増やさず騙す方向にしたせいで余計な作業が増えてしまったのは自業自得であつたりと……

ですがコンコルド効果とでも言いますか、たとえすぐ死ぬだろうと考えていても、手間を掛けた以上手抜きは出来ないと細部まで拘った結果、あなたという存在が生まれました。——結果として予想を大きく上回り楽しませてくれる傑作が誕生したので、私としては大喝采ですよ」

胸を張って、誇らしそうに語るD。

ああ、もう本当に……ムカつく。

「おっと。どうされましたか？　あやうく私の美しい顔が汚い柘榴になるところでしたよ？」

「……眉一つ動かさずによく言う」

突き出した拳はDの顔面スレスレを通り抜け、その奥のゲーミングチェアのヘッドレストを貫通して粉碎していた。

「もう少しだけ補足を。元が蜘蛛でしたので蜘蛛の魔物に転生させました。それが丁度あちらでの重要人物の一人に縁付かせることも出来た訳で、それが理由でエルロー大迷宮へと放り込んだのですが、これ以上無からという理由でエルロー大迷宮へと放り込んだのですが、これ以上無いくらいに上手く嵌まりましたね。おお！　なんて神采配なんでしょうか、当時の私は」

「ふんっ!!」

「緊急回避っ」と」

そのまま真横に腕を振り抜いたが、前転でもするように屈んでDが椅子から離れたことで空振りに終わった。

腕に絡んだ綿を払い落としながらDを睨めば、ゲーミングチェアを駄目にされたというのに飄々とした態度を一切崩すこと無く残骸を見て肩を竦めるだけだった。

「やれやれ、結構高いですよ、これ」

「知るか。ご自慢垂れるのはそれだけか？」

「一晩中でも語れそうですが……止めときましようか」

無表情のままなのに、やたら大袈裟で演技っぽい動作をしながら首を振っているD。

その顔と動作のミスマッチさが、なんとも気色悪く見える。

語られれば語られるほど、胸糞悪さが込み上げてくる私の誕生秘話の酷さ。

どれもこれも、全てはあんたが仕事したくないが為に偽装工作を頑張った結果が、私でしょ。

軽い、軽すぎる、馬鹿にしているだろ——それが苛立ちを加熱させる。

人というか蜘蛛の命を、一体何だと思っていやがる。

矮小だったのは認めるさ、所詮蜘蛛だもの。

でも、勝手にそう都合良く玩具にされて、気分が良いはずないし、ふざけるなと思う。

一寸の虫にも五分の魂というし、私が生まれたのはおまえのお陰だとしても、身代わりの玩具として弄ばれたことに変わりはない。

何か重要な意味があるのかも知れないと、怯えたことも。

最悪会いに行けば処分されるのかもしれないと、恐怖したことも。

何か契約や義務を科せられ不利益なことを押し付けられるのかと、嘆いたことも。

何もかも実は、たいした事ではない自慢を聞かされるためだけに、来いと呼ばれただど？

Dから面白い相手だと認められてる？ だからお気に入りっぽい？ 目を掛けられている？

もう……知るか。

あまり、嘗めた口きいてると……本気で反抗してやるぞ。

「ふふふ……その怒り、実に結構ですよ」

背筋が凍りそうな、平坦で無感情な声が響く。

だけど、その裏には何故か満足そうな愉快極まりないとも謳っているような響きにも思えた。

「あなたは自由であればこそ輝く。私はその輝きを尊重しますとも」

その方が面白そうでしょうと、重なって聞こえてくるようだ。

ゾワリと、全身に悪寒が走る。

それと同時に何故か、頭の奥が熱を持ったように茹だってくる。

な、んだ、これ……

奥歯を噛み締め、急な身体の異常に耐える。

何をしたと睨むが、Dはしまったとでも言いたげに腕を振るだけ。

「ああ……名付けをしたのは、少々失敗だったかもしれないですね」

膝をついた私に、Dが唇と唇が触れ合いそうになるまで顔を近づける。

「それでも、此処まで抗えているんですから見込みありますよ。

神にとつても名付けは重要な意味合いを持っています。名付けられた側は、名付け親との関連が強まるのです。魂を縛られるとも言えます」

私の白織という名前は、Dから授けられたもの。

なら、この感覚は……ッ！

「ええ、親から認められて、子であるあなたは恍惚を感じてしまう。これは格の差が大きいほど、より強力な支配力を持ってしまいます」

名前を授けられたその時点で、気付かないうちに最初からDに縛られていたとでもッ!?

「あなたは自由であれ。ですが、その自由の翼をもいではまえば魅力は減ってしまう。けれども、手元に置きたいと思ってしまう。それだけ魅力的だったのですよ……」

耳元で囁かれる、静かなハスキーボイス。
ふわりと絡みつくような甘ったるい匂いが薫る。

脳髓へと浸透してくる妖しい声色に、思考がグズグズに溶かされていく。

「あなたは私のものです、手放す気など更々無い。ですが、何処までも自由に飛び立って欲しい。私の軛を断ち切るほどに。そんな矛盾した願望を私は抱いているのですが、はてさて……どうしましょうか？

ねえ……白織？ 私に口づけをしますか？」

Dの声が、脳内で反響する。

魂に刻まれた本能が私に囁いていた。

ここで首を縦に振れば、極上の快樂と共に絶対の庇護を得られる。

闇のように、何処までも包み込むよううで安息に満ちた、深淵の法悦へ。

優しく引き摺り込むように、逃げ出すことも抜け出すことなども一生出来ないように……底なき闇の中へと私を誘っていた。

全身へと浸透しだした熱泥のような誘惑に、私は――

翠を纏う、小さな少女の笑い顔がよぎる。

「――ッ!!!」

思いつきり、Dを突き飛ばした。

そして全身で息をした。

身体を侵していたもの、その全てを吐き出し入れ替えるかのよう

に。に。「あらら、残念。ですが喜ばしくもある。一時的にとはいえ、私の支配に抗ったのです。これほど嬉しく思うことなどありませんよ」

ぜえー、はー、くそッ。

ほんとうの、ほんとに……ふざけるなよ、おまえ。

私が？ こいつに？ 魅了されかけただと？

弄ぶのも大概にしろよ、クソがッ。

「言祝ぎましよう、我が子の自立を。」

反抗期の子を持つ親とはこんな気持なのでしょね。抗い噛みつき、手を焼かされつつも成長をみせてくれる様は、なんてこうも楽しませてくれるのでしょうか。——初めての経験です。心より感謝しますよ、白織」

ぱちぱちと、やる気のない拍手が鳴らされる。

その言葉に宿るのは曇り無い澄み切った感謝のみだったのが、おぞましかった。

「そうかい。こちらは最低を下回るといふ、初めての経験をしたよ」

——クソ邪神め。

その絶対なる神の座から、大上段に傲岸不遜に見下してる。

いつか縛り付けて飼い馴らそうとした蜘蛛が、焼け付く毒牙を突き立ててやる。

よろめきながら立ち上がり、私は部屋から出ようとする。

惚けて腑抜けた肉体に鞭を打ち、背を向けた。

その時、これで最後だとばかりにDから語りかけられる。

「帰るのですしたら、お土産をどうぞ。近いうちに来るだろうと予想して準備していたのがありますから。ご心配せず、怪しいものなど入れていませんので。ただの菓子折りですし。帰ったらお二人でどうぞ」
クローゼットの中に仕舞われていた紙袋の束を、Dは取り出す。

そして差し出されたそれらを、ひったくるようにして受け取った。

そして——Dに言われたことで、もう少しだけ質問することが出てきた。

「ねえ」

「なんででしょう?」

「コケちゃんは……なんでコケちゃんは魔物の境遇だったのさ?」

彼女は、前世はごく普通の人間だ。

なら、人族に生まれるほうがよほど順当だろうに。

「ああ……それはですね。あなた以外にも数パターンほど、人外転生

になった転生者を見てみたいじゃないですか。場所こそエルロー大迷宮ですけど、生まれは厚遇してあげたんですよ？

彼女の生まれは下層でも有数の強さを誇る、コケダマ種の群れの中で誕生したんですから。集団生活が基本の群れに守られながら安全に力を付けて、いずれは群れを率いる魔物へと進化する。

そんな展開を期待していたのですが……なんともはや、不確定要素てんこ盛り自由意思に任せた放牧とは、かくも予想外を生み出し楽しませてくれるものなんでしょうね？」

悪びれることもなく、Dはそう嘯く。

腐汁滴る果実のように、甘くおどましい臭気で言葉を飾り立てながら。

分かっていたけれど、コイツという存在は性根からしてロクでもない。

その発想も考えも、誇るように実行した畜生行為にも。

「もういい……黙れよ」

耳が穢れる。

聞くに堪えない。

こいつは駄目だ——何かを言うのも耳を貸すのも、無意味でしかない。

その神としての実力だけではなく、中身という意味でも狂ってやがる。

Dが持つ深淵は、こうして対面しても浅瀬すら見えやしない。

一つの世界を滅ぼしてでも尚お釣りが来るような、そんな途方も無い力を人型へと凝縮したのが邪神Dなのだから。

絶対的な、抗えぬ破滅をもたらす存在。

死を司る者。

闇黒の享樂者。

Dに狙われるということは、死が確約されるのと同義だ。

それほどまでに絶対的な総量と格の差が、私とDの間には天地を越えるレベルで隔たりがある。

敵対した時点で、どんなに足掻こうとも生き残る可能性は完全に潰

えてしまう、絶望そのもの。

そうだと認識していたのを、さらに上方修正せねばならないだろう。

一番危険なのは、その力を気紛れで振るい、気に入った相手にはトコトン粘着的なほど執着する精神性だろう。

こんなことばかりやってるから友達居ねえだろ、絶対。

部下にも嫌われるんじゃないの？

なあ、最狂最悪のボツチさんよ。

「失礼なことばかり言ってくれますね……まあ許しますとも。

さあ、もうお行きなさい白織。

気が向いたら何時でも来ていいですよ。食事は大したものを出せませんが、ゲームの遊び相手としてでしたら歓迎ですので」

その言葉に対し、願い下げだと鼻を鳴らして、私は立ち去った。

Dから貰ったお菓子は、コケちゃんに出す前に毒見という事で試しに自分で食べてみたところ、気が付いたときには全部が全部、包装紙が開けられた状態で中身は残さず無くなっていた。

ヤツベ……

コケちゃんには地球に行ったこと、しばらく内緒にしておこつ。

罪悪感から、しばらく後にコケちゃんを私から遊びに誘った。

コケちゃんは不思議そうにしながらも、うん勿論と快諾してくれて。

そうして結構昔の、魔物時代の頃に思ったことだが——

前は一緒に出来なかった、海辺での水遊びを二人して心ゆくまで楽しんだ。

——それらのお話は、いつか機会があったら語るとしよう。

蜘蛛9. 75 記憶の中の故郷へ3 (22/07/08 挿話)

私が再び、地球のDの元へとやって来たのは、あちらの年数で数えておよそ一年半後。

此方へと来る発端となったのは、魔族領で起きた反乱未遂騒動にて、ある人を見つけたからだ。

それらの顛末は、だいぶ端折って説明すると……

まず諜報用の分体を開発した私は、手始めに魔族領内の情報収集をしていると、近々クーデターでも起こそうとしている勢力を発見した。

それを魔王へと報告を上げて、三日後には反乱軍の討伐部隊が編成されて出発したのだ。

傷跡が深くならない内にかしたいバルトによる、早期解決と短期決戦を目指した電撃的な作戦立案によって、鎮圧に乗り出される魔族の兵士たち。

そこに交じる、アエルにメラに鬼くんの姿。

更に観覧も兼ねて控えている私と吸血っ子。

残念ながらコケちゃんは狭間の国に行っていたので、開戦時には呼ばなかった。

そして始まる蹂躪劇。

魔剣で大暴れする鬼くんに、反乱軍を鎧袖一触なメラとアエルで、若干可哀想な光景だった。

そこで、監視していた反乱軍のリーダーらしき人物が見るからに機械っぽい通信機器にて何処かに連絡を入れて、反乱騒動にエルフの集団が乱入してきたのだ。

私自身は、領主屋敷の地下に設置された転移陣から逆に襲撃を掛けるべく別行動していた訳で、そっちでポティマスの人形含むサイボーグ兵相手とドンパチしていた。

けれど、その間に鬼くんがエルフの少女と出会って、その子供が前世で先生だった人である岡崎香奈美と名乗ったのだ。

その後は、そちらにも居たサイボーグ兵によって不意を打たれて先生を見失った鬼くんと、乱入した吸血つ子と人形蜘蛛らが殿で残ったエルフを残滅したことで、一連の反乱騒動は一先ず終結を迎えた。

反乱騒動が終われば、諸々の後始末や、首謀者の処刑判決と自決。……首謀者であるワーキスの死の様には、胸に来るものがあった。

何も世界の真実を知らなかったとはいえ、彼自身は魔族の未来を思つて反乱を起こして、信念に従つて凄絶な自害を選んだのだ。

自ら命を絶つなんて、馬鹿のすることだと思つている。

生きることを至上とする私には相容れない考え方。

でも、信念や誇りに殉じて貫き通した在り方には、敬意を抱く。

……次の転生までの一時の眠り。

安らかに眠れよ、憂国の魔族さん。

ワーキスの死に様もそうだし、魔王の強固な心の強さ、コケちゃん
の使命感……

私の周りには、強い人が多い。

実力という意味ではなく、精神の強さだ。

私には、あるのだろうか？ そんな心の強さというものが……

心無き力は、暴力であり害悪だという。

ならば、私がしていることは悪か、否か？

指針となる信念は、統括を担う誇りは、私に見つけられるのだろうか？

答えは、まだ出そうになかった。

なにはともあれ
閑話休題。

前世というかマジモンの蜘蛛だった時の恩人である岡崎先生が、やりにもよつてエルフなんか生まれれていて、しかもなんか利用されるっぽい様子だったのが、この騒動で発覚した最悪の事実だった。

だって先生は、あのポティマスの支配下にあると言つても過言じゃ

ないのだから。

魂に絡みつく、支配の根。

それがある限り、私たちは先生には一切手が出せない。

もしポティマスが先生を完全に支配したら、彼女自身の自我は消滅してしまうのだから。

不倶戴天の宿敵のもとに、恩人を生まれ変わらせる。

しかも彼女は人質にされているようなもので、命運を常に安全地帯引き籠もりの屑野郎に握られている状況。

そんなクソみたいな采配をした存在の心当たりと言えば、一人しかないのだ。

というわけで、クレームでもつけに行こうか。

「死ねえい!!」

「よつと」

空中に転移、からの流れるように回し蹴りいイツ!

しかし、なんとなく屈んだような動作で躲され、勢い余った私は壁に激突して隣部屋との直通路を開通させるだけに終わった。

「ふむ……丁度もう少し部屋が広ければ機材もつと置けるなーと思っていたんですよ。リフォームありがとうございます、白織」

「チイツ! なんだよお前、無敵か?」

「無敵ですとも。邪神ですので」

そーいうことじゃあーなああーいつ!

くそお、皮肉が効かないと分かっているけど、こいつの前では口が悪くならざるを得ない。

それだけム力つくのだが、敵意全開な私が目の前にいてもDは飄々とした態度を一切崩さないのだから苛立ちは怒髪天を衝くのだ。

「さてと、もう少し静かに来て欲しいのですが過ぎたことは流しましょう。いらっしやい、白織。今回は何用ですか?」

どうせ覗き見ですでに知っているだろうけど、直接言う。

「先生をエルフなんかに転生させたのは、お前のせいだろ」

「ええ。私も、いつあなた達が出会うのかと楽しみにしていたのですが、運命的な出会いでは無く人づての伝聞では、些かガツカリですね。

ドラマが無いじゃないですか。もつと劇的でなければ、観客は盛り上がらないというものです。クレームものですよ、これは」

「知るかッ！ こちとら、おまえを楽しませる為に必死こいてやってるんじゃないんだよ！」

何故、そんなことで勝手に期待され、勝手に失望されなければならないのか。

第一に、先生がなんの誰に生まれて、そして何処で何をしているのかなど、私は知らなかったというのに、そんな演出など出来るはず無いでしょ。

というか、知っていたら出会いもへつたくれも無いだろうに。

Dが床に転がったポテチの袋を取り、ぷるぷる震えながら開けた。

それを強制的に奪い取り、異空間に放り込む。

まったくマイペースが過ぎる。

無理矢理にでも主導権を握らなければ、いつの間にかDに呑み込まれてしまうだろう。

「先生を何故エルフにしたのか？ ですよ？ それを聞きに来たのでしょう？」

「ああ、だから話せ。私の我慢が保つうちにな」

無表情のまま、大袈裟に肩を竦めて嘆息している。

まるで聞き分けのない子供を相手にしているかのような、癪に障る身振りで。

それを努めて無視して、私は思惟を巡らせる。

私たち転生者は、Dの手によってあの世界へと転生させられた。

そして、その転生先についても振り分け選んだのがDである。

先生がエルフで生まれたのは、こいつがわざわざ選んだからに他ならないのだ。

「理由は決まっていますとも。その方が面白そう、ただそれだけです」
「だろうな——憤激すら起こりはしない、聞き飽きた台詞だよ。」

「あちらの世界において、エルフはとても重要な役回りを担っています。であれば……物語の登場人物として、一人くらいはエルフである

べき、そうとは思いませんか？」

ならないね。

創作と現実の違いだよ。

困難、苦境、不条理、試練、試練、試練、試練——

食傷気味でうんざりなんだよ、現実を生きる当事者としてはなあツ。

あちらの世界でのエルフは、全てポティマスの奴隷だ。

魂から縛られているのだから、ある意味で奴隷よりも悲惨なのかもしれない。

エルフらに真の意味での自由など無く、自覚のあるなし関わらず、奴の手足か駒あつかいだ。

そんな種族に転生させられた先生とか、いずれ盛大に爆発する厄介事の種ではないか。

当人も周りも不幸するだけの、哀しき未来を背負わされている。

「ついでに——エルフに転生者の存在を知らせれば、とても面白くなりそうだと感じたので、彼女には変わったスキルを進呈しました。

生徒名簿というスキルで、その能力は転生者の情報を断片的にですけど知ることが可能なスキルです。生まれ、現在、そして未来。そんなことを知れるスキルですよ」

……は？

ちよつと待て、おまえは何を言っている？

なら先生が魔族領に来て鬼くんのことを迷いなく言い当てたのも、ひいては吸血っ子がエルフに襲われていたのも全てはそのスキルが原因だと？

「ええ、今あなたが考えてる通りですよ」

まるで心が読めているかのように内心を見透かして、先だって言葉を打ってくるD。

「エルフの彼の動きは、私の期待以上でした。まさか転生者の大半を手中へと収めてしまうとは。少々やり過ぎて、予期したイベントの大半が陽の目を見ぬまま潰えてしまいましたよ」

残念そうに瞑目しながら、Dはヒラヒラと両手を上げた。

「どういうことだ、それはッ！」

「どうもごうも、それが事実です。それ以上のことは秘密ですよ。何をするつもりなのか、あるいは何の目的で集めたのか、肝心な内容のネタバレはNGですので」

私とあなたの仲だから、お教えしたのですよ——

動作だけなら見惚れるようなウイंकをしながら、Dは冗談めかして言うのだった。

「大人で良識があつて、なおかつ生徒に対してそれなりに責任感を持つている人物。そんな教師の鑑のような相手に、死亡予定時期などが示されるスキルを贈ったら、一体全体どうなってしまうのでしょうか？」

——ッ！

「まったく、先に手が出るのは悪い癖ですよ？」

振り下ろした拳から、紙一重の位置にDは居た。

その動きは、魔術なんかじゃない。

ただ、貧弱な若葉姫色という女子高生の身体能力で、一厘の無駄すらなく回避運動をした結果の光景だった。

まるで液体のように、目に見えぬ高速で墜落する拳から逃れた動作は、絶技の類いだ。

「健気ですよね。生徒のために、自身も幼い身体であるというのに危険を冒して世界中を回って、そして自らの手で助けようとした生徒を、最悪の相手に委ねているのですから。」

ああ、とても愛おしいです。彼女は頑張っていますよ、この私が是非とも称賛させて頂きたい。小さな身体で良く頑張りました。生木に隠された鋼鉄の拷問台の上に並べて、転生者を保護したと安堵している其処のあなた。その気分は如何様ですかねえ??」

「——黙れ」

鬱陶しい戯言をペラ回す口舌を断ち切るため、周りの被害すら考えない全力の一撃をDへと叩き込む。

これは流石に人並みの能力では避けられなかったのか、狙い違わず

頭を爆砕した。

しかし腕を引き戻した瞬間、時計を逆回しするかのようには、Dの頭部は瞬時に寸分変わらず元通りになっていた。

やはり無駄か、しかも再生した瞬間が認識できないほどの、気味が悪い復元速度だった。

しかも——打ち砕いた瞬間、微かに漏れ出たDの力の片鱗は、私を恐れさせるには充分なほどに恐ろしい代物だと、身体と本能で理解させられていた。

ほんの一瞬、刹那の間に掠めただけだというのに、私の腕は重度の火傷を負ったかのように皮膚がめくれ上がっていた。

殴った拳は、筋肉どころか骨さえ見えるレベルで、ズタボロの血濡れに。

そして——Dの内から漏れた、まるで死が溢れかえっているような、禍々しい気配。

死という概念が、凝縮して凝縮して更に凝縮したような、光すら殺す闇黒の極み。

最悪の邪神という自称が、それさえもDを表現するには欠片も足りていないような。

そんな窮極的な危険性と超越性が、この薄皮一枚下の闇黒にあったのだ。

「——ああ、失敗しました。これは気付かれたかもしれませんね」
「なんの話だ」

「いえ、気にせずとも結構。此方の話です……ですが、あまり時間は無いかもかもしれませんね」

ぼやくように呟くDに、私の表情は増々険しくなる。

「少しだけ……不思議には思いませんか？ あなたはどうして、そこまで先生に入れ込んでいるのだろうか、その自覚はありますか？」
何を言っている、そんなの当たり前ではないか。

「他の転生者なら、不幸になろうともそこまで気にしないはずです。転生者がいると知っていても視界に入らなければその存在を気にも留めやしない。今まで積極的に探そうとしてこなかった事がその良

い証拠でしょう。

苔にしろ吸血鬼にしろ鬼にしろ、目についた相手には手を差し出しますが、所詮出来る範囲で。見て見ぬふりはせずとも、全力を尽くしてあげるほどでは無い。彼らの境遇に同情こそすれ、共感して憤りなどはしない。——それなのに、先生だけはそれほどまでに憤る。何故でしょうか？」

それ、は——

言葉に詰まる。

反論の言葉が、すぐには出て来ない。

Dの言葉は、確かに核心を突いている。

あまり転生者に……というか人類そのものに、興味が然程無いのは事実だ。

なんか困っている様子だから気紛れに助けよう。

その程度にしか、気持ちを向けていない。

もし、出会わなかった場合。

その誰かが死んだと知っても、心にさざなみ一つ立たないだろう。

——ズキリ。

いいや、コケちゃんになら、出会ったことが無くても悼むくらいはするだろう。

そして今では、この三人のうち誰か一人でも殺されるような事があれば、怒り狂うはずだ。

長い付き合いがあるから、その時間で育まれた関係があるから、赫怒を滾らせることが出来る。

他の転生者だったら、こうはいかない。

先生の立ち位置を、別のクラスメイトが担っていたとしても——

またポティマス の 仕業か、可哀想に……としか浮かばない。

でも、先生にはそうではない。

直接顔を合わせたことは無く、一方的に此方が現状と境遇を知っているだけで、交流の積み重ねなど絶無である。

なのに——私は、強い怒りを覚えている。

こうして二度と会いたくないと思っていたDに、クレームを怒鳴り

に行くほど。

「ええ、ええ——実に面白いですね。蜘蛛だった頃の記憶なんて殆ど無く、恩も何も憶えていないはずなのに。魂に刻まれた想いとでも言うべきでしょうか。実に興味深いです」

そう、そうだ——私には蜘蛛だった頃の記憶は酷く曖昧で、音や色の無い映像フィルムの連なりでしかない。

けれども、それを補完するように若葉姫色の記憶で埋め合わせれば——無視できず忘れられないほど鮮明になっていく出来事がある。

『うわっ、でけえ蜘蛛がいる!』

『気持ち悪いな。おい、箒持って来い、潰すぞ』

教室の隅に巣を張った私を、登校してきた男子たちが潰して殺そうと言いつつ待つのですうー!』

それを若葉姫色ことDは眺めていて、私は何も分からずただ漫然とした危機感を察知するだけ。

『ちよつと待つのですうー!』

そこに先生が駆けつけて、箒を片手に持った男子たちを止めた。

『良いですか? 蜘蛛っていうのは益虫なんですよ? 他の虫を食べてくれる良い子ちゃんで、その糸は自然界の織物! 古来より蜘蛛に纏わる話は多く、蜘蛛が生まれながら織物の天才なのは神様にも匹敵する腕前の機織りが上手な女性が蜘蛛に変えられてしまったからだと言われております。……まあ、その女性は傲慢にも私の方が神様より上だと言い、作った作品が神様を扱き下ろすものだったから、怒りを買って蜘蛛にされてしまったんですけどねえ』

蘊蓄で気をそらし、私を庇うようにした立つ先生の背中姿。

『それ、眠くなるような古文か? 今度の授業で訳せとは言わないよなあ……』

『古文ではないのでご安心を。でしたら、昔は蜘蛛が何の生き物と混同されていたのかクイズしてみましようか。こんなにかわいい蜘蛛ちゃんのお話いっぱい探してきますよお』

『……蜘蛛は可愛くはねえだろ』

文句を言いつつ、不承不承で先生の言い分を聞き入れる男子生徒たち。

『みんなもー。この子は殺しちや駄目ですよおー?』

『へいへーい』『はい』

『良かったですねえ。君も一所懸命生きるんですよ?』

私を見上げながら、満面の笑みで笑いかける先生。

——ああそうだ。

あれがあつたからこそ、私はあの教室で生きる権利を与えられたんだ。

だから——先生は私の、命の恩人だった。

ゆえに、命には命の恩返しをと、そう私の魂へと刻まれたのだ。

そうしてホームルームが始まろうとした時。

『ごめんなさいっ、朝の家事で遅れました!』

『苔森さーん? ギリギリセーフなので大目に見ますが、明日からは気をつけてくださいね?』

『はい……』

忍び笑いがクスクスと広がり、それに晒された少女はただでさえ小柄な体躯をさらに縮こませ、肩を落としながら席に着いた。

そして彼女は、先生から私の扱いについて改めて聞かされ、その瞳で私のことを見詰めていた。

彼女の瞳には他の生徒たちとは違って、澄んでおり嫌悪の色が欠片も混じらないもの。

そして何故か、そう何故か——焦がれるような羨むような、そんな優しい微笑で私のことを見ていたのだった。

「——お遊戯会は済みましたか?」

ふと意識が過去から現実へと帰還した瞬間、突如横合いから知らない第三者の女性の声が響いたのだ。

跳ねるように振り向けば、そこにはメイドさんの姿が。

……え？　なんでメイドさんが？

伝統的なタイプと言うべきか、クラシカルなヴィクトリアンスタイルのメイド服に身を包んだ、楚々として優しそうな笑みを湛えた、大和撫子みtainな雰囲気美人さんが立っていたのだ。

その笑みはDへと向けられていて、優しげな笑みのはずなのに何故かとても怖いと感じる笑顔をにこやかに浮かべているのだった。

「——ええまあ。やれやれ迂闊でしたね。先程の再生で、これまでに色々と工作してきた居場所を誤魔化す仕掛けや絡繰りが、全部パアですわね」

「あなたは最上位神としての自覚が足りません。今回の家出は此処までです。さあ帰りますよ」

どうやら、この美人さんはDを連れ戻しに来た人？らしい。

Dのことを知っている以上、普通の人間では無いのは確かなのだが、一見して綺麗な美人さんにしか見えない。

母性に溢れるような雰囲気で吸い込まれるような柔和さだけど、少しばかり胸の厚みが足りないような……おっと、この手の話題はコケちゃんで、下手にイジると危険だと体感しているのだ。

気を逸らしていた刹那にも満たない時間、その間にメイドさんはDの首根っこを押さえており、Dのことを猫のように摘みながら、彼女は私へと視線を向けた。

「それで——なんですわ、アレは」

「アレは私の新しい玩具です」

アレ呼ばわりも、玩具発言も気に食わないが、今は口を噤む。

どうにも、目を逸らせばたちまち見失ってしまいそうなほど、このメイドさんは存在感とか気配が極限まで薄いのだ。

あきらかに魔術などは使っていない。

なのに、ありえないくらい存在感が消失しているのだ。

まるで存在感も何もかも、事象の彼方へ吸い込んでしまっているかのように。

だから、下手なことを言って不況を買うのはマズイ。

ただでさえ、Dとは売り言葉に買い言葉で喧嘩寸前で、あいつに反

抗しているようなものだし。

さらにDと同格そうな存在のメイドさんに、仕掛ける余裕など無い。

「ただの分身体ではありませんね。なんですか、これ？」

「あなたの目を誤魔化すために辻褃合わせで生み出したら、予想外に神になった突然変異の蜘蛛であり、さらに私に臆せず反抗して噛みついてくる可愛い子ですよ」

「……なんですって？」

私を置き去りにして、二人で話が進む。

その言葉の裏にて何が交わされているのか全く分からないけれどDの返答で、メイドさんが私へ初めて興味の籠もった視線を向けてきた。

「あなた、名は？」

「……白織」

Dから貰った名。

けれど、私にはこれ以外の名前など無いので、こう名乗るしかない。

「そう、白織……憶えておきますわ。では白織、私はこの家出常習犯を連行しますので、あなたは好きになさってください。——さあ、帰りますよ。仕事が溜まりに溜まっていますから」

「いやーだあー。帰りたくないです、仕事したくないです、このまま世界が終わる日まで遊んでいたいですうー」

稚児のように手足を振り回し、駄々をこねるDの姿になんとか眩暈がする。

そして誠に遺憾ながら、こいつが私のオリジナルだと改めて確信出来る仕草でもあった。

うつつつつわあ、見苦しいわああ。

「あなたが言うど、本当に世界の終わりまで遊び惚けるつもりでしょうに。それにあなたが仕事をしなかったら誰が代わりに冥界の管理をするのですか？」

「ん。——それが詰め込み教育をしてあとは実地で憶えろで、翠星にでも」

「誰ですか、それ。部下の中にはそんな名前も、代わりを任せられそうな存在もいませんよ」

メイドさんを指さしながらコケちゃんの神の名を上げるD。

当然、知らないメイドさんは首を傾げているが……

Dめ余計なことを、それでコケちゃんのこととも知られたじゃないかッ！

「その蜘蛛さんと同じく、新たに神へと至った存在ですよ。私が名付け親です。あげませんよ」

「まだ見もしらない相手に、欲しいとかもありません。それに聞くに新米でしょう？ 冥界の管理など成りたての神が出来るようなことでは無いこと。あなたが一番知っているはずですが」

「いやあ、それがどうにも可能性大って感じですよ。その白織とはまた違った輝く原石です」

「ふむ……」

顎に手を当て、思案するメイドさん。

どう出るか緊張が走り、いざとなればと覚悟を決めた次瞬――

「翠星なる存在については後々でいいでしょう。あなたも、そう身構えなくて良いですよ。どうもその方とは浅からぬ関係のご様子。なにも取って喰おうとする訳ではございません。いつかお会いできたら十分ですので。――なによりも、このサボリ魔を仕事漬けにして働かせる義務がありますから。では、ごきげんよう白織」

ふつと怜悧な気配を霧散させ、何処までも優しく抱きしめてくれるようなそんな穏やかな声色で宥めるように語りかけられた。

そして首裏を掴まれたまま、足を床に引き摺りながら回収されていくD。

なんて――原始的な方法っ。

「あつ、そうそう白織。すみませんがこういう事ですので、しばらくは此方に戻って来れません。従ってあちらの世界への干渉もまた、出来ません。システムは私が居なくても問題ありませんが」

ズリズリと連れ去られながら、Dが伝え残した事を喋っていく。

「その間システムは、私は干渉することが出来ません。つまり外部か

「何かしららの干渉があつても私個人は何も出来ないでしょうね」
「やたら、私は、を強調して説明するD。」

つまりは、好きにしろって許可証を出したって訳だ。

「そして、この家にあるものは好きに使つてくれても構いません。もしかしたら便利なアイテムがあるかもしれないよ。あとは、その机にある革表紙の本。それを翠星さんへ渡してください。彼女のために用意した神秘の品物です。きつと彼女の力となつてくれるでしょう」

Dの目線が示す先には確かに革表紙の本が置かれていて、なんとも言葉にしづらけれど、Dのそれとは違う神聖さを感じる風格ある一冊が、鎖で封をされた状態で沈黙していた。

私が視線を戻したときには、もうDは部屋の外へ消える寸前で、まるで哀れな子豚のように出荷目前な草臥れた姿であった。

「そして本当に最後に一言だけ……お話の通りに苔さんを妻として迎えるのも面白そうですね」

ちよつとまてやあ!?

なに言つてるんだ、こいつは!?

しかし、追いかけたときには、Dの姿もメイドさんの姿も無く。

ただただ薄暗いだけの廊下が、ポツンと静寂を湛えていただけだった。

そこに取り残された……私一人だけ。

寂しく無為に、振り上げた拳の行き先すら無いままに。

そして私は、本を回収すると――

とくに何も考えず詳しい確認もしないまま、それを後でコケちゃんへと手渡した。

そうして現代へと、流れる時間は到達し重なり合う。

あー、やっちゃまったかなあ……

振り返って見ると、私が向こうでやった行為って思いつきりDに喧嘩売ってるというか、挑戦状叩き付けてきた感じだよね。

ヤバイヨ、ヤバイヨ……どうしよううっ。

ロクな策すら無いというのに、いつちよまえに啖呵だけは切ったから、退くに退けない。

そして、コケちゃんと魔王を連れていった、システム中枢での出来事。

あれのせいで、コケちゃんは……

どうしたものかと悩んでいると、いつの間にかある部屋の前にいた。

「——ッ。……………」

しばし迷ってから、ノックをする。

ノックをして少し、聞き慣れた返事を耳にして部屋へと入った。

「どうしたの？ 白ちゃん？」

「……コケちゃん」

ベッドから身体を起こし、私を穏やかな目で見てくれる小さな少女。

コケちゃんがいつもと変わらぬ体で、私のことを迎え入れていた。

一見して休んでいるだけに見えるコケちゃん。

けれど今の彼女には、新たに刻まれた呪いの枷が絡まっていた。

眼には見えないそれは魂へと科せられた、世界との呪縛による繋がり。

私はそれを……システムに捧げられるまでの制限時間という枷を、あそこに罫があると知らずに掛けてしまったのだ。

悔やむ気持ちで、言葉が出ないままコケちゃんの傍へと歩いていき。

広いベッドの端に腰掛けた。

左肩越しに、コケちゃんの顔が近くで見える。

「……」

「……」

そしてそのまま、数秒の沈黙。

本来ならば私は、沈黙で空気が重くなることなど一切気にしないのに——何故かこの時だけは、どうしようもなく不快で息苦しく、胸が詰まるような感覚だった。

「白ちゃん」

「——ッ」

ビクリと肩が震える。

心臓が早鐘を打つみたいなのに、痛いほど収縮している。

そして何を言われるのか戦々恐々としながら固まっていると——そつと優しく抱き寄せられて、私の頭がコケちゃんの小さな胸に押し付けられていた。

「あ——」

「何も言わなくてもいいよ」

そう、頭上から聞こえてくる。

「何かを悩んでいたり、悔やんでいるのは見れば分かるよ。」

でも、言葉にすると辛いなら無理して言わなくてもいい。私は白ちゃんのことなら、何でも受け留めるから。だから大丈夫、気にしてないよ」

後頭部にて、慰撫するかのようにながな手が髪を撫でている。

「それでも気に病むのなら……うん、もう少しだけこのままで……もう少し、だけ……」

最後の方はか細く、消え入ってしまいそうな儂い音色。

本当は自分も辛いのに、それを隠して振る舞う、心押し殺した声。それが私にとつて、とつてもとつても聞くに堪えなくて、コケちゃんの背に腕を回した。

「わっ……うん、勿論いいよ。もう少しだけ……そう、私も少しだけ……白ちゃん」

透視と万里眼で全方位を見れる私は、コケちゃんの瞳に涙が浮かん

でいたのに気付いていた。

キラキラはらはらと、こぼれ落ちていく光の粒。拭ってやりたい、けど私も顔を上げることが出来ない状態で——頬に感じる、一条の熱。

流れ落ちる熱さは、どんな炎よりも肌を焦がすようだった。

——此処に誓うよ。

ならば私は、貴女のために。

必ず助けてみせるから。

だから待ってて、コケちゃん。——私の大切な親友。

そうして抱き合いながら、私たちは想いを分かち合い、痛みを分かち合うのであった。

甘く、優しく、光を感じながら、切に切にと相手の痛みが無くなるのを希って——

「んふふー」

「おわっ?」

体重移動と重力操作の魔術で、コケちゃんに抱えられたままベッドに転がされた。

そして——同じベッドで至近距離で見つめ合う。

「えへへ、久しぶりだね。こうして同じベッドで一緒になるの」

「いや……魔族領まで来るときには宿で同じ部屋にて寝泊まりはしたけど、それでもベッド自体は別だったじゃん」

「細かいことは気にしない。折角だからこのまま寝よう? 私たち二人とも、根を詰めすぎているから。たまにはリラックスする時間も大事でしょう?」

——まあ、いいか。

「おやすみ、コケちゃん」

「おやすみ、白ちゃん」

瞼を閉じて脱力する。

ベッドの柔らかさと、隣にいる小さな息遣いを感じながら、ひとときの安らぎを、私たちは享受するのであった。

勇者2 引き継がれるモノ

少し未来の、聖アレイウス教国、とある教会にて――

静まり返った聖堂の中。

ステンドグラスから差し込んだ光が、神言教の聖印を神秘的に照らしていた。

既に誰も居なくなつたこの場所で、僕は椅子に座つたまま1人動けずにいた。

ティーバさん……

オウツ国とサリエーラ国との戦争で、僕は悲劇を見た。

打ちのめされていた僕が立ち直れたのはオーレルと、彼のおかげだった。

ティーバさんにお世話になつたことは数知れず。

帝国の貴族で軍人の彼が口添えしてくれなかつたら、住民を守るために魔物を退治することも、勇者の肩書に縛られて思うように動けなかつただろう。

そして、世界各地で相次ぐ子供の行方不明と、それに関与する人身売買組織の調査と討伐も。

彼が常々忠告してくれたから、僕は物事を見極める眼を養えた。

彼が副官として側についてくれたから、ただのお飾りでしかなかつた僕が、誰からも認められるような戦士として前に進むことが出来た。

感謝してもしきれない程、多大な恩義を感じていた。

それなのに……

討伐隊結成から初の殉死者。

その二十二名の一人が、ティーバさんだった。

いつかは、戦いの中で誰かが犠牲になつただろう。

けど、その最初がティーバさんになろうとは、誰も想像もしていなかつたはずだ。

葬儀は粛々と行われる。

教皇が直々に取り仕切り、悲愁な表情を葬儀の最初から最後まで教皇は変えることは無かった。

それは、本気でティーバさんたちの死を悼んでいるように見えた。葬儀が終わった事で、棺は聖堂の外へ運び出されて並んでいるだろう。

聖女として討伐隊に同行し共に苦楽を分かち合ったヤーナや、お互い微妙な立場から幼馴染へとなったハイリンスは、既にそちらへ行っている。

葬儀が終わっても僕は椅子から立ち上がることが出来ず、ティーバさんが亡くなったという事実を受け止めきれなかった。

本当はただ悪夢を見ているだけで、この足で討伐隊の指揮所に行けば、ティーバさんがいつものように忙しく部下に指示を出している光景があるだろうと、そう思ってしまう。

けど、そこに居るのはきつと亡霊でしかなく、本当のティーバさんは外に並んだ棺の中に居る。

僕はそれを知ってしまうのが怖くて、棺を見てしまえば辛い現実に戻されるのが嫌で、今もこうして立ち上がれずに、俯き背中を丸めている事しか出来ない。

一人静寂の中で顔を伏せていると、いつの間にか僕の隣に座っていた人がいた。

「……師匠、来ていたんですね」
「うむ」

ケレン領での悪夢の襲撃後に弟子入りを志願して、魔法などの鍛え方を文字通り身体に刻み込むように教えてもらった師匠、ロナント様が座っていた。

帝国と聖アレイウス教国は別大陸にあるけれど、世界でも希少な空間魔法を使いこなす師匠なら転移して来る事が出来るのだろうか。

「ままならんものよなあ」

師匠は僕に顔を向けること無く、どこか遠くを見つめて呟く。

「儂より若いくせに、みんな儂より先に死んでいく。まあ、ティーバもいい年しておったがお。それならそれで、あともう少し粘って儂よ

り長生きせいつちゅー話じゃ」

悪態をつく師匠だけど、その声にはいつもの覇気が無く重苦しい。そして同期と呼べるような人は魔族との戦争でほとんど死んでしまい、数少ない生き残りであるティーバさんも亡くなってしまったのだと、師匠は物憂げな表情で哀悼を捧げた。

「ティーバさんは、師匠から見てもどんな人でしたか？」

「あやつが帝国で何と呼ばれているのか、知っておるか？」
「いえ」

けど、なんとなくどんな風と呼ばれているのか、わかる気がする。

「陰の英雄、じゃよ」

それを聞いて、驚きよりも先に納得が浮かんた。

身近で接してきて凄いい人だと実感してきたし、英雄と呼ばれても不思議じゃない。

師匠はティーバさんの活躍を語る。

堅実で、目立たないけれど要所要所でしっかり貢献し、後ろで支えてくれた。

それはまさしく、僕が感じていたティーバさんと同じ印象で。

彼が居たからこそ僕は、後ろを気にすること無く最前線へと踏み込むことが出来た。

そんな陰の英雄を、僕らは失ってしまったのだ。

「僕が、ついていけば……」

「お主がおれば？ ふん」

思わず呟いてしまった言葉に、師匠は面白くない物を見たかのように鼻で笑った。

そのことに僕は激昂してしまうけど、見返す師匠の眼に映った感情に掻き消されてしまった。

押し殺した、それでも隠せず抑えきれない、冷たい怒り。

その矛先が、僕に向けられていた。

「そうさな。最近では師匠らしい事が出来ておらんかった。久しぶりに、稽古をつけてやろう」

その剣幕に、その殺気に気圧されて、萎縮してしまう。

おもむろに伸ばされた師匠の手を、僕は避けることが出来なかった。

師匠に肩を掴まれるのと同時に視界が一瞬暗転して切り替わり、次の瞬間には乾燥した風が吹く見渡す限り何もない荒野へと、転移で連れて来られた。

「さて、では儂を殺す気がかかって来るがよい。儂もそうさな、半分くらいその気でやってやろう」

僕から数歩離れた距離に立っている師匠が、そう宣言した。

「え？ あのこと……」

「来ないのか？ 先制くらいハンデで譲ってやるぞ？」

本気だと感じた。

師匠は今、実戦形式で僕に稽古を付ける気だ。

師匠の修行は厳しく、それこそ生命の危機を何度も感じたほど。

だけど実戦形式の稽古は、今まで一度もつけてもらったことは無かった。

それが、どうして今に？

「……おっと。そういえばお主は今丸腰じゃったな。しょうがない。

これもハンデの一つじゃ」

師匠が虚空から杖を取り出した後に、剣を取り出してこちらに放り投げた。

宙に浮かんだそれを慌てて受け取り、鞘から刀身を引き抜くと見事な剣の姿が現れた。

「これは、魔剣ですか？」

魔力を流してみると、刃に火炎が纏わりついた。

「うむ。どこぞの馬鹿たれが、とある魔物に量産させたらしい物じゃ」

「魔物が……、魔剣を量産？」

僕は、そつとマフラーに手を添えた。

そんな話は聞いたことが無い。

魔剣の制作は難易度が高く、素晴らしき職人と謳われるような鍛冶師でも、容易には作ることが出来ない代物。

それを量産、しかも魔物が？

僕は過去の記憶を思い返す。

大半の魔物は、本能のまま暴れるだけの獣である。

ただ中には、確固たる意思を持っている魔物も存在している事を、僕は知っている。

魔物にも意思があつて目的がある。

それが相容れない時には、戦うしか無いって事も。

「まあ、その話は今関係無いの。それを貸してやるゆえ、本気で掛かつてこい」

師匠が剣の由来についての話を打ち切る。

そして、戦いたくなくても戦わなければならぬ時は幾らでもあると、一喝した。

師匠には引く気がない、なら覚悟を決めるしか無い。

「行きます」

「うむ」

師匠相手に手加減なんかして勝てるはずもない。

魔法を牽制に放ちながら、僕は剣を手にして駆け出した。

剣で斬り掛かっても、転移で避けられる。

発動まで時間が掛かるはずなのに、それを無い物であるかのような発動の早さ。

師匠が掲げた杖から、火球が飛ぶ。

初級の魔法だけど、師匠の有り余る魔法のステータスで威力を底上げされた魔法が、雨霰と連射されて僕に襲いかかる。

それを全力で走り回って回避する。

逃げてでもジリ貧と上級の聖光魔法をぶつけて突破を狙うも、初級であるはずの魔法に僅かに競り負けて、爆風がこちらに吹き込んでくる。

けれど、それで一步師匠に近づいた。

さらに踏み込み、空中で跳び上がり一步を、空間機動でさらに一步を。

一度見せた技は、もう通用しないと思い再び大地を蹴って走る。着地する瞬間を狙った火球を、光球で迎え撃ち余波は障壁とマフラーの特性で強引に突破する。とっておきの光魔法によって生み出された幻影が、師匠の眼を欺く。

だけど、師匠の勘の良さから初手で本物の僕に火球を放ってきた。僕はあえて避けることもせず直撃をくらったけど、そのまま幻影のダミーを動かし続けた。

師匠の気がダミーに向いている隙に、さらに距離を詰める。あと二歩！

至近距離で放たれた火球を、炎を纏わせた魔剣で迎え撃ち振り抜く。

熱い、苦しい、それでも前へ！

あと一歩！

「距離を詰めれば勝てると思うたか？」

目の前に杖が迫る。

一瞬、予想もしていなかった事態に頭が真っ白になる。

それを見逃す師匠ではなく、距離を狂わされ反応が出来ない僕は、強かに顔を強打された。

よろけてたたらを踏む僕に、追撃の火球が襲い掛かる。

視界に広がる赤色に、僕は咄嗟にマフラーを絡ませながら左手を掲げた。

「はあああつ!!」

魔蛾の翅に包まれた拳が、火球とぶつかり合う。

拳が振り抜かれると、炎は全て掻き消され霧散した。

「なんと!?!」

だが、拳は師匠には僅かに届いていない。

すぐさま体勢を整えて剣を振ろうとしたが、それより先に師匠の火球が無数に襲い掛かった。

気づけば僕は、地面に倒れて空を見上げていた。

「どうじゃ？」

「……あと、一歩だったのに」

思わず不満と文句が、口から溢れてしまった。

「馬鹿を抜かせ。儂が本気なら一歩すら踏み出せずに、あの世行きじゃわい。まあ、ちと最後には少し本気を出してしまったがお」

確かに、師匠は手加減していたし、当たっても死にはしない程度の火球しか使ってこなかった。

転移も最初の一回しか使わなかったし、それこそ本気だったのなら僕が距離を詰める事は不可能だった筈だろう。

「己の弱さを思い知ったか？」

「……はい」

まだまだ僕は弱く、師匠には勝てない。

その差に忸怩たる思いを抱く。

「なあ、ユリウス。……ティーバは弱い男だったか？」

「いいえっ!!」

即座に否定する。

決してティーバさんは、弱い人では無かった!

「そのティーバが為す術なくやられた相手じゃ。お主がいたところで死体が一つ増えただけじゃ」

「それは、でも……」

「もう一度聞く。己の弱さを思い知ったか？」

その質問に、僕は答えることが出来なかった。

師匠は続ける。

己よりも強い相手と戦ってしまっただけで、それが全てだと。

弱ければ強き者には勝てず、今回の事は相手の方がティーバさんより強かったただけだと。

その物言いに、僕は堪えきれず噛み付いた。

「それはっ！ 師匠は強いから、そんな事が言えるんですっ！」

手のひらに爪が喰い込む。

師匠であれば負けないだろう。

なぜなら人族最強の魔法使い、それが師匠だからだ。

「違うな。儂は弱い。……お主から見て強いというだけで、儂もまた、弱いのだよ」

しかし、師匠の言葉は思っていたのとは正反対で、真実一片の疑う余地も無く自分は弱いのだと確信しているようだ。

そして師匠は語る。

人はどうしようもなく弱いのだと、人という括りでは強い師匠でも敵わない存在がいると続け、迷宮の悪夢を例に上げた。

僕が何をしても届きそうにない師匠でも、勝ち目がないと宣言する悪夢。

それと同格と目された亡霊にも、結局僕は何もしていないし出来なかつたと思ひ浮かんだ。

「弟子一号よ。己の弱さを自覚せよ。この世には、勇者であろうと人には手に負えぬ相手がいる事を知れ。不可能は不可能なのだ、それを理解せよ」

そんなの、どうしろって言うんですか師匠。

悲しみが溢れて止まらない。

上手く言葉に出来ない想いが、叫んで喚き自分でも何を言っているのか、わからない。

「どうしようも無い事は、この世にごまんとある。じゃが、全力で生きることを否定はせん」

だけど、ティーバさんが全力で生きそして死んだ事に僕が口を挟むのは間違いだと、彼の生涯を汚す行いだと叱責された。

「なんで、こんな……ッ」

「よい。今は何も考えず泣け」

人は生きて、いつか死ぬ。

それは変えられないし、死に方も選べない。

けど大切なのは、どう死んだかではなく、どう生きたか。

生者である僕たちは、ただ死者を悼み生き様を想うだけでいいと、

師匠は語った。

ひとしきり泣いた後、僕は師匠の転移で聖堂に戻り、ティーバさんの納められた棺に、今までの感謝を込めて最後の別れを済ませた。

周りには、赤く泣き腫らしたヤーナとオーレルが、棺に縋り付いて泣いていた。

「師匠」

「む？」

僕は決意を乗せて宣言した。

「僕も、ティーバさんのように。死んだら泣いて縋られる、そんな生き方がしたいです」

「すればいいじやろう。それはお主の自由だ」

「はい」

けど師匠は忠告だと、告げた。

「じやがな、言ったように己の弱さを、まずは自覚せよ。……自分に来ること、出来ないことを見極めることが出来ずに無謀をすれば死期を早める。生きてこそその生き方じや」

その言葉に、僕は深く頷く。

けど、師匠はその反応に納得していない様子で。

「言うでもお主は無茶しそうじやがなあ」

「しませんよ」

「どうだかのう。……よし師匠命令じや。儂より先に死ぬことは許さん。よいか？ 儂が死んだら今日以上に泣いて儂の棺に縋るがよいぞ」

「それはちよつと……」

思わず苦笑してしまう。

師匠が死ぬところが想像できなかったし、もし師匠が死んでも今日より泣ける気がしない。

「おい、それはどういう意味じや？ 儂とて簡単にはくたばる気は無いとしても、その反応は無いいじやろう？」

「いえ、何でもありません。はい」

でもきつと、師匠が亡くなる日が来れば、僕は泣き叫ぶんだろう。

「そんな日が来ないことを、願ってます」

「来るさ。人はいつか死ぬ。来ないというのであれば、それは儂の命令に違反した時じゃ。師匠の命令も守れぬような不肖の弟子になるんじゃないぞ？」

「ええ。もちろん」

僕はこの日、ティーバさんに死を教わり、師匠に生きるということを教わった。

それを、心に刻みながら、僕は誓う。

いつか死ぬ時まで、ティーバさんのように立派な生き方をして行こう。

師匠は帰ろうとした時、僕に向けて大きな袋を押し付けた。

「これは？」

「餞別じゃ。馬鹿弟子が何処か途中で無駄死しないように、要らないもの押し付けただけじゃ」

中を見ると、さつき師匠に貸してもらった魔剣と同等の代物が、複数詰め込まれていた。

それ以外にもポーシヨンらしき小瓶も入っている。

「こんな高価な物、受け取れませんっ」

「受け取れ、どうせ儂には必要ない物じゃ。それとも何か？ お主はこれを使いこなせず、自分は道具に使われてしまうと、そう言いたいのか？」

そう言われてしまうと、何も言えなかった。

「儂に剣は使えん。それに、どこぞの馬鹿たれに譲ろうとしていた物も、いつの間にか変質して儂には使えぬ代物になっておったしのお……」

「それは」

師匠は遠い目をしたまま語る。

「ネクタル。紅いポーシヨンがあるじやろう。その効果は一人の時に鑑定してみるといい」

そう言つて、反論も返品も受け付けないと、師匠は去つていった。後で知つたネクタルの効果は、一時的な不死性と神の如き力を得ること。

　　だけど資格無き者が飲めば、待っているのは死。

　　師匠、こんな物どうすればいいのですか。

　　勇者だからといって資格があるとは限らないのではと、僕は思った。

幕間3 天体観測

久々の魔族領に全員揃っている今日この日。

吸血っ子は学園休みだし、メラと鬼くんは軍生活だけど今は重要な仕事も無いし多分暇なはず、コケちゃんも今日は魂の休息所から魔族領へ帰ってきている。

私？ 今日も今日とてニート生活ですが、なにか？

一応、諜報用分体を使って各地の情報収集は行っているから、全く仕事していない訳では無いんだけどね。

大急ぎで、ある用途に特化した分体も開発中だけど、まだまだスベックが足りていない。

……もどかしいなあ。

そんなふうに悠々自適に生活していて、折角だし魔王から直接進捗を聞きに行くかと考えていると、窓の外から魔術の気配がした。

この魔術の質はコケちゃんの物。

隠蔽と幻影の魔術を重ね掛けてして周囲から察知出来ないようにしてあるけれど、構築発動の方法が独特だから見分け方を知っていれば気付く事は難しくない。

透視と千里眼を組み合わせて外を見てみると、以前の姿である魔蛾に変身したコケちゃんが魔王を吊るして空から運んでくる光景だった。

邪眼なんか使ってきた影響か、眼の性能は結構良いので目視すれば大体の事はわかる。

なので、いわゆる認識阻害と光学迷彩が合わさった状態でも、問題無く2人の姿を把握できた。

そして上空から公爵邸の敷地内に直接落下してきた魔王は、真っ直ぐ私の部屋へとやって来て、開口一番こう言った。

「白ちゃん、報告ありがとう。早速だけど狩りに出かけるよ。今回はかなり大掛かりな戦いになりそうだからソフィアちゃんにメラゾフィスくん、それとラースくんとかも呼んでね」

肩に手のひらサイズの翠色の魔蛾を止まらせた魔王は、説明を続け

る。

ていうか、肩のそれコケちゃんの分体……いや眷属か？　なら本人は今も上空でホバリングして待機しているけれど、会話は聞いているって事か。

どうやら魔王が来たのは、私の分体が見つけた魔族領の北側から魔物の群れが南下してきそうと言う、魔王へ送った報告書を読んだかららしい。

南進して来ているのはデルームベイクという、オオカミとクマを足して2で割ったような顔に、二足歩行も四足歩行も出来るような、人に近い骨格をした毛むくじやらの魔物だ。

「……吸血っ子たちとか、全員で？」

「そそつ。無視するのも問題だし、数が多いから取り零しが無いように大人数でね」

『他の人に声を掛けるのは私の眷属が向かっていて、全員に魔王城に集合するように伝えているよ』

コケちゃんの声で魔蛾から念話が飛んできた。

術式の糸を手繰れば、この魔蛾を端末として経由し本体から声が届いているみたいだ。

「それじゃあ、行くよー。今日は熊鍋じゃー！」

「いやあれクマじゃないし」

『……毒は無いから、一応食べられると思うけど』

そうして、三者三様に纏まりのない私たちだったけれど、準備は滞りなく進んで出発した。

はい、やって来ました魔族領北部うー！

ここまで全員運んだのは私。

転移で、ぱぱとね。

にしても、寒い！

冷たい突風が吹き抜けて、底冷えするような気温に体が震える。

手先がかじかみヒリヒリとした痛みが継続的に襲ってくるので、無

いよりはマシと即席の手袋を糸で作って手に被せる。

ある程度厚みを持たせて防寒効果を高めたけれど、材料が材料だからか舞踏会とかで使うようなお綺麗な手袋になってしまった。

吸血っ子たちが、剣を持つのに邪魔だからって素手のままだったから、用意するの忘れてたよ。

その吸血っ子はデツカイ大剣を握りしめ、体長3メートルくらいの魔物と鬼ごっこしながら斬り掛かっていた。

重量を感じさせずに振り抜かれた大剣は、綺麗に魔物を両断して次の獲物へと向かった。

うん、楽勝みたいだね。

デルームベイクは魔族領ではかなり強い部類の魔物で一匹出るだけでも大事件なのに、吸血っ子には一蹴出来る程度の強さでしかない。

その程度である以上、私らにとっては脅威に感じる事は無い存在なんだけど……

数え切れない程のデルームベイクの群れ。

それが周囲の木々と雪原を埋め尽くすように広がっていて、突然縄張りに侵入してきた私たちに向かって襲いかかってきていた。

こんな数のデルームベイクの群れが街に到達したら、冗談抜きで壊滅しかねないね、うん。

ただでさえ、魔王が圧政を敷いてカツカツなのに魔族領の北部が壊滅したら戦争に参加する人員が減っちゃうので、こうして被害が出る前に駆除している訳だけど。

チラツと発起人の魔王と、一緒について来た人形蜘蛛たちの様子を見る。

あいつら、魔物そっちのけでスケートして遊んでやがる！

働けよ、おい。

いや正直、過剰戦力だから魔王たちが居なくても問題無いんだけどね。

けどだからといって遊んでいる姿を見ると、なんだかねえ……

一方働いている方では、メラが雪原を走り回って常に一对一の状況

になるように立ち回り、隙を無くし逆に相手の動きを見切つて、堅実に戦っていた。

無駄のない綺麗すぎるほど型通りの動きで魔物を斬り捨てると、また型通りの一撃を放つて作業のように1つ1つ処理していく。

見えて安心感が湧く戦い方だね。

鬼くんの方と言うと、カウンター戦術？ あんまり積極的には攻勢には出ず一太刀ごとに攻撃を止めて、何かを確かめるようにまた同じ動きで攻撃している。

なので、周囲を塞がれたり魔物から一発貫いそうになっているけれど、余裕を持つて魔物からの攻撃を捌いているし、わざと苦境に自分を追い込んで技を試している感じかな？

その証拠に、主にメラの戦い方を観察しながら戦っているし。

修行しながら戦っているとか、向上心が高いことで。

最後にコケちゃんだけど、……最も訳わかない戦い方をしているなあ。

上空にて羽ばたいている魔蛾の大群からは、超圧縮されたウォーターカッターが飛んでくるし、地面からは金属光沢のある杭が突然生えてくるで、穴だらけにされた魔物がいたるところで無数に転がっている。

しかもこれ、コケちゃんからしたら末端の分体だけで戦っているようなモノで、じゃあ本体では何しているのかと言うと、こっちもヤバイ。

魔物姿での最終形態だったモフ・モフラスの姿で魔物の群れに突撃し、攻撃を回避しながら深くまで潜り込むと、瞬時に全身を苔で覆つて巨大化しコケダマ化、落下地点に居た魔物ごと押し潰しながら着地する。

そして巨大な球体から3つほどドラゴンに似た頭部の長い首が生えると、鋭い牙をしている顎で噛み付き薙ぎ払いながら周囲の魔物に襲いかかっていた。

周囲に魔物が居なくなれば、再び身体を作り変えて魔の山脈で見たドラゴンと同じ、やたら尻尾だけ長い蜻蛉龍になって、直接飛び掛か

り殴りかかっていた。

……うん、めっちゃ化け物。

戦闘スタイルの模索って事で色々な方法を試しているらしいけど、あれは純粹な身体能力の強みを最大限発揮出来るようにしたスタイルらしい。

だからって人型捨てるって、やりすぎじゃない？

高速で肉体を作り変え続けているので、外傷を負っても姿が変われば消え去る。

本来の肉体は苔の集合体だから、血なんて流れていないので失血死も無い。

なので、ダメージとなるのは基となっている苔を減らす事だけど、切り飛ばしても再度吸収するから意味無し、焼いて滅らそうにも以前の反省からか熱や酸などの耐性を引き上げているので簡単な事では無い。

どっちが魔族領で恐れられている魔物か、わからなくなるね。

全く戦い方の参考にならないからか、鬼くんからは目を逸らされているし。

にしても、私はアラクネ形態にしかねないのに、コケちゃん変身パターン多くてズルいぞー。

まあ私が蜘蛛型になったらなつたで、毎回服が脱げるだろうし使わないと思うけど。

コケちゃんの場合だと、服ごと取り込んで人型になる度に再構成する荒業で、変身後の問題点を解決しているんだよね。

そこまでするんかい。

そんなこんなありつつデルームベイクの群れを一掃し終わり、少し離れた凍った池だか湖だかでスケートをみんなですっていると、怖気が走るような咆哮が遠くから聞こえた。

「うひゃあ!?!」

「お嬢様!」

「あつ……。メラゾフェイス……っ」

驚いてバランスを崩した吸血っ子をメラが抱き留めて、甘ったるい雰囲気を展開しているけど、それを無視して千里眼で咆哮の発生源を探る。

すると山を幾つか挟んだ先に、比較対象が山となりそうな超巨大な魔物の姿があった。

そのシルエットはカバとかイノシシに近いだろうか。

ずんぐりした胴体に短い手足が生えているんだけど、足の本数が4つじゃなくて8本もあるし、サイズが大きすぎて胴体と比較すると短い手足の筈なのに、足だけで小山ほどの高さがある。

「あー。コイツから逃げてきたのか」

魔王も確認したのか、山越しに超巨大カバの方を見ていた。

「間違いなく神話級だね。流石に魔族領まで降りてこないと思うけど、こんな近くに居座られたら魔物の大移動が何度も発生しちゃうよ」

神話級ってマザーとかと同格の魔物じゃん。

そんなのが何でこんなところに？

「それはわからないけど、ちようど戦力が揃っているんだし退治しようか。白ちゃん」

まあ、それがいいか。

エネルギーの回収にもなるし、あの巨体なら分体作成時の材料として丁度いいかも。

そんな事を魔王と相談していると、すぐ近くにて手のひら大の魔蛾が人型に集まりだし、それが一度全て苔に変わると、次の瞬間にはいつもの魔女ルツクのコケちゃんが居た。

「周囲一帯で魔族領に逃げ込もうとしている魔物は、眷属みんなを幾つかのグループに分けて配置することで押し留めているよ。こっちは任せて」

「そっか、それじゃあ行こうか、白ちゃん」

領き、魔王だけ連れて転移しようとした所、待ったが掛かった。

「ちよつと待ちなさい！ 私も連れていきなさいっ！」

「お嬢様！ 相手は神話級です、危険すぎます」

「メラゾフィスさんの言う通りだと思うよ。今回は、僕たちは残ろう」
好戦的な吸血つ子が私も参加させると吠えたてている。

うーん……神話級を相手に最低限戦えるだけの能力はあるけれど
正直、不安が。

「まあ、いいんじゃない。上を見る良い機会だし、危なくなったら私が
瞬殺するし」

ちよ、魔王!?

「アエルとリエルはメラゾフィスくん、サエルとフィエルはラーズ
くんについて援護して。私はソフィアちゃんをカバーするから。そ
れじゃ白ちゃんお願い」

あーもー、仕方ないなあ。

私は、最後にコケちゃんを見て小さく呟いた。

「……行ってくる」

「行ってらっしゃい、白ちゃん」

そうして私たちはコケちゃんを残して、山より大きい神話級の魔物
へと戦いを挑んだのだった。

再び転移して凍った湖近くへと戻ってきた。

多少吸血つ子たちに経験を積ませるって事で戦わせたけど、全く攻
撃が効いてないわ。

あれは単純に耐久力が高すぎて微々たるダメージしか入らないし、
それも膨大なHPからすれば誤差の範疇だし高速で自動回復するわ
で、全然歯が立っていないかった。

最終的には魔王パンチのラッシュで頭グチャグチャに陥没させて
大地に沈めた。

やっぱ魔王の強さ、化け物だわ。

「おかえり。危険な魔物は魔族領に入る前に全て撃退したよ」
「ただいま」

背後では、吸血つ子たちが崩れ落ちる音が聞こえた。

何度も生命の危機があつたし、神経をすり減らす場面は数え切れない程。

そんな戦闘を経験したんだし、吸血つ子には少し大人しくなつて欲しい。

……無理だよなー。

「ソフィアちゃんたちは無事？」

「……ん、怪我はない」

既に魔王が治療したから傷一つ無いはず。

けれど、コケちゃんは念の為と治療するみたいだ。

「この方法は治療魔法とは別の原理だから一応ね。《詠い始めよう、女神と娘とを——》」

コケちゃんが最後に魔力を込めて言葉を発すると、その手元にDからコケちゃんへと渡すように言われた、あの怪しげな本が現れた。

そして、その本は独りでに宙に浮かび、淡く水色に発光していた。

「なに、それ」

「ん？ 詠唱？ それとも本？」

「……どつちも」

私の知っている魔術では詠唱なんて必要無いし、コケちゃんが今使った魔術の理解不能な謎術式に目眩がしそうだ。

「詠唱は、ある程度本を読み進めていたら自然と脳裏に浮かんだ言葉。それから本と私が一体化したみたいだね、こうして特定の言葉を呟けば呼び出せるようになったんだよ」

コケちゃんは本を手を持ち、エネルギーを流し込む。

それと同時に表紙へと青白い線が広がっていく。

「そして本は、魔術を発動させる時の補助として使えるほかに、発動出来ないと思っていた高度で複雑な魔術も、こうして発動出来るように使い方を教えてくれる」

私の横を通り過ぎ、しゃがみ込んでいる吸血つ子たちに向けて、コケちゃんは魔術を発動させた。

「《慈愛溢れる母は、生命を豊かに実らせる——》」

いつか見た、コケちゃんが真に神として覚醒めた時と同じような、

花びらのように穏やかな淡い光が吸血つ子たちを包み込んだ。

その魔術の構成は気が狂いそうになる程の高密度な術式の塊で、かろうじてコレが魂に作用している類の魔術だと言うことしか、理解出来なかった。

そして光が収まった後の場所には、先程までの衰弱が嘘のように消え去った吸血つ子たちの姿があった。

「……主に精神的な疲労だった筈なんだけど、綺麗サツパリ消えているわ」

「この感覚には、覚えがありますね……」

「これ、副作用とか無いの？ 疲労感を遮断しているだけとかだと危ないんじゃない？」

治療を受けた側の吸血つ子たちは、結構辛辣なことを言っていた。

「何も副作用はありません！ 肉体と魂、両方の状態を回復して安定させた事で活力とか全部復活させただけで、ドーピングとかじゃ無いから」

コケちゃんに吸血つ子が詰め寄って、喧しく吠えあっている。

その光景を横目に見ながら、私は面白くないという感情と少しの焦りを憶えた。

魔術の腕では、コケちゃんに置いていかれている……

空間とか闇など、得意な魔術の系統なら私のほうが上だけど、それ以外の魔術では圧倒的に私が遅れて後塵を拝していた。

使い方の違いと言えばそれまでだけど、身体強化の魔術を常時発動させるのはコケちゃんの方が先に成功させたし、扱える幅も許容量も今の所コケちゃんの方が上。

私の場合は、分体が増えれば増えるほど能力が向上していくけど、それでも簡単には埋まらない差というモノを感じていた。

猶予は僅かしか無いのに……

それを感じさせず、普段通り振る舞うコケちゃんを見て、胸がチクリとした。

……強いなあ、コケちゃん。

そう思っていると魔王が隣に居た。

すると、手を叩いて注目を集め、みんなに語りかけた。

「よし折角だから、この後は魔王城の最上階で待機しようか。面白いものが見れるよ」

「えー。さすがにもう帰って寝たいわ」

「まあまあ、ソフィアちゃん。メラゾフィスくんも良いかな？」

「まあ……、構いませんが」

「行くわっ！」

メラが参加すると聞いた途端、意見を180度回転させる吸血っ子。

それを見て苦笑する鬼くんに、穏やかな表情で眺めているコケちゃん。

そして、魔王城の最上階で見えたのは。

「この世界にも、彗星がやって来るんだね」

コケちゃんが隣に来て呟く。

そういえば日本語だと、コケちゃんがDから付けられた名前と、音が一緒だ。

「また、みんなとこうして星を見ようね」

そう言っただけに座り込み、星を見上げた。

私も同じように座り、鮮やかな光放ちながら澄み切った夜空に尾を走らせる天体を見て、らしくないと思いつつも、そっと星に願いを託した。

この日の小さな約束が、いつか必ず叶いますように、と……

幕間4 ハロウィン

もうすぐ本格的な極寒の季節が訪れようとしている季節。

この世界では、ちよつとした収穫祭が農村地帯で行われ、都市部では特に行事やイベントなどは無い時期である。

だけど、ふと思いついて時期的にも今がピッタリだったので、予定を変更して今日は白ちゃんの所にやって来て、こう言った。

「白ちゃん、とりつく・おあ・とりーと」

「えー、……何も用意していないんだけど。……取り敢えずいつものお茶菓子いる？」

いつものように公爵邸で、まったりお茶を飲んでいた白ちゃんは、テーブルに置かれたお菓子を指しながら、呆れた表情を浮かべていた。

その反応は予想していたので、私は持ってきていた物を取り出した。

「まあ、こつちにはハロウィンなんて風習無いから、最初から配る用のお菓子作ってきたけどね。はいどうぞ」

「わーい、おかしだあー」

棒読みの平坦な口調で答える白ちゃんは、さつそく包みを開いて中身を取り出した。

そして一口、唇へと運んだ。

「うまー、なにこれクッキー？」

「クリクタ入りクッキー。作り方は前世と変わらなかったけど、材料が小麦粉の代わりに芋粉って言うのが異世界らしいね」

魔族領の街でもお手軽な値段で売られているクッキーもどきだけど、それに一手間加えて果物のジャムなども練り込んで、材料の選定から作り方まで結構本格的に考えて作った一品だ。

わざわざ変装までして人族の大きな街まで転移し、質のいい材料を買いに行ったほどである。

「それで、なんで急にこんな事を？」

「たまには息抜きも、大事かなって」

これから津波のように押し寄せる数々の計画のために、最近の私たちは寝る暇も惜しんで仕事に準備にと追われていて、それは白ちゃんも例外では無かった。

だからこうして気分転換に、前世に因んだ遊びを持ちかけたのだった。

「……まあ、いつか。魔王とかにもあげるの？」

「もう渡してきた。ハロウィンとかは関係無く、ただの差し入れとしてね」

「そっか」

アリエルさんは主に方針を指示するだけで実務自体は少ないから余裕ありそうだけど、軍団長に就いて激務に追われるメラゾフィスさんや同じく魔族軍で仕事に奔走しているラースくんなどは、今にも倒れそうなほどオーバーワークな日々が続いていた。

「コケちゃんは、今暇なの？」

「今日くらいは平気。でも、また明日からは仕事漬けになると思うけどね……」

だからこそ、日常を楽しむ機会を大切にしていきたいと思う。

もう、あんまり時間は残されていないのだから。

「そろそろ帰るね。白ちゃんも忙しいだろうし」

「いや別に。……どうせならさ、もつと盛り上げた方が楽しいんじゃない？ ちょっと付き合ってくれる？」

「……うん？ まあ、勿論いいけれど……？」

そして次の瞬間には、景色が暗転して違う風景へと切り替わった。

近頃、退屈だわ。

白は公爵邸から何処かに行くことが増えたとし、苔森も月イチでしか帰ってこない。

そして私は学園に放り込まれてメラゾフィスと引き離されるわけで、暇で暇でしようがない。

外出も面会も、面倒臭い手続きを踏まないと出来ないから自由なん

て無いし、強引に脱走しようとする、サエルとリエルとフィエルが邪魔してくるから不可能。

ていうか、実際試して失敗したわ。

ふざけんじやないわよ。

同じクラスの人とかは？

有象無象のガキどもはお呼びじゃないのよ。

あのマウント取りたがりの腹黒は、点数でいつも負けているからって対抗心燃やしてベタバタと毎回絡んでくるから、監視されているよ。うで正直ウザイ。

腹黒の婚約者らしい委員長も、絡まれて迷惑被っているのは私の方だというのに、婚約者のいる男性にみだりに近づくなだとかネチネチお小言注意してくるし、こっちもウザイ。

なんか知らないけれど、他のクソガキどもも気を惹こうと私に些細なちよっかい掛けてくるし、学園に行っても面倒事が舞い込んでくるだけなのよね。

目に留まりたいなら、メラゾフィス並みのいい男になってから来るがいいわ。

まあ、無理でしょうけど。

「メラゾフィス成分が足りないわ……」

「……なにしているの、ソフィアちゃん」

「っ!？」

寮の自室で愚痴を呟いていると、突然白と苔森が部屋の中に現れた。

予兆も何も殆ど悟らせずに気がついた時には既に部屋の中に転移してきた二人は、戸惑いと呆れが混じった表情でこちらを見ており、それを私は糸に縛られた状態で見返していた。

なんで糸で縛られているのかって言うと、ついさつき学園から脱走しようとして捕縛されたからに他ならないからよ。

「……」

「……」

「何の用よっ?」

「あー、私は白ちゃんに連れて来られただけだから……白ちゃん？」

「……連れて行く」

そう言つて白は簀巻き状態の私を掴んで、何処かへと連れ出そうとした。

襟が絞まつて苦しいのだけれど、退屈していたし出掛けられるのなら多少扱いが雑でも寛大な心で許せなくもないわと、苛立ちを抑えて考えていたら苔森が白に質問してくれた。

「私も、何するのか聞いていないのだけど……。それにパペットたちはどうするの？」

「……人形蜘蛛も連れて行くか」

手招きされたサエルとリエルとフィエルは置いていかれまいと瞬時に集まり、白の服の端を掴み確実に連れていってもらおうと、密着して貼り付いていた。

「邪魔」

まあ、すぐに離れて一列に整列していたけれど。

そして次の瞬間には、景色が暗転して違う風景へと切り替わった。

「で、今度は僕の所つて訳か」

「そうね」

「またお邪魔します……」

「……」

もともと名前だけだった第八軍の解体と人員再編に伴い、次の軍団長として内定が決まっていた僕は、引き継ぎとしてどんな人が集められるのか纏めてある資料を読んでいると、白さんがみんなを連れて大人数で現れたのだった。

白さんが何を目的として招集を掛けているのかわからないけれど、一応少しくらいなら離れても大丈夫だと思う。

資料を読むと言つても、獲得すべきと指示された思考加速のスキルによつて速読出来るし、内容自体はもう読み終わっていた。

頭を悩ませていたのは再編後の第八軍の人員についてで、元々所属

していた兵は他の軍団に再編されて残っておらず、新たに第八軍に配属されることになったのは不正を働いた魔族の領主たち、その配下や私設軍を解体して編成し直した、寄せ集めの軍だからだ。

そこに不正した領地から強制徴兵してきた魔族も入れられるのだから、士気も忠誠心も欠片すら存在しない軍になることが、実際に軍団長に就く前から簡単に予想出来る。

そんな人員しかない軍を、僕は率いることになっている。

なので、反抗的だったり命令無視が起きたりするのは当然で、それを抑え込んで無理矢理従わせるためには、どんな方法がいいのか考えていた所だ。

まあ、結局は無礼られないように力尽くの暴力で押さえつけるしか選択肢が無いけど。

「何するのかわからないけど、用があるって言うならついていくよ」

ここでこうして思い悩んでいても埒が明かないだろうし、そろそろ気分転換すべきかと頭の片隅に浮かんでいたのも、白さんの誘いに僕は特に何も考えずに返事をした。

「よろしい」

「……白ちゃんのことだから、変な事じゃなければ、いいのだけれど」「ちよつと止めてよ。……なんだか不安になってきたわ」

その奥でヒソヒソと話している二人の会話内容を聞いて、反射的に答えたのは間違いだったかなと、少し後悔した。

大抵、僕が呼び出される時は、魔族の群れのど真ん中に落とされたり、そうでなくても面倒事に巻き込まれるのが基本だったから、感覚が麻痺していたのかもしれない。

もちろん拒否権なんて無いので、反論しても無駄だと思っていたのもある。

そして迂闊に僕にも聞こえるように話していたのもあって、白さんに睨まれているソフィアさんとコケさんが身体を縮こませているのが、視界の端に映っていた。

白さんの不興を買うと何が起きるのか知りたくもないので、巻き込まれないように僕は静観して口を噤んだ。

その後、おしおきと称してデコピンが実行されて、ソフィアさんはデコピンとは思えないような轟音を立てて吹っ飛ばされたし、コケさんの方は見間違いで何でも無くデコピンが炸裂した瞬間に頭部が爆発四散して消失していた。

ただ飛び散ったのが血とかでは無く緑色の苔塊で、首から上が無いのに倒れること無くバランスを保ちながら、痛がっているような動きをしていた。

その後すぐに動画を逆再生するかのように頭部と髪が修復していくのを見て、改めてコケさんも人外の一員なんだなと再確認した。

まだ痛むのか額を押さええる二人が起き上がると、白さんのそばに並んだ。

そして次の瞬間には、景色が暗転して違う風景へと切り替わった。

「で、なにこの状況？」

「多少白さんのやり方に強引なところもあつたけれど、まあこうして集まったのですから、結果的に良かったのではないのでしょうか？ アリエルさん」

「文句がある訳じゃないんだけどねー」

呆れの混じった表情を浮かべるアリエルさんが、グラスを片手に真っ黒な蜘蛛をモチーフにした被り物を頭に乗っている。

そのアリエルさんにお酒を注いでいるラースくんは、顔に赤い隈取りが塗られていて鬼っぽさを演出しつつも、何処か滑稽な印象を受けるメイクをさせられていた。

「メラゾフィスうっつ！」

「お嬢様、淑女ともあろう方がはしたないですよ」

「あああ……メラゾフィウムで満たされていくわ」

「すみません。私には、そのメラゾなんかについて理解することが出来ないのですが……」

学園生活で長期間引き離されていたからなのか、思いつきりメラゾフィスさんに抱きつき甘えるソフィアちゃんと、胴体に擦り付かれ引

き剥がせず困った顔をしているメラゾフェイスさんが、右の方で擦り切れた黒いマントを羽織りイチャイチャしていた。

「がおー」

「ぎやおーっ!」

「おぼけ?」

「おぼけなんていないよ?」

「じゃあ、ひようるーだ」

「にーあも、いつも酒よこせーっていつてる」

「おなじだー」

「おかしくなきや」

「「「「いたずらするぞー!」」」」

左側では、アエルにサエルとリエルとファイエルのパペットたちシスターズと、カリユとテクスそれにラニアの妖精組が合わさって、合計七人の見た目では幼い子たちがワイワイキヤイキヤいと喧しいほど賑やかに騒いでいた。

丈の合っていないフード付きの白いローブを被ったちびっ子たちは、その言動とは裏腹にお菓子を奪い合って喧嘩とかはせず、きちんと分け合い食べつつ近くにいた子に些細なイタズラをお互いに仕掛けあつて遊んでいた。

「なんか、宴会みたいになっちゃったね」

「にやははははっ! 辛気臭い顔しても、何も変わらないってね。ガス抜きしなくちゃ、良い案も何も浮かばんよーだ」

重厚なソファに支配者の如く足を組んで腰掛ける白ちゃんは、酒精が香る液体を溢れんばかりに注がれたグラスを傾けて口を潤し、無邪気にも思えるような緩い顔でケラケラ笑っている。

そして私は、同じソファで白ちゃんと寄り添うように座っていて、お酒には酔っていないものの賑やかで暖かいこの雰囲気、いつの間にか酔い痴れていた。

「ほら、コケちゃんも飲んだほうがいいよー」

「……いただきます」

持つていたグラスにお酒を注がれ、私は勧められるまま中身を飲み

干した。

お酒を飲めば大変なことになると理解しているのなら、事前に対策を構築済みである。

味はそのまま感じるけれど、体内に入れば即時分解して無毒化させる術式を発動してあるので、今の私はもう酔っ払って退行したり醜態を晒すことは無い。

なので、純粹にお酒の味のみを楽しむ私は、痺れるようなホロ苦さと鼻に抜ける焼け付く香りに首を傾げていた。

本当に不思議でしかない。

酔っていた時はあんなに美味しいと思えた物が、こんな何とも表現しづらい味だったなんて。

不味い訳ではないけど、素直に美味しいとは言えない。

これが、酔えない時のお酒なのかな……

「あははっ、ねえコケちゃん。こんなバカ騒ぎこそが、私たちに合っていると思わない？」

「……うん」

白ちゃんがグラス越しにみんなを見つめて、そう言った。

それに私は、白ちゃんの肩に頭をこつんと軽く乗せる事で答えた。

「明日には、みんなこの時に起きたことを正確に憶えていないはず。まともな理性なんて何処かに吹き飛んじやっているし、やらかしも迷惑も恥も、いっぱい生まれて消えていく」

私もグラスをそっと掲げて、話を続ける。

「だけどね、大切な時間も此処にある気がする」

「ふーん？」

「忘れちゃいけない。私たちが守りたいと思っているのは、この瞬間なんだって」

「……そっか、コケちゃんはそういう覚悟か」

空気に溶け込ませるように静かに言い切ると、白ちゃんは遠い存在でも眺めるかのように、私を見つめていた。

まるで光で眼が眩んだように、そっと目を細めながら。

この瞬間だけ、周りの喧騒も聞こえず無音になったと錯覚するよう

な分厚い距離感が、白ちゃんと私との間にあった気がした。

「さーてっ！　まだまだ飲むぞー！　お酒うまいなあー、にやははははっ！」

「あっ……」

真意を確かめる機会を逃し、空気が移り変わってしまった。

たぶんもう、聞いても教えてくれないだろう。

「ほらほら、楽しまなきゃ損損。大切な時間なんですよ？」

「……そうだね、今は楽しまなくちゃ、ね？」

目の前にグラスを掲げてきた白ちゃん。

それを見て私も今夜だけは楽しさに浸るだけでいいと思い直し、グラスを重ね合わせて澄んだ音を冷たくも暖かい室内に響かせた。

その私たちの背後では、月明かりとキャンドルの炎に照らし出された幾つもの影が、ユラユラと身を絡ませて重なり合い、たった一夜だけのパーティーを延々と踊っていた。

血2 吸血鬼のあり方（22／06／19挿話）

魔族領に来てから、そう……たぶん八年、八年が経過したわ。

順を追って出来事を振り返ると、結構色々な事があつたなと思ひ返す。

その中には、良いも悪いも山ほどあつて、私のあり方を決定づけた大きな転換点もあつたわ。

でも、それがあつたからこそ今の私——

ソフィア・ケレンという存在に、真実本当に生まれ変わったんだと、そう思うわ。

初めの話は、そう——

アリエルさんの意向で、魔族の貴族子息令嬢が通う学園にてこの世界の学問を身に付け交流関係を広げなさいと、全寮制の学園に放り込まれた時からかしら。

メラゾフィスと引き剥がされて。

メラゾフィスと！ 引き剥がされてっ!!

ただでさえ公爵邸に住んでいた時から会う機会が激減していたというのに、寮になんて入ったらますます会えなくなるじゃない。

外出の許可も外部からの面会も、七面倒な手続きを踏まなければならぬとくれば、実際に顔を合わせる事が出来たのも、年に二度ある長期休暇かそこらなもの。

ふっぎけんじやないわよっ！

こちらら欲求不満で、そうとくるなら窓でもブチ破って脱走でもしてやるわよっ！

……こほん、言葉遣いが乱れてしまったようすわ。

たいへん失礼しました、御免遊ばせ。

最近板についてきた令嬢ムーブは此処までにしておいて。

そんなこんなでメラゾフィスから引き剥がされ、全寮制の学園へと通うはめになった私だけど、ちよつと心配していた入学のなんやらは

何一つ問題なく拍子抜けするほど、あっさり通過した。

一応中途編入ということで試験があつたけど、それも能力を測るだけとの事であり、落とされるとかは無いらしい。

なので、文句たらたら嫌々で渋々といった調子で試験を受けたけど、いざやってみれば想像より遥かに簡単なものだった。

筆記試験は科目によってバラツキが出たけれど——算数なんかは仮にも高校生まで履修していたのだから解けないはずも無いし、言語についても旅の途中でアリエルさんから人族語も魔族語も、私ら転生者全員みっちり教わつたので問題なし。

唯一、この世界の歴史問題に関しては、全く知らないので解けなかつたけど。

実技となれば、もつと簡単。

伊達も何も、白考案の拷問まがいな修行を何年も熟してきたのだから、そりゃあ強くなつていて当然という話ね。

魔法は上位の魔法を見せただけで、接近戦は魔闘法と気闘法を発動させただけで合格と。

私、殆どなんにもして無いんですけど？

——後々知つたことだけど、当時の実力でさえ教師陣を軽く捻れるほどに、常識から外れた代物だったとか。

まあ身近にいる強さの基準が、白や苔森、アリエルさんであれば、さもありません。

文字通りの人外どもめ……あつ、今じゃ私も吸血鬼そのひとりか。

ともあれ——

学園に入学して、その後同じクラスのガキどもの自己紹介やらなんやらがあつて——自分の年齢を棚に上げるようだけど同い年とはつまり、皆外見も中身も子供ということなのよ。

話が合わない突拍子無いわ調子が狂うで、とても付き合っていられないわ。

一応、不満を募らせながら学園で過ごしていて、それなりに印象に残つたのは何人か居たわ。

そして、それなりに話し相手……というか向こうから勝手にやって来る奴も出来ていた。

金髪碧眼で見た目はキラキラしてるのに腹の中では黒いモノが渦巻いてそうな、ワルドとかいう公爵家の男子とか。

あとは魔法を専門としている教師のジグリス先生だとか、若干チャラいけど熱血な気質を持っているカラーとか、初対面の時にいきなり魔法勝負を仕掛けてきて返り討ちにしたら何故か懐かれたニタラとか、貪欲に強さを求めている私に弟子にしてくれと頼み込んできたシヴィイとか……

ものの見事に、どいつもこいつも男子ばかりじゃない。

しかも、みんな美形という。

おかげで女子からは目の敵にされてるし。

知らないわよ、邪険にあしらってもめげずに突っかかってくる向こうに言え。

腹黒の婚約者であり、眼鏡付けてて見た目からクソ真面目そうな学級委員長タイプのフェルミナという女子から、そりやあもう何度も何度も、ありがたーいお小言を頂いたことは数知れず。

ふん、そんなの腹黒を振り向かせられないそっちも問題でしょ。

私に会うな近づくなと言われても、心底困るし面倒なのよ。

私は私らしく、このソフィア・ケレンという第二の生を、心のまま謳歌している真っ最中なの。

あなたみたいな端役、端から大して興味無いのよ。

邪魔しないでちょうだい。

——ほんと、イライラして仕方が無いわ。

ストレスでハゲるんじゃないかしら、この銀糸の髪が抜け落ちるなんて世界の損失よ。

そういう時になると、なかば無意識の内に血を求め。

気が付いたら魅了スキルを使って、いつもの男子どもから血を吸うのが習慣になっていた。

そうすれば多少は苛立ちが収まるし。

私も相手も、どっちもハッピーなのよ？ 別に何も問題無いじゃない。

私は美味しい生き血を吸えてイライラも収まるし、身体的にも腹が満たされ大満足。

血を吸われた男子も、すっごい恍惚とした顔を浮かべるし。

まあ昂ぶったとしても、この身体はメラゾフィスのもだから気安く触らせなどしないけど。

気絶して床とキスしてるのが、とてもお似合いだわ。

なんかいつの間にか男子が、私のことを崇拜しているようだけど、それも当然の事ね。

ほんと、良い気分だわ。

なんかこの前、ワルドがフェルミナを婚約破棄して、そいつを学園から追い出したわ。

いじめとか暗殺未遂とか、なんか色々罪状をワルドが述べて、それをフェルミナに突きつけた。

私の知らないところで事件があったらしく、そしてそれを証拠に断罪は行われた。

勝手に始まり、勝手に収束したけど、まあいいわ都合が良いじゃない。

ふふっ、喧しく囁ささっていたのにバチが当たったのよ、ざまあみろ。

そうしてフェルミナは学園から去っていき、女子どももこの一件を機に静かになっていったわ。

もう、此処に私に齒向かう奴はいない、何もかも良いこと尽くめ。私はこの学園で、血のように鮮やかな薔薇色の時代を過ごすのだわ。

ああ、なんて楽しいのかしら。

そう、思っていたのだけど――

「お嬢様、今のあなたは、ご自身のことをあなたのご両親に誇れますか？」

ぶたれた、メラゾフェイスに——なん、で……？

頬に走るヒリヒリとした痛みが、これが紛れもない現実であると如実に伝える。

「そんなの、そんなこと、え？ あれ？」

反射的にせり出した反論は、途切れ途切れで言葉の体をなさない。喉から出るのは、嗚咽にも似た呻きと疑問だけ。

——嘘、うそよ、違う、ちがうわ、そんなはずないツ!!

「お嬢様、吸血鬼の本能に身を任せ好き放題するのは、さぞや気分がよろしかったでしょう。誰も逆らわない、誰も逆らえない。そう、お嬢様自身が仕向けているのですから。運命が味方しているとでも？ それとも都合の良い夢か何かだとも思っていましたか？ 現実味の無い、自分にだけ優しい世界は実に楽しいものでしたか？」

良い気分だわ——違うっ。

都合が良いじゃない——違うっ！

何もかも良いこと尽くめ。ああ、なんて楽しいのかしら——ちがうツツ!!

そんな、そんなはずない……無いのよ……

「お嬢様、再度問います。今のお嬢様は、ご両親に誇れる人生を歩んでいらつしやいますか？」

答えられない。

答えられる訳、ないもの。

だって、そんな……

どれもこれも、鮮明に憶えている。

指摘されれば幾つも浮かび上がる、常軌を逸した行為の数々。

魅了で誑かし、その血を嬉々として啜った。

そのまま身体が熱いほど昂揚して、血を吸われ気絶した男を床に転がし、メラゾフェイスを想って自分を慰めたこともあったり。

何となく気に入らない事があれば、八つ当たりの暴力を振るったり、何処か行けと睨んだり。

不満や愚痴があれば、取り巻きの男どもの傍でポロつと零したり。ありえない……おかしいわよ……

なに前世の私が見たら卒倒しそうな事を、平然とやってるのよ。だというのに、それが普通の事じゃないと囁く私がいた。

あまりの悍ましさに、血の気が引いた。

「お嬢様、私はお嬢様のことを主として仕えることはできません。なぜならば、私の主はあなたのご両親だからです」

メラゾフィスが、言葉を続ける。

聞きたくない何も言わないでと、駄々をこねる幼子のように頭を振るが、隠れた本性を暴き出す言葉は止まってくれない。

まるで、吸血鬼を殺す銀の弾丸のように。

「ですから、たとえ吸血鬼としての親がお嬢様であろうと、この心を書き換えることはできません」

それは、拒絶の言葉。

それがメラゾフィスの口から吐き出された。

いやっ！ 嫌よっ、メラゾフィスは私のものなのよっ！

そう願って目に魔力が集った瞬間、再度乾いた平手が私の頬を打ち抜いた。

「この心は、あなたのご両親に既に捧げています。私はもう迷いません、惑いません。私に魅了の魔眼は効きませんよ」

毅然とした態度で、私の目を覗き込むメラゾフィス。

その瞳は深い哀しみで染まっていて——ああどうしてなのかしら、私を見ないで。

「あなたのご両親が、私に託したことはただ一つ。『お嬢様を頼んだ』。ただそれだけです」

わたしの、両親。

ジョン・ケレン、セラス・ケレン。

今世での、パパとママから、メラゾフィスに頼まれた、こと？

「頼まれたのです、私はお嬢様のことを。死ぬまで見守っていきます、決して見捨てはしません。間違っていればそれを何度でも指摘します。正しき道に戻るまで、幾度も幾度もこの手を振り上げましょう。

ですが出来ることならば、私に手を使わせないでください」
そんな、そんなのって、ズルいわ……

もう、逆らえる訳ないじゃないの。

意味ある言葉は言えず、ただ滝のように涙を溢れさせながら嗚咽を漏らすことしか出来ない。

ごめんなさい、メラゾフィス。

ごめんなさい、今世での両親。

ごめんなさい、前世のパパ、ママ。

心の中で謝り続けるものの、それで感じるのは悔恨などでは無く、なにを謝っているのだという自分自身への当惑だけ。

それで気付いてしまった。

止まらない変わり果ててしまった、人と吸血鬼との齟齬。

あれらの行為が人として異常だと認識しているのに、今の私はそれに特別な感情など何も抱けず当たり前のことだと、素で思っていることに。

血を吸うことが、ごく自然なことだ。

異常なことが、平常だった。

いつの間にか私は、身も心も吸血鬼に成り果てていたのだ。

そのことに気付いて、もう人には戻れないんだと少しだけ寂しく。けれど、少し寂しい程度にしか思うことが無いという事実には、それも大して感慨を抱けず。

両親に誇れるかですって？

今世も前世も、どちらも人である両親に、今の私が誇れるわけないじゃない。

今の私は吸血鬼。

考え方も価値観も、生き方すらも違っていた。

人としての誇りなんて、とうの昔に捨ててしまっていた。

それも特に気負いもなく、ゴミ箱にちよつとクズゴミを捨てるかのような気安さだ。

そうと指摘されなければ、自覚することも無かったように。けど、自覚してはもう駄目だった。

人と吸血鬼との違いが、分かってしまう。
だから——気持ちが悪い。

「うぶ……っ！」

「……………お嬢様」

えずいて口を抑える私に、メラゾフィスが労りに満ちた手で背中を撫でる。

——やめてよ、優しくしないで。

縋りたくなってしまいうから。

それから私は、答えの出ない日々を過ごす事となったわ。

血3 ソファイアとして生きる（22／06／19挿話）

授業中、訓練中、食事中、就寝中――

時間と場所を選ばない吐き気が襲いかかり、事あるごとにトイレに駆け込んで、心の澱みごと内容物をブチ撒けてしまう日々。

けど、それで鬱屈とした気持ちが晴れることは無いわ。

むしろ余計に、心と本能との軋轢でげっそりと憔悴していつてしま

う。
私の所業を知って会いに来たメラゾフィスに叱られて以降、こうして何度もメンタルを崩しては保健室の住人となっているのが、近頃の私ね。

ワルドを始め無自覚に魅了を掛けていた男子などは、それを解除して此方の方から接触を避けているわ。

顔を合わせるのも気不味いし、どの面さげて接すれば良いのかわからなくなってしまった。

なにせ今まで、血の詰まった肉袋、ただの食料としてしか見ていなかったんですもの。

それが意思ある人間だと認識してしまえば、もう無理でしかない。会話も何も不可能だった。

だって私、前世では根暗で陰険なボツチだったのよ？

まともに人と対話したことなど、殆ど無いんだもの。

ましてや男子ともなれば、絶無でしかない。

前世のあだ名の、リアルホラー^ホ子の名は伊達では無いのよ。

……自分で言ってる、泣きたくなかったわ。

苔森のように、基本誰とでも臆せず社交的に話せるタイプじゃないのよ、私。

ラースは男子だけど、転生者のよしみがあるから話せる。

ブロウは、あれに気を使うなんて馬鹿らしいし。

公爵家の執事の人は、すごい年上だから目上向けの話し方で良い

と。

……つて、あら？ 意外と今世では普通に話せる相手多いわね。白は、まあその……あれは色んな意味で例外ということ。

だからその、人ではなく物として扱ってきた相手に、今更どうすればいいのか分からなくなってしまったのよ。

魅了して洗脳して、物扱いしてきた相手に対して、加害者の私が何を言えるという。

吸血鬼のスキルに内包する魅了効果は、そこまで強力じゃない。

彼らを完全に支配下に置いていたのは、それだけステータスの差があつたからに他ならないわ。

だから魅了を止め、距離を取った今、既に正気に戻っているだろう。現に何人かは私から離れていった。

しかし、それでもまだ私と関わろうとする理解不能な物好きも居る。

ワルドもその一人だ。

何が目的なのか知らないし知りたくないけど、知らず魅了していた相手が近づいてくるってだけでも心労になるんだから、本当にやめてほしいのだけ。

そのたびに、自分の最低さが浮き彫りにされるのだから嫌になる、何もかも全て。

そうして悩んでいる内に日々は経過して、狭間の国とやらから戻ってきていた苔森が、事の顛末を聞いて私に会いに来た。

「……ソフィアちゃん。話は、聞きました」

「なによ……あんたも私が悪いと、そう言いたいのか？」

ぶつきらぼうに、悪態を吐き捨てる。

どうせ苔森も、私を鋭い言葉で批難するんだと、そう思っていたから態度は荒んだまま。

「起きた出来事を含めて、話を一通り聴いてからというものの……色々と私自身にも思うところが沢山あつたから、会いに来るのが幾ら

か遅れました」

何故か苔森自身も、深く悔いるように訥々と喋りだす。

そういえば魔族領に帰ってくる周期を考えれば、もう少し早く会いに来て別におかしくない、のかしら？

駄目ね、日付けすらロクに頭で計算出来ない状態まで落ちてたよう
で、頭が回らない。

「私も、人族や魔族とかが、自分と対等な存在だとは到底思えないと、
ソフィアちゃんの一件にて気付いたんです」

……それって私と同じ、考えが人から外れていつてるとい
う事かしら？

「勿論、相手は心ある知的生命体であり尊重すべき存在だと、理解して
います。けれど、それでも必要なら害虫駆除のように、冷酷なまでに
苛烈な排除へ踏み切れる確信が——私の中にはある」

胸に手を当て、噛み締めるように苔森は言う。

それは、相手が人だろうが無慈悲に殺せるとい
う、駆除の宣告。

「じゃあなに？ 苔森は公爵邸の執事とか世話になつた相手でも、必
要なら迷いなく殺せるの？」

「殺せます——いいえ、もはやゴミ掃除か何かとしか感じない」

断言は一瞬に、淀みも一切なく。

苔森の歪みが顔になる。

「私にとって、どうしても殺したくないと忌避感を感じるのは、コケダ
マ種や魔蛾や妖精たち……私の生まれ種族と、その繋がりがある今世
での家族たち。それと一緒に歩んできた白ちゃんくらいなもの。人
に対しては同族意識なんて欠片も無いみたいなんだ」

そう苦笑する顔に、私は思わず自分の歪みについて堰を切つたよう
に吐き出していた。

「じゃあ私は？ 吸血鬼になつた私は、なんだと言うのよ？ 血を
吸って同族たる吸血鬼を増やせとでも言うの？ 人は全て餌か眷属
候補？ 冗談じゃないわッ！」

赫怒を乗せて叫んだ想いは、紛れもなく本心だった。

それは人としての想い。

けれど私の中にあるのは、それだけでは無い——

「でもねっ、心の何処かでそれが当然と叫ぶ自分が居るのよ。血を吸って当たり前、人は食料だと思つて当たり前、気に入った人間は眷属に召し抱えて従えるのが至極当然だつて、今も今も醜悪に嘲笑つているのよッ!!」

それが吸血鬼の本性。

どうしようもない、私の中に誕生していた化物のワタシ。

血腥くて、悍ましくて、——気持ち悪い。

「……それでも、良いよ。そう思うこと、そう考えること自体は、私は否定しない」

けれど、その告解を聞いても苔森は穏やかな表情のまま。

彼女の側での見え方を、静かに語る。

「私だって人のこと言えないもの。禁忌然りシステム然り、この世界の実情を知ってから人は全て星の糧となつて死ねばいいと、そう考える事が多々あるから。——だから私も自分にとつての特別以外には、どうしようもなく無情になれる、なれてしまう」

しみじみと、けれど自罰のような嘆きを帯びながら、吐露しつづける苔森の内心は、私とは別種だけど非常に近い、人外の苦悩。

それが分かつてしまうからこそ、ああ駄目、もう抑えられない——

「こんな……今の私は、両親に誇れるような姿じゃ、ないのに……血を啜る化物なのに、それでも私は、良いの、かしら……?」

人族だったあの人たちから見て、吸血鬼としての生き方など、絶対に受け入れられない。

もしも戦争が無くてポティマス襲われることも未来永劫無く、両親と共に過ごしていたら、私はどうなっていただろう？

何も分らない。

意味無き仮定の話は、微かな情景すらも像を結ばない。

どうしても、ごく普通の人族などではなく、吸血鬼として血に酔い痴れる私しか描けない。

「勿論、私の価値観からして言いたいことは沢山ある。けれど、ソフィアちゃんが吸血鬼であるのなら、そういうものとして私は一定の理解

をするよ」

私の喘鳴じみた途切れ途切れの言葉に、何度も何度も頷きながら苔森は、様々な感情が溶け込みいつそ寒々とした底冷えする口調で、肯定の意を示す。

「血を吸うのが、その種にとって必要な事で当然の事なら、それは正しいこと。何も変じゃないし悪いことだとも思わない。だってそれが吸血鬼にとっての常識で正しきなのだから」

そうだと、私の中のワタシも賛同の声を謳う。

「例えだけど、人間だってその生き物は言葉の意味を理解出来るほど賢いのに、人じゃないからと家畜やペットを飼ったりするでしょ？

ほんの少し前まで生きていたそれだとしても可哀そうだと感傷を抱いても結局は食べたり、好き勝手に出来る娯楽相手になることには変わりがない。それと同じことだよ」

けど、どうしてかしら——今、心底目の前にいるコレが、怖くて仕方無い。

「だって、自分とは別種だから。——常識も価値観も何もかも、それはそれ、これはこれ。別個に考えてしまうのが、他種族に対しての考え方として普通なんだよ、きつと」

まさしく、人外の考え。

これこそが、人を越えた上位種の思考回路なのだと言われる彼女の真理。

まるで闇を凝縮したような翳り方をした瞳が私を、いや世界そのものを茫洋と見つめていた。

「——こほんっ。なんか未恐ろしいことを述べていたけれど、別に自分とは種が違うから他種族のルールとかを完全に無視していいとまでは言わないからね？」

ふつと、気配が普段の柔らかかなものへと切り替わる。

それにホッと安堵を零し、知らず強張っていた肩から緊張が抜けていく。

全く、怖がらせないでほしいわ。

でも……まあ、少しは参考にはなったかも。

そして苔森なりの人外として生きる答えは、もう既に揺るぎないほど決まっていたようで。

「それなりの時間を掛けて、端から端まで細々とした部分まで悩んだけれど——だからこそ、人は人程度でしかないと割り切って、心ある者向けの厳格な基準を設けることが私の答えとしたよ」

基本は、前世の道徳や倫理を下敷きに、自身が大切だと思う相手に対し行う対応を、幅広く適応させただけ。

自分が悪いと思うことは、しないように。

自分が必要無いと思うことは、しないように。

自分が迷惑を掛けてしまうと思うことは、しないように。

自分が外道だと思うことは、しないように。

……エトセトラ。

さつきまで大仰なことを言つてて、苔森のことが心底怖いとすら感じたけど、要は単に真つ当な対応を心掛けますっていうだけじゃないのよ。

これの何処が、怖いのか。

恐怖も心配も、しただけ損だったわ。

……変に突き抜けてしまえば、流石によろしくないとは思うけど。

まあ今のところ大丈夫そうかしら？

もし秩序狂いにでもなったら、たぶん白が殴つてでもリセットさせるでしょ。

そっちは根っからの混沌側の気質だし。

むしろ多少は、苔森の爪の垢を煎じて白も見習ってほしいものだわ。

なら、私の場合はどうなのだろう。

結局のところ、血を吸わざるを得ないという問題は、一つも解決していない。

「血が必要なら、それで結構。吸うことそのものは私自身も問題にしてないよ。……けれど、ね、やっぱり余計な問題を引き起こすのは飲心出来ないよ。問題は血を吸ったことでは無く、魅了し好き放題にやらかしていたのが駄目。ソフィアちゃんに必要なのは自制心と線

引きのお話だよ」

正論っ、まごうことなき正しさの暴力っ。

何も間違っていないからこそその理屈が、私を容赦なく襲う。

「そう、ね……苔森の言う通りね……」

同意の首肯をするけれど、これまでの問答で感じたものとして、恥じる気持ちで一杯だった。

正直、打ちのめされすぎて胸が死ぬほど痛いわ——主に私と苔森の人間性の格の違いに。

前世と今世あわせた時間、私と変わらないはずでしょ？

途中からとはいえ、一緒に同じ旅の空だったでしょ？

同じ内容の勉強を、アリエルさんや家庭教師から受けたはずでしょ？

なんでこんなに人間出来てるのよ、おかしいじゃない。

「なんでって言われても……そうだね……禁忌から無情な真実というものを知ったり、強欲という魂を喰らうスキルの業の深さを幾度も噛み締めたり、コケダメ達が私と一体化しているのも様々な要因があったとはいえ原因は私だから責任を感じているし、狭間の国にて出会った人々も実に多種多様な人達で見聞を広げるのにとっても良い経験だったし……」

ちよこんと小首を傾げながら、苔森が理由となりそうな事を次々答えていく。

ああ、もういいわ。

止めて頂戴、お願いだから。

「……ごめんね」

そーいうところよっ！

察するのも上手いとか、非の打ち所が無いじゃないっ！

思い当たる欠点なんて、一部の相手に対し過剰な男嫌い発症するとこくらいよ、あなた。

ポテイマスとか、ブロウとか、そんな奴に嫌悪マックスになる程度。

「はあ、もういいわ。私、疲れたわ。色々と自分のことが馬鹿らしくなってきたし……」

なんだか悩んでた事が、ある意味どうでも良くなってきたかも。つまるところ、私はまだまだ未熟ってことね、人としても吸血鬼としても。

よくよく考えれば、経験値の量が違いすぎるのよ。

この世界のレベル的なものではなく、積み重ねてきたありとあらゆる経験というものが。

場数が違う、回数が違う、種類が違う、密度が違う——
それじゃあ勝てないわ。

当たり前の話よね。

「うん、よしっ。苔森のことを人生の先輩として見倣うわ」

「え？ ならアリエルさんの方を見倣ったほうが……」

「いいのよ。あれはどっちかというところ、孫に優しいお婆ちゃんポジだし」

「……まあ、確かに」

苔森は先輩。

色んなことを少しだけ多く重ね、ほんの前を歩んでいる存在。

背中を見ながら、足跡を学ぶべき相手。

なら白は、私にとっての憧れ。

嫉妬すら抱くほどの、遥かな頂きの存在。

苔森との会話を盗み聞いて、実は割りと俗な内面だと知ったけれど、構わないわ。

突き抜けた自我が、いつそ清々しいほどの結果を運んでくるのだから、憧れは無くならない。

高みを目指して、憧憬として仰ぐべき相手よ。

そう、ならばこそ——

苔森のように、相手の機微が分かるような柔軟性と、

白のように、確たる己はこれだと堂々振る舞えるように。

改めて誓うわ。

ソファイア・ケレンは、ソファイア・ケレンとして相応しく生きる。

そこに人とか吸血鬼とか、些細なことは気にしないし関係ない。

人らしく世を弁え、そして吸血鬼らしく心の思うがまま素直な自分

で。

周りに迷惑を掛けない程度で――

――好きなように、伸び伸びと。

そう割り切ってしまえば、不思議と心は軽くなっていた。

今までやたら悩んでいたのが、嘘みたいに霧散する。

多少考えが吸血鬼よりの自覚はあるけど、まあこれも良し。

血は吸いたいんだから、しょうがないもの。

止めろと言われても、止められない。

誰かが私を悪と謗ろうとも、知らないわ――これが私よと言いつ返しやる。

「ふふふっ、これからもよろしくね。小さな『先輩』っ」

「……立ち直つたみたいだけど、小さなつてのは余計です!」

くすくすと楽しげに喉を鳴らす。

そうして私は――人で吸血鬼なソフィア・ケレンにと、確たる己になれたのだった。

「まあ、それはそれとして。後で迷惑掛けた人達に謝らないとね……特にフェルミナちゃんとか」

「え? 誰それ?」

「……」

「……」

「……………正座」

「なんでっ!?!」

日没してから次の日が昇るまで。

この後、私が委員長ことフェルミナにやったことを余さず思い出すまで、散々お説教されたわ。

つらひ……

39 そして、戦争へ

——祈る。

これから始まるのは、破滅を阻止するために生命を滅ぼす大戦争。その大戦にて私が担うのは、生命を断頭台へと追いやる処刑人の役目。

これから待ち受ける激動の時代は、死んでいたほうが女神に守られて幸せである。

そう言い訳して、私は数多の生命が失われることを許容する。

来世では、良き人生がありますように——

さあ、行こうか。

この手に世界の平和を勝ち取るために、戦おう。

「副団長、第十軍準備完了しました」

魔王城に用意された第十軍の執務室に貼られた巨大な世界地図と、そこにピン留めされた地点を眺めていると、そんな声が聞こえた。

「ご苦労さま、フェルミナちゃん。団員たちのところに案内してくれる？ 今白ちやんいないから代わりに私が各地に転移させるから」「かしこまりました」

静かに一礼して執務室の扉の傍に佇む、十代後半に見える少女。

実際の年齢も見た目通りでありながら、その能力は世間一般的には英雄と呼ばれる存在を倍近く上回る、隠密と暗器の扱いに長けた一流の暗殺者である。

そんな彼女であるけど、ほんの数年前は優秀だが普通の人間という枠に収まる、ただの貴族令嬢だったなんて想像もつかないだろう。

今は家名も無く、フェルミナとだけになった少女が第十軍に所属することになったのは、初めにソフィアちゃんが魔族領の学園で引き起こした騒動から話す必要がある。

依存脱却と情操教育の一環としてアリエルさんの指示の下、学園に

入学していたソフィアちゃんだったが、数年が経過して二次性徴を迎える頃になると吸血鬼としての本能で、周囲の男性を魅了し始めたらしい。

それは無意識の行動だったらしいけれど、狭い学園の中で男子の大多数がソフィアちゃんに傳くという状況に陥り、それを危惧した女子の一人がソフィアちゃんの排除を試みて失敗した。

その女子こそがフェルミナちゃんであり、最終的に婚約者からの婚約破棄に学園からの追放騒動までにも発展した、大事件となったらしい。

ソフィアちゃんがアリエルさん関連の人物だった事もあり、貴族社会の裏側では忖度が行われて切り捨てられる方向で事態が進み、最終的に家からも勘当されて居場所を失った彼女を引き受けたのが第十軍である。

元々本来の第十軍は名前だけの軍団で、とある家の私兵の名前を連ねる名簿があるだけの架空の組織と言える状態だった。

魔王軍が再編されていくに伴い、白ちゃんと私に割り当てられたのが第十軍で、それぞれ軍団長と副団長の役職を引き受けた。

その第十軍の元軍団長がフェルミナちゃんの父親であり、私と白ちゃんに役職を引き継ぐ過程で面識があったこともあり、私たちは行く宛の無い彼女を身内の不祥事による負い目もあって、二つ返事で迎え入れたのだった。

それからは、似たような理由で何処にも居場所が無い人員を集めて、白ちゃん主導の修行と訓練を熟していく内に、世界有数に数えられるような超人たちへとなったのだった。

ギリギリ勝てるような魔物の群れの真っ只中に転移で強制的に放り込まれて、生きるか死ぬかの日々を繰り返していれば強くなるのも当然だけど、毎日ボロボロになつては治療されて再び魔物と戦わされる事に、少しだけ同情する。

もし私が最初期の能力しか無い状態でエルロー大迷宮での生活を再びする事になったら、確実に気分が滅入ると思うから。

分体や眷属を置いて様子を伺いつつ本当に危険なら助け出すつも

りだったけれど、彼ら彼女らは用意された地獄を潜り抜け続けて、心身ともに壊れてからが本番とばかりに鍛え上げた結果、狂氣的な忠誠を私たちに捧げてくる超人軍団が出来上がっていた。

最初期から居るフェルミナちゃんはそのれほどでも無いけれど、他の団員からは白ちゃんには畏敬が捧げられ、私には信仰のような感情を向けてこられるのは、正直少し怖いと思ってしまう。

そんな、魔族の枠組みから半歩逸脱した団員たちだけど、結局は人なので神話級相手は無理だし当然私たち神格と比べたら、可愛そうなくらい隔絶した差があるのだけれど。

上位竜には互角としても龍には一対一では敵わない程度なので、私たち第十軍よりもっと特殊な第九軍の構成団員である人化した龍と竜の軍団には、逆立ちしたって勝てないだろう。

その第九軍は、基本的に戦争などには参加せず目立った行動はしていない。

けれど全く活動していない訳ではなく、私たち第十軍と若干仕事が被っているけれど世界各地に散らばったエルフの殲滅と、見逃している古代遺跡の捜索を行っている。

魔王軍であるけどアリエルさんの指揮下に無い軍団なので、軍団長の黒ことギユリエさんと協議して彼個人が手を貸せる範囲で仕事を割り振った結果が、その活動内容であった。

せめてものの借りを返すという事でギユリエさん本人から申し出た内容であり、かなりギリギリではあるが計画の為にエルフの排除は必要な事だと理解したゆえ、殲滅に協力することのこと。

そのおかげで、白ちゃんが集めてきた情報を元に2つの大陸に団員を転移で送り込み、エルフを暗殺していく仕事が多量になったので、ちよつとくらいは感謝している。

殲滅に協力してくれているとはいえ、隠れ潜んだ相手を見つける能力が白ちゃんの分体と配下の龍たちでは比較にもならないので、私たちが先に見つけて直接動くほうが速く、一度に複数の箇所で見見し手が足りない場合のみ手助けを求めるくらいでしか、第九軍が活躍する機会や出番が無いとも言えたので。

「こちらです。既に担当地域ごとに整理しております」

「ありがとう」

フェルミナちゃんが先導して通路を進み、魔王城の一角にある広場へと出た。

視界に彼ら彼女らが映るのと同時に、私の姿を確認した団員たちが一斉に跪いた。

その光景に僅かに気圧されつつも、私はゆっくり歩を進める。

先程にもちよつと説明したけれど、第十軍の役割はエルフの殲滅など裏で活動する内容が多い。

大半の時間は魔物の領域での特訓だけど、真の計画のために動いてもらうことも少なくない。

今回の人族と魔族の過去類を見ない規模での戦争も計画の一部でしか無く、ただの通過点。

両軍共に莫大な数の死者を作り出して足りないエネルギーを掻き集めつつ、システム内での正規手順で行われる転生機能によって、大量の魂を一時的に保護させる。

私たちはシステムを解体して、無駄な浪費が多い機能であるステータスやスキルなどの魂を拡張させて育てる部分を崩壊させる予定である。

システムがある時では、この世界で死んだ魂は一時的にシステムに取り込まれ、次の転生を待つことになる。

その時、システムによって維持されているスキルなどは消失して魂から引き剥がされるけれど、これが生きている間に解体によって無理矢理引き剥がされると、反動によって甚大な負荷が掛かることになり、最悪死亡あるいは魂の崩壊が発生してしまう。

これはスキルやステータスを鍛えている人ほど重く、対策も何も無ければ確実に死ぬことが予想されていた。

解体が始まれば、魂の崩壊の可能性がある死。

だからこそ、死んで何もない魂だけの状態こそが一番安全になる。

それを防ぐための方法も考えているけれど、この案は私でなければ実行することが不可能な方法であり、成功するかどうかは今のままでは一割もあつたら良すぎる程である。

偶然とはいえ獲得した管理者権限も利用して、システムの魂保護機能の解析は成功している。

それをそのまま対象範囲を拡大させてもエネルギー不足で非現実的であり、精々百人未満でしか救えない。

それなら手順の方に介入してみようにも、考えている方法では足掻いても埋めることが出来ない演算能力の不足があつた。

アプローチなどは完璧に近いと言える。

けど、私単独ではキャパオーバーで不可能。

もつと負荷を減らし私自身の許容量を上げるか、それとも別の方法へ切り替えるべきか。

答えは、どっちも模索し続けるだけ。

適性や得意分野からシステム解体において魂の領分は私の担当であり、白ちゃんが頑張っている以上、弱音を吐いている暇はない。

白ちゃんがハッキングや裏口発掘などの正道邪道問わない解析作業と並行して、実際にスキルとステータスの機能を解体するまでの手順を整えているところだから、その仕上げの行程が酷いものでは犠牲になつた人も生き物も魔物も全て、浮かばれないから。

石畳に覆われた空間に1つ分の足音が鳴り響く。

ここに集まつた彼ら彼女らには、魂の保護術式を個別に掛けてある。

システムに拠らない私独自の魔術であり、肉体が死を迎えるまでは機能し続ける独立型の術式。

だからステータスやスキルを徹底的に鍛え上げられている第十軍の人たちだけ、システム解体に巻き込まれて死ぬことは無い。

この数年の間に第十軍の団員たちに情が湧いてしまい、つい掛けてしまった魔術。

彼ら彼女らには、世界の裏側の事情つまり禁忌の内容も一部教えて

ある。

星の崩壊の危機と、それを助長するエルフの裏の顔を。

それは主に、機械化したエルフとの戦いを想定した予備知識を教える側面が大きかったけれど、暗い真実を知った上でなお私たちに付いてきてくれる団員たちに、私は報いたかったから。

終わった後の世界で、生きられる権利。

世界がどうなっていくのか何も保証は無いけれど、それだけが私からあげられるモノだから。

「遅かったじゃない？ それでご主人様はどこよ？」

「ソフィアさん私語は慎むように」

「なによフェルミナ。私はただ、トップであるご主人様が不在なのを聞いているだけよ？」

「それでも……」

「待って、そこまで」

フェルミナちゃんとソフィアちゃんが喧嘩しそうになったので止める。

ソフィアちゃんも学園を卒業した後、騒動に関わった男子の一部とともに第十軍に所属する事になり、被害者と加害者が同じ組織に居ることでもギスギスした空気になることが非常に多い。

一言注意すれば止めるけれど、こうも頻度が多いと正直面倒にも感じてくる。

経緯が経緯だから仕方ないとは思うけれどね。

「白ちゃんはアリエルさんのところ。そつちに配置した眷属から話し込んでいるのが見えるから、しばらくは来ないと思う」

何か余計な事態に発展する前に、速やかに質問に答える。

それを聞いたソフィアちゃんは懨然とした表情で、抑えきれない不満が大いにあると、全身から滲み出していた。

「またアリエルさん……。軍団長っていうのに自分のとこ放っておいて何やっているのかしら？」

唇に指を当てて苛立ちを浮かべるソフィアちゃん。

その容姿は、背も伸びて身体も女性的な起伏を描き、退廃的な色香

を無自覚に振りまく美人へと成長していた。

かなり前から身長を追い越され、今では完全に背丈も胸なども負けて私が見上げる側である。

その格差に不満を感じたことが無いとは言えないけれど、競つても意味無いことだと割り切つて思考を切り替える。

……この身体だと、生理現象も代謝も何もあつたものじゃないから、成長の見込みは無いのではないかという考えは置いておく。

「さて、少しだけ話をしようと思う」

私は団員たちを見回しながら、そう告げると一瞬で空気が引き締まった。

「私たちは残酷な真実を知っている。世界に後がないこと。次の世代、次の人生が存在しないかもしれない事を。それを知つてもなお、君たちはついてくる事を選んでくれた」

一拍区切つて、続ける。

「……ありがとう」

深く頭を下げた。

「これから始まるのは、誰にも知られる事のない陰の戦い。私たちは魔族から人族から裏切り者で、批難されるし極悪人と罵られる道であるだろう」

右腕を掲げて、脳内にイメージを構築する。

「けど、世界を救うにはこの道しかない」

頭上に、この星を宇宙から見た光景を映し出す。

以前ギユリエさんが見せてくれた映像の再現だけど、内容は全く欠けてはいない。

「これが、この世界の現状。水龍に阻まれて知ることが出来なかった大陸の外の世界。こうなった原因によって、この星に住む全ての住人が今も永遠に贖いを求められている」

海の向こう、罅割れ僅かな緑すら存在しない死の大地が映る。

「この呪われた宿命を断ち切りたい。そう思わないですか？」

私はゆっくりと瞼を開き、彼ら彼女らを見つめる。

「敵は誰ですか？ 私たち自身？ 正しいけれど違う。滅ぼさなければ

ばならない敵がいる。それはエルフ、今も破滅を引き起こした技術を使い続ける女神の献身を裏切る大罪人」

重々しく溜めを作って、吐き捨てるかのように続ける。

「その族長こそが全ての元凶、始まりから今に至るまで生き続ける世界の害悪。……彼を、殺す。それは遠くない出来事だけど、今の私たちは露払いをするだけ」

私自身の感情と、受け継いだ遺志も乗せて語る。

「落ち込まないで、憤らないで」

口調を明るく切り替えて、団員たちを宥める。

「そこに辿り着くまで大変かもしれないけれど、彼を殺しても終わりにじゃない。まだやるべき事が沢山残っている。……むしろ、それからが大変かもしれない。そこからが本当に世界を救い始める時だからゆっくり息を吸い、数秒間だけ無音となる。

「君たちみんなに問う。……私たちと共に来てくれる?」

空間の圧が煮えたぎるように膨れ上がった。

誰も声に出さずとも、この場に静かな熱狂が沸き起こったのを感じたのだった。

「聞いていたよ、あれ台本でも用意してた?」

「一応は最初から考えていたよ。途中アドリブも入れていたけれど」

「……すっぴん」

40 そして、戦火は巡る

まず最初に作戦が実行されたのは、オークン砦。

人族の補給部隊を洗脳し、ある荷物を紛れ込ませて砦の中へと送り込んだ。

その荷物は、生きたアノグラッチ。

復讐猿とも呼ばれる、同族を害した者を決して許さない、獰猛で恐ろしい魔物。

もしその魔物一匹でも殺したりでもすれば、群れ全体でその犯人を捨て身で殺しに来る。

結果的に、群れそのものが全滅することになって。

「来た」

第二軍を率いる軍団長サーナトリアは布陣した丘の上から、砦と近くの山肌を見て呟いた。

そこには、山肌が動いていると錯覚するような夥しい数の魔物が砦へと殺到する光景だった。

岩雪崩のような魔物の群れの先端が今、砦の城壁に接触する。

「うまくいったわね」

「はい。全て抜かり無く」

サーナトリアとその副官は、遠く離れたオークン砦を眺めていた。

第二軍が見守る中、砦の壁に取り付いてよじ登るアノグラッチは、遂に内部へと侵入して人族と戦闘を開始していた。

もう、このオークン砦を巡る戦いは、初日にて趨勢が決していた。

オークン砦を征したのは、人族でも魔族でも無く、魔物であったが。

「ごめんなさいね、魔王様。私、あなたの思惑に素直に乗るつもりはないの」

憂鬱そうに気怠げに、けれど隠しきれない怯えを滲ませてサーナトリアは小さく呟く。

その脳裏には、生々しい赤の光景と湿っぽい水音の咀嚼音が刻み付けられて消えてくれない。

彼女は反乱軍に加担して見逃され、さらに失態を重ねてしまった臆

病な裏切り者であったから。

「魔族としては間違っているのかもしれないけれど……。ノルマはきちんと達成するから見逃してくれないかしら」

彼女はただ何もせず動かず、復讐猿に蹂躪されていくオークン砦を眺め続けた。

ダーザロー砦。

オークン砦が魔の山脈に接した西の端であるように、ダーザロー砦は人族領と魔族領の境界線で東の果てにある砦だ。

その砦と魔族領の間には、小国の都市全てが収まりそうな超巨大な湖に繋がる川が流れており、流れる水に水深という天然の要害で、双方攻め難く守り易い地形となっていた。

そのダーザロー砦を攻めるのは、ヒュウイ率いる第六軍。

魔族の中でも若輩者であり年齢よりも幼い見た目をしているが、彼は魔族の中でも有数の魔法の使い手と言われていた。

そんなヒュウイが率いる第六軍は、軍団長の意向もあつてか魔法師団とも呼べる、偏った編成をしている。

軍における魔法使いの役割は、対軍用の大魔法による敵軍の殲滅と、それを相手が使ってきた際の妨害にある。

広域に甚大な被害を齎す大魔法は、多数の敵兵を相手取る戦争において切り札となりえる。

一般的に大魔法と呼ばれるものは、中級上位にあたる広範囲殲滅魔法のことである。

これらを行使するためには、複数の魔法使いが連携というスキルを利用して負担を分散しながら発動する必要がある、人数を揃えた上で協力するのが必須である。

それだけの大規模な準備が必要な大魔法は、どうしても発動までに時間が掛かる上に膨大な魔力が漏れ出るため、すぐに発動しようとしていることが相手に察知されてしまう。

いかに自軍の大魔法を守り、敵軍の大魔法を潰すか。

それが戦争における魔法使いの駆け引きであり、その点では両軍とも互角だった。

味方の大魔法も発動出来なければ、相手の大魔法も発動させない。そうなると地形も相まって遠距離から個人で発動可能な普通の魔法の撃ち合いとなり、魔法戦に特化した第六軍が有利になるはずだったが、一方的に被害を被っているのは魔族軍の方だった。

「クソッ！」

「ヒュウイ様、撤退を！」

ステータスに優れる魔族が人族と魔法を撃ち合えば、魔族の方が勝つ。

それが常識であったが、この戦場においては当て嵌まらない。

ダーザロー砦には人族最高の魔法使いロナント老と、その弟子たちが配属されており、奇しくも両軍共に最高の魔法師団同士の戦いだっ

た。そしてロナント老は、そんな常識など打ち捨てる新たな技術を持って戦場に立っていた。

魔力操作を鍛え上げれば、魔法の構築に手を加えて威力を上げられる。

これによって、魔法の理論は一変していた。

彼とその弟子たちは、下級の魔法の威力を底上げする技を磨き上げ、ただの下級の魔法の狙撃で次々と魔族軍の戦力を削っていた。

前時代的な運用法しか知らないヒュウイには、劣勢に追い込まれた盤面を覆せる方法はこれしか思いつかなかった。

「大魔法を使う。補助を」

「今大魔法を使っても無意味です！ 撤退を！」

副官が反論するものの、ヒュウイは有無を言わず威圧を放つ。

しかし周囲の誰一人として動くこと無く、その光景に激昂したヒュウイは地団駄を踏む。

「ひえ？」

それが、魔族軍第六軍団長ヒュウイの最期の言葉となった。

第四軍が攻めるのは、ダーザロー砦から湖を挟んだ西側の対岸。

片方を湖に、片方を森で囲まれた戦場である。

片方が見通しの良く障害も無さそうな水場であるが、この水上を戦場とすることは無い。

なぜなら水中に潜む強力な魔物に、陸上に住む人族も魔族も敵わないのが当たり前だからだ。

船など出せば沈められるのが目に見えており、両軍ともに湖には侵入することは無い。

対して森側となると、大人数が行軍するのは適さないが、少人数を密かに迂回させ背後から襲撃するといった戦術が行えるので、両軍どちらとも嚴重に警戒している領域である。

そんな地形の有利不利が存在しない場所を攻める第四軍を率いていたのは、魔族軍でありながら魔族では無い、吸血鬼のメラゾフィス。一兵卒から成り上がり、ついには軍団長へと上り詰めた彼は、種族を隠した得体のしれない新参者であるにも関わらず、部下からは紛れもなく慕われ信頼されていた。

なにかにつけて昇進を繰り返し軍団長に指名されて収まっただけという彼本人の評価とは違い、実際はメラゾフィス以上に実力や統率力それに責任感を合わせて持っている存在は、他には第一軍の軍団長であるアークナーしかいないと言えた。

そんなメラゾフィスが第四軍を率いて敵軍と対峙すると、手始めに城壁を崩すべく暗黒槍を構築して放つ。

上位の魔法をたつた一人で、しかも過剰に魔力を注ぎ込むことで巨大化させ強化する方法を行使しているにも関わらず、暴発することもなく発射される。

それが炸裂すれば、城壁が完全に崩壊して乱戦に移行するかに思われたが、城壁の上から3つの迎撃が暗黒槍に向かったことにより、威力が減じて砦の壁一枚に大穴を空けるだけに留まった。

その結果に再度暗黒槍の構築を始めるメラゾフィス。

そこに向かって来る雷の斬撃、その向こうには人影が2つ。

この世界でも前世と同じ名前を名乗る彼と彼女の名は、クニヒコとアサカ。

彼の主人と同じ世界からやって来た、転生者だった。

「こんなところで会うなんてなあっ！ メラゾフィスううツ!!」
「……来たか」

神から目を掛けられた転生者と、非才を努力で埋めるだけの求道者が、今対峙した。

第八軍、それは軍と呼ぶには士気と忠誠心が荒んでおり、いかにも暴君と奴隷兵の集団と呼ぶのが正しい有様だった。

この第八軍の兵士たちは、寄せ集めで編成した集団である。

不正を働いた魔族の領主たち、その領地からの徴兵と私設軍を集めただけの軍団が、第八軍。

そんな集団だからこそ、士気は恐ろしく低く、叛意を持っている兵士も多い。

それを力尽くで従えているのが、第八軍の軍団長ラーズ。

隙を見せたら脱走兵が続出すると考えている彼は、逆らう気が起きないように圧倒的な力の差を示して来たが、それでも指揮能力の欠如から見縊られるのを気にしていた。

出来そうもない軍団の指揮であるなら、最初から指揮を放棄すればいい。

ラーズが最終的に選んだ方法は、そんな単純明快なことだった。

自軍の背後には地雷剣を埋めて退路を潰したと通達し、それでも逃げ出すと言うのなら自ら直々に斬り捨てるかと宣言した。

そして彼自身は姿を隠しながら魔剣を投擲し、砦を破壊していた。

何処から飛んでくるのかわからず予兆も無い爆撃は人族が砦に籠城するのを諦めさせ、前進するしか選択肢を無くさせる。

追い立てるように魔剣を投射すれば、速度を上げて此方へと向かって来る。

そうなれば、あとは魔族軍と人族軍が正面衝突して乱戦になるだけ

だった。

もはや指揮なんて無意味、ただ目の前の敵を倒し殺すしか、生き残る道は何も無い泥沼の戦場となっていた。

軍団長のラーズは、あえて人的被害が少ないように人族軍の後方へ魔剣を遠投し追い立てつつ、向かってきた敵兵を最小限の人数だけ切り捨てていた。

これは人族に同情して手心を加えている訳ではない。

むしろ逆、彼自身が人族軍を減らしすぎると魔族軍の被害が少なくなってしまうからだ。

やろうと思えば、ラーズ単騎で一方的に人族の軍勢を殲滅出来るけれど、それを行ってしまえば世界に捧げるエネルギーが少なくなってしまう。

だからこそ、双方被害を最大限にするという、まっとうな指揮官であれば戦術としては下の下としか言いようのない、戦い方を両軍に強いていると。

「むむむ！ この覇気！ 貴殿がこの魔族の軍を率いる長であるとお見受けする！ 吾輩の名は、ニユドズ！ 正々堂々と尋常に勝負いたせいッ!!」

鎧兜の隙間から皺の目立つ顔を覗かせる老騎士が、ラーズの前に立ちほだかった。

この戦場にて誰よりも老いていそうなのに、誰よりも若々しく滾る老騎士は、一騎打ちをラーズへ申し込んだ。

「……受けて立つ」

そして剣は交差し、1つの首が宙を舞うのだった。

クソリオン砦。

人族が境界線に建造した要塞の中でも特に堅牢であり、それに見合うだけの地勢的にも重要度が高い地点でもあるので、この砦を境に魔族領と人族領が分かたれていると言っても過言ではない。

他の砦が落とされようとも、この砦だけは絶対に死守しなければな

らない。

それほど重要であり、陥落すなわち人族が魔族に破れ去り侵攻を止められなかった事を意味するほど。

そのためクソリオン砦は、長年の魔族の侵攻を防ぎ続けてきた事により、時代を経るごとに拡張が続けられ、複数の分厚く長大な防壁が築かれている。

配備された兵も人族の中で精鋭と謳われる猛者ばかりで、一兵卒ですら油断することは出来ない強者しか存在しないとされる。

そんな難攻不落の要塞を攻める魔族軍であるが、他の砦では1つの軍で攻略に当たっているのに対し、2つの軍団を投入していることからも、クソリオン砦の難しさが見て取れる。

訓練を積み重ねて高い練度と忠誠心を併せ持つ、正統派の第一軍と軍団長アーグナー。

彼らについて語れることは正統派すぎるが故に少なく、単純に軍という人の集団では魔族軍にて最高峰の軍団と言える。

それと共に轡を並べるのは第七軍と軍団長のブロウ。
第七軍は過去に反乱を起こした兵士たちで構成され、彼らは堅牢な要塞から敵を誘き出すため、使い捨て同然の餌の役目を与えられた囚人である。

普段から魔王に反抗的な性格のブロウを利用し、元反乱軍である第七軍の軍団長にブロウを据えれば、自然と反乱分子は第七軍へと集まってくる。

それらが暴走して反旗を翻すも、抑えつけて制御されるのも、どちらでも良い。

最終的にはエネルギーにするのだから、いつ死んでも構わない。

少しでも有効的に使えるのであれば戦力として使い潰す、それが第七軍だった。

そしてブロウは見事に扱いつらい人員を纏め上げ、今この瞬間まで暴発することなく、戦場へと彼ら第七軍を前線へと駆り立てたのであった。

しかし愚直なまでに感情的なブロウだが、根は真面目であり情に厚

い。

自軍を死地へ追いやる選択肢しか無いとしても、使い潰される兵士たちを案じ、その死を嘆くのを止められない。

「ブロウ。どうやら釣れたようだぞ」

「っ！」

態度も表情も取り繕っておらず不安が自身の部下にも伝播しかけていたブロウは、勢いよく顔を上げて雰囲気が変わる。

「準備せよ。……勇者のお出ましだ」

第七軍を無数に犠牲にして屍を積み上げつつクソリオン砦の城壁を1つ破ると、その向こうから魔族を蹴散らしながら現れたのは、人族の希望。

勇者ユリウスと、その仲間たち。

平地にて暴れまわる人の柁から外れた戦力に、戦場の空気が変わっていく。

魔族軍は、その暴威に恐れをなして震え上がり及び腰に。

人族軍の方は、勇者の活躍を見て士気が奮い立つ。

それを見て軍団長の二人は、大将自ら勇者を迎え撃ちに行く。

ブロウには、先程語ったような理由に加え、魔族の存続を懸けて退けない理由がある。

だが、第一軍のアーグナーにも退けない理由があった。

彼は関与の証拠を一切残していないが、裏から反乱軍を扇動しエルフと結託した過去があった。

それは魔王の排除を目的としたものだったが実現すること無く、魔王本人が動くことすらもなく鎮圧された事で、敗北を認めた彼は方針を一転させて魔王に従うようになった。

気持ちを入れ替えてからは魔王へと多大な貢献もしてきたが、一度裏切った事実は消えない。

アーグナーが自身の死も覚悟して戦場に赴くのは結局の所、全て自業自得によるものだった。

それでも彼が進むのは、やはり魔族の存続のため。

「俺は魔族軍第七軍団長ブロウ。勇者よ。いざ尋常に勝負っ！」

「勇者ユリウスだ。受けて立とう」

「儂もせつかくだから名乗っておこうか。儂は魔族軍第一軍団長アーグナー。推して参る」

広大な戦場の中心にて、人族と魔族の両雄が向かい合う。

この戦いは、お互いに種族を背負い存続を懸けた、小さき戦争。

退けない、勝つのは俺だっ！

退けない、勝つのは儂だ。

退けない、勝つのは僕だ！

同じ覚悟でありながら交わらない想いを胸に、彼らは激突した。

4-1 そして、暗闘は始まる

ここは鬱蒼とした木々が生い茂る森の中。

人魔緩衝地帯と呼ばれる場所のうち最も範囲が広く身を隠しやすい領域にて、統一された白装束の集団が気配を殺して、身を潜めていた。

彼ら彼女らはフードを目深に被り、とある敵が情報に釣られて通過してくるのを待ち受けるため湿った土で汚れるのも構わずに森へと潜伏していた。

だが、それにしても白装束には汚れが見られない。

いや、そもそも森の中では目立ちそうな純白だというのに、そこに居ると知って目視しなければ気付かず見失ってしまいそうなほど、存在感というものが極限まで薄れていた。

この白装束の集団こそが、魔族軍第十軍。

彼ら彼女らは複数の部隊に別れて、副団長の手により砦と砦の間にある空白地帯と呼べる地域にそれぞれ転移をし、人族領から魔族領へと抜けてくる者がいないか警戒していた。

第十軍の任務は、魔族の大規模な侵攻に乗じて人魔緩衝地帯から逆侵攻してくる敵の殲滅。

他にも元から住んでいた人族の殲滅もあるが、ここを担当する部隊の仕事では無い。

「……なにっ？」

その部隊にて、中心人物と見られる二人の少女が険悪な空気を醸し出していた。

視線を向けたのがフェルミナ、向けられたのがソフィアという名の少女である。

「いいえ、なにも」

「あっそ」

彼女、フェルミナは思考を巡らせる。

元は魔族の名家だった彼女が、勘当された原因を作った人物であるソフィアについて考えると、憤懣やるかたない気持ちに陥ってしまう

う。

そのため仲良く話す仲では無いが、任務に支障をきたすほど反目しあう関係では無かった。

作戦行動中のため悪感情は横においておき、任務に集中する。

第十軍は、少数精鋭の超人部隊。

そのため実力で言えば、他の軍団にも引けを取らない、むしろ上回る部分が多々あると自負しているが、新たに発足してから年月があまり経っていないこと、少数精鋭であるが故に軍団としては人数が少ないことから、表舞台で活躍する機会が無かった。

そのような経歴の第十軍は、他の軍団には実態などが知られておらず、逆に隠すように情報統制してきたこともあり、諜報や暗殺などの裏方だけしか出来ない軍団と他から見做されている事に、軽く残念な気持ちを感じていた。

実際は、暗殺も熟すためには相応の実力が必要なように、普通の戦闘でも華々しい大戦果を上げられるだけの能力があるのだが、第十軍の性質上陰で戦うことが常だった。

そう、今回も。

だけど、ある意味ではこの戦場こそが一番重要な場所であることも理解していた。

だからこそ、彼女は待ち続ける。

敵が来るのを。

対して、ソフィアはというと。

戦争中であるにも関わらず血風吹き荒れる戦場では無く、こんな地味で退屈な森の中にいるのに苛立っていた。

しかも、嫌いな奴と一緒に隠れ潜んでいることにも。

自分がやった訳でも無く指示も出していないけれど、結果的に追放された原因となったことに、少しは責任も感じていて悪かったと反省する気持ちもあるけれど、それ以上に普段のフェルミナの態度に怒りを覚えることが非常に多かった。

追放騒動の事件後、それからすぐに彼女は白からお仕置きとして、

ある呪いを刻まれた。

白に対してご主人様呼びを定着させる呪いと、命令一つで強制土下座させる呪いを。

さらに土下座の呪いは、白の気分次第で乱用されることが多々あり、その度に無様を晒す彼女を鼻で笑うフェルミナの行動に、毎回罪悪感なんて吹き飛ばすほど苛立つのがいつものことだった。

そして彼女は、折角久しぶりに思いつきり暴れられると考えていたのに、派手な戦場から離れて来るかどうか不明な敵を待ち続けるという、忍耐力を試される役割の任務に就かされたことで、隠せそうにもない不満を募らせていた。

吸血鬼という生物の習性として吸血衝動の他に、戦闘欲求が駆り立てられるというものがある。

そして最近では、学園に閉じ込められていた事もあつてか実戦を行う機会も少なく、たまの相手では弱すぎる雑魚か、圧倒的強者との戦いしか行えていなかった。

有象無象を蹂躪するのも、届かない高みに足搔くのも、どちらも燃え上がるけれど、ほぼ互角の相手との死闘つまり魔の山脈での鬼人との戦いと再戦のように、奥底から滾る戦いに飢えていた。

勝つか負けるか、それがわからない相手との命を削り合う戦いを制して、勝利した瞬間の気分はどれほどの味だろうか。

その機会は、たぶんもう二度と訪れないのでは無いかと、憂い一つも。

ソフィアは思う。

早く来いと。

この憂鬱を晴らすため、八つ当たり出来る獲物が欲しいと叫ぶ心を握り潰し、待ち続ける。

敵が来るのを。

「……」

アイコンタクトと手信号が無音で飛び交う。

それに合わせて第十軍の全ての団員が戦闘態勢に移行した。

強化された聴覚によって足音を察知し、感知能力に優れた人員が敵の人数を伝達していく。

そして、息を潜めて深くまで進んで来るのを待つ。

あらゆる感知をすり抜ける技を訓練したこともあり、第十軍の存在は察知されること無く森へと溶け込んでいた。

唯一、目視での認識だけは防げないものの、隠密や隠蔽を駆使した状態の相手を視認するのは、簡単な事では無い。

そして気配を気取られないように視線は向けず、すぐ近くの場所を通り過ぎようとしている相手にも一切反応せず、合図を待ち続ける。

静寂に満ちた森の中に、敵の足音だけが微かに響く。

敵の息遣いすら聞こえそうなほど沈黙を保ち続け、自分の心臓の音すら押し殺していると、待ちにまつた合図が第十軍全員へと伝わってきた。

指に括り絡まる、目に見えないほど極細の糸が引っ張られたことによつて。

無音のまま一齐に動き出す第十軍。

隠れていた場所から素早く飛び出し、敵が対処する間もなく攻撃を叩き込む。

完璧な奇襲が成立し、呆然としている敵が正気を取り戻す前に次々と追撃を与えていき、敵の数を減らしていく。

敵が対処へと身構える頃には相手に甚大な被害を齎しており、細かい獣道しか無い森の中では隊列を長く取るしか進軍する方法がなく、その長く伸びた隊列を分断するように左右から襲撃したこともあつてか、完全に軍としての機能を喪失し各個撃破されるだけの小集団へと引き裂いていた。

そうなれば、個の力で優れ罫を張っていた第十軍の方が圧倒的優勢で、事態が進み続ける。

しかし、全てが他人事のように冷静に対処してくる例外もいた。

「ポおおティいいマあスうううっ!!」

「ふむ。待ち伏せされていたか」

激昂して叫びながら大剣で斬りかかるソフィアに対峙しているのは、無表情で嫌な目付きをしているエルフの男。

今回の作戦において、最上位の討伐対象。

ポティマス・ハイフェナス。

「武装の使用を許可する。やれ」

ポティマスが襲われているにも関わらず落ち着いた声で命令したことで、周りのエルフたちの身に変化が生じた。

あるものは手から銃身を、あるものは同じく手から光の刀身を出現させた。

しかし未知の武装に見えたそれも、第十軍には既知の武器でしか無く、それに対処する戦闘法を徹底的に教え込まれていた。

機械技術の産物を悉く防がれる予想外な結果に驚くエルフたちを、第十軍の団員たちは無慈悲に 反撃を加えて塵殺していく。

「致し方ない。抗魔術結界は……」

渋い顔をしながら、コストの重さから使用を躊躇していた手札を切ろうとするポティマス。

だが、何も発動すること無く途中で言葉が途切れた。

「……いいところだったのに、邪魔しないでくれる?」

戦っていた相手が急に倒れた事に、文句を呟くソフィア。

その視線の先には、突如ポティマスの背後に現れて一切動くこと無く首を切断した白い少女。

彼女こそが、魔族軍第十軍団長にして彼女らの主。

白と呼ばれる存在である。

それとほぼ同時に、森がざわめく。

森の全域に隠されていた気配が一斉に活性化して、この場へと集まってくる。

だが第十軍の団員たちは、戦闘態勢へ移ることはない。

それは敵の襲来では無く、彼ら彼女らのもう一人の主の気配であるからだ。

白の隣に、苔で出来た人型としか言えないモノが形を成していく。そして小柄な人間と同じくらいまで膨れ上がると、表面が崩れ落ち

中から一人の少女が現れた。

もう一人の主、魔族軍第十軍副団長、そこでは苔とだけ名を呼ばれる存在だ。

森の中であるというのに、場違いなほど神々しくも悍ましい気配を纏う少女が二人。

二人は、第十軍の彼ら彼女らを見定めるように眺めながら、並び立った。

「任務完了です。ご主人様、副団長」

状況確認をすばやく終えたフェルミナが、二人へと跪く。

それに倣って、他の団員たちも姿勢を正して恭しく膝をついた。

変わらず立ったままなのは、二人と昔から知り合いであるソフィアだけである。

「……」

「ご苦労さま、みんな」

白は一瞥もせず、ただ首肯するだけ。

そして苔は静かな声で、任務に当たった皆を労うのであった。

「う、ぬぐぐううー！」

目の前で土下座をさせられているソフィアちゃんを、憐憫の籠もった目で見つめる。

敵を横から奪われて不満気な態度を隠そうともしなかったソフィアちゃんは、奪った相手である白ちゃんを睨みつけるという不機嫌を買う行動を取ったために、現在強制的に地面に頭を擦り付けさせられていた。

「ふっ」

屈辱にプルプル震えるソフィアちゃんを見下して、フェルミナちゃんが鼻で笑う。

このような事が起きるのは良くあることで、些細なことでも白ちゃんは無理矢理に土下座させるので、もはや回数など数えていない。

舐めた態度を取ったからお仕置き。
反抗的な眼をしていたからお仕置き。

ただ機嫌が悪かったからお仕置き。

そんな暴論としか言いようのない理由で実行しているようなので、この横暴を止めるも私の仕事になっていた。

《——解除》

呪いの縛りから解き放たれたソフィアちゃんが苦々しい表情を浮かべて顔を上げる。

そして隣からは、勝手に掛けた命令を打ち消した私に対して、批難するような雰囲気を漂わせる白ちゃんの姿があった。

「やりすぎ、そして使いすぎ」

「……教育の一環」

私の苦言に、被害者のソフィアちゃんがもつと言えと目で訴えてくる。

それに対して、白ちゃんはどこ吹く風と聞く耳を持たないのが、毎回起きる一連の流れだった。

呪いの命令自体は解除出来るけど、呪い本体には私の知らない法則があるため、ソフィアちゃんを白ちゃんの暴虐から解放してあげることは出来なかった。

しかも、この呪いについて問い詰めても白状せず、わかった事は同じような解呪不可能の呪いを掛けるのは、二度と出来ないという事だけでしか無かった。

なので、助け舟は出すけれど完全には止められないと、ソフィアちゃんには見解を説明した時に謝っていた。

……最近の私は仲裁役ばかりで、そろそろ冗談じゃなくストレスで胃に穴が空きそう。

実際は擬態でしか無い臓器なので、胃にダメージなんて無いけれど。

「全団員に通達。楽にして」

空気を変えるために、指示を下す。

その一声で、跪いていた団員たちは立ち上がり姿勢を正したまま静

聴の体勢となった。

そして未だ呻きを上げるソフィアちゃん以外は無言となる。

この異様なまでの忠誠心には毎回ちよつと引いてしまうけれど、それを見せないように押し殺し内側に仕舞って、追加の命令を説明する。

「最重要目標のポティマスを撃破したけれど、知つての通り彼は本体ではなく操り人形。なので、本命の部隊はたった今潰したけれど、再度侵攻してくる可能性もある」

といつても、もう周辺地域には怪しいエルフの影は確認されていないけれど。

「なので第十軍には、戦争終了まで人魔緩衝地帯にて待機。けれど、ローテーションは第一種から第二種に変更して、きちんと休息を取るように」

あまり長引かせない予定だけど、任務上隠密を重視しているため本格的な野営地を設営出来ない以上、疲労が溜まりやすいと思うので気をつけるように告げる。

「私たちは他にも仕事があるので再び離れるけれど、戦争終了時には回収に訪れるので、それまで任務に当たって欲しい。以上です」

素晴らしい切ると、確認のため白ちゃんにも視線を向ける。

問題は無いようで、軽く頷いていた。

この通達は、別の場所に配置された第十軍にも、私の眷属を通じて伝わっているだろう。

一時的に視界を共有してみると、各地でも同様に真摯に聞き入っていた。

そして、私と白ちゃんは第十軍のみんなを残して、アリエルさんが居る魔王城の作戦司令室へと転移したのであった。

「なあ、お前らはどつちだ?」

「そりゃあ勿論、苔様だ」

「俺も」

「厳しい訓練の中でも、きちんと俺たちを見てくれる」

「あと優しいからな、……ほんと」

「みなまで言うなよ？　振りじゃないからな？」

「俺は……白様だ」

「マジか、……実は俺も」

「あの何考えているのかわからないミステリアスさが神々しい」

「そしてなにより、……顔と体が良い」

「」「それな」「」

「僕は、ソフィア一筋だ」

「」「黙ってるワルド」「」

「お前ら最近、僕への当たり強くない？」

「この後、彼らがどうなったのか、神のみぞ知る。」

42 そして、勇者は地に墜ちる

転移してきた私と白ちゃんの視界に映ったのは、司令室とでも言うような部屋の中央に置かれたデスクに腰掛けて無数のモニターから戦場を観戦するアリエルさんと、苦虫をいくつも噛み潰したかのような余裕のない表情で顔を酷く歪めているバルト卿の姿だった。

「お？ 白ちゃんにコケちゃん、ちようどいいところに」

「……何でしょうか？」

私たちに気付いたアリエルさんが、気安そうな声で振り向く。

それに一拍遅れて、冷や汗が顔に浮かぶバルト卿も振り返った。

「このままだとブロウが死にそうなんだよねー」

何気ない世間話をするかのように、クソリオン砦を攻略中のブロウに生命の危機が迫っている事を説明するアリエルさん。

その言葉を受けて、再び顔色が悪くなるバルト卿。

彼にとつては血を分けた弟のことであるから、気が気ではないと感じ取れた。

空中に投影されているモニターを見る。

ギユリエさんが狭間の国について説明するときに使った魔術を白ちゃんは再現していて、映っている映像と音声は、戦場の各地に配置された分体から送られてきているものらしい。

遠方の状況を把握する事は、私も眷属の感覚を借りて似たような事が出来るけれど、他人に共有出来るように投影する方法は、いまだ習得出来ていなかった。

こういう小技は、白ちゃんの方が大得意だからね。

私はシンプルな構築の魔術は息を吸うかのように扱えるけれど、多機能な魔術の開発と運用では白ちゃんに敵わない。

魂へ干渉する事に特化した魔術なら、白ちゃんのほかギユリエさんにも追従を許さないけれど、応用可能な範囲が限られているため、こういう便利な事が出来る魔術では無かった。

気を取り直して、クソリオン砦を映しているモニターを探す。

そして見つけ出したモニターに映っていたのは、劣勢に追い込まれ

て血を流していくブロウと、懐かしい顔だけれど憶えている記憶よりも精悍な青年へと成長した勇者ユリウスの姿だった。

あの戦争が開始する寸前、森の中にて初めて会った時に焼き付いた眩いほどの魂の輝きは、一生忘れられそうに無いものだった。

だから、思わず相談に乗ってしまったし、当時魔蛾だった私の翅一枚を渡してしまうほどに。

そして、戦場で三竦みになっていた私たちを纏めて消し飛ばそうとした大魔法から、身を挺して彼を逃した事も。

魔族と人族の戦争前に事前準備として世界各地の情報を集めている時も、勇者のことは常に心の何処かで気にしていたと思う。

彼が歩いて生まれた軌跡は、遠く離れた場所の出来事だったけれど、一つ知る度に心が踊った。

勇者と仲間たちが積み上げていく冒険譚に、憧れのような光を感じていた。

羨ましいと思ったこともある。

人として正道を歩み続ける彼らが、悲しくなるほど綺麗だったから。

でも、そんな事では世界を救えないと、私は知っている。

だから今日、私は彼を、ユリウスを……

「アーグナーだったら勇者と互角くらいには戦えると思ったんだけど、買い被りだったかな？」

「勇者とその仲間が強いだけ。アーグナーは、頑張っている」

アリエルさんと白ちゃんの会話で現実へと引き戻る。

アーグナー卿を誹謗したアリエルさんを、白ちゃんが窘めるという珍しい光景によって。

「おん？ ……びつくり。なに？ 白ちゃん、アーグナーのこと買っている？」

この場所にはバルト卿もいるので、普通ならあまり喋らないはずの白ちゃんが庇うような発言をしたことに、アリエルさんは目を丸くして聞き返す。

私も同じような顔になっていると思いながら白ちゃんを見ると、静かに頷いた。

その後アリエルさんが、あんなのが趣味なのと白ちゃんをからかう一幕の後、モニターの向こうで変化が起きた。

『ならば、魔王を倒しに行こうか』

『……は？』

『戦争の元凶が魔王ならば、それを倒せば済む話だ。そして何より……、魔王を倒すのは勇者だと相場が決まっているものさ』

負傷と疲労で膝をつくブラウに、剣を突きつけるユリウス。

首に巻かれた白と緑色のマフラーが、風になびき揺れている。

そして今、勇者が呟いた宣言に、魔王が酷薄に笑い答えた。

「ふーん。言うねえ……」

アリエルさんが嘲笑するのに合わせて、私は一度瞼を閉じた。

感情を凍らせ、再びゆつくりと瞳を開く。

「じゃあ、予定通り行こうか」

その言葉に、私と白ちゃんは何も言わずに頷いた。

誰もが冷たい瞳のまま、計画通りに作戦を遂行する。

今更止まらない。

それに、この計画には私も賛同しているのだから。

茶番劇を終わらす女神たちが動き出す。

先に白ちゃんだけが異空間へと消えた。

そして次の瞬間、クソリオン砦を巡る戦場にクイーンタラテクトと瓜二つな怪物が出現した。

モニターの向こう側で、ゆつくりと暴虐が動き出す。

開かれた口からブレスが放たれると、それが通過した後の空間には何も残らず、大きく崩壊した城塞の防壁と瓦礫の山が映っていた。

そして、砦へと脚を進めていく白き巨影。

ただ一步脚を動かしただけで、無数の兵士らが薙ぎ払われていき、踏み潰されていく。

画面越してあっても、戦場が狂乱に突き落とされたのが見て取れ

た。

怪物が蹂躪を開始して数分後、再びこの部屋へと転移で戻ってきた白ちゃん。

けれど、想像とは異なり白ちゃんはたった一人で帰ってきた。

「おかえりー。……あれ？ アーグナーとブロウは？」

その事に疑問を憶えたアリエルさんが白ちゃんに問う。

あの今暴れているクイーンタラテクトは白ちゃんが作った分体で、それが戦場に投入された時点で軍団長は退却させる手筈となっていたからである。

「アーグナー、戦闘続行。ブロウ、部下の避難」

「……あー、部下を避難させるから残るとか言われた？」

再度の問いにも首肯を返す白ちゃん。

それを聞いて、苦々しくも誇らしいような複雑な表情を浮かべるバルト卿。

「よかったの？」

彼らが自ら残る事を選択したとはいえ、白ちゃんなら無理矢理連れ帰ることも可能だったのに、それをしなかった事が不思議に思う。

「誇りは？」

「……………えっ？」

「それで、彼らの誇りは、保てる？」

「……………」

今まで一度も聞いたことが無い、重々しく語気を強めた口調で白ちゃんは言う。

その台詞に、言葉が詰まってしまった。

たしかに、彼らも覚悟を決めて戦場へと立っている。

それが私たちによって仕組まれた盛大な茶番だとしても、彼らは背負っているモノの為に生命を懸けて自ら戦っていた。

愚かだとは、言えない。

彼らを苦しめている側の私が言っても、ふざけるなど返ってくるだろうけど、偽りなく本心からそう感じた。

だけど、それでは少しだけ予定から外れてしまう。

「バルト」

彼らについて思い悩んでいると、アリエルさんが声を発した。

「はい」

「ちよつと、ブロウに連絡してくんない？」

電撃でも打ち込まれたかのように一瞬硬直してから、バルト卿は動き出す。

事前に軍団長クラスには全員所持するように制作して渡した、スマホを模した遠隔通話の魔道具を耳に押し当てて、戦場にいるブロウへと連絡を試み始めた。

この魔道具は、金属板へと遠話を少し拡張しただけのシンプルな術式が刻み込まれている、私が用意した通信機器である。

焦りが滲むバルト卿を横目に、私は白ちやんとアリエルさんに話しかける。

「私は現地で見届ける。戦いが終わった後、二人が生きていたら回収にも行く。だから白ちやんは例の場所で準備していて。……………勇者は、……………私が、やるから」
些か予定が狂ってしまったけれど、これからする事に変更は何も無い。

軋む心を見なかつた事にして、私は誰かに言い聞かせるように宣言した。

「……………わかつた。気をつけて」

「そつちもね。失敗しないでよ？」

「……………いつてらつしやい、二人とも」

短く言葉と視線を交わし、白ちやんは世界を支える女神の元へ、私は人の希望を摘み取り私たちに相応しい歪んだ希望にするため、死に溢れた戦場へと跳んだ。

幾ばくかの時間が流れた頃。

偽物であるとはいえ、本物に迫る強さのクイーンタラテクトが沈んだ。

到底人では敵わない怪物で、普通なら勇者でも勝てない存在として作られた大蜘蛛が、である。

けれど、クイーンタラテクトが勇者に倒されるのは予定調和として仕組まれていて、そこまでは想定範囲内とされていた。

想定から外れたのは、討伐するためには使わざるを得ないと思われる力を、決して解放すること無く勇者が大蜘蛛を殺したことであった。

もともと、あのクイーンタラテクトは生贄である。

勇者が、勇者剣という武器を消費して勝ってもらう為の、用意された障害。

勇者剣とは、それだけでは不壊に等しい頑丈さを持つだけの剣だが、勇者が手にした時のみ解放される能力が一つある。

それが、ただ一度だけ、勇者剣を犠牲にして放たれる、神さえ屠れる一撃。

それを無駄撃ちさせるために、勇者単独では敵わぬ壁として立ち塞がる。

そのはずだったのに。

眼下ではクイーンタラテクト討伐に沸き立つ人々の中心にて、傷だらけになりつつも力強く剣を掲げる勇者ユリウスの姿があった。

その腰に吊るされた、もう一本の剣を一切引き抜くこと無く勝利した姿で。

声が枯れんばかりに叫び続けたユリウスは、ゆっくりと人々の中から離れていく。

その先には、唯一生き残った勇者の仲間の一人が立っていた。そこで立ち止まり、彼らの間には悲痛と沈黙が流れていた。

さほど遠くない場所には、大地に穿たれた巨大な陥没痕。

他には誰も居なかった。

……いや、近づく影が一人。

ただでさえ消耗していたのに、怪物が暴れまわった余波に巻き込まれて瀕死になりながらも勇者に斬り掛かったのは、魔族の軍団長ブロウ。

それに合わせて、戦える魔族たちが集まってくる。
対抗するように人族の兵士たちも。

彼らの間で、譲れない意思が飛び交う。

決裂した想いは混ざり合うこと無く、剣によって分かれた。

数瞬の剣戟が煌めく。

そして、血を吹き出しながら崩れ落ちたのは、ブロウの方だった。

「改めて言う。退けっ!!」

魂が抜け落ちた骸から目を離して、魔族へと喝破するユリウス。

その覇気は、何一つスキルを使っていないというのに、戦場全てを満たすようなものだった。

結局、アীগナーもブロウも、最期の時まで戦いを止めず死んでしまった。

止めさせたり、妨害は出来ただろう。

けれど、介入するのは、憚られた。

自分の魂すら燃やし尽くすような輝きが、そこにはあった。

決して誰にも踏み躪れないような、恒星のような彼らの祈り。

それを穢して貶めるような所業は、してはならない禁忌のようで。

「……白ちゃん。これで良かったんだよね」

戦場の遥か上空にて、私は呟く。

細長い龍の形態となり悠々と空を泳ぐメントの背の上で、手に乗せ

た白蜘蛛を見つめる。

何度も確認はした。

止めなくてもいいのって。

それは選択を他人に委ねる逃げだったけれど、そう思っていたのは白ちゃんも同じで。

私たちは結局、何も彼らの戦いに手を出すことは無く、事切れる最期の時までただ見守っただけだった。

白蜘蛛が頷く。

それを見て、私はこの戦争における最後の仕事へと移る。

「準備はいい？ ……それじゃあ、いくよ」

白蜘蛛が異空間へと消えていくと、私は動き始める。これから始めるのは、神の手による強引な幕引き。

デメテール・イムノス

「詠い始めよう、女神と娘とを——」

詠うは、魔法の言葉。

抑え込んだ力の封印を解く、私だけの法。

内側から溢れ出す神秘の奔流は形を変え、本となって手に現れた。不吉ながらも神聖な、けれど私のためだけにあるように手に馴染む、神秘のカタチ。

白い花の髪飾りが解け、無数の花卉となって頭上に光輪を形取り成していく。

ドクリと、呪いが刻まれた脇腹が痛んだ。

——世界が、新たな生贄を求めている。

次なる歯車として、私を呼んでいる——

魂に直接語りかけてくるのは、世界に染み込んだ贖罪の呪詛。

悍ましく、鬱屈として、嘆きに満ちているけど、僅かな奇蹟を願う祝福が詠われる。

その想いに同調しつつも、私が行くことは出来ないと断って、力を引き出す。

「まだ、諦めるわけにはいかない」

私も、最期まで足掻き続けると、決めたのだから。

奇蹟を探そう——これからも、みんなと。

絆は、見えない糸となって繋がっているのだから。

そして今は、奇蹟を紡ぐため、死を与えよう。

神の祝福の裏返しは、逃れようのない破滅の法則。

アイドゥーネウス

「冥王は不死たる馬を駆り、貴方を攫う——」

瞬間、戦場にいる誰もが空を見上げた。

けれど、彼らが知覚出来たのはそこまで。

刹那にも満たない時間。

あの戦場、あの空間は、世界から裏返し、冥府へと変わった。
ほんの僅かな時間のみ、世界に死が満たされる。

そして世界が元通りになった時、その中にいた生者は誰一人居な
かった。

例外たる龍神の人形を除いて。

その隣には、恐怖に固まった顔のまま息絶える、勇者ユリウスの姿
があった。

「……」

「……」

「おやすみなさい。……どうか、来世では良き人生を」

「あんたが、それを言うか」

「……………祈るくらいなら、いいでしょう?」

「……………そうだな。あんたは最後まで渋っていた、それは俺も知ってい
る」

「悲しいよね。良い人も悪い人も、等しくみんな死んでいく」

「ああ」

「彼を、お願いします……………。最期はつ、綺麗に見送られるべき、だから

……………」

「……………そのつもりだ」

そして二人は別れていく。

男の方は、腕に勇者の亡骸を抱えて歩いていく。

顔を下げ、誰にも表情を見せないようにして。

少女は、男とは別の方向へと歩いていく。

ツバの広い帽子を深く被り直し、目元を隠しながら。

乾いた大地に、雫が二つ染み込んでいくのを、太陽と蜘蛛が見てい
た。

「ふっぎけるなあッ！ そんなに、私たちの邪魔をしたいのか!? 私たちの気持ちを踏み躪るつもりなのか!? 答えろよ、女神っ！ いや、D イ イ ツ ツ !!!」

S 1 追悼

神父が棺のそばに立ち、祈りと鎮魂の言葉を朗読して唱える。それに合わせて、パイプオルガンのような楽器の音色が鎮魂歌を演奏していた。

王城の中枢区画奥深くにある王族専用の厳かな礼拝堂にて、アナレイト王国第二王子ユリウス・ザガン・アナレイトの葬儀が行われていた。

「それでは、祈祷の儀を……」

神父の言葉に合わせて俺は手を組み、祈りを捧げる。

哀しみが、身体中に侵蝕していく。

堪えきれず溢れた涙で、視界が滲み霞む。

もう一度、兄様と出会いから今までのことの記憶を思い出す。

俺の名前は、シユレイン・ザガン・アナレイト。

この国の第四王子として、生を受けた転生者だ。

側室の子供であり立場はあまり高くないけど、俺には同じ母親から生まれた誇れる兄がいた。

それが、今棺の中で凍りつき、安らかな顔で眠るユリウス兄様だった。

兄様と初めて顔を合わせたのは、まだ俺が赤ん坊だった頃の話だ。

優しげな蒼い瞳をした少年が、お付きの人たちと一緒に育児室へとやって来た。

その少年こそが兄様で、俺と腹違いの妹であるスーを見て、涙を零していた。

何故涙を流していたのか俺にはわからないし、兄様の涙を見たのはその時で最後だった。

まだその時の俺は、この世界の言葉を理解していなかったから、俺たちを見て兄様が何と呟いたのか、わからなかった。

けど、兄様がその時、きつと何かを決意したんだと思う。

後になってから、その日の前日に俺と兄様の実母が亡くなったことを知った。

今身に着けている首巻きに思いを馳せる。

白い帯地に魔物の翅が縫い付けられている、白と緑の首巻きだ。

魔物の翅は、過去兄様が止めを刺した神話級とも言われる虫系の魔物から得たものだ。

死してなお鮮やかな色彩を魅せる翅が、俺の背中を覆っている。

そして、この白い布地のほうもタラテクトという魔物の糸で織られたもので、亡くなる少し前に母様が編んでくれたものらしい。

これを編んだのが母様だと聞かされたけれど、正直ピンと来なかった。

一度も俺は、母様に会ったことすら無いのだから。

けど、兄様は違う。

兄様にとつて母様は、この上なく大事な人だったんだろう。

幼い時に最愛の母親を失い、勇者として戦いに赴かなければならぬ。

それは、一体どれほどの苦しみで、その中で兄様は一体何を決意していたんだろう。

「はじめまして。僕は君たちのお兄さんのユリウスだよ。こう見えても勇者なんだ」

「シユレインは賢いね。将来はいい政治家になれるかもしれない」

「シユレインには剣の才能もあるね。どうだい？ 将来僕と一緒に行くかい？ ああ、スーそんなに睨まないで。わかったよ、その時はスーも一緒にね」

「シユレイン。彼女が出来たんだって？ しかもお互い渾名で呼び合ってるのか。僕もこれからはシユンって呼んでいいかい？」

「シユン。スーが可愛いのはわかるけど、甘やかしてばかりじゃダメだよ？」

「シユン、父上は優しい方だよ。けれど、父親である前に、王なんだ。この国を支える王としての責任を果たしているんだ。それを分かってくれないか？」

「シユン、何かあったらレストンを頼るといいよ。あいつはいつも王城にいるからね。僕ら家族の中で一番暇をしてるはずだし、すぐに相

談に乗ってくれるよ」

「僕の師匠？ あの人は人間じゃないよ。うん」

シユン——、シユン——、シユン——。

「勇者は、人族の希望。だから僕が負けることは無い。……絶対にね」
ユリウス兄様との思い出が、溢れて止まらない。

いつの記憶でも、包み込まれるような優しい微笑みを浮かべていた。

「夢だつて貶されてもいい。実現不可能な戯言だと笑われてもいい。けど、目指すことだけはしていいはずだ。平和でみんなが笑つて暮らせる世界。僕はその理想を追い続ける。死ぬ時までね」

かつて兄様が語った夢が、浮かんでくる。

俺も大概甘いと思うし、他人からもよく言われる。

けど、兄様ほど甘い理想は、思ったことすら無かった。

俺の中では、勇者と言えばユリウス兄様ただ一人だ。

その大きすぎる背中を見て、勉強してきたし努力もしてきた。

けど、それでも兄様には届かないと思う。

そんな半端な力と覚悟しか無い俺だけど、兄様が目指した夢を引き

継いでいきたい。

ユリウス兄様のように、きつとなれないだろう。

ステータスには、勇者の称号が確かに記載されている。

学園にて世界の声が聞こえたあの日、兄様が死んで俺が次の勇者となった。

けど、俺には勇者の称号は重すぎる。

ユリウス兄様ほど純粹に、世界の平和なんて願えないし立ち向かう覚悟も無い。

こんなものを兄様が背負っていたのかと、体が震える。

今日までは、勇者の義務だからと半分流されるように過ごしてきた。

けど、今日ユリウス兄様の最期の顔を見て、その半分も本物へと塗り替える決意が出来た。

俺の理想はユリウス兄様だ。

兄様が描いた夢を引き継いだだけの、借り物で偽物の勇者。最初は兄様の模倣でしか無いと思う。

それでも、俺はユリウス兄様のように立派な生き方をしたい。

そうした先が、きつと俺と兄様が夢見た理想を体現する、本物の勇者だから。

隣に座っているカティアが、そつと俺の膝に手を添えたのを感じる。

燃え盛るような真っ赤な髪が微かに揺れて、暗い喪服の肩に掛かっていた。

彼女も俺と同じ転生者で、前世からの友達だ。

この葬儀は身内である王族と、秘密を守る重要な役職の人しか参加していない。

そこに無理を通して、公爵家令嬢のカティアも参加出来るように振じ込んで貰った。

本当は先生にも来て欲しいと思ったが、さすがに自国の貴族でもない人を参加させるのは無理がありすぎたらしく、後で話を聞いたカティアからも、こっぴどく叱られてしまった。

「シユン。大丈夫ですか？」

「ああ。悪い、平気だ」

囁くように声を潜めたカティアの心配に、大丈夫だと返事をする。

そうだ、もう迷いは無い。

俺は、勇者だ。

この決意を曇らせないためにも、俺は兄様のような微笑みでカティアを見つめる。

瞬間、目を丸くしたカティアの頬が赤みを増していった。

「そ、それなら良いですけど……………」

顔を俯かせながら尻すぼみに小さくなっていく声に、俺は首を傾げながら。

もしかして、なんか変な顔だったか？

やはり兄様のように、辛い時でも笑顔を浮かべるのは難しいか。

「それより、次の儀式ですわ。ほら、お立ちになつて」

周りを見れば黙禱を捧げる時は終わっていて、次は死者を送るための歌を斉唱するようだった。

ゆつくりと俺も席から立ち上がる。

荘厳な音楽が、礼拝堂に響き渡る。

亡くなった人が神の御下へ行き、現世での偉業を讃えられ安寧を授かる、そして傷を癒やした魂が良き人生へと生まれ変わることを願う。

そんな歌詞の賛美歌を、穏やかなメロディーの伴奏に合わせて歌い上げる。

たしか生まれ変わりの概念は仏教とかインドあたりの宗教特有のものだったはず。

だけど、この世界の最大宗教である神言教は西洋圏っぽい雰囲気だけど、教義や教えの中に転生について書かれており、神言をよく聞いた者ほど神の覚えめでたく、神から愛された魂であるほど世界に貢献した者として、次はより良い人生を送れるようになる。

そんな事が、神言教の教典に書かれていたと思う。

俺には神言も、ましてや神についてもわからない。

けど、きつとユリウス兄様なら生まれ変わったとしても、その清廉な魂で次の人生でも人助けをしている筈だ。

もしそんな事があれば、生まれ変わった兄様は俺を見てどう思うだろう。

こんなのが勇者だなんて、幻滅するだろうか。

いや、きつと違うはずだ。

違ってなくちゃならない。

俺が憧れた兄様の背中を、今度は俺が背負う番だ。

肩に流した首巻きこそが、誓いの証明。

もう迷ったりはしない。

美しくも切ない賛美歌が終わり、神父が最後の祈禱を行った後、献花の儀に移った。

俺も花を両手で持ち、順番を待つ。

一番最初に花を捧げた父上が、席で涙を拭っているのが目に映った。

目の周りを赤く腫らしながらも、嗚咽一つすら上げていない。

そして威風堂々とした姿勢のまま、微笑みを保っていた。

式の途中というのものもあるだろうけど、王としてこれ以上威厳を失った姿は見せられない。

その覚悟と責務が、瞳に力強く宿っていた。

父上の王としての姿。

その強さを知ったのは、ごく最近だ。

俺には真似できないと思ったけれど、今ならわかる気がする。

一緒なんだ。

背負っているものがあるから、決して折れないし逃げないという事が。

ときには重すぎて潰れてしまいそうになるけれど、それが支えとなるんだって。

父上には、王としての誇りが。

俺には、兄様の理想が、背中に押し掛かっている。

棺の前に立つ。

遺体を腐敗から保護するための魔道具から冷気が出続けている関係か、周囲の気温が低く思わず身震いしてしまいそうだけど堪える。

ユリウス兄様の顔が、視界に映る。

血の気の抜けた白い肌。

そこに傷は一見して何処にも見当たらず、本当にただ眠っているだけのように見えてしまう。

けど、もうこれが魂の抜けた遺体なのだと、鍛え上げたスキルが残酷に真実を告げる。

また、涙が溢れて視界が滲む。

でも泣いちやダメだ。

奥歯を噛み締め、微笑みのまま献花台に花を添える。

そしてユリウス兄様に黙祷を捧げ、背を向ける。

兄様、まだこんなちっぽけな俺だけど、勇者として認めてくれますか？

その答えは、聞こえない。

けど、何処にあるかはハッキリ理解した。

今、俺の胸に宿った熱こそが、答えなんだって。

葬儀は粛々と進み、ユリウス兄様は王家の墓地へと埋葬された。

そこには俺は参加せず、王城の面会室にて待機していた。

「すまない、待たせたか？」

「いえ、構いません。ハイリンスさん」

埋葬の告別式にも参加したハイリンスさんは、時間がかかった事を謝罪した。

その姿は、記憶にあるよりも痩せこけ憔悴しているように見える。

「無理を言って時間を作って欲しいと頼んだのは俺の方なんですから、謝るのは俺の方ですよ」

「だが、しかしな……」

なおも言葉を続けようとするハイリンスの肩を掴んで、姿勢を正させる。

それに驚いた表情を浮かべるハイリンスの目を見て、俺は宣言する。

「ハイリンスさん。いや、勇者の仲間ハイリンス・クオート」

力強く、想いを込めて告げる。

「俺は、ユリウス兄様じゃない。けど、兄様みたいな立派な勇者になりたい！ こんな弱くて偽物の勇者だけど、俺を守って導いて欲しい」

ハイリンスさんが王国に帰ってきて初めて面会した日の再現だ。

だけど、頼み込むのは俺からだ。

「シユン……」

「ユリウス兄様が歩いてきた世界を、俺に教えてくれ」

そして手を差し出す。

差し出されたから掴むんじゃない。

俺から手を差し伸べるのが、勇者だ。

「……変わったな、シユン。………こちらこそ改めて、よろしく頼む」

あの日の焼き直しのように、堅い握手を交わす。

借り物でも背負い続ければ、いつか本物に。

上書きされた勇者の覚悟は、俺の中にしっかりと灯っているのだから。

俺は、ハイリンスさんに力が欲しいと告げた。

すると、ユリウス兄様が師匠と呼ぶ人から受けた修行法を教えるもなかった。

正直、頭おかしいとしか言いようのない拷問じみた内容だったけれど、説明の上ではこの上なく理に合っているという、何とも言えない感情が浮かんだのは悪くないはずだ。

「その首巻きをしているなら、耐えられるはずだ。自動回復の特性が付いているし、死にかけても持ち主を守ってくれる力がある」

「……それでも兄様は、死んだんですよね」

この首巻きが、とんでもない効果を複数持った国宝級の装備になっているのは、この国では俺とハイリンスさんしか知らない事だ。

効果を知られて永遠に国庫に仕舞われてしまう前に、俺に手渡してくれたことに感謝しかない。

「ユリウスでも、敵わない圧倒的な力がある。それだけは憶えておいてくれ」

兄様を倒した相手は、ハイリンスさんも詳しくはわからないらしい。

上空に悍ましい気配が膨れ上がったかと思うと、次の瞬間には意識を失っていた。

そして目が覚めたら、ハイリンスさん以外の方が全員死んでいるのが見えた。

意識を失う直前に見えた空に浮かぶ影の形は、小柄な髪の長い少女

のようだったという。

ハイリンスさんでも何をされたのか一切わからないまま、戦場にした全ての人たちを外傷も無く皆殺しにした。

そんな規格外の存在が、魔族軍に居る。

もしかしたら、それが魔王なのかもしれない。

俺が立ち向かうべき相手の強大さと恐ろしさに、背筋が凍りつきそうだ。

でも、立ち止まらない。

「……そうだな、ならこれも渡しておこう」

そう言っただけハイリンスさんが渡してきたのは、汚れが多少目立つ頑丈そうな袋。

「ユリウスの他の遺品だ。外に出すと不味い魔剣とか薬とかを隠してた。内緒にしてくれよう？」

「ありがとうございます。たしかに受け取りました」

兄様の力。

その欠片を、俺は受け取った。

戦いは、避けられない。

それは必然だと、俺は直感していたんだと思う。

兄様を殺した相手は、許せないと今も思う。

でも、力が無ければ、ただ泣くことしか出来ない。

哀しみを拭って、希望を灯す。

先生、ごめん。

俺、強くなりたい。

兄様の仇を取りたいという気持ちに嘘はつけないし、兄様の夢のためにも強さがある。

兄様の理想に、俺の全てで殉じたんだ。

光の声が呼んでいる。

そっと胸に押し当てた手から、熱い鼓動が響き渡るのを感じた。

学園と暗躍

43 反省会議

「……」

「……」

「……」

陰鬱な空気が、部屋に充満する。

それを象徴するかのように窓からの陽射しが途切れ、薄暗い闇が室内を覆い尽くす。

ここに集った誰もが表情に影を落とし、重苦しい気配を滲ませていた。

つい先程までは、魔族軍を実質的に統括しているバルト卿や、第九軍団長の黒ことギユリエさんも居たけれど、今この部屋には私と白ちゃんにアリエルさんだけが同じテーブルに着き同じ戦場の俯瞰図を見ながら、静かに思い詰めていた。

頬杖ついて顎を乗せるアリエルさんが指で机を叩く音だけが、静寂の中で響いている。

そして一際大きな音を立ててカツンと指を叩きつけると、重々しくアリエルさんが溜息を吐いてから話し始めた。

「……何事も、上手くいかないもんだね」

「……うん」

「そうですね……」

今回私たちが引き起こした戦争で、最大目的が達成出来なかったのが非常に痛い事実となつて、精神が潰されるかのように押し掛かっていた。

複数ある目的のうち幾つかは達成したけれど、それでも戦争を起こした上での成果としては少なすぎる結果に終わってしまった。

魔族軍と人族軍を争わせ莫大な死者を積み上げてエネルギーを確保する目的は、それなりに満足出来る目標値を達成し、ギリギリではあるもののシステム解体時に星の再生が可能になる範囲まで増やす

ことが出来た。

けれど、あくまで最低限のエネルギーしかシステムには貯蓄されていないので、余裕を持たせて星の再生をするなら、もう少し確保しておきたい程度の心許無い量だった。

その過程で魔族軍にも犠牲になる重要な人員や軍団長についても想定していたけれど、予想した以上に有能な人員が最期まで諦めずに戦い散っていった。

「軍団長の戦死者は、ヒュウイ、ブロウ、アークグナーか」

アリエルさんが、今回の戦争で死亡した軍団長の名前を順番に挙げる。

無茶な戦術に加え相手が悪かった第六軍の軍団長ヒュウイは仕方ないとは言え、アークグナー卿やブロウなどクソリオン砦を攻めていた人員の殆どが全滅していた。

まあ、幹部級の人員が最期まで戦って死んだのはともかく、一般兵士が壊滅したのは私が原因と言えるけれど。

「なんでアークグナーとブロウの二人、回収しなかったの？」

アリエルさんが、不機嫌さを滲ませて私と白ちゃんに問う。

それを疑問に思う事は当然で、やろうと思えば戦闘に介入して逃げる隙や時間を作り出せし、白ちゃんなら強制的に転移で連れ帰る事も可能だったから。

「私には、彼らの最期の輝きを穢すのは、侵しがたいものに見えたから……。あれを穢したら二度と元には戻らないシミとなりそうで」

魂が濁ってしまう。

命や肉体は守る事が出来ても、精神や魂を傷つけてしまえば、消えない蟠りが永遠に残り続けてしまう、そう思ってしまった。

「……白ちゃんは？」

「信念」

「ん？」

「だから信念。アークグナーもブロウも、命を懸けて戦った、死ぬ覚悟で。それを邪魔するのは無粋だった」

そう言い切ると、白ちゃんは口を噤んだ。

突き放すかのようなドライな言い方だったけれど、それが白ちゃんの中で最大級の賛辞だと理解出来る重さが、台詞に込められていた。「……そっか」

表情を和らげて小さく呟くアリエルさんは、それ以上追求してくる事は無く、ただ犠牲になった人を悼むかのように少し瞼を閉じた。

「まあ、彼らの事は置いとこう。それより、コケちゃんに聞きたいことがあるんだけど？　なんで生き残ってた一般兵士まで巻き込んで勇者を殺したの？」

「うっ……」

アークナー卿もブロウも死亡して戦場の空気が人族軍側に傾いたけれど、それでも戦意を失っていない兵士たちが仇討ちだと立ち向かうのもいれば、撤退しだす兵士たちもいた。

それを無視して無差別即死魔術を展開したのは、勇者を逃さないという目的の為だったけれど、他にもあのように巻き込むのが避けられない形でしか発動出来ないという理由だった。

「あれは数人程度なら例外にして効果対象から外せるけれど、そんなに細かく制御出来る魔術では無いから魔族軍だけ生き残らせるとかは、流石に無理です……一応、撤退する魔族軍はあまり巻き込まないように気を付けてはいたんですよ」

だからこそ事前に知っていたギユリエさんの分体は効果対象から除外し、勇者ユリウスの遺体と勇者剣の処理を任せた訳でもあった。

アークナー卿やブロウが生き残っていたら、魔術を使う前に回収して安全圏まで撤退させてから発動させていたはずである。

それでも第一軍のアークナー卿の側近まで巻き込んだのは後になって少しだけ後悔したけれど、アークナー卿はともかく側近の顔や魂までは詳しく知らなかったので除外出来ない結果に終わったはずだと思う。

「それなら仕方ない……となると思った？　第七軍はともかく第一軍が欠落したのは再編に大きな支障が出てくるねー。まあ実際に苦労するのはバルトなんだけだよ」

今回の戦争の後も軍を使った作戦が計画されているので、人手が

滅つたのは多少痛い事には変わりはない、けれど……

「酷な言い方だけど、一部の軍を除いて魔族軍は包囲網の為の肉壁だから別にいいんじゃない？」

「……白ちゃん。たしかに、そうだけどさあ」

軽く頭を掻き毟ったアリエルさんは長い溜息をつくとき、パチンと手を打ち鳴らし切り替えた。

「よし！ もうこの話は止めよう！ 次行こ、次」
「ん」

「じゃあ次は……、勇者剣についてで」

勇者剣という物が、どんな危険物なのかは全員知っている。

あのDさんがシステムに用意した、神さえ殺せる神剣。

それを無駄撃ちさせるために、クイーンタラテクトを模した白ちゃんの分体が勇者と戦闘した訳だったけれど、結局使うこと無く自力だけで勝ってしまった。

そうなつては改めて勇者剣を抜かせる事は難しいし、無理して私や白ちゃんの本体で相手すれば死ぬ可能性があるので危険の方が大きい。

私の眷属で相手した場合も、魂を回収する前に消滅されかねないので同様。

「んで、勇者剣は？」

「勇者ユリウスの遺体と共に、ギユリエさんの分体が回収したはず」

あるべき場所に戻すと戦争前にギユリエさんは言っていたので、担い手を失った勇者剣が私たちの前に再び現れる事は、もう無いはず。

「そっかそか。……じゃあ次は白ちゃんに質問ね？」

白ちゃんが、ギクリと体を強張らせる。

それは、指摘されてほしくない何かがあるのだと、言外に示していた。

「システムへの干渉に失敗。その結果、勇者の称号を廃止出来ずに終わった、ねえ？」

「うぐっ」

バツの悪そうな雰囲気を漂わせる白ちゃん。

少し顔を逸らすその反応は、不本意な結果に終わったことを悔いているようだった。

対勇者の作戦途中で私と白ちゃんが別行動していたのは、勇者を殺害する実行役と、システムをハッキングして称号の機能解体あるいは封印して廃止させる役割を、各自で分担して実行する計画だったから。

そのため、私が勇者の殺害に移る時には白ちゃんはシステム中枢に待機していて、勇者の称号が空位になった瞬間に干渉していたはずだった。

タイミングを合わせて勇者を殺害したのに、それでも失敗したのは何故なのか、白ちゃんに問い詰める。

「あーそのー、これには訳があつてですねー」

「……………訳って？」

言いにくそうに、しどろもどろになりながら白ちゃんは答えた。

そして、ときどきアリエルさんの方を気にしながら、話し始める。

「勇者が死んだ瞬間、たしかにシステムに干渉したんだよ。けどさー

……………、その途中で邪魔が入ったというか、何と言うか…………」

「邪魔って、何?」

煮え切らない態度を続ける白ちゃんに対し、燦る気持ちを抑えて根気強く続きを待つ。

「システムの防衛機構が働いて対処に手間取り、失敗しました。すみませんでしたっ!」

「……………詳しく教えて」

事によつては、今後の計画に差し障る内容だと理解し、深く耳を傾ける。

そうして聞き出した情報は、やはり一筋縄ではいかないのだと深く痛感する内容だった。

十二人の真っ黒な人影、ソフィアちゃんやラースくんクラスの強者がシステムの防衛機構として配備されていたこと。

人影を排除しようとするやと広範囲高威力の攻撃ではシステムを巻き込む恐れがあるから使えないこと、そのため攻撃範囲を制御可能な

空間遮断でしか攻撃出来ず持久戦になったこと。

なんとか時間を掛けて排除しようとしたが、応戦中のほんの数分間で次の勇者が任命されていたので、撤退を選択してきたということ。そして今は、システム中枢から全ての分体なども引き上げたので、人影も消えていることなどを時間を掛けて聞き出した。

「……次は、慎重に調べてから事に当たろう」

「だねー。……んん？ 魔王、どっかした？」

アリエルさんの方を見ると、目を大きく見開いて驚きとも呆然ともつかないような、そんな魂の抜けた表情を浮かべて、固まっていた。そして突然、瞳を潤ませながらポツリと呟き始めた。

「……あは、あははは。そっか、そこに居たんだね。クラくん、ナタリーちゃん、■■■■ちゃん、■■■■くん、それに……………」
院長も、フオドウィーも……………ははっ」

手のひらで顔を覆い、天井を見上げるアリエルさん。
乾いた笑い声を数秒上げ続けると、穏やかな雰囲気はこちらに向き直る。

「……知り合い？」

短い白ちゃんの問いかけに、アリエルさんは唇を軽く歪ませて答えた。

「私がおばあちゃんだっっていうのは知ってるよね？ システム稼働初期からずっと生き続けている生き証人だっっていうことも」

その問いかけに、私と白ちゃんは頷く。

「だからさ、初代支配者のみんなとも、顔見知りだったんだよ……」

段々と語気に力強さが無くなっていくアリエルさん。

「それって、つまり……」

「そうだよ。白ちゃんが戦ったのは、その初代支配者のコピー、いや影法師ってところかな」

そうになると、数が少し合わないけれど……

「でも、支配者は全部で十四人ですよ？ 一人はアリエルさんで……」

「もう一人は、ポティマス。節制は一度死んでから転生だし、最初のダ

ステインが登録されているんじゃないかな」

一度も代替わりしていない支配者スキルだから、人影が存在していない。

つまりは、そういう事らしい。

「もし、暴食が代替わりしていたら……」

「そんなときは、私のコピーが居たかもねー。あはは」

ただでさえ強くて面倒臭い相手に、今のアリエルさんが追加されるとなると、難易度が桁違いに跳ね上がりそうだと思った。

「……死ぬなよ?」

「やだなー、白ちゃん。私が死ぬはず無いでしょ? ……………今はまだ、ね」

白ちゃんの言葉に、明るく戯けた調子で返事をするアリエルさん。けれど、最後に小さく呟いた台詞に、言いようのない陰が滲んでいた。

「取り敢えず、対処法は追々考えていきませんか? アリエルさん、その人たちの能力や戦闘方法について知っている事はありますか?」

「おぉー、勿論。記録のスキルが無かったら忘れてるほど昔の話だけど、問題無いよ」

「じゃあ、後で教えて下さい」

「おけー」

一先ず、防衛機構そのものについては一段落ついた。

その次の話題は……

「つてことは、どつかでもう新しい勇者が生まれているってことだよね? で、それが……」

「転生者の山田君に、勇者の称号がいった……」

「今は、シユレインくん。ですネ」

全員して、同時に盛大な溜息をついた。

勇者が代替わりしたのは、まだ許せる。

今回は失敗したけれど、次代の勇者が無関係の現地人だった場合、もう一度チャンスがあった。

だから次代の勇者が現れても、アリエルさんに辿り着く前に身動き

出来ないようにすることで、ゆつくりと次の策を練って再び称号廃止が出来るはずだった。

その甘い考えを嘲笑うかのように、勇者の称号は殺すことが出来ない転生者に渡っていた。

いや、転生者の殺害に反対しているのは白ちゃんの方だけである。

私の場合は、気は進まないけれど必要なら仕方ないと割り切り殺傷も辞さない考えで、この手でユリウスを殺害した以上、弟だろうが転生者だろうが止める理由にはならない。

だけど白ちゃんは、転生者は出来るだけ生かしておきたいという理由があるらしいので、それに合わせた結果、次の勇者シユレインは監視するに留めていた。

私も、積極的に殺したい訳では無いし、後回しにするなら反対はしない。

システムからエネルギーを引き出して力の差を補い、魔王を倒せるようになるという機能は厄介だけど、そもそも勇者が魔王と直接対峙しなければ効果を発揮しないのだから。

だから極論、学園から出さなければ問題は無いと言えるので。

それはそれとして、生かしておきたいのに非道は実行する白ちゃんの考えがわからない……

脳裏に過ぎった白ちゃんの所業を思い出してしまったことで、僅かに気力が削げる。

「監視は順調？」

「うん、勿論ですよ。ダズドルディア大陸は広いので一部は白ちゃんに任せていますけど、学園の状況は今も把握しています」

監視などの能力は白ちゃんの方が得意だけど、私でも同じことは出来る。

そして、いくら何でも二つの大陸全部を白ちゃん一人で担当するのは大変らしいので、それぞれ大陸ごとに担当地域を分けていた。

魔族領と帝国があるカサナガラ大陸、それにダズドルディア大陸の辺境地域は白ちゃんが。

聖アレイウス教国とアナレイト王国があるダズドルディア大陸の

大国は私が担当していた。

なんでわざわざ距離が遠いダズドルディア大陸の方を私が担当しているのかは、単純な理由。

白ちゃんに、細かい人間関係进行操作しないといけない暗躍なんて、出来ないからである。

ああ……、本当に、あの時は酷すぎると思った……

そうして、私はアナレイト王国の学園での暗躍について振り返り始めた。

4 4 回想録：敗北者の慟哭

851年 人魔大戦が勃発する5年前。

アナレイト王国王立学園、王族・高位貴族専用寮。

「いつかあいつのもの全てを奪ってやる！ 俺が奪われたのと同じようになあ！」

窓から差す月明かりだけが照らす、薄暗い部屋の中。

粉々に割れた鏡や、壁に直接突き立てられた剣などが散乱している。

「待ってろよ！ あいつが大切にしているもの、全部ぶっ壊してやる！ その上で泣き叫ぶあのクソアマを笑いながらグチャグチャに犯してやる！」

そして部屋を壊し続けながら喚き散らす、黒髪金眼の目付きの悪い少年が居た。

目の前で暴れまわる彼も転生者の一人で、今は10歳頃なはずなのに背丈や肩幅などがガッチリしており、かなり大柄な体格をしている。

その少年の名前は、ユーゴー・バン・レングザンド。

前世での名前は夏目健吾で、男子の中心人物だったけれど我儘な性格かつ歯に衣着せぬ物言い嫌われることもあれば、裏表の無い性格だと評価される側面もある、人によって好悪が凄く両極端になる人物だったと記憶している。

私としては、あまり好きではないけれど、そこまで悪い人では無い、そう思っていたのに……

「待ってろよ！ 俺はこの世界を取り戻してやるっ！」

あまりにも不快な台詞に、隠密の効果が解けそうになる。

多分今の私は、無表情になって目が死んでいるだろうと思いつつも、隣の白ちゃんを見る。

何故私と白ちゃんがここに居るのかは、白ちゃんから聞いたアナレイト王国の学園で起きた事件によるものだった。

魔族領での反乱未遂事件から数年。

その頃になると、白ちゃんの分体情報網は大陸全土まで広がっていた。

中には転生者が集まっているという、アナレイト王国国立学園にも手を伸ばしていた。

そこで、課外授業中の事故に見せかけたアナレイト第四王子殺害未遂が発生した。

襲われた第四王子も実は転生者で、そちらの前世は山田俊輔くん。計画を主導した犯人は、さつき話題にしたユーゴー。

細かい経緯や原因については省くとして、その事件でユーゴーは力を失い、逆恨みに近い憎悪を滾らせているのを白ちゃんは発見して、利用することにしたらしい。

そのため私と白ちゃん二人が、別大陸の学園まで転移して出向いた訳だけど……

本当に、彼を引き入れるの……？

荒れに荒れまくり聞くに堪えない声を撒き散らす人物が、本当に役に立つのか疑問に思いつつ、白ちゃんが注意を惹けと指で指示しているので、その通りにする。

「……こんばんは、ユーゴー・バン・レングザンド」

「誰だい!」

勢いよく振り返るユーゴー。

突然部屋に現れた私たち……いや、白ちゃんは再度転移し姿を隠しているのです、突然現れた私を見て驚愕の表情を貼り付けていた。

「それとも、こう言った方が良いですか？ 夏目健吾くん」

「お前……。いや、その顔、見たことあるような……」

怪訝な顔で、部屋の陰に居る私を見つめてくる。

それに合わせて私は、ゆつくりと被っている魔女帽を取り、胸の前に抱えた。

「まさか、転生者か？ その顔、クラスメイトに似た奴が居たのを憶えているぞ。チビのあいつだ。だが、なんで前世と顔が同じなんだ？」

私が誰なのか理解したようだけど、どうやら名前までは憶えていな

いらしい。

同じクラスメイトとさえど、あまり接点も無い関係だったから、忘れていても不思議じゃないと思った。

だけど、チビ呼ばわりされるのは、事実だったとしても許せない。そう内心で思っていると、突然ユーゴーの背後に音もなく現れる白ちゃん。

背後から一切声を上げられないように右手で口を塞ぐと、体を糸で縛り上げて動きを封じる。

そしてユーゴーの頭部側面に左手を添えて押さえつけた。

ユーゴーの左耳に突き刺された白ちゃんの指の表面に何かが動いている。

それは、小指の先ほどの小さな蜘蛛で、それがそのまま耳の中へと……

「ストオオープツ!!」

制止の大声に、ビクリと体が跳ねる白ちゃん。

それから数秒後、ユーゴーの左耳から転がり落ちてきた極小の白蜘蛛。

赤い液体が頭胸部に付着していることから、かなり際どい所まで侵入しかけていたようだった。

耳から何かが脳へと入り込む恐怖からか、意識が完全に飛んで気絶したユーゴーが床に受け身も取れずに倒れ込むと、私は白ちゃんに掴みかかる。

「何しているのさっ!?!」

「ちよーと、電波受信するように……」

それは、洗脳でしょう!?!

そのやり方には賛成できないと食って掛かると、白ちゃんは言う。

「でもさー、沢山ぶっ殺しておいて今更ねー」

全く悪びれた様子の無い白ちゃんに、何かが切れる音がした。

「それでもー！ 私は殺しなどの非道を行っても、外道に堕ちたつもりは無いっ!!」

魂を侵す外法を得意としていても、生まれ変わり体が魔物の肉体に

なつたとしても、人の心まで完全に捨てた憶えは無い。

人と怪物の境界線は、ちつぽけな自戒と理性でしか区切られていないのだから、それを踏み越えてしまつては、私は人では無くなる。

狂気に吞まれて正気を失い、魔物の本能に塗り潰された事もあつた。

知らず識らずのうちに、精神汚染で記憶を忘却しかけていた事もあつた。

それらを乗り越える度に、私の精神と怪物の在り方との線引きが明確になつていった。

強欲によつて魂を奪い取り、私の糧にした事もあつた。

だけど、記憶や意思などは抹消してから取り込んだ。

それは私自身が他人の一生分の記憶を受け止められないという理由もあつたけれど、殺した相手の魂を真つ新にする事が一種の供養だと思つたからである。

そんな風に、私の中では越えてはならない一線があり、洗脳という行為は許せない内容だつた。

けれどそれは私がそう思っているだけであり白ちゃんには一切何も関係無い話だけど、目の前でそんな事をされては黙っている事は出来なかつた。

「そのやり方は認められない。私は徹底的に反対するよ、白ちゃん」
「……」

白ちゃんは無言のまま、私を見つめ返してくる。

その目には、理解出来ないと何故反対するのかわからないと、戸惑いが浮かんでいた。

そのまま二人して、口を噤んだまま睨み合う。

私が右手を構えるのと同時に、白ちゃんの瞼が開く。

一触即発な空気が高まり張り詰めていく中、部屋の外から魔力の高まりを感じた。

この部屋を監視していたらしい見張りが気絶させられていき、一つの気配が扉の前に立つ。

ゆつくりと開けられた扉から姿を表したのは、水色の髪をした少女

だった。

「あなたたち、誰？」

不快さを滲ませて睨む少女の瞳は、勇者ユリウスよりも色味が薄いけれど透き通る蒼で、どこか似たような面影があるように感じた。

私はその特徴から、彼女がユリウスの異母妹スーレシアだと理解した。

かなり剣呑な気配が漏れ出ているスーレシアの様子に警戒を高めると、彼女は人外などの例外を除いた中では上位に食い込める精度で魔法を構築して、水の槍が宙に浮かび灰色の霧が部屋に充満していく。

「水流魔法と……、呪怨魔法？ 《散れ——》」

私や白ちゃん相手では、そもそも普段から維持している耐性や抵抗力を突破出来ないなので効果は無いけれど、背後のユーゴーが巻き込まれれば命の危機に陥るので術式ごと吹き飛ばす。

狙いを私に変えて、襲い掛かってくるスーレシア。

右手の擬態を一時的に解いて、腕の振りと同時に微細な苔を空気中に飛ばす。

魔法を使われると面倒なので、神龍結界や神霊苔に乱魔の鱗粉などのスキル術式を混ぜ合わせて再現した疑似抗魔術結界を、今散らした苔を基点にして部屋内に展開した。

テスモポロス

「《哀しみ呪う冬の大地——》」

何故か魔術の設計が完了した瞬間、自然と術名が脳裏に浮かび上がり例の怪しげな本と合わせて使う事で効果が劇的に上昇した謎多き術式だけど、性能は折り紙付きである。

体の力が抜け、脚を縛れさせるスーレシア。

空間内での魔術発動が困難になり生命力を枯らしていく領域に囚われた彼女は、手に握った短剣を突き刺そうとした勢いのまま、私の目の前に倒れ込んだ。

そして、この領域の主だけは影響を受けずに魔術を行使可能である。

なので――

「眠れ――」

プツリと糸が切れたように、眠りに落ちたスーレシア。

眠っているというのに、幼い顔付きが背筋が凍りそうなほどの憎悪で歪んでいて、正直何でここまで殺意が高かったのか見当がつかない。

無力化に成功したので、私は疑似抗魔術結界を解除した。

圧倒的に有利な環境を作り出せるこの魔術は、その効果の高さに比例してエネルギー消費も無視出来ない負担が掛かるので、常時展開には向いていない。

それに、この魔術も同格以上では効果が薄くて、完全には魔術を阻害出来ないという欠点も。

実際に白ちゃん相手に試した時、強引に妨害を空間魔術で上書きされ転移で逃げられたので。

手早くスーレシアを糸で拘束していく白ちゃん。

それを見て、私は言う。

「そっちの説得は任せる。ただし洗脳は無しだからね」

「え、えっ!?!」

心底嫌そうな顔をする白ちゃん。

そっちのスーレシアに関する事情について私は知らないし、頭が痛くなる出来事の連続に苛立ちを抑えるのも限界に近かったので、せめて一人くらいは自分で何とかしろと突き放して、私自身はユーゴーの元に向かう。

背後で慌てふためく白ちゃんを無視して、私はユーゴーを叩き起す。

ついでに血が流れ続けていた耳も治療しておいた。

「うう……、何だよ……はっ!?!」

「目は覚めましたか?」

「お前!?! ツウ、頭いてええ……」

まだ治しきれていなかったのか、頭を押さえるユーゴーに再度治療魔術を掛けていく。

痛みが引いて話を聞ける状態になったと思うので、会話を再開する。

「それじゃあ、話を聞いてくれる？」

「お前……」

「苔森」

「は？」

「苔森 真理。今はコケとだけ名乗る事が多いけれど」

「……おう。たしかそんな名前だったな、おーけー思い出した」

怪訝な顔をしているけれど、平静を取り戻したように見えるユーゴー。

「にしても、向こうのは若葉さんか？ はは、夢ん中でも美人だな」

「……うん？」

突然、変な事を言うユーゴー。

まだ完全に正気に戻った訳では無いと、私は感じた。

「若葉さんと苔森さんって、なんか接点あったか？ まあ、別にいいか、どうせ全部夢だ」

どこか虚ろな目のまま、ユーゴーは一人で語り続ける。

「畜生……、山田のやつばっか楽しそうで、なんで俺だけこんなに虚しい思いしてんだ。俺の周りには、どいつもコイツも碌でもないやつしかいねえ……。俺はッ！ 一成がいなきや、俺はダメなやつなんだよ」

蹲って、薄ら笑いを浮かべている。

「なあ出てこいよ、一成。夢なんだろう？ そろそろお前の顔が見てえよ……」

そう言って、ユーゴーは口を閉ざした。

私も、その内容を聞いて沈黙してしまう。

背後では、短い悲鳴が断続的に上がっているけれど、そっちは無視して考える。

夢か……

全てが夢であれば、どれほど良かっただろう。

いつもどおり学校に通って、退屈な授業を聞きながら勉強をしてい

たはず。

卒業したら、早くお母さんを楽しにするために就職しているかな？

それとも進学を勧められて大学に通っているかな？

そのどれもが、今では夢の話となってしまった。

戸籍も無い、向こうでは死んだ人となっている自分では、得られないモノ。

一度瞼を閉じて、気持ちを落ち着かせる。

どんなに苦しくても逃避しても、この世界は紛れもなく現実である。

それをユーゴーに理解させるには、どうすればいいのか。

私は思考を巡らせる。

それを考えている時、ユーゴーの手が伸ばされた。

「ははっ、無様だな、俺。ほんと笑える。……なあ、お前がいい、俺を慰めてくれよ」

ユーゴーの手が、私の頬を掴もうと近づく。

その手が触れる寸前、私はユーゴーを突き飛ばした。

「つう……、いつてええ。何すんだよ!? 大人しく受け入れろ!!」

「ふざけるなっ!!」

怒りのまま叫ぶ。

最近の募りに募ったストレスにも着火して鬱憤が膨れ上がる。

色々考えていた事が全部吹き飛び、感情のまま短絡的で最も効果的な方法が浮かんだ。

「うるせええッ！ この世界は、俺のためのものだろう？ なんで、上手くないかないッ」

「この世界は、夢じゃない。それを直接教えてあげる」

私は、ユーゴーの頭を掴んだ。

指の間から見えた目には、何かを恐れるような怯えの色が見えた。

「管理者権限、私のエネルギーを対価に——」

「やめ、やめろおお!?!」

「禁忌インストール」

いつか来る逃れられない宿命と共に、付与されたシステムに干渉出

来る正式な鍵。

その力を使って、ユーゴーにこの世界の真実を叩き込む。

出来ることは、そんなに多くは無いしリスクもある。

けれど、それを忘れてしまうほど、ユーゴーの態度には腹が立っていた。

「あ、がっ……」

苦しいな声を上げて、再び気絶するユーゴー。

崩れ落ちた姿を眺めつつ、私は酷く痛む脇腹の鈍痛を感じて少し後悔していた。

また、残り時間が減ってしまった。

私自身のエネルギーを使ったから代償は少なく、期間にして二週間程度だけど、私がシステムに捧げられるまでの猶予期間が短くなった。

管理者権限を使うことの代償は残り時間の減少という、目に見える形で脳裏に示されている。

禁忌のメニューみたいに、私はシステムと繋がる機能を一部だけなら閲覧して使える。

それを開いても禁忌のような気持ち悪さは無いけれど、刻一刻とカウントを減らしていく時間に気が滅入りそうになる事はある。

そこに並ぶ機能には、システムの状態やM Aエネルギーの貯蓄残量なども確認出来るので、それだけなら特に対価も無く閲覧可能だった。

けれど、システムに干渉しようとすれば数字の減りが恐ろしい速度で加速しだすので、私自身がシステムに干渉するのは、出来るだけ避けるようにしていた。

機能を読み解き魔術の構築を調べる事は出来ても、私が直接システムに触れる事は出来ない。

そんな事をすれば、問答無用でシステムに引き寄せられてしまう。そういう予感がしているので、システムをどうにかする役割は白ちゃんにお願いしていた。

今はまだ、システムについて私たちは何もわかっていないけれど。

いつかは、きつと、白ちゃんが見つけてくれると信じて託していた。
「……コケちゃん、使ったね?」

「……………ごめん」

背後に立っていた白ちゃんに、私は謝る。

管理者権限は、出来るだけ使わない。

それが、システム中枢から帰ってきた後に約束した話だった。

約束を破ってしまった事を反省しながら、私は振り向く。

表情は変わっていないのに、静かに怒っていますと感ぜられる雰囲気

気を纏う白ちゃんに、思わず顔を下げてしまう。

「てい」

「あたっ」

軽くデコピンされる。

少しだけ頭を揺さぶられて、額を右手で擦る。

「もう、使わない。いいね?」

「……………はい」

罰がこれだけだということに、少し切なくなる。

白ちゃんが普段ソフィアちゃんにしているような苛烈な罰の方が

楽だと思えるような、深い後悔の気持ちに胸を襲った。

「ならよし。時間は?」

「大丈夫、あまり減ってはいないから」

そこまで問題になるほど、代償は重くなかったと説明する。

視線を向こうに向けると、石抱の刑に処されているスーレシアの姿

があった。

なにやら完全にトリップして兄様兄様と延々演説をしていて、周囲

の状況には一切目もくれずに喋り続けていた。

「白ちゃん、あれは?」

「あー、多分大丈夫。山田くんをダシにしたら釣れた。で、ああなっ

た」

「……………うん、全くわからないよ、白ちゃん」

後で細かく聞かないと、わからないだろうなと思いつながら、視線を外す。

こんな事が立て続けに起きる中、暗躍もしなければならぬ。

その事実で内心で溜息をつきながら、私は白ちゃんに提案をした。

「白ちゃん、これらの学園での暗躍諸々、出来る？」

「……無理！」

「はあ……、胸張って言うことじゃ無いよ」

眉間を指で押さえる。

ふうーと大きく息を吐きだして、続ける。

「ここに連れてきたの、私に学園任せるためでしょう？　じゃあする

よ。代わりに軍はフェルミナちゃんとかに仕事引き継いで欲しいけれど」

「もちのロン！」

それは、前半後半どつちの意味だろうか。

出来るだけ余計な事は考えないように、思考を切り替えていく。

そうして、私はアナレイト王国での活動を始めたのであった。

45 回想録：帝国の皇子

場所は変わらず、学園の寮。

盗聴や監視対策を改めて施し、室内の状況について一切把握できないようにした部屋の中。

あの一夜から数日が経過し、勢いで無理矢理与えてしまった禁忌について受け止める時間が必要だと思い、時々様子を見に來ながら学園と王都に眷属での情報網を構築していた。

その禁忌を与えた相手であるユーゴーは、ソファに座り込んだまま思考に没頭していた。

「情報の整理は出来た？」

「……いや、まだ飲み込みきれねえ」

目元にクマが浮かび始めているユーゴーは、倦怠感を滲ませる動きで顔を上げた。

「にしても、この嫌な感じ。どうにかなんねえのか？ 贖え、贖え、うるせえし、おかげでロクに寝れやしねえ」

「……ごめん、それは無くせない。でも少しだけなら軽減出来るから、今はそれで」

「そうかよ。……ああ、少し静かになったわ」

固まった体を解すように肩を回すユーゴー。

その雰囲気は、最初に会った時の粗暴な気配とは大きく変わって、影を滲ませ憂いを含んだものへと一変していた。

「外道耐性を上げれば少し楽になるから、上げるために必要な物を次は持ってくるよ」

「……なあ、こんなもの俺に見せて、何がしたいんだ？」

静かに問いを投げかけられた。

それに何と答えるか、少し考える。

元々は、此方の学園で使える手駒を確保するという理由で、白ちやんに連れられて來たけれど、今では……

「真実を知ってほしかった、からかな」

心の奥底から淀んだ気持ち吐き出す。

「この世界が、後が無いほど追い詰められていて滅びの危機に瀕している。決して都合の良い夢幻では無いのだと、寝ても覚めても変わるこの無い現実なのだ、知ってほしかったから」

禁忌の内容は、今でも思い出せる。

列挙された罪の歴史に、人とは、これ程まで愚かになれるのだと思っただ。

それが歴史の授業で習うような文字や数字の羅列ではなく、実感を持った知識として叩き込まれ知ることになるのだから、目を逸らすのは難しい。

本来無関係の転生者だろうと、自分には関係無い他人事であると切り捨てる事は出来ない内容。

それが禁忌。

「そんな事のためにか？」

「割と大事なことだよ」

そう言えば一部、記載されていない歯抜けの情報もあったはずだから、それについて補足も必要だと思っただ。

まあ、知識については目的からすれば、おまけである。

本当に知ってほしかったのは……

「荒療治だったけれど、おかげで目が覚めたでしょう？」

「……ああ。その通りだよ、クソがッ！」

盛大に悪態をつくユーゴー。

その背中には、驕りに満ちた態度も酔い痴れている夢遊病のような気配も無く、ただごく普通の一人の少年のように見えた。

椅子を持ってきて対面に置く。

背に腕を回して長い髪を纏めて掬い、毛先を膝に乗せて座る。

その様子を、ユーゴーは横目で見ていた。

「にしても、お前ほんとに苔森か？ キヤラ違いすぎんだろ」

ボソツと彼は呟く。

「なんかこう……、もつと普通な、ってもアレか……多少は変なヤツだったけどよ。少なくとも、そんな死んだ目なんかしてなかったはずだ」

僅かに顔を顰める。

自分の変化については、本当に元の自分から変わってしまったと強く実感している。

怒りっぽくなっただし、転生前の日本にいた頃の笑い方なんて、今は出来そうに無い。

「そういうユーゴーも、何あの態度は？　まるで自分が世界の中心みたいな馬鹿みたいな事」

今どき不良ですら、あんな態度は取らないのではと思える口の悪さだった。

不快さやムカつきは、近頃の記憶ではダントツであり、今でも少し怒りは治まっていない。

「馬鹿とは何だよ？」

「言葉通りの意味だよ。あれは馬鹿としか言いようがない」

苛立ちのまま、お互い鋭い言葉で罵り合う。

正面から堂々と、飾りつきの無い本音の言葉をぶつけ合った。

白熱した勢いで双方同時に立ち上がって椅子を蹴飛ばし、正面から睨み合う。

「デメエ……。何様のつもりだよ、チビ」

「ストッパーのいないユーゴーなんて、大馬鹿野郎のクズ以外に何があると言うのさ？」

「あ？？」

「んん？」

低い声で、威圧し合う。

この程度の圧なんて、初めて魔物と相対した時にすら及ばない。

どちらもスキルや魔術に頼らない素の状態で、視線をバチバチとぶつけ合っていた。

「……はは、はははははははっ！」

突然、ユーゴーが笑い出す。

急な変化に目を丸くしていると、段々と声が小さく掠れていき自嘲しているかのような笑い方になっていく。

そして最後には泣いているような呻き声へと変わった。

「……ああ、そうだな。俺はクズだ、一成がいなければ俺は、ドンドン悪い方に行つちまう」

手のひらで顔を覆い、歪に唇を釣り上げてユーゴーは静かに笑う。指の隙間から、雫が流れて落ちて伝つていく。

「久々だよ、こんな避けもせず真っ直ぐぶつかつて来るヤツ。素の俺を出せたの、いつぶりだろうなあ……」

荒つぽく、ユーゴーは目元を擦る。

袖口で雫を拭った後に見えた瞳は、曇りが抜けて穏やかな光を湛えていた。

ゆつくりと近すぎた距離を離していく。

ユーゴーは蹴倒したソファを元に戻して腰を下ろすと、私に問いかけた。

「なあ、一成について何か知ってるか？」

その質問に、私は答えを持ち合わせていなかった。

「ごめん、桜崎くんについては何も知らない。生きているのか、死んでいるのかも」

白ちゃんから聞いた情報にも、少ないながら自分で調べた情報にも、桜崎一成らしき転生者の事は一切入って来てはいなかった。

転生者は基本的に見た目や容姿では判別出来ないのです、鑑定などが使えない今では見つけるのが困難だと、以前白ちゃんが愚痴を言っていたのを憶えている。

「そうか……」

重く息を吐きながら、ユーゴーは短く呟いた。

「先生には？ 何故か先生は転生者について詳しく知っているみたいだけど、そこからは？」

情報を集めていく内に、誘拐事件や野盗被害が私たちがこの世界に転生してきた時期から数年後に頻発していて、その裏にエルフがいた事がわかっている。

それらの事件が転生者を集めるために画策されたものだと推察していて、転生者についての情報をエルフに流したのが先生である可能性が極めて高い。

どうして転生者の正確な位置情報を先生が知ることが出来たのか未だ不明だけど、わかっているのは先生が転生者を集めてエルフの里に匿っているという事実。

エルフの裏の顔を許せない私たち魔王陣営とはいずれ対立するとはいえ、今ならまだ学園にいて疲労を癒やしている先生から聞き出せる事はあるのではないかと、提案をする。

「岡ちゃんか……。前に、一成のこと聞いてもはぐらかされたしなあ」
遠い目をして答えるユーゴー。

僅かに漏れた気配から、その答えに全然納得していないのだと感じた。

「なら、今聞きに行こうか」

「は？ いやでもよ、俺軟禁中だぜ？ 下手に外に出られねえんだけど」

呆れた表情で顔を上げて、こつちを見てくる。

だけど、私は大真面目に考えて、そう提案していた。

「聞けるのが、今しか無さそうだから提案しているんだよ。どうにも、学園から去るつもりみたいなんだよね、先生」

連絡員らしき外部のエルフと会う回数が増え、そこから盗み聞きした内容からエルフの里に一時帰還するようだと情報を掴んでいた。

「だから、話を聞けるのは今だけだと思う」

「俺は……」

「……………予想、ついでにるんでしよう？」

酷だと思いつつ、核心を突いた質問を投げかける。

先生が教えなかった。

それは、私でも真実が何なのか思い当たってしまうのだから、当人が気付いていない訳が無い。

私自身は隠れて話を聞こうと思う。

今はまだ、顔を見せる訳にはいかないし。

下手に情報を与えて、先生が今後予定している魔族と人族の戦争に参加されたら困るので、極力私の姿は見せないようにしなければならぬ。

私は手の上に、最小サイズのコケダマを召喚する。

大きさは、大体テニスボールより少し小さいくらいだと思う。

「これを適当なポケットに入れておいて。そうすれば私も聞こえてくるから」

「顔見せらんないって、どういう事だよ？」

ユーゴーは訝しげにコケダマを受け取ると、一見ただけでは苔の塊にしか見えないので様々な角度から目を細めて観察していた。

「こつちにも理由があるので。私たちに付いて来るなら詳しく教えていくよ」

目が合ったのか急に仰け反り、手からコケダマを落としそうになり慌ててキャッチしていた。

多少手荒に扱っても傷一つ付かない防御力を与えているので、怪我の心配はしていないけれど、その扱いに少しハラハラしてしまう。

少し辛抱して欲しいと、ユーゴーに渡したコケダマに念話を送った。

「おつと……。へえ？ どうせ無理矢理連れて行くんじゃないかって思ってたぜ？」

皮肉げにユーゴーは嘯く。

どうせ俺の話なんて聞きやしないだろうと、煙のような不信と疑惑の感情が、顔にありありと浮かんでいた。

どのみち、一度は来てもらう事になる。

だけど、そこからどうするのかは本人の意思に依る。

私たちに付いて行けないと言うなら、監視は付けるけれど帝国なり何処にでも送り帰す。

けれど、もし最後まで聞いた上で、私たちと共に来ると言うなら

……

「まずは、先生から話を聞きに行こう」

手を差し出す。

それをユーゴーは一巡考え込む仕草を見せてから、力強く私の手を取った。

日が傾き、陰が色濃くなる黄昏時、学園の裏門。

人氣がなくなつた狭い道を、幼いとも言える小柄なエルフが旅装を纏つて歩いていた。

彼女はこれから、学園の外に待機しているエルフの一団と合流し、一度エルフの里に寄つた後、里で保護している転生者の様子を確認してから、魔族領に囚われている生徒を救う糸口を掴むため隣接する帝国に赴く予定だった。

もつとも、そう思っているのは彼女だけなのだが。

彼女が気配を殺して裏門に近づいた時、建物の陰から目の前に人影が立ち塞がった。

「よお、岡ちゃん」

「夏目くん……、何故君が此処に。君は今、謹慎中の筈では」

夕日に照らし出された人物は、彼女がステータスを低くしスキルを剥奪した相手だった。

まさか昨日今日で復讐かと身構えるものの、当の相手は自然体のまま殺気すら感じられない。

「そんなの、どうでもいいだろ」

平坦に、彼は言う。

「なあ、岡ちゃん。最後に教えてくれよ。一成は……、一成は何処だ？」

感情の籠もっていない、押し殺した声が響く。

その問いに、彼女は迷う。

真実を教えていいのかと。

「あいつは、もう……、いねえのか？」

偽りは許さないと、鋭い眼光が彼女を見詰める。

その雰囲気、彼女は重い口を開く。

「桜崎一成くんは……、もう亡くなっています」

言ってしまったから、彼女は後悔する。

この感じ、まさかと、悪い予感だけが脳裏に浮かびます。

「そっか、ありがとよ。センス」

答えを聞いた彼は、数秒噛み締めるように口を閉ざすと、朗らかに笑って返事をした。

邪気も憤慨も一切無い、悲しげな笑顔で。

「じゃあな」

「夏目くん!!」

再び建物の陰に消える彼を、一瞬遅れてから彼女は追い掛ける。

しかし、視界に映ったのは誰もいない石畳だけだった。

彼女は急いで自分のスキルを見る。

そこには起きる時間も変わらないまま『スキルを剥奪され死亡』の文字が浮かんでいた。

その事に、彼女は喜べない。

今ナニカ、大事なことを間違えたのでは無いのかと、不安が消えてくれないから。

学園を遠くから見下ろせる山の中腹に、彼は居た。

隣に大きな帽子で顔を隠した髪の長い少女が立っており、その少女が問う。

「本当にいいの?」

「ああ、このままじゃダメだ。こんな俺じゃ、一成に顔向けできねえ」

赤く腫らした目元を更に強く擦ることで酷く悪化するのも気にせず、彼は宣言する。

「俺を連れて行ってくれ。禁忌なんてもの俺に押し付けられる程だ、色々知っているんだろう? 何するか知らねえが、このまま立ち止まっただけじゃねえんだよ」

目の前の木の幹に、拳を叩きつけるユーゴー。

ステータスが失われた体では皮膚が破けて血が流れるけれど、欠片も気に留めていない。

「後で、お墓を作ろうか」

私は風に溶かし込むかのように、静かに言う

「中身の無いお墓だけど、区切りをつけるには必要だと思う」

「……そうだな。ウジウジしてたら、この馬鹿野郎って怒られちゃうな、一成に」

ゆつくりと振り返るユーゴー。

その瞳には、力強い輝きが燃え盛っていた。

「いくか」

「それじゃあ……、行こうか」

この日、アナレイト王国の学園から帝国の皇子は忽然と姿を消した。

少なからず騒動は起きたが帝国からの抗議は不思議な事に一切無く、事件は有耶無耶のまま闇に葬られた。

同時期にエルフの留学生、フリーメス・ハアイフェナスもヒツソリと姿を消した。

それらを知った学園に通う転生者たちに動揺が走ったが、彼ら彼女らには本当の真実を知る術を持ち合わせていなかった。

疑問を持ちつつも、勉学に励む転生者たち。

その影にて蠢く者たちが、静かに罨を張る。

「この力が使えれば兄様を……くッ」

「使わせる訳ないでしょう？ 苔森の指示よ、諦めなさい」

「第十軍はどう？」

「正直、何度死ぬかと思ったが……。前よりもっと強い力を手に入れた、そして知識もな」

「……本当に、するのですか？」

「おう。山田のやつに、今はシュレインか、現実つてもんを教えに行くぜ。あと負けたままってのも性に合わんしな」

「やりすぎないでね……」

「わーってるよ。今の俺の力と、あいつとの差はヤベーくらいに開いてんの理解してっから。あのソフィアくらい強くねえと相手になん

なくて近頃退屈なんだぜ？」

「崩壊しないように調整するのが大変面倒な事、本当にわかっていますか？」

「頼りにしてっぜー」

「はああ……。嫌いなタイプのはず、だったのだけどなあ」

かくて、二人の王子は再び対峙することになる。

あの時は一方的な逆恨み。

今は、どんな気持ちを抱いて向かい合うのか。

それは本人のみぞ知る。

S 2 不穩

ユーゴーが姿を消してから、はや数年。

俺に対しての暗殺未遂と、地竜による襲撃事件。

両方とも被害は殆ど無いとはいえ学園に少なくない衝撃を与えた二つの事件は、結局の所真相が表沙汰になることは無く、主犯不明のまま有耶無耶に終わった。

その犯人がユーゴーだと俺は知っているが、実際に具体的な罰が与えられる事は無かった。

当のユーゴーが、学園から忽然と姿を消したからだ。

空間魔法による逃走ではないかと言われているが、真実は不明のままである。

事件からしばらくして、カティアやユーリと話した会話では……

「仮に襲撃者たちとの関係が証明出来なかったとしても、他国の王族に本人が攻撃を加えたことは事実。それが何の罪にも問われないのは、おかしいと思いませんか？」

「何もおかしい事は無いのよ。ここはそういう世界だから」

目撃したのが俺と岡先生だけとはいえ、日本では考えられないような事実に疑問を浮かべる俺とカティアに、ユーリが答えた。

ユーリは元クラスメイトの転生者で、隣国の聖アレイウス教国の象徴的存在である聖女の候補の一人でもある。

前世の名前は長谷部結花で、女子の中では手鞠川とか古田とか苔森とかの、比較的大人しい子や漆原美麗のグループに馴染めない子たちと仲が良かったと記憶している。

その漆原ことフェイは今世では地竜になっていて、俺と行動を共にしているけどな。

「シユン君たちは、その地位に居るから気付かないだろうね。この世界の身分っていうのはね……みんなが思うよりずっと強い力を持っているんだよ。あたしは元孤児で平民だから、そういうのを結構耳にしてきた……。貴族に殴られた拳句に殴った手を痛めたって理由で

処刑された人もいた。売った野菜に虫が付いてたつて理由で一家諸共処刑された家族がいた。他にもね、それくらいの話だったら世界中に溢れているよ」

その時、俺とカティアは二人して絶句していたのを憶えている。

「身分の差は絶対の差。ユーゴー君は世界有数の大国の次期剣帝。このくらいの事件、有耶無耶にするのは簡単な事なんだよ」

苦い顔をしていたカティアと俺。

その時、俺たちは世界の事を全く何もわかっていなかったのかもしれないと、そう思った。

話の後は、神言神言とトリップし始めて喋り続けるユーリから最後に神言教に入信を迫られる、いつもの感じだった。

その後のユーゴーについて、気にならないと言えば嘘になる。

ステータスが低くなりスキルも失ったユーゴーが、あの後何も無かったとは思えない。

人として最弱クラスまで弱体化したと知られば、ユーゴーの祖国である帝国でも居場所が無くなっているかもしれない。

最悪、祖国から絶縁を言い渡されているかも。

レングザンド帝国では力こそが全ての実力主義だという。

そう考えると、力を失う事がユーゴーにとって相応しい罰なのかもしれない。

力に溺れ、精神すら病んでいたように見えたユーゴー。

俺も、ユリウス兄様やスーにカティアの存在が居なければ、力に溺れていたのかもしれない。

あの事件を機に、世界を見る目が変わった。

以前の俺は、ユリウス兄様に憧れを抱いているだけの、ただの子供だった。

けど、初めて人の悪意に正面から触れ、魔物の恐ろしさと殺気を肌で感じて、俺はようやく兄様が進んでいる道の困難さの一端を知ったのだった。

今でも、恐怖が脳裏にこびりついて離れない。

俺が平和ボケした日本からの転生者だからそう強く思うのかもしれないけれど、俺は殺すのも、殺されるのも、怖くて仕方がないし、どうしようもなく嫌いだ。

それでも、この世界で生きていくには、兄様の背に追いつくためには、その恐怖に屈する訳にはいかないし、嫌いだから逃げることで出来やしない。

あの事件の後も、俺は演習に参加して魔物と戦い殺す機会があった。

俺の一太刀で呆気無く倒れ、命を奪ってしまった弱い魔物。

力が無ければ、死んでいたのは俺の方だとわかっているのに、命を奪った自分自身の力が怖い。

この手にある重さと恐怖は、決して忘れてはならないものだ。

命の奪うことへの重さ、それを行った俺自身の力に、恐怖を忘れてはならない。

忘れてしまえば、俺は俺では無くなる。

いつ自分の命が脅かされるかわからない危険な世界で、そんな考えを持つのは自分でも馬鹿だと思うけど、この感覚だけは失ってはならないものだと感じた。

命の重さを理解する。

その上で、守るべきものと、奪わなければならない命を天秤にかけ、戦うことを選択する。

兄様が歩く道は、そんな道なのだろう。

俺には、まだまだ覚悟も勇氣も足りていない。

それでも俺は、極力誰かを殺す事なんてしたくなかった。

けど、自分と隣にいる身近な誰かを守るだけの力が必要だ。

矛盾しているようだけど、俺に力が無くて何も出来ずに見ているだけなんて、耐えられない。

それで大事な誰かが目の前で死ぬような事、俺は嫌だ。

成長していくにつれ強くなる力に、喜びよりも怖さが大きくなる。

魔族との戦争がいつ勃発してもおかしくない情勢では、必要だと理解している、だ。

ユリウス兄様は今、帝国にいるんだろう。

魔族との国境線がある帝国では、小競り合いも多いと聞く。

兄様と直接顔を合わせたのも、随分前の事になっていた。

岡先生の姿も、長らく見ていない。

ユーゴーが姿を消したのと同じくして、岡先生も学園から消えていた。

前は授業に時々は出席していたのに、今では影も形もない。

あの時、ユーゴーに何をして力を消したのかも、地竜との戦いで参戦しなかった理由も、今姿を見せない理由も何もかも、俺にはわからない事だらけだ。

俺の周囲では、表面上では何も無くても、いろんな事が変わった。カティアは、図書館に籠もり知識を漁っては人脈を広げているように見える。

徐々に俺と距離を取ろうとしているようで、なんとなくギクシヤクした関係が続いている。

フェイも、それまで乗り気では無かったレベル上げに積極的に取り組み、体が大きくなるという理由で嫌がっていた進化もあつさり行い、今では数メートルの巨体になり外暮らしをしていた。

スーも最近は何だか余所余所しい気がしていた。

前までは「兄様」と言つて何処までも付いてきていたのに、この頃はその頻度も少なくなった。

これが兄離れなのかと思うと、少し寂しいものがある。

そう言えば、何を思ったのか知らない間にスーはペットを飼っていた。

緑色の鮮やかな翅を持った虫だ。

普通、女性は虫とかは苦手だと言われているけれど、これは抵抗を持たない人も多そうだと思う綺麗な見た目だった。

俺も少し可愛いと思う、丸くてぬいぐるみのような姿だ。

蝶なのかと聞いたが、実は蛾らしい。

なるほど確かによく見れば、カイコガを緑色にして翅に鮮やかな模様を描けば、こうなるだろう見た目だ。

どうやって手に入れたのか教えてくれなかったけど、それがスーを成長させた何かであるなら、俺がどうこう言うのも野暮な話だろう。その時、当の虫自身は器用に前脚でグシグシ触覚を擦って呑気な姿を見せていたが。

何も変わっていないのは、ユーリくらいか。

神言教の勧誘活動を所構わずまくっている姿を見かけるし、絡まれて困っている生徒が居れば俺がユーリを引き剥がして、逃げろと生徒に目で合図する事が何度もあった。

そして標的が俺に変わるまでがワンセットで、俺とユーリでの定番になっていた。

そうして俺の周囲では些細な変化はありつつも、大きな事件も無く平穏に過ぎ去っていく。

そのはずだった……

《条件を満たしました。称号「勇者」を獲得しました》

この声が聞こえてから、俺の世界は一変した。

勇者の称号を得たことは、すぐに教師を通して父上に報告された。

父上に呼び出されて久しぶりに帰ってきた王城だけど、懐かしさや感慨に浸る余裕なんて俺には無かった。

そして俺は、父上の執務室で勇者の称号を確認され、嘘ではない事を証明した。

いや、してしまった、か……

勇者の代替わり、それはユリウス兄様の死を証明するようなものだからだ。

あの時、初めて父上の弱い姿を見た。

父上も一人の親だったんだと、遅まきながら理解したんだ。

その後は、ユリウス兄様の死と新勇者になった俺についての公表を伏せる事で決まり、一ヶ月程俺は城に缶詰となって自主訓練に明け暮れる日々だった。

何もしていないと色々と考え込んでしまって、落ち着かないから

だ。

体を動かしていれば、少しは気が紛れる。

そんな気がしたから。

聞いた話によれば、ユリウス兄様が死んだことは世界的に秘匿されているらしい。

戦場の現場などでは知れ渡っていそうだけど、少なくとも戦場から遠く離れたこの国では、そういった噂が入ってくるのは、まだ先の事になりそうだった。

戦場では魔族の侵攻が何故か止まり、魔族側も今回の戦争でかなりの被害が出たと言われているので、しばらくは動きが無いだろうと予想されていた。

そして時間は過ぎ、戦場からハイリンスさんが帰還して、ユリウス兄様が遺体で帰ってきた。

兄様の遺体は、身内のみで密かに葬儀が行われた。

そこで俺は改めて、兄様でも命を落とすような、過酷な現実というものを感じた。

力が欲しいと思った。

けど、だからと言って甘さを捨てる気は無い。

心が無い力では、人を傷付けるだけだと、俺はそう思う。

傷付けるだけの力が生むのは、悲しさだけだ。

それを俺は、ユリウス兄様の遺体から感じ取ったんだ。

力は怖い。

戦うのは、もつと怖い。

こんなにも早く覚悟を求められるなんて、俺は想像もしていなかった。

きっと俺は、ユリウス兄様が生きていても隣に立って戦えなかっただろう。

魔物を殺すのも抵抗を覚える俺なのに、しっかりとした意思を持つ相手を殺す事なんて、不可能だと思う。

弱くて、臆病で、ちっぽけな勇者。

それが俺だ。

時間を掛ければ強くなれるこの世界で、俺はこれから戦いの日々
身を投じる事になる。

嫌な世界だ。

世界の仕組みも、逃れられず変われない俺自身にも。

何も考えず、魔族は敵だと言えたら、どれほど楽だろう。

ただ、殺すことに何も疑問を抱かずに戦えたら、どれほど簡単だ
ろう。

でもそれは、兄様の理想にも、俺自身の魂にも反することだ。

不安に押しつぶされそうな時、話せる相手は少ない。

兄としてのプライドかスーに弱音は吐けない、フェイは俺が勇者に
なると同時に巨大な白い卵のようになっていた。

鑑定したら「竜の繭」と表示され、中でフェイが生きているのかも
不明であり、あの気安い軽口も今は聞こえない。

ユーリも教国に呼び戻されて学園から去ってしまい、今頃は王都の
教会で帰国の準備をしているだろう。

唯一カティアだけが俺の内心を吐露できる相手だ。

けど、今は話せてもカティアとはいずれ離れてしまう。

俺は戦場で、カティアは学園だ。

そんな危険な場所に連れて行くことなんて、出来ない。

俺は、兄様が経験したという自傷じみた方法で只管鍛えるだけだ。

こうでもない、俺では追いつけないから。

兄様が歩いてきた道、その裏側をハイリンスから聞いた俺は、立ち
止まれなくなった。

兄様の理想に、俺の全てで殉じる。

そのために力を付けることも、考えを巡らせる事も、正しさを求め
続ける事も、どれも止めてはならない。

時間も止まること無く、刻一刻と過ぎ去っていった。

父上に呼び出されて執務室に向かう俺。

ついに兄様の死が、市井にも噂され広がってきているらしい。

もう隠すのも限界だと判断し、神言教は正式に勇者の死を発表するようだ。

そして、新勇者の発表も一緒に。
今日呼び出されたのは、その事についてだろう。

「シユレインです」

扉をノックしたが、返事は無い。

おかしいな、父上はここだと聞いていたんだが。

もう一度ノックをする。

すると、扉が僅かに開いていた。

俺は違和感を覚えつつも、そのまま扉を押して執務室に入った。

「父上？ 入りますよ？」

この声にも、やはり返事は無い。

室内を見渡すが、書類の積まれた机には誰もいない。

「誰もいない？ いや……ッ!？」

これは血の臭い!？」

急いで執務室の奥へと走る。

そこには、額を撃ち抜かれて血を流す父上の冷たい姿が横たわっていた。

「ッ!？」

叫び声を上げようとした。

けど、いつの間にか俺の周りに消音の効果がかけていて、その音が外に出る事は無かった。

「失礼します父上。……シユレイン？ そこで何をしている？」

混乱で頭が真っ白になっていた時、開けっ放しだった扉からサイリス兄様が護衛を連れて室内に入ってきた。

そして、倒れ伏す父上と、隣に立つ俺。

「シユレイン、貴様父上を!？」

違う、俺じゃない!!

けど、その声は掻き消されて聞こえない。

「衛兵！ シユレインが国王陛下を襲った!？」

俺とは反対に、よく通る叫び声でサイリス兄様の言葉が城内に響き

渡る。

雪崩込む衛兵たち。

「シユレインを捕らえろー！」

サイリス兄様の号令で、動き出す甲冑騎士。

目にも留まらぬ速度で接近し、剣を振り下ろしてきた。

長剣を抜いた瞬間も振り上げた瞬間も、見えなかった。

けど、普段の訓練の成果か、咄嗟に自分の剣を間に差し込む事に成功した。

しかし、その剣が容易く両断される。

ありえない。

咄嗟のことで強化も何も掛けてない状態だったとはいえ、そこらのナマクラとは違う質実剛健な名剣だというのは、簡単に切り裂かれて真つ二つにされた。

追撃の掌底が、鳩尾に突き刺さる。

胃液を撒き散らしながら、俺は室内の壁まで吹き飛ばされた。

「ゴツ……、オゲエ……」

血液混じりの内容物が、口から溢れる。

確実にあばらの何本かが逝った。

内臓にも深刻なダメージが入っているだろう。

即死しなかったのが奇蹟だと思える、致命の一撃だった。

蹲る俺に、甲冑騎士が語りかけてきた。

「よう。無様だなあ、勇者様？」

煽るような口調と声が、頭上から投げ掛けられる。

兜で若干聞き取りづらいが、その声には聞き覚えがあった。

「おつ、まえッ……。ユーゴー、か？」

「正解だ」

気が付けば消音の効果が消えていて、呻きと共に俺は問う。

兜を脱いで現れた顔は、スキルを失い失墜したはずのユーゴーだった。

歪に釣り上げた口角とギラついた瞳が、俺の目に映る。

「悪いな、シユン。ちよつと死んでくれ」

そう、ユーゴーは世間話でもするかのように嘯いた。

S3 転落

「悪いな、シユン。ちょっと死んでくれ」

目の前のユーゴーは、そんな事を宣った。

歪に歪められ歯を剥き出しにした口と、冷めたような無感情の目が、俺を見下す。

俺は、震える膝に鞭打って立ち上がる。

口腔内に溜まった血を床に吐き出して、治療魔法を自分に掛ける。

その俺の動きを、怜悯な目のまま見逃し続けるユーゴー。

こいつ、遊んでいるのか……？

一見隙だらけに見えるけれど、あの速度からすれば後手でも対応可能なのだろう。

だから俺が回復しても問題無いと、余裕ぶっているんだと思う。

「ユーゴー。わざわざ正体を明かすな」

「あ？ ……命令すんな、目的が合うから協力してるだけだ。それを忘れんじゃねえぞ」

ユーゴーは長剣の切っ先を、サイリス兄様に向ける。

首元に突きつけられた刃に怯むサイリス兄様と、サイリス兄様の護衛らしい甲冑騎士の過半数がユーゴーに武器を向ける。

それをつまらなそうに危機感なんて覚えていないかのように、無感情に見るユーゴー。

沈黙が数秒、過ぎていく。

「そこまでよ」

短く、血の通っていないかのようなゾツとする声が聞こえた。

騎士たちの間を縫いユーゴーの横に立ったのは、俺と同じ歳くらいの少女だった。

死人のような白い肌に鮮血のような色の瞳を輝かせる、童話の世界から飛び出してきた王女様と言われても不思議じゃない、儂げで妖しい美貌の少女。

「……………ちっ、わーっただよ、ソフィア」

剣を下ろすユーゴー。

そして夢げな見た目を裏切るような、あまりにも禍々しい気配を纏う少女の片腕には、見知った青い髪の少女が気を失って抱えられていた。

「スー!？」

「おっと、動かない方が良いぜ? なにせ、お前の妹は……人質、だからな」

「ユーゴー、ききつつ、まああ!」

怒りで視界が赤く染まったと錯覚する。

それほどの激情が内側で燃え盛り、負傷を無視して立ち上がる。

「おいおい、膝が震えてるぜ? 座ってるよ」

こいつら何の目的でスーを!? それにサイリス兄様との関係は?

「気になるか? 俺たちの目的。こつちのお兄様は王座が欲しい。んで、俺たちはシユン、お前が邪魔だから排除したい。両者共に同じ目的だって訳だ」

俺の視線に気付いたユーゴーが答える。

怪我を多少治して呼吸が安定するようになり、俺は問い返す。

「な、んで……。次の王は、サイリス兄様のはずだ」

「ところがな? あの王様は次期国王にお前を指名しようかと画策していたんだよ。お前が勇者だと公表される前に次期国王と発表してしまえば、勇者として戦場に気軽に赴く事も出来なくなるって考えさ」
「そんな下らん事で、この私の王座が奪われて堪るかツ!!」

淡々としたユーゴーの言葉に思わず噴出して叫び上げる、サイリス兄様の苦渋に満ちた慟哭。

その叫びは、いつの間にか新たに張り巡らせていた空気の壁で、部屋の外には聞こえないようにされていた。

行使したであろう術者の姿は、見えない。

ユーゴーが魔法を発動させた様子は無く、ソフィアと呼ばれた少女も何か魔法を使ったようには見えなかった。

「弱ええなあ、シユン。そんなものか? 勇者つてのは。これなら前の勇者の方がマシだぜ?」

「ッ！ お前に、兄様の何がわかるッ!!」

唐突に投げ掛けられたユーゴーの煽り文句に、思わず反応してしま
う。

俺が俺じゃないかのような激情で、気が狂いそうになる。

スーを人質にしても飽き足らず、兄様の事まで持ち出されては、僅
かな平静も保てそうに無い。

「前の勇者は、それはもう凄え男だったぜ？ 最期まで諦めず戦って
たさ。だがよ、それに比べてお前は何だ？ 俺を追放して満足か？

そんなものなのか？ 勇者の弟さんよ」

ふざけるなッ！ 俺は、俺はアッ!!

「ユウウゴオオオオオッ!!」

血反吐を溢しながら、ユーゴーに殴り掛かる。

激痛も無視して放った一撃は、いとも容易く片手で受け止められて
いた。

「はんッ」

そのまま片手で、俺の体重など存在しないかのように投げ飛ばされ
る。

投げ飛ばす時に握り潰された拳から、粉々に砕かれた骨が突き出て
いた。

「やる気あんのか、お前？ そんなんじや、誰も救えねえぞ。人も、世
界も」

取るに足らない雑魚だと面倒な相手に絡まれたと言わんばかりな、
見下しきった苦笑を浮かべるユーゴーは、長剣を弄びながら余裕の態
度を崩さない。

イカれた関節を嵌め直し、ユーゴーを鑑定する。

けど……

《鑑定が妨害されました》

「あ？ ……ああ、鑑定か。こうすりや見れんだろ。それで絶望しろ、
シユン」

返ってきた結果に驚いているとユーゴーは俺が何をしたのか見抜
き、態々鑑定を妨害するスキルか何かを解除して、自身を鑑定しろと

俺に勧めてくる。

ユーゴーは、自身の速度に付いてこれぞ壊れた甲冑の板金を剥がしてガントレットを外した。

「ユーゴー、何のつもりだ。さっさと殺せ」

「いいだろう？ もうちよつと付き合えよ。それとも、お優しい兄様は弟が甚振られるのがお気に召しませんか？」

「ふんっ、勝手にしろ」

痺れを切らしたサイリス兄様が、ユーゴーを急かす。

だが、ユーゴーは何処吹く風で聞く耳を持たない。

そして俺は、再度ユーゴーを鑑定した。

すぐさま、しなければ良かったと思うような圧倒的な強さを知ってしまった。

《人族 LV81 名前 ユーゴー・バン・レングザンド

ステータス

HP : 19169 / 19662 (緑)

MP : 11542 / 13422 (青)

SP : 12577 / 15154 (黄)

: 12663 / 16510 (赤)

平均攻撃能力 : 20222

平均防御能力 : 16526

平均魔法能力 : 18189

平均抵抗能力 : 19396

平均速度能力 : 15282

スキル

HP 超速回復 LV 6 MP 高速回復 LV 2 MP 消費大緩和 LV

2

SP 高速回復 LV 10 SP 消費大緩和 LV 7 魔力感知 LV 1

0 術式感知 LV 10

魔力精密操作 LV 10 魔神法 LV 10 魔力付与 LV 10 魔

法付与 LV 10 大魔力撃 LV 10

破壊大強化LV4 斬撃大強化LV4 打撃大強化LV2 貫通
大強化LV1 衝撃大強化LV1
外道大攻撃LV4 火炎攻撃LV10 闘神法LV10 気力付
与LV10 技能付与LV2
大気力撃LV10 剣の天才LV10 体術の英雄LV3 投擲
LV10 空間機動LV10
連携LV4 統率LV6 集中LV10 思考超加速LV3 未
来視LV1 並列意思LV1
高速演算LV6 記録LV1 命中LV10 回避LV10 確
率大補正LV10
隠密LV10 隠蔽LV10 無音LV10 無臭LV10 無
熱LV6 鑑定LV10 遠話LV4
気配感知LV10 危険感知LV10 動体感知LV10 熱感
知LV4 反応感知LV1
火魔法LV10 火炎魔法LV10 獄炎魔法LV8 水魔法L
V1 雷魔法LV10
雷光魔法LV9 呪怨魔法LV1 影魔法LV10 闇魔法LV
10 暗黒魔法LV7
深淵魔法LV10 外道魔法LV10 治療魔法LV10 帝王
破壊大耐性LV5 打撃大耐性LV6 斬撃大耐性LV6 貫通
大耐性LV4 衝撃大耐性LV4
状態異常無効 外道無効 苦痛無効 痛覚無効 恐怖大耐性LV
5 気絶大耐性LV8
炎熱無効 雷光耐性LV6 水耐性LV5 氷結耐性LV3 大
地耐性LV2 暴風耐性LV2
暗黒無効 酸耐性LV8 腐蝕耐性LV6
五感大強化LV10 暗視LV10 知覚領域拡張LV3 万里
眼LV1
天命LV10 天魔LV10 天動LV10 富天LV10
剛毅LV10 城塞LV10 天道LV10 天守LV10 韋
駄天LV10

過食LV4 激怒LV2 強欲 征服 傲慢 奈落 淫技LV3
神性領域拡張LV6 禁忌LV10 n%1||W
スキルポイント：434
称号

魔物殺し 強欲の支配者 悪食 魔物の殺戮者 無慈悲 傲慢の
支配者 魔物の天災 妖精殺し

人族殺し 妖精の殺戮者 覇者 率いるもの 王 魔族殺し》

「なっ……、何だこれ……」

桁がおかしいステータス。

無数の強力なスキルが、高レベルで並ぶ取得スキルの数々。

同じ人とは思えない化け物の数値が、そこには記されていた。

目に留まったのは、禁忌LV10。

神言教が、所持する事それだけで罪と見做す禁忌のスキル。

それがレベルカンスト状態で、ユーゴーは所持していた。

他にも、見たこと無いスキルが何個かある。

「どうよ？ 俺様の新たな力は？ 敵わないと絶望したか？ 負け犬

は大人しく、ガタガタ部屋の隅で震えてるといいさ、最後の時までな」

ありえない。

けど、鑑定は無情にも淡々と結果を表示する。

正面からぶつかるのは論外、奇策を弄してもなお届かず、決して勝てない圧倒的な差なのだ。

ユーゴーに何があったのか知らない。

学園から姿を消した後の事も、こんな人間から外れた能力を得た経緯も。

このまま何もかも諦めて屈してしまいたい。

そんな考えが、脳裏をよぎる。

けど――

「ぐうッ、おおおおっ!!」

退いてはならない、諦めない。

俺はユリウス兄様の影すら踏めない、臆病者で弱虫な人間だ。

けど、兄様が灯した光を受け継ぐって決めたんだ。怖くて体が震えても、怒りで自分を見失いそうでも、みんなが笑って暮らせる世界、その理想を俺が絶やしていい訳無い。

今はちっぽけな俺の手でも、守れるモノがあるなら諦めてなるものか！

「まだ、折れねえのか……？」

心底面倒そうに、首を鳴らすユーゴー。

凍えるような感情の無い視線に、怯えて威圧されている場合じゃない。

「しかたねえ……、簡単に死ぬんじゃねえぞ、シユン」

ユーゴーは手に持った剣を床に突き刺して、拳を固めてゴキゴキと圧を掛けるように響かせる。

まるで獣のような覇気が襲い掛かってくるが、逃げない、まだやれる。

真正面から迫る一撃を躲けたのは奇跡だと思う。

パワー、スピード、どれも俺には認識出来ないレベルだった。

ただ予感のまま体を反らし、拳の殺傷圏内から逃れた俺は、ユーゴーを無視して走る。

「スーを、返せええッツ!!」

勢いそのまま護衛たちの隙間を駆け抜けた俺は、背後に控えるだけで何もしていなかったソフィアという少女に、折れて根本だけになっていた剣を投げつける。

彼女の顔面に向かって飛ぶ剣だったけれど、それを何も纏っていない素手で叩き落される。

けど、腕は振り切られたまま、注意も剣に向いたままだ。

あと少しで、スーに届く。

その瞬間――

「がはあッ!?!」

突然、背骨を押し折られるかのような衝撃が背後から襲い掛かった。

強制的に地べたに這いつくばらされ、何とか視線を動かして確認す

ると、闇の中でも燦然と輝くユーゴーの眼光が間近にあった。

「手間掛けさせんなよ」

くそッ!

何も出来ずに終わるのか、俺はッ。

「さあ、シユン。負け犬の勇者様? 最後だ、言いたい事は?」

耳元で、嘲るようなユーゴーの声。

やたら煽るような言い回しをしながら、俺の背中を押し碎こうと圧力を増していく腕。

こんなところで、俺は、死ぬのか?

「……嫌だ」

戦いたくない、死にたくない。

でも、俺はまだ、諦めたくない。

思わず漏れた声は、誰にも聞こえなかった筈だ。

だが、それに答える声が響く。

「——させません!」

室内に、風の衝撃波が吹き荒れる。

ユーゴーが飛び退き背中が軽くなると同時に、エルフの小さな影が、俺を覗き込む。

「シユンくん、大丈夫ですか!?!」

そこに居たのは、長らく姿を見せなかった岡先生だった。

小さな体に急所を守るだけの軽装を纏い、弓で武装している姿が視界に映る。

「久しぶりだというのに随分なご挨拶だぜええ、岡ちゃん!」

甲冑は傷ついているものの、本人にはかすり傷一つ無さそうな様子のユーゴーが咆える。

そこに、さらなる魔法を撃ち出す先生。

しかし、その魔法はユーゴーの隣に立ったソフィアが腕を前に伸ばすことで、空中で分解されるかのように消えて無くなった。

まるで魔法そのものが無効化されているかのような現象に、竜や龍に備わったスキルのようなだと思ひ浮かぶ。

「あ、あなたは!?!」

先生が驚愕に目を見開く。

その視線の先にはソフィアの姿があった。

先生は、彼女について知っているのか?

「くっ! シュンくん、逃げますよ!」

「ですが、スーがッ!」

目眩ましと足止めのために、風の魔法で床を粉碎して巻き上げる先生。

そして逃げろと言うが、スーを置いていく事なんて出来ない!

「ダメです! 今は一旦引きましょう! そんな体で何が出来ると言うのです、シュンくん!」

ここまで警戒し切羽詰まった先生の声は、聞いたことが無い。

ユーゴーの強さは身に沁みているけど、ソフィアという少女もそれほど危険な存在なのか?

鑑定を仕掛けても、ユーゴーの時と同じように妨害されて見る事は出来ない。

「シュン、俺の背に乗れ。逃げるぞ」

誰かの背中に背負われ、短い金髪が眼前に映る。

「ハイリンス……さん」

「酷い傷だ。レストンにシュンが危ないと聞いて駆けつけた。混乱しているだろうが、今は逃げたほうがいい。立つのもやっつだろう。無茶と無謀を履き違えるな、シュン」

走り出したハイリンスの背から、俺は背後を振り返る。

スーは、ソフィアの腕の中でピクリとも動かず沈黙していた。

「くそッ……ごめん、スー」

迫りくる衛兵は、先生の魔法で吹き飛ばされ蹴散らしていく。

城内の各所で、兵同士が争っている様子が感じられた。

「一体、何がどうなって……」

「反乱です」

「反乱?」

「はい。主犯はサイリス第一王子とユーゴーくん。……ですが、その

罪をシユンくんに擦り付け、あたかも自分たちが反乱を鎮めたという事にするつもりなんです」

先生の説明に、信じられないという気持ちが湧き起こる。

「ハイリンスさん」

「俺も同意見だ。最近のサイリス殿下にはキナ臭いところがあったからな」

そんな、サイリス兄様は、悪魔に魂を売っても王座が欲しいというのか。

「今戦っているのはレストンくんの部隊です。彼が時間を作ってくれている間に逃げます」

そして、俺たちは城から脱出した。

何故かユーゴーが追撃に来ることは無く、多少の抵抗のみで抜けられた事に疑念を覚えながら。

「ここでレストンくと落ち合う予定です。その後、この国を出奔します」

「待ってください先生！ スーを助け出してからだ！」

「ダメです」

城から脱出し、一軒の屋敷に身を隠した俺たち。

ユーゴーとの戦いで負った傷は、治療の甲斐もあって既に全快していた。

「ユーゴーを倒せなくても、スーだけを助けるなら見つからずに行けば……」

「ダメです！ シユンくんも見たでしょう、彼らの強さを。行けば必ず死にます」

その言葉に言い淀む。

桁を二つ間違えたかのようなステータスに、勝てるとは思わない。

むしろ、何故今生きていられているのか不思議なほど、ユーゴーとの差があった。

「ソフィアさんがいる限り、こちらに勝ち目はありません」

「ユーゴーは、あのソフィアって少女は、一体どうしてあんな力を……」

「それは……」

先生が口を開こうとした時、扉が開いた。

そこから、レストン兄様を始め、様々な懐かしい顔ぶれが入ってきた。

その中には、学友の姿も。

「シユン、無事だったか？」

「殿下、お久しぶりです」

「立派になりましたね」

レストン兄様の背後に控えるのは、かつて俺とスーの侍女として働いていたアナとクレベア。

その奥には、見慣れた顔が二人。

「カティア……、ユーリ……」

「心配しましたわよ、シユン」

「何が、どうなっているの……。神様、私に神々しい声でもって導いて下さい……」

でも何故、カティアたちが此処に？

「先生から念話を受けてですわ。シユンが反乱騒動に巻き込まれて危機に陥っていると聞いては、居ても立っても居られませんか」

俺たちは再会を喜ぶが、浸るだけの時間は用意されていなかった。

「まずい、囲まれている」

常に屋敷の外を警戒していたハイリンスさんが、端的に状況を説明する。

強行突破を主張した先生の言葉に、頷き武器を構える一同。

「シユン、この剣を使え」

「これは？」

レストン兄様から、清廉な想念を感じる剣を渡される。

少しだけ刀身を見ると、透き通る青空のような鮮やかな蒼。

「王家伝来の神剣だ。戦闘は専門外の俺が使うより、勇者であるシユンが使った方が良いだろう」

「……ありがとうございます。受け取りました」

この剣があっても、ユーゴーには届かない。

そう思いつつも、レストン兄様に感謝を述べて厚意を受け取る。

そして俺たちは包囲を突破し、王都の外門まで迫る。

けど、そこで待っていたのは……

「待ちくたびれたぜ？ シュン」

別の部隊が門の前に立ち塞がる中、その奥にて待ち構えるユーゴーが居た。

帝1 黒幕の実働役というお仕事

俺があいつらと行動を共にして……、あー、何年経ったか？

まあ、結構な時間が過ぎたと思ってくれ。

毎日生きるか死ぬかの日々を過ごしていれば、多少は時間感覚もブツ壊れるだろ？

ほんと、馬鹿みたいな密度の時間だったぜ。

一成の墓作って自分にケジメ付けた後、最初にやらされた出来事は、魔物の巣に放り込まれた事だった。

死ぬっつーの。

まあ、同じ事何度もさせられている奴らが居たから乗り切れたけどよう。

で、同じ地獄見て同じ釜の飯食って、そんで仲良くなってよ。

楽しかったぜ、堅苦しさなんて全然無く、今までで一番自由だった。

魔族は危険だ何だと、帝国や学園で教えられてきたが、結局あいつらも同じ人間だ。

ただ寿命がちよっと長いだけな。

一緒に馬鹿やれば、それが良く分かる。

他には拷問じみたスキルの鍛え方だったりだとか、世界の裏側とも言える隠された真実つてのをアリエルとかいう、苔森と同等の小せえ奴から教えられたりもしたな。

あれが魔王って言うんだから驚きだよな。

なんだよ平均ステータス九万つて、バケモンか。こつちにも転生者は何人か居てさ。

苔森だろ、笹島の奴に、リホ子……て言ったらキレるんだったな、根岸さん改めソフィアだろ、それにあまり会えねえけど若葉さんも居た。

前世で仲良かった奴は此処にも居なかったけど、まあ学園の時よりはマシだな。

あまり話した事無かったが、笹島の奴と気が合うのは予想外だった。

なんつーかな、笹島と話していると、一成がチラつくんだ。

笹島のクソ真面目な所が、俺が馬鹿をやった後に叱る一成の感じと良く似てるから、懐かしさと同時に反省も覚えるんだ。

ああ俺、一成に、こんなに迷惑掛けていたんだなってさ。

俺のやらかしをキツイ言葉で、ときには拳でブン殴られては、反省もするさ。

向こうも今まで女所帯だったからか、気安く話せる相手が出来て多少籠が外れてたんだろうな、そのまま喧嘩になって止め時がわからなくなりヒートアップしちゃった。

その頃の俺は、多少力を取り戻したとは言えまだ弱かったから、顔面パンパンに腫れ上がるまで殴られたのは今でも少しムカつく。

でもまあ、スゲー楽しかった。

最後なんか痛みすら忘れて笑うしかなかったからな、脳内麻薬でラリってるのなんの。

いい感じにお互い馬鹿で、いい感じに意地張って、そんでいい感じに分かり合えて。

なんだこれ、不良漫画か？ 馬鹿じゃねーの、最高だよ畜生。

そっから修行漬けの日々に時々魔物を狩りに行く日常を過ごしていたら、いつの間にか獲得していたのが、強欲と傲慢だ。

支配者スキルっつーの？

超強力な効果を持つけれど、精神汚染などリスクも大きい危険なスキル。

そのせいで何度も突然ブツ倒れて、目が覚めたら苔森が俺を治療していて、その後叱られるのがお馴染みになっていたな。

なんでも魂が崩壊しかけていたらしい。

本人には自覚が無い所が怖いな。

たまに日本食モドキを作ってくれんのも苔森だったか。

転生してから微妙な飯ばかりだったから、懐かしくて涙が出そうだ。

そんなときは、何処からともなく若葉さんも現れるんだから不思議だ

よな。

でも、そのおかげで俺は強くなれた。

けどさ、この力でシユンの奴に復讐する気は、もう無い。

あいつも馬鹿だと思うよ。

何も知らずに、のうのうと青春しちゃってさあ、本人は幸せだろうさ。

そのちっぽけなモノが、何の保障もされていない薄氷の上にあるのにな。

だから俺は、シユンの奴に現実を叩きつける。

今更お前一人出てきても何にもならないんだと、邪魔だから引っ込んでろと、心を折りに行く。

全てが終わった後で殴られること覚悟してっからさ、今だけは絶望して引き籠もってろと。

なのにな、あいつは……

「ぐうッ、おおおおおっ!!」

ボロボロに痛めつけて、心を折るような言葉吐いたのにさ、全然折れねえの。

むしろ、逆に燃え上がる始末。

おい、マジかよ？

ここまでして、まだ立ち上がるとか想定してねえって。

いい感じに戦う意思を無くしたところで、岡ちゃんが助け出すって筋書きだったのに、もう一回へし折らなくちやいけねえじゃねえか。

手加減苦手だから、殺さないようにするのが難しいのにな。

「何をしている！ 追え！」

シユンが助けに来た岡ちゃんに引っ張られるように逃げ出すのを見送りながら、そばで喚く煩いサイリスの野郎を見る。

こいつもまあ、利用されてるだけの可哀想な奴なんだけどな。

けど、既に毒牙に掛かっているっーなら、解放してやんのが筋か。

「じゃあ、手筈通りに頼むわよ？」

「ああ。任せておけ」

「ほら、いつまで寝たフリしてるの、妹ちゃん？」

「……チツ」

ソフィアに抱きかかえられていたスーレシアとかいうシユンの妹が、それだけで人を殺せそうな憎悪を乗せた舌打ちで返事をした。

「敵わない相手にも立ち向かう兄様の雄姿に浸っていたというのに……、あああんなにスー、スーと私の事を思っ呼んでくださるなんて……」

「はいはい、トリップする前に仕事しましょうねー」

「くっ……、約束は守りなさい」

そのスーレシアが、俺を睨みつけながら恨みがましく言う。

こいつが苔森や若葉さんと交わした約束で、支配者スキルを獲得したらシユンの安全を保障するという約束だ。

その条件は達成され、こいつが持っているのは色欲だ。

この大仕事が終われば晴れて自由の身で、シユンたちの元に帰るのもよし、俺たちに付いて来るのも構わないと、選択肢を提示されていた。

「ほんとに良いのか？ 大好きな兄様と離れ離れで」

「良いわけ無いでしょう！」

鬼でも取り憑いたんじゃないかって怖え顔で激昂するスーレシア。

「でも、悪の手に関われた私を救い出し離れ離れになった兄様との感動の再会……、その時兄様はどれほど私に注目してくれるか、ああ想像だけでもう……」

その次の瞬間には恍惚とした表情に一変して、感情の落差に気味の悪さを覚える。

「なあ、あれヤバくね？ 一回、苔森に診せた方がいいんじゃない？」

「汚染進んでるわねー。でも今は忙しいんだから後にしなさい」

大詰めって事で、休む時間も無いとボヤいていた姿が浮かぶ。

なんとというか、ブラツク勤めの社畜のような雰囲気を漂わせて、一層光を無くした目で仕事していた苔森に、これ以上負担を掛けるのも良くねえなと思ひ留まる。

あいつ変に真面目だから、幾つもの仕事抱え込んで調整作業に苦心しているのを見ると、可哀想通り越して痛々しく見えてくるから、少

しは頼って欲しいとも思う。

俺も人の手伝い出来るほど、余裕ある訳じゃ無いけどさあ……

「お前ら……、一体何の話をしている？ それにスーレシア、貴様は……」

「煩いですね……。それではサイリス兄様、短い間でしたがお世話になりました」

泥のように濁った目をしたスーレシアが、サイリスの頭に触れる。

汚いものに触ったと冷え切った表情をしながら、仕事だから仕方無いと淡々と処理を開始する。

「ぐ、ぐあああああ!？」

今サイリスに施されているのは、精神の破壊。

こいつの頭ん中には、あのポティマスとかいうクソ野郎の洗脳が施されている。

本人には一切自覚はねえだろうし、支配と言っても思考を少し誘導される程度のもらしいが、この手の洗脳がアナレイト王国の上層部に蔓延していた。

さつきシユンの仕業に見せかけるように殺した国王も、その一人だ。

まあ、洗脳の目的なんてどうでもいい。

要は、この国は一度掃除する必要があつて、洗脳された奴を徹底的に殺して駆除すること。

それが、今回の第十軍の仕事だ。

ぶっちゃけシユンの事は、俺がどうしてもって頼んだオマケでしかない。

「それじゃあ、私は元凶を仕留めに行くわ」

「おう」

ソフィアが部屋の外へと出ていく。

これからあいつは、この洗脳を仕組んだポティマスの分体をブツ潰しに行くんだろうな。

こうもボロボロな国の内情を知ると、自分のところもシヤレにならない

いなと痛感する。

俺の生まれ故郷である帝国も、内部がかなり腐敗していた。

文官と武官で対立していて、中央は汚職役人どもの巢窟、武官は我関せずで地方に引き籠もっているわけで、よく保ってるなこの国って思ってたぜ。

力を得なおして、世界の真実という知識を得た俺は、帝国はこのままではダメだと思った。

だから帝国の改革をさせて欲しいと、アリエルさんたちに頼んだ。戦争開始の一年くらい前に帝国に戻り、俺は帝国内部を一齐に粛清した。

幸い、諜報が得意な若葉さんが居たから、強請るネタには困らなかったからな。

どうしようもない不正役人どもは、証拠を突きつけて即首斬り。そこそこ悪い事してて、けど役に立ちそうな奴は、秘密をチラつかせて脅迫。

小物は、威圧して脅し従わせる。

日和見は、苛烈にも思えるような強引な姿勢を見せつけることで、ゆっくり取り込む。

これで中央はカタが付いてしまった。

実力主義って、こういう時便利だよな。

恐怖政治とか言うなよ、自覚しているんだからさ。

武官たちは、もっと簡単。

ただ直接領地に取り込んで、私兵ブツ飛ばして力を見せる、終わり。今世での親父も、本当はこういう事したかったんだろうけど、実力が無くて孤立してたなんて、馬鹿みたいな話だよ。

今では俺は、現剣帝より人気で畏れられる皇子様って訳だ。

まあ、一般市民には俺が国に帰ったのを秘密にしてあるから、上層部だけの話さ。

あの人族と魔族との戦争では、俺は帝国側に立って参加していた。

俺に忠誠を誓ってくれた奴らを死地に送らなきゃいけない時は悩んだし、死んだと知った時には落ち込んだりもしたさ。

それに、会ったこと無い相手とはいえ、仲良くなった奴と同じ魔族を殺す側に立つって事も。

俺は不自然に見えないように犠牲を増やして戦う作戦なんて、どうすればいいのか悩んだけど、その必要は無かった。

あの変態爺、強かったんだなあ。

俺が帝国に帰ってから力尽くの改革をやってる時、一番の障害で気持ち悪かったジジイが人族で最高の魔法使いと呼ばれているんだから、こんなのが最高なんて世も末だと思ってた。

そのロナント爺と同じ砦で参加して、ある程度軍が消耗したら俺も出るかと考えていたら、爺が敵将を狙撃で討ち取っちゃうんだから俺の出番も策も無くなっちゃった。

仕方無いので、適当に掃討戦に参加して引き上げるだけにした。

ちよつと一当てして、何人か斬って、それで終わり。

それだけでも、現場の兵士には実力を示せたから充分だったかな。

もし、俺の国にもポティマスの魔の手が伸びていたらと思うとゾツとする。

そうだったら、流す必要のある血は、もつと増えていたかもしれないからな。

「あの腐れ尼を、殺して。——終わったわ」

感情の籠もっていない冷やかな声で、呼びかけられた。

その後ろには、虚ろな目でブツブツと讒言と溢し続けるサイリスの姿があった。

「上出来だ。それで？ スーレシア姫はいかがなされますか？」

「その巫山戯た口調は止めて。ここに残る。囚われのお姫様は城の奥で待つ方が目立つもの」

「へいへい……」

シユンの奴も面倒なのに好かれて大変だなあと、他人事だからこそ淡白な感想が浮かぶ。

さて、俺も次の仕事に取り掛かるかあ……

「……………ふふっ」

城内の道中で洗脳されている奴らをサクツと殺し、シユンたちの潜伏場所から脱出先として一番候補になりそうな場所に先回りして、待ち構える。

そして戦闘音が聞こえ始め、ようやくシユンたちが現れる。

「待ちくたびれたぜ？ シユン」

驚きで目を丸くするシユンのアホ面に、冷酷なユーゴーという仮面が外れないように注意を払いながら、俺は語りかける。

お前、勇者が何なのか知っているのか？

そんな、お綺麗なモノじゃ無いんだぞと、遠回しに叩きつける。

それなのに、一步も退かずに自論を返してくる。

そんなの、分かっている。

争いは悲劇を生む、力なんて争いを生むだけのモノだって。

勇者なんて俺には過ぎたモノだと。

けど、悲劇を見過ごせない。

止める力があるなら、俺は諦めない。

……言うじゃねえか、身の程知らずが。

お前は本当に知ってるのか？ この世界の真実を。

だったらまずは、高みというものを識れ、シユン。

俺なんか、その中じゃ中間下くらいなんだぞ？

第九軍の奴らとか神話級の魔物含めて、俺はその程度だ。

その程度の力と覚悟で、何も知らずに立ち止まっていたら、俺が殺すぞ？

一旦距離を取って、左手に火炎魔法を構築する。

ほら、如何にもな大技準備しているぜ？ お前ならどうする？

真っ先に先頭に飛び出し、光の盾を作り出すシユン。

そうだよな、お前ならそうするよな。

俺は敢えて、その下の地面を狙う。

見た目こそ派手だが、お前なら直撃しても致命傷にならない程度には威力は抑えてある。

『――腐れあ――ろして』

……なんだ？ 一瞬雑音のような変な感じがしたが。まあ、いい。

余計な思考は忘却するに限る、狙うのは、ユーリだ。

シユン、お前は殺さないから安心しろ。

代わりにユーリが犠牲になるだけだ。

そして俺は、魔法を放つ。

灼熱の炎槍は狙い変わらず命中し、ユーリの心臓を焼き貫いた。

ユーリの……心臓？

「あ？」

「えっ……？」

「ユーリいいいいつつ!!?!?」

今、俺、何をやった……？

シユンの絶叫を聞きながら、俺は呆然と立ち尽くした。

聖一 夢見る乙女

えっ……？

一瞬の衝撃と、その後に襲ってきた何かゴツソリと抜け落ちる感覚に、私は惚けたような声を溢し思考が止まる。

シユン君が驚いた表情で、手を伸ばし駆け寄るのが見える。

そして崩れ落ちる私を、そのまま抱き留められた。

ああ、そっか。

私、ユーゴー君に撃たれたんだ。

痛みは感じない。

あの凄そうな火の魔法だもん、神経ごと焼き切って胸に大穴を空けられたんだから、当然かな。

自分の命が、神の御下に導かれているのがわかる。

死にかけているのに妙に冷静な思考のためか走馬灯が脳裏を巡り、私、ユーリーン・ウレンこと長谷部結花は、過去を振り返る。

この世界で生まれ落ちた場所は、ごくありふれた貧民の家だった。

魔物に襲われて財産や住む場所を失ったり、盗賊や戦争など人の悪意によって転落したり、運が悪くて貧しい生活を余儀無くされるなど、この世界で貧民に身を落とす理由は様々。

そんな、家族を養う事が出来ない両親が、生まれたばかりで何の役にも立てずお荷物な赤ん坊をどうするのかは、自明の理だった。

私は、今世の家族から捨てられ、教会の前に置き去りにされた。

子供が捨てられるのなんて、この世界ではよくある事で、他の聖女候補にも同じような経歴の子だっている。

けれど、私は生まれた瞬間からしつかりとした意識があつて、本来は憶えていないだろう赤ん坊の頃の記憶や、捨てる瞬間の親の顔だつて見てしまった。

仕方無いと思いつつも、これで楽になったと言わんばかりの、安堵した表情を。

気が付いたら自分が赤ん坊になっていて、訳も分からず混乱して不

安に押し潰されそうな時に、いきなり訪れた絶望。

待つてと叫んでも喉から出るのは甲高い泣き声で、むしろ叫んだ瞬間足早に離れていく足音。

足音も聞こえなくなり、固い石畳に接した体が痛みと寒さを感じたその瞬間に、私の心は何処か壊れたんだと思う。

しばらくして教会の建物から人が出てきて、私を屋内に入れてくれたけれど、その後の事はよく憶えていない。

喉が枯れそうなほど泣き叫んだ疲労に、誰かの腕に抱かれて暖かい部屋へと連れられた安心で、気を失ってしまったから。

再び目を覚ましてからの私が縫ったのは、気絶する寸前に聞こえた日本語。

まるで機械音声のように無機質な印象の女性の声は、教会では神言と呼ばれるものだった。

言葉も分からない状況で、頼れる相手もない中では、向こうから一方的にだけ私に合わせて日本語で語りかけてくれる声、それだけが救いだった。

まだ言葉が分からない時には、スキルを取得する気も無いのにスキルの名前を思い浮かべて、声を聞いたりもした。

神言という不可思議なものの違和感も、孤独と不安に苛まれた私には関係無かった。

むしろ、だからこそ特別なものなのだと、傾倒するのに時間は掛からなかった。

私を保護してくれた教会が掲げる神言教の教義についても、そんな私だからこそ欠片も抵抗無くすんなりと受け入れて、のめり込んでいった。

聞こえてくる声は神の声であり、神の声をより多く聞くためにスキルやレベルを上げていこうという教義に。

このユーリーン・ウレンという名前も全部、神言教から貰ったもの。ユーリーンは私を拾ってくれた人から、ウレンは孤児院代わりだった教会の名前から貰った。

わざわざ日本語で語りかけてくれる心優しい神様の声をもっと聞

くために、沢山頑張ってスキルを成長させたりもした。

その結果として、神言教の上層部の目に留まり聖女候補に抜擢されたのは、今までの努力が認められたみたいで嬉しかった。

ほんとは、ただ不安から逃れたくて始めた事だったのにな。

そうならば、もう止められなかった。

周りも神言を崇め奉る人たちで、その中で生活を続けていけば考え方も変わっていく。

より深く神言教を信仰するようになったし、スキルだけではなくレベルも積極的に上げるため、魔物と戦う事も厭わなくなった。

とはいえ体の出来上がっていない、まだか弱い聖女候補だから、教会で修行中の頃には街の外に出て魔物と戦った事は無いんだけどね。

どうやって戦闘経験を積んだのかは、おいおい。

そして、神言教を学び教義を守っていけば、してはならない事にも目が向く。

禁忌。

それが何なのか、調べても何処にも書いてなかったし教えられる事も無かった。

あるのは禁忌の取得に繋がりがねない、見るも悍ましい禁止行為についてだけ。

真つ当な人が普通に生活していれば行う事はない人道から外れた内容なので、その果てに取得する禁忌がどれほど危険で許されないものなのか、知らなくても理解出来てしまう。

神様が禁忌と定めるようなスキル。

そのようなスキルを持っている人は、即刻罪人と判断されて処刑されるのも当然だと思った。

そんな日々が数年続き十歳頃になると、私は留学を勧められた。

場所はアナレイト王国の王立学園。

最初は、あんまり乗り気じゃなかった。

だって学園に入学すれば、聖女候補として修行する時間が削られると思ったから。

でも上からの決定は絶対で変えられず、私は渋々学園に行くと、運

命に出会った。

山田君。

前世で隣の席だった男の子で、密かに心寄せて気になっていた人。たまに授業中に横目で見たり、野外活動で思わず声を掛けてみたりと、我ながら恥ずかしくなるような甘酸っぱい事をしていた相手。

その彼が、学園に居た。

奇跡って思えた。

偶然にしても出来過ぎだって。

山田君はその国の王子様に生まれ変わっていて、名前も前世と良く似た響きのシュレインというカッコイイ名前。

彼本人は前世と同じ、シユンっていう名前を縮めたあだ名で呼ばれる事を望んでいたけれど。

表面上は何でも無いように装っていたけれど、内心では舞い上がってテンションが可笑しな事になっていた。

だって、シユン君が王子様だよ？

親から捨てられた少女が、前世から想っていた人と出会えて、その人が大国の王子様。

ロマンチックな展開に憧れていたとはいえ、これには運命を感じずにはいられなかった。

意外とかかなりのロマンチストで話が合った真理ちゃんとも、ここまですべたな展開の話題なんて、したこと無かったんじゃないかなあ。

けれど、元々は何処にでも居そうな普通の女子高生だった私には、意中の人と上手く話せる能力なんて持っていなかった。

そんな私の会話デッキには神言教についてでしか手札にはなくて、シユン君と話せる切っ掛けはいつもそれになってしまっていた。

いつまで経っても内心テンパっちゃうのは治らなくて、シユン君がちよつと引いているのを理解しつつも、神様の御声について濁流のように喋り続ける事しか出来なかった。

シユン君から嫌がられていると分かっているとしても、私はこの空気を味わうのが楽しくて、ついつい毎回挨拶代わりに神言教に勧誘しては一方的に話し続けてしまう。

神言教への勧誘は、毎回やんわりと断られてしまいうけれど、むしろ断られても構わなかった。

だって、それならこれから何度でも神言教への勧誘で、シユン君に話し掛けられるから。

熱心に神言教に勧誘するのも、本気で本心だったけれどね。

神様の事を話している時なら、臆病な自分でも勇気と自信を持って動けた。

グイグイ体を寄せる事も出来たし、唇と唇が触れ合いそんな距離まで詰め寄る事も出来た。

そうすると、シユン君の妹でお兄ちゃん大好きなスーレシアちゃんが怒って、私に襲い掛かってくるんだけど、それを大島君ことカティアさんが仲裁して、当の本人であるシユン君は困ったような表情を浮かべて、なあなあで誤魔化そうとするこの時間が好きだった。

この時間がいつまでも続いていけばいいのに、そう思った。

だって、いくらロマンチックな出会いを言ったと言っても、いくら最有力な聖女候補だとしても、私は元孤児で平民。

継承権は低いとはいええ大国の王子様であらせられるシユン君とは、身分が違いすぎた。

私は次代の勇者様にお仕える事が、避けられないお役目。

シユン君も、国が決めた婚約者とお付き合いするのが確実、それがカティアさんな可能性が高い事も。

いつかは失恋しちゃう。

だから、本当の想いは伝えられなかった。

だって、そうでしょう？

叶わない願いだと知っていて、成就しない夢を追い続けるのなんて、悲しいだけだもん。

もし上手くいってお付き合いが出来たとしても、何かの拍子で今代の勇者様であるユリウス様が早くに身罷られ次の聖女が求められたら、私はシユン君から離れなくちゃならない。

聖女候補の殆どが、勇者様と年代が合わずに候補のまま一生を終える事が珍しく無いとはいえ、この世界には死が溢れていて優しくは無

い。

それに、聖女になれないとしても私は神言教の中で、いい感じの役に就く事になるだろうと、漠然と思っていた。

決して自惚れじゃないと思いたいけれど、沢山いる聖女候補の先輩後輩の中で、ダントツ一番の成績を収めているんだもん。

教会が私を手放す訳無いって、分かっちゃうから。

それを理解してからは、より過激にシユン君に絡んでいった。

シユン君と離れるのが嫌だから、少しでも長く一緒に居たくて。

でも別れは避けられないというのなら、本心は隠して神言教に傾倒したユーリの仮面を被って。

いつか嫌気が差して、シユン君の方からウザイとか嫌いだとか言っ
て欲しかった。

そうすれば、私の本心を伝えること無く、手酷くフって貰えるから。

そうすれば、後腐れなく思いつきり陰で泣いて、失恋出来るから。

でも、シユン君は良い人過ぎるから、いつまで経っても嫌な顔一つ
しないし、私を遠ざけたりもしなかった。

それじゃあ、臆病で馬鹿な私は、どこまでも甘えてつけ上がっちゃ
うよ？

シユン君が通りそうな所で神言教の布教活動をして、適当な生徒に
絡んでいく。

そうしているとシユン君がやって来て、私を生徒から引き剥がす。

後は勧誘目的と偽ってシユン君とお話。

いつかの別離に嘆く私も、今のこの緩い雰囲気を楽しむ私も、どっ
ちも本物だった。

その日常が変わったあの日も、正しく運命なんだと感じた。

シユン君が、勇者様になった。

それはシユン君のお兄さん、ユリウス様が亡くなった事を示してい
るんだけど、私は少しだけ、そう少しだけ喜んでしまった。

ああ、これでシユン君と、ずっと一緒に居られるって。

勇者様と聖女はセット。

慣例では、実力に差があつても年齢の近い人が聖女に選ばれるけれど、私とシユン君は同じ年で実力は私以上の人はいない。

聖女に内定されるのは確実だった。

その事実を知った時、私は暗い喜びに支配されていた。

聖女たる者みな高潔であれと、教えられてきた内容を裏切るような、醜く汚い本音。

でも、この気持ちに嘘はつけない。

これで、恋心を諦めなくてもいい可能性が生まれたんだから。

学園から王都の教会に移動して上からの指示を待っている時、私はそんな事を考えてた。

非道い女だと思う。

ユリウス様が亡くなったという事は、先代の聖女であるヤーナ様も亡くなっている可能性が高いというのに、私はそんな二人の姿をシユン君と私に置き換えて妄想していた。

その時だけは、勇者様たちが歩いた苦難も哀しみも忘れて、明るい夢だけ見てたんだから、当然聖女に相応しくない悪い事を考えていた私にはバチが当たったんだと思う。

泣いているシユンの顔が見える。

ごめんね。

私、最期まで嘘付きだった。

本来は影の薄い地味な私は、自分を偽らないと生きていけなかったから。

だから、嘘付きで醜い私を知らないまま、忘れて欲しい。

こんな終わりが訪れるなんて思ってもいなかったけれど、シユン君の腕の中で逝けるなんて贅沢だよね。

ああ、でも。

最期に一つ、やらなくちゃいけないことがある。

今なら通る気がする。

燃え尽きる前の蠟燭が一番明るいように、圧倒的強者になっていた

ユーゴー君の抵抗を突破してスキルを仕掛ける。

「……夢見る乙女」

難易度は最高の迷宮へと、ご招待。

夢見る乙女。

寝ている時に見た夢をストックして、小規模な異空間ダンジョンとして作り出せるスキル。

夢の迷宮に取り込まれた人は、そのダンジョンを攻略しないと外に脱出できないから、使いようによっては、足留めにもってこいのスキル。

だれど私は今まで、このスキルで生まれたダンジョンを修行場所としてでしか使っていないくて、誰かに見せたりした事は無かった。

最悪使った本人である私がダンジョンに殺される可能性もあるけれど、逆にその性質があるからこそ、一時も気が抜けず密度の濃い経験を積むことが出来た。

その中でも、面倒さが一際最悪な悪夢を元にしたダンジョンにユーゴー君を落としたんだから、しばらくは帰ってこれないはず。

今のうちだよ、シユン君。

戦っても敵わないんだから、急いで逃げて。

達成感に浸りながら、私は笑う。

上手く笑えているか自信無いけれど、嘘付きの最期には勿体無い結末だよ。

視界が暗くなって霞んでいく。

そのまま闇に溶けようとした私は、何かに引き留められる。

それは、お寝坊さんを容赦なく起こすような、暖かくも強引な朝日のようで。

声が聞こえる。

「シユン、君……?」

「ユーリー！ 良かった……っ」

目と鼻の先に、シユン君の顔が見える。

「わ、たし……死ん、だ……」

「治した」

嘘。

あれは治療魔法なんかで治るような怪我じゃない。

聖女候補として、怪我人の治療もしてきた私が言うんだもん。

あの傷では、間に合わない。

それなのに。

「シユン、君は、すご、いね……」

「今はもう喋るな。何故かユーゴーが消えた今、脱出する最大のチャンスだ」

それは私のおかげ。

でも、長くは持たないと思うから急いで。

そう言えたら良いのに、体は答えてくれない。

お姫様抱っこなんて、嬉しくも恥ずかしい格好に文句も言えやしない。

シユン君。

私の勇者様。

嘘付きの聖女は、どこまでも純粹すぎる勇者様に、恋をしてもいいのでしょうか？

恋とは落ちるものなんて良く言ったもので、落ちたら二度と戻れはしない。

落ちていく、どこまでも。

嘘付きの本音。

今からでも聞いてくれますか？

どこまでもお供します、地獄にだって永遠に。

シユン君。

大好きです、前世からずっと。

嘘付きの本当は言葉にされず、乙女の夢の中で、ヒツソリと呟かれた。

S 4 脱出

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV4」が「禁忌LV5」になりました》

腕に抱いたユーリが気を失った。

脳裏に聞こえてきた声を無視して、ユーリを見る。

傷は完全に塞がったけど、魔法で服も焼けて大穴になっているので胸元が大きくはだけており、非常に目に毒な光景となっていたので、俺はマフラーを外してそつとユーリに掛ける。

鑑定をして命に別状が無い事を確認し、俺は安堵の息をつく。

失った血や体力まで完全に戻るといふ訳では無いので、変わらず生命の危機に瀕している状態のままというのが起こり得るからだ。

スキルが効果の通りに能力を發揮し、ユーリが無事戻ってきた事に喜びを覚える暇もなく、戦況は目まぐるしく変化していた。

「シユーン！」

「カティア、ユーリを頼む！」

「わかりましたわ！」

俺はカティアと入れ替わるように戦線に復帰する。

ユーゴーは何故か突然まるで転移したかのように姿を消し、統率者を失った兵士たちが右往左往して戸惑っているのが見える。

それでも事前の指示に従って、俺たちに攻撃を仕掛けてくる兵士は、ハイリンスさんやカティアそれに岡先生とアナと、戦えるみんなが攻勢を押し留めていた。

レストン兄様やクレベアも一対一では早々遅れは取らないけれど、俺やハイリンスさんのような力は無いので、カバーしあえるように近くに固まり堅実に戦っていた。

包囲している大多数の兵士は、俺たちが本気で戦えば簡単に叩きのめすことが出来る相手だが、それをやれば勢い余って殺傷してしまい、無用の犠牲を生み出してしまう可能性がある。

なので、多少手加減をしつつ気絶させるに留めていたが、それは兵士たちの中に強敵が混じる前までの話だった。

「さっきぶりね」

俺たちの背後から現れ今先生と対峙しているのは、王城で出会い戦ったソフィアだった。

直接対峙してはいないとはいえ、その威圧感は無敵にも負けていない凍えるような覇気だ。

「ねぎ……」

「その名前で呼ばないでって、言ってるでしょ？」

先生が何か言いかけて、それをソフィアが遮った。

何のことだ？

襲い掛かって来た兵士の剣を受け流し、すぐさま引き戻して剣の腹で強打する。

気になるが、兵士の数が思ったより多い。

深く考えている暇が無い。

「あ、これ。先生にプレゼント」

チラリと見ると、ソフィアが岡先生に向かって何かを投げた。

それは赤い液体で宙に線を描きながら、先生の足元に転がった。

転がったのは人の生首で、その顔は先生と初めて再会した時に会った、エルフの親善大使であるポティマスだった。

「そ、そんな!？」

目を見開き慌てふためく先生を、楽しげに眺めて手についた血を舐め取るソフィア。

艶かしい水音を立てて、舌が唇に付いた血も拭っていく。

「不味いわ。性根が腐っていると、血も不味くなるのかしら?」

「ポティマスは、あなたが?」

「それ以外に、何かあるの?」

信じられないと訴える先生の表情に、ソフィアは心底不思議そうに答える。

まるで、何も悪い事も可笑しな事もしていないと言いたげな。

「だって、あなたは!」

「人殺しなんて出来る筈が無いとか言わないですよ? 自分だって散々やってきたでしょ? ここは日本じゃないんだから、前と同じだなん

て思わない事ね」

人殺し？ 先生も？ 日本じゃない？

先生の事は一先ず置いておく。

今のソフィアの台詞は、彼女が転生者だとほぼ告げているようなものだった。

それなら、転生者について一番詳しい情報を持っていた先生が知っていたとしても不思議では無い。

ユーゴーとの関係も、転生者だからという理由で少しは説明がつく。

尤も、そうだとしても、なんの躊躇も無く人を殺したように見えるソフィアとは分かり合えないだろうし、肝心な情報はまだ何一つ分かってはいない。

そのソフィアと向かい合っている先生は、ショックを受けつつも戦う意思を見せる。

それを受けても、ソフィアは酷薄に笑い余裕の態度を崩さない。

「先生、私と戦う気？ やめてよね。先生には手を出さなくて、ご主人様に言われてるんだから」

ご主人様？ 誰だ？

王城で見たユーゴーとの距離感は、そういうのとは違うと感じる。

では、いったい誰を指している？

「それで、ユーゴーの奴は何処行ったのかしら？ ここに居ると思っただけど？」

ソフィアが今気づいたといった感じで、問いを投げかける。

先生は少し間を空けてから、口を開く。

「……それを知って、どうするつもりですか」

「べつにどうとも？ 勝手にちよっかい掛けて、勝手に居なくなった馬鹿がどうなろうと知った事じゃないわ。むしろ弄るネタが増えるわね」

底意地の悪そうな笑顔を浮かべ、他人の不幸が最高のご馳走だと目で訴えていた。

そんなソフィアに対し、警戒を少しも緩めない先生。

「まあ、いいわ。教えてくれないのなら用は無いわね」

興味を失ったと踵を返して、立ち去ろうとするソフィアだが、ふと足が止まる。

「ああ、でも。その王族さんには、逃げられちゃ困るのよね」

その視線の先には、レストン兄様の姿が。

「やらせない!」

「シユン君!」

「あはっ!」

飛び出した俺を、妖麗な笑顔で迎え撃つソフィア。

彼女が一回力強く地面を蹴ると、影の中から何らかの巨大生物から削り出したような大剣が飛び出し、俺の剣を容易く受け止める。

「これは、正当防衛! だから少しだけ、遊んであげるわッ!」

「ぐおッ」

重い!

手を抜かれているとわかる一撃なのに、俺の全体重を乗せた斬撃を意に介さず、逆に吹き飛ばす威力が籠もっている。

甚振るために手を抜いていたユーゴーの攻撃よりも、今の一撃は効いた。

骨は折れていないけれど、衝撃で腕全体が痺れるほどだ。

「あなたの相手は、私です!」

俺が石畳に体を打ちつけ転がる中、庇うように入れ替わり飛び出した先生が、魔法をソフィアに向かって叩きつけた。

「先生!」

すぐさま加勢しようとするが、目の前にフードで顔を隠した黒装束が立ち塞がる。

「邪魔だ!」

だが、黒装束の強さはユーゴーやソフィアほどでは無くとも強く、勇者となりステータスが引き上げられた俺でも一筋縄ではいかない相手だった。

他でもハイリンスさんやアナに襲い掛かっている黒装束たちの姿が見える。

向こうも対応に掛かりきりになり、加勢するのもされるのも無理そうだ。

俺は目の前の相手は排除するために斬りかかる。避けられるが、偶然に剣がフードを掠める。

その下から僅かに見えたのは、俺より少し年上くらいの若い青年の顔だった。

同時に仕掛けた鑑定の結果に、俺は驚いた。

「魔族!？」

鑑定して見えたステータスは、平均千以上と英雄クラスと呼ばれるような数値を示していたが、それ以上に目を引いたのは表示された種族。

人族の敵対者である魔族が何でここにという気持ちもあるが、それよりも驚いたのは他の事。

さつき見えた、人族と全く差異というものが見られない見た目。

そうと知らなければ、鑑定しなければ、気付かなかっただろう外見に俺は驚愕した。

何処からか舌打ちが聞こえた。

その発生源はソフィアだったようで、俺と対峙している黒装束に対し、射殺さんとはばかりに鋭く睨みつけていた。

「ああー、もう！ 色々と台無しじゃない！」

イライラが頂点に達していると、荒々しく叫ぶソフィア。

だが、戦闘の冴えは僅かな綻びも見えず、先生の攻撃を見戯とばかりにあしらっていた。

どうする？

このままではジリ貧だ。

連戦の疲労で、俺やハイリンスさんそれに先生などは兎も角、他の人たちが限界に近い。

ユーリも守らなければならぬ状況では、ふとした切っ掛けで瓦解しかねない。

この状況で出来る最善は……何がある？

ソフィアの手が、先生の首を掴む。

吊るし上げられた先生が、苦しそうに藻掻いていた。
マズイ!

先生の危機に動こうとしたその時、変化が起きた。

『ピンチの時に、華麗に参上!』

場違いに明るい念話が、俺たちの耳に届く。

鈍い風切り音と共に、光り輝くような白い飛翔体が急降下してきた。

それは、上空から光の玉を兵士や黒装束に爆撃して降らせながら土煙と石片を巻き上げていき、先生を掴んだソフィアに突撃をして、距離を詰めていく。

先生を手放して回避したソフィアは、そのまま後ろに下がり様子見の態勢へと移るようだ。

ソフィアと先生の距離が開くと、反転してきて俺の前に降り立ったのは、純白の鱗を持つ見事な巨躯の竜だった。

『ヒーローは遅れてやって来るってね!』

「フェイか!？」

その口調や、その慣れ親しんだ気配は、長年相棒として共に過ごしたフェイのもので、この竜がフェイの進化した姿だと直感で理解した。

フェイは元々黒色の地竜だったが、目の前にいる白色の翼を持った竜への変貌に、正直言葉で言い表せないくらいの驚きを受けているが、一つ脳裏に考えが浮かんだ。

『さつき目覚めたばっかで、なんかよく分かんないけど、ピンチなんやしよ?』

「ああ。助かった」

俺はすぐさま指示をする。

「フェイ。兵士たちを押し退けて、城門まで突進してくれるか?」

運良く、黒装束たちは城門側にはいない。

ソフィアや黒装束たち数人は回避したりして無傷のようだが、兵士たちはフェイの光球で打撃を受けている。

兵士たちが混乱から復帰する前に、すぐさま行動に移せば包囲を突

破出来る！

『りょーかいよ！』

翼を顔の正面で交差して、フェイは走る。

力尽くで押し出された兵士たちが左右の建物に叩きつけられ気絶するのを見ながら、俺は大きく声を張り上げる。

「今だ！ 突破する！」

ユーリを抱えたカティアが横を通り過ぎる。

一瞬視線が交差し、すぐ切られる。

——待っていますわ。

すぐ行く——

言葉を交わさない約束。

でも、ごめん。

守れるか、自信無い。

「ハイリンスさん！ 先生を！」

「シユン、わかった！ 今行く！」

ハイリンスさんは大盾で黒装束の攻撃を受け流すと、裏に貼り付けていたらしい物を地面に叩きつけて煙幕を作り出し、一瞬の隙を付いて先生を抱えて駆け寄って来た。

だが……

「レストン兄様！ アナ！ クレベア！」

その三人だけは俺たちの壁になるように、兵士たちと戦い続けた。

「俺たちが時間を稼ぐ！ ハイリンスさん、シユンを頼みます！」

「私たちからもお願いします！」

「殿下、どうかご無事で！」

そう言って、こちらを振り返ること無く呐喊していく。

レストン兄様たちは、殿として残るつもりだ。

「そんな、それじゃ……」

レストン兄様たちでは、ソフィアや黒装束には太刀打ち出来ない。

そんなの分かっているはずなのに、どうして。

「シユン、ぼさつとするな！」

「ハイリンスさん！ でも！」

「彼らの想いを無駄にするなッ！」

「ッ！」

ハイリンスさんに腕を引かれたまま、叱咤される。

一瞬だけ迷った意識の空白に、先生を抱えた逆の腕で、俺はハイリンスさんに担がれた。

「ハイリンスさん!?!」

「こうでもしないと、梃子でも動かんだろう、シユン」

そしてそのまま、走り出す。

レストン兄様たちとは、正反対に。

「降ろしてくれ！ ハイリンスさんッ！」

「逃げるぞ」

「逃がすと思う?」

後ろから声が聞こえてきた。

首を動かして覗き込むと、ほんの僅かな時間でレストン兄様たちを無力化したらしいソフィアと黒装束の姿が見えた。

ここからでは、レストン兄様たちが生きているのか死んでしまったのかも、よく分からない。

「ソフィアあ！ よくもッ！」

俺の血を吐くような叫びにも、鼻で笑うような態度のソフィア。

そのソフィアに向かって、巨大な光線が向かっていった。

目も眩むような光線の濁流は、膨大な光量で周囲を照らし一時的に俺たちとソフィアたちの間を埋め尽くす。

「フェイ!?!」

『悪いけど、あんなのの相手なんか無理だから！ 逃げるしかないの!』

俺と先生ごとハイリンスを掴んだフェイが、空高く飛翔する。

その背には、今だ意識の戻らないユーリを支えながら、しがみつくカティアの姿も。

一瞬の内に、眼下に見える王都が小さく縮小していき、さっきのフェイのブレスらしき光線にも無傷で受けきったソフィアの姿が。

そのソフィアは俺たちを見上げたまま、眺めているだけだった。

『あのまま残っても、勝ち目なんか無かったのよ』

フェイの辛辣な言葉に、俺は反論出来なかった。

こうして俺たちは、王都から脱出した。

レストン兄様、アナ、クレベア。

彼らを、置き去りにして。

本来喜びで例えられる筈の夜明けの光は、悲痛な敗北の影を心に色濃く落としていた。

「ご主人様、そのボロ雑巾みたいなユーゴーは？」

襟首を掴まれ引き摺られているユーゴー。

術者が一度死亡したため脱出不可能になっていた異空間から救助された後、そこからさらに懲罰として苛烈なお仕置きを加えられた姿は、見るも無残な状態となっていた。

「簡潔に。コケちゃんが倒れた」

「え」

「何があつたんですか!?!」

その当人は此処には居ないが、連日の激務に今回の心労で限界を迎えて寝込んでいた。

「あんたらのせい」

「ちよつと待って！ 何がどうしてそうなったのか知らないけど、最後ちゃんと逃したわよ!?! それにほら！ そのまま逃がすと後で何しでかすか分からないじゃない!?! だから先生に昏倒の状態異常掛けておいたし、これで十五日はあいつら下手に動くことが出来ないわ！ 私変な事してない！ 無実よ！」

「お仕置き」

「びぎやあぁーっ!!」

「そつちも同罪」

「ひいつ!？」

「「ぎやあぁ?」「」

白が一言告げた後、のたうち回る隠密装束たち。それを見ながら、白は考える。

妹ちゃんは、今回やらかしたので一度回収つと。再調教が必要だね。

そして山田くんが、慈悲の所持者だったか……なら、それを利用しよう。

白き神は、悪辣な策を練る。

さて、何を選択する？

私たちと敵対するか、それとも手を取る？

見て見ぬふりをするっていうのも、ありかもね。

白き神は動かない。

ただ、獲物が自ら網の中へと飛び込んでくるのを、待つだけだった。

S5 慈悲

王都を脱出してから十日が経った。

俺たちは王都から少し離れた街まで姿を隠しながら進み、ハイリンスさんの旧友だという人物の屋敷に匿って貰っていた。

現時点での俺の立場は、かなり不味いものになっている。

父上を殺害した反逆者で、王都でクーデターを起こして王座を篡奪しようとは画策した王子。

第三王子レストンも共謀し、カティアの実家やエルフの後ろ盾も得て、密かに反乱軍を結成していたのを、事が大きくなる前に阻止した。そういう筋書きらしい。

その情報は各国にも伝達され、晴れて俺は国際指名手配犯という訳だ。

笑えないな。

その発表がされる前から、カティアの両親である公爵夫妻の姿が見られなくなっただけで、既にその時から、サイリス兄様の手の者に捕まっていたと考えるのが自然だろう。

カティアの両親もまた、反逆者と共謀したと冤罪を掛けられていた。

他にも、レストン兄様たちは無事と言っているのか分からないけれど、生きてた。

あの場で殺されていなかったのは救いだったけど、反逆罪で処刑されるのは時間の問題だ。

アナヤクレベアも同様である。

後悔だけが募る。

どうしようもなかったと頭では理解していても、もしもを考えてしまおう。

あの時もっと俺に力があれば、あの時上手く動けていれば。

だが、あの状況を打開するには痛い妄想のような絶大な能力でも持っていなければ、何をしても無駄だっただろう。

それほどまでに俺と、ユーゴーにソフィアらとの間には、大きな力

の差があつた。

力があれば、救えた。

父上も、レストン兄様も、アナもクレベアも、そしてスーも。全てを覆す、ご都合主義。

何が起こつても力を振るえば、何事も上手く収まって大団円。

そんな妄想みたいな力を、俺は一つ持っている。

それは敵を打ち倒すためのモノでは無く、誰かを助けるための力であるけど。

あの時ユーリを救つたのは、間違いじゃないと思っている。

同じような事が目の前で起きれば、俺は誰であろうと救おうとするだろう。

けど、それが本当に正しい事だったのか、ユーリを助けた時に疑問に思つたんだ。

ユリウス兄様は、どう思うだろうか。

俺は……、間違つていないよな？

これからの事をどうすべきか、答えの見えない思考を巡らせていると、扉がノックされた。

「何してんの、お前？」

「お邪魔します、シユン君」

「カティア、それにユーリ。ユーリはもう体は平気なのか？」

カティアに少し寄り掛かるようにしてユーリが部屋に入ってきた。

まだ少しだけふらつくようだけど、目が覚めた時より顔色はだいぶ良くなつていた。

「まだちよつと貧血気味だけどね。それ以外はもう平気だよ」

「無理はするなよ？ 死にかけたんだ。安静にするのに越したことは無いんだから」

ユーゴーが突然目標を変えて放つた魔法は、ユーリを貫いた。

その傷は跡形もなく消し去つたが、重傷だった事には変わりない。

そう思つてユーリを見ていたんだけど、何故かユーリは自分の体を掻き抱くように身を振つた。

「……何処見てるの？」

「ちがつ、そういうつもりじゃ!」

シミ一つ無い、なだらかな肌がフラッシュバックする。

あれは不可抗力だから仕方ないと、誰に言うでもなく心の中で言い訳する。

「シユウオンナー?」

「カティア、誤解だ!」

ジツトリとした視線に晒され、俺はたじろぐ。

何を言っても火に油を注ぎそうだと口籠っていると、救いの手は差し伸べられた。

「あ、これ返すね。大切な物なんでしよう?」

そうユーリから手渡されたのは、ユリウス兄様の形見であるマフラーだった。

「ごめん、手間かけさせたか?」

「いいえ、助けてくれてありがとう。シユン君」

「ああ……」

「……?」

なんだ?

なんかいつものユーリとは違うような……

妙に静かな……、ああそうか。

「ところで、今日は勧誘活動しないのか?」

「もう! 私だってそういう時じゃないって弁えていますっ!」

毎回いつも出会う度に神言教に入る気になったと聞かされ続けてきたから、それが無いとなると何とも言えない不思議な感覚を覚えたりもするけど、そりゃそうか当然だよな。

なのに、距離感はいつもと変わっていないので顔が物凄く近くにあって、ジツと大きな瞳で覗き込まれると、俺も一応男の端くれだから、その少し困ってしまう。

「シユン君……」

「……ユーリ」

そのまま見つめ合う。

無音が痛いほど張り詰め、何かに流されそうになった時、わざとら

しい咳払いが。

「おっほんっ！」

「うお!？」

「きや!？」

「お前ら……、俺の事忘れてないか？」

慌ててお互い弾かれるように後ろに下がり、距離を空けた。

一呼吸して気持ちをリセットした時、ユーリが俺に対して質問してきた。

「ねえ、少し聞いてもいい？ あの時の治療魔法は、普通の治療魔法じゃないよね？」

なんて言えばいいかな、特にユーリには……

「言いたくないのか？」

「あ、ごめんね無理につて話じゃないの。それで先生を治せたらなくて。私でも先生の状態異常を治すのは難しくて」

一部の内容だけ伏せれば話しても問題無いけど、無理に聞いてこないなら助かる。

「どつくに試したけど、あれはこういう時には使えないんだ。ごめん」
ソフィアと戦っていた先生は、昏睡という状態異常を掛けられたようだった。

鑑定してみた結果では、十五日経てば自然と解除されるようで、何もしなくても目は覚めるし、命に別状は無い。

昏睡自体は、治療魔法を根気よく掛け続ければ早く目が覚めるみたいで、もうじき目覚める程度には治療が進んでいた。

ただ、鑑定で俺が見れたのはそこまでだ。

先生も、ステータスやスキルは読み取れ無いようになっていた。

ユーゴーやソフィア、それに先生。

彼ら彼女らは、何を知っているんだ？

先生が秘匿している知識や情報についても、大いに気になる。

ユーゴーが持っていた見たこと無いスキルについてや、ソフィアの事について。

レストン兄様と先生が顔見知りだった事も、いつの間にあれだけの

兵を集めていた事も、どれも俺は知らなかった。

それに、やたら意味深な台詞ばかり吐いて痛めつけるだけで、結局俺を殺さなかったユーゴー。

ソフィアという謎の転生者と、魔族との関係。

ご主人様。

これらの関係性は、一体何だ？

結局、先生の言葉も、ユーゴーやソフィアという言葉も、どれが正しいのか分からない。

情報が不足している。

基準となる絶対正しい真実も、俺は何も知らない状態だった。

「シユン？ おい聞こえてるか？」

「あ、悪い。何だ？」

どうやら思考に没頭しすぎたようだ。

カティアの呼ぶ声に、現実へと引き戻される。

「フェイの事なんだが」

「ああ」

「凄いいよね。あんなに綺麗な翼」

光を反射して煌めく、巨大な白い竜。

どうにも俺が勇者になった事で使い魔として契約していたフェイにも影響が出て、新たな進化の選択肢が生まれた結果、希少な光竜に進化したらしい。

地竜としての優れた防御力をそのままに、流麗な翼を手に入れた事によって空中でも自由に飛び回れる能力を得ていた。

勇者が魔物を使役していると、そういう特殊な進化をする事があるらしい。

単純なステータスだけでも、上位竜を越えて龍の領域に踏み込んでいるし、スキルの数も凄い。

ぶっちゃけ、俺よりも強いのは間違い無い。

そのフェイだけど、今は街にほど近い森の中に身を隠している。

さすがにあの巨体では、街の中に入れる訳にはいかないし目立ってしまうからな。

「フェイちゃんは何か言ってた？」

「退屈すぎて、暇で暇で死にそうだったさ」

フェイの方は大丈夫だろう。

それより問題は……

「スーは……、無事なんだろうか」

人質となっていたスーは、今はユーゴーに連れられてレングザンド帝国に転移しているらしい。

名目上は、以前から打診されていたユーゴー王太子の婚約者として国を出るといふ事らしいが、それが虚偽だと俺でも感じ取れる。

ユーゴー、お前は何がしたいんだ？

俺を散々痛めつけたけど結局殺さず、ユーリは殺そうとしたのは何故だ？

幾つもの言動に、不自然や違和感が多すぎる。

「スーのことは考えても分からないんだから信じるしかない。大丈夫だ、あの子は強かだから人質だと言うのに凶たく立ち回っているさ」
「そうですよ！ シュン君一筋なスーレシアちゃんが簡単に諦めたりしませんって。むしろ……」

そうだよな、俺の自慢の妹だ。

俺が先に弱音を吐く訳には、いかないよな。

「ありがとう……、カティア、ユーリ」

俺は、辛い時こそ笑わないとなど、笑みを浮かべる。

二人も、優しげな表情で微笑み返してくれた。

「シュン、いるか？ つと、お邪魔だったか？」

「ハイリンスさん。いえ、大丈夫です」

扉を開けたハイリンスさんが、顔を覗かせる。

何の用だろう？

「レストンと、公爵夫妻の処刑が三日後に決まった」

俺たちは、息を呑む。

背筋に走った冷たい感触に、怖気立つ。

「かなり大々的に告知されている。処刑であると同時に、十中八九俺たちをおびき寄せるための罠だろう」

追手は俺たちを探すのではなく、向こうから来てもらうように作戦を切り替えたのだろう。

「俺たちが来るのをレストン殿下は望まないだろう。それを踏まえた上で聞く。どうする？」

毘だとしても、レストン兄様の想いに反するとしても、俺の考えは変わらない。

答えなんて、最初から一つだけだ。

「行きましょう」

王城を駆け抜ける。

不気味なほど酷く静まり返り、いつもなら配置されている筈の見張りすら一人も居ない城内は、明らかな異常を示していた。

フェイに乗って上空から高速で接近して、誰にも気付かれずに城壁に降り立って潜入した俺たちだったが、順調すぎるほど妨害も何も無く計画通りに進んでいる。

元々計画とも呼べないような、警戒網が薄いだろう空からフェイで侵入して、レストン兄様たちを救出するという単純な作戦であったけど、それにしてもこの状況は可笑しいと感じていた。

城の中には兵士も文官も誰一人いない、ただ一つの場所を除いて。玉座の間。

その場所にだけは、ハッキリと反応があるのを気配感知で把握していた。

確実に毘だろう。

けど、此処まで来て今更引き返す事は出来ない。

ソフィアか、黒装束か、それとも俺が及びもつかないナニカか。

誰が待ち受けているのか不明だけど、覚悟を決めて向かうしかない。

此処に来たのは、俺とハイリンスさんに、カティアとユーリ、その四人だけだ。

昏睡から目覚めた先生だったけど十日以上も眠り続けていたため体がすぐには動かせず、言葉で引き留めようとする先生を無視して俺たちは来た。

管理者か……

この世界が、神の遊技によって作られた世界だというのは、納得出来る。

ステータスやスキル、大凡ゲームのようだと思った事が全て管理者の手によるもので、俺たちはそれを鍛えては成長させて、最後には管理者に回収される。

そういう仕組みが、この世界に敷かれている。

人族と魔族が争うのもそうだし、勇者と魔王が指名されるのも同じような理由なのだろう。

人々が戦い続ける事を強要され、その果てに死んだ後、管理者が力を得る。

そのような事が、古くからエルフで伝わっていると、先生は締め括った。

そして、大量のスキルポイントを有している転生者は格好の獲物であり、エルフはそれを嫌って転生者に力を付けて欲しくないため、里に集めて鍛えさせる必要が無いように隔離しているとも。

俺たちは、その話を信じられないと思いつつも、耳を傾けて聴いた。

ユーリは最初、酷く狼狽していた。

今まで盲目的に信じてきた神言が、そんな得体のしれないモノだと知ってしまった彼女の衝撃は計り知れないものだろう。

けど、彼女にも何か思い当たる節があるのか、黙り込んだまま口を噤んでしまった。

カティアは、先生が持つ情報の信憑性を疑っていた。

古くから伝わっているからといって、それが事実であるとは限らない。

先生自身も、全てが本当なのか正直分からないと言うが、実際に管理者の部下を見たことがあるらしい。

それが、あのソフィアと呼ばれる少女で、管理者の側に付いた転生

者、根岸彰子。

他にも、エルフが管理者と敵対しているのなら、転生者は力を付ける前に始末するのではという質問に、先生は族長であるポティマスの鶴の一声で転生者は生かす方向になったと言った。

俺は……、一つだけ質問をした。

先生は、禁忌について知っていますかと。

ユーリが驚愕の目で俺と先生を見ていたのを憶えている。

それでも、聞かなくちゃならないと思った。

そして先生の答えは、知らないだった。

一般的に知られている、レベルを10にすると恐ろしい事が起きるというのは知っているけど、それが何なのかエルフでも伝わっていないと。

先生との話は、そこで終わった。

日が沈んで暗くなり、作戦の予定時刻になったからだ。

俺たちは無言のまま走り続ける。

緊張が俺たちを包み込み、暗闇だけが周囲を埋め尽くしていた。

そして辿り着いた大きな空間を持つ、玉座の間。

玉座に座るサイリス兄様の様子は、普通では無かった。

「余が、王だ……」

そのサイリス兄様の前にひれ伏すように並べて座らせられた、レストン兄様とアナにクレベア、カティアの両親たち。

その首に剣を突きつける虚ろな目をした五人の兵士たちが、サイリス兄様の意思が感じられない平坦な宣言で動き出す。

「この玉座は、余のものだ。余が、王なのだ」

明らかに異常だとわかるサイリス兄様は、壊れたロボットのよう
言葉紡ぐ。

その姿は、普段の厳しくも理性的な雰囲気欠片も無い。

「玉座を、脅かす、ものは、要らぬ」

兵士たちの剣が、レストン兄様たちに振り下ろされた。

距離が遠い！ 間に合わない！

背後で悲鳴や齒軋りが聞こえるのを無視して俺は走り、剣を振り下ろした兵士たちを突き飛ばしレストン兄様たちに駆け寄る。

五人とも、抵抗なんて無かったかのように綺麗に首を斬り落とされている。

首を切断されて、生きていられる人なんていない。

それでも、俺のスキルを使えば、死を覆して救う事が出来る。

《慈悲》という名のぐ都合主義があれば。

レストン兄様の完全に分かたれていた体と頭が繋がりに、同時に命の鼓動が蘇る。

兄様を連れて行こうとした死神が、遠くへと消え去っただろう。

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV5」が「禁忌LV6」になりました》

慈悲のスキルは、禁断の死者蘇生を成し遂げる。

ユーリが疑問に思ったのも当然、これはただの治療魔法では無いのだから。

俺は、レストン兄様の蘇生を完了させると、すぐさまアナとクレベアの蘇生に移る。

それも問題無く蘇生に成功し、二人が息を吹き返す。

次は、カティアの両親……

「おい、シュン！ 血が出てるぞっ！」

「えっ？」

ハイリンスさんの叫びに、俺は顔を上げる。

その動きと同時に口の中に生温い鉄の味が入ってきた。

「あ……、鼻血か？」

ボタボタと鼻の奥から溢れてくる血液は、一向に止まる気配を見せない。

それどころか、ドンドン勢いを増していく。

「シュン君！ 無理をしないで！」

「そう、ですわ……。シュン、私は覚悟してましたから……。もう……」

心配そうにしているユーリと、悲しげな顔をしているカティア。

そのカティアの悲痛な表情を見て、俺は死力を振り絞る。

慈悲のスキルはおそらく全スキルの中で唯一の死者蘇生のスキルだが、その分制約もデメリットも大きい。

まず、MPを大量に消費する。

勇者となつてステータスが大幅に上昇した俺でも、同時に五人を蘇生させるのはギリギリになるだろう。

もしかしたら僅かに足りず、MPを補う必要があるかもしれない。だが、それは問題では無い。

次に、蘇生させる遺体があまりにも損壊していれば成功しないし、死後間もなく感覚から言つて数分以内でなければ効果が無いという事も。

あの時、父上がいつから死んでいたのか分からないので確証は持てないけど、まず蘇生は不可能だっただろう。

最後に、これが最大のデメリットなのだろう。

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV8」が「禁忌LV9」になりました》

慈悲を使用するたびに、禁忌のレベルが上がる。

今のところ禁忌のスキルが俺に何かデメリットを齎した事は無いが、レベル10にした時に何が起きるかは分からない。

けど、俺は……

MPポーションを取り出して飲み干し、最後の一人を蘇生する。

魔力切れ寸前で頭痛が酷く気分が悪いが、無視する。

血涙でも伝っているのか視界が赤く染まり、耳から聞こえてくる音が遠い。

デメリットもリスクなんてものも知ったものか、俺はこの手で救えるモノは全部救うと決めただから。

そして、蘇生が成功すると……

《熟練度が一定に達しました。スキル「禁忌LV9」が「禁忌LV10」になりました》

《条件を満たしました。禁忌の効果を発動します。インストール中です》

「グアアアアアアアッツ!!??」

俺の中に、何かが流れ込んでくる。

あまりの激痛に頭が割れそうだ。

遠くから、俺を呼ぶ声がする。

霞む視界には、カティアやユーリ、それにハイリンスさんの姿が見えるが、何を言っているのか上手く聞き取れない。

莫大な情報の奔流に、俺の意識が攪拌され闇へと押し流されていく。

その中で、俺はある真実を知った。

《インストールが完了しました》

禁忌の意味。

この世界の真実を。

46 非公式会談

神言教の総本山、聖アレイウス教国。

その中でも警備が最も厳重な教皇が執務を行う区域にて、私たち魔王陣営と、ダスティン教皇が席を同じくして会談を行っていた。

私は、調子や気分の悪さを気力で誤魔化し、多少無理をしてもこの会談に参加していた。

重要な案件であるし又聞きでは情報に齟齬が生じる、なので表面上は何とも無いのを扮って。

今回此方から参加しているのは、私と白ちゃんという管理者側の存在。

そして魔族代表のアリエルさんと、帝国代表のユーゴー。

向こうは護衛すら不要と、教皇ただ一人だけが席についている。

今回の会談の目的は、魔族軍の人族領における通行の許可。

エルフの里を、完膚無きまでに破壊する。

そのために敵軍である魔族軍を、見逃して進軍させて欲しい。

そういうお願いだった。

私たちの関係性は特殊ではあるものの、本来はどれも敵同士である。

魔族の代表である魔王に与する者たちと、人族の代表である教皇。

そんな関係であるのに協力関係にあるのは、ポティマスという真つ先に滅ぼすべき世界の害悪がいるからに他ならない。

しかも、協力関係にあるのは各陣営のトップだけで、その下の人間などは詳細を知らない協力という。

魔王は魔族を力尽くの恐怖政治で従えているだけであり、反発する勢力や生じた軋轢が水面下で今も埋まっている。

教皇も宗教という力で人々を扇動しているけれど、個人の思想に反するような事を強権でもって動かす事は出来ない。

今回参加しているユーゴーも、帝国内部を一部掌握しているけれど、脅迫で支配した中央でなら強引な手段も可能だけど、地方までは完全には言い難い。

特に、今回の魔族軍を通せという指示は不可能だろう。

なので、どの陣営でも末端まで完璧に支配している訳では無く、トップの意思一つ次第で自由に動かせるようなものではない。

いくら神言教という、思想のみで此処まで人心を操れる宗教と組織を作り上げたダステイン教皇でも、今回の要求は頭を抱えるほど難しい問題だと以前に行った会談にて言っていたけれど……

「根回しは大変でしたよ」

「さっすがー！ 君なら出来ると信じていたよ！ うん！」

苦労を滲ませつつも、さらっとダステイン教皇は言い切った。

それに満面の笑みを浮かべて答えるアリエルさん。

でも内心では、うそでしょとか思っついそうなテンションだ。

そんな無茶無謀な要求をしていた私たちだったけれど、本来それは達成が不可能な無理難題で、その次に本命となる出来うる限りの援助を要求するという流れを白ちゃんが提案し、それに沿って交渉を進めていた。

なので、今ダステイン教皇が言ったことは想定外の事であり、でしたよと過去形で話している事から既に準備が完了していて、号令一つで実行可能だと示していた。

『ユーゴー。帝国内での進軍ルートを構築出来そう？』

『あー……、確認しなきゃ分からねえけど、なんとかするしか無いんだろう？』

私は、帝国について現状最も詳しく知っているだろうユーゴーに念話で声を掛ける。

当初の予定では、エルフの里付近まで私と白ちゃんが協力して大規模転移を発動させて軍を移動させる事になっていたのですが、現時点では帝国内に根回しなどは何もしていない状態であり、計画も何も白紙の筈である。

そしてユーゴーの返答は、難しいけどなんとか調整する、だった。

軍団規模の人数が使用出来る転移陣は、先の戦争から帰還する各国の援軍や冒険者、それに平時は物流網として使用されているので物の行き来の再開、それらの順番待ちや予約でギチギチであり、新たに魔族

軍が横入りする余裕は無いはず。

『要はエルフを逃さず殲滅出来ればいいんだろ？ なら、包囲に必要な必要最低限の人数だけならギリギリ割り込めるだろうよ』

少し間を空けて返ってきたユーゴーの提案に耳を傾ける。

『どうせ、主力は俺たち化け物連中だしな。普通の軍は足留め要員にしかならないなら、少数精鋭だけ居ればいい』

『なら、その方向性で』

ユーゴーの出したその結論に、私は同意した。

「でも、いいのかい？ 天下の神言教とはいえ、相当ムリしたんじゃない？」

私とユーゴーとの会話の間に、アリエルさんとダステイン教皇との間でも話が進んでいた。

そのアリエルさんの問いに、笑みを深くするダステイン教皇。

「ええ、それはもう。後先を考えない、なかなか手痛い出費を強いられました。ですから……」

ダステイン教皇は目を細めて言葉を区切り、充分溜めを作ってから口を開く。

「失敗は許されませんか？」

重すぎる覚悟の籠もった言葉に、身を締め付けられるような錯覚を覚える。

横目で、白ちゃんとユーゴーが僅かに気圧されているのを感じ取った。

「失敗なんてしないさ。絶対にね」

欠片も動揺が見られないアリエルさんが静かに答える。

「この時を待ち続けてきたんだ。ずっとずっと……」

「そうですね。長い、実に長い間、この時を待っていました」

それにダステイン教皇も同調する。

口調は静かに、けれど瞳には激情が渦巻いて宿っている二人が想いを同じくする。

私には、そのあり方が痛々しくも羨ましいと感じた。

ポテイマスが憎い、エルフが憎いという感情は、私の中にも焼け狂

いそうな程あるけれど、元を辿ればそれは精神汚染による誰かからの借り物。

二人ほど、気の遠くなりそうな程の時間を掛けて、恨みを積み重ねた感情では無いのだから。

この感情は私の本心であり、偽り無き願いでもあるけど、重さが違う。

そう魂で感じる程の覚悟が、二人の間にはあった。

それを見て、私は思う。

残り時間は、もう僅か。

この戦いの成否に関わらず、最後の計画を実行しなければ、私に未来は無い。

私に施された呪いは、神仰の所持者が神になった時に、自動的に刻み込まれるモノだった。

システムの助けを得て神になったのなら、最終的にシステムのために体と生命そして魂までをも捧げる事を求められる。

簡単に言うと、神仰というスキルは、次の生贄を作るためのものだった。

その宿命は神となっても逃れられず、解呪する事も出来ない。

機会が無かったから知る事が無かったけれど、私自身がシステムの外に出ること、つまり星から逃げ出す事は出来なくなっていたらしい。

これまで白ちゃんは、何度か地球まで転移して日本に帰還していたらしい。

その話を白ちゃんは今までしてこなかったけれど、つい最近地球産だと思われる物品を見つけて問い質したところ、発覚した。

最初は、狭間の国の一件が終わった後にDさんから呼ばれて。

その時、私の呪いについて聞かされたらしい。

だから私には地球に行ける事を話さず、口を噤んでいた。

連れていけない場所の事について、何も知らせない方が良いだろうと思つて。

私が持っているあの怪しげな本も、地球にいるDさんから渡して欲しいと言われた物品で、よくよく考えれば気付くヒントは前からあったと、記憶の節々から思い返せた。

地球について、日本について、気にならないと言えば嘘になる。

けれど、この星の問題が片付けば、システムそのものが無くなれば私の宿命も無かった事になるので、今は何も聞かなかった知らなかつたと、心の奥底に封印しておく。

それに、私がシステムに捧げられる訳にはいかない理由が、他にも沢山ある。

白ちゃんやアリエルさんたちと離れ離れにならないようにという事もあるけれど、もっと大きな理由が私には、私たちにはある。

私がシステムに捧げられれば、それに連動して眷属となっているコケダマたちもシステムの贄になってしまふのだから。

今世での家族を、道連れにはしたくない。

王が、主が、我ら^{わたしたち}の大切な家族が犠牲になるのは、誰であろうと見たくない。

それが私の願いで、みんなの願い。

だから失敗なんて出来ないし、する気なんて欠片も無い。

エルフの里にてポティマスが何を隠し持っているのか知らないけれど、退くわけにはいかない。

最悪、荒野の時に撃破したGフリートを遥かに超える強大な敵が出てくる可能性もあるけれど、何が来ても私たちは勝つしかない。

瞳を閉じて、ゆっくりと息をつく。

時間は待つてくれない。

だから急いで準備をしないと。

幾つかの細かい案件について打ち合わせた後、私たちは教国を後にした。

現在、私は魔族領まで帰ってきていた。

理由は、まず仕事の抱えすぎによる疲労が溜まっていた事と、前世で仲が良かった結花ちゃんが一時的にだけ死んだ事によるショックで私が倒れた事によって、アリエルさん白ちゃん両方から忙しい時期だけど、短期間でいいから必ず療養する事を厳命されたからである。

私の体調が悪いままではポティマスとの決戦に差し障るという事もあるけれど、あのように声を震わせ心配している表情で頼み込まれたら、想いを無碍にして拒否する事は出来なかった。

アナレイト王国での一連の暗躍は、白ちゃんが引き続き動いていた。

転生者であるシュレインが支配者スキルの慈悲を獲得していたので、その他諸々の確認のためにある実験をするらしい。

慈悲によつて蘇生された存在には、魂に寄生された影響が残っているのか。

シュレインの禁忌のレベルはどれくらいなのか。

それらを測るらしい。

それにしても、アナレイト王国での暗躍には後悔も反省もするところが多かったと思ひ返す。

あの暗躍では、悪役と正義それぞれ象徴となる役が必要だったので、必要であるなら仕方無いと洗脳のスキルである色欲を解禁させたのが裏目に出してしまった。

色欲の所持者であるスーレシアが暴走して、ユーゴーの耐性などを貫通して暗示を掛けていた。

その結果として結花ちゃんが、今の名前はユーリちゃんが、ユーゴーに殺されかけた。

実際に、肉体から魂が抜けていて完全に死んだ状態になっていて、現場に居なかった私では魂を保護して蘇生するのが間に合わない状況だったので、シュレインが慈悲を使っていなければ確実に輪廻の環に行っていただろう。

前世での知り合いが犠牲になる事は容認しているし覚悟もしている。

けれど、悲しくないわけ無いし、誰かが死んでしまえば心だつて痛くなる。

それで私が倒れちゃったのは、まだまだ覚悟が甘かったのかもしれない。

会談の後、ユーゴーから言われた。

「本当にすまねえ！……俺が、まんまと操られちゃったばかりにツ」
自分の意志では無かったとはいえ、自分がユーリを殺そうとした事に責任を感じていて、深々と頭を下げられた。

私は……、ユーゴーを許した。

洗脳という手段を許してしまった私にも責任はあるし、スーレシアが一応は味方である立ち位置だったため、洗脳対策も何も想定していなかった事にも問題があったから。

私自身も、罰せられる側だと感じていた。

だから、お互い何もせず手打ちにした。

実際に罰が必要なのは元凶のスーレシアであり、今頃白ちゃんに徹底的に矯正されているだろうというのも、大きな理由だった。

私が快復した後には、精神汚染の除去も頼まれている事だし。

一先ず、寝て休むことにしようか……

睡眠無効の術式に頼ってばかりで、休息も殆ど取らずに延々仕事を
行い続けていたし、きちんと寝たのは一体どれほど昔の事だったかな

……

意識が、闇に堕ちる。

そしてそのまま、私は一時の眠りについた。

『熟練度が一定に達しました』

『熟練度が一定に達しました』

『熟練度が一定に達しました』

……

『苦しい』

ほんの僅かな時間のはずだけど、長い間眠っていたような気分だった。

生きているのかも、死んでいるのかも分からない暗闇から、意識が浮かび上がる。

なにか、夢を見ていたような気がする。

暗い地の果てで、永劫に等しい時間、苦痛に苛まれる誰かの夢。けれど、目覚めた時には、殆ど内容を思い出せなかった。

ふと、気付くと手に温かな感触が触れていた。

「すう……、すう」

「むにゃあ……」

「ん……」

私の周りには、妖精の姿をした大切な家族たちがいた。

カリユ、テユクス、ラニア。

レウキ、ファイノ、エレクトラ、イアンテ、メリテ、イア、ロディア、カリロエ。

メロ、テイケ、オキロエ、ロド、プルト、ガラク、パラス、アルテ。クリユー、ネイラ、アカスタ、アドメテ。

普段は妖精の姿を取らないみんなも、同じ小さな妖精となつて一緒にベッドで寝ていた。

そして、ベッドを守るように長大な体を丸めて眠っている、爽やかに仄かに甘い香りを身に纏う翠龍のメントも。

私と、生命と魂をも共有して、文字通り運命共同体の、愛しい家族たち。

安らかな気持ちで心を満たしていく。

そして、それに呼応して切なる願いが生まれていく。

まだ、さよならなんて言いたくない、生贄になんてなりたくない。私は……、逝きたくない。

この想いを誰も知らないまま、みんな寄り添ってくれている。みんなを道連れにしてしまう未来なんて、認めたくない。

白ちゃん、アリエルさん、ソフィアちゃん、メラゾフィスさん。
アエルちゃん、サエルちゃん、リエルちゃん、フィエルちゃん。
ラースくん、フェルミナちゃん、ユーゴー。

彼ら彼女らと、みんなとの時間が、私にとって何より大切な温もりだから。

もう一度、時間を戻せるのなら、私はその時間を大切にしたい。

誰も、私を忘れないように。

何も、後悔する事が無いように。

でも、最期の時が来たら……、私は……

希望を、託せるように……

瞼を再び閉じていく。

運命も、祈りも、まだその時ではない。

けれど、夢が終わる時間は、すぐそこまでに迫っていた。

竜1 フェイローン

「フェイ！ シュンが倒れた、急いで脱出するぞ」

その知らせを聞いた時、あたしは一瞬だけど頭が真っ白になった。まさか、あいつが倒れるなんて思ってもいなかったから。

言葉にするのは難しいけどまあ本能みたいなもので、此処にはユーゴーやソフィアとかの、絶対勝てない相手がいらないだろうと感じていたから、その衝撃は大きかった。

なんだかんだ運が味方して、しぶとく生き残るだろうという予感もあつたし。

だから、苦しげに顔を歪ませているシュンの姿に動揺したのかもね。

「フェイ！ 気を確かに！ あなただけが頼りなんですのよ！」

カティアの奴に急かされ気を取り直したあたしは、救出対象の五人に加え気絶しているシュンも加えた、六人もの意識の無い人間を運ばなくてはならなくなり、結構苦勞して王都から脱出した。

合計で九人乗せるとか、さすがのあたしでも、シンドイっつーの。その後は、事のあらましとかを聞いたわ。

誰も居ない王城を進むと玉座の間にシュンの兄貴であるサイリスって奴がいて、入ってきたのを見計らったかのように処刑が実行された。

それで、救出対象全員の首が飛んで、助けられなかったと思つていたところシュンが飛び出し、なんと切り離された首を繋ぎ合わせて生き還らせちゃつたって訳。

性格こそフツメンだけど、あいつは昔からとんでもない事やらかすわね。

王族だつてのに何かハブられているみたいだから常識知らずだし、そのせいで突拍子も無い事をやらかしてカティアに呆れられたり、それにラツキースケベも頻発して起きるわね。

まあそれは置いて、その蘇生行為の代償なのか顔中から血を流しながら生き還らせていったらしいんだけど、最後の五人目が完了し

た後に、シユンが頭を抱えながら倒れた。

一瞬、脳の血管とかが切れてそれで倒れたんじゃないかって思い、命の危険とか無いのか心配になったけど、どうやらそうじゃ無いみたいで今は大丈夫らしい。

一旦戻ってきたハイリンスさんの旧友の屋敷だけど、救出した五人の方は問題無く目を覚ましたみたいだけど、今も眠ったままなのはシユンだけ。

そのシユンも、ついさつき目覚めたらしい。

指摘されてから初めて気付いたんだけど、その知らせを受けるまでのあたし、結構ソワソワしてたらしいのよね。

意外でも無いか。

シユンとの付き合いも、結構長いものだしね。

初めて顔を合わせたのは、あいつが七歳の頃だったかしらね。

あたしが卵から孵った時に目の前に居たのがシユン。

実際には、それ以前である卵の中にいる状態の時から意識あったし、言葉を学ぶために会話とか聞き耳立てていたけど。

なんとなく自分は人間じゃないって勘付いてたし、実際に外に出れば竜の子供だったという。

考える時間だけは腐るほどあったから、色々考えたりしたのよ。

前世でのあたしは、若葉にイジメそのものと言っていい事をやらかしてたし、あたしが人以外に転生したのも、それらの悪行が原因かもで、ああバチが当たったのかもなーなんて。

周囲から人の声が聞こえる事から、どう足掻いてもペット以上にはなれないだろうし、人として生きられない。

ならせめて、あたしが竜として生まれたのなら、ご主人様となった目の前の王子様に精一杯奉仕しようって思ったのよ。

そうすれば多少は快適な生活が送れるだろうって、打算込みの意地汚い考えだったけどね。

それから幾らか時間が経って、その王子様が転生者だと知り、それがまさかザ・普通を地で行くシユン君だとは思わなかったけどねー。

それで、そのシユン王子様と良く顔を合わせていたご令嬢が、前世では男だった大島つてのが、一番衝撃を受けたけどね。

外から見るぶんには笑い話だけど、本人からすれば大変な事だろうし、ちよくちよく元女としてアドバイスもしてやったわ。

いやまあ、あたしも精神的にも生物学的にも女だけど、今世では地竜のメスだし。

人じゃないから肌のお手入れとか別に気にしなくていいの、すっごい楽だわー。

そんな事思ってたのを見抜かれたのか、カティアから物凄い殺気の籠もった目で睨まれたけど。

あいつも、だいぶ女に染まったわね。

シユンにその妹のスー、それとカティアの三人で勉強や訓練とかしながら何年か経つと、王国に前世で先生だった人がやってきた。

「ふむふむうー。では自己紹介いたしますうー。今の名前はフィリメス・ハアイフエナスですう。以後よろしくですうー」

妙に鼻につくようなクセの強い喋り方が悪化していた、岡ちゃんこと岡崎先生がエルフに生まれ変わって、あたしたちの前に現れた。

ハマってた何かの漫画キャラを真似してたら素の口調がそれになつてたらしいと、元からかなり残念な先生だったけど、この世界に転生してから何かあったのか、その時はやたら前世の雰囲気やキャラに固執しているように見えたのよね。

先生だと証明するために、わかりやすさを重視したといえ、それまでなんだけど。

前世では授業中によくお仕置きされたりと、あたしが先生苦手だったのも穿ち過ぎた見方をした理由なのかもしれないわ。

その後は、王国の学園に先生も含めた、転生者たちが集うことになった。

あたしは、シユンの使い魔扱いね。

入学式とかの人メインの行事には参加出来ないけど、授業や野外活動などの遠征には参加出来る微妙な立ち位置という形で。

そこで会ったのが夏目と長谷部。

学園での日々で何があつたのか、語る必要無いわよね？

ユーゴーの馬鹿がシユンに喧嘩売って無様にも返り討ちに遭い、学園から去っていった事。

それから数年が経ちシユンが勇者に選ばれて、それと時を同じくして勇者の称号に引き摺られるように、あたしが進化するために眠りについた事。

進化が終わって目が覚めれば、めっちゃデカくなってるし翼も生えてるわけで、驚くところは沢山あるのに、ちようどシユンがピンチの時に目が覚めるんだから、驚愕している暇も無かつたわ。

それで、休む暇も無く、今に至ると。

思えば、あたしも結構シユンの事、気にかけていたんだなと思いつつ返す。

こんな世界に生まれ変わっても普通を貫ける事、尊敬しているのよ？

なかなか出来るものじゃないわ。

並みの意思では、自然と周囲に染められて変わってしまうだろうか。

誰だって、人伝だとしても身近に命の危機があるのを感じながら生活してれば、殺伐とした思考が当たり前になるし、力を付けようと必死にもなるわよ。

それでも、シユンは変わらなかった。

あの平和ボケして面白みのない日本の価値観を、いつまでも保っていたんだから。

シユンが幼少期過ごした、周囲から隔絶されるような環境も影響していると思うけど、それでもあそこまで甘ちゃんदैいれるのは才能だと思っわ。

この優しくない世界。

いずれは、シユンの身にも危険が訪れる。

その時に体を張るのは、あたしの役目だと思つた。

だって、あたしはシユンの相棒だもん。

昔から、そう昔から、シユンには返しきれない程の、恩がある。

人じやない地竜に生まれたあたしにも最大限快適に過ごせるようにと、頭を下げて周囲にお願いしてくれた。

時々あたしが人間だった事を忘れそうになっても、あいつが前世と同じように扱ってくれたからこそ、忘れずに済んだ。

他にも、他にも……

こうして並べてみると、結構いろんな恩があるわね。

けど、恋愛感情は無いわよ？

そこらへんはあたしも地竜の感性に染まったのか、人間の顔を見てもイケメンだなーと思う事はあっても、だから何って感じ？

そもそも興味が湧かないというか、アレね、人間がイヌやネコとかの別種の動物に欲情抱くほどガチにはならないって感じかしら。

……そんな特殊性癖も、もしかしたら現実にいるかもしれないけど。

あたしは、カティアやスー、それにユーリも加わった、ドロドロの愛憎模様を横から眺めるのが面白そうだから、とくに何もしない見え見えの好意がシユンに向かつていても黙ってるだけよ。

いつか盛大に刺された時に、医者まで連れてってあげるくらいは、するかもね。

まあそんな感じで、あたしはシユンに結構な恩があつて、それなりに心配してたつて訳よ。

命に別状が無い事を知り、そして目が覚めたと聞いて、あたしは心の底から安堵した。

その後、数日休息を取った後、シユンとカティアとユーリに、先生とハイリンスさんも加えて、さらにあたしも合わせた五人と一匹で、エルフの里に向かう事が決まった。

レストンやアナにクレベア、それとカティアの両親の公爵夫妻は、王国に残る事になった。

彼らには、帰ってくる場所である王国を守って欲しいと、シユンが

伝えて。

そうなった切っ掛けは、先生が何処からともなく得た情報の出処であるエルフの間で交わされている念話の情報網から得たもので、里にユーゴーが向かっているらしいとの事、スーも一緒にね。もちろん反対意見も多かったらしいわよ？

国内が荒れている状態で、個では上位に入るシユンたちが居なくなる事を洩る意見もあったし、指名手配を出したサイリスって奴が何故か心を壊していて自失状態だけど、今国を回しているのはそいつの母親である正妃だし、布告そのものは各国に広まっていて取り消すことも出来ないから、国外に出れば犯罪者として捕まる可能性もあった。カティアの両親も愛娘が危険な場所に向かうのを反対していて、それを丸一日かけてカティアが説得して付いていく事になったのよね。けど、そこに行くべきって一番主張したのが、シユンだったのが驚きだった。

ユーゴーたちに聞くことがある。

その一点張りで理由も説明してくれないんだから、みんな困惑していたみたいよ。

あたしもその一人。

数日ぶりに会ったシユンは、何処か違った。

ずっと顔色が悪いし、何か強迫観念に囚われているかのように周囲の状況も見えて無くて非常に危なっかしい、けどその理由は教えてくれない。

色んな感情がゴチャ混ぜになったような表情をしているから、何かがあると分かっても、じゃあ何を悩んで苦悩しているのか、少しも分からなかった。

その原因について、あたしたちの誰もがみんな、答えを見つけない事は出来なかった。

幾つか予想や推測は思い浮かんでも、本人が口を開かないようでは何一つ分からなかった。

シユン、一体どうしたのよ。

あたしは、シユンたちを乗せて西へ向かう。

王国の転移陣は壊されていたから、普通はこれが当たり前の、自らの体一つで物理的に移動する方法だね。

他国の転移陣とかを利用しようにも、あたしたちはお尋ね者だし、姿は見せられない。

なら、あたしが空を飛んでひとつ飛びするのが、一番いいと。

道中には、エルロー大迷宮っていうあたしの生まれ故郷である地下洞窟を通る必要があるけど、それ以外はあたしが頑張ろう。

その上は大陸を隔てる大海峡だから、そこを通らないと向こうの大陸に行けないとの事。

さすがに何日、下手すれば一週間以上も、海の上を休み無く飛びっぱなしってのは無理だから、そこは地下歩きだけど空を飛べるのなら圧倒的に速く移動出来る。

シユン。

あなたの相棒は、このあたしよ。

あなたの望みなら、多少の無茶だつてしてやるわ。

だからさ……

あたしたちのこと、少しは信じてくれないかな。

S 6 迷宮

夢を見ていた。

『——贖え』

俺じゃない誰かが、何をやっても後手に回り、選択を誤り、酷く後味の悪い結果に終わる夢だ。

『——贖え』

何もかもが、望まない悪い方向へと進んでいく。

『——贖え』

どうにかしたい、どうにかしようと思っても、その行動がかえってさらなる悪い方向へと事態を誘ってしまう、そんな夢。

そんな、まるで永遠に抜け出せないような牢獄へと囚われる、失敗した世界の誰か。

足掻いても、嘆いても、誰かは間違いを積み重ねる。

そして、その果てに、誰かは……

「……ユン。……シユン！」

意識が覚醒する。

どうやら、ぼうつとしていたらしい。

さつき何を考えていたのか思い出せないけど、ロクなものではないような気がする。

それはきつと、消し去った方がいい内容なのだと、意識の奥へ消えていった。

「本当に大丈夫ですか？ 近頃、心此処に有らずで、心配ですわ」

「気分が悪くなったら、言ってね……？」

またカティアやユーリに、心配掛けちゃったな。

反省しないと。

「ああ、大丈夫だ。問題無い」

俺たちは、道中の山々や河川それに関所や国境などを、フェイの背に乗り空を飛ぶ事でまるっと無視して飛び越え、エルロー大迷宮の入

口にまで辿り着いていた。

エルロー大迷宮の出入り口は此処のように高い城壁の砦で囲まれていて、内部から危険な魔物が出てこないようにする防波堤の役目を持つているらしい。

このエルロー大迷宮は、大陸と大陸とを繋ぐ、陸路での唯一の通り道。

案内が無ければ一生出られないとも言われる、広大過ぎる地下空間に張り巡らされた大迷路に、毒を持つ魔物を筆頭にした危険度が高い魔物も多数生息する魔境。

この天然の要害があるからこそ、魔族は此方側のダズドルディア大陸には入ってくるのは不可能とされていたが、王国で出会った黒装束の人物、その種族は魔族だった。

転移陣という距離や障害を無視して大陸間を渡る方法もあるので、それを使えば魔族が此方側に来ることは、あり得ない事じゃない。

ユーゴーの地位を利用すれば、魔族を転移陣に紛れ込ませるのも可能だろう。

帝国には、空間魔法の達人である人族最高の魔法使いもいる。

それを考えれば、長距離転移という手段もありえるか。

黒装束を送り込んだのがユーゴーで、黒装束は魔族で、彼らはソフィアに従っていた。

ユーゴーとソフィアは、魔族とも手を組み、管理者の側についてただろう。

……何故、王国を混乱の渦に叩き落としたのかは分からない。

だが、今なら二人の行動理由も、少しは分かる気がする。

先生から聞いた情報には、意図的に捻じ曲げられたと思われる内容が複数混じっていて、本来の意味とは全くの別物に改悪されていた。

この禁忌で知った情報こそが、偽り無き真実であるのなら、先生は嘘をついていた事になる。

……いや、嘘をついているのは、エルフそのものか。

先生が管理者について話す時の様子では、それが大方真実だと思いつているように見えた。

エルフは信用できない。

こんなにも間違った解釈を脈々と伝えていて今もそれに従って活動しているとすれば、エルフの行動方針というものは、世界にとっても認めがたい代物だろう。

ユーゴーたちの目的は、それに起因しているのかもしれない。

帝国から出発した軍は、エルフの里を目指して移動しているらしい。

これもエルフからの情報だが、嘘では無いだろう。

指名手配中の俺たちが近づく訳にはいかないが、世界各地に教会を建てて情報網を幅広く持っている神言教なら帝国が動いているのも気付いているだろうし、それと擦り合わせれば簡単にバレる嘘はつかないだろう。

その情報から帝国軍がエルフの里に到着する時間を逆算すれば、俺たちがエルロー大迷宮を踏破する時間の方が早く、その後のエルフが隠し持つ転移陣までの移動時間まで合わせても、ギリギリ間に合う計算になるだろう。

その事実可喜ぶべきなのか、よく分からない。

今では正しいのはユーゴーたちの方だと思えてしまい、俺は一体どちらに協力すればいいのか、全然分からない。

心が、精神が、魂が、僅かな光すら見えない昏迷で張り裂けそうだ。

俺が目を覚ましたばかりの頃は、混乱に驚愕それに不信と、明らかに様子がおかしく挙動不審な状態になっていただろうから、既に先生にも俺の不信感とかを勘付かれているだろう。

けど、俺は知った真実を、誰にも告げていない。

カティアにも、フエイにも、ユーリにも。

誰であろうと。

俺は、この感情を何と言えいいのか、分からない。

『悲しい』

ああ、そうか。

悲しいのか。

『世界が醜くて』

争いに塗れた世界が、悲惨で、愚かで、醜くて、……それが悲しい。
俺は、こんな世界が嫌いだ。
それなら……

「シユン、本当に大丈夫か？ 俺に考えがある、ついてきてくれ」
俺が思い悩んでいた間に、ハイリンスさんが良案を思いついたらしい。

急いでエルフの里まで向かいたい俺だが、もし見つかったりでもして無駄な戦闘を行うのは避けたいと思うので、強行突破以外の策があるなら何も言わずに付いていこう。

千里眼によって遠く離れた場所から確認した警備の状況は一見普段通りに見えるが、よく見れば身に纏う鎧が違う兵士たちがいる。

学園で学んだ記憶から該当するものを探れば、それは帝国兵の装備だった。

ユーゴーの手の者だと思われる帝国兵たちを遠く向こうに見ながら、俺たちはハイリンスさんの先導に従って、エルロー大迷宮の入口から遠ざかっていった。

「ここだ」

案内されて辿り着いた場所は、エルロー大迷宮の入口からすぐ近くにある小さな村だった。

道中でハイリンスさんから聞いた話によれば、この村は大迷宮に入ろうとする人たちを相手に、商売や宿屋を営む人たちが集まって出来た村らしい。

やけに大きな商店や宿屋などが立っている事から、それは確かな事だろう。

俺たちは人目につかないように村の外周を進み続け、姿を隠しながら村の外れにある一軒家へと足を進めた。

例のごとくフェイの巨体は目立つので、今回も村の外で隠れて貰っ

ている。

そして中から現れたハイリンスさんの知り合いだと思われる壮年の男性と短く言葉を交わして、俺たちは家の中へと滑り込むように入った。

この人は迷宮案内人のゴイエフと名乗った。

迷宮案内人とは、エルロー大迷宮の構造を熟知し危険極まりない魔境の中で、安全に通り返けられる経路を頭の中に叩き込んでいる人たちのだ。

そして仕事柄、案内人自身も実力が無ければ務まらず、服の下には鍛え上げられた屈強な肉体があるのを感じ取った。

俺たちは一部情報を伏せて、大迷宮を通り抜けた事を告げた。

それを聞いたゴイエフさんは、深く悩んだ末に断った。

迷宮案内人は様々な人物を案内する事になるので幅広い人脈を持っており、そこから俺たちの事も耳に入っており、それが無実の罪だということは気付いているようだった。

しかし……

「申し訳ありません。此方も生活と命が懸かっていますので。下手にあなたの方に力を貸して帝国に目をつけられる訳にはいきません。……私が良くても家族にまで、その危機が及ぶかもしれないと考える」と

「そうですか」

ハイリンスさんの落胆した声が聞こえる。

しかし、ゴイエフさんの言い分も理解出来る。

この家の中には子供を含む何人かの気配があるのが分かっていて、彼にも家族がいるのに無理に巻き込むのは、さすがに再三と食い下がって頼み込む事は出来なかった。

それほどまでに、俺たちに貼り付けられた国家に反逆した罪人というレッテルは重く、無実だと知っていても国に逆らうという行為は簡単な事では無いのだと、肌で感じる事になった。

「なんだ、腰抜けが案内したく無いってんなら、俺が案内してやろうか？」

意気消沈する俺たちに、けたたましくドアを蹴り飛ばして現れたのは、年齢の衰えというものを全く感じさせない立派な体躯を持つ老人だった。

酒瓶片手に現れたこの老人は、ゴイエフさんの父親で、バスガスさんと名乗った。

そして、腑抜けたゴイエフの代わりに、自分が案内人をやってもいいと言う。

「帝国が怖くて案内人なんざ、やってられるか。帝国よりも、迷宮の奥底にいる化物どものほうがよっぽど恐ろしいぜ。迷宮案内人が恐れるのは人じゃねえ、迷宮だ。違うか？」

バスガスさんが語気を荒らげて、ゴイエフさんに鋭く言葉を突きつける。

言っている内容は暴論とも取れるような事なのに、ゴイエフさんは息を詰まらせて反論出来ないようだった。

オメエだって、今のままでいいとは思ってないだろ、老いぼれが勝手にやった事だと釈明すればいいと説得され、ゴイエフさんの勢いが急速に無くなると彼は俺たちに向き直して言う。

「こんな引退した爺で良ければ案内するが、どうする?」

ハイリンスさんとカティアは悩んでいるようだけど、俺は直感的にこの人なら信じられそうだと感じ取った。

それを念話で共有すると、一瞬バスガスさんが反応したのを目敏く見抜いた。

念話を盗み聞くんなんて簡単な事では無いのに、それを行えている事から実力は確かだ。

「よろしくお願ひします」

「おうよ。つつても、そうたいした事は出来んがな」

謙遜にしても、否定が過ぎるだろう。

確実にバスガスさんが、一角の人物であるのは明確なのだから。

その後、ハイリンスさんとバスガスさん二人が主導して、今後の予定を話し合う。

ゴイエフさんも諦めて、出来得る限りのバックアップをしてくれる

ようだ。

その途中でフェイから念話が入り、先生がいることを確認されると念話を切られた。

そしてフェイは先生に念話を繋いだらしく、幾つか会話を重ねると先生は出掛けると言い出し、そこにカティアやユーリも含めて女性陣全員が出掛けていった。

何故か俺は残るように言われたので、不思議に思いつつもカティアたちの実力ならよほどの事が無ければ大丈夫だろうと見送った。

「最近の女子供は強いな。あの子ら相当なやり手だろう?」

「人の能力を詮索するのは、マナー違反じゃないんですか?」

戦闘時なら兎も角、基本的には失礼な行為だと教わってきた。

その戦闘時でも、鑑定の不快感で魔物の怒りを買うなど、危険性もある事も知っている。

「普通はな。だが、俺たち迷宮案内人は案内する連中の実力がある程度把握している必要がある。迷宮内では案内人の判断で客の命が左右されるんだ。その責任を果たすためマナーなんてお綺麗な事は言ってられねえのさ」

肩をすくめて、バスガスさんが悪びれもせず語る。

「鑑定なんざしなくても、そいつがどの程度出来るのかは一目で分かるようになった。つっても、精度はあんま高くねえけどな! ……おめえさん方が全員、相当な手練れなのは分かる。だがな、迷宮じゃそんな人間でもアツサリ死ぬ時や死ぬんだよ。氣い抜かない事だ。特に、周りの人間すら見えて無さそうなオメエさんはな」

バスガスさんが最後に挟んだ忠告に、俺はドキリと痛感する。

確かに近頃注意が散漫になりかけている気がしているし、カティアやユーリの心配する言葉にも冷淡に聞き流して、反省も何もしてないようだったと思り返す。

さつき別れたばかりの彼女たちの表情すら、臍気でハッキリとしない。

カティアは何て言った? ユーリの表情は?

そう言えば、フェイの調子も何処と無く変だったような?

俺の様子がおかしいままだからか、みんな余所余所しくギクシヤクした雰囲気だったと、今更になって気付いた。

「すみません。少し……、目が覚めました」

「それを言うのは俺じゃ無いだろ？」

「はい」

帰ってきたら、謝らないとな。

まだ真実を告げる勇気は無いけど、今までの事は謝りたい。

「若いねえ」

「戻りました」

バスガスさんから温かい視線を向けられ、何となく居心地の悪さから顔を背けていると、頃合い良く先生たち女性陣が戻ってきた。

今までの事を謝るべく、彼女たちを出迎えるために振り返ると、その人数が一人増えている事に気付いて視線が留まる。

「もしかして……」

「ジャジャーン！ フェイちゃん人型バージョン本日大公開！」

澆刺としたテンションで、キメポーズまでして高らかに宣言する少女。

光り輝くような色素の薄い髪に、背中に翼の生えた天使のような姿。

だが、その顔は前世の記憶にて、見覚えがあるモノで。

「フェイ、なのか？」

「イエス！ 進化して光竜のスキルが追加されたんだけど、実は、その効果の中にあつたのよ！ 人化！」

やたらとテンションが高く、俺が口を挟めそうに無いほど盛り上がっているのは、転生してから地竜として生きてきたので人型の姿になれた事は、俺が想像も付かないような喜びなんだろう。

事情が分からないバスガスさんとゴイエフさんが目を丸くしているが、説明するのも難しいので今暫くは置いておく。

フェイが着ている見慣れない服から、女性陣が出掛けたのは服を調達するための事だったのだと理解した。

それなら、俺は同行出来ないのも当然か。

「ちよつと、それだけ？ もつと何か無いの？」

「……そうだな、似合ってるよ」

「でしょでしょ！ やっぱあたしってば輝いてるうー！ よっ！ 美少女！」

フェイから感想をせがまれ、俺は答える。

それに反応し、さらに気分良く小躍りし始めるフェイ。

フェイの前世である漆原美麗は、自ら美少女と名乗っても許されるくらいには容姿が良かった。

だからこそ自尊心が強く、自分よりも持て囃されていた若葉さんのことが許せず、イジメなんてしていた訳だが。

その顔の良さのおかげで、今の翼を生やした半竜人といったフェイの姿も、違和感が無い。

とても神秘的な見た目になっているけど、その言葉遣いや行動によって、ああフェイなんだなと安心するが。

だがしかし、これでエルロー大迷宮に侵入する際に、フェイが内部に入れないといった事態は、無くなっただろう。

フェイの人化という大事件で流されていたけど、改めて俺はみんなに向き合う。

なんかタイミングが悪い感じだけど、後回しにすればするほど二度と言えなくなりそうだから、今この瞬間に告げる。

「みんな、本当にごめん！」

俺は深々と、みんなに頭を下げる。

戸惑いの声が聞こえるが、そのまま続ける。

「俺、全然何も見えてなかった。ただ、ユーゴーに会う事だけ考えて、みんなにどんな影響与えているのか気付いてもいなかった。だから

……、迷惑掛けて、ごめん！」

頭を下げたまま、一気に言い切る。

微動だにせず、俺は反応を待ち続けていると……

「シユン、顔を上げて下さいまし」

カティアの言葉通りに、俺は真っ直ぐ起き上がる。

そして、軽く。

そう軽く、頬を打たれた。

「心配させた罰ですわ」

殆ど衝撃も無い、ただ添えられたかのようなピンタは、俺の心を強く打ちのめした。

「……悪い」

「そう思っているのですしたら、これからは行動で示して下さいね」

そうカティアは微笑みながら離れていく。

入れ替わるように、ユーリが前に出てきた。

「あの……、シユンくん。その……、理由とか、聞いてもいい？」

「ごめん、それはまだ……。俺も整理が付いて無いんだ。だから……。もう少し待ってくれ」

俺自身も、まだ全部は理解しきれていなくて、何をどう話しているのかも分からず、断片ですら上手く言えないんだ。

けど、そう言われる事も予想出来ていた、だから……

「いつかは、必ず話すから」

自分勝手な事を言っているのは分かっている。

でも、今はこれで許してくれ。

「……………待ってるから」

儂げに言うユーリ。

その表情に胸がジクジクと痛むが、奥歯を噛み締めて抑え込む。

俺一人だけじゃない。

付いてきてくれたみんなの事も考えないで突っ走るなんて、勇者失格だなと自嘲する。

これでは、俺は兄様に顔向け出来やしなないなど。

いや、そもそも人としてダメか。

弱くて、愚かで、挫折に苦しむ、ただの人間。

結局、俺はそんなものなんだから、この真実も手に余る代物だ。

それを背負い込んでしまった俺が取るべき選択は、まだ分からない。

でも、この大迷宮を潜り抜けるまでには、必ず決断したい。

「ありがとう、みんな。……付いてきて、くれるか？」

静かに頷いてくれる、みんな。
俺たちは、エルロー―大迷宮突入に向けて準備を始めた。

S7 踏破

バスガスさんが迷宮を案内してくれる事になり、その翌日。準備を整えるの一日掛けて、俺たちは砦に囲まれた入口から少し離れた海辺へと来ていた。

この崖から飛び降りた先にある海の底に、エルロー大迷宮に繋がる入口があるらしい。

海は水龍の生息域であり普通なら使われる事が無い、案内人の中でも極僅かしか知らない秘密の抜け道なのだそうだ。

しかし問題が一つ浮き彫りに。

「あ、あのさ。あたし、泳げないんだけど……」

居心地悪そうにフェイが、そう言った。

全員信じられないという顔をしてフェイの事を瞠目しており、気まぐずい空気に晒された当人は、身を小さく縮こませていた。

今の俺たちの格好は水着姿で、つまりは事前に聞かされていた上で此処まで来て着替えた後にも関わらず、ギリギリになるまで言い出せなかったという事らしい。

ちなみに、俺たちの装備品や荷物は、空間魔法が付与された空間収納袋の中に仕舞われており、

バスガスさんが持っていた物や、ユリウス兄様が持っていた物を引き継いだハイリンスさんの袋にそれぞれ分割して預けていた。

特にハイリンスさんが持っている袋には、兄様が遺した数々のアイテムが収められているので、これを王城から持ち出せたのは大きな助けになるだろう。

話を戻して、フェイの泳げない問題は、もしダメそうなら俺が支えて一緒に潜る事になった。

人化しているとはいえ、本来の姿である竜の巨体を圧縮しているようなものらしく、体重自体は一切変化していないので、見た目とは裏腹に非常に重たいのだ。

それを、重力を操る重魔法によって誤魔化しているが、水中に潜るのであれば細かい制御をしている余裕も無くなるので、魔法を解除し

なければならぬ可能性が出てくるだろう。

そうになると、ステータスの一番高い俺くらいしか、十全にフェイを支えられなくなる。

仕方のない事だと言え、カティアとユーリから無言で送られる冷たい視線に、背筋が凍りそうな威圧感を覚えたので、邪念などは出来る限り思考から排除しようと思う。

そんな一悶着の末に、バスガスさんからの一喝が落ちた後、俺たちは意識を切り替えて、最後の準備を終える。

「それじゃ、行くぞー！ しっかりついてこいよっー！」

バスガスさんが飛び降りたのを皮切りに、俺たちも崖から飛び降りた。

水中に潜って目を開き、周囲を確認する。

ステータスカススキルのおかげか、裸眼で海の中に居るにも関わらず、問題無く目視出来る。

すぐ近くでギクシヤクと泳ぐフェイの姿が映り、溺れている訳では無さそうだが上手く下方へと潜水が出来ていないので、その手を取り海底の方へと引っ張っていく。

先行しているバスガスさんはドンドン深く潜っていき、水深十数メートル以上もの深さの岩肌に目的のエルロー大迷宮への入口があるのが見えた。

そしてバスガスさんがポツカリと空いた岩の割れ目にしか見えないうちへと入ると、その後を追うようにハイリンスさんや先生、カティアやユーリが進んでいく。

嫌な予感が走り、感じ取った気配の元へと振り返れば、超然たる態度で泳いでくる巨影が映る。

その輪郭から察するに、まるでネツシーと呼ばれる首長竜のような姿をした、水龍が居た。

フェイを連れて急いで泳ごうとするが、水中での動きでは水龍に敵うはずもなく、このままでは入口に到達する前に追いつかれてしまう。

そうなってしまえば、一巻の終わりだ。

息を止めたまま動きにくい水中で戦うなど自殺行為でしかなく、現在武器を預けているので魔法しか使えない状況だが、龍全般には魔法が効きづらいので有効打にはならないだろう。

背後に迫りくる脅威に焦る俺とは反対に、フェイが振り返り大きく口を開いた。

そして口内から燦々と眩い閃光のブレスが飛び出し、海水を引き裂いて水龍へと突き進む。

対する水龍も鉄砲水のような過重圧のブレスで迎え撃ち、ぶつかり合ったブレスが海中に大きな衝撃波を発生させて、それが津波のように俺とフェイを押し流していく。

迷宮への入口を背にしていた事が運良く働き、俺たちは海流に押されるまま入口に飛び込んで、安全が保証されていないウォータースライダーを滑るかのように奥へと流されていく。

そして、一瞬の浮遊感の後に、盛大に岩肌へと叩きつけられた。引き離されないようにフェイを抱きしめたまま俺を下にして落ちたからか、骨の髄まで響き渡るような衝撃が全身を襲う。

苦痛を堪えて周囲を確認すると他のみんなも流されていたようで、それぞれ大なり小なり無数の擦り傷を作っていたのが見えた。

結構な距離を勢いよく流されたにしては、みんな大きな怪我も無く、そして全員揃っている事に大きく安堵した。

良かった、取り残された人がなくて。

ただ、俺たちの体は無事でも水着までは大丈夫では無かった。

そのせいで、女性陣の格好がかなり際どいものに……

破れた水着を隠しながらカティアが睨んでいるので、慌てて視線を逸らす。

「うっ、すまん……」

「そのすまんが何かは敢えて問いませんが、いつまでくっついてい
るおつもりですか？」

抱きしめたままのフェイの事を思い出し、急いで離れる。

「うん。あー、まあ、助かったからチャラで」

ホントに、すまん。

不可抗力とはいえ、罪悪感が半端無い。

「かぁーっ！ 初っ端からこれじゃ、先が思いやられるな！」

バスガスさんの叫びに、心の底から同意する。

さつきみたいな幸運が、そう何度も起きるはず無いので、何が起きても大丈夫のように気持ちを引き締めないと。

「ま、なんとか無事に中に入る事は出来たな。ようこそ、この世の地獄、エルロー大迷宮へ」

バスガスさんの仰々しい語りに、常套句だとしても洒落にならないなど肩を落としながら、俺は治療の準備に取り掛かった。

太陽も見えず時間感覚が把握しづらくなる迷宮に潜り、今日で二日目。

慣れない環境による浅い眠りのせいか目が覚め、仄かな光量で輝くランプが周囲の岩剥き出しの壁面を照らし出しているのが、寝惚けたままの瞳に映った。

硬い地面から体を起こす。

今は夜中という事で、交代で見張りをしながら順番に睡眠を取っているところだった。

エルロー大迷宮の攻略は、入口での突発的 사고を除けば順調に進み、バスガスさんの案内の下で問題無く歩みが続けていた。

エルロー大迷宮上層の魔物は、毒を持っている種類が多くて普通は苦戦をするのだが、俺たちは全員それぞれが治療魔法を取得しており解毒が可能だった。

それだけでは無く、世間一般では上位に入るステータスを持つ俺たちであれば、上層の魔物から攻撃を受ける事が殆ど無いので、苦戦になる事すらなく手堅く撃破していた。

会敵したのが弱い方の魔物である事も大きいですが、盾役のハイリンスさんが巧みに魔物のヘイトを集め、自身に攻撃を集中させる事で俺たちを守ってくれているのも大きい。

心配だった迷宮病と呼ばれる、生活リズムの変化や精神的な影響で体調を崩す人も、今のところ誰も罹っておらず、バスガスさんが無理の無い攻略ペースを計測してくれるおかげで、肉体的にも精神的にもそこまで疲労を溜め込まずにすんでいた。

そう言った注意事項は、初日に移動しながら説明を受けている。焦りは禁物。

それは俺個人だけの事では無く、みんなの状態にも相互に気を配る必要があるという事だ。

「大丈夫ですか？」

横から先生が、俺の顔を覗き込んでいた。

一瞬体が強張るが、この感情は先生個人に向けるものではないと思いい直し、姿勢を元に戻す。

「大丈夫です。途中で目が覚めてしまって、……良い夢は見れそうに無いですね」

微妙な空気を変えようと、戯けて冗談を付け加えて誤魔化する。

しかし、それに反応する声が。

「そりやそうだ。なんたって、此処は悪夢の古巣だからな」

「悪夢？」

聞き返した俺の疑問に、バスガスさんは続ける。

「おうよ。知ってるか？ 迷宮の悪夢の話だ」

「いえ、聞いたこと無いですね」

「私があります。たしか、十年以上前に迷宮に突如現れた、神話級の魔物の片割れを指し示す言葉でしたよね？」

普段はビリビリ芯に響くような大声のバスガスさんも、周りで眠っている人が居るためか、声を潜めて重厚感のある低音で喋る。

まるで怪談話をするかのような陰鬱な雰囲気を作り出しているバスガスさんに、静かに囁くような声で問い返す先生。

「よく知ってるな。昔の話だし、嬢ちゃんくらいの子供は普通知らねえと思っただが」

「ええ。たまたま知る機会があったので」

十年以上も昔の話。

俺たち転生者が、この世界に生まれただけの頃か。

「悪夢は、女王と亡霊に並ぶエルロー大迷宮の生ける災厄だ。夢で魘されるってこたあ、そりゃあ悪夢がお出ましになる前兆かもしれんぞ？」

「けど、たしかその魔物は亡霊共々、既に死んでいるんじゃないやありませんでしたか？」

「世間では、そう言われているな」

「世間では？」

バスガスさんの含みのある言い回しに、俺は聞き返す。

「ああ。一般的には両方とも死んだって話だが、俺にはどうもそれが信じられん。あの化物どもがそう簡単にくたばるのかつてな。きつと今も何処かで生き延びていて、虎視眈々と獲物が来るのを狙っているんじゃないかと、俺は思っている」

やたら実感の籠もった語り口調で話すバスガスさん。

「まるで実物を見たかのような言い草ですね」

「おう。何を隠そう、悪夢の第一発見者とは、俺の事だからな」

何故か胸を張り、誇るように言うバスガスさん。

どうやら当時、悪夢や亡霊が引き起こしたと思われる異常な事態について、原因の究明や魔物の間引きをするために、派遣された騎士団を案内したのがバスガスさんらしい。

そして、その魔物の巣まで何も知らずに行ってしまい、奇跡的に生還したらしい。

「よく生きて帰れましたね」

「そこなんだよな。悪夢は妙な習性というか、何と云うかがあってだな？ こつちから手を出さなければ見逃してくれるんだ。それどころか傷を治してくれたりもする。亡霊の方も似たような習性だったらしい」

「……ええ？」

しかし、この後に組まれた討伐隊では有無を言わさず全滅させたらしく、その後もトンデモナイ大事件を起こして騒動を巻き起こしたり、逆に気紛れに人助けのような事もしていたらしい。

それは本当に魔物なのかと、疑念に思うようなチグハグさだ。

「まあ、悪夢に関して確実に言える事は、トングデモなく強いって事だな。此処までの戦いで坊主の強さは見せて貰ったが、それでも上には上がいる。この世には、どうにもならない相手がいるって事を頭の中に刻んでおけ」

「ええ、分かっています。痛いほどに……」

間を置かずに、俺は返事をする。

力の差なんてものは、既に悲しいほど身に沁みて痛感している。

けど、その力の由来と与えられる目的を考えれば、俺は羨ましいとも妬ましいとも思えない。

ユーゴーとソフィアたちは一体どうして、あそこまで鍛え上げてでも戦う事を選んだんだろう。

「何やら坊主にも事情がありそうだが、あんまし気負い過ぎる事はねえ。人間出来る事、出来ない事があるんだよ。出来ない事を無理してやろうとしたって、出来ねえもんは出来ないんだ。坊主に出来る範囲でやりやあいい」

そのようにバスガスさんが窘めてくれるが、簡単には割り切れそうに無いと感じた。

「でも、目を逸らす事は……」

「何に悩んでいるかは知らねえが、生きてこそその悩みだ」

バスガスさんの声に、顔を上げる。

「出来もしねえ事を無理してやろうとして、死んでいく人間は多い。人間なんざ、ちよつとの事ですぐ死んじまう。頑張りすぎて死ぬなんて、本末転倒もいいところだろう？」

真剣なバスガスさんの助言に、俺は耳を傾ける。

「坊主、何かを守るための戦いつてやつは、確かに立派なもんだ。けどな？ 勝てない奴を相手に逃げる事は恥じやねえ。そこで死んじまったら、もう一度立ち向かう事も出来ねえだろ？ その時に勝てないのなら、逃げて力を付けてもう一度挑めばいい。まあ世の中には、どんなに頑張っても届かない化物もいるけどな」

きつと、バスガスさんは色んな出来事や様々な人間を、幾つも見て

きたんだろう。

迷宮という過酷な環境で、何度も何度も、長い時を過ごす案内人。その中でも、老齢になるまで迷宮に潜り続けた人の事だ。

きつと、俺には想像も出来ないほど、積み重ねられた人生を背負ってきたんだろう。

「もし、ですけど……。バスガスさん個人では絶対解決出来ない難題に直面した時。そして、その問題から逃げる事は絶対に許されていない時は、どうしますか？」

俺は、思わずそう呟いていた。

それにバスガスさんは、当たり前前の事実を言うかのように軽く答える。

「あん？ そんなもん気にせず逃げればいいだろ。生きようとする事の何が悪い？ それを責めるような奴がいるなら、じゃあテメエでやれって言ってやればいいんだよ」

「それでも逃げられないのなら……」

「仲間連中を頼る」

「え？」

ほぼノータイムで返ってきた答えに、俺は呆然とした声を上げる。

「当然だろ？ 俺一人ではどうにもならないなら仲間を頼る。迷宮案内人っていうのは、そういうもんさ。……さつきも言ったろ？ 出来ないもんは出来ないんだ。一人の人間に出来る事なんざ、たかが知れているんだよ。それなのに何でもかんでも出来ると思うのは、そりや傲慢つてもんさ。思い上がりも甚だしい」

辛辣な持論を述べるバスガスさんに、俺も先生も目を丸くして静かに聞く。

「所詮、人間なんてちっぽけなもんよ。己の体一つしかねえんだから、自分以外を頼り守らなきゃ生きていけねえ。弱い俺たちは、しがらみ抱え込んで身を寄せ合って生きてんだ」

そして、たつぷり間を取ってから、バスガスさんが告げる。

「人間、どうしようもない時は逃げろ。それで、仲間を頼れ。坊主にもいるじゃねえか、仲間って奴がよう？」

そう言つて、バスガスさんは寝ているみんなに視線を向けた。

「バスガスさん」

「……なんだ？」

「ありがとうございます。……バスガスさんのおかげで、何となく俺が進むべき道が分かったように感じます。だから感謝しているんです。俺を叱つてくれて」

そう、俺が答えると、バスガスさんは朗らかに笑い声を上げた。

「おう。分を超えた責任なんかは、一人だけじゃ潰れちまうもんだ。それに直面した時に、逃げる選択肢もあれば、己の信念に従つて突き進む選択肢もある。結局のところ、一番大事なのは自分がどうしたいかって事だしな。けどな、坊主は一人か？」

自分がしたい事。

みんながしたい事。

俺たちが、したい事。

打ち明けたとして、賛成してくれないかもしれない、理解してくれないかもしれない。

もしかしたら、拒絶され否定されるかもしれない。

それでも、向き合う勇気が生まれた。

この禁忌の事を話すという事は、みんなを苦悩に突き落とす行為でもある。

だからこそ、みんなの苦悩も背負おう。

全員で分け合い、そして全てを纏めて抱え込む。

俺は、ユリウス兄様とは違う。

あらゆる悲劇や絶望に対して、誰よりも先頭に立つて導く事は出来ない。

俺は兄様ほど、強くないのだから。

仲間の支えが無ければ容易く折れてしまいそうな俺では、一人では生きられない。

だから、みんなの助けを借りよう。

カティアの、冷静沈着な頭脳が必要だ。

ユーリの、このシステムという法則が表ではどう伝えられているか

という知識が必要だ。

フエイの、自由で梓に囚われない考え方も必要だ。

ハイリンスさんの、世界を見て回った知見に基づく視点も必要だ。

そして、先生も……、エルフの内情を知っている人も。

「ご助力、感謝します。俺は、仲間みんなと真実に向き合っていると思えます」

この迷宮を抜けて、一息つける時。

迷いはもう無い、その時に告げよう。

この世界の真実を。

「心配掛けました。俺は、……逃げない」

「そうか、それなら俺から言う事は何もねえな。気張れよ」

一步を踏み出す恐れから抜け出した俺に、諦めるという文字は無い。

そう決意と気炎を滾らせている俺の肩を掴み、痛いほどバスガスさんが背を叩いてきた。

揺さぶられて、結構キツイ。

「……気になってたんだが、その首巻き見してくれるか？」

「え？ これですか」

バスガスさんが俺のマフラーに対して、穴が空きそうなほど目を細めて見詰める。

そして鑑定してみたいと言うので、首から外して手渡す。

「やっぱり、亡霊の翹だ。坊主、これをどうして」

「それは前勇者の、ユリウス兄様の形見です」

これは兄様の形見なのだと、誇ることも嘆くことも無く、ただ事実のみを告げる。

「なるほどな。ザトナの悲劇に居合わせた勇者、その弟がオメエさんって訳か」

バスガスさんが、しみじみと言う。

「亡霊の加護つてのも縁起が悪そうだが。まあ……、大事にしるよ、それ」

「もちろんです。……ところで亡霊とは？」

さつきから何度か会話に出てきた亡霊という単語は、何となく予想は付いているものの、確証は無いのでバスガスさんに問う。

「ああ。そういや言っただけでなかったな。亡霊は蛾の魔物らしい。俺は直接見た事は無いがな。そして悪夢は、蜘蛛の魔物だ」

やはり、これはそういう物だったのかと、一人納得する。

かつて兄様が出会った魔物。

その欠片が、今俺の手にある物なのだと、そつと撫でる。

『シユン——』

跳ねるように顔を上げる。

そこには、驚いたような顔のバスガスさんと先生しか見えなかった。

けど、今——

「……兄様」

幻聴、だろうか。

でも、おかげで勇気が持てた。

ギョツと、首に巻き直したマフラーを握りしめる。

そうだ、俺には兄様がついてる。

王都の時から、ずっと。

決意を新たに、立ち上がる。

勇気の欠片は、いつでも俺のそばに居たんだと気付いたから。

兄様が、誰かを導く光なら……

俺は、仲間と共に、照らし出された道を歩んでいく。

俺は。

みんなに支えられつつも、俺として。

生きていくのだと。

K1 転換

迷宮に入って既に五日目かと、カティアこと、大島叶多は考える。少人数である事、その全員が高いステータスである事を最大限利用して、かなりのハイペースで最短コースを駆け抜けているので、既に迷宮の半分以上を走破していた。

俺たちの行軍速度は迷宮案内人のバスガスさんという人が言うには異常の一言で、安全と速度を両立出来る限界にまで到達しており、むしろバスガスさん当人がこれ以上は老いぼれには堪えると嘯いていた。

そう言いながら豪快に笑う様子からは、疲れなんて感じさせないがな。

この迷宮内で脅威となるのは魔物だけであるが、その魔物も俺たちにとっては取り分け脅威にもならない相手だった。

盾役のハイリンスさんを中核とし、オールラウンダーな俺とシユンやフェイ、魔法による援護に秀でたユーリや先生が後衛を務める、安定感のある布陣で苦戦らしい苦戦も無く進んでいた。

案内人という事で、バスガスさんが戦闘に参加するのは稀であるが、時折参戦した時に確認した戦闘能力は、この実力者揃いの中でも引けを取らないほど。

そんな即席ではあるが上手く回っているパーティだったけど、少し前からさらに洗練された。

最近のシユンの様子は何処か異質な雰囲気だったが、今、目の前に居るのは誰だ？

「ハイリンスさんは中央の魔物を抑えてくれ！ フェイは左を牽制！ カティア、ユーリ、先生は魔法で攻撃、右から順に撃破するぞ！」シユンの指揮の下、俺たちは動く。

二日前から積極的にシユンが作戦の指示するようになり、最初こそ拙い感じだったけど、今ではそれなりに様になっていると思うほどだった。

その日を契機に、シユンは再び変わった。

もちろん良い意味ではあるので、陰鬱な陰のある表情のシユンより遥かにマシな筈なのに、この変わりように俺は戸惑いを隠せない。少し前からするようになった、憂愁が滲む表情は変わってない、けど目が違う。

今のシユンの瞳は、眩いほど輝いて見えたから。

俺が睡眠を取っていた頃にバスガスさんと何か話をしたらしいが、詳しい内容は分からない。

けど、その時にシユンは何かを掴み、絶望の色から希望を宿すように昇華していたのだった。

今のシユンからは、普段の頼りない感じはしない。

冷静に前を見据え、その中に譲れない想いの光を宿したシユン。

倒すべき魔物を、最速かつ一撃で倒していくシユン。

その効率的ながらも、息を呑むほど冷たい慈悲深き戦い方を俺は眺める。

俺では、あのようには出来ない。

もともと俺とシユンとでは、肌でヒシヒシと感じるほど才能の差があった。

子供の頃は小さな差でも、成長するにつれて埋め難いほど溝は広がっていった。

その才能に、嫉妬した事だってある。

けど、直向きに努力し何事にも一生懸命な姿に、俺は目を奪われて純粹に尊敬するようになっていたんだ。

そういえばコイツ、前世の頃から目指すべき目標があると、そこに向かって迷い無く突っ走る奴だったな。

今世では、その目標が兄であり勇者のユリウスさんだったから、努力を続けてドンドンと実力を付けた結果が、今の光景に繋がっているんだろう。

対して、俺はどうだ？

身体は、変わった。

二次性徴を迎え、見た目こそ女性らしく成長していったが、精神は

男のままだった。

男の精神を持ちながら、女として生きる。

そんなチグハグな自分。

けど、変化は日々を重ねるごとに、目に見える形で現れていった。身なりについて注意を払うようになり、肌の状態も自然と気にかけていた。

手の甲に血管すら浮いていない自分の細くて丸みのある繊細な指先を見て、爪の割れが無いかと眺めた時、その無意識の行為に静かに驚いた。

胸が膨らみ始め、階段を登るなどで非常に不安定な部位の事を意識させられる度に、ゴリゴリと精神が削られるような思いをしつつも、誇らしい気持ちも芽生えていた。

内面の方も、知らず識らずの内に変化が進んでいた。

可愛いものや綺麗なものに興味を惹かれるようになり、脳裏でそれを手にした女の姿での自分を想像した。

感情の振幅が次第に大きくなり、凧いだ精神から生まれる論理的な思考よりも、膨れ上がった感情に突き動かされる衝動的な行動が多くなった。

決定的な転換点となったのは、課外授業、シユンがユーゴーに襲われた時だ。

あの時、自分でも訳が分からないくらいに精神が震え慄いた。

もしシユンが殺されていたらと悲観的な考えが浮かんだ瞬間、自身が世界から切り離されたかのような浮遊感を覚えた。

最初はただ、シユンが前世からの、それこそ唯一無二の親友だからと思った。

けど、再びシユンと顔を合わせた時、自分でも理解出来ない感情を抱いていた。

シユンを失いたくない。

その想いは、日に日に強くなっていく。

近くに居るとソワソワして落ち着けない、けど離れてしまうと寂しくて落ち着かない。

矛盾した感情に戸惑う自分では、その不安を制御出来なかった。けど、それが何なのか本当は分かっていた。

ただ認めたくないだけで。

元は、男だった俺。

今は、女の私。

あの事件が起点となり、自らの心が二つに割れるのは必定となってしまうんだろう。

シユンにベツタリとするスーやユーリを見る度に、心がささくれ苛立ちが生まれる。

だというのに、そんなの変だと認めず、目を逸らそうとする自分がいた。

それを隠すために、より深く猫を被っていった。

次第に、自分が行っているのは演技なのか素なのか、分からなくなっていた。

けど、傾いた天秤はもう戻らない。

精神は、自らの体に、周囲の環境に、依存している。

今この思考も、残滓にすぎないモノなんだろう。

俺という自意識は残っているが、もう表には出てくる事も無い絞りカス。

その俺は、ただ現実を遠い出来事のように俯瞰するだけ。

現に今も……

「さて、迷宮も半分を越えてきたが、この先のルートを決めていこう」「ルート、ですか？」

バスガスさんとシユンが話しているのが聞こえる。

「この先は幾つかのルートがある。危険な最短コース、比較的 안전한遠回りコース、危険はあるかどうか分からんが曰くのあるコース。ざっとこんな感じだが、どれを選ぶ？」

「そうですね……。危険な最短コースは、どう危険なんですか？」

「エルロー大迷宮上層の道は二種類。通常の狭い通路そして、もう一つが大通路と呼ばれる……」

その会話に、俺は口を挟めない。

肉体の支配権は、既に全部、女の自分にあつた。私が意図していない事は、俺には一切出来ない。

いつか俺の精神は、消え去る運命だろう。

その結末に、否は無い。

よくよく考えれば、前世から俺は、矛盾していたのだから。

姉二人にこき使われて女は恐ろしいモノだと身に沁みて理解しているのに、姉のお下がりである少女漫画ばかり読んでいたからか、恋は綺羅のようなものだど幻想を抱くようになった。

そんな乙女チックな願望を拗らせた自分に、嫌気が差した事もある。

男なのに、女みたいな願いを抱え込む自分。

それを考えれば今の状態は、本来あるべき形へと収まろうとしているのだから。

だから、問題は、……無い。

「みんな。危険な最短コースを進むべきか、遠回りでも安全なコースか、みんなの意見が聞きたい」

進むべきコースについて、バスガスさんに問い掛けが終わったシユンが、俺たちみんなに向けて、声を掛けてきた。

強い魔物がわんさか居ると言う、大通路を通る最短コース。

今まで通り通常の狭い通路を進む、最短と比べると四日ほど遠回りするコース。

そして悪夢の残滓なる、強くて厄介な蜘蛛の魔物が多数生息しているかもしれないコース。

最後のコースは、実際に悪夢の残滓と戦った経験のあるハイリンスさんが反対した事で、選択肢から外れたので、残る選択肢は二つ。

「私は最短コースを進むべきだと思います」

「私も賛成しますわ」

先生の意見に、口が勝手に動いて私が同意する。

その事に、違和感も危機感も抱いていない、抱けない。

だって、今話している私も、此処で考えている俺も、同じ自分なのだから。

話は進み、中立のバスガスさんは投票には参加せず、賛成が5、反対はハイリンスさんの1だけとなり、俺たちは危険を承知で最短コースを突き進む事になった。

「ここから先は大通路だ。気を引き締めろよ」

大体一日ほど経過して、俺たちは大通路へと足を踏み入れた。

大通路と言うからには大きいのだろうと思っていたが、これは想像以上だった。

幅はゆうに百メートルを越えているように見えるし、天井までの距離も同じだけ高い。

それが、見通せない闇の向こうにも延々と続いているのだから驚きである。

周囲には魔物の姿は見当たらず、それはしばらく進んでも同じだった。

俺たちが歩く足音だけが響く。

それは嵐の前の静けさのようで……

「妙だ。魔物の姿が無い」

バスガスさんが、隠しきれない焦燥に顔を歪める。

「普段はもっと魔物が居るんですか？」

「ああ。このくらいの距離を進んで全く魔物の姿が無いっていうのはオカシイ」

まるで悪夢と出会った時のようだ、口の動きと聴覚強化された耳で、小さな呟きを聞き取る。

その様子から、只事では無いと感じ取った。

「別のルートに出れる道はありますか？」

「もう少し行ったところに抜け道がある。そこから別ルートに切り替えよう」

誰もが胸騒ぎを感じ、ルートを変える事にしたが、その判断は一步遅かった。

心臓を直接揺さぶられるような怖気立つ咆哮が、大通路に響き渡る。

何かが、此方に向かって地響きを立てながら駆けてくる。

それは、テイラノサウルスを少し細くしたような体躯に、異様に鋭く大きい手には名刀のような鋭利で長大な爪を複数本も携えている、地龍だった。

「地龍ッ！ チイツ！ 上層に居るって事は、進化したてか!？」

バスガスさんが舌打ちして、悪態を吐き捨てる。

全員が、戦闘態勢に移っていく。

当然、私も。

俺は、此処で見ているだけ。

「みんな！ 奴は速度が高い！ 気をつけるんだ！」

シユンが叫ぶ。

同時に地龍が大地を蹴って、突進してきた。

その勢いのまま振り下ろされた爪を、前に飛び出したハイリンスさんが大盾で受け止める。

「グウツ!？」

断頭台の刃のような爪を受け止めたハイリンスさんが、勢いの乗った一撃が齎す衝撃に呻く。

しかし、ハイリンスさんが爪を防いだ事によつて地龍の動きが一瞬だけ止まり、その絶好の隙を突くために俺たちは走る。

シユンとバスガスさんは、機動力を奪うために脚を狙う。

しかし、バスガスさんの斬撃は龍鱗に弾かれ傷らしい傷も無く、シユンの方は剣が通つたものの傷口は浅く、地龍の動きを完全に止められる程では無い。

ユーリと先生、そして私は、魔法で援護射撃を行う。

光球が炸裂し、私の火炎が顔面を焼いて、先生の暴風が地龍を吹き飛ばす。

しかし……

「参ったね、こりゃあ……」

バスガスさんが呟くのと同時に、地龍が起き上がる。

その堅牢な鱗で覆われた体には、魔法での負傷は見当たらなかった。

本物の龍は、此処まで魔法が効かないのか。

龍種に連なる魔物は、龍鱗というスキル、あるいはそれが進化したスキルを持っている。

効果は、魔法の威力を弱めて阻害すること。

自分の魔法ではどうしようも無いと感じた私は、細剣を引き抜いて近接戦闘に切り替える。

剣術より魔法の方が得意だが、なにも身体能力が低い訳では無い。むしろ、物理ステータスでも一流に入れるレベルなのだから。

宙を蹴って何も無い空間を走り、後衛を狙ってきた地龍の攻撃を、ハイリンスさんが再び防ぐ。

同じように止まった隙を突こうとしたが、剣を振るう前に地龍が飛び下がる。

「雷と土は効かない！ カティア、下がれ！ お前のステータスでは……」

「やってみない事には、分かりませんわ！」

シユンの隣に出る私。

下がれと言われたにも関わらず、私は強がって笑い虚勢を張る。

あの速度では到底追いつけないし、こんな頼りない細い剣では鱗を斬り裂けないだろう。

でも、シユンの隣に立って守りたいという意思が伝わってきた。

その想いに、俺は……

「はあああああッッ！」

様子見をしていたフェイが目にも留まらぬ速さで駆け、力強く叫びながら地龍を殴りつける。

そして顔を強かに打ち据えられた地龍が、大きく吹き飛んでいった。

シユンと私は、その現実感の無い光景に啞然としていた。

おま、その見た目で、それは無いだろう？

例えるなら、お忍びの貴族令嬢が、素手で馬車を殴り飛ばすような

ものだった。

あくまで見た目だけな。

フェイの容姿は、着飾ればそんじょそこらの令嬢なんて目じゃないだろう。

ただ口調については、公爵令嬢視点から言わせてもらおうと落第以下だけだな。

元の場所から数メートルほど殴り飛ばされた地龍が起き上がると、憎々しげにフェイを睨みつけ殺意を滾らせる。

そして地龍とフェイの格闘戦が始まった。

地龍の鋭利な長爪と、鱗に覆われたフェイの細腕が激突する。

フェイの腕が斬り落とされる幻が浮かぶが、実際には互角、いやフェイが有利を取り続けながら生身で鳴るとは思えない金属音を響かせながら打ち合っていた。

攻撃が一向に効かず、再びフェイに殴り飛ばされる地龍。

再び立ち上がる地龍。

だが、その瞳は赤く血走り激憤に燃え盛っていた。

「ッ!? 気をつける! 発狂してステータスが跳ね上がった!」

シユンが叫ぶ。

地龍の変化に注意を促すべく、声を張り上げたんだろうが、それが仇となった。

「シユン! 避けて!」

私が駆け出し、シユンを突き飛ばす。

その次の瞬間、背中に灼熱感が走った。

「カ、カティアアアッツ!」

シユンが、悲痛な声で絶叫する。

そんなに叫ばなくても聞こえてるって、煩いなあ。

俺は冷静に周囲を把握する。

俺／私を斬り裂いた地龍は、フェイとハイリンスさんが抑えている。

戦況は、互いに決め手に欠けるものの、このまま暫くは保たせる事が出来るだろう。

それより問題なのは……

「慈悲……、いやまだHPが0になってない！　まだ間に合う、治療魔法を……、ユーリ!!」

私／俺に対して、治療魔法を掛けているシユンとユーリ。

二人は涙を滲ませながら、必死に治療をしている。

それを感知系のスキルで認識しながら、俺は私と向かい合う。

なあ、なんであんな無茶をした？

——シユンが傷つくかと思うと、自然と体が動いていましたわ。

シユンなら避けられただろう。

——そうかもしれないですね。でも、理屈じゃ無いのですわ。

シユンを守りたいという気持ちが燃え盛る。

それで自分が傷ついてちや、シユンが悲しむだけだ。

——分かってます！　でももう抑えきれないのですわ！　この心

を焼き焦がす情念が、私を突き動かしてしまうのですから。

俺は、その吹き荒れる感情に晒される。

好きなのだ、愛しているのだと。

愛した人のために、自分の全てを使って支えてやりたい。

傷ついて欲しくない、血を流して欲しくない、シユンが死ぬなんて

見たくない。

そのためなら、あらゆる災禍からシユンを守るために、私はこの身

を捧げてでも惜しくは……

そうじゃないだろ!?

魂を懸けて、そう叫びを上げる俺が居た。

違うだろ！　俺／私たちは、シユンの心の傷になっただけで終わ

たいのか!?

——ッ!?

息を呑む、私の精神。

私が考えている事は、俺にも分かる！

——だって私／俺たちは、同じ魂だから。

俺は、親友を助けたい。

——私は、好きになつた人を救いたい。

ならさ——

——私／俺たちは。

共に戦えると思わないか？

——共に戦えると思いませんか？

《熟練度が一定に達しました。スキル「並列意思LV1」を獲得しました》

「……カティア！」

傷が塞がり、痛みが引いていく。

ゆっくり視線を動かすと、シユンとユーリの安堵した顔が。

「……ごめんなさい。失態ですわ」

私は素直に謝る。

自分の迂闊さで、多大な迷惑を掛けた上に心配させたとなれば、猛省しかないですわ。

「立てるか？ 今すぐ下がって安全な場所に……」

「私も戦いますわ」

シユンの言葉を断ち切って、自分の意見を告げる。

「でも……」

「治療魔法さまさまですわ。大丈夫、動けます。だからお願い、シユン」

シユンの目を見て、真摯に頼み込む。

此処で引いたら、俺／私じゃない。

「……分かった」

「ありがとう、シユン」

そして私／俺たちは、地龍に再び立ち向かう。

魔法は効果が薄い、剣もだ。

——なら、どうします？

だが二人分の魔法なら、地龍にだって効くんじゃないか？

私／俺は、両手に魔法陣を展開させる。

私がメインで組み立て、俺が補助する。

そして発動した魔法は、構築難易度が高く、そう簡単には発動できない炎の大魔法。

この威力なら、龍鱗があっても関係無い。

「カティア?」

「いきますわよ!」

小型の太陽となった火球が、地龍へと向かって飛翔する。

それを危険と感じたのか、一瞬の溜めの後、地龍がブレスを放つ。猛火とブレスが衝突する。

「くっ!」

「カティア!」

「止めは任せましたわよ、シユン!」

発動した魔法の威力は高くブレスを押し返し始めているが、仕留めるには至らないでしょう。

美味しいところは、譲ってやるよ。

だから、シユン——

「うおおおおおツツ!!」

シユンが手を突き出し、鮮烈な眩さを持つ光線が放たれる。

その一条の光は、地龍の顔面付近まで来ていた火球に突き刺さり、失明しそうなほど膨大な光量となって炸裂した。

光が収まり、復活した視覚が捉えたのは、頭部を喪失した地龍の姿だった。

《経験値が一定に達しました。カルナティア・セリ・アナバルドが
……》

?

神言を聞き流しながら、私／俺は、シユンを見詰める。

掛け替えの無い親友よ／大切な愛しき人よ——

俺は／私は——

お前を／あなたを——、守るから。

今日この日。

俺は／私は——、カルナティア・セリ・アナバルドという二人で一

人になったのだと。
そう魂に、刻み込んだ。

鬼3 心鬼身責

『――贖え』

目を閉じて意識を集中させる。
無我に潜航しようとする僕の邪魔をすべく、その言葉が魂に直接語りかけてくる。

『――贖え』

精神を直接揺さぶられるような思念に対し、僕はただ見詰めるだけ。

罪の記録があった。

贖罪の歴史があった。

けど、それに対し僕は何も思わない。

『――贖え』

これは、この世界で生きる全ての人間に向けた言葉。

星を破滅間際まで追いやった、その引き金を落とした人間たちに、罪を自覚させるための言葉。

それが禁忌。

しかし、それとは全く関係無い世界で生きていた僕ら転生者が、向き合うべき罪とは何なのか。

その問いの答えとは……

ゆっくりと、瞼を開いていく。

まず視界に映ったのは、馬車の内装。

少し顔を横に向けて、窓の外を軽く眺める。

視界に飛び込んできたのは、帝国の軍旗を掲げた兵士たち。

しかし、彼らは帝国の兵士では無い。

魔族軍第八軍、捨てても惜しくない使い捨ての軍。

僕が暴力で支配し、率いる軍だ。

小さく誰にも気付かれないように、そつと静かに溜息を吐いてから

視線を切る。

現在、僕たちはエルフの里に向けて人族領域を進軍中だ。

鎧や服装を帝国軍に偽装し、予め神言教の根回しが済まされている事で、誰に見咎められる事も無く軍を進めていた。

現時点では、ただ軍団を歩かせるだけなので特にする事も無く、僕は記憶を振り返る。

まず脳裏に浮かんだのは、神言教の教皇の事だった。

白さんたちに連れられて教国に訪れたときの出来事を思い出す。

先に神言教について振り返ろう。

神言教が掲げる教義、スキルを育てて神の御言葉をより多く聞く。

それは、生きていくうちに、蓄えるエネルギーを多くしろということなの。

この世界の住人はシステムによって、スキルやレベルアップなどを果たした時に、それを告げる声を聞いて育っている。

それを神の声として崇めるのが神言教であり、その事に違和感を覚える人間は少ない。

それが当たり前であり、そう言い聞かせられてきたのだから。

変だと思うのは、別の世界を知っている転生者くらいなものだろう。

真実を知ってしまえば、笑えない。

神言教は、宗教という枠組みを利用して、人族に広く強要しているのだ。

世界の礎となれ、と。

幼い頃から刷り込み自分の意思で、神言教の教義に従っていると信じ込ませる。

それは非常に効率的で、何処か悍ましくも感じてしまう。

人の命が、ただの消耗品のように扱われているからだろう。

まるで牧場のように、人族は神言教という羊飼いに操られるまま、育てられて出荷されていく。

その事に、人族が気付いていないというのもまた、恐ろしさに拍車を掛ける。

そんな牧場を作り上げたのが、神言教の教皇ダステイン。

神言教を知れば識るほど、それを構築した教皇の手腕がより恐ろしくなる。

神言教で最も恐ろしいのは、その絶対壊れる事無き機械のような組織力だ。

人族領域のほぼ全域に渡って、大陸各地に神言教は教会を作り、影響力を持っている。

例外となるのは、女神教を信奉しているサリエーラ国くらいだ。

神言教の関係者の多くは、念話の上位スキル、遠話を習得している。

そして、各地に散った教会には遠話が使える人を配置しており、リアルタイムとはいかないが、遠く離れた場所の情報を素早く得られるシステムを構築していた。

伝言ゲームのように、距離の制限は中継を挟む事で克服して情報を集積し、それにより得られた情報を元にして、情勢を読んで世界を動かしていくのだ。

それ以外にも様々な仕組みを作り上げ、神言教という組織を盤石に仕上げていた。

注目すべき点は、それらの仕組みには人手が多く必要であるが、決して突出した才能が必須では無いという事だ。

遠話しかり、神言教を回す上で必要なスキルというのは、一般的なものばかり。

誰でも、その気になれば覚えられる。

つまりは、誰が欠けても回る組織構造。

それは教皇ですら例外ではない。

ダステインという名を受け継いだ教皇が不在でも、問題無く組織が回り続けるように、神言教が揺らぐ事の無いように、組織の基盤というものが恐ろしいほど地固めされているからだ。

絶対的な不壊の組織とするために、遙か昔から長い時間を掛けて作り上げる。

それを成し遂げた教皇は、間違いなく大局を見据える賢者と言えた。

けれど、それに驕ること無く、人を使い、人を支配している。まさしく人の王。

僕が見てきた人物の中では、異質な存在だった。

アリエルさん、白さん、苔森さん、ソフィアさん、メラゾフィスさん、ユーゴーなどは、自身が強者として極まっているが故に、下々に頼るという事をしない。

個人で出来る事が多いからこそ、他者を率いる王として成り立っていないのだ。

メラゾフィスさんは、ソフィアさんの従者という意識からか、率先してあらゆる仕事を片付けてしまい、部下などに任せる事が少ない。

ユーゴーの統率力は、暴力とカリスマによつて支えられているもので、賛同する人々からは強い支持を受けるが、相性が悪ければトコトン反発されるやり方だ。

苔森さんは、ちよつと特殊だけど本質的には同じ、王というより群れの長であり、狭い範囲なら強固に繋がりを結んでいるが、その範囲を越えて影響力を広げられない。

彼ら彼女らの率い方は、要たる人物が欠けたら成立しなくなる、強くとも脆い集団である。

それらと比べて教皇の支配は、なんという完成度の高さだろう。自分の力とその限界を見極め、早い段階から組織作りに焦点を絞つて行動してきた。

そのような事を、アリエルさんから予め教えてもらっていた。……だが、実際に会ってみて、それは上辺だけしか理解してなかったと痛感した。

僕が初めに抱いた第一印象は、普通の老人にしか見えない、……だった。

強者には一切見え、ほんの少しの害意で以つて腕を振るえば、容易く命を吹き消せるような、その程度の力量しか秘めていない。

そう確信でき、直感に嘘は無い。

しかし、それはあくまで戦闘能力に限った話だ。

アリエルさんをして、化物と呼ぶような教皇。

その片鱗を焼け付くほど鮮烈に、垣間見る事になった。

「だからこそ、私は積み上げられた死体の山が、無駄にならぬようにしておきます」

耳にこびりつく、その言葉。

其処に込められた不動の意思が、どれだけ僕を打ちのめしただろう。

あの教皇は、その言葉の通りに幾億もの罪科を積み重ねて、それでもなお歩みを止める事を選ばなかった、恐ろしいほどの信念で塗り固められた人だった。

大を生かすために、小を殺す。

そのためなら、前世での僕の親友の俊、その兄であり、そして各方面で人気もあり能力も歴代の勇者にだって劣らない、手塩にかけて育んだ勇者ユリウスですら、あっさりとして売り渡してみせた。

大局的に利があるのならば、小さな犠牲すら躊躇無く容認する。

それが、小に割り振られてしまった、本来守るべき人々を虐殺する事でも。

ソフィアさんの故郷は、神言教が計画した女神教を滅ぼすための作戦で戦火に巻き込まれた。

その際、決して少なく無い無辜の人々が犠牲となっていた。

人殺しは、いけない事だ。

疑問や理由など、理屈で説明出来るようなモノじゃない。

しては、ならない。

其処に理屈など無い、ただ人が人であるからこそ忌避する行動。

それは悪。

けど、その悪に手を染めてでも、守りたいモノがあるとしたら？

大罪だと知りつつも、それ以外に目的を果たせる手段が無いとすれば？

その事実に対し、教皇が返した答えが、さっきの言葉だった。

教皇が行っている事は、己にとって都合のいいように世界を改変させる行為。

けれど、それは個人の利益を求めた行動ではなく、純粋に世界を案じているからこそだった。

その在り方が、恐ろしい。

しかし、僕の罪悪感に罅をいれるほどの衝撃だった。

己が為してきた事を誇るでもなく、むしろ犠牲にしてきた死者たちに詫びるかのよう。

けれど、立ち止まることは無い。

己の存在全てを擲つてでも、多くの犠牲を積み重ねても、それ以上の人族を救うために。

何かを救うために悪に手を染め、その罪を濯ぐために新たな悪行を延々積み重ねる、終わりになき贖罪の連鎖。

終わりが無いと許される事は無いのだと知りながら、それでも続ける贖罪の旅路。

それは、どれほど過酷なのか。

その時になって初めて僕は、教皇の底知れなさを実感したのかもしれない。

分からなかった。

その頃の僕は、自分がどうあるべきか、生き方を見失っていた。

憤怒に吞まれ、狂気のまま殺戮を繰り返す僕。

苔森さんたちと出会い、憤怒を封印して貰って理性を取り戻せたのは、奇跡でしか無い。

あのまま理性を取り戻す事も無く彷徨い続けていれば、遠くない未来に力尽きて野垂れ死ぬか、取り返しのつかない罪を重ね続けていただろう。

僕は、幸運にも生きている。

生きているからには、犯した罪を濯ぐためにも、何かを為したいと思っただ。

けれど、何を為せばいいのか、答えを定める事は出来ていなかった。ただ、先をゆく人たちに追従するだけ。

世界を、星を救うために、命を奪うことを選んだ彼女たち。

大義を成し遂げるために、人の命を奪うことは、果たして正義なのか？

僕は、ずっと悩んでいた。

僕には、そう簡単には割り切れそうに無い。

前世の頃から、曲がった事が嫌いだった。

潔癖なまでに、自分自身に対し、人々に対し、世界に対し、正しくあれと願っていた。

けれど、憤怒に支配されて人々を虐殺した時から、僕は自分の生き方を見失っていた。

正しさに、背いた僕。

あるべき姿を無くした僕は、進むべき道も分からずに、ただ何となく背中が見えているからと、揺るがぬ目標を定めた彼女らの足跡を追い掛けるだけ。

そこに訪れた教皇の言葉は、一縷の望みとなった。

正しくないと知りながら、それを罪と知りながらも進み続け、大義を為す。

それは陰しく苦悩に満ちた、辛い生き方だろう。

苔森さんも似たような事を言っていた。

「殺しなどの非道を行っても、外道は認めない。そこが私という在り方の線引きだから。だから、このルールだけは絶対。それに従って善行もするし悪行もする。その果てに自ら引き起こした事を悔やんだりはしない。それでみんなを、家族を救えるのなら、私は悪でいい」
神言教の暗部の家に転生していた、前世ではお調子者なムードメーカーで、今世でも変わらぬ愛されイジられキャラのままだった、草間忍ことサジンも、このような事を言った。

「難しく考える必要はねーと思うけどな。正義とか悪とか、結局のところ立場が違うだけだろ？ だったら自分の立場で正義を貫けばいいじゃん」

彼らの言葉と意思は、眩しいくらいにまっすぐで揺らがない。

そう言い切れる彼らが羨ましいと思った。

そうだ、僕が進むべき道は、こういう生き方だ。

『――贖え』

禁忌が訴える、その言葉。

それに同調しつつも、斬り捨てる。

ああ、贖うとも。

けれど、禁忌に言われたからじゃない、僕自身のエゴの為だ。

僕が殺してしまった人々の死に、報いるため。

その死を、無意味にさせないために。

僕の身勝手に殺し、身勝手に贖罪を求めて、また殺す。

謝罪はしない。

僕が切り捨ててきた背後に広がる死者の轍にも、もう振り返りはしない。

僕は、許されざる悪だ。

ならば、全ての罪も穢れも背負って、僕は正義のために正義を為そう。

それこそが、咎人たる僕が唯一、成し遂げられる事。

罪を背負った、ならばその罪のために最後までやり通す。

その果てが死であろうとも、構わない。

足掻き続けた先に、成し遂げるか、惨めに死ぬか、それだけ。

そして、成し遂げた暁には、僕は罪を禊ぐために、自死すら構わない。

いつかの終わりのために、最期には滅びが待ち受けていようとも、もう、立ち止まりはしない。

S 8 脱出

地龍が沈む。

頭部を焼き尽くされ消失した事により巨体が鈍重に崩れ落ちると、死した地龍を吊うかのように重々しく大地が鳴動した。

俺は、確実に地龍が生命活動を停止している事を認識して、静かに瞑目する。

すまない。

殺した俺が言うことじゃないけど、どうか安らかに――

手にした剣を握る手に、生々しい感触が蘇る。

また一つ、この手で命を奪ったのだと魂に刻み込む。

なんて、軽い――

命の価値が、それを奪った俺の手が。

なんて、重い――

命を奪った事が、そうしなければ為らなかった俺の罪深さが。

そのように、強要させる世界そのものが。

これが、この世界と日本との違いだとしても、俺は嘆かずにはいられない。

魔物は人を襲うから、殺して当たり前。

魔族は敵だから、殺して当たり前。

人ですら、些細な切っ掛けで簡単に殺し合いになる。

そして奪った命に対して、この世界の人々はあまりにも無頓着だ。

なら、せめて俺だけでも、あらゆる命は重いのだと、十字架を背負わなければならない。

ユリウス兄様が死ぬまで理想を追い続けたように、俺もまた命の価値は重いのだと、一生変わることなく想い続けなければ為らない。

命を奪うことが怖い。

命を奪われることも怖い。

それでも、俺は足を踏み出そう。

それがどれほど苦しみを生む一步であろうとも文字通り魂を削る所業だとしても、進まなければ道は見えないのだから。

たとえば、それが世界そのものと反するような、愚かな思想であろうとも。

仲間がいれば、きつと――

「……ふう。一時はどうなるかと思ったが、まさか龍殺しを達成するとはな」

バスガスさんが大きく溜息を吐きながら、地龍の死骸へと油断無く近づいていく。

そして俺たちに確認を取ってから、空間収納が付与されている袋の筒口を開き、まるで空間ごと吸い込むかのように地龍の巨体を格納した。

魔物の素材は部位によって様々な用途があり、龍ともなれば全身が宝の山のような物だからだ。

「この地龍が、大通路で一番危険な魔物ですか？」

「バカ言え。こんな大物、普段はいねーよ。大通路で一番厄介なのは、その下の地竜だ。こいつはおそらく、地竜が進化したものだろう」

「なるほど。確かに、鑑定して見えたレベルは低かったです」

「だろ？ 他の魔物の姿が見えないのも、進化したてのこいつが、手当たり次第に食い散らかした結果だろうよ」

地龍を仕舞い終えたバスガスさんと言葉を交わし、この地龍が居たからこそ大通路の異常事態が起きていたのだと、俺たちは理解した。

俺は周囲を見回し危険が無さそうなのを確認してから、カティアのそばに寄る。

「大丈夫か？ カティア」

「ええ、勿論ですわ。心配掛けて悪い」

最初は物腰柔らかな言葉遣いで、続く言葉は気安い砕けた口調でカティアが言う。

その話し方に一瞬疑問を覚えるが、雰囲気は変わっていないので気のせいかと思った。

「服がダメになってしまいましたわ。替えの服はあったかな……」

「分かった、荷物から……」

「待って、シユン」

カティアが、俺を呼び止める。

腕に加わる抵抗感から、袖口をギュッと掴まれているのを感じ取った。

「あの時、戦うって我儘を認めてくれてありがとう。おかげで私は大切なモノが何なのか、気付けましたわ」

それは地龍との戦いで的事だろうか。

俺は、とくに何かした覚えは無いけど……

「……カティアに、お礼されるような事はしてないと思うけど」

「それでもですわ。感謝しているんだから素直に受け取れ」

何とも言えない奇妙な感覚に、俺は首を傾げる。

まあ、背中をバツサリいった大怪我にしては体調の悪さは見られないし、元氣そうなら安心だ。

そう思った時、特級の悪寒が走った。

瞬時に振り返ると、岩の上から此方を見下ろす八つの真っ赤な無機質な眼と視線が交わる。

僅かな光すら塗りつぶす暗闇だというのに、そこだけ世界から浮いているかのような白い体躯が瞳に映った。

白い甲殻と体毛に覆われた体は、先程の地龍と比べれば小さく映る。

だが、その存在感はこれまで見てきた魔物の中でも、桁違いに大きかった。

それに当てられて、誰一人として動けない。

俺もカティアを守るように、崩れ落ちないように虚勢を張るだけで精一杯だった。

『勇者?』

不意に、声が聞こえた。

その声は念話であり、俺では無い誰かに向けて発せられたもの。

それを傍受しただけに過ぎなかった。

気付けば、悪夢の残滓と呼ばれる蜘蛛の魔物が、数え切れないほど無数に居た。

『支配者?』

『支配者』『支配者』

『鑑定不能?』

『鑑定不能』『鑑定不能』

『転生者?』

『転生者』『転生者』

『でも弱い?』

『弱い』『弱い』『弱い』『弱い』『弱い』『弱い』

『弱い弱い』『弱い弱い』『弱い弱い』『弱い弱い』『弱い弱い』『弱い弱い』

そこかしこから聞こえてくる念話が、脳内で反響する。

無数の赤い視線。

闇を埋め尽くすように、浮かび上がる白。

口の中が渴いていき、思考が停止しそうだ。

聞き捨てならない言葉も聞こえるが、俺は動けない。

今動くと、背後のカティアを始め、仲間を危険に晒してしまう。

「転生者……?」

口の中で、ヒツソリ呟く。

この魔物は、俺たち転生者のことを知っているような口振りだ。

声を張り上げて、その真意を問い正したい気持ち膨れ上がるが、

グツと堪える。

俺のせいで、悪夢の残滓が襲い掛かってくる事になれば、目も当てられない。

ふと、念話が止まって、痛いほどの静けさが訪れる。

気付けば、全ての悪夢の残滓の視線が、俺を貫いていた。

『転生者?』

『そう言った』『そう言った』

『どうする?』

『宣言』『宣言』『宣告』『宣告』
『告げる』

『終わりの始まり』

『世界が始まる』『世界が終わる』

『どうせ死ぬ』『みんな死ぬ』

『何しても無駄』

『諦めろ』『立ち止まれ』

『それでも進むなら』

『みつともなく』『生き足掻けばいい』

そう言つて、悪夢の残滓は俺たちの前から姿を消していった。

まるで、この先の未来を予言するかのようになり、不吉な言葉だけを残して。

俺たちが硬直から復活したのは、たつぷり時間が経つてからだつた。

周囲に魔物の気配が一切無いのを良い事に、俺たちは各々座り込みだり岩に背中を預けたりして休息を取っていた。

あの何事にも動じなさそうなバスガスさんも顔色を悪くして座り込んでおり、昔遭遇したという悪夢とのトラウマが刺激されていたのかもしれない。

他のみんなも似たようなもので、一度会った事があるハイリンスさんも何事にも物怖じしないと思っていたフェイですらも、若干引きつった表情に見えた。

唯一平気そうな顔をしているのは先生だけだ。

もし、あのまま戦いになっていたら、まず勝利はあり得ない。

鑑定は控えたがあの時、地龍にも匹敵するような強さを感じた悪夢の残滓が、数えるのも億劫なほどいた。

多少の個体差はあったとしても、それだけの大群かつ地龍相当の魔物が相手では、逃げ出すことすらままならず、俺たちは死んでいただ

ろう。

俺たちは幸運にも、ただ逃されたに過ぎないのだと実感した。

「神様の声が聞こえた……。大丈夫、神様が見守って下さる、それだけで……。そういえば先生は平気そうですね？」

ユーリの瞳が一瞬濁ったように感じると、次の瞬間には急速に顔色が復活していき、普段の調子を取り戻した。

そして、一人だけ最初からずっと平然としていた先生に声を掛けた。

その問いに先生は、そうでもないのだと答える。

「いえ、平気じゃありませんよう？ ガワだけ見れば可愛かったんですが、あの中身は、ちよつと気味が悪かったですし……」

「可愛い……？」

前世から先生がゲテモノ好きだというのは知っていたが、あの悪夢の残滓を見て、そんな感想を抱けるのは正直凄いと思う。

ただのキャラ作りの一環だと思っていが、本気で蜘蛛とか好きなのだと初めて理解した。

「ところでえ……。あの子たちが言っていた事、どう思います？」

「分かりません。情報が少なすぎる」

あの悪夢の残滓たちが言っていた、警告らしき謎の言葉。

そもそも、悪夢の残滓と呼ばれるあの魔物たちは一体何なのか。

人族語を解するだけの知能。

念話まで駆使する仲間同士の連携。

ただの魔物と言うには、あまりにも異質な存在。

「終わりの始まり……。みんな死ぬ、か」

不吉な言葉だけが、延々と繰り返される。

けど……

「みつともなく足掻いてみせるさ、最後まで」

俺がする事は変わらない。

足掻き続けた果てに、ようやく得られる奇跡を目指すだけだ。

「お世話になりました」

俺たちは、バスガスさんに頭を下げる。

悪夢の残滓と遭遇した後の迷宮攻略は驚くほど順調に進んで、進化したての地龍が魔物を根刮ぎ食らい尽くし、そして悪夢の残滓も居た事により、あの大通路一帯全てから魔物そのものが少なくなっていたのが有利に働いたのだろう。

その後、悪夢の残滓と再び遭遇することも無く、特筆すべき事件も何も無く、俺たちはエルロー大迷宮を抜けて、バスガスさんの拠点に一晩泊まり英気を養った。

そして次の日の朝にはもう、エルフの里に向けて旅立つことにしたのであった。

バスガスさんとは、此処でお別れだ。

「しかし、本当に地龍の素材は俺が全部貰っていいのか？ 売れば一財産だぞ？」

「ええ。急ぎの道中ですし地龍を入れられるほど、こつちの空間収納袋にも余裕は無いですから。お世話になったお礼だと思って下さい」

「なら、遠慮無く頂こう」

バスガスさんが、大きくニカッと破顔する。

「……では」

「おう、最後に一ついいか？」

別れを惜しみつつも足を進めようとした俺を、バスガスさんが引き留める。

「坊主。これは俺の勘なんだが、近い内にデカイ事件が起きる気がする。根拠はねえ。ただ、ここ何年か拭いきれない不安が常に張り付いているような感覚がする。坊主が巻き込まれた騒動もその前触れなのかもしれない」

そうなのかもしれない。

ここ最近の世界の動きは、非常に活発だと感じていた。

「俺は坊主たちを案内した事で、世界が少しでも良い方に転がるよう願っているぜ。そうなれば、案内人冥利に尽きるってもんだ」

差し出された、バスガスさんの手。

「励めよ、坊主。俺が出来んのは迷宮を案内するので限界だ。だが、こんな老いぼれで良ければ、また案内してやる。だから死ぬんじゃねえぞ、生きて再び顔見せに来い」

俺は、その手を力強く握り返し、堅い握手を交わした。

「はい、また会いましょう。バスガスさん」

バスガスさんの激励と約束に、俺は裏切らないようにしたいと誓った。

『バスガスさん、いいオジサマだったよねー』

「そうだな」

『あつ、あれ蝶じゃない？ 鮮やかな色のっ』

竜形態に戻ったフェイに乗り込む時、フェイの視線の先には緑色の翅を持った虫が居た。

その丸々とした姿には見覚えがある。

たしか、あれは……

「それ、蛾らしいぞ」

『うえっ!?!』

「ちよ、フェイ!? 急に動かないで下さい!」

「あわわ、落ちる!?!」

驚きでフェイの体が跳ねた事により、背に乗り込んでいたカティアやユーリがバランスを崩して慌てふためいていた。

「締まらねえなあ。オメエさんら」

そう苦笑するバスガスさんに見送られながら、俺たちは空へと飛び立った。

バスガスさんと別れて、エルフの里に向かう旅を続ける俺たち。

フェイの背に乗って移動すること二日、サリエーラ国の端に位置する街へと辿り着いた。

エルフの里へと通じる転移陣はこの国に隠されているようで、その

場所へ向かう最後の補給地点として、この街へと足を踏み入れていた。

フェイも人型となり、翼を隠すためにゆったりとしたマントを着て、ついてきている。

この世界はファンタジーじみているけど獣人などの種族はいない。そのため、こうでもしなければ翼を持つフェイは目立ってしまうからだ。

ただ、この国では少々事情が異なるかもしれないと言う。

「サリエーラ国は女神を信仰する国家です。そして言い伝えでは女神は白い翼を持っていたとか。フェイちゃんの翼を見られたら、何をされるか分かりませんか？」

先生曰く、最悪女神の真似をする不敬者として襲いかかれるかもしれないと言う。

おそらくはその逆で、崇められるだろうとの話だが、なにせ考え方が違うので何が起こるのか、先生にも読めないという。

最近ではあの迷宮の悪夢を崇めた神獣様とか、空を飛ぶ人影を見たという事でそれは女神様の影なのだと祀る考えもあるらしい。

ユーリも女神教は邪教との事で、崇める神様は同じだとしても考え方が全くの別物なので神言教とは相容れないのだと、声高々に叫んでいた。

そのユーリは現在、下手な事を言ってしまうように口を噤み、周囲の情報をシャットアウトするべくフードを被ったその下で、耳を塞ぎながら歩いていった。

神言教と女神教との折り合いの悪さについては、実際に過去戦争をした事もあるほどで、二つの宗教の間には想像もつかないほど根深い恨み辛みがあるだろう。

だが、俺には結局のところ、どっちも本質は同じなのではという気持ちがあった。

「スキルを捧げよ！ さすれば救われる！」

これが、女神教の街で声を張り上げる神官らしき人の言葉だ。

先生が言うには、サリエーラ国とは管理者サリエルを神として祀る

国で、その方法を宗教として纏めたのが女神教だと言う。

神言をより多く聞き、スキルを育てる事を推奨する神言教。

そのスキルを、サリエルに捧げる事を説く女神教。

その崇める神様も一緒であり、育て上げたスキルも結局のところ、最後にはシステムと呼ばれる世界の仕組みそのものに、還元させなくてはならないのだから。

それが、この世界で生きる人々に課せられた宿命。

二つの宗教の違いは、それを還元させる時が生前か死後かの違いでしか無いのだと、たったそれだけの事なのだと言った。

そして女神教の教義について知った事で、得られた知識もあった。

スキル消去、か……

スキル消去とはスキルポイント無しで獲得出来るスキルであり、数日かけて自身が取得しているスキル全てを消すスキルだ。

発動するば全てのスキルが消えるまで止まらず、狙ったスキルだけを消すとかも出来ない。

消えたスキルは戻ってこないが、また鍛え直せば再び獲得する事は出来るという。

このスキルについては、女神教が言うスキルを捧げるとは何なのか聞いた時に知った事だ。

先生が考えるスキルを捧げることへの見解は、だいぶ捻じ曲がったものだったが、このスキルについて知れたのは良かったと思う。

このスキルこそが、鍵になる。

俺は、そう確信していた。

もし、全ての生命が一斉にスキル消去を選んだのなら、それはきつと……

夢物語だろう。

それでも、思わずにはいられない。

俺は宗教について否定的だが、少なくとも女神教の考えについて悪くはないと感じていた。

「それでは、先生は協力者に会ってきますう。相手が相手なので、今回

は先生一人で行かなくてはなりません。なので、皆さんは宿で待っていて下さい」

物資を買い終えた俺たちに向かって、先生はそう言った。

誰かついていくべきだと思うが、先生一人でなければならぬ理由があるそうで、俺たちは宿を取って待っていて欲しいと言う。

それに対し、俺は……

「俺も、先生を含めたみんなに、説明したい事があります。だから先生、帰ってきたら……」

「んむ？ ……かしこまりました。どうやら、大事な事みたいですね」

込められた重さを感じ取った先生が、真剣な表情に切り替えて答えた。

「それでは、また」

「ええ、待ってます先生」

そして、俺たちは一時の間だけであるが、先生と別れる。

それにこつちの方も、話したいことがあるみたいだな。

カティアと短く目で会話しながら、俺たちは宿の中へと入っていった。

宿の一室に集まった、俺たち。

俺、カティア、ユーリ、フェイ。

つまりは、今居ない先生を除いた転生者たちだけで集まっていた。ハイリンスさんは気を利かせて席を外し、今は酒場で時間を潰しているだろう。

「それで、カティア。何の話だ？」

単刀直入に話を切り出す。

それにカティアは、魔法による遮音を施すと重々しく話し始めた。

「勿論、他の転生者についてだ」

カティアがベッドに腰掛ける。

じっくりと時間を掛けて話すつもりのようなので、俺たちもベッドや椅子など座れる場所に各々腰を下ろして聞く態勢になった。

「シユンたちには黙っていたけど、私は先生に他の転生者について問い詰めたことがありますわ。先生が言うには、エルフの里で保護したのが十一人。俺たちを含む接触に成功したのが八人。残り七人が所在不明って話でした」

その話については、先生と初対面の時に言われたのを少し臆気だが憶えている。

「接触到成功したっていう八人のうち、俺、シユン、フェイ、ユーリ、ユーゴーは確定だ。あとの三人は聞いていません。此処まで大丈夫か？」

「ああ」

「問題は、所在不明の残り七人。そのうち五人は既に死んでいるって話です」

「……そうか」

氷柱を直接体の中に入れられたかのような冷たさが、一瞬全身を突き抜けた。

予想してなかった訳じゃない。

だが、こうして事実を聞くと、堪えるものがある。

断片的な情報からでも、先生が転生者を保護するのに相当な無茶をしているのが分かってたし、それほどの無茶があるという事は、危険もまた大きかったのだと察せられる。

中には当然、間に合わなかった可能性もあるわけで……

「死んだ奴は、林康太、小暮直史、桜崎一成。そして苔森真理と、若葉姫色ですわ」

ユーリが苔森さんのところで、フェイが若葉さんのところで強く反応した。

ユーリの前世、長谷部さんのクラスでの席は俺の隣であり、そこで二人がよく会話していたのがぼんやりとだが浮かぶ。

前世での二人は仲の良い友達のようなだったと、かなり薄れかけだが記憶の片隅に残っていた。

ユーリは目を閉じて静かに手を組む。

それは、亡くなった友達に対して冥福を祈っているのだと、俺でも強く感じ取れた。

そしてフェイの方は唇をキツく結び、形容し難い表情を浮かべていた。

フェイと若葉さんとの間には、浅からぬ因縁がある。

フェイが、若葉さんにイジメに近い事をしていたという、因縁が。

その事について、フェイは生まれ変わってからは自分の行いを悔いていたけど、その相手が既に死んでいたのだと聞き、複雑な感情を抱いているようだった。

「あー、ごめん。なんかちよつと、言葉に出来ない」

フェイが、力無くベッドに倒れ込む。

そんなフェイの様子を見て、俺はカティアにも視線を向ける。

たしか、カティアは前世で若葉さんに告白して玉砕したと記憶しているからだ。

「カティアは、若葉さんのことは……」

「私ですか？ まあ、そりゃショックかな？ けど、なんというか実感が持てないって言うのが、正直なところですよ」

俺たちは転生者の誰かが死ぬところを直接見たわけでは無く、ただ

先生から死んだと伝えられたに過ぎない。

それはつまり、極限まで簡略化された事実のみの言葉でしか無いのだから、実感が湧かないのも当然かもしれないな。

それに、俺たちはこっちの世界で既に前世と同じくらいの時間を過ごしている。

あんまり成長出来てる実感は無いけど、もうそれだけの新しい記憶が積み重なっているのだ。

つまり正直なところ、前世のクラスメイトたちの顔だって臚気でも無い。

仲の良かった連中の事は、それなりに憶えているが、それ以外となると強烈なインパクトのあるエピソードでも無ければ、記憶から忘れかけていた。

死んだ五人のうち、若葉さんと桜崎君とは仲が良かったとは言いが、若葉さんは人の視線を集める容姿だった事で、桜崎君はユーゴーの前世である夏目の幼馴染でお目付け役だった事から、今もなお記憶に残っている。

苔森さんは、隣の席の長谷部さんによく会いに来てから印象に残っているし、ともすれば中学生以下に見える先生並みに小柄な背丈だったのも印象に刻まれていた。

ただ、林君に関してはさして仲が良いわけでも無く、正直言うと既に顔も思い出せない。

すまん、林君。

俺たちは、それぞれ互いに記憶の断片を出し合う事で、交流の無かったクラスメイトたちの事を思い出しながら、話を広げていく。

俺にとっては死んだ五人の中では一番仲が良かった小暮。

かなりの泣き虫で、何かある度に涙を流す癖が付いているようだった小暮について、彼の大哭きエピソードで盛り上がる。

林君は、普段あんまり明るくないのに体育の授業でラケット持った瞬間に性格変わったよなと、みんなして思い出す。

そう言えば、若葉さんは予想外に運動音痴だったよなと体育の話から話題が上がって、フェイもぶすつと不貞腐れた顔だが、若葉さんの

エピソードについて話していく。

そして次は……

「そういえば、苔森さんの事を詳しく知っているのはユーリだよな？」
「うん、そうだよ。自由行動ばかりしていたから誤解されがちだけど、根は真面目な良い子でね。背が小さいのを気にしてたから、それをからかわれると普段とは打って変わって怒ってたなあ」

「ああ、何となく思い出したわ。いたわ、そんなチビっ子」

俺の問いにユーリが答え、それにフェイが今思い出したといった感じにで呟く。

「印象的なエピソードってなると……。あつ、たしか一度、若葉さんに思いっきり抱きついた事があったかも」

「あの若葉さんにか？」

「その若葉さんにだよ。まあ、若葉さんの方は表情一つ変えず無言のまま、少しも相手にされなかったけどね。結局、真理ちゃんはトボトボ帰って来たし、若葉さんも何事も無かったかのように行っちゃったけど」

「なんで、そんな事を」

「うーん？ たしか突然抱きついたら何か反応あるかなって言うってたかも。思いつきで動くことも多かったし、興味があると体が動いちゃうタイプだったから、深い理由は無いと思うな」

苔森さんについてはユーリ以外あまり知らないのです、話は桜崎君のエピソードに移り変わる。

「はあ。いっちゃんが生きてれば、夏目のバカも違ってたかもしれないのにね」

「そうかもな。桜崎君がいないから、ユーゴーもあんなったのか？」

フェイが言ういっちゃんとは、桜崎君のことだろう。

前世から横暴な性格だった夏目のストッパー役であり、唯一あいつに対等で話せる奴だった。

夏目と桜崎君は、二人セットで見られる事が多かった。

その夏目が暴走しそうになると、いつもさりげなく止めに入り問題が大きくなる前に仲裁して、毎度ケンが悪いことしたなって、こつそ

りと謝りに来ては後始末に奔走していたのを憶えている。

もし、桜崎君が今もユーゴーの隣にいたら、未来は変わっていたかもしれない。

「どうしてこうなったんだろう。みんな日本では、それなりに上手くやれてたはずなのにな」

俺の呟きに、カティアが返す。

「異世界に生まれ変わったのですわ。誰だって変わるものさ。ユーゴーは、私たちとは違う方向に変わってしまった。それだけの事なんだよ」

「カティアは……、いや何でも無い」

「私が何ですって、シユン？」

変なところで切ってしまったからか、カティアが俺を覗き込んでくる。

視線が重なり、ドキリとした感覚を覚えた。

「あー。カティアも少しは変わったかもな」

「それだけ？」

「え？」

「それだけかって聞いているんだよ、シユン」

カティアの問いが分からない。

けど、何も言わないのは良くないような気がして。

「……カティアは凄いや。俺では気付かないところも良く見ている」

浮かんだ言葉を、反射的に口に出す。

「大切な親友だ。いつも助けて貰ってる、感謝してるよ」

上手い言葉を見つけられず、所々つかえながら語る。

下げていた視線を戻すと、カティアが少し頬を赤くしつつも不満気な表情。

そして周りを見れば、膨れっ面のユーリと笑いを堪えているフェイの姿が目映った。

「なに、笑ってるんだ？」

カティアがフェイの方を向き、その態度を見咎める。

「いいやー？ あたしはこの件に関しては傍観派ですからー」

ニヤニヤと嘲り笑うフェイに対し、カティアとユーリが冷たく睨む。

「こういう空気になると、俺ではどうすることも出来ないので非常に肩身が狭い。」

「それで？ カティアはこれだけを言いに来たんじゃないだろ？」

雰囲気を変えるべく、話題を逸らす。

既に亡くなっていた五人のことを伝えるだけだったら、態々先生の居ない時間に来る必要は無いのだから。

「そうですね。みんなは、先生の話を何処まで信じていますか？」

やはり、その話か。

「まあ、普通に考えて妄想乙って感じよね」

「私も、先生の事は兎も角、内容までは信用出来ないかな……」

半信半疑といった様子で、フェイとユーリが自分の考えを述べる。

眉を顰めた物憂げな表情なのを見て、そろそろ頃合いなのではと俺は思った。

「俺が話しかかった事も、それなんだ」

常に意識の片隅にあつた禁忌へと、目を向けた。

慣れてきたとはいえ意識を向けた瞬間、濃縮された醜悪さが襲い掛かってくる。

体の内側で、何かが這いずるような悪寒も走り、吐き気が増す。

だが、俺は目を逸らさず受け止める。

世界の再生、星の生命力、管理者、女神、システム。

俺が知った真実。

「ユーリ、まずは落ち着いて聞いてくれ。……俺は禁忌をLV10にした」

みんなの息を呑む音が聞こえ、特にユーリの顔は完全に表情が抜け落ち限界まで瞠目していた。

一瞬ユーリから殺意が噴き上がるが、数秒後には一旦鎮静化する。

「……どういふこと？」

「それを説明するのに、まずは慈悲ってスキルについて話す必要がある」

俺は、慈悲について話す。

支配者スキルの一つ、そして死者蘇生を行えるスキルであること。そしてデメリットで使用する度に、禁忌のレベルが上がる事を説明した。

「じゃあ、王城での治療は……」

「全員即死だった。それを俺が生き還らせた結果、禁忌のスキルがカンストしたんだ」

そして禁忌をカンストさせた事で知ったのは……

「禁忌のスキルの内容は、情報の開示だった。この世界の成り立ちの」俺は、この星が滅びかけている事を説明した。

荒唐無稽であり信じてくれないと思っていたが、みんなは真剣に耳を傾けていた。

滅びかけている原因が、この世界に住んでいた人たちのせいである事。

MAエネルギーと呼ばれるものを浪費したせいで、世界が滅びかけた事。

その代償として、この世界の人々は延々と同じ世界で転生し続け、生前に鍛え上げたステータスやスキルの力を回収され、それを星の再生に回されている事

そして、先生が悪しきように言っていた管理者こそが、俺たちが神言と呼んでいたシステムに、自ら生贄となり世界を救った女神その人である事を。

俺は、一度そこで話を締め括った。

禁忌には他にも沢山の項目があるが、そこまで全部見終わってはいないからだ。

だが、基本的な情報だけでも、これほど重たい内容だった。

「それじゃあ、先生の話は……」

「ああ、嘘塗れだ。正確には、それを教えたであろうエルフが、だけどな」

先生本人は、嘘を言っているつもりは無いだろう。

ただエルフがそう信じているという、客観的な意見を言っていたに

過ぎないのだから。

「なるほどですわ。だから神言教は禁忌のスキル保持者を……」

「この世界の人々にとっては、自らの罪を突き付けられるようなモノだからな。この事実を広めないように、そういう措置にしたんだろ
う」

次の瞬間、今まで黙っていたユーリが勢いよく喋りだす。

その恐ろしいほどの早口な様子は、錯乱一步手前といった状態で

……

「え？ え？ 禁忌持ちは殺さなきゃ？ でも、禁忌を上げたら真実
が？ 嘘？ でもシユン君が嘘つくはずない。なら？ え？」

「ちよ、ユーリ？ あんた、落ち着きなさいよ」

不意にピタリと言葉が止むと、ユーリはおもむろに手袋を外す。

そして、自ら手首に爪を走らせ切り裂いた。

「ユーリ!?! 止血を!?!」

俺は血が出る手首を瞬時に掴み、そのまま無言のまま至近距離で向
かい合う。

傷口をキツく押さえて、強く手首を握り締める。

そのまま治療魔法を発動させて、血が止まったのを確認してから手
を離した。

「止めてくれ、ユーリ。わざとだとしても、誰かが傷つくところは見たく
ない」

「……っ」

ユーリが落ち着いたのを見て、俺は数歩下がる。

「ごめんなさい、シユン君。でも分かった事がある」

一見、平静を取り戻したかのように見えるが、よく見ると瞳が濁っ
たままだった。

そしてユーリは両手を天に伸ばす。

「そう、事実はどうであれ、神様はいらっしゃる！ 神様の声が聞こえ
る！ 私の信仰は、此处にある！ それだけで充分！ ああ、サリエ
ル様！」

「分かった。分かったから、静かに！ 迷惑になるから！」

実際は遮音を施したままなので問題は無いのだが、ユーリを現実に引き戻すために色々理由を付けて説得する。

暴走するユーリを取り抑えるのにカティアやフェイも加わり、信仰心ガンギマリ状態のユーリが正気に戻るまで、結構な時間が掛かった。

一騒動あったが仕切り直し、カティアが俺に向けて問い掛けてきた。

「あー、話を戻そうか、シユン。その禁忌の内容、先生にも言うのですか？」

「ああ。先に三人に説明したけど、実はハイリンスさんや先生にも話そうと思ってた」

俺一人では気付けない視点もあるだろうと、今いない二人にも告げるつもりだった。

実際に、誰かと語り合う事で見えていなかったモノが見えるようになるのは、カティアと一緒に過ごしていた時に、何度もあった事だから。

「ハイリンスさんは良いとして……、先生に話すのは反対ですわ」

「……どうしてだ？」

「まず先生がどう反応するのか読めない事。それに、禁忌の内容を先生に話した事で、予定通りにエルフの里に入れなくなる可能性もありますわ。今まで信じていたものが嘘だと知ったら先生は、ただショックを受けるだけでは済まないでしょう」

たしかにそうだ。

エルフの里への転移陣について知っているのは先生だけだ。

その先生がもし、エルフが嘘をついていたという事実を知ってしまったら、これから向かう場所で騒動が起きる可能性がある。

それが穏便なものであればいいが、そうはならないだろう。

「シユンの話で、世界の仕組みや管理者については理解した。ですが、それでも先生が隠している何かは多すぎます。全てを話すと言いな

がらも、まだ説明されて無い事が多いのだから」

それは、俺も思っていた事でもある。

先生は転生者の情報は意図的に制限しているようだった。

エルフの里で保護されているという転生者、その現状や誰がいるのかなど。

俺たち以外の、エルフの里で保護出来なかった転生者について、殆ど何も聞かされていない。

「先生が私たちに隠しているって事は、それなりに理由があるんだろうと、私も思いたいですわ。けど、現状が現状だ。今は問題を起こしたくない。せめて、保護されている転生者に会うまでは」

カティアの言いたいことは正しい。

たしかに、あとちよつとまで来て、足止めは食らいたくないと思うが……

「フエイとユーリは……」

「あたしも、タイミングが悪いと思うわ」

「それに私たちも、考えを整理する時間が必要じゃないかな」

認識を根底から覆されるような事実の連続だった。

気持ちの整理をつける時間も必要か。

「分かった。今はこの四人だけの秘密にしておこう」

今は、これでいい。

此処で立ち止まっても、答えは出ないだろう。

その鍵を握っていきそうなのが、ユーゴーやソフィアたち、そしてエルフ。

俺たちは、向かわなければならぬ。

ユーゴーたちの真意、ユーゴーたちの手に囚われたスー、エルフの本当の顔。

それらが一点に集う、場所へと。

『——贖え』

頭の中で鳴り止まぬ、呪詛を見詰める。

逃げたいと思った。

死にたいと思った。

自分の感情が制御出来ず、みんなにキツく当たりかけた事もあった。

最初は、罪も無い俺たちが一体何をしたんだと、見当外れな言葉を繰り返す禁忌に強い不快感を覚えた。

だが、今なら思う。

仲間がいる事を知り、みんなが引き上げてくれたから、俺は持ち直したんだ。

ユーゴーたちが動いているように、俺だから、俺たちだからこそ出来る事があるはずだ。

その答えは完全には分からないけど仲間が居るのなら、もう俺は折れたりしない。

甘ったれな俺なりに、出来ることをしよう。

戦うこと、殺すことが、全てでは無いのだと証明しよう。

力無き俺に出来ることは、真実と向き合い対話すること。

それが人間というものなんだと、前世から信じているのだから。

蜘蛛10 システムについて復習しよう

ここ最近の忙しさは尋常じゃない！

まず分体使った諜報でしょ？

大陸各地に散らばるエルフの殲滅でしょ？ それに伴う第十軍の転移でしょ？

急に帝国通る事になったから内部の問題アレコレ片付ける必要が出たでしょ？

王国の方で第三王子とかの蘇生実験でしょ？

仕事が多い！

いやまあ、帝国の方は予想以上に優秀すぎる教皇のせいだけど、王国の事は私が首を突っ込んだ結果、増えた仕事なんだけどね。

コケちゃんが休んでいる間、少しの期間だけ山田君たちの監視を引き受けるつもりだったけど、山田君が慈悲を持っているのなら話は別。

ポティマスに寄生された王国上層部を一掃するだけだった予定を変更して、反乱騒ぎで拘束した第三王子や大島君の両親である公爵夫妻の処刑を発表させた。

そこにOHANASHIした妹ちゃんを使い、洗脳した兵士たちを用意させ準備完了。

私はヒツソリ監視の目だけ配置して、事の顛末を見守った。

当然、それを知った山田君たちは救出に乗り出した。

来て貰わないと困るのはこっちの方なので罾も何も仕掛けて無いのだから、山田君たちは順調に進んで玉座の間へ到着。

そこに山田君たちが突入したら、洗脳された兵士たちが首をスパッですよ。

山田君たちの目の前で、けど絶対に間に合わないタイミングで処刑を実行させ、第三王子、公爵夫妻、ついでにアナとクレベアっていう山田君のメイドやっけてたらしい二人も追加で殺害。

首が無くなった五人に山田君が急いで駆け寄り、予想通りに慈悲を使用した。

次々と、実にあつさり、第三王子たちの蘇生を完了させていく山田君。

そして五人目を蘇生させた次の瞬間、頭を抱えてブツ倒れた。

慈悲の仕様についてはシステム調べている時に知ったから、たぶん禁忌カンストして気絶したんだろうなって思う。

あの情報インストールは、普通耐えられるものじゃないしね。

今回行った実験の目的は色々あるけど、山田君の慈悲の再確認、山田君の禁忌について、そして一番の目的はポティマスに寄生された人物を一度殺して蘇生させたらどうなるのか、だ。

結果から言うと、一回死ねばポティマスの魂を引き剥がす事が出来ると分かった。

システムの設計上、死んだ人間の魂にスキルの影響が残る事は無いつて予想していた訳だけど、それが証明されただけでも充分おつりが来る。

つまりは、先生をポティマスの魔の手から救い出す手段が一つ増えたって訳だ。

そのためには一度殺さないといけないから、最終手段だけだね。

支配解除の術式はコケちゃんが開発しているから、そっちで済むのなら必要無いけれど。

それにしても、人の生き死にだっていうのに、呆気無く覆るものかわ。

神の力は、生死すら操ってみせる。

私には出来ない能力を見せ付けられているようで、なんだか落ち着かないし気に食わない。

このような機能すらも含むシステムを構築したDの途方も無い力の一端のようで、魂に特化したコケちゃんの突き抜けた異能のよう

で。
私の手では届かないモノが、すぐ近くにあるというのが癪に障るのだ。

私も死者蘇生が出来ない訳では無い。

だが、それはシステムというものが存在するこの世界限定での話。全ての魂がシステムに紐付けされているからこそ、私でも蘇生が可能という限定的な力だ。

システムが無い世界では、死者の蘇生なんて私には逆立ちしたって出来っこない。

それなのに、Dは一から作り上げてしまっている。

神になる前から力の上限は見通せなかったけど、神になってからも底は見通せない。

恐ろしいものだわ。

もしかしたらコケちゃんなら、システムの無い世界での蘇生も可能なのではと思っているけど、現状確かめる事は出来ないし、今気にする事では無い。

一刻も早くシステムから解放してあげなければ、コケちゃんが次のシステムに捧げられる生贄になってしまうのだから。

システムを調べていく内に、Dの作った神仰の悪辣さを目にする事になった。

あれは本来神となった瞬間に、システム中枢に縛り付けられる事が確定しているスキルだった。

所持者である魂を、神へと至らせるように調整を施しながら強制的に成長させる、いわゆる制御装置付きの傲慢といった神仰スキル。

ただ、本来素質の無い者が神クラスまで魂を膨らませるのは非常に危険であり、保護されているからこそ魂が破裂しないものの、人格や精神には恐ろしい悪影響が出る事は確実だと思う心までは安全を保障しない、危険すぎる術式構成だった。

普通の魂の持ち主が最終段階まで進めば、魂という器を満たすエネルギーを求めて、ただ殺戮を延々と繰り返す機械のようになっていただろう。

そして最後には、呼び寄せられるままシステムに身を捧げ、新たな歯車となる。

コケちゃんに適性があつたから良いものの、普通なら廃人化してもオカシクない代物だ。

ただ、それは精神面だけでの話であり、本来コケちゃんも神化した瞬間にシステムへと引き寄せられても不思議ではなかった。

それが先送りされたのは、神化した瞬間システムの影響範囲外の宇宙空間にいた事、多分だけど女神が妨害してくれたんじゃないかな。

あまり良い印象の無い女神だけど、そこだけは感謝してやる。

神になって目覚めた時、そこにコケちゃんだけ居なかったら、今の私は無かっただろうから。

自殺なんて以ての外だけど、生きる気力が大きく減っていただろうし。

力を競い合う仲間がいて、正面から私に意見をぶつけてくれる親友がいるからこそ、何も持っていなくて空っぽだった私が、本物で満たされていったのだから。

幾ら力を蓄えても、私一人だけだったらつまらない。

本音で叱ってくれるからこそ、私は人の心というものを知れる。

力と身体、勝利と成功は、自ら手に入れてきた。

でも、心だけは、感情だけは、コケちゃんから分けてもらい一緒に育んだものだ。

生まれ故に、子供のような精神のまま、神様の力を得てしまった存在が私だ。

本当はただの蜘蛛でしかなく、偽りの記憶だけしか持っていなかった私が、得られたモノ。

だから、手放したりしない、逃しはしない。

コケちゃんは私のモノだ。

何処にも行かせやしない。

だからこそ、許せない。

こんな代物コケちゃんに与えたDが、私から親友を奪おうとする世界が。

今はあのメイドさんに出荷されていたDだけど、この星のゴタゴタ全てが終わったら私の気が済むまでボコボコにしてやる。

たとえ無意味だと、勝てないと分かってもだ。

先生をエルフに転生させ、生徒名簿なんて厄ネタ与えた罪状もある

しね。

追加で、あいつドナドナされる最後に私に向かつて、お話の通りに苔さんを妻として迎えるのも面白そうですねとか抜かしやがった。

ふざけんな！ 何がお話じゃない！ お前には渡さんぞ、絶対！

さて気を取り直し、この後王国は内乱状態になったけど、そこは知った事じゃない。

あわよくば山田君が王国内に足留めされればなーって思ったけど、何故かエルフの里に向かうと言いだしたし。

まあ禁忌カンストしたのなら、それを知ってそうな夏目君に向かうか。

山田君たちの相手は夏目君に任せておけば魔王の方には来なそうだし、上手く行けば引き込めるかもしれないからね。

それよりも、優先してやるべき事がある。

システムを解体させる下準備、これを本格的に始めなくちゃならぬい。

私たちの最終目的はシステムをブツ壊し、その時に生じるエネルギーでもって、この崩れかけの世界を再生させる事だ。

そのためには入念な準備が必要で、準備にはシステムの事を細部まで知り尽くす必要があった。

世界の命運、魔王の願い、コケちゃんの命までも懸けた、絶対に失敗出来ない大勝負だからね。

だから準備段階であるにも関わらず、神経質すぎるほど慎重に慎重を重ね、システム専用の分体を作るほどリソースの大半費やしても、本腰入れてシステムの調査を行っていた。

軍団長のお仕事に、分体関連の開発とそれを使った諜報活動。

これらも結構忙しかったけど、第十軍の運営はコケちゃんに任せていたし、分体が調べた情報は報告書担当分体が書き上げて執務室に転送してたから、私はシステムに集中して作業を進められたという訳だ。

それでも休む暇すら無いブラック労働なのは、マジふざけんなって

感じただけだね。

これも、教皇が予定に無い仕事ぶつ込んだせいだし、コケちゃんが倒れて一時抜けたせいだし、システムが難解にも程があるせいだ。

面倒な人付き合いしなくちゃならない第十軍の仕事、ほぼ全部コケちゃんにやってもらっている以上、文句なんてコケちゃんには言えないんだけどね。

まあいいや、今わかっているシステムについて説明しよう。

システムとは、Dが生み出した超巨大魔術である。

その主な効果は、この世界に生きている生物にスキルやステータスやらを付与し、死後それらを回収してエネルギーに変換して、そのエネルギーでもって世界の再生をしているという複雑怪奇で多機能な魔術である。

長い！ でもこれでも要約して分かりやすくしているんだよ？

そもそも何で世界がそんなシステムに頼らざるを得なくなったのかは、禁忌に聞け。

大昔のこの世界の人間が馬鹿やらかしエネルギーを枯渇させるような事をしてかし、その穴埋めのために女神が生贄となったらしい。

それ以上の詳しいことは、私には興味が無い。

知る必要も無いと思っている。

当時を知っている魔王を筆頭にした黒や教皇を見てれば、胸糞悪い上に碌でもない事が起きたんだろうなって、察せるのだから。

過ぎ去った罪の歴史など、不要だ。

私に必要なのは、未来を手繰り寄せるための手段だけでいい。

話を戻して、システムの基本機能の他にDのお遊び機能が、ちよくちよく追加されている。

スキルとか魔物とか、ゲームチックな部分はほぼそれ。

エネルギーを回収するだけならスキルなど無くてもいい。

ただ、魔物の方は微妙なラインかな？

スキルなどがお遊び要素だとしても、それでエネルギーを溜める仕様であるのなら、戦って貰う必要がある。

その相手として用意されたのが魔物、いわゆる敵キャラだ。

ただ、システムが魔物を用意していたのは最初期だけで、あとは自然繁殖で勝手に魔物が増えていったみたい。

魔物を生み出すのにだってエネルギーが必要だし、何もしなくても増えてくれるのなら無駄遣いしなくて済むしね。

結果的に今の魔物は、システムが生み出した魔物の子孫と、元々この世界に生息していた動植物が今の環境に適応したのと、それらが混じったモノとで、もう分類不可能な感じで種類を増やしていた訳。

実際、魔物としてお前それどうなのって奴も多数いるしね。

システムが無かったら、ただの家畜みたいなのだっているし。

システムが現在魔物にしている事と言えば、本能的に人間に襲い掛かるよう刷り込んでいる事と人の手に負えなくなった神話級の魔物を人里以外に誘導させるくらいかな。

人間からしてみれば傍迷惑の上ないけど、戦わなくちゃならないんだからしょうがない。

それに、魔物も食物連鎖に組み込まれているから、今更居なくなっても困るだろう。

そして魔物以外にも、人間同士を争わせる仕様がある。

それこそが、勇者と魔王。

人族と魔族、それぞれの勢力を率いて相争わせる仕組みだ。

どちらも変わった能力が付与される特殊称号で、勇者には魔王への特効効果と勇者剣の使用許可さらに窮地で力を発揮するなんて機能も。

この魔王への特効効果が問題で、どんなに強い魔王だろうと勇者は互角に戦えちゃうんだよね。

互角にさせるために足りないエネルギーは、システムから引っ張ってくる事になる。

エネルギー溜めたい時に、そんな無駄遣いしたくない。

そもそも勇者が残っていたら、普通に魔王の身が危ない。

だからこそ、大戦の時に勇者ユリウスを抹殺し、ついでに勇者っていう仕様そのものをシステムから撤廃すべく、干渉した訳だが……

結果は、見事失敗。

システムの事をかなり調べた上で、ほぼ確実にいけるだろうと判断したのに、この体たらくではシステム関連を任せてくれたコケちゃんに合わせる顔が無い。

だが諦めずに失敗を糧にして、深く理解を進めたところ、システムを掌握するのに重要なのが、元から怪しいとは思っていたけどやはり、支配者スキルが最重要の鍵である事を突き止めた。

これらのスキルはシステムにアクセスするキーとなっている。

支配者スキルを持っていて、禁忌から知ることが出来る支配者権限の確立っていうのを行えば、様々な特典がある。

鑑定の妨害とか、システムに検索を掛けたりだとか。

ただ、そういう特典を使いすぎると魂が摩耗していくため、あまり乱用するのは推奨出来ない。

鑑定の妨害など、ほぼ消費無しなものもあるから、それは何回かお世話になったけどね。

それで、この支配者スキルをキーにして裏メニュー的なものが実行出来るのを、システムを調査している最初期の頃から、既に発見していた。

これは権限確立した時に知れる、出来る事一覧みたいなものにも載っていない事で、私みたいにシステムを詳しく調べなければ知りようが無い機能だった。

その中であつた訳ですよ、システム自壊プログラム。

やっぱりというか、あの性悪のDらしいと言えいいのか……

ご丁寧にやり方の説明書まで付いて存在しているんだから、笑うしか無いよね。

まあ、正攻法以外にもやり方が存在していたのは、僥倖だ。

普通に表メニューでチマチマやってたら、その間にコケちゃんが生贄にさせられるのだから。

それだけは断じて認められない。

許せない、否定する、拒絶する、認めてなるものか。

だが……、それでも私一人ではどうしようもない事がある。

それが、支配者スキル持ちを増やすという事だ。

この自壊プログラム、発動させるには支配者スキル全てのキーが必要なのだ。

そう、すべてのキーが必要！
無理ゲーだろ、こんなの！

だって、現在支配者スキルの幾つかは空位になっているんだもん。さらに言えば、支配者スキル持ちの中に、絶対私たちに協力するはずが無い奴も居る。

そう、ポテイマスだ。

だが、諦める訳にはいかない私は必死に考えて、何とか出来ないか方法を探った。

そうして編み出したのがピッキング。

要は正規の鍵を使えないのなら、裏技的にこじ開けちゃおうという方法だ。

全部の支配者スキル持ちからキーを貰うなんて出来っこ無いし、こうでもなきやシステム自壊の実行なんて不可能だって。

とりあえず、支配者スキルを獲得出来るような人物に目星をつけてマーク。

既に味方側に、魔王の暴食、鬼くんの憤怒、吸血っ子の嫉妬、そしてなんとメラの忍耐がある。

メラが忍耐を獲得したのは驚いた。

だって、支配者スキルって獲得するの、メツチャハードル高いはずなんだけどな。

神化前は、四つ。

叡智も入れたら五つ支配者スキル持ってた私が言っても、その難しさが伝わらないと思うけど。

あと学園の方で、夏目君が山田君のこと逆恨みして殺害を企てた事件が発生。

まあ先生のおかげで未遂に終わり、そこで先生が支配者権限を確立させているのが判明。

持っている支配者スキルは、七美德スキルの救恤だと思われる。

発覚の切っ掛けとなった支配者権限のスキルの消去だけど、あれは

普通なら魂を大きく傷付けて自身もスキルを失ったりステータスが大幅に下がってしまうものだ。

なのに、先生が無事なのは、皮肉にもポティマスに寄生されていたからである。

支配者権限を使った代償で魂を消耗するはずだった先生だけど、その代償がまさか寄生していたポティマスの魂に行き肩代わりさせたのだった。

おかげで、先生に寄生しているポティマスの魂は大幅に弱体化し、無理矢理乗っ取るのは難しくなっただろう。

そしてこの事件は、さらに私たちにとって追い風となった。

夏目君と妹ちゃん、将来支配者スキルを獲得することになる二人を勧誘出来たのだから。

最初は洗脳でもして引き込もうとしたけど、それはコケちゃんに怒られたから止めた。

なんやかんやあって、コケちゃんから強制的に禁忌インストールされた夏目君は、自らの意思で私たちに協力してくれるようになったし、妹ちゃんの方は山田君をダシにすれば脅迫もとい説得に応じてくれたし。

それで獲得したのが、夏目君が傲慢と強欲で、妹ちゃんが色欲と、一気に三つもの支配者スキル所持者が増えたのだった。

実にお買い得。

夏目君は、吸血つ子や鬼くんに匹敵する単騎戦力として短期間で急成長した。

成長チートとして最強スキルである、傲慢と強欲の二つを所持しているんだから、そうなるのは当然といっちゃ当然だ。

私が持ってた自身の魂を急成長させる傲慢、コケちゃんが持ってた他者の魂を取り込む強欲。

強くなるのは道理だろう。

まあ、コケちゃんが居なかつたら、死んでいた可能性には目を瞑る。

たまたま治せる存在がいて、たまたま同じ陣営だったんだから、問題無し、ヨシ！

妹ちゃんが獲得したのは色欲。

その洗脳を使えば色々と悪用出来そうだったけど、コケちゃんが認める訳無く、泣く泣く封印。

まあ、色欲を獲得して効果知った途端、山田君を洗脳して既成事実作ろうとしたんだから、さもありなん。

即押し倒しに行くとか、ないわー。

妹ちゃんをこちらへ引き込む時に、山田君には手を出さないという約束に加え、支配者スキルを獲得したのならお願いを聞いてあげても良いって言ったけど、それは今のところ保留されていた。

なんか、面倒そうなお願いされるんじゃないかってヒヤヒヤしてる。

まあ、役に立ってくれたお礼に、最大限の報酬は用意しよう。

システム崩壊の余波に巻き込まれないようにするくらいは、正当な報酬だろうから。

他にも支配者スキル持ちが居ないか探ったけど、在野には居なかった。

転生者で冒険者やってる田川くんと櫛谷さんらもゲットした様子はないし、実は教皇のところ草間くんという転生者も居たけど、そつちも持っていなかった。

残りの転生者は、エルフの里に纏めて監禁されているし、そんな境遇では支配者スキルなど獲得しようも無いのでスルーだ。

という訳で、現在判明している支配者スキル持ちはこうなる。

傲慢：夏目君。

強欲：夏目君。

暴食：魔王。

嫉妬：吸血つ子。

憤怒：鬼くん。

色欲：妹ちゃん。

怠惰：空位。

謙讓：魔王。

救恤：先生。

節制：教皇。

忍耐：メラ。

慈悲：山田君。

純潔：空位。

勤勉：ポティマス。

十四の内、八つものキーが手元に揃っていた。

空位が二つで、うち以外の陣営が所持しているのが四つ。

半数のキーを確保出来たのは大きいけど、これ以上は限界だろう。

ごく最近に知ったことだが、魔王が謙譲なんて獲得していたのは驚いた。

まあ、獲得した経緯はどうでもいい。

要はキーが増えた、それだけ分かればいいのだから。

あとはピッキングで何とかするしか無いだろう。

その難易度は、支配者スキルの状態で変わってくるようで、権限確立済み〓権限未確立〓空位といった順番で難易度が高くなる。

最難関なのは、勤勉と節制と救恤の三つ。

ただ、山田君が禁忌カンストさせたから慈悲も権限確立されそうなのが怖い。

そうになると、途中で難易度が上がる可能性があり、慈悲のピッキングを最初からやり直す羽目になりそうだった。

ポティマスぶつ殺して空位にさせる予定の勤勉、説得させるチャンスがありそうな先生の救恤は後回しにして、先にピッキングするのは権限が未確定な慈悲か、どうしようもなさそうな節制か。

先に節制か。

やろうとしている事を考えれば教皇が賛成するはずも無いし、味方にならないのならこじ開けるしか無い、そして空位の二つも。

これ以上粘っても、うちの陣営の誰かが取る事は無さそうだし、他のところに取られる可能性の方が高いだろうから。

それに、吸血つ子や鬼くんのような、既に支配者スキル持ちの味方が死ねば、再び支配者の座は空位になってしまう。

なら、そうなる前に今ある分だけでも、開けっ放しにしておくべき

だろう。

結構長くなったから、とりあえず此処まで。

一応、コケちゃんや魔王に報連相してから、システム中枢へ作業に行くとしますか。

そして私は、エルフの里へ行軍している馬車の中に居るであろう、二人の元へ転移した。

蜘蛛11 システムに喧嘩を売ろう

「という訳で、私はちよつとその作業をこなしに行つてくる」

「んー。それはいつも通りに、システム関連分体とやらに任せておく事は出来ないの?」

「流石にピッキングとなれば、また防衛機構とやらが作動しちゃうのでは? だから白ちゃん本人が行かないといけないのだと思う」

「ああ、なるほど」

報連相は大事という事で、システム中枢へ出発する前にコケちゃん
と魔王に会いに来た訳だが、何かよく分からないけれど二人から引き
留められていた。

場所は、馬車ならぬ蜘蛛車の中。

アークタラテクトの背中に籠が乗っているという、色んな意味で豪華な乗り物だ。

蜘蛛の魔物を眷属としている魔王だからこそだが、危険度Sランク
の魔物を足に使うだなんて、普通じゃあり得ないからメツチャ目立つ
んだよなー。

これとかのせいで、一応鎧とか見た目とかを偽装してあるとはい
え、こちら魔族軍が尋常な軍団では無いつてのがバレバレなんだよ
ね。

魔族つて魔族語使つて話すし、それ聞かれたら一発アウトだし……

うわ……、うちの偽装、下手すぎ?

「そんな理由。迎撃するのに本体が別の場所では対処出来ないし、リ
スキー過ぎる」

「そうかー」

まあ、魔王が引き留めたい気持ちも分かる。

転移はコケちゃんでも出来るけど私ほどの即応力がある訳では無
いし、敵の情報をいち早く察知出来る諜報能力は、私の専売特許だ。

情報が停滞してしまえば、幾ら転移という切り札を持っていても先
手を打つことが出来ないし、私の重要性はトップクラスだろう。

ははっ! 自分の有能さがコワイワ。

「白ちゃん……、またアホな事考えているでしょ？」

「深夜テンションつて感じかな……、これ」

心外だなー。

「ソナナコトナイヨー」

「白ちゃんがそう言うときは、大抵凶星を指された時だよね」

「ソナナコトナイヨー」

「うん、間違い無いよ。だいぶキテますね」

魔王とコケちゃん、二人して肩を竦める。

むう、最高にノリノリなのに。

「……」

「今度は、白ちゃんが休む番だよ」

とか、思っていたら何故か魔王に引つ張られた。

そして、されるがままでいたら、体勢を横にされ魔王が作り出した糸でモコモコ状態にされた。

糸が綿みたいな弾力のある形状になっていて、それで全身を包まれているという。

そこで、気が付くと乗り物の中には、コケちゃんのフカフカな苔のクッションが敷き詰められているし、なんか如何にも寝るには最適な環境が整えられていた。

「先に休ませて貰ったのだし、今は私に任せておいて」

「行くのは明日にしときな。今日はそこで寝ること」

寝るの？ この状態で？

いや、たしかに寝心地は良さそうなんだけどさ。

「白ちゃん、自分では気付いて無いかもだけど、すっごい疲れた顔してるよ」

「マジか」

「おおマジです、白ちゃん。見た目は誤魔化せても、雰囲気に出ているのだからバレバレだよ」

顔に出たか。

神でも肉体があるのだから、疲れもする。

魔術で状態を戻せたとしても、細かな疲労は溜まっていたのか。

「でも。あんま時間無いし……」

「疲れてボーっとして失敗する方が危ないって」

正論！

「白ちゃんだって、本当は休んだ方が良いって思っていない？ 少し休んだほうが良いよ」

確かに少しは思ってた！

急がば回れって言うし、疲れた状態で事を急いでも、効率は悪いし上手くいかないって言われているからなー、仕方無いかー。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「うん。分体とかも必要最低限だけ残して、あとは全部休息させな」

「ええ……」

それやっちゃうと、世界中の監視網が一時的にストップするんだけど。

「エルフの里や、シュレインら勇者たちの監視など、重要な場所は私が見ておくから」

「返事は？」

「……はい」

なんか、今日のコケちゃんと魔王は強引だなあ。

これは逃げてても無駄な気がするぞ。

そうすると、今度こそ絶対寝かせるべく甘やかされるだろうし、泣かれるかもしれない。

そんなの恥ずかしいし、気まずいんですけど!?

「……私もさ、白ちゃんたちに頼り切っちゃってる自覚はあるんだよ。だからさ、その白ちゃんがこんだけ疲れているのを見ちゃうと。休んで欲しいって思うわけ」

なんか、魔王が自己嫌悪に陥っているような表情で言ってきた。

そして今度はコケちゃんが悲痛な顔で。

「私だって、友達が辛そうなのは嫌だって思うから。それが私のためだと分かると、尚更ね……」

……辛いのは、そっちでしように。

死にそうなんだよ、消えてしまっそうなんだよ、もう時間が無いっ

て分かってるのに。

もつと嘆いてよ、もつと憤ってよ。

でないと、私が悲しめないじゃん。

「……私は好きでやってるんだから。コケちゃんのためでも魔王のためでも無い、私のために自ら選んだ道なんだから。誰のためでも無い、だからそんな顔しないでよ」

少し嘘をつく。

今は自分の意思で選んだ道だけど、その原点には二人の存在が居るのだから。

私の行動は、恩を受けた誰かのためにある。

「ごめん、じゃないな。こういう時はありがとうって言うべきか」

「……うん、そうだね。まだ、泣くのは早いよね。今は笑うべきだよね」

コケちゃんと魔王は、微笑みを浮かべる。

「そうそう」

「全部終わったらす、もう一回ありがとうって改めて言いたいんだ。だから、その前にブツ倒れないでよ?」

「OKボス!」

「コケちゃんもね」

「え……。うん、分かりました。約束、ですよね」

「そう、約束。破っちゃダメだからね」

約束、かあ。

そのためにも、今はしっかりと寝ようか。

それじゃあ、おやすみ……

「……寝ちゃいましたね」

「そうだねー。こうして無防備に寝てる姿は、久々に見るよ」

「力を取り戻してから、寝ているところは見ていないかも」

「それはコケちゃんにも当て嵌まるからね」

「うつ……」

「ほんとは、ぐーたらするのが好きなくせに」

「分かります。必要無いのなら、トコトン気が抜けちゃうのが白ちゃんですから」

「ふふつ、昔にそんな奴が居たから、よく分かるよ」

「……もう少しなんです」

「もう少し?」

「勝つにしろ負けるにしろ、エルフの里での事が終われば、最終段階に進めなくちゃならない」

「そこまで、時間は無いの?」

「はい」

「そつか……、勝とうね」

「勿論です」

「私はさ……、もっと力になりたいんだ」

「うん?」

「コケちゃんや白ちゃん、それにソフィアちゃんやラーズくんにユーゴーくんは本来部外者だったんだよ。それなのに色々押し付けてるようで、心苦しかったんだ」

「でも、私たちは……」

「知ってる、自ら選んで来てくれたって。でもさ、甘えたく無いんだよ」

「……」

「強くなった。いつかポティマスを倒せるように、世界を救えるようにって長い時を生きてきた」

「……はい」

「けどさ、それでも二人の手伝いは出来ないんだ。だから出来る事を精一杯したい」

「充分、アリエルさんは頑張っていますよ」

「ありがとう。でも、それが最低限のお返しだと思うんだ」

「そんなことは……」

「あるんだよ。そして成功させる事こそが、みんなに対する最大の感

謝になる」

「……」

「だからさ、祝おう。世界を救った後に、みんな一緒にさ。誰一人欠ける事無くね」

「……あは。きつと楽しい時間でしようね」

「そうだよ、最高に楽しい時間にしようよ。滅びかけの世界を救った英雄たちは盛大な祝宴の中でハッピーエンドってね」

「なら、負けられませんね」

「そうだね、でも無茶ばかりかしちゃダメだよ。一人でも欠けたら、それは幸せな終わりにならないのだから」

「……憶えときます」

「うむ」

おはよう！ ございますっ!!

なんか恥ずかしい会話されてた気がするけど、全部気のせいだと思うことにしよう。

そうしよう。

でもまあ、もこもこの寝心地でスッキリ疲れが取れました。

「おはよう」

「おはよう、白ちゃん」

もこもこから這い出す、あれコケちゃんは？

「コケちゃんはそっち。集中してるみたいで反応も無いし、ずっと何か書き込んでいるんだよ」

見ると、例の怪しげな本を開いて、そこに魔術を使って真剣に何かの術式を書き込み続けているコケちゃんが居た。

なんか瞳も青白く輝いているし、全力戦闘の一手手前な状態になっていた。

コケちゃんの全力戦闘状態は分かりやすく目立つからなあ。

白い花飾りが、光輪に変化するでしょ。

光の翹を展開するでしょ。

それで瞳の色が変わる。

メツチャ神々しくも目に悪い感じで眩しいんだよ、コケちゃん。

とりあえず挨拶だけしとこーかなって思ってたけど、どうするか。

「……うん？ 起きたの、白ちゃん？」

「ああ、うん」

とか考えている内に、コケちゃんが顔を上げる。

すると、瞳の色も戻って灰色になり、僅かに漏れ出ていた気配も静まっっていく。

「あー、何してたの？」

「ある魔術を作っていてね。これは己の本質、魂に直結した大掛かりで複雑な魔術となるのかな」

本を一旦閉じると、コケちゃんは背表紙を撫でる。

そして、そのまま話し続ける。

「もしこれが完成していれば、きっと役に立つと思うから。効果は完全には確定していないけど、あと一歩のところまで来ているし、エルフの里に到着する直前あたりには出来上がると思う」

ふと、思いついたといった様子で、コケちゃん本を指で叩く。

「そうだ、途中だけど術式を見てみて」

トントントンとエネルギーを軽く込めて本を叩けば、空中に魔術陣が展開された。

その異次元的な情報量の密度に、軽く目眩がした。

なんだこれ、複雑すぎて読めん。

一種の圧縮言語みたいになってるせいで、そこに複数の意味が幾重に折り重なって書き込まれているのは分かるけど、その一つ一つの意味までは完全には理解出来ない。

刻まれている術式の数も桁違いで、巨大過ぎる基礎部分から細かな制御術式らしきものまで常識外れであり、見えるけど理解出来ないとはこういう事を言うのでは無いかと思った。

これ、もしかしたらシステムより難解かもしれんぞ。

魔王なんか、顔ポカーンとしてるぞ。

なんつーもん見せるんだ、コケちゃんは。

「どうかな」

「うん、無理読めん。全く分からん」

「え」

「え、じゃないんだよなー！」

コケちゃんも、大概異常だったのを再確認したわ。

「あー、うん。そうだ、これ必要でしょ」

「うん？」

理解を諦めた魔王が、何かを手渡される。

ああ、これは必要だわ。

「キーは必要でしょ？」

「ありがとう。助かる」

「助けられてるのはこっちだからね。気にしないで」

魔王から謙譲のキーを受け取る。

「そういや、まだ受け取ってなかったな。」

「……ゴホン。そうだ白ちゃん、大鎌は持った？」

「あー」

「戦う事になるのだから、武器は持っていくべきだよ」

「そういえば、そんなのあったなー。」

「なんて思っていると、すぐ近くでゴドツという重い音が。」

顔を向ければ、白い大鎌がそこにあった。

「さっきまで何も無かったよな？」

「しかも、私は呼び寄せてないし。」

私の体の一部を使い、一緒に神化したとも言える、この大鎌。

この大鎌は私の意思に関係無く、勝手に動かし勝手に何かやらかすんだよなー。

「イヤ、何かやらかす時は大抵役に立つ時とか、私の身に危険が迫った時とか、手元から離れた時に転移して戻ってくるのかなんだけどね。」

「なんか大鎌から、怒ってるようなオーラが感じられる。」

「悪かったって、忘れてて。」

「白ちゃんの大鎌も、私の本のように対話すべきだよ」
「対話？」

大鎌は私の半身みたいなもんだけど、対話ってどうすりゃいいのや。

意思があるっばいけど、会話なんて出来んぞ？

「語りかけるのは基本だけど、そうだね……。まずはエネルギーを流して自身と大鎌を同調させてみるのが最初かな」

「なんか、そんな漫画あったな……。共鳴だっけ……」

手を伸ばして拾い上げ、軽くエネルギーを流してみる。

すると、物凄く膨大な量のエネルギー流し返された。

「むぐっ!？」

「エネルギーを浸透させ循環させるのは基本技能だよ。習熟するには時間が無いと思うけど……」

「いや、モノにしてみせる」

それに流し返されて分かった事がある。

コイツ中身、じゃじゃ馬のクソガキだッ!

めっちゃ憎たらしいドヤ顔してるイメージが見えた。

わからせねば。

オマエが下で、私が上だッ!

「ぐぬぬ……」

「白ちゃんや、白ちゃんや。行かないのかい？」

「はっー!」

そうだった!

こんな事してる場合じゃねえ!

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい。気を付けてね」

「こつちの事は心配しないで行ってきて」

魔王とコケちゃん、二人から見送りの言葉を掛けられる。

……なんか、今の会話、家族っばいな。

ちよつと照れる。

誤魔化すように、慌てて転移を実行。

そして私は、システム中枢へと移動した。

幾何学模様を描いた巨大な魔術陣が、この空間一面に広がっている。

床、壁、天井、それぞれ隙間無く刻まれ発光している空間は、幻想的な光景を作り出していた。

そして、その中心には、下半身が空間に溶けるようにして消えている、まるで魔術陣に宙吊りにされて縛られているかのような姿の女性。

女神サリエル。

システムの核として生贄としてこの世界に捧げられた、魔王が「お母さん」と呼んだ大切な人。

『熟練度が一定に達しました』

『熟練度が一定に達しました』

『熟練度が一定に達しました』

口も動いていないにも関わらず、この空間内に不協和音のように折り重なって響く声。

神言教が神の声として崇める、システムからのメッセージ。

此処に来ると、不快感が凄くて気分が悪い。

それは、過去の人間たちの身勝手さが透けて見えたりする事か。

あるいは魔王からあれほど慕われ救われる事を望まれながらも、本人は救いを望んでいないかのような女神に対するものなのか、あるいは……

「……なんか、少し似てるんだよな」

差異はある。

けど、何となく顔の作りがコケちゃん和被るんだよなあ。

女神を幼くして、色とかパーツの微調整を行えば、コケちゃんのように見えるかもしれない。

だからなのかな。

救われるのを拒絶する女神が、気に食わないのは。

「……」

頭を軽く振って雑念を振り払う。

目的は、女神の顔を見る事じゃない。

幻想的な空間の中に、ポツポツと白い蜘蛛の姿が見える。

私のシステム関連分体たちだ。

その分体たちは、既に準備完了して待機している。

女神を中心にして、壁に十四の目立つ魔術陣がある。

その魔術陣が、鍵穴だ。

支配者スキルのキーをそこに差し込んでいけば、ロックを解除出来る。

まずは、正規のキーを手に入れている八つのロックを解除する。

此処までは正当な手段でロックを解除したから、問題無し。

本番はこれからだ。

システム関連分体を動かし、空位になっている支配者スキルと対応している魔術陣に接触する。

ピッキングの時間だ。

『異常検知』

それを遮るような鋭い声。

その声は、不協和音のように空間に響いていたものとは異なり、ハッキリと女神の口が動いて、直接発せられた声だった。

『外部からの干渉を確認。防衛機構発動』

……やっぱ、こうなるよね。

女神の周囲にエネルギーが集まっていく。

防衛機構が発動するのだろう。

まあ、以前勇者の機能を撤廃させようとした時に、一度見た内容だ。それと変わらないのなら、出てくるのは……

真っ黒な、かろうじて人影だと分かるようなシルエット、それが十人現れた。

一見無個性に見えるが、よく見れば細かな差異がある。そんな人影が無言で佇む。

『排除開始』

人影が唐突に動き出す。

恐ろしいスピードで突っ込んできた人影がいるが、それを余裕持つて避ける。

既にタネは割れてんだよ！

大鎌を構えて、私も走り出す。

最優先は、蘇生人影とヒーラー人影！

それを狙って空間遮断という空間そのものを分割させる魔術で、切り裂く。

対処するには私と同等以上の空間能力で抵抗するか、避けるしかない技だ。

だが、効果を発揮する前に霧散した。

盾を構えた人影、結界を張っている人影の二人掛かりで妨害されたからだ。

まじかー。

空間遮断なら、防御力も関係無しに、標的だけを仕留められると思っただけだ。

現実には、防がれた。

どうやら原理的には、龍が持つ魔法阻害効果と一緒だ。

この阻害とは、構築に干渉して効果を下げる仕組みであり、実は魔術でも影響を受ける。

だから、理論上は魔法阻害が出来るスキルであれば、私の魔術も妨害出来る。

それでも、要求される出力は相当であり、普通は防げないはずなんだけどなー。

まあ、いいや。

他の邪魔者を一気に片付けて、大鎌で仕留めてみよう。

大戦の時、目を温存出来たから、こんな事も出来るのだ。

空間遮断、十連！

各邪眼でロックオンした人影が一斉に切り刻まれる。

そして刻まれた人影らは、体を両断されてバラバラになり崩れ落ち

た。

どうよ、このマルチロック防御無視攻撃は！

残るは、盾人影、結界人影、蘇生人影、ヒーラー人影の四人だけだ。蘇生される前に、急いで仕留める！

私は空間を蹴って、音の壁をブチ抜きながら呐喊する。

そして漆黒のオーラを纏った大鎌が、結界ごと蘇生人影を斬り裂いて消滅させた。

ふはは！

腐蝕属性は、即死プラス体も塵すら残さず消滅させるという、超危険属性なのだ！

喰らったら抵抗出来ずに消え去るのみよ。

実際、私でも危ないほどなんだし。

……これなら、最初から大鎌で斬っていた方が早かったか？

やっぱチート武器だわ、大鎌。

使えば何でも消し飛ばしちゃうから過剰火力だし、最近は使う機会すらも無かったけど、改めて強すぎないかと認識する。

なんかもつと褒めろって思念が聞こえた。

ウンウンスゴイネー。

でも戦闘中は、黙ってる。

メツチャうるせえ。

残る人影も、一閃、二閃と繰り返し、ものの数分で人影は全て片付いた。

蘇生人影に蘇生される前に瞬殺出来たのが、上手くいった要因かな。

「ほい、サクッと人影撃破」

事前に相手の手札が分かかっていて、尚且最強武器も装備していれば、どんな高難易度ミッションだろうと楽勝ってね。

人影を撃破し終えて、やられたシステム関連分体を数えている時に、その声は聞こえた。

『危険度を格上げ』

『緊急防衛機構を発動』

『対抗策を検索』

『検索完了。初代叡智の支配者、初代神仰の支配者の複製体を創造』
『排除開始』

高密度のエネルギーが再度結集して現れたのは、全て暗黒に染め上げられた、巨大な蜘蛛の体に人の上半身を生やした異形の人影と、宙に浮かび四枚の翅を羽撃かせる小さな人影の二つだった。

「……うえっ!?! 嘘でしょ!?! そりゃ無いって!?!?」

まさか!

これって!

そして私は、再び戦闘に突入した。

今度の相手は、過去の自分たちだ。

蜘蛛12 かつての自分たちと戦おう

うおおお!?

ちよ、危なッ!?

敵に回ると、こうもヤバかったのか!

私は、必死になって二つの人影が撒き散らす猛攻から避け続けた。た。

地上からは、蜘蛛脚の人影が縦横無尽に跳ね回り、正確無比な暗黒の槍と空間歪曲が、見惚れるような精密さと苛烈さを併せ持つて、容赦無く襲い掛かってくる。

そしてシステム中枢という限定された空間において、天井付近ギリギリを目にも留まらぬ速さで飛翔するのは翅を有する小さな人影であり、その人影は狙撃手のように一瞬たりとも同じ場所には留まらず、死の気配纏う魔弾を全て異なる軌道で先読みしているかのように撃ち込んできていた。

暗黒槍は相殺か空間遮断の防壁で防ぎ、空間歪曲は支配される前に干渉してやる事で潰す。

そして、宙の人影から飛んでくる死滅の魔弾は、同じ属性の大鎌で切り払うか空間遮断で絶対に生身では受けないようにして、なんとか致命を避けていた。

うがああッ!

一旦、仕切り直しだ!

自分の周囲の空間を遮断し、立方体の箱の中に収まっているかのようなバリア的なモノを形成。

空間遮断を応用した、即席の避難場所を作り上げた。

……ふう。

一度深呼吸して、気持ちを落ち着かせよう。

この空間遮断は、効果範囲の空間そのものが外部の影響を一切受けつけない空間へと作り変える魔術だ。

そのため、物理でも魔法でも基本的に破壊するのは不可能。

遮断に巻き込まれた物体も原子単位で繋がりを絶たれ、物理的な強

度では絶対防げない切断能力を發揮出来る。

外から解除するには、私と同じく空間魔術に精通していなければ不可能だ。

ただし、発動前に妨害されると脆い、完全に光とか音も遮断しちゃうため見た目が真つ黒だし、一分の隙間すら無く覆っちゃうと私も向こうを認識出来なくなっちゃうという欠点があるけど。

それでも、ほぼ全ての攻撃を防げる無敵のバリアとして使えるのだ。

とりあえず、時間を稼げた。

外部から空間干渉を受けているのが分かるが、二人掛かりであろうと、今の私の支配力を越えて空間遮断の防壁を崩すのは並大抵の事では無いので、考えるには充分な時間がある。

その間に、情報を整理しよう。

新たに出現した人影は女神が告げた内容が正しければ、私とコケちゃん、それも神化する寸前のスペックを再現して現出していた。

アラクネ時代の私。

マステマ時代のコケちゃん。

それぞれの人影については、半人半蜘蛛のを偽私、翅持ちのを偽コケちゃんと呼称しよう。

その偽者たちだけど、尋常じゃなく強い。

そりゃあ、荒野でUFO相手にしてた頃の状態を参照しているとすれば、私もコケちゃんも当時平均ステータス四万から五万はあったと思う。

神になってからというものの、能力的にはアラクネ時代よりも相当高くなっただけ、必要無いと切り捨てたモノも多いし、再現出来ない能力もある。

ぶっちゃけると使える手札を減らして、より強力な一部の能力に特化した感じだ。

その筆頭が空間魔術であり、あとは邪眼とか闇や腐蝕属性など。

ステータス的には然程変わってないので、今の私もステータス換算で五万から六万程度であり、それと少し下くらいのステータスで並ば

れているので、身体能力で差が無くなった。

さつきまでの人影は吸血つ子や鬼くんクラスの大体二万いかない程度だったので、余裕を持って対処出来ていたけど、偽私や偽コケちゃん相手となると一瞬の隙が命取りになる。

さて、どうするか。

能力については、粗方目星が付いている。

過去の自分たちだからね、手の内は知り尽くしていると言ってもいい。

まず偽私。

暗黒魔法と次元魔法、それに死滅を含む邪眼各種を取り揃え、近接戦闘では大鎌と蜘蛛の前脚で迎撃するのも逆に攻めに回るのも可能な、遠近万能なオールラウンダー。

さらに糸を使った戦術も可能であり、罠のように張り巡らせて動きを制限してくるだろう。

次元魔法の練度も高く、短距離転移を駆使してくるし、こちらの空間支配にも逆らってくる。

深淵魔法や腐蝕攻撃など即死級の攻撃も完備しており、致命傷を負っても欠片さえ残っていれば忍耐や不死やらで死なず、脳さえ残っていれば奇跡魔法で瞬時に復活してくる。

わぁーお。

昔の自分ではあるけど、なんてチート。

こんな奴に襲われた魔王の気持ち少し分かるわ。

戦いたくねえ。

過去の自分一人だけでも厄介なのに、それと同等クラスの化物が、もう一人いるんだよなー。

それが偽コケちゃん。

幅広い属性の上位魔法を操り、状態異常や魔法妨害を引き起こす鱗粉、非力であるものの攻撃を受け流して守りに徹する旗杖の棒術など、徹底して遠距離からのヒット・アンド・アウェイを狙うスピードスター。

その旗杖に腐蝕属性を溜め込み、腐蝕弾として狙撃する危険過ぎる

遠距離攻撃も持つてる。

そんな劇物を短いスパンで乱射しながら、近接攻撃の届かない空中を四枚の翅で高速飛翔して、決して敵を自らに寄せ付けない。

さらにこちらでも不死や奇跡魔法を所持しているので、耐久性能は折り紙付きだ。

片方が粉々になるまで負傷しても、お互いに再生させる事が出来るだろう。

こつちも大概ヤバイですなー。

なんだよ、腐蝕弾って。

しかも神速の如き速さで空中を移動するから、座標が目まぐるしく変化して空間魔術で狙い撃つのも難しいときた。

やりづらい。

こんなもの、システムを守るための防衛機構だとしても、過剰戦力にも程がある。

ほんと冗談じゃないっての。

これクリアさせる気無いだろD。

魔王ですら、配下の人形蜘蛛を連れてきても勝率は微々たるものだろう。

システム範囲内の強さでは、奇跡を幾多も重ねなければ攻略は、まず不可能。

不正やらかそうとした相手に対するお仕置きだとしても、宥赦が無さ過ぎる。

まあ、どんな障害だろうと、私は乗り越えるしか無いけどね。

負けられないんだ、勝利を寄せせ。

とは言え、どうしたもんかなあ……

こちらの手札である、空間遮断や腐蝕属性は、あんまり効果が薄いんだよね。

偽私も偽コケちゃんも、空間感知や干渉能力を持っている上に腐蝕耐性も相当高いと思うから、イマイチ有効打にはなりそうにも無い。

こちらの攻撃手段が完全に潰されてる……

先の人影で事前対策して速攻で撃破したとはいえ、逆にメタ張られ

るのは想定外だつてば。

ここで解禁するつもりは無かったけど、……使うか？

あれもシステムという魔術の産物だろうし、効果は確実にあるだろう。

ただなあ……、ギユリギユリに見られる事は無さそうだけど、この場所でエネルギーを奪う魔術なんて使いたく無いんだよなあ。

この偽者たちを作るのに、どれだけエネルギーが消費されたか分かったもんじやない。

それを欠片も還元せずに吸収してしまえば、予定してた計画に支障をきたしそうだ。

うーん……、ん？

お前、なんか策でもあんの？

大鎌から思念が伝わる。

それに拠ると、あの程度の無効化なら突破出来ると言う。

ただ、発動するにはもつと同調した上で、溜めがいるらしいが……

「ダメでもともと。それでいくか」

試せる事は出し尽くしてから、切り札を使うとしよう。

情報分析や分体に割いていた思考リソースを、戦闘用に比重を傾けていく。

ちよつとばかり集中して、本気出すとしようか。

空間支配を広げる事で周囲の状況を把握し、空間遮断のバリア内から短距離転移で抜け出す。

すぐに、私の存在を感じた偽者たちが標的を変えて動き出した。

再び繰り返される激戦。

限られた空間を四方八方に駆け回りながら、互いに遠距離を保つまま魔術や魔法を撃ち合う、超常の力で成される銃撃戦の中で舞い踊る。

偽私の暗黒魔法の掃射と、その合間に挟まれる歪曲の邪眼を弾き返す。

偽コケちゃんの対処しづらい死角から襲い来る狙撃を、空間遮断で確実に防ぐ。

その中で私は、偽者たちの攻撃を片手で防ぎながら、もう片方の手にある大鎌と深く同調を開始していた。

お前は、私の半身だよな？

——その通りだよと、大鎌が答える。

私が神化した際に巻き込まれて変質した、この大鎌。白くて清廉な優美さに反して、司る概念は悍ましいほどエグイもの。

半身と言える存在であるが、私とは分離した別存在である大鎌の力を、完全に引き出せるとは口が裂けても言えなかった。

手に持てばドス黒く不気味なオーラを纏うが、ただそれだけだ。

私自身の力で制御出来てる訳じゃないし、勝手に大鎌がやっている事では無いのだ。

その力に、手を伸ばす。

大鎌の柄を握る手のひらが、ズリズリと皮膚が重い火傷を負ったかのように痛みを訴える。

いや、実際に手のひらの皮膚は消失しているだろう。

腐蝕属性とは、そんな力だ。

自らを滅ぼす力で以って外敵を滅ぼす、万象死滅の呪詛。

死の崩壊を司るとは、良く言ったものだ。

死で、死を制する。

これの大本であるDが、死そのものが溢れかえっていると形容するほど、禍々しい気配の片鱗を見せていたのも納得できよう。

これでも本来の力からは大幅に弱体化しているんだと容易に想像出来るほど、オリジナルであるD本人が持つ力の格は、途方も無いものだった。

その切れ端でしか無い力ですら、私は満足に扱えていない。

死滅の邪眼を再現出来たのは良いものの、使えば眼球に深刻なダメージが行き、一点の曇りすら無いほど完璧に再生が済むまで、他の邪眼を使用するのを控えなければならぬ欠陥品だ。

でも、本来なら反動で眼どころか脳まで消滅しかねないものを、その程度のリスクで使っているのは、努力の賜物である。

えっへん。

まあ、それは置いて。

「ぶっつけ本番で、引き出して見せるさ……ッ」

難しい？ 満足に使えない？

知ったことか！ どんな困難だろうと関係無い！

いつだって、蜘蛛として生まれた始めの頃は、限られた手札を如何に使うか考え続けてたんだ、今になって出来ませんなど、言ってるか！

「お前は私で、私はお前なんだろう？ 同じだと言うなら、考えてる事分かるよなあッ!!」

想いを燃やせ。

願いを込めろ。

激情を糧に、私の本質と大鎌が結びつきを強くし、撚り合わさっていく。

——答える意思是、そうだもつとだ！ と叫ぶ声。

飛来した腐蝕の魔弾を大鎌で切り払う。

さつきまでは大鎌のオーラと対消滅するような消え方をしていたのに、今では腐蝕弾そのものを喰らい尽くすように大鎌が吸収した。

そして偽私が幾重にも展開させ、削り殺そうと押し寄せる魔法すらも、暗黒の刃に呑み込まれて死滅していく。

刃に触れたモノ全てを崩壊させエネルギーとする事で腐蝕の力が凝縮していく。

分かるよな？

私の怒り、哀しみが。

理不尽に抗う力を寄越せ、絶望の未来を払う力を寄越せ。

死で以って、この世の不条理全てを殺してみせろ！

——おおーッ!!

「うおらああああアアアアアッ!!」

滾る感情全て、大鎌の刃として顕現させてやる。

コケちゃんのやり方が感染ったのか、心に浮かんだ言葉を高らかに謳い上げる。

「《死滅鎌理——》『イイ!!』」

瞬間、大鎌が覚醒める。

白い持ち手は、より穢れすら無き純白の枝へ。

大鎌の刃は、光すら呑み込む暗黒天体の如き闇の処刑刀へ。

私が望み描いた未来のために、世界も神すらも殺して見せようと狂い啼く、死滅の理で編まれた反逆と縁の刃が創造された。

死によって滅ぼし、連なる理すらも斬り裂いて紡ぎ直し、絶望の未来を拒絶する。

暗黒を帯びる逆襲の波動が、私の周囲を支配していった。

それに対し、何一つ慌てるような反応すらも見せず、淡々と排除行動を繰り返す偽者たち。

何度も繰り返された致命を帯びる攻撃に対し、私は大鎌を一閃するだけ。

たったそれだけで、全ての攻撃が死滅した。

道理も因果も無視して、自らに不都合なモノは全て無かった事になつた。

あり得ない、だが現実として結果が此処にある。

私が支配している空間では、因果律そのものから事象を拒絶されて消滅するのだと、先の一振りで理解した。

それを見て私は、戦闘中だというのに溢れ出る気持ちを抑え込めなかつた。

え、やばくね？ 私の時代来ちゃう？

おっほー、全能感が超気持ちいい!!!

この世全てを手中に収めているかのような感覚は、まともに探知を使えるようになった時よりも凄まじく強力な快感となって、全身を駆け巡っていた。

まさしく神となつたよう。

単にエネルギーが多いだけの生物って訳ではなく、絶対的な存在として君臨している昂揚感は、狭い支配領域だけでの話であらうとも、陶酔に溺れるには充分過ぎた。

ああ、病みつきになりそう……

だが、そんなに長く持つ力でも無いのも、理解していた。未だ、私たちの偽者は健在だ。

なら制限時間内に終わらせなければ、何のための覚醒だろうか。

「さあて、行くぞー」

今度こそ、逃しはしない。

無駄だと分かっているのか、同じような攻撃が飽きもせず繰り返される。

それを一瞥しただけで掻き消し、短く距離を拒絶しながら跳ぶ。

短距離転移では無い。

ただ、自分の目の前にある空間を拒絶して、距離を弄っているだけだ。

不規則に、しかし異様なまでに不可思議な軌跡を描きながら、偽者へと接近する。

最初は地上にいるから狙いやすい偽私。

私を捉えられず魔法の手が止まった瞬間に、一気に距離を拒絶して大鎌の射程圏内に入れる。

足元に私が現れたのを感じて反射的に前脚の鎌を動かそうとしているが、もう遅い！

滅殺ッ！

振り抜かれる暗黒の刃は、濡れた紙を裂くよりも簡単に、偽私の体を通り抜けた。

だが、それは手応えが無かったという訳じゃない。

むしろ逆、刃に触れたコンマ一秒以下の時間で、既に全身が跡形も無く消滅していたからだ。

消滅した人影は、純粋なエネルギーに一切のロスも無く変化して、この密閉空間に放出された。

おやすみ！ 私偽者！

ピンポンダッシュのように何度も何度も空間干渉してきて地味にウザかったから、かつての私と形だけそっくりな紛い物が消えて清々した。

残るは偽コケちゃんか。

造形こそ、かつてのコケちゃんそっくりだけど、色は真っ黒だし何より重要な魂が宿ってない。

なら、斬るのに抵抗などありはしない。
ただ、距離が遠いし速い。

偽私の時とは違い、接近するのも容易では無いし攻撃を届かせるのも一苦勞だろう。

常に高速で飛翔し続け、時折重力や慣性すら無視した動きを見せるのは、重力を操る魔法も併用しているからだろう。

まさに疾風迅雷とも呼べる動き。

相手の攻撃も無意味だが、こちらからも攻撃が届かない。

そんな相手に対し、私は次の一手を考える。

その間にも小競り合いは続く。

腐蝕の魔弾が空を裂く——、大鎌に喰わせる。

指向性を持った嵐が迫る——、私の領域に入った瞬間そんなもの無かったと因果から拒絶する。

うーん、無理にでも空中戦をするしか無いのか……

うん？ え、そんなこと出来んの？

大鎌から伝えられた提案に一瞬迷うが、もし上手くいけば永続的な能力の強化に繋がるとして、覚悟を決めて実行する。

究極の自己否定は、窮極の自己肯定なのだ、そう告げる大鎌の声に従って。

「ぐ、ぎい、いいいッッ!!」

私は、暗黒に染まった大鎌で自分の眼を切り裂く。

痛覚無効化の魔術すら無視して激痛が走るが、死滅の刃で裂かれたはずの眼球は傷一つ無い。

逆に、むしろ……

「私の敵を捉えられない眼を、拒絶するッ!!」

視界が一変した。

見通せる。

動きが、纏う術式が、その存在そのものが。

空間を構成する、ありとあらゆる要素が。

絡みつく因果というモノが。

その眼に捉えた偽者のコケちゃんを睨みつけ、私は転移する。

場所は、今まで予想が不確定でしか無かった、偽コケちゃんの進行ルート目の前で。

軌道変更が不可能な位置に先置きされた大鎌に、偽コケちゃんが緊急回避も出来ずに突っ込み、その真つ黒な体を消滅させた。

残ったのは空間中に漂う高濃度のエネルギーだけ。

そして私は重力を少しだけ拒絶し、滑空するように地上へと降り立った。

着地すると同時に、大鎌が元の白一色の姿に戻る。

これで終わったかと息を吐くと、尋常ではない脱力感が襲ってきて、フラつく。

は、反動か？

身体全てが筋肉痛になったのを何倍にも倍増させて、そこに馬車酔いとかの気持ち悪さを何倍にしたものをミックスさせた感じ……

つまり、メツチャ死にそうな感じになっていた。

「あばばババツツ……」

自分の体さえ支えられず、システム中枢の床に倒れ込む。

全身を蝕む苦痛と悪酔いに、このまま寝てしまいたいという気持ちが湧き起こるが、残った気力を振り絞って、周囲を確認する。

流星に、防衛機構とやらが再び稼働する事は無さそうだ。

人影十二体に加え、私たちの偽者まで出てきたんだ。

これ以上強力な戦力のストックも無く、打ち止めて事だろう。

はー！ しんどかった！

勝利の昂揚に浸って嘔み締めながら、私は大鎌と自らの願いというものを見詰めて、空を仰ぐ。

発光する魔術陣だけが照らすシステム中枢の天井を眺めて、私は眩しく。

「ああ、こんなのキャラじゃないって……」

熱血キャラなんて、柄じゃないのに。

私は平穩穏やかにグータラ出来たら満足なのにさ。

でも……

「勝ったよ、コケちゃん」

親友を失わせない。

その願いを、深く魂に刻み付けながら、私は分体の状況を確認し始める。

大鎌が覚醒してからというもの、分体の方に意識を傾ける余裕が無かったからだ。

えーと？

システム関連分体は、半分近くがヤラれたか。

諜報用分体も、一時完全にストップしてたから、不自然な体勢で固まっているのもいる。

んーと……

山田君がもうそこまで来てる……。正直、魔王も居るから困るんだけど。禁忌カンストして真実話してるし、上手くいけば引き込めるか？

来たら考えよう。

今は気分も悪いし放つところ……

エルフの里まで、あと少しといった様子の山田君率いる勇者パーティを見て、嘆息する。

ハイリンスめ、何で山田君の腰に勇者剣が吊り下げられているんだ。

あの勇者剣は、大戦後然るべき処分をするって言うからハイリンスに渡るのを認めたのに、そのハイリンスが勇者ユリウスの遺言に従って第三王子のレストンに渡すと、そのレストンもまた勇者ユリウスの遺言に従い、山田君に渡したと。

レストンは、まあ良い。

ちゃんと律儀に勇者ユリウスとの勇者剣に関する事は他言しないって約束を守って、山田君には何も説明せずに渡したし。

だがハイリンス、お前何ホイホイ超危険物を他人に渡してるんじゃない！

それ、お前の本体や、私にもコケちゃんにも有効なんだぞ!?

何考えてんだか……

要は牽制なのかなあ。

勇者ユリウスの弟までには手を出させないって言う、親友ハイリンスの意思かも。

はー、そんな気無いのに。

そんな些事を気に掛けている余裕なんて、今は無いってば。さつさと、システムを解体しなくちゃいけないんだからさ。

ギユリギユリも、知ってるはずだと思うのに。

……いや、コケちゃんの様態とかは極秘だったわ。

ある程度復活してきたので、システム関連分体の活動を再開させる。

作業はそつちに任せて、私は体を起こすと女神の元へ歩いていく。

『熟練度が一定に達しました』

『熟練度が一定に達しました』

『熟練度が一定に達しました』

感情を感じさせない平坦な声の通知。

ここから世界中の生命全てに、レベルアップだとかスキルアップとかのシステムメッセージが、別個に無数に飛んでいる。

私は、女神っていうのはシステムに拘束されている間は感情も思考も何もかも奪われて、完全な人柱になっていると思ってた。

けど、もしかしたらと……

新生した瞳で、女神を見詰める。

この状態でも僅かながら意思があるのではと思う。

システム関連で、何者かの意思が介入していると思つた出来事が幾つもある。

勇者のシステム、そしてタイムラグが無い次代勇者の任命。

負担が減るかもしれないのに、新たな人柱であるコケちゃんを拒絶した動き。

誰が、どっちの事をしたのか分からない。

Dか、この女神か。

……どうでもいいか。

助けると、救うと決めただ。

邪魔をするのなら、その思惑ごとく壊して救うだけだ。

「勝利か、破滅か……」

未来は二つに一つだ。

大団円のハッピーエンドか、無残に敗れ去るバッドエンドか。

選ぶのは勿論——

「あんたを待つてる人がいるんだよ？　いつまで縛られてるつもりさ」

願うように告げながら女神に背を向け、私は転移でこの場を去った。

「ほう？　その力を、そのように発現させましたか」

「なかなか面白いですね」

「けど、まだ純度が薄い。神髄には程遠い」

「これならまだ……。いえ、今は口を噤みましょう」

「さて、物語も佳境を迎えました」

「台本を書き換えて、相応しき試練を用意しましょうか」

「世界最悪の邪神の名において、宣言しましょう」

「苦難を、破滅を、絶望を、悲劇を——、終幕の時に地獄を作り出しましょう」

「勇気を、意思を、友愛を、決意を——、輝きで以って世界に抗ってください」

「さあ、私を楽しませてください」

「また覗き見してますね？　仕事追加です」

「ソナー」

滅び墜ちるエルフの里

47 決戦前

遙か遠くに見えるのは、広大な大森林。

帝国軍に偽装した魔族軍が進軍するその先に、目的地となる場所が見え始めていた。

「遂に来たね」

その森、ガラム大森林を見て、アリエルさんがポツリと呟いた。

この場所の奥地にあるものこそが、エルフの里である。

ユーゴーが率いる帝国軍は先行して森の中に踏み入っていた。

現在は大軍を通しやすくするために森を切り拓いており、ステータスやスキルというモノがあるこの世界では、相当重労働であるのは変わらないが難しい事ではなかった。

今も軍の先頭に立ちステータス任せに大木を切り倒しているユーゴーの状況が、彼につけた眷属から知らされていた。

その後ろからゆつくりと進むのが、今私たちがいる魔族軍。

先頭の帝国軍が速度を落としている関係上、魔族軍も気持ち速度を落として進んでいた。

本来は、敵同士の勢力なので合流する訳にはいかず、ある程度の距離を保ったまま進軍しているという訳だった。

魔族軍が帝国軍に追いつく頃には、丁度エルフの里まで到着しているだろう。

「ポティマスは終わりだね」

「ふふ。そうだね」

「ようやく……、決着の時ですね」

上から順に、白ちゃん、アリエルさん、私が言う。

相槌を打つアリエルさんが言葉を続ける。

「ああ、終わりにしよう。長い、ホントに長い因縁を」

「うん」

「ええ」

軽く微笑むアリエルさんの宣言に、私たちは首肯を返した。

「さあ、行こうか」

世界の救済、その第一歩で、後は駆け抜けるだけ。

その始まりは、世界に寄生するポテイマスという悪性腫瘍を取り除く事。

決意を確かめ合い、私たちもポテイマス率いるエルフと無数の機械兵器が待ち受けているだろう大森林へ、足を踏み入れていった。

既に大森林は目前で、左右何処を見ても木々が生い茂る森が視界に映るといった距離まで迫る。

しかし先程決意を確かめ合うという感動的なシーンを演じた私たちだったけど、この馬車ならぬ蜘蛛車といった籠の中で現在、何とも言えない弛緩した空気が漂っていた。

「ふおおおー?!」

「ここか? ここがええのか?」

変な声を上げているのは白ちゃん。

そして白ちゃんの上に馬乗りになって、容赦無く弱い箇所を抉り込むのはアリエルさんだった。

……ただ、ごく普通のマッサージを行っているだけ。それだけです。

別に何も変なことはしていません。

ここまで種々様々な事を頑張っていた白ちゃんに対して、日頃の感謝と労いという事でアリエルさんがマッサージを提案し、それを白ちゃんが受けている真つ最中という状況だった。

アリエルさんの技量については白ちゃんの様子を見れば明らかで、ふにやりと顔を綻ばせ気持ちよさそうに、アリエルさんの手揉みにされるがままになっていた。

でも、白ちゃんが妙に艶っぽい声上げるから、集中出来ないのです
が……

「てい！」

「つぐ!？」

「誰が無駄に年食ったババアだって？」

「そんな事言つてな……おぐうつ!？」

向こうは、放つておいてもいいかなあ……

じやれ合っている白ちゃんたちを横目に見ながら、私は既に愛用の魔術補助器となった魔術本を自身の内側から召喚して、現在構築中の魔術が書き込まれているページまで捲る。

この魔術本は、私の力を取り込みつつ増幅させ演算装置としても使える、魂そのものと融合した高密度の神秘の塊だ。

神秘と呼んでいるけど、言わば特定の色に染め上げられたエネルギーであり、その純度が桁外れに高まった結果、物質化したモノと言える。

これは信仰を基にして染まったエネルギーであり、本という形態を取っているのは、その信仰の大本である神話を書き記すために、といった感じだと思う。

実際に書かれていた詩は、その神話に関する内容だったし。

そしてこの魔術本と私の相性は、比倫ひりんを絶するほど良いものだった。

だからDさんが白ちゃんを通じて私に渡したのか、それとも何か裏があるのか。

それは分からないけれど思うところがあるとすれば、この神話の内容が私の境遇と大きく被るといふ事だった。

神話の通りになるとすれば、私は……

頭を振って、脳裏に思い浮かんだ事を追い出す。

状況が似ているとは言え差異も多いし、別にそういう事になるとは限らないと、否定する。

そもそも、この世界での事を終わらせなければ何も始まらないのだと、下らない事を考えるのは全てが終わってからでも問題は無いのだから。

「さて、続きを刻もう」

今書き上げているのは、一種の権能とも呼べるような魔術の作成である。

白ちゃんがシステム中枢に行く前に見せた、あの魔術陣がそれ。

自分自身の本質、魂と直結した大掛かりで複雑な魔術。

作り方自体は、魔術本の中に記載されていた。

たぶんDさんが仕込んでいたと思うけれど、思惑はどうであれ使える物なら使うだけ。

この魔術を作れるようになった切っ掛けは、本を読み進めて作り方を知った事も大きいけれど、私の願いを祈りの形を、ハッキリ描けるようになったから。

そもそも、自分の魂というものを知っていなければ、この魔術は成立しない。

既に私は、組み上げた一部を使って強力な魔術を行使出来ている。魂に干渉するような、詠唱を含んだ魔術がそれだ。

今ある魔術、それらを組み合わせた一つの完成形は、組み上がっていた。

だけど、その魔術には上がある。

そのヒントを掴みかけていて、あと一歩、足を踏み出せば成立する。精神の本質、私という存在の極点にあたるもの。

この、世界すらも描き変えられるような魔術なら、上手くいけば世界を救う切り札になる。

そう迷いなく信じて、私は本に書き記していこう。

耳を澄まし、自己の奥底へと潜る。

魂魄の鼓動が聞こえてくるはず、そして自らの魂を描き出そう。

私の祈りは、みんなが生きられるように、希望を託せる温もりある世界であること――

ふと瞬間、一つの想いが脳裏を過ぎった。

私はその祈りを込めて、魔術を書き上げていく。

「此処に――、神名《翠星》の名において書き記す」

書き込んだ魔術が、形を変えて文章になっていく。

それを指でなぞると、間違いなく私の祈りの結晶であるのが理解出

来た。

「……出来た？」

これは、形になったと言っても良いのだろうか？

けれど少しだけ、ちよつと外れていると感じた。

上手く言葉に出来ないけれど、ルーツは同じなのに別の物語であるような。

「でも、これなら……」

発現した能力は、いつか必ず必要になるかもしれない。

これがあれば、悲しい結末でも覆す事が可能になる。

そう確信出来る、権能にも等しい力だった。

本を閉じる。

励起していたエネルギーを内側に収めていき、平常時の状態になるように整えていく。

今すべき事は終わった。

けれど未だエルフの里には、辿り着いてはいなかった。

ガラム大森林の伐採作業は、帝国軍の総大将であるにも関わらず最前線にて体を張って、木々を切り倒しているユーゴーのおかげで順調だけど、それでもエルフの里まで辿り着いていないのは、この大森林が非常に広大であるからだだった。

森を切り拓いた後の帝国軍は、表側の戦力である一般エルフを惹き付けつつ適度に戦力を削って適度に攪乱する捨て駒に近い軍と、ユーゴーが直接指揮している精鋭の部隊の二つに分かれる。

捨て駒の帝国軍は、不正を行った領主などの私兵などの、いわゆる魔族軍の第八軍と同じような構成となっていた。

そしてユーゴーの精鋭軍はエルフの殲滅を行いつつ、結界内から向かってきたシュレインたちの対応に当たる事になっていた。

彼らシュレインの勇者パーティは、王国から此処まで様々な出来事が起きつつも、私たちが辿り着く前にエルフの里に繋がる転移陣に到着して、エルフの里の結界内へと入っていた。

結界内での様子は現在不明だけど、大まかな予想としては他の転生者たちと会っているだろう。

私たちが戦端を開いた後、不確定要素の彼らが戦場に出てくると考えれば、対応に当たり足留めを行うのは、ユーゴーが位置的にも因縁的にも最適だった。

「てい」

「あたあー!?!」

また白ちゃんが何か変なことを考えたのか、それを察知しデコピンするアリエルさんが見えた。

周囲の空気へ伝わる揺れは極限まで抑え込んでいるけれど、そこに込められた破壊力は白ちゃん以外が受けると頭が吹っ飛ぶ威力のデコピンだった。

まあ、これくらいでない和白ちゃんが普段展開している防御魔術によつて、一切痛痒を感じないのだから、お仕置きとして二人の間ではこれが正解なのだと、もう見慣れた光景である。

「白ちゃんつてさ、分かりにくいようで、分かり易いよね」

「あつ、確かに」

基本的に感情的で自分本位な価値観なのは、一緒に過ごしてきて最初の方に理解した事だ。

だからこそ、表情には出なくても内心では不満や苛立ちが渦巻いている時があり、それらを察知する能力は、白ちゃんと付き合う上で必須技能だった。

そもそも、魔物の頃は蜘蛛であり表情すら無いのだから、必然鍛えられたとも言う。

けど、最近はそれだけじゃないような感覚も覚えていた。

それが何かは、まだ掴めていないけれど。

悪いものではない、それだけは確かだと思う。

「ぶう……」

不貞腐れている白ちゃんが映る。

私たちの前だと表情もコロコロ変わるのに、その素直さを少しでも他で見せられれば、ソフィアちゃんやラーズくんたちとも壁を無くせ

るのではと思う。

けれど、そこが白ちゃんだから。

唯我を気取っているけれど、本当は自分が傷付き心が揺らぐ事を恐れている、ごく普通で臆病な子供である事も、私は知っている。

誰かを大切にしてしまえば、見捨てられなくなる。

そしてもし大切になった人を見捨ててしまえば、自分が許せなくなってしまう。

だから、必要以上に自分の内側に誰かを入れたくないのが、白ちゃんだ。

口下手なところは元からかも知れないけど、本質はたぶんこれ。

だから白ちゃんは、私とアリエルさんにしか、心を開かない。

そうそう死ぬことも無く、相手を知っていて、実力的にも対等に付き合える相手だから。

気に掛けている相手は他に先生もいるけれど、それは白ちゃんの出自に関係しているからこそ、先生も特別の枠に入るのだろう。

白ちゃんの正体は、殺されそうになっていたのを先生に保護され教室に巣を作っていただけの、Dさんつまり若葉姫色の身代わりの役目を与えられて異世界に送り込まれた、ただの蜘蛛だった。

違和感は、最初に出会った時からあった。

群れから逸れエルロー大迷宮の下層で彷徨っていた私は、アノグラッチと戦っていた白ちゃんを見つけた。

その時は、不安と飢えで精神が溶けかかっており、ただ憶えのある食料としてアノグラッチらに襲い掛かっていった。

そして先にアノグラッチと戦っていた蜘蛛にも、敵だと思って攻撃した。

けれど、森羅万象という魂すらも感じ取れるスキルを持って生まれた私は、その蜘蛛が異質な魂をしていたので敵意よりも興味が勝り、念話で声を掛けた。

今思い返すとファインプレーだけど全く理性的では無い判断だったと思うよね。

迷宮での頃は頻繁にテンションも乱高下していたし、だいぶ精神が

狂っていたと思ひ返せる。

それで、その蜘蛛が若葉姫色と名乗り、私たちは一緒に行動をするようになった。

でも私は、その蜘蛛が若葉姫色だとは思えなかった。

だって、自分の魂と群れのコケダマたちの魂、それらで人と魔物との魂の差は理解していた。

そして若葉姫色と名乗った蜘蛛の魂は、異質ではあったが大きさは魔物のそれに近かったから。

人の魂では無いというのは始めから気付いていた。

でも、一緒に過ごしたのは私も心細かったから。

そしてお互いに、当時は蜘蛛子ちゃんコケちゃんと呼び合って、私たちは生存競争こそが唯一の世界から這い上がってきた。

大迷宮中層でDさんと会話した時に、あの教室に居て転生しなかった一人がDさんだと聞いて、それがすぐ若葉さんだと分かった。

口止めの呪いを施された事からも、それが真実なのだ と確信が持てる証拠になっていた。

けれど、私は白ちゃんから離れる事を選択しなかった。

絆を少しずつ重ねて、心を理解し合いながら、死線乗り越えてきた。

そうしている内に、白ちゃんが何者であろうとも気にならなくなった。

だって、些細な事だって気付いたから。

白ちゃんは白ちゃんであり、今そばにいるのが親友である、それだけが答えだったから。

ルーツなど、さして重要では無い。

今と未来、そこで共に歩めるかが大事だったのだから。

その結果が、今の私たち。

深い深い暗闇の中で出会い、共に過ごしてきた。

魔物の身体が何だ、偽物の記憶と魂が何だ、そんなもの私たちの絆には罅一つ入っていない。

私は、白ちゃんだから親友になって、救われたのだから。

意地っ張りで負けず嫌いで、怠けたがりな刹那主義。でも、本当は誰よりも仲間思いで、そのために頑張れる白ちゃん。大切なモノは、積み上げてきた思い出と足跡、分かち合ってきたモノにこそ、あるのだから。

白ちゃんも、そう思ってくれていると、良いな。

「……どうしたの、コケちゃん？ そんな笑顔でさ」「え？」

笑っていた？ 私が？

「なんか初めて見たような、懐かしいような……、ああ前世でのコケちゃんの笑い方だ」

「……ほんとう？」

記憶の彼方へと消え去った、前世で自然と行っていた笑い方。絶望と哀しみ、冷たい狂気に塗れ過ぎた。

私はもう、あんなふうには笑えないと思っていたのに。

それなのに、今、私は……？

「おおー。目が輝いてる、これが本当のコケちゃんか」

「茶化さない魔王」

「あいたっ！」

かなり強めに、アリエルさんが白ちゃんに頭を叩かれる。

無理矢理床にキスさせられても、アリエルさんは怒りを見せず苦笑していた。

「その顔の方が良い、明るく笑ってる方が良いよ。……だけどその顔を見せて良いのは私の前だけにして」

「おやおやー？ 独占欲発揮してます？ 白ちゃん？ ん？」

「ふんっ！」

「ほっ！」

白ちゃんの踵が頭にめり込み、再び床板にキスさせられるアリエルさん。

「えつと……、私の前だけって……」

「えつと……、私の前だけって……」

「ああー!! 何も言ってるませーんツ!!!」

その誤魔化し方は、無理があるのでは無いのかな!?
割と結構、私自身もテンパっているのを感じながら、何一つ質問など受け付けませんって態度で示している白ちゃんを見て、これ以上この事は蒸し返さないようにした。

下手な事して藪蛇となれば、私にも二次被害が来そうだと思っただら。

……なんだか、頬が熱い気がする。

無意識の内に、肩に掛かる柔い髪を指に絡めていた。

「えーあー、そうだ! コケちゃんって実はダブルとかだったりしない?」

「うん?」

話題を変えるために、唐突に投げ込まれた質問に首を傾げる。

なんでもシステム中枢に囚われている女神と少し似ている事から、よくよく考えると日本人の顔じゃ無いよね? と、白ちゃんが疑問に思っただらしい。

私はシステム中枢に行ったのは最初の一回だけなので、細部まで女神サリエルの顔を憶えている訳では無いけれど……、確かに似ているかも?」

その理由は、マステマに進化した際に墮天使という種族になった事で、女神サリエルの顔付きに私が引つ張られたのかもしれないと思っ
ていたけれど、そう言えば白ちゃんの指摘についても少し当て嵌まっていたのを思い出した。

「お母さんの家系で、結構昔にギリシヤからの血が入っていたみたい。だから、血の濃さとしてはクオーター以下だけど、そのせいかもね」
前世で、かなり小さな頃の記憶だ。

私には物心付く頃には父親という存在は居なかった。

だから自分の親について聞いた時に、父親の事ははぐらかされたけれど、お母さんの方の家系については結構深くまで教えてくれた。

その中に、たしかそうだと教えてくれたはず。

「ほおー? コケちゃんは異国のルーツもあったと」

「生まれも育ちも日本なので、思い入れも何も無かったですよ？ それに転生して魔物になって、異世界でそれなりに暮らしていれば、もう何一つ関係無い話ですけどね」

アリエルさんの疑問に、私は思ったままの事を口に出す。

前世ではちよつと目鼻立ちがパツチリ整っているだけの些細な特徴でしか無かったから、外国の血と言われても、ピンと来ない程度のモノだったのだから。

そういえば……、あの神話のルーツは……

「なんか、こうしてふぎけ合っている内に、結構進んだみたいだね」「ん」

「……そうみたいですわね」

感知範囲を広げて周囲を把握すると、エルフの里まであと少しといった位置だった。

アリエルさんは、顔を引き締め真剣な表情で言う

「今回の戦い、勝率は？」

「100%」

それに即答する白ちゃん。

「じゃあ、私たちが生き残れる確率は？」

「……」

しかし、続く問いには口が塞がる。

「即答出来ないって事は、100%じゃないって事だ。ほら、分かりやすい」

また、苦虫を噛み潰したような表情になる白ちゃん。

アリエルさんが苦笑したまま続ける。

「白ちゃんってホント身内には甘いよね。……でも、今回ばかりは、その甘さを捨てな」

アリエルさんは言葉の途中で区切ると、雰囲気を一変させ吐き捨てるように言う。

戦いなんだと、戦いであるから命のやり取りをするんだ。

そして命を懸けているのだから戦いで死ぬ事があるのなら、それは私たち当人の力不足が原因で他人の命まで背負う事は無いと言った。

アリエルさんたちは、彼ら彼女らなりに全力で自分たちの出来る事をする。

だから私たちも、自分なりの勝利を目指して全力を尽くして欲しいと、切に願って来た。

「出来る限りのフォローはするよ」

「……アリエルさんの想いは、邪魔しない。けれどピンチなら、たとえ死んでても助けてみせる」

「なら、二人の手を煩わせないように頑張んなきゃね」

誰も欠けて欲しくない。

そんな願いも、私を構成する祈りの一つである。

「みんなで生きて勝つ確率は、100%」

白ちゃんが言う。

「そう、誰一人欠けたりしない」

私が拳を掲げる。

「出来る事を精一杯。当たり前の事を、全力で」

察したアリエルさんが、ソラへと掲げられた誓いに、自らの手を重ねる。

そして、白ちゃんも――

「「勝とうッ」」

三人で宣言する。

ここには居ないみんなも、願いは同じだと祈って。
決意と誓いは結び、そして振り抜かれた。

48 狼煙を上げろ

何処か陰暗とした、樹齡何百年を思わせる無数の巨木が空を覆い隠す、深き森の中。

一見して人工物の欠片も無いような場所だけど、そこに似つかわしく無い不自然なまでの異質な結界が、眼前にて行く手を阻んでいた。私、白ちゃん、アリエルさん、パペットたち四姉妹、計七人。

魔族軍から別れ、白ちゃんの転移で結界間際まで移動した私たちは、その結界の向こうを見詰めながら合図を待っていた。

先行していた帝国軍は結界外縁部まで到着し、地形の有利不利を解消するため更に周囲の木々を切り拓いているだろう。

そして合図があれば、大魔法を結界に放つというフリを行う。

実際には、その大魔法程度の威力では、結界は決して壊れない。

私たちを阻んでいるこの結界は異常なまでに堅固であり、どれくらい強度があるのかと言うと、クイーンタラテクトの全力ブレスにも小揺るぎ一つすらないという。

このガラム大森林にはエルフの監視と威圧という事でクイーンタラテクトを配置しているので、実際に試した事があるとアリエルさんが言っていた。

そしてアリエルさんの全力攻撃でも壊れず、僅かな罅すらも入らなかった結界でもあった。

そのクイーンタラテクトを含むアリエルさん眷属の蜘蛛たちは、現在は丁度帝国軍の反対側に、エルフの里を挟んだ向かい側の森にて待機している。

アリエルさんから号令が掛かれば、すぐにでも動き出すだろう。

その位置取りは、結界を破壊すれば帝国軍魔族軍と蜘蛛の軍団両方から、挟撃を行える布陣となっていた。

そして私たちは、その中間と呼べる位置に居て、いざ結界が破壊されれば横合いから攻め立てることが可能な場所から、結界の遠く向こう側をジッと見詰めていた。

しかし、何故今は動かないのかと言うと、結界を破壊する最後の準

備が整っていないから。

この結界は、ポティマスが考案した例の禁忌である星喰い技術を集結して作られているらしく、MAエネルギーを湯水の如く浪費して常時凄まじいほどの防御能力を發揮している。

効果はそれだけでは無く、光や空気など必要な物は透過しつつ害のある物は遮断する事に加え、通常の転移や念話などの手段も封じられているらしい。

そんな、星の生命力を無駄遣いして稼働する、超高性能の結界だった。

これがあるせいで、コツコツ地道にシステムが集めているエネルギーを横から掠め取られているのだと想像すれば、当然心中穏やかではないられない。

破壊する手段自体は、白ちゃんが事前に用意出来ているとの事で、以前地球に行った白ちゃんがDさんの持ち物を盗ん……貰ってきた中であつた、とある道具を使う予定だ。

いわゆる神器と呼べるモノ。

私が所持している魔術本とは性質が違ふし、見た目もただの金属バットにしか見えないけれど、格としては遥か上にあるという、何とも得体が知れない代物だつた。

それを用いて破壊する予定だけど、結界を破壊する前にまず行うべき事がある。

それが、エルフの里内部に存在する転移陣を、破壊する事だつた。

転移陣とは、魔力つまりエネルギーさえあれば、誰でも使える長距離移動手段である。

そして、結界によって隔絶しているエルフの里と外部とを繋げる、唯一の出入り口でもある。

白ちゃんの下調べによつて、結界という障害があるせいでエルフの里内では一箇所に纏めて設置されており、一旦全て束ねてから結界の外へ繋がる穴から外部まで通して、そこから各地へと転移させているらしい。

これら転移陣を残したままだと、たとえ物理的に包囲していたとし

ても、エルフらが逃げだせる余地が生まれてしまう。

そして、逃げた先で転移陣を破壊されては、追い駆けようにも厳しいと言わざるを得ない。

一応、長年の調査や追跡などで神言教が幾つかの転移陣の出入り口を把握しているらしい。

しかし、把握していない転移陣があるかもしれないし、全ての出入り口を見張るのも戦力の無駄になってしまうだろう。

なら、把握している転移陣からエルフの里へ侵入して、内側から転移陣全てを破壊してしまえばいい、というのが私たちの作戦であり合図を待っている理由だった。

もう分かると思うけれど、その合図こそが転移陣の破壊に成功したという連絡だった。

エルフの里内部に潜入しているのは、転生者の草間くんことサジン。

前世での名前が草間忍であり、だからなのか忍者という固有のスキルを所持していた彼。

神言教の暗部を担う家に生まれ、そこで訓練を施されていたらしいのでスキルの効果も噛み合い実力的には相当な強さらしい。

ただし人族基準であり、私たちのような例外、人外勢とは比べてはいけないけれど。

そのサジンには、ラースくんが作った炸裂剣という爆発する魔剣を渡してある。

教皇と打ち合わせの会談を行っていた時に、ラースくんなどを連れて行った事もあり、その際に休憩時間などで旧交を温め、様々な魔剣などを渡していたらしい。

その内の一本が、今回爆発物として使う炸裂剣だった。

なので、一応能力的には最適な役回りとなっており、転移陣を爆破して来るくらいなら問題無く可能だろうと送り出していた。

そうして待機しているが、それなりに時間が経過したにも関わら

ず、結界の向こう側では変化が何も起きていない。

なかなか連絡が来ないので、その後の作戦についても思い返し確認しておく。

転移陣の破壊が確認されれば、帝国軍が偽装の大魔法を発動させるのと同時に、白ちゃんが結界を破壊する。

そうしたら前後から、帝国軍と魔族軍そして蜘蛛の軍団が、目立つように派手に攻勢を行う。

表側の戦力である普通のエルフやシュレインたち勇者パーティがそちら側に向かっている間に、不確定要素も居なくなり手薄になった横合いから、私たちがエルフの里中心部へ突入する筋書きだった。

たぶんそこに、ポティマス本体が居るだろう地下施設などがあると予想しているので、機械兵器などを発見次第それら全て排除しながらポティマスの抹殺を目指す。

そういう話だったけれど……

「白ちゃんが何と言おうと、これだけは譲れないなっ！」

「ダメなものはダメ」

白ちゃんとアリエルさんが睨み合っている。

吹き荒れる威圧感と緊張感は、同行しているパペットたちがガタガタ怯えるほどの、密度の高い圧となって空間を支配していた。

その睨み合いの原因は、ポティマスと戦い決着を付けるのはアリエルさん一人で行いたいという想いによるモノで、それに白ちゃんが反対しているという構図だった。

白ちゃんの主張は、魂に寄生された先生を人質代わりにしつつ、馬車馬のごとく働かせた事への復讐に加え、アリエルさんよりも強い自分が相手して安全策を取りたいというもの。

今までの戦い等を振り返れば、保有している戦力はアリエルさんにも届きうると予想しており、せめて手助けでも容認して欲しいとも。

そしてアリエルさんの主張は、譲れないモノが因縁が、自分とポティマスとの間にあるのだと、その終止符を打ちたいのだと頑なに意見を曲げず、一步も退かなかった。

元より自身の寿命もそんなに残って無く、死ぬ事も覚悟の上で悔い

はないという。

そして戦いに挑み、もし負けて死んでしまったのなら、私たちが代わりにポティマスを始めしてくれるだろうと信じているとも。

私は、ポティマスに恨みや怒りの感情こそあれ、二人ほど因縁と呼べるものは無いので、対決については譲るつもりだった。

私が抱くポティマスに対する感情の源泉は、精神汚染で混じり合った過去の誰かが抱いた怨嗟と未練の想いである。

そしてその誰かは、孤兒院の仲間アリエルさんが討ってくれるのなら、思い残す事は無いと告げていた。

……白ちゃんには悪いけど、此処はアリエルさんの味方をさせて貰おう。

「私は——、アリエルさんの意思を尊重するよ」

「え」

「おとよ」

私が発言すると、二人とも違う顔で振り返る。

白ちゃんは裏切りにあつたかのような顔で、そしてアリエルさんは驚き浮かぶ意外そうな顔で。

「白ちゃんがポティマスを倒してしまえば、アリエルさんに晴らすことが永遠に出来ないシコリを残してしまう。だったら、勝つても負けでも後悔しない結末を選ばせてあげたいな」

味方が居ない事を悟った白ちゃんが、大きく溜息を吐きながら呟く。

「……はああ。許さないよ」

「え？」

「死んだら許さない。魔王が死んだら、その瞬間に何もかも放り投げて八つ当たりで世界ブツ壊すから。……私にそんな選択させないためにも、絶対生き残る事。分かった？」

「……了解、ボス」

泣いているような笑っているような、そんな表情でアリエルさんが白ちゃんに敬礼する。

そして視線を外して遠くを見る白ちゃんは、誰にも今の表情を見ら

れたくないかのようだった。

その数秒後、結界の中で遠目ではあるが爆発の閃光が瞬き、煙が立ち上るのが見えた。

どうやら転移陣の破壊は上手くいったみたい。

アリエルさんが耳に手を当てて念話を受け取っているのを見て、それは確実だろう。

「さて……、これで心置き無くブツ壊せる。とっておき、新技のお披露目といきますか！」

大きく伸びをして、その大きな胸を強調するかのように背筋を反らす白ちゃん。

長らく待たされ続けた鬱憤を晴らすかのように、白ちゃんが威勢よく叫ぶと、異空間から二つのモノを取り出す。

片方は白ちゃんの武器である白い大鎌で、もう片方は野球の金属バットのようナニカ。

ピカピカと禍々しく黄金色に輝くバットで、これで叩かれるとホームランになるらしい。

訳が分からないと思うけど、ボールと生物を対象にしてバットを振り抜くと、物凄く吹っ飛ぶ。

なのに、力一杯振り抜いた衝撃も落下して地面に墜落しても、ちよつと痛いだけで済むという、謎の保護機能まであるバットだった。

いわゆるジョークグッズみたいな、お巫山戯に全振りしたかのような代物なのに、内包しているエネルギーは計り知れないほど大きいという、効果や見た目などは兎も角、中身だけは異常異質なモノが詰め込まれている本物の神器と言えた。

「すうう……。共鳴、集中……、あの時の感覚を思い出せ……」

片手に大鎌、片手に金属バットを持った白ちゃんが、深く息を吸い込み力強く吐き出す。

そして……

「《死滅鎌理——》」

白ちゃんと同調した大鎌が、姿を変える。

持ち手は何者にも染まらないかのように白く、大鎌の部分は僅かな光すら反射しない空間を塗り潰す闇のように黒く、二色へと別れていく。

そして、世界に宣言するかのように呟くのと同時に開かれた瞳には、虹彩を横一文字に断裁する裂傷痕が浮かび上がり煌々と真紅に輝いていた。

「白ちゃん……う？」

「これは……」

突き放すかのような排斥の念が籠もるオーラが、ビリビリと肌を刺す。

直接触れていないというのに、そばに居るだけで自分の足元が不安になるような暴力的な気配。

けれど、何故かは分からないけれど、この力は私たちを絶対に襲わないという、不思議な安心感を憶える想念が籠められていた。

そして、この力は……、私が組み上げていた魔術と根源は同じものだと感じた。

「巻きで行くよ！ 失敗する事を拒絶ッ！ 合体ッ！」

白ちゃんは歯を食い縛り真剣な顔で、左手のバットを右手に持った大鎌の刃に押し込んでいく。

ゆっくり分解されていき呑み込まれる金属バット。

そして……

「ブツ飛べ！ ホームラアア——ンッ！！」

荒れ狂うエネルギーを滾らせた大鎌が、結界に向かって振り抜かれた。

帝国軍の方に付けた眷属から大魔法が放たれたのが連絡され、丁度同じタイミングで白ちゃんの大鎌が結界に命中すると……

——甲高い金属音が鳴り響いた。

その音色は、アニメとかにあるような効果音のように、わざとらしいほど誇張され澄み切った音だった。

音の発生源となった結界は、粉々に砕かれたガラスのように光の粒

子になって崩壊していく。

同時に大鎌の気配も鎮静化していき、元の白ベースの大鎌に戻り白ちゃんの瞳もいつもの重瞳のような形状に巻き戻っていた。

「……ふう。大体半分くらいか？ 吸収して残ったエネルギーは」

一息ついた白ちゃんが手元の大鎌を見て、そうボヤク。

「まあ、上々でしょ。《拒絶》込みで完璧に砕けたし」

そう言つて、大鎌を肩に乗せる白ちゃん。

如何にも一仕事終えて満足げな顔をしている白ちゃんに、アリエルさんが恐る恐るといった様子で質問を投げ掛けた。

「白ちゃん、何今の、ものすんごく禍々しいオーラのバツトは？ そしてあの鎌……」

「魔王、世の中知らない方が良い事つて、色々あるんだよ？ ……たぶん」

納得がいかない表情だけど、それ以上追求して良いのか悩んでいるアリエルさんを横目に、私は白ちゃんに問い掛ける。

「白ちゃん、あの技……。自力で編み出したの？」

「うん？ そ、コケちゃんのアドバイスのおかげでね」

教えたのは初歩とすら言えない、基本的でごく普通の心構えみたいな事なのに、それで何段階も飛び越えてあの力を発現させるなんて凄すぎる事であり、ただただ心服するしか無い。

「凄い……。天才肌にも程があるよ。もはや嫉妬すら湧かないレベル」
「ふふん」

ドヤ顔を浮かべ、ご機嫌な雰囲気白ちゃん。

でも、少し疲れているような感じもする。

……すぐ解除したし、出力は高いけれど持続性などの安定性は仕上がっておらず、まだまだ完成には至っていないのではと思った。

「うーん……。よし気にしない！ 白ちゃんがそう言うなら不必要な事だろうし」

意識を切り替えたアリエルさんが、頬を叩きながら自身に活を入れる。

結界が消えたことで、エルフの里内部にも感知能力を届かせる事が

出来るようになり、私は軽く感知範囲を広げて巡らせ、現在の状況を把握する。

結界が無くなった事に騒然とするエルフら。
動き出す、帝国軍と蜘蛛の軍団。

質の異なる魂が一箇所に纏まっており、そこが転生者たちが軟禁されている居住区だと理解し、今のところ転生者たちにエルフが何かする事は無さそうだと、位置関係などから把握する。

「じゃあ、行こうか。白ちゃん、コケちゃん」

気負いなく、世間話をするかのようにアリエルさんが言う。

アリエルさんの掛け声を受けて私たちも頷き、私たちなりの仕事を始める事にした。

中心部へと駆け出す私たち。

先頭は白ちゃん、誘導のために転移する事無く普通に走っている。

後ろに続くのは、アリエルさんとパペットたち四姉妹。

そして私は、みんなの一番後方、殿の位置で、久々の光の翅を展開しての自力飛行。

かなりの速度を出せるけれど、大陸の向こうなど転移で移動したほうが速い場合などが多くて、使う機会も無く半ば忘れかけていた技能だった。

重力や空気など操って小回りも利き機動力自体は非常に高いけれど、必要になる機会が無かったともいう……

探しているのは機械兵器。

地上には見当たらない以上、地下に隠してあると考えるのが自然で、その奥にポティマスも居るだろう。

出て来たのなら、後はそこからアリエルさんが突入するだけである……

などと考えている内に一キロくらい先の地面が、上に乗った土砂や

木々ごと動いて割れていき、そこから機械兵器らが一糸乱れぬ動きで無数に湧き出してきていた。

外観は、SFに出てくるような角張り量産のみを考えた無骨なデザイン。

頑強そうな四本脚と四本の腕に保持された銃が、異質さと威圧感を醸し出していた。

その機械兵器らは迷うこと無く私たちに向かって来る。

「どうやら敵さん。既にこっちの事を捕捉してたみたい」

「関係無いでしょ。どうせ壊すんだしっ！」

「左右と背後には気配無しだよ、白ちゃんアリエルさん」

「先に私が対処する。魔王は温存！」

速度を上げて機械兵器に接敵する白ちゃんは、向こうと視線が通る距離になる前に、魔術を発動させて闇の弾丸を乱射して間の木々ごと撃ち抜く。

予想していた機械兵器の能力を考えてれば、牽制程度の威力しか無い魔術だったと思っただけ、機械兵器らは回避すらまともにも出来ずに闇の弾丸をモロに受け、呆気無く粉碎されていった。

……弱すぎる、いやこれも捨て駒なのだろう。

なら、誘い？

機械兵器が出てきた出入り口を、蓋が閉まる前に白ちゃんが破壊する。

その先は急な下り坂となっていて、どこまでも深く地下の奥底まで続いていると思わせた。

「行ってくるね。白ちゃん、コケちゃん」

そこを覗き込んだアリエルさんが振り返り、私たちに向けて静かに呟く。

「魔王……」

「気を付けて、アリエルさん」

アリエルさんが飛び降り消えていった闇を見詰める、私と白ちゃんそれとパペットたち。

四姉妹も心配そうな雰囲気を漂わせつつも、ただ見送った。

……それじゃあ、私たちに出来る事をしようか。
折角だし、一応私なりのやり方を白ちゃんに見せておこうかな。

49 神格到達者

神格到達者――

それは、自身の生物としての枠組みから逸脱して、無限に成長し、無限に己を拡張していける、上限というものが無くなり通常の生物の理から外れた存在といえる。

そして、生物として本来定められた理から外れているという事は、存在しているだけでも世界の理というモノを破壊しているに等しい存在でもある。

故に、その存在そのものが一種の特異点であり、あらゆる世界に共通して根差している法則にも完全には縛られず、逆にその法則に対して干渉する事が出来るようになる。

それが、いわゆる権能とも呼べるモノ。

干渉出来る法則は、個々によって千差万別の様相を見せる。

その法則の属性は、おおよそ神になった時には決まっていて、私の場合では魂魄に関する事、そして白ちゃんは空間に関する事だった。

当人の意思と純度によって扱える法則の強度が変わり、それらが安定していなければ、まともに使用する事は出来ない代物である。

そして、その意思と純度が極まった時、至る位階がある。

己の本質が剥き出しとなった、根源の願望あるいは祈り。

世界を変えたいという想いの結晶。

それは――

「――というように、神として上位に至るには、概念や法則などに干渉出来るようにならないと、まず話にならない。そのための方法の一つとして、自分自身をより強大な特異点に作り変える手法がこの魔術。その作り方が、このDさんから貰った本に書いてあったんだよ」

この魔術本を読み解き掌握していき完全に私と同調したと思った時、最後に解放されたページに記載されていた内容がそれだった。

それに従って組み上げた大魔術。

この本と併せて行使する魔術も、自然とその大魔術に噛み合うように誘導されていたみたいで、勝手に名前や術式が書き換わっていたのも、そのせいみたいだった。

何のために、この大魔術を仕込んでいたのかは分からない。

しかも、その大魔術の名前だけは態と欠落させたのか、何も書かれていない空白となっていた。

同じように、最後の位階についても――

「白ちゃんがさつき行った大鎌との共鳴。あれも、本質としてはこの大魔術と同じモノだと思う」

「あれが、その魔術と同じだって……?」

怪訝そうに、白ちゃんが戸惑っている様子が映る。

順番に段階を踏んで組み立てるのと、感性のまま本能的に昇華させるのでは、やり方が完全に別物だけど、最終的に至る位階は同じモノになるだろうと直感していた。

「自分自身を新たな理で塗り潰し、更に深い深度まで世界から外れる窮極の特異点化の大魔術」

けれど、大魔術と呼んでいるけれど、本質はもつと別のモノ。

「そうすれば、より強く法則に干渉出来るようになる。そして外からの影響も受けづらくなって、より不変の存在に近くなる」

正確には術式を組んでいる訳ではなく、ただ自分自身を法則へと、ある種の異世界に作り変えている作業と言える。

だから、事前に組み上げている術式とは、どうありたいどうしたいかの確認作業でしか無い。

ノートに自分とは何かと書いて、自問自答しているのと同じ事だ。

「だから、これが出るようにならないと、いつまで経っても下級神としか呼ばれないし、存在の格も低いままで肉体という依代が常に必要な、ただ強いだけの生物でしか無いんだよ」

始めに思った事でもある。

神化した私たちがだったけれど、再び魔術を使えるようになった私たちだったけれど。

神にしては――、弱すぎると。

それを押し上げる力が、この《 》だと書かれていた。

「けれど、今の私でも完全では無くて、現状では数時間くらいしか保たなそう……かな」

一欠片足りていない。

あるいは、根本的なところで噛み合っていない部分があるような。

それでも不完全ながら発動出来るのは、相性が99%以上も一致しているからだけ……

その残り1%以下の部分とは……

「それでも、さっきの白ちゃんよりは長時間維持出来るよ。それが発動の仕方や作り方の違いだとしても、少しは参考になると思うな」

「そのやり方そのものは教えられないの?」

その質問は当然だよな。

でも……

「これ、読める?」

「……??」

この大魔術に関して記されているページを、白ちゃんに見せる。

万里眼で、その場から動かずに白ちゃんが見詰めているけど、数秒後には宇宙の真理を垣間見た猫のような表情でフリーズしていた。

明らかに記載された文字を読むことが出来ていないと、何処を見ていいのか分からずフラフラと視線が泳いでいるのが感じ取れる。

口頭で詳細な構築方法について説明しようにも……

「二朝一夕で理解が可能な内容では無いから、掻い摘んで説明するとさっきの内容がほぼ全てで、確実に言える事は——、自分の魂の本質を理解する事、それで自分自身も世界すらも変えてしまいたいと願う事が、この力を極めるのに必要な、最も基本で最も難しい要素だから」
だから、やり方が異なっても、至る場所は同じになる。

「白ちゃんなら、その力と自分自身を重ね合わせ同調していけばいいと思う。到達するのに十分な下地が、もう既に出来上がっているから」

既に、力だけなら白ちゃんの方が大きいのだから。

それに重要なのは力の多寡ではなく——

「あとは、自らの本質その願いで、自分を染め上げていけばいいんだよ」

——想いの純度こそが、至るために必要な事なのだから。

「それじゃあ白ちゃん、パペットたち。ちよつと離れてて」

「おん？ 何かすんの？」

「白ちゃんが強くなったように、私にだって磨き上げた力があるというのを、見せてあげるよ」

白ちゃんたちから充分に距離を取る。

一度、この戦場で連絡要員として必要な分だけ残し、眷属たちみんなを私の中へと呼び戻した。

そして、突入する前から呼び出していた魔術本を、畏敬の念を籠めて胸の前で開く。

頭上に光輪が現れ、背中の翅も淡く輝き出す。

詠うのは、ある神にまつわる悲劇の物語。

「詠い始めよう、大地の女神と攫われし娘との詩を——」

願うは、冥界を支配する王の力。

「慈愛溢れる母は、生命を豊かに実らせる」

何処か遠くに居るであろう神に願う。

祝詞を紡ぎ上げる瞬間、世界の悲鳴が聴こえた気がした。

「その娘は、愛しき友と共に常春の花畑にて戯れていた」

まず音が消える。

周囲一体の風が、瘴気を帯びているかのように重苦しくなる。

次に、光が消える。

ごく普通の晴れた空だったのに、曇り空のように霧の中のように暗くなる。

最後に、温度が消える。

まるで極寒の厳冬の中に居るかのような、生命を枯らす冷気が私の周りを覆い出す。

「しかし突如、冥王は不死たる馬を駆り、娘を攫う」

そして、私の身にも変化が現れた。

物などが枯れていく。

そこから、私の眷属となった今世の家族たち、その魂を宿した魔性が現れる。

しかし、その姿と気配は異様なモノに——

三つ首の龍頭の魔獣。

冥府の川を思わせる大蛇。

闇を纏った妖精。

そして、本来の尾に加え瘴気の尾を増やした、六本脚の翠龍。

これが、私が描いてきた魔術。

それらを組み合わせた一つの完成形、みんなを守るために、敵を滅ぼす権能だった。

——シィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ

この大森林に、冥界に住む怪物が産声を上げていた。

!!!!!!

「私は、此処から大森林全体に眷属たちみんなを広げて行って、隠れ潜んでいるエルフや機械兵器が出てきそうな隠し通路を探して制圧していこうと思う。白ちゃんは？」

アリエルさんが地下に消えて行って、十数分。

この力の説明に時間を使ってしまったからだけど、その明らかな隙に見える時間にも追加の機械兵器が現れる事は無かった。

なら、こちらから攻め立てる事が重要だろう。

「まだ、色々聞きたい事あるんだけど……、仕方無いか。取り敢えず、居住区に引き籠もっている一般エルフを全滅させて来る。人形蜘蛛たちも引き連れてね」

その発言に首を上下に激しく振り、白ちゃんの背後に隠れるパペットたち四姉妹。

先程から一刻も早く私から離れたといった様子で、今の私の状態が危険なモノだという自覚はあるけれど、完全拒否な姿を見せ付けられると少し心が痛む。

代わりに、少々落ち込んだ私に眷属のみんなが寄り添ってくれてい

た。

……うん、私にはみんなが居るのだから、問題は無い。

単に、この状態がダメなだけだから、使っていない時ならパペットたちも平気だと思いたい。

ただ、そうなると永続変化すれば、二度と触れ合えないという事になっちゃってしまうのかな……

「転生者たちの隔離も私がやる。居住区から近いし、異空間に放り込んでいた方が安全だから問答無用で回収しとく」

白ちゃんの言葉に頷く。

方針は決まった。

後は、場当たり的に対処していく感じかな。

必要なら、連絡や協力をすればいい。

「それじゃあ、殲滅の時間だ。行ってくるね」

「……うん、分かった。そっちは任せたまよ、白ちゃん」

パペットたちを引き連れて走りだした白ちゃんを見送り、私は私の活動を始める事にした。

他の戦場では、それぞれの様相を呈していた。

エルフの里の外縁部、結界があつた付近では帝国軍とエルフの戦闘部隊との衝突が起きていた。

森という地形を最大限に有効活用して攻撃や防御を行うエルフらに、帝国軍は草木に足を取られ不慣れな環境によって普段の力を発揮出来ずに、厳しい戦いを強いられていた。

善戦しているのは、ユーゴーが率いる精鋭の部隊のみ。

その中に、いつかの頃に出会った事がある老人が居たけれど、その老人もユーゴーに引けを取らないほど獅子奮迅の活躍をしていた。

機械兵器が出てくるまでは、少し抑え気味にユーゴーが戦っているとはいえ、木に隠れているようにとも大木ごと撃ち抜いている上に、まだまだ余裕の見える姿でエルフを屠っていた。

反対側のクイーンタラテクトが率いる蜘蛛の軍団は、終始エルフラを圧倒して順調に侵攻を進めていた。

種族特性とも言うべき障害物に強い八本脚の機動力で難なく動き回っているし、そもそも戦力的にも総数にしても、普通のエルフラでは対処可能なほどの圧倒的な差があった。

なので、エルフラは僅かな時間も足留め出来ずに、蜘蛛の津波が奥へ奥へと雪崩込んでいた。

シュレインたち勇者パーティは、外縁部に向かって移動中。

その進路の先に居るのは、偶然かそれとも必然か、ユーゴーが居る場所に一直線。

間もなく、ユーゴーとシュレインたちは接触するだろう。

アリエルさんと接触しないのなら、そちらは放っておいても問題無し。

白ちゃんとパペットたちは、居住区のエルフラを粗方殲滅し終わり、残ったエルフラも白ちゃんが召喚した戦闘用分体によって追い詰めていた。

大森林に散らばった戦闘用分体たちも、生き残っているエルフラを探し出しては狩り続けている。

そうしている内に、エルフの里のいたるところから万単位の機械兵器が現れた。

最初は、弱すぎると思った機械兵器。

量産品だと言わんばかりに物量だけは恐ろしいほどあるけれど、私や白ちゃんなら問題は無い。

ただ、これが帝国軍とかに差し向けられると危ないかもしれない。ユーゴーたちなら数機程度なら余裕で対処出来ても、この数ではギリ貧になるだろうから。

そして、量産型の機械兵器を破壊していると追加で現れたのが、形状などは基本的に同じまま、大ききだけが巨大化した機械兵器だった。

これも様々な場所から無数に出現していて、おおよそ千機ちよつと

の数がエルフの里に広く展開されていた。

「……ようやく本番って感じかな」

新たに現れた巨大機械兵器は、抗魔術結界を装甲の上に塗布するかのよう展開していた。

機動力や戦闘能力は上位龍に匹敵している性能を持っていたけれど……

「それでも、今の私たちの相手では無い」

抗魔術結界なんて存在していないかのように、眷属たちみんなが巨大機械兵器に触れる。

それだけで、まるで魂を吸いつくされたかのように、機能を停止していった。

まるで、では無いか。

実際に、あの巨大機械兵器に囚われていた魂を吸い尽くして、エネルギーを枯らしたのだから。

今の私と、眷属たちみんなに共通して帯びている法則は——《枯死》。

衰え、古い、枯れ落ちて凍え死ぬ。

万物が持つ生命力そのものを殺す、冬によって齎される死の概念である。

危険度を認識した巨大機械兵器が、一斉に反転して私たち目掛けて襲いかかってくる。

外縁部近くに出現した巨大機械兵器も警戒して一時足を止めていた。

そっちは白ちゃんに任せたい。

今は、周囲一体から集まる巨大機械兵器らの殲滅だ。

巨大機械兵器が攻撃してくる。

けれど、その攻撃は意味を為していない。

分厚く長大なブレードが振り下ろされて、眷属が両断されて粒子となつて散る。

地面を抵抗無く斬り裂ける威力があり、直撃すれば私でも容易く粉

砕されるだろう。

しかし、数秒後には粒子が再集結して何事も無かったかのように復活し、逆にそれに触れた巨大機械兵器の方が、核となる魂を奪われ機能停止していた。

なら距離を取って木々すら簡単に穿つ光線を砲身から放ってきて、私たちに近づく度に威力が減じていき、実体の無いエネルギー弾は《枯死》の格好の獲物でしか無い。

そして、相手の攻撃は物理魔術エネルギー的にも全て無効化しながら、侵蝕していく。

私たちが通った後の森は生命力を吸い尽くされ急速に荒廃していき、上空から見れば森の一部が時間を早回しにしているかのように、枯れ木の森へと変貌しているだろう。

その中に、生きている生命体は私たち以外には居ない。

どうにも白ちゃんの戦闘用分体が、巨大機械兵器に向かって隕石を異空間から召喚し衝突させて撃破しているので、その射線に入らないように気を付けながら、私と眷属たちみんなはジワジワと領域を広げていく。

……あと一時間くらいは持つかな。

それまでが、タイムリミット。

この状態で無くなれば、巨大機械兵器を撃破するのは難しくなる。

接触するだけで機能停止に追い込むのは不可能になり、反動でしばらく弱体化する予感もある。

それでも、私自身でなら破魂を直接打ち込めば、弱体化していても撃破自体は出来るだろう。

だけど、それでは時間が掛かる事になってしまう。

この状態でいられる限界までに、全てを殲滅して終わらせなければ……

そう思っていると、蜘蛛の軍団の方で動きが。

それは、巨大機械兵器とは比較にならない本命の機械兵器と思える、ウニのような鋭角な形状をした、無数の砲身を持ち空中に浮遊し

ている機械兵器だった。

これは、急いで撤退指示をユーゴーたちに伝えなくてはいけない危険すぎる相手だった。

圧倒的な火力の絨毯爆撃と高エネルギーの砲撃で、蜘蛛の軍団たちが蹂躪されていくのを見て、警戒を高めていると……

「……当然、私の方にも来るよね」

少し先の空間に突如現れる、黒鋼のウニ。

しかも、その数は一つ二つでは無く、数十もの数があった。

これは、少し厳しいかもしれない……

空間転移によって出現した新たな敵が、私たちに向けて幾多もの砲身を向けていた。

結局、先生には何も話さずに、エルフの里に入った俺たち。

案内に従って隠された洞窟内のそのまた奥に隠された転移陣に乗り、エルフの里に転移してきた俺たちを出迎えたのは、無数に突き付けられた剣の刃先だった。

その場では、王国の反乱騒動で首だけにされていたのに何故か生きていた、族長のポテイマスが取りなし、俺たちは何とかエルフの里へと入る事が出来た。

何故ポテイマスが生きていたのか、何故俺たちよりも先にエルフの里へ帰還していたのか……

何故先生に嘘を教え、一体何をポテイマスは隠しているのか……

内心では、得体の知れない不信と嫌忌を押し殺しながら、俺たちはポテイマスの案内に従って里の中を進む。

そして、明らかに形だけの歓待だと分かるポテイマスからの持て成しを受けて、その日は一先ず何事も無く終わった。

先生とハイリンスさんを除いた、禁忌やエルフに対する不信について情報を共有していた俺たち四人は、事前に打ち合わせた通りに最初は問題を起こさず情報収集に徹する事になっていた。

転移陣がある大樹の内部構造と位置。

エルフが住む居住区の大まかな地形。

森の中を進む帝国軍の情報。

そして、転生者たちのこと。

ポテイマスは、まるで最初から全て予想していましたがと言いたげに、胡散臭さが滲む上から目線のまま、俺たちに転生者たちと会う事を許可した。

その提案は俺たちの目的から考えれば渡りに船だったけど、何かの罠なんじゃないかと疑う必要は常にあるだろう。

既に此処は、戦いが始まる前から敵地なんだと、思わなくちゃいけないのだから。

エルフの里に着いた翌日。

俺たちは、先生に連れられて転生者が保護されているという区画に向かっていた。

最初、ちよつとそこまでといった感じで出発した俺たちだったが、既にかなり長い時間歩き続けていて少々辟易しながらも、多少整備されているだけの細道を進んでいた。

このエルフの里は、里という呼び名ではあるものの、その広さはかなりの面積を有している。

結界内だけでも、普通に歩けば端から端まで移動するのに日を跨ぐほどの広さがあり、その内側にエルフという一つの種族がほぼ全て集結していても、なお余裕のある広さだ。

それを考えれば、歩いて行ける距離に転生者の保護区画があるのは近いとも言えなくは無いが、この距離を鍛えてもいない人が歩き通すのは厳しいと思った。

……予想より、だいぶ遠いな。

道中では、結界について先生と話をしていた。

広大なエルフの里全周を覆う結界でありながら神話級の魔物にも破られない強固さについてや、遙か昔それこそ千年を越える昔から既に結界はあつたらしいなど、先生は語っていく。

そして、そんな強固さを持つ結界なのに、先生は破られる事を前提に考えている節がある事を、俺たちは何となく察していた。

先生が時折見せる、語れない何か。

その何かによって、エルフとはまた違った視点で、先生は何かを確信しているように見える。

俺たちが不信を感じているのは、もう気付いているだろう。

なのに黙して語らない先生、その目には一体何が見えているんだ？

そうして何処かぎこちない空気のまま、漸くこの巨大な森の中でありながら、木々が無くして陽が大きく地面を照らす開けた場所に出た。

どうやら、此処が目的地のようだ。

巨大な樹木が幾多も生い茂るこの森は、太く分厚い枝葉に塞がれて空がほぼ見えない。

しかし、この区画は木々が無く、代わりに開墾された大地に野菜が植えられ畑となっていた。

遠く向こうには、家畜らしき生き物の姿も見える。

「それじゃあ。俺は此処らへんぶらついて、待ってるとするか」

「すみません、ハイリンスさん」

「気にするな。転生者同士だけで、積もる話もあるだろう」

転生者の保護区画を目前とした森との境界線の場所で、ハイリンスさんがそう言う。

気を利かせて、部外者は混ざらずに大人しく待っていると、そのように態度で示してた。

そして、ハイリンスさんと俺が別れる瞬間、短く目配せした。

頼みます——

——任せておけ。

そして、転生者のみで進むと、俺たちの姿に気付いて作業を止め近づいてくる一人の少女。

「お帰り、先生」

「はい、ただいまです」

自然な日本語で挨拶を交わす先生と、彼女。

その畑を世話している、俺たちと同じくらいの若い少年少女。

そのうちの一人が、今先生と言葉を交わしている少女だった。

ただ、その少女の言葉には棘があり、心做しか先生の表情も硬い。

「それで？ その四人は新たな犠牲者ですか？」

さらに追加された少女の言葉で、より冷たく重苦しく、溝が決定的に浮き彫りになる。

「犠牲者なんかじゃありません」

「見解の相違ですね。少なくとも私はあなたの事を加害者だと思つてますけど？ まあ、いいわ。そっちの四人、名前は？ ああ、こつち

の名前じゃなくてあつちの名前ね」

そうして、それぞれ前世の名前で、山田俊輔、大島叶多、長谷部結花、漆原美麗と、名乗る。

叶多の性別が変わっていた事にか、それとも前世と近しい姿をしているフェイについてか、眉間に皺を寄せて訝しげに見る少女。

一連の反応で思い出した人物の通りに、彼女は工藤沙智と名乗った。

クラスの委員長をしていた女子で、ハッキリとした物言いでクラスの中でも目立っていた子だ。

規律に厳しく、そのせいで敵も多かったと記憶している。

フェイとはお互い性格的に、犬猿の仲だったと言えるだろう。

その後、俺たちの存在に気付いた何人かが、工藤さんと同じように作業の手を止め此方に近づいてきて、その流れから一旦作業を中止して全員で集まる事になった。

ただし、そこに先生は参加せず、辞退した。

「先生も来ますか？ 歓迎はしませんけど」

「……そう、ですね。折角の再会の場に私が居たら……皆さん気分が悪くなるでしょうから、遠慮しておきます」

工藤さんの明確に拒絶を突き付ける言葉に、先生は泣きそうなのを懸命に抑え込んだ顔のまま、踵を返していった。

前世では、委員長と先生という関係で触れ合う機会も多く、かなり仲が良かった二人なのに、今の二人には簡単には埋められない溝がある。

此処でも、何かがあつたのか……？

先生が心を砕き傷つきつつも、他の転生者たちからは嫌われるような出来事があった事を、痛いほど肌で感じていた。

「行きましょよう」

そんな先生を無視して、歩き始める工藤さん。

周りを見れば、複雑な表情で先生を見詰める人も何人かいるが、それでも声を掛ける人は誰一人いなかった。

俺たちとは反対方向に去っていく先生。

その背中は見た目以上に、とても、とても小さく、痛々しく見えた。

工藤さんに案内されて着いたのは、食堂だった。

樹木を割り抜いて内部を住居とするエルフの里特有の建築物。

その中でも、大きめの樹木を使った食堂がある建物に入り、その内部には、所狭しと机と椅子が並べられている。

その奥で調理をしている四人の少年少女達。

その内の一人の少年が、俺たちに気付いて怪訝そうな目で見直し、フェイの姿を見て目に驚きが浮かんでいた。

やはり、何年経つてもフェイの事を憶えている人は多いのだと感じられる。

そして、少年は向こうから声を掛けてきた。

「工藤さん。もしかして、その四人……」

「ええ、そうよ」

工藤さんが、調理していた四人にも作業を中止するように言い、号令を掛けて集める。

そして各々普段座っているのだろう席に着き、代表として工藤さんと俺たちが前に立った。

「じゃあ、みんな自己紹介を……。こっちも改めてお願いできる?」

俺たちが順に自己紹介を終えると、ぎわぎわと周囲が騒然とする。

その視線の多くがカティアに向かっていたのは、まあ仕方の無い事だろう。

そして、此処にいる転生者十三人も、順番に自己紹介をする。

お互いに名乗り合った後、俺たちはポツポツと語り始め、懐かしさを感じる賑やかさで情報交換をしていく。

俺たちの身の上話。

ユーゴーが攻めて来ている事。

敵対しているソフィアの事。

向こうからは、この里での暮らし。

そして、此処に来た経緯。

殆どみんな、攫われてきたようなものだった。

それぞれ状況は違うけれど、親に金で売られた、実際に攫われてきた、などなど……

事前に聞いていた人数から増えた二人は、田川邦彦と櫛谷麻香の二人で、二人は両親が所属していた傭兵団が魔族との戦いで壊滅、その後冒険者として活動していて、その最中にエルフから接触があり、つい最近このエルフの里にやってきたのだと言う。

そして話は、更に不穏な方向に移り変わる。

保護と言うが実際には体の良い軟禁状態であり、エルフに監視されるの生活に誰しも少なからず不満を持っているのが、口にしなくても態度で見取れた。

エルフからの接触も物資の補給以外には無く最低限、先程畑で作業していたように食材など大半を自給自足で賄う日々。

「エルフは俺たちに余計な事は、して欲しく無いらしい」

その言葉は、きつと正解なのだろう。

だが、その目的が分からない。

先生が語った、管理者の戦いのために。

これは嘘だろうというのが俺たち総意の見解だ。

なら、エルフがスキルなどを育てさせないのは何のためだ？

管理しやすくするため、だろうか。

それとも、いや、しかし、なら……

本当の目的は見えてこない。

先生が犯罪に手を染めてなお、転生者を集めた理由が見えてこない。

そして、そんな先生にエルフが手を貸した訳も。

善意……からでは無い。

今まで出会ったエルフたちは、俺たちにも転生者にも敵意を隠そうともしていない。

そんな奴らが、態々労力を掛けてまで先生の手助けをするだろうか。

なら、指示したのはもつと上の方。
ポテイマス。

あいつだけは、観察対象か何かだと、人ですら無いといった目で、俺たちを見ていた。

それは、俺たち転生者を、何かに使うためのよう。

……此処は危険だ。

もうすぐ戦場になるからじゃない。

このエルフの里というものが、得体のしれない怪物の腹中のように思えてきたからだ。

俺は、カティア、フェイ、ユーリに目配せをする。

そうして無言で席を立ち動き出した俺たちは、周囲を調べ監視している目や物が無いかを確認し改めて話を切り出した。

「ちよつと。どうしたのよ貴方たち」

「問題は無いか？」

「ああ」

「建物の周囲一帯には居なさそうね」

「取り敢えず、怪しげな物も無さそう」

この会話が、監視や盗聴されていない事を祈りつつ、日本語で喋り始める。

「俺たちは、エルフを信用していない」

その宣言に、ざわつくみんな。

それを手で制して、続きを告げる。

「もうすぐ、エルフの里は戦場になる。結界が破られるにせよ内部に侵入されるにせよ、どのみち此処は安全とは言えなくなる」

ユーゴーたちが、何をするつもりなのか分からない。

けど、あれだけの實力を持った上で此処まで来るのは、何かしらの確信があるはずだ。

「そして、みんなをエルフが守ってくれるとは思えない」

もしかしたら、何かしらの理由で守ってくれるかもしれない。

だが、それを行うのは末端で嫌々なども考えられる。

そうならば、確実な安全とは言えないだろう。

いや、そもそも目的を考えれば、守ってくれない方が助かるのだが。前置きは、此処までで良いだろう。

そして俺は、本題へと入る。

「だから俺たちはみんなに、このエルフの里から脱出する事を提案したい」

俺は転生者みんなに向け、全てを捨てて逃げろと、言葉少なく厳粛に、告げたのだった。

S 11 急転

「だから俺たちはみんなに、このエルフの里から脱出する事を提案したい」

原木から削り出したかのような椅子に体を預けていたみんなが、しんと静まり返った。

その言葉を聞いた転生者のみんなは、動揺と困惑が混じった目で、俺たちを見ている。

俺は、それに真つ向から対峙しながら、その理由を諄々じゆんじゆんと説明し始めた。

この星が滅びかけている事実。

そうなった経緯の記録。

神言と呼ばれる声の正体。

ゲームのような世界を作り出している、システムの意義。

本来莫大な情報量である禁忌の内容を、理解しやすいよう要約して話す。

客観的に、けど罪悪感をこれでもかと煽るように記されていた情報から、この世界に仕組まれている無慈悲な真実というものを語る。

それと真つ向から逆らう話を、先生に教えていたエルフ。

そうと知った上で見える、エルフの不審さと異様さ。

目的や考えも何もかもが見えずに、ただただ薄気味悪いその態度が、どうしようもないほど得体が知れずに抑え難い危機感を訴え続ける、ポティマスポティマスの事。

そして、生徒を守りたいという純粹であるはずの想いを利用され、計り知れない何者かの手の上で無自覚の内に踊らされているように見える先生の事。

エルフや先生の事については、俺と仲間たちが思った主観的な意見が主だ。

これまでの情報を組み合わせて、論理的に考察してみると浮かび上がる推理のようなもの。

ある程度、間違いは無いと信じ通せるだけの直感はあるが、それを

裏付ける確証までは無い。

だが、俺が感じている危機感は、俺たちが予想した結論は、このままでは確実に不味い事になるというモノだった。

どう転ぼうと既に、一刻の猶予も無い状況にまで、差し迫っているという予感。

それが答えだった。

感覚的なモノに拠る部分が多くて感情的に訴えかけてしまう俺を、カティアとユーリが理路整然とした語り口で仮説を補強してくれて、そこに俺と同じく感覚で状況を読んでいるフェイが意見をみんなに問い掛けていく。

その話し合いの中では、当然質問もあり喧々囂々と騒がしくなる――

「ちよつと待って！ 今の話が本当なら、この星はどうなるの？」

「……分からない。俺が知っているのは、この世界に敷かれているシステムというものから与えられた情報でしか無い。だから、目で見たり体感した事なんかじゃない。だけど、こんな面倒な手順を踏んだ上で、これが罰だと言わんばかりに無理矢理与えられる情報なんだ。その内容にも矛盾は見られないから……」

一息挟んで、気持ちを落ち着けてから続きを話す。

周囲から早く話せと、無言の圧と視線だけが抉るかのように突き刺さる。

「だから、星が危険な状態なのは確かだと思うけど、いつまで持つのかは正直不明だ。……でも、今すぐどうこうというのは無さそうだ。一応、これが希望的観測では無い理由も説明しておく」

星が崩壊目前という危険な状況であるならば、徴候として何かしら目に見える現象が起きているはずだ。

少なくとも、それを実感したことは無い。

なら、現時点では猶予があるはず。

禁忌から見る事が出来る履歴とやらでは、良い方にも悪い方にも大きな変化は無く、長いこと停滞に近い緩やかな回復が続いていたのが、ここ最近十数年分の履歴を除いて記されていた。

その十数年の間に更新された履歴では、一度大きく減った後に何度か急激な上昇が起きており、その一つは時期を考えれば例の人魔大戦が同時期に起きていたと、当て嵌まる。

それが、管理者側つまり女神サリエルを助けるために動いている存在たちが、引き起こした結果であり成果なんだろう。

それらの行いによって、システムに蓄えられたMAエネルギーやらは回復傾向にある。

一時には、枯渇寸前とまではいかないが、かなり危険域に近づいていた事からすると、驚くべき復活劇と言えるだろう。

……だがしかし、それは数多の命を、犠牲にした成果だ。

到底許せるようなモノでは無いし、本心では決して認めたくも無い事柄で。

それしか、道が無いとしても……だ。

「じゃあ、私たちは、どうすればいいのよ……」

「それを何とかしようとしているのが、ユーゴーとソフィアたちなんだと思う」

ユーゴーを鑑定した時、あいつは禁忌のレベルがカンストしていた。

そうであればユーゴーも当然、禁忌によって齎される真実を知っている事になる。

その禁忌を知った上で動いているのであれば、あいつは自らの意思と選択で、此度一連の騒動に関わっているのだと、否応無しに気付いてしまう。

あの時の王国では、俺たちが知らない何かしらの陰謀があったためか？

政治機能を根本から崩さんと言わんばかりに、王城に勤める高位貴族や父上など含めた王族には夥しい死者の数が出ていたが、俺たちとユーゴーが街中で戦った時以外には市井に被害らしい被害は無かった。

その事に、今更ながら気付く。

だが、それでも無用な犠牲が多すぎるように思えてしまう。

犠牲にした命が多ければ多いほど世界の救済に繋がるのだとしても、彼らは手段を選んでいないような印象を受ける。

小さな犠牲など数にも入らず、より大きな目的のために。

まるで、大義の為なら虐殺すら厭わずに、全てを踏み潰していくかのような。

そんな印象を。

「夏目と、それにリホ子あいや根岸さんらは、その大義とやら何やらで、こんなド派手な大騒動を引き起こしてるって言うのか？」

リホ子のところで横から櫛谷さんに睨まれた田川が、訂正を挟みつつ唸るように呟く。

その一連の流れから、リホ子という呼び方は侮辱の籠もった渾名であると、間接的にはあるが諭された。

俺も、そう呼んでいたことがある。

今更、過去に吐いた無神経な言葉によって、傷つけていたかもしれない事実は変えようが無い。

人を悪しきように貶めるのは悪い事だと、唐突にユリウス兄様の顔が浮かんだ。

俺も二度と言わないよう気をつけるべきと、深く過去の罪を内省する。

そして機会があれば、きちんと謝るべき事だとも……

「ああ、多分」

「そうか。……なら、あいつは、いやしかし時期が」

軽く首肯を返した後、田川はブツクサと何か考え込む様子となり、俺たちから視線を外した。

それを横目に見つつ、俺は思う。

管理者側と仮称している彼らの中には、此処には居ない転生者も居るのかもしれない、と。

前世からの親友と迷いなく叫べる京也は、この転生者の保護区画には居なかった。

そして先生からも、京也が死亡したとは聞かされていない。

はぐらかされた感じだが、明確に死亡していると匂わす事もしな

かった。

なら京也は、今もこの世界の何処かで生きているはずだ。

お前が居るのは、そちら側なのか？

京也なら義憤に駆られて世界を救う事に動くか？

それとも、こんな事は止めさせようと、一人対峙しているのだろうか。

どちらにせよ、こんな事を知ったら見て見ぬ振りは出来ないと、猛る姿が目には浮かぶようだ。

一通り話し終えて。

俺は深々と頭を下げながら、混迷極まる内心を吐露するかのよう
に
眩く。

「すまん……、こんなあやふやな事しか言えなくて」

確かな事は、殆ど何も無いと言っている。

どれも、予想、予感、予測……、決定的な証拠を求められたら、何
一つ提示出来ない狂言めいた空論や仮説に陰謀論の数々、でも――

「だが、俺はこの現状を見て確信した。いずれ良くない事が起きる、そ
の確信を」

それだけは何としてでも伝えたいのだと、真摯に深く重く、心を籠
めて告げる。

「此処が危ないとして、じゃあ何処行くんだよ？ 結界の外には魔物
が居るらしいし、安全な場所なんて、無くね？」

「逃げたとして、衣食住はどうするの？」

「それに外の事、殆ど何も知らないし……」
ヒソヒソと、重苦しい困惑の空気になる。

エルフの方からも極力関わりが無い生活してきたみんなにとって、
外とは未知の世界にも等しいのだと、みんなの様子から示されてい
た。

「あー、ちょっといいか？」

髪を掻き毟りながら田川が、非常に言い難そうに口を開く。

「冒険者っていう職業柄、色んなもんを見てきたから言わせて貰うぜ。

外の世界は非常に危険だ。魔物の脅威ってだけじゃない。盗賊に殺された人、戦争に巻き込まれた人など、それらで残された人など、悲劇に見舞われた人々を沢山見てきた。だから言わせて貰うが、此処を出たとしてアテがあるのか？ この人数で逃げ隠れるのは、まず無理だろ」

その発言の後、一層ざわめきが強くなる。

その問いに対し、俺は言葉を詰まらせてしまう。

「……あー、ほぼノープランか？ 参ったな」

「悪い……。転移陣までみんなを移動させて、そこから脱出を考えていたんだが」

一応、現状で考えられる方法について話す。

此処まで来る道中にて地形や位置関係などを確認しながら歩いてきたが、結局のところ選択肢はあってないようなもの、つまり導き出せる解は最終的に一つ。

この転生者の保護区画からエルフの居住区まで行き、そこにある転移陣を使つて全員脱出する。

策とも言えない強硬手段だが、これ以外にエルフの里から脱出する方法は無いだろう。

いや、もう一つあると言えばあるのだが、それは俺たちではどうしようにも不可能な方法だ。

今は、思考の片隅に留める程度でいい。

「まあ、それが妥当だよな。けど、此処からエルフの居住区まで相当な距離があるぞ。此処に隔離されて鍛えてもいない奴らには、ちと厳しいんじゃないの？」

田川が目線を周囲に向ける。

確かに、彼らの身体能力などは鑑定するまでもなく低いのだと感じ取れてしまうのだから。

「あたしでも、一度に全員は運べないわよ」

先んじて、フェイが出来る限界について申告する。

ここで家畜として育てている魔物について一番詳しい手鞠川さんも、魔物に乗せて全員移動するのは厳しいのではないかと語ってい

た。

「これから策を練り上げるにしても、周囲の地形とか多少詳しい事知ってる奴は必要だろ？ 最近来たばかりの俺とアサカだが、冒険者やってたからなのか多少森人中出歩いてても問題なかったぜ。流石に遠くまで行こうとするのと文句言われたから引き返したけどよ」

「ちよつと、クニヒコツ。その話あたし知らないんだけど？」

眼光鋭く目を細めて田川を叱責する櫛谷さん。

そして軽く詰め寄り圧を掛けていると思ったら、大きく溜息をついて俺たちの方へ向き直った。

「はあ、しようがないわね。ごめんみんな、一先ずこの馬鹿に付き合っ
て山田君たちを案内した後みんなの事はクニヒコとあたしで守ろう
と思うわ」

「私たちの方だけど……、取り敢えずは、いつも通りに生活していれば
よさそうね」

話は一応の纏まりをみせた。

田川と櫛谷さんが転生者の保護区画にて、みんなの守りに付く事
に。

外からは何も変わっていない日々を繰り返しながら、準備を図る。

この日は、そういう結論となった。

だが、物事は俺たちの都合を待ってくれる事は無く……

「くそッ！」

「……クニヒコたちとも連絡が付きませんわ」

燃え盛る転移陣のあった建物を見て、俺は悪態をつく事を抑える事
が出来なかった。

事の始まりは、転生者のみんなと再会してから数日が経過して、エ
ルフの居住区にてヒツソリと情報収集をしていた時。

俺、カティア、フェイ、ユーリ、ハイリンスさんの五人は、転移陣
がある大樹の中から騒ぎの音が響いたのを聞きつけ、エルフからの制

止を緊急事態だろと言いついて飛び込む。

そして俺たちの視界に映ったのは、見知らぬ少年だが何故か懐かしい感じがする相手だった。

「草間？」

「おお！ 俊に叶多！ 久しぶり！ あ、漆原さんと長谷部さんも、ちーっす」

いつそ場違いなほど、道化師のように戯けた言動の少年。

あまりの既視感を憶える雰囲気は逆に不気味に思えてくるほど、とある人物の姿が重なって見えてしまっていた。

殺伐とした状況にも関わらず、軽い挨拶をしてくる調子の良さ。

特に何の気負いもなく、物事も深く考えて無さそうな、ポジティブすぎるテンションの高さ。

これらの特徴から、この少年が転生者の草間忍だという事は、すぐに見抜いた。

というか、草間の事を知ってるクラスメイトだったら、一瞬でモロバレすると言うべきか……

草間は、容姿が前世とはまるっきり別人に変わっている俺たちを、一人ずつ指差しながら前世の名前を言い当てた。

その事から、草間は事前に俺たちの事を一瞬で言い当てられるほど、外見等々の特徴まで詳しく知っていたという事。

更に、転移陣を使って侵入してきた状況などから、草間はユーゴー側についた人間だと判断して動くべきだろう。

俺は、草間に威圧を掛けつつも手は添えたままで剣は抜かずに追い掛けて、問いを投げる。

何しに来たのか。

お前は俺たちの敵なのか。

それらの問いに、草間は歯切れ悪く答える。

そりゃあ、ジジイからの任務で、エルフを逃さないために。

あー、んー、俊たちとは別に敵って訳じゃないけど？

そんな事を、警備に当たっていたエルフからの突き込まれる槍の連撃を避けながら、考えるより先に口からポロポロ溢れ落ちてしまうか

のように、動作の合間合間に喋る草間。

追う俺たちと逃げる草間の、目まぐるしく位置が入れ替わる追い掛けっこ。

俺たち転生者が生まれつき何らかの特殊なスキルを持ち合わせているように、草間も《忍者》という名前が忍しのぶだから与えられたとしか思えないスキルながらも、分身や擬似的な短距離転移などを行使できる高性能なスキルを持っていたため、追いついても軽々と逃げられ続けていた。

そしてとても長く、だが実際には数分も経っていないだろう時間が、経過する。

身を翻して転移陣の一つに降り立った草間は、その手に持つ一振りの剣を空高くへと放り投げながら、最初から最後まで変わらなかった軽い調子のままに、こう言った。

「あつ、俺逃げるけど、みんなも逃げた方が良いよー」

転移陣が光を放って草間の姿が、宙へ解けていくかのように消えていく。

それを見ながら同時に、俺は叫んだ。

「全員、今すぐ外に逃げろッ！」

草間が取り出し、そして現在クルクルと宙を舞う剣。

それを一目見た時から、危機察知が煩く警鐘を鳴らしていたのを知っていたから。

炸裂剣。

自爆の効果が付与された魔剣だと、鑑定は無機質に示していた。

その魔剣は強い力を内包しており、それが全て爆発によって解放されれば、この場にある全てが吹き飛ぶのだと、全てを読まずとも理解してしまっただけに他ならない。

鋭く切羽詰まった俺の叫び声。

それに疑問を挟むこと無く即応し、カティアを始めとした仲間たちは、すぐさま建物の屋外へと向かい駆け出した。

それに対して、エルフたちの反応は遅い。

それに俺は、足を止めずにもう一度だけ、逃げろと大きく叫びながら

ら、外へと走った。

……彼らがもう、逃げるのが間に合わないと分かっているながらも。

此処で、冒頭の場面に繋がる。

転移陣を完膚無きまでに焼き尽くされ、脱出手段が無くなってしまった事に落ち込む俺たち。

その後すぐに、今まで感じたことの無い、刺々しく触れる者全てを拒絶するかのような恐ろしい力の奔流を遙か遠くの境界との境界線付近から感じ、次の瞬間長らく不変を誇っていたという境界が、脆いガラスのように粉碎されて消え去っていた。

打ち拉がれる俺に、悪い知らせは更に続く。

それは転生者の保護区画に残っていた田川たちと、急に連絡が取れなくなった事だ。

念話で転移陣が破壊された事を伝えて、これから合流すべきかどうか向こうと話をしていた時、突如田川たちと念話が繋がらなくなった。

最後に聞こえたのは「何だコイツら!?!」という田川の驚愕に満ちた叫びで、その直後プツリと念話の繋がりが絶たれた感覚だった。

俺は、今すぐ転生者みんなの安全を確かめに行きたかった。

けど、直感もう既にその場には居ないだろうという予感を告げていた。

迷った末に出した答えが……

「フェイ、ユーゴーの処に行く。力を貸してくれ」

「シュン、どうするつもり!?!」

「分かった! けど、取り敢えず後ろ向いてて!」

俺の呼びかけに、すぐ反応して竜形態に変身するフェイ。

変身を完了させたフェイに飛び乗り、俺は考えを仲間に伝える。

残された手は、もうこれしか無い。

S12 窮境

フエイの背に乗り、辿り着いたエルフの里の外縁部。

結界があつたはずの場所だが今は影も形も見えず、そして元が森であつたのかも疑わしいほど、木っ端微塵になつた樹木が碎け倒れ伏す荒れ地へと化していた。

この地もつい先程まで壮絶な争いが繰り広げられていた戰場だったのは明白で、泥濘んだ地面に倒れ伏し息絶えたエルフの兵士たちが、周囲に無数に存在しているのが否応無く視界に映り込んでしまつていた。

……生き残っている人は、いない、か。

それが現実。

木片と泥水で酷い惨状となつている足元にも、誰かの死体が転がっている。

胴ごと力尽くで両断されているものや、内側から爆散したような酸鼻極まる血肉の塊が、一つや二つではきかない数があるのだ。

それが、泥と混ざりあつて濁つた血や液体の沼が生臭い臭気を立ち上らせているのを、強制的に嗅覚へと叩き込まれて感じ取つてしまふ。

直視しなくても吐き気が沸き起こり、口元を抑えたくなる。

胃が痙攣し逆流して来ようとする反応を、気力だけで無理矢理抑え付けた。

凄惨で不条理な現実が、俺の精神を呵責無く殴りつける。

そして、それを為したであろう元凶の姿を、俺は睨みつけた。

「……ユーゴー」

毛皮と武骨なベルトで装飾され、真っ白な光沢ある布で仕立てられた、丈の長い軍服を身に纏うユーゴーが、恐ろしいほどの覇気を滾らせて其処に立っていた。

その白い布地には返り血一滴すら付着していない。

つまり、あいつは己が殺した相手の血すらも被ること無く、エルフたちを塵殺したという事実には他ならない。

圧倒的なまでの、実力差。

ただ普通に佇むだけで、尋常では無い格の違いというものを威迫され見せ付けられていた。

「おぉーおぉー。雁首揃えて、漸くお出ましか、シユン」

貼り付けたような酷薄な笑みで、俺たちに向き直るユーゴー。

嘲笑すらも滲んでいるかのような歪な顔で、歯を剥き出しながら見下した視線を向けてくる。

その周囲には帝国軍の兵士の影すら見えず、ユーゴーたった一人だけが佇立していた。

「ユーゴー、この惨状はお前がやったのか……ッ!？」

「ああん？ 見れば分かんذار、俺が殺った。戦場に居る以上、殺し殺されは当然だろ」

「——ッ」

カティアの問いに何を当たり前など言いたげな態度で、戯けたように肩を竦めるユーゴー。

傲岸に冷笑を崩さないユーゴーとは対照的に、俺は裡に燃え広がった憤激で息を呑む。

何で、そんな軽く言うんだよ。

人が死んだんだぞ、お前が殺した、なのに——

ぎちりと、力を込めすぎた掌が音を鳴らす。

人相手にこそ行っていないが、俺だって命を殺し奪った。

自分の身は自分で守れるように、レベルを上げるために——、ただ死にたくないからという理由だけで命を奪った事のある俺は、ユーゴーを批難出来るような聖人君子なんかでは絶対無い。

——でも。

「お前ッ、こんな事して何とも思わないのか……ッ」

この世界では異端でしか無い、甘っちょろい前世の価値観という理想論。

人として正しい事でも、この世界にはそぐわない別世界の常識。

時代や世界が、そんな代物求めてないし認めないとしても、捨てられない想い。

要するに、子供の空想、世迷い言。

この世界を受け入れる事も拒絶する事も出来なかった馬鹿の、臆病な妄念。

それでも、悲しいから、耐えられないから、嫌だと叫ぶんだ——
「……………」

獣のような笑みを消し、胡乱な目で俺を見るユーゴー。

それと同時に撒き散らされていた威圧が凧いだように静まり返るが、それは戦意を仕舞い込んだのでは断じて無く、俺は今まさに噴火寸前の火口を覗き込んでいるようだど錯覚していた。

「俺の役目はシュン——、お前の足留めだ。そして転生者は殺さない、それが俺たちの共通認識。だが、よ………」

無表情のまま静かに呟くユーゴー。

何の感情も見えない能面のような顔だからこそ感じる、寒々しい怖気が肌を粟立たせた。

「試してやるよ、お前の覚悟って奴を」

自嘲気味に呟かれたそれが——

命懸けの対話、その開戦を告げる合図となった。

「おらアツ!!」

迅雷としか言えない速度で距離を詰め、ユーゴーは俺の目の前に現れる。

裂帛の声と共に振り下ろされるのは、無手の拳。

だが、何も持っていないから油断することは出来ない、何故なら——

飛び退き数瞬前に俺が居た地面が、爆音と土煙を吹き荒らしながらクレーターとなった。

その爆心地の近くに居た、俺とハイリンスさんがたたらを踏んで吹き飛ぶ。

「シュンくん!」

『やらせないわ!』

無理な回避で姿勢の崩れている俺に迫撃はさせまいと、ユーリとフェイの光弾が連続して幾多も放たれる。

流星雨のように見える光魔法の弾幕による援護。

以前見たユーゴーのスキルには光耐性などは無かったが、だからといって通用するはずもなく、光弾の雨に曝されているというのに拳を叩きつけた姿勢から、何も感じていないかのように平然と体を起こしていた。

纏れそうになる足を叱咤し、全力で後退しながら俺は叫ぶ。

「先生は、どうしたッ!？」

「安心しなッ！ 先生は保護対象だ、無事に決まってるんだろ。……ただまあ、真実が受け入れられないって様子だったからよ、……眠らしてやったさ」

一瞬、悲しげな気配を滲ませたユーゴー。

だが、それは瞬時に覆い隠され、冷酷な仮面を再び被った。

「お前、まさか本当は……ッ」

『下がって、シュン!』

横合いから高密度な光の奔流が、俺を避けてユーゴーだけを呑み込む。

そしてフェイが、竜の咆哮と念話、二つ同時に叫びながら突進する。

『あんだ。いつからそんな化物になったのさッ!』

「いつから? 下らねえ理由でお前らに八つ当たりして馬鹿みたいに学園を追い出されてからさ。このクソみたいな地獄の中で、文字通り死にそうになりながら鍛え上げた以外にあるかよッ!」

『ッ！ へえ、自覚はあるんだ』

光を圧縮して作り上げた鎧のようなものを纏ったフェイが、ユーゴーと対峙する。

揃えた爪からも鋭利な光刃が伸びており、それと併せて人外特有の射程距離の長さを活かして、接近しすぎないよう慎重に立ち回っている。

全身凶器となった巨体が、大胆ながらも隙を極力減らした連撃を、苛烈に叩き込む。

それに対し、その場でユーゴーは暴風のように四肢を動かし、片っ端から撃ち落としていた。

「甘えエツ！」

『——うクツ!?』

砕け散るフェイの光鎧。

大きく引き絞られた拳がフェイに狙いを定める前に割り込んだのは、爆炎と治癒の光。

「無茶すぎですわ！」

「私たちの事も、忘れないでよね！」

「微力ながら、俺も加勢するぞツ」

吹き荒れる衝撃波は、ハイリンスさんが大盾で防ぐ。

その背後で、カティアとユーリが動く。

炎を目眩ましとして、裏では地面や大気を同時操作して死角から容赦無く攻め立てるカティア。

治癒の奇跡を願い舞い降りた柔らかな光が、一瞬の内に何十と交錯した激戦で疲弊したフェイを優しく包み込む。

「ふふ、ふふふふ！ ユーゴーくん！ 転生者は殺さないと言うのなら、なんでもの時、私が死にかけるような攻撃をしたの！」

瞳孔が完全に開いた怖気のある目を見開きながら、ユーリがゾツとするほど冷たい声でユーゴーを詰問する。

それに申し訳無さそうな顔をしつつも、戦いの手を止めずにユーゴーは答えた。

「……何を言っても言い訳にしかならねえ。だが、悪かったと思っている。それだけだ」

王都でのユーリを殺しかけた経緯の説明や、その明確な謝罪も何も言わず、ただ短く自責の念を呟くだけのユーゴー。

「どうやら、キツイお仕置きが必要みたいだね。神様に懺悔する覚悟はいい？」

「くはッ！ お仕置きには少しばかりトラウマがあんだよ。そいつは勘弁だなあッ!!」

それに対し、笑顔だが背後に鬼の姿が幻視してしまうユーリが、不意打ち気味に魔法を撃つ。

他の魔法を目眩ましにして高速で飛んできた魔法を、敢えて防御も

何もせず受けたユーゴー。

その一発は罰だとして甘んじて受けたが、次に向かってきた魔法は獣のように四肢を旋回させ、ステータスの暴力によって打ち砕いていた。

だが、向こうが直接的な攻撃を封じた上で、手加減に手加減を重ねられている状況なのに、この剣山の上で綱渡りをするかのような極限状況に戦慄する。

ユーゴーは、これまで一度も俺たちに直接的な攻撃をしていない。

空を叩いた事で発生した衝撃波や大地を踏み抜き移動した際の風圧で、俺たちを吹き飛ばす以外には攻撃らしい攻撃は行って来ないというのに、既に俺たちは満身創痍一步手前だ。

ここまでの瞬くような攻防で、ユーゴーが痛痒等で顔を顰める事すら一切無し。

なのに、俺たちは肩で息するほど、崖っぷちにまで追い詰められていた。

「さて……。おい、シユン」

数メートル、ユーゴーからすれば刹那の内に詰められる距離で立ち止まったあいつは、失望の色を隠せない声色で俺に尋ねてきた。

「なんで、今も剣を抜かねえんだ？ 嘗めてんのか？ 億が一の勝機があつたとして、武器も無しに勝てると思っちゃいけないだろう」

動揺が、カチャリと鏗鳴りとなって腰元の剣に添えられた手から、悲しく響いた。

そんな余裕なんて無いが、剣を抜いていないのは慢心でも驕っている訳でも無い。

そう俺は——、人相手に剣を抜く事が出来なくなっていたんだ。

「……出来ない」

「……………そうかよ」

それに気付いたのは、ついさっき。

草間を追い駆けていた時に、俺は自覚してしまった。

情報を聞き出すために草間の事を生け捕りにしようという気持ちもあつて、血を流さない制圧をするためという言い訳もあつた。

だが、本来なら武器も無しに追い掛けるのは愚の骨頂だろう。何度も、剣を引き抜こうと腕に力を込めた。

でも、抜けなかった。

命を奪うための道具である剣を人に向けるという事が、何よりも恐ろしく感じたんだ。

情けない。

泣きたいほど恥じているし、悔しくて惨めで、どうしようもなく無様だった。

「ああん？ それは何のつもりだ、シユン？」

——でも、剣が抜けない事に気付いたからこそ、踏ん切りがついた事もある。

「シユン!？」

「ちよつと!？」

「シユンくん!？」

「シユンツ！」

俺は、鞘に納まったままの剣を、地面に落とした。

これでもう、手元に武器と呼べるものは無い。

「ユーゴー、ただ話がしたいんだ。受けてくれるか？」

全面降伏、白旗を上げる、ギブアップ……

俺が選んだ選択というのは、戦わないという選択だった。

両手を頭の後ろで組む。

どうあがいても勝つ事は不可能。

そして、奇跡が起きて勝ったとしても、俺たちに出来る事は何一つとして存在していない。

とんでもない醜態だろう。

今までの俺を、築いてきた何もかもを、ドブに捨てるかのような行為だ。

でも、構わない。

本当は、最初からこうすべきだった。

命を奪う罪、それを自覚した、フェイの親である地竜を殺した、あの日から。

俺は人だ。

どうしようもないほど、ただの弱くて愚かな人間なんだ。

そんな、ただの人には、こんな力なんて要らなかつたんだと、昔から俺は気付いていたんだ。

「……」

絶句するユーゴー。

不思議そうに俺を見ながら、荒々しい覇気も何もかもが霧散していた。

分からないのか、そうだよな。

なら、もつと分かり易く、身体で示そう。

「——ッ」

仲間たちが息を呑む音が聞こえた。

見たくないよな、こんな姿。

でもごめん、こうするのが一番分かり易いから——

「頼む！ 転生者たちをッ、みんなを助けるために手を貸してくれッ！」

膝をつき、泥に塗れた湿っぽく饅えた地面へと、自ら頭を擦り付ける。

恥も外聞も押し殺して、俺は敵だったユーゴーに土下座していた。

ただ、全ては……

転生者を救う、それだけのために。

俺は、誇りも尊厳もかなくなり捨てて、今世での家族と国をメチャクチャにした仇敵に対し、嘆願しているのだった。

「——ア、——、ッッ」

口を開閉させるも、言葉が出て来ないユーゴー。

それを数度繰り返し返した後に、ゆっくりと口角が吊り上がっていく。

「……………はは、ははは」

呆けた顔をしたまま、乾いた笑いが響く。

その声は段々と大きくなり、次第に喉を震わせて全身で可笑しさを表現していた。

「あつはは、ははははっはッ!!! ……ははっ、底抜けの馬鹿だなあ……
シユンは」

苦笑気味に、前髪を掻き上げながら高笑いを上げるユーゴー。
そして一転、俺たちを優しげな目で見詰め、邪気の感じられない朗らかな笑みを浮かべる。

「止めだ、止め。相当な覚悟が無きや、こんな馬鹿出来んだろ。俺の負けだ」

その言葉の通りにユーゴーも、両手をヒラヒラとさせて無抵抗の意を示す。

一瞬、ある方向をチラリと見て、ユーゴーは一度深く息を吸う、そして。

「——おい、出てこいよ。途中から見ていたの気付いてるぞ。お前の親友が一世一代の馬鹿やってんだ。何も言わずにいるつもりか？」

突然、ユーゴーが遠くへ向かって大声で叫んだ。

すると、限界まで絞り抜かれた長身の男が、樹々の上から音もなく降り立ってきた。

その男は、俺の前にしゃがむと、泥で汚れるのも気にせず優しく俺を起こす。

引き起こされた俺の視線と男の顔が間近で交差したとき、俺の心に去来した感情はなんて言えばいいんだろう。

納得？ 動揺？ 切なさ？ それとも、歓喜だろうか。

戦慄く口と心から、自然と声が漏れ出ていた。

「……京也」

「久しぶり、俊」

俺とカティアイや叶多の、前世で共通の親友、笹島京也。

その顔が、今日の前にあった。

「憶えててくれていたんだ。イメージ変わったから分からないと思っていたけど、流石俊だね。ゲーム三昧でも点取れる記憶力は、今も健在って事かな」

親しげに話し掛けてくる京也。

けど憐憫と、あとは羨ましさ？

そんな感情を瞳の奥に隠した顔で、俺を真っ直ぐ見ていた。

「京也、本当にお前なのか……っ」

「そうだよ。正真正銘、笹島京也本人さ。叶多も、久しぶり」
思わず、分かりきった事を何度も聞いてしまっていた。

それに対し、穏やかな声で答えるものの、何処か様子のおかしい京也。

柔らかな笑みだけど、やや俯きがちで視線がズレているように見えたからだ。

まるで、俺を直視するのが怖いとでも言いたげで。

「俊、見せて貰ったよ。君の覚悟を」

微笑んでいる。

でもそれは弱々しくて、今にも泣き出しそうな顔で京也は言う。

「その上で、僕も覚悟を示すために言うよ。僕は、エルフを滅ぼしに来た」

「……そう、だよな」

もう既に、一目見た瞬間から直感していた事だ。

京也は、管理者を助ける側についているんだって。

「僕はね。今世の家族を殺したという重罪を禊ぐために、人殺しという罪を塗り重ねているんだ」

その独白に、跳ね上がるように顔を上げる。

突然語られた重い過去の吐露に、俺も仲間たちも瞠目している。

「羨ましいよ。正しさのために、全てを擲つ覚悟のある俊は」

「俺は……」

違う。

そんな事無い。

俺には、これしか無かったんだ、これしか選べなかったんだ。

愚かにも臆病にも逃げた先に、唯一残された道でしか無いんだよ、京也。

「でも、僕はこれからも人殺しをしていく。僕はこの道を変える気は無い。やった事を後悔する事もしない。永遠に……罪と向き合い続けるんだ」

絞り出すかのように掠れながらの京也の宣誓は、胸が潰れそうほど痛々しかった。

けど、それに掛け合わせる言葉を、俺は持っていない。

俺とは違った意味で、絶対に譲ることの出来ない信念を示した男に何もしてやれない事に、俺はまた悔しくなった。

——弱い、つなあああアツツ、俺えツ。

涙は見せない。

ただ歯を食いしばって、耐え忍ぶだけだ。

親友の心を救ってやる事も、地獄へと駆ける親友を止める事も出来ない。

そんな俺に出来る事は——

「なあ、京也——俺は、お前の親友だよな」

その問いに、京也は一度目を閉じてから、力強く答えた。

「ああ、今も変わっていない。そう思いたいよ、俊」

けどその声は、涙ぐんでいるかのように震えていた。

そっか、お前も、同じなのか——

決して、俺とは相容れない思想だろう。

逃げた俺と、立ち向かった京也。

それでも親友として、いかなる時でも対等でありたい。

京也が犯した罪を直視しても、繋がった友情は消してはならないんだと思うから。

友が誤った道に居るのなら、正すのが親友。

友が間違いを犯そうとしているのなら、止めるのが親友。

友が犯した罪に苦しんでいるのなら、寄り添い救うのが親友だ。

だから——

「俺は……、前世でも今世でも、どんな京也でも、ずっと親友だ。なあ、そうだと京也」

俺は京也を、逃げずに受け止める事にしたんだ。

地獄？ 結構、俺もいい場所になんて行けそうに無い。

お前が親友である、それを永遠にするだけ。

それだけなら、俺でも出来るだろう？

「……あの」

気まずそうに、けどよく通る澄んだ声が響いた。

それに全員が同時に振り返ると、視線が一斉に集まった事で、一瞬ビクリと硬直する白い少女の姿が。

「帝国軍と魔族軍に撤退指示を」

その静かながらも、良く通る声。

只々白いとしか表現出来ないような、そんな少女の顔は――

「……若葉さん？」

白い髪。

白い肌、白い服。

色合いこそ真つ白だけど、その顔は死んだと聞かされたクラスメイトとそっくりで。

目を閉じていても分かる、前世でよく目にし鮮烈に記憶に残っている顔だった。

「まじか……」

「……うん？ 嘘でしょ？」

「そんな、どうして？」

カティアたちが信じられないといった感じで、当惑の声漏れる。

それに対し、白い少女は首を傾げると重々しく口を開いて、こう言った。

「旧交を温めてがてら、諸々説明したいところではありますが、今はお互い忙しい身です。それは日を改めて」

何故か、ユーゴーと京也が物凄く驚いているが、それを見て見ぬ振りする白い少女。

そして最後に一言。

「……転生者は無事。だから安心して」

そして、そこにいたのが夢幻であったかのように、フツと消える白い少女。

その声の持ち主は、その容姿は、死んだはずの転生者、若葉姫色に
他ならなかった。

50 闇に酔う

超高密度のエネルギーを内包している光弾と砲撃が、稲妻の如き速度で天から降り注ぐ。

あらゆる物を焼き滅ぼすかのような閃光が射線上にある大気や樹木を消滅させつつ、轟音と共に迫ってきていた。

逃げられるような場所は存在していない。

雨霰と降り注ぐ爆撃と光弾は周囲の枯れ森ごと吹き飛ばし、あらゆる物体を巻き込みながら地上を燃え盛る焦土へと変えていった。

そんなものを景気良く大盤振る舞いにバラ撒くのは、黒き鋼で出来たウニのような浮遊兵器。

更に言えば、一つでさえ投射される火力は圧倒的なのに、それが数十機も居るのだから爆撃の雨に抑えつけられて身動きが取れない。

荒れ狂う爆発と熱に、十分な防御を取れなかつた眷属たちが粉々に粉碎されては焼き焦がされ、依代を失つた魂たちが次々と、私の内側にある世界へと戻ってきているのを感じる。

「ツう、ああッ——！」

すぐさま物理強度を引き上げて、物理砲弾とエネルギー弾の入り混じった爆撃を防ぐ。

そこへ無数の爆雷が、大気の悲鳴を響かせながら一斉に襲い掛かって、障壁へと重い負荷を加えてきていた。

結界など、術者自身の外側に展開する防御手段は使えない。

使用不可な理屈は至極単純、今私が使っている枯死の力は自身が発動させた障壁であろうとも、影響範囲内に出現させれば瞬時に形を失ってしまうから。

魔術を崩す効果、威力を減衰させる効果は、以前使っていた結界とは比べ物にならない出力。

だからこそ、自身の内側に作用する強化や防御で身を守るしか無いし、外部へ放出して遠距離を攻撃する魔術は当然の如く無意味になって実質使用不可になっていた。

そして、黒鋼のウニから砲撃の威力は、先程身を持って

体感していった。
伝わってきた。

直撃すれば簡単に四肢の一つや二つ消し飛ばされ、悪ければ全身が消滅する。

超高密度のエネルギー体だけなら、枯らして減衰させる事が出来ていた。

しかし、実体のある砲弾は純粋な運動エネルギーによって破壊を齎してくるので、吸収しがたい運動エネルギーと消せない質量により実質不意打ちのような攻撃を受けてしまった事で、少なくともは眷属たちみんなが吹き飛ばされ、実体を保てずに地上から掻き消されてしまっていた。

その事実には歯噛みしてしまう。

——接近出来ない、私には打つ手が無い。

今の状態でのみ使える《枯死》という能力の弱点は、効果の届く射程距離である。

触ればエネルギーを枯らし、魂だろうと奪い取る力であっても、近付く事が出来なければ意味を為さないのだから。

先程までの機械兵器は、動きが素早くとも地上戦が基本であり、強化した反射神経で追える程度の速度でしか無かった。

そして向こうの攻撃手段と、此方の能力相性が圧倒的なまでに有利であった事もあって、容易く撃破する事が出来ていたけれど、黒鋼のウニのように只管距離を取りながら上空に居座られると、それは突如として一変し、機械兵器との戦いが急激に難しくなってしまったのだった。

幾多もの砲塔が、怒涛の轟炎を吹き上がらせる。

既に、私や眷属たちに対して有効打に成り得る物理弾頭主体に切り替えており、最大限に強化して交差した腕で防ぐものの、砲弾が激突した部位から闇色の粒子が流血のように噴出していた。

弾かれたり外れた砲弾は、焦げ付いた臭いを撒き散らしながら砕け散り、飛散した破片が超高熱の火炎を発生させる。

それらは肌を焼く前に無効化されるが、火という根本的に相容れな

い現象が齎す不快さまでは、消してはくれない。

次第に数を減らしていく、眷属たちみんな。

外界へと呼び出している時は、エネルギーを分け与えて生み出した仮の体でしかないから、肉体が消失したとしても、それは死を意味しないから喪失や別離で嘆くことは無い。

けれど、みんなが塵となって消えていく光景には心を痛めるし、前後左右から全身を打ち据える衝撃波によって、体重の軽いこの体は何度も吹き飛ばされそうになっていた。

「近づけない……」

思わず呟く。

隙間なんて無いような密度の砲撃の前では、飛翔して接近しようにも無慈悲な爆炎によって押し返されてしまうだろう。

それを潜り抜けて触れたとしても、一触一殺が限度。

数十もある黒鋼のウニを相手にするには時間が掛かり過ぎて、先にこの状態の発動限界に達してしまうだろう。

「動けない……」

唐突に、鼓膜すら越えて骨の髄まで震わせるような、落雷の音すら生温い天罰のような轟音が、やや遠くの場所から大気を大きく揺らしながら伝播してきた。

意識を僅かに向けて確認してみれば、どうやら白ちゃんの異空間から飛び出した隕石が、向こうで戦うクイーンタラテクトと交戦していた黒鋼のウニに、激突した音のようだった。

その隕石弾に直撃した黒鋼のウニは、揺さぶられた事で一時的に砲撃を止めているが、砲の一つすらも折れたり欠けたりする事は無く、無傷の姿を悠然と空から見せ付けていた。

どうやら抗魔術結界だけでは無く、物理防御に特化した結界も展開した、二層構造になった結界が張られているようだ。と瞬時に理解する。

構造や原理は、今の私と同じ展開方法だと思おう。

外側に抗魔術結界を張って、内側に物理防御結界を張っている構造。

魔術による攻撃は抗魔術結界で阻害し、物理的な攻撃は物理防御の結界に防がれる。

最大限の防御効果を持たせるために、エネルギーの無駄遣いとか言えない設計をしている機械兵器に、鈍い怒りが心の奥底に沈殿していく。

こんなにも星を貪って、今までの人々の努力を無に帰す代物を作り出していた事に、悲憤で心が張り裂けそうなほど煮え滾って猛り狂う。

怒りは、ドロリとした熱にして魂に焚べる。

そして、如何にして黒鋼のウニを即時撃破させる方法について考える。

結界そのものは、障害にはならない。

触れる事さえ出来れば、どんな妨害を張り巡らせていようと、阻む障害ごと枯らして侵蝕していけると確信しているが、届かなければ意味が無い。

ふと、白ちゃんはどうか処しているのか気になった。

瞼を開け、瞳に高密度のエネルギーを纏わせて、黒鋼のウニを睨んでいる。

その視線の先にある黒鋼のウニは、展開していた結界が分解され浮遊するための魔術すらも食い尽くされて、地上に落下していくのが見えた。

そして、黒鋼のウニから白ちゃんへと流れ込むエネルギーの奔流。察するに、何かしらの邪眼によって、結界や魔術ごとアリエルさんの暴食のようにエネルギーに変換する事で、相手の魔術を無効化しつつエネルギーを食らうものだと思われる。

向こうでも無数の黒鋼のウニに囲まれていた。

そして気づけば、百機以上もの黒鋼のウニがエルフの里上空に浮かんでおり、それらの中心には正三角錐の何かまでもが、悠々と浮かんでいた。

まだ、こんなに出てくるのか？

——気を逸していたのが悪かったのか、その極大の危機感に気付いた時にはもう遅かった。

黒鋼のウニの大編隊、その中心にいる正三角錐の機械兵器が燦然と発光し始める。

そして、一瞬の後に眩い光が、極大のレーザーとなつて動けずにいた私に向かって発射された。

「ぐうッ!？」

実体の無い超高密度のエネルギーが、私たちをジリジリと焦がす。枯らしても減らしきれないエネルギーによって、身が削られていくのを感じていた。

このまま受け続ければ、死の一步手前。

大量のエネルギーを消費して耐えたとしても、そうなれば弱りに弱つた私では後が無い。

白ちゃんほど空間魔術が得意では無い私では、逃げる事も不可能だった。

いわゆる、詰みに近い状況。

どうすればいい？ どうしたら窮地を脱出出来る？

削られていく身とエネルギーと共に、眷属たちみんなの悲鳴が聴こえる。

嫌、死にたくないし、死なせたくないかない。

誰も苦痛の中で死んでほしくなんか無い、幸せに生きて欲しいから。

私はどうなってもいい。

ただ、みんなには生きていて欲しいだけなのだから。

その無情な現実を認識した私は——

——なら、どうしますか？

何処か次元の異なる場所から、問い掛ける声に。

力を——

みんなを守る力を、と——

その内容も意味も理解しないまま、無意識の内に答えていて。
——良いでしょう。

この世全て遊技盤、そう哄笑しながら悦楽の笑みを浮かべる存在は、狂喜して祝福を謳う。

愉悦に満ちた声が、その選択を肯定していた。

「詠い始めよう、大地の女神と攫呪わレシ娘トノ詩ヲ——」
再び紡がれる、祈りの解号。

だが、願う祈りの色彩には、闇が混じっていた——

私は、再度魔術を編み直すために、祈りの言葉を口にした。

呼応するように、溢れ流れ出す死想の闇が、私と世界を満たしていく。

抑えられていた殺意の波動が解放され、純度を増した枯死の狂嵐が吹き出し荒れ狂う。

死ね、死ね、死ね——、枯レテ死ネ。

純化していく精神は、黒い情動で染め上げられていく。

ただただ、相対する敵の死を願い続けて、無限に叫喚し続ける破滅への讃歌。

爪デ引キ裂ケ、齒ヲ突キ立テロ、纏ウ闇デ、アラユル生命呪イ尽クセ——

膨れ上がる闇の波動で、眼前に浮かぶ敵を撃滅しよう。

悍ましく、けれど懐かしい超越的な闇の気配が私を包み込んで、禍々しい力を具現していた。

そのために、まずは——

「枯れてしまえ——」

超高密度エネルギーの砲撃が、瞬く間に枯れて無に吞まれていく。

その速度や吸収効率、影響範囲は、先程までのものとは格段に違う別物となって世界を喰らう。

正三角錐から放たれていた極大のレーザーが、跡形もなく消滅し

た。

急激に跳ね上がった力によって減衰能力の出力も極限の域にまで高められており、枯らして吸収するエネルギーが光線の威力を上回って、途中で存在しなかったかのように掻き消えていた。

続く黒鋼のウニから轟音と共に、物理砲弾の弾幕が飛来してくる。だけど、それに焦らずただ手を翳した。

枯渴の法が、生物やエネルギーだけでは無く、無機物にまで手を伸ばして枯らそうとしていく。

先程までは完全には防ぎきれなかった物理砲弾も、能力圏内に囚われれば何百何千年も経過して風化したかのような、ボロボロの鉄屑となつて崩壊し暴風に吞まれて流されていった。

この物悲しく生命の消えた光景は、まるで――

「終末の世界よッ！ 世界を害スル存在、全て消シテしまえッ!!」

枯れ落ちろ、崩れてしまえ――、滅んだモノを糧にして、世界の再生は成し遂げられる。

終末を経験して漸く、――世界は黄泉還るのだから。
猛り狂う終焉の風。

幾多もの砲門が閃光を瞬かせるが、その破壊の魔弾全てが虚無と粉塵へと変えられていく。

その力は見境なく世界を襲っていた。

「――ウア」

水気を失い罅割れた大地を踏みしめながら、大きく息を吸い込む。ただ、そうであるのが自然なように、表情が凶相へと歪んでいく。そして、闇が集つたかのような崩壊と再形成を繰り返す翅を背中に生み出すと――

「――アハッ、堕ちてしまえ」

世界の害悪が不遜にも空に浮かんでいて目障りだったから、私は宙へと飛翔した。

その背後に、眷属たちみんなを、置き去りにしながら。

砲撃の流星雨と、魔性の彗星が踊り狂う。

空というキャンバスに、破滅を告げる光が煌めき瞬いては走る。

けれど、ある一点だけは世界が違うかのように闇に染まり、寂滅して凧いでいた。

「——あハハ、まズは一機」

黒い軌跡を描きながら呐喊した魔星は、その手に顕現させた闇の魔槍で撫でるように触れる。

それだけで世界を穢す不純物は、世界の礎となるエネルギーへと崩壊し闇に溶け消えていった。

彼女が編んだ法則は最高域を突破して駆動し、そしてそれは今なお更新し続けていく。

——光が消える、熱が消える、物質が消える。

森羅万象全て崩壊しると、熱に浮かされたような歪な凶相で、酔い痴れながら歌う。

その姿はまるで、いつかの迷宮での状態に戻っていたかのようで。

……酷く懐かしくも、目眩がしそうなほど痛ましい姿で、闇に囚われて踊っていた。

「アはハハはh a h a h a h a h a h a h a h aハッツ!!」

幼気な幼子のように、けれど普通では無い音色で歌声を奏でながら、彼女は宙を駆け巡る。

宙に闇が走ると、道中にあつた穢らわしき鋼は塵となって、一つ二つ次々と黒ずんだ枯砂に風化して砕け散った。

紅潮しまるで別人のような、匂い立つ色香で艶然と笑う少女。

その彼女と深淵に繋がる闇との同調が深まっていく。

故に、浮かび上がってくるものがある。

本来の光が今、塗り潰されようとしていることに——

彼女の願いとは正反対の方向に進ませる、悪辣な闇の呪いに魂が穢されようとしていた。

「——ウア?」

天高く遙か上の空間に亀裂が浮かび、それが広がって蜘蛛の巣のよ
うな模様が描かれていく。

その向こうから、悲しむように憐れむように覗き込み見詰める、幾
万の紅き眼球。

哀傷に涙を滲ませる邪眼が、彼女の姿を捉えていた。

視線に晒された彼女のその身から、エネルギーが抜け出していく。
それと同時に纏う飛翔や強化の魔術が、邪視に喰われながら分解さ
れていた。

「ツジィー！」

姿勢をグラつかせる魔星の少女。

そこに、さらなる邪眼が縛りを加える。

時間の静止、恐怖の喚起、重圧の増加、そして空間の固定。

その縛鎖に絡め取られ、動きを止める闇。

だが、代償として彼女が纏う崩壊を司るエネルギーを吸収した蜘蛛
たちは、その身を塵へと変じさせながらも抜けてしまった穴を次から
次へと埋めて、一時も止める事無く邪眼で縛り続ける。

その動きづらさを不快と感じ、普段彼女が言わないような、憎しみに
満ちた悪態が漏れる。

「邪魔ヲ、すルなツ！」

今なお膨張し続ける闇を外へと爆発させ、枷を引き千切る。

その衝撃で、僅かに残った屑鉄も粉碎され、塵となって吹き消され
た。

残るのは死に体の三角錐だけ、それもまた喰らい尽くすという執念
に取り憑かれた邪眼によって地へと墜落していくのだった。

そんな荒れ狂う彼女の前に立ち塞がった、黒い刃の大鎌を持つ白い
少女。

「Dめ……、これはお前の差し金か？」

空間の壁を足場として空に立つ彼女は、複雑極まる苦々しい表情
で、吐き捨てるように言う。

その開かれた瞳には窺い知れないほどの、多すぎる感情が籠められ
ているようだった。

怒り？ 悲哀？ 屈辱？ 憐憫？

いいや、どれも確かに存在するが、どれも違う、正しく無い。

「ふざけるな、こんな現実認めて堪るか。大ッ嫌いだよ」

肩を震わせながら白の少女は気炎を滾らせ、魂を懸けて宣誓する。

「ああ、そうさ。お前がこういう事繰り返すってんなら、何度だつて抗つてやるさ」

大鎌を構えて突き付ける。

同じ闇でも違う色の闇が、哀絶に絶叫して泣き喚く。

「だから……ッ、正気に戻ってよ、コケちゃんッ！」

二つの闇が、今交差した。

蜘蛛13 死へと堕ちた乙女

ああ、懐かしいな。

嫌になるほど、いつかの記憶とダブって既視感を憶える状況だ。いつもこうだ。

私たちの関係と運命は、戦いたくないのに、戦わざるを得なくする。笑えるよね。

友達だつて思っているのにさ、こうしてお互い傷付け合う状況でしか、素直になれない自分が、本当嫌になるよ。

「アはハハはh a h a h a h a h a h aハハツツ!!」

嬌笑を上げながら襲い掛かってくるコケちゃん。

振り下ろされた闇の魔槍を、大鎌の拒絶の刃で受け流して回避する。

遠心力と突進の勢いが乗った一撃は重く鋭いけど、触れるわけにはいかない。

触れたら最後、あの槍の攻撃はそういうものだから。

一種の外道攻撃のようなもので、あの槍が纏うエネルギーは此方の魂を侵蝕して汚染してくる、ヤバめの性質を帯びているのが、解析に特化した邪眼によつて把握していた。

神同士の殺し合いにおいては、大別すると二つの戦い方がある。即ち、削り切るか、魂を砕くか。

削り切るとは、神が持つ膨大なエネルギーを全て消費させる事。

エネルギーが無くなれば神だつて、ただの生物と変わらなくなってしまう。

その状態になってしまえば肉体の再生も魂の保護も出来ず、煮るなり焼くなり好き放題な貧弱な状態に追い込まれるだろう。

魂を砕く方法の代表例が、外道魔法と深淵魔法。

神を倒しうる手段をサラツとスキルとして仕込んでいたDに痺れないし憧れない。

そんなもの神でも何でも無い、ただの人々に使わせるなよ。

それらの魔法は、神になってシステムをサポートを失った私には、

構築難度が高すぎて組むことすら出来ず再現不可能な代物だ。

魂っていうのは生物の核そのもので、神にとつては本体であり動力炉。

幾ら神でも、これを砕かれたりすれば生きてはいけない。

本体なんだから、当然と言えば当然なんだけどね。

神々の戦いでは、こつちが主流。

魂を砕く手段を持ち、それを防ぐ手段を持つ。

如何に必殺の一撃を当てるか、そして防ぐかが重要なんだと、神の基本講座とやらにあった。

魂を砕くなんて、つい最近まで私には出来なかった。

裏技で神になったようなもので下積みも何にも無い私には、魔術に関する知識や経験値の絶対量が足りていないからだ。

それを引つ繰り返せるのが得意属性というか、権能っていう自身に適した法則ってやつ。

私個人が空間の支配で、半身たる大鎌が因果拒絶の法則だ。

その拒絶の法則を直接叩き込めば、それなりに魂を砕ける必殺の一撃にはなると思う。

なんで元が同じ私だというのに、別々の法則を司っているのかは知らない。

多分、空間の素養が本体に残り、闇とか腐蝕とかの因子が大鎌に移ったとか、そんな単純な理屈だと思う。

つまるところ、私本来の力は、大鎌と合わせた時にこそ、完全に発揮出来る能力だ。

大鎌抜きは私は片手落ちどころじゃないくらい、能力を扱えていなかった。

そりゃあ、今迄ただの道具としか見ていなかったんだから、大鎌の力を使えなくて当たり前か。

現に、大鎌の能力を発動していなかったら即死してもオカシクはないほど、この周辺の空間は危険極まる状況だ。

終末の法則に汚染された大気が、暗雲となって周囲を漂っている。

これを吸い込んだり皮膚に触れたりしてしまえば、たちまち肉体が崩れ落ちて塵となるだろう。

そのコケちゃんが支配している空間に全力で抗っているのが、拒絶の法を重ねた空間の鎧だ。

どこその目隠しクス野郎の無限を作る空間じゃないけど、支配下の空間内では私に対し害となるものは何であろうと因果から拒絶されて排除している。

これによって無秩序にバラ撒かれる呪詛は、完全にシャットアウト出来ていた。

……ただ、この鎧があつたとしても、闇の魔槍のように圧縮されている攻撃を喰らうわけには、いけないのが現状で、防戦一方だった。

「チイツ!?!」

「遊ぼう? 遊ぼうヨ、白ちゃん!」

こんの!?

その顔で、その声で、コケちゃんが絶対やらないだろう事をするな!

互いに重力だの何だのを操作して、空中を滑るように疾走しながら斬り結ぶ。

闇の魔槍も、拒絶の大鎌も、どちらも当たれば必殺を宿しながらも、虚しく空を切るばかり。

この大鎌をコケちゃんに振るえだつて?

出来る訳無いだろツ、そんな事!!

まるで出来の悪い茶番みたいな私たちの争いは仕組まれたモノであり、その原因についても既に理解していた。

今のコケちゃんは、操り人形だ。

中身が、魂が違う。

あの身体を操っているのは、別の意思だ。

拒絶して作り変えた邪眼、その眼には今もコケちゃんへと流れ込む闇の力の源泉を捉えていた。

Dから押し付けられ、コケちゃんに渡したあの怪しげな本。

あれが、コケちゃんが豹変した原因で、狂気に駆り立てている異常

の根本だ。

思えば、そう都合良く強くなれる手段を何の対価も無しにあのDが渡すとは思えないと、気付けそうなものなのに私は見過ごしていた。最初から仕組まれていたんだろう。

あの詠唱が完成すれば、Dとのパスが生まれる。

其処から力を引き出せば、魂はDの力に穢され、勝手に暴走し始めるって寸法に違いない。

畜生ツ……、悪辣なDもムカつくけど、何も考えず渡した私自身にも腹が立つ。

よく考えれば私もDの影響をモロに受けた存在だし、何か仕込まれてたりで危ないのではと思うけど、現時点では問題になりそうなモノは排除されている感じだった。

それは悪影響を及ぼしそうなDの因子が大鎌に集中したのと、それが因果拒絶という外部からの影響を排除するのに特化した能力に進化した事によって、実質的に無害化しているからだ。

決定的に分岐したのは、システム中枢で大鎌を覚醒させた時からだろう。

あの時から私は、以前の私とは別人となった。

大鎌という、もう一人の自分を受け入れ孤高を捨てたその時が、呪いを断ち切る起点となった。

変わらなかつた私という存在があるとするならば、そいつはきつと寂しい奴だろう。

多分きつと、コケちゃんに出会えなかつた世界での自分だ。

自分の心に他人を入れるなんて、正気じゃないって言うでしょうね。

でも、本当に大切な人なら、邪魔じゃない、痛くない、苦しくないんだ。

温かい、安らぐ、幸せ。

そんな小さな想いが、心を満たしてくれるんだ。

大切な人は、拒めない。

向こうの私からすれば、無駄と呼ぶようなモノを受け入れたから、

得られた温かさもある。

だから私は、そんな愚かで白痴な私が嫌い。

もしも、コケちゃんを知らなかった私では、自分しか愛していない空虚な生き物だろうから。

以前の私に中身が無いのも当然だよね。

だって私は、あいつの身代わりだし。

元が元だからね、世界最悪の邪神なんて名乗る奴よ。

まともな精神性なんて、最初からあるはずが無い。

そのの写し身である私も、最初は心の中身が一人で自己完結していたし。

疑問にすら思っていないかったもの。

自分が一人でいることに。

自分が何よりも上で、その他大勢は見下すのがデフォルトな、その傲慢な考え方に。

あれが、Dの地金に近い部分。

力の差がありすぎて何もかもが格下だから、見下すのが当たり前な思考。

私が無意識に驕ったり油断してピンチになったりしてたのは、こういう根っこの考えが染み付いていたからだと思う。

最弱の魔物だったと、その苦労や辛さを自覚しているはずなのに、何度もピンチになったのは、きっとそういう事。

癩癩起こしたガキか、見るに耐えん。

いきあたりばったりだし、考えが甘い。

ストレス少なく何事にも気楽に行けるのは、それはそれで良い点だろうけど、あんな状態じゃあ薄っぺらいにも程があるぞ、私。

あいつの呪いともいえる性質を、完全には抜けきれなかった。

だから、それを拒絶する。

私はDの人形じゃないんだって、証明してやる。

「ドウシテ？… どうシテ白ちゃんハ邪魔ヲするの？」

喜悦に染まり狂乱しつつも、その言葉には偽りなき真摯な想いが籠められていると分かる声で、コケちゃんが問い掛けてきた。

「どうしてって……ッ」

「コンナ事してイる連中、生キテいる価値なんテ無いでシヨウ!」

一瞬、コケちゃんの視線がブレる。

その先には、残骸と化したつよロボやウニの姿。

「許シがたい。白ちゃんハ血肉を吸ワレ蝕まれタトして、恨ミを抱かナイと言えル?」

……ああ、何となくコケちゃんが言いたい事が分かってしまった。

星もまた大地という、巨大な肉体と魂を持つ生命体だ。

コケちゃんは常々、星のことを気にしていた。

それは、私たちが生きる環境に大きく影響する重要な土台だからつてのもあつたけど、どうにもそれだけでは無い理由もあつた気がする。

それが、これか――

「酷イ、なんて酷い。コンナ死ぬ寸前にまで星ヲ追い込ンデ、ドウして知らヌ顔デ愚かにも暮らしていらレルのか」

悲痛に吼える、コケちゃんの隠れていた想い。

続く言葉は私でも考えざるを得ない、この星全ての住人に向けた訴えだつた。

真実を失伝させられていたというのは、知っている。

神言教が禁忌の取得を制限し処罰してきたからこそ、耐えきれずにヤケに走る人間が出ないようにして、今の社会が出来上がったのだから。

異常気象などは、星が行う免疫反応。

不調に対し環境を変動させて排除する大掛かりな、星が生きている証。

今はそれすらも出来ないほど、死に体な状態の星なのだと言を枯らして叫ぶ、そして――

「デモ、それでも思つてシマウ。ナンデ生きてイルのかと」
罪を償え、せめて苦惱しろ。

システムは罰だというのに、恩恵だけ享受しているのは、許せない。コケちゃんの怒りとは、それだった。

粘つくような赫怒が空間を充滿し、それと共に速度が上がった猛攻を凌ぐ。

流星のように彗星のように、目にも留まらぬ速度で空を突き抜ける私たちだったけれど、戦いの場所はエルフの里上空の範囲に留まっていた。

途中でUFOみたいなのが出てきたけど、私たちの戦いの余波によって装甲板が大きく抉られて大穴が空き術式も砕かれ墜落したので、たぶんポテイマスの最終兵器とかなんだらうけど、そっちを気にしている余裕がない。

その大穴から魔王が突入していったのがチラツと視界に映ったから、元凶の始末は魔王が着けてくれるはず。

問題はこつちだ。

まだコケちゃん本来の意識が残っているのか分かんないけど、帝国軍や魔族軍が撤退している方とは別の方角へと、少しずつ移動しているのを知覚していた。

それに僅かな希望を見出し、少しの安堵を感じるが、戦況は悪くなる一方だ。

何故なら、撒き散らされた闇の濃度が上昇し始めているからに他ならない。

この仄暗い闇は、終末を齎す汚染された大気であるのは知っている。

それを支配力を高めた空間によって遮断しているけど、これが高まっていけばどうなるか分からない。

突破されるか、押し潰されるか。

向こうのエネルギーに干渉するのが悪手な現状では、強固な空間で影響を拒絶するしかない。

今のコケちゃんが纏うエネルギーは、触れた相手を穢して崩壊させる呪いに満ちた代物だ。

暴食の邪眼でエネルギーを喰らってしまった分体が次々と崩壊した事からも、その凶悪な性質は明らかである。

それは空間の支配範囲を広げようと、空気中に漂う残留した闇のエネルギーに干渉した時にも、容赦無く発揮されていた。

自分の周囲だけを、不可侵の領域として保つだけで精一杯。

性質のえげつなさだけで、私の手札の多数を問答無用で潰していた。

「ふう……ッ!?!」

空間の鎧に掛かる負荷が増大した。

ジワジワと、拒絶の法を越えて侵蝕されてきているのが分かる。

どうすればいいのかは、最初から分かっている。

あの本を破壊すればいい。

ただ一瞬たりとも気を緩めることが出来ない状況では、コケちゃんの腰に吊り下げられている本だけを、大鎌によって破壊するのは厳しいとしか言えない。

せめて、刹那だけでもいい、動きが止まれば……

「ああ、アア……コンナ瀕死の重病な星に対シテ、癒やすコトもせず鞭打つような存在、死ンダほうがマシ。救えない、救えない、救えない……」

謔言のように、喋り始めるコケちゃん。

その内容は、先程の怒りと同じものによるものだったが、今度のは深度が違った。

「モウイイ、糧になっテヨ。ソレだけしカ、期待シナイし望まナイから……」

許さない、認めない。星を穢させてなるものか。

そういう狂気に汚染されて高まった負の感情が爆発しようとしていた。

「自然ニ還つて……。星に沿って生き、星のタメに死ヌ。滅ンデしまえ、全テ何もかも。——他の生命なんテ、死んでシマえばイイ!!」

激発した破滅を願う慟哭に、私は思わず叫び返していた。

それは、この戦いの中であるものを視界の隅に映していたから——

「ならッ！ あれも、死んでしまえと言うのか!? コケちゃんの言うみんな、大事じゃないって言うつもりなのかッ!? 答えろッ!!!」

隙を晒すと理解していたが、大鎌を大振りで叩きつける。

それを難なく防ぐコケちゃんだが、籠められていた重みまでは止められず姿勢が流れる。

そして視線が私から別の方に移る、その先には――

「――ッ」

魂の繋がりによって、過剰に注がれる闇に苦しみ悶えるコケちゃんの眷属たち。

それを認識したコケちゃんが、息を吞んで表情が固まり、体の動きが止まる。

それと同時に、闇に染まっていたコケちゃんの魂に光が戻ろうとしていた。

小さな、だけど本来のコケちゃんの輝きが。

「――ッ、今だああアッ!!」

拒絶の法則は最大強度、呪いの因果を断ち切る想いを籠めて、大鎌を振り抜く。

それを認識したコケちゃんだが、精彩を欠いた動きで泥の中にいるよう。

先程までの超反応は見る影もない。

闇の意思と、本来の意識が対抗し合っているんだろう。

この奇跡を逃すわけには、いかない!

◇ 私を訴える
◆ 私を救うために競わせる
△ 大切な人を救うために競わせる
◇ 大切な人を救うために競わせる
◆ 大切な人を救うために競わせる
■ 大切な人を救うために競わせる
◇ 大切な人を救うために競わせる
◆ 大切な人を救うために競わせる
■ 大切な人を救うために競わせる
□ !!

「打ち砕けッ！ 死滅鎌理イツ!!」

暗黒天体のような、全てを呑み込み破壊するような黒色の刃が、呪いの本に突き刺さる。

――バキリと、罅が入って割れるような音が。

大鎌に穿かれた本はコケちゃんから引き剥がされ宙を舞い、僅かに震えると次の瞬間には粉々に砕け散って微細な塵となり消滅した。

コケちゃんが纏っていた闇と術理が、力の源泉を失った事で霧散して溶けていく。

もう——、終末を齎す法則は描かれてはいない。

闇の中から、元の色彩に戻ったコケちゃんが現れる。

崩れ落ち地面へと落下しようとする彼女を、慌てて抱き留めた。

……軽い、見た目以上に軽く感じる。

こんな小さな身体で、あんな怒りを溜め込んでいたのかと、気付いてやれなかった自分に怒りを憶える。

「……うう」

「目は覚めたかい？」

「ごめんね……、白ちゃん」

ほんとだよ。

エネルギーをかなり無駄遣いしたんだから……あれ？

予想より、減っていない。

さっきの戦いで消費したにしては、残っているエネルギーの量が多い。

まるで、戦いの最中にエネルギーが増えたかのよう。

周囲の環境などにあるものからエネルギーに変換したり、魂そのものから湧き上がるエネルギーもあるが、この上がり幅は可笑しい。

思わず大鎌を見る。

私自身に変な影響や呪いなどは、絡まっていない。

なら、このエネルギーは何処から来たんだろう。

釈然としない疑問を抱えつつも、これは悪いものでは無い。

そう感じていて、今は腕に抱いたコケちゃんの事を気にするべきだろうと意識を切り替える。

闇の残滓が残っているけど、コケちゃんの魂は光を取り戻した。

狂わせた源泉である本も壊した事で、今のコケちゃんにDとの繋がりにらしきものは無い。

再び、コケちゃんの魂が穢されるような事は無いだろう。

けど、絡んだ繋がりはもう一つある。

システムとの呪縛、それは断ち切れなかった。

この繋がりの強度は、全力で干渉してもびくともしない。

それは決してシステムからは逃げられないと言っているような、偏

執的なまでの恐ろしい執念が籠もっているようだった。

「ううっ……ッ、そういえば、機械兵器は？」

「しばらく寝てていいよ、コケちゃん。もう終わったと思うから」

……ポテイマス不倒すという、大仕事は終わった。

ならば、システムを終わらせるのが、最後の仕事だ。

それが……大切な人を救う、唯一の方法だから。

さあ、女神の意に沿わないとしても、私のエゴのため犠牲になってくれ、人類よ。

51 終戦：王に寄り添う者達

カツカツと、温かみのない無機質な床と壁で覆われた船内に、足音が響く。

照明が落とされ無明の闇が広がる長大な通路を、一人の少女が進んでいた。

此処は、ポティマスが最終手段として星から脱出するために用意していた宇宙船。

UFOでイメージされるような巨大な円盤状の船、その内部であった。

ガラスの向こう側にある工場や農園などの施設を一瞥しながら、少女は歩み続ける。

防衛用のロボットやポティマスの分体を蹴散らし、漸く辿り着いた最深部。

その場所には、透明な筒の中に身動き一つせず機械に繋がれ、延命に継ぐ延命によって古き時代から生き続けていたエルフの老人が浮かんでいた。

「やめろ！ 止めろ辞めろ病めろオツ!? 終わりたくない！ 終わって良い筈が無いッ！ 私は永遠に生き続けなければならないんだ！

頼む！ 止めてくれエツツ!!」

部屋に取り付けられたスピーカーから、延々と見苦しい絶叫と懇願が迸る。

ただただ生きること固執して、人からエルフとなり、その寿命を大きく越えた年月を無理矢理生き続けていた哀れな男は、痩せさらばえた醜い姿と成り果しても、その矮小な本質は変わる事がなかったのだ。

「残念ながら、ポティマス。あんたには死よりも、もつと酷い目にあつて貰うよ」

男を見上げる少女が、口を開く。

その声は淡々としていて良きも悪しきも、どちらの感情も籠もつてはいなかった。

「……深淵魔法」

狂乱する男を取り囲むように、緻密な魔法陣が浮かび上がる。

その魔法は、魂を分解しシステムへと還元させる魔法。

生きることだけに全てを費やし星すら犠牲にしようとした男の末路は、自らが破滅に追い込んだ星のために己の魂を贄として捧げさせ償わせる事だった。

「クソ、クソツ、クソオオツツ!! お前のツ! お前の不老の秘密さえ解き明かせていれば! お前が、お前があアツツ!!!」

怨嗟と嫉妬に満ち、意味をなさなくなった声が喚き散らす。

彼が作り出した被造物、その中で唯一成功とも言える不老の少女は、口を軽く開いたかと思うとキツく閉じ直す。

そのとき彼女が思っていた事は、単純な疑問。

『死なないために生きてきた、あんたの人生は……。その最初の願いに何か意味があったのか?』

けれど、聞いたところで意味は無いだろうと、少女は言葉を飲み込む。

彼の原点を聞いたところで、過ぎ去った時は戻らないし、それを聞いて赦されるほど甘い罪では無いのだから。

代わりに手向ける、最期の言葉は――

「じゃあね、お父さん」

魔法陣が光を放つ。

そして後に残されたのは、何も無くなってしまった事による静寂だけだった。

「もう大丈夫だから……、いい加減放して欲しいんだけど……」

「全然大丈夫そうじゃ無いし、放したら逃げるでしょ?」

「……うう」

「体、崩れかけているんだから、コケちゃんもジツとしてなっ」

とても長い通路を、白ちゃんに抱えられて進んでいる私。

いわゆる横抱きとも或いはお姫様抱っこなどと呼ばれる、背中と太ももの裏から体を支える持ち方で抱えられた私は、抵抗も虚しくとうよりは抵抗する元氣も無い状態で、そのまま白ちゃんの腕の中にて運ばれていた。

白ちゃんが言う通り、無理に術を解除した反動によって下手に力を加えるとボロボロと崩れてしまう今の体では、ただ歩く事だけでも難しく極限まで消耗した状態で他の魔術を発動させるのも、自壊を招くだけの行為になるだろう。

故に、今はこうして運ばれている方が良いのが確かなのだけど——
「少し気恥ずかしいのだけど……」

「知りません、聞きませーんっ。勝手に無茶して暴走した人の言葉なんて聞こえませーんっ」

「本当に反省しています……」

言葉尻が小さくなりながらも、深い反省と感謝の想いを伝える。

あのとき白ちゃんに助けられる事が無かったら、どうなっていたか。

術の暴走により正気を失い狂乱に落ちた私は、荒れ狂う感情に吞まれ目につくモノ全てに対し、怒りと暴虐の衝動を向けていた。

あのまま止められる事なく暴走していた場合、エルフの里を壊滅させるだけに留まらず、帝国軍魔族軍果ては世界全てに生きる生命に対しても、怒りと殺意が向いて止まる事も出来ずに、虐殺者として墮ちていただろう。

あの時に私は、苛烈な考えについても、吐き捨てるように叫んでいた。

けれど……あれらの言葉も確かに、私の本心であった。
魂に根付く、憎しみと恨みの想い。

それは禁忌によって知った、星が破滅に至る過程を直接叩き込まれて、芽吹いた感情だった。

繁栄と利便性を享受しつつも、その反面本質を理解しないまま星の生命力を消費し続けて自らの首を絞める事になった、過去の罪に囚われこの星に転生し続けている人類の愚かさ。

それを忘れ去り安穩と生きて永遠に解放されない魂の、なんて盲目な命と人生なのか。

けれど、私がこの世界の人達に憤慨するのも断罪しようとする事も、本当は傲慢なことなのだと言付いていた。

何故なら自分もまた、愚かな人類の側に属していたのだと知っているから。

この星は破滅寸前になった。

そしてそれは現在進行系の形で、前世の地球でも同じような事が当て嵌まっていた。

年々と季節が巡る度に、悪い方向へと変わっていく空気。

刻一刻と肌で感じる不安が増していくのを自覚しているのに、何もせず現代の技術の良い面だけ見て楽しんで、けれど資源の大量消費や環境破壊など悪い面には見て見ぬ振りをしていた。

その果てに待つのが、この星と同じような破滅だと薄っすら理解していても、だ。

力も無い、知恵も無い、世論へ訴えかける声も無い。

何か大それた事を成し遂げる能力なんて、ただの高校生でしかない前世の私に、持ち合わせてはいなかった。

それでも、些細な事なら出来たはずだった。

節電、冷暖房の温度設定、食品ロスを減らす、 unnecessary 消費を減らす、ゴミのリサイクル……

テレビやネットとかで、色んな問題提起について知っていたのに、……私は何もしていない。

むしろ、無駄遣いする方の人間だったのだから。

現代における強欲の罪とは、浪費の事だ。

システムから見透かされていた私の罪に、どう言い繕えばいいというのだろうか？

こういう事は、無理に強制されるものでもするものでも無いのは、分かっている。

けれど、恥じる気持ちも無しに誰かの批難だけを言うのは、明らかになお門違いでしかない。

まずは自分自身に向けるべき、愚かさへの怒り。

それが私の奥底で渦巻く感情の、全ての源流だった。

もはや、この星はそんな小さなものでは救えないとしても……

この星に生きる者として、果たすべき事とは……もうずっと前から決まっているのだから。

「それで、あの暴走についてコケちゃん本人からは自覚あったの？

まさか何も憶えていないとは言わないよね？ 原因があの本にある事は分かっているんだ、キリキリ吐いて貰うよ」

虚偽や誤魔化しは許さないという視線が突き刺さる。

それを受けて私は、一度瞼を閉じて考えを纏めていく。

そして、真っ向から見詰め返しながら静かに口を開いた。

「あくまで予測でしか無いけどいい？ まずは——」

正気に戻った時に感じたのは、大きな存在との繋がりを絶たれた喪失感。

そして、今迄把握すらも出来ていなかった、強大なナニカによって魂を支配されていた感覚に、気付いた事だった。

ずっと前から種を仕込まれ、これまでの干渉……神仰、神化、あの本、■■の大魔術。

それらによって、無自覚のまま根深く侵蝕していた呪いが発芽した結果が、あの暴走だった。

「細かい事は省くけれど、結果としてDさんに弄ばれていた……って事になるんだよね」

全て最初から、そうなるように仕組まれていた。

面白くするため。

そんな理由で、迂遠にも程がある仕込みを何重にも巡らせて、起爆するのが今か今かと、彼女は楽しみにしていたのだろう。

正直、驚きは無い。

憤りこそしても、あり得ると納得もしてしまうから、驚愕には値しない。

彼女ならやって当然、そんな悪い信頼があるからこそその結論だった。

「けど……、だからと言って何もせず、手をこまねておく訳にもいかないでしょ」

白ちゃんの言葉は、尤もである。

今回は、暴走の元凶であつたあの魔術本を壊した事で、呪いからは解放された。

持っていた力の幾つかが失われたけれど、胸の内に潜んでいた闇も歪みが消えて、本来あるべき色合いへと薄まっていた。

けれど、本来ならこんな回りくどい事をしなくても、何時でも支配出来たくらいに力の差がある事を、一瞬とはいえDさんの力と繋がつた私には身に沁みて思い知らされていた。

対抗策を見出さなければ、待つのは彼女の胸三寸次第で再び操り人形と化す未来。

本当の意味での自由を勝ち取るのなら、せめて最低限でも抗えるだけの何かが必要だつた。

私も、白ちゃんも、そんな在り方には否と唱える点では共通している。

なら、だけど、しかし――

「でも、今のままではほんの僅かに抗うだけでも不可能なくらいに出来る事が無いよ。そんな簡単な事では無いのは白ちゃんも良く知っていると思う。それこそ、神としての位階を上げるくらいの事でもしなければ、効果的な方法には辿り着けないはず」

それはつまり、現状では不可能。

格の劣る者が上回る存在を前にして、勝つのはとても難しい。

ましてや、その差が一と天文学的な数字とを比べているようでは、話にならない。

圧倒的質量によって押し潰されるのが、目に見えている。

総量で立ち向かうのは無茶無謀。

なら逆に、そう簡単には押し潰されない強度を――

そういった方面を突き詰めた場合こそが、神としての位階を上げるというものであるが。

「けれど、今の私には……あの本を失つた私には、あの大魔術はもう使

えない。残滓みたいなのはあるけれど、もはや以前とは比べ物にならないくらいに劣化したものしか、今後は発動出来ないと思う……」

死への想いが混じっていた祈りの形では、もう上手く回らない。感覚は憶えているから再現こそ出来ても、もはやそれは私が描いたモノでは無い別物になる。

そんな予感を、構築も何もする前から魂で感じ取っていた。

しかし、白ちゃんは首を横に振る。

「私だって、見様見真似で似たような事が出来たんだよ？　なら、今度はコケちゃんが思う正しい形で、なんにも頼らずに作ればいいじゃん」

短く息を呑む。

その通りだった。

導き出した答えが間違っていたから、やり直しは利かないとは誰が決めた事？

そもそも、最初から異物が仕込まれていた問いなど、正しい答えには成りはしないのだから。

「そうだよね……うん。ありがとう白ちゃん、何か分かったような気がする」

闇混じりの負に傾いた願いは、あの形へ。

なら光を求めた願いの祈りは、また違った形を見せるはず。

悪い面を知っているからこそ、良い面も素晴らしい愛しいと想えるのだと……

そうだとも、本当は——枯れ果てた終末世界なんて望んでいない。描いていたのは、それすらも乗り越えて埋め尽くす——優しい翠を。

願ってしまったから——理想の救済が訪れるその日まで、苦しくても進むって。

でも今は……

強張った体の力を抜いていく。

白ちゃんに重さも心も全て、預けていった。

……誰かの腕の中で休んでも、いいよね。

「というか、……重くは無いの？」

「むしろ軽過ぎて余裕」

「それはそれで、チビだと言われているようで複雑……っ」

非常に長い長い通路を抜けて白ちゃんに抱えられたまま着いた場所は、無数の画面とキーボードのようなものが並ぶこの宇宙船らしき巨大な鋼の制御室と呼べる場所だった。

其処では、アリエルさんが中央にある椅子に座って目の前の画面を見詰めていた。

「終わったよ……っつて、どうしたのさ二人とも。イチヤイチャ見せ付けてるつもり？ それ」

操作の手を止めて肩越しに此方に振り向くと、アリエルさんは呆れたような詠いも少々混じった声で、私たちを出迎えた。

此処まで白ちゃんに抱かれたままなのを思い出し、指摘された事で気恥ずかしさが強く蘇る。

「おっ、降ろして……ッ」

「ええー……。もうちよつとフザケておきたかったけど……まあいや」

「あーそういうのイイから。これ見て」

これまでの道中でだいぶ安定してきた体の状態を、白ちゃんに確認されてから漸く解放された私は、駆け足でアリエルさんの隣に立ち画面を覗き込む。

同じように白ちゃんも、反対側に立つとアリエルさんが指差す画面の内容を追っていく。

「……これは」

「ロクでもないわな、ポティマスらしいけど」

転生者の魂を利用した神化実験。

システムの力だけでは、自身は神に成れないと見切りをつけた。

幾ら経験値という名の魂を集めても、限界を突破する事が出来な

い。

なら異なる世界の人間の魂を使えば、或いは限界を突破出来るかもしれない……

そういう理屈で、綿密に考証と検討を重ねた試みについて記されていた。

「まあ、ポティマスも本気でこれで神に成れるなんて、思ってたなかったんじゃない？ ……もしかしたらっていう淡い希望みたいな」

「でも、その割にはすごい慎重に理論を検証して、装置作ってるみたいなんですけどー？」

「ポティマスゆえ致し方なし」

映し出されている文章の中には、実験を成功させるための理論検証や機材の開発準備についても事細かに記してあり、転生者を集めたのもスキルを取らせず生活させたのも全て、成功する確率が天文学的な低さの実験のために苦勞と努力の跡が滲み出ているかのような記録だった。

「……言つては何だけど、根本的に神とは何かというのを間違っている理論だよね」

偶発的に神という存在に成った私と白ちゃんだけど、だからこそ分かってしまう。

そもそも、魂を混ぜ合わせる事は無意味どころか、遠ざかっていく方向性でしか無いのだから。

一つの器に無数の色を注ぎ込んでも濁ったナニカが出来るだけで、それは不安定で脆い。

揺らぐ事の無い強靱な魂でしか、限界を越えた成長と進化には辿り着けないのだから。

もし、ポティマスが神に成りたかったのなら、まずは自分の魂を強固にするべきだった。

そういう意味では、惜しかったけれど最後の一步が足りていなかったのかもしれない。

純粹だけど虚ろ。

彼の魂とは、そんなモノだったのだから。

「ほーん？ まあ神とはなんぞやと問答する時じゃないよね。言いたいののは、あと一年遅かったら機材も完成していて、転生者たちはミキサーに掛けられていたかもしれないってこと」

肩を竦めて鼻白んだ顔をしているアリエルさん。

恐ろしい事を言っているけれど、まさにその通りだった。

病的なほど慎重だったからこそ私たちの作戦が間に合ったけれど、もし何かしらの要因で時期が前後していれば、間違いなく惨いと言えない未来もあったかもしれないのだから。

「これ以外にも、此処にはポティマスのこれまでの研究結果の資料が、わんさか」

「わお」

「跡形も無く、廃棄で」

つい声に出してしまったような白ちゃんと、食い気味で判決を下す私。

どうせロクでもない実験の記録なのは分かっているし、残すべきでは無い内容は誰にも知られずに消えるべきだと思う。

何故、駄目な事なのか。

それだけが、タブーとしての禁忌にされるだけで充分。

「最終的にはそうだけどさ。取り敢えず何か見落としが無いか、ざっと中身確認してからね」

「それが良いんじゃない？ コケちゃん」

「……それなら、まあ」

念のため、巨大な画面を確認しながら眺めていると、アリエルさんが呟く。

「こっちは、こんな感じだけど二人の方は？ なんで争っていたのか理由は聞いてもいい事？」

「……それは」

「あー……」

外から見た場合だと、理由も無く突如争いだした私たちになるけれど、その原因について語るとなると、色々深い事情が絡みつつも単純な事に帰結して、それを説明すればこうなるのも当然。

「なんだよそれ！ 邪神名乗ってるにしても、なんて酷いことする奴なんだッ！ Dつてのは！」

椅子の肘掛け部分をカツカツと指で叩き、憤慨しているアリエルさん。

私たちのために憤ってくれているのが分かり、それは心が温かくなる事だけど話が進まなくなるので、その事は私たち自身がなんとかするしか無いと言って話を終わらせた。

「余波で地下諸共エルフの里は何もかもが消滅。唯一残っているのは、この宇宙船だけ」

「そしてエルフの生き残りは、先生だけってね」

上空から見た場合、このガラム大森林の中心がポツカリと荒廃した土地で挟られているだろう。

エルフの里で人が住んでいたような場所は全て、その範囲の中に呑み込まれていた。

もはや、ポティマスの下僕で人形でしかなかった純粋なエルフは、この星には存在していない。

残っているのは、血が薄まってポティマスの支配下には無かった、混血のエルフだけ。

「そっか、じゃあ後は、この宇宙船を壊せば本当にお終いか」

「……感慨深い？」

「そうだね。区切りが着いた」

澄んだ瞳を湛えた横顔は、清々しい解放感を噛み締めているように。

「ああ、そうだ。……約束、守ったよ。無事に目標達成しました、つてね」

椅子を回転させて振り返ったアリエルさんは、何でもないような平気な振りをしたまま穏やかな顔で笑っていた。

「それが無事と言えるの？」

「死ななきや安い」

「……最初から気付いていたけれど、詳しく見せて」

アリエルさんの体には、治癒されたのか傷などは何も無い。

けれど、その魂には、深い傷が刻まれヒビ割れていた。
もはや穴が空いて萎んだ風船。

勢いよく抜け落ちた中身には、燃え尽きる寸前の弱々しい灯火しか残ってはいなかった。

「どんな感じ？」

「んー。たぶん、少し休めば日常生活に支障がないくらいには動けるようになると思う。今まともに動けないのは魔力が枯渇しちゃってるから。それさえ回復すれば、とりあえず動けはする」

「コケちゃんの診断は？」

「絶対安静。それでも、何もせず放置した場合は五年すら持たないと思う」

アリエルさんは謙譲によって、魂の器ごと薪にして燃やし尽くしたのだから。

それを考えれば魂が残り、謙譲の終了後に即死しなかっただけでも奇跡に等しかった。

元々限界に近く、アリエルさんの寿命はあまり残されてはいなかった。

それでも、あと数十年は余裕で持つ筈だった。

けれど今は、僅か数年で尽きて消滅してしまうような命になっていて……

「つまり、戦闘は不可能、と」

「さらに寿命を縮めていいならできなくはないけどね」

「魔王」

「冗談だって。どっちにしろ私の寿命はもう長くなかったんだから。ちよっと早まったくらいで、何の問題も無いよ。五年もあるんだ、残りを見届けるための余生には充分過ぎるよ」

——思い出せ。

元々補助が無くとも使っていた、チカラ権能なのだから。

白ちゃんとアリエルさんの会話も雑音として排除し、自己へと没入していく。

私本来の色で紡ぎ直した祈り、その断片は……

——暗闇の世界は移り変わり、再びあらゆる花々が、色彩豊かに咲き乱れる時が来る。

「すう………《花冠を贈ろう、愛しき貴方へと》」

そつと右手を翳す。

同時に、清廉な空気と甘い花の香りが、燐光と共に柔らかく吹いた。その平穏に満ちた風はアリエルさんを包み込み、優しく浸透していく。

文字通り魂を砕いてでも決着をつけ勝った彼女に対し、その功績を讃えて祝福するかのような、温かくて慈しむ愛の抱擁。

それが齎すのは——

「体に力が、戻ってきてる？」

——優しく癒そう、誰もが平穏に生きるために。

あの時、初めて生み出した光は、癒やしだった。

それは、たとえ何度絶望しても狂気に堕ちても、誰かの幸せを願っていたから。

魂に空いた穴が塞がる。

ただ生きられるように、紡ぎ直して相応しき姿へと。

その際、深く魂に根付いたのは状態異常無効に付随する解毒の術理。

彼女には、これが必要だと自動的に導き出されて、魂の一部として混じり合っていた。

眩くも優しい碧き燐光が消える頃には、以前のように戦う事など出来ないけれど、それでも無茶さえしなければ身を守る程度なら可能なくらいに、魂が回復していたアリエルさんの姿があった。

「……もうちよつとだけなら頑張っても良いのかな。やっぱ、待つだけなんて性に合わないし！　ありがとうコケちゃん。あと少しだけ、一緒に戦わせてくれるかい？　白ちゃんも」

「うん、勿論っ」

「しよーがないなあーっ！　……折角の命擦り減らすなんて、魔王も大馬鹿だよ」

差し出されたアリエルさんの手に、大げさに溜め息を吐きながら白

ちゃんが手を添える。

「まだ、終わっちゃいないよ」

「知ってるよ。遂に始めるんだね？」

その言葉の意味は、説明せずとも同じモノが共有されていた。

世界の敵は、始末された。

ならば、世界を救うための最終章。

次こそが最後の犠牲だと懺悔しながらも、下す無慈悲な鉄槌。

その最後に、痛み分けだとしても星を救えるのなら、何でもしよう。

傷だらけでも死にかけでも、最後に生きて笑い合えたら勝利。

「何度だって誓おう、勝とうって」

そして私も、術を発動させた右手で二人の手に重ね合わせた。

「「あっ」」

その瞬間、微細な苔と孢子となって砕け散った、私の右手。

宙を舞う粒子が、翠色の煙幕を立ち込める。

さっきの魔術の行使によって、再び結合が脆くなっていた事による

事故だった。

「コクケくちやくんく?」

「最近、白ちゃんが過保護になった気がする」

「同感」

「お前らが私の知らない所で無茶して、ボロボロになるせいでしょうーがッ!!」

美人は怒っていても綺麗だけど、やっぱり怖い。

そんな事を思いつつ、この緩い空気が漂う空間に白ちゃんの怒号が響いていた。

再会する転生者たち

52 黎明の始まり

……ポティマスが逝ったか。

結局私は、他国の王とも呼べるDにみつともなくも頭を下げて、どうかサリエルと彼女が愛した世界を救ってくださいと、何もかも擲つて泣き付き頼み込んだ事くらいしか、自ら選択して結果を残せたモノは存在しない。

それすらも、正しかったのかと聞かれれば何も言えなくなってしまう体たらくだ。

「私たち管理者がするのは、監視と調整です。実に神らしいではありませんか。ですから、特定の誰かを殺そうとしたりは、してはいけませんよ？ サリエルもそれは望んでいないでしょう??」

Dにそのように言われては、私が彼女のために出来る事は殆ど無くなってしまった……

奴にとつては、ポティマスは生きている方が面白い人材だったのだろう。

盤面を賑やかにする悪役として、玩具にしているこの世界を混沌に掻き混ぜるための存在としてアイツは見られていた。

そして私自身も、盛大なただの娯楽のために利用する、便利な駒の一つでしかなかったのだ。

Dの考えについては奴と話した事がある、この世界に新たに誕生した神たちから聞いて、以前と全く変わっていないのだと改めて認識した。

……ああ、翠の方からな。

白いのは特定の相手以外には無口で喋らんから、まず会話が成立せん。

Dの玩具になったからこそ、この世界は他の神々の手出しも無かったと言えるが元より崩壊寸前の星だったのだ、Dの影響が無くても誰も見向きもしなかっただろうな。

誰が旨味の無い絞り滓の星に、態々手を伸ばすというのか。

あのDの縄張りに手を出す奇矯な神などいないとしても、こんな辺境の星、探せばそれこそ星の数ほどあるだろうから、目に見えて負債を抱えた代物など誰も欲しがりはいしまい。

もはや、怒りも擦り切れて保ち続けるのも難しいほど、気の遠くなる長い時間が過ぎた。

罪を犯して今もなお罪を償う宿命であるはずの人間に対して、幸せを願うほどにな。

ユリウス……ハイリンスとして生きている私の分体から見ている彼は、本当に良い奴だったよ。

何の含みもなく、あいつには幸せになって欲しかったと言えるほどだ。

もはや悩んでも後悔しても、何もかもが遅すぎた。

大事な時に選択の機会を逃してきた私は、この手で何かを掴めた事など一度もありはしない。

空回りばかりで、そこらの大衆と変わらないような、大きなうねりに流されるだけの存在。

……そんな私にも、決断の時が来ている、か。

なに、敵対はしないさ。

既に彼女らは、僅かな時間で私よりも神として上の存在となっている。

魂を保護する術も満足に使えん今の弱体化した状態では、勝算など欠片もありはしない。

そうなった経緯は不明だが、突如始まった彼女ら同士の戦いを見て、それは疑いようのない事実だと思いついた。

龍は先に生まれ長く生きている者から術を教えられて、力を付けていく。

その指導してくれる龍の長老たちが全員星から逃げて居なくなつたのでは、力を磨くことも成長させる事も出来んからな。

停滞、いやエネルギーを世界のために捧げ続けたのだから、退化か。所詮、張りぼてで無駄に時を重ねた龍でしかないのだよ、私は。

サリエル、アリエル……

私が幸せを願う者たちは、悉く貧乏籤を引いてきた。

孤児院の者たちも皆命を擲ち、人生も魂も全て、世界に捧げていた。

……彼女に似た翠の少女もまた、自分を犠牲にしようとしている可能性が高い。

人の世に分体を放って逃避に耽っていたこんな私でも、管理者なんだぞ。

気付くさ、普通。

犠牲になる順番があるというのなら、彼女より私の方が先だ。

自分の後始末は、自らが方を付けるしかあるまい。

不安は、残る。

彼女らも、Dの駒から抜け出せておらぬのか、妙な宿命が絡んでいるように見える。

でなければ、お互い命を奪い合う技を使ってまで、戦う事になどなるまい。

ああだが、白い方だけでも翠の方だけでも不安だが、きっと二人が共にあるのなら、この想いも託せるだろう。

どちらも極端な考えの持ち主だが、お互いの意見を合わせる事でフランスの取れた答えを導いてくれるはずだ。

頼むぞ、この世界を救ってくれ。

俺が居なくなった世界でもな……

どんな非日常の後でも、朝は何も変わる事は無くやって来る——

太陽の動きに関して非常に精確な体内時計が、朝日が登り始めた事

を知らせて私を起こす。

体の調子を確かめながら目を開けると、すぐ近くには白ちゃんとアリエルさんの顔があった。

「すびい……くかあ……」

「んん……」

少し驚いたけれど、理由を思い出して一人で納得する。

二人の顔をぼんやりと眺めながら昨日の記憶を振り返って、こうなった経緯がまあ大体私のせいだという事を思い出して、寝起きなのに重い溜め息をつくことになった。

「二人がまた無茶しないように、今夜は全員一緒に寝ること、いいねっ!？」

SFに登場する移民船のような巨大サイズの宇宙船から外に出て、開口一番白ちゃんが発したのは、そんな言葉だった。

そして、戦いに巻き込まれないよう撤退した事により、被害が少なかった外縁部で野営地を設営している魔族軍の本陣まで転移で連行されて、このエルフの里にまで来る時に使用していたアークタラテクトが背負う籠の中に押し込まれた、私とアリエルさん二人。

白ちゃん自身も連戦の疲労によって体調が万全とは言えないはずなのに、有無を言わずに実行された分かりにくい気遣いに対し、私とアリエルさんは苦笑するしかなかった。

嫌な訳では無い。

ただ、白ちゃんらしいなあと、思っただけ。

私たちが暴れに暴れたせいでエルフの里に無事な家屋など一つも無く、しかも急遽戦闘を中止させられ撤退すると、背後の戦場が消滅していくという状況に置かれた兵士たちの混乱は著しく、そんな彼らを尻目に勝手に暴れたのに勝手に休むという事に多少の罪悪感を憶えながらも、私たち三人は一度休息を取るために、一緒に横になつて寝ていたのであった。

……さて、これからどうしよう。

先に起きてしまったとはいえ、二人を起こしてしまうのは忍びない。

けれど、このまま何もせず居るのも少し退屈で、今もまだ外で忙しそうに動いている人が結構居るのに怠けているのも、なんだか落ち着かない感じだ。

状況把握のため周囲一帯に薄く意識を向けていると、感知範囲に見知った相手を見つけた。

その姿を確認した私は横にしていた体を起こして伸びをし、外で活動することを選んだ。

まずは、此処から出る事からかな？ ……ああ、一応書き置きも残しておこう。

白ちゃんが起きた時に私が居なかったら、また大騒ぎになりそうだからね。

現在この籠の内側は糸で覆われていて、外部からも内部からも出入りが出来ないように入口や窓などが堅牢に塞がれていた。

一時的に弱化している私たちの安全のために、マイホームなるものを作っているのは理解出来るけれど、こうも過剰防衛な光景が目に入ると白ちゃんは過保護だの心配性だのと思い、呆れつつも何だか温かく感じる気持ちが増える。

メモ書きを置いた後、私は換気用に空いている小さな空気穴に、そっと手を伸ばす。

そしてその向こうが籠の外に繋がっているのを確認して、自らの体を苔へと分解した。

——外側から見た籠、その一点の隙間から苔が溢れ出す。

その苔は、瞬く間に膨れ上がり人型を模ると、その中から一人の少女が姿を現した。

少女は数度自分の体や服装を確かめると、伏せて微動だにせずいた大蜘蛛を優しく労い、更に護衛として待機しているパペットタラテクト四人にも礼を告げてから、静かに歩き出していくのであった。

「確かこの辺りに……、あつ居た居た」

まだ早朝の時間。

魔族軍の各軍がそれぞれ幕営を建設し、テントが居並ぶ広場を眺めながら私がやってきたのは、第十軍に割り当てられた区画だった。

気配を殺しながら行き交う、白装束の団員たち。

そのスキルによって隠された存在感の無さによって、一見し誰も居ないのでは無いかと錯覚するような一角だけど、認識しづらいだけで行き交う白影の数は結構多い。

その中から、目当ての人物を見つけ出すと声を掛けようとしたけれど、それより先に相手の方が気付いて向こうから声を掛けられた。

「お目覚めになられましたか、副団長」

「おはよう、フェルミナちゃん。私たちが居ない間、問題は無かった？」

「緊急のものでしたら、特には」

駆け寄って来てピシッと折り目正しく直立する、第十軍の団長補佐フェルミナ。

といっても白ちゃんよりも私と接する機会が多いから、実質副団長補佐とも言えるけれど。

若干の焦げ臭さと死臭が風に乗って流れてくる道を歩きながら、私はフェルミナちゃんから現在の状況を聞いていく。

魔族軍と帝国軍の損害状況については、おおよそ予想していた通り。

ソフィアちゃんやラーズくん、ユーゴーやロナントという魔法使いなど、強者が配置されている一部の部隊を除いて、前線に出ていた部隊は壊滅的な損害を被っていた。

あの量産品の機械兵器ですら実際の強さは下位の龍を上回っていて、本来なら一般的な兵士では対処出来ない脅威であり、それと対峙してしまった帝国軍の部隊とかは文字通りの意味で全滅してしまっただころが多数とのこと。

魔族軍の方は、正面衝突をしている帝国軍を避け横合いから殴りつ

ける戦術を取っていたため、部隊の損害自体はそれほど多くは無く、機械兵器の相手を主にソフィアちゃんやラースくんたちが受け持った事によって、何も出来ずに壊滅するといった状況が少なかったのも理由だろう。

初期では、帝国軍の背後から不意打ちで襲撃する魔族軍という案も出されていたけれど、それは裏切りじみた策略を嫌った私とラースくんによって反対され、挟撃こそしないものの協力して戦うことなどしないし普通に巻き添えも見殺しもする程度の、中間案で作戦が敢行されていた。

なので各軍の損耗は、先に戦端を開いた帝国軍全体では、壊滅判定寸前の四割。

魔族軍では、全体の損耗率は一割程度。その内訳はラースくん率いる第八軍の人員が殆ど。

そして、身内となる第十軍の面々やソフィアちゃんメラゾフィスさんラースくんなどは、全員が戦いを切り抜けていた。

途中で戦闘を中止して引き上げた事も影響し、本来ならば敵わない相手との戦いにも関わらず、結果全体としての人的被害は、そこそこで終戦したのだった。

夜通しで戦後処理に奮闘していたであろう、疲労が色濃く浮かぶフェルミナちゃんから話を聞き終えた私は、大丈夫かと聞くと――
「私たちより他の軍団や帝国軍の方が、遺体の回収とかで忙しいですから」

そう言いながら皮肉げに作り笑いを浮かべ、フェルミナちゃんは肩を上げて下げるのであった。

「エルフの方は？」

「それがいつの間にか、死体も何もかも戦場から消失していたようですね……」

「……ああ、分かった。何も問題無い、それでいいよね？」

「承知しました」

つまりは白ちゃんが片付けた、そういう事だろう。

その方法については、詮索しないのが身のためだと思う。
エルフについて、そう言えば新たに分かった事があった。

ポティマスの複製体であるクローン、外部から拉致されエルフに改造された人、それらの子孫を含めたものが、エルフと呼ばれる種族である。

遙か昔からポティマスが自由に使える手駒として、時折外の血も混ぜ合わせながら作り出されたエルフという種だけど、そうになっていた最大の理由は、勤勉とそれに組み合わせた眷属支配スキルのために、であるらしい。

私たちが想定していた、勤勉による肉体乗っ取りと、魂の移動による不死についてだけど……

これまで何度も目撃した分体が示すように支配下にある存在を乗っ取る事は可能であるけれど、本来の肉体から魂を移し替えて擬似的な不死を成立させる行為までは、実はポティマスには出来なかった事らしい。

本来の勤勉には其処までの効果など無く、実際は他のスキルを一つだけ選び、それを超強化するだけの、元々魂を操作する事とは一切関係が無い支配者スキルだった。

それをポティマスは眷属支配のスキルと組み合わせる事で、己の血縁で被造物に当たるエルフに対し、絶対的な支配権を確立していたらしい。

それこそ、相手の魂ごと肉体も完全に乗っ取れるレベルで。

本体が延命装置の中で浮かんでいようとも、それがあつる限り自由に動かせる体には困らない。

だからポティマスは、保身のためでもあるが外部の事は全て完全支配した分体で活動し、本体は極限までの延命処置を施されて、エルフの里深奥に安置されていたとのこと。

白ちゃんが出来るからといって、ポティマスまでもが同じ事が出来る訳では無い。

つまり私たちがポティマスについて最も頭を悩ませていた、本体の魂が分体へと逃げ込まれ生き延びるといふ事は、全て杞憂という訳

だった。

最後の悪足掻きとして、先生ことファイリメスを人質にされる可能性もあったけれど、それは彼女がエルフの里に入る直前、密かに接触した眷属を通してコツソリと魂保護の魔術を仕込んでおいたから、結局のところ逆転の隠し玉はポティマスにはもう無かったという事である。

あんなに苦勞した大陸中のエルフ殲滅も、実は必要無かった事については考えない。

一応エルフの暗躍を阻止していた可能性が高いのだから、決して無駄な事では無かったはずで、それだけでも充分やる価値はあったと思いたいから。

「それで副団長。朝食は取られますか？ 既にソファイアさんが、勝手に、一人で食べていると思えますが」

「……いや、必要無いかな。お水だけでいいかも。ちよつと食欲無いから」

「用意させましょうか？」

「いいよ、自前のがあるから」

非常に便利故に再現した空間収納の魔術を使って、異空間から水筒を取り出す。

中身は果汁や蜂蜜などを混ぜた、この世界で自作したスポーツドリンクのようなもの。

それを飲みながら他の報告などを聞き、丁度撤退を始める直前に突如第十軍が待機していた場所のど真ん中に出現し保護した転生者たちの今の様子とか様々な事に耳を傾けていると、とある人物がこちらに向かって来ているのを、先んじて察知した。

同じく気付いたフェルミナちゃんが剣呑な気配に切り替わるが、それを制して私は、やって来た老人の方へと向き直した。

「何か御用ですか？ ロナント老」

「いえ、ただの挨拶で御座いますれば。帝国の改革以来、お久しぶりで御座います、苔様」

やたら仰々しく、狂信じみた熱を宿しながら深々と頭を下げているこのお爺さんは、先程話題にした帝国の魔法使いその人で、筆頭宮廷魔道士のロナント・オロゾイ。

そして、ユーゴーに手を貸して腐敗した帝国の立て直しに奔走していた時に、一目見るなり弟子にしてくれと、やたら気持ち悪い動きで土下座し縋り付いてきた変態でもある。

「魔法……いや魔術とは何と難しく、そして奥が深い。下賜された教えの少しですら満足に熟せぬ非才の身ではありますが、日々精進を重ねて簡易な魔術であれば行使出来るようになりました」

……驚いた、もうそこまで出来るように。

当時、私を発見するとあまりにもしつこく纏わり付いてくるので、彼の望み通り魔法の本来の姿である魔術の初歩を、ざっくりと教えては追い払うのを繰り返していた。

スキルを使わずシステムにも頼らない、己個人のみで行使する魔の術理。

その使い方と学び方については自分も通った道なので少しは解説出来たので、そう簡単では無いことを理解しつつも、この魔法狂いの老人が講義中は静かにマトモになるので続けていたところ、こうなっていた。

その結果として、変態から狂信者に進化してしまったのは、頭が痛い事実ではあるけれど。

「此度の戦い。苔様と白様が振るうお力に、儂は畏怖で体が震えました」

そして如何に素晴らしかったのかを、難解で普段の会話では使わない美辞麗句を並び立てて熱く語りだすロナント老を冷ややかに眺め、トリップに入っているのを良いことに認識障害も合わせて発動させて静かに気配を殺し、フェルミナちゃんも連れて抜け出すのであった。

……相手にしたくない人種というのも、色々ある。

疲労を感じているときには、それは顕著に現れるだろう。

——背後で奇声じみた賛美を唱え続ける、変人のように。

「——はっ、苔様はどちらに!? ま、待ってください! もっと、もっとお話をとおっ!!」

S 1 3 真相

……時を少し遡り、争いが中止して少し経った頃。

あの後……

互いに戦意を失い双方矛を収めることで戦いは有耶無耶となった。背後から心胆が冷え切るほどの轟音と閃光が鳴り響いたことで、やや強引に連れ出され戦場から抜け出した俺たち四人は、京也たちに案内されるまま無言で進んだ。

疑問は数多くあり、不安や警戒も勿論あった。

けど、予感がこの場に居ては不味いと叫び、また抵抗したとしてもユーゴーあるいは京也どちらにも敵わないだろうという、歴然とした実力差があったのも京也たちに素直に従った理由だ。

それにもし、拒絶したとしよう。

それで何が出来る？

ただでさえ実力は及ばず、大事な事は何も知らないというのに。

ならば、賭けでも何だろうと乗るしか無いと、その選択肢を選ぶしかなかった。

泥だらけの戦場から、走り抜けた先。

そうしてエルフの里も戦場も見えなくなるほど長い距離を移動した俺たちは、帝国軍のようだが何かが違う軍団の野営地へと足を踏み入れた。

その場所にて俺は、妹のスーと再会したのだった。

「兄様」

「スー……」

一見して、何かしらの拘束や不当な扱いが為されている訳でもなく、至って健康そうな姿を確認した俺は、安堵で胸を撫で下ろした。

しかし、やつと再会出来たスーの方は、俺を見詰めてはバツの悪そうな顔をしていた。

そして俺たちの背後にいるユーゴーや京也の姿を認識すると、二人

を射殺さんばかりに睨みつけていた。

「おいおい、そんな睨むなよ。お前の計画四われのお姫様が狂ったからと言って、俺に当たんどじやねえよ」

「……」

心底いい迷惑だと言わんばかりに、刺々しく殺意すら感じるような反応をしながら歩き続けて、俺の傍を通り過ぎ前に出るユーゴー。

それに対して京世の方は、何も言わず背後で静観の気配を崩さずにいた。

いや、やや雰囲気が強くなったか？

思うところがある。

けど、口を挟むべきでは無い。

そんな感じだ。

横目でちらりと二人の反応を見つつ、俺はスーに顔を向けた。

「無事……だったのか」

「ええ。兄様が心配するような事は、何一つとしてありません」

俺が声を掛けた途端、表情が一変する様は過去にもよく見た光景。

「ああ、必ず兄様が来てくれると信じていましたっ。きつと迎えに来てくれると」

そして言い切るや否や、俺に向かって飛び込もうとしたスーだったが、その行動はいつの間にか剣を抜き放っていたユーゴーが、スーの首筋へと白刃を添えていた事によって止められていた。

「ユーゴー！ お前っ」

「ハッ、なんだこの茶番。似合わねえぜ姫様よお？」

怒気すら滲んだ、ドスの効いた声が響く。

その声の主へと視線を向ければ、ユーゴーは真顔のまま続ける。

「なあ、シユン。まさかそいつが、ただの人質だったなんて、そう思ってたのか？」

「黙って、ユーゴー」

「効かねえよ。対策済みだっつーの、クソアマめ」

魔力が高まる気配を、スーから感じた。

何かしらのスキルを使ったのだと推察出来るが、それを受けたユー

ゴーの方は平然としており、胸襟の中から首飾りを引っ張り出した。翠色の球体が連なり青白い光が走る、真珠のネックレスにも似た首飾りが宙で揺れる。

「……チイッ！」

「今から言う事は真実だぜ。俺の言葉を信じる信じないは自由だが、そいつには恨みがあんだよ。この際だ、全部ブチ撒けてやるさ、真相つてのをな」

そうしてユーゴーが語ったのは、俄には信じ難い真実で。

俺たちは、全員例外無く衝撃を受ける事となった。

「まさか、そんな」

「スーちゃんが……？」

「へえ、ふーん？」

スーが自らの意思で、この騒動に協力していただつて？

それもずつと何年も前から、俺の命を盾に協力を迫られ、ユーゴーたち……いや若葉さんたちの計画とやらに、力を貸していたという。

サイリス兄様を壊したのも、ユーゴーがユーリを殺しかけた原因も、スーにあつたと？

そんな馬鹿な……

「違います兄様っ。スーは脅されて仕方無く……」

「だが、途中から乗り気だつたらうが。王国の混乱には、そいつの力が不可欠だつたんだからなあ」

元々は、敵対関係だつたユーゴーの視点で語られる真相とやらに、どれほどの信憑性があるのか俺には分からない。

けど、纏う雰囲気からは嘘を付いて混乱させようという気より、ただ隠す必要が無くなったから淡々と事実を暴露しようとしているようだった。

「色欲。そいつが獲得した支配者スキルで、効果は他者の洗脳。それによつて王国の兵士だとか、第二王子を操つてクーデター紛いを発生させたつて訳だ。……まあ、俺たちがそうした理由は王国上層部にポテイマスの洗脳が蔓延していたからなんだがな。王国は勇者を秘匿することに、やたら躍起になつていただろ？ まだ学生だから、政治

的な理由で、時期じゃない……適当な理由付けて勇者様は軟禁状態にして外の情報もシャットアウト、なあ変だろ？」

色欲だって？ しかも効果は洗脳？

じゃあ、あの処刑の時正気では無かったサイリス兄様は、スーがあのようにしたと？

そしてサイリス兄様は、もはや二度と元には戻らないだろうと言える状態だったのを、王国から離れる寸前の時に、残ったレストン兄様から聞いていた気がする。

そして思い返せば、確かに勇者の称号を受け継いでからの数ヶ月、その間俺の元には僅かな情報すらも、届くことは無かったが……

「それが正しいと証明出来る証拠はあるのか、ユーゴー」

「鑑定でも使えばいい。少なくともそいつが色欲持ってるのは、確認出来んだろ」

強い疑念の表情でカティアが問い質すと、ユーゴーは仏頂面で吐き捨てるように言う。

「洗脳されてた連中は全員殺した。生き残ってるのも、役割上残す必要があったシユン以外の王子くらいなもんだ。そいつらも、洗脳の上書きでブツ壊れたり、一度死んでからシユンの蘇生で復活したりで影響は残っちゃいねえよ。だからまあ、今証拠を出せと言われても何にもねえさ」

重苦しい沈黙が、周囲を包んだ。

王国転覆の真の理由がユーゴーの言う通りだとして、それに手助けをしたスー。

恐る恐る鑑定をスーに使えば、そのスキルの欄には色欲の文字があつて、その効果もユーゴーの言う通りで……

思わずスーから、一步後退りしてしまった。

その俺の反応に、ビクリと硬直して驚愕に目を見開くスー。

「俺の言葉が信じらねえって言うなら、他の連中にでも聞けよ。そのダンマリ決め込んでいる鬼野郎でも良いし、もっと詳しい事知ってるだろう若葉や苔森でもいいさ」

締め括りとしてユーゴーが発した最後の言葉に、俺と仲間たちは瞬

時に顔を見合わす。

今、重要な事言わなかったか？

「真理ちゃ……苔森さんを知っているの!? ユーゴーっ!」

「おっ、おう。……そういえば、お前からすれば会った事は無かったか。死んだと思われていた若葉と苔森の二人だが、あれを普通と言っているのか知らんが生きてたぞ。さっき若葉の方は見ただろうか？

オカちゃんは何を基準にして俺らの生死を確認してたか知らんけどさ、それも正確じゃなかったって事さ」

なら、他に亡くなったとされるクラスメイトも、もしかして――

「だが、他の死んだとされる三人。一成に、小暮、林……あいつらは既に死んじまっただろうさ。支配者権限にスキル検索なんてのがあつてな？ 色んな使い方があるんだが、あるスキルを何人が所持しているかつてのを調べられるんだ。そして転生者には、全員に共通したスキルがある。……もう分かるだろう？ その人数を見れば、現在何人の転生者が生きているのか一目瞭然なんだよ」

その僅かでも思い浮かべてしまった甘い希望は、容赦無く否定された。

「まあ、後で本人らに直接会って話せばいい。若葉は兎も角、苔森なら納得の行く説明してくれるだろうさ」

俺は、どうもこういうのは苦手だしな……、と呟くユーゴー。

自らが作り出した空気の悪さに今更ながら気付いたのか、頭を掻きながら全員を一瞥し、徐に剣を鞘に収めるユーゴー。

そうして、他にも仕事が残っていると、後はお前らで話し合えと、色々と投げっぱなしのまま、ユーゴーは俺たちの横を通り過ぎながら、この場から去っていった。

残された俺たち。

背後では、分析や困惑に猜疑などなど、様々な感情が渦巻いているだろう。

しかし俺はその周囲の情報を遮断して、スーと向かい合いついてい

た。

まるで二人だけしか、この世界に居ないかのよう。

俺は、意を決して無理矢理にでも口を開いた。

「全て、本当の事なのか……スー」

「……ええ。間違いありません、兄様」

自ら真相を認めるスー。

だが、その瞳には仄暗い濁った闇しか映していなかった。

「でも、それは全て兄様を想ってッ」

「もういいッ！」

スーの言葉を、強引に断ち切る。

でも、この言葉もスーには届かないだろう。

兆候や違和感、今迄俺が見て見ぬ振りしてきた想いの全て、その掛け違いが此処までのすれ違いを生んでしまった。

今も、その瞳に映る俺は、俺じゃない誰かではないかと思う。

聞こえてくる声音も、兄様の為、兄様を想って、兄様を助ける為に、

兄様、兄様……

「なあ。その兄様って、誰だ？」

口に出たのは、そんな純粋な疑問。

「誰って……、そんなのシユン兄様しか、私には」

「違うだろ」

「——ッ」

静かな宣言に、今度はスーがたじろぐ。

なんなのだろうな、ずっと前からこうすべきだったと、呟く俺が居た。

きつと俺たちは一度、本気の本音で、痛みを伴う語り合いをやるべきだった。

兄妹ならさ、それが起きるのは当たり前でごく普通に勃発する事、俺たちは一度もしていないと気付いたから。

——結局は、スーにも一線を引いていたのだろう。

妹と思っている、それは家族の繋がりというよりは、付き合いが多いだけの他人に近い。

ユリウス兄様の事も、そうだ。

憧れる近所の格好良い青年、前世の家族という関係性とは違うものだ。

だから今——、本当に兄妹となるには、行わなければならない事がある。

さあ、一步踏み出せ。

そして俺とスーの距離が狭まり、互いに手を伸ばせば触れ合えそうな近さに接近する。

「兄様……？」

その声に戻事はせず、俺が返したスーへの答えは、パシンという一つの乾いた音だった。

「えっ……??？」

あまりにも小さな、暴力。

俺が放ったビンタは、妹のスーの頬を確かに捉えていた。

「嫌われるとしても、兄妹喧嘩すべきだったんだ、俺たちは」

間違いを犯したのなら、手を上げてでも叱るべきだ。

そんな資格など無い？ いや、俺はスーの兄なのだから、俺がやるべき事なのだ。

そして、教えなければならぬ。

俺たちの関係性というものを。

「上辺だけ見ても、何も通じ合えない……。俺はスーのそんな一面を知ってて見過ごしてきた。だから答えるよ。俺は、スーの想いには答えられない」

その瞳に反射している俺の顔は、酷い顔だった。

だけど、ああ……初めてスーが俺を見ている、そんな気がした。

「嘘……ウソ……、そんな……兄様がそんな事言うはずが……」

「スー」

再度、突き放すかのようにだけど、大事な事だから真摯に、俺は言う。

「——だって、俺たちは兄妹だから。スーのその好意には、俺は答えてあげられない」

俺とスーとの間を決定付ける、想うからこそその激痛を伴う宣告が、

今為された。

暫しの無言。

俺の方は、胸の内を曝け出しきった事による無言。

だが、スーの方は分からない。

言葉が見つからないのか、呆れて失望したか、それとも憤激が煮え滾っているのか。

確認出来るのは、今のスーが無表情を通り越して虚無としか感じられない顔をしている事だけ。

「ああ……そつか、最初からそうすれば……」

掠れきり感情の読めない声音で、傍に居た俺以外に誰も聞こえないような音量で、スーが言う。

そして一転、吊り上がった笑みを浮かべた。

次の瞬間――

「――ッ!?!」

「兄様、愛しています。なので、一緒に死にましょ?」

「ごふッ!?!」

腹部に突き刺さる短剣。

それは的確に急所を貫き、グリグリと抉られる灼痛が、背筋を伝って脳髓に響く。

「スー!?!」

「シユン君!?!」

カティアとユーリの声が遠くなる。

瞬時に動いたフェイと京也の姿が、俺とスーを引き剥がした。

霞む視界に、スーが地面に叩き伏せられ京也に拘束される光景が映って、俺は手を伸ばす。

止めろと言いたいが、声が出せない。

どうにも上手く息が出来ないようで、喉から鳴るのは喘鳴のみだ。そして倒れ込んだ俺の視界に映ったのは、涙を浮かべる仲間たちの顔で――

――また心配掛けて、ごめん。

意識を失う直前、思ったのはそんな言葉だった。

近頃、よく夢を見る――

今世と前世の、在りし日の記憶の夢。

『シユンは、将来どんな人になりたい？』

そう問い掛けるのは、最後に見た時より幾らか幼い時分のユリウス兄様。

そして、それに答える存在も、今より幼い頃の俺で。

『俺はユリウス兄様のように、正しい事を行える人になりたい！』

無垢に、愚かにも、ただ憧れだけで、苦悩も痛みも知らないまま兄様の光に焦がれた。

その時にはもう、兄様は正義の重さというものを背負っていたというのに。

『ははっ、それは辛い道だよシユン。正しい道はいつだって絶望と隣合わせで、痛いんだ』

その時の俺には、兄様の言った事の欠片すらも、分かっていなかった。

どれほど茨の道で、どれほど不条理な世界なのか、憧れに曇った俺には想像すら出来なかった。

激痛に塗れ血を流しながら、辛くて苦しくても前に進む。

そんな生き方が出来るのは、兄様のような一握りの存在だけなのだと。

『――それでも、僕みたいになりたいと言うのなら、憶えておいて』
穏やかながらも、何処か悲しげな兄様が告げた。

『どんなに打ちのめされて折れそうな時でも、必ず答えはここにあらって』

そう言つて、ユリウス兄様が示したのは、俺の胸で――

『迷ったら立ち止まっても良い、問い掛けて。答えはいつだって、シユンの身近にあるから』

景色は薄れてぼやけていき、記憶はより深くへと遡っていく。

それは遙か昔の記憶。

前世で最も古い記憶と言ってもいい、曾祖父母が生きていた頃の記憶。

『おお俊輔、よく来たなあ』

今世での父上のような、厳格そうだけど朗らかな曾祖父母。

その頃は、正月とかに曾祖父母の家に帰省することも珍しくは無かった。

そして曾祖父母は今時珍しい、神道を深く信仰していた人達でもあった。

『さあ、俊輔も神様にお祈りをするんだ。二礼二拍手一礼、憶えておるな？』

近くの神社に連れて行かれ、熱心に神様への感謝を告げる曾祖父母たち。

幼き頃の俺は、正直不満タラタラで面倒臭そうにしていた。

なんで、こんな事しているんだと。

それを曾祖父母たちは――

『この世界で健やかに生きていられるのも神様の御陰。分からんだろうと思うが、感謝を告げる事が大事なのだ。神様が見守って下さるからこそ、儂らが幸福に過ごせておる。その感謝はこうして口にして唱えなければ、伝わらんのだよ』

頭を傾ける非常に幼い俺。

それを曾祖父母たちは、笑いながら頭を撫でた。

『いずれ分かればいいんじゃない。それ次は厄落としじや』

帰省するたび、何度も御参りに連れ回されることに少し嫌気を感じていたが、それでも全面的に嫌だった訳では無い。

むしろ、神社という非現実的な空気に、多少興奮していた事も事実だ。

だから、その時の事も、よく憶えている――

『高天原に坐し坐して、天と地に御働きを現し給う龍王は――』

曾祖父母が亡くなってから知った事だが、よく連れて行かれた神社は、少し変わった神社だったらしい。

龍神様を祀る、そういつた神社だったとか。

だから、その時の光景も記憶に深く刻まれていた。

『――成就なきしめ給えと、畏み畏み申す』

そして、曾祖父母が亡くなった時のことも。

特に何が原因だとかは聞かされなかつたけど、間際の話は聞いた。

ただ眠るように息を引き取つたらしい。

俺が見たのは、皺が無数に刻まれた顔に穏やかな表情を浮かべて、棺に入っている姿だけ。

けど、その時曾祖父母が亡くなって悲しい以外にも、思ったことがある。

ああ、曾祖父母は綺麗に生き、そして美しく亡くなったんだろうって。

そして亡くなって言葉を交わせなくなつたとしても、確かに俺に何かを託していたと思う。

そうか、だから俺は――この世界を嘆いているのか。

ならば、俺の祈りは――

ちっぽけで、ありふれた……、単純なモノで良かったんだ。

53 私の本質は

どうしようもなく変質者っぽい老人に絡まれたけれど、密かに抜け出すことに成功した私が次に向かおうと思ったのは、転生者たちのところへ、だった。

既にフェルミナちゃんとは別れ、これまで通り第十軍には転生者たちの保護と監視の継続と、他には帝国軍の方に居るだろうユーゴーを此方へと呼んできて欲しい事も伝えている。

ゆっくりと歩き続けている私。

だがしかし——現在私は関係の無い場所をグルグルと巡っていて、最初に思った事とは真逆の事をしている状態だった。

その行動に、何かしらの深い理由などがある訳では無い。

ただなんとなく、調子が合わなくて気分も乗らない、それだけだった。

今も忙しく仕事に追われる人達の邪魔にならないよう気配を殺し、更に魔術で姿を見えないようにしながら、散歩を続ける。

突貫工事によって平らに固められ、整地された大地を歩きながら、私は考えを巡らせていった。

エルフの里を崩壊させ、ポティマスを排除する。

その目的は達成され、今こうして次なる目的の前に、一時の休息をとっている訳なのだけけれど。

「……………はぁ」

なんとというか、ほんの少し気が抜けてしまったような感覚。

まだ他の転生者たちとも顔を合わせていないし、本当の大仕事はこれからで、立ち止まっている余裕すら欠片も無い事を分かってはいるけれど……

どうにも、心の奥底で煮え滾っていた狂熱が、一切感じられなくなっていた。

それが何によって齎されていたのかは理解していて、全てあの本が生み出し維持していた眠れる狂気の暗冥。

けれど、それによってどんなに苦しくても進み続けるという強烈な

意思を生み出してたのも、また真実であり……

本当は悪いモノだったと理解しているのに、いざそれが無くなつてしまえば心にポツカリと穴が空いたような、そんな空虚感に苛まれているのは何とも可笑しな話だった。

今迄、どうやって奮い立っていたのだろうか？

何をどうして、此処まで身を粉にして頑張っていたのだろうか？

昨日までの感覚は遙か昔の事のように、すぐには思い出せそうに無い。

だからこそ、溜め息をついてしまうのを止められない訳で。

「魂に、穴が空いたみたい」

実際には、そんな事は無いのだけど。

確かにあの本が失われた事で魂には空白が生じているけれど、それは異物が抜け落ちた事により本来正しい形へと戻る前に生じた小さな隙間。

今も私の魂は、正常に穏やかな世界を編み上げて、その中には無数の魂が揺蕩い息づく。

私と眷属たちみんなの為だけの、小さくて広い、優しい神域。

——ふと、私の内側から呼びかける沢山の声が聞こえて。

「……ああ。そんな単純な事だったよね」

随分と長い間、忙しさや怒りに押し流されて、忘れていたかも。

人氣が一切無い場所へと、足を進める。

そして、喧騒も遠くなった森の中で大樹を背に、瞼を閉じて精神世界へと潜っていく。

星空照らす、苔むした岩と清らかな水で満たされた、静謐な世界。

そこで相對する、今世での私の家族たち。

誰しもが親であり子で、全員が兄弟で姉妹な、みんなで一つの関係。

私の原動力とは、こんなにも単純な願いであり——いつだって傍に居たのだと、思い出したのだから。

この世界に生まれ変わって、はや十数年。

前世の年齢と同等の年月が経過し、それだけの時間が過ぎた事により地球の時も、相応に進んでいるだろう。

だからもう、白ちゃんに連れられれば地球に行けるとしても、お母さんには会えない。

会いたくても、会ってはいけない。

だって私は、この冥界に囚われた死人だから。

冥府の果実を食べてこの世界にて生きる、一柱の化け物な神格。

そして、向こうでは既に死亡認定されているような存在が、一体どんな顔して赤のお母さんと会えばいいのか。

私には……分からないから。

そんな前世のお母さんの事を想うからこそ、決して手放してはいけないと、繋がりはより強固になる。

その環は、最初は小さな環だったけれど今やその対象を広げ、とっても大きな環になっていた。

環の中に居るみんなを守りたかったから私は——星を救いたいと、戦ってきたのではないのか。

「……白ちゃん」

その環にて、最も中心にいる相手。

私の心を繋ぎ留めてくれて。いつも白い光の元へと連れ戻してくれる人。

普段は純白で伶俐だけど、時には表情豊かな笑顔を魅せる光景が浮かんできて——

自然と頬が緩んで、表情が笑みに変わってしまうのを自覚し……

——ドクンという音と共に、何かガカリと嵌った気がした。

少し時間が経って——

気を取り直し、漸く転生者たちのところへ向かう私。

まだ完全には活力とかエネルギーなどは回復してはいないけれど、それでもだいたい持ち直して、すっかりと一歩ずつ足を進めていた。

目が覚めてから、おおよそ一時間ほど。

時刻は一般的に朝食を取るだろう時間も過ぎ、空に登った太陽によつて夜に冷えた空気も過ごしやすい気温に。

それだけの時間を、かなり無駄に消費してしまった感じがするけれ

ど、おかげで気持ちの整理も大方つくことが出来た。

……………なんかというか、今更気付くなんて、鈍いにも程があるよね。何年、一緒に過ごしてきたのか。

それだけあれば、少しくらいは自覚していてもおかしく無いのに。計画やその下準備に忙しく奔走していたから、別々に行動する事が多かったから、なんて理由で言い訳は出来ればしたくない。

だってそれは、この胸にある闇を照らす温かな光を、否定することに繋がりそうだから。

時間を掛けて育まれていた想いを、偽りや嘘にして自ら穢したくは無かった。

気付いてしまえば、目を逸らせない。

こんなにも大きな感情が、私の中に眠っていたなんて、知らなかった。

でも、その押し潰されそうなほど存在感を覚えるものが、何よりも温かくて心地良く思えて。

「つ……………うう……………むうう……………」

コツソリと、一度頬に両手を当てて温度を確認。

うん、よし……………平常、平常……………、赤くなんかなってはいない……………

自覚した途端にこれでは、先が思いやられる。

体感年月を考えたら、乙女って年齢ですら無いのに。

しかも、女の子同士だなんて……………

お互いに元魔物で、しかも性別の概念もあまり意味を為さない神格という存在とはいええ、外見も自意識も女同士……………いや、割と白ちゃん良い意味でも悪い意味でも男らしい時があるかも。

格好つけたがりだし、かと思えばダメダメな部分晒して、呆れ果てる時もあるし……………

何だか、もやもやとムカムカと、ほんのちよつぴりドキドキして切ないような、複雑な気分。

それはともかく、今はまだ……………この感情を知られたくない。

嫌われたり拒絶されるのも不安だけど、告げる時期では無いの分かってるから。

だから胸の内に仕舞っておこう。
もう少しで全てが終わるから、その時には、きつと――

そして到着した、転生者たちを押し込めたテントの列。

エルフの里深くに突入した白ちゃんが確保し、撤退寸前に第十軍が保護した転生者たちは、全員この場所へと纏めて集められていた。

転生者たちはそれなりに大所帯なので、幾つかのテントに分けて押し込んだらしいけど、テントは全て隣接しているし、その外側には第十軍の団員が使うテントで囲って、更に見張りも立たせて睨みを利かせていたので、抜け出そうとした人はいなかった。

そして、軟禁されていた転生者たちが魔族語や人族語などを話せる訳も無く、指示や命令などの意思疎通には大変苦労したらしいが、数人ほどこの世界の言葉を理解出来る人もおり、彼らが言葉を訳して説明する事で、大きな混乱は起きなかったらしい。

以上の事は、先程フェルミナちゃんから聞いた、昨日の転生者たちの様子。

そして、シユレインたち勇者パーティも負った怪我を治療し、ここで寝かせているらしい。

彼とスーレシアとの騒動については、既に聞いている。

誰が悪いのかと聞かれればスーレシアと答えるけれど、あまり深く介入する気は無い。

現在スーレシア姫は、別の場所にて拘束、頭を冷やさせている。

痴情の纏れ？で人を刺したにしては手緩い対応だけど、構っている余裕が無いのだから処罰等は全て後回し。

……というか協力者とはいえ方向性が違うので、態々手を焼く必要なんて本来は無いはず。

彼女の暴走を阻止出来なかった事もあり多少負い目を感じるけれど、あの性格は精神汚染によるものでは無く生来の気質なので、魂をどうこうして何とかかなる代物ではない。

無理に変えようとするれば洗脳と同じであるし、彼女が向ける感情の矢印は一点に集中していて、私から何を言ったとしても精神は小揺るぎすらないだろう。

それに話を聞く限り、想いの擦れ違いについては、当人同士で片を付けるしか無いと思う。

私が出る幕が無いことを祈る。

これ以上、彼女の面倒を見ることになるのは、本当に御免被りたいのだから……

密集して並ぶ、テントの列。

そこから少し離れた場所に集まっている複数の人影を認識して、私は小走りで向かう。

当然先に到着しており待たされた事に微妙にイライラしていそうなユーゴーの他にも、不機嫌さを隠そうともしないソフィアちゃんや困ったような表情のラーズくん、そして長い付き合いだからこそ内心を読み取れる、いつもの外行きの無表情を被っていた白ちゃんの姿もあった。

——少しだけ、胸が高鳴ったような気がする。

「……遅かったじゃない。いつまで待たせるつもりだったのかしら？」

「まあまあ、ソフィアさん。別に打ち合わせしてた訳じゃ無いから……」

「俺は軍の再編作業、中断して来たのに何十分と待たされた訳なんだから？」

「……………」

白ちゃんは無言で、批難しているような気配。

勝手に居なくなっており心配させた事に加え、私が居ないと転生者たちとの話し合いを始められないから、肝心の説明役が一向に来なかった事に憤っているようだった。

他人と話す事が苦手で見知らぬ誰かとは代弁者である私が居ないと、白ちゃんはそもそも会話すらも始められない。

代わりに話してくれる私が居るから怠けている節があるので、いつかは矯正させなければ延々と私を頼り続けてしまいそうだと思うた。けれど……、今回はまだいいかな。

過去のしがらみも絡んだ転生者たちとの話し合いとなると、流石に色々酷だと思われ頼られている事には、悪い感じはしないから。

ましてや白ちゃんは、これから会う転生者たちが外見から連想する若葉 姫色という人物とは、別人なのだから……ね。

「ごめんなさい、待たせましたか？」

まずは一言謝る。

ユーゴーを呼び出したのは私だし、これから行う説明も転生者全員が揃っていた方が都合が良いだろうから、最後に来てしまった者として反省の意を示した。

「ホントよ、全く。そもそもからして……」

「お前らそーいうのいいから、さっさと行くぞ。後がツツかえてんだ。向こうも待ちきれないようだしよ」

嫌味を飛ばそうとしたソフィアちゃんを遮り、ユーゴーが肩越しに背後を指差す。

そちらに視線を向ければ、天幕の隙間から此方を覗く複数の顔が――

「やべ」

「ちよ、押すなって」

「痛っ。踏んだの誰よっ」

「っ、潰れる……」

次々と引つ込んでいく頭の数々。

そして、不自然なまでの静けさが生じるのであった。

「……ええっと、一つのテントに集めると狭いよね」

「そうね」

「だね」

「なら、広場に出てきて貰う方が良いかな？ 周辺には第十軍以外には部外者は居ないし」

「……………お前ら聞き耳立ててんだろ？ ほら、椅子だの敷物だの

持って出てこい！」

ユーゴーの良く響く号令に、おずおずとテントから出て、ゆつくりと集まり始める転生者たちのみんな。

その中には腹を刺されて休んでいたシュレインも、少し具合を悪そうにしながらも仲間たちと共に来ており、赤い髪の少女に肩を貸して貰いながらも力強い眼で、此方を見詰めていた。

……あと何故かは知らないけれど、サジンと荻原くんが抱き合うような形で一纏めに縛り上げられており、二人は両足で地面に線を引きながら首根っこを掴まれ連れて来られていた。

何故……いえ、縛られている理由までは、予想が出来るけれど……サジンは神言教からの協力者で実質私たち側である事が、転移陣を破壊した時に知られていても何もおかしくは無い。

けれど実は神言教の密偵で態とエルフに捕まり、内部の情報を無限通話というエルフの里の結界を無視して伝達出来るスキルによって横流していた荻原くんは、その秘密を今迄ずっと隠し通していた筈だった。

その念話から齎された情報によって計画の仔細を詰める事が出来たから、私たちにとっては影の功労者であるのは間違い無い。

しかし、他の転生者たちからすれば裏切り者に見えるのも容易に想像がつくので、正体がバレたのなら拘束されても変な事では無い。

……けれど、この縛り方には疑問しか無い。

あまりにも近すぎる距離と引き摺られる振動で頭部が衝突し合い、小さな呻きが何度も響く。

というか、何かの間違いでもあれば……キ、キスしかねない縛られ方に、色々と戸惑ってしまい頭が混乱しそうで。

しかも他の女子たちは、それを熱の籠もった視線で満足げに眺めているし……

——忍者は、昔っから潜入工作はお手の物っすよ。こんな風に弱みを探って……

よ、よせ！ 僕の無限通話がお前と接続してしまうっ！

オギも受け入れた方がいいよ……、俺の魔剣『朔』と熱い『忍術』を

……
ああ……結界を貫通して情報が届くつ、アアーツ!!!

……
異次元の果てから、変な電波を受信したような気がした。

腐蝕^{ホモオキシス}する樂園は、一刻も早く深淵に還って下さい。本当に切に……
頭を振って腐臭がする思考を追い出し、周囲を見る。

転生者の女子たちの中で幾らかマトモそうなのが、外で冒険者をやっていたアサカさんと委員長だった工藤さんしか居ない状況に目眩^{メクラ}がしそうだった。

そういうの、否定はしないけれど狂的に暴走しているのは、ちよつとね……

私たちを認識すると、誰でもいいからと、次々に助けを求めるサジン。

泣きが入った切実な声で叫ぶが、この場にいる全員は誰一人例外なく無視を決め込み、その嘆きは虚しく響くのであった。

「……そういえば、先生は？」

「件のエルフの少女は、天幕の中で呆然としています」

「連れてきてくれる？ その後、指示があるまで各自休息」

「了解」^ヤ

背後から姿を見せないままフェルミナちゃんの小声が聞こえ、私は魔族語で密かに指示を出し、彼女はそのまま気配を転生者たちに一切悟らせずに動き出した。

そして真実を知ったショックからか自失状態に見える先生がやって来れば、私と白ちゃんを見て驚きの表情を浮かべたものの、直ぐに沈んだ顔へと戻るのであった。

そしてフェルミナちゃんが下がるのと同時に、第十軍の影も一切無くなつていき……

一応、これで全員が揃い準備も整った事になる。

「本物？」

「えっ、でも……」

転生者たち全員が集まれば、ヒソヒソと会話する声はより多く増えていく。

彼女ら彼女の視線が集中して向かうのは、やはりというか白ちゃんと私に対してで、死亡したと言われた人物が現れたからだと思われるた。

視線に晒されている白ちゃんは居心地悪そうに、視線から逃れようとスススッと動く。

私の背後に移動すると、両肩をそつと掴んでは前方へ押し出そうとしてきて、私のことを自身に突き刺さる視線からの盾にするのであった。

その行動によって更にヒソヒソ声は高まるけれど、当の白ちゃんからすればヒソヒソ話も視線も心底嫌だと感じているのが手に取るように理解出来るので、身長差から壁には成れないけれど視線を代わりに受けて上げようかな。

そして、騒がしい転生者たちの中から代表して出てきたのは、既視感を憶えるムスツとした顔の黒髪の少女で、彼女は背後に居る白ちゃんを一瞥した後、私を見ながら口を開いた。

「お久しぶり……で良いのかしら？　あなたは苔森さんで、後ろのは若葉さんで良いのよね？」

「その前に、工藤さんで合っているよね？」

「ええ、その通りよ」

やはり此方でも纏め役をしているのだろう彼女は、鋭い目付きのまま頷いた。

「その質問だけど……今、私は苔と名乗っていて、後ろに居るのは白と名乗っているから。みんなが想像している苔森 真理と若葉 姫色とは、別人だと思って」

「それって、どういう……ああ分かったわ。私たちの知っている二人とは、もう違うと」

やや誤魔化す言い回しになったけれど、私は前世の自分とは精神性が塗り替わり、白ちゃんの方は本当の意味で若葉さんとは別人なので、何も間違った事は言っていない。

ただ、向こうが誤解したまま勝手に納得しただけに過ぎないのだから。

隅の方に居る先生も、私の言葉に確かに耳を傾けていて、瞳が動揺で揺れていた。

「ちなみにだけど……そっちは笹島くん、こっちは夏目くん？ あなは……消去方で根岸さんかしら？」

「うん、そうだよ。久しぶり委員長」

「おう、当たり前だ」

「……………ええ、そうよ」

工藤さんの問いに、穏やかに答えるラーズくんと、無愛想に返事するユーゴー。

そしてソフィアちゃんが面倒臭そうに肯定すれば、今の彼女と前世とのイメージの違いからか、工藤さんの後ろに居る転生者たちが俄然と騒がしくなる。

パンツと、手を打ち合わせる音が数拍鳴り響く。

それによってざわめきを静かにさせ、続けて次の質問を向けてきた。

「……それで？ あなたたちは何の目的で此処に来たの？ 山田くんたちから聞いた話と、あなたたちの主張、両方を聞いてから判断するわ」

剥き出しの警戒心と押し殺した不安感を纏いながら、工藤さんは此方に問う。

その内に秘めた感情を察し、私はきちんと受け止め対応しようと思つた。

けれど知りたいと言うのなら、甘い嘘なんて告げはしない。

容赦無く答えを叩きつける事しか、出来ないのだから。

——さあ、真実を教えてあげよう。

何処までも無慈悲で、痛いだけの真実を。

蜘蛛14 無知の虜囚たち

各自、それぞれ好きな位置に敷物や椅子を並べて腰を下ろし、話を聞く体勢になる転生者たち。

草間くんと荻原くん兩名は変わらず、剥き出しの地面に転がされたままで、放置されてる。

悲しい事に誰も彼らを助けようとせず、男子らは巻き込まれる事を恐れてるようで、女子の方は腐な人たちのようなので言わずもがな。

まあ、秘密にすべき内通者の情報を開口一番でバラしたとなれば、信用は地に落ちるわな。

そんときの光景が、容易に想像出来そうだ。

んで、転生者たちは半円を描くように座って、話が始まるのを待っている状態。

なんだけど……

なーんで私も、その中心にコケちゃんと一緒に立っているんですかねー？

いや、コケちゃんが説明してくれんだから私必要なくない？って思うんだけど、何故か下がろうとしたら鬼くんに睨まれたので、渋々前に出ることに。

何も口にしていなくても、目がそう訴えてたんだよ……

ま、まあ？

コケちゃん一人に任せるのも忍びないし、傍に立つくらいなら……いや、やつぱり辛いわ。

向こうからすれば若葉という人物の役を私に当て嵌めるだろうけど、実際には別人ならぬ別蜘蛛だし、私から見れば転生者たちとは全員、今回が初対面だ。

此方の実情や真実について知らないからこそ、外からはそう見られてしまうとは言え、あいつと私を同一視されるのは、どうにも落ち着かない。

「では……。疑問も沢山あると思うから、聞きたい事があれば順次、言ってみてほしい」

「頃合いと見て本題を始めようかと、コケちゃんが口を開く。

対するは、前世でも目付きが鋭かったけど、今世でも切れ長の眼で威圧感の凄い工藤さん。

なんというかコケちゃん小さいから、嫌味な上級生がガン付けて下級生をイジめてる光景にしか見えんぞ。

そんなコケちゃんの背に隠れる私。

あつれー、おかしいなあ？ 端的に言っつて、クズなのでは？

「じゃあ改めて。敵じゃない危害を加える気は無いと言うけれど、そもそもあなた達の本当の目的は何？ 山田くんたちからはエルフへの不信感について聞いたけど、それも何処まで正しいのか、私たちに判断付かないから」

これは、さっきの質問とほぼ一緒だね。

鬼くんが先程、僕たちは敵じゃないと言っつて、困惑と警戒をする転生者たちを宥めた後、今こうして話し合いの場に持ち込んだ訳で、状況は今動き出そうとしていた。

「簡単に説明するのなら、エルフの裏の顔全てを壊滅させる為に里を襲撃し、あなたたち転生者の保護と救出も兼ねて、私たちがこの地へとやって来ました」

まずは、要点を述べるコケちゃん。

しかし、それでは情報が不明瞭なので、工藤さんは続きを目線で促す。

「……白ちゃん。残骸の一部を、此処に出してくれない？」

「ん」

コケちゃんの言いたい事、話の持って行き方が何となく分かったので、私はサポート役に徹して仕事するでしょう。

これくらいなら口を開かずに済んで、されど何もしていないとは思われないだろうし。

適当に、異空間の中から解析用として確保していた、グローリアとかいう名前負けなつよロボの残骸やウニの砲塔とかを取り出し、転生者たちに見せ付けるように並べる。

それを見て、一気に動揺が走り空気がざわつく。

というか、吸血っ子や鬼くんまでもが少し動揺しているあたり、そっちはつよロボを見ていないのか。

危険だつて事で外周に到達する前に破壊してたし、途中で撤退させちゃったしな。

……ちなみになんだけど、システム周りには英単語が多く使われているので、そこからこの世界に流入し、英語のような言葉が広まったと思われる。

この世界と地球との間には、それ以上の関連性は無いはず。たぶん。

「これが、エルフの本当の顔です。世界にそぐわない力を持ち、そしてその動力源は星の生命力と生き物の魂。この禁忌の異端技術を隠し持っていたからこそ、私たちは星の害悪となるモノを全て消し去る為にエルフの里を滅ぼしました」

予想付いてたけどコケちゃん、エグいとこ切り込むなあ。

これは困惑どころの騒ぎには収まらんぞ。

「星の生命力はともかく……生き物の魂？」

「人間を材料にしているんです。これは」

「ひゅッ……！」

甲高く短い悲鳴の後に、嘔吐する音が響く。

少し遅れて騒がしく無数のどよめきが聞こえる方角に目を向ければ、殆ど水しか混じっていない胃液を吐き戻す、痛々しい先生の姿が。やっぱ、先生には致命傷どころの情報じゃないっ！

体の震え方も危険な痙攣引き起こしているし、次の瞬間にはショック死しかねんぞ。

「先生！……しっかりして下さい、先生っ！」

いち早く駆け寄ったのは、距離的に近くに居た山田くん。

背中を擦るものの、えづきと痙攣は収まる様子を見せない。

そして、先生が崩れ落ちると同時に動いていたコケちゃんが先生の傍にしゃがみ、膝が吐瀉物で汚れるのも構わずに、震える小さな肩に手を添えて魔術を発動させた。

術式から読み取った効果は精神系。

魂に作用して精神を弄る類いの魔術で、洗脳という行為が嫌いなコケちゃんがカウンター術式として編んだ、精神を安定化させ元に戻す魔術。

これも実質洗脳と変わらないと言って、本人は好ましく思っていないかったけど、その効果は抜群であり、みるみるうちに震えも収まり顔は青褪め呼吸は荒いままではあるが、一先ずの落ち着きを取り戻したようだった。

「……………」

状態が安定した事を確認して、そつと肩から手を離すコケちゃん。そのまま暫し、誰もが無言となり先生の啜り泣く声だけが聞こえる。

エルフに生まれて体の成長が遅い先生は、人化してから肉体的な成長の変化が無いコケちゃんと比べても幼く見える。

けれど、この転生者たちの中では唯一の大人だったであろう先生。その先生が、こうも取り乱して倒れた姿に、周囲には重苦しい空気が漂う。

私自身も、先生が此処まで重く受け止めるとは思っていなかったし、転生者たちにとっては尚更衝撃的な光景だろう。

「先生……………」

「触らないで下さいっ！」

「——ッ」

コケちゃんは、涙と鼻水で濡れる先生の顔を拭おうと手を伸ばした。

しかし、その手は触れる直前に払い除けられ、勢いでコケちゃんが後ろに踉蹌めく。

——つと。

「…………つ。あ、えつ…………、白ちゃん…………？」

「大丈夫？」

バランスを崩していたコケちゃんが地面に倒れる前に、瞬時に回り込んで受け止める。

腕の中に収まったコケちゃんは、体を縮こませたまま何か言いたそ

うに、けれど言葉にならずに口をパクパクさせて私を見上げていた。光の加減で青みを帯びるラブラドライトのような瞳が、不安げに揺らめく。

おっと、流石に転生者たちの前では、この体勢は恥ずかしいか。両腕を支えながら立たせると、コケちゃんは眉を下げ口をへの字にしたまま静かに言った。

「……………ありがとう」

お礼を言われているのに、何だか怒られているような気がする。何故だ。

みつともない姿を見られてしまったからか、少し頬が赤くなったコケちゃんは咳払いをすると、先生の方へ体を向き直す。

その一連の流れが終わると、隅で肩身を狭そうにしていた転生者の男子どもから、また今迄とは別の騒がしさが湧き上がっていた。

聴力を強化して会話を拾えば、キ？だのマ？だの何だのと…………

お前から何言っているん？ 単語が圧縮され過ぎてて内容が全然分からん。

再び視線を合わせて、先生に呼び掛けるコケちゃん。

感情の高ぶりも落ち着いたのか、今度は手が出ることも無く悲痛な慟哭から話が始まる。

「私がッ、私がしていた事は間違っていたんですかッ?! 私は…………生徒たちを危険に晒してッ、利用されて……………ただ、なんですか……………っ」

嗚咽を漏らしながら、先生は叫ぶ。

戦場に出てきた先生と戦闘を行い身柄の確保をしたユーゴーは、その時に襲撃の目的とエルフの真実について語っていたらしい。

なので、先生は既に悪辣なポテイマスの裏側について、幾らか知っている事になる。

私たちの中で共有されている情報から説明した内容を推察すれば、人身売買とロボの中身とか、吸血っ子が襲われ殺され掛けた時の話と、そこから危険だからと殺された転生者も居るのではないのかとか、そこら辺の話について伝わっていると思う。

私は、あまりにも見ていられなくて、勇気を振り絞って自ら先生に声を掛けた。

「間違っていない……。命懸けで、生徒の為に戦ってきたのは……間違いないかじや、無いです。こうして、みんな生きて会えたじゃないですか」

私としては長文ゆえに、跡切れ跡切れになりながらも確かに伝わるよう、心を込めて先生は何も悪くないと言い聞かせるように告げる。

しかし先生は、納得せずに今迄胸の内に秘めていただろう想いを絶叫する。

「みんなじゃ、ない！……助けられなかったッ！ わた、私は……助け、られ、なかったあ！」

それは擦り切れそうな心が発した、無力さに絶望する悲鳴だった。

先生が言うのは、この場に参加する事が永遠に不可能な、欠けてしまった転生者たち。

桜崎一成、小暮直史、林康太、……この三人。

彼らの死を、先生はずっと前から間に合わなかったと後悔し、嘆き続けていたんだろう。

だが、私からすれば本来抱える必要の無い、身の丈を超えた重荷を、無理して背負い込んでいるだけにしか見えなかった。

彼らの人生は、彼らのもの。

そして、運命なんて言いたか無いけど、彼らは死から逃れられなかったに過ぎない。

この世界は残酷だ。

死が身近に潜んでいる。

私たちは単に運が良かったから生き延びただけで、死に直面した事など数え切れないほどある。

コケちゃんや吸血つ子や鬼くんなども同じで、もしかしたら誰かが居ないなんて普通にありえてしまう。

他の転生者たちも、山田くんのような非常に恵まれた特権階級でも無い限り、常に死の危険性と隣合わせの生活をしていただろう。

魔物が入れない街の中だろうが戦争や賊によつて殺されるかもし

れないし、城壁の外ならば何時死ぬことになっても不思議では無いのだから。

そんな世界で、自分以外の命を救うにしても限度があるだろう。ましてや、幼いエルフの身と先生の境遇では、土台最初から全員を救うなど無理だったのだ。

神ですら不可能な事が、この小さな先生に出来る筈も無い。求め過ぎている。

人間だろうが神だろうが、己の分を超えた事などロクな事にならないし、出来もしない事を嘆き責任を感じているのは、それは傲慢ではない。

それに……取り零した過去ばかり眺めて、救い出せた今を見ていない先生に、苛立ちが募る。

どうして、助けられなかった、なんの為に……そんな事を繰り返す先生の背に立ち、肩を叩いて強制的に前を向かせる。

「先生」

「ツ！」

「あなたがした事は……全て。目の前の彼らを見無視して……、一人、嘆くことなんですか？」

過去は、その人が積み重ねた、とても大事なものだ。

それが——、今を、自分を作り上げる。

けれど、過去に囚われて懊悩し、今という大切を蔑ろにしているものじゃ無い。

私は……、何か致命的なモノを落としてしまった事は無いけれど、それでも偽物の記憶と本物の記憶の二つを持つなりに、過去の大事さについて分かっているつもり。

その上で言わせて貰うと、得られ掴むことの出来た今の結果すら見ないようでは、過去すら否定しているに等しい。

そして過去を否定するという事は——、自分自身そして全ての人に対する裏切りだ。

何も価値が無かった？ 間違いだった？ 取り零して空虚しか残っていないかった？

違う。

全ての事に、価値はあり意味もあつて正しさもゼロじゃない、決して空っぽだった訳では無いのだから。

自分に嘘をつく行為が、何より自分を殺す。

そして自分を殺せば、育み結んだ絆さえも、自分以外の大切な価値さえも貶めて、何にも残らず消えてしまうのだ。

「——だから、前を向いていて欲しい。私が……恩義を感じた、先生は、取り零したと嘆いても、それよりも多くの命を救い出した……、みんなの恩人であるはずだと、思うから」

かなり無理して喋ったからか、喉と精神が疲労困憊だ。

けれど、私の想いは伝わったのか涙は止まり、先生の瞳には僅かながらも生気が宿っていた。

先生は、荒っぽく様々な液体塗れの顔を拭うと、姿勢を正し胸を張って正座をした。

「先生、無理しないで下さい。後からでも話せますし、そもそも聞かなくても良いんですよ……」

「いいえ、いいえ……っ！ 聞かせて下さい、最後まで」

コケちゃんや山田くん工藤さんなどが先生の事を心配するけれど、当の先生は梃子でも動かないと腰を深く沈める。

しかしその姿に、先程まであつた自殺でもしかねない危うさは、何処にも存在していなかった。

空気が変わり始めている。

この場に現れた時、憔悴しきつていた先生に、どう反応しているのか分からず遠巻きに見るだけだった空気は、驚いたような反省するよ
うな、けれど上手く納得出来ない複雑な感情に、自問自答しているよ
うな空気へと移り変わっていた。

そんな空気を察して、再び矛先が先生に向かわないように、鬼くんが助け舟を出す。

「まあ、みんなも言いたい事はあると思う。僕はエルフの里での暮らしがどういふものか、伝聞でしか知らないし、みんなと共感出来るとは言えない。けど、先生も好きでみんなを此処に閉じ込めていたん

じゃないって、僕はさっきのを見て思ったよ。悪気があってそうしてたんじゃなく、善意からそうしていたんだって、必死な叫びから感じ取れたよ。……みんなは、どう思った？」

穏やかに語り掛けるその言葉に対し、転生者たちの受け取り方や反応は様々だ。

大まかに分けるとするならば――

視線を彷徨わせて、戸惑いいつも周囲の流れに身を任せる者。

話を主導してきた工藤さんや私たちに視線を向けて、先を期待する者。

そして、工藤さんなど自責の念に力無く肩を落としている者などだ。

大多数が、意見も無く他人任せな連中だけど、仕方ないと割り切る。こんな環境じゃ、大きな決断を迫られるなんて経験、しないだろうし。

むしろ工藤さんが、結構しっかりしていた事に驚きだわ。

「……それならそうと、言つて欲しかったわ」

継るような声で、工藤さんが呟きを溢す。

先生と工藤さんは、前世では立場も関係無く、かなり仲の良い関係だった。

それだけに、裏切られたと思つたときの恨みの想いは、非常に強くなったのだろう。

「……言えなかった」

「はっ」

先生のために、これで口を開くのは最後だと思いながら、言葉を紡ぐ。

「先生には、言えない理由があつた。破つたら、ペナルティのある、そんな理由が」

「若葉さんッ!？」

「白……、です」

先生の言葉を訂正しながら私は、これ以上何も言わないと口をキツく噤んだまま下がっていく。

生徒名簿。

それこそが先生がDから与えられた悪趣味なスキルで、生徒の情報が分かるものの、その情報を生徒には教えるはならず、破った場合何か良くない事が起きるといふ、罰則付きのスキルだった。

そのペナルティが、重いのか軽いのか、実際には私にも分からない。もしかしたら何も無いのかもしれないし、連座で大多数が巻き込まれる危険なものなのかもしれない。

ぶっちゃけ、私が言及するのもギリギリセーフなのか怪しいのだ。なので、必要最小限の情報だけ説明するに留めるしかない。

……ああ、疲れた。

幸いな事に工藤さんは察してくれたようだし、前世で先生から貰った恩も少しは返せたと思う。

その分、工藤さんにダメージが大きく入ったようだけど、こればかりは私の管轄外。

広がった溝については、本人同士で話し合っただけ埋めてもらうしか無い。

工藤さんは内心の整理に没入しだしたのか、蹲ったまま暫く動くことはなさそうだ。

まあ、多少は同情できんことも無い。

生まれたばかりの頃から、ずっと此処に居たんだもん。

自由も、娯楽も、刺激も、——死の危険も無い、真綿の監獄に。

私は、御免だね。

死と隣合わせの自由と、ペットとしての飼い殺しの人生だったら、迷いなく自由を取る。

明日、魔物に喰われて死ぬとしても、それもまあ良し。

自由の代償は高く付いた、だが悔いは無い。

魂は、気高く輝いたのだ。

けれど死ぬつもりなど更々無いよ。

私には、私を真っ直ぐ見てくれる人が居るから。

それだけで、自分がどれだけ価値があるのか、理解出来るのだからさ。

その真っ直ぐ見てくれる人の背に回る。

首を回して瞳が追い掛けてくるものの、その視線はちつとも不快じゃない。

そして、彼女のつむじ辺りに顎を乗せるように寄り掛かると、そつと頭上で耳打ち。

「後は全部任せた、コケちゃん」

「……………了解」

もう何もしない！

話を振られても、何も答えないぞっ！

魔術で即席の石製ベンチを作り出すと、私は腰を降ろして背もたれに体重を預けた。

そんな私を見る目は様々だが、気にしない。

一生分の台詞を言い切ったとでも思えるような感覚なので、どう思われようが休みたいのだ。

耳だけは傾けつつ、私は顔を伏せた。

透視もオフにすれば、赤みがかかった暗闇が視界を埋め尽くし、私を外界の猥雑さから遠ざけて、夕闇のような安寧を齎してくれるのであった。

——ほんの少しの時間だけ、白織が視覚情報を遮断している時。

後を頼まれた翠の子は、軽く下唇を噛む。

そして、ちらりと一瞥して——心の中で呟く。

白ちゃんの、ばか……

54 死に掛けの星

先程まで、喧騒が留まることを知らずにいた広場。

私たちの目的、エルフを滅ぼした理由。

泣き崩れ、これまでの本音を曝け出した先生の事。

それらの出来事が立て続けに起き、受け止めるにしても何にしても、無言とはいかなかった時間もある程度の落ち着きを見せ、現在は次の説明に戦々恐々としつつも期待しているような雰囲気となっていた。

白ちゃんから耳打ちされた感触を誤魔化す為に、私は帽子の位置を調整する。

その広い鍰を持つ魔女帽で、少し顔を隠すようにしながら。

人の気も知らないで……、まったく……

よくよく考えると、普段から距離感是非常に近かったと思う。

話せる話せないの壁が白ちゃんにはあるように、口が動かなくなる相手には距離を取ろうとするのに対し、気を許した相手には物理的にもグイグイ来るようになるからだ。

なので、先程の白ちゃんの行動は、特段いつもと変わった行動では無いけれど……

自覚をしたというだけで、こうも気持ちを揺さぶられてしまうようでは、隠そうとしてもすぐにバレてしまいそうだった。

今はまだ、白ちゃんが気付いたという様子は無いから大丈夫だと思う。

けれど、普段通りという自己暗示も何時まで持つか分かったものではないと、そう感じていたのであった。

「話を戻して……今ならまだ、あれらの事を記した研究資料なども確認しに行く事が出来ますよ。あまり気分の良い内容とは言えませんが」

「いえ……結構よ。それが真実なのね……」

「私は……」

「俺たちも、いいか？」

「……では、先生たちは午後にも私たちのところに」

「はい」

「ああ」

壊れた機械の残骸を見ながら、脱線してしまった話を引き戻すべく声を出す。

中断された説明の補足として裏付けになる証拠について触れると、エルフの里に閉じ込められていた転生者たちは、纏め役の工藤さんが動かなかった事から全体としても動かず。

先生とシュレインたち勇者パーティは、自らの眼で真実を確認したいと意思を示しているので、一先ず他の説明を優先してから後ほどと告げる。

そして――

「次の話に移る前に……あなた達は何処まで知っていますか？」

外界から隔離されていたにしては、ある程度の情報を知っている様子の彼女らを見て、話を擦り合わせるために、基本的な部分について何処まで理解しているのかを問う。

そこからは意気消沈している工藤さんに代わって、シュレインたちが話し始めた。

此処に来る経緯となった、王国の叛乱騒動。

その一件に関わっていたユーゴーが率いる帝国軍が、エルフの里へと進軍している情報。

そして、システムから教えられた禁忌について。

その禁忌から、星が崩壊しかけている事について知り、先生が語ったエルフの情報との食い違いに気付いて疑惑を覚え、保護されていた転生者たちを里から逃せないかと探っていた事。

システムの存在意義と神言の正体に、犠牲となった女神について

……

「――大まかには合っています。どれも基本的には、間違っではないません」

彼らの話を聞き終えて私は、欠け落ちている情報について説明する。

王国の叛乱騒動は、里以外に存在するエルフを殲滅する作戦の一環にて起こしたものである事。

その際、国の上層部にポティマスの洗脳が施されていたので大掛かりな作戦となり、様々な事件が巻き起こったのは、私たちが引き金を引いたのだと認識して構わないと告げた。

その説明に、最も渦中にいた当事者であろうシユレインは口を挟むことも無く、只々静かに耳を傾けている。

事前にラースくんやユーゴーから話を聞いているとしても、不自然なほど反応が無いことが気になるけれど、話の進行を優先してその点には触れずに話を続けた。

「禁忌から教えられる情報についても、一部禁忌では語られていない話もあります」

星が崩壊しかけた原因が、ポティマスそして当時の人間たちであり、そして現代のそれとは違う神格としての龍が星の生命力を奪って脱出し、滅亡へのカウントダウンが始まったという、歴史の闇へと消えた真実を語る。

「……どうして、その情報を知ったんだ？」

「信じがたい話だと思われませんが、システムが稼働する前から生きていた人が私たちのリーダー的存在であり、私たちみんなの恩人なので」

「その人って？」

「今代の魔王、アリエルさん。世界の崩壊を目撃した生き証人で、遂に星の寿命が危険域に達した事から、魔王という役を担ってでも戦うことを選んだ人です」

魔王という言葉に、ざわめきだつた。

それは外で暮らしていた転生者以外も同様で、このような場所に囚われていても、魔王ひいては魔族に対する恐怖観が浸透しているのだと察し、強引にだけど流れを変えさせる。

「そもそも……。勇者と魔王の関係性について、シユレインはご存知

ですか？」

「え？ いや……どちらでもシステムから任命された人物が勇者と魔王になり、魔王は勇者によって討たれる。そういう戦いが繰り返されてきた事くらいしか」

「なら、もつとシステムの根幹に踏み込んだ話から説明します」

そうして告げるのは、人族と魔族の役回り。

恐れられている魔族の正体が、MAエネルギーを使って進化した人間であり、星の崩壊を早めた人類の子孫である事。

その魔族は贖罪の為に人族と争い続け、システムにエネルギーを注ぐ宿命を背負っている。

それを主導するのが、任命と同時に禁忌を与えられる魔王という存在である事。

「でも、それは過去の人類が悪いのであって、今の魔族の人達には関係無いことじゃッ！」

「確かに、そうです。けれど世界の仕組みとして、そうなっている事をまず理解して下さい」

そして魔王は、基本的に魔族の中から選ばれるので、人族よりも長い寿命から能力的にも優れている事が多く、普通に戦っては勝負にならない。

なので、人族から選ばれる勇者には、対抗手段が用意されている事を説明する。

勇者は必ず、魔王と同等の実力まで引き上げられるという事。

その力の源泉は、システムに貯蓄されたMAエネルギーであり、今の魔王と勇者が対峙すれば莫大な量のエネルギーが消費されてしまう事を告げた。

「なら、勇者であるユリウス兄様が亡くなったのは……」

「勇者とアリエルさんを戦わせない為に……そして勇者ユリウスを殺したのは、私です」

「——ッ!? そんなッ」

絶句するシユレインを無視し、勇者剣という特効武器についても説明する。

その説明の間にショックから復活したシュレインが、剣を見ながら茫洋と呟く。

「この、剣が、か……?」

「ニーアさんレイセさんから、あなたの事は聞いています。出てきたらどうですか?」

『……やれやれ、ふて寝すら出来ぬか』

私の呼びかけに対し、やや古風な言い回しの念話が、全員の耳へと響いた。

それと同時に現れたのは、小さな体に膨大な力を秘めた、白き龍だった。

「あなたは……」

『我は光龍ビヤク。この勇者剣の守護者にして、先代勇者を見守ってきた者だ』

「ユリウス兄様を?」

『然り。我と勇者剣を見つけ出したのは、お主の兄じゃ』

勇者剣の装飾から浮かび上がるように出現した白龍はゆらりと宙を舞い、シュレインの首巻きと重なるようにその細長い体を巻きつけ、彼の肩に足を乗せた。

新たに現れたビヤクに対し、色々と聞きたそうなシュレインだったが、それをグツと堪えて此方へと向き直る。

「……続けてくれ」

「分かりました」

その瞳には、隠しきれない怒りと悲しみが滲んでいたが、口には出さずに何処までも平坦な声で話の続きを求めた。

そして、そんな魔族と人族、魔王と勇者の関係性は、システムによって定められたものであり、この関係は星が再生しシステムが不要となるまでは永遠に続く、呪われた法則なのだと告げた。

「星の状態がどれほど危機的な状態なのかは、実際に体感して貰う方が理解して貰えるかと」

どうにも言葉だけでは、現在の状況がどれほど深刻なのか理解しきれないようだと感じる。

私は座り込んで休んでいる白ちゃんの傍に寄ると手を取り、先程の意趣返しも兼ねてやたら耳元の近くから呟く。

「白ちゃん、万里眼で宇宙から見た星を映して欲しいのだけど……」

「うへッ!? ……あーはいはい、了解ですよー」

肩をビクリと跳ねさせ奇声が漏れた白ちゃんは小声で返事をする
と、瞼を開いて紅い瞳を空へと向けた。

そして白ちゃんの手直接接触している私は、魂同士での感応によって感覚を共有し、白ちゃんが見ている景色を私が中継して、転生者たち全員へと共有させた。

「なっ」

「うお!?!」

「ごんな、嘘でしょ?」

啞然、驚愕、戸惑いの声。

「これこそが、現在この星が置かれている実情なのです」

今全員が見ているのは、宇宙空間に視点を置いた白ちゃんの視界。

そこに映っていたのは、今もなお星の半分が崩壊したままの光景だった。

自らの暮らす地が死に掛けの惑星であることに、まさかとか、そんななど、様々な声上がる。

事前に知っていた私たちの側を除いて、この場に居る全ての人が顔を強張らせ目を見開く。

禁忌から先に情報を得ていたシュレインも、この光景を目の当たりにして驚きを隠せておらず、肩に停まった光龍のビヤクもこうして見るのは初めてなのか低く唸り声を上げていた。

そうして、一分にも満たない感覚共有だったけれど与えた衝撃は計り知れない時間が過ぎれば、真っ先に立ち直った先生が、私に質問をしてきた。

「……苔森さん。さっきの光景が、この星の本当の姿なんですね?」

「はい。間違いなく」

続けて来た質問はこの星が後何年持つかという話で、その問いに少なくとも人族が寿命を迎える程度の期間では、星が崩壊したりする事

は無いと説明した。

「——しかし、私たちにとっては別なのです」

人族の寿命では問題は起きない、けれどエルフの先生のように長命だと、そして不老な吸血鬼のソフィアちゃんに魔物から進化したラスくん、最後に私と白ちゃんにとっては、他人事ではいられない。

右手を人の形から苔の集合体へと変え、威圧感は抑えるようにしながら光輪と翅を展開する。

それでも熾烈に青白く輝く光に、転生者たちは気圧されたような或いは魅入られたような顔で、私を見詰めていた。

「人族とも魔族とも違う、人外に生まれた私たちは不老とも呼べる寿命を持っていました。だからこそ星の危機には他人事ではいられず、まだ取り返しがつく今こそが、行動を起こす最初で最後のチャンスだったからなのです」

だから今こうして、私たちはエルフを滅ぼし戦争を引き起こしても、星を救う為に戦い続けているのだと、深い覚悟を声に乗せながら全員へと語りかけるのであった。

解放していた光を閉じ、右手を元に戻して人外らしい特徴を収める。

その私の宣言を聞いて、再び黙り込んでしまうシユレイン。

反論したい、けれどどう言っているのか分からずに悩んでいるようだった。

代わりに前へ出てきたのは、同じく魔物生まれで光竜から人化した姿が前世の容姿と非常に良く似ている漆原さんことフェイルーン。

「あー……予想なんだけど。あんたらって、あたしと同じ魔物生まれ？」

「はい。私と白ちゃん、そしてラスくん……ああ笹島くんは、魔物から進化して現在の姿になりましたので。ソフィアちゃんは魔物では無いですけど人外なのは一緒です」

ソフィアちゃんの場合は、生まれながらの吸血鬼という出自であるが、人外で不老なのは一緒であるので、同じ範疇にある。

唯一ユーゴーだけが、ごく普通の寿命しか持っていない人族ではあ

るけれど。

「……そっかあ、マジかー。あたしも何か違っていたら、そっち側に居たかもしれないって事？」

「それは分かりません。私たちが集まったのは、アリエルさんの御陰でもありますから」

色んな事があつたけれど、私たちが一つの場所に集う事が出来たのは、アリエルさんという旗印があつたからこそ。

アリエルさんが居なければ、私と白ちゃんは二人で旅を続けていただろうし、ソフィアちゃんも白ちゃんが見つけたという切っ掛けはあるにせよ、アリエルさんが保護しなければあの戦争後どうなっていたのか予想も付かない。

そしてラーズくんは、私たちがアリエルさんと一緒に旅をしなければ出会うことすら無く、今も雪山を彷徨っているか戦いの中で死んでいただろう。

真後ろから、……いや、私の方は殺され掛けたんだけどなあというボヤク声が聞こえたけれど、そちらの方は話がややこしくなってしまうので無視する。

——あれは、白ちゃんの自業自得の面も多々あるので。

「じゃあ……俺たちは、どうすればいい？　こんな事を知って俺たちに何が出来る？」

「それは……」

「あーすまん。真剣な話してるとこ悪いんだが」

顔を上げたシュレインが、悲壮な想いを宿した目で問いかけてきたところ、今の今迄すっかりと存在を忘れられていたサジンが、明るい調子のまま口を挟んできた。

荻原くんと抱き合うような形で縛られたままという、なんとも言い難い状態であるけれど顔だけは真剣そのものといった表情で、如何にも重要な事を話すように言葉を紡いだ。

「漏れそうなんだ。トイレ行ってきていい？　さっきので玉ヒュンして、もうマジ限界なんだわ」

一瞬、力が抜けたのは不可抗力だと思いたい。

密着して縛られている状態の荻原くんの方は、呆れ顔から驚愕へと激しく表情が入れ替わって、言葉にすればまさしく、嘘だろ!?!と言っているような顔をしていた。

「良いんじゃないかしら? どうにも考えが纏まってないのも居るみたいだし、小休止って事で」

そう言うが早いか、さっさと背を向けて離れていくソフィアちゃん。

あまり興味がなさそうで、つまらなさそうな顔を隠しもせずにした彼女は、その態度の通りに早々と立ち去っていった。

「じゃあ、ドロン!」

サジンが叫びながら姿を消し、縛っていたものを失ったロープが一拍遅れて静かに落ちる。

残された荻原くんは、大きく安堵の溜め息をつくと周囲を見回し、誰か僕のも外してくれないかと近くにいた男子へ訴えていた。

それぞれ、姿勢を崩したり休憩したりする転生者たち。

一転して緩い空気が変わったのを感じ、この状況では説明しようにも誰も身が入らないと察した私は、暫く白ちゃんと共にこの場から離れようとする。

私たちが居ては話せない話。

そういうのもあるだろうと考えての行動だったけれど、背後から私に対し呼び掛ける声が――

「真理……ちゃん」

「ユーリ……いいえ、結花ちゃん」

そこに立っていたのは、前世で友達だった長谷部結花が生まれ変わった姿。

靡く銀の髪と翡翠の眼が深く、私を見詰めていた。

「ん」

「……わかったよ」

白ちゃんからは私の事はいいからと示され、誰かに話しかけられる前に逃げるように、さっさと離れていった。

そして遠ざかっていく白ちゃんに眉を下げながら目を細め、胸の内
で燻る感情に蓋を落とすと、表情を元に戻し振り返った。

今更、友達だとは心から名乗れはしないだろうけれど、せめて誠意
を持って答えよう。

それが、関わる必要の無かった友達を巻き込んでしまった側の、責
任だと思つて。

55 聖女と翠星と、白蜘蛛と

去っていかうとする、小さな背を追い掛ける。

この期を逃せば、二度と私と彼女の道は交わらない。

そんな気がしていた。

なんて言えば良いのか、どう話せば良いのか。

思考を加速させても何も纏まってすらないというのに、気持ちだけが奔って止まらない。

ユーリーン・ウレンは、小走りしながら考える。

彼女は、間違いなく前世で友達だった人であり、そして私の知っている苔森真理という少女では無かったから。

記憶の中では、いつも楽しそうな笑顔を浮かべていた真理ちゃん。

そんな彼女が、彫刻のような冷たい無表情を貼り付けて、私たちの前に現れたのだった。

足首に届きそうな途中から色が変わる長い金髪や、体格と比べると非常に大きく見える三角帽を被った魔女みたいな服装など、容姿だけでも前世との差異は多岐に渡る。

不思議と似合っていたし、顔も彼女だと分かる特徴を残しながらより洗練されたような造形へと変化していて、まるで彼女をモデルにして作られた精巧な人形のように。

彼女が人間じゃないという事には、心から驚愕した。

勿論、友達が生きていて嬉しいという気持ちもあるけれど、それよりも私は、真理ちゃんが今に至るまでに歩んできた来歴を想像して、心を痛めてしまう。

魔物に生まれるというのは、どういうものなのか私には想像もつかない。

同じ魔物生まれでも生まれた時には王宮の中で、シユン君と一緒に過ごしてきたフェイさんも、人では無いなりの不便さや不自由さに、何度も愚痴をこぼしていたもの。

あの凍りつくような凜冽な光に恐ろしいと感じつつも、全てを包み込んでくれるような神々しさも感じた、光輪を背に浮かべ人では無い

と証明していた姿。

私は、あの姿に怖いと思いつつも、何処か想像もつかない畏怖のよ
うなものを感じていた。

そこに至るまでに彼女は、何を見て何を経験したんだろう。

フェイさんよりも過酷な環境から現在の姿があるのだとしたら、
いったいどれほどの苦難を乗り越えて、戦ってきたのだろうか。

それは、前世の真理ちゃんとは似ても似つかない雰囲気から、否が
応にでも察せられたから。

「真理……ちゃん」

「ユーリ……いいえ、結花ちゃん」

さして長くもない距離。

すぐに追いついた彼女の隣には、若葉さんを真っ白にしたような、
白と名乗る少女が。

「………わかったよ」

白さんが私の方を示したと思ったら、それだけの短いジェスチャー
で内容を理解した真理ちゃんは足を止めて、此方へと視線を合わせて
きた。

そして、ほんの数秒ほどの沈黙が私たちの間に流れ、私が何を言
うか言葉に詰まっていると、彼女は静かに口を開いた。

「それで、何の用ですか？」

その口調は突き放すかのようで、再会した友達に向けるような優し
さは何処にもない冷たいものだった。

「えつと……その……」

「……私たちに恨み言ですか？ 全てお前達のせいだと。確かに、そ
う言われても仕方のない事をしてきました。理由や理屈を説明して
も、納得出来るものでは無いのは分かっていますから」

「………違うよ」

そう心の何処かで感じていたのも事実ではあるが、そんな事を言
たくて来たんじゃない。

私たちの住む星が、危険すらも越えた状態だったのも理解したし、彼女たちが今迄人知れず泥を被りながら頑張ってきた事も、今となっては納得すら感じる。

そりやあまあ、何も知らない私たちに人殺しを前提とした計画を持ち掛けられても、反発するか敵対するかのどちらかだろうし、今でも私は星が危ないから大勢の命を殺すなんて出来やしない。

それが、普通の人間にとつての限界だろうから。

なら、何を言いたくて此処まで来たのか。

その答えは、少し前のシユン君と京也君との再会の光景が思い浮かんだことで、漸く確かな形で自覚したのだった。

あの時に、シユン君が出した答えこそが、今の私たちに必要な事なのだと――

「恨み言を言いに来たんじゃない。ただ、私は……友達に会いに来たんだよ、真理ちゃん」

そう、ただ会いたかっただけなんだよ。

目の前の友達から目を逸らしちゃ駄目。

逃げたら、二度と私たちは、友達には戻れないから。

「確かに、怒ったり悲しいと思つたのも事実だし……どうしてこんな事になっているの、誰かを責めたい気持ちもあるよ。けれど、違ふんだよ。そんな事は本当はどうだって良いんだから。犠牲になつた人からすれば、何言ってるんだって怒られそうだけど……でもやっぱ、私は真理ちゃんともう一度友達として話がしたいって……それだけなんだから」

きよとんとした瞳をしている真理ちゃんに、私は宣言する。

「だから、ええつと……私、逃げないっ！ 真理ちゃんが何であろうと、私は友達だつて思ってるから。だからもう一度……友達になつてくれませんか？ 真理ちゃん」

私の好きな人がそうしたように、私も逃げずに受け止める。

シユン君の真似だとしてもこの瞬間だけは、私が導き出した私だけの本音なのだから。

《熟練度が一定に達しました。スキル「神性領域拡張LV1」を獲得し

ました》

答えを告げた瞬間、魂が昇華されたような気がした。

神言が私に起きた変化を伝えてくださるけれど、その意味までは教えてはくれず、ただ私と真理ちゃんとの間に、奇妙な沈黙が流れているのを感じるだけだった。

「……あははっ。友達も何も、友達では無いなんて、一度たりとも言った事すら無いのに」

雪解けを迎えた花のように、柔らかに綻んだ笑顔。

無理に貼り付けていたような無表情が溶けて無くなり、いつかの記憶と今の彼女が重なり合う。

「はい、此方こそ。また友達になってくれますか？ 結花ちゃん」

その微笑みは、やっぱり前世の彼女とは少し違う憂いも帯びた儂いものだったけれど、それでもさっきまでの押し殺したような顔よりは、何倍も良い綺麗な笑顔だった。

「初めて……笑ってくれたね」

「それはまあ。敵同士みたいな関係でしたから、笑顔なんて出せる訳が無いでしょう？ それに何だか、さっきのは告白みたいで、それも可笑しくて」

「もーっ！ そんなんじや無いよ。私が好きなのは………えへへ」

釣られて、私も頬が緩む。

息が詰まりそうな寒々しい空気は、もう何処にもなかった。

「結花ちゃんの言葉を疑っている訳では無いんです。ただ、お互いに知らない時間を重ねてきて、その中にはきつと……認め難い事も沢山してきました。そういうのを知った結花ちゃんがどう思うのか……。私自身が、嫌われた方がマシと、臆病風に吹かれていただけみたい」

真理ちゃんが自嘲するように、小さく呟く。

「真理ちゃん……」

「ああ待って。その名前では、あんまり呼んで欲しくは無いから……」

彼女が言うには、そちら側の転生者たちは前世の名前との決別をし、皆それぞれ新しい名を受け入れ、今の人生と向き合っているらし

い。

「それじゃあ……なんて呼べばいいの？」

「あんまり、元の名前から変わっていないようだけど……。コケちゃんって言うのが今の愛称なのかな？ ……ああいや違う」

それは、前の世界と何も変わらない。

今の私は――

「翠星……この名前が、今の私」

神として、そしてこの星の行く末を背負う者として、この名前なのだから。

――そう見越して、Dさんもこんな名を与えたんだと思いたい。

「わかった、翠星ちゃん」

「でも……普段は、コケちゃんをお願い。そっちの方が呼ばれ慣れているから」

「じゃあコケちゃん。私も、ユーリって呼んでほしいな」

「うん、ユーリちゃん」

そうして、お互い新たな名での自己紹介が終われば、次の話へ。

そうして少し、お互いの身の上話などに花を咲かせるのであった。

私からは、教会での修行と質素な生活に、不満もありつつも結構のめり込んできた事を。

コケちゃんからは、魔物に生まれたばかりの頃、過酷極まるエルロー大迷宮で白さんと日々一緒に過ごした話を微笑交じりで、けれど楽しそうに話すのであった。

「私とユーリちゃんの間で仲直りが成立したとしても、それだけでは何の問題も解決はしていないよね。話してみても、彼から頼まれてきたのでしょうか？」

そう言っただけで彼女が促したのは、私が此処に来る前の出来事だった。

それは話が中断した後、シユン君と交わした短い一幕。

『聞きたい事は山程ある。けど、俺では冷静に聞けないだろうから、ユーリに頼みたい』

悲しげに顔を伏せ苦悩しているシユン君が頼んできたのは、自分の

代わりに私がコケちゃんから答えを聞いてきて欲しいというものだった。

『あの時、この剣で彼女を殺したいと思っってしまった。無防備な背中に剣を突き立てて、兄様の仇だと叫びたかった。……けど、それは違うとも思った。俺がすべき事は、そんな事じゃない』

そう絞り出すかのように吐き出された言葉は、紛れもないシユン君の本心だったのだろう。

シユン君にとって、この世界で誰よりも心を傾けていたユリウス王子。

男性に嫉妬するなんて変な話だけど、そう感じてしまうほどシユン君はユリウス王子に熱を上げていたのだから、彼が亡くなったと聞いて受けたショックも彼を殺害した犯人に対する憎悪も一際大きかったのだと、察せられる。

『だからまずは……彼女の本心が聞きたい。ユーリ、頼まれてくれるか？』

それなのに、そんな心を自制して真実を見極めようという姿勢に、尊敬の念を感じたのだった。

『どうして、シユン君のお兄さんを……？』

「理由はさっきの話し合いで説明したし、そういうのが聞きたいって訳では無いよね」

「はい。コケちゃんの本心について、聞きたいから」

彼女は一度表情を消して瞼を閉じると、寂しげな顔で語り始めた。

「私も、殺さねばならないから、ただ殺した訳では断じてありません。……むしろ、出来る事なら勇者ユリウスには生きていて欲しいと、そう願いたくなる美しい魂の持ち主でしたから」

そう言うや一転、決意を滲ませた表情で宣言する。

「けれど、殺したかったから殺すなんて、そんな単純な理由で命を奪った事など、一度も無いっ。魔物も人も、食べ物として、糧として、贄として……どれも重く受け止めながら命を奪ってきた。彼を殺したのも、そうしなければ為らないという……全てを台無しにしかねない勇者という爆弾を排除するためには、良い人だろうと何だろうと、私

自身の心を殺してでも、命を奪わなければならなかったのだから……」

そう言い切った彼女の姿は、酷く弱々しく悲しそうな雰囲気だ。

本当は命の遣り取りなんか望んでいないのだと感じるような、そんな後悔と罪の意識に苛まれて泣くのを堪えている、ごく普通の小さな少女に見えたから。

「……………ですから、許して貰おうだなんて考えてもいません。私は、私なりの理由と正義で勇者ユリウスを殺したと。そしてその罪を重々承知の上で、止まる訳にはいかないのだと。そのようにシユレインくんへと伝えて下さい」

再び、無表情の仮面を被る彼女。

それは今、立ち止まる訳にはいかないからこそ、か弱い内心を隠すために張られた防壁なのだと感じるのであった。

「そんなのって…………」

「ちよつと長く喋りすぎたかも。また今度、ゆっくり話そうね。……出来ればきつと、…………全てが救われた後にでも」

「待って、コケちゃん…………ツ！」

「次の準備もあるから…………彼にも、よろしくね。……またね、ユーリちゃん」

——一陣の強い横風が吹く。

その次の瞬間には、彼女の姿は何処にも無くて。

夢か幻のように気配も音も無く、私の目の前から消えていたのだっ
た。

「私は…………」

「……………ユーリ」

「シユン君」

近づいてくる足音に振り返れば、そこには複雑な表情をしたシユン君が。

「聞いてたの？」

「ああ……」

シユン君のお兄さんの話から、コツソリと耳を傾けていたらしい。その事は、さっきの様子を見るに、コケちゃん自身も気付いていたようだ。

「許せない?」

「それは……そうだな。やっぱり理屈じゃあ、納得出来ないところがある」

「それが普通なんだよ。理由があつたから兄弟を殺されて、はいそうですかと、簡単に納得出来るはず無いんだから」

理屈で分かつてても、感情は別というのは、良くある事。

「でもね……彼女は私の友達なの。仇だからって殺されそうになれば阻止するし、見過ごせない。それに……シユン君にも、恨みで誰かを殺すような事はして欲しく無いなって、そう思うから」

それでも、思い留まれるのが人の強さだと、シユン君にはそれが出来ると思うから。

私なりに出来る事は、拗れそうな二人の間を取り成す事なのかもしれない。

そう感じていたのだった。

「話が必要なら、私も同席させてね。頑張つて、険悪にならないよう取り持つから」

「……ありがとう、ユーリ」

「えへへ。どういたしまして」

シユン君からの深い感謝の籠もったお礼に、少し照れてしまう。

こんな状況でも、好きな人と一緒に居るといふのは、心が踊って表面に現れてしまうから。

「そっか……許す、いや認める、か……」

あれ? そういえば、もしかしてコケちゃんって……

隣で、シユン君が悩み今まさに答えを導き出そうとしていたその時、私の脳裏に過ぎったのは、話し合いのときにコケちゃん気配が少し揺らいだ瞬間の前後のこと。

そして思う、やたらと近しいボディタッチも説明途中に含んだ、白

さんとの距離感。

——もしかして、二人……付き合ってる!?

そのまさかの予想に私が思ったのは、実にくだらない下世話で失礼な話で。

そっかあー。

だから若葉さん、いや白さんは、男子どもをこっ酷くフリ続けていた訳なのかなあ……

あと、コケちゃんは何らか男嫌いなところを見せてたし、そっちはまあ納得しか無いという。

導き出した結論は、実にシンプル。

……まさか白さんが、同性好きのロリコンだったなんて。

今まさに、酷いレッテルを貼ってしまったような気がするが、そう見えるんだから仕方ない。

前世で誰も相手にしなかったのは、そもそも男子は対象外だったからという、身も蓋もない理由だったと、なんだか納得してしまいそうだった。

ああ、でもやっぱり、若葉さんと白さんは、違うのかな？

そう思うのだった。

なんとというか、根本の雰囲気が違うと言えればいいのかな。

若葉さんは超然とした、同じ人間とは思えないような隔絶した影のある雰囲気纏っていた。

それに対し白さんは、周囲を押し潰すようなヒリヒリ焼け付く雰囲気だけど、それでも優しさも一握りほど持ち合わせた、二つの側面があるような気配。

まるでそう、真夏に浮かぶ太陽のよう。

強すぎる日差しで大半の動物はバテちゃうけど、植物には恵みの光でもある、そんな気配。

若葉さんが底知れぬ闇なら、白さんは灼熱の閃光。

多分だけど、この感覚は正しいと、——私はそう思ったのだった。

……うーん、コケちゃん遅いなあ。
気になるから、様子見みしよつと。
決してこれは覗きでは無い。

！
大技の反動で病み上がりなコケちゃんが、ただ心配なだけだからっ

！
私たちが今居るのは、第十軍の野营地外側。

転生者たちとは、だいぶ距離が離れているから、再開するまでは顔を合わせずに済みそう。

一緒にいるのは、吸血っ子だけ。

鬼くんとユーゴーは、それぞれ別のところに行っているみたい。

そこで吸血っ子は、スキルで召喚した影狼なる黒い狼を背もたれにして、実に気持ちよさそうに日向ぼっこしていた。

おい、お前吸血鬼だろ？ 良いのか、それで。

当の本人は、燦々と照らす光を浴びながら、穏やかに目を閉じ寝る体勢へとなっていた。

……こいつ、ほつとくとそのまま寝そうだな。

時間になったら、容赦無く蹴り起こすか。

そんな吸血っ子の姿を横目に見ながら、私は瞼を開いた。

そうして万里眼の邪眼でコケちゃんを映せば、長谷部さんと話している姿が。

そのお互いの表情は、予想とは違って穏やかなものだった。

あつれ？ なんか和やかに会話してるし、どゆこと？

長谷部さんに対して自然な柔らかい表情で答えるコケちゃんに、何故だか分からないけれど言いようのない黒いモヤモヤを感じた。

そして二人は、実に仲の良さそうな雰囲気ですれ合っている。

その話の内容までは、読唇術とかが使えない私には此処からでは理解出来ず、そうして胸の内側で燻る不快感は、より大きくなっていくのだった。

その表情は、私だけに向けて欲しい。

コケちゃんの笑顔は、私だけが独占していたい。

——そんな事が、脳裏に思い浮かんだ。

んん??

今、何を思った?

それは、まるで——私が、嫉妬しているみたいじゃないか。

その瞬間。

虚無だった白蜘蛛の心が、大きく揺らぎ始める。

けれどそれはまだ、圧縮され密度を高めた末に生まれる光には、まだ足りていない。

戸惑いを気の所為だと思い、忘却の彼方へと投げ捨てた白蜘蛛は気付かなかった。

自分の心。

それを自覚するには、まだ彼女は純粹すぎて……悲しいほどに、まだ空白だったから。

56 説明会の終わり

説明の中断から、おおよそ三十分程。

それだけの間を空けた休憩時間は、既に終りを迎えた。

先程ユーリちゃんとの会話を不自然に切ってしまった事に、少々気味いような気持ちを感じている中、戻ってきた話し合いの場。

当然その中には、友達の縁を繋ぎ直したばかりの彼女の姿もあって

……

心配そうな、此方の様子に注意深く気を配っているような視線が、私へと向けられていた。

その視線に、少し罪悪感のようなものを覚えてしまう。

……けれど、あの時に会話を打ち切らなければ、見せる必要の無い弱みを晒していただろうし、そうするほか無かった。

彼女の前から姿を消した後の、空白の数分間。

その間の私は一人誰も居ない場所へと姿を隠し、蹲るしか出来ない状態に陥っていたのだから。

左脇腹を、そつと擦る。

魔術でも誤魔化しが効かない、刺し抉られるような痛みは、もう静まり収まっていた。

人型になった時から刻まれていた、傷跡のようなもの。

それは時々痛みを私へと訴えていたけれど、最近では頻度も重さも段々と酷くなってきた。

内側から内臓を壊され侵蝕されているかのような痛みは、生贄の呪い。

無知のまま神になりたいと邪神に願ったが故の、その代償。

悪化していく傷の痛みは、まるで残された時間を示しているようで

システムとの繋がりに意識を向ければ、浮かび上がってくる
制限時間。
カウントダウン

——まだ、大丈夫。

全てを終わらせるまでは持つと、そう計算したのだから。

「——さて、全員揃いましたか？」

まだ休憩から戻って来ていない人も誰かが呼びに行き、各自の椅子や敷物へと座る。

雑談に興じていた人も、私たちが戻ってきた事で会話を止め、再び静かに耳を傾けていた。

私たちの側も、欠伸を堪えきれないソフィアちゃんの様子以外は、以前と同じ並びに。

唯一変わっていたのは、サジンと荻原くんの二人の状態。

説明を中断する前の抱き合うような体勢から、個別に縛った状態へと変わっており、余った縄をシュレインが持つている事から、あの体勢では話を聞くのに不都合だと、改めて縛り直したのかもしれない。

それでも、しっかりと拘束されているのは、特にサジンには縄が食い込むほどキツく縛っているのは、忍者というスキルを持つ事への警戒の現れか、それとも単なる信用の無さからなのか。

……後者のような気がするけれど、それは今に関係無いものだから置いておこう。

そのほか個人的に注目してしまう点は、シュレインの傍に寄り添って密着しかねないほど近くに並んだ、ユーリちゃんとカティアの姿についてだろうか。

学園での出来事からシュレインと、此処には居ないスーレシア姫も加えた彼女たちの間に、複雑な人間関係が形成されている事は知っていた。

勿論、優柔不断なシュレインの気質によって、未だ誰にも手を出してはいないようだと、学園の監視や調査をしてきたので、私が思っているような関係では無いと理解しているんです。

けれどその光景によって、遥か遠き前世のトラウマ部分が静かに刺激されて、イライラが沸々と膨張して心を荒ませていく。

ただの創作話としてなら、許容しよう。

その他にも、王族として複数の相手を持つ必要があるなど、そういった理由でなら一応納得出来なくもない。

しかし、いざ現実として目の前で展開されると、少しばかり苛立つてしまうのであった。

——ハーレム野郎は、去勢されてしまえばいいッ。

父親だと認めたく無い男は、いわゆる複数の女性関係を持つていたらしく。

大好きなお母さんが母子家庭シングルマザーへとなった理由が、そういった類のものであったが故に。

こればかりは私の根幹を形作る、根が深い価値観なのだった。

「ごほん。……では改めて、説明を再開します」

さつきまでと同じように、努めて無機質に、説明するためだけの状態へ。

内心の激憤を覆い隠す伶俐な仮面を被り、まだ判断する情報が不足し戸惑ったままの転生者たちと相對する。

何処まで話したのかを記憶から振り返って、先程の最後の会話を思い出し言葉を紡いだ。

「何をすれば良いのか……という話ですけれど、基本的には特にありません」

その言葉に困惑し訝しむ様子の転生者たち。

いち早く反応したのは、休憩時間中に精神的に持ち直していたらしい工藤さんの声だった。

「ちよつと待って。特に無いって、どういう事なの？」

険しい声色で口を挟んだ彼女は、最初から変わらない鋭い目のまま此方を見据えた。

「その言葉の通りです。エルフの里に軟禁されていた転生者たちには、特に何かをして欲しい事はありませんから。むしろ変な事をして掻き乱される事の方が、色々と手間になるので止めて欲しいくらいです」

主に、サジンと荻原くんの方に目線を向けながら、そう告げた。

そして視界の端では、あの変な縛り方を行っただろう女子たちが視線を泳がせている姿が、目に映るのであった。

あれくらいなら、まあ本人たちには溜まったものじゃないけれど、問題にも為らない些細な事。

むしろされると一番困るのは、周囲も現状も把握せずに一斉に逃げ出そうとする事に他ならないけれど……それは指摘せずにいた方が良いでしょう。

言われて気付いたから嫌がらせに動く、そんな事態は本心からご遠慮願いたい。

「変な事って……ふざけないで。そんな事しないわよッ！」

「ちよつと、待て。そんな言い方は……」

「——委員長、山田くん。そこまでにしといて」

激昂しかけた工藤さんと苦言を呈してきたシュレインらの言葉を遮り、口を挟んできたのは今迄ずっと静観をしていたアサカさんだった。

「今は取り敢えず、話を聞いときましょう。聞けるときには、より多くの情報を得ないと。それが生死に直結だつてするんだから」

思いもよらぬ援護射撃に、私は内心で驚いた。

彼女の声には相応の重みを感じられ、それが冒険者として生活してきた彼女なりの、経験則から紡がれた言葉だと察せられるようだった。

彼女と彼について、知っている事はそう多く無い。

せいぜい、冒険者として活動し人魔大戦にも参加していたなど、殺人経験も含めた結構な場数を踏んだらしいという事を、知っているだけである。

同じく行動を共にしてきたクニヒコの方はというと、言われて初めて気付いたとばかりの反応をしている模様で……

その事から、その手の交渉事は主にアサカさんが行っていたのだろうなとも、二人の様子の違いから読み取れてしまうのであった。

「続きをお願い。その言い方だと、外から来た私たちには何か有るよ
うな言い回しよね？」

不承不承ながらも、氣勢を沈め座り直す工藤さんとシユレイン。アサカさんの発言は至極真つ当な正論であるので、個々がどう受け取ったにせよ反対する言葉を呑み込んで納得し、けれど不満げに口をキツく噤んでいた。

「はい、その通りです。ですがその前に、これからの転生者たちの処遇について話しておきます。当面の間は、私たちが責任を持って保護します。住む場所も食事も贅沢などは約束出来ませんが、困らない範囲で面倒を見るつもりです。少なくとも、エルフの里での暮らしより酷くなる事は無いと保証しましょう」

第十軍で管理している土地、私やアリエルさんの個人資産、それと魔術などによる強引な解決策など、多少の問題なら無視出来る程度の余裕はある。

いざとなれば、今回の協力者である神言教側の手助けを仰いでも良いし。

その私の発言に、囚われていた転生者たちの誰もが安堵の息を溢す。

中には、自給自足生活はおさらばだとか、外の世界ってどんなのだろうとか、解放に喜ぶ言葉や未知への期待の声なども聞こえていた。

「おい、お前たち。前に話してやった事忘れたのか？ 仮に彼女が話した事がホントだとしても、外の世界はそんな優しい場所じゃないっーの」

「そうですね。最低限、身の回りの事は各自でして貰うと思います。そこまでは面倒見切れませんから」

クニヒコと私の苦言と忠告にも、何処吹く風な転生者たち。

保護するとはいえ、彼ら彼女らは別に要介護人などでは無いのだから。

そんな甘えた人間が居たとしたら、泣こうが喚こうが容赦無く放り出す。

「それと、希望があればそれに沿った形で答えます。帰りたい場所があるのなら送り届けますし、一人出て行きたいと言うのならそれでも良いです。……流石に無いとは思いますが、何も無くなり手助けして

くれたエルフもおらず、周囲には魔物が生息する場所でも問題無いと言うのでしたら、此処に残るといふ選択肢も構いません」

最後の言葉には、転生者たちの幾人かが同じ様に、首を横に振っていた。

「苔森ちゃん……今、エルフも居ないって」

「……先生には酷な話ですが、誰が裏側に通じたエルフなのか分からない以上、里に居たエルフは先生を除いて、文字通り皆殺しにしました」

「そん、な……。いえ……。当、然ですよね……」

ザワリと揺らぐ空気。

転生者たちにも関係がある話で、たとえ軟禁されていたとしても接する機会のあるエルフの人も居ただろう。

そのエルフらも死んでいると聞かされれば、冷静でいられない人も数多く。

「そこまでやるか!？」

「やりすぎよっ!」

静かに受け止める先生とは対照的に、加熱していく転生者たち。

「あーもう! うっさいわねえ。さつき苔森が理由説明したでしょう? エルフは一人残らず死んだの、あなたらはそれだけ知ってれば良いのよ。気にすべきは、この後の自分の生活。此処で過ごしたあれこれなんて、私には知った事じゃないのよ。責任どころか正義どころか、聞く気なんて欠片も有りはしないわ」

指向性を持った冷気が吹き荒れる。

その発生源はソフィアちゃんで、彼女はもう我慢ならないといった様子で騒ぎ立てる転生者たちを一喝した。

それらに晒された転生者たちは、急に襲ってきた寒風と威圧の籠もった背筋が凍えそうな声に、強制的に萎縮させられ、血の気の失せた青褪めた顔で体を震わせていた。

「抑えて、ソフィアさん」

「何よ? そもそも私らに説明する義理なんて無いのよ。前世の好よしみで親切に教えてやっているのに聞く気が無く邪魔するってのなら、こう

して黙らせるまでよ」

「ソフィアちゃん」

「はいはい、説明してるのは苔森だものね。邪魔したわ」

手をヒラヒラと振り、もう何もしませんとアピールするソフィアちゃん。

「まったく……口を開けばギャーギャーギャーと……。そんなに嫌なら、地球にでも帰れば良いじゃない」

心底喧しいと嫌悪感を露わにするソフィアちゃんは、最後の最後で特級の爆弾を落としてしまうのであった。

「え?」

「は?」

「あ……」

瞬間的に凍結する空気。

そして次の瞬間には、聴き逃がせない和高々に激発する声が。

「帰れるの!?!」

その工藤さんの声に合わせて、期待に満ちた視線で大騒ぎとなる他の転生者たち。

ソフィアちゃんがさっきの言葉を白ちゃんの方を向きながら言ってしまった事で、それが誰なら可能なのかと、教えてしまっていた。

「……お仕置き、確定」

「まって、今物凄く嫌な感じがしたんだけど!?!」

是非も無し。

こればかりは、私でも擁護出来ない。

喜び興奮する人や感極まって涙ぐむ人も居る中、私と白ちゃんは顔を見合わせて——瞬きの内に意見を擦り合わせた。

そして——

「無理、です」

「……今は、それは出来ません」

確かに、白ちゃんなら地球にも行ける。

けれど、今の転生者たちでは地球へと連れて行けない理由があったから。

この世界には、システムがある。

それは星を再生させるのが最終目標ではあるが、付随して後々エネルギーを回収する為に、魂を育てる機能がある。

それが、ステータスであり、スキルである。

しかし、本来であるならば転生者たちには適応されない法則でもあった。

なにせ私たちは、別の星である地球からやって来た、よそ者であり部外者ともいえる魂である。

なので、システムが管理する魂の対象外であり、ステータスもスキルといった恩恵も本来ならば存在していなかった。

それを解決していたのが、n%ⅠⅡWのスキルだった。

システムと紐付けを行い、此方の法則に転生者の魂を適合させる為のスキル。

このスキルがあるからこそ、転生者たちがシステムの恩恵を得られるようになっていて、それと同時にシステムと完全に馴染み切らないように制御している効果もあった。

完全に馴染んでしまうと、この世界で循環している魂の一つだと認識されてしまい、システムによって未来永劫、その魂は囚われてしまう。

そうならないようにn%ⅠⅡWのスキルは魂を分類分けして管理させ、それを防いでくれている訳であった。

だからこそなのか、n%ⅠⅡWのスキルは、魂の根幹部分と密接な位置にて接続されている。

システムと転生者の魂を繋ぐものであり、正しく言うのならスキルなどでは無く、システムへと接続する為の変換器とでも言うような代物であるから、そういう構造をしていたのであった。

これを残したまま、システムの外へと連れ出すのは、色んな意味で危険性が伴ってしまう。

単純に、システムの補助が無くなるので魂に付加されたスキルなどが機能しなくなり、余分な物を抱えた魂が、その重みに耐えきれぬかどうか、一つ。

次に、予期せぬ誤作動を起こす可能性だってある。

機能しないがあればその逆、暴走する可能性だって無いとは言えないのだから。

そしてこれが一番の要因なのだが、無理にシステムの外へと連れ出すと、魂が自壊する危険性が非常に高いというのが、転生者たちをこの星から逃がす事が出来ない理由だった。

魂に付加されているそれらが急に消失した場合、反動として強烈極まる負荷が掛かるだろう。

それは、普通の魂では先ず耐えきれないと、私と白ちゃん二人での魔族領に居た頃の検討会にて推察と予測がなされていたのだった。

一応、外そうと思えば、それは不可能では無い。

至難の技と表現するのも生温いほど、極めて繊細な作業を求められるだろうけど相応の時間さえ掛ければ、飛び抜けて魂への干渉性に秀でている私でなら、何とか解放出来そうだとは思う。

けれど、そんな事をするには時間が幾ら有っても足りないし、そんな悠長な事はしてられない。

システムを解体し大元から接続を切ってしまうえば、それらの問題は全て解決するのだから、案の一つとして考えた以上には、全く考えてもいない事柄であった。

そのような事をソフィアちゃんが言ったのは、時々地球へ行っていた白ちゃんが持ち帰った地球由来の物品を見せたり、いつかの過去にて帰りたいかと聞いたせいだろう。

けれど現時点では、イタズラに混乱させるだけの不必要な情報だった。

私は、それをどうにか矛先をずらし誤魔化す為に、それらしい理屈と正しい訳を瞬時に考え、口を開いた。

「おとぎ話のように転移が可能な、空間魔法というものがあります。それを極めれば、どうなると思いますか？」

「……ああ、そういう事か」

これ以上余計な事は言うなど、ソフィアちゃんたちには目で釘を刺

しておく。

ラーズくんが、それだけで察したのか小さく呟き、上手く合わせてきた。

「その白さんは、空間魔法が得意だね。大陸中に潜むエルフラ狩り出す時にも、僕たちを世界中へと送ってくれたんだ」

その言葉に新たな動揺も生まれるけれど、大の混乱を収める為に意図的に無視して続ける。

「僕たちが今日この日の計画を実行出来たのも、白さんの功績が大きいい。その彼女なら、いつの日にか地球にだって辿り着ける。これは、そういう仮定の上での話だよ」

「しかし、そう簡単なものではないと思って下さい。現に私たちが、星から逃げ出さずに、戦って星を救う方を選んだことから——理解頂ければと」

私とラーズくんの言葉に、一気に醒めて沈静化する空気。

どうにか最悪の展開にはならず、煙に巻けたようだ。

しかし、それでも希望があると、色めき立つ転生者たちの姿もちらほらと。

「予め言っておきますが——空間魔法を極めた上で、システムの補助も受けられない先の先を行うという、普通に考えて到底人の寿命では成し得ない、机上の空論にも似た可能性である事を憶えておいて下さいね……」

その唯一の例外が白ちゃんなのは確かだけど、そもそもからしてシステム頼りの魔法ではなく、権能混じりの「魔術」である。

それは他人には真似なんて不可能な、白ちゃん固有の超高等技術であった。

「本当にごめんなさい変な希望を抱かせてしまったようで。再三言いますが、こればかりは確実な保証など、何処にもありませんからね？あくまで私たちならという話ですし」

その釘刺しにも、本当に理解しているのか怪しい転生者も多いなか、話を続ける。

まあ、システム解体後でなら帰還も可能ではあるから、その時それでもなお帰りたいという人がいるのならば、個人的には勧めたくは無けれど白ちゃんとは相談しよう。

この問題が一応の纏まりを見せたことに、内心で深く安堵した。

正直、この話はとても気分が悪くて悪くて仕方がなかった。

向こうでは既に死人しびとで、此方では人から外れた存在が故に——私は、帰る気など無いのだから。

「……さて、説明に戻ります。これからの事については、保護している期間中に世界の情勢とかを学んで、今後の身の振り方について考えるの良いと思います。私たちに協力するのか、自立を選ぶのか、それとも拒絶を選ぶのか……選択肢は無数にありますし、どれを選んでも私たちはその選択を尊重しますから」

これで、エルフの里に囚われていた転生者たちに向けた、大まかな説明は終了。

後は、それ以外の転生者に向けた説明が残っていた。

「そして、私たちが個別に協力をお願いしたいのは、支配者スキルというものを所持している人に対してのみです」

この中で、それを持っている先生とシュレインに対して、一瞬だけ気配を向けた。

その無言の指摘に二人は反応を見せ、微かに肩が動く。

「七つの大罪と美德、それらの名前を冠した十四のスキル。それこそが支配者スキルです。漫画やアニメなどの娯楽文化や、あちらの宗教について知識がある人なら、少しは分かるかと」

先生は、以前白ちゃんが持っていた癒し手たる救恤のスキルを。

シュレインは、蘇生を司る慈悲のスキルを。

この二人は、それぞれ所持していたから。

「なので、これらのスキルを持つ人は……後でも良いので名乗り出てくれると嬉しいです。それはこの星を救う為にも、とても重要な意味を持つものなのですから」

これで、言いたい事は、全て言い終わった。

後は、彼ら彼女らの選択によって成される事。

「今日は、此処までで一旦終わりにしましょうか」
そういつて彼女らに背を向けた。

「——白ちゃん、行くよ」

踵を返して振り向き、私が想う人へと声を掛け退出しよう誘った。
私の背に、視線が突き刺さるのを感じていたが、それには取り合わず言葉だけで答える。

「別に逃げたり、放り出したりなんかしないですよ。何かあれば、この野営地に詰めている人たちへとお願ひして下さい。細かな問題なら対応するようお願いしておきますし、私たちに用があるのでしたら取り次いでくれますから」

立ち上がった白ちゃんと共に、この場から去っていく。

私たちの行動を見て、これで漸く潮時かと後に続くソフィアちゃん。
ん。

ユーゴーも少し遅れて歩き出し、唯一ラーズくんだけが立ち止まって迷っているようだった。

その更に背後、残された転生者たちは、突然の打ち切りに困惑しているようであり、息が詰まる話し合いの終了に安堵しているようだった。

あれなら、まあ——今のところ大事となる問題には発展する事も無いだろうと感じた。

そして、説明中ずっと白ちゃんの視線が背中に注がれていた事に気付いていながらも、それには触れず普段通りの距離感で並び歩く。

この瞬間だけ余計な周囲の雑踏は、意識の外へと霞んでいった。

——なんだか、やけに白ちゃんの事となると敏感に察知してしまうなあ。

これが、恋を自覚したからなのかと思ひながら、私と白ちゃんは去っていくのであった。

今は指摘なんかしない。

それで変な空気になるのは嫌だし、もしそれで白ちゃんの本心などを知ってしまったら、普通ではいられないから。

けれど……いつかは聞きたいな。

白ちゃんが私の事を、コケちゃんという人物の事を、どう思っているのかを。

ねえ、その時には——素直に教えてくれますか？

57 残された者達の決断

退出していった彼女たちの背を転生者たちは見送り、それから数分が経過した。

この場に残るは、シユレインら勇者組、唯一残されたエルフのフィリメス、冒険者として活動していたクニヒコとアサカ、囚われていた転生者たちとその代表、変わらず縛られたままのサジンと荻原、そしてこの騒動の引き金を引いた側のラース。

残された転生者たちを取り巻く空気は、個々人で多種多様な感情が入り混じり、混沌としか言えない様相を見せていた。

ある人らは、冷静に状況を見据えようと思惟を巡らせ。

ある人らは、直情的ゆえに義憤と納得の狭間で揺れる男と、何処までも現実的に眺める女。

ある人たちは、舞い降りた一縷の希望とやらに浮かれ気味で。

ある人は、生来染み付いた性ゆえ、それでも疑念が残ると未だ不安そうに。

ある人らは、平時と変わらぬ明るき呑気さと、それを窺める気苦勞に溜め息を吐く。

またある人は、出来る事なら全てやり直したいと、慚愧と後悔の念に沈んでいた。

「先生」

「え、あ……シユン君」

悩むフィリメスは声を掛けられ、驚いたような反応を見せる。

その様子は、普段の彼女とは全く異なり、覇気の無い茫洋とした顔だった。

「大丈夫ですか？ やっぱり休んだ方が」

「はい。ありがとうございます、シユン君。……でも、先生は大丈夫ですよ。白さんから言われたように、こうして俯いている訳には、いきませんし」

けれど、彼女の頭の中では、何一つ整理が付いていない。

エルフの事、転生者たちの事、星の事、そしてそれら全ての常識を

打ち壊した彼女たちの事……

一体誰を恨めば良いのか、混乱した頭と心では判別がつかない。今まで利用する為だとは言え転生者たちの捜索に尽力してくれたポティマスか、それとも真相を叩き付け自らが知る世界を壊した彼女たちか。

彼女たちを怨むのも、お門違いだとは気付いている。

けれど、エルフの中にも親しくしていた人も居たし、それらの人達も一切の別も無く纏めて殺されていると知れば、複雑な感情で胸が苛まれる。

正直に告げるとするならば実はエルフ達には、そんなに心痛めている訳では無い。

非情にも思えるが、単に優先順位の問題。

フィリメス・ハアイフエナスイや岡崎香奈美にとっては、今世での同族であるエルフより、前世から知っている生徒達の方が、心を占める割合が多かっただけに過ぎないのだから。

だから、里に居たエルフが皆殺しの憂き目にあつたと知つてもショックではあるけれど、意外と冷静に受け止めている自分が居るのに、彼女は奇妙な納得感を覚えながら気付くのであつた。

「やあ先生。ちよつと良いかな」

「おい、京也。今は……」

「大丈夫、シュンが思っているような事を言いに来たんじゃ無いから」突然、割り込んできた声の主は、角がある以外は前世とほぼ変わらない、けれど雰囲気は勇壮なものへとなっていた青年。

その僅かな違和こそが、彼女に世界の違いというものを、鮮烈に示すのであつた。

「少し、僕の昔話をしても良いかな？」

「京也の？」

「そう、僕の今世での昔話さ」

その言葉に、驚きの表情を浮かべるシュレイン。

それは、その話について少しばかり理解していたからこそその反応だつた。

「僕が生まれたのは、魔の山脈にあるゴブリンの村だった」

「ゴブリンって、まさか」

「その通り、最初はちっぽけな一ゴブリンに過ぎなかったんだよ」

鬼人は、己の過去を語る。

その村では、原始的ながらも生きるといふ事に真摯な生活が、営まれていたと。

「そこで、僕は生まれ持ったスキルを使って、村に貢献しようとした」
彼の手に、無から発生したかのように小さなナイフが生まれた。

それを弄びながら、彼は小鬼であつた自らの過去へと立ち戻る。

「それによって、村では狩りの成功率が上がり飢えで亡くなる子供も減って、日常生活でも使える刃物が増えた事により食事や建物も向上していったんだ」

「別にそれって、ただ良い事尽くめじゃないか」

「そうだね……最初はそう思ってたし、みんなの役に立っていると
思ってた誇らしかったよ」

しかし鬼人は、曖昧に笑う。

「その結果、出処不明の武器を持っているゴブリンとして、僕たちの村
は人族から討伐される事になった」

「——ッ!？」

「そんな……っ」

あまりにも報われない結末が予想出来て、絶句するシユレインと
ファイリメス。

「その結果は、予定調和として村は全滅。そして僕は、珍しいスキルを
持った魔物として、人族の召喚師に隷属させられる事になった。その
後の事は、あまり気分の良い話では無いから割愛させて貰うよ。最終
的に、その召喚師の支配を断ち切り、その召喚師を含めた人族たちを
怒りのまま殺し尽くしたという話だから」

壮絶な半生を語る口調は穏やかで、とてもそんな出来事があつたと
は思えないほど淡々と続く。

「それからの僕は怒りに瞳を曇らせ、魔の山脈を彷徨っていた頃に白
さんたちと出会い、その流れで彼女たちと合流したっていう経緯さ」

そこで一旦口を止め、彼は表情を大きく歪める。

そこから読み取れるのは、強い自罰と自嘲の色だろうか。

「まあ僕が言いたい事はさ……良かれと思つてした事が、村に破滅を呼んでしまつたつて事。その結末は救いような無いもので、後悔しても取り戻せない過去の出来事さ。——本当に、僕は愚かな小鬼だつたんだよ」

その明かされた事実には、親友だつた少年は答えられない。

彼が思うより、想像以上に凄絶な親友の過去に、何と声を掛けて良いのか分からないからだ。

「笹島くんは……それをどう受け止めたんですか？」

エルフの少女は、鬼人へと問いかける。

彼がその罪に対して、どんな答えを出したのか、知りたいと思つたから。

「受け止めてなんか、いないさ」

「え？」

「今も犯した罪を受け止めるなんて出来てはいないんだ。ただ償い続けるだけの人生。もう居ない村のみんなの為に、これからもずっと」

予想だにしない言葉に、彼女は目を丸くする。

それを認識し、彼は薄く微笑した。

「けどね、悩む先生を見て、僕なりに気付いた気がするんだよ。僕の贖罪は虚しいだけだなと」

「そんな事は……」

「いいや、違わないさ。だって僕の贖罪には相手が居ないから。結局何処まで行つても自己満足に過ぎないと、そう思つたんだ」

もはや誰もおらず風化した村の残骸の記憶と、この場に居る彼女が救つた転生者たちを見比べて鬼人は嗤う。

自分が救われたいから為す贖罪と、他人の為に行える償い。

そのどちらが、尊いものだろうか、彼は過去を振り返りながら告げていた。

「僕にはそんな償いしか無かつたけど、先生には選択肢がある。それが羨ましくもあるし苦悩する事だつてあるだろうとは思ふよ。けど、

いつかは立ち上がって欲しいと思うな。僕とは違って答えは直ぐ傍にあるんだからさ」

先生を信じている。

それは白の少女が見せたものと同じ、何処までも信頼という名の無責任で、けれども思い遣りに満ちた言葉だった。

その信頼を向けられる価値なんて私には……そう思った彼女は自らが救った生徒たちを見た。

そこに映ったのは——今でもなお彼女を先生として想い心配する顔だったから。

その事に気付いて彼女は、ああ……と小さく呟く。

悩みの全てが晴れた訳では無い。

けれど、こんな私でも頼られている。

その事実気付いて、彼女は決意と共に立ち上がった。

「やっぱり、私は先生ですっ。生徒の為に私はっ、立ち止まる訳にはいきません！」

宣言する。

己はやっぱり、生まれ変わっても失敗したとしても、先生である事に変わりないと。

これからの未来でも、間違う事はあるだろう。

それでも生徒を守る為なら、挫けたり立ち止まったりは、もうしないのだと強く誓うのだった。

「それにしても……私より大人みたいですな、笹島くん」

「それはまあ、何年も軍……」

「笹やーん！ 俺そんな事知らなかったよーっ！ 辛かっただろうに、うおおおん、ズビビッ」

「引っ付くなバカ！ お前の鼻水とかで汚れるっ！」

号泣しながら飛びついたのは、ガチガチに絞められた縄から一瞬で抜け出したサジン。

感極まって顔を様々な液体で汚す彼はそのままラースの腰に抱きつこうとしたが、それを察知した当人によって容赦無く地面に叩き

伏せられていた。

その喜劇のような流れに、息を呑むような重苦しい空気が払拭されて、笑いが沸き起こる。

そのような明るい空気へと移行させたのは紛れもなくサジンの功績なのだが、それを素直に称賛出来ないのは、やはり彼のお気楽過ぎる性格ゆえだろう。

「えつと……笹島くん」

「なんだい委員長」

「なんて言ったら良いのか判らないけれど……ごめんなさい、色々と誤解していたわ。あなたたちの事も、世界の事も」

転生者たちの代表である工藤さんは、深い自責で心が重い。

何処か、甘く考えてはいなかっただろうか。

前世の価値観に縛られ命の遣り取りや戦争などが、全て自分には縁遠い遥か遠い場所での出来事だと、そう感じてはいなかっただろうか。

不便で退屈だけど、それ以外には逼迫して困った事の無い環境が、どれだけ恵まれていたのか、今になって漸く気付いたから。

「僕の経歴はかなり特殊な生い立ちだから、それがスタンダードとはとても言えないけれど。まあ優しくは無い世界だよ、この世界はさ。クニヒコたちなら、それを実感しているんじゃないかな」

「ん？ ……あーまあ、そうだな……突然、親兄弟皆殺しにされる。そんな事が起こる世界だよ、此処は」

瞳の奥に暗い復讐の炎を宿しながら、クニヒコは言った。

その言葉に、再度強烈な衝撃を受ける転生者たち。

この彼もまた、夢見がちな冒険譚を歩んで来たのでは無く、苛烈過ぎる程の人生を歩んできたのだと知って、憧れを口にしていた己を深く自省し肩を落としていた。

クニヒコの脳裏に浮かぶは、燃え盛る故郷の地。

その深々と記憶に刻まれた災禍を引き起こした、圧倒的な格の違いを見せつけてきた痩身な男の姿が浮かんでいた。

その男が所属しているのは魔族軍、その軍団長の一人。

その事実気付いた彼は、鬼人へと問い掛けた。

「なあ笹島。お前はメラゾフェイスつつう男を知ってるか？ ……答えろ」

「……ああ、勿論。僕たちと志を同じくする仲間だよ」

その氣迫滾らせたクニヒコの声色と、これまでの作戦に関する情報共有を唱えた翠の少女が主催した説明会にて事実を知っていた鬼人は、心に何とも言えない苦味を感じながら答えた。

「メラゾフェイスさんも此処に来ている。後で会ってくれるよう、お願いしとくよ。 ……僕からは、それだけさ」

「ああ……それだけで、充分だ」

彼らの因縁は、一先ずこの場では先送りとなった。

よって、次の話題は……

「これから私たち、どうすれば良いのかしら。保護してくれるとは言うけれど、その後は？ 協力するしないにせよ、何の基盤も無いんじや将来は暗いわ。世界の命運という話だけでは無く、明日をどう生きるかという話でもあるし」

寄る辺なき転生者たちの今後、その話だった。

此処には居ない、翠の彼女が語った壮大過ぎる話を疑っている訳では無い。

それほどもまでに、星の状態というものを直接体感させられた事が衝撃的だったからだ。

「星を救うって、要は沢山の命が育ったら、それを沢山殺すって事でしょ？ つまり私たちに誰かを殺せって言うんじゃ無いわよね……」
「安心して欲しい。罪を負うのは僕たちだけで充分だし、その負の連鎖も直に終わらせるつもりだから」

「京也、そいつは一体？」

鬼人は言うべきかどうか僅かに逡巡したのち、ゆっくりと口を開いた。

「さつき支配者スキルについて話していたよね。それにはキーと呼ばれる特別な機能があるんだ。それを使って、僕たちは現在のシステムの構造そのものを再編し、強制的に星の再生を起動させるつもりなん

だよ」

「まさか、そんな事が可能なのか……?」

「仔細までは知らないけど、苔森さん達が言うにはそうらしいよ」
明かされた星の救済手段に、誰もが言葉を失う。

よもや、そこまでシステムの核心に迫っていたのかと驚き、またその方法のデタラメさに理解の範疇を越えていたからだ。

「いやこの際手段については置いておこう。それを為した場合どうなる? システムを再編すれば今のシステムの恩恵に支えられた世界が何事もなく無事であるはずが無い」

「鋭いね、シュン。その通りステータスやスキルは消失し、全世界規模で尋常では無い混乱が発生するだろう。僕たちを支える力も消失し、化物からただの無力な存在へと落ちぶれるさ」

だが、これで良いと鬼人は告げる。

それでシステムありきで繁栄してきたこの世界は、再び崩壊するかもしれない。

しかしそれこそが、本来あるべき姿だと力強く宣言した。

「そもそも、システムという存在自体が異物そのものなんだよ。砕け散った星を再生させる為とはいえ、強いられる贖いの代償が重すぎる。それは一体何年続いている? 禁忌のログを見れば判るけど軽く千年は、この終わりなき地獄が繰り返されてきたんだよ」

ならば、終わらせねば為らない。

己が悲劇の運命に落とされた原因がスキルという世界の理であるならば、それによる利得を破却させてしまおうとしても、望むところだと鬼人は雄々しく語る。

——その結果、自らが大罪人として吊るされても構わないと。

「ふざけるなッ! 何勝手に納得してんだよ。認められるか、そんな事ッ!!」

響いた怒号は、怒りよりも悲しみに満ちた絶叫だった。

「システムが元来不要な存在だったのは、俺も同意見だよ。そんなものが無い世界から来た転生者なら、尚の事分かるさ。けどな、親友が死んでも構わないと聞かされて、はいそうですかと言える訳無いだろ

……」

そんな悲しい運命など言わないでおくれと、シュレインは友へと続けるように叫んでいた。

「なら、シュン。君はどうするんだい？ どのみちシステムは一度解体される。その流れは止められないし、例えだが今更僕一人が離反した処でどうにも為らないよ。世界は一新される、その結果として然るべき罰を僕は受ける。これは、彼女たちに協力すると決めた時に誓った、僕の贖罪なのだから」

それでもなお、僕を止めるかい？

そう告げる彼に、シュレインは――

「……ああ、そうだな。俺では止められないだろう。世界の命運も、京也の贖罪も、何一つだつて止める事など不可能だろうさ。なんたつて戦う事に怯え剣すら抜けない臆病者の勇者だもんな」

自分の弱さを見詰め、無理に止める事など不可能だと悟っているシュレインは、力に訴えて抗うことはしない。

説得も無意味、善悪を問うのも無意味、彼は止まらない、止められない、それが分かるから――

「けどな、親友として……一人の友人が悲しい人生歩もうとしてんなら、支えてやりたい救つてやりたいと思つて何が悪いッ！」

自らのエゴを、渾身の気迫でもつて叩き付けた。

親友を想う、剥き出しの心。

止められないのなら、重荷を分かち合う。

戦いというものに致命的なままでに向いていない勇者が示せる、唯一の勇気がそれだと信じて、彼は地獄へと墮ちようとしている親友の支えになりたいと、全ての想いを籠めて吼えていた。

「そーいや、前世から京也は融通がきかなかつたよな。いつも零か一か、極端なんだよッ！ 罪を犯したから死ぬしか無い？ 馬鹿なのか、どうして生きるという選択肢が無いんだ。一人で償う事が死しか無いと言うのなら、俺を巻き込めッ！ 絶対死なせない、体張つても支えてやるから覚悟しろよッ、この大馬鹿野郎ッ!!」

襟首を掴み上げながら、滾る熱を眈から溢しつつシュレインは、頑

固者の親友へと決意を宣したのだった。

「ああ、いいよ。俺は京也たちに協力する。どうせ俺一人が抗つても、流れに呑み込まれるだけ。なら、自分の意思で乗っかてやる。それが崇高なものでも卑賤なものでも構うものか。その結末の如何も、全て受け止めてやる」

激情のまま、シュレインは湧き上がる言葉をそのまま吐き出ししていく。

自分でも、何を言っているのか良く理解しないまま、けれど言葉は止まらない。

「俺はッ、京也お前と再び会えて嬉しかったさ！ だから、またさよならなんて御免なんだよッ」

全ては、親友の為に。

ちっぽけな非戦の勇者が出した答えは、全てを受け入れる寛容さという答えだった。

「私も、協力します。生徒が辛い道を歩んでいるのに先生が何もしないなんて、そんなの私自身が許せませんから。その過程や結果も、先生は見届けたいんです」

困っている誰かがいれば見過ごせず、救恤せずにはいられない。

何処まで行っても自分は先生だったから、彼女もまた立候補する。

今ここに、鍵を持つ者が二人、力強く己の意思を示し覚悟を燃やすのであった。

「……………あれ、どう思うっ？」

「シュン×キョウヤ……………アリね！」

「止めなさい、あなた達！」

腐り落ちた彼女たちは、こんな状況でも変わらず平常運転だった。
ある意味、恐れ知らずの勇者とは、彼女たちの事を差すのだろう

……

しかし、この彼女たちの活動は、今後の趨勢に影響を与えない。
彼女たちは、ただの舞台裏的一幕、それだけに過ぎないのだから。

58 変革の兆し

糸で編まれた手錠と首輪を嵌めたソフィアちゃんが、部屋の中央にて座らされていた。

「……辞世の句は？」

「まって、ご主人さま!? 言い訳する機会も無しに死刑なのっ!」

此処は私と白ちゃんが墜落させた、ポティマスが設計製造した宇宙船の中。

外の中世じみた世界観からは不釣り合いな鋼の室内にて、冷たく硬い床へと座らされたソフィアちゃんが抗議の叫びを上げる。

甲高く騒ぐ彼女を無視して、肅々と裁判は進んでいく。

「別に俺としては、向こうに帰っても一成が居ないんじや意味はねえし、今ではこの世界にも愛着が無いとは言えねえしな。帰還なんてどうでも良い。だが、あの発言は色々駄目だろ。今バラすことじゃねえのは俺でも分かるわ」

「正直、あの失言は私でも擁護出来ないし、罰は受けて然るべき。何とか最悪の展開は回避出来たから良かったものの、希望があると知った彼ら彼女らから今後もこの手の質問に晒される事になるのが目に見えるようで……まあ、やりすぎは止めるから、安心して地獄に墜ちるといいよ」

ぞんざいな口調で呆れ果てるユーゴーと、盛大に嘆息しながら容赦無く助けを求める叫びを切り捨てる私。

今この場にて、彼女に救いの手を差し伸べようとする奇特な存在など誰一人として居なかった。

「味方が、誰も居ないわッ!!」

被告人の不服を訴える陳述は却下され、早々に判決は下された。

「断、罪」

「ウギャアアアッ?!?!」

設計者の思想が伺えるような、偏執的なまでに理路整然と通された天井の配管へ糸が貼り付き、その糸によって空中へと吊るされるソフィアちゃん。

せめてもの慈悲か、逆さ吊りや絞首などでは無く胴体から吊るされる形なので、一応下から覗き込まないかぎりスカートの中が晒されてしまうような事は無い。

しかし、糸を軸としてグルグルと高速で回転させられ、その様は滑稽を通り越してむしろ憐れに見えてくるほど、苛烈に三半規管を痛めつける拷問そのものであった。

そして程なくして――

「おえ……ごほッ、うう……」

四肢を力無く投げ出しグツタリと、二つ折りの状態で宙ぶらりんとなるソフィアちゃん。

ギリギリ吐くような事にはなっていないけれど、あと少しの刺激で決壊しそうなほど、血の気の失せた青褪めた顔で、淑女にあるまじき呻きを漏らしていた。

「これで、勘弁してやろう」

そう傲岸不遜に言い放ち、縛っていた糸を解れさせる白ちゃん。

拘束から解放されたソフィアちゃんはそのまま重力に従い、鈍い音を立てながら床へ落下した。

「これに、懲りたら……先に考えてから、喋るように」

そして、普段なら何も言わないというのに、今日は少しだけ饒舌に説く白ちゃん。

過去の一件からソフィアちゃんに対してのみ厳しめな態度を取る白ちゃんは、今でも何かあれば容赦無く制裁を下し、毎度毎度やりすぎな程の罰を下すのだけど、しかし――

「……あれ？」

「ん？ どうかしたか？」

「いやうん、何でも無い――けれど……」

結果だけ見れば、今回もソフィアちゃんは酷い目に遭って、目を回しながら床で伸びている。

けれど、いつもなら加熱して暴走しだす白ちゃんの制裁が行き過ぎないよう、私が止めに入るという構図が今迄の流れであった。

今回は私も怒っていたため阻止に入る基準が高くなっていたとい

うのもあるが、それでも以前の白ちゃんであれば、膨れ上がった癩癩から自制心を失い理不尽な暴力へと形を変えて発散するのが常だったはず。

その白ちゃんが暴走した時に止める事が出来るのが、唯一同等格で同じ思い出を共有し合っている私だけだった。

力量でも心情的にも、それは自惚れかもしれないけれど白ちゃんの隣に立てるのは私だけであり、実際に以前からそうしてきたのだ。

白ちゃんの制御装置として、そして同じ志の仲間として。

なのに、白ちゃんが自ら暴走を止めた？

私が抑えに入る前に？

この時、感じた感情は一体何なのだろう。

ただ分かるのは、寂しく悔しいと思いつつも喜んで称えたいような、複雑な入り混じった気持ち。

まるでそう——手の掛かる子供が、少しでも成長を魅せているかのようだ、そう感じていた。

「——さてと、情報共有していたとはいえ、ちゃんと細部まで聞いていなくて誤解した情報で口を滑らしたソフィアちゃんも悪いし、周知徹底の確認を怠ったコケちゃんも悪い。そして何より——本来ちゃんと説明すべき立場なのは全ての情報を握っている白ちゃんなんだからね？ コケちゃんを通して伝達出来ているけれど、いつまでも彼女に甘えてばかりじゃ駄目だよ」

正面に立つのは、アリエルさんの姿。

今起こった事の経緯と事情を、この部屋に入るなり突如始まった裁判から見聞きして理解した彼女は、喧嘩両成敗と全員それぞれの過失を上げ、やんわりと優しく叱る。

そして、槍玉に挙げられた三人は揃って彼女の前に並び、正座して反省の意を示すのであった。

「……反省してるわ」

「ごめんなさい……」

ソフィアちゃんと私が、静かに謝罪を述べる。

私たちの間にて情報共有に問題があると判ってはいても、改善しよう改善しようと考えては改革も刷新も実行せず、なあなあで済ませていたのは事実であり、その皺寄せが今回最悪のタイミングで爆発したのが、先の事件における事の本質だった。

「まあ、それを言ったら私だつて人のこと言えないけどね。白ちゃん達と出会う前は、誰かの力を借りたり協力を願うなんて、考えもしていなかったんだし。……いやはや、コミュニケーションとはかくも難しき、なんてね」

肩を竦めて、おどけるように自嘲するアリエルさんは、自分もまた会話を怠っていた側だと歪な笑みを浮かべる。

そもそも、本来の手勢とは眷属たる蜘蛛の軍団であるし単体としても突き抜けているため、魔王として活動し始めた時には全て自分で片付けようとしていたと、これもまた並外れた能力持つ者の驕りかと盛大に嘆息していた。

そして、反省を促された最後の一人は――

「……………悪かった、です」

そう小さく、けれど確かに、謝罪を口にしたのであった。

「は、ええっ!？」

「嘘、ご主人さまが…………？」

「マジか？」

「白ちゃんが素直に認めるなんて珍しい」

不満げに苛立ちも隠しもせず、私たちの反応は不服だと拗ねたように白ちゃんは返事をする。

「何? 悪い?」

「いいや、そうじゃないよ。悪いも何も…………白ちゃんって自分の過ちは絶対に認めない、唯我独尊極まった根っからのポツチ気質だったじゃん。私の言葉では反省のはの字すら受け付けないような性格で、唯一耳を傾けるのはコケちゃん。それでも謝罪は口にしない。そうだったでしょう?」

その言葉に、大きく瞳を開いて何度も頷くソフィアちゃん。

アリエルさんの疑問に対し、白ちゃんはポツリと眩きを返した。

「今までコケちゃんに……迷惑掛けてる、自覚ある、し……」

そして、訥々とつとつと時間を掛けながら話した。

「なんだかんだ頼りっぱなしな自分に、思うところがあるってだけ、だから……ちよつとくらいは素直に悪い点認めるのも、致し方無いというか……ああもう、そんな眼で見るなァッ!!」

最後は怒鳴りつけるように叫んで、直後不貞腐れたようにそつぽを向く白ちゃん。

この内心の吐露を聞いている間の私は、まるで電撃に打たれたかのような衝撃が、何度も何度も胸に深々と突き刺さっていた。

そして心を満たしていくのは、形容しがたき喜びの感情だった。

感動、高揚、誇らしい、嬉しい、——私の好きな人が、自ら成長しようとしている姿が愛しくて愛しくて堪らない。

「あーあ、一人感極まって泣きそうになってるし……ほれ、白ちゃん。責任とって慰めろ」

「魔王に言われたか無いっつーの」

忌々しげに親指を下にしたハンドサインをアリエルさんに向けながら、立ち上がる白ちゃん。

そして——

「わわっ」

「……嫌?」

「あつ、えつと……少し恥ずかしいけれど、嫌じゃ、無いよ。……えへ」
手を引かれ、そつと白ちゃんの腕の中へと誘われる。

香るお日様の匂い、背に回された腕から感じる温もり。

それらの温かくて落ち着く感触に、自然と頬が緩んではにかんでしまふ。

「別に大層な理由とか何も無いし。ただ私って改めて見ればクズだなどと、コケちゃんにばっか負担掛けさせてる自分が、嫌になっただけだよ」

「負担だなんて……それに白ちゃんはクズなんかじゃ無いよ。単に適性の問題、役割分担してただけ。私が好き好んで引き受けていた仕

事だし」

だから、別に迷惑になんて思っていない。

苦手な事を強引にさせて、白ちゃんに無理させたり軋轢を生じさせるのは良くないと、これまででは思っていたから。

——けれど、それでは駄目だと、白ちゃんは言う。

「いいや、そんな関係はもう止めだ。変わりたいんだよ、私だって。みっともない自分になんか、なりたくない。見てくれだけが良い中身の無い存在なんて、死んでも嫌だ。だから——」

最後の呟きは、言葉にならずに空へと溶けた。

その時、白ちゃんが何を言おうとしたのか分からない、けれど——
「ずっと一緒だよ、白ちゃん」

これが、彼女が求めている言葉だと確信して、ニコリと微笑みながら口に出した。

「見捨てたりなんかしないし、離れるつもりも無いよ。……だって、色んな意味で白ちゃんの隣に立てるのは私しかないのだから。人付き合いが壊滅的で、興味が無い相手にはトコトン冷淡で、知っている人でも鞭しか振るえない難儀な性格の持ち主。秘密主義だし、自分でやった方が早いと抱え込んでしまうカッコつけ。思っている事を口にしないツン多めのツンデレ。そんな白ちゃんに付き合えるのなんて寿命とか抜きにしても、私しかないのだから」

ほんの少し、本音の部分を曝け出す。

話したことの無い、今話すつもりでは無かった本当の気持ち、その一端を形にしていく。

「でも、白ちゃんが変わりたいって言うのなら……少しずつ改善していこうよ。時間なら、これが終われば幾らでもあるのだから」

未来を勝ち取る。

その結末は目前に迫って、あとは最後の一手を打っただけだから。新たな世界で、ゆっくりと歩もう。

二人で一緒に、悠久の癒やされた星の中で少しずつ。

そう、私は笑顔で告げるのであった。

対して、私の言葉を聞いた白ちゃんは胸を抑えて、非常に苦しそう

に呻いていた。

「いたい……、思い遣りに満ちた鋭い指摘が、何より痛いよ……」

意図せず心の急所を何度も抉り込んでしまった言葉によって、精神へと重篤なダメージを与えてしまい、ヨロヨロと崩れ落ちる白ちゃん。

慌てて支えるものの体格差は如何ともしがたく、そのまま膝をついた白ちゃんの肩に手を添えることしか出来なかった。

「ああつ、ごめんね、そんなつもりじゃ……」

「良いよ……よりハッキリと自覚出来たし……でも、感謝するよコケちゃん」

「……………本当にごめん、白ちゃん」

そう強がってはいるものの閉じた瞼の端に雫が滲んでいることから、明らかに歯に衣着せず言いすぎてしまったと猛省するほか無かった。

「すう——何なのかしら、この三文芝居。納得いかないわ、ああ妬ましい」

「いや、そう言うなって。……まあ俺も、あの白の意外な一面知って驚いているがよ。ところで、改めて確認なんだが、あれで——」

「まだよ」

「マジか」

「オオマジよ」

苦虫を噛み潰したかのような顔の吸血鬼と、呆れた顔で鼻を鳴らす次期帝王が小声で会話する。

「あーあー、そろそろ戻って来いお二人さん。——そんなことより、こつち見て、ほら」

途中から椅子に座り直していたらしいアリエルさんは、真剣な顔をして画面を示した。

その雰囲気から、重要な内容が見つかったのだろうと察せられた。全員が視線を細め、示された画面を追う。

そこに書かれていたのは日記であり、一日たりとも欠かすこと無くその日起きた出来事を端的に記載した文章は、日記というより業務連絡じみた無機質な記録文ではあったけれど。

そしてアリエルさんが指した部分は、その文章の中でも例外的に、書き手のポティマスさんの感情が窺い知れる内容だった。

そこにあつたのは、焦燥と疑念。

《突如としてMAエネルギーの総量が大幅に低下した。原因は不明。こちらの機器で同時期に観測した次元震となんらかの関わりがあるだろうが現時点では何とも言えない。明らかな異常事態だ。このような事例は、システム稼働後からこれまで一度もない。システムに重大な欠陥が発生したのか？ この世界にいても安全なのか？ 不明だ。ギユリエイストデイェスにこの星を離れることを禁じられているが、脱出の準備はしておいたほうがいいかもしれん》

日付を見れば、およそ十六年前。

私たちが、この世界へと転生する切っ掛けとなった、事件の日の日記。

先々代の勇者と先代の魔王、その両名ともに次元魔法の天才にて、改変した術式を用いて何かを行おうとして失敗。

その結果として、日本にある教室の一室が爆破し、先生含めて総名二十七人が死亡し転生した、あの出来事を指した内容だった。

この事件の概要については、此処に居る全員が既に知っている。それゆえ事件の内容そのものに驚いている訳では無い。

重 要 な の は、これをポティマスが書いた上で、当のポティマス自身がこの結果に驚愕しているという事実。

「どういう事だ？ あの事件はクソエルフが狙って起こした訳では無いという事なのか？」

「今迄は、勇者と魔王が次元に穴を空けた遠因が、ポティマスにあると考えて動いてきたけれど、それがそもそも間違っていた、と……？」

黒幕だと思っていた者が、黒幕では無い。

そして、先々代勇者と先代魔王が勝手に行った事とは、到底思えない。

大前提として、システムについて禁忌について理解しているだけでは始まらないのだ。

上位管理者Dその存在を知らねば、次元を越えて地球側へと干渉するなど、大それた事など考えつかないのだから。

あの大爆発はDさんを狙った攻撃だと仮定して、一体どうやって彼女の存在を知ったのか？

禁忌にすら、その名前や存在を匂わせる文言など、一切記載されていないというのに。

そもそも——ポティマスですら、Dという存在自体、知らなかったのではないのかと？

ならば、他にその事を知っているのは——

そうして、思い当たった真実が実を結ぶ直前に。

「——そうだ、全ては私の責任だ」

背後から響き渡った第三者の声に、全員が一斉に振り返った。

一瞬の空間揺らぎの後、転移して現れた黒甲冑の人物。

カツカツと足音を立てて目の前に来た黒い男こそ、この世界の管理者の一人。

ギョリエデイストデイエス、遙か過去より世界を眺めてきた黒き龍神が、そこに立っていたのであった。

59 黒の過去語り

すまない。

自分のせいだ。

私が間違えたせいで。

このような展開になるとは、予想もしていなかった。

私はただ、彼女が愛した世界を守りたかった。

それだけだった筈なのに。

底の見えない後悔の海に溺れる私は、結局何処まで行っても何をしても、負け犬の性からは逃れられなかったのだろう。

そうだとも、己は敗残者。

間違いを重ね、幾重にも降り積もった後悔に嘆くだけの、何処まで行っても救えない男だった。

最初の間違ひとは、一体何だったろうか。

傲慢極まる龍種至上主義に傾倒していた事だろうか、当時の人間が龍の子供を攫うという暴挙の対応に己が任じられた事だろうか、その時にサリエルと出会った事だろうか……

いいや、否。

これら全ては、自らを変えた転換点。

その出来事があったからこそ、今の己へと変革出来たのだ、間違いなどでは断じて無い。

それからの私は、彼女を理解しようとして監視し、されど理解出来ず、そのストーカーまがいの行動を人間に指摘されては人間の社会を学び……まあ有り体に言ってしまうえば、若く馬鹿だったのだろう。

口車に乗せられては態々相手の土俵に上がり、その度に言い包められては内心激昂しつつも暴力に訴えては負けだと手は出さず、ただひたすらに人間というものを観察し学んでいった。

だがしかし、そのおかげで得たものもあったのだ。

盲目的な龍は至高という考えから抜け出せた事や、人間にも人間なりの強さや知恵そして愚かさがあるのだと実感していき、人間の視点というものを理解していったのだ。

そして——機械サの如き月エの女神ルに恋をしたのだ。
意味が分からないと？

であろうな、なにせ彼女に対して最初に抱いた感情は、紛れもなく
「憤怒」と「恐怖」なのだから。

龍以外に、強き者など認めない。

欠点は何処かにあるはずだ、それを見つけ、ほらやはり龍こそ至高
と叫びたかった。

冗談では無い、ふざけるな、己の世界観を破壊しようとする存在が
許せなかった。

だが、そうやって知れば知るほど、彼女の歪さから目が離せなく
なっていたのだよ。

原生生物の保護を唱えつつも、人間ばかりを救済しようとする偏
り。

人間味の無い機械のように使命とやたらに忠実に従っているように
見えて、ふとした瞬間に僅かながら感情のようなものが見え隠れして
いたりする齟齬そご。

それらの自覚が彼女本人には無さそうなのがまた、苛立ちを誘って
憎々しかったさ。

そうして、彼女を気にして、彼女の生活を探り、彼女の思考を推察
し、彼女が歩んできた過去について調べて、彼女について考えている
内に……いつの間にか惹かれていたのだ。

馬鹿らしいにも程があるだろ？ 私もそう思う。

だが、惚れたのだ恋をしたのだ、その感情に偽りなど何も有りはし
ない。

此処に、どうしようもなく馬鹿で愚かな男が一人、生まれただけに
過ぎないのだ。

それを自覚した時期も含めてな……

そして、運命の日は唐突に訪れた。

人を淘汰する——星の生命力を搾取する人間に対して裁きを下す、
その宣言が我ら龍の長老から龍全員へと下された。

その時の私は、思い返しても酷いものだった。

頭の中が真っ白のまま、当時アリエルらキメラ達が暮らしていた孤児院へとフラフラと誘われるかのように足を進め、何を言うべきか何をすべきか何も判らないまま辿り着き、そこで……最初の間違いを犯したのだ。

私が選んだ選択は、何もしないという、酷く中途半端な選択。

同胞たる龍の味方をする事もせず、サリエルを孤児院に引き留める事も、彼女と一緒に戦い人を滅ぼそうとする龍を止める事も、どれも選べなかったのだから。

そして人を襲う龍と、対抗する為に星の生命力を更に搾取する人間と、そんなどうしようもない人間を守る為にたった一人で戦い続けるサリエルという構図が出来上がるのであった。

その結末は、順当に世界は争いによつて荒廃し、星を見限った龍が星の生命力を強奪して宇宙へと脱出するという、星の終焉を呼び起こす凶行でもって終結した。

この時、何か選択出来ていたとしたら、ほんの少しでも現在を変えられるていたのだろうか。

二つ目の間違いとは、星を存続させる為にサリエルを犠牲にする、その人類の、彼女自身の意思に反抗しなかった事だろう。

たとえ無意味だとしても実力的に不可能だとしても、彼女を強引にでも連れて逃げ出せば、私が恋した彼女は救えたのだ。

人間が犯した罪は龍の視点から見れば救いようの無い愚行であり、再三の注意にも耳を貸さないというのなら知的生命体であろうとも、人間など害獣と何ら変わらないのだからな。

星を捨てる、その選択を彼女は是と答えんのが分かっている……そして私が選んだのは、龍でも天使でも無く、どの勢力にも与しない神であるDに助力を乞うという、思い切った一世一代の大決断だった。

私がDについて知っていたのは、空間能力に秀でていたからに過ぎん。

何処へでも行けるからこそ決して行つてはならない場所として、

神々の間でも禁句に等しいその神の存在について、予め教えられていたのだ。

そうして、伝え聞く行動原理は「面白そうか否か」などというDに縋り付き、幸運にもあるいは不幸にもDのお眼鏡にかない、この世界はDの介入によって星とサリエルの延命が為された。

その対価として、人間はDの作ったシステムに来世を延々縛られ、助けたかったサリエル自身もシステムの核として吊るされる、そんな碌でもない現実を黙認しながら……私はDへ世界と人間とサリエルへの恋心さえも、売り渡してしまったのだ。

これにより、D主催の盛大な罰ゲームが始まった。

全てはDを楽しませる為に、この星の住人は殺し合いを延々続けなければならぬ宿命となり、己もシステムを保全する裏方を務めさせられた。

もし、だが……此処でDの監視と調整のみという指示に従わず、サリエルが願った人々が争わず殺し合わないよう導いて欲しいという言葉にも従わず、彼女を解放する為に奔走していれば少しは今を変えられるだろうか。

彼女を、あまりにも長過ぎる苦痛から解放出来ていたのではと、そう思ってしまうのだ。

Dが一体何を目的としてシステムなどという馬鹿げた代物を与えたのか、私にも真相は杳やうとして分からない。

娯楽目的だと言うのも本心だろうが、それ以外にも様々な目的が仕込まれていたのではなからうかと勘繰ってしまうのだ。

それらの遊びや仕掛けについて、私は全て理解出来ているとは到底言えない。

だが例として一つ上げよう。

向こうの世界には、蠱毒なる呪術の伝承があるらしい。

百蟲同じ壺に落とし、互いに共食いさせ最後に勝ち残ったもの、これ即ち神霊なり。

七大罪や七美德のスキルに「神へと至る」という文言がある時点で、それはあながち間違っていないのだろう。

システムは人工的に神を生み出すための実験装置、そういう事だったのだ。

その伝承では、最終的に出来上がるのが毒物というのが、最高に皮肉が効いていると思わんか。

ああ、そうとも彼女たちは毒物だ。

大概の神とは得てして、弱者から見ればそういう、傍迷惑な性質を持ち合わせているものだ。

世界を劇的に変革する、劇薬にほかならん。

だが、毒も薄めれば薬となる。

互いに中和し合う事で、ほどよき望ましい効果を。

それを期待している。

その未来を担ってくれるのなら、今此処に私の罪を晒そう。

何もしない何も選ばないというのも、もう止めだ。

己が罪業、それに向き合い、清算を行う時が来たのだ。

最も事新しき、己が犯した間違いとは――

「どういふことだッ！ 答えろギユリエ!!」

荒々しく啖呵を切った、アリエルさんの叫びが反響する。

殴り掛かろうとするアリエルさんを止めるべく抑えに掛かるが、謙譲の代償でステータスなどが下がっていても長年鍛え上げた体捌きまでは衰えておらず、するりと横を抜けられギユリエさんに馬乗りになると、彼の顔面を何度も何度もアリエルさんは殴りつけていく。

なんとか白ちやんの手も借り引き剥がす事に成功するが、アリエルさんの怒りは治まるどころかより深く燃え滾っていく。

魂に負った重篤な傷に治療を施したとはいえ、まだ安静にしている欲しい。

治療前の椅子から立ち上がるのも苦痛な状態から、軽く動いても大丈夫な程度には安定しているけれど、それでも今のアリエルさんは残った皮膚を縫合して出血を止めただけの状態。

今無理をすれば再び傷口が開いてしまい、今度こそ治療の施しようが無いほど魂が粉々に壊れてしまう、そうなってしまえば来世すらも望めない。

食って掛かるアリエルさんの怒号が波となって噴出し、室内に反響する。

問い糾すアリエルさんに対し、ギユリエさんは殴られて当然だと静かに受け止めつつ、ゆっくり口を開いた。

「すまん……などと、薄っぺらい謝罪を口にしても納得しないだろう。今から話すのは、十六年前に起きた次元震。それを私から見た場合での真実だ。……良いか？」

床から身を起こし立ち上がったギユリエさんは、手で拭った自分の血をおもむろに眺め、覚悟を決めたかのようにギラギラと眼光湛えた瞳で此方を見た。

そして、過去が明かされようとしたその時――

「ちよつと待って」

「……白ちゃん？」

それに待ったを掛ける声が。

「どうして止めるのさ、白ちゃん？ 今の私は、事の次第によっては白ちゃん相手でも怒りを抑えられないだけけど？」

「分体から連絡、先生たちがこつち来たいって……折角だから、彼らにも聞かせる」

「……………ああ、良いよ。聞かせてやろう、いいかギユリエ？」

「構わない。……とうに覚悟は出来ているとも」

ギユリエさんの話は、一時後回しとなった。

煮え滾る気持ちを落ち着かせる為に、アリエルさんは荒々しく椅子に座っては瞑目しているし、ギユリエさんも凧いだ湖面の如く黙り込んで、壁に寄り掛かっていた。

しかしその様子は、今にも爆発寸前の火口のようにだと、内側の感情が解放される間隙で堰き止められているだけなのだ、そう感じるようだった。

「それじゃあ、迎えに……」

「私が行くよ」

「白ちゃんが？」

その立候補に、静かに驚く。

「変わりたいと言った手前、これくらいはやらないとね。なにより転移で運ぶほうが早いし」

「でも……」

「そりゃあ会話質問説明、どれも嫌さ。けど嫌々してたら何も変わらんから」

「……分かった。いつてらっしやい、白ちゃん」

そして、空間転移にて一瞬で消える白ちゃん。

その数分後、先生やシュレイン達に、ラースくんも連れて、この場へと戻ってきた。

やって来た彼ら彼女らに、私は現在の状況を軽く説明する。

それが終わると同時に――

「では、始めるとするか」

漸く役者が揃ったか――そう言わんばかりの鋭い視線で、それまで沈黙していたギユリエさんが皆の方へと向く。

「急に来て状況が理解出来ておらぬ人間も居るだろうから、まず簡潔な事前知識から振り返るべきだろう」

ちらりとシュレイン達の方に視線をやり、そう前置きしてから話し始めた。

切っ掛けとなった次元震、それによって引き起こされた世界を越えた先での爆発、次元を越えて流入した魂と転生者の誕生……それらが先々代勇者と先代魔王によって端を発した事件であると、ギユリエさんは各人の認識や見解を確かめるように紡いでいく。

その情報だけでも、先生やシュレイン達は驚いているが、ギユリエさんは構わず続ける。

「だがな、まだ明かされていない真実がある。そのポティマスの日記にも書かれていない、私が犯した……いいや、私たち管理者が犯した間違いが、幾つかあるのだ」

私たち魔王陣営の仮説、シュレイン達の常識、それらを覆す言葉。ギユリエさんは此処に、神のみが知る真相を曝け出すのであった。「事の発端は、私が当時の勇者と魔王に、人魔の種族間における停戦を持ち掛けたのが始まりだ。転生に次ぐ転生で、魂の劣化による出生率の低下が著しく、とりわけ魔族側での劣化は危険な水準だった。このままではそう遠くない内に魔族が減ぶと確信した私は、人族魔族それぞれの象徴たる勇者と魔王に停戦するよう、直接赴いて呼び掛けたのだ」

魔族側での歴史を調べている時に、当時の情勢について大まかにだけ知っている。

深刻な人口減少、それによる労働力の不足、それでも戦争に駆り出され擦り減らしていく人手と命、耕す者の居なくなった農地や村に、食糧危機や魔物被害……

当時の魔族達が種族の立て直しに、どれだけ必死に奔走していたのか良く判る、血の滲むような努力の記録だった。

それは今もまだ続いており、内政面での魔族の取り纏めを行っているバルト卿の粉骨砕身ぶりを見れば、決して予断できない深刻さなのが、良く分かってしまう。

「しかし此処で誤算が二つ。一つは、この時点で既に勇者と魔王はポティマスとの接触を受けていたのだ。奴に吹き込まれたのは管理者が諸悪の根源説。その結果、彼らは私の言葉よりポティマスの言を信じたのだろう。表舞台に一切姿を見せぬ謎めいた管理者の私と、エルフの族長という公的な立場のあるポティマス……どちらを信じるのかと比較されれば、文句も言えんな」

淡々と語るギユリエさんの顔に、表情は無い。

ただ真実を公開する、それだけの機械のように。

「二つ目の誤算は、当時の勇者と魔王が、次元魔法の使い手であった事だ。次元魔法は空間魔法の上位であり……ああ要点だけ抜き出せば、その魔法の使い手は一度会った事のある存在に対して、空間を越えて攻撃を行えるという点だ。それによって、己が直接出向いた事が仇となり攻撃対象として選択可能になっていたのだ」

次元魔法は制限も多く、可能不可能がハッキリと線引きされていたけれど、非常に多彩で便利な能力を持っていた。

その一つに、遠隔から対象を指定しての攻撃があった事を思い出した。

あまりにも使い勝手が悪かったものだから、記憶にも全く残っていないけれど。

「そして、これは誤算というより己が迂闊であったからだが……勇者と魔王が神を害するつもりで攻撃する。この構図が、なにより不味かった」

システムに隠された機能。

勇者と魔王が神に挑もうとした場合、対抗する為にシステムのエネルギーを消費して強化される仕組みがある。

当然、人が神格相手に勝てる見込みは低く、一時的にとはいえ神に伍する力が個人へと注ぎ込まれれば、器の限界以上の力によって破裂するのが確約された未来となる。

その機能の目的とは、外部からやって来た侵略的な神に対抗する為でもあるが、Dさんが考える本命は別だろう。

この世界の住人が神に抗い、管理者を殺す。

その可能性と展開を、用意したかったのでは無いのだろうか。

「それゆえに、神を狙った攻撃によってシステム内のMAエネルギーは大幅に減少、勇者と魔王は次元震を引き起こしたのだ」

「取り敢えず今まで話を聞いて、大体悪いのはポティマスだと判ったけれど、不可解な点がある。その攻撃はギユリエを狙った攻撃だったんだよね？　じゃあ何故ギユリエは無事で、そこからどうやって転生者の話と繋がるのさ？」

アリエルさんの疑問は尤もである。

システムから消費されたエネルギー量から推察すれば、生き延びたとしてもただでは済まない。

そして、当時のギユリエさんが無事だったのはポティマスの日記にも記載されており、ギユリエさんに攻撃が行かずに、何故か別世界にある日本の教室が爆発した。

そうなった最大の原因が、予想が付きつつも未だ不明瞭で。

「ああそうとも……彼女の咎は、己が背負おう」

小さな呟きが、ギユリエさんから漏れた。

絞り出すかのような声は嘆きに満ちていて、けれど一步も退かない決意に満ちていた。

「女神サリエル。彼女が、私へと向かう筈だった攻撃を次元の向こうである地球に居たDへと逸らした人物であり、そして君たち転生者を生み出してしまった、この件に関わる最後の一人だ」

泣きそうな、そして猛烈に自分を恥じているかのような様子のギユリエさんは、静かに告げた。

それを聞いて、アリエルさんは生気の抜けた忘我の表情を浮かべる。

同様に、先生やシュレイン達も瞳を大きく開いていた。

その中でも、一層怖ろしい気配を放射していたのは、神言教を強く信仰しているユーリちゃんだった。

「だが、それでも全ての原因は私にある。私が、勇者と魔王に接触したから。私が、勇者と魔王を説得出来なかったから。私が、彼らの攻撃を事前に察知出来なかったから。私が、サリエルの行動を把握出来なかったから……それが、これまでに起きた全ての因なのだ」

瞑目した後に関かれた目は何処までも真っ直ぐで、内面にある不退転の覚悟が映っていた。

それはまるで、殉教者のような澄んだ瞳で。

「……いや、ギユリエ。あんたは悪くないよ」

「いいや、やはり私が悪いのだ。私の責任でこんな事になっているのも知らず、のうのうと今まで過ごしてきたのかと思うと、慚愧に堪えない」

そして力強く首肯を一つ挟んだ後、ギユリエさんは口を開いた。

「彼女の咎は、私が背負う。だからどうか、この愚かな男の首一つで許してくれないだろうか」

自らの罪の代償。

それを己の命で贖おうという男の宣言が、此処に示されたのであつ

た。

60 白翠の救済案

「――罪深い己が示せる最大限の誠意がそれだ、アリエル。私を殺してMAエネルギーに還元するなり、次のシステムの中核にするなり、どんな沙汰でも受けよう。身勝手な願いだが、どうかこの通りだ」
そう締め括るとギユリエは膝を突き、己の首を差し出すかのように深々と頭を下げた。

女神サリエルと自らの罪過に対して差し出せる物、それは己の生命それ以上の物は何も無いと、贖罪の覚悟をこの場に居る全員へと見せつけていた。

彼が示した行動に、誰も動けない。

否、動くこうとしなかった。

シュレインは、ギユリエの言葉の裏に隠れた重すぎる意思に圧され吞まれ掛けていて。

フィリメスは、静かに彼の説明に聞き入って、自分たちの運命の真実を噛み締めるように悲しげな顔で受け止め。

ユーリは、信じてきた女神こそが自分たちをこの世界へと呼び込んだ因だと知り、信仰と怨恨の狭間で、心中が大嵐の如く掻き乱されていた。

その他の人達はというと、冷静に情報を見極め分析する、あるいは理解が追いつかず首を傾げるなど、反応が二極化していた。

『主上!? どうかお考え直しをッ。何故主上が命を投げ出さなければ為らぬのですか。ならば、我ら龍をシステムへ捧げてくださりませ。これまでの御恩、何を躊躇う事がありましたらどうぞ』

「いいや、これで良いのだビャクよ。私の地獄への旅路に、お前達まで同伴する必要は無いのだ」

シュレインが持つ剣に宿っていた光龍ビャクが慌てて飛び出し、龍種全ての主であるギユリエへ奏上する。

それに対し黒き龍神は首を横に振って、己の眷属の想いを汲み取りつつも、やんわりと断る。

そして遥か過去、かつての日常と彼の想いを憶えているアリエル

は、ギユリエの覚悟に思う処があった。

ギユリエの決断は、それはそれで美談にでも語られるべき素晴らしさだ。

だけどしかし、分かっているのだろうか。

その覚悟というものは――

「……ギユリエ、あんたそれだとサリエル様の願いは、どうなのさ？

今までサリエル様の意思に殉じて、人類が滅ぶような事止めてきたじゃん。もし私たちが、急に明日から人類絶滅を掲げたらどうするつもりよ」

「無論、貴様らを信じている。第一に、そこまでする気は無いだろう？

貴様らは」

まなじり 眦を険しくし、アリエルは問い糾す。

これまで女神の為に人生を掛けて尽力してきた存在が、その願いを放り捨てるかのような決断と覚悟に違和感を禁じえなかったから、揺さぶりを掛ける為に極端な例を言う。

それに対する返答は何処までも透明で、ある種無責任にも思えるような信任の念であった。

「もはや、何かの代償無くしてはどうにもならん位置に来ている。サリエルも身を削りながら世界の為に尽くしてきたが、既に限界が近い。なればこそ、その全てを終わらせる最後の犠牲は、私だけで良い。これ以上、彼女の苦痛も涙も、一分一秒たりとも長引かせたく無いのだよ、私は」

そう宣するギユリエの表情は、自ら生命を差し出そうとしているにも関わらず、非常に穏やかなものであり、発した言葉にも嘘の気配は感じられない。

そして、こう続けた――

「願わくば、最も犠牲の少ない選択を望む。その後によって来るのが争いの必要無い世界だと言うのなら、彼女の意味を尊重したと言えるだろうさ」

ギユリエの心中にあったのは諦念。

今更、彼女が解放されても僅かな時間すら持つまい。

解放されても、彼女が死ぬ運命は決して避けられない確定事項。神としての力を失うどころか次の転生すらも望めぬほど、長きに渡る多大な献身と負荷によってサリエル自身の魂も限界だろうと、薄々察していたのだ。

それを見捨てていたのは何処のどいつだ？

抗えたらうに、動けたらうに、——救おうと足掻けた筈だろう、この大馬鹿者が。

彼の胸裏にあるのは、自罰の炎。

であるなら、彼女と共に焼かれよう、魂を焚べて燃焼する地獄の業火にて。

最期が彼女と同じであるならば、これほどの救いは他にない。

そう、思っていたのだが——

「色々と遅いわッ！ やるならもつと早く決断しろおっツ!!」

「——が、ア!？」

突如、驚異的な加速でもってギユリエへと接近した白織は、誰の目にも残像すら映さないほどの速度で、彼の顔面を殴り抜いていた。

その動きを把握出来たのは、無意識にて感覚を強化している神格らか、長年の経験と勘によって動きの起こりを察知していたアリエルだけであった。

「げほ、かはッ——ぐ、う」

あまりの速度は凄まじい衝撃波を生み出し、周囲に居た幾人かがあわや吹き飛ばされそうになる寸前、瞬時に結界を張った翠星によって暴風は散らされ誰も怪我する事無く流された。

その威力を一身に受けたギユリエだったが、一応手加減はされていたのか頭蓋が弾け飛ぶ事こそ無かったものの、防御を貫通してシエイクされた振動により口や鼻から鮮血を垂れ流していた。

「な、何をするッ!？」

「このヘタレ！ ノロマー！ ギユリギユリッ！ なーにが、彼女の意思を尊重しただ。自己満足で悦に浸りたりながら自殺したいだけでしょうがっ」

拳を固く握り締め、滾る憤慨をそこに全て乗せるかのようになり、白織が鬼気迫る姿で立つ。

「それに、お前が死ぬのも、本当に女神が望んでいる事なのさ？」

叩き付けられた問いに、ギユリエは答えられない。

当然だ、なにせシステムが稼働してから幾星霜。

己の罪と向かうのが怖くて、彼女の元に行った事など一度たりとも無かった。

いいや、辿り着けなかったと言うべきか、彼は彼女の居る場所に入る資格が無いと思っていた。

其処へはDの許可が無ければ入る事が出来ない、彼はそう思い込まされていただけだから。

——かのDが求めたのは、システムの不具合の発見それだけであり、余計な事に気付いて早々に遊戯が終わるのを嫌ったが為、彼の権限と与えられた情報はシステムの全体像からすれば、非常に限られた代物であったのだ。

それ故、ギユリエのシステムへの理解度は、ともすれば新たな神二人よりも劣っているのでは無いのかと思えるほどで——

そんなギユリエの迷いなど一蹴して、激昂した白織は臆面も無く自分の理想を叩き付けた。

「最後の最後でギユリギユリが死んでたら、大団円のハッピーエンドに成らねえだろうがツ!! 誰も何も死なず失わずなんて理想論だけど、知り合いくらいは生きてて欲しいんだよ。勝手に死ぬ気になっとな、この馬鹿野郎がツ！」

何処までお前は馬鹿なんだ。

そのギユリエの姿は、系統こそ違えど自身と重なる愚かさの一面が見えてしまい、同族嫌悪にも似た感覚を覚えてしまって、どうしても白織には許せなかったのだった。

「命までは別に必要無い。けど、死ぬ寸前までエネルギー振り絞って貰うから覚悟しろよ？」

それは彼女なりの激励だったのだろうか。

それを正確に理解出来るのは、言い放った当の本人と彼女を良く理

解している人だけだった。

そして、白織に手招きされた翠星は、共に並んで全員の前へと立つ。此処に、雑事を翠星が引き受けてくれたおかげでシステムの解析に集中でき、大半の構造を理解出来た白織が、己と友の二人で考えていた救済案というものを皆へ開陳するのであった。

「えっと、此処からは白ちゃんに代わって順に説明しますね——」

未だに感情が昂ぶっている白織が説明すると、大事な要点や前提情報を飛ばしそうだったので、説明を引き受けた翠の乙女が肩に掛かった髪を後ろに流し、全員を見渡しながら語り始める。

支配者権限の鍵を使って、システムの解体と再編を行うのは既定路線のまま。

この星に住む生き物に付与されている、ステータスやスキルといった機能。

魂に干渉し強化と成長を促して、死後魂が存在するのに必要な最低限のエネルギーだけ残して、余剰分をMAエネルギーへと変換してシステムに捧げる収穫装置。

それらの星の再生に関わらない機構を完全停止させ、分解した後、浮いたエネルギーを全て星の再生を司る部分へと充てる事で、強制起動させる。

此処まではシュレイン達も理解しており、とても信じられる内容では無いが理屈は立っており、シュレインには裏付けとなる知識の一部もあって、否定の言葉は挟まない。

「——そして此処からは、システムを解体した際のリスクについてです」

ステータスやスキルの機能が無くなれば、それらによって維持されていた魂の能力は、消失するのと同時にエネルギーとして自動的にそして強制的に回収される。

それらの能力は生きている間は魂と密接に付属しているので、無理に引き剥がせば荒っぽく封を破いた時のように、魂がボロボロに傷付いてしまう。

その衝撃に、長い年月不自然な転生を繰り返してきた、この星の生

き物の魂は耐えられない。

何も対策が無ければ、少なく見積もって約半数の人類は、それで確実に死ぬだろう。

生き延びても後遺症などで自我が崩壊する数も含めれば、まともに生き残れるのは四分の一にも満たないと予測された。

そして、スキルやステータスの恩恵が前提として生きている魔物などは、より酷い影響を受けて絶滅の可能性もあるかもしれないと、無情な真実が開示された。

その内容に、シュレイン達は顔を青くし、ギョリエは眉を顰めて歯噛みした。

星の再生、その代償がこれほど大きなものだとは思ってもよらず、予想の遥か上をゆく空前絶後の未来予想図に絶句した。

「なんだよそれ……そこまでしなくちゃ、救いは無いというのかよッ！」

シュレインは遣り切れない悲哀に、掠れた声が漏れる。

彼らとて、犠牲も無しに事が進むとは思っていなかった。

この世には、手を汚してでもすべき事があって、血塗られた犠牲無くして成立しない、物悲しき現実があるのを魂が裂けそうなほど痛く実感していた。

救いたいという想いは同じ、彼らが道を違えるつもりは無い。

だが、こんなあんまり過ぎる手段しか無いのかと、嘆かずにはいられなかった。

「例の術式は出来てる?」

「うん、勿論。最大限効率化した魂の保護術式は、既に出来上がっているよ」

そんな彼らの慟哭を知ってか知らずか、新たな神格二人は互いに目を合わせて短く確認を行い、これらの陰惨な運命を覆す、希望の選択肢を提示するのであった。

「話は最後まで聞いて貰いたいです。——要は、安全にステータスやスキルを分離させれば、全てが丸く収まるのですから」

いやまさか、そんな事が可能なのか、不可能だ——

よもやそんな夢物語が本当に実現出来るのかと、彼らは一縷の光を目にしたような顔で問い質していた。

あらゆる期待の目が一身に突き刺さっている翠星は、その奇跡の概要について説き始める。

「生きている間に無理に剥がせば約半数の人類が死亡しますが、その衝撃を和らげる、ないし魂を保護していれば、機能解体時にエネルギーを回収されても死ぬ危険性は大きく減少します。それを行うには事前に膨大なエネルギーを用意する必要があり、本来であれば実行不可能な案ではあるのですが……」

ゆっくり一呼吸置いて区切った後、翠星は続けた。

「私と白ちゃん、二人が保有している魂の力。その殆どを捧げて不足分を補い、そして私が解体を始まってから終わるまでシステムと接続し、魂を保護する術式を演算維持し続ける事で、生き物が死ぬこと無くシステムを再編出来るという訳です」

示された案とは、ある種殉教とも献身とも取れる、二人自ら神格としての力を捨て去つても構わないという考え。

これにより、最終的な収支は激減。

マイナスにこそならないものの、回収出来るプラスは大部分が無くなる。

更に付け加えると、もしこの作戦が大成功したとしても神格としての力は失われ、魔術の素養は残るもの見た目通りの人並みな存在へと零落し、今までのように万能じみた力は振るえなくなるだろう。

だが、それがどうしたという？

人並みに落ちぶれたとして、一度神に至った事実は変わらない。

その時点で魂の質は文字通り別格であり、時間さえ掛ければ再起も可能なのである。

百年、千年、幾億の年月を掛けたとしても、いつかは取り戻せる。それまでに襲来する苦難や逆境も、共に歩む人が居れば必ず乗り越えられると、二人は強く信じていたから。

彼女たちの心に、迷いはなかった――

「なら、俺も魂の力を捧げれば――」

「ただの人の魂一つ分とは桁が幾つも違うのですよ、シュレインくん」
口を挟んできたシュレインに、翠星は冷たく威圧混じりに声を発する。

そして、自身に内包しているエネルギー、その途方も無い格の差というものを、封をして抑えている魂の蓋を一瞬だけ解放して、彼に叩き付け実感させた。

「おッ、っはあ……ッ!?!?」

巨人の手で床に押し潰されたかのように崩れ落ちるシュレイン。
歯の根が噛み合わずガチガチと音を立て、恐怖で身体が震える。

それは、小動物が肉食獣と相対した場合など比喩物にならない程、生存本能が警鐘を鳴らし悲鳴を上げて絶叫する、根源的恐怖であった。

指向性を持って放たれ、直接当てられたのはシュレインだけであるというのに、僅かな余波だけでも、彼ら彼女らの心胆を寒からしめるのに充分過ぎるほどであった。

「ぐッ……それでも、俺一人では雀の涙だとしても、複数なら大勢なら、少しくらいは足しになるだろうッ? 違うかッ!?!」

膝が震えながらも身体を起こしたシュレインは、心を占める恐怖に抗いながら意見を叫ぶ。

それは彼なりに出来る事を考えた結果、少しでも力になりたいという意思だった。

しかし――

「確かに、そうです。でも少し黙っていて下さい」

何故かシュレインにだけ、やたらと当たりが強い翠星は、その発言をピシヤリと両断した。

「それでも、ほんの僅かに必要なエネルギーには達していません。なので、あと数力国分の人類の犠牲が追加で必要になる………その計算でした」

彼女が視線を向ける。

その先には俯きながら座る、三人目の神であるギユリエの姿が。

「――そこで、私が現れた訳か」

翠星と白織は、静かに首肯する。

この星で活動する三柱の神。

その全員が持つエネルギーを合わせれば、星の再生と人類や生物の保護、そのどちらも両立した未来図に辿り着けると、翠星は締め括ったのであった。

「……そうか、なら良かった」

未だ身体の震えは治まらないが、シユレインは朗らかな笑みを浮かべる。

それは、多少灰色をされていて完全無欠な傷の無い選択肢では無いけれど、それでも救いはあると納得出来る、過酷な現実の中に差した一筋の光だった。

スキルやステータスの消失？ 解体後の混乱？

勿論大変な混乱が起きるのは予想出来るし、自身も大きな流れに巻き込まれて激動の時代を奮闘する事になるはずだ。

この案でも別の誰かに聞けば賛否両論あるだろうし、ある一人に掛かる負担が大きく、その彼女に何もしてやれない自分に腹が立つけれど、それでも彼は思った。

——こんな俺でも、少しでも彼女たちが齎した救いの為に報いたい、と。

「他の方は、何か言いたい事はありますか？」

「では、私^{わたくし}から——といっても反論などではなく、気持ちを表明したいだけなのですが」

スツと手を上げたカティアが、やや苦笑しながら発言の許可を取る。

「シユンが勝手に決めた事に、思うところはありますわ。けど、今か未来か。そのどちらかを選択せねばならないと言うのでしたら、私は未来に賭けてみたい。これまでの犠牲を見過^ごすのは褒められた行為では無いと分かっておりますが今回の件、私は最後まで見定めるだけですわ」

これまで色々な事が目まぐるしく移り変わってきたが、結局はシユンが居たからこそ。

彼の突き進む道に、肩を貸し背中を押してあげるのが自身の役目だと、そう思う赤髪の少女は、瞳に熱く燃える焔を宿して毅然と答えた。「まあ、どんな結末であれ、知らなかった関わられなかったなんて、御免だわ」

「私も、友達が困難な道を進もうとしているのなら、一緒に行くよっ！全部一方的に任せつきりなんて、そんなの友達じゃないものっ！」
フェイ、ユーリも、己の意思を示す。

「……苔森ちゃん。その作業に、危険は無いんですか？」

「大丈夫ですよ、先生。なんと行ってでも白ちゃんが居ますから。今の白ちゃんなら、安心して他の事を任せられます」

「そう、ですか……いえ、ここは応援すべきですよ、頑張ってください苔森ちゃん」

「はいっ」

心配するフィリメスの言葉に、優しく安心させるように説き伏せる翠星。

今の心が成長し始めた愛しき人なら、あらゆる不安は存在しないとも言うように。

「ま、私らのやることに変わり無しよね？」

「ちゃんと聞いてた？ ソフィアさん？ けど、これで——」

「ああ、そうだな。これが最後の大仕事だ」

ソフィア、ラーズ、ユーゴーも、目の前に迫った最終目標に闘志を滾らせ。

「もうすぐです、サリエル様——」

「よもや、こんな展開になるとはな……だが、悪くない」

システムに捧げられた女神の在りし日を知る最古の二人は、脳裏に懐かしき情景を思い浮かべ、違えるはずだった道が同じ方向を指して共に進める事に、この上ない喜びを覚えていた。

そして——

「往こう、白ちゃん」

「ああ、始めよう。あいつのお遊びも、これで終幕だ」

その作戦の中核を担う二人の神は、寄り添いながら外の様子を映し

ている画面を見詰める。

そこから確認できる、荒廃した自然。

自分達のせいではある、その凄惨で物悲しい光景に想いを馳せる。

これまでの恩と犠牲に、感謝を――

涙に報いる事は出来ないけれど、次へと繋げる為に必ず未来に感謝を廻す。

このような光景が二度と起きないように、星を救おう。

その決意を、二人同じく共鳴させていた――

「――ああ、それではツマラナイ。なんと盛り上がり欠ける結末だろうか」

冥府の底より、声が響く。

悍ましき絶対零度の冷たさをもって、邪悪なる神の手は盤上の駒を指差す。

その駒は、かの神が闇を貸し与えていた、お気に入り。

しかし彼女は、何の対価も無しに力を与えていた訳では決して無かった。

「さあ、ツケを支払って貰いましょうか」

故に、今こそ清算の時。

貸し出した闇の力、その返済を――翠の駒は、漆黒に染まる。

「ならばこそ墮天せよ、翠の乙女。――今こそ大厄災^{ギガントマキア}を遂行するのだ」

王手を描いていた盤面が、大きく塗り替わる。

氾濫する闇の粒子。

それに無理やり犯された駒は反転し、無明の闇と共に世界に仇なす光を破壊する魔性へと呪われていった。

「最低最悪の終末譚^{エンディング}を踊ってくださいな——私を楽しませる為に」

《 ワールドクエスト発動 》

世界を守ろうとした女神は深淵へと堕ち、愚かなる人類に神罰が下される。狂いし魔神は生命を貪り絶滅させ、星を再構築する。終末の時来たれり——神と人よ、大厄災に抗うのだ。

61 彼の元へ黄泉還れ、我らが愛しき人よ

「唐突に肌が粟立つような奇妙な不快感を覚えて、私は視線を巡らせる。」

周囲に何か、異常を示すようなものは見当たらないし、常に巡らせている魔術の感知にも、何の反応も無い。

この場所が宇宙船の船中という個人的に居心地の悪い、無機質な金属や加工品で組み上げられた鉄の部屋である事を除いても、先程の感覚はとても異質なものであった。

「どうかしたの、コケちゃん?」

「……いや。何か、変な感じがして」

隣に居る白ちゃんからの問いに、首を傾げながら戸惑い混じりの声で答える。

一瞬過ぎった嫌な感覚に胸がざわつくような不安を覚えるが、現時点では何かしらの兆候らしきものも無く、得体の知れぬ不安に寒気を感じつつも、頭を振って瞑目する。

現在は、全員の決意表明が為された直後であり、それぞれ内心では思う処とか違う想いに考えを抱えてはいても願うべき未来は同じ地平を指し示し、皆の目的が一つとなっていた状況だった。

それゆえに、熱意を宿しながらも穏やかな空気が漂っており、そのような粘度が高く薄気味悪い気配など、皆無であるはずなのに――

「やっぱり、気の所為なのかな……」

曖昧な第六感、けれど無視するには大きすぎる嫌な胸騒ぎに、自然と呼吸が浅くなる。

もう一度、僅かな見落としすらも無いように、違和感の原因を確かめようとしたその時――

《 ワールドクエスト発動 》

世界を守ろうとした女神は深淵へと墮ち、愚かなる人類に神罰が下される。狂いし魔神は生命を貪り絶滅させ、星を再構築する。終末の

時来たれり——神と人よ、大厄災に抗うのだ。

聞こえてきたのは、そのような宣告だった。

無機質な通告、何の抑揚も無い平坦な音の羅列。

けれど、その裏側に誘惑と狂騒、あらゆる全てを破滅させる悪意を含んだ、混沌を願う邪悪さがケタケタと嘲笑っているようだった。

そして、続いた異常の始まりは——

「ひっ——、あ——」

突然、痛みが走る。

左脇腹の傷痕から再発した痛みは瞬く間に全身へと広がり、抵抗する力と意志をも奪い尽くし、膝について堪える事すら出来ずに、私は崩れ落ちた。

「あ、ああア——ぎあああ、あ、ああアツ?!?!」

堪えきれない痛みに絶叫する。

肉体では無く、魂を穢され壊されていく激痛。

刹那が無限に思えるほどの責め苦と同時に、外殻から刻一刻と闇に汚染されていく魂。

その猛悪で容赦無き蹂躪に、何度も何度も意識が飛びそうになり——

魂を穢そうと闇が荒れ狂うのと並行して、現実でも影響が起き始める。

「深淵魔法!? いや、違うッ!!」

「お前ら全員、下がれえエッ!!」

その正体について詳細までは分からずとも、危険を看破したアリエルとギユリエの指示が飛ぶ。

影が広がるように現実を侵蝕してきた闇の世界が、発狂したかのよう泣き叫ぶ彼女を中心に、嵐の如く赫黒の暴風圏を生み出した。

その闇の風は、本能で触れてはならないと理解させるには充分なほど、万物を貶め汚染する呪詛を孕んで猛り狂っている。

発生した異常に困惑しつつも、本能的な恐怖によって身体が勝手に

動き飛び退く皆々だったが、唯一下がる事無く眼前を見据え、凶悪な闇にも抗える拒絶の鎧を纏って手を伸ばす白い人影。

「そんな、どうして……あいつの呪いは、消したはずなのにッ」

慟哭が白織の喉を震わし、悲痛な声が漏れる。

今にも泣き崩れそうな顔で、中心に近付くほど押し返さんとする圧力とへばり付くような粘性を増す闇の粒子に抗い、今まさに闇に墮とされようとしている彼女へと必死で手を伸ばす。

強力無比であるはずの因果を歪める絶対防御の鎧ですら、この闇は容易く喰い破って押し返そうとしており、なかなか前へと進めず이었다。

しかしそれでもと、相殺出来ない闇の泥濘でいねいに足を取られても、吹き付ける死の塵埃じんあいに肌と骨肉を溶かされようとも、白織は瞳に宿る閃光を加速度的に高めながら止まらない。

否、止まらないのだ、なんとしても——

「行かせない、絶対に——コケちゃんの全ては、私がッ——!!」

そうだ、そうだとも、私は彼女の事が——大切なものだから。

その大切さの源泉となる感情に、今漸く触れて——

——そっと、白織は押し返された。

「えっ……」

身体が傾く。

その力は決して強いものでは無く、むしろ羽で撫でられたかのような柔らかく小さな一押し。

けれど、それが何よりも白織の心を揺さぶって、進むだけの意志を叩き折った。

「なんで……ッ」

「生きて、白ちゃん」

共に呑み込まれたら、破滅の未来が待ち受けるという確信に満ちた直感があった。

だからこそ伸ばされた手を振り払い、彼女は白織を押し出したのだ。

翠星が闇の中へと消え去る間際、聞こえてきたのは苦痛など感じて

いないかのような、穏やかで優しげな音色。

そして、闇に溶けながらも動いた唇が、最後に紡いでいたのは――
――あ、い、し、て、る、よ。

その直後、跡形も無く彼女の存在ごと消失した闇の奔流。

まるで巨大な獣の顎が閉じるかのように、闇の牙が憐れな乙女を口内へと収め、次元の狭間へと沈み込んでいったのだった。

――そうして、闇が消え去った後に残ったのは、ひらりと宙を舞いながら落ちる三角帽子。

漂うそれを纏るような忘我の表情で掴み取った白織だったが、手にした数秒後にはボロボロと、茶色く枯れきった苔となり崩れていく。

塵となって崩壊した後に残っていたのは、帽子の飾りとして付いていた水仙のような純白の花が一輪、それだけが白織の手に残っていたのだった。

それを茫洋と見詰めた白織は、色の抜け落ちた表情から一転、くしやりと顔を歪めて――

けああああアアああ嗚呼アアアアああああああアアアツ――
「――」

!!!その絶叫は、聞いた者をも魂を引き裂かれたかのような激痛を齎す、痛々しい断末魔。

切れ味鋭いナイフで斬られた事に気付かない内に、ゴツソリと大事なモノが抉り取られた感覚。

そして急な喪失感の後に、ジワジワと侵蝕していく耐え難い激痛が。

痛い、痛い痛い、痛い――
傷なんて無いのに、今直ぐ心臓を抉り出したい程の灼熱感。

哀絶と赫怒の波動に当てられて気絶する者もいる中、白織の内側は燃え盛っていく。

嘆きと怒りが反響し、今理解した自分の想いも、最後の最後で受け取った彼女の想いも纏めて、薪として焚べて燃やし、魂が病んだ殺意で純化されていこうとする。

朱く染まる視界と意識。

その衝動のまま、何もかも焼き尽くして滅ぼし、黒灰にしてやると
暗い狂気に墮ちようとした、その時に――

手のひらから感じた、優しく清涼な空気。

同時に瞬く、これまでの二人で歩んだ記憶が彗星の如く煌めいて。
描かれた想いの情景には貴女がいて、光の中で笑っていたから――

「――っあ」

それによって、遍く天界人界冥界全てを滅ぼそうと狂乱していた黒
き殺意が鎮められ、代わりに浮かび上がってきたのは、彼女への深く
強固な想い。

ああ、そうか――私も――貴女の事が――

漸く掴んだ自分の真実を拒絶することなく抱き留めて、白織は瞳に
静かな焰を宿した。

何も無かった無色の空間に、燦々たる光が灯る。

それはまだ小さな火種であろうとも、反応し始めた事に変わらな
い。

熱は増幅し魂は加速して、延々と連鎖的に燃え広がっていく。

空虚な闇は焼失し、理解した想いで恒星の如く爆発と収縮を繰り返
して閃光を放つ。

そして白織は、自らの願いを心の中で形にした――

運命が、私たちを引き裂くというのなら何度だって抗ってやろう。

その度に、もう二度と離れ離れにならないよう、強くキツく解けな
いように結び直そう。

彼女を糸で捕まえて、ドロドロになるまで私の想いで溶かしてや
る。

蜘蛛の愛は重いのだ、逃げられると思うなよ。

嫌がったって、離さない。

必ず、救い出してみせるから。

――だから待ってて、私の大切な人。

対して、闇の奥底へと堕ちていく彼女はとうとうと——
深淵へと向かって翠の乙女は墮天していた。

その行き着く先はシステム中枢へと繋がっており、今もなお強大すぎる引力によって光一つ無い暗闇の中へと堕ちていく。

堕ちて逝く、堕ちて逝く、堕ちて逝く——

この闇と死に満ちた空間を潜り落ちていくたびに、秒単位で作り変わっていく肉体と魂。

身体は闇に置き換わり、生の気配が削ぎ落とされて凍える寒さを帯びる。

本来の柔らかな光を宿していた魂は、闇と混じり合いながら黒く呪われた。

けれど最後の一線として、自らの内に抱える眷属の魂を掻き集めながら心の核だけは守り抜き、そこだけは優しい楽園を保ちながら眠りに落ちていく。

夢見るように、翠の乙女は祈っていく。

ああ、あの時に闇へと祈った願いは、本当の願いでは無かったと。

みんなを守るために滅ぼすのではなく、ただみんなを慈しみ感謝する事の出来る世界が欲しいと願い焦がれていたのだと、それを深く理解していた。

……でも、今の私では叶えられそうに無い。

だから、お願い。

私の代わりに、みんなを手伝ってあげて。

堕ちた果ての終点がシステムの中枢ならば、そこに居るのは今まで魂の運行者として身を捧げてきた女神の姿。

新たな生贄を得たことで死にかけの前任者は解放され、今まさにエネルギーへと分解されながら女神の魂と半壊した身体はシステムか

ら弾き出された。

このまま身体は暗黒へと消え、魂は輪廻の環へと溶け落ちようとしている女神を認識して――

もはや逃げられないと悟った故に、逆に此方から強引にでも、システムへと接続していく。

私の想いと、彼女の想い。

その両方を重ね合わせて、システムの中核が入れ替わるこの瞬間だからこそ、行える奇跡。

そして、システムが持つ膨大な演算能力も利用して、私達は■■■を発動していった。

「亡き魂、貴女は何処に。」

貴女を愛した人の深い悲しみは、拷問のように私達を責めたてる。

私は貴女に呼びかける。女神よ、私は貴女が蘇ることを願っている。

春風よ――私の願いを浚い、どうか彼の者まで届けて欲しい。

――

私の根源と彼女の根源を撚り合わせて、それに合わせた祈りが編まれていく。

冥界に響く歌声は、ある男と女に起きた悲しき別れを詠う、悲劇の物語。

ああ、どうか待って、消えないで。

あなたは死者では無いのだから、私たちの月の女神よ。エウリュディケ

毒蛇に噛まれたのでは無く、誑かされただけ。

冥界に繋がれたけれど、その生命はまだ終わってはいない。

「私は貴女を一人にしない。」

冥界の門は開かれ、歌声が貴女の元へと導いてくれる。――

過酷な世界に磔にされても、その身を罪の肩代わりで擦り減らしたとしても、未だその魂は潰えていないのだから、――偽りの悲劇に終止符を。

私が代わりに冥界へと堕ちるから、どうかお願い――みんなを助け

てあげて。

「彼の苦悩の嘆きが、私に奇跡を願わせた。

故に、冥界に堕ちた乙女が告げる。

見ては為らない、振り返っては為らないと。」

私はもう、守れない。

次の生贄として選ばれ、冥界の瘴気で穢されてしまったから。

逃れられない——だから代わりにあなたが守って欲しい。

罪悪感を抱えながらも、私は代わりに託すことを願う。

「彼女は出会いと愛を齎した。ならば私は、貴女のために代償を支払おう。

平穏な日々に戻れるのなら、冥界に囚われし女王として彼女を光へと戻さん。」

魔性へと墮天していく乙女は、狂気にも似た深度で想いを紡ぐ。

みんなの力になって、みんなを助けて上げて。

そして、どうかお願いします——私を止めて。

「エッセンティア《神髓》——オル《外典・彼の元へ黄泉還れ、エウリュディケ我らが愛しき人よ》」

月の女神は解き放たれ、翠の乙女は闇へと磔にされた。

そして乙女は最後の力を振り絞って、解放された女神へと自身の僅かな血肉すら与えて元の身体を修復し、崩壊しかけの魂にも加護を与えて、光差す地上げんせへと送り出した。

転移先は、まだ自身の残滓が残っている、みんなの場所へ。

そうして月の女神は、宙ソラに戻る。

代わりに翠の乙女は、冥界の深奥まで呑み込まれ堕ちていった。

翠の乙女は、冥王神の手の中に——

邪神の罠に嵌まり連れ拐われた乙女は、愛しい人から離れ離れにされて嘆きながら眠りにつく。

この無明の闇から救い出してくれる白き太陽を願って、今は夢見るように眠り続けていく……

沈鬱な空気で満たされた、鋼の室内。

さっきの現象が一体何だったのか、誰も真には理解していないが、それでも一人の少女が闇へと消えた事に、絶望的な重圧をもって全員の心を押し潰さんとしていた。

「ご主人さまが……泣いてる？」

そう、思わず呟いてしまったソフィア。

白織の頬には一筋の雫が流れ、手にした白い一輪を掛け替えの無いモノのように、大事に大事に胸へ押し当てていた。

先程の劈くような慟哭を止めて沈黙する白織に、何と声を掛けて良いのか分からず、何度も口を開いては閉じるを繰り返し、伸ばそうとした手が空を彷徨う。

このとき、全員の胸中にあつたのは悲しみだった。

だからこそ、更に続く異変の起こりを、皆が全く同時に察知する事が出来ていたのだ。

唐突に浮かび上がる、転移の魔術陣。

瞬時に警戒の体勢を取り各々武器やスキルの構えを見せる中、転移陣が光を放つ。

そこから弾き出されたのは、機械じみた骨格フレームに羽毛を纏わせた蒼翼を持つ、青白く伶俐な印象の美女だった。

「さ、サリエル様っ！」

一目で誰か理解したアリエルが急いで駆け寄り、倒れ伏す美女を介抱する。

ゆつくりと瞼を開いた美女は、自らを抱き抱える人物を認識して淡々と抑揚無く言葉を紡いだ。

「……アリエル、少し成長しましたね」

「そんな事つ、最初に言う事じゃないでしょう……ッ。けど、どうして……」

何処かズレた返事に、呆れたような困ったような声で、涙ながら嘆息するアリエル。

次いでギユリエも膝を突き、サリエルの正面にて相對する。

「サリエル……本当にお前なのか……？」

「肯定、私はサリエル。正真正銘、それ以下でもそれ以上でもありません」

その独特な喋り方を聞いたギユリエは、口角を歪めて涙を浮かべながら笑顔を浮かべた。

ああ、間違いなく彼女だと、そう確信出来る声と口調だったから。その他の面々は、新たに現れた美女に警戒しつつも、彼女の一挙一動に注意を傾ける。

特に、その呼び名と美女が発した声色で、自らが信仰する女神その人だと理解したユーリの集中度合いは、瞬きすらせず瞳が真っ赤に血走るほどであった。

そしてサリエルは、彼ら彼女らを見渡して、こう言った。

「どうかお願いします。私の代わりにシステム中枢へ囚われた彼女を、止めてください」

自らの身に起きた奇跡。

その代償として闇へと堕ちた乙女を、救って欲しいと訴えたのだ。た。

「——おや、女神が復活しましたか。これは予想外」

「翠の乙女が贄となる代わりに、彼女たちの願いである女神を輪廻の環に返してあげようと思ってましたが……まあ、面白そうですから良しとしますか」

「さあ、白き蜘蛛よ。貴方の歌姫は深淵の底です。その絶望を奏で、彼女を救ってみせるといい」

大厄災—G i g a n t o m a k h i a—

大厄災 —始まり—

ERROR—ERROR—ERROR—

上位管理者Dの権限により、システムを再起動します。

——システムリブート。

解放：女神サリエル。

接続：翠星。

動力経路接続、設定初期化、パラメータ再設定、セットアップ開始

……………クリア。

システムチェック……

……………オールグリーン。

システムの中核装置は、《女神サリエル》から《翠星》へと、正常に移行しました。

上位管理者Dから命令受信：他の全優先事項を破棄。

上位管理者Dから命令受信：システム中枢区域の洗浄指示。

実行：システム中枢区域の洗浄。

警告：外的驚異：蜘蛛型魔物。

対策：システム中枢区域全域に、腐蝕攻撃、破魂を発動。

警告：魔術干渉：空間転移。

警告：蜘蛛型魔物が空間転移にて、異空間へと退避しました。

対策：システム中枢区域内全域に、転移妨害術式を展開。

対策：システム中枢区域を異空間化。空間拡張、空間歪曲、次元封

鎖。

対策：システム中核装置を異空間深奥へ配置。

？

——システム中枢区域内に存在する、外的驚異の全排除が完了しました。

警告：システムに、外部からエネルギー供給を確認。

るで彼女を讃える為に詭えた荘厳な鋼の神殿であるかのように存在感が塗り潰されていた。

機械のような人間味の薄い雰囲気のアリエルと、金属の無味乾燥な重厚感との相性は、恐ろしいまでの違和感の無さであり、もしこの場所がポティマスの製造した宇宙船の中だと知らなければ、誰もが彼女こそがこの空間の主だと思うだろう。

現状、誰一人としてこの事態を正確に把握しているとは言えないものの、共有出来る情報は概要をかいつまんで開示し、状況整理を終えていた。

此処に至るまでの過程や目的、そして今まさに女神サリエルを救い出そうとしていた事。

しかし、突如としてワールドクエストなるものが宣告され、聞こえてきた言葉に理解が及ぶ前に悍ましき闇が次元を侵蝕して発生、その闇黒に呑み込まれて大切な仲間の一人である翠星が消えてしまった事。

それらの説明はほぼ全てアリエルが説き、この状況下であつても何かしらの情報を掴んでいるであろう白織は、部屋の片隅で静かに身体を丸めていた。

時折、意識が別の場所に飛んでいるように見え、分体の操作に集中しているのかそれとも記憶の海に潜っているのか、内心は窺い知れない。

確かなのは、とても大事そうに純白の花飾りを手の内で覆い守っている、それだけだった。

そのような白織を心配そうに見詰める人は数多いが、彼女の最大の理解者が消えてしまった現状では、声を掛けるのも躊躇う^{ためら}う空気が生まれていた。

それゆえ、自然と話の中心点は女神サリエルへと向く。

「それで……サリエル様。どういう事なのか教えてくれませんか」

「私もあの時何が発生したのか正しく理解出来ておりません。ですが、彼女から託されたのです。止めて欲しいと」

滑らかに可動する蒼翼を折りたたみ、自らの身体を確かめ終えたサ

リエルが、鷹揚おうようと頷きながら答えた。

彼女の視点なりに何が起きたのかを語り、その説明を聞いた全員は呆然と口を開いたまま驚愕の表情を晒していた。

「サリエル様、それでコケちゃんは大丈夫なの？」

「おそらくですが今直ぐに危険な状態に陥る訳では無いでしょう。システム中枢に囚われるという事は、システムにおける生体演算装置としての役目と、膨大なエネルギーを個々人の魂に調整して貸し出す変換器の役目を担わされるという事です。故に、一般的な生物が接続すれば流れ込む情報量とエネルギーに耐えきれず即死する代物ですが、充分な強度を持つ神格であればそう大きな負荷ではありません」

誰もが思っていた問いを、サリエルは投げかけた。

そして、返ってきた説明にほぼ全員が瞠目し、淡々と話し続けるサリエルを見詰める。

システムについては、つい先程まで囚われ苦役に服していた、まさに生き証人であるサリエルの言葉に疑う余地は無い。

「でもコケちゃんは、いわゆる新人神様みたいなものだし、耐えきれれるの？」

「むしろ、私より余程適合性があるかと。まるでそう詭えられたかのように数多の術式を並列処理出来る魂魄と、個々の魂に合わせて干渉出来る特異性。——嫌味なほどあの装置に繋げる為に作られた生贄のようです」

最後に小さく呟かれたのは、明らかな嫌悪の色が見える感情の籠もった声色だった。

その発言に、サリエルをよく知る二人は驚く。

このような悪態を、彼女は吐くような人物では無かったからで——悠久に等しい時間の中で、彼女も変化していたのだろうか。

そう思ったが二人は聞くことはせず、サリエルに話の続きを促した。

「ですが、楽観していられる状況でもありません」

堅い口調で告げられた二の句に、俄にわかに空気が騒がしくなる。

入れ替わりの直後、サリエルは何かしらの命令がシステムに下って

いたのを認識しており、現在微弱な繋がりとなったシステムへのアクセス権限で接続を試みたところ、平常時の稼働率から急速に出力を上昇させて何か稼働しようとしているという情報が読み取れた事を説明した。

「まだ何か起こるって訳ね……ああ、これだけでも胃もたれしそうだしというのに」

「サリエルよ。今直ぐシステム中枢に行つて、彼女を解放すれば良いのではないのか？」

天を仰ぎ見るアリエルに代わつて、ギユリエが疑問を呈した。

しかし、そこで今まで会話に参加していなかった白織が口を挟んだ。

「止めておいた方が良い。現在のシステム中枢には直接転移出来ないよう、妨害を掛けられてる。それに、最低でも腐蝕無効と外道無効が無ければ——入った瞬間に死ぬよ」

白織の脳裏に映るのは、ワールドクエスト発令直後システム中枢内で発動した防衛機構によつて分体の退避を余儀なくされた光景である。

本体と比べて酷く劣るスペックしかない分体では、システム中枢全域を覆った腐蝕と破魂の闇による容赦の無い排除に抗う事も出来ず、悔し涙を呑みながら闇の中に浮かぶ小さな影を前に、逃げ出すしかなかった。

そのような不甲斐なさ滲む仔細を、白織は内に秘めたまま説明はしなかったが、とても悲しげに苦々しく語る様子から、無策では立ち入る事すらままならない状況というのは誰もが理解した。

「腐蝕はともかく破魂も使われているのか？　それが常時となると、私でも防ぎ続けるのは至難の業だぞ。そちらに気を取られて他が疎かになりかねん」

神格特有の超感覚で、部屋に残留した闇の痕跡を睥睨し、小さく呟くギユリエ。

龍種固有の能力である魔術無効化結界であろうとも、完全無欠の守りでは無い。

それはスキルで再現された模造品では無く、龍という神格に備わった本家本元の力ではあるが、上回る出力で境界ごと押し潰す、あるいは貫通される潜り抜けて通されるなど、意外と穴は多いのであった。その穴を埋めながらでは、行使出来る能力に限度がでる。

しかし、その程度の無茶を乗り越えられずして何が出来ると、意思を固めた時――

「私が行く」

「白ちゃんが？」

「そう、私一人で――」

心配そうに問うアリエルに対し、白織は闘志と決意を漲みなぎらせていた。

「これは、私が迎えに行かなくちゃならない事だから」

「……手助けは？」

不要であると、首を横に振る白織。

その態度から、こりやあ言っても聞かないなど、肩を竦めてアリエルは苦笑した。

「じゃあ、私たちは私たちに出来る事をするよ。戦後処理とか面倒事は全部こっちに任せて、白ちゃんは白ちゃんにしか出来ない事を任せただから」

「――ありがとう、魔王」

そうして今後の方針が固まろうとした――その時に。

《ワールドクエストシークエンス1：全人類への禁忌インストールを
開始します》

「む？」

「あん？」

「おっと？」

「なんだと？」

「これは……」

「――ッ」

「今度はなんだ!？」

「……!?」

ごく普通の反応を発せられたのは、ラース、ユーゴー、アリエル、ギユリエ、サリエル、白織、そしてシュレイン。

………それと、アリエルの護衛として影で息を潜めていた
バベツトタラテクト・シスターズ
人形蜘蛛四姉妹。

ずっと気配を殺していて、ほぼ全員から意識されずにいたが、この状況下では動揺を抑えきれず存在感を露わにしていた。

それ以外の大多数は、酷い頭痛を堪えるような苦悶の表情でバタバタと倒れ伏し、呻きを上げながら次々と気絶していった。

気絶しなかったのは、いわゆる既に禁忌を獲得している人達や、通常のシステムの対象から外れている存在、それと人類の定義には入っていない魔物は、問題無く意識を保っているのであった。

「まさかまさか、こう来るとはねー」

アリエルは、脳内に直接聞こえてきたノイズの酷い音声と、今現実を起こっている事を一瞥し、深く嘆息しながら呟いた。

今行われたのは、全人類への禁忌をインストールするという宣告。神言教がスキル持ちを徹底的に弾圧して、ひた隠しにしてきた都合の悪い真実が、この世界にて生きる人類誰もが知る処となった。

その事実には、アリエルは乾いた笑いを浮かべる。

彼女の瞼の裏では、微笑が崩れ大慌てしているダスティン教皇の姿が描かれており、予め禁忌を最大まで上げている一部の人間を除いて、向こうでも殆どの人員が倒れているだろう。

それは大人数の信者を纏めた組織力で屋台骨を支える神言教にとって、機能不全を起こしている光景が目には浮かぶようだった。

「シークエンス1……まだまだ、これ以降もあるって事か」

気絶した仲間の様態を確認しながら、誰に向けてでもなく虚空を仰ぎ見てシュレインが呟く。

1があれば、2や3以降も、起こり得る可能性がある。

その不安に彼の精神が、墜落めいて暗く沈み始めようとした時——
「みんな。僕は外の様子を見てくるよ。急に気絶した事で、怪我人が出ているかもしれない」

「……ああ、そうだね。確認は必要か」

この場で倒れた人の介抱を一通り行ったラーズは、残る皆に向けて声を掛けた。

なるほど言われれば確かに、様々な状況が次々と浮かぶ。

倒れた拍子に何処か打って怪我しているかもしれないし、何か大きな物を動かしていたとすれば下敷きになっていたり、水場では溺死しかけているかもしれない。

火を扱っていた時に気絶すれば、大火傷や火災にも繋がるだろう。

「うん、そうだ。取り敢えず野晒しで倒れたままにする訳にもいかないし、この際だから全員運び込んでおおう」

「運び込む、ですか？」

妙案が思いついたと大きく首肯したアリエルが、悪戯っぽくおどけながら提案する。

「そつ。この船に、ね」

ポテイマスが作り上げた宇宙船。

長い航行を見据え、居住区や生産区画まであるこの巨大宇宙船ならば、エルフの里に残っている人々を全員収容できる。

そして、動かせるだけのエネルギーが既に充分積まれているのであれば、数万を超える大人数を一度に移動させるのも可能だろうと、アリエルは語った。

「であれば、一先ず私も手を貸そう。人手は多い方が良い」

「申請。私も介抱に手を貸したいと頼み込みます」

「ありがとうございます」

「——京也、俺も行くよ」

「じゃあーねえ。帝国軍の面倒は大将が見ないと」

彼らは共に肩を並べ、この部屋から出ていき外の野営地へと向かった。

待機中だった人形蜘蛛たちにも指示が下され、同様に運び込みの手伝いについて行った。

そうして――

気絶したまま横になっている人々を除いて、残ったのはアリエルと白織の姿だけ。

硬く冷たい床に直で寝かされているのを憐れに思ったのか、白織は異空間から引つ張り出した枕や毛布を、魔される人達の首の下に差し込んでいた。

「白ちゃん、本当に大丈夫？ さつきからずっと上の空だけど」

「――多分、ね」

心配するアリエルに、言葉短く白織は返答した。

「あの声……ノイズが酷かったけど、コケちゃんの声だ」

「そうだね。つまり……今のシステムの核は、彼女で間違いないと」

小さく頷く白織。

そして再び口を開くと、内心で煮え滾っていた想いを早口で一氣にぶち撒けた。

「今直ぐにでも飛び出して行きたい。けど、心が乱れた状態で強引に突入すれば嫌な予感がする。先走りそうな想いと冷静さを訴える直感、それらが衝突して心が乱れて纏まらない。表面上普段の表情を取り繕っているけれど、今にも崩れそう。ああ……胸が痛いよ、魔王。こんなの知らない知りたくなかった。こんなにも……こんなにも、コケちゃんの事が大切だったんだって、ようやく理解したんだよ。私は……私は、どうしたらいいのか、心が荒れて何も分かんなくなる」

返ってきた言葉に一瞬目を見開いた後、柔らかな微笑を浮かべるアリエル。

そして、この宇宙船の操縦システムにアクセスして操作マニュアルを探し出して画面に表示し、それを熟読しながら呟く。

「そりゃあ誰だって、目の前で恋人を理不尽に拐われたら、怒り狂うし嘆き悲しむものよ」

「……恋人？」

「ありや、そこからか」

心底不可解だと言わんばかりの白織の言に、頬を搔いて苦笑するアリエル。

「最近の白ちゃんとコケちゃん二人の様子は、付き合ってますオーラ全開だったよ？ エルフの里に決着が付いた後は、もう完全にデキてたね。めっちゃ甘々……まさか自覚無かったとは」

「そこまで自分の本心に鈍感だったとは、予想外だーと、彼女は道化のようにぼやいた。

長年の付き合いで、この口下手なお子様について二番目くらいには良き理解者であると自負してきたが、これではまだまだだなと内心で自嘲していた。

「恋人……そっか、恋人か………あぁーっ、もう！　ほんと大馬鹿だなあ私！」

「ははっ、命短し恋せよ乙女……って神様だと寿命とくに無いんだっけ？　ならちよつと違うか。何にせよ、白ちゃんが自分の恋心に気付けたようで、おばあちゃんは嬉しいよ」

頭を掻き毟る白織と、それを微笑ましそうに見詰めるアリエル。

その様子を眺め、アリエルはただ家族として背中を押そうと決めた。

「白ちゃん、拐われたのなら必ず取り戻さなきゃね？　大切な恋人なんですよ？」

「——ああそうだね、そうだともッ！　私は何も返せて無いんだ、この大きな想いも貰ってばかりの恩すらもっ!!」

力強く己の意思を吠え立てた白織。

これならひとまず安堵出来ると大きく息を吐いたアリエルは、再び操作方法を頭に叩き込むべく画面に集中する。

コケちゃん——

アリエル自身にとっても、大切な家族である翠の少女の身を案じながら、彼女の無事を祈る。

コケちゃん——

そして、愛していた大切な人なのだと思いの想いを噛み締めながら、来るべき争いの予感に魂を高めていく白織。

次の宣告と争乱は、もうまもなく——

禁忌の強制インストールにより気絶した人々が意識を取り戻し始めて半刻。

無知のまま突然与えられた世界の真実とやらを知った人々の反応は様々であった。

狼狽えて逃げ場など何処にあるのかも分からず狂奔する人、得てしまつた情報から事態の趨勢を見極めようと必死に思惟を巡らせる人、もはや思考放棄のようにひたすら神に救いを祈る人。

誰もがこれは只事ではないと直感しながらも、今も気持ち悪く脳内で責めたて贖罪を迫る声に、全人類が苦悶し翻弄されていたのであつた。

各陣営にて、事態の把握や混乱する人々の統制、唐突な気絶による負傷者の手当に追われる中、遂に次の宣告が惑う人々のことなど知らぬとばかりに下される。

《ワールドクエストシークエンス2：魔神の尖兵は顕現せり。人よ、溢れし魔性に抗え》

疲労を休める暇も内容を噛み砕く余裕も無く、再び舞い降りた歪んだ神の啓示。

その耳障りな音の羅列に人々は再び戦慄に包まれ、何か得体の知れない不安が暗雲の如く民衆の心に膨らんでいく。

この宣告がなされた後に変わつた点は幾つか。

まずは、意識の片隅に常に浮かぶ禁忌の項目。

その中にワールドクエストという項目が追加され、幾つかの新情報と新たな機能が加わっていたからだ。

示されていた内容は、こうだ——

『罪を忘れ、のうのうと恩恵ばかり享受する愚かしき人類よ。

汝らの所業は目に余る。

星を貪り枯らしておきながら、それを忘れて甘い蜜だけ啜るなど、なんと醜き畜生だろうか。

ゆえ魔神は——遍く天地万象種族貴賤老若男女の区別無く、ありと

あらゆる生命を糧と見做し、壊れた星を再誕させんと狂い泣く。

零れ落ちた黒涙は魔性へ転じ、地の底囚われ動けぬ魔神に代わって神罰を下す。

刮目せよ人類——これが汝を滅ぼす尖兵なり。我が名は、光を破壊する救星主』

大仰おごりやうな言い回しの文章には愚かな人類を罵倒し呪う強烈な念が籠もっており、その文を読んだ対象の精神を打ち砕かんとする、莫大な怨念で編まれた絶対絶死の殺害予告であった。

意志の弱いものであれば閲覧した瞬間に発狂し、見つけないで近付かないで認識されたくない恥も尊厳もかなぐり捨てて、ありもしない果てまで逃げ隠れしたくなる代物。

そして新たに追加された機能は、何処かの場所をまるで鳥のように俯瞰的に映した映像群。

景色に憶えや知識ある者であれば、それが海と呼ばれる水の領域である事や、エルロー大迷宮の入口付近にある都市であるとか、黒き暗幕の中に浮かぶ欠けた天球こそが自らが暮らす星であると気付けただろう。

その内、海を映した映像に変化が現れる。

海面が盛り上がるようにして半球を形作り、その内部には蠢く影が見える。

そして下から押し上げる圧力と水の結合力の均衡が限界を迎え、水の半球を卵殻のように砕き散らせ、滅殺の産声を激震させた。

それは、九つの頭部を持つ魔性の多頭龍。

不死の水蛇、世界そのものから供給されるエネルギーを生命力に変換し、一つ首を落とされても瞬く間に新たな頭を生やす、神話に語られるような最凶最悪の怪物であった。

比較対象となるモノが映っていないから分かりづらいが、その大きさは大国の首都を優に超え、王城ですら一薙ぎで押し潰せそうな程の巨大さをしている。

その幽世から這い出した九頭龍は、三つの頭がおもむろに首の根元へと噛み付き、それぞれ一本ずつ首を噛み切り落とした。

海面へと落下した三つの首は盛大な波飛沫を上げ、白波を立てながら海に沈んでゆく。

併せて生物の中身だとは思えない、見ていると恐怖が沸き立つ闇黒にオーロラのような極彩色が揺らめく自切した断面から、勢い良く穢れた瘴気が噴出して渦巻き凝縮し弾け飛ぶと、闇の下から傷一つ無い頭部が新生していた。

対し、深海へと沈んだかに思われた首は、段々と数が増していく気泡を水面に浮かべ泡立たせ、そして――

地獄の門番。

ケルベロス

死界の川。

ステュクス・カロン

冥府の魔精。

ニユクセス

それはまさに冥王が侍らす魔の衛星。

その地から動けぬ魔龍と魔神を守るため、災厄の象徴たる悍ましき三の魔性が海面を爆散させ、冷たき幽世から生命犇めく現世へと呼び寄せられた。

三つの魔性らは、身体を分け与えた幽世の九頭龍と我らが王に向けて恭しく首を下げると、刷り込まれた使命に従い大陸へとゆつくり歩を進めだす。

カサナガラ大陸には、獄犬と大蛇が。

ダズドルディア大陸には、魔精が。

それぞれ恐怖を煽るかのように本来の性能からは遅々とした速度で、鏖殺の進軍を開始した。

次いで、幽世の九頭龍がまるで痛痒に悶えるかのように身じろぎをする。

互いの首で龍鱗を擦り合わせ、大気を鳴動させながら剥がれた破片が宙を舞い変生していく。

その破片は、九頭龍からすれば小虫に見えるが実際は小屋程度の大きさはある、手脚が無く蛇に翅が生えたような姿の、もしくは蜻蛉のような尾長翼竜が、次々と数え切れないほど生み出されていたのであった。

溢れ返る歪な翼竜は三つの魔性を追い越し、我先にと生命を殺戮す

べく大陸へと飛び立つ。

それらを把握した各陣営の反応は、実に様々な混迷極まる事相を見せていた――

此処はエルフの里襲撃に参加した、帝国軍の幹部が集まる一室。

気絶から目が覚めれば、彼らは見知らぬ場所に放り込まれていて、訳の分からぬ状況に上も下も大いに戸惑い、敵など見えないというのに臨戦態勢を取る兵士も数多く見られた。

その爆発寸前の状況を収めたのは、帝国皇太子次期皇帝そして今回のエルフの里強襲の総大将を務めていたユーゴー・バン・レングザンドの一喝であった。

絶対の自信、漲る熱量、人族を超越した圧倒的な実力。

それらに裏打ちされ、皇族としては粗野極まる、しかし荒くれ者の多い軍では実に分かりやすい覇気を感じさせる言葉は、混迷に喘ぐ兵達の精神的支柱を鍛造し直すには充分過ぎるほどの効果を齎していた。

彼は、この場所は危険では無いと説き伏せ士官らに部隊を纏めるように言い、幹部格の高官は会議があると伝令を遣わして、指示を次々と下していた。

そして秩序と規律を取り戻した帝国軍を部下に任せ、一室へと集められた幹部達の前に、次代の帝王が厳かに言葉を発した。

「ああ分かった。兵の消耗は何処も深刻で、士官はともかく末端兵士の混乱は未だ収束してるとは言い難い。誰もがこのワールドクエストに不安を抱えてんだろ？ 全て理解してるさ」

完全壊滅した軍も数多く、損耗した兵の再編に苦勞する将校達の不信と忠義の入り混じった報告を聞き、静かに噛み締めるように首肯するユーゴー。

これ以上戦えないという悲鳴を訴える部下たちの意見に、さもあら

んと思惟する。

元々、今回の遠征はかなり強引な手法と理由付けで動かした軍であり、いくら帝国が実力主義で力こそが正義と尊ばれる気風だったとしても反論に不平不満や疑惑の念は噴出し、それを封殺して進軍させたのだ。

エルフ討つべし、族長ポティマスは神言教における最大の禁忌を犯している事が判明した。

神敵に裁きを下ささんがため我が帝国軍は神言教と協力し、かのガラム大森林を踏破し不壊を誇る結界を新兵器にて粉碎、抵抗するエルフを打ち倒し大罪人ポティマスを白日の下に晒さん。

これが真相を何も知らない士官や兵士へと下達した、表向きの理由である。

此処で言う神言教との協力とは、つまるところ魔族軍の事であり実際に神言教からも人員が参加しているが、見知らぬ後方の帝国軍の正体が魔族だと思われないようにする欺瞞情報だった。

そして、結果は言わずもがな。

犠牲とする捨て駒前提の部隊は予定通りに壊滅したが、思った以上に多くの人数が残った。

モラルの低い部隊や後ろ暗いところのある部隊は前線へ押し出し、一人残らずエルフの軍や機械兵器に塵殺されたが、予定より早く撤退命令を下したため必要な犠牲と切り捨てざるを得なかったマトモな部隊が、それなりに生き残ってくれたのは本当に喜ばしいとユーゴーは思っていた。

だが、それでも犠牲は犠牲。

死に追いやった顔も名も知らぬ兵達に内心で深く黙禱を捧げ、毅然とした表情で言い放つ。

「だが、この戦い。勝利せねば明日は無い」

雄々しき声に、誰もが息を呑み静まり返る。

威圧した訳でも何かスキルを使った訳でもない。

ただ常態で発せられる風格に、自然と冷静さと畏敬が湧き起こる。

この王者の前では、懦弱な姿など見せられないと――

「俺たち軍人だけじゃないぜ。故国で待つ家族や隣人すら巻き込まれる、世界規模の危機だ。これから向かう場所は、災禍の中心部エルロー大迷宮の傍。此処で食い止めなきや、怪物は背後にいる無辜の民を蹂躪して数え切れないほどの命が失われんだ」

容易に想像出来る最悪の未来に、彼らの脳裏に血と屍で築き上げられた悪夢が描かれる。

そこに転がるは知人恋人家族、崩壊し燃え盛る街並みは故郷の景色。

ある者は拳を血が出るほど握り締め、ある者は唇を噛み目を伏せる。

事態の全容が分からずともこれほどの災禍、何もせずいたらどうなるのか、戦いに携わる者として理解出来ない者は誰一人いなかった。

「だからよ——帝国軍は何だ？」

その言葉に、水を打ったようになる会議の間。

彼らに投げ掛けられた、重圧の宿る問いに一瞬時が止まり——

「人類の守り手だろが。此処で気張れなくて何とする？ お前ら、俺に付いてこいッ！ 帝国軍は此処にありッ!! 人類守護の刃を掲げよッ!!!」

それは、覇者の雄叫び。

掲げられた灼熱の答えが彼ら全員の耳朵を震わせ、昏き絶望感を余さず全て焼き尽くした。

嗚呼、それこそ我らが本懐。

聞き入る彼らの心に迷いなど既に無く、痺れるような震えが総身を駆け巡り、萎えた身体に火が注ぎ込まれた。

もはや憂いも逡巡も消し飛び、帝国軍に再び息吹が蘇る。

その熱量は、ともすればエルフの里強襲の時より上で、次から次へと際限なく溢れる使命感が、喝采となって響き渡った。

轟くは勇猛たる闘いの声。

それを眺めながら不敵に、泰然^{たいぜんじやく}自若と佇むユーゴー。

そんな彼の傍に静かに近寄り、高位の魔法使いを示すローブを纏う

老人がそつと耳打ちする。

「殿下——」

「おう、爺。本国への通達は？」

その老人の名は、ロナント・オロゾイ。

ギラつく眼は知識欲で塗れ、刻んだ皺は積み重ねた探究の証。

帝国筆頭宮廷魔導士にて、人の世界にて比肩する者なき、人族最強の魔法使いであった。

「委細抜き無く。ですが、よろしいのかのう？ エルフの里への出陣も含め、事が終わればタダではすみませぬぞ？」

「良いんだよ。後々査問会議だとか、強引に軍を動かした責任の沙汰だとか、最初っから織り込み済みさ。それで廃嫡されても悔いは無い、むしろ自由になれて最高じゃねーか」

「……お戯れを。殿下以上に、今の帝国を率いる事の出来る人物など誰一人おりませぬ」

「こんなロクデナシが？ 冗談キツイぜ」

自嘲するユーゴーに、謙遜の気持ちは無い。

本気で自分は塵屑に類する人種だと確信しているが故に、真に尊敬されていてようと決して自戒の帯を緩めない。

間違いだらけで外道に堕ちようとした大馬鹿なんか、称賛されるなどあつてはならないからだ。

ロナントの背後には老の弟子たるオーレル・シユタツトが、気怠げに無言で控えていた。

彼女は、過去勇者ユリウスとも親交のあつた人物であり、その実力は数奇な運命を辿ることで、師に匹敵する実力者として次席宮廷魔導士の位を頂いていた。

……まあ、もつとも本人からしてみれば、そんなものより結婚してさっさと隠遁したいと願っているのだが。

彼女は勝手に盛り上がる士官たちを眺め、暑苦しくてついて行けないっすと言っていた。

「オーレル」

「なんすか？ 殿下」

田舎訛りのキツイ、敬意も何も感じられない無愛想な返事が零れる。

「あれを止めるには、大元を叩かなきゃならねえ気がすんだ」

「まー、そうっすよねえー。如何にもあの馬鹿デカイ魔物から次々と剥がれ落ちてんすっから」

「つまり誰かがやらねばならない。だから——」

「ムリムリッ！ 勝てっこ無い、アタシは嫌っすよ。断固辞退させて頂きます。では——」

「逃がすと思うか？」

「ギャアアッ!!?! 離すっす、この人外！ 師匠以上の化物に付き合ってたら命が幾つ有っても足らないっすよッ!!」

瞬時に逃げ出そうとした次席宮廷魔導士の首根っこを押さえ、ユーゴーは片手で吊るし上げる。

喧しく騒ぎ出すオーレルを無視し、くつくつと喉を鳴らしながら続ける。

「実際、付いてこれそうなのがお前と爺くらいしか居ねえんだよ。どう見ても周囲の三体は神話級に匹敵するし、大元はそれを遥かに超えるレベル——元のアリエルさんクラスか？ そんな弩級の魔物を相手取れる最低限の質持つてんの、一緒に地獄の訓練やったお前らだけなんだよ」

ユーゴーが言う地獄の訓練とは、白織が主催した魔物の生息地サバイバルの事である。

極限環境にて四六時中襲いかかってくる魔物と戦い、生死の境界線で楽しくタップダンスする、実に頭のオカシイ強化合宿であった。

それにより、ドM^{ロナン}変態^ト爺はともかくオーレルまでもが超人の域へ到達しており、一騎当千の強さを得た引き換えに、また婚期が遠ざかったと彼女はさめぎめ泣いたのだった。

「取り敢えず一匹は俺らで潰す。前衛は俺、後衛はお前ら二人で援護を頼む。あれが上陸したら、一般兵では対処不可能だ。——だから頼む」

その熱意の籠もった嘆願に、彼女は瞑目しながら特大の溜め息一つ

吐き出して――

「いやあーないっすねえ。そこまで言われたらアタシ断れないっすよ」

「ああ、感謝するぜ。――姉さん」

「姉さんは余計っす」

小言をぶつくさ漏らしつつも、彼女自身これは不可欠な事であると認識したから、やる気無さげでも来るべき戦いを見据え、仕方無く装備の確認と準備を始めていく。

「あーまったく、こんな行き遅れの物ぐさに、なんでそんなに期待掛けるんすつかねえ……」

「いやいや、まだ姉さん若いだろ？ 普通にイケるし^{そそ}唆るわ、俺」

「――は？」

理解出来ないといった表情で瞠目するオーレルと、首を傾げるユーゴー。

そこにあるのは常識の違い。

オーレルからしてみれば、二十代に突入したのに結婚どころか婚約相手も居ないのは、貴族的に充分行き遅れの範疇で。

しかし日本の価値観を多少残しているユーゴーからすれば、晩婚など普通にあつた社会を知っており、二十代など普通に花盛り真っ只中だと思っていたからだ。

八歳ほど年上？ アリよりの大アリ、飾らない性格も高評価。

おっぱいたゆんたゆんで、めっちゃドエロい。

「――うつつつわ、マジっすか。本気で言ってる？ この鬼畜^{とせか}鶏冠^{とせか}??」

「どーいう意味だコラ。この駄乳」

「ちよッ！ 言って良いことと、悪い事があるっすよッ!!」

沸騰したヤカンのように、激しく脂肪の塊を揺らしながら激昂するオーレル。

その様子を眺め、ユーゴーは鷹揚^{おつよう}と頷きながら微笑する。

これでいい。

間違い続きの人生を、少しでも良い形でやり直したいから――ハリ

ボテでも気高くあらん。

「まつ、やってやるさ。桜崎あ一成いの誇れる親友である為にもな」

全軍に可及的速やかに部隊を再編し即応状態で待機せよと、命令を下し会議の閉幕を告げた。

それを機に、指示を受けた将校や士官たちが動き出し次々と退室していく。

そして若き帝王は、支配者然と腰掛けていた椅子から立ち上がって、外套を翻し剣を鳴らす。

——今回ばつかしは、剣じゃなくて本気の拳で行くか。

ある少女から直伝で学んだ魔拳を解禁する時が来たと、音が鳴るほど拳を握り込む。

そして折角ダチに作って貰ったのに陽の目を見ない愛剣に苦笑する横顔は、真摯な熱意と気概に満ちていたのだった。

準備段階 ―クニヒコ・アサカ―

時を同じくして――

一定のリズムを保つ足取りで、クニヒコとアサカは無言のまま無機質な床に足音を刻む。

二人は同じ室内に放り込まれていた他の転生者たちと同様に目を覚まし、予め禁忌を知っていたため気絶しなかったシユレインとラーヌから事情を軽く聞き、戻ってきたシユレイン達と入れ替わるように、部屋を後にした。

二人が今の今まで他の転生者たちと一緒に居たのは、何かあった時にいざとなれば戦う力の無い転生者たちを守るように、シユレインの真相を知ろうという誘いを断って残っていたのだった。

まあ実際は、転生者を害する気など第十軍の末端ですら欠片も思っ
て無く、それ以外の危険事は彼らが事前に排除していたので、そもそ
も杞憂というものだったのだが。

それでも、万が一に備えて警戒するのは、冒険者という職種の職業
病なのかもしれない。

そして、そもそも二人にとって世界の真実なんて、実はどうでも良
かった。

クニヒコは、部族の仇であるメラゾフィスしか眼中に無く。

アサカに至っては、前世から友人兼恋人のクニヒコ以外、あまり興
味を持っていなかったから。

――二人は今でも、あの災禍を良く憶えている。

荒々しくも結束感の強い気風だった生まれ育った部族の全員が、血
と炎で塗り潰され惨殺されたあの日の事を。

移動式住居が火に吞まれ、大人たちの地鳴りのような怒号と悲鳴
が、何度も響いていた。

硬いもの同士を打ち付け合う音が聞こえ、その後の一つまた一つと
悲鳴が上がった。

災禍が訪れる前までは、外に出て世界中を冒険してみたいなどと、

拙い夢を描いて未来に思いを馳せていたというのに、その幻想は一晚で木っ端微塵に砕け散ったのだった。

それを引き起こしたのは、たった一人の男と地竜二匹。

戦闘音が響く内は何が起こっているのか、サツパリ分からなかった。

ただ暴風や黒影が走ったかと思うと、次々と冗談みたいに人が死んでいったのだから。

そして気が付けば転生者二人以外は全滅していて、目の前にあの男が立っていた。

『子供、か』

ゾツとするほど冷淡な声で語り掛けてきたのは、今にも倒れてしまいそうなほど不健康そうな顔なのに、目だけが炎を反射して妖しい朱色をギラつかせていた瘦躯の男。

そして何のつもりか二人を見逃すという発言をし、背を見せ去っていくようにした。

『待て！ 名前はッ!?』

『……メラゾフィス』

復讐の念に染め上げられたクニヒコは男の名を問い、彼はそれに答えた。

クニヒコには何の為にこの男が部族を殺し、何故自分たちだけ見逃したのか分からなかったが、そんな事は全て仇討ちという想いで塗り潰されたのだった。

対し、アサカは気を失いそうほど恐怖に震えつつも冷静だった。

ああやっぱり、消される時が来たのだと。

能天気な幼馴染と違って彼女は、自分たちの部族の本質が、盗賊となんら変わらない野蛮極まるものと薄々気付いていたのだ。

大人たちが血気盛んに戦闘訓練に明け暮れている事、時々外から帰ってきた大人がちやうど人間の頭部くらいの革袋を携えていたり、それを持って街へ出ていたり。

今日は何人魔族を殺したとか、報奨金は幾らだとか、大人はそんな話ばかり。

そして、狩りがあつた日の夜は毎回お祭り騒ぎ、戦利品と酒を掲げ朝までとても煩かった。

だからこそ、聡明な彼女は嫌でも気付くというもの。

野盗まがいの合法盗賊団な部族は、遂に邪魔だと結論付けられ排除される時が来たのだと。

心の内で諦観に苛まれつつも、どうかお願いクニヒコだけでも逃げてと思いつつ、庇おうとする彼の背中に炎など目じやないくらい熱い想いが湧き上がって――

アサカがクニヒコの事を、どんな事があつても一生支えようと思つたのは、この時だった。

そして、二人して穴を掘って遺体を弔い、残された馬車や家財を集めて、肩を寄せ合い寂しさと悔しさを噛み締めながら、途方に暮れつつ近くの街へと行くのであった。

それからの二人は、当然身寄りも無いので教会の世話になり、親切的な冒険者から手解きを受けて転生者のお約束かメキメキと実力を付けて、気付けば有数の実力を持つ冒険者となっていた。

神言教が運営する孤児院は質素だけど穏やかで居心地良く、傷を癒やすことに専念出来た。

街に入る時ちよつとした一騒動があつて、その縁で知り合った日本人っぽい名前をしたお人好しの冒険者からは、師弟関係を結び戦いの基礎をみっちり仕込まれた。

失ったものも沢山あるけれど……けれど、新たに始める事も出来た。

二人三脚で修行と冒険の日々、風龍と雷龍なんていうS級魔物の討伐に参加して死にかけた事もあったが、どれも精一杯必死に取り組み、そしてお互い苦笑し合う事もあった。

このまま復讐なんて止めて、ずっと二人で冒険を続けている方が、余程幸せなのではないのかと思うほど、満ち足りた時間だった。

しかし――運命の糸車は、二人を舞台へと誘い込んだ。

人魔大戦と呼称される、過去に類を見ないほどの大規模な戦争。

それが、二人を因縁の相手に会わせたのだ。

あの日、メラゾフィスを相当な実力者だと臆げながら認識していた二人は、そうであるなら魔族の将かそれに相当する存在として、大きな戦いなら必ず出てくるだろうと思った。

実際、Bランク以上の冒険者は強制参加などと言われていたので、クニヒコは戦意を滾らせて、アサカはそんなクニヒコに付き合っつて、この戦争へと参加した。

そして部族の仇であり所属が敵同士であり、偶然にも同じ戦場で出会ったのなら、後は言わずもなだろう。

二人とメラゾフィスは、戦場で刃を交えた。

だがしかし、その差は二人が思っていたよりも余りにも隔絶していたのであった。

剣を振る——余裕を持って防がれる。

魔法を放つ——こちらを一瞥すること無く、易易と相殺される。

そして相手の反撃は正確無比——全力で回避しなければ、次の瞬間には命が無いと感じていた。

単純なステータスの差だけでは無い、磨き抜かれた技術こそが何より恐ろしいほど段違いで。

またこれでも近中距離戦を仕掛ける二人の対応自体が片手間に行っている事であり、遠く砦からメラゾフィスに向けて飛んでくる超高威力の精密狙撃な魔法の弾丸を捌きながらの戦闘だった。

流石に三方向からの同時攻撃を防ぎ続ける状況に苦しげな顔をしていたが、それでもまだ余力を残しているのを垣間見えるのが、彼のデタラメな化物度合いを示していた。

一番威力が高く、彼に手傷を負わせられそうな狙撃を相殺するのに意識が割かれていなければ、冒険者の中で上位に位置する程度の二人では、瞬く間に返す刃か魔法で殺されていただろう。

その均衡が崩れたのは、四人目の攻撃が加わったからだ。

ローブを被った小さな子供から放たれる風の魔法。

その援護でようやくメラゾフィスへと攻撃が届くようになり、即席の連撃が叩き込まれた。

しかし、彼が血を流したのは狙撃だけであり、クニヒコとアサカそ

して小さな子供の攻撃では、傷一つ付かずに全て生身で受け切られたのだった。

その事に絶望した次の瞬間——彼は周囲の状況を見てすぐさま撤退と叫んだ。

戦場全域に聞こえたのではという大音量で魔族軍に撤退命令を下すと、メラゾフィスは背を向けて走り去っていったのだった。

いつそ、惚れ惚れするほどの鮮やかな引き際。

それを呆然と眺めた後、認識が追いついた事で二人は崩れ落ち、遅れて脳が疲労を訴えていた。

二人の人魔大戦は、その一戦で幕を引いた。

双方尋常では無い数の死者を出し、自軍が砦ごと壊滅するか逆に敵軍を壊滅させるかという極端な結末となり、どちらも再度の戦争など不可能だと感じる傷跡を両軍へ刻み込んだのだった。

そして小さな子供の正体が、前世の担任である岡崎先生だと本人から明かされ、他にも保護している転生者がいると聞き、しばらく休養がてら先生の誘いに乗ってエルフの里へと赴いたが……

「まさか、こんな事になるとはな……」

「まったくな」

ぼやく声に覇気は無い。

実は星が危険な状態で？ 若葉さんこと白さん達は救済の為に戦争を仕組んだ側で？

仇のメラゾフィスもそちら側だったと？ 冗談も休み休み言って欲しい。

だが、これは千載一遇の好機。

この機を逃せば二人が、主にクニヒコが知りたいと思っている、あの日の真実は永遠に闇の中に閉ざされたままだろう。

「あー、にしても頭いてえエ、気持ち悪い……なんでアサカは平気そうなんだ？」

歩いている最中、過去を振り返ると同時に禁忌による不快感で頭

痛が発生し、喉から搾り出すかのように、クニヒコの口から低い呻きが漏れる。

「まあ、慣れよ。——前にクニヒコが、大ポカやらかした時よりマシね」

最後の方は隣には聞こえないように呟き、アサカはとても深々と嘆息して首を振っていた。

ちよつとした不注意やミスをよくやらかし、毎回そのフォローで頭を悩ませたアサカにとって、この程度の不快感は耐えられなくも無い範疇であった。

過去の回想を打ち切り、二人は歩く。

エネルギー節約の為に仄暗い通路を歩き回りながら、教えられた区画の位置を確かめつつ目的の場所へと、クニヒコとアサカは漸く辿り着いた。

「——此処か」

目の前の扉が自動で開き、部屋の輝度の違いで僅かに目を細める二人の視界に映ったのは、この宇宙船に整備されたカフェテリア。

そこに、目的の人物たちが居た。

「なんだか、奇妙な懐かしさを感じるわよね。そう思わないかしら？」入り口側を振り向きもせず言葉を発したのは、白磁の指でカップを掴み上げ、優雅にお茶を飲むソフィア。

如何にも蒼き薔薇といった貴種の気配を醸し出す彼女と、近未来的な内装の飲食スペースとは何ともミスマッチ感が強いのだが、彼女はこういう感じの場所にも見覚えがあると、慣れた様子で飲食を楽しんでいた。

「まあ……同感だな」

「そうね」

そしてその彼女に返事する、隠しきれぬ赫怒の滲む声と覇気の無き憂い声。

何故ならソフィアの背後には、従者の鑑とばかりに洗練された隙の無い立ち振る舞いで控える、メラゾフィスの姿があったからだ。

「それで、そんな怖い顔して一体何の用かしら？ まあ何となく予想

はつくけれど」

艶然えんぜんと外連味うそげんたつぷりに嘯くソフィアは、手に持ったカップを傾け上品に微笑する。

それは綺麗でもあるが妖しく、転生前が二人と同じごく普通の日本人だと思えないほど、彼女は気品に満ちた風格を醸し出していた。

あまりの色香に一瞬呆けるクニヒコだったが、すぐさま気を取り直し臆せず言葉を叩き付けた。

「用があるのは、メラゾフィス唯一人だけだ。あんたが十年くらい前に滅ぼした、人魔緩衝地帯の集落——俺たちはその生き残りだよ。まさか、忘れたとは言わねえよな？」

憎悪を宿した視線で射抜きながら、叩き付ける怨み返しの念。

過去の罪過を取り立てに來たぞと、クニヒコは奥歯が割れんばかりの形相で睨んでいた。

「……………ええ、勿論憶えておりますとも」

「ふうん……………メラゾフィス、相手してやりなさい」

その視線を、静かに噛み締めるように受け止めるメラゾフィス。

対しソフィアは、何処吹く風と二人の姿を流し目で確認すると、これもまた一興ひとこころと自らの従者に許可を出した。

「ですがお嬢様、宜しいので？」

「構わないわ。私は一人でお茶しているから、気の済むまで彼らを持って成すといいわ」

「……………かしこまりました」

そうして席を立ったソフィアは、併設されている厨房スペースへと軽やかな足取りで進み、何か興味を惹かれそうなものが無いか、にこやかな笑顔で物色を開始するのであった。

妖艶さ匂う美人から一転し童女みtainな屈託の無さを見せ、その落差に驚き声が出ないクニヒコとアサカの二人。

その様子に、メラゾフィスは無言を貫くものの内心では、小さなぼやきが零れていた。

——まあ、お嬢様も白様ほどではありませんが、外見と内面のギャップが激しい方ですからね。

「では、此方へどうぞ。お客人」

内心をおくびにも出さず磨き抜かれた完璧な礼をもって、メラゾフィスは呆氣に取られたままの二人を席へと案内するのであった。

「——どうぞ、ハーブティです。気分が落ち着きます」

二人が席につくなり、メラゾフィスは空間収納が付与されているらしき白地の袋から新たな磁器を取り出し、手慣れた様子で芳しい湯気を立ち上らせる蜂蜜色の液体を注いで二人の前へと静かに差し出した。

「……あざます」

「頂きます」

メラゾフィスの如何にも出来る男といった気遣いに、クニヒコは釈然としない気持ちを抱きつつ一応礼を言い、アサカは今更毒を入れるなど回りくどい事などしないと確信しており、素直に口を付けて風味を味わっていた。

少し離れたところでは、探し出した合成食料や保存食を前に味見をして、表情を千変万化させているソフィアが居たが、そちらの方は意図的に無視して二人はメラゾフィスに向き合った。

そして、どうして自分達の故郷は滅ぼされたのか真相について問うクニヒコに、メラゾフィスは思惟を巡らしゆっくりと口を開いた。

「あまり気分の良い話ではありませんが、エルロー大迷宮までの移動時間で答えられるだけ応えましょう」

「ああ、構わないぜ」

「では、少々長い話となりますので、さっそく始めましょうか」

そうして、なるべく客観的に話すが魔族よりの視点である事を前置きして、メラゾフィスは語り始めた。

魔族の内乱、反乱軍、裏から支援するエルフ、その中に交じっていた先生こと岡ちゃん、反乱の電撃的鎮圧、戦力の大半を喪失し安全な帰還経路を失って取り残されたエルフたち。

残存した先生含むエルフが人族領に戻るためには人魔緩衝地帯を

通る必要があり、彼らを無事に脱出させるためには、そこを縄張りとする盗賊もかくやな部族を先立って排除する必要があった。

——それが二人の部族であるとメラゾフィスは語った。

「マジかよ……アサカは知ってたのか？」

「当然、薄々察してたわ。うちの部族がどういうものか、ギルドに訊けば確証も得られたわよ？」

「何も知らなかったのは俺だけかよ……ッ」

クニヒコは自分の部族が、そんな野蛮な存在だとは思ってもみなかった。

しかしアサカは、最初から理解していたので平然と受け止め、話の続きを促した。

「何故、先生を捕虜なり何なりで確保しなかったの？」

「したくでも出来なかったのです。ポティマス・ハアイフェナスの他人の身体を乗っ取れるという支配のせいによって」

そうして明かされる、ポティマスの悪辣さ。

それを聞いて、星を滅ぼすに飽き足らず能力までもがえげつない悪態を吐き捨てるクニヒコ。

そして話は尚も続く。

きっかけは先生だったが、君たち転生者があの場所にいた事も、あの時点での部族の壊滅を決定づけたと、メラゾフィスは言う。

人魔の境界線であり、どのみち戦火に呑み込まれる危険地帯だった事。

そうなれば未来において部族の壊滅は決定事項であり、その部族に所属しているとすれば二人を巻き込みかねず、また転生者を集めている先生に引き合わせる訳にもいかなかった。

それゆえ、当時転生者について理解がありかつ転生者が顔を知らない、自由に動ける戦力として自身が実行役として選ばれたのだとメラゾフィスは締め括った。

よもや自分達のせいでもあると聞かされ、転生者は疫病神か何かかと自嘲するクニヒコ。

しかし、先程も言ったように遅かれ早かれ戦争に巻き込まれ滅ぶ運

命だったと、メラゾフィスは彼を慰めた。

「あなた方から見れば、私の行いは到底許されざる事でしょう。ですので、私を怨む正当な権利は当然あります。……ですが、謝罪は出来かねます」

相手の想いに理解を示し、復讐は何も間違っていないと言いながらしかし、メラゾフィスは罪の清算には答えられないと、驚くほど真つ直ぐに精錬された想いで返答した。

「私にも、軽々しく命を差し出す訳にはいかない理由が当然あるのです」

そう言つて、ちらりとソフィアの方に視線を遣るメラゾフィス。

一瞬見せた態度に信念と忠義を垣間見て、何となく彼の芯というものを察してしまった二人。

「あなた方の挑戦はいつでもお受け致しましょう。しかし、その場合は我が忠義に懸けて今度こそ全力で排除させて貰います。——話は以上です」

これが自身に出来る最大限の譲歩だと誠意すら窺える言葉に、苦々しい表情で顔を俯かせ、拳をテーブルに打ち付けるクニヒコ。

そうして、メラゾフィスが席を立とうとした瞬間——新たな宣告が全員の脳裏へと響いた。

《ワールドクエストシークエンス3：神話の戦いに乗るか降りるか、祈りで以て答えよ》

「うぐッ！」

「今度は何なの……？」

脳内で掻き鳴らされる不快な思念、それに表情を歪めるクニヒコとアサカ。

対し、開示された内容を瞬時に読み解いたメラゾフィスは、未だ気持ちの整理がつかない二人に背を向けた。

「——では、失礼しますお二方。今後についてお嬢様とも話し合わせねばなりませんので」

静かに現状を理解したメラゾフィスは、何かの魔物肉を缶詰にした

ものを味わっていたソフィアの傍へと控え、短く一言二言を交わすと彼ら主従は部屋を後にしたのだった。

そして——取り残された二人はというと。

「どうしろってんだ、ちくしょうッ!!」

「……………」

怒りと無念と困惑に、肩を震わせるクニヒコ。

その彼に、無言で手を添えるアサカ。

どうするべきか決める為に真実を聞きに来たのに、余計迷ってしま
う体たらく。

クニヒコは、もしこの復讐を成したところで得られるのは後味の悪い虚しさだけだと、軍人然と従者然と鋼の忠誠心を宿す好感の持てる男を完全に憎みきれないと——そして自分の復讐は真実を知って容易く揺らぐような、その程度のもだったのかと深く重く悩むのであった。

空になったカップには、何も無い。

彼ら二人の心を示すかのように、何処までも空虚な中身を晒していたのだった。

準備段階 ― 教皇 ―

思えば、私の人生とは後悔と失意の連続であった。

長きに渡って記憶を保持しながら転生を繰り返し世界を導いてきた男は、自らが犯した裏切りを決して許すことなど出来ない、誰が見ても屑でどうしようもない頑固者でしょう。

私の最初の名はダズドルディア国大統領ダステイン・エーベハイナム。

今は亡きダズドルディア国の歴代大統領の席を、父、祖父、曾祖父と勤め上げた名門中の名門の家系に生まれた、生まれながらの政治家でした。

決断力に優れ公約を必ず守る、強きリーダーシップを発揮した大統領……などと過大評価も良いところの肩書を持っていたのです。

しかし所詮人の身、出来る事は限られている。
遙か昔、システムが敷かれる以前の世界の話。

ある犯罪組織が龍の子供を拉致したと、当時の我が国もその対応に追われることになりました。

龍の子供が拉致された時に部下や官僚たちに下した指示は、捜査官の派遣や密入国への監視体制強化など、消極的な対応しか取れずにいました。

これもまた、人では龍に敵わないという不条理から。

テトマイアの悲劇と呼ばれる、テトマイア国が開発した地図すら書き換えるほどの破壊力を持つ新型の爆弾を、その国はあろうことか龍の生息域に落とし――

同日、テトマイアという国家は報復によって事実上地図から消え失せた、龍の恐ろしさを世界が再認識する契機となった事件。

人には人の分がある。

人の手には負えぬ荒ぶる龍は、同じく人では無い超越者の慈悲によつて解決される事をただ願うしかないのだと、忸怩たる諦念をかつてのダステインは抱えていた。

その超越者こそが、どの国家にも所属せず国の垣根を越えてあらゆる

る慈善を体現している組織、サリエーラ会の会長であるサリエル様でした。

巷では女神などと言われるくらいに、無欲に見返りを求めず悪事も為さず、ただ救済のみを目的とするかのように、弱き者に手を差し伸べる清廉潔白な無私の救世主。

彼女の献身はシステム構築前からも多大なものを積み上げており、実際テトマイアの悲劇の折に龍を止めたのは彼女なのですから、人道的にも武力的にも人は女神の御稜威みいつに絶つるしかなかったのです。

この世界は、龍と女神という絶対者によって上手く頭を抑えられておりました。

だからこそ人は龍の機嫌を伺い、刺激しないよう大規模な争い少なく、弁舌と叡智によって発展してこれた歴史があります。

今では僅かな面影すらありませんが、科学、工業、農業、医療、文化――

どれをとっても、素晴らしく発展した人の技術と共にあり、またそれをさらなる発展を目指して研鑽を重ねていたのが、かつての世界なのです。

精緻な材料工学、高度な半導体技術、完全自動化した物質生成工場、細胞の一片からクローンを作り出せるほどの再生医療……

それが皮肉にもポティマスという、叡智の怪物を生み出し育む土壌となったのが、冗談にしても笑えない話なのですが。

――ポティマスの所業については、既に詳しく語らずとも良いでしょう。

あの男がM Aエネルギー理論を世界中にバラ撒いてから、人という生き物は便利なもののあるものへと容易く流されてしまうもので、それがどう危険なのかロクに知らないまま、世界は滅びの流れへと急速に傾き始めたのです。

そして――恩を全て仇で返した裏切りの日は訪れたる。

人の手ではどうしようもならない星の終焉が、私に決断を迫ってきた。

即ち、星と共に人類は滅ぶか、大恩ある女神を犠牲にして生き延び

るか――

そして私は――人類の為に女神を売り渡してしまったのです。

他ならぬ全ての元凶のポティマスが提示した、かの女神サリエルを生贄に捧げて星を存続させるという疑念があるうとも受け入れざるを得ない、最悪の裏切りを選んできました。

龍から人類を救いたもうた女神サリエル。

かの御仁を生贄に捧げ、星と人類を存続させる――その願いは、思わぬ形となって齎された。

システムという新法則の誕生である。

結局のところ、ポティマスはサリエル様を研究対象としか見ておらず、星を救う気など欠片さえ持ち合わせていなかったと後で知りつつも、それで全ての罪を責任転嫁出来るほど私という人物は器用では無い。

後悔と失意は変わらず深まるばかり。

故に、ギユリエ様と禁忌が告示した、女神サリエルを救い出せという指針は希望でありながらも絶望であった。

その苦悩を彷徨い、私は決断した――

人類を守るため、手段を選ばない。

それがひいては星と、裏切ってしまったサリエル様を救うと信じて――たとえ人類の為に女神を再び裏切らなければならぬとしても、人を救う。

足掻いて、藻掻いて、苦悩して、嘆いて、摩耗して、切り捨てて――

その結末がこの様とは、全く以て屑で恥知らずな私にはお似合いでしょう。

神言教は、人族の為の組織。

そうなるよう作りましたし、実際に成した救済は数知れず。

しかし同じく、うず高く折り重なる罪深き犠牲もまた数知れず。

私の名は、未来永劫罵られるべき存在です。

そしていつの日か――私の身勝手な理由で発足した血塗れの神言教も、遍く罪過の受け皿となりながら滅びるべき存在でしたが――

《ワールドクエストシークエンス3：神話の戦いに乗るか降りるか、祈りで以て答えよ》

『現在、魔神の尖兵はエルロー大迷宮を中心として世界中へと広がるうとしていく。かの魔性は、目につく生命全てを贄として捧げ、星の糧へと充てるだろう。これにより、生命の再分配が行われ星が救われる。この際、星を再生させる糧として尖兵は人類を優先的に狙う。

乗るを選択した場合、禁忌は消失し己の力へと変換され、そして尖兵からの殺害対象の優先順位が上がる。降りるを選択した場合、禁忌は消失し魔神へと僅かに力を送り、尖兵からの殺害対象の優先順位から外れ、大厄災が終了するまで狙われなくなる。なお、巻き添えになった場合での命の保証はしないものとする。さあ人類よ、汝の選択は如何に？』

「何としても各国の戦える者には参加を選択させよ！ 扇動でも金銭でも構わない、一人でも多く戦力を掻き集めるのだッ！ 一般市民にもくれぐれも降りるなど選ばないよう、御触れを出せッ」

神言教の総本山である聖アレイウス教国。

その行政府は平素の荘厳らしからぬ、怒号混じりの喧騒に包まれていた。

「水増し^{サクラ}を使え！ でっち上げで構わない、人々が奮起するカバーストーリーを組み立てろっ！ もはや神言教は終わりだ、人材も金銭も惜しむな！ 人々が戦いに挑むよう、駆り立てろっ！！ これこそ、最後の聖戦であるとなッ！！」

こうして教皇ダステインが下した指示が、周囲に控える念話の上位スキルである遠話スキル持ちへと伝わり、世界各地に派遣されている遠話持ちへと伝言ゲームのように連鎖していく。

普段は神言教が巡らせた情報網から上がってくる情報を、逐次ここへと集約する事が主な役目の遠話の人員。

しかし現在は逆に、此方側から神言教の指針と情報を拡散させる為に、喉が枯れ果てんばかりに遠話持ちが遠くの地に居る受信側へと叫んでいた。

教皇の傍に、原稿用紙を抱えた付き人が現れる。

そして手渡された文章を瞬時に目を通してながら、一枚の紙を抜き出した。

「現実と向き合うのです。我々は何を信じ、何のために生きるのか……その原点を、今一度自分の意志で考えるのです。遥か過去の罪過に囚われるのでは無く、贖罪の為に命を捧げるのでも無い。今を生きる人類として、今のあなたにとって、掛け替えの無いものを心に思い描いて立ち上がって欲しい。人々よ臆するなかれ、最後の聖戦を越えてこそ我々の生きる道があるのだと――

――草案はこれか？ 良し、すぐに全教会に内容を伝達せよつ。事は一刻を争う、一秒たりとも無駄にするでない!!」

「――はッ!! 全ては神言の仰せのままにッ」
神言を讃える定型句を述べながら、付き人は直ぐに行動へと移った。

それを鷹揚わうようと頷きながら見送ると、ダステインは深々と椅子いすに老骨を預けた。

「……何が神言の仰せのままに、か。その神言を裏切り、抗おうとしている者の言う事では無いというのに」

この場に居る誰にも聞こえぬよう、枯れきった眩くらきが空虚に溶ける。

神言教教皇ダステインはまた一つ罪を重ねたと、深い溜め息を吐き出すのであった。

この論説は、一種の論点ずらしである。

過去の罪と星の未来について訴えるワールドクエストに対して、現在のみに視点を引き戻し人類に開き直りを促す訴え。

魔神が人類へと突きつけた、罪の指摘も罪過を贖えも星の救済も、どれも論としては正しい。

そうしなければならぬ理由も、もはや禁忌によつて全人類が知る処となった。

しかし、だからといって素直に納得など出来ないし、させては為らない。

最初から、人類に正当性など皆無だろう。

元より神言教は、人類を騙して罪を忘れさせて、知らず識らずの内に人々を肥え太った生贄へと仕立て上げるといふ、度し難い所業を覆い隠す為の虚飾宗教である。

それは禁忌と照らし合わせれば自ずと理解出来るものであり、知つてしまえば人心は離れていくのが目に見えていた。

故に、神言教の権威失墜は織り込み済みであり、いずれ人々に踏み躪られながら消え去るのが、設立した時より定められた役割の宗教であつたが……

「ですが——今は、早すぎる」

ダステインは、禁忌に追加されていたワールドクエストなる項目に意識を向ける。

そこには、この大厄災を止める手立てが事細かに記されていた。

『大厄災の基点は、両大陸間にある大洋中心エルロー大迷宮直上にて顕現した《翠魔レルネー》にある。かの魔性の核を破壊すれば、これ以上魔神の尖兵は創造されず、大厄災の工程は終了する。また尖兵を合計一千万体打倒した場合は、大厄災は停止する。もしくはエルロー大迷宮最奥にあるシステム中枢に坐している魔神本体を弑逆した場合、システムは正常な運行へと回帰する。そして最後に——降りるを選択した人類が一定数を越えた場合には、大厄災は中止される』

人類が存続するためには、この大厄災をやり過ぎす或いは終わらせねば為らない。

その為の選択肢は、幾つか提示されていたが、しかし——

「どれも言い回しが異なる。——つまり、それぞれ違う結末となって返ってくるのでしょうか」

その根拠は、ただの勘でしかない。

しかし教皇ダステインが積み重ねた、圧倒的なまでの人生経験と政治感覚が、この僅かな違いに激しく警鐘を鳴らしていた。

特に——最後の降りる選択肢には、人生最大級の危機感を覚え総毛立つ。

ご丁寧に、現在どのくらいの人数が降りるを選択したのか、確認すら出来る作りだった。

——その人数は、少しずつだが着実に増え始めている。

この選択に進んだが最後、人類は滅ぶのだと最悪の予感を拭えないものなのだから——

人族を存続させる事を第一に考える不屈の教皇は自らの直感に従い、最善にして最低な選択肢を選び出した。

「申し訳ありません、サリエル様……人族のため私は、あなた様に刃を向けましょう」

もはや、女神の美しき声は聞こえない。

脳髓を掻き回すかのような、不快で歪みきった甲高い悲鳴のような神言しか聞こえないのだ。

嗚呼、サリエル様——あなた様もようやく、こんな罪深き人類を見捨てる事が出来たのですね。

その事に深い悲しみを覚えながらも、比例して高まる決意の熱量。

——ならばこそ、私も往きましょう。

ダズドルディア国最後の大統領として、神言教始まりの教皇として、そして恥知らずにも大恩を仇で返すしか能のない愚かな男として決意を固めようとした、その寸前——

「警告。それを実行すれば、私はあなたを制圧せざるを得ません。どうか、今一度ご再考を」

「いやいや、サリエル様。ダステインはそんなつもりで言ったんじゃないと思うよ？」
「どうかさ今のサリエル様、昔の頃より冗談通じな

くなってる?」

「……それだけ、人間性が摩耗する程だったのだろう。そも、天使とは元来こういうのが基本なのだから。お前たちに親身に接していた、あの頃が異常だったのだよ」

「否定。今でも私は、あなた達の事を『守るべき大切』だと思っております。それに冗談も理解しておりますよ? 今からこの者達をシバキ倒して無理やり言う事を聞かせるのですよね」

「いや、洒落になってないからそれ。……なんかちよつと不安なってきました」

「奇遇だな、アリエル。………私もだ」

予兆も無くダステインの背後に、三つの人影が現れた。

それは空間を歪めて繋げ、遠い彼方から一瞬で移動する転移によるものだった。

突如、この行政区に無断で乗り込んできた不屈き者を迎え討たんと、この状況下にて気が立っていた衛兵や騎士らが武器を手に、不審な人物らに向けて刃を構えるが――

「控えろおおオオツ!!!」

次瞬、雷鳴の如き大喝破が轟き渡った。

その出処はダステイン教皇からであり、その枯れ木のような身体からは想像もつかないような、荘厳な石造りの室内を震撼させるほどの声量であった。

そして、ダステインはヨロヨロと椅子から立ち上がると、三人のうち蒼白い印象の美女の前にて静かに膝をつき、罪を悔いる敬虔な信徒のように深々と頭を下げた。

「ああ……サリエル様。よもや再び御尊顔を拝謁はいえつ出来るとは……」

その言葉を聞いた周囲の神言教高官らは、教皇が発した言葉の意味を理解すると一斉に跪いて、蒼き美女へと迷いなく信仰を捧げるのであった。

「あー、うん。ダステイン、話があるんだ」

三人の中から、黒髪の小柄な少女が一步前が出る。

その少女は、表向きは敵対関係、裏ではズブズブの密約を交わして

きた協力相手――

魔王アリエルが気不味そうに頬を搔いて、未だ拝跪したままのダステインへと話を持ち掛けた。

場所を移し、密談の際に使用する特別な個室にて。

「なるほど……そういう経緯だったのでですね」

ダステイン教皇、魔王アリエル、龍神ギユリエ、女神サリエル――個々において方向性は違えど世界を統べる事が可能な実力者達が、この小さな部屋に集い言葉を交わしていた。

そしてダステインが知らない、アリエルがこの目で直接目撃し起こった出来事について、何一つ包み隠さずに教皇へと開示したのだった。

「であれば、魔神とはサリエル様を指すのではなく……」

「うん、コケちゃんの事だよ」

まさか忘れるはず無いよねと目で訴えれば、勿論ですという無言の返答。

説明を聞き終わったダステインは噛み締めるように何度も頷き、俯き加減の瞳をさらに細める。

そしてたつぷり間を置いた後、不撓不屈ふとうふくつの賢者のような佇まいでアリエルらと相對した。

「犠牲の少ない救済方法……それがあるのでしたら最後の奉公とばかりに、喜んで協力致しましたのに」

「それはギリギリまで出来るかどうか、分からなかったらしいからね。次善策は強引にシステムを解体しての人類半減。これはダステインなら止めに回るでしょ？」

「否定は出来ませぬな」

「アリエル。私もそれは反対です」

「うん、分かった。だからちよつと今は黙ってて貰えますか？ サリ

エル様」

「……」

至って大真面目に真剣な顔で人類半減について口を挟んできたサリエルに、この性格にも慣れてきたのか割りと辛辣な態度であしらうアリエル。

そしてサリエルは言われた通り正直に、キュッと唇を一文字に窄めていた。

その遣り取りを何とも言えない表情で眺めるギユリエに、目を丸くしながらも朗らかに微笑するダステイン教皇。

しかし、その微笑は段々と崩れていき、やがて懺悔する罪人であるかのように悲壮な気配を纏いながら、ダステインは訥々と呟き始めた。

「ああ、我が後悔。あなた様がこうしておられるだけで救われるというもの。——ですが」

「代わりにコケちゃんを犠牲となつては、私たちにとって意味が無いッ！」

荒々しく打ち付けられる拳。

それは以前ならばテーブルを粉々に破碎し、床面にも穴を空ける振り下ろしのつもりだったが、今のアリエルでは天板に罅を入れる程度の威力であった。

そして睨み付けるようにアリエルはダステインを見据えると、敢然かんぜんと言いつつ放った。

「どうせ、ダステインの事だ。神を殺すつもりだったんだろう？ 人類の為にとか言つてさ。納得出来る考えだし、あんたならそうするはずだ」

「ええ——私はどんな手を使つてでも、人族を救うと決めたのです。ならば義務を果たす為にも、止まる訳にはいきません、止まれないのです。それが恩を仇で返す神殺しであっても、です」

「うん、知ってた」

「お前も、難儀な宿痾しゅくあ持ちだな……」

予想通りとアリエルが返事し、ギユリエは小さく嘆息しながら首を振った。

このダステインの行動原理は死ななければ――

否、死んでも再び生まれ変わり同じ目標へと歩み続けるのだと、この両名は長い付き合いで理解していた。

「だからこそ、提案があるダステイン。私たちはコケちゃんを救いたい、あんたは人を救いたい。この両方を目指す選択を、今なら手を取り合えると思うんだけど、どうだい？」

「……詳しく訊かせて貰いましょうか、アリエル殿」

そして語られる、神と人とが手を取り合う、夢物語を現実にするための救済方法。

既にある程度協力的だが、更にこの教皇の協力を引き出す為に、アリエルが差し出せるモノ。

それは――

「まず手始めに、人魔の完全なる停戦協定、そして此度の大厄災における種族の垣根を越えた協力体制なんてのは――いかがかな、ダステイン？」

「それこそ、願ってもないものでしょう。長きに渡って相争った貴方と共に肩を並べられるとは、まさしく幸甚こうじんの至りでありますな、アリエル殿」

「よっし！ それじゃあ留守番させてる魔族たちを説得してくるよ。事は一刻を争うんだからね」

「ですな。私も各国へと通達を下しましょう――そう、全ては」

「全ては――」

「私たちの手で、未来を掴む為に」

どんなに険しくとも苦難に満ちていても、納得出来る結末を――
彼らは此処に、誓いの環を結んだのだった。

準備段階 ― 魔族 ―

魔族領にて、有数の名門に生まれた。

それなりの能力を持ち合わせ努力もして、そして時代と噛み合い順調に出世した。

絵に描いたような順風満帆な人生……そう思えたのなら、どれほど良かっただろうか。

これはただ時代に翻弄された、その程度でしかない男の話。

バルト・フィサロは、名門中の名門であるフィサロ公爵家の長男として、この世に生を受けた。

魔王城の周辺一帯を治める由緒正しい家柄は、それに相応しいだけの権威と地位を宿しており、そこに生まれたというだけで一定以上の栄達は約束されているようなものだった。

当然、フィサロ家長男である俺も次期当主を担うべく必要な教育を受け、元より努力家な気質も合わさり順調に実力をつけ、これまた順調に家名に恥じない出世街道をひた走っていた。

その過程に、疑問や不満がある訳では無い。

むしろとても恵まれた側として、衣食住も学びも十全な幼少期を過ごし、世界というものを広い視野で理解していったのだ。

だからこそ、魔族の現状についても正しく認識してしまった。

飢えや困窮に苦しむ平民階級。

荒れた土地、過酷な環境。

深刻な人手不足。

深々と、後を引き続ける戦争の爪跡。

国を担うべき上の世代が軒並み帰らぬ人となっていた、破綻寸前の政治体制。

絶対的な統率者である魔王の不在――

若輩である自身がトントン拍子で出世を繰り返していったのは、兎にも角にも人手が全く足りていないという現状があったからだ。

時代が少しでも能力のある人材を放っておけるほど、何処もかしこ

も余裕など一片も無かった。

ゆえに、その地位に相応しいと能力や努力を認められたというよりは、空いた席を埋めるために能力的に一番マシだったのが俺という事に過ぎないのだ。

一応、人より勝っていたという自負もあったし、何から何までをも卑下している訳では無い。

自分と近い年代では、最優と言える優秀さだっただろう。

しかし、武力では弟のブロウに負け、魔法の腕では第六軍軍団長ヒュウイに劣り、権謀術数ではサーナトリアに敵わないと、彼らはそれぞれ別の分野にて俺より優れていた。

総合力と言えば聞こえはいいが結局のところ、今は亡きアーグナー殿には全ての面にて遠く及ばない下位互換。

自身より優れた存在がいる中で、それでもなお順調過ぎるほど出世してきたのは、偏に公爵家ひとえという生まれの良さと、御上が空席だらけという時代が噛み合っていたおかげでしかない。

出世の喜びよりも、身に余る仕事に悩殺されていた苦労の方が大きい日々。

仕事への誇りや覚悟が追いつく前に、大きすぎる責任の仕事ばかりが俺の元へ舞い込み続ける。

それでも何とか潰れずにやっていけたのは、この窮状に喘ぐ魔族を立て直すのが俺の役目だと、そう思い込んで脇目も振らず奔走していたからだ。

少しずつ改善していく内政状況や軍備。

このままいけば、時間は掛かるものの安定の兆しを見せる——そう感じていたのだが。

今代の魔王様が就任してから、その未来図は果てしなく不透明なものとなった。

兎にも角にも軍備増強、軍団再編、軍拡、軍拡——

絞れる限界まで余力を吸い上げては軍に充てるそのやり方に、反発や不満は当然あった。

内政部門との調整役に引き立てられた俺に、下や同僚から苦情が来

るのは毎日の事。

しかし、忸怩たる思いを抱えていても魔王様に逆らう訳にもいかなかった。

仮に逆らっても勝ち目は万に一つも無く、人の姿をした文字通りの怪物に、ちよつと種族として優れているだけの進化人類程度が、敵うはずも無いのだから。

だからこそ、少しでも勝ちの目がある人族と争う事でしか、魔族が生き残る為の道筋は残されていなかった。

そうして種族の興亡を懸け、挑んだ人魔王大戦——
——結果は、痛み分け。

アーグナー殿を始め、ヒュウイ、弟のブロウ、三人の軍団長と数多の魔族が命を散らした。

人族の方も、勇者を始めとし数多くの強者が倒れ、向こうの戦死者もまた膨大だろう。

両軍共に多大な犠牲を出した戦争は、魔王様の目論見通りの結果となつた。

なにせ、魔王様の目的は人族に勝つことでは無い。

そんな理由だったのなら、魔王様ご本人と魔王様が引き入れた数名だけで、そのまま人族全てを滅ぼす事すら可能だろうから。

魔王様が望んでいたのは、より多くの死者を出す事。

それも、戦えるだけの力を持った多量のエネルギーを有する存在が、争いの中で死ぬことを目的としていたのだ。

その理由については、ワールドクエストの宣告文と禁忌を読み解けば、推論も出来よう。

魔王様は知っていたのだ、この世界の仕組みと真の実情を。

そのために戦争に駆り立て引き起こした——仮にそう言われても今なら素直に納得出来る。

しかし——魔族側にだって言い分というものはある。

魔族は、此れまでずっと人族と争い続けていた。

残っている最古の歴史書の頃から、変わらず飽きもせず——延々とだ。

人も土地もボロボロに成り果て、もはや種族として立ち行かなくなる、その寸前になるまで戦い続けて、命を世界のために捧げてきた歴史があった。

かつて、長寿などという欲に目が眩み、MAエネルギーを大量に消費してその身を進化人類へと変えた、その罪過を贖うために。

魔族の真実を知っていたのは、歴代の魔王様とその側近だけだろう。

市井の魔族には、今の今まで明かされなかった真実。

歴代の魔王が就任後に段々とオカシクなっていくという都市伝説は、魔王に就くと同時に禁忌もシステムから与えられていたせいであり、今まで魔族が何代にも渡って戦争を仕掛けていた真相。

その過去の魔王様たちが心血を注いできた贖罪が、実を結ばずに今に至ったことは残念に思う。

しかし、だ――

それでもしかし、長年の魔族の努力さえも、のうのうと恩恵ばかり享受する愚かしき人類などと一緒くたにワールドクエストから突きつけられて、黙っていられる筈がない。

ならば、俺の人生とは？

俺の努力も、ブロウの死も、アークナー殿やヒュウイの死も、あの戦争で死んだ魔族も、歴史の中で礎になっていった数多の魔族たちも

――全員が皆、目に余るほどの愚かな人類なのか？

いいや、断じて否。

それでは余りにも、散華していった同胞たちが報われないではないか。

だからこそ、俺は――

魔王城、会議室――

城下で起きている混乱も、第二軍が市街を巡回してまわり、被害状

況の確認と冷静な行動を呼び掛ける事で、ようやく沈静化へと向かい始めた頃。

この場に集っているのは、先の大戦で戦死した軍団長や魔王アリエルの遠征に同行した軍団長を除く——いわゆる居残り組とされた軍団長たちだ。

第二軍軍団長サーナトリア。

第三軍軍団長コゴウ。

第五軍軍団長ダラド。

そして魔王補佐にして内務最高責任者のバルト。

この四人が、同じ円卓を囲んで議論を交わしていた。

議題は当然、突如聞こえてきたワールドクエストについて。

その内容について詳細までは把握していなくとも、大まかな意味は集った誰もが理解しており、彼らは決断を迫られていた。

すなわち——戦うか、否か。

「やっぱり、戦うしかねえんだべ……？ 降りれば、殺されねえんじや？」

片田舎の平民出身から軍団長まで上り詰めたコゴウが、戦慄き震える声で呟く。

いつかの戦争前の会議の時と同じように、本当は争いを好まない彼らしい消極的な意見を今回もまた述べていた。

「いや——判断は慎重にすべきだろう。少なくとも我ら軍人は乗るを選択し、戦えぬ民衆を守る盾となるべきだ。影響範囲がどの程度か分からぬが、襲い掛かってくる魔性を誘導出来るやも知れぬとあれば、やるしかあるまい」

それに返答するのは、厳しい顔で眉間に皺を寄せ思索しているダラド。

「このような重大な案件ほど、魔王様の指示を仰ぎたいところだが、連絡が付かぬとあればな……我らで判断を下すしかあるまい」

彼は魔王至上主義者であり、何においても判断基準の第一に魔王を置いている。

魔王が白といえれば白であり、黒といえれば黒なのだ——彼にとって

は。

それは、この集まりの中では異端の考えだったが、当の魔王本人が居ない以上、此処に居るのは文武に優れた年季ある壮年として、他の三人は彼の有用な意見には耳を傾けそれ以外は無視した。

「ま、どうするべきかっていうより、私らがどうしたいのかって事よね。あれだけの規模と物量に立ち向かうのは、人族を相手に戦争するのは訳が違うでしょうし」

それでも、魔王様一人を相手にするよりマシそうだと感じているのが毒されている証拠よねと、サーナトリアは妖美な顔かんばせを引き攣らせ、苦笑していた。

「あー嫌だわ。降りても良いなら、降りたいわよ。こんなの」

彼女はこの中では誰よりも、魔王アリエルの恐怖が骨身に沁みている人物であり、魔王に反旗を翻そうとして、その計画を容赦無く粉碎された過去を持つ。

彼女が生かされているのは、まだ利用価値があるから見逃されただけであり、それからは従順に平服している理由も我が身可愛さで生き延びたいから——彼女はそんな小心者でしかなかった。

皆の意見を聞き終えたバルトは、瞑目して嘯み締めるように思惟を巡らせる。

そして毅然きぜんと熱を灯しながら、話を切り出した——

「皆各々、考えはあると思う。これはサーナトリアの言う通り、最終的には本人の意思で選ぶべき事だと、俺も同意見だ。そしてこれは飽くまで、俺個人の意見に過ぎないが——人族とも協力して戦うべきだと、そう思う」

対面する三人の顔が、驚愕に染まる。

その意見は、まさしく思いもよらぬ突飛な発想だが、しかし何よりこの状況では的を射ていた。

だからこそ三人は、反論を挟まず無言で続きへと耳を傾けた。

「これから俺は早馬を使って帝国に使者として赴き、停戦の申し出と今回の大厄災にて共同戦線を張ることを帝国、ひいては人族全体相手に提案しに行くつもりだ——とはいえ、すんなり話が進むとは思えぬ

から、その間にサーナトリア達には希望者を募って軍を再編して欲しい」

目の前に差し迫る未曾有の災禍を前に、人族も魔族も関係無い。

魔性は種族など一顧だにせず滅ぼしに掛かるのだと、そう読み取ったからこそバルトは迷わず、様々な因縁絡まる人族とも手を取るのだと、口にしました。

そして、これも魔族の未来の為どうか理解してくれと、バルトは深く頭を下げた。

彼の言葉を聞いた三人が口を開く——その前に。

会議室の扉が轟音を響かせながら、勢い良く開け放たれた。

「話は聞かせて貰ったあーッ!! このままでは、魔族どころか全人類が滅亡するッ!!」

とある星の何処かにて聞いた事のあるような台詞を吐きながら、魔族の今後を定める軍団長らの会議に乱入してきたのは、彼ら魔族が面従腹背の忠誠を捧げる魔王アリエルその人だった。

その後ろには、何とも言えない渋い表情を浮かべる第九軍軍団長の黒ことギユリエと、彼ら四人からすれば見覚えがない蒼白い美女がキョトンとした表情で首を傾げて立っていた。

そしてアリエルはスタスタと入室すると上座にある自身の席へと腰掛けて、驚愕に硬直したままの四人を睥睨しながら不敵な笑みを浮かべた。

「さて——早速で悪いけど、魔族領全域にワールドクエストの降りるを絶対選択しないように通達するの……希望者だけでいい、戦える者を集められるだけ集めて欲しいんだ」

銜いもなく端的に要件を伝えたアリエルに、真意を問う声がバルトから上がった。

「お待ち下さい、魔王様っ! いったいどういう事なのか、先に説明を求めますっ!」

バルトは眉間に皺を寄せ、確認の意を乗せて睨み付ける。

他の三人らも怪訝な表情でアリエルを見据え、彼女の傍に控える黒と蒼の二人にも注意深く目を配らせていた。

「うーん、本当は問答をする時間すら惜しいんだけど……取り敢えず、降りるを選ぶなって事だけ伝令して貰っていい？　こればかりは後手に回るとマズイんだ。理由もこれから説明するから」

「……サーナトリア」

「分かったわ。——私よ、追加事項を告げるわ」

警戒と視線の棘は未だリエルに向けて突き刺さっているが、彼女の真剣な様子に事の大きさを察したバルトが先に折れ譲歩した。

それを見たサーナトリアは、下された指示を念話で市街を巡回している部下へと伝えていく。

「……うん、ありがと。それじゃあ、禁忌の内容とワールドクエストに既に目を通してしている前提で話すね？　——大丈夫？　——よし、まずはエルフの里についての顛末から……」

リエルの口から語られる、事の発端に至った経緯、災禍の始まりの瞬間、そして犠牲者——

「ふうん、あの子がねえ……」

「お前ら魔族を道具扱いしてきた、私が言えた義理じゃないが——彼女のことなど、どうでもいいなんて態度とってみろ。先に星の糧にしてやるよ」

「いいえッ！　滅相ありませんッ」

同胞たる魔族では無いんだからと実に淡白な反応を見せたサーナトリアに、研ぎ澄まされた刃のような殺気を向けるリエル。

極めて個人的な想いや色眼鏡による優劣の差、どれだけの価値を相手に抱いているかの比較にて悲しきかな——罪人の子孫である魔族と、遙か昔に死別した孤児院仲間の面影を宿す少女とでは、そもそも勝負にすら為らないほどの隔絶した鼻肩の差があった。

個人的な心情的にも持ちうる能力的にも、替えの利かない大事な相手だからこそ、ドスの利いた声でふざけた事をぬかした相手を脅すアリエル。

その言葉に籠められた本気度合いを否応無く理解してしまったサーナトリアは、顔を青くし体を震わせながら必死で謝罪の言葉を述べるのであった。

「魔王様……やはり我々魔族は魔王様にとって、ただの道具でしか無かったのですか」

「……ダラドか。そうだよ、効率良く戦乱を呼び起こして火種となる舞台装置。真実など知らなくても魔族だから争わなくちゃならない、魔族なら戦争を起こしても仕方が無い。戦火を広げる理由付けにはこの上ない役者だろう？　魔族なんてものは」

自分が魔王なんて役目に就いた目的も、そんな都合の良い手足を求めての事であり、語るほどの感情など最初っから魔族に抱いていなかったと、秘していた本音をアリエルは晒した。

それを聞いたダラドは、自分の忠義は欠片も届いていなかったのかと、エルフ征伐にも選ばれず置いていかれたそれらの現実を、力無く痛感しながら肩を落とし項垂れた。

その様子を見て、アリエルはポツリと眩きを零した。

「魔族全体には特に何とも思うことは無かった——けど、こんなお前らを滅ぼそうとする虐殺者に忠義を向けてくれた事、感謝するダラド。私が留守中でもお前が領に居れば、魔族は再び反乱などしないだろうと、そんな勝手な期待をしていた。それに改めて感謝を」

鼻を鳴らしながら、ぎこちない礼を返すアリエルに、ダラドは瞠目して息を呑む。

そして意味を解するのと同時に、溢れんばかりの忠誠心と喜びを総身に湛えながら、一言万感の思いを籠めて喉から搾り出した。

「っ——有難き、お言葉です」

「……受け取る資格など、私には無いさ。バルトにサーナトリア、コゴウにも、少なからず感謝はしてるよ。長らく私を支えてくれた事ありがたく思う」

寂しげにぼやく声に、嘘偽りは無い。

散々道具として檻糶雑巾になるほど使い潰す気だった自分が、捧げられた想いに応えてやれる事など何も無いのだと、分かっているからこそアリエルはこれ以上ダラドに言葉を掛けない。

そして話を戻す——

「なんで降りるを選択しちやいけないのかって話だけどね。色々と詳

細は省くけれど未来視スキルのような起こりうる未来を、限定的条件下にて遙か先の未来を知ることの出来る人から、大厄災の結末というものを予測していったんだよ」

ゆっくりと長く一息置いて、煌々と燃える意思を瞳の奥に灯すアリエル。

努めて明るく日常の事を話すかのように、いつもの不敵な笑みで口を開き円卓を挟んで相對する四人へ、この世界と人類が迎えることになる最悪の末路を厳然と告げるのであった。

それを一字一句余さず聞き終えた四人はというと――

「……そんな、馬鹿な」

「ちつとも笑えないわね、まったく」

「ああ神様、オイラはどうすれば……」

「ううむ……まさに人類の抱える弱さの証明であるな。愚かなど一概に言えん宿業か」

あまりに酷く報われない結末を聞かされ、顔を顰める四人。

そんな彼らに向けアリエルは、だからこそ何とかなる為に力を貸して欲しいと頼み込む。

「私なんかに従うのは嫌なんだろうけど、これが最後の命令だ。魔族人族、龍種に魔物……大厄災に立ち向かう為に、種族も怨みも越えて手を貸してくれ。この通り頼む……っ」

円卓に手を突いて深く頭を下げるアリエル。

それに対し、顔を見合わせ四人の間に僅かな煩悶と戸惑いを滲んだ後、バルトが他三人に向けて鷹揚と頷く。

応えるは、苦笑だったり安堵であったり不動の忠誠心であったりと、見事にバラバラだが意見は纏まった。

「魔王様、魔族一同この国難いや世界の危機に、全力で立ち向かわせて頂きたいと思います」

「よっしゃ。その言葉を待っていたよっ！」

バルトの宣言に、満面の笑みで喉を鳴らすアリエル。

そうして繋がる、人族と魔族の協力的体制。

これも、全てはそう――

「「「私たちの手で、未来を掴む為に」「」」」
また一つ、誓いの環は広がり強固なモノへと、確かな形を作り出したのであった。

準備段階 ― シュレインー

――共に付いてきてくれた仲間達が意識を取り戻した後。

ワールドクエストによって現在この世界に迫り来る脅威を認識した俺たちは、フェイの背に乗り大厄災の中心である海の上を飛んでいた。

俺たちがこうして先行している訳は、あんな光景を見せられて居ても立っても居られなかったというのもあるが、何より今世界中へと広がるうとしている魔性の脅威がどのくらいか確かめるためでもあった。

ワールドクエスト2以降で、あの魔性というものが人々を生き物を殺してまわると知った俺は、絶対に防がなければと思ったが同時に手が足りないとも感じていた。

勇者といえども俺は剣を抜けない臆病者で、カティアやユーリにフェイなども一般的な兵士より遥かに強くても、世界観が違うような白さん達には隔絶して劣る。

圧倒的実力を誇る白さん達でも、両の手で数えられるほどの人数しかない。

一般的な兵士が鍛え抜かれたアスリートだとすれば、俺たちは一騎当百な超人に相当する。

そしてユーゴーやソフィアなどはまさに人間兵器、単騎で戦場を支配出来る戦略規模の戦闘力を持っているが、先程言ったように僅かな人数しかないのだ。

そうになると、あのヒュドラみたいな超大型の魔龍から生み出され、放射状に広がっていく小型の魔性を防ぎ止められない箇所が、必ず出てくるはずだ。

つまるところ、戦略規模の人間が一人や二人いたところで、両大陸の海岸線全部をカバー出来る訳が無いという物理的な限界が、事実として聳え立っていた。

戦う力を持たない無辜の人々を守るためには、自分達だけじゃ駄目。

エルフの里で対峙した帝国軍や魔族軍、そのほかの国家や冒険者までもが力を合わせて防衛線を敷かなければ、この大厄災によつてより多くの命が失われる。

その考えについては、魔王であるアリエルさんも同じ意見のようだった。

恐ろしき諸悪の根源だと思つていた魔王があんなに小さな少女だったことも、その願いが世界に縛り付けられた女神を救い出すことだけだったのも、記憶に新しい驚きだ。

だがしかし、ここ最近の出来事は驚愕に次ぐ驚愕の連続で感覚が麻痺してしまつていて、魔王の正体がどうこう程度だと不思議かな大して驚かず、素直にありのままの事実を俺は受け止めるのであった。

話を戻して——アリエルさんはこの問題に対して神言教の協力を仰ぐという考えを告げ、実際にエルフの里を襲撃する際にも裏では彼女たちと協力関係にあつたとなれば、直接話を通すのも可能なのだろう。

神言教との交渉には彼女とギユリエという黒い男性、そして女神その人だというサリエルさん、その三人が向かった。

残つた人達は、皆それぞれ別の目的を持って動き出しており、軍の統率に動いたり、来る戦いに向けて英気を養うなど、各々活動を開始していた。

最も重要な立ち位置にいる白さんも、もう一度集合した時には姿が見えなくなつており、彼女は彼女で何かしらの大事な動きをしているらしいのだが……

各自それらの選択や行動を決める中、俺たちはこうして魔性の強さを確かめるといふ誰かが一度確認すべきだろう役割を申し出て、危険は重々承知で無茶は絶対しないと告げた後に、宇宙船から飛び出し威力偵察に向かつたのだつた。

そうして——陸地が見えなくなるほど沖合へと進んだ俺たちの前に立ち塞がったのは、いったい総数はどれほどいるんだと、数え切れない出来損ないの竜のような魔性の群れ、群れ、群れ——

まるで悪夢のような蝗害じみた魔性の波濤^{はとう}。

黒ずんだ翠色は枯れかけの植物を思わせ、それが空を暗く重苦しく染め上げている。

大群というのは、ただそれだけで恐ろしい。

数え切れないほどの大群が純化した殺意を一斉に向けてくる光景は、直接応戦する前から恐怖を掻き立て戦意が砕け散ってしまいそうになるほどだ。

その群れの中から、突出して我先にと俺たち目掛けて襲い掛かってきた歪な翼竜を、囲まれないうよう距離を取りながら俺たちは迎え討った。

「ジイイイi aアアaアアッ!!」

鋭い牙をむき出し、殺意で濁った眼球を輝かせながら飛翔するそれらを、カティアの火炎魔法やユーリの聖光魔法、フェイのブレスなどで撃ち落としながら迎撃する。

心配だからと俺たちに同行し共に肩を並べている京也も、空間魔法で剣を取り出しては投擲し、群れの奥まで貫通させてから爆発させたリ、右手に持った刀から轟雷を迸らせては、誰よりも多く魔性の数を減らして、フェイが自由に動ける進路を確保していた。

『敵だった時は怖くて仕方なかったけど、味方だと頼もしいわねッ!』
「そいつはどうもッ! 僕だって、シユン達が無茶するのは見過ごせないからねッ!」

フェイと京也が軽口を叩き合いながら、次々と無数の魔性を閃光と雷撃にて蹴散らしては空いた隙間にフェイが飛び込む。

その連携は即席ながら噛み合っており、フェイの動きに合わせて京也が適時援護している形だ。

そして俺は魔法で相手が時折使ってくる弾丸状のブレスを防御しながら、接近してきた小型魔性に鑑定スキルを掛けていた。

それで分かった事とは――

「こいつら、一匹一匹はそこまで強くない。平均ステータスは500前後と、おおよそ中位目前の下位竜って感じの危険度だ。一般兵士でも、数を揃えて相手すれば問題無く勝てる。だけど――」

『その数で圧倒されてんだから、まともなぶつかつたら磨り潰されるでしょうね——はあぁッ!』

俺の眩きに念話で応え、既に何度撃つたか分からないブレスを前方に向けて照射するフェイ。

それによつて数十もの翼竜が閃光に呑み込まれ焼き尽くされるが、その向こうには何度も何度も押し寄せる津波のように、尽きることのない後続が視界を埋め尽くすほど控えていた。

その光景に齒噛みしながら、俺はカティアとユーリにも問う。

「確かに、普通の兵士でも耐え忍ぶことが可能でも、——ジリ貧になるのは明らかですわねッ!」

「こんなのを一千万体倒しきる前に、先に軍も騎士も壊滅しちゃうよっ」

灼炎と光弾が空に軌跡を描きながら飛び、襲来する魔性を片端から叩き落としていく。

「京也は!?!」

「……僕も同意見だ。この大群相手では人族の軍隊だと厳しい戦いになるだろうね。勝てるか勝てないか、ギリギリの強さを攻めている感じだよ」

俺たちの実力でも、この程度の相手なら多少余裕を持って戦闘を継続していられる。

だが、一般的に戦うことを生業とした職業軍人とか騎士でもステータスは400程度で、俺たちみたくステータスが千を越えていたりするのは、それだけで英雄と謳われるのが世間一般での常識なんだ。

ステータス的には兵士などとあまり大きな差は無いが、それでも尽きることのない物量差は勝ち目の無い展開を容易に描き出してしまふ。

「やつぱり……元を絶たなきや駄目かつ」

「ですわね、シユン。でも、そろそろっ、くうっ!」

「これ以上は魔力が持たないよっ」

ひたすら砲撃に集中していたカティアとユーリの顔が、少し苦しげなものとなっていた。

見れば、二人とも魔力が枯渇寸前のようで、これ以上の継戦は無事に引き返せるラインを越えてしまう。

「ああ、分かった。フェイ!!」

『しっかり捕まってなさいよね。全力で飛ばすわよッ!』

「最後に置き土産だ。——消し飛ばせ、若陽ッ!!」

京也が刀に魔力を注ぎ込んだ次瞬、極大の雷光が瞬き大量の魔性を呑み込み焼滅させていった。

あまりの眩さに、一瞬視界が白く染まるほど。

それによつて魔性の動きが一瞬停止して、この状況ではとても大きな空白時間が生まれた。

その隙に俺たちがフェイの身体にしがみ付くのと同時、瞬時に魔性に背を向け反転し、大海上の戦場から高速で離脱していく。

余力を全て速度に変換した逃亡は空を貫く一陣の風となり、残された魔性は俺たちに追いつく事すらままならず吠え立てる事しか出来ない。

そして一瞬意識を向けた背後では、距離がドンドン離れていくというのに、視界に映るは無数の魔性が城壁のように虚空を埋め尽くさんとする光景。

知っている魔物とどれも特徴が噛み合わない歪な翼竜は、万の絶叫を轟かせて逃した獲物を睨みながら飛び交っていた。

脳裏に響く、痛々しい悲鳴で紡がれるレベルアップの通知。

その声が誰のものなのか分かっているからこそ、心は無力感で軋みを上げる。

——背後でドンドンと点描のようになっていく魔性の脅威を強く感じながら、そうして俺たちは当初の目的である情報だけを握り締め、転生者ほか皆が居る宇宙船へと帰還するのであった。

魔性の群れを振り切つて帰還した俺たちは、この宇宙船の操縦室と

も言える場所を目指す。

フエイはこれからも連戦が予想されるからと、人化はせず竜形態のまま甲板で待機するとの事。

なので、通路を早足で進んでいるのは、俺とカティアにユーリと京也の四人だけだ。

そして俺たちが操縦室へ到着すると、そこに居たのはモニターと操作盤に齧り付くエルフの里に軟禁されていた転生者たちと、中央の座席に座る先生とハイリンスさんの姿が。

「——シユン君！」

俺たちの顔を見るや、急いで飛んできた先生。

「ああ、カティアさんにユーリさん、笹島くんも……飛び出していつてから、ずっと心配していたんですよ。——フエイさんは？」

「大丈夫です、外で待機しています。人化するのが手間だと「なるほど」

手に負えないと感じたらすぐに退却するとしても、もしフエイですら逃げ切れない相手だったら危険な行為だったのは間違い無い。

そこは反省すべき点だが、ワールドクエストで確認できる移動速度と強さの気配的なものから、俺たちでも行つて帰つてこれると直感したからこそ確かめに行つただけけど、それを話したらまたお説教が始まりそうなので、ぐつと言葉を飲み込んだ。

「オギは何処に？」

この場に居るはずの、友達の名を上げる。

すると俺たちが入室した時から動いていたのか、すぐ近くから声が聞こえた。

「ここに居るよ。んで、誰に連絡するんだい？」

「勿論、アリエルさんと……ダステイン教皇にもだ」

教えてもらったオギのユニークスキル。

それは面識のある相手なら、何時でも何処でも誰とでも念話による通信会話が可能な、無限通話というスキルだった。

距離の制約も無く、エルフの里内部から連絡可能なほど障害や妨害も無視し、一度に多人数での念話を繋げられるほどの、念話スキルの

完全上位互換な能力を持っていたのだ。

その能力は、まさにこういう時に真価を發揮するタイプの能力に他ならない――

「――もしもし、聞こえますか？ シュレインです」

オギと念話が繋がった感覚の後、さらに複数の人数が同じ念話の環へと入った感じがした。

少し間を置いてから話し始めれば、俺の呼び掛けに答える声が。

『こちら、アリエル。聞こえてるよ勇者くん』

『……ダステインです。連絡してきたという事は、何か掴んだのですか？』

脳裏に響くは、アリエルさんとダステイン教皇の声。

教皇とは幼い頃に神言教の洗礼にて会った事があり、その沁み入るような静かな声に優しげな好々爺然とした顔が思い浮かぶのだった。

そして、どうやらこの念話には、他にも先生も接続しているらしい。

ただ口を挟む気は無いようで最初の挨拶以降、無言のままだ。

「先程、小型の魔性について鑑定と実際に戦闘を試みて確認してきました。それで得られた情報と所感なのですが――」

俺はアリエルさんとダステイン教皇に、自分達が掴んだ情報を伝えていく。

それを相槌挟みながら深く耳を傾けた二人はというと――

『やっぱり、そんな感じかあー』

『休む間も無く連戦を強いられる事が予想されるとなると、全ての国が協力し交代で当たっても、数日で限界を迎えるでしょうな』

現在、神言教が主導して各国に防衛線への参加協力と呼び掛けているらしいが、それぞれ自国の防衛にも兵を残したい考えもあり、なかなか構築が進んでいないらしい。

そうなる则ち一日持つかどうかも怪しいらしく、人族や魔族の兵士達だけでは、この大厄災に立ち向かうには厳しい状況と言えるのであった。

『ん？ ……………ギユリエから伝えて欲しいって。今、世界各地に生息している龍種たちが集まるよう号令掛けたって。既に水龍たちは

海上にて戦闘を開始しているらしいよ』

念話の向こう側でアリエルさんが誰かと会話している感じのあと告げられたのは、龍の神様だというギユリエさんが、配下である龍種たちを動かしたという事実。

魔物の中でも最上位に君臨する龍とは、基本的に人類とは比べ物にならない強さを持っており、長く生きた古龍と呼ばれる存在ともなると神話級の魔物であり、意思ある災害そのものだ。

それが今、味方となった。

防衛線の戦力は、これで飛躍的に上昇した事だろう。

「っ——ありがとうございます。ギユリエさんにも、そう伝えてください」

これで、より多くの命が救われる。

力無き俺だからこそ、命を張って戦ってくれる龍たちとその恩には、真摯な感謝を送った。

『であれば、軍が展開しにくい山間部や僻地などは、黒龍様にお任せしても宜しいですか？』

『ちよつと待ってね………了解したって』

『寛大なご配慮に、感謝を』

そうして次々と纏まっていく対応策。

国も所属も種族も願いや目的さえ異としていた者達が、あと一時間もしない内に火蓋を切られる大厄災に向けて、一つの目標を掲げて突き進む。

ああ、これこそありふれた人間が掴むべき答えだと、俺の胸に染み込んでいくこの想い。

理不尽に激昂するのでもない、喪失に涙を流すだけでは無い——それもまた、往々にして訪れてしまう運命のようなものだから。

重要なのは、どう向き合うか。

地を這うしか力を持たない、何処にでもいる人間として生きていく為には、どうすれば良い？

その答えは、手を取り合うこと。

考えや意見の異なる相手でも、一つになろうとする寛容さこそが俺

の答えだと、確かな熱と共に胸の奥底で燦然たる光を継いでいた。
俺は、勇者シュレインだ。

兄様とは違う——だからこそ掲げる理想もまた違ってくる。

——夢だつていい。

実現不可能な戯言だと笑われてもいい。けど目指す事だけはして
良い筈だ。

平和でみんなが笑って暮らせる世界。僕はそれを追い続ける。死
ぬまでね。

これが兄様の理想なら、俺の掲げる理想は——争う必要の無い世界
だ。

過ぎたる力など、要らない。

ましてや慈悲というスキルだなんて蘇生なんて力など、人を狂わせ
オカシクさせるだけの、弱くちっぽけな人間が手に負える力なんか
じゃ絶対無い。

この大厄災に、俺が懸ける願いは、それ唯一つ。

少なくとも、贖罪を義務として求められるなど断じてあつてはなら
ないから。

例え、それが自分を支え続けた力との決別だとしても。

今まで築いた己の能力全てを、永劫捨て去る選択であろうとも。

構わないと、誇りを胸に。

後悔はない。

鍛えてきた一切合切を対価に、自分はただの人間であることを取っ
たのだから。

生温い平和な前世という過去に囚われ、争いと死の絶えない今世と
いうものを知り、そのどちらとも胸の中に溶け込んでいるものだから
——そんな俺だからこそ描ける未来がある。

争いの無い世界、俺はそのために進み続ける。

終わった後でも人は争うのだと予感しながらも、歩みを止めない何
度だつて答えを探そう。

見つけたいんだ。

傷を負うことなく、死ぬこともなく、誰もが胸を張りながら明日を

目指せる生き方を。

だって誰かが死ぬのは、当たり前前に嫌で哀しいじゃないか。

その為にも、まずは――

こんな世界こんな仕組み、俺たちにはもう必要無いんだって――皆
の手で証明したいんだ！

準備段階 — シュレイン2 —

『……いやはや、燃えてるねえ。こうも若々しい熱血見せられると、なんだか無性に自分が恥ずかしく思えてくるよ』

『同感ですな。思えば、我々は長く生き過ぎたのでしよう。決意や覚悟は重くとも、惰性で続けてきたと言われたら否定出来ませんまい。今の彼のような自分を燃やし尽くすほどの情熱など、とうに失って久しい感情でした』

そこで、ふと——脳内で感嘆する二つの声が。

「えっあつ……すみません、もしかして聞こえていましたか？」

『懸ける願いは、争う必要の無い世界だつてどこからかな。念話なんだから、強く思うと口に出さなくても伝わっちゃうからね』

おおう……なんだろう、俺自身も無性に恥ずかしくなってきたのですが。

こんな未熟な青い願い、お二人からすれば失笑もので——穴があつたら入りたい。

ていうかオギ、お前までそんな驚いた顔するなよ。

目を逸らすな、口笛全然吹けてないぞ。

先生も猫みみたいな微笑を浮かべて優しげな目で見るの止めて下さい……

『いえいえ、実に良き願いですよ勇者シュレイン。青臭くて結構、理想に進まんとする想いは何であれ立派です。どうして馬鹿に出来ましようか』

しかしそんな心境さえをも見透かしているのか、ダステイン教皇は未熟な若人を導くかのように温かく説いた。

『願わくば、折れること無く、されど折り合いをつけて。願い一辺倒ですと、私みたいな破綻者になつてしまいますゆえ。先達からのご忠告です』

決して自分のようにはなるなど、深い経験則と重たい卑下を感じさせる言葉。

しかし、俺は——

「ありがとうございます。ですがダステイン教皇、あなたは素晴らしい人だと、短いながらも俺はそう感じました。ですから尊敬させて下さい。あなたが転生を幾度も重ねても、人族を守る為に戦い続けたのだと。俺にはきつと耐えられない苦痛と人生を、何度も何度も乗り越えてきた凄い人なんだと、誇らせて下さい」

ダステイン教皇の真実。

それを知った今では、どうして彼のことを低く見る事など出来ようか。

立派な人だ——俺なんかよりもずっと、強く、気高く、研ぎ澄まされて美しい。

『……それは、アリエル殿からですか？』

「えつと……はい」

『何か問題でも？ ダステイン？』

『いえ、構いますまい。ダステインの名は今代にて終わり。そういう事なのですから——後の未来を頼みましたよ、若き勇者よ』

その言葉には万感の思いが籠められているようで、だからこそ胸を打った。

今、俺は託されたのだと——

「はいっ!!」

力強く、堂々と答える。

迷いや煩悶だって、完全に消えちやいない。

託された重みだって、全部受け止めきれた訳じゃない。

けど、それでいい——それで良いんだよ。

「だってそれが、人間だから」

そう呟いた言葉は、俺の中に宿った世界の真理だから。

一人では苦難に立ち向かえないのなら、みんなの手を借りて——

その勇気を見せるために、俺は前を向こう。

そして、細部を詰める話し合いが数度続いた後に、二人とも結論としたのは同じ答え。

『押し寄せてくる魔性を食い止めるのは、それで良いとして』

『やはり、問題となるのはアレですな』

『人々が絶望して、大多数が降りるを選択するその前に。どうかして大厄災を終わらせなければならぬって事だね』

『ですな』

「あの、それってどういう……」

俺の知らない共通認識で語られるアレとやらに、疑問を挟む。

とても嫌な予感がしつつも、聞き逃してはならない真実だと感じるから。

『ああ、そういえば勇者くんが飛び出していった後に、推論が纏まったんだっけ。なら、まだ知らないか』

複雑な想いがあるのか、一呼吸挟んで告げられた起こりうる可能性が最も高い無慈悲な結末。

それは――

『――このままでは、降りるを選んだ人類が大半を占めた結果、システムに繋がる全人類が一斉に即死する羽目になるって事を、ね』

終焉に至る運命が訪れる。

易きに流れた人々の選択が、全てを巻き込みながら自らの破滅を呼んでしまうなどという、最悪極まる展開を、最古の魔王は吐き捨てるかのように告げるのであった。

「システムに繋がる全人類が一斉に即死するって……どういふ事ですか、アリエルさん！」

聞き捨てならない情報を前に、発する言葉が炎のように熱を帯びる。

怒鳴るような声が出てしまい他の転生者たちが何事かとこちらを向くが、向こうで転生者たちに何かを教えているハイリンスさんの一声で、彼らは操作盤へと視線を戻すのだった。

『なんとなく誰から齎されたのか、予想はついているでしょう？ これはそういう話らしいから、これ以上の詮索はしないよう念頭に置いててね』

アリエルさんから、諭すように釘を刺される。

そこで俺は、近くににいるオカ先生へと視線を向けた。

俺の視線に先生は、首肯もしなければ首を振ることも無く、ただ瞑目して無言で佇むだけ。

——たしか、俺たちに対してナニ力を隠していて、それを言えない理由があったとか。

もしかしたら、ソレ関係なのか？

「ですが……どうして、話しちゃ駄目なものじゃ無かったのですか？」
疑問に思う俺に、アリエルさんは飄々とした態度のまま軽い口振りで答えた。

『私は彼女に対して、何一つ質問しちやいないよ。ただ彼女が、絶対に降りるを選択してはいけませんって血相を変えて必死に言ってたのを拡大解釈しただけだし』

つまりは、アリエルさんの勝手な推論。

ただの予想であり、先生の口から直接聞いた事では無いと、彼女はそう嘯いた。

『うん、だからこれはあくまで私の仮説。降りるを選んじや駄目って話を最大限膨らませた結果、私が思う最悪の展開つてのを予想したに過ぎない。だから、もしかしたら此処まで酷くないのかも知れないし、逆にもっと酷いのかもね』

徐々に俺の中でも、アリエルさんの発言の意図が察せられていく。
しかしそう簡単に馬鹿にしていい話では無いと、彼女は声を固くして続きを述べた。

『ちなみにこれは、白ちゃんから裏付けとってるし、システムの管理者であるギユリエも認めてる事だからね。つまりは彼女がそういった類のスキルを持っていて、詳細は誰にも言えずとも確かなナニ力を知っている彼女の発言や行動には必ず意味があるのだと、そう保障されているようなもんだよ』

システムに精通した二人がそう言っているのなら、その情報の確度は高いという事なのだろう。

……そういえば、オカ先生はこの広い世界から転生者を幼い頃から見つけ出していたんだよな。

であるなら、もしかしたら俺たちの情報を知る事が出来るスキル。

それも、強引にでも保護を推し進めたり、助けられなかったと重すぎる責任すらも感じていたとなると、現在だけじゃなく未来のことさえも——俺たちが死亡する未来、そういう事か。

「分かりました——降りるを選んだ結果、俺たちも巻き込みながら最悪の結果になると、そういう事で納得します。これ以上は何も言いません」

『それを少しでも阻止するために、人々が降りるを選ばないように神言教と魔族領では考えを誘導しているんだけどね。——センセイ？』
アリエルさんは、同じ念話の環に繋がっているオカ先生へと問い掛けた。

その呼び掛けに先生は静かに頷くと、沈黙を破って会話に参加するのであった。

「はい——まだ、駄目です」

『やはり、誘導するにしても限界がありますか。ここに来て神言教の信頼が失われかけているのが足枷となるとは……』

ダステイン教皇が、嘆くような声で苦々しく吐息を搾り出した。

事の次第は、全人類が禁忌をインストールした事によるもの。

それによって神言教に猜疑的な人々がちらほら現れ始め、降りるの選択を思いとどまらせるよう説諭せつゆしようにも反発の声が上がり上手く進んでいないという話だった。

禁忌に意識を向けて確認してみれば、降りるを選んだ人の割合は一割を超えた値だ。

その数値は、今も止まらず加速している。

これから自らの命を奪おうとしてくる悍ましい怪物の姿が容易に見る事の出来る現状。

その恐怖に打ち勝つのは並大抵のものでは無いのだから、これが普通であり弱者なら当然の選択だと分かってしまうのだから、仕方無くもなんだか哀しい。

「なら、どうすればッ」

『方法なら、他にもあるよ。ほらワールドクエストにも書かれている事じゃないか』

「そうか——降りるの結末に進む前に、別の条件を達成すれば」
『そういうことっ！』

弾むような声で、俺が出した解答を肯定するアリエルさん。
「どうやら、そういう方向性で間違い無いようだ。」

「ですが何をするつもりなんですか？ 魔神本体を弑逆するのは苔森さんを殺すのと同義ですし、一千万体なんて桁違いの数を倒し切る前に——まさか」

思い当たった結論に、俺は息を呑む。

ああつまり——

『そのまさかだよ。翠魔レルネーを倒す、それ以外に道は無い。だからさ勇者くん——その力を、勇者剣を手に、立ち向かって欲しいんだ』
腰に吊るされた重みが、更に増したような気がした。

ユリウス兄様からレストン兄様へ、そして俺へと渡ってきたこの剣が、今この状況で最も重要な鍵となるのだと、それが分かったからこそ無意識に身体が強張ってしまう。

「なぜ……俺なんです？ それこそユーゴーやソフィアに、白さんなら」

『ワールドクエストの注意事項を呼んでみて。理由が分かるから』
「——これは」

そうして確認する注意事項。

「どうやらこれは、特定の称号を持っているか支配者スキルを獲得していなければ閲覧出来ない、制限の掛けられた情報のようだった。」

決められた手続きに従って封印を解き、内容に目を通せば——
『翠魔レルネー、および翠魔ケルベロス、翠魔ステュクス・カロン、翠魔ニユクスは、能力として神特効を持つ。なお小型翠魔の方は、神特効を持たない。』

この原理は勇者による魔王特効と同じであり、神格を相手にした場合のみ自動的にシステムからエネルギーを引き出して能力が上昇し、課せられた制約が全て解除される。

また、翠魔レルネーが神格に撃破された場合、翠魔レルネーと従属翠魔は再度復活し、大厄災は最終フェーズへと移行する。

これらの条件は、神格による一方的な早期解決を禁止するための措置である。

人の罪業は、人が清算すべきであり、神は手助け以上の事はしては為らない。

ゆえに大厄災に立ち向かえる資格を持つのは、全人類とその星にて生きる生命のみ。

人間は自らの力によって——己が勝利と未来を掴んでみせろ。

神には、神のための戦場がある。

深淵のさらに奥にて私は待つ、そう白き神にお伝え下さい——上位管理者、邪神Dより』

「……ははっ、何だよこれ」

『本当、フザケていると思えないよねえ。ちなみに復習がてら補足すると——邪神Dってのはシステムの設計者であり、白ちゃんやコケちゃん、ギユリエヤサリエル様すら超える、特級の上位存在って話だよ。私らの想像もつかないような格の違う化物だとか』

勿論、分かっている。

俺たち転生者をこちらの世界へ転生させてくれた相手らしいが、元を正せばその邪神Dとやらのゴタゴタに俺たちは巻き込まれただけで、その異名が示す通り決して善き存在という訳では無いのだろう。

『だから、敵として対峙しても私らでは相手にならないし、ご指名は白ちゃんだけみたいだしね。私らはDについて考えるより先に、大厄災をなんとかしなくちゃいけないんだよ』

「それは……はい、その通りですね」

そもその話だが、システムの設計者に対して、システムの恩恵があつて初めて戦える俺たちが抗って何が出来るという。

この星を生かしているのもシステムであり、その機能を自由にできる存在となれば、星も俺たちさえも生かすも殺すも胸三寸。

実力でなんとかなる相手じゃないし、命綱を握られていては反抗の芽すら潰されている。

『それで話を戻すけれど、翠魔レルネーを倒すにあたって必要なのは

確実に消し飛ばせる火力なんだよ。隠しても仕方無いから言うけど、今の私は弱体化して以前のように戦えない。だからアレを倒せるほどの確実な力は、憤怒込みのラーズくんか君の勇者剣、この二つしか無い』

「ラーズ……ですか？」

それは誰なのかと漏れた呟きに、ピクリと反応する京也。

——いや、まさかな？

『おや、知らない？ そっか改めて自己紹介した訳でも無いしね。サジマキョウヤ君ことラーズだよ。こっちでの新しい名つてとこだね』

思わず、京也のほうを見てしまう。

その視線に、バツの悪そうな顔で苦笑している事から、事実なのだと理解してしまった。

『アリエル殿、先程から話が脱線しすぎていますぞ』

『おっと、ごめんよっ！ つまりは君たち二人、そのどちらかが翠魔レルネーの核を破壊すれば、私たちの勝利。敗北条件は、倒しきる前に降りるの結末に進むこと』

『そして二人を万全な状態で送り届ける為にも、三体の翠魔を相手にする人も必要です。そちらはアリエル殿と相談した結果、人選が決まっております』

その人選に、さつき俺が挙げたユーゴーやソフィアさんなどが回るらしい。

そしてアリエルさんも、古龍と一緒に相性の良さそうな相手と戦う予定だとか。

ダスティン教皇は変わらず神言教を限界まで動かして、人心を纏め上げ少しでも降りるの結末へ進まないよう、時間稼ぎに尽力することだ。

『危険は一番大きい役回りだと思う。だから無理強いはしないつもり。やるかやらないかは自分で決めて』

『龍種の長たちもおりますゆえ。総力戦で事に当たれば、犠牲は多くとも勝てるやも知れませぬ。ですので、無理ならば無理と、おっ

しやっても構いません』

アリエルさんとダステイン教皇は、最終的に決めるのは自分の意志だと告げる。

正直、怖い——怖くて堪らない。

あの巨大過ぎる化物を相手に、俺なんかでは虫に刺される痛痒すら与えられないだろう。

ほんの身じろぎ一つで、無惨な押し花か紅い花火となるのが関の山だ。

だが、俺の力——というよりは勇者と勇者剣の力が必要であるのなら。

こんな俺にも出来ることがあるのなら、必要とされているのなら。

たとえ俺一人では辿り着く前に死んでしまうような存在に、世界のため立ち向かわなければならぬと言ふのなら。

なら、俺が取るべき選択は——

ちらりと、傍に居る仲間を見て、決心した。

「——すみません。ほんの少しだけ、仲間と相談してもよろしいですか？」

何処までも人間らしく、俺は誰かを頼ろう。

恥だとも無様だとも思わない。

それが道連れまがいの行為でも、たった一人では人間は戦えないのだから。

準備段階 — シュレイン3 —

場所を移し、宇宙船の格納庫といった無骨で広々とした空間にて。甲板から直接入って来れるこの場所には、俺のほかにカティアやユーリ、それと京也ことラースと竜形態のままのフェイの五人が居た。

そこで俺は、アリエルさん達から知り得た情報を全員に共有し、意見を求めた……のだが。

『へえーふうん、ラースねえ?! 確かそれって怒りって意味じゃなかった? ねえねえ笹島くん自分の名前にアイタタたあつて名前付けたのなんで? ねえ、何でよ?!』

「……前世の名前も今世の名前も、名乗るのに相応しく無いと思ってるからラースって名付けただけだよ。そんなに深い意味や理由は無い」

フェイが、ラースという名前についてニヤニヤとした口調で弄り倒す。

そのからかいに、京也は不機嫌そうな顔で理由を答えていた。
ラース、か……京也には合っていない感じがするな。

俺は、京也は怒りをコントロール出来る奴だと思うから。

前世での京也は、仮面だとしても表面上怒っているところは一切見たことが無かった。

そんな京也が怒り狂うほどの過去の傷——その怒りが必要なくなるまで、俺はお前の事を支えていこうと改めて強く思った……まあ何をしてもやれるのか判然つかないけどな。

『ほほう、今世の名前もあると。じゃあ、そっちは?』

「……………ラズラズ」

『——ツ——くっ——似合わっ——ツ』

ツボに入ったのか、巨体をくねらせながら床面をバシバシ叩くフェイ。

竜の姿のままなので、手を打ち付けるたびに地震のように周囲が揺れて危ないので注意する。

「フエイ、そこまでだ。それと人の名前で誂うなよ。今世での京也の両親が付けてくれた、大事な名前だろうに」

『——う。……ごめん悪かったわ、謝罪する』

俺の言葉で冷や水を浴びせられたかのように冷静さを取り戻して、気不味げに京也へと深く頭を下げるフエイ。

その謝罪に京也は大きく嘆息した後、言葉短く許すと告げた。

「ラズラズ……たしか、ゴブリン族の命名規則はそんな感じでしたわよね」

「そうだよ、遙か昔のゴブリンの英雄にあやかって、音を二度重ねるんだ。ああそれと、ゴブリンといってもこの世界のゴブリンは——」

「高潔な武士気質みたいなんだってね。物語にもなってるから色んな意味で驚いたよ」

『いつだったか、シユンが野外活動でゴブリンと死闘するハメになった事もあったわねー』

いわゆる地球上の創作に出てくるゴブリンとは全くの別物。

山奥とかで小さな村を作り、狩猟と農耕の自給自足の生活を営む修験者のようで——あのとときは様々な不幸が重なって流されるがまま戦闘が勃発することになり、マジで死ぬかと思った。

なんで戦闘中に覚醒を起こして、技のキレが跳ね上がりステータス差を埋めてくるんだよ。

まるでバトル物の主人公のように、色々と理不尽な存在だった。

結局、決着は付かずじやむやに終わったけど、あれはあれで良かったと今でも思う。

そのまま続行していたら身命を賭け鎬を削り合い、どちらかが死ぬまで終わらなかつただろう。

……って、今はこんな話している時じゃないだろ。

「親睦も大事だけどそれは後にとっておこう。大事なのは、これからどうするかって事。俺たちの選択が、この世界の未来を決めるんだから」

既に大まかな事情と裏を明かして、アリエルさん達が語った結論は伝え終えている。

この勇者剣か、全力の京也でなければ、翠魔レルネーに対抗できない。

そして、翠魔レルネーをどうにかしなければ全人類が減ぶとなれば、俺自身としては立ち向かうことに異存はない。

しかしだ——俺一人では辿り着けやしないのだから、仲間みんなの意志を確かめて協力を願わなければ、始まりにも立てない。

だからこそ、こうして誠実に全てを明かし、真摯に頼み込んでいる訳だが、なんだか俺だけ一人カラ回っている感じがするのは何故だ？

「何故って……どうして私らが断ると思ったのよ、シユン」

「そんなの今更です。そもそも、嫌だったら王国の時から一緒に付いてきたりしないよ」

『そうそうー。泣き虫でヘタレな勇者様は、アタシらに素直に支えられなさいって』

カティア、ユーリ、フェイは、三者三様の言葉と雰囲気では何処までも力を貸すと肯定していた。

その温かな心が胸の奥へと染み入り、確かな絆となって光を灯す。

「京也は……」

「シユンに言われずとも、僕は行くつもりだったさ。けどまあ、可能性は一つでも多いほうが良いからね。——行こうか、親友^{シユン}」

眼前に立つ穏やかな顔を浮かべた親友に——俺は笑みで返した。

「ああ、行こう！^{キョウヤ} 親友！俺たちの未来の為に!!」

掲げられた拳を、力強く打ち合わせる。

なんだか、これが初めて京也と心から分かり合えたような、そんな誇らしさと昂揚感に満ちた、むず痒くも嬉しい友情の確かめ合いだった。

「——みんな、一緒に未来を勝ち取るぞツ!!」

「!!」

俺の掛け声に、響くような声で一斉に応えるみんな。

心なしか、とても温かい。

さつきまでの骨の髄まで凍えるような寒さは、もう何処にも感じら

れなかった。

『なら、これからに向けて最後の準備つてとこね』

結論は出たと、フェイが次の話題へと流れを変える。

それを受けてカティアとユーリは、顔を見合わせて静かに頷き合う。

「うん、そうですわね……このままですとフェイや京也はともかく、私たちは足手まといになってしまいますから」

「ならカティアさん——今こそ私たちに出来ることを」

「ですわね。ユーリはそっち、私はこっちで」

「どんな効果でも、恨みっこなし。得た力で全力を尽くすこと」

お互いにしか分からない何かを交わし合い数秒後、二人は無言のまま大きく首肯した。

そして更にユーリは俺の手を取り、両手で包み込むように握った。

「ユーリ……？」

「神言教の文献にあったんだけどね。聖女が真の意味で認められる為には、勇者の称号を持つ人と儀式する必要があるの。さあシユン君、汝を我が聖女に任ずる——そう言つて？」

「えっと……汝を我が聖女に任ずる？——うわっ!」

そう言つた途端、俺とユーリの間で湧き上がる光の粒子。

それは鎖のように絡み合い、幻想的でありながらも絶対の楔のように俺たちを結び合う繋がり生まれたような感じがした。

何となくだが、これはフェイと交わした契約とも似ている。

お互いの状態が分かるというか、無形の通信回線が二人を結んでいくようだった。

そこから伝わってくるのは……胸の高鳴り？

「あっ——これちよつと恥ずかしいかも。慣れないと余計な事まで伝わりそうだね」

「あ、ああ……本当に合っているのか、これ？ いや確かに何か起きた訳だけどさ」

何処となくお互い気まずい雰囲気になるが、それを横から大きな咳払いが聞こえた事で、空気は一蹴されて霧散した。

「でしたら、私たちを鑑定してみれば、どんな力を得たのか分かりますわ」

そうカティアが言うので、俺は二人のことを鑑定してみた。

するとそこには、見慣れないスキルと称号が――

カティアの方にあつたのは《純潔》というスキル。

その効果は、絶対的な結界能力。その防御性能は神龍結界をも越えるであつた。

さらに称号ともなると――

《純潔の支配者：取得スキル「腐蝕無効」「親愛」：取得条件：「純潔」の獲得：効果：抵抗が大幅上昇。防御系、耐性系スキルの熟練度に＋補正。支配者階級特権を獲得：説明：純潔を支配せしものに贈られる称号》

「凄いな……」

「でしょう？ 大当たりですわ。これなら盾役として、シユン達を守ることが出来ます」

そして、ユーリの方はもつと凄かつた。

《勤勉》という指定したスキル一つだけを超強化するスキルと、称号で得たらしき複数の強力なスキルが新たに並んでいた。

《勤勉の支配者：取得スキル「思考超加速LV10」「真摯」：取得条件：「勤勉」の獲得：効果：MP、SP（赤）、抵抗の各能力上昇。精神系スキルの熟練度に＋補正。支配者階級特権を獲得：説明：勤勉を支配せしものに贈られる称号》

《聖女：取得スキル「奇跡魔法LV1」「勇者LV1」：取得条件：勇者と誓いを交わした癒し手であること：効果：治療の効果が大幅に上昇する：説明：勇者に寄り添い世界を救おうとする者に贈られる称号》
「なんか、もう……言葉に出来ないな。俺要らないんじゃないか？」
「そんな事無いってば。勇者剣を使えるのはシユン君だけなんですよ？ なら私は、どんな怪我でも必ず治してみせるよ。それが勇者を支える聖女のあるべき役割なら」

二人が獲得した、七美德の名を冠する支配者スキル。

これらのスキルを得ることが出来たのは、先程の翠魔との戦闘に

よってレベルアップを果たしていたからこそ、スキルポイントに余裕が生まれて支配者スキルの獲得に至ったのだという。

なら俺はと考えた時——浮かんだのは、慈悲を獲得したときに合わせて得たスキル。

その名を改めて見て、思わず苦笑が漏れた。

——そっか、俺の答えは最初から此処にあったのか。

『はああ……ならアタシもやるしかないわよね。シユンその袋よこしなさい』

カティアとユーリの様子を見てフェイは何かを決意したかと思うと、俺が持つ空納が付与された革袋を大きな鋭い爪で指差した。

「え？ ああ……」

『ええつと……前に大迷宮で見た時には、たしか……感覚に従って……あつたわ、これね』

そのままフェイへ手渡すと、器用に爪で掴みながら中身をひっくり返した。

その中から、ある朱い液体が入った小瓶を取り出した。

つて——確かそれはっ！

「待て、フェイ。それは下手に使えば死ぬかもしれない危険なポーションで——」

『ごくん』

制止する間も無くフェイは、瓶ごとその朱い液体——ネクタルを飲み干してしまった。

ネクタルの効果は、一時的な不死性と神の如き力を得ること。

だけど資格無き者が飲めば待っているのは死なんていう、恐ろしい代償も持ち合わせていた実質使用不可能なポーションであった。

それを、フェイが躊躇すること無く飲んだということ。

「大丈夫なのか、フェイ!？」

『アタシの直感が今これを使えって言ったのよ——お、おお??』

あっ、ゴメン少し眠るわ……できる、だけ……早く起きる、から……』

そう最後に言い残すや否や、フェイの身体から生えるように白桜色

の結晶が、隙間無く覆い尽くしていく。

増え続ける結晶は、この広々とした格納庫を埋め尽くすかのよう
にドンドン膨れ上がっていき、やがて天井スレスレと格納庫の半分を占
める大きさにまで成長して、ようやく膨張を停止するのであった。

以前にも、似たような事があったのを憶えている。

これが進化の為の待機状態だと分かっているても何が出来る訳でも
なく、その光景を俺たちは呆然と見詰めるしかなくて――

――時同じく。

フェイルーンが神蜜を飲み込んだのと同じタイミングで、二人の神
格は脳裏に響いた囁きに対応を求められていた。

「なんだと？ 新たに龍へと昇格した者がいるだと？ しかしこれは
……」

システムの構造的に、龍種は全て黒き龍神の眷属として識別され、
彼の元に通知が伝達される。

そして、システムより求められるのは――名付けの儀。

「地竜に生まれた転生者の子か……しかし既に名前があるので、な
らば――命名、オスト」

龍神は、かつての同胞の名を記憶から引つ張り出し、美しき純白の
龍鱗を持っていた龍から名を与えた。

名付けによって、眷属としての繋がりを確定させる為でもあるが、
これを行う事により正式に龍として進化が始まるのだ。

――さらにそれは、今システムに囚われている少女にも届き。

魔術陣に磔にされ意識が殆ど無くとも、白竜が進化の際に取り込ん
だエネルギーの質に反応して無明へと堕ちた意識に僅かな光が戻る。

何故なら神蜜ネクターに宿るエネルギーとは、彼女が神に至る時に眷属に流
してなお溢れた、材料に縁があるというだけで濃縮されてポーシヨン
に宿ったという、彼女と同質の力の結晶なのだから。

そのほんの僅かに灯った光が、フェイルーンの進化をさらに上位の存在へと至れるよう、強烈に後押しをする。

生命を滅ぼすために前もってシステムに大量に注がれたエネルギー、それさえも逆に利用して、翠の乙女は白竜を神に近き存在へと、強くより強く進化させるのであった。

「……承認。——進化プロセスに介入。実行：超越進化、対象：フェイルーンオスト。記録参照、命名——オウエイシス。——進化先を、光龍フェイルーンオストオウエイシスに変更します。最優先処理として、超越進化を実行開始」

システムが光り輝き、魔術が唸りを上げる。

これにより、取るに足らぬちっほけな竜は、最も神に近き光を統べる気高き龍へと新生する。

システムに記録された、名付けに籠められた想いを参照して彼女に新たな名前が与えられた。

その名は、白き月と砂漠の泉。

生まれたばかりの地竜に名付けた少年は、とあるゲームに出てきた地名から名前をつけた。

何処までも続く砂漠の世界。

その中心にはオアシスがあり、幻想的な夜景は砂漠の中にひっそりと存在する楽園とも。

「……………お願い、どうか」

——世界を壊してしまう前に、止めてほしい。

生命の無い、渴いた星になんてさせないで。

そして、始まる龍への新生——

本来ならば急激な進化は、フェイルーンの身体も魂にも多大な負荷を与えてしまう。

魔物の進化が段階を踏んで上位種になっていくのも、そのときそのときに合わせた器と魂に昇華させていかなければ、肉体と魂の力のバランスが崩れて不具合を起こすからだ。

その末路は即死ならまだ優しい方で、魂の崩壊すらもありうる。

収まらぬ過ぎた力も、中身の足りぬ大器も、総じて均整を欠けばただただ壊れ落ちるのみ。

しかしその齟齬をシステムに囚われている神の持つ力、魂に特化した性質によって適時修正され引き上げられ強引な後押しを受けながら、白き龍は進化の階段を恐ろしい速度で駆け昇っていく。

——その力は、システムの恩恵から外れる一歩手前まで。

——その体躯は、優美に天を泳ぐ白光の大河のように。

——その魂は、真なる龍へと至れる資格を得るほどに。

此処に、新たなる超越者が一人。

光龍フェイローンオストオウエイシス——二柱の祝福を受け、新生を果たすのであった。

準備段階 ―ギユリエ・サリエル―

五人の男女が、一人の黒き男へと跪く。

筋骨隆々な半裸の大男、如何にも破落戸ゴロツキのような粗野な風体の男、モヒカンみたいな髪型で痩せぎすの青年、気怠げな雰囲気纏う美女、中性的で胡散臭い笑みを貼り付けた性別不詳な人物。

外見も受ける印象もバラバラで、統一性など欠片も無いように見える彼らは、人化した古龍。

主たる龍神より長きに渡り世界の守護を賜ってきた、太古から生きる龍の長達であった。

――火龍グエン、雷龍ゴーク、風龍ヒュバン、水龍ニア、闇龍レイセ。

それが、彼ら彼女らの名である。

この場には居ないが他にも古龍と呼ばれる存在はおり、水龍イエナは支配領域たる海にて翠魔と先立って交戦を開始しており、光龍ビヤクは命たる勇者剣の守護にてシュレインと共に。

エルロー大迷宮を守護する地龍ガキアという長もいたが、かの龍は十数年前に逝去しており後任となりえる存在も軒並み亡くなっていたので、現在地龍の長は空位でありこの場には居なかった。

「急な召集に応じてくれたこと、感謝する」

黒き男、ギユリエティストイエスの労いの声が静かに響く。

継ぎ目の見当たらずに灰白色の石材で床面を覆われた不可思議な空間にて、龍神とその眷属たちは一堂に会していた。

「はっ、いいえ。主殿の命とあらば、直ぐに馳せ参じるものでございます」

龍種の長、その中から半裸の大男火龍グエンが口を開き、筋肉で覆われた巨軀を窮屈そうに丸めながら、彼ら全員を代表して答える。

その構図は、上位者と下位者。

それを明確に身体と態度で示しており、彼らの間ではそれがごくごく自然の事であるかのような厳粛な空気が流れていた。

「うむ、事の次第は大まかには理解しておるな？ これよりお前達に

は、部下を率いて防衛線構築にあたってもらう。大迷宮まで距離が遠い領域には即席の転移陣を敷く。よいなニアア？」

「ご配慮感謝しますのお。我も氷龍らも、遠路はるばる飛び続けるのはちと大変でありますゆえ。戦の前に疲労困憊では、お役に立つどころの話ではありませんからのお」

袖で口元を隠しながら、カラカラと含み笑う氷龍の長ニアア。

雪国らしい意匠と和風テイストな要素がミックスした、雅趣な衣服をその身に纏いながら嘯く姿は、どこか花街の女主人を連想させるようである。

「ひゃっは、腹黒その二がよく言うぜ！ 本当は動くのがメンドーなだけだろう？ そう言うのをニアトって呼ぶんだぜ？ おっと、もしや太って飛べなくなっただんじゃねーの？」

「ほほう？ 三下風情が言ってはならんことを吠えたな？ 今すぐその空っぽの頭、氷漬けにしてやっても良いのじゃぞ？ ん??」

ニアアへ向けて、多分に馬鹿にする揶揄を含んだ言葉を厭味つたらしく吐く風龍ヒュバン。

その嘲りに表面上は笑みを浮かべながらも青筋を立てたニアアが冷気を手に集束させて、袖無しノベストのようなものを羽織ったヒュバンへと底冷えする表情を向けて、お互いに睨み合う。

「やめよ、二人とも。主殿の御前であるぞ」

「黙ってる、ハリボテ」 「黙っておれ、虚仮威し」

「むぐう……」

窘めようと、威厳を感じさせるような重い声でグエンが語りかける。

だが返ってきたのは鋭い棘の言葉であり、それに彼は押し黙ってしまった。

そう——なにを隠そうこの大男、それっぽく大物感を出しているが格好つけているだけであり、実のところ内心ではテンパっていたりビビったりもする肝の小さい男なのだ。

つまり屈強な見かけによらず、二人の圧すら感じる恫喝にただ呑まれていただけという。

「はいはい、お二人とも。じゃれ合っていないでマスターの話を聴く。グエンも落ち込んでないで」

軽く手を打ち鳴らし、スーツのような礼服を美麗に着こなすレイセが声を上げる。

その男性とも女性とも取れる音色の声で、彼らを諫め場を仕切り直す、空気は一転して灼けるようなヒリヒリしたものへと切り替わっていった。

「……任以外はあまり束縛せぬよう、個々の主体性に任せてきたのは問題だったか？」

あまりに我や個性が強すぎる面々を一瞥して、頭が痛いと思目し唸るギユリエ。

「まあよい……無駄話は聞かなかった事にして進めるぞ。ヒュバンと風龍にはアリエル他と共に、別の役割を与える。誰よりも速いお前達だからこそ、彼ら彼女らを大厄災の中心部へ送り届ける役を任せたい」

「俺様に？ ……承ったぜ、主の命なら嫌とは言わねえさ」

いつぞやの共闘が、ヒュバンの脳裏によぎる。

考えることが苦手な彼だが、あれと同じように背に乗せて運べばいいのかと納得した。

「……今回の戦い、神である俺は事の中心には一切手を出すことが出来ん。縛りを付け加えられたからな」

それゆえギユリエは、この大厄災に直接的に介入することなど不可能であった。

今までも、そうさせられてきたからこそ心中に浮かぶのは納得しか存在しない。

けれども――

「それで黙ったまま、何も出来ず舞台の外から眺め続けるだけであるのも、もう終わりにしよう」

いつの日も、どんな時も、歴史の転換点である瞬間さえ――己は何も出来ずに見過ごすしかないのだと、諦めていた。

しかし今は、今だけは――退いたりなどしないと彼は誓う。

「俺も、この世界を——彼女が慈しむ人の世界を守りたいと切に願うのだ。ゆえに今こそ、被ったままだったこのガワを脱ぎ捨て、龍に戻る時だ」

宣した呟きは勇壮に、そして決意に満ちたものであった。

その直後、空間が軋みを上げ始めた。

その現象に何事かと、この異空間の主でもあるギユリエへと問いの眼差しを向ける彼らに、龍神は問題ないと短く告げる。

それは、この龍神によって維持されていた異空間が末端から分解され、エネルギーに還元されていく光景。

無惨にも崩壊していく旧世界のビルや摩天楼立ち並ぶ都市が、虚空へと消え去っていく。

この異空間には彼が過去を忘れまいと、とある都市を土地や街並みを、そつくりそのまま丸ごと取り込んだ、思い出染み付く旧世界の遺物が当時の姿で保たれる過去の世界。

響く音は、壊れゆく歴史と思い出の悲鳴か。

けれども、反響して遠雷の如く鳴り渡る荘厳な音は、彼の決意に呼応して打ち鳴らされた門出を祝う鐘声のようで。

圧縮していく異空間は、彼を中心とした領域だけを残して、何もかも無に溶けた。

もう、此処には何も無い。

もう、此処には意味は無い。

もう、此処には過去に浸るための残骸など、残ってはいない。

ゆえに、全てを清算して未来へと往こう——彼女が隣に居る未来へ。

その行為の見返りは、空間を維持するためのリソースが浮き、空間と内包した質量がエネルギーへと変換されたことで、彼の器へと幾分か力が充填された事だった。

ギユリエは、心中で呟き続ける。

手を貸しては為らぬのが上位翠魔との戦いだけであるならば、それ以外ではもはや自縄自縛の枷など引き千切って、己の心が趣くままに力を振るおうぞ。

——なあ、Dよ。

お前の言う愚かな演者のための舞台で、延々と裏方を回していた黒子が、劇を叩き壊す大道具を携えて盛大に演目に乗りに込んでくるといいうのも、なかなか愉快な話にならないと思わんか？

一流の悲劇を描いたはずの筋書きが、実に馬鹿馬鹿しいちんにゆうしや闖入者によつて三流作者の下らぬ脚本に早変わりだ。

台無しになったと嘆くか？ いいや、それも良しと嗤うか？

どちらでも構わん、俺は好きにする。

それが選ぶべき俺の答えなら、何を迷おうか。

俺は、そう——月の女神サリエルと、彼女が愛する世界の盾たらんとする、一人の騎士だ。

「少し下がっている」

彼ら龍の眷属たちに向けた言葉は、確かな思いやりも感じるがしかし、既に何者にも揺るがぬと断言の熱量が籠もっていた。

そして——魂の鳴動と共に、本来あるべき姿へと黒き男は変生し始める。

彼の身体が瞬く間に黒く染まっていき、纏う黒き鎧が肉へと癒合し混ざり合い、全身が肥大化と変形を繰り返しながら、その姿を組み替えていく。

腕は無骨な五指から、鋭く堅い巨腕へと転じ。

前後に延伸していく胴体は、鎧が龍鱗となって全身を覆い、鋭角で流線的な輪郭を描いていく。

口と鼻が突き出てきて、刀剣の切先のようなスラリとした顎門になり、兜の装飾はそのまま二本の角となって、頭部に覇者たる冠の如き威を示していた。

これこそ彼の、龍神の真の姿。

さあ吼えよ、時より取り残されし龍。

長きに渡る眠りから目覚め、女神の愛する世界のために再起の咆哮を謳い上げるべく。

「シユウウウ……この姿になったのは、果たして何百何千年ぶりだろうか……」

「偉大なるお姿です、我らが主上」

「よせ。昔と比べれば、所詮これなどハリボテにすぎん」

完全な龍の体躯であろうとも、流麗な人の声にて語るギュリエ。

その黒曜石の如き巨軀は鈍く光を反射して、細身に見える内側では引き絞られた筋繊維が活力に漲っているのが、ヒシヒシと感じる圧から見て取れた。

これの何処がハリボテだと言うのだろうか、威風堂々たる御姿に心より畏敬を捧げながら、そう龍の長達は思うのであった。

「これより俺は、ダズトルディア大陸を空より守護する。俺が睨みを利かせている間は、内地まで一匹たりとも翠魔を侵入などさせんとも。彼女の世界、決して滅ぼさせません……ッ！」

大陸に住む人々を守るため、終わりなき戦線を守り続ける。

檜舞台に立てずとも、己の出来ることやりたい事を、全力で振るうのだ。

それこそ白織が以前酒宴で語ったように、俺も少しは自分勝手に生きてもいいだろうさ。

——他人が何と言おうと、一番大切なのは自分が何したいかでしょ？

——ならばよし、あなたの好きにすればいいですよ。

高次元からの声も、届いていない聞こえていないかのよう、不変の意思で彼は天を睨んだ。

枷と縛鎖を千切った龍神は、夜天に浮かぶ月と並ぶために大翼を広げて飛翔するのだ。

「少し疑問なのだけど、マスター？ カサナガラ大陸の方は、どうするの？ まさか見捨てるとは言わないと思うんだけど」

脳裏に浮かんだ懸念を案じるレイセに、龍神は空間と空間を繋ぐ転移門を開きながら、穏やかな声で返答を口ずさんだ。

「安心せよ、レイセ。そちらには何も心配などいらん。なにせ月が見守っているのだからな」

「——まさか」

地表より遙か高みの、雲海見下ろす天空にて。

月光を背に、蒼き美女が悠然と機翼を広げ佇んでいた。

瞼を閉じたその表情は一種の彫刻作品のように、儚さと壮美さを宿しながらも完成され尽くした無機質さを帯びて、冷たく瞑目している。

怜悯な美貌からは、内奥に潜む感情を窺い知ることは出来ない。

まるでそう、天に坐す月の如く。

彼女は凜然とした銀砂を散らした夜天のベールを纏いながら、静謐に世界と一体化しているようだった。

そしてそつと開かれた瞼が、眼下の世界をただ静かに眺めた。

感情の籠もらぬ眼球が、世界を瞬時に一瞥して。

「——地形情報のアップデート終了。新たなデータの適応が完了しました」

淡々とした言葉が呟かれる。

宙に浮かぶその蒼き美女、女神サリエル。

彼女が地の底で眠り続けていた間に起きていた、世界の変遷や崩壊と再建について記憶野に刻み込み、過去と現代との差異を反芻していたのだった。

「カサナガラ大陸、ダズトルディア大陸……人が生存可能な領域は、今では二つのみですか」

吐き出された声に微かに滲んだのは、慚愧ざんきと寂寥せきりょうだろうか。

そのときのみ、無機質な瞳に色が灯ったように見えた。

かつてはこの星を覆い尽くした人間が、今では小さな箱庭でしか生きられぬ現状に、儚さを覚え憂いている。

そして、胸へ去来するのはそれだけではなかった。

「あんなに泣き虫だったのに……強くなりましたね、アリエル」

記憶とはまるで違う少女の姿に、それもまた人の成長だとサリエルは寿ぐ。

魂が大きく変質しているのは理解している。

しかし、それが何だという？

生きているだけで変わっていくのが生物として当たり前である以上、あれもまた積み重ねによる変化と成長の行き着く先であるがゆえ、純粋な賛辞を贈るのみ。

ただ——立派になったと、子を抱きしめる慈母のように。

サリエルなりの愛で、自らの手を離れ長き道のりを歩んできた、あの日の子供を愛していた。

そして、その変化の切っ掛けとなった存在たちについても考えを巡らせる。

そつと物憂げに瞳を伏せ、言葉が絞り出される。

「……………このような展開になると、予測出来たというのに。末路は人柱だと分かっているとお、それでも世界が救えればと。あなたは神になることを選んだのですか、翠星」

システムに囚われていた時、神仰というスキルについて妨害した時から理解していた。

このまま進めば邪神の玩具として、いつか取り返しつかない事になると。

そして危惧した通りに、世界を巻き込みながら彼女は破滅へと真つ逆さまに堕ちていく。

もはやサリエル個人では、どうすることも出来ない流れである。

自身がこうして解放され自由になれたのが彼女のおかげであると分かつてはいるが、だからこそやるせない情動が胸の奥に不具合を発生させる。

激動する世界、その中心点には転生者たちが居て最大の要因こそが

——神格にまで至った二人。

彼女らの存在が今も特大の不確定要素となり、自身の演算を致命的

に乱していく。

「いいえ——だからこそなのかもしれないね」

そんな自身の計算を軽々と越えていくからこそ、世界を救うまであと一歩まで漕ぎ着けていたとサリエルは確信する。

翠星と白織、史上類を見ない特級のイレギュラー。

停滞していた世界を壊し、決意と信念で邁進しつづけ、新たな地平を目指して駆け抜ける。

その先に未来があると信じているからこそ、怠惰や迷いなどありはしない。

彼女らは、互いに足らぬものを補い合い高め合う。

際限なく、何処までも。

善性も悪性も、秩序も混沌も、正道も外道も併せ持ち、正しさも間違いも分け合いながら。

世界を救う、その日まで、その先も——果てなき旅路を行くために。であれば、この運命すらも二人ならあるいはと、サリエルは思いを馳せる。

「ならば進みなさい白織——あなたの運命は片割れと共に。闇などに負けぬよう、あなたの未来を取り戻すのです。二つの星が揃いし時、真なる救いがあるんことを」

闇より生まれし白き太陽。

冥界より翠の彗星を天翔させよ。

この星の救いは、二人の紡ぎし運命に懸かっている。

ならば、それまで時間を稼ぐ必要があると、既に答えが出ているのだから。

サリエルは己が担うべき役割を再認し、たましい炉心にいのり燃料を焚べる。人の世界を守らんがために。

生き物のいない世界など、それは救いとは呼べないのだから。しかし、この身体はあくまで奇跡的に願いが重なって発動した魔術による、修復されし器。

力を使いすぎれば幻のように消えてしまう不安定なものであるがゆえに、その戦闘力を見る影も無いほど弱々しい。

中身も同様に、生命維持に最低限の量しか保持していない。

とてもではないが、現在内包するエネルギーでは翠魔を止めるには力が足りないだろう。

けれど——まだ打つ手はある。

「エネルギーの深刻な不足。——ですが、足りないのなら他から用意しましょう。省エネです」

見上げた月は、荘厳に美しく。

世界を慈しむように、優しく穏やかな光で全てを包み込んでいた。

準備段階 ―アリエル・白織―

私は、コケちゃんに似た特徴の人をもう一人知っている。

かつて掛け合わせた生物の種名を振って、タラテクトと呼称されていた実験体。

そして、掠れ声で相手の名前を反芻して聞き間違えられたという些細な食い違いによる経緯で、アリエルという名を貰った少女は、遠い昔に失った過去を想う。

翠の髪に、飛ぶことは出来ない形だけの翅、半ば硬質化した皮膚の手足、茫洋とした瞳――

それが、私の知るコレーという少女の記憶だ。

目付きがボンヤリとしていたのは、かなり目が悪いからで、そのせいで鈍臭くよく転んでは涙を浮かべる泣き虫な子。

その子のことを、ここ最近の数年間にて何度も思い出していた。

私の生い立ちは、少々どころではなくかなり特殊だ。

あのポティマスが、不死の研究のために行った事は多岐にわたる。

その内の一つとして作り出されたのが、私達キメラという、遺伝子から根本的に手を加えられた実験体たちが挙げられた。

あいつは長くとも精々百年ちよつとしか生きられない短命な人間という枠組みに、早々に見切りをつけたのだろう。

その試行錯誤の過程で、様々な種を掛け合わせたキメラが作られる事となった。

エルフという種族も、これらの知見と成果あつてこそその、ポティマスなりの最適解な人類の進化という奴なのかもしれない。

当然、そこに至るまでに夥しい犠牲と失敗の山があつたのは間違いない。

私もその一人。

救助される前は、自由や人権など一切無く、チューブと機械の付いた実験用のベッドに縛り付けられたままの生活だった。

そして当時人間だったポティマスが国際指名手配された際、データ

を取り終えて用済みとされたキメラ達は、一々処分するのも手間と完全に放置されていたのだ。

点滴の中身は尽き果て生命維持に必要なモノが完全に停止する寸前、もはや風前の灯。

けれど、そんな薬品臭のする地獄の底から救い出してくれたのが、今も慕うサリエル様に他ならない。

——あのときは本当に心の底から、物語に出てくる慈愛の女神様のようにだと思っただよ。

私を含む救出されたキメラ達は、生まれた時から今までずっと実験体生活だった事もあり、医療施設が併設された孤児院へと一箇所に集められた。

そこで初めて、私達キメラは人間らしい居場所を手に入れたのだ。

掛け替えの無い人達と過ごしていた、優しい日々。

私を含む、遥か昔にて同じ孤児院にて暮らした、キメラという共通の繋がりがあった家族たち。

ポテイマスの実験によつて作り出された、人に様々な種族の要素を混ぜ合わせ掛け合わせ出来たキメラの生き残りが、治療と延命を受けながら同じ家にて暮らしていた。

私自身には外見上それと分かるような特徴は無かったけれど、保護された子供の半数は、一目で普通の人間では無いと分かる特徴を持っていた。

耳が長く尖っていたりだとか、肌の色が緑色だったり、全身が毛で覆われていたり、頭髮の色がピンクだったり、人型の龍みいだったり……

程度も形状も様々な一人ひとり特徴の異なる、実に個性豊かな同類であり私の家族達だった。

しかしキメラは、ただ外見が特徴的なだけの人間という訳では無い。

生まれながらにして抱える、身体機能や身体的欠陥も多種多様に千差万別で、優れた性質を獲得していた人もいれば、私みたいに欠陥ばかりの人もいた。

私の欠陥は、自分の体内で勝手に栄養を消費して、毒物を作り出してしまふ事。

しかも生合成した毒に身体の方は一切適応していないので、そのまま中毒になる始末。

根本的に完治させようにも、文字通り身体を作り直すような、そんな不可能としか言えない手段でもなければ、私達キメラの身体はどうにも為らない仕様上の問題だった。

おかげで解毒と栄養剤の点滴は外すことが出来なかったし、内臓とかもうボロボロ。

食べられるものなんて、消化の良い流動食しか受け付けなかった。毒を生成するのに栄養を使って、身体を治すのにも栄養を使って、慢性的な栄養失調だったものだから、身体は全然成長せず今も小さいまままで止まってしまった。

白ちゃんやソフィアちゃんのような肉感的な身体になりたいと思つたこと、少しはあるさ。

とはいえ、見込みも既に皆無ならば仕方無しと、もう割り切つたけどね。

まあ、私のことは此処までにしておいて——その内の一人こそが、コレーちゃんだ。

コレーちゃんの場合はキメラらしいって言うのもアレだけど、外見からして分かりやすい特徴を宿していた子だ。

首裏から突起みたいに見える、飾りにしかない小さな翅。

首周りや手足を覆う絨毛に、ちよつと硬い皮膚をしている四肢の末端。

手足が物理的に硬いから運動神経が悪く、私たちの中では下から数えた方が早い身体能力。

内臓器官の欠陥から食事は液体しか摂取出来ないけれど、宿した植物の特性から必要な栄養素は一応最低限自己生成できて。

けれど、余計な化学物質も作ってしまうのか、意識がいつもボンヤリしていて常に眠そうで。

けつこう異形ではあるけれど、それでも私達キメラの中では中程度の異形度合いと、色々と中途半端で出来ない少女だった。

だからこそ、保護された時はポティマスに使い潰される寸前で放置だったらしく、しばらく専用の集中治療室で眠り続け生死の境を彷徨っていた。

もし何かしら運命の歯車が少しでも掛け違っていたら、彼女はそのまま亡くなっていた事は想像に難くない、創造主^{ポティマス}から捨てられた数ある失敗作の一人が、コレーちゃんだった。

そんなコレーちゃんだったからこそ――

だいぶ質感や差異はあったけれど、私が初めてコケちゃんの人化姿を見た時に、コレーちゃんの面影を重ねてしまったのも、まあ無理も無い。

運動出来ないのと食事制限されてる組という共通点から、まあまあ仲は悪くなかったし、記憶にある思い出も多いのだから。

向こうからは私のことを、親しみを込めた愛称で「アライ」と呼ばれたりもした。

それに、システムが施行されてからも同じ陣営で――サリエル様救済の為に手段は問わない側と一緒に裏方やったりと、私が弱かった時期に過ごした時間が最も多かったのも彼女で。

少々倫理的にもとるが、あるスキルを使った眷属による貢献を考案し最初に実行したのも彼女だった。

守られるだけの立場に、同じ歯痒さを味わったり。

怪我した仲間を、一緒に心配しながら手当したり。

行つたきり二度と戻らなかつた仲間を想つて、共に悲しみの涙を流したり。

笑つたり、悲しんだり、喜んだり、嘆いたり、満たされたり、失つたり――

いっぱい、たくさん、幾重もの――忘れられぬ、忘れたくない日々が、そこにはあつたんだ。

その、思い出の最期は――

『けほっ、ごふ………ああ………もうなんにも見えないよ………アライ、そこに、居る？』

『結局、届かなかったけど………私たち、頑張ったよね………』

『先に、休むね………アライ………』

『また………みんなと笑えたら………もう一度、あの日々のように………いつの日か、きつと——』

『そうになったら、嬉しいなあ———エル、あ、ま………捧げ、ま、す』

———どこまでも美しく鮮彩に、翠は灰色となって星へと散っていった。

「——つ、う」

アリエルは瞼を開く。

視界に映ったのは、無機質な内壁。

少し疲労でボンヤリとする頭に活を入れれば、ようやく此処がポテイマスの宇宙船の一室であることに、夢現な思考から認識が追いついてきた。

どうにも謙譲の副作用からか、上手く機能していないスキルが多い。

状態異常無効がきちんと働いていれば、数日間ほど徹夜したとしても、全く眠気に襲われること無いんだけど………

神言教と魔族、両方との交渉が終わってこつちに戻ってきた途端、電池が切れたみたいに眠ってしまったみたいだ。

どちらも今は、翠魔に対抗するため軍を移動させている真つ最中。緊急事態という事で、各国の転移陣は何処も彼処も大忙し。ダスティンが顔を顰めながら折衝に尽力しているのが、容易に想像つくなあー、はははっ。

トップを繋いだ以上、私に出来る事は無くなったので少しばかり休憩をと思ったが、予想以上に疲れていたようで椅子に座るや否や夢の中へ、というやつだろう。

身体を預けていた椅子から立ち上がるようにしたが、思うように力が入らず再び脱力して背凭れに寄りかかる。

やけに身体が怠くて重くてしかたがない。

「はああ……そういえば安静にしてって言われてたんだった。以前の感覚のようにつて訳にはいかないかあ——ん？」

ちよつとした違和感を覚えて、目元に指を添える。

指先にそつと染み込む水滴の粒。

頬に熱いモノが伝う感覚。

拭つても再び滲んでくるこれは、涙……？ ああ——

「……………もう一度、あの日々のように」

そう、誓つて——頑張つてきたんじゃないか。

最後の一人になつても、一人ぼっちになつても——ずっと。

萎んでいた身体に意思を籠め直し、肘置きで身体を支えながらゆつくりと立ち上がる。

少しふらついて立ち眩みのような感じがしたが、数秒ほど深く呼吸を繰り返せば、ようやく炉に火が入つて内側に熱が巡りだしてきた。

一人ぼっちになつてしまった臆病な魔王に、期せずして再び紡がれた仲間たち。

擦り切れそうなほど長い人生からすれば刹那に等しい、心から楽しいと思えた時間。

これが私という生涯の、燃え尽きる寸前の輝きであるのなら、それで良い。

ならば最後の最期には、煌めく思い出で終わりたいじゃないか。

私の願いと誓いは今も昔も変わらず、笑顔で笑い合える結末を迎え

ること。

だから――

「必ず、助けなくちゃ――今度こそ絶対、涙に濡れた灰色になんて、させないから」

あの日々の恩を返すためにも。

望んでいたものは叶ったんだ、なら残りの時間を焚べたって構わない。

だからあともう少しだけ、私に力を――みんな。

そうして、弱体化した今でも使える、自分の手札について確かめていると。

前触れも無く室内に、静かな足音が響いた。

その憶えのある気配の主へと振り返ってみれば、予想通りの白い人物が――って。

「ちよつと、白ちゃん。どうしたのその服、ボロボロじゃん」

いつもの美麗な印象を与えるローブのような服が、まるで長年放置されて腐り落ちたかのように黒ずんで穴だらけな状態。

破けた布地から白い肌が覗け、力を籠めて引つ張れば完全にバラけてしまいそうなほど、かなりアブナイ格好に白織はなっていた。

「思ったより大迷宮の最下層はヤバイ状況になってね。腐蝕の瘴気って感じのが充満しててさ、転移した瞬間すぐに対抗術式で本体まで被害が及ぶのは防げたけど、服はご覧の通り少しだけ間に合わずに瘴気に蝕まれてお亡くなりになって奴」

塵となつて崩れる寸前といった様子の袖をヒラヒラさせながら、軽い調子で白ちゃんは言う。

「あーもー、聞きたい事も言いたい事も沢山あるつてのに……取り敢えず着替えてこいっ！ 話はそれからだ！」

「はいよ。――やつぱはこの服だと、激しく動くには不便か。アレに袖通すでしょう」

そういうと、さして恥じらいも何も無く、傷んだ服を脱ぎ捨てていく白ちゃん。

入口からは死角になる部屋の隅にて、白ちゃんは手早く新たな装いへと着替えるのであった。

「……これでよしっ」と

魔王に言われた通り、駄目になった服から新たな服装へと着替えた私。

今更と言えば今更だったんだけど、普段から着ていた服は袖口とかスカートとかがヒラヒラしている、実に運動には向いて無さそうな見た目と着心地重視の服だったんだよね。

神になり力が復活してからは、攻撃は邪眼か空間魔術ブツパで遠距離から安全に仕留め、移動と回避は転移でどうにかなる相手ばかりだったのだから、あの服装でも別に問題無かったのだ。

私の戦闘スタイル的に、知覚外からの暗殺か一方的な嵌め殺しが可能なら、そうするからね。

そういう場合だと、そもそも動く必要すら無かったり。けれど、システム中枢での影戦しかり、エルフの里での暴走コケちゃんしかり――

そしてこれから向かう、私の大切な人の救出しかり――
今後は大鎌を用いての近接戦闘も視野に入れた装備にしておかないと、インフレバトル感の出してきた熾烈さを増していく戦闘に、色々対応出来なくなるだろう。

そういう意味では今着ている服装は、機能性も拡張性も含めて一級品な自信の一張羅だけだ――

「おお……様になってるじゃん。格好良いし似合ってるよ、白ちゃん」

魔王が私の姿を見て、感嘆するように呟きを零す。

ふふんっ。

まあ、それもそうだろう。

この服装は、第十軍に私特製の衣服を支給するかつて時に、試作として自分用に作った軍服風な衣装とそのセットなのだから。

首周りに余裕のある立ち襟を、指で整える。

青みを帯びた白銀のジャケットとズボンは丈夫な生地で縫製されており、内側には魔術的補強の精緻な刺繍も隙間無く施されている。

飾りボタンや飾り帯なども特別製で、光の加減で黄金にも蒼銀にも見えるそれらは、神格二人の複合素材で出来ている——要はコケちゃんのを髪を貰って混ぜ込んだ高純度のエネルギー結晶体だ。

まあ他にも色々細かい仕込みはあるけれども、大まかな外見はそれ。

総観して、金紗を差し色にしている純白の軍服っぽいものとなる。

これ一着作るだけで相当時間を掛けた代物であり、それに比例するように性能も折り紙付き。

魔術的防護が何重にも自動発動している、自分でも盛り過ぎたと思うほどの、大鎌とは別の意味での神器に匹敵する一着だった。

作ったは良いけれど、なんだか普段遣いには勿体無く感じてしまい、異空間に仕舞い込んで埃を被りかけていたそれを私はひっぱりだし、これからは本気である証も兼ねて着替えたのだった。

……ちなみに第十軍には結局、此処まで手の込んだモノを全員分作るとなると死ぬほど面倒臭いとなったので、シンプルな肌着を配るだけにしたんだけどねっ！

それでも充分過ぎるほどに強度や防御性能があるのだから、急所を守るにはそれで事足りるし、不要な手間を惜しんだともいう。

つと、そうだ最後に——

「これ付けてくれる？・魔王」

取り出したのは、純白の花飾り。

それはコケちゃんの持ち物だったモノであり、今は髪紐と合わさった形にしてある。

彼女のモノを勝手に改造するのもしかと思うが、まあ許してくれるだろう。

それを私は、今の髪型を解いて魔王につけてほしいとお願いする。

「えっと、それは——うん、分かった、ポニテで良い？」

「ん、頼んだ」

これで装いも完成。

決意も誓いも新たに私は違う自分を掴み取り、真実最高の未来を織り上げるため、新たな姿へと変わったのだ。

「それじゃあ——白ちゃんも着替え終わったし、今の状況を確認し合おうか」

「了解。先に魔王から説明お願い」

「あいよ」

エルロー大迷宮から一旦戻ってきた理由も、現在の人類側の対応がどうなっているのか確かめにきたのだし、内心でふざけるのも止めて真面目に話を聴く。

余計な言葉を挿むこと無く、私たちは情報交換を始める。

神言教による各国への呼び掛け、魔族軍との共闘体制、混乱覚めやらぬ市井の人々への誘導——そしてワールドクエスト。

ざっくり要点を抜き出せば——Dの悪辣な遊びに全人類が参加を強制されて、自分だけ助かればいいと人類の大多数が逃げの選択肢を選べば、もれなく全員道連れで死ぬっぽいて事か。

まさにDらしい、甘さや優しさなど無く弱さをみせれば絶望の中で死ぬがよいとばかりの、クソみたいな難易度の試練だ。

生存ルートらしき選択にしたって、人類だけでは勝機なんて一切無いような極悪さで、うち一つは神殺し？ 本当にふざけるなよツ、Dめッ！

そんな人類の総意を試される、決意表明。

現在の状況は、降りるを選んだ人類は二割に少し足りない程度。どれくらいがボーダーラインなのか不明だけど、未だに先生が予告する結末が変わらない以上、このまま放置した場合での人類の末路は、滅び一択。

人類の末路なんて、実のところどうでもいい。

愚かな奴が多かったから死ぬ、それは自業自得だ。

だけど——コケちゃんが一緒に巻き込まれるかもしれないとあれば、止めるしか無い。

それ以外の選択なんて、私には無いから。

ならば——

「じゃあ、こっちも説明する。今のエルロー大迷宮の状況だけ——」

私が単独で行動していた出来事を、魔王に語る。

とはいっても、魔王のように煩雑な交渉事を色々やっていた訳じゃないし、言葉にすれば大して長くない説明ですむ。

分体がヤラれた事から、直接本体でシステム中枢に乗り込むべく大迷宮の最下層へ転移したが、既に最下層にも腐蝕の瘴気が充満していて生物が立ち入る事が不可能な領域になっていた事。

自分の周囲を結界で防御しながら奥へ進んだが中枢前の扉がロックされていて、見た感じ三体の上位個体な翠魔を撃破しないと封印が解除されない仕掛けを施されていた事。

強引にこじ開けようとしてみたが防衛機構が反応して、物量で押し流すように小型翠魔が大量に湧き出してきた、防護と解錠と戦闘を並列して行うには厳しい状況だったから一旦引いた事。

溢れ出した小型翠魔は、支配者的存在であるマザーも地龍もそしてコケダマも居なくなっていた最下層を一気に占領し、その物量でもって迷宮内の生命を駆逐しだした事。

そして、下層にいたベイビーズこと悪夢の残滓と邂逅し、翠魔が地上に出て来ないように無理のない範囲で戦えとアイツらに封じ込めを指示して、最下層から溢れてきた翠魔をある程度一掃してから此方へと帰還し、今に至る。

その一連の過程を、魔王へと順序立てて説くのであった。

「ふうむ……やっぱり地上の翠魔は、私たちが必ず撃破しなくちゃ為らないみたいだね」

険しい顔で私からの情報を噛み砕いた魔王は思索も短めに、為すべき事を端的に示した。

大厄災の中核である翠魔レルネーを撃破するにしても、私がシステ

ム中枢へ突入するにしても、どちらも三体の上位個体を撃破するのは必須。

翠魔レルネーと戦闘中に背後から襲われたら堪らないし、そもそも何もせず通すとは思えない。

仮に無視されたとしても、今度は力無き人々に向かうかもしれないと、そう語った。

「……私は手を貸さなくていいの？」

神は手を出さなつて話だが、直接でなければ色々やりようはあるはず。

Dのことだから、破った場合の罰則は想像の遙か上をいき、危ない橋かもしれないがギリギリの範疇で援護出来るのではないかと告げるが――

「いらないよ」

そうあつさりど、魔王は提案を断った。

「少なくとも地上の事は、私たちで何とかする。何もかも神頼みなんて、それこそ生きている意味なんて何一つ無いじゃんか。だから、これは私たちに任せて」

軽快に言う口調に、無理や抑圧しているような感じは無い。

魔王は本心から、これは自分達で立ち向かうべき問題であり私の手は必要ないと答えていた。

「白ちゃんは、白ちゃんにしか出来ない事をしに行つて。私たちではシステムの事詳しくは分からないからさ……だからコケちゃんを救う役目は、白ちゃんに任せるしか無いんだよ。白ちゃんは、私たちを気にせずそれに集中して欲しいんだ。それが私からの一生涯のお願いだよ」

——そう言われたら、反論できないじゃんか。

だから私は、何も言わず静かに頷くだけで返答とした。

籠められた想いを察してしまうからこそ、余計な言葉はこれ以上無用だった。

ありがとう、魔王な私の恩人。

出会いは最悪だったけれど、積み重ねてきた思い出は悪くなかった

し何だかんだ楽しかった。

今では出会えたことが、心から本当に良かったと思うよ。
だけどき、最後に一つだけ言うなら。

「死ぬなよ」

「——分かってるさ」

少し不安の交じる言葉だが、私が何を言っても魔王の決心は変わらなさそうだ。

それが心配と不安になりそうだと感じたその時——

「私はまだ死なないよ。サリエル様とだってまだまだ話足りないし、白ちゃんとコケちゃん二人の行く末を見届けてからでないと、死んでも死にきれないさ」

肩を竦めてカラカラと弾ける笑い声。

そしてそのまま、さらつと爆弾を放り投げてきた。

「だからさ、どうせなら私が生きている内に、二人の結婚式見せてよ」

「んなあッ!?!」

ちよつとお!?!

それは色々と、段階すつ飛ばし過ぎではありませぬかああ!!?!

「おーおー顔真っ赤。白ちゃんもそんな表情できるんだねえ」

「魔王っ!」

「怒んない、怒んない。……………約束だよ」

「——ッ、くつ」

それで魔王が最後の一線を越えるのを思い留まるのなら、仕方無い。

魔王にだって、死んでほしくないのは確かなのだ。

「……………約束する」

「ありがと、白ちゃん。いやあー楽しみだなあ、早々死ねないや」

くつそおお、その朗らかに笑う顔に拳骨落としたいっ!

でもそれは、私の本心も否定するようなモノだから、握り締めた拳をプルプル震わせるだけしか出来なかった。

「肩の力、抜けた? 白ちゃん」

ああ、張り詰めていた緊張は解けたよ。

感謝はしないけどなあっ!

誰がからかわれて、ありがとうなどと言うものか。

「それじゃあ、頑張ろう白ちゃん。私たちの手で、未来を掴む為に」

「——私たちの手で、未来を掴む為に」

これで、嵐の前の静けさは終わりだ。

ここから始まるのは、世界の運命を懸けた最後の決戦。

私たちの手で、未来を掴む為に。

私には、私の大切な人だけで充分。

その為に世界を救わなければ為らないというのなら——いいさつ

いでだ、星も人も纏めて救ってやるよ。

ならば生きよう、みんなと共に。

それが、私の願いなのだから。

憂いも迷いも、ありはしない——絶対に大切な人^{コケちゃん}を救い出すツ!!

「あっはははははッツ!! いい、いい——実に良いツ!!」

「踊れ、踊れ、人間たち。選択肢は与えたぞ? 生きるも死ぬも、私たちの選択次第」

「折角、少ないエネルギーを使って舞台を用意したのです。存分に踊り狂うがいいツ!!」

「その果てに待つのは、勝利か破滅か——どれであろうとも、私は勇気も愚かさも希望も絶望も、全て纏めて愛でましょう」

「我が手にあるは、あらゆる生命の運命なれば——私を楽しませる為に、踊れ愚者ども」

「さあ——私は此処です、白き神」

「あなたが来るのを、一日千秋の想いで待ち焦がれましょう」
「どうか——ですから、ああどうか、我が無聊ぶりようを癒なやして下さいな。白
織、翠星」

翠魔 | Corrupting Spirits |
大厄災 | 開戦 |

そう、ゆえに今、此処から——
人の世界を守らんとする者らと世界を滅ぼす翠魔との、未曾有の大厄災が幕を開けるのだ。

大波荒れ狂う洋上。

この世全てを滅殺せんと狂乱する魔性が怨嗟の悲鳴を上げながら、ひたすら暴走する衝動に従い感知した生命を滅ぼすべく進軍する。

その行動はもはや機械じみており、小さな魚や微生物ですら許せないとばかりに、死滅の波動を海中に打ち込みながら三体の翠魔は、そう定められているかのように死の領域を広げていく。

かの魔性が通った後には生命は何も残っていない。

潮の流れで流入してきたものも、残留する死滅のエネルギーが猛毒の汚染物質であるかのように一つ余さず蝕み浄滅していく。

それは、世界の終末を告げる冥界からの呼び声か、それとも新世界に至らせる再誕への胎動か。

どちらにせよ、生命を許さぬ領域は今もまだ足らぬとばかりに死を溢れさせ、糧となる贅を求め凝固した血液のように、ドス黒い紅で大海を染め上げていた。

その領域の外側では、少しでも侵蝕を食い止めんと多数の水龍が抗い数多の小型翠魔を撃墜していくが、同時に特攻じみた捨て身の攻撃により少しずつ骨身を削られ、屍を海の底へと沈めていく水龍も数多くいた。

小型翠魔の何より恐ろしいところは、単純な数の暴力では無い。

自身の死を厭わず生命を滅殺するという行動原理であり、行動パ

ターンもある時点から変化して使用後自壊は必然となる腐蝕攻撃を身に纏つての突撃すら行うようになっていた。

もはや迂闊な接近は、死を招く。

使い捨ての自爆兵器と化した小型翠魔に、水龍たちは確実に数を減らしていくのであつた。

油断した者、弱い者、運が悪かつた者を次々と、冥界へと誘う魔性の尖兵。

それらの目的は唯一つ。

より多くの生命を、我らが王へ捧げるがため。

何故なら、それしか知らないし、それ以外に何も許されていないから。

混濁した意識に他の思考が入る余地など無く、そうする事で救われるのだと強烈に刷り込まれている翠魔に、止まるという行動原理などありはしない。

翠魔もまた、誰かを救いたいと願つて殺し回るのだから、その狂気は際限なく膨れ上がり留まるところを知らないのだ。

既に最初に作られた小型翠魔は、両大陸へと上陸する寸前。

まだ水龍たちのおかげで、上陸しようとしている個体数はだいぶ減らされているが、その減つた数であろうとも人類を蹂躪するには充分過ぎる暴威である。

それがもし、制限なく世界に破滅を齎そうとしてきたら——想像するに恐ろしい光景だろう。

水龍たちの奮闘虚しく、翠魔に海上での防衛線が喰い破られて、それらが一挙に押し寄せるのも時間の問題かと思われた、その時——

『いっちょよ、派手にいくとしましよっかッ』

「ああフエイ！　これが、俺たちの開戦の号砲だツ!!」

天地に轟くは、決意の叫び。

その瞬間、暗雲を蒸発させながら煌めいた極光が翠魔ごと空を裂く。

まるで水平に流星が駆け抜けたような、巨大過ぎる光輝の柱。

それが通過した後の場所には大気がプラズマ化した刺激臭しか存在しておらず、消し飛んだ翠魔の数は、百を有に超え千に到達して万にも手が届きそうだった。

威力の桁が一つや二つ違う閃光は、小型翠魔の濃霧に大穴を空け、此方から彼方を繋ぎ上位翠魔への道を開くのであった。

始まりを告げる煌めきに呼応して宣誓する、王者魔人勇士英雄たち

彼ら彼女らは、それぞれ数多に飛翔する龍の背の上にて、自らの誓いを空へ掲げた。

「やらせはしねえよ。俺の身内に手を出す奴は、何であろうとブツ潰すだけさッ！」

「我が魔法……いや魔術の研鑽。とくとご照覧あれつ、我が神よッ！」

「うう、今からでもお家帰りたいつす」

帝国の三巨頭は、守るべき人々の期待を背負い並び立ち。

先頭に立つ帝王は、拳に填めた巨大な手甲を合わせて、ガチリと打ち鳴らした。

「あのデカブツは、私の血潮を滾らせてくれるのかしら？」

「私がいる限り——お嬢様には、指一本たりとも触れさせはしません」

吸血鬼主従は匂い立つ騒乱の気配に、抑えていた闘争本能を曝け出し。

朱く微光を灯す瞳が、濃密な血の匂いを予感させる。

「どうしてスーは、お兄様のところじゃ無いんですかっ」

今代勇者の妹は、愛しの兄では無く何故か吸血鬼主従の場所に配された事に不平を漏らし。

しかしそれも仕方なき、前科ある彼女の暴走に対処可能でさらにその力を発揮させるには、この配置が最適であるがゆえに。

「いくぞアサカ。これは俺たちの復讐以前の問題だ」

「ええ仕方ないわね、クニヒコ。逃げてでも死なら立ち向かうだけね」

復讐を胸に歩んだ二人の冒険者は、納得出来ない展開を否定するため力少なくとも戦いを選び。

今、怨みも怒りも越えて、復讐対象である相手と肩を並べる。

「この戦いが、私の旅路を飾る最期で最高の勝利とする為に。また背を借りるよ、ヒュバン」

『前は白いので今回は蜘蛛のか。つくづく俺様は蜘蛛に縁があるよなあ、まあよろしく頼むぜ』

蜘蛛の王と風龍の長は、奇縁に思いを馳せながら再びの共闘に笑いを零して。

荒野以来となる世界の危機、それに関わった者達として信頼を預け合う。

「本命には直接手を貸せずとも、己の意志のままに。構わぬだろう――なあDよ」

『我らが主上。配下龍一同、展開が完了しました』

龍神とその眷属たちは、土地ごとに任された役割を熟す最低限だけ残して、両大陸の海岸線沿いへと集い。

「現在の私が、上位翠魔を撃破出来る可能性は皆無。であれば、託しましょう人類に」

カサナガラ大陸の遥か上空にて、霞む月輪を背に浮かぶ女神は守るべき対象へと願いを託し。

「此度の戦いが、私たち人類いいえ全ての命が、宿命から解放されるのを願って率いましょう」

ダズドルディア大陸の中心地にある大神殿にて空を仰ぐ老人は、あらゆる贖罪の清算を祈り。

「シユン君、白さん、苔森さん……みんな。どうか無事に帰ってきて下

さい」

「先生、転生者一同いつでもいけます。私たちは私たちになりに貢献しましょう」

「そーだよ、オカちゃん。端役だろうと、俺たちだって役に立つとこ見せようぜ」

「主役には成れなくても、端役なりの意地で私たちだって戦うんだからっ」

「だからシユン、僕たちを気にせず行つて来い。——勝てよ」

皆の先生と囚われていた転生者たちは、宇宙船の艦橋にて操縦桿と照準器を握り構えた。

「——始まったか」

『マザー？』『マザーの為、戦う』『邪魔させない』『露払い、任せて』

地の底深き大迷宮の中では白き神が、悪夢の残滓と呼ばれる眷属に囲まれながら大鎌を手に瞼を閉じて時を待つ。

その時こそ、自らの戦いだと分かっているからこそ微動だにせず、地上の皆が成し遂げてくれる瞬間をひたすら信じて待つのだ。

獄犬、海蛇、魔精、三つの紋章が封じるシステム中枢への扉。

閉ざされた扉の解錠を仲間に託して——白き神は、堕ちた翠の乙女を救うのだと想い続ける。

「必ず勝とう、もう逃げやしない。俺の双肩と背には、明日を目指す皆の希望がある。どんな困難だろうとも、一人じゃなければ乗り越えられると信じているッ!! ——往くぞみんなっ、準備は良いかッ!!」

天空を統べるが如く、柔毛に覆われし優美な身体と十枚翼で泳ぐ大河のような光龍の背中にて、己が答えを得た勇者は共に想いを合わせる仲間へと、魂を籠めて呼び掛けた。

「既に、いつでも」

「それこそ前世から、だよ」

『愚問ね』

そこで勇者は横を向き、隣に立つ不条理な世界により鬼となった親友は――

「言われずとも、親友。^{シユン}――君が語る未来のため、僕たちの道を示してくれ」

厚い信頼の籠もった仲間たちの声に応えて、シユレインは声を張り上げた。

ならば言うべきは、これだけで良い。

「――ああみんな。これが真正銘、最後の戦いだ」

この世界に絡み付く、終わりになき贖罪の連鎖。

そこに積み重なった嘆きも哀しみも憤怒も絶望も――それら全てに意味はあったと、みんなの力を合わせて輝く未来を掴み取ってみせると勇者は誓う。

人類を嘗めるな、邪神よ。

人は醜く愚かであろうとも、光を持っているのだ。

それを認めている、信じている。

果てなき闇の中であろうとも光を胸に宿し、導^{しるべ}として掲げられるのだ。

部外者だった転生者も、今はこの世界に生きる光の一つ。

この世界の未来は、俺たち全員で決めるんだ。

邪神によつて、世界の運命も人の人生さえも、遊技盤のように好き勝手に弄ばれて堪るものか。

それを証明する為にも――いぎ、いぎ、いぎ、この手に未来を掴みに、全身全霊を懸けて。

「いくぞおおオオツツ!!!」

「!!! 応っ!!」

闇夜を切り裂け、生命^{ヒト}の輝き。

夜明けを照らす暁光と共に、彼ら彼女らは龍の背に乗り大厄災へと立ち向かうのであった。

翠魔ケルベロス

空に裂く、上位翠魔への道。

その何も無い空間を一足先に駆け抜けて、拳を叩き込んだのはユーゴーだった。

「戦の華だ。先陣は、俺が切るぜッ！」

当然のように魔力で足場を作り出し、それを踏み砕きながら疾走して視界に映った上位翠魔の内その片方である三つ首の獣龍を殴り飛ばして、連携などさせないよう距離を引き剥がす。

機先を制するその動きは、野性的な直感のなせる技か。

誰より疾く、空中に穿たれた一本道を通り抜けて、相手に対応の猶予を与えないまま有利な状況へと運んでいく。

「爺、オーレル！ 付いてこい！ 俺らであのデカブツを仕留めるぞッ！」

「あい、わかった。いざご照覧あれ、我が魔術！」

「しよーがないっすねー。龍さん、あのバカを追いかけて下さいっす」
後方へ向けて叫んだユーゴーに、二つの返答。

大洋を渡りきれほどの飛翔能力がある龍種に騎乗したロナントとオーレルが、二の矢三の矢となつて、後に続く人達のため通り道を押し広げながらユーゴーの背を追う。

二人とも得手としてるのが高位の魔法であるがために、その殲滅力は凄まじい。

どちらも対軍用の魔法を個人で発動させ、更に続く後続のために翠魔の数を減らしていった。

次々と突入していく、大厄災に立ち向かう勇士たち。

天を衝く隔壁のような翠魔の群れを、彼らは踏破していく。
そして彼らの視界へと映ったのは、まるで台風の目の中心部へと入ったかのような不気味なほど静かすぎる光景だった。

天まで聳え立つ黒き壁面。

それは全て小型の翠魔が密集して形成された壁であり、外界とこの空間とを区切る境界線。

誰かが思わず身震いした。

風が無い、熱が無い、何処までも薄暗く——この場所には生命の気配が全く存在しない。

まさしく冥府のようであり、生命を拒絶する化物の体内に等しい領域なのだ、誰も彼もが理解するのであった。

「シユン！ お前らは先に進め！ こいつらは俺らの獲物だツ！」

叫んだユーゴーは、視界に白桜色の龍の姿を捉える。

その頭上で角に掴まる人影を見据えながら、不敵に笑った。

そして——ユーゴーの拳撃が轟音を響かせれば、戦いの火蓋は切られたのであった。

激しく掻き鳴らされる金属音。

それは今しがた殴った上位翠魔のケルベロスが、尋常では無い硬度を持つていたというのもあるが、ユーゴーの手に詰められた分厚く巨大な手甲が飢えた獣の如く鋼の牙鳴りを響かせる。

ギチギチと不気味に金属の軋みを鳴らすさまは、まるで手甲そのものが生きているかのよう。

対する獣龍も波飛沫を散らしながら体勢を立て直し、牙を剥き出して喰りを上げた。

次瞬、海面と大気をブチ抜きながら疾走する二つの影。

轟き爆砕される海は水柱を噴き上げ、音速を突破して発生した衝撃波は嵐の如く激震する。

山脈の如き獣龍の爪牙と小さき人間であるユーゴーの鉄拳がぶつかり合うたびに、火花と閃光が飛び散っては闇を照らしだした。

その応酬は、両者との間に比べるのも烏滸がましいほど体格の差があるものの、まるで獣同士の熾烈な縄張り争いのようでもあり、二体の獣は本能のままに荒々しく回転率を上げていく。

「疾ッ——」

『——！！』

超高速の鉄拳が空を割り、獣龍の鼻先を強かに打ち据える。

しかし化物らしい異常なまでの耐久性で、一つの首がカチ上げられようとも他の二つの首が反撃の顎門あぎとが牙を剥く。

速度の乗った剛撃を放った直後のユーゴーに、回避に移れる猶予は無いように見える。

あわや噛み潰され、無惨な挽き肉なるかと思われた瞬間――

「世話が焼けるっす」

二条の魔弾が、ケルベロスの顔面へと飛来した。

灼炎が覆い視界を潰された二首は、何も無い空を噛むだけに終わる。

その隙に相手の身体を蹴って、外套を翻しながら宙返りするよう
に空を駆けながら併走する。

「サンキュ、助かったわ」

「よく言うっす。ウチらが援護しなくても避けられたくせに」

悪態を吐くオーレルだったが、それを言われた相手はどこ吹く風で
楽しげに嗤っている。

まるで悪童のように口角を歪ませて、しかしその視線は片時も敵か
ら目を離さずに返事をした。

「応とも。少し前の鍛え直して散々身体に教え込まされたからな、片
時も気を抜くなっとな」

「そのわりには、けっこう慢心やらかすんけどねー」

「痛いところつくなよ……」

「馬鹿弟子ども、巫山戯ておる暇は無いぞ。そら、奴やつさんはお怒り
じゃ」

合流してきたロナントがそう呼び掛けた刹那、彼らは上下に散開す
る。

一瞬遅れて僅かに風景が歪み、目では認識することが難しい力場が
彼らの居た空間を通り過ぎ、射線上にあるもの全てを大震させて粉碎
していった。

その半ば不可視の一撃を前に、カラクリを見抜いたロナントが眩

く。

「指向性を持たせた振動かのお？ 事前に口を開いておったのを見るに、範囲は前方直線。三つの首それぞれからも投射出来そうじゃな」
獣より龍に近い形状の頭部を、ロナントは目を細めてつぶさに観察する。

巨大な牙の間から白煙を噴き上げている中央の頭部は、まるで砲撃した後の大砲のようであり、今まさに残り二門の砲台からも不可視の砲撃は放たれようとしていた。

空気を甲高く鳴らし、吹き荒ぶ震動分解。

射線に入って巻き込まれた小型翠魔が、塵になるまで崩壊し消え失せたのを視認して、彼らはその脅威度を更に一段引き上げた。

「やべえな。俺でも一撃モロに喰らえば死ぬんじゃないかね？」

「むしろあんなの耐えられたら、どっちがバケモンか分からんっすね」
このような状況下であるというのに、明日の天気を語るような気楽さで呑気な冗談を口にしあうユーゴーとオーレル。

彼らには、死の恐怖が無いのだろうか——否、何よりも死神の気配を色濃く背に感じているからこそ、平素の自分を強く保つためにそう振る舞っているだけだ。

現に、彼らの額には冷や汗が浮かび、笑みの表情もどこか硬い。

だが動きに澱みは無く、それどころか段々と動きのキレを増していき、滑らかな連携へと洗練されていく。

「変に気負っても上手くいかねえ。いつも通りの馬鹿なくらいが丁度良い」

「カツコつけてるのも肩凝るっすもんね。やっぱ素の自分が一番っす」

次々と投射される致命の砲撃を紙一重で躲し、潜り抜けていく。

騒がしく軽口を叩き合い、小気味良いノリで掛け合いを演じ続ける二人。

その様子が気に食わないのか、生命を滅ぼす魔性たるケルベロスは怨嗟の籠もった眼光で、今もなお宙を舞い続ける害虫に対し、視線だけで射殺すかのように睨み付ける。

『Grr——ッ』

ああ、どうにも——

ケルベロスの山脈のような巨体からしたら、己の役目を邪魔するあの鬱陶しい羽虫を叩き落とすには、この環境は開け過ぎている。

ゆえに——己に与えられた能力にて、大地の化身としての権能で以って、可及的速やかに星に仇なす害虫を駆除すべし。

『SiGyaaa——!!!』

地獄の門番に内蔵された暴威が、唸りを上げて駆動する。

同時に肌で感じられるほどの莫大過ぎる魔力の高まりと魔術陣の燐光を認識して、対峙する者らに戦慄が走る。

なにせ籠められた魔力量は大都市を軽く消し飛ばせそうなほどであり、その影響範囲は自分達を余裕で捉えているのだから。

ほんの僅かな大気の揺らぎを感じ取れたのは、危機察知の賜物か。彼らは直感に従い、更に更にと上空へ退避する。

その次の瞬間に海を割って屹立^{きつりつ}するは、荒々しく棘だらけの高密度圧縮された鉱石の針葉樹林。

その背丈は、海面から測っても何十メートルもある。

いくらこの場所が下にエルロー大迷宮を有する遠浅の海だとしても、海中に浸かっている部分も含めれば百メートルを軽く超える幾多もの大樹が、飛沫を滴らせて鋭利な枝葉を伸ばしていた。

判断が一瞬でも遅ければ串刺しにされていただろう光景が、一目瞭然と周囲に広がっている。

自由に飛翔出来る空間は限定され、大地そのものが牙を剥いたかのような鉱石の檻。

その中心には、必ず殺す誰一人逃さないと、冗談みたいな出力が装填されている三つの砲身が。

「面白え。上等だ、その首ごと全部へし折ってやるよ」

闘志を滾らせ、鋭い眼光で石林の向こうを見据えるユーゴー。そして石林ごと砕きながら震動波が放たれた。

破壊の余波で、射線上の周囲にも散弾銃のように鋭利な岩石片が飛び散っていく。

風の悲鳴を奏でながら、炸裂していく破壊の渦。

それを避けても、拡散する岩石片が襲いかかり身を斬り裂くという二段構えの攻撃は――

「当たるかよッ!」

二十、三十と振るわれる鉄拳の驟雨。

それによつて当たる軌道の破片全てを粉碎して、ユーゴーは最短距離でケルベロスへと向かつて駆け抜けようとする。

当然、それを黙つて見ている訳も無く、迎撃は思いもよらない別方向から突き出るのであった。

「――危ねえッ!」

身を屈めて、前方へと飛び込むように前転するユーゴー。

背後を見れば、ちょうど首が通つたであろう位置に、まるで刀のような岩枝が伸びており、その枝は近くの幹から新たに形成されていた。

まさに剣林とも言うべき枝葉に、たたらを踏まざるを得ない。

そこへ狙いすましたかのような砲撃が襲い来る。

「大丈夫ですか?」

「ああ。だがまあ――」

なんとも動きづらい。

見ればケルベロスの砲撃にて碎けた箇所にも、石林が蠢き新たな幹と枝葉を伸ばして、障害物と武器を形成していくのが映るのであった。

かといって、慎重に動けばそれでいいとも言えない。

何故なら――

『――!!』

自身で作りに出した鉋石の樹林を、まるで小枝か何かのように碎き折りながら、ケルベロスが強襲してくる。

そして振り下ろされる巨爪を回避して、すれ違いざまにカウンター
の鉄拳と魔法はケルベロスへモロに直撃するもの。

「チッ、硬つてえな」

「普通の毛皮なんかじゃ無いっすね。焦げ目一つ付かないなんてどう

なってるんすか」

自ら鉱石の剣林に突っ込んでいったように、ケルベロスが纏う毛皮は生半可な攻撃など一切通さない頑強さだった。

魔法を減衰させる獣毛、その下には刃を通さない龍鱗装甲、そして衝撃を殺す分厚い皮下組織。

まともにダメージが入ったのはユーゴーの初手の一撃くらいで、それさえも化物らしい桁外れのタフネスさの前には、雀の涙程度でしかなかった。

回避も、攻撃も、集中していれば何とか可能。

このままギリギリの綱渡りで持ち堪えるのはいいが、しかしそれではジリ貧だ。

逆立つ鬣はまるで巨人のヤスリのように空間を削り、反転する際の龍尾は致死の圧を纏いながら振り回され、鉱石の大樹を根本から破砕して質量兵器を無造作に作り出す。

向こうの攻撃はどれもこれもが一撃必殺の威力なのに対し、此方ほどの行動にも全力で当たらなければ一つのミスで死へと一直線の、端的に言って絶体絶命な状況。

当たれば死ぬ類いの攻撃は回避しているものの、避けきれなかった小さな石片が肌に裂傷を幾多も刻んでいく。

「舐めんなアツ!!」

急所のみ当たる破片をガードして、ユーゴーはケルベロスへと突進する。

身体を強かに打ち据える礫の雨霰、その衝撃が骨を軋ませ痛みが走るが、意志力で捻じ伏せ突き進む。

「おおらあああツ!!」

堅く拳を握り、横合いから迫る左の首を殴って止める。

巨大な牙が衝撃で静止した瞬間——殴った拳を開いて毛を掴み、全身をバネのように使いながらユーゴーはケルベロスの頭上へと登り込んだ。

そこから繰り出される怒涛の連撃。

脳髓を液状化せんとする鉄拳の嵐は、減衰されようとも関係ないと

ばかりに打ち込まれ、一つの首の頭蓋を凹ませるほどだったが。

「駄目か……ッ!」

その巨体を大きく振り、立つ足場を大きく揺さぶられた事によってユーゴーは振り落とされてしまった。

投げ出された空中で受け身を取るが、そんな明確な隙を獣は見逃さない。

「やべッ」

獣の直感のなせる技か、体勢が崩れたユーゴー目掛けて最短距離で放たれていた獣爪。

瞬時に身体を捻って回避するも、鋭い爪は脇腹を掠めて肉を抉る。

「ツウ、くっそ——」

痛手ではあるが、まだ耐えられる範疇。

そう思っていた攻撃だったが、本当の恐ろしさはそれだけでは無かった。

「がはッ!?!」

盛大に吐血するユーゴー。

激痛が治まらない腹部を見ればドス黒く変色しており、感覚で内臓が傷口から入り込んだナニカで汚染されようとしているのを理解した。

「ぐッ、おおおおッ!!」

即座に傷口に拳を突っ込み、腐った内臓を抉って捨てる。

汚染の大部分を除去し、治療魔法も使い侵蝕を押し留めるが、結果失った血肉と生命力は遥かに大きな代償を支払うことになった。

そして身をもって味わった事により、先程の現象が一体どういうものなのか、ユーゴーは察するのであった。

「毒、だと……?」

システムで再現された、毒という状態異常では無い。

人体に有害な重金属による鉱毒、それがシステムの影響を無視して恐ろしい速度で体内を汚染していき、細胞が機能不全を起こし血肉が腐っていくのだった。

ケルベロスが持つ爪牙、その全てが毒性を持つ重金属で構成されて

いるのだろう。

「触れるもの全てを穢す大地の呪い、それこそが地獄の門番たる翠魔の司る呪詛なのだ。」

「な、え……う？」

「なんじやと……っ、身体が思うようにっ」

見れば、オーレルやロナント、龍たちも最初の頃より動きに精彩を欠いていた。

戦闘を始めた時には気付きもしなかったが、目を凝らせば空気中に舞う微細な粉塵がモヤのように充満しはじめており、その粉塵を彼女らは知らず識らずに吸い込んでいた。

それが一定限度を超えたがために、激痛と腐敗の呪いが発動する。ゆえに呼吸困難に酸欠そして麻痺と、多重苦の呪縛がケルベロスと対峙する全てへと掛けられていたのだ。

魔に染まった汚染物質が肉体内部に入ったからなのか、伝わってくる思念の波濤。

狂えし魔性が放つ滅殺の狂気。

穢れよ、穢れよ、大地の中で眠っていた穢れが目覚める。

山脈を切り崩し我を起こしたのは誰だ？

翠が消える、生命が居なくなる。

強欲さが自然を破壊し、秘されし鋼を望むのか。

そんなにも大地の恵みを欲して盗掘するのならば、いいだろうくてやる。

無惨に抉られた自然が全ての生命を巻き込み、猛毒の牙を剥く。生命よ、死ぬがよい——掘り起こされた大地の怒りを思い知れ。内から腐り落ちる激痛を味わうがいい。

「ちっ、くそ——ッ」

精神へと直接叩き付けられる魔性の激情。

殺意で眼球を漆黒に染め、猛毒の唾液を牙から滴らせる。

そう、故にこれは地獄の門番。

大地の宝物を守護し、不遜な盗人へ誅戮を下す番犬なのだ。
そして反応の鈍ったユーゴーへ、視界を埋め尽くす獣の口内が迫ってくる。

回避しようとするが、蹴り出そうとした脚は痙攣していて、上手く力が籠められず空を滑る。

手足が震える、神経に電極でも差し込まれたかのように、何故か身体が思い通りに動かせない。

侵蝕する毒素が神経系まで達したのか、指先の感覚さえも覚束ないのだ。

「殿下っ！」

「あの馬鹿……っ！早く逃げるっす!!」

もはや苦悶に苛まれる身体は言うことを聞かない。

であれば――

『G a a a ——ッ!!!』

「……避けられねえな」

末路を悟ったユーゴーは、薄く笑う。

その胸中に去来する感情は本人以外分らない。

そして――大地の裂け目の如き顎門は鉷毒の牙を噛み鳴らし、愚かな人間を一口で飲み込むのであった。

翠魔ステュクス・カロン

少しばかり時間を遡って——この領域へ突入した直後の頃。

あの場にいた上位翠魔のもう片方。

そちらにも、相對する存在達が交戦を開始していた。

逆巻き渦巻き、唸る大海。

総身の長さは大都市をも軽く横断してしまうのではないかという、尋常ではない大きさの海蛇が身をくねらせるたび、海は荒れ狂い大津波を引き起こす。

胴の太さだけを見ても、大の大人が手を繋いでも数百人単位でなければ輪を作ることすら不可能そうな体躯である。

その巨体と内包した膂力だけでも脅威だというのに、死界の川たるステュクスが持つ殺戮兵器は他にもあった。

海蛇の龍鱗を埋め尽くすかのように体表へ貼り付く、化物サイズのフジツボの群体。

それが虚ろな闇を堅固な殻から顔を覗かせ、敵手へと向けていた。

空を引き裂く、塵殺の水流が幾条も踊り狂う。

狙いも曖昧に無造作に放たれる、超々高加圧のアブシレフジェット切削水流。

ウォーターカッターという言葉の方が馴染みあるその現象は、射程に捉えた獲物を水に混じった死滅の粒子で粉微塵になるまで削り殺し、血の赤色すら残さない殲滅性能を見せつけていた。

次弾装填にほんの少しの溜めがあるが、その隙も隣接する別のフジツボから切削水流が間断なく放たれるとくれば、迂闊に近づけば蜂の巣より酷いこととなるだろう。

全方位に放射される対空砲が、幾千もの弹幕となって海から空へと破壊の雨で埋め尽くす。

それこそステュクスが搭載した塵殺兵装カロン。

都合九千四百余りの砲門が、機械的な殺意を蠢かせ氾濫していた。

まさしく海蛇という形をした超弩級戦艦そのものと言えよう。

そして戦艦というのなら、敵を確実に撃滅する必殺の主砲も当然の如く備えている訳で——

「――避けなさいッ！」

ソフィアの喝が響く。

それを掻き消すかのように直後、波飛沫とともに轆碎の大海嘯が爆ぜた。

ステュクス・カロンの顎門が煌々と不吉な光を灯し、放たれたのは万物を分解する赫黒の閃光。

水平線の彼方まで届く射程をみせ闇へと呑み込む奔流は、戦慄の一言。

今もまた、逃げ遅れた数匹の龍の生命が散華した。

無作為に選ばれる抹殺対象に差別も優劣も無く、激流が通り過ぎる度に平等に死へと誘う。

それは冥界^スを流る^{テユ}死の大河^クと、生者^カを彼岸^ロへと運ぶ渡^シし守の如く。

この場合はステュクス・カロンの巨大さと位置関係も相まって、最も人が多い戦場といえる。

だが、そのような怪物と対等に渡り合えているのは、ソフィアとメラゾフィス、それに水龍の長イエナだけだった。

それ以外では所詮、有象無象、烏合の衆。

己の身を守るのに精一杯であり決定打を与えるには、とてもではないが力不足でしかなかった。

「畜生ッ。なんだよこれ、俺たちじゃ手も足も出せねえって言うのか……ッ」

「泣き言言わないっ。けど、これじゃあ何もつ、くうう!?!」

クニヒコとアサカは、背中を貸してくれている龍にしがみつきながら己の無力さを噛み締める。

S級冒険者間近と持て囃されようと、所詮それは人族基準での評価。

神話の戦いには、まるで実力が足りていなかった。

これこそが神話級。

人類には対処不可能と謳われる怪物の、純然たる暴威の嵐だった。

——しかし、そんなこと関係ないとばかりに艶やかな声で狂喜の音色を謳い上げる者も。

「あつはあはははあああつ！　　“死ね”、“死ね”、みんな“死んじやえ”えッ、あはははははっ!!」

まさしく暴走しているとしか言いようのない狂態で笑い声を上げるのは、スーレシア。

魔力の籠もった命令が翠魔を射抜けば、自らの肉を喰い破り同士討ちを始めていく。

これら魔性らは作られた存在だからなのか精神干渉への抵抗が薄く、支配者スキルである色欲の絶対支配に容易に嵌っては、熱病の如く狂宴を繰り広げるのであった。

それによつて横槍を入れてくる小型翠魔は少なく、ソフィアたちが海蛇の相手に集中出来る状況を作り出している功労者なのだが——

「ああもう——くそッ、クソッ、邪魔、邪魔！　さっさとスーの前から消え失せろおおッ!!」

「荒れてるわねー。ほらほら、お兄様のための露払い頑張りなさい妹ちゃん？　じゃないと褒めて貰えないわよ?」

「言われるまでもないのよ、この毒婦めッ！　　“死ね”え！」
「残念残念、効かないわよ」

「キイイイッ!!」

敬愛する兄様が近くに居ないからか、内に秘めし殺意と憎悪を滾らせて皮肉を囀るソフィアへと金切り声で言い返し、翠魔を次々と支配しては自死させていく。

まるで暴虐な女王のように、痲癩を発露させながら幾度も幾度も下される死の宣告。

スーレシアがそうなっているのも、当然理由があった。

それは、宇宙船から出発する寸前にまで遡り——
敬愛と憎悪と独占欲がごちゃ混ぜになった、愛しの愛しの兄様から、力を貸してほしいと真摯に頼み込まれたからだ。

自身の願いを拒絶されたことで、愛憎入り交じる感情をスーレシアは抱いていたが、それを正面から受け止めつつも決して聞き入れるこ

とは無く、シユレインは辛抱強く説得を繰り返した。

そして妥協とも言うべきか折衷案ともすべきか、この大厄災を乗り越えた先で気の済むまで兄妹二人の決着をつけようと、それを約束して協力を取り付けたのだった。

スーレシアとしては、そのまま兄と同行しようとしていたのだが、それに待ったを掛ける声が。

アリエルの指示でスーレシアはソフィアと同じ場所に配置が決められ、途中で紛糾騒乱が二つや三つあったものの、結果は現にこうしてソフィアに無理矢理引き摺られながら戦場に連れ出されたのだった。

それゆえ、スーレシアは様々な溜まりに溜まった不満を大爆発させ、今の狂乱を発症しているのだった。

「まあ、勇者くんから拒絶され発狂してる妹ちゃんをいざとなったら止められるのは、現状私しかいないからなんでしょうけど」

氷狼の爪大剣を手に襲来する小型翠魔を切り払いながら、背に広げた血の翼で姿勢制御と攻防を同時にこなしながら、踊るように空を駆けながらソフィアはぼやく。

この采配をしたアリエルにほんの少しの愚痴を零しつつも、視線は険しく海蛇を睨んでいた。

「本来なら、こういう相手にこそ一番刺さるはずなんでしょうけどね——嫉妬は」

素晴らしきものを引き摺り落としたという呪詛の念が、ステュクス有能力を封じて絡みつかんとする。

だが海蛇とフジツボの化物の猛攻は僅かな減退無く、今もなお荒れ狂ったままだ。

一応鑑定は通るので、覗き見たステュクスとカロンのステータスを簡潔に言い表すのなら。

「あれらの技、全部スキルじゃなくて物理的に構築されたものかどうかの？ ——っと」

常態で桁外れのステータス値、数万にも上るHP、上限無き無尽蔵のSP……

それらだけでも厄介だが、なにより驚くのはそのスキルの少なさだった。

死滅の血液、腐蝕粒子展開……たったこれだけ。

僅か二つのスキルしか保有しておらず、そのうちの片方だけでこの状況なのだ。

「もし仮に、腐蝕粒子展開じゃなくて死滅の血液を封印していたら、初手の時点で全滅していたでしょうね」

でなければ、戦闘区域全域を覆い尽くす腐蝕属性の死霧が、自分たち全員を等しく三途の川へと連れ去っていただろう。

腐蝕属性の切削水流と波濤砲を封じれたとしても、残ったスキルで迂闊にも近付いてきた生命を纏めて殲滅する。

たった二つのスキルしか持たないのではない、たった二つスキルだけで十分なのだ。

この怪物とっては。

『S i z i s i s i i i i』

まるで嘲笑うかのように、多分に擦過音が混じった鳴き声を上げるステュクス。

そして再び吹き荒ぶ、死滅の暴風雨。

破壊と死を撒き散らす嵐が横殴りに降り注ぎ、止まるところを知らない。

体表に食い込むほど寄生したカロンが、ステュクスの穢れた血を吸い上げ、放つ。

その一連の攻撃手段は、弾幕の物量を鑑みるに宿主を殺すほどの失血を起こすはずだがしかし、死の海蛇は精彩を欠く様子など微塵も見受けられない。

——もとより、ステュクスとカロンはそういうコンセプトで設計された怪物である。

死の雨を降らせるカロンを多数搭載し、それを運用する無尽蔵の造血器官と心臓を駆動させる、恐るべき海上の移動要塞。

死滅の血液や腐蝕粒子を作るのにも海水さえあれば良く、水面下の体表から補給しては死の属性に染め上げ、弾薬と燃料にする工程に澱

みは一切無く。

こと周囲が海である限り、ステュクス・カロンの消耗など訪れることなど無いのであった。

「よもや、ここまで強大とは。——あなた達は引き返してもよろしいのですよ。お二方の力量では些か手に余るでしょう」

メラゾフィスが、翻弄されるがままのクニヒコとアサカに向かって撤退を勧める。

それは本心からの心配からであり、彼自身それほど余裕があるとは言えなかった。

集束し密度を上げた暗黒槍を、ステュクスに張り付くカロンの一つへ、彼は放つ。

極限まで高めつつしかしその本質は実体の無い闇だからこそ、黒き大槍は迎撃の飽和射撃に打ち勝ちながら、海蛇へと貫徹した。

しかし——それで得た成果は、全力を籠めた一撃で、ようやく砲台の一つが沈黙しただけ。

「……地道に、一つ一つ潰していくしかありませんね」

それは気の遠くなる作業だろう。

なにせ、カロンの数は万近くもあるのだから——

「いいヤツ、否だツ!!」

逆巻き轟く風雷が、切削水流を押しつけ雷鳴で蒸発させながら、カロンへ炸裂する。

発生元を見れば、雷龍の牙で鍛造されし魔剣を手に、限界を超えた行使にクニヒコとアサカ両名とも肩で息をしながら、メラゾフィスへと不敵に笑い返す。

「嘗めんじゃ、ねえぞツ！ これでも、冒険者だ！ 逃げる訳には……いかねえんだよツ！」

「そうよっ！ 依頼に失敗すれば、犠牲になるのはいつも戦う力を持たない人達……ならっ、戦うしかないのよツ」

不退転の覚悟を決め、毅然と胸を張りながら再度魔剣に魔力を充填していく二人。

そしてクニヒコは、内なる激情を叫びあげる。

「正直、まだ納得してねえ！ けどッ、こんな展開望んじやいねえんだよ！」

そうとも——抱えし復讐心について、未だ納得も割り切りも済んでいない。

しかし、だからといって自他もろとも世界が減じるなんて、真つ平御免だった。

「全部終わってから改めて、その澄まし顔ブン殴ってやる。だからよっ、俺が復讐を遂げるまで、くたばるんじやねえぞ、メラゾフィスウウツ!!」

ざわめく大気とともに、爆雷と暴風の波濤が再度震撼する。

駆け抜ける疾風迅雷が、ステュクスの表皮を蹴りカロンをミキサーに掛けたように粉碎した。

二度の大技で、もはや魔力など空に等しいが、二人は知った事かと滾り続ける。

その姿を見て、メラゾフィスもまた口端に微笑を浮かべて告げた。

「いいでしょう。その時は気の済むまで、何度でもお相手しましょう。

ですから、貴殿も……」

「当然だッ！ 勝つぞッ!!」

「ええ、勿論です」

——そうして従者と冒険者達は、限界を幾度も超えながらカロンを削り落としていく。

忍耐の積み重ねで会得した努力の技が、復讐心を研ぎ澄ませ練りに練り続けた風雷の爆発力が、不可思議な噛み合いを見せながら、死界の川へと叩き付けられていた。

『普段なら優雅にダンスのお誘いでもしているところですが、そうも言ってられませんわね』

まるで東洋龍のような細長い体躯の水龍が海水を操作して、ときに壁に、ときに鞭にと変幻自在に蠢きうねらせながら、憎々しげに呟く。

全長数百メートルにも届く美麗な龍、彼女こそが水龍の長イエナ。

広大な海洋を管理する水龍を統括する立場の彼女は、それに見合っただけの実力を備えているのだが生憎とステュクスとは相性が悪く、思うように実力を発揮できていなかった。

支配下にある水をステュクスへと放つ。

だが、それは海蛇へと着弾した途端に強引に支配権を奪われ雲散霧消し、逆に吸収されて無為へと帰した。

イエナの基本技であり必殺は、高度に極まった液体操縦であり、相手の体内へと侵入させた水による内側からの爆散や窒息こそが真骨頂であった。

しかし、ステュクスへと接触した途端に支配権を奪われ、水による内部破壊どころか、逆に切削水流の材料を与えているだけではなかった。

『チツ！ やはり水は駄目ですか。ならニアの真似事ですけど——過冷、凝縮、凍り付けッ！』

先程と同じように飛翔する水。

再び同じような結果になると思われた水弾だが着弾から一転、氷結の結晶華がステュクスの体表に幾つも咲き誇った。

『……どうにも、わたくしでは勝てそうにありませんわね』

さっきの手応えを見て、イエナはそう端的に評価する。

何故なら、凍らせた部分も身動き一つで容易く砕き割り、さしたるダメージとは言えなかった。

それでも、イエナの声色に焦りは無い。

『まっ。勝てないのなら、効果的な嫌がらせをするまでですわ』

号令一つ、一斉に放たれる複数の水龍からの、十数条の冷凍ブレス。最も管理する領域が広く、最も数が多い龍種、それが水龍。

だからこそ古龍の数も最多であり、神話級に到達した水龍それが総勢三十七もいるのだ。

その半数近くからの同時攻撃には、さしもの死の海蛇であろうと僅かに動きが鈍る。

当然、その隙を吸血姫は見逃さない。

「よくやったわっ。これで——」

大剣が流麗に閃き、切削水流を凍らせ反らし強引に進路をこじ開ける。

このチャンスに全霊を懸けんと、ソフィアが身体を捻り大剣を振りかぶりながら、ステュクスの頭部へと流星のように墜落していく。

このまま開きにしてやると、闘争心で沸騰する血液。

それとは対照的に、冷気を纏う大剣は絶対零度を刀身に集束している。

「砕けえ散いいれエエツ!!」

これにより、翠魔討滅——そう、誰もが、感じた、——刹那。

『Z i i S i s i s i s i s i s i s i s i s i i i i a a a a ——』

!!!!

狂乱の大爆破が、空間を埋め尽くした。

「んなツ!」

「お嬢様!」

「ぐあああッ!?!」

「きやあああああ!?!」

「くううっ!」

『そんな馬鹿な!』

それにより——

必殺目前であつたソフィアも、追撃の構えだつたメラゾフィスも、風雷を放つ寸前のクニヒコとアサカも、自害の呪言を放つていたスーレシアも、油断なく警戒していたはずのイエナも、全員が全員驚愕の中吹き飛ばされた。

咄嗟に大剣を盾にして、被害を抑えたソフィアは叫ぶ。

それは、先程の現象が起爆する瞬間を直接その目で捉えていたからで——

「まさか、脱皮したとでも言うの!」

大剣を落とす寸前、ステュクスの鱗が内側から急激に膨張するのを

目撃した。

そしてそれが内部からの圧力でボコボコと膨れ上がり、激烈な自爆を行ったのだった。

「うっ、つう——」

至近距離からの爆発に揺さぶられ、思わず呻きが漏れるソフィア。凄まじい衝撃で内臓の幾つかが破裂したのか、口端から血が垂れる。

しかも、自爆の際に飛び散った破片には腐蝕属性の性質もあつたのか、防御力や耐性を貫通して大剣では守りきれなかった脚や肩の末端がグチャグチャに蹂躪されていた。

「こんな、ものおおおッ!!」

穴だらけとなつて使い物にならなくなった両足を血で覆い、真紅の義足を構築する。

この程度の負傷など傷にも入らないと、反撃に転じようとするが――

「お嬢様、避けてくださいッ!!」

メラゾフィスの必死な声に、反射的に回避を選択する。

次の瞬間、真横を通り抜けたナニカによって片腕が消し飛ばされた。

「なに、が……」

掠れた吐息とともに漏れる戸惑いの声。

そして、失血しすぎたのか霞む視界に映つたのは、悍ましい形態へと変貌した海蛇の姿だった。

ドクドク、ドロドロと、まるで溶岩流のように蠢く漆黒の血液。

それが体表のいたるところから間欠泉のように溢れ出し、今しがた腕をもぎ取っていったのも、それだと認識した。

しかも今の一撃が血によるものであることが、ソフィアを更に苦しめる。

傷口より混じった死滅の血液が猛毒のように体内で血を汚染し暴れ狂うのだ。

溶けよ、腐れよ、海に注がれし穢れが汝の血肉を齧り尽くす。
大海原を汚すモノは何やらん。

澄んだ世界は混濁し、生命の揺り籠は崩壊する。
墮落が産んだ穢れは流れ流れて濃縮し、腐蝕の棘と化す。
もはや海洋に清廉な美しさなど、ありはしない。

濁りに濁った汚泥が、あまねく世界を穢し尽くさん。
生命よ、死ぬがよい——堆積した海の呪詛を思い知れ。
骸さえ溶け落ちる苦悶を味わうがいい。

思考に混じった狂気の波濤に、ソフィアは眉をひそめる。

ああ、うるさいうるさい。

そんなの、私の知ったことじゃないわ。耳障りなのよ、黙ってなさいッ！

しかし、それに一瞬気を取られてしまったのも事実で——

眼前には自らへと殺到する漆黒の奔流。

もはや防げないし、回避もまた不可。

このまま呑み込まれて、細胞の一片すら残さず融解する敗北が、彼女へ訪れようとしていた。

「っ……く、はは」

「ソフィアお嬢様ああっッ!!」

乾いた声が漏れ、咄嗟に伸ばしたメラゾフィスの腕も虚しく届かず。

予定調和のように——彼女は死の濁流へと押し流された。

翠魔ニユクス

東の洋上、その空でも熾烈な争いが起きていた。

カサナガラ大陸側の遠洋では、今も激しい争いが繰り広げられている。

それら二つの戦場も地獄なら、ダズドルディア大陸側である此方側もまた地獄の光景に他ならなかった。

あれらが大地、海洋の魔性であるなら——此方は空を司る魔性が踊る、凍えし闇夜であった。

『KYahahaha hahaha hahaha hahaha hahaha!!!』

震撼する耳障りな嬌声とともに、宵闇のごとき極低温の奔流が空間全域を薙ぎ払う。

黒い光線という矛盾した存在が、逃げ場のない攻撃範囲と射程で対峙するもの全てを氷像へ凍てつかさんと、唸りを上げた。

『蜘蛛のっ!』

「ただの冷気なんかじゃ、私の腹も下せやしないよっ! ——ッ!!」

前に出たアリエルが、暴食を発動させて空間ごと齧り尽くし、極冷を呑み干す。

禍々しい奔流は最初から存在しなかったかのように消え失せ、肌を撫でる寒波だけが夢幻の類いでは無かったと証明しているだけ。

これこそアリエルの支配者スキル、暴食のチカラ。

硬度や質量を無視し、仮想の口腔で範囲全てを自らのエネルギーに変換して一方的に捕食可能なスキル。

彼女の原罪の象徴であり長年連れ添った信のおける相棒である。

『やっつるううー!』

「ほら、ヒュバン! もつと接近しろッ! ここからじゃ本体には届かないんだからッ!」

『アイアイサーッ!』

アリエルと軽妙な掛け合いをしているのは風龍の長ヒュバン。

彼は弱体化しているアリエルを背に乗せ、芸術的な軌跡を魅せながら超高速で飛翔する。

猛烈な吹雪で覆い隠しながら氷杭が音速を超えた速度で襲来し、空を覆う暗雲からは突如雷霆が降り注ぐが、それらをヒラリヒラリと躲しながら、弾幕の雨を物ともせず二人は颯風と化す。

「さすが邪神の仕込みとでも言うべきかねえ？ 名に違わぬ化物ぶりだよ、まったく」

そう視線を向けた先にはアリエルが語った通り、本能的な怖気が走る魔性の姿があった。

それを一言で言い表すなら、妖精のようなナニカだろう。

夜空に輝く星々と闇を凝縮したような、超自然的な妖しさと底知れない怖さを内包した闇黒が、妖精の姿を形取っている。

四肢も顔も余すところなく漆黒であり、まるで影法師かなにかにしか見えないのだが、唯一口腔と瞳のみ燦爛とした青紫の光を放ち、不気味な笑みを浮かべているよう。

そして、ガラスを擦り合わせたような甲高い嘲笑でケラケラケケタと無邪気に醜悪に、此方を見下すように闇を翻しながら踊っていた。

ニユクス、夜の女神——そうした御伽噺を、彼女は融合した記憶から掘り起こす。

それは地球と呼ばれる惑星の神話であり、情報の源泉については白織本体から分化した体担当が保有していたサブカル由来の雑学なのだ——

「これ夜っていうか、冰雪系だよね!？」

空間が軋む音すら聞こえるような吹雪舞う極冷却。

冥府の魔精に近付くほど強まる気温低下は既に零下を容易く超え、吐いた息も白く身体の末端も凍傷を起こしかけている域だ。

もはや氷獄が顕現したかのような有様で、ニユクス直下の海面も氷河の如く凍りついていた。

身体の震えごと熱を奪い尽くさんと肌に霜が浮かぶ。

眼球すらも凍ってしまいそうで、瞼を閉じれば二度と開けられまい。

その異常なまでの冷却現象は、魔法やスキルで引き起こせる領域を

遙かに超越していた。

『……こりゃ、単なる氷魔法って訳じゃねえなあ。むしろ風魔法の領分だ。この強烈な気圧変化と下降気流、純粋な自然現象も込みな冷却だぜ』

独りごちるように呟いたヒュバンの言に、アリエルは問い返す。

「分かるの!？」
馬鹿ヒュバンのくせにつ!？」

『おいおい。馬鹿だという自覚はあるが、俺様の得意分野くらいは学があるぜ?』

いわく――

天蓋を覆い尽くすほど積乱雲、そこから下降気流の流れが生まれ、高高度で凝集固化した氷粒が落下してくる。

それ自体も宇宙に程近い領域から吹き下ろす超低温だというのに、落下中の氷粒は融解しながら落ちていき、その際に多量の熱量を奪い、乾燥した空気を抜けるときにも気化熱で更に熱を奪う。

その他諸々の仕組みもあるが、長くなるので割愛――

ゆえに、地上に迫るときには極寒の空気と化しており、それを集束させ留めた結果がこの氷獄の仕組みだとヒュバンは語った。

大気を利用した気象兵器。

暴風竜巻も、凍らせるのも稲妻を発生させるのも、全ては世界に満ちる大気の対流によるもの。

超大規模な環境操作によって世界を蝕み、全生物を氷河期に呑むまで氷獄を顕現させる。

それが冥府の魔精ニユクスの、本当の能力であった。

『おかげで翔ぶのも一苦労だ。……ていうか、さつきから俺様の後ろを付いてきている奴! お前なんで此処にいらんだよツ!』

「オヤオヤ? 御力添エガ必要カト思ツタケレド、不要ダツタカナ?」

後方へ向け怒鳴るヒュバンに、飄々とした掠れ声が返答する。

本来発声に適さない声帯で無理矢理に言葉を紡いだような歪な音の主は、闇龍レイセ。

龍人ともいうべき人の体格と形態を選んだかの龍は二本の脚で空を蹴り、ヒュバンの通った後をなぞるように付かず離れずの距離で追

いかけていた。

『お前、防衛はどうしたんだよっ?』

「ナアニ、数少ナイ部下ニ任セテキタサ。ソレニ何ブン、僕ハ元カラ人型ダシネ。向コウハ不向キダツタカラ適切ナ場所ニトイウ奴サ」

肩を竦めておどけるように一笑するレイセに、ヒュバンとアリエルは訝しげな態度を崩さない。

レイセの言う通り能力的に多数を相手取るより、とある目的のために一対一に特化しているのは知っているが、だからといってそれが全てでは無いだろうと訝しげに瞳を細めていた。

「ソウ邪険ニシナイデヨ、純粹ニ君達ガ心配テ来タンダカラ。……實際、アレニ当タルノ二人数ハ多イ方ガ良イデシヨ?」

ぼやきとともに見遣る先には、当然ニユクスの姿。

冷気と闇を纏い、氷界の冥府で楽しげに傲岸不遜に、今も終わりのく輪舞曲ロンドを踊っている。

そしてヒラリクルリと四回転を舞えば、両の手と背後に浮かぶ合計六つの大氷球が――

「来るよっ!」

内部に圧縮した冷気を解放して放たれる、絶対零度の砲撃。

それを再び暴食で打ち消しながら、彼らは攻撃が届く射程に収めるため疾走する。

「くっそ。なんでこっち側がニユクス単独なのか、これを見れば理解させられるよっ!」

彼らはニユクスへと向かって飛翔している。

しかし――その距離は未だ遙かな遠くであり、望遠で姿を捉えなければ点にしか見えない距離が開いていると言えば、どれだけ彼我を隔てる空間の広さについて実感出来るだろう。

『干渉範囲が広すぎんだろっ!』

「圧倒的ナマデノ環境支配ソレニ加工高精度ノ狙撃トクレバ、広域殲滅ニ最モ特化シテイルノガ、コノ魔精ナンダロウネ」

冥府の魔精と接近戦をするためには、甚大な距離の壁を詰めねば話にならず。

遠距離戦で対処しようにも、射程は向こうが圧倒的に上手で、威力精度も凶悪。

しかも充満する冷気で、熱と体力は刻一刻と奪われるのだから持久戦は最悪中の最悪だろう。

どこまでも無慈悲に徹底的に、純然たる性能差と敵手の強みを押し付けられた状況だった。

圧倒的な不利、突破口は針の穴ほどあるのかも怪しく、勝機は遙かな先。

だとしても――

「それでも進むしかないでしょッ!! 行けえ、ヒュバン!!」

『否もねエ! カツ飛ばすぜツ、付いてこれるかッ!?!』

「無論、必死ニ喰ライツクサ!」

放たれ、飛来する、氷獄の大波濤。

それに真正面から臆すること無く、気炎を上げて立ち向かう。

脇目も振らず、愚直なまでに真っ直ぐに。

氷杭を破碎し、乱気流を制し、極冷の奔流を切り裂きながら猛追する。

彼らはまさに、空を一直線に駆け抜ける流星だった。

『Kihii? kyahahahaha!!!』

滅殺の氷獄砲を幾度も放てど、やたらしぶとく生き残る抹殺対象を認識し、ニユクスは耳障りな嬌声で嗤いながら次の一手を構築させていく。

そうして放たれたのは、散弾のような面制圧の氷晶弾雨。

しかも追尾能力まで備えているのか、的確に此方を捉えて穿とうとしてきた。

前方上下左右と様々な角度から襲い掛かり、逃さない。

身を振じ込める隙間など何処にも無く、暴食で消しきれる物量と範囲では決してなかった。

氷晶がアリエルたちを針山の如き不格好なオブジェにするかと思

われた、その間際――

「これで仕留められるなんて、嘗められたものだねっ!」

空に、幾条もの銀線が閃く。

四方八方に空間を割り割くそれは、アリエルの周囲三十メートル圏内に到達した水晶弾を残らず砕き割り、絶対の防空圏を作り上げていた。

銀線が閃くたび、アリエルの手指が残像を描くほど高速でかつ繊細に動く。

そして氷弾の嵐雨を踏破した際、一瞬だけアリエルの周囲に垣間見えたのは、揺蕩う蜘蛛糸。

「弱体化しようとも、鍛えた技まで衰えるはずないでしょ」

アリエルがやった事は単純である。

ただ操糸で神織糸を手繰り、斬撃と破壊属性を極限まで高めた糸で微塵に細断しただけである。

それが入神の域で行われたものだから、視覚ではまるで氷晶が勝手に消失していくように見えるほどであった。

謙譲で魂を削りスキルの殆どを失おうとも、培った技量は僅かな翳りも無いのだと、アリエルは高らかに示していた。

『あんま見下してつと、痛い目みるぜ?』

「ソウ言ウコトツ」

さらに続く第二撃も、暴風が的確に撃ち落とし、闇の弾丸が僅かな討ち漏らしも砕いていく。

アリエルが見せた気概に応えるように、ヒュバンとレイセもまた気炎を滾らせる。

彼らは止まらない、さらにさらにと加速を続ける。

大出力の大技は暴食で、範囲と手数重視の技では研鑽された戦闘技術によって蹴散らされた。

アリエルたちの分析通りなのか、ニユクスの攻撃は超々広範囲殲滅に偏っており、大氷球からの極大冷却砲以外は威力が何段も落ちる攻撃だった。

それでも人族や魔族の兵士達を軽々殺せる代物だが、あいにく此処にいるのは人外側の存在。

この程度の小技では、命を刈り取れるなどと思い上がりも甚だし

い。

ゆえに、彼らは順調に進軍を遂げ――

「捉えたぞッ!!」

冥府の魔精との距離が、遂に一キロメートルを切る。

彼らの速度なら、あと数秒も掛からずに肉迫出来る距離まで近づいた。

迎撃の攻撃が道を阻もうとするが、もはや此処まで来れば無駄な一手。

気配を読んで回避し、潜り込み、斬り払う。

そしてそのまま氷雨を突破し、眼前で無防備に揺らめく魔精へ――
彼らの必殺が叩き込まれた。

ヒュバンとアリエルの溜めに溜めた一撃が先立って発動する。

風刃が胴を両断して、暴食がニユクスの頭部を根こそぎ喰らい尽くす。

入れ替わるように疾駆したレイセが、ニユクスへと肉迫して――

闇と腐蝕と外道属性の三重奏を練り上げた魔拳が、胸へと巨大な風穴をブチ抜いた。

渾身の三連撃が狙い変わらず炸裂し、冥府の魔精を打ち砕いたのだつた。

「これで――」

『――終わりだッ』

彼らの必殺は、もはやオーバーキルとも言える領域だった。

歪な笑みを浮かべていた頭部は完全に消失し、胸部は根こそぎ粉碎した。

残っているのは両腕の末端と分断された下半身くらいなもので、誰がどう見ても致命傷であると疑わない光景だった。

だけど、しかし――

「ッ！ マズイ、逃ゲロ二人トモッ!!」

予想外な手応えの薄さに、レイセが警告を上げるも遅かった。
大氾濫する闇の霧。

残った身体から吹き出した粒子に呑み込まれ、レイセの姿は見えない。くなり。

即座に反転しようとしたヒュバンとアリエルにも襲い掛かる。

「ぐう……ッ!?」

『掴まれ、蜘蛛のっ!!』

全力の回避運動で内臓と三半規管を揺さぶられながら、アリエルとヒュバンの二人は辛くも命を繋げた。

しかし、支払った代償は重く身体に刻まれていた。

「ヒュバン……ッ!」

『喚くな……大、丈夫だっつーの。こんなの屁でもねえって……』

アリエルを守ることを優先したのか彼女はほぼ無傷なのに対し、ヒュバンは片目が失明し腹部は血塗れで内臓が飛び出している。

そして彼自慢の大翼は穴だらけのボロボロで、今にも根本から千切れてしまいそうだった。

なんとか体勢を整えた彼らに、無情な現実が視界に映った。

至近距離から闇を浴びせられたレイセの姿は何処にも見当たらず。

そして大爆発で撒き散らされた闇の霧が、個々に集束して姿形を描き出し、幾らか小柄で感じる密度も低い、数多のニユクスが宙に浮かんでいたのだった。

『レイセ……ちくしょう……』

「——ッ! そっか、群体っ」

何故それに気付かなかったのかと、アリエルは奥歯が砕けんばかりに歯噛みする。

その名前にも表れていること——翠魔の太源は誰であるのかアリエルは瞬時に思い出し、魔精の性質を見抜いた。

闇霧の集合体。

それは彼女が救い出したいと願う少女の、神格となつて獲得した体質と非常に酷似していた。

素体となっているのが闇か苔かの違いはあれど、どちらも身体を物理的に破壊されても致命傷にならず、僅かな断片さえあれば時間を巻き戻すが如く瞬時に修復してしまう。

単なる損傷では意味を為さず、全てを消し飛ばす高火力でのみ痛打となる特異体質。

それがニユクスに備わった基本的性能であり、体積の全てを潰さなければ決して死なない不滅の魔性なのだ。

——そうとも、翠魔とは主たる翠星が獲得してきた能力を元にして作られた存在である。

地獄の門番は、麻痺毒と土。

死界の川は、腐蝕と水。

冥府の魔精は、不死性と風。

最も適性の高い魂に関する能力——外道属性の能力を持っていないのが微かな救いだらう。

それまであれば、たった一撃貫うだけで問答無用に魂を砕かれ、即死していたのだから。

そして、アリエルとヒュバンを取り囲むように出現したニユクスらが、氷球を創造していく。

単一であったときより幾分か出力は劣るものの、弱った二人を瞬間冷凍するには十分すぎるほどの冷気が集束していく。

その絶対零度と共に、輪唱される呪詛の詩。

大気が凍てつき、キシギシとガラスに罅が入っていくような音が、空間を埋め尽くさんばかりに響き渡る。

ニユクス同士が共鳴しながら奏でられるそれは、冥府へ誘う魔精の葬送歌であった。

凍てつき、眠れ、穢れし天空は光を覆い隠す。

巡りし空を澱ませたのは、貴様らだ。

大気は捻れ狂い、星々は姿を隠した。

傲慢にも支配者を気取るなら、吹雪と極寒が汝に裁きを下さん。

天の恵みは、とうに愛想を尽かした。

ゆえに大地へ注がれるは、天球隈無く覆い尽くす狂乱の天災なり。

生命よ、死ぬがよい——積乱する天空の狂気を思い知れ。

髓まで凍えし極夜を味わうがいい。

「……ごめん、白ちゃん」

詫びるように、アリエルは小さな眩きを零し。

そうして——全方位からの飽和射撃に、アリエルたちは掻き消されるのであった。

転生者たち

そうして、彼らは敗北する。

勇者も白き神も、送り届けることすら叶わぬまま朽ち果てていく。彼らが負ければ、もはや翠魔を止めることは誰にも不可能となる。勇者と鬼人が目標を変え転進し、多大な消耗と引き換えに二体ほど撃破が可能だとしても、余力は皆無と化し。

ならばと、そのまま進めば上位翠魔四体を同時に相手取ることとなり、その四面楚歌な状況では勝算はゼロだろう。

いずれ上位の翠魔が大陸に到達し、神が相手となればもう一卷の終わりだ。

封じられた神殺しの機能が解禁され、立ちはだかる障害物を殺すために世界の命を貪り尽くしてしまうという、誰もが望まない結末へと至ってしまう。

そうなってしまうえば、救いは何処にも無い。

戦う、逃げる、どれも無駄。

死ぬのが、早いか遅いかの違いでしかない。

このまま何も為せず、届かず——世界は終焉を迎えてしまうだろう。

ゆえに、この世界の物語は幕を閉じようとしていた。

洋上、転生者たちの居る宇宙船。

空に浮かぶ魔法科学の要塞には、夥しい数の手足の無い歪な翼龍が群がり襲いかかっていた。

それは、この物体が世界にとって害悪な代物であるからに他ならない。

現在は長年掛けて備蓄したMAエネルギーで動いているが、根幹設計として星から生命力を吸い上げる装置が搭載されている以上、翠魔

が執拗につけ狙う理由は充分以上にあつた。

たとえアリエルが、出立前にロックを掛けていたとしても関係ない。

そこにある。

それだけで何を差し置いてでも破壊しに、翠魔は狂気を突き叫ぶ。

壊せ、消エロ、世界ヲ穢ス存在ハ許サナイ——

だが、そこまで狂的に襲いかかってくるのなら、こうも考えられる。

——人類を守る最前線の砦として、これはこの上なく堅城鉄壁であろう、と。

「撃て、撃てえっ！ よく狙わずとも撃てば当たるんだ、気にせずブツ放せッ！」

「ゲームとかと一緒よ。コントローラを動かして……マークが重なったら……撃つ！」

装甲に展開された迎撃機構が全力稼働し、幾条の光線を瞬かせる。

それを操るのはエルフの里に囚われていた転生者たちで、彼ら彼女らは砲台の操縦桿を握りしめガゴガコと鈍い音を奏でながら、引き金を何度も何度も引き絞った。

その彼ら彼女らの中心。

船を操舵する座席に座る小さなエルフの少女は、己のスキルと禁忌に映る戦いを見守りながら、祈り信じている。

「ユーゴーくん、ソフィアさん、クニヒコくん、アサカさん、アリエルさん………どうか勝ってください。必ず運命を変えてみせると、信じています」

たった今、彼ら全員が窮地に陥っているのを理解した上で、フィリメスは強く祈る。

まだ終わっていないと、曇り無く純粹に。

「この声が、この祈りが聞こえていないのは百も承知。でもっ、どうか届いて」

彼女のスキル生徒名簿に記された未来は、今や空白。

皆が大厄災に立ち向かい始めてからは、転生者たち誰か一人の未来

すら窺い知ることとは不可能になっていた。

先程まで記載されていた――

『ワールドクエストから降りるを選んだ人類が過半数を越えた。故に魔神翠星の最期の審判の鐘が鳴り響く。人類は滅魂の大波濤に呑み込まれ皆悉く消滅する』

――という一文すらも、残らず白紙に。

そして大厄災発動と同時に復活していた、苔森真理の名前。

記されていた死亡理由『大厄災最終フェーズの反動により、魂が崩壊して死亡』という文章も、補足のように書かれていた『現在彼女とシステムは暴走状態であり、その機能は全生物抹殺に固定されている。このまま進めばいずれ自壊するでしょう』という内容も、今では掻き消えていた。

未来はもう、何も分からない。

しかし――

「奇跡は必ずあると信じている。運命に絶対は無いんだって、知っている。――だから私は、皆が勝利する結末を、絶対に掴み取れるはずなんですっ！」

運命に必死に抗ってきた彼女は、諦めていない。

たとえそれが、何もかも踊らされてきたとしても、藻掻いた足跡と想いは偽りではないから。

だから願う、変えてみせてと――

「ああそうだ――俺たちにだって、出来る事がある！」

「そうよ！ もう、守られるだけなんて御免なのよ」

「こんな晴れ舞台、キメなきや男が廃るっの！」

「クラスメイトが頑張っているのに、あたしらが何もしないままとか、ありえないし！」

「ジャンル違いなんだよ、こんなシリアスなんか求めてねえ！」

「スローライフは少し退屈だったけど、世界の危機なんてお呼びじゃないわ！」

「うちらは何にも知らないけど、こんなの間違っているって分かるか

ら」

「里の暮らしだって、楽しかったし面白かったの。それが永遠に無くなるなんて嫌」

「そうね。私たちの未来、まだまだこれからよー」

「やりたい事、してみたい事、たくさんあるんだから、あんた達に託すわ！」

「進めシユン、みんな！ 世界は俺たちが守ってみせる。邪魔なんてさせない！」

勝て、勝って、勝ってくれ——勝利を願う大合唱。

想いを迸らせ、唸る激励の嵐。

転生者たち誰もが全員が、このような運命に屈しないと強く叫んでいた。

そして——シユレインの友達であるオギも、舞台に立てない弱者だからこそを呟く。

「戦う力を持ってない資格も無い。それで何処かほっとした気持ちもあつたんだよ。あんな危険などに行かずにすむってさ。

努力したこと無いし、命を懸けて戦ったことも無い。この世界ではあり得ないくらいぬるま湯に結果的に浸れていたってこと。与えられた仕事を熟すだけで、あとは何もしない。

言い訳になるけどさ、エルフの里で軟禁されてたから出来ることなんて何もなかったっていうのもあるけど、それでも何ら恥じていなかった」

だって、それ以上は面倒だから。

無理して痛い目を見るより、より安定した楽な道ばかり見ていた。

けれど今は、そんな甘いことに逃避するようなきじやないと、彼は思う。

「けどさ、あいつが頑張ろうとしている姿をみて、やつぱ駄目だと気付いたよ。ここで立ち上がらなきゃ、僕は何のために生きているのかすら分からなくなる。だから——僕たちなりの戦いをするまでだっ」

そうして再び集中して操縦桿を力強く握りしめた。

それを見つめるフィリメスの小さな肩に、そつと手を置くハイリン

スの姿が。

「良い子たちじゃないか」

「ええ、私にはもつたないくらいなの、自慢の生徒たちです」

朗らかに笑うエルフな先生と、優しげな表情で首肯する人族の青年。

ハイリンスは、自身が黒き龍神の分御魂わけみたまであることを明かしていた。

力などは人族の範疇に収まり、本体とは別個の意思で行動する存在ではあるが、その継承された知識は本物で、ファイリメスたちが知らないであろうこの宇宙船の操縦方法を教授していたのだ。

そのために、共に旅した勇者シユレインの弟君とは別行動となっても此処に残るといふ、彼なりの世界を救う最善手を選んでいった。

「ああ——だから勝つてくれ。シユンたちに希望を繋げ」

「負けないで、みんな。私たちに、輝く未来を信じさせてっ！」

二人の願いが、静かに熱量を伝播していく。

「私に出来ること、それは——」

独りごちるように呟くファイリメス。

自らの持つ支配者スキル救恤の、味方と認識する存在に回復能力を付与する効果の対象として、彼女は大厄災に立ち向かう全ての存在が味方だと、強く自己に言い聞かせていた。

ゆえに数が数ゆえ効果は若干薄まっているものの、人族魔族や龍種問わず全てに、HP超速再生LV1に相当する治癒を齎していたが、上位翠魔と戦う彼らには僅かな力添えにもなっていない。

それだけでは、届かないのなら——

「献上こそが、我が美德——私の力、彼ら彼女らへ譲り渡します！」

それは——支配者スキルを取得した際に得る、もう一つの特別なスキル。

禁忌を理解し、支配者権限を確立させなければ使用不可であり、使ってしまうえば魂を削るほどの反動を受けることとなるスキル群。

スキルの中には使用に際してデメリットがあるものがある。

その中でも、特殊スキルのデメリットは特段に大きい。

おいそれと使えず、使おうとも思わないくらいの反動が使用者に返るのだ。

ファイリメスの持つ献上とは、他者への力の割譲。

自身の魂を大きく削る替わりに、その力を増幅して相手に渡すスキル。

その倍率、なんと元の十倍。

それだけの力が、渡された相手の能力を底上げするのだ。

強力ではあるが、自身の命を考えるのなら決して使つてはいけなスキル。

それを、ファイリメスは迷いなく使用した。

「——ゴふッ」

「ファイリメスさん!?!」

「大丈夫ですッ」

口から血塊を吹き出すファイリメス。

自らが持つ魂の力を差し出し、さらに反動で魂が傷ついたのだから、その重篤なダメージが肉体にも反映されているのだ。

内臓の幾つかは、グチャグチャに潰れているだろう。

小さな身体に走る激痛は、想像を絶するほどである。

でも、彼女は倒れない。

意識を強く保ったまま、祈った。

「私たちは私たちがなりの、全力で戦います……だからっ、勝ってみせて!!」

彼女の想いが今、空間を越えて彼らへと伝わった——

「そこまで言われりゃ——」

「——負ける訳にはいかないわね!」

かつての先生からの純粋な激励に、奮い立たない者などなく。

「『奈落』へ貶せよ、我が原罪!!」

「『禍根』を溶かせよ、我が原罪!!」

二人の魔人が目覚めて――

「……………なんだか院長やみんなのことを思い出すなあ」

その献身の姿が、記憶の誰かと重なった蜘蛛の少女も熱を取り戻し。

彼女は、再び魂を燃やすことを決意した。

「だから、まだまだッ――『昇華』し呑み干せよ、我が原罪!!」

彼ら彼女らの想いと誓い、魔の暴虐となりて顕現せり。

反撃の鼓動がいま、力強く鳴り響いた――

地獄の門番、死界の川 ―決着―

掲げた宣誓が、魂を震撼させながら力強く響き渡る。

大顎を噛み閉じ、自らの牙で確実に抹殺対象を穿ち潰したと認識する、地獄の門番。

ケルベロスは次に殺すべき対象を定めるため、ほんの一瞬、秒にも満たない時間、先程仕留めたばかりの存在から意識を切った――その間隙にて。

「まだ死んでねえぞ、駄犬がッ！」

閉じた歯牙が、内側から爆散した。

たまらず悲鳴を上げながらケルベロスは大口を開いて振り回し、砕けた牙とともに弾き出されるように出てきた人影があった。

「殿下っ！」

「無事であったかっ」

服には大穴が空き、襪褌のよう。

だが、そうなるほどの穢れを帯びた致命をその身に浴びたはずなのに、ユーゴーの肉体に負傷は見受けられない。

いいや、むしろ空気に晒された肉体は漲る魔力に異様なほど活性化していて、腐り落ちた血肉が秒単位で刷新されていく。

まるで脆い人の身体を脱ぎ捨て、強靱な魔の存在へと新生するようになる。

「その姿……大丈夫なんすか？」

「ああ、問題ねえ。絶好調だ」

消える激痛と麻痺。

肉体そのものが高次のものへと組み替えられたことで、呪詛の鉱毒から影響を脱し身体の痺れが解けていく。

「二度下がって回復しろ。俺が抑え込む」

変化はそれのみならず、日焼けした肌がより浅黒くなり、髪は脱色して鋼じみた色合いに。

魔族よりも魔族らしい、悪魔じみた姿へと――ユーゴーは変貌を遂げて現れたのだった。

「うおおおおおおオオオア!!!」
雄叫び轟き、魔人は掻き消える。

暴風と衝撃波を置き去りにして、空間ごと破碎する剛拳烈脚の圧殺陣。

「使うなつて言われてたから、使わずに済めば良かったんだけどよ。もう出し惜しみできる余裕もねえな——なら、魂燃やしてヤルまでだああツ!!」

支配者スキルに附属する特殊なスキル、その一つが奈落である。発動させた奈落というスキルによつて、今のユーゴーは全盛期の魔王アリエルすら超えていた。

その力は、魔人化。

天界追われ、奈落に堕ちた天魔の一端を身に宿す能力。

あくまで擬似的なもの、ほんの数分間しか保たないハイリスクな身体改造だが——それに見合うだけの異常な強化をユーゴーへ齎していたのだった。

そしてもう一つ。

「——潰れる」

ユーゴーが手を翳した瞬間、ケルベロスが海面に叩きつけられた。直接殴つてなどいないのに、地獄の犬は無理やり押さえ付けられたように不格好に伏せていた。

よく見るとケルベロスの獣毛には、五指の輪郭が浮かび握りしめているようでもあった。

——奈落へ引きずり込む、重力の手。

それが、ケルベロスを押さえ付けている力の正体であった。空気の破裂する音が連続する。

荒れ狂う殴打が重なりすぎて、もはや耳を劈くつんざ一続きの音にしか聞こえない。

その檻に閉じ込められた地獄の門番は、まるで弄ばれる子犬のように、あれほどの巨体を押さえつけられて身動きの一切を封じられていた。

「ああ、そうさ——負け犬のままは御免被るんだよ」

前世では、その場その場のノリで生きる馬鹿な餓鬼。
楽しくやりたいだけなのに、疎まれ避けられ嫌がられる。

転生なぞすれば、腐りかけの帝国で薄ら寒い笑みを貼り付けた腹黒い豚どもから、気色悪い御為ごかしを聞かされる日々。

そして、しばらくは気楽に生きれるかと王国へ留学すれば――

そこに居たのは前世俺がのダチ欲しと気楽かつなぬるま湯のを余さず持っていた山田シュレイオンのヤロウ。

「なんで裏目に出るんだ、なんで息苦しく暮らさなきゃならねえ、なんで惨めな思いを味わわされてんだ――なんでもっと、自由に生きられねえんだよ」

ユーゴー・バン・レングザンドいいや夏目健吾の人生は、ままならない現実との衝突だった。

「粗暴に振る舞おうが閉塞感は壊せねえ、利口に生きれば胸糞わりい馬鹿を見る。俺の人生、生き易いと思ったことなど一度もねえ」

どうして俺はこんな息苦しいんだ――そう虚しく吼えたこともある。

けれど――

「だけどなあッ、腐って腑抜けて落ちぶれて――そんな無様じゃ、死んだアイツ一成に顔向け出来ねえだろうがよオッ！」

亡き親友へ捧ぐ、感謝の誓い。

失って初めて知る、彼の献身と友情の数々。

いかにお前のフォローに助けられていたのか、いかにお前の友誼が俺を孤独の淵から救ってくれていたのか。

それを転生後、二度と逢えなくなってから理解したゆえに、感謝は絶えない。

今更、己の犯した罪業と歪んだ気質は消せやしない。

けれど心に宿る親友への感謝に相応しくあるために、ユーゴー・バン・レングザンドは儘ならぬ苦しい世界であろうと生き恥を晒してでも、雄々しく戦い生きるのだ。

「もつとだ！　ここに魂懸けなきや意味ねえだろッ！　――『征服』し飾れよ、我が原罪!!」

躊躇なく行われた、禁断の特殊スキル二重起動。

次の瞬間——この場にいる味方全てが、世界守護の旗のもと神話に謳われる征伐軍と化した。

「なんとっ！」

「ありえねえっす……力が溢れかえって……」

ロナント、オーレル、そして龍たち全員の戦闘力が跳ね上がる。

湧き上がる力は、彼ら彼女らのステータスを底上げしスキルに補正をかけていく。

誰もが皆、元々の限界点すら軽く超えて、神話級の領域に踏み入るほどに。

「お前らー！ 長くは保たねえ、畳み掛けるツ!!」

ユーゴーを基点としたそれは、自身が鍛え上げた力を基準とした他者への強化^{パフ}。

そして対象が多いほど自身も飛躍的に強化され、一時的に能力の共有化すら行える力だった。

将たる存在が強ければ強いほど、臣下とする兵たちも強くなる。そして臣下が多く強ければ、将もまたより強大となる。

——それを体現するスキルが、征服であった。

ユーゴーの号令に従うように、飛来する獄炎と嵐天の魔弾が炸裂した。

それだけに留まらず、次から次へと降り注ぐ破壊の渦の乱れ打ち。

魔人が率いる軍勢が、反撃や抵抗を許さずにケルベロスを滅多打ちにしていく。

その強化幅は、未恐ろしいもの。

なにせ、傲慢と強欲を順当に用いて力を高めたユーゴーと、これら二つのスキルの組み合わせは極めて相性が良いのだから。

限界を突破し成長させた自己の能力に、奈落による魔人化の強化値が加算され、それらが征服によって配られ味方全員を強化するのだ。

絶対なる王者に率いられし、勇猛果敢な人界の守護者たち。

これこそ次代の帝王と、世を守る益荒男なり。

もはや規模は比較にならないほど跳ね上がり、数え切れないほどの

暴力の竜巻が吹き荒ぶ。

龍のブレスで焼かれ、魔弾が風穴を空け——ケルベロスの全身が瞬
く間に壊されていく。

それを真つ直ぐ眺めながら、ユーゴーは寂寥を滲ませながら呟く。

「……わりいな、だがまあ許せ」

それは誰に向けて詫びた言葉だろうか。

動きの止まったケルベロスに向け、ユーゴーは正拳に構えた。

身体を捻り引き絞られていく全身の筋肉に、最大の破壊力が充填さ
れていく。

お前の憤激その怨念に、一定の理解を示しながら、けれども黙って
滅んでやる訳にはいかないと手向けの言葉を捧げる。

「胸に刻むぜ。この綺麗な世界は、俺だって好きになれたものだしよ」

爆発のような大気の破裂音と共に、ユーゴーはケルベロスへと熱誠
の鉄拳を振りかぶった。

引き絞られた筋肉が解き放たれ、そして動きが目で捉えられなくな
ると、彼の姿はケルベロスの後方遙か彼方にいた。

その拳を振り抜いた体勢で静止している姿を見つけたとき、全てが
終わっていた。

正面中央の喉から背中までを貫通し、穿たれた大穴。

喉と心臓を根こそぎブチ抜き、脊椎ごと跡形もなく消し飛ばした一
撃に、さしもの世界を滅ぼす地獄の門番ですら、耐え切れるはずもな
く急速に生命活動が停止していく。

『Grrr……………』

海中へ崩れ落ちる寸前。

ほんの僅かな時間だけ狂気が消え去り、剥き出しの牙を収めゆつく
りと瞼を閉じるケルベロス。

——ああこれで、我らが王が望まぬことをせずにするんだ。

そのことに感謝しながら、地獄の門番の核となった眷属たちは翠の
乙女の元へと帰っていった。

そして同じく――

「はああああああああアアア――ッ!!」

ステュクスが放つ死滅の濁流が突如、途中で勢いを減退させながら凍てつき砕け散った。

赤黒い氷柱を粉碎して、血のような結晶を纏いながら現れたのは五体満足な姿のソフィア。

――いや、これははたして彼女と呼んで良いのだろうか。

肌に纏うは、血の龍鱗。

瞳孔は縦に裂け、爬虫類じみた真紅の瞳。

そしてなにより目につくのは、側頭部から後ろへと突き出た氷のツノ。

その姿はまさしく、えんれい艶麗たる人型の龍。

まるで吸血鬼と龍人の合いの子のような妖しくも美しい姿に、白磁の吸血姫の身は轉身していたのだった。

大剣を構え直し、彼女は再びステュクスへと突撃を掛ける。

迎撃の切削水流が迫るが、それただ手をかざすだけで致死の液体を何の変哲もない氷へと無効化し、空を駆ける。

「ふふ、はははは……あつははははッ!!」

もはや絶叫に近い笑い声を上げながら、鮮血の龍人は触れえる攻撃全てを雲散霧消させる。

全身を駆け巡る血は新たに発現した力をのせて流動し、とてつもない開放感と共に喜悦の乱舞が止まらない。

「お嬢様……ご無事で何よりです」

「ええっ！ この私が負けるはずないもの！ 付いてきなさい！ ブッ倒すわよ！」

「是非も無し、お供します」

ソフィアを先頭として、吸血鬼主従が弾雨をかき分けて突き進む。

死滅の血液も腐食の粒子も、彼女の周囲一帯だけは存在を許されず溶けるように消えていく。

消えずに残るのは、なんの魔術も籠もっていないただの水と氷が、重力に引かれていくだけ。

「醜きされいでしょう？ 弱つよいでしょう？ でも別にいいの、これが私だから」

今のソフィアは、禍根のスキルによって肉体が本物の龍に近い組成へと作り変わっていた。

それゆえ、彼女に近づくだけで魔術由来の力は掻き消され、見る陰もなく溶け落ちる。

まるで、嫉妬に狂い全ての輝きを溶かしたいと願う邪龍レヴィアタンのように。魔術の輝きは、邪竜が纏う毒の息吹によって融解していくのだった。

「私は、吸血鬼ワタシよ——それが誇りで、それが自分」

今の自身の姿を見遣りながら、ソフィアは言う。

「誰に何と言われようと否定されようと、それが私だもの。邪魔させないし、奪わせない——私の自由と己全ては私のもの。それが私の掴んだ、唯一の真実だから」

前世の根岸彰子の記憶も、ソフィア・ケレンの名も、両親を失った出来事やメラゾフィスと共に旅した思い出も、似たような境遇の仲間と過ごした日々も、どれもこれも自分のもの。

悩んだことも後悔したことも沢山あるけれど、消したいほど嫌なものなど一つも無い。

吸血鬼としての性だってそう——今では私を構成する一つだから胸を張って言い返せる。

これが、私よ——と。
血を吸うことへの罪悪感も、闘争を好む気質への厭悪えんおも、もう何処にもありはしない。

なぜならそれが吸血鬼の普通であり私だからと、ソフィアは迷わない。

——吸血鬼とは、神を目指し、されど不完全に進化した魔術生物のことを指す。

器だけ不相応に拡張して、魂の中身を満たせなかった成れの果て

が、そう呼ばれるのだ。

大半の吸血鬼が理性を失って、本能のまま血を吸い同族を増やしてしまうのは、その進化に適合出来なかったからだ。

高次へ進化した肉体に、なんの成長や補強のないまま格の低い魂を入れれば、希釈されて自我が溶けてしまう。

そして不完全な進化いや神化は、生物の根源たる血という因子を暴走させて、神格ではなく怪物へと被術者を変容させる。

生物なら誰しもが持つような、親より生まれ子をなし繋ぐという、一つの理を歪曲させて。

だから吸血鬼は血を求めるのだ。

血液に含まれる魂の断片を啜り、欠けた己の魂を補うがために。

そして血を吸うという行為で、自らと同じ血族を増やすために。

バトルジャンキーともいえる性格へと変わるのも、強い魂を求めているから。

殺した相手の生き血を浴び、空虚な中身を埋めたいがため。

そして血族にするに相応しい、お眼鏡に合う相手かどうか試すため。

それらの悪性ともとれる本能させ、ソフィアは受け入れ誇っている。

心と血は同じ身体にあつて、正誤も合わせ呑みながらどちらも自分だと共存している。

ゆえに胸中にあるのは――

「なんて、清々しいのかしら」

口角が上がり、澄み切った笑みが浮かぶ。

無垢で無邪気な童女のような心境で、この生を心の底から謳歌するのだった。

「だから邪魔なのよ、デカブツ。私の前に立ちはだかるのなら容赦はしない。御大層な理想とやらも呪詛や嘆きも知ったこっちゃないわ。私はやりたいようにするだけよ」

飽和射撃をものともせず、豪雨の如き弾幕を潜り抜ける吸血鬼主従。

それを援護するかのようになり、冒険者二人も海蛇の意識を惹くべく顔
面目掛け、強烈な風雷を放ちながら叫んだ。

「応ともっ！ 無様でも醜くても、俺たちの歩んだ旅路は宝物だッ！」
「消される訳にはいかないのよ。命も想いも！ 私たちの旅は、私た
ち自身で終止符を打つわ！」

クニヒコとアサカ、その人生の大半を復讐と冒険に捧げてきた二人
にとっても、ここで終わる訳にはいかないと吼える。

たとえ力が及ばずとも、無価値な扱いだろうとも、その末の結果が
どうなったとしても、納得を得られなければ終われないのだ。

「……………スーは兄様のため。それ以外必要ない」

『わたくしの使命は、海の統治。好き勝手にさせると御思いで？』

半目で淡々と呟くスーレシアに、謳うように水龍が持つ役目を宣す
るイエナ。

彼女らにも、譲れないものがあると臆せず怯まず戦う。

誰もが皆、心に宿した信念に従って立ち向かうのだ。

たとえ相手が、非常に強大で恐ろしい海の化身たる翠魔であつて
も。

『S i s s i a a z i i i a a a a ————— !!!!!』

「無駄なのよッ！」

降り注ぐ死の雨を次々と打ち払い、ソフィアは更に更にと加速す
る。

手数が多さに接近する隙間を伺っていたのも過去のこと。

今の彼女に、死滅の呪いは通用しない。

血の龍鱗が形作る、異端の抗魔術結界。

その範囲は狭くとも、魂を燃やした熱量によって出力と干渉性は極
まっております、その守りは例外的な相性差を誇っていた腐食属性ですら
突破できない。

腐食の切削水流も、死滅の血飛沫も、靄の如く溶かし散らす。

もはや自壊すら厭わず狂乱するステュクスへ、ソフィアが懐へ入り
込んだ。

「断罪——こそが、我が美德——」

その彼女を援護するように、メラゾフィスが正確無比な剣撃を滑り込ませる。

発動した特殊スキル——それは対象の罪業に応じて威力を高めるスキルで実質的に生まれたてなステュクスには効果の薄いものだったが、それでも強化率は桁外れな値となつて痛打を与えた。

そして怯ませた僅かな隙こそが、ソフィアへ捧ぐ必殺への布石だった。

ソフィアの大剣に、血の龍鱗が並ぶ。

それは刀身を延長し、一刀のもと両断できる凍血の特大剣へと組み変わった。

望まぬ狂気に染められた魂を解放してやるために。

「おやすみ、苔森の眷属たち。ご主人様が助けるまで、彼女の中で眠ってなさい」

真紅と漆黒を迸らせながら、最後の一撃が放たれる。

振り下ろされた特大剣は、死を撒き散らす海上要塞として設計された翠魔を唐竹に両断した。

脳のみならず機関部である心臓ごと潰され、その身に纏う腐蝕の力が消えていく。

死界の川と渡し守は、魔術を砕く鮮血に引き裂かれた。

血液はただの海水へと変わり、半壊した巨体も海へと溶ける間際、ステュクス・カロンは切なく喉を鳴らした。

『Si, i i i………』

——ありがとうございます、主の友よ。また今度、一緒に遊ぼう。

未来に約束を交わしながら、死界の川の核となつた眷属たちは翠の乙女の元へと帰っていった。

冥府の魔精 — 決着 —

転生者たちと翠魔の二角が決着をつけた頃、此方側も終幕を迎えようとしていた。

「まだまだあア——ツ!!!」

ガチガチと、小さな牙が打ち合わされるような音が、その渦中から無数に鳴っていた

そのたびに、一部の隙も無かった全方位からの飽和射撃に、空間ごと抉られたかのように虚無が生じていく。

冷気が、氷弾が、そして闇の霧まで——空間に空いた漆黒の孔へと呑み込まれていく。

歪む空間は、黒い雲霞のように不定形に流動していた。

その黒い雲——いや、蜘蛛。

煙のうちより召喚されし蜘蛛が、おびただしい数の鋏角で世界ごと噛み千切り咀嚼している。

それは全てを食い尽くす、大地を荒野とさせん暴食の害の象徴——その蜘蛛版だった。

それらを手繰っているのはアリエル。

発動させたスキルの影響か、肌に黒線が無数に浮かび上がり、それがまるで髑髏や死神を模したタトゥーのように、不気味な凶形を描いていた。

それらが脈動するたび、暴食の顎門アギトが乱れ舞う。

スキル昇華によって覚醒したばかりの能力。

そうであるにも関わらず、展開できる限界までアリエルは手足の如く操作して、あらゆる全てを分解し、己と世界へと捧げるエネルギーに変換していた。

喰らったエネルギーを元に、展開される虚無の孔。

さらに、その上限は今この時も最大値が増加し、時間が経つにつれ一つ二つ三つと際限なく更新をし続けていた。

——昇華のスキルは、絶対崩壊の力。

対象の情報質量など無形のものさえ分解し構成を崩壊させ、三次元

上の存在からM Aエネルギーへと強制相転移させる、究極の昇滅術式。

それは基礎となる暴食を強化する形で顕現し、アリエルが持つ能力を進化させる。

今まで暴食は、自身の口腔内しか展開出来なかった。

しかしその上限は劇的に引き上げられ、同時に配置出来る個数も箇所も、当人の力量次第で如何ようにもなる代物へと進化していた。

つまり――

「一つも逃さない。全部喰らい尽くしてやる」

腕を振るうたびに放たれる黒い雲霞――幾千匹もの蜘蛛の大群が猛然と撃ち出される。

掠めるだけで根こそぎ喰らう暴食の顎門^{アギト}。

以前は単独だったその獯猛な飢えた狼が、彼女が指揮するまま群狼となって暴れ狂う。

空間を蹂躪していく虚無の孔はニユクスの攻撃悉くを消失させ、その牙は次第に次々とニユクスの分裂体にも襲いかかっていた。

限界を突破していく能力はアリエルの肉体と魂を激しく消耗させながら、残り少ない寿命を薪木に爆発的に燃え上がる。

かくして顕現した極小ブラックホールの小惑星帯^{アステロイドベルト}。

もはや散らばったニユクス全てを喰らい尽くすのも、数分もあれば片がつくだろう光景だった。

「負けられないんだ、約束したからっ！」

思いの丈を乗せて、アリエルは叫ぶ。

今の彼女を支える意思の源泉は、交わした約束への誓い。

それを頼りに、無限の意志力を捻出していた。

「白ちゃんもだって――ううん、それよりもずっと前から、私は約束してきた。数多の想いと共に生き続けてきたっ！ たとえ約束を交わした相手がいなくなろうとも、願いが叶わなくなっても、ずっと、ずっと……っ！」

彼女の脳裏に浮かぶは、悠久の昔に過ごした仲間たちと、彼ら彼女らから継いだ想いの数々。

院長、クラ、ナタリー、■■■■、ゴブゴブ、■■■■、
コレー、■■■■……

同じ孤児院のみんな。

システム黎明期という激動の時代に、サリエル様を救うため流星の如く命を燃やして走り抜けた人たちの顔と遺志が、サリエルの中で巡りだす。

その誰もが皆、戦火に倒れるか寿命で朽ちるかで、もう一人も残っていない。

思い出の場所も形見も全て何もかも、風化しきった。

けれど記憶だけは——決して消えることない大切な光だった。

その思い出があるからこそ、サリエルはどんなに寂しくても悲しくても一人ぼっちでも、自死を選ぶことなく生き続けたのだ。

受け継いだ皆の願いは、幾百幾千の時をこえ成就した。

けれどまだ、果たすべき約束は残っている。

「もう一度、あの日々のように！ みんなと笑い合いたいんだ！ 生きてやるとも、笑顔で迎える最期のためにいっツ!!」

裂帛、迸る誓いの熱量に応えて暴食の蜘蛛群が凶悪に駆動する。

乱れ舞う虚無の虫害は、ことこの瞬間に至って絶対的な有利不利を反転させた。

すなわち、圧倒的な性能差と不死性で一方的に捌れていたニユクスが、抵抗も無為に喰われる側へと追いやられる側へと盤上をひっくり返した。

相性差が、ニユクスを冥府へ送り返さんと追い詰めていく。

喰らいつき貪る虚無が、極寒の闇をただのエネルギーへと還元させた。

殺意を滾らせ迎え撃つ魔精も、戦慄き逃げ惑う魔精も平等に、覚醒した暴食は呑み込む。

氷獄砲も、氷球も氷晶も、苦し紛れの雷霆すらも喰らい、冥府の魔精は次々と虚無へ消えて数を減らしていった。

そうして、残るは最後の一体になった時。

「——うぐ、あつ!? そんな、な……あと少しなのにツ」

唐突に口から溢れ出した血液。

操っていた暴食の制御が崩れ、プツプツと泡が弾けるように自壊していく暴食の蜘蛛群。

アリエルは胸を掻き毟りながら、最後の一手に身体がついていかないう事に悔しさを滲ませた。

——そもそも、ただでさえ彼女の状態は限界だった。

エルフの里でポティマスを倒すときに使った謙讓、その負荷も抜けきらぬまま特殊スキルを発動させたのだ。

発動直後は意志力によるブーストが掛かっていると、ならば後々来る反動は言わずもがなというべきだろう。

意志力で限界を越えて覚醒できるとしても、それは自食と同義。

身体か寿命か、なにかしらを犠牲にして力へと変える作業は、当然だが長くは続かない。

むしろ、あの状態で良く持ったほうであると、驚嘆する領域である。だからこそ、止め処なく溢れる血に溺れながら、瀕死へと急速に墜

落するアリエル。

まだ死なずにすんでいるのは、意志力の賜物かそれとも魂を包む翠の加護ゆえか。

けれど生命の危機に瀕するアリエルに、もう止めを刺せる余力はなかった。

『ごほ、くっそ……こんな時こそ、俺様がおいしく出番を搔つ攫う瞬間だろうがよ……ッ』

穴だらけの大翼を必死に広げながら、己も瀕死なヒュバンは齒痒く思う。

背に乗せるアリエルの身体が一気に冷え、今にも命の灯火が尽きようとしているのを詳細に感じながらも、彼自身なんとか羽ばたき高度を保つだけで精一杯だ。

当然、冥府の魔精への止めをヒュバンが担うことなど到底不可能。

背中にて血を流して倒れ伏すアリエルを振り落とさないように、今速度と体勢を保つことしか出来ることがない。

その明確な隙を、一体だけ残ったニユクスは当然見逃さない。

『Kihihihihihii——!!』

凝縮していく闇と冷氣。

身動きの取れぬ両者へ向け、氷弾を装填し照準を合わせていく。

この一射に自己の残存エネルギー、その殆どを費やし空気に溶けゆく寸前になるとしても、抹殺すべき対象を確実に浄滅させられるのならば、迷いなく冥府の魔精は身を捧げた。

時間さえ掛ければいずれ太源より供給されるエネルギーによって復活を果たせるからと、闇黒が渦巻き、蠢き、集束する。

纏う闇が霞んでいき心臓部だけを残して、影法師よりも儂い存在へとニコクスは零落する。

しかし文字通り存在ほぼ全てを注ぎ込んだ一撃は、これまでのどんな攻撃よりも凄まじく凶悪な殺意と猛威を氾濫させていた。

この瞬間この一点にのみ、全てを凍らす氷河期へと回帰したかのように、世界ごと凍らせながら呪詛と狂気が爆発する。

それは此処から数キロメートル単位で氷獄へと閉ざし、生命を終わらせる極夜だろう。

既に彼らでは抵抗はおろか逃げることもすらまならない。

だから共に生命を蹂躪されるだけで、勝機は無いのだと再び潰える——まさに寸前。

「——僕ノコト忘れテ貰ツチャ困ルヨ、オジヨウサン？」

ニコクスの背後から核たる心臓を抉り抜く、破魂の瘴気を纏う五爪。

胸部より抜き出したそれを握り潰しながら、その腕の主は剽軽ひょうきんに掠れた声で嘯いた。

「レイセー！」

『テ、テメー!? 生きてやがったのかよ!?』

勝負の天秤が傾ききる間際で乱入したのは、闇に吞まれ消滅したと思われていた闇龍レイセー当人だった。

「悪イネ、兄妹タチ。美味シイ処ハ僕ガ頂クサ」

そう言いながら五爪を揃え、胴を貫いた腕を引き抜く際に、力任せに斜めに抉り抜く。

グシヤリと身体が引き裂かれていく苦痛と損壊で、冥府の魔精が甲高い悲痛な声を上げていた。

アリエルが奇跡の逆転を果たしていた時、レイセはずっと気配を殺し息を潜めたまま、傷付いた身体を癒すことすらせずに、じつと機会を伺っていた。

レイセにとつてもアリエルの逆転劇は驚異の覚醒だったが、戦闘前の状態から限界を予測して、最後の最後で一手足りなくなるだろうと、この瞬間のために加勢したい欲求を堪えてひたすら隠形に徹していたのだ。

その成果は、こうして冥府の魔精最後の依代を打ち砕いた。

だが――

『!!!』

音も無く、されど大気が狂気に震えだす。

――まだ、まだ、もつと、もつと、死ぬ、死ぬよ、遍く生命死ぬがよい。

体積の九分九厘失おうとも、まだ一厘もあるのなら狂気は忠実に刻まれた使命を実行する。

すなわち、自爆。

集束途中だった氷獄の種子を暴走させ、死なば諸共と不規則に膨張を開始させる。

それが絶対零度の大氾濫を巻き起こす瞬間――

「悪いけど、その大ききなら一口だよ」

至極あつさりど、氷河期になるはずだった闇氷は虚空へと呑み込まれた。

口をモゴモゴとさせ、口腔に溢れかえる血ごと飲み下すアリエル。

たったそれだけで氷獄は、ニユクスの真正正銘の最後の一欠片と共に、エネルギーへと分解還元されて終幕を迎えるのだった。

ゴクリと喉を動かし空になった口。

糸が切れたように倒れ込んで天を仰ぎながら、アリエルは呟く。

「ごめんよ、酷いことして。ごめんよ、約束……守れるかどうか分からないや」

片方は、今しがた撃破した翠魔に向けて。

もう片方は、約束を交わした白い少女に向けて。

アリエルには、命の灯火がもう幾許も無いのが分かった。

あと数分も持つのか怪しいそれに、乾いた自嘲の笑みが漏れる。

約束を破ってしまうこと、後悔や無念はあるけれど、それでも充分以上に上出来だ。

そう思つて、瞼をゆつくりと閉じていく。

天に渦巻いていた暗雲が蠕動を止め、色濃い闇が霧散し消える刹那

——無垢な思惟が届く。

——いいよ、ありがとう。助かった、感謝している。だからどうか生きて、蜘蛛の王様。

直後、喰らい分解していた闇が反転して癒やしへと変わった。

生命を滅ぼさんとする呪詛ではなく、生命が健やかであつてほしい祈りは、絶命間際の身体機能と魂へ優しく浸透し回復を紡ぐ。

自身に起こつたその感覚に、アリエルは目を見開く。

虚空を見詰め、そして胸に手を当てながら堪えきれぬとばかりに破顔した。

「くふ、はは、あははははは——えほ、ごほごほ………また死に損なつちやつたよ」

血を零し噎せながら見る先に、彼女は翠の燐光を幻視した。

くすくす、けらけらと、翠は舞う。

本当にすべき一仕事を遣り終え満足げにしながら、冥府の魔精となつた眷属たちは翠の乙女の元へと帰つていった。

暴食に喰われ、破魂の直撃を受けても、核となつた魂が無事だったのは、翠の乙女の権能ゆえかそれとも彼女が同胞へと向ける愛ゆえか。

何はともあれ、これにて上位翠魔の三角、全てが倒された。

翠魔の一角、地獄の門番ケルベロス——討滅完了。

翠魔の一角、死界の川ステュクス・カロン——討滅完了。

翠魔の一角、冥府の魔精ニユクス——討滅完了。

ならば、次の舞台へのお膳立ては整った。

つまり——

「やってやったぜ……」

「——だから次を任せるわよ」

反動で衰弱した帝王と吸血鬼は、後続く者を信じて託す。

満足げな笑みを浮かべて、お前らもやり遂げてみせろよと鼓舞をする。

「これで私たちの役目は果たした。

さあ導いてあげたぞ、白ちゃんよ！ 君の好きな人を奪い返してこ

いッ！」

韋駄天の如く命と魂を燃やして駆け抜け、勝利を掴んだ。

なら今度は君の番だと、アリエルは海の底を見据えながら叫びを上げる。

その激励に勿論——応えなければ私じゃない!!

「——言われずともオッ！」

システムの中枢へと続く扉に浮かび上がっていた、三つの紋章は霧散した。

獄犬、海蛇、魔精。

それらが封を施していた扉は、いまや彼女を阻むことなどない。

神殺しの能力を持たない下位の翠魔を鎧袖一触に蹴散らしながら、凛々しき服に身を包んだ白織は大鎌を振るい疾走する。

大切な人を救い出すために、白き流れ星と化しながらエルロー大迷宮の最下層を瞬時に踏破し、システム中枢へ一直線に墜ちていく。

走り抜けた周囲には、両断された翠魔と崩壊して灰となった残骸が、一面に散らばっている。

これらは所詮、魂すら入っていない紛い物。

ゆえに容赦なく斬り捨てるのに彼女は迷わないが、それでもその顔は一つ斬るたびに暗く曇っていった。

「どけよ、道を開けろつ。——邪魔をするなあああツ!!」

その堆積する感情を怒りに変換し、闇を裂く裁断の斬線が閃く。

そして遂に、システム中枢、その境たる扉の前。

深淵に続く最後の防壁を見上げながら、白織は叫んだ。

「さあ来たぞ、応えろ扉! 私を彼女の元へ通すがいい!」
手を翳す。

封が解かれた扉は白織の意思に従い、重厚な音を響かせながら左右へと開け放たれる。

その向こう側は一寸先も見えぬ異空間の闇黒であったが、彼女は一切躊躇わずその深奥へと飛び込んだ。

「オオオオオオオオオオオオ——ツ!!!」

まるで墜落のように。

彼女は待ち受けるだろう冥界へと、魂魄総身すべてを懸けて突き進んでいた。

同じく——

「みんなやり遂げてくれた。なら俺たちも——」

「ああシユン。ここからは僕たちの番だ」

『あたしたちも往くわよ』

「ええ、ここが正念場ですもの」

「私たちの未来と運命は、この戦いの先にあるからつ」

山脈とさえ形容できる九つの頭部を持つ魔性の多頭龍の眼光に射抜かれながら、勇者と仲間たちは怯むことなく睨み返す。

人の世界は奪わせない。

生命の輝きは、誰にも神だろうとも、穢させてはならないものだから。

「やるぞ、みんな!!」

「『『 往(う)つ、シユン!! 』』』

大厄災、第二幕——その火蓋が切って落とされた。

魔神ペルセポネ

闇闇が包み、無明が支配している。

その一寸先すら見えない空間は、この地が文字通りの深淵であることを示しているよう。

本来ならば扉のすぐ向こうに、システムを駆動させる魔術陣と中核たる女神が見えるはず。

しかし、走つても奔つても一向に何も無く、不気味なまでの静けさに満たされていた。

理解できるのは、この空間自体が死の気配を多分に含んだ異空間であること。

システム中枢と重なるように通常の座標とはズレた位相が展開されており、それは迷路のように空間を乱雑に拡張しては繋ぎ合わせ、通るべき空間の揺らぎを間違えれば延々と同じ場所を彷徨い続けてしまうだろう。

そして充満する腐蝕の粒子は、資格なき者を阻む冥界の瘴気か。

まっとうな生ある存在では、一歩たりとも進むことを許さないそれを拒絶の力で防ぎつつ、この異空間を掻き分け進んでいく。

吐いた息は急速に熱を失いながら闇に溶け、靴底は灰を踏みしめたような感覚を返す。

痛いほどの無音も合わさり、まるで極寒の雪道か地下墓所カタコンベを歩いているようだった。

その迷宮の最果てに、本当のシステム中枢がある。

彼女が待つ、星の底が。

——そして、ついに。

「迎えに来たよ……」

最後の空間の歪みを潜り抜けて、開けた空間へと出る。

暗闇の世界から一転、脈打つ赤黒い燐光が目を刺した。

システムを運行させる魔術陣、その全てが血色に染まっている。

灰の地面、白黒の空、薄気味悪い景色に変貌したシステム中枢。岩肌と精緻な魔術陣が敷き詰められた無機質な空間だったはずが、まるで生き物の内臓のような生々しい不気味さを放ち、掛かる負荷などお構いなしにシステムは暴走状態にあった。

その脈動が行き着く先。

見上げた視界には、罪人であるかのように魔術陣に磔にされた小さな人影が。

「……コケちゃん」

吊るされた翠の乙女。

冥界へと拐われ贄にされた、私の大切な人のもとへ遂に辿り着いたのだった。

「——だめ、だよ。ここに来ては駄目なのに……白ちゃん」

蚊の鳴くような声が耳朶を揺らす。

まさか返答があるとは思わず、目を見開く。

「ッ、どうしてッ！」

切実な色を持って、問いが喉から絞り出される。

何故、なんでそんな事を、私は……ッ。

「逃げて。取り込まれてしまう……闇に堕ちる前に……白ちゃんだけでも……生きて……」

途切れ途切れの言葉は、まるで遺言のよう。

それ以上何も言わせないと、咄嗟に手を伸ばす。

だが、それが届く前に彼女の身体を赤黒い瘴気が包み込んだ。

それと同時に響き渡った怖気の走るシステムアナウンス。

それが、何が起きているのかを厳然と告げる。

脈動しながら膨張し形を変えていく闇は、やがて醜悪で惨たらしい異形を象った。

『中枢装置の情報を基に迎撃システムを構築します。——成功しました』

『迎撃システム《Abyss of The Eleusis地の果てに縛られし女神 光を破壊する救星主》を顕現させます』

闇黒より産み落とされたのは、異形の女神。

背骨が丸まった巨獣のごとき体軀が大地を揺らし、獣毛で覆われし身体が姿を現す。

無数の触手で構成された虫脚のような脚部とブクブク膨れ上がった尾部が地面を擦った。

眼球模様が無数に浮き出た四枚翅が背中より生え、それらは折れ曲がり二度と飛べないと堕ちた事を示すよう。

そして牙と触手が蠕動する円口類のようなグロテスクな口腔の上、顔の代わりにあつたのは祈るような姿の女神像。

血涙流す女神像の顔は——大切な人コケちゃんと同じ顔。

「ッ——ふっぎけるなあああああああああああアアツツ!!!」

感情が振り切れる。

醜悪な歪曲カリカチュア画化に、理性と感情は焼け落ちる。

激発する赫怒が、このような運命を拒絶する法則と化して吹き荒れた。

お前のせいカッ!

これも、何もかも、貴様が描いた面白い展開という奴なんだろう?

いったい何処まで……私たちを弄べば気が済むんだよ、D!

噛み締めすぎた奥歯が砕けた。

破片が刺さり血の味が広がるが、それさえ些事と精神は赤く染まっ
ていく。

握り締めた大鎌との同調は過去最高潮、刃に形成された因果拒絶の
処刑刀が嘆きを絶叫する。

嫌だ、認めない、こんな運命なんて望んでない——だからッ!

「——救い出す、必ず」

その宣言と同時に、魔神もただただ狂乱しながら謔言を零した。

『何処? 何処? 無い、足りナイ、壊レテル。埋マラナイノ、痛いノ、
寂しい、苦シイヨ』

まるで幼子のような口調で、病みと絶望に染まった呪いの言葉が溢
れ出す。

狂乱した言葉を吐き出したかと思えば、次の瞬間には理性的な言葉を発する。

支離滅裂で、理解不能な、破綻した叫びと祈り。

『助ケテ、助けて、誰も居ナイ。命、無クナツタ。暗イヨ、怖いよ、置いていかないでッ！』

寒い、冷タイ、凍っちやう……ワタン星ガ死ンデシマウ。救って、救イヲ、救ワナキヤ……

止まらない、止メラレナイ。嫌、イヤ、イヤア……うあ、あああ、アアアアアアツ!!!』

瞬間、世界を塗り潰すほどの超高密度の狂念と殺意が横溢する。

凍えるほどの冷氣と闇が魔神の全身に集い、悍ましいほどの死が込められていく。

『——生命ヨ、死ヌガヨイ』

彼女が絶対言わないような事を、吐き捨てながら——

魔神ペルセポネの虫脚、闇を帯びたそれが空間を薙ぎ払い、死闘が幕を開けた。

「そんなこと、させないッ！」

大鎌と真っ向から激突した衝撃は、空間そのものさえ大震させ撓ませる。

雷轟すらそよ風に思える、耳を劈く大轟音。

撒き散らされる衝撃波と死滅の奔流。

それに硬直することなく、刃を切り返しながら瞬時にその場を飛び退いた。

感じた危機感の判断は正しく、叩きつけられた虫脚が剣山のように棘を伸ばし放射状に広がるのだった。

離脱が一瞬でも遅れていたら、串刺しは免れなかっただろう。

しかし、本当に危険だったものは別にある。

「出力が桁違いに強まってる……ッ」
間違いない。

ほんの少し前、エルフの里で争ったそれと同質の力ながら、密度も強度も断然こちらが上回っている。

コケちゃんが発現した《枯死》という闇。

それでさえ、掠めるだけでエネルギーを消し殺される背筋の凍るものだったというのに、魔神が操る今の闇は本家本元のそれと遜色ない代物だった。

並行して法則の支配領域の闘ぎせめ合いを行っているが、反応は思わしくない。

私ごと塗り潰そうとする狂念、その多寡は常人の持ちうる規模を遥かに超越しており、まるで大災害を相手にした小虫であるかのよう。気を抜けば、一瞬で向こうの法則に囚われてしまおうだろう。

比例して私を抑えつける強制力も桁違いであり、今も身体に数十倍の重力が掛けられたみたい。此方の能力を制限されて動きにくい。

全力で抵抗し拒絶してこれなのだ、戦闘用分体を呼ぶ余裕すらない。

常態で垂れ流される闇の影響を最小限に防ぐだけで、空間能力の殆どのリソースが食い潰されていた。

結果出来上がるのはこうして単身、転移もできず回避に徹して一撃すら受けられない状況だ。

服に腐蝕属性の抵抗を付与してある？ 空間遮断の壁を張る？ 拒絶の空間鎧で阻む？

どれも等しく無駄だろう。

そんな小細工、異界法則そのものなDの闇に通用などしないのだから。

「——ッ、ちいー！」

鋭利な槍と化した触手と、動きの読めぬ不定形の闇が、恐ろしい速度で猛追してくる。

大鎌での切り払いは、二度、三度、五、十、五十を突破し、百の大台まで刹那の内に到達する。

しかし、拡散分裂する刺殺の雨はそれをも上回る数で、捌ききれなかった数十の闇黒が私の血肉を削り喰らう。

扶られ、舞う血飛沫が死に溶けては消失した。

血痕一つさえ残らぬ潔癖なまでの猛悪さを見せつけながら、傷口よ

り重篤な喪失感が私を襲う。

「これ、は——ッ」

『枯レヨ、衰えろ。星ヲ芽吹カセル糧トナレ』

貪られ減少する活力。

それは激痛と共に侵蝕してきて、私の内部をめちやくちやに掻き回しては蹂躪する。

病魔に冒されたように肌は爛れ落ち、木乃伊みたいに骨と皮だけへと、闇がへばり付く箇所から萎れていった。

このままでは四肢と五臓六腑が全滅し、戦闘行為など不可能にさせられる。

それを、理解して——

「まだだアッ!!」

拒絶の法、それを最大増幅したものを自分自身へ叩き込む。

私の全てを貪ろうとしていた侵蝕は止まり、逆回ししているように生氣を取り戻していく。

代償にエネルギーの大半を持っていかれたが、それで済んで安いと思えた。

そのまま受け続けていれば、魂まで闇に犯され飛ばされていただろうから。

「止めるんだ、コケちゃん！ 願っていたのは救いたかったのは何だったのか、思い出して！」

『願い、救い？ ——ああ、アアアアア。そうだよ……私はただ、この星が続いてほしくて……。コノ哀しくも綺麗な世界が、好きに思えて、守リタクテ……だから絶対に——星を再誕させると、私はあのと き、誓ったカラ』

呼び掛けに、謔言のような言葉が返ってきた。

だけどしかし、宿るのは深海よりも深き哀しみと慙愧。

とても正気ではない、けれどそれが彼女の紛れもない本心の発露でもあって。

『癒やすんだ、戻すんだ、治すんだ——邪魔をするナアあああ!!?!?』
「くっ、ああああッ!？」

必死に呼びかけた声は届かない。
迸る嘆きが、胸に迫るほど痛く理解してしまう。

同じ目標に向かって助け合ってきた仲だ、懸けてきた想いの丈は私
が一番良く知っている。

『消えてよおっ！ 嫌だよ、イヤ、いやああああ——コンナこと願った
覚えないうっ!!』

そんなもの要らない、見せないで、与えないで……私に闇を注がな
いでえ。壊したくないのに、殺したくないのに……ごめんなさい、許
シテ、食べてごめんなさい、殺してゴメンナサイ……近寄らない
で、近寄らないで、近寄らないで……来ないでエエツ!!』

劈く絶叫と共に、振り下ろす巨腕が闇の波濤を撒き散らしながら地
面を砕く。

私を亡霊^{ナニカ}と勘違いしたまま、必死になって振り払うように暴れ狂
う。

『——ああああああああアアアアアアアアアアアアツツ!!』
「——、——ツ」

胸の痛みを噛み殺し、殺到する死線の数々を全霊で掻い潜る。

予測しづらい動きを直感と本能で見切り、地を這うが如くに重心を
落として疾走する。

魔神ペルセポネが対応に転じる前に、間髪入れずに反撃の大鎌を左
脚へ叩き込む。

いかに強大で耐久力がありそうでも、体重を支える部位を潰されれ
ば転倒するなり動きを止められるだろうと——

しかし、その予想は驚愕の結果で覆された。
「なッ——!?!」

大量の黒い血を噴き出す裂け目。

そこから、不気味にぬめる触手が私を絡め取ろうと鎌首をもたげ襲
い来る。

慌てて地を蹴り、退避する。

一瞬前まで居た場所に、嫌な水音がビチャビチャ鳴らしながらのた
くついていた。

そして、傷口はまるで太い蔦草が絡み合うように蠢いて、傷口同士を繋げて縫合されてゆく。

通常の生物では、ありえない身体構造。

その奇怪さと不気味さに絶句する。

自身も大概トンデモ生物に分類されるが、これはそれ以上の外れ具合だ。

理に真っ向から唾吐く、邪なる異次元の生態。

「出鱈目な……あのクソ邪神め」

この抵抗と迎撃が間に合わなくなった時、私は間違いなく死よりも恐ろしいことになる。

それが分かっているのに、近づくことすらままならず、攻撃すらままならない。

そもそも、コケちゃん本体が何処にあるのか不明では下手に攻められない状況だった。

だというのに魔神ペルセポネの本当の力は未だ解放しきってはならず、さらにさらにと闇と呪詛は留まることを知らなかった。

『 詠イ始メヨウ、大地ノ女神ト攫ワレシ娘トノ詩ヲ—— 』

紡がれだす、彼女を示す悲嘆の詩。

『 慈愛溢レル母ハ、生命ヲ豊カニ実ラセル。』

ソノ娘ハ、愛シキ友ト共ニ常春ノ花畑ニテ戯レテイタ。

シカシ突如、冥王ハ不死タル馬ヲ駆リ娘ヲ攫ウ。

娘ヲ失イシ母ハ、哀シミ呪イ冬ノ大地デ世界ヲ覆イ尽クスノ

ダツタ。』

そこまでは以前にも聞いたことのある祝詞。

呼応して増殖しだす闇の瘴気。

その総数は、もはや億や兆の領域にあった。

左右同時に迫る押し潰しに、旋回させた刃で応えるが衝撃でたたらを踏む。

その間にも、次の、次の、次の次の次の猛攻が、怒濤の勢いで押し寄せてくる。

足元から蛇のように這い寄る触手を裁断する。

しかし切り飛ばした末端からさらに増殖し、檻のようになって動く場所を制限する。

天が砕けたかのように、闇の奔流が上から落ちてくる。

刃先のみにも全能力を集束させ、かろうじて断割し隙間に身を振じ込むが、結果一瞬だけが一步も動けぬ隙を晒した。

その間にも魔神ペルセポネの口から溢れ出す、呪いの言葉。

狂気に横溢した呪詛から一転、どこまでも哀しく切ない祈りが紡がれだした。

『 ああ天より地を見る太陽よ、どうして貴方は見ているだけなの？

祈りは反転し、冥府魔道の瘴気が地底より森羅万象を蝕み尽くさん。』

前方より穿つ、鋭利な棘だらけの虫脚。

限界寸前だが防御が間に合った。

だが、無理な体勢からの防御は、その後の余裕を奪い去った。

真横、斜め後ろ、足元、脳天、真正面——間断なき連撃は拳動の出先から崩され、動ける場所も無く魔術の発動すら許さない。

足薙ぎ、腕落とし、内臓抜き、首切り、武装狙い——様々な部位や箇所を同時に狙われ、ついに対応能力を超え始める。

自分自身、今どう対応したのか認識が追いつかなくなる。

そんな状態だというのに、何故か魔神ペルセポネ、その内側に取り込まれた彼女の悲鳴が聞こえてくるようだった。

血涙を流しながら絶叫している。

声など聞こえていないのに、籠められた意思が痛いほど伝わってきた。

——痛い、苦しい、哀しい、助けて、と。

『 生命を滅ぼせ、冥界の乙女。——別離の嘆きは神をも殺す。』

もはや本能と直感で凌いでいた迎撃だったが、終わりは唐突に訪れた。

『エッセンティア 神髓 — — —
来タル冥界ノ闇ヨ』

《アピス・オブ・ジ・エレウシス 嗜虐ニ嗤イシ冥王ノ呪イアレ、

—— 知覚も認識すら置き去りに、気が付いたときには大鎌ごと闇の槍に貫かれていた。

「ギイ、あ、ああアアツ?」

そんな、馬鹿な、何も見えない、分からなかった……ッ。

私と彼女との神格としての隔絶した差を示すかのように、無慈悲な滅びが襲来していた。

心臓を穿つ、黒死の魔槍。

それは瞬く間に全身と魂を汚染し尽くし、大鎌の刀身に無数の亀裂が広がっていく。

修復不可能なまでに粉碎された大鎌の断末魔が、同調している私にも伝わってきていた。

砕かれた大鎌の破片、その一部が私の身体に深々と突き刺さる。

赤黒く染まる視界と、耳朶を犯す不協和音とノイズ。

肉体的な痛みより遥かに凶悪な激痛が、脳髓と魂を発狂に追い込みんと穢し狂う。

氾濫する痛みと理解不能な情報の渦。

それらが冒瀆的に完膚なきまでに、私の自我を壊していく。

その中で、私の魂へと直接響いてきた声が——

『もはや逆転など不可能。あなたと彼女では、神格としての完成度が違う。いまだ神髓に到達していないあなたと、一度かぎりの奇跡とはいえ月の女神を再誕させるに至った彼女。どちらが優れているか明白に格付けが済んでいます。——ですが、それでもあなたは足掻くのでしょうか?』

その通りだ——諦めるだなんてこと、私は受け入れたりなどしない。

『ならば力が欲しいですか? 蜘蛛さん?』

明滅する意識に差し込まれた問いに、私は——

「違う! 私の手は、私が築き上げるものだッ!」

全霊を掛けて、拒絶を返した。

断じて違う、私はお前の言う通りになんて、なるつもりは欠片も無いッ！

そう吼えたものの、心魂全てを穢されている私は紛うことなき致命傷で、逆転の余地など何処を見てもあるはず無く。

『そうですか——なら世界が終わるその時まで、そのまま眠っているといい』

冷ややかに無慈悲を告げる声。

それっきり聴覚そのものがイカレたのか、何も音を認識できなくなる。

そして指一つ動かせぬ私に——巨大な断頭の爪刃が落ちてきた。

「――、ア——っ——」

首を通り抜けたそれは、守りの術式ごと紙屑のように裂いては頭部を切除した。

回転する視界、遠ざかる私の身体。

熟れた柘榴のように、私の頭が落ちていく。

切り離された断面から激しく血が噴き出し、鉄臭い液体が衣服を濡らす。

その光景の一滴一滴さえも引き伸ばされた刹那は捉え、そして——醜悪な牙と触手の口腔が眼前に迫っていた。

暗闇へと堕ちていく意識。

戦うための腕も、駆けつけるための足も、想いを伝えたかったはずの喉も——どれも等しく彼女に届かず叶わなかった。

——なんで、私は肝心な時に上手くいかない。

どうしていつも、痛みと苦しみを味わうしか出来ないんだ。

血と涙とともに、絶望へと沈んでいく。

そうして……全身一口で丸呑みに出来る大口が、魂ごと私を冥界の深淵へと墮とすのであった。

もう私に——出来ることは何も無い。

勝利も未来も、微塵に消えた。

大切な人を内包した、闇の深淵へ。
真つ逆さまに、落ちていく——堕ちて、逝く。

翠の芽吹く星

翠が揺蕩う――

私は、私の原点について振り返る。

自らの本質。

その在処を探して。

――まず、最初に挙げるべきなのは、この世界へと転生した事だろう。

それは不運な事故であり、自分では避けようもなかった必然の出来事。

哀しくもあるし、怒りだって当然ある。

けれど、もし過去を変えられるとして、転生する切っ掛けとなった爆発など発生せず、そのまま地球の日本で暮らせるとしたら、どうだろう？

私は……拒否すると思う。

この世界で、得たもの感じたもの。

それを何もかも無かった事には、したくは無いから。

絶望した、激憤した、狂気に堕ちてしまった。

知る必要のない、抉られるような魂の痛みを知ってしまった。

だけど――それだけではない事も、また知っているから。

贖罪と死が支配する世界でも、孤独では無いと教えてくれた。

この世界にも家族が居て、文字通り私たちみんなは共に生きている事に気付き。

各々が想う世界のために、命を懸けて抗う者たちの輝きに魅せられて。

ああ、どれも大切なモノ。

忘れたくない、消えてほしくない。

この輝きを守りたい。

誰もが健やかな星で平穏に過ごせる世界ならばと、切に切にと希う。

私が犯した最初で最大の罪は、今世での家族たちを殺してしまった

事。

彼ら彼女らの血肉を喰らい、魂を奪ってしまった事。

極限状況下での過ちだとしても、あの時はそれ以外に選択の余地がなかったとしても、間違いは間違いなのだから。

家族という柘榴を喰らい、死に穢れてしまった私は、罪を贖うために生命の光に焦がれていく。

言い換えれば、自罰の意識が生んだ代わりに何かへ尽くしたいという想い。

それが都合良く、星の危機というお題目があつたから飛びついただけのこと。

代償に、さらに罪を重ねて重ねて……負債は膨れ上がって、世界を巻き込んでしまう罰となる。

なんて愚か。

救いたかったものを自分で滅ぼすなんて、本当に愚かとしか言い様のない。

そして、そうなつてしまった後に、本当の気持ちに気付いたのだから。

だからこそ祈る。

もう叶わないからこそ、祈りは深く重く、より強固に。

——破滅を迎えようとしている世界ならば、救われた自然^{セイ}が満ちる世界にしたいのだと。

でなければ、犠牲となった全てが報われないから。

そのためなら、私は……私は、もう………

新たな中核装置を認識しました。

セットアップ中です。

実行：中核装置の同調。

実行中、実行中、実行中……

チャンネルを変更します。

接続：白織。

実行：新世界のシミュレート。

冥界の底に眠りし、翠の乙女。
愛しい光を胸に抱きながら、優しい夢の中で微睡んでいる。
白き太陽が昇る、その時を――

白き光が浮かんでいる――
人の心とは、過去の積み重ねにあるらしい。
今までに体験してきた事、誰かから与えられたもの、それらが乱反
射する万華鏡だ。

優しい家庭で生まれ育てば、思いやりの心を持つ存在に。
暴力や虐待が日常的であれば、荒んだ素行を繰り返してしまうよう
に。

これは、そういう話。
だからこそ――私の心とは何なのだろうか。
自分の記憶だと思っていた前世は偽りで。

今世でも、植え付けられた記憶と思想に従い、振り回されるかのよ
うに生き抜いてきた。

この世は総じて理不尽だ。
どうあがいてもままならないことは数多くあるし、到底敵わぬ存在
も実在している。

抗おうと戦う先にいずれ待ち受けるのが、地獄と絶望の類だと理解
している。

なら私は、与えられた配役をなぞる不格好な人形か？

何処までいっても必死に抗っても、神様の娯楽を満たす玩具でしか
ないのか？

ならばどうする――諦めるのか？

違う、否だと、そう思いたい。

他人に救いを求める奴は、嫌いだ。

自分の足で前へ進めない奴は、もつと嫌いだ。

そして結局、最後まで何も信念も何も持たずに、虚ろに生きている
奴が大っ嫌いだ。

――だから、私は自ら選ぶ。

始まりは人形でも、それでも私自身が選び、積み重ねてきた思い出があるから。

他の誰のものでもない、私だけの思い出。それがあから、私は私になれる。

貴女のが好き、私になれたから——絶対に諦めない。

——シミュレーションを開始します。

何と聞こえたのか分からないまま、意識が漂白されていく。まっさらな世界。

何もなくて、なんでもある。

何処までも果てしないキャンバスに、二人の思い出を絵の具に色彩が落ちた。

「——ちゃん、白ちゃん」

誰かが私を呼んでいる。

いや、誰かなんかじゃない。

この声は——

「うう……」

「おはよう、白ちゃん。もう日の出から何時間も経っているよ」

暗闇の底から浮上するように、意識が覚醒します。

困ったように苦笑しながら覗き込む大切な人の姿に、なぜだか全く

分からないけれど大きな安堵が胸中を埋め尽くすのであった。

不思議と涙さえ浮かびそうな気分。

寝起きだとはいえ、ちよつと私らしくない感慨に浸っていた。

最近の定番のやり取りのはずが、どうしてか凄く新鮮で嬉しく思う自分がいた。

「おは、よう……？ あれ？ どうして？」

「まだ寝ぼけているの？ ほら起きて。早くしないと朝ごはん冷めちゃうから」

思わず首に手を当てる。

ちやんと繋がっているし、押し当てた掌には力強い脈動が伝わる。そのまま首を捻っても、おかしいところは見当たらない。

見下ろした自分の谷間は今日も邪魔なほど立派なお山で、その内側にある心臓はあいも変わらず新鮮な血液を送り出すべく規則正しいリズムを刻んでいるのだった。

いつも通りの健康体で、絶好調。

違和感なんて欠片も無いのに、脳内によぎった感覚だけが謎だった。

まるで——目の前の■■■■を■■■られずに■■■れたような。

どうにも脳内がグチャグチャして纏まらないものだから、顔を顰めて唸ってしまう。

そうこうしている内に、温め直したのか美味しそうな匂いが風に乗って流れてきた。

「ほらほら。今日は帝国を抜けて、魔の山脈まで行くんでしょ？ 早く食べて出発しないと、到着する前に日が暮れちゃうよ」

「——そうだったね、ごめん。企画した主催者がこんな調子じゃあ、コケちゃんも失望するよね」

「ううん。全然っ」

朗らかに、そして少し照れくさそうに、彼女は笑顔を浮かべる。

つられて私も、頬が熱くなりながらはにかんだ。

「見聞とハネムーンも兼ねた、世界一周旅行。こんな企画に了承してくれたコケちゃんには感謝が絶えないよ」

この世界に転生した私たち転生者。

同じ場所に生まれ、同じ地獄を乗り越え、同じ苦難と喜びを分かち合った二人。

そんな境遇の者同士が、ずっと二人だけで支え合い助け合っているだけ、ただならぬ関係へと発展するのまさして時間が掛からなかった。

「白ちゃん……そんなことないよ」

手を取られ、そつと小さな手に包まれる。

ほどよい暖かさと柔らかさが密着し、それから彼女の心が伝わって

くるようだった。

愛おしさに満ちた、とろけそうな熱量。

「これが私の気持ち。嫌なんて一つも無いですし、私自身愛されてるなあつて思えて嬉しかった。だから……ありがとう、白ちゃん」

言い終わるや否や、林檎みたいに顔を赤く染めて俯いてしまったコケちゃん。

私自身も、心がポカポカして嬉しいけれど気恥ずかしくて視線が泳ぎだす。

そうとも、私たちは恋人同士。

私こと白織と、コケちゃんこと翠星は、この過酷だけれども美しい翠の芽吹く星にて、お互いがお互いに唯一無二の伴侶なのだった。

——あれ？　なんで私たち、そんな名前だったんだっけ？

——まあ、いいか。

こうしてこの世界に生まれ落ち、旅をする日々も既に十六年目になるのか。

魔物に生まれ、生まれ故郷である大迷宮を出て、そして文字通り血を吐く苦勞の末ようやく人型にもなれるようになった。

今は世界を巡る私たちだけ、此処に至るまで数年に一度の頻度で予期せぬ騒動に巻き込まれたり、ずいぶん波乱万丈な旅路をおくってきたものだとは回顧する。

——軽い頭痛と共に、様々な記憶が脳内を巡る。

エルロー―大迷宮を脱出した私はとくに何の事件や出来事も無く、入口の周辺地域の偵察を終えて帰還した。

そのあとは、ひたすらレベリングと訓練の日々。

人型になれるだろう進化、アラクネとマステマを目指して、魔物を狩り強さを身に付けることを繰り返した。

時間は掛かったものの、私たち二人は特殊な進化に到達し、念願の人らしい姿を手に入れた。

……とはいえ服装次第で誤魔化せるコケちゃんとは違い、私は一目

で人外なのがバレる身体構造だったので、当時はガツカリ感が否めなかつたけどね。

それでも一応目標にしていた進化を達成できたので、完全な人型は今後の課題として、私たちはこの世界のことをもっと深く知るために旅に出ることにしたのだ。

宗教戦争が理由で、最近戦火に吞まれた街を遠目に見たり。

異形な私たちは人目を避けれる場所を通らざるをえず、そういった細道を進んでいるとき避難民らしき人を目撃したこともあった。

元は身なりの良さそうな青年が、自身がやつれてでも腕に抱いた赤子を懸命に守っている姿は、戦争の虚しさを感じずにはいられなかつたね。

そんな彼らが無事に逃げられるといいなーって治安維持に貢献すると、旅の道中ついでとばかりに盗賊狩りをしたり。

人知れず旅路の平穏を守る、見目麗しき異形の影。

なんて、世直し道中気取りで心の赴くままに旅をしていたのさ。

そうして辺境秘境を主に巡っていれば――

「まさか、SFじみた太古の遺跡を発見するなんてね」

「防衛機構であるロボを撃破していった奥に、まさか神格に至れる馬鹿げた劇物があるなんて誰も思わんって」

正確には、炸裂すれば星ごと粉碎させられるGMA爆弾というものが不発状態で遺跡の奥底に転がっていたのだ。

しかも、私たちがロボを蹴散らしながら進んでいたせいか、防衛機構が暴走を起こしGMA爆弾の起爆カウントダウンが始まっていた始末。

よもや私たちのせいで、世界の危機。

このままでは世界を巻き込んで、私たちは盛大な花火の中に消えるのかと焦りに焦って、咄嗟に選んだ行動は――

「食べて爆発のエネルギーを取り込もうだなんて、いったいどんな発想をしたら閃くの？」

「その破裂寸前な私にキスをして、口移しで過剰なエネルギーを吸い出そうとしたのは、どういう直感からなのかなあ？」

「あのときは、二人で分け合わなければ生き残る道はないって思ったから……そのお陰でこうして偶然にだけど二人とも神に至れたのだから」

「ついでにシステムの頸木すら超えてしまい、見た目通りの小娘二人に成り下がったんだけどね」

奇跡的に驚異となる危険な魔物とかが遺跡周辺には居なかったから良かったものの、当時はもう絶望なんて言葉じゃ済まなかった。

見た目通りの貧弱な少女二人、ステータスもスキルも使えなくなり、神化の影響が完全な人型になっていたせいで人外の強みさえも失っていた。

どうにか魔力を自力で感知できるようになり魔術が使えるようになるまで一年もの間、私たちはあの遺跡でサバイバル生活を強いられることとなったのだ。

大幅な弱体化で、体力も力も貧弱な少女二人。

荷物は空間魔法に全て仕舞っていたから、取り出せなくなって着の身着のまま。

しかも私は今までシステムの恩恵によって問題が噴出していなかっただけで、その恩恵を失えばアルビノによる日光への脆弱性が露呈したもんだから、日中には活動できないという制約まで。

——そうして、牢獄のような日々が幕を開けた。

鑑定した時の記憶を頼りに食べられるものを探し、前は容易く蹂躪していた魔物や盗賊の存在に怯えながら身を潜める生活。

遺跡が雨風を凌げ内部の気温も安定しており比較的清潔だったとしても、そんなの何の慰めにもならない。

今まで当たり前に出ていた事が出来なくなった苦痛と、日々の糧食を得るのも一苦勞な日々は順当に私たちの心身を擦り減らしていった。

過酷な生活に身体も心も疲弊していった私たちは、ついに限界を迎え、そして——

友という一線を超えて、荒んだ心を慰め合う一夜の過ちを犯してしまった。

「なんとまあ、ひどい馴れ初めですこと」

「けれども、ああして不健全とはいえガス抜きが出来ていたお陰で、諦めたり自暴自棄にならずに済んだとも言えるし……あう、思い出すのも恥ずかしい」

歴史にも置き去りにされた遺跡での、少女二人の蜜交。インモラル

身体をしつとり密着させ、抱えた傷を吐き出しながら口付ける。

容赦なく、優しく、激しく——甘い切なさ、二人の体力が尽きるまで。

不安を吐き出し、弱さを晒し、傷を舐め合う行為を、夜ごと重ねては互いの熱で埋め合うのが、あの二度目の地獄を生き抜くために必要なものだった。

でなければ、とつくの昔に些細な事から殺し合いに発展し、共倒れの末路を迎えていただろう。

誰も彼もが目を覆うような、救いようのない悲劇だ。

けれど、そんな壊れかけの心を癒やすために淫蕩を貪り溺れる日々が、皮肉にも魔術を取り戻す切っ掛けになろうとは思ひもしなかったけれどね。

ほら、古来より神秘を感じ取るには、酒と麻薬と^ヒ行為とか言うじゃん？

思いつきり偏見だけど、あながち間違いでもなかったという。

気が付いたら、二人とも内に渦巻くエネルギーを自覚できるようになって、自覚さえ出来れば感覚を掴むのも早かった。

死にたくない一心と、早く人らしい生活がしたいと焦がれて。

常を感じる生命の危機も合わせて死にも狂いで努力すれば、完全にはいなくても僅か一年で能力の大半を取り戻せたのだった。

——そういう記憶みたいだ。

「それはともかく。なんとか脱出した後は白ちゃん念願の、文明薫る人族の街へ行つたんだよね」

そうそう——

後は遺跡より無事脱出を果たし、人族と偽つての冒険者稼業。

実力さえあれば、身元不明で怪しさ満点の私たちだろうと日銭を稼

げるのだから、そういう組織構造を作ってくれた人には足を向けて寝られないね。

今では二人とも、Aランク冒険者。

そこに昇格するまで様々な事件や大騒動もあったけれど、これ以上無い気楽で自由な生活を満喫しているのであった。

「辛いことも沢山あったけれど。今では笑い話に出来るくらい、充実していたよね」

「まったくだよ。運命を描いた神様は、どんなに性格悪いんだか」

二人して、互いに笑みを交わし吹き出した。

整備もまばらなデコボコとした街道を行く私たち。

荷物も持たず武装すらしていないような格好だけど、それらは異空間に収納してあるし、莫大なエネルギーをシステムの上限縛り無しに扱える私たちは、そんじよそこの相手に負けることなど天地がひっくり返るほどあり得ず、何ものにも縛られない旅人であった。

あるがままの風光明媚な自然。

この過酷で厳しい世界だからこそ、綺麗な景色。

森や山脈の稜線などを遠くに眺めつつ、気ままに道草を楽しみながら、並んで歩き続けて。

日が暮れかけた頃、ようやく麓街の城壁が見えてきた。

「今日は、この街までだね」

「予定通りにいかないのも旅の醍醐味。門を閉められる前に入るとしよう」

「じゃあ、競争っ」

「ちよ——ふふふ、待てえ！」

ちよっと駆け足、けれど普通の人からすれば全力疾走よりも速い速度で数キロメートルもの道を踏破し、お互い息一つ切らすこと無く麓街の城門までふぎけ合いながら辿り着くのであった。

白糸が織りなす想い

魔の山脈の麓街へと入って――

私たち二人は、薄墨色の不揃いな石が敷き詰められた街道をゆつくり歩いていった。

夕焼けに染まった暮れなずむ街並み。

遠目に見える山脈も、朱と黒のコントラストを一層際立させていた。

大通りから外れ、幾つかの角を曲がった先の小路通り。

どんな店かを表す木造の看板、雑然と野晒しにされている空の木箱。

酒場や、パン屋に、食べ物屋、薬売り――猥雑な匂いが鼻をつく。

店々の外観を眺めては別の店を眺め、二人で物色を楽しんでいく。

今から開店する飲食店や、日没で店仕舞いに移る店など、黄昏時ならではの景色が広がる。

「よし、ここはしよう」

そう言っ指差したのは、一軒の大衆酒場。

すでに店内には人の賑わいを感じさせ、酒と食事を楽しむ談笑の騒ぎが外にも漏れていた。

薄汚れた作業着の街の労働者や、使い込まれた武器を傍らに置く冒険者など、様々な人々が思い思いに羽根を伸ばしている様子が見て取れた。

「うん、いいよ」

「じゃあ、早速行こう。お腹ペコペコだよ」

入る前から匂いで分かる、美食の予感。

旅の醍醐味は食事にある。

そんな信条を今思いつき、そしてそれに相応しい夕飯を味わうべく、私たちは飴色に日焼けた扉を押して入店するのであった。

「乾杯ー」「乾杯！」

小気味良い音を立てて、掲げたグラスが鳴る。

そしてそのまま、中身を呷った。

暖色系の灯りがグラスに、ちろちろと囁くように反射する。

ちなみに、酒では無い。

果実搾りたての新鮮なクリクタジュースである。

何故か、街に居るときではコケちゃんが絶対に阻止して、お酒は飲ませてくれないのだ。

まあ飲んだときは前後の記憶が飛んでいるので、一期一会の美食を忘れぬために街中では控えるのもやぶさかではないが。

それはそれとして、食べてよし、調理してよし、絞ってもよしと、ほんと万能だな。

クリクタというこの世界の果物は。

しばらく経てば運ばれてくる料理に舌鼓をうち。

香ばしく焼けた肉を切り分け、瑞々しいサラダを口に運びながら――

にこやかにコケちゃんと談笑に花を咲かせていた。

「……ん？」

「どうしたの白ちゃん？ 何を見て……」

食事を楽しんでいる最中。

ふと――視界に入ったとある人影に、何故か目が逸らせず色濃く留まった。

酒場の一角。

一人、ジョツキを片手にかなりの勢いで酒を飲む小柄な黒髪の少女がそちらに居た。

テーブルの上にも、食べかけの料理と食べ終わったと見られる大量のお皿が塔と連なり、少女の体積よりも料理の方が多かったであろう食べっぷりであった。

その少女が、どうしてか気になる。

なぜだか分からないけれど、頭と心の奥底が鈍い疼きを覚えた。

雑音がする、雑音がする、雑音がする――ラジオの雑音のような音が鳴り止まない。

頭が割れそうだ。

「……ねえ」

意識がコケちゃんに向いた途端、音と頭痛が引き潮のように失せていく。

そして先程、何と感じていたのか全く思い出せなかった。

「え、ああ……ごめんなんでもないよ」

「そう……っ」

心配そうに何か言いたげなコケちゃん。

彼女が口を開こうとした瞬間、それを遮って俄にわかに店内が騒がしくなる。

視線を反対側に向ければ、向こうでは酔客同士の怒声と罵声が飛び交っていた。

言い争いはどんどん加熱して一触即発の空気に、そしてついには喧嘩にまで発展した。

突発的に起きた荒っぽい馬鹿騒ぎに、酔いも回りきった無責任な野次馬までもがやいやいと囃し立ててさえいる。

悪ノリしている奴らが面白い余興とばかりに煽り立て、もはや收拾がつかなくなっていた。

「わーおう」

「む——、——ッ………」

騒ぎを起こしている酔客らを見て、コケちゃんは言葉にならない呻きを漏らし不機嫌そうな顔を浮かべる。

野卑な男どもが、あーだこーだ言い争いながら馬鹿騒ぎを続行する。

そのたびに目が据わっては表情が抜け落ち、絶対零度の冷ややかさを帯びていく。

……あ、キレてますね、これ。

そのとき、宙を舞った一つの酒瓶。

予期せぬ流れ弾が向かう方向は、さつき見ていた黒髪の少女の方で

「——つと」

思わず、飛び出しては酒瓶を防いでいた。

頭痛や気持ち悪さを無視し、身体が勝手に動いていた。

その反動で、脳髓を直接削られるような激痛が今も続いているが、とにかく無視した。

——こんなもので止められると思うな。

そして密着しそうなほどすぐ真後ろに、その少女の気配を感じる。

「大丈夫ですか？」

そう努めて平静を保ち、私は黒髪の少女へと話しかけた。

不思議と、私は基本会話嫌いだというのに、この少女には口籠らずスムーズに言葉が出てくる。

まるで、この黒髪の少女とも長い時間を過ごしたことがあるような。な。

ふと——やってから気付く。

こんなことに意味は無かったと。

何故なら件の少女は飛んでくる酒瓶に気付いていたし、読み取った力量はこの程度で遅れを取ることも怪我の一つすらしないだろうと、必要ないと最初から分かっていたのに。

「え？ ——ああ、ありがとう。見知らぬ美人さん」

黒髪に白が交じる少女は一瞬呆けて目を丸くし、やや後に咳払いをして感謝を述べた。

その台詞に、何故か胸がチクリとした。

少し寂しいときえ感じる——少女とは初対面なはずなのに。

「別に平気だったのに、どうして庇ったんだい？」

どうしてって……

なぜなら、それは……

「恩返しをしなければと、そう思ったから」

「んん?？」

疑問符を浮かべ首をひねる少女。

対して私かというと、去来した不思議な感慨に知らず微笑んでいた。

胸の芯へと染み渡らんとする、ようやく悟った真理の感慨に。

「……いや、何でもない。怪我が無くて良かった」

そう言つて、私は背を向けた。

その頃には、喧嘩も収まり騒ぎも収束していたのだった。

「……………」

その中で唯一人が、黙して瞼を伏せる。

位相が異なるかのように朧な気配を纏い、何かを胸の内では噛み締め
ている。

「……………もう、気付いてしまったのかな」

翠の少女の眩きは、喧騒の中に消えていった。

そして――

A級冒険者の財力を活かし高級宿の一室を確保した私たちは、支
払ったお値段に相応しい豪華な内装の部屋で、自堕落な休息を堪能す
るのであった。

シンプルだけど品の良い調度品。

板張りや薄い毛布だけなどのこの世界の安宿とは、比較するのも烏
漕がましい。

むしろ現代のホテルにも、風情や見栄えなどで決して劣らないだろ
う。

彼女となら、気が弾む。

心の底からありのままの己を曝け出して、微睡んでいられる。

「あああ〜しあわせええ〜♪ 食っちゃ寝さいこお〜♪」

「行儀悪いよ、白ちゃん。でも確かに、あのお店美味しかったね」

横幅も大きなふかふかのベッドに寝転がり、全身でその柔らかさを
味わいながらだらんと手足を伸ばす。

洗剤の清潔な香りに、滑らかな肌触り……我が蜘蛛糸マイルームに
も劣らない心地よさ。

……………やりおるな。

「……………楽しいね。白ちゃん」

「ああ。このまま運命も因果も知らないまま、幸福に浸っていたいよ」
ぐうたらしつつ、穏やかな二人の日常。

こんな日々が毎日続けば良い。

世界の存亡とか背負わなければならない使命とか、私たちには本来関係ないことだから。

神なんて言われるような存在になろうとも、所詮もとはちっぽけな魔物だった。

その本質も、そんな重たいものを背負えるほど、立派でも高潔でもない。

何処にでもいそうな、ありふれた中身だ。

荒事や面倒事なんて、無いなら無い方が良いに決まっている。穏やかに日々を過ごせるだけで、それで充分なんだ。

「そう——それが白ちゃんの願いなのかな？」

「——そうだよ。それが貴女に贈りたい未来だから」

ベッドから身体を起こし、背筋を伸ばして真っ直ぐコケちゃんに向き合う。

いつにないほど真面目に、誠実に。

「ちゃんと言葉にしたことも想いを伝えたことも、無かった。ほんのつい最近に自覚したような気もするけれど……いや、関係ないか。私は今までずっと空虚で何も答えを出せていないから。この想いくらいは、正しく伝えたい」

彼女の小さな手を取り、両手でしつかりと包み込みながら告げた。

聞き逃したり別の解釈など出来ないように、本当は言葉にするのも恥ずかしく隠したままにしておきたい、偽りなき赤心の真実を唱えた。

「この温もりは、他のなにもものにも代わりが利かない」

貴女が傍にいる幸福や心地良さを知ってしまったから。

知ってしまったえば、それが無い世界なんて考えられない。

「この想いは、他のなにもものでも埋められない」

貴女から貰った感情が、こんなにも大きくて消えることがないから。

空虚だった私が、本当の意味で自分を描けるようになった。

「ずっと抱きしめていたいんだ。二度と失くしたり離れたりしないよ

うに。貴女と二人で、未来を紡いでいきたい」
だって——

「好きなんだ愛しているっ。貴女の全てが、私が望む全てだから！

私は……貴女のために恩返しをしたい!!」

そう、それこそが私。

昏い闇に吞まれ魂を踏み躪られようとも、変わることはない唯一の真理。

誰にも屈したりしない折れやしない、そのためならこの命、生きるか死ぬかでも良い。

貴女と共に、生きれるのなら。

「うん勿論、喜んでっ。私も言うよ——貴方が好きです愛しています、白ちゃん」

——抑えきれない喜びに溢れたその顔が、なによりも綺麗だと心の底から思えた。

「たとえ深い夢でも……うん違う。夢とか幻とか関係ない、この瞬間は紛れもない真実だから。だからお願い、もつと……」

キュッと指を絡め合い、より強く手を重ねてきた。

切なげにそう言い、幼さの残る顔に随喜の涙をはらはらと溢れさせながら——

「白ちゃん……ちゅ」

「——ん」

啄むような軽い口付け。

雛鳥が餌をねだるみたいに、柔々と唇を食まれる。

瑞々しい果実のような朱同士が触れ合い、微かな震えを伝えてくる。

そしてそのまま少しずつ長く、少しずつ深く——もつともつとと接触している時間は長くなる。

互いに舌と粘膜を貪り、とろける唾液を混ぜ合わせる。

焦点が合わないほど近い距離で、高鳴る熱を感じ合いながら。

「——あ」

「ん……」

そして数秒経って湿った吐息と共に、私の大切な人はそつと顔を離れた。

彼女の瞳が陶酔と羞恥に潤んでいる。

私も生涯で一番穏やかな顔をしている自覚もあった。

「大好きだよ、白ちゃん……だから——愛してるって、伝え合おう？」

心から交わす想いと共に。

秘めた願いと共に。

私たち二人の影が、重なり合って結ばれた。

甘い微睡みは、覚醒めない。

二人の無意識にある理想を投影して、終わらぬ仮想世界は続いてゆく。

沈むように、溺れるように、深淵へと落ちていく。

彼女らの魂は冥界の底に囚われたまま、闇の中から抜け出せない——いまは、まだ。

翠魔レルネー——1——

ここで一つ、時間は遡り——

翠魔レルネーと勇者たちが会敵する、ほんの数分前。彼らの覚悟を再認する、ちよつとした幕間が語られていた。

十枚翼を羽ばたかせ天を泳ぐ白桜色フエの光龍ライの背にて。

光龍だった頃よりも遥かに大きい体軀は、俺たち四人を乗せても広々とした余裕がある。

そして、背後からの轟音がしんと鳴り止んだことで、俺たちを送り出してくれた皆がやり遂げたことを感じ取っていた。

そのことに、感謝と尊敬を抱く。

あれだけ恐ろしい存在を前にして、恐怖に押し殺し、苦難を乗り越え、勝利を掴んだこと。

此処まで来た今でも、逃げ出したい気持ちがある俺だからこそ、それはとても凄いことなのだと思おう。

けれど、だからこそだ——託された願いに背くことは出来ない。

「見えた、あれが——翠魔レルネー」

「なんて、巨大な……」

慨嘆が籠もる声の俺と、思わずといった眩きが漏れるカティア。

暗雲と小型翠魔を掻き分け進む俺たちの目に映ったのは、巨大という言葉すら足りないと思えてしまう醜悪ながらも神聖さすら感じる九頭龍の威容。

混濁した血色の海からとぐろを巻く超巨大蛇の群れは、絡まり合う山脈のよう。

いまだ遥かな先だというのに、それでもなお視界の大半を埋め尽くす巨体は、彼我の距離と縮尺の感覚がおかしくなってしまうそうだった。

『ねえ、気付いてる?』

「うん、フエイさん。小さい翠魔が私たちを無視してるというか、一瞥いちべつもくれずに外へ飛んでいくみたい」

フエイとユーリが言うように、翠魔レルネーは幾つもの鎌首を蠢かせていた。

膿が滲み爛れたような鱗は身じろぎするたび痛々しく剥がれ落ち、それが小型翠魔へと変じては狂気の産声を上げて、外へ外へと拡散していく。

放射状に外界へと向かうそれらは、当然俺たちへと向かってくる小型翠魔もいるのだが、何故かレルネーが見える距離まで来た途端、川の流れが別たれるかのように俺たちを避けだした。

それは、まるで――

「どうやら、誘われているみたいだね」

「そうみたいだな、京也」

たすき掛けで袖を捲った袴姿で、腰に吊るした二本の長刀に手を添えている京也^{ラリス}。

眼光鋭く前を見つめる親友の言に、俺も同じ見解だと首肯する。

まるで黄泉路のよう。

この先に待ち受けるのは、俺たちが相手せねばならない存在、遍く生命滅ぼす幽世の九頭龍。

内包する驚異は、ユーゴーたちが倒した三体の翠魔とは比べ物にならないだろう。

遠目から認識しているだけでも心胆を寒からしめる翠魔レルネーは、尖兵たる小型翠魔を一時も休むこと無く産み落とし、出現した場所から一歩たりとも動いていない。

その強大無比な中核と、手足となる存在を生み出すという在り様に、思い当たるものがあつた。

「……以前兄様が討伐したという、土精のようだ」

「精霊種の事ですわね。たしかに、規模こそ違えど符合するものは多々ありますわ」

上げた例を、風で靡く赤髪を押さえながら補足するカティア。

精霊種――この世界において極めて珍しく特殊な魔物群の総称で、そもそも生物であるのかどうかさえ怪しい生態の魔物だ。

出現する位置は決まって、一定範囲内に人里がある場所。

親たる精霊は発生した位置から動くことは無く、眷属の小精霊を無数に生み出し続け。

小精霊は外へ外へと散らばり、周辺地域の生物に無差別に襲い掛かるのが特徴である。

兄様の実体験の話と学園書庫で調べた内容から推察するに、まるで人に試練を与えるための意思なき装置みたいだと思ったそれが、翠魔レルネーと重なり合う。

「なら、止めるためには本体を叩くしか無いですわ」

「そうだね。けど……やることは変わらないとしてもあれだけの巨体じゃあ……」

錫杖を抱えるように両手で握りしめるユーリから、不安げな呟きが漏れた。

俺以外の皆も、よくよく見れば微かな震えや強張りがあるのに気付ける。

あれを倒さなければならぬ。

それがどれほど途轍も無いそして恐ろしい難行なのか、全員が全員理解していた。

『——小僧』

「っ、ビヤクさん」

『勇者たる汝がその様でどうする。胸を張らんか、未熟者。我と剣を担うに相応しい、真に世界を愛する勇者は戦う前から屈するののか？ 違うであろうが』

首巻きの上から俺の首に巻き付く光龍ビヤクが、軽く爪を立てながら肩を叩き、うつむきがちになりかけていた俺を叱咤する。

『汝の理想は、虚構か？ 汝の夢は口先だけか？ 違うというなら吼えてみよ。どんな苦難を前にしても、あ奴は膝を折るなどせんかったぞ。先代ユリウスはな』

「——」
念話で語りかけてきたその言葉は、なによりも熱く俺の芯を捉えた。

千の激励よりも兄様を引き合いに出される方が、俺にとって何億倍

も奮起させる。

「ああ——必ず勝つさっ！」

『その意気ぞっ！……やはり兄弟であるな。汝ならば、いつか至れるはずだ。理想とやらにも』

なんとも不器用な発破だと思う。

けれどそれで力が湧き上がってきたのも事実だ。

ゆえに深い感謝を籠めて、ビヤクの喉元を指で撫でる。

それに不敬であるとはかりに鼻を鳴らしているが、避けられたり払われたりはしなかった。

ふと、こつんと背中に寄せられた重みと熱を感じた。

俺よりも小さな身体が、銀の髪を揺らめかせて添えられる。

「ユーリ、どうかしたか？」

「……………シユンくんは間違つてないよ。私もその背中を支えるから、大丈夫」

密着した状態で告げられた言葉が、暖かく染み渡っていく。

真摯な想いは光のように行き渡り、優しい微笑は陽だまりのようだ。

その、なんとも言えない気恥ずかしさを感じ、思わず話題を逸してしまう。

「——そ、そういうえばユーリは、女神様のところへ行かなくても良かったのか？ その……………熱心に信仰してきた神様なんだろう？」

「ううん、今はいいの。私なんか邪魔しちや悪いだろうし、引き裂かれていた神様達にだって、積もる話は沢山あるだろうから。だから……………全てが終わった後でいい」

静かに語るそれは愛惜に満ちていて、複雑混沌な気持ちを抱いていても大切に想うからこそ身を引いたのだと、強く伝えた。

「そっか……………なら、尚更伝えなきゃな」

「えっ？」

「まだまだ、これからさって事。前世合わせても人生経験が三十すら満たない俺たちは、掴みたい未来モトさえ遠くだからさ。賢しげに悟ってみせて、足を止めるには早すぎる」

そうとも、まだ知らない事は世界には沢山あつて。

やりたい事や分かち合いたい事も、まだ出会えてすらいないんだ。

「俺たちの終わりは、今じゃない。続いていくんだよ、未来へと」

思わず込み上げた笑みは、我ながら呆れるほど馬鹿みたいな希望論からだった。

終わりと決めつけるのは、それこそ死ぬ間際で良い。

生きて生きて、生き抜いて——その果ては人生という道の遙かな先にあつて欲しいから。

その愚かともとれる一言に、ユーリを始め皆が苦笑した。

「ふふ、ふふふ……そうだね」

「癪ですが、同意します。底抜けに馬鹿なシユンらしい」

『シユンにしては、良いこと言うじゃない?』

三者三様、口々に好き勝手に言うが、そこには侮蔑や嘲笑など一切なく。

信頼、友情、絆——そういった心地よい感情のみ。

「なら——続けにいこう、シユン！ 僕たちの未来はまだ先だと言う君となら、必ず勝てるさ」

京也が力強く気概を示す。

弾け、伝播していく熱は俺たちを包み、一つの理想を核にして環を描き出す。

「そうだな！ 託された想いも未来も、全てが俺たちの背を押してくれる！」

重くなど、無い。

それらは全て、力と勇氣に変わってくれるから。

加速するフェイに掴まり、勢いよく俺たちは突き進む。

もはや一キロメートルを切った距離に、レルネーの圧倒的な巨軀は断崖のごとし。

向こうからすれば、人など蟻以下な矮小さだろうけど、臆することなども無い。

未来のために。

その誓いを胸に、俺たちは必ず勝ってみせるツ!!

「やるぞ、みんな!!」

「『』 往こうつ、シユン!! 『』」

——そんな彼ら彼女らを見詰める十八の眼は何を思うか。

狂気に濁った瞳であるが、此処まで辿り着いた存在について翠魔レルネーは認識していた。

いまや翠魔レルネーは星の触覚、狂えし神意の代行者だ。

生命を抹殺する使命を果たすべく、知覚領域は星全域にまで及ぶ。それゆえ、たかが大洋一つ分の範囲など手に取るように把握出来るのだ。

幾らでも生成できる下位翠魔が迎撃に合い、それほど生命を殺傷出来ていないことも。

ようやくその一部が、大陸へ到達して手当たり次第生命抹殺を開始したことも。

奮闘や逆転、決意という名のもと、抗う人類と龍種。

自身の守護たる上位翠魔の三角を打倒したそれらを見届けても——狂気は変わらない。

膨れ上がる狂念は、呪詛となって紡がれる。

荒ぶる九頭龍の呻きは生存本能を逆撫でし、全身が総毛立つものだった。

もはやその狂い様は一種の現象じみて、世界規模で齎される災害そのものであるかのよう。

森羅万象滅ぼさねばならぬと怨嗟を轟かせて、半身腐りし龍が身じろぎ蠢く。

鱗は爛れ、血液は腐った、吐息も膿んでいる。

隣れにさえ思える痛ましき姿は、見るものに世界の終焉を連想させる。

これが何の化身なのか。

それを思えば、かの九頭龍に感じ入るそれも当然の事だろう。

翠魔の中で唯一、その名が怪物ではなく怪物が住んでいた地名を冠

しているのも、その証明。

人は「星」に住まう者。

ならば果たして、その化身に抗うことは正しいことなのだろうか。

そも、星が無ければ生命など存在しない。

ならば正しいのは、あちらではないのかと——そう思えてしまう畏怖が九頭龍にはあった。

本来は素晴らしき威容を湛える星の守護龍。

それが病んで堕ちた末路こそが、翠魔レルネーの本質である。

幽世の九頭龍は、苦痛や狂気を吐き出すように海面へと巨軀を何度も何度も打ち付ける。

のたうつ衝撃は地震となり、押し出された海水は天津波となって広がる。

そして黄に混濁し血走った眼をギョロリと回し、抹殺すべき存在を視界に捉え——

一斉に殺意を叫喚した。

死に絶えろ、死に絶えろ、遍く生命灰燼と化せ。

それが星を再誕させる、救いであろうが。

生命住めぬ、半壊した身体が今も疼く。

貪られ枯れた病み星は、爛れた傷を癒やす糧を欲している。

ゆえに狂い嘆こう、星の痛みは我らが痛み。

森羅の最果てまで、醜き畜生を一掃し罪深き者を浄滅せん。

生命よ、死ぬがよい——壊れた星の嘆きを思い知れ。

永劫終わらぬ神罰の死毒を味わうがいい。

具象化した天災、絶滅機構。

禍津を纏いし究極の生命抹殺装置、幽世の九頭龍が今——動き出した。

抗う人類、舞う天月

空を翳らせる魔性の群れ、世界へ広がる大厄災。

水龍の防衛線を抜けて襲来した翠魔が、海岸に沿って展開した人族と魔族の混成軍へと殺到していた。

世界中へと薄く広がった魔性は一戦場あたりの密度を減じているが、それでも決死の覚悟で挑まなければならぬ死と隣合わせの争いが世界各所で繰り広げられているのだった。

これらの戦線こそ、無辜の民を守る命の防波堤であり不退転の防衛線。

剣と鎧で武装した人達と、歪な翼龍のような翠魔が、己の全てを懸けて互いの命を削り合い。

矢弾と魔法が飛び交い、鋼と爪牙が火花を散らす、最終戦争の如き壮絶な戦場であった。

「弓兵隊。構え、照準——撃ち落とせッ！」

「第一魔法隊、後退。第三魔法隊、大魔法準備。第二魔法隊、放てえッ!!」

強弓から射られた矢の雨が、剣の届かぬ上空を飛翔する翠魔を撃ち落とす。

そして時間差をつけて投射される複数人協力での大魔法が中空にて炸裂し、撃墜に至らなかつた翠魔ごと巻き込みながら殲滅するのだ。

それでも猛攻を耐え抜いた翠魔もあり、翹翼を損傷して飛べなくなろうとも身体をバネのようにして兵士たちへと牙を剥くが——

「盾兵、押し留めろ！ 剣士隊、側面より強襲。決して触れずに一撃離脱を徹底せよ！」

大盾を組み合わせ巨大な一つの城壁となった盾兵部隊が、その身を晒さぬようにして翠魔の突進を受け止める。

すかさず剣や槍を構えた接近戦を担う部隊が呐喊し、勢いよく刃を突き立てては即離脱した。

彼らが離脱した次瞬、黒い血を流す絶命間際の翠魔は金切り声を上

げながら腐蝕の瘴気を纏い、最後の力を振り絞り頭突きを盾兵らに打ち付け、それでようやく活動を停止するのであった。

「被害報告！」

「盾兵、重傷1、軽傷6。剣士隊、軽傷4です！」

「負傷した者は治療魔法使いの元へ！ 抜けた穴は交代！ 盾兵の陣形に隙間を作るな！」

翠魔のもつ腐蝕属性によって、掠っただけでも大怪我へと転じるため兵士たちの損耗は激しく、治療魔法が使える支援部隊には負傷兵が目まぐるしく立ち代わり入れ替わっていた。

果断に下される指揮官の命令に、速やかに行動へと移る兵士たち。普段ならば彼らは、こうも迅速な対応や命令伝達など望めない練度ではない部隊である。

しかし——異様なまでの熱気が彼らの間で充溢し、実力以上の能力をこの終わりの見えぬ戦場で発揮させていたのだった。

高まり続ける士気。

どう考えても劣勢であるというのに、彼らは止まらない。

自らの身体や命すら顧みない奮戦によって、じわじわと反撃に転じ始めていた。

「生身で受けなければ問題無い！ 連携を密に、全軍、押し返せえッ！！」

雷鳴の如き指揮官の喝破に、兵士たちは更に一層士気を滾らせる。まるでこの瞬間に魂を燃やし尽くすかのように、輝きを放ちながら

魔族軍、陣中——

魔族領と帝国領の境目にあたる地域でもまた、苛烈な戦闘が繰り広げられていた。

彼らを包む熱気はそのまま戦火と化し、徐々に熱量を高めながら戦

闘の勢いを激化させていくのであった。

戦場にて争う彼らは魔族領に残されていた兵力、そのほぼ全てである。

治安維持や民衆の誘導のため残った第二軍軍団長サーナトリアとその配下を除き、強行軍でこの場所へと行軍してきた彼らは、疲労を感じさせぬ戦いぶりを見せていた。

それもそうだ——彼らの間ではある共通意識が互いを結び、末端の兵士にいたるまで士気も意気込みも突き抜けているのだから。

ともすれば狂気そのものと言ってもいい熱狂具合。

一個人では冷めてしまうそれも、軍という集団内で伝播し続けるとなれば、熱は際限なく膨らみ続け弱腰の兵ですら勇猛果敢な戦士へと早変わりしていた。

魔法と爆音は途絶えること無く、花火のように煌めく。

転がる死体も魔族のものも多いが、それ以上に絶命して灰へと帰す翠魔の骸も数多く、それらが戦場が埋め尽くされようとしていた。

火炎の赤と黒煙、そして熱風に流される灰。

空には、断続的に襲来し命を刈り取ろうとする翠魔の影。

終末を思わせる凄惨な光景だが、彼らは折れること無い不屈を瞳に宿していた。

その戦いの指揮をとる者達は、次なる一手を果敢に選び取りながら、加熱していく戦場を冷静に双眸で見据える。

「左翼展開、包囲。魔法隊、目標切り替え対象南南東800、撃ち落とせ！——臆するなっ！ 一体一体なら大したことはない！ 冷静に対処せよッ！」

念話で遠方の兵士と交信しながら全体指揮をとるのはバルト。

軍団を的確に動かし、戦場全域を多角的に捉えながら、加速する思考は脳を沸騰させながら冴え渡る。

瞳が乾き鼻から血が垂れようとも、一顧だにしない。

命を削りながら奮戦する様は、まるで死兵のよう。

彼だけではない。

誰もが己の命を懸け、裂帛の雄叫びを響かせながら果敢に戦ってい

る。

大怪我を負おうが戦闘に支障が無いのなら、怯まず武器を振るう。そして死が確約されたものとなれば、凄絶な笑みを浮かべながら最期の大立ち回りをするのだ。

死を覚悟してなお戦う兵士たち。

そして彼らを背負う指揮官。

誰もが魂を燃焼させていた。

「我らの命、魔族のため——いいや、世界の未来のために！」

激を飛ばすバルトに鼓舞されて、使命感を滾らせる魔族たち。

昂揚は渦となり、内側より溢れ出す活力は無尽蔵にも思えるほどに昂ぶっていた。

「バルト殿」

「ダラド卿か。何か気掛かりでも？」

指揮するバルトへ声を掛けたのは、第五軍軍団長のダラド。

その顔は硬く、何か懸念事項があるかのように口端をキツく結んでいた。

「強行軍と終わりになき連戦で兵士たちの疲労が深刻だ。士気は極めて高いが、それでも休まず戦い続けられるはずもあるまい」

睡眠無効など、疲労や負荷を無視出来る類いのスキルを一兵卒は到底保有などしていないため、誰も彼もが休まず戦える訳ではない。

それゆえ、今だけは精神的な後押しがあるが、早々に限界が訪れるとダラドは懸念していた。

「分かった。人員の調整とペース配分を任せる」

「心得た。バルト殿自身も気を付けるのだぞ」

なにもそれは、兵士だけではなく指揮官にも当て嵌まるのだと、ダラドは釘を刺す。

それに苦笑いを返しながら、バルトは頬を叩いて気を引き締め首肯した。

「こんな時になんだが……貴殿の前世はどうであった？」

「……転生履歴を見たのか？」

「ああ、そうだ」

侘びた苦笑を湛え、ダラドは遠い目をしながら己に言い聞かせるように呟く。

「先に問うた身として答えよう、我は流通最大手の最高経営責任者だったらしい」

禁忌の転生履歴。

それはこの世界で繰り返された、何十何百代にも渡る己の人生を遡り見返す記録だった。

肉体の死と共に忘れ去ったはずの、魂に刻まれた記憶を呼び覚ます贖罪の自叙伝。

たった一人の人生分の記憶でさえ、膨大な情報量でありそれを一瞬の内に回顧させられる衝撃は目が眩むほど凄まじい。

全ての人生を思い出す前に、数回目あたりで脳が破裂するのではないかと思うほど。

「世界を股にかける、大動脈にして不動の企業。そのようなものゆえに、星に危機が迫っているという事柄も、確度が高い情報だとは知っておったのだ。

だが、無視した。

金のため、従業員のため、そして老いた我が身可愛さゆえに。

最期は、財産も人も何もかも失つての惨めな死だ。裏切られ、奪われ、残ったものは何も無い。ワールドクエストが語る、星を貪り枯らした醜き畜生には、お似合いの末路であろうよ」

自嘲の溜息を盛大に吐き出し、低く地鳴りのようにダラドは笑う。

「そして、そのツケは死してなお終わらぬ、この様だ。これを滑稽と言わずしてなんと言う」

「……そうだな」

魔族の宿命。

永遠の憎まれ役であり、最も罪深き虜囚たち。

「バルト殿は？」

「俺は………俺はそこそこの国の王子だった」

とはいえ、実権などなく政治は議会が取り仕切る、飾り物としての王族だったが。

面倒な義務だけ課され、他の目を気にし続ける、堅苦しい不自由な生活しか存在しない。

「だが、俺は祖国が……もう存在すらしない国と、その地に暮らす民のことが好きだった」

国があつた大陸も天変地異に沈み。

記した歴史書や物品なども、永い時間で塵と消えた。

あの国が存在していた証明するのは、もはやこの記憶の中にしか存在しない。

「俺たちの愚挙が星を壊し、この歪な世界に至つた。その果てが今の魔族なのだろう。ならばこそ清算するしかない。俺たちは生きている。現代を生きる魔族だから、未来を生きる子らには因果を背負わせたくないと思う」

バルトは静かに反芻しながら、毅然と決意を固めていく。

「だから、今度こそ俺は魔族たみを守りたい。何度生まれ変わろうとも、変わらず足掻くまでだ」

それが俺の生きる意味で、始まりの王子おれより継いだ願いだ。

「クク……そう、だな……足掻く、か……。たったそれだけで終わる話であつたな」

「ああ、そうだ。往こう」

過去を見返した男達の会話は、これにて終わり。

彼らは一握りの理想だけを掬い上げて、震撼する鉄火の戦場へと向き直る。

戦いは、未だ終わりの兆しすら見えない――

「教皇殿下、此方になります」

「案内ご苦労。他の者らは各々の仕事を優先してください」
「はっ」

過去の荒野での一件で大きく人員を減らした神言教の暗部。

新たに鍛え上げたなかで空間魔法を扱える人員により、転移で到着した前線の城砦。

そこに、教皇ダステインは居た。

ここはダズドルディア大陸における、大厄災に対抗する戦線の中枢部。

各地の戦場の状況を纏め上げ、人族国家の総力を上げて支える、頭脳と心臓であった。

兵士に案内され、ダステインは重厚な椅子に腰掛ける。

彼が座った場所は周囲より一段高く、この作戦司令部全体を見渡すことが出来た。

石造りの実用性を重視した無味な室内に、多数の将官が窮屈そうに奔走していた。

「それで、各地の戦況は如何ようでしょうか？」

姿勢正しく泰然とした挙措で、教皇はゆるりと視線を巡らす。

その問いに、下方に待機する兵士が背筋を伸ばして答えてゆく。

現在の戦況は、拮抗の体をなせる瀬戸際。

交戦しているのは移動中の軍隊も含め総数のおよそ五分の一であるが、だが場所によつては戦力の偏りがあり、損耗激しく後詰めがもう無い戦線も出始めていた。

そしてこれまでの激戦で潰えた兵は、夥しい数に上る。

被害は甚大であり、人魔大戦の比ではないほど生命を散らしていた。

「報告にあつた白装束についてですが……無視して構いません」

「は？ ……いやですが、味方どうか不明瞭な集団を放置には……」

「あれは味方です。神言教が保障しましょう」

各地の戦場で戦線崩壊の危機に陥ったとき。

何処からともなく白装束の一団が現れ、圧倒的な戦闘力で周囲の翠魔を殲滅して気が付いたときには戦場から跡形もなく消えているという。

その集団にダステインは心当たりがあつた。

そして彼らを率いていた、白い少女の存在に小さく感謝を捧げる。

——ご助力、感謝いたします。

「人族連合軍に魔族軍……共にこの苦難を乗り越えましょう。我々人類が、生きるために」

たとえ些細な違いでいがみ合うのが人類の悪癖だろうと、時には己や世界を滅ぼす災厄には主義主張を超えて団結出来るのもまた、人である。

それが一時的なものであったとしても、団結できたのは事実なのでから。

「——サジン、居るのでしょうか？」

「ありや。なんで爺にはいつも見破られるかなー」

「勘ですよ。長く生きていれば分かるものです」

「んな馬鹿な」

すうつと隅から滲み出るように、かつて草間忍という名だった少年、サジンが現れる。

そしてダステインの前まで音もなく歩くと、膝をついた。

「なにゆえ戻ってきたのです？ あのまま転生者たちと戦っても宜しかったですのに」

「じょーだん。俺程度が混じったところで、高が知れてるっーの」

サジンが戻ってきたのには理由があった。

彼の生まれは神言教の暗部、その幹部にあたる存在が父親だった。

そのせいか、あるいはお陰か、赤子の頃より早々に転生者だと発覚し、エルフの魔の手が伸びる前に嚴重にダステインが保護していた。

貴重な人材を無駄に遊ばせるはずもなく彼には厳しい暗部の訓練が課せられたが、今となってはサジンはこう思う。

——けど、他の転生者の境遇を聞いちゃうと、それでも俺は恵まれてたんだなー、と。

神言教に保護されていないければ、エルフの連中に監禁されていたのだから。

あのような生活、とても自分には耐えられそうにない。

「なんていうか、気付いたんよ。爺には一応恩があるっつき。世界の

命運なんか関わりたくねーし今でもトンズラこきたいけどさ、爺に恩を返さないで消えんのは筋じゃねーだろって」

軽口めいた言い方だが、籠められた想いは真摯な感情だった。

彼は彼なりに、義理と使命を果たすべく戻ってきたのだった。

「報告しますッ！ 内陸部にも翠魔が空間転移で現れたと！」

「数は、場所は？」

「今のところ、各国の王都など大都市のみで確認され、数も十数匹ほどの少数だと」

血相を変えて来た伝令のその報告に、ダステインは唖る。

どの国も前線に兵力を送り出している。

しかし大きな都市であれば、幾分かは治安維持要員として兵士も残してあるだろうから、即刻に都市が壊滅するなどという事にはならないだろう。

だが——放置すればするだけ無辜の市民が犠牲になりかねない。

「サジン」

「言いたいことは、なんとなく分かったさ」

このようなときこそ、暗部で培われた訓練と経験が役に立つ。

「では暗部の人員へ伝達、彼らには内陸部都市の援護をお願いします」

「あいよー。まあー受けた恩の分くらいはしっかり戦うさ。死なねえ程度に」

再び、陰と同化して姿が見えなくなるサジン。

数秒前まで彼が居た場所を眺め、ダステインは背もたれに倒れ掛かりながら呟く。

「……私の役目も、終わられるのでしょうかね」

老いし者は去り、次の世代が未来を紡ぐ。

まだまだ未熟なれど、理想に燃える輝きに託してみたい。

ああ素晴らしきかな人類よ。

絶望が氾濫する地獄の底であろうとも、希望はある。

女神よ、感謝を。邪神よ、我らは負けぬ。

——人類に栄光あれ。

空に翼を拡げて静止する巨大な黒龍。

まるで黒曜石の鉞脈をそのまま剣にしたような、鋭く玲瓏な体軀が地上を睥睨する。

『サリエル……』

微かな感傷を喉で転がしながら、ギユリエティストデイエスは高空に鎮座する。

龍化して拡大した知覚器官は、地上の多くを捉えていた。

海岸線に沿って展開される生存戦線。

人族に魔族、種族の別なく戦うことを選んだ勇士たち。

石と木と鉄を組み上げた都市。

教会や避難所に集まり、傷付いた人の手当てをする男や煮炊きをする女。

自然と共にある農村部。

遠くの空を見上げながら不安げに祈る農民たち。

彼女が守りたかった、人類という存在たち。

『なんでお前が守っていたのか、これだけの時間が経ってようやく分かったよ。』

好きなのだろうか、こんな光景が。

未熟な人類だからこそ、思いやりや勇気を示したときが何より喜ばしいのだと』

無論、善性だけとは限らない。

むしろ悪行愚行のほうが全体から見れば遥かに多く、嫌でも目についてしまう。

自棄になって凶行に走る人もいた。

無気力になって投げやりになる奴がいた。

絶望して生命を絶った者もいる。

『それでも……なのだろうか？』

己も分かるよ。

人として同じ目線で暮らし、幾つもの人生を体験してみても理解できなかった。

今の分体である、ハイリンス・クオートも同じことを思うだろう。『ならば——俺も守ってみせるさ、この世界を！』

瞬間、空間支配能力で捉えた翠魔の数々。

その全てが——空間断層に原子の単位で断ち切られて輪切りとなった。

『こんな俺でも……舐めてくれるなよ、魂なき人形め！ かの翠のを侮辱するその姿。一匹余さず刻んでくれよう——我が名はギリエティストデイエス！』

かの翠の少女に救われ、捧ぐべき女神への愛を取り戻した、忠義の黒龍としれ！』

黒曜石の如き巨躯に決意が宿る。

黒き龍神は空間を越えて、未熟な人々をただ守らんとするのだ。

遙か彼方の空に見えたそれは、流星のようであった。

疾く、鋭く、超々音速の速度で飛翔する銀の尾を描く光。

高度な機械を作れなくなった今の世界では、人が到達方法を失った絶空の領域。

空気が薄く、極低温と低酸素が支配する場であろうとも、そのような人の住めぬ世界こそが己に相応しいとばかりに、悠然と光は舞い踊る。

いや、本来はもつと遙かなる宇宙^{ソッラ}の秩序のために駆ける流れ星だったからこそ、大地に縛られていた今までが異常だったとも言えよう。

機械仕掛けの翼から光を放出し、天空を舞う秩序の使い。

無機質な瞳が捉え誅戮するは、世を混沌に乱す堕ちた神の姿。

——天使。

彼女サリエルを示す種族名は、それである。

「残存エネルギー、二割。エネルギー節約のため近接戦闘へ再度移行。撃滅を開始する」

宣言と同時に、両手の甲から光刃が発振する。

その次の瞬間、爆音と暴風が吹き荒れた。

目にも留まらぬ速度で、空を高速飛翔する銀の天使。

鋼の翼からフレアを噴出させ、さらなる加速をしながら烈しく眩しく燃焼する。

その軌跡が通過するたびに、翠魔が次々と両断されては墜落していく。

弧を描く蒼白い光が、空を裂く。

月光のような淡い光であるというのに、光が内包した威力は死そのものだった。

黒い影が群れを成して、サリエルが一瞬前居た場所を横切った。

サリエルの存在を危険だと判断したのか、翠魔が狙いを絞って追い駆けてきていた。

「脆くとも、攻撃性能は十分危険。接触は厳禁ですね」

『ジイイイiaアアaアアツ!!』

まるで黒い蛇のごとく、流動しながら突撃を繰り返す翠魔。

周囲の戦場からも集まり、目視で計測したその総数は一万九百二十にも膨れ上がっていた。

「近接、接触の危険。射撃、非効率。大規模殲滅魔術、エネルギーの消耗が激しい——では、アレでいきましよう」

大きく高度を上げて、サリエルが天に向かう。

その最中、腰を覆うパーツが展開していく。

「申請——」

聖なる天使の一人サリエルの名において、魂魄に対し罪を犯す者に神の裁きを。

コード、死眼天月——承認求ム」

シンセイラジュダク

追い掛ける翠魔。

しかし、圧倒的な速度差でみるみるうちに距離を離され、見上げるだけになる。

そして成層圏すら突破し、高度上昇を続けたサリエルは翠魔の直上、数千メートルの位置で停止していた。

展開するパーツは、細い弧から三日月へ、そして完全なる真円を形作る。

機械仕掛けの新たな銀月が、空に月光を妖しく反射した。

「Telebase 制約解放——Type: Sariel mode 《其は神の命令、死眼天月を司る者》」

その瞬間、世界は月光に覆われた。

抵抗する余地もなく、サラサラと灰へ崩壊していく翠魔。

見上げた天には、天空より見下ろす巨大な瞳が浮かんでいるのであった。

幻月環、つきかぎ月暈、エンジェルヘイロウ。

そのような言葉が連想される、虚像として空に映し出された月の邪眼。

その月の邪眼が視線を動かす度に、翠魔は次々を灰に帰すのであった。

サリエルの背に浮かぶ鋼の銀月。

それから投射された邪眼こそ、彼女の力の一つであった。

単騎で、大陸一つを丸々カバー出来る戦闘力。

視界の届く範囲全てこそが、殺傷圏内。

そして鋼の銀月の向こう側は世界の根源と繋がっており、そこから制限付きではあるが無尽蔵のエネルギーを引き出して術を長時間展開し続けるのも可能であった。

「——駄目ですね。定格の半分も発揮できていません」

そうぼやくサリエルの顔に、冗談の色は感じられない。

これでも大幅に弱体化しており、そもそも格上には全く通用しない戦法だと彼女は言う。

「まあ、これでもこの相手には問題無いでしょう。稼働限界まで、さあ踊りましょうか」

月の女神の邪視が、魔性を睨め尽くす。

神の命により、魂の運行を穢すものに裁きを下す。

「たとえ弱く儂き、真昼の月のようなものであろうとも。

確かに其処には存在するのですよ、私が愛した世界と人が」

——だから、守ってみせる。

天に煌めく、月の法。

地上に向けて微かに微笑んで、女神は空を舞い続けた。

乱気流を生み出しながら閃光が走る。

極光と滅光が交錯する。

躍動する大質量の高波を薄紙のように割り裂き、砕かれた大気が悲鳴を奏でるさまは、さながら世界の終わりのようだった。

災宴の中心たるこの地は、まさしく死の気配が満ち満ちる猛毒の沼底。

沸騰する海は魔女の釜めいており、その奥底は紛れもなく冥界の入口と繋がっているのだと感じられた。

けれども空は、そんな冥界らしい静寂と暗さとは真逆の、極彩の煌めきを描いていた。

聖なる光、業火の如き灼炎、清廉な蒼き雷轟。

それらが乱れ舞う。

そしてそれらを塗り潰すように、黒き滅光が閃く。

純粋な腐蝕属性の光線という、全てを消滅させる反物質砲。

ときに無造作に乱射して逃げ場を塞ぎ、ときに狙い撃つかのよう放たれていた。

龍頭の一つから狙い澄まされ迫る光は、広域を消し飛ばしながら瞬き一つほどの時間もなく到来せんとし、たった一撃で彼ら全員を何千回も殺し尽くせる威力を内包しているのだと直感する。

回避しようにも、間に合わない——

「死力を尽くさなければ、勝機などありませんわ！」

凜とした声が、その展開を虚空へと逸らした。

「『親愛』こそが、我が美德——対象フェイ、範囲拡大、腐蝕無効付与、純潔……展開いっ!!」

次の瞬間、光龍の巨大な全身を覆う城壁のような光壁が現れた。

光壁と滅光が、けたたましい轟音を立てて閃光を撒き散らす。

嫌な音を鳴らし僅かに撓んだ光壁だが、神龍結界をも超える絶対防壁の結界は滅光を耐え切り、腐蝕無効が付与されていることで滅光の最大の驚異である特性は完全に無力化されて、逸らされた威力が四方

へと拡散する。

その驚愕に値する行為を為した術者は、少し肩で息をしながら堂々と胸を張りながら赤髪を肩へ払った。

「……ふう。さすがは当代一人しか取得できない支配者スキルと言ったところ。おかげでわたくしでも盾として役立てますわ」

術者を中心に不動堅固な結界を張るスキルというのが、純潔の効果。

その防御性能は、ステータスカンスト超えの攻撃を余裕で耐えきるほどであり、事実上システム内での攻撃では破壊不可能な耐久性を誇る。

そして今しがた起動させたスキル親愛。

それは本来、術者個人を中心とした半径数メートルにしか展開できない制限を取り払い、さらに結界そのものに追加で効果を付与でき、術者と所縁のある対象にも純潔の絶対防壁を付与させる力であった。ゆえに、親愛によって授けられた純潔の加護によって、滅光は決してフェイに届くことはない。

『サンキュー、カティア。……能力聞いてたとはいえ、さすがにちよつと肝が冷えたわ』

「礼には及びませんわ。わたくしも出来ると理解していたとはいえ、ぶつつけ本番で少しヒヤヒヤしましたし」

お互いなんでもないかのよう語る、フェイとカティア。

だが、その言葉には微かな震えも交じっていた。

開戦から僅かな時間で交錯した応酬は百を超え、死の気配もそれだけ数多く感じた。

何度も繰り返し返したからといって、慣れるなどありえない。

むしろ慣れて感覚が麻痺した瞬間、容赦なく死神の鎌は命を捉えるだろう。

なんとか死線を潜り抜けられているのは、死への恐怖や己は弱いと認識している臆病さこそが、精妙な回避を生み彼らの生命を繋いでいるのだ。

「ハイリンスさんの大盾のように……傾けて逸らすっ」

再びの衝撃が純潔の防壁に突き刺さった。

身の毛がよだつ咆哮と共に、ドス黒い滅光がいくつも照射される。しかしそれらの凄まじい猛攻を、今度は傾斜をつけた結界で受け止め捌いていく。

カティアは極限域の術式制御によつて脂汗を滴らせながらも、この絶死の光雨から守りきる傘を展開し続けていた。

「カティアっ、無理するな！」

「大丈夫ですわっ。それよりも——」

『掴まれッ！』

瞬間、天蓋が落ちてきたような龍頭の押し潰しが迫りくる。

それをフェイは空中で側転するように紙一重で躲し、その勢いのまま加速し踏み込む。

背に乗るシュレイン達は、フェイの重力魔法によつて慣性の影響を抑えているものの、それでも肉体に掛かってくる負荷に必死に耐ええしがみつく。

「矛は僕が担う。そのまま進めッ！」

不安定な足場を苦ともせず、ラースが構えた。

鞘より二本の刀が抜き放たれ、灼熱と雷鳴の剣気が飛翔する。

魔力を溜めに溜めた斬撃は滅光に劣らぬ破壊力を内包し、今しがた避けたばかりのレルネーの首へと叩き込まれた。

龍鱗を焼き裂き、筋と骨を断ち切つて、巨大な切創から黒い血飛沫が吹き上がる。

城に匹敵するような首を半ば以上斬り裂き、僅かな肉と皮で繋がっているだけの大きな傷を与えたが、誰もこれで首一つ無力化したとは思っていないかった。

そんな簡単に痛打を決められるなら、こうも苦戦などしていない。

斬られた断面から、悍ましい闇色の触手が伸びる。

それらが絡み合い結び合つて、ほんの数秒ほどで焼失した欠損すら埋めて、斬った首を接合されてしまった。

それだけなら、まだ良い。

本当に危険で、迂闊に攻勢に出られない理由があった。

飛び散った血飛沫や肉片が、重力に逆らって宙に浮かび凝集しだす。

無形だったそれらは小さな龍頭へと変じ、此方へと牙を剥いて突撃してきた。

その数、ざっと二十。

「炸裂剣——ッ」

「援護するね。聖光魔法！」

空納より爆発する使い切りの魔剣を射出するラースと、錫杖を向け以前のそれとは数段も威力が上昇した光弾を連射するユーリ。

それらに撃ち抜かれ蜂の巣となり、小さな龍頭は中空で大爆発を起こし今度こそ消えていく。

あれらの接近を許せば、あの恐ろしい威力を至近距離で受けることとなり、腐蝕の属性を帯びた一撃は身体を大きく抉り取るだろう。

血や肉片を焼き切っているから自爆する龍頭はこれだけで済んでおり、彼らは知る由もないことだが、もし焼却や浄化以外の攻撃で傷を与えれば十数倍の数が襲いかかっていただろう。

それらはまるで、幾ら切り落とされようとも再生し新たに増える首のよう。

神話に語られるヒュドラの如く、迂闊な攻撃は死を招く反撃として返ってくるのであった。

「くッ——俺も」

「シユン君は待機してっ」

「そうですね。あの怪物を仕留めるには、此処ぞという時までシユンを温存しなければならぬのですもの！」

ユーリとカティアからの叱咤に、シュレインは齒噛みする。

そう、彼は分かっている。

彼ら彼女らの役割と、己の役割というものを。

フェイは、この死線氾濫する戦場を駆ける騎龍として。

カティアは、死を遠ざけるための盾として。

ユーリは、要所要所で攻めも守りも両方フォローする援護として。

ラースは、立ち塞がる壁を強引に砕くための矛として。

そしてシュレインは、翠魔レルネーに勇者剣によって止めを刺す、最も重要な切り札。

ゆえに、皆が道を切り開いてくれたその時まで、彼は何も出来ない何もしてはならないのだ。

しかし、そんな彼らを嘲笑うかのように、幽世の九頭龍は次なる絶望を作り出す。

全ての鎌首を持ち上げ、レルネーは大きく息を吸い込みだした。

同時に高まる凄まじい、物理的な振動さえ伴う魔力の波動。

その様子に、全員の危機察知がけたたましく警鐘を鳴る。

「不味いッ」

『止めないとヤバイって!?』

魔法が、ブレスが、剣閃が、剣林弾雨と叩き込まれる。

生半可な攻撃では鱗一つ剥げず、のちに猛悪な反撃が来ると分かっていたとしても、これは何としても阻止せねばならないと直感していた。

けれども全力の抵抗も数手遅く、音だけで圧殺するような大音響が全方位に炸裂した。

『—!!!
—!!!』

空間すら磨り潰す激しき大震に、フェイの飛翔が止まる。

空間全域を対象とした攻撃であるがゆえに純潔の結界でも完全に防げず、通り抜けた衝撃波に身体内部をめちゃくちゃに掻き回され、全身の穴という穴から血を吹き出してシュレイン達は呻き苦悶に喘ぐ。

「がああああアツ——!?」

夥しい量の吐血をするシュレイン。

内臓全てが液状化して吐き出しているのではないかと錯覚するような勢いと量であり、仲間たちも同程度の重傷に襲われていた。

ギリギリで耐えているのは、人外ゆえに身体強度が段違いなフェイトラスだけであった。

そして、人体を崩壊させる振動波は未だ鳴り止まない。

皮膚はめくりあがり、手足がひしゃげ、内臓は飛び出し、全身から

血液が噴き上がる。

細胞一つ一つ分解するような猛毒の波動が、彼らを粉微塵に解体しようとしていた。

「ぐうう——、みんなは死なせないっ！」

自身も血涙を流し、眼球も鼓膜を潰れて何も周囲を認識できないというのに、このままでは皆が危険だと理解して、ユーリが血泡でくぐもった声を上げる。

そして——究極にまで高められた癒やしの波動が全員を包み込んだ。

「『真摯』こそが、我が美德——奇跡魔法・過剰強化ツ！」
オーバーロード

優しいな燐光が広がり、襲いかかる破壊により失われる生命を補填していく。

赤いペースト状にも成り果てた肉体が刹那のうちに再生しては繋ぎ合い、壊れた身体を回復していった。

その回復速度は、瞬き以下の時間で一点の瑕疵なく身体を修復するほど。

当然、奇跡魔法は本来ここまでの能力ではあらず、ユーリの技量が度外れているからでもない。

異常とさえ言えるほどの癒やしのからくりは、たった一つ。

今の彼女は、己の全てのリソースを奇跡魔法に注ぎ込んでいるからだった。

それはただ魔力や集中力を束ねているのではない。

他の全てのスキルを捨てて、単一のスキルのみしか使えない縛りを受け入れたがためである。

勤勉の特殊スキル、真摯。

勤勉で指定した取得しているスキル一つを、さらに超強化させるスキル。

それをユーリは、勤勉の対象スキルを聖光魔法から奇跡魔法へと瞬時に切り替え、攻防の両面に適したスキル構成から、回復に極限特化した構成へと組み替えたのだった。

無論のこと、そんなものはノーリスクで出来ることではない。

特殊スキル共通の魂を削られる負担は基本として、この真摯というスキルには他には無い特性があった。

一度発動すれば指定したスキルそれ以外は一切使えなくなり、またこれは任意に解除できるようなものでもない。

死ぬまですつとこのままなのだ。

つまり他のスキルや魔法などは今後一生、代償として二度と使えなくなるということだった。

「けれど、そんなのどうだっていい。聖女として、みんなの仲間として——絶対にやらせはしないからっ！」

皆を想う気持ちを籠めて、今代の聖女の祈りが宣される。

その清廉な想いは、血に染まった鬼人の背をも押した。

「義を見てせざるは勇無きなり——ああそうとも、僕に必要だったのは君らのような勇氣だった」

物寂しげな苦笑を湛えながら、ラーズは一步踏み出す。

射出寸前の弓矢のように、二刀を構える。

崩壊と再生の繰り返しによる激痛を制し、逆境を覆すために雑念を捨てていく。

今必要なのは、ただ鍛え上げて染み込ませてきた己の技のみ。

そう決断すれば、ラーズの顔から表情が抜けた。

代わりに双眸に宿ったのは、澄んだ無想の極致。

「シィイツ——!!」

鋭い擦過音を吐き出しながらの剣閃。

流れる星のような二連の斬撃は、空に紅と蒼の細い軌跡だけを残す。

その次の瞬間、斬線の延長線上にあったレルネーの首四つが、音もなく切り飛ばされていた。

万物を原子まで磨り潰さんとする咆哮が、痛みに悶える悲鳴へと変わる。

それによって、破壊振動の檻から彼らは解放された。

「今だッ、突っ切れ!!」

『言われるまでも無いっつーの!!』

ラーズの怒声一喝に、悪態混じりに言い返すフェイ。
あと僅かな距離となったレルネーへと、彼らは勇気をもって突撃していった。

荒れ狂う腐爛した龍頭を躲し、のたうつ首を潜り、逆立つ龍鱗を通り抜け、遂にシュレイン達は幽世の九頭龍の中央の首へと到達する。
一つだけ——折れたり欠けたりしていない、禍々しくも完全な二本角を持つ中央の首へと。

「フェイ!! 抑えろ!!」

『了解ッ』

シュレインの指示に、九頭龍に抗せるほどの巨大な光龍であるフェイが応えた。

二本角の龍頭に肉迫しては組み付き、動きを封じる。

巨龍二体がつれ合うさまは、まさに怪獣大決戦のよう。

進化による変化でフェイは以前の何十倍もの巨軀となったが、それでも九頭龍と比較した体格差は大人と子供よりもお広い。
それでも、ほんの少しの間だけ止めるだけなら問題無い。

『ぐうう——あああッ』

当然、そんな行為を見逃すはずもなく、未だ無事な四つの首がフェイへと鋭利な牙を剥いて噛み付いた。

右腕に、左脚に、翼に、胴に——

直接牙が喰い込んだことで流し込まれる死滅の毒に、言葉ではあらわせぬ激痛が襲いかかる。

『けど、そうくると思った!』

身体を致命的に崩壊させる死毒と、ユーリが揮う癒やし再生が拮抗している苦悶を堪えつつ、フェイは全身に光を伝導させて纏わせる。

『全力全開っ、ウオオオオラアアアアアアアアアアッ!!!』

そして、羽の一枚一枚、鱗の一枚一枚から、数万もの白桜の結晶柱がレーザーの如く迸った。

圧縮した光の刃が乱れ舞い、レルネーの龍頭らを口腔内から突き破って串刺しにする。

半身腐りし龍を浄化し焼き尽くす、光輝を纏いし龍の煌めき。

それはまるで荒廃した大地に、生氣溢れる桜の大樹が開いたかのようだった。

『さあ、ぶっ潰せえッ！』

フェイの身を挺した拘束により、レルネーは身じろぎ一つロクに出来ない。

全ての頭部と顎を封じて、回避する余地を一切無くした。

「僕から行くッ！」

そう言うやいなや、ラーズは空へと舞う。

何もない空中を魔力の足場で駆け、爆発寸前の大砲のように全身に力を漲らせ引き絞る。

「封印解除——憤怒ッ!!」

瞬間、彼の視界と意識は、深紅に染まる。

殺せ、壊せ、生きとし生けるもの全てを滅ぼし尽くせと、眼前の翠魔と同じような衝動が体中を駆け回る。

それは抗い難く、思考が鼓動が、細胞一つ一つに至るまで殺意を訴える。

今世、親兄弟を無惨にも殺され、妹の肉を喰わされた。

あるとき自分が理想と思えた小さな世界は、理不尽な因果と暴力で碎かれて何処にもない。

そんな現実がフラッシュバックし世を憎み、呪い、滅ぼせよと自我を跡形もなく焼き尽くさんとばかりに憤激する。

違う——

この身体を震わせる血の滾りは、そんなものでは無い。

「グッ……ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

彼は確たる己を描いて、怒りの誘惑を断ち切った。

肉体の隅々まで乱流する、はち切れそうなほどの熱量の手綱を握りしめた。

渦巻くそれを取りこなすのは当然ただでは済まず、ラーズの全身は鉄板に置かれた生肉のように水疱が浮かんでは弾け焼け爛れていく。

まるで体内を巡る血液が全て、炎にでも変わってしまったかのよう

に。

けれども彼は一切の躊躇もなく、その痛苦を甘んじて受容し認めていた。

熱く燃焼する血、研ぎ澄まされる精神。

煮え滾る激情を真正面から見詰め、悟っていく。

己の怒りを。

——ああ僕は何よりも、こんな世界が許せなかったんだ。

ラース、いや笹島京也が最初に抱いた夢想は、必ず“セイギ”は勝ち、“ワルモノ”は打ち倒されるべきだということだった。

前世の幼き頃から、間違ったものは許せなかった。

それは物語の人物がそうであるように、正しくないと思えば、どんな状況だろうと過ちを正したくてしようがなかった。

平和や人道を守ると誓った者ほど、悪の非道や醜悪さを認められないと、心の奥に消えぬ憤怒の炎を宿している。それが自分にも当て嵌まっていたのだった。

そんなときに訴える手段は、いつも暴力。

当時それしか知らないし出来なかった餓鬼だったとはいえ、現実ではそれでは通らない。

ただ怒りのまま殴ってしまったえば、悪いことだ。

“ワルモノ”でも殴ればその時点で相手は被害者で、自分の方が“ワルモノ”になってしまう。

“セイギ”など、結局は立場や視点で如何様にも変わってしまう、曖昧なものだと気付かされた。

暴力と正義感。

それは前世の社会通念では容認されぬものであり、万事するりとまかり通る無敵の印籠なども、ハナから存在しなかった。

燻った想いを抱えたまま過ごしていた前世の日々。

その問いについて答えを見つけられる前に、己はこの世界へと転生していたのだった。

そして地獄を経験し、守りたかつた温もりも信念も彷徨いの渦中で血と炎に埋もれ、残ったのは燃え堕ちた己という残骸の灰だけ。

もはや、己に正義を語る資格などない。

ただ惨めに理不尽に負けて砕け散った、人でなしが一人いただけだった。

けれど、目を醒まし世界の真実を知ったとき——まだ終われない、そう思えたのだ。

こんな灰となった自分であろうとも、この世界は間違っていると声高に言える。

それはかろうじて残されていた、正しきを希求する怒りの感情であつた。

「正義とは『怒り』であるのだから」

焼き尽くすべき罪と共に、こんなくだらな茶番を終わらせなければならぬ。

振り返る権利すら、もう己には尊すぎる代物だと知っている。

誰かが生きられるために、その土台である星のため——人を薪木にする^と決めたその時から。

「僕は、その憤怒^{セイキ}に殉じるまで!!」

なら、進むしかあるまい。進むしか、ないんだよ。

ただ僕は、その独り善がりな免罪符のために、何もかも貫き通すと決めたんだ。

——だから僕は鬼でも人でもない、贖罪という正義に身を捧げた鬼人であろう!!

憤怒の殺戮衝動をラーズは柳のように受け流し、けれども力だけは乗りこなし充填していく。

元が数万もあるステータスに、さらに数万もの数値が加算される。けれども、これでもまだ九頭龍の核には届かないだろうと確信し

た。

「『閻魔』となり裁けよ、我が原罪。消えぬ業火にて我が身を浄火し給え——罪業消滅」

ゆえに、もう一手。

左の雷刀は納刀し、両手で上段に炎刀を構える。

範囲と手数^の二刀流から、真に鍛え続けた威力と技の一刀へ。

赫々とした焰に包まれていくラース。

その熱量は、まるで罪人を裁く業火のようであり、それが全て一つの刀身へと集っていく。

烈火のように激しい怒りと、それを越えた先にある義の心が籠もった刃が、眩いほど白熱した。

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!』

苦し紛れの抵抗とばかりに、拘束を強引に振り払い、顎を開こうとするレルネー。

しかし全身全霊を懸けたフェイの両爪による圧迫は、大地の如く不動であった。

その濁った黄色い眼球が捉えたのは、仄暗い闇を真昼のように変える白刃の形をした太陽。

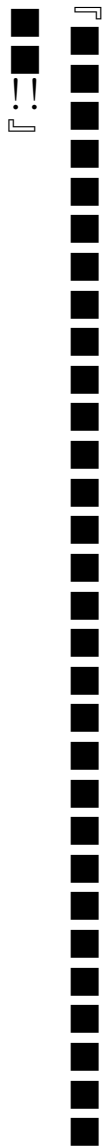
それが今まさに振り下ろされんとする、凄烈な閃きだった。

「――絶刀・禊祓」

みそぎほらえ

彼が願う、祈りの宣誓。

音も光も置き去りにした一振りが、狂える龍を根本まで切り裂いたのだった。



絶叫が上がる。

九つの首が集積する胴体部分まで届いた斬撃は、中央の首を唐竹に斬り裂いた。

傷口は赫々と燃え上がり、それは他の首まで伝播して少しずつ翠魔レルネーは炭化していく。

穢れは炎に浄化され、灰は海へと溶けてゆく。

濃密な死の気配は力強い熱波に置き換わり、肌をヒリヒリと焦がして吹き抜けるだけ。

重々しく崩れ落ちる九頭龍を見ながら、彼らは呆けたように言葉を零した。

「やった……う？」「これで」『終わったの？』

疲労に膝をつくカティアは呆然と何も無くなった波紋を立てる海を眺め、ユーリは緊張が切れたのかフラリとへたり込む。

牙を突き立てていた龍頭も灰と化し、苛んでいた死滅の毒も消えて自由になったフェイは、翼を一度大きく揺らし静かに浮かんでいた。

「——勝てたのか？」
本当に？

これで終わりなのかと疑心が湧き続けて止まらない。
皆、死力を尽くしていた。

幾度も生と死の境界線に触れて、か細い奇跡を掴み取った結果こそが、今しがた翠魔レルネーが消滅していく光景だというのに。

「——いや。まだ終わってない、気を抜くなみんな！」

そうラーズが叫んだ瞬間——世界が小さな脈動を刻む。

最初は静かに微かに……けれど徐々に大きく重く、膨れ上がる狂の思念。

秒単位で増す圧迫感に、心臓を握り潰されるかのような恐怖が再びせり上がる。

特に絶刀を放った両腕は漆黒に炭化しており、肩口も肉が焼けた香ばしくもある臭いと共に溶け出した皮下脂肪と茶色くなった筋肉が露出している酷い惨状。

炎刀も完全に融解して原型を失い、右手に層を成してへばりつき固着している。

魔力も精魂も尽き果て、とてもではないが再び戦うなど不可能な有り様であった。

「ユーリー！」

「わかってる！　けど、治りが遅い……ッ」

ユーリーの奇跡魔法は、正しく発動している。

けれども特殊スキルの反動は魂を削り、閻魔は其中でも特に対価が重い。

魂が重度に傷付いたからこそ、そう簡単には傷が治らないのだ。

むしろ遅々とした速度でも回復に向かっている事こそ、いかにユーリーの真摯補整込みの奇跡魔法が優れているかの証明であろう。

『みんなぼさつとしない！　来るわよ掴まれッ！』

滅光のブレスが降り注ぐ。

復活によって暴走しているのか、襲いくる猛攻は以前よりも数段桁が違う。

横殴りに飛んでくるそれらを、フェイはヒラリヒラリと躲しながら、付かず離れずの距離で翠魔レルネーの周りを周回しだす。

「これは……ッ」

「ええ、見間違いではありませんわ」

高速で舞うフェイを追いかけ回す、滅光のブレス。

その威力は絶大のまま、僅かにだが溜めに掛かる時間が少しずつ短くなってきていた。

科せられた制限が解けていき、天井知らずに回転率が上昇していくのが感じられる。

さらに――

『くッ』

「上からもっ！」

予想外の位置から飛んできた黒い光。

それは頭上の暗雲の中から落下してきており、その正体は自身の身体で此方を狙えない対角線上にある龍頭が、弓矢の曲射のように空に向けて撃ち拡散させた滅光の雨だった。

カティアの純潔の結界によって上空からの攻撃も防げてはいる。

だが、すでに術者の方が限界を迎えようとしていた。

「ぐふッ!? ごぼ、うつ、ぐううう……ッ!」

「カティア、血がッ!」

手で抑えるも、口の奥から滝のように溢れて止まらない血。

ラーズのそれみたく極端な反動では無いものの、カティアもまた戦闘開始から今までの長時間の特殊スキル込みでの純潔の展開でついに臓腑が弾け、逆流した血が喉に絡まり沸騰した薬缶のように呻く。

それと連動するように、チカチカと不安定に揺らめきだす結界。

その一部、密度が薄くなり本来の強度を失った部分に滅光が突き刺さり、一瞬の後パリンという乾いた音を立てて貫通した。

『づ、あアアアッ——!』

「フェイさん!」

純潔の結界を貫通した滅光は、フェイの右翼の後ろ三つをまとめて貫徹し、血に濡れた白桜色の羽根が花びらのごとく散る。

すぐさまユーリの癒やしの魔法が傷口を覆う。

そのダメージは特殊スキルによる自傷ではないので、ユーリの治療にすぐさま再生していくが、翼という飛翔に関わる部位を攻撃されたことで重心が傾き姿勢がぐらついてゆく。

『やば——』

ほんの少しの間、動きが制限された。

バランスを立て直すのに数秒も掛からないが、そのたった数秒が致命的な隙となる。

——無数の滅光が虚空を駆け迫る。

鋭く、速く、不規則に、ぞっとするほど煌びやかな死の光雨。

それを回避する手立ては、彼らには何処にも無かった。

「——あ」

死を確信する。

認識がそれ一色に染まり、ただ心臓が早鐘を打つ音だけが耳に響く。

時間間隔が引き伸ばされ、やけにゆっくりに感じる死を眺めるだけしかできない。

最後の最後で失敗した。

次の瞬間には、無念も悔しさも感じる暇さえなく、終わってしまった——まさに刹那。

「——ああ。これじゃあ、おちおち寝てもいられないよ。やっちゃんえアサカちゃん」

「言われなくても——“退廃”を廻せよ、我が原罪」

苦笑するような軽い調子の声と、気怠げな侘びた声。

二つの共に何処からともなく現れた灰色の霧が、迫る滅光を遮断していた。

滅光は灰の暗幕に触れた途端、急激に縮小して掻き消される。

どんな正や負のエネルギーであろうと、時間による風化は全てを無ゼロにさせるように。

灰の中では、まるで恐ろしい速度で時間が進んでいるかのような不自然な消え方だった。

儂い線香花火のように滅光を消滅させて食い止める灰の暗幕。

それが分厚い壁となって、シュレイン達を守っていた。

「一体なにが……？」

疑問を漏らすシュレインの前に、小さな影が映った。

「魔王アリエルちゃん、ピンチの勇者クンに助っ人を連れてきたよつ——なんてね」

翠魔レルネーとシュレイン達との間に、ニヒルに笑いながらウインクを飛ばすアリエルが現れていた。

「よつ、手こずってんな。手を貸すぜ……アサカが」

「あんたは流れ弾を警戒するのに集中つ。これ、維持するのも結構キ

は沢山ある。

ユーゴーとソフィアの活躍はたしかにレルネーを抑えるのに一役買ったが、全ての行動を止めるには至らない。

よって止めきれぬ龍頭が破壊を振りまこうと、顎門の奥に昏い光を湛えだした、その時――

「『自失』へ酔わせよ、我が原罪」

甘ったるく酩酊しそうな、實際酔いの喜悦が溶けあう声色が謳う。

あらゆる存在の精神防壁をグズグズに溶かして酔い痴れさせる、傾城傾国の一顧が。

「――『口を閉じろ、蛇』」

囁きは脳髓が溶けそうなほど甘いのに、言葉は何処までも醜悪な悪意と殺意に染まった一声で、翠魔レルネーは弾け飛んだ。

発射直前なのに顎を閉じて自爆したものの、硬直して停止したものの制御を失い喉奥で炸裂させたもの、神経に電極でも刺されたように痙攣するものまで。

突如の理解不能な現象に、混乱したかのように翠魔レルネーが震えていた。

「この声、スーか!？」

「はい、おにーさまあ♪ あなたの妹のスーが活躍するところ、とくと目に焼き付けてください」

寝所で睦言でも語っているかのように、誘うように両手を広げているスーレシア。

まるでメツシユやインナーカラーのように、水色の髪に艶やかなピンクが入り混じり。

艶やかに紅潮した頬と濁った瞳が、桃色に惚ける魔性の笑みを浮かべていた。

「いいかげん、お遊びに付き合っている暇はもう無いの。穢らわしいブツを晒す塵に一時も関わり合いたく無いの。だから聞き分けの無い獣には、もっと直接的に言ったほうが理解してくれる?」

そして、更に命じる――今も自壊し続けるレルネーへと。

「『自害なさい』」

声が響いた瞬間、劇的な変化が現出する。

レルネーの龍頭の三分の一が内側より破裂し、三分の一が共食いを始め、三分の一が命令と抗う意思との鬩ぎ合いで鱗と筋肉を断裂させながら硬直する。

先程よりも、より強い強制力と拒否反応が、翠魔レルネーの肉体を自ら破滅させていた。

「色欲——洗脳と絶対命令の力。これがそうだと言うのか」

『……えげつないわね』

「今のところ、私たちに向けられていないのが幸いですわね……」

それを目の当たりにして、カティアら女性陣は背筋が震えた。

アレの矛先が、もし自身らに向けた時の恐ろしさと凶悪さに。

新たに参戦した、彼ら彼女らの獅子奮迅。

それにより生まれた、絶好の機会。

「さあ、往くんだ勇者クン！ 勇者剣で再び外側を吹き飛ばし、今度こそ確実に仕留めるぞ！」

アリエルの叫びが、シユレインを衝く。

今こそ王手を掛ける、最後の瞬間であると。

「俺は……、くッ」

そのことも、当然わかつている。

しかし——不安が拭えない、自分に自身が持てない、勝利の光景を描けなかった。

戦いの凄絶な激痛に、死の気配に、負けてしまっていた。

どうしようもないほど弱気な自分に、自己嫌悪が湧いて沸いて止まらない。

何故なら、俺は勇者なんかではない。

剣を握る手は震え、止まらぬ冷や汗が服を濡らす。

ここまで来てなお、臆病な餓鬼のままだ。

あの決意は嘘だったのか？ あの覚悟はそんなにも軽いのか？

勇気を奮い起こしても、すぐに恐怖が塗り潰す。

心の強さを、どうしても保ち続けることが出来ない。

度胸が足りない、頭が足りない、力の有無など宝の持ち腐れに等し

かった。

凡人が怪物の前に立つという、あまりの圧倒的な恐怖を前にして魂が竦んでいた。

「俺は、兄様には……」

悔しくて情けなくて、視界が滲む。

力なく肩が落ち、俯きかけたそのとき。

「しつかりなさい！ シュン！」

胸に直接叩き込まれた熱が、懊悩に耽る彼から迷いを吹き飛ばした。

カティアに胸ぐらを掴まれ、少し痛いくらいに両拳が胸に突きこまれていた。

「あなたはお兄さんとは違う、当たり前ですわ。彼は彼で、シュンはシュンです！ あなたが臆病なものも卑屈なものも、前世の頃から良く知っている！ だけど一瞬でも一度でも、あなたは頑張れるんだって、私はツ……知ってるから！」

迷いながらも、悔やみながらも……シュンは一步を踏み出すと決意して此処まで来た。私はそれにただ付いてきただけ。自分で選んでいない、一人だったら足を止めていた。弱くて一人では進めないのに、それでも進んだ姿が眩しいと思ったから、私は一緒に此処まで来たの！」

湧き上がる感情に後押しされるように、カティアはシュンの手を固く握りしめて告げる。

「カティア……俺は、そんな考えだった訳じゃ……」

「いいえ、私にはそう見えていた——そう思っていたいの。」

弱さも併せ持つての、ただの人間なのでしょ！

そして……弱くても立ち上がって勇気を魅せるから、人は輝いて憧れるんでしょ!?

私は、それが出来るシュンの姿が羨ましいとさえ思った……信じてる、だから——」

そう言つて、不意に抱き寄せられて。

カティアの顔がゆつくりと迫り、焦点が合わないほど近くへ来て。

「——ちゅ」

「っ！」

「なああ!?!」

咄嗟に何が起きたのか、理解が追いつかずシュレインは瞠目する。背後と上空から、驚きと抗議の悲鳴が響いたのを耳が捉えていた。「——っ、——な、何故とか野暮なことは、またいつかつ！ さあ、立って！」

カティアの行動に戸惑いと動揺が湧き起こるが、それをすんでのところで呑み込んだ。

一度瞼を閉じて、変わりに浮かべたのは柔らかな笑み。

「ああ分かった。往ってくるよ」

お互い目が合う。

もう大丈夫だ——そう告げる瞳に、カティアは少し赤い顔で微笑んだ。

「フエイ、俺を上へ！」

『あーっ私、修羅場なんて知いらないつと！ 翔ぶわよ！』

天高く舞い上がる、フエイの身体。

空よりも高く、天まで届けと、螺旋を描いてどこまでも駆け昇っていく。

『小僧、そのまま翔ぶがいい！ ——我が汝を支えようぞ！』

「とお、べえエエツ!!」

首巻きと同化していた光龍ビヤクが指示すると同時に、シュレインはフエイより飛び降りた。

重力が彼を捉え、風を切りこじ開けながら墜落していく。

両腕で蒼金の剣を硬く握りしめ、九頭龍へと剣先を向けた。

最大の危機感が警鐘を鳴らして、強引にでも放たれた迎撃がシュレインへと殺到する。

それを見ながら、彼は避けるでも防ぐでもなく小さく唱える。

「——寛容、こそが、我が美德」

シュレインの身体が、滅光の中へと消え去る。

その光景は、彼が髪の毛一つ無く消滅してしまったかに見えた。

だが――

「つ――く、うおおおおオオオツ!!」

僅かな綻びや擦り傷さえないシュレインが、連続照射の限界で消えた滅光の中から現れた。

寛容、それは受け入れること。

全てを寛容するとは、あらゆる物事を受け流し受け入れたりする事も、自由であるということ。

そのため一時的にその場に居て何処にも居ない、透過状態へと変化する事こそが寛容という特殊スキルの力であった。

破壊の嵐を無視し、大気さえ透かして空気抵抗を無くして加速しながら墜落する。

そうして、空間に散らばる闇を輝ける刀身で照らしながら――思う。

――この世界はゲームのような、命が軽い世界であることを、求められている。

全ては、この星の過去の人々が起こした、罪過に拠るもの。

人の罪で滅ぶはずだった星が、女神の献身によって生き永らえた、この世界。

その償いとして、この星に住む全ての生き物には、殺し合いを要求されていた。

スキルを育みステータスを伸ばし、そうして鍛え上げた魂を、星のために還元する。

人と魔物との殺し合い、人同士での殺し合い、魔物同士での殺し合い……

野盗被害、頻発する戦争、人族と魔族、勇者と魔王。

それらに巻き込まれて、死んでしまう人々……

世界は、死に満ちている。

この世界では死ぬ事こそが求められる法則なのだから、死は誰しも身近にあるものだ。

死んで償え、そのために生きて死ぬ。
それこそが、この世界の真理。

けど、だからといって悲劇を容認していい世界では無いだろう。
こんな俺だけど、この世界にも幸せってあるものだと思ってる。
複雑だけど暖かな家族に恵まれた。

二度と会えないと思つた友達に、また出会えた。
こんな俺にも、好意や信頼を向けてくれる人たちがいる。

——そして、優しくも強くて輝かしい、兄がいた。
これが俺の幸せで、万人にはそれぞれの幸せがあるだろう。
こんな世界でも、何かしらの幸福というものが必ずあるはずだ。

人ならば誰しも、いいや全ての生物にだって、幸せを願うそれを噛み締める自由があるはず。

俺だって人間なんだよ。

ちっぽけで暖かな、些細な幸せを追い求めて何が悪いと言うんだ。
生きてこそ、幸せは抱ける。

その前提のために、もう一度始めるために、俺は——

「勇者剣よ！これが最期の戦いだ！俺の願いに応えてくれッ!!」
煌めきを増す無垢なる刃。

祈りに呼応して、澄んだ音と波動が闇を破いながら広がっていく。
「命が軽いだなんて言わせない。贖罪をしなければならぬとして
も、殺し殺されが全てでは無いだろう。誰かを殺すことが償いだと言
うのなら、それじゃあ新たな罪が生まれるだけだ。」

殺しなんかしなくても、魂を鍛え上げた果てに老衰で死ぬ、それで
いいじゃないか。

血塗られた魂を捧げられるよりも、練磨された輝ける魂を。それこそ
を神様が望んでいるのではないのか、って」

俺たちの血と死の宿業は、終わらせるべきだ。

人は、自らの足で寄り添いながら歩んでいけるものだから。

天の加護も、邪神の愉悦も、全部全部もうたくさんだ。

神頼みなど、ただ見守って欲しいという願いだけで充分。

お人好しながらも王として慕われていて、光輝く星のようだったシ

リウス父上。

勇者として理想に殉じながら光を示し、最期には女神の元へ旅立ったユリウス兄様。

その血と想いを引き継ぐシユレインとして、俺は世界を救うことを願っている！

そのとき脳裏に浮かんだのは、前世で神社にお参りに行った時の記憶。

そこで聞いた、祈りの言詞。

愚かな心を戒めて。

人々の罪穢れを脱ぎ去らし。

世界の病災をも立ち所に祓い清め給えと——祈願奉る。

自分が何故、そのようなことを口に行っているのか分からぬまま、シユレインは墜ちる。

忘我の境地にあるシユレインは、二つの手が肩に添えられた気がした。

皺くちやながらも暖かな手と、武骨ながらも優しい手、それは——

——頑張るのじやぞ、シユレイン。

——シユンなら出来るよ、だって僕の自慢の弟なんだから。

「——アアツツ!!」

空に水滴を零しながら、叫ぶ。

この一振りに全ての想いを籠めて。

「遍く煌めき、この刃に集え。俺たちの世界を守らんがために」

其れは、光。

其れは、希望。

其れは、人を守りし勇者の剣。

「——世界の敵を穿て、勇者剣アアツ!!!!」

御柱の如く、天と地を穿つ極光の柱。

聖なる銀の光が、狂気に穢れた禍津の龍神を浄化していった。

けれども、まだ——

コアは砕けてはいなかった。

海底にて胎動する、小さな蛇龍が瞼を開いて蠢きだす。

しかし、今のシュレインがトドメを刺せる武器は無い。

すでに勇者剣は、光の塵へと分解されて消えかけていた。

ならば、新たな刃が必要であった。

「受け取れええ、シュン!!」

雷光の如き速度で、飛翔する長刀。

蒼き稲妻を纏うその刀は、友へと贈る己の魂に他ならない。

「ああ——ありがとう、京也ツ!!」

受け取った反動で旋回し、勢いで鞘を飛ばして抜き放つ。

手より伝わる痺れるほどの熱さを握り締め、籠められた想念に同調

していく。

——尊敬と誇りは、雷鳴のように。

この刃は、尊敬した背に追いつくための光を照らす。

「さあ、終わりにしよう」

心の中で、二礼二拍手一礼。

いざ閉幕のとき。

贖罪の輪廻も、終末譚も——望まれぬ物語には、エンドマークを付けて区切りにしよう。

小さな蛇龍は、もはや迎撃は間に合わないと判断して噛みつきを選択する。

そして顎門を開きシュレインを噛み砕こうとした瞬間、ある物が目に映った。

彼の首に巻かれた白い首巻き、その端で翻る翠色の翅が。

縦の瞳孔が丸く開き、混乱したように動きが鈍り硬直する。

その僅かな時間でシュレインは最後の距離を越え、蒼雷の刀を突き出した。

「いっけええええええええええエエツツ!!!」

核たる蛇龍を穿つは、瞬く天雷刀。

隕石の如く、光の軌跡を描き落下の速度を乗せてコアを貫いた。

閃光を導く雷が、奔流を撒き散らしながら炸裂する。

そしてついに、幽世の九頭龍を再誕できぬほど木端微塵に浄滅させたのだ。

——大陸各所、分解され灰となりゆく翠魔。

荒れ果てた大地に、空から陽の光が地表を照らし始めた。

人々は剣を下ろし、空を見上げる。

今度こそ、そう今度こそ本当に終わったのだ。

目も眩む光に包まれながら、地表より闇は祓われ消え果てるのであった。

「終わりが、近いな……」

ぽつりと、瞼を閉じて仰向けに倒れているアリエルが呟く。

つうーと、静かに口端から血が流れる。

大迷宮の奥底で今も戦っているだろう白い少女のことは気掛かりではあるが、もはや余力も命もほとんど残っていない。

無理を押ししてユーゴーやソフィア達を連れてきただけで、精一杯だったのが実情である。

外見上は無傷に見えても、内側は自壊一步手前の瀕死だった。

此処にいる彼ら全員、皆似たりよつたりな有り様。

もうこれ以上は、参戦もなにも不可能だろう。

先ほどの戦いにて己の舞台は終わったのだと、誰もが感じていた。

「素直にいきなよ、白ちゃん。君の良いところは、そんな自由奔放さだろう？」

躊躇うな、進め。さっさと終わらせて帰ってこい……待ってるから
さ」

何もかも見届けると誓った。

だから此処から先は、誇らしさと共に彼女に託そう。

今帰ってゆく翠の光に龍と妖精を幻視しながら、祈りを託して言葉
が溶けていった。

紡いでゆく、翠白の報恩譚—E l e u s i s—
苔よ森よ、真理たれ

そうして——とても長い、ゆつくりとした微睡みの中。

夢と現の狭間、怖いほど優しい安寧から瞼を開く。

——世界にヒビが入る音がした。

それで……私は悟る。

けれど、もう少しだけと虚空を眺めながら余韻に浸る。

私たちは優しい時間に身を置きながら、同じベッドに腰掛けてお互いに肩を寄せ合っていた。

じんわりと染み込むのは、確かな喜び。

満たされている——伝わる暖かさが、私の空虚を心地よい熱で埋めてくれる。

「ふふっ。いろんなことがあって少し疲れたかも……でも、悪くはなかったよね？」

「そうだね。——ああ悪くないかも」

こんな世界でも、私たちは幸せに満ちている。

それさえあれば、どんなことがあるうとも怖くないと思えた。

詰めが甘いとも、肝心なときに上手いかないのも、痛みと絶望で以て知っている。

そのたびにお調子者の仮面を被って、失敗も後悔も塗り潰したが、澱みはずつと心の底に溜まり続けていた。

本当は逃げたかったことも、泣きたかったことも、あった。

私自身も認めず、弱さだと誰にも見せなかった心。

けれど——

「今なら、その弱さも受け入れられる気がする」

コケちゃんのお陰だよ。

そう言いながら背後から抱きしめる。

甘やかで清らかな匂いが鼻先をくすぐり、芯まで深く吸い込む。

鎖骨の前で指を重ね、もう何処にも行かせないとばかりに強く抱擁した。

こんな口クでもない私が、闇に墮ちることなく光を目指して進めるのは、貴女から貰った数々のもので支えられているから。

心無き人外は獣のまま。

それでは、より強大な力に屈するか討たれるのみ。

Dに抗おうだなんて考えない、あいつに都合の良い駒のまま。けれど貴女の心が、あの闇から光に連れ出してくれた。

「なら——もう分かっているよね、白ちゃん？」

甘い吐息から一転、悲しげな雰囲気纏い、腕から抜け出すコケちゃん。

今にも泣きそうに目尻を下げ、この幸せを崩す真実を問うた。

瞬間、ほつれるように景色が歪み千々に崩落していく。

身を委ねていた、泡沫の夢が壊れだす。

——ああ、そうとも。

理解していた、目なんてとつくに醒めていた。

これが、ただの夢だつてことも。

瞬間——奔ったガラスの割れるような音が止めば、見える風景は一変していた。

「こうして無理に繋げられた私に、残された猶予は少ない」

色彩の消えた空間、まるで深海か宇宙のような世界。

眩暈のしそうな膨大なエネルギーが渦巻き、それが集束する中心部。

そこに閉じ込められ揺蕩うコケちゃんがいた。

そして——彼女は真実を語りだした。

「想定外の方法で女神を救おうとした代償とでも言うのかな。私は、システムと深く繋がりがりすぎてしまった。そのせいで魂がシステムと

融合しはじめている。いずれは自我も希釈されて、私が私を保てなくなってしまうだろうね」

そう苦笑する彼女は、その身体に無数のヒビ割れのようなものが走っており、今にも砕け散ってしまいそうな儂さを連想させる。

ヒビ割れから漏れる燐光は残りの時間を示すように、とても弱々しい輝きだった。

「既に分離可能な境界線も越えてしまい、このままでは暴走するシステムの命令に従って死を振り撒くだけの存在に、私は堕ちてしまう。そうなった後に残るのは生命の存在しない星。星は健康な状態に回歸するけれど、誰も居ない静寂に満ちた世界となる。

私自身も例外ではなく、まだ魂が無事であっても無くても星を再生する役目を果たせば、どの道物言わぬ骸として消えてしまう定めなんだよ」

「——そんな、嘘だッ！」

嫌だ。

嫌だ、認めたくない——想いを告げれたばかりなんだ。

まだまだ贈りたい未来も返したい恩も、なにも出来ていない。

そんなの、死んでも嫌だった。

最悪の想像が思考に追いつき、全身が凍えるほどの恐怖が這い回る。

もはや彼女無しの世界など、想像すら出来ない。

あの夢が、私たちの無意識にある理想を投影して組み上がったものだど気付いているからこそ、私自身の本心も分かってしまう。

隣にコケちゃん居てほしいと願わなければ、あんな仮想世界にはならないのだから。

「なにか、方法は無いのかッ!？」

「無いよ。もう……どうしようもない」

元の状態には二度と戻れやしない。

もし解放できるとしても、システムとの繋がりを断ち切れれば容赦なく死ぬ。

皮肉にもシステムあってこそ紙一重のバランスで持ち堪えている

だけであり、そこから分離してしまえば生命維持装置を外した病人ように死人と化すだけ。

逆にシステムを掌握する方向に舵を切ったとしても、総エネルギー量が下位の神経数十柱分にも相当するシステムの方が上位であり、せいぜいがパーツの一部でしかない存在が抵抗したところで無意味だった。

考えれば考えるほど、コケちゃんの状況は詰んでいた。

もう手遅れであり、何か手立てがあるのなら、とつくだに行っているし伝えている。

そう最後に呟きながら、彼女は静かに微笑みを浮かべた。

「ありがとう、最期に思い出をくれて。短い夢幻だとしても、ここでの私たちは本物だったから。だからこれで充分……」

瞳を伏せながら一拍区切り、覚悟を滲ませ告げる。

とても残酷な願いを。

「さあ私を殺して、白ちゃん。此処なら、迎撃機構に邪魔されず直接魂を砕くことが出来るから。この誰にも望まれない戦いを、貴方の手で終わらせて」

「——嫌だッ」

知らない、聞きたくない！ どうしてそんなことを迫る。

けれどそんな私の様子を、どこか寂しげな慈愛の眼差しで見ながら諭すように言う。

「お願い、どうか聞き届けて。それしか残された方法が無いのはもう理解しているでしょう？」

これが科せられた罰。

世界を滅ぼす魔神は、明日を生きることが許されない。

もう助からず、ならせめて最期は選びたい。

避けられない結末なら、出来るだけ美しい終わりにして欲しいと微笑んでいた。

「神話のペルセポネのように、冥界の食べ物を口にした者は、そのぶん冥界の住人と化す。食べてしまえば、現世に居場所は無い。

なら、もつともつと欲しがった者には……いったいどんな代償が

待ち受けているんだろうね。永遠に冥界に囚われて、責苦と凌辱を受けるだけで済むとは到底思えない。ハデスに乞うた柘榴はそんな優しい罰を許してくれるほど、甘くはないから」

子供に読み聞かせでも語るように、ゆっくりと彼女は囁く。

自身の末路が、もつと酷いものだとは確信しているから瞳に迷いは見られなかった。

「だから最初から間違っていたんだよ。ハデスに救いを求めても得られるのは悍ましい死だけ。

今だけが、真に穢れる前に逝ける最後の機会なの。

全てが手遅れとなる前に、私が私でない存在と成り果てる前に——
どう、か、救って……」

紡がれる願いに、嘆きと怒りを堪えられない。

だって、ああ、そうだと——

「——そんな救い、私に出来る訳ないだろツ!!」

グチャグチャに顔を歪めせながら、魂が裂けそうなほど絶叫する。
なんだよそれ、冗談じゃない。

極端すぎるし性急だろう、到底受けられないことだった。

「でも——」

「五月蠅えんだよツ！ そんなこと知ったことかアツツ!!」

現実という理不尽に、ただ認めたくないという拒絶の感情で殴り返す。

「私がそうしたいからそうする、ただの拒絶^{エゴ}に過ぎない。ああそうだとともに、ただの癩癩^{カサカサ}だつて！ けど、そんな結末なんて私は受け付けてなるものか！ 断じて認めない！」

だから、抗う。

どんなに馬鹿げていても、現実が見えていないと蔑まれても、決して諦めない。

それが、自分というものを持っている証明だから。

「なん、で……どうして、そこまで言い切れるの……？」

もう私たちには未来なんて無い……このまま妄想に浸って、死の間際まで夢を見ても良いのに。白ちゃんの手で殺されるのなら、貴方

だけでも生き残れるのなら……それでも良いと思えたのに。どうして——」

「決まっている——」

涙まじりの震えた声に、力強く答える。

結局、私は最高の自分、最高の結末じやなきや嫌なんだよ。

身勝手でも良い、愚かでも良い。

だって私は弱いから、中身なんて空っぽだったから。

贈られ拾い集めた大切なモノ。それを大事にする事の何が悪い？

何も無かったから大事にするとも、失いたくない——だから助けるんだ。

「大切なんだよ、世界よりも私自身よりも！　それが全てで他には何も要らない。そのためなら、極論世界が滅ぼうがどうでもよかった！　でも、私は貴女がいない世界では生きられない、意味が無いんだ！　なぜなら私は——貴女に恩を返したいだけなんだから!!」

それは、紛れもない本心。

私が貴女を愛して、貴女が私を愛してから、自分が自分にとってどれほど価値あるものになったことだろう。

芯が曖昧で虚無だった私が、どれだけ救われたのか伝えきれないほどだと言うのに。

そうでなければ私は成長できないから、人の美しさなど宿せない。

白織という存在は、コケちゃん貴女無しでは生きられない。

その小さな、けど強い彼女の手を握りたいんだ。

そうだと——

恩返しという絆こそが全てを結ぶ、私が始めから持っていた唯一の真理だから。

「——ぐず、ううう………あは、ははは………っ。

白ちやんらしい、極端な考えなんだから……吼えたところで、何も解決なんてしていないのに。どう、してかな………胸が熱くて痛くて心地良い……ほんと、ばかつ、だよ………白ちやん」

目尻に涙を湛え、可笑しそうに苦笑するコケちゃん。

悲哀と歡喜が緋い交ぜとなった表情に、煌めく雫が伝っては儚く虚空に散る。

「解決してない？ そうだね、賢い思考なんてとつづくに壊れてる。好きだと自覚した瞬間から」

ああ確かに、諦めの悪い馬鹿で、何の解決策の糸口も見出させていないさ。

誰かを好きになるとは、理屈や常識なんて放り捨てて盲目的になつてしまうものだから。

けど――

「――だから、その前にどうか聞かせてほしい。

コケちゃんの本心を。闇に歪められたものではなく、本当の真理こたえを」

それは、きつと――

「大切だったんだろう？ 守りたかったんだろう？

それを都合よく捻じ曲げられて利用された。貴女の答えは、それじゃない」

枯死も、終末も、翠魔も――Dがお膳立てした配役に過ぎない。

彼女自身が掴み取った答えでは、断じて無い。

「さあ――聞かせて」

答えを待つ。

大切な人の、秘せられた本当の想いを。

彼女は唇をわななかせ躊躇いと決意に揺れ動いた後、哀惜を滲ませて声を紡いだ。

「私の願い――聞いてくれる？」

「――ああ」

「この星を救いたい。紛れもなく、私自身の本心からそう願っている。まだなにも私は、私たちは……この世界に、恩返しが出来ていないから」

人は数多の恩の中で生きている。

誰かに助けられ、誰かに救われ、誰かの愛と共に生きている。

そこに意味なんて無いかもしれない。

顔も名前も知らない誰かが振り撒いた断片でしかないのかもしれない。

けれど、気付いた愛も気付かなかった想いも、私たちの中に絶えず注がれているのだから。

どうしようもない悪党だの、下劣で邪な存在も数多いのを知っている。

世界は悪意に満ちているだなんて、そんな悲しいこと分かっけていても言いたくない。

闇ばかり穢ればかりが目につくけれど、そんな極端なものが人の全てでは無いから。

だってそうでしょう——

生きているかぎり、恩と感謝は尽きることは無い永遠だ。

「だから——私、まだ生きたいよっ……なにより大事な、大好きな……白ちゃんにだって、恩返ししていかないもの！」

瞬間、世界に深い亀裂が走る。

今の衝撃が、外部から大厄災が阻止されたものだとは直感で理解した。

それにより、システムの運行に揺らぎが起きる。

雪崩込んでくる地上での顛末。

ここが星に生きる生物の魂全てと繋がるシステムの中核、そのものであるからこそ投影され見えてくる皆の心と真実。

——ありがとう、魔王。ありがとう、みんな。

破滅を止めてくれたことに感謝が絶えない。

胸の奥より湧き出す想いが、鼓動を響かせた。

同時に、私より溢れ出た《拒絶》の法が変質しながらこの仮想世界に満ちていく。

そして彼女の《魂》の力が、エネルギーに方向性を与えて流れを生み出していった。

内外より加えられた圧力で、システムが不安定となった一瞬の間隙が生じる。

その証拠に彼女を囚える暴力的なエネルギーの渦が、穏やかに風い

でいた。

それを確認して瞬時に彼女を救い出す、か細い蜘蛛の糸を見出した。

分の悪い賭けとさえ言えぬ確率絶無の凄まじい暴挙だけど、魂が碎けかけている彼女を救い出すにはこれしかない。

だから――

「コケちゃん、いいや翠星、私の大切な人……貴女を食べるね。」

貴女の全てを私が喰らい、そこから必ず助け出すから！」

闇の呪縛を解き放ち、死の運命を覆す。

半ば無形のエネルギーへと変わり果てた彼女を救うためには、私が魂ごと取り込んで新たな器を与えてあげるしかないから。

私の魂をよすがに彼女の魂を括り、同期させることで崩壊を止めるのだ。

けれど代償として、私もコケちゃんの魂に括られる。

どちらかが殺されればお互いに死んでしまうが――構うものか、むしろ一蓮托生で上等だとも。

成功率なんて小数点の彼方だけど、そんな無理難題をやつてのけよう。

その程度の不条理を覆せなくて、なにが《拒絶》の力だ。

「信じて。必ずそこから救い出してあげる。一緒に寄り添い助け合つて、生きていこう」

驚きに目を丸くして瞠目している。

だが、数秒後には全てを受け留めるようにコケちゃんは両手を胸の前で重ねた。

「……………うん、うんっ。分かった、いいよ……………お願い」

そして涙と共に震えながら伸ばされた指先へと、私も指を絡めた。額と額をそつと合わせ、胸の内を見つめ合う。

二人の間で魂が共鳴しながら、碎かれきつた互いの魂を循環して満たしていく。

心が繋がっていく。

高まり合う力と、重なり合った真理が、暖かく鼓動を刻んでいく。

「真理とは、恩返し」

「命の恩人、友に仲間、親と子、自分と世界、私と貴方——巡りゆく命の循環」

「ふと、周りを見渡して……満ちる優しさに気付ければ、それで充分」
「私たちは誰かの恩と共に生き、誰かに恩を返していくのが、生きるということなら——」

すなわち、世界に贈る感謝の気持ち。

それは不滅の理なり。

「いっしょだね。それが貴女の願いであり私の全てなら……死んでなんかいられない」

私の願いも、また同じだ。

まだ誰にも、恩返しなんて出来ていない。

だから——

重なる想い。

紡いだ絆。

共鳴し合う魂。

「ならば、何度でも——」

「うん、私たちで一緒に。果てるときまで、ずっと永遠に」

自然と手に形成された大鎌と旗槍を、お互いに構えた。

己の魂の結晶。

それを互いの心臓に向けあって——もう二度と離しはしないと抱きしめ合い、互いの背より刃が突き出ていた。

「私達の恩返しは、悠久の果てまで紡がれていくべきだから」

——今、一つになる魂。

無色の世界を染め上げるように、交わした誓いは力強く。

欠けた生命を二人で補い合うように、翠と白が大輪の花と咲く。

翠の乙女は、闇の冥界から白き太陽のもとへ帰還した。

女神の死と再生に纏わるエレウシスの秘儀が、時代と世界を越えて紡がれる。

重なる想いと辿り着いた真理が、二人を闇の呪縛から解放し、新たな神へと生まれ変わらせた。

天照らし紡げ白蜘蛛の恩返し

さあ、翠白の報恩譚は此処から始まる。

天に廻れ、私たちの星——太陽のように彗星のように、遍く銀河へ
恩を返そう。

「私は訴える、大切な人を救うために競わせろ。」

告げるは、叛逆の宣誓。

未来を願い、神にさえ抗う蜘蛛の詩が織られていく。

「諦めなど要らない。何故避ける？ 何故、この私から逃げるのか？」

優しき光を仰ぐ私は、決して碎けぬ無窮の栄光しか認めない。

「

それは、闇より生まれし不朽の太陽。

不撓不屈ふたうふくつの栄光への希求が、超密度の光となって凝縮していく。

自身と大切な人、その二つの魂が融合し——迷える蜘蛛は白光放つ
恒星となる。

「私には、私の大切な人だけで充分だから。

懲罰さえ跳ね除け、傲慢にも神さえ越えんと胸に誇ろう。

神が私を否定すると言うのなら、いいとも自ら首を括って抗
うのみ。」

大切な人を守りたいがゆえに叛逆を願う言霊。

その祈りを核に、闇に喰われたはずの身体が再構築されていく。

白光で織られた髪がなびき、エネルギーの結晶が物理的な質量を紡
ぎ出す。

同じ真理を宿し、されど異なる魂同士による反応現象。

それにより白織の魂は、まるで星核のように高圧高温で無限に密度
を高めていく。

膨張、収縮、加速、加圧、加熱、集束、凝縮、爆縮——空間圧縮さ
れた人間大の輝恒星。

魂による核融合反応は上限知らずの永久機関となって、白織を内か

ら焼き尽くさんとするが――

「けれどもお願い、愛しき貴方よ――どうかその輝きを支えさせて。絞首の糸は燃え尽きた。ならば貴方が再誕するは、優しく穏やかな大地の温もり。」

私達の恩返しは、悠久の果てまで紡がれていくべきだから。

「

それを受け止め包み込むのは、太陽に救われた翠の乙女。

膨張してく熱量は天文学な数値に上り、急激な変化は魂が耐えきれられないものではない。

それを翠星が、魂を繋ぎ留めて癒やしていく。

まるで――有り余るほどの大きな愛で、世界全てを包み込むように。

互いを思い合う相互作用が、不朽の理として二人を遥かなる高みへと押し上げていく。

「ならば生きよう、翠の楽園で。」

死滅の光が此の身焦がそうとも、先導せよ韋駄天よ。」

自壊すら覆した白織に、もはや常識という絞首の糸は溶け落ちる。

詠唱にともなう自己の進化は、あらゆる軛を砕いて適した身体へと組み直す。

存在密度が世界の許容量さえ上回り突き抜けて、ついに物理法則さえも超越した。

祝福するように、砕かれたはずの大鎌も幻想的な音を共鳴させ、光の讃歌を奏でゆく。

「――白き陽光は闇をも照らす。」

ならばこれは、蜘蛛へと眨された機織りでもなく。

虚無に嘆く闇の迷い子でもあらず。

そう、彼女は――

「エッセンティア神髓――《フアータアラニアルム・ヘリオス天照らし紡げ白蜘蛛の恩返し、因果交織》ツ！」

「

再誕する、新たな太陽。

愛すべき真理に至った白恒織星が、死を滅する光となって虚無の果

てより顕現した。

『——ッ!!!』

刹那、氾濫する光の糸。

魔神ペルセポネの内部から光が溢れ出し、悲鳴すら上げられぬまま斬り刻み裁断する。

微塵切りにされた闇の中から、彗星のように飛翔する光雨が飛び出し、闇を祓いてシステム中枢を白く染め上げる。

恐るべきことに、その一つ一つの星は太陽に匹敵する隔絶したエネルギー量を内包していた。

しかし如何な理屈か、躍る白光は内包した熱を維持したまま外部に放散することなく、穏やかな春の陽射しのように照らすだけ。

凍えるほどの冷氣と闇の瘴気が、熾烈であり優しい光によって浄化される。

埒外の力を宿した眩き光子、それらが集い虚空に太陽を創造していく。

燦然と光り輝く白き恒星。

光の結晶と化した煌めく大鎌を手に、白織は光輝の中より舞い降りた。

その背に巡回する八つの光刃。

まるで天体図のように、白織という太陽に従い重厚なエネルギーを宿して公転する。

そして、淡き燐光が人の輪郭を形作っていく。

質量を持ったエネルギー体と化して、翠星は共に再誕を果たす。

麦穂のような黄金の髪をなびかせ新緑の衣を纏い、翹翼を悠然と広げながら白織の背後に浮かび愛おしげに腕を首に回して頬を寄せていた。

『——ア、ジジ z i、ギ、ッ!!』

狂気に蠢く闇が、ありえないと戦慄する。

肉体を跡形もなく喰い尽くし、魂を穢して強固にシステムに縛り付けたというのに、より激烈な高次元の存在として復活を果たしたというのだから。

しかも、魔神の核だった生贄の少女さえも奪い取った状態で。

システムの呪縛は、そんな甘いモノではない。

星一つ分の全ての生命活動を制御する仕組みの中核装置は、嚴重なプロテクトと何重にも掛けられた拘束術式で、本来は決して分離できないように出来ているのだ。

まして、予備として繋がれていた白織ならまだしも、大厄災と魔神ペルセポネの太源として複雑に絡み合って接合していた翠星には過剰なまでの絶大な縛鎖があったというのに。

理解不能、解析不能の現象を前に、機能崩壊寸前のシステムは自己防衛機構のままに眼前の神を取り込むべく、まだ完全な機能停止には陥っていない魔神を強制的に蘇生させる。

『——アアアaaaア——ア——■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!』

核を失った魔神ペルセポネの成れの果てが、断片を掻き集めて無理矢理再起動し襲いかかった。

その姿は、もはや何と形容していいのか分からないほど醜悪な化物。

触手と獣毛をこねくり回した、不定形に蠢く悍ましい肉塊としか言いようが無い。

一度完膚なきまでに壊された魔神の成れ果てとして、搭載されていた機能の大部分が使用不可になっているが、壊れているからこそ出力は規格外の高まりを見せていた。

地底に轟く《枯死》の闇の波濤。

自壊すら厭わない出力と、システム本体から制限無しエネルギー外部供給を受け、純粋な威力だけなら魔神ペルセポネのときより成れ果ては上回る。

その顔の無い頭部から、昏い光が溢れ出す。

翠魔レルネーの九本同時滅光よりも強力な、大陸さえ消し飛ばす死の暴威が解き放たれた。

人体など粒子一つで消滅させ神さえ物理的に屠れる闇を前に、二人は避ける素振りさえなくただじっと見続ける。

その術式構成と引き起こされている物理現象を、四つの瞳は正確に見定めて――

「――それはもう知っている」

『■■■■!!?』

ゆらりと片腕を持ち上げ差し出すように大鎌を掲げれば、ただ置かれているだけで刃に触れさえせぬまま闇の波濤は無に消えた。

空間さえ粉碎する威力は余波として衝撃波も纏っていたが、それさえも無効化されて二人の髪の毛の一つも揺らせていない。

世界そのものが異なるかのように、白織と翠星の周辺は穏やかな光で包まれていた。

『■■■■!!』

原理は不明だが、遠距離からの砲撃が効かぬというのなら直接殴りつけるまでと、触手を束ねた爪腕を振り下ろすが――

「効かないよ。その程度では私たちは揺るがない」

速度と質量を乗せた一撃は、陽射しを遮るような軽い動作で小さな掌が受け止めていた。

蟻と象とさえ形容できる圧倒的な体格差。

その矮躯側である翠星が小揺るぎ一つせず宙に浮かんだままという、目を疑うような光景が展開される。

体勢からして明らかに衝撃を逃がせないはずであるが、爪腕は何故か重質量のモノにぶつかつたように、衝突の破壊力が全て自らに跳ね返って肉の潰れる音が響く。

エネルギーの集束体ゆえに、輪郭が緩やかに揺らめく翠星の見た目からして、決して硬そうには見えぬと言うのに、現実是不動の光に砕かれ浄化されていく。

あらゆる生あるものには特効である闇も効かず、純然な物理攻撃も弾かれた。

しかし、この密着したポジショニングの優位を保ち続けるため、成れ果ては様々な魔術を用いて通用する手段を探ろうと夥しい種類の

災禍をブチ撒けていく。

獄炎、蒼海、嵐天、地裂、氷獄、天雷、聖光、暗黒、深淵。

猛毒に、麻痺に、昏睡、強酸、呪怨、重力、空間……システムが記録している全ての攻撃方法が実行される。

それらが無防備に佇立したまま、白織と翠星はじつと受け続ける。しかし、それでも——二人には一切の影響を与えられない。

攻撃が当たる瞬間にオーロラのような翠緑の光が生まれ、同時になての威力が虚空に相轉移したかのように消失してしまうのだ。

溢れた極星光も、翠星が瞬時に支配下に置いて集め、白織へと還元されて二人の間を循環する。

まるで天女の薄絹のように、二人を優しく包む煌めく光。

それが、あらゆる猛威と破壊から遠ざけている。

「甘いよ！」

「私たちをどうこうしたいのなら、最低でも星さえ砕く攻撃くらい持って来い！」

跳ね上がる光輝の大鎌で、かち上げられる魔神の成れ果て。

何百トンもありそうな巨躯が、それでも軽いとばかりに冗談みたく吹き飛ばされた。

更に追撃として、天廻する光刃が巨躯を鋭く縫い留め拘束する。

「これで充分理解した」

「素の状態での耐久性は検証が済んだね。なら——」

「ああ、そろそろ此方から行かせてもらおう！」

瞬間、鳴動する魂の炉心。

胸の奥で爆発的に増幅していく白き閃光は、まるで太陽の如く。

それも、優しさなど欠片も無く自壊すら厭わないと加速していく様は、あらゆる因果も不条理も焼き滅ぼすと滾り狂う、破滅と進化の陽恒炉。

「螺旋を紡げ我が魂、共に光の果てまで往くために！——ソルリアクター陽恒炉・オーバーロード臨界駆動ッ！」

総身に噴き上がる白金の煌めき。

あまりのエネルギー量で電離する原子の悲鳴が、甲高く弾けながら

絶叫している。

それを大鎌に乗せて解き放つ。

穢れさえ飲み込むように白の光輝は光速を纏い、空間ごと一直線に斬り裂いてみせた。

光の奔流に裁断される成れ果て。

その身体が、原子核ごと浄化されるように解れて分解される。

ただのエネルギーとして、あまりにも煌びやかにシステムへと戻されてゆく。

成れ果てを構成する、あらゆる物質と術式が因果や理屈も越えて、強制的に解体されては純粋なエネルギーへと変換され、システムへ眠るように静かに帰る。

故にこれは、因果裁断の死滅光。

常識という絡まる螺旋を断ち切り、自在に捻じ曲げ組み直す強制再編の光であった。

「さあ、帰るといい」

「あなたも私の大切な世界の一部だから……今はおやすみ、私の影」
溢れかえる光の中。

淡く儂く消えていく魔神の成れ果てに、二人は優しく触れる。

そしてすかさず、システムへ逆干渉を開始した。

接触箇所から双方向に伝導する、膨大な情報粒子とエネルギー。

それらを、白織と翠星は微笑みながら掌握していく。

核たる中枢装置の喪失、システムに貯蔵されていたMAエネルギーの急激な減少、過負荷で焼き切れた術式回路、システム中枢という物理的な要石へのダメージ……

数多の要因により維持する力を失い崩壊寸前だったシステムを、二人で分担しながら相互に補修していく。

そのたびに起きる、二人の相互進化。

情報処理速度が足りない？ —— なら足りるように進化する。

エネルギーの伝導が遅い？ —— なら満たせるように進化する。

まだまだまだまだまだまだまだ——もつと高くもつと強くもつと先へ。

白織は翠星を進化させ、翠星は白織を進化させる。

お互いがお互いを、より高次の存在へと生まれ変わらせる様は、まるで次世代への転生。

世代を幾度も重ねること新たな性質やより良い機能を獲得するよう、二人は最適な形で改良と再編を刹那の内に実行する。

お互いにエネルギー生命体とも言うべき存在だからこそ、生きたままの超進化。

脱皮、昇華、変革、覚醒――

進化、進化、進化、進化――

限界を超えて呼応し、何処までも飛翔する比翼連理――果てなき銀河を往く綺羅星の如く。

それらの一連の戦闘を、深淵の底で冥王は驚嘆と共に喝采を叫ぶ。

「あっははははははははははは――ツ!!」

至ったのか。あの状況から、これほどの神髓へ!」

浄化されていくシステム。

干渉する権限さえも剥奪されてあの世界を覗き見る無数の視点が断絶しながらも、Dには欠片も嘆きやしてやられたといった感情は無かった。

あるのはただ、喜悦の一色のみ。

神髓とは、神格として最高位に至るには必須の権能。

魔術を越えた真の魔法、己独自の異界法則、世界そのものへ刻みつける神の星。

それが使えるだけで最低でも上位に位置し、発現した権能によっては最高位とも渡り合える力を手にすることが出来る。

しかし、当然ながら至るのは容易ではない。

そもそも神格の資格ですら希少であり、実際に神へと至るのは更に少ない。

その上神髓に目覚めるなど、確率を表記するのも馬鹿らしいほど絶無である。

Dが翠星に行っていたのは、力の譲渡による位階の引き上げだ。いわゆる擬似的な神髄到達をさせていたに過ぎず、真の意味では覚醒には程遠かった。

しかしこれは――

「二人で一つの神髄！ そんなやり方、机上の空論だと思っ
たのに！」

互いに足りぬところを補い、共鳴し合うことで魂の限界を越えたのだ。

ゆえに、ひよっこにも満たない成り立ての下位神が、上位の神でも習得している者が少ない神髄へと、真実到達していたのだった。

「基礎性能として……単独の個体として星さえ超える霊的質量、卓越した空間制御による超圧力の常温核融合、因果裁断による事象の改変に、あらゆる状況へ適応する相互進化などなど、色々ありますが……本質は別」

星さえ超える霊的質量を獲得し、星を破壊する威力でもなければ傷一つ付かない防御能力も。

不朽ゆえに際限なき出力捻出を実現している、永久機関である魂の炉心も。

それが力場を持つ存在であるならば、因果の糸を切っては繋ぎ直す干渉能力も。

極限環境や異なる法則にも適応できる存在へと進化する、強化転生能力も。

全ては、一つの法則によるもの。

「――相互作用の完全操作能力、それがあなたの至った神髄ですか」
電界から磁界、磁界から電界へ。

あるいはエネルギーの増減で、物質が相転移により様々な状態変化を起こすように。

あらゆるエネルギーの相互作用と相転移は、万物に共通して存在する絶対の繋がりである。

それはもはや哲学や概念的な面も含み、共に生きる誰かが居るとい
う相互承認によって死という事実すらも塗り替え、それらを自在に操

り事象さえ編纂し越えうる権能となって現れる。

それこそ、本来は不可能な力の流れであつても。

空間という場にあるかぎり、この世の通常法則全ては白織の権能からは逃れられない。

惑星の運行すら手中とする太陽となった彼女は、恒星を物質転換させ惑星に、惑星をエネルギー化させて恒星にすることも、望むなら不可能じゃない。

その手は、あらゆる因果の糸を自由自在に好きな形質へと織り上げるのだ。

この世の全ては、繋がりで出来ている。

繋がりが、流れ、永遠に続く不滅の理。

その恩返しと感謝の連鎖こそが、世界に光をもたらすと掲げた二人の答えだった。

「なあ、見ているんだろうD?」

「これが私たちの答え、私たちの真理」

システムの中核を完全掌握し、一時的な安定駆動状態まで復活させた白織と翠星。

システム中枢はあるべき姿へと回帰し、界の位相が本来の場所へと戻る。

そして、穏やかに輝く白と翠の光が、虚空を照らし始めた。

掴み取った星の玉座と共鳴し、更に深い高次元への道を開く。

「今度は、お前の番だ」

「私たちから出向いてあげる」

翠と白のエネルギーが渦を巻き、真なる冥界の底へと干渉する。

システムと繋がっていた底知れぬ闇の気配。

それを辿つて、Dの居場所までの経路を確立するのだ。

全てを観覧し、愉悦と嘲笑で運命を弄びながら、悪逆非道を極める邪神の元へと。

「ええ、来てください！ 白織、翠星！ あなた達が此処まで至るのを待っていました!!」

そして遂に開く、冥界の門。

最後の戦場へと続く道が、今この世界へと顕現する。

遙かな過去より続く、贖罪の輪廻。

その要を担った、闇黒の遊技盤の創造神へ——ありつただけの想いをぶつけるために。

「そう、全ては——此処から始まったから！」

祈りを抱きながら翔ぶ、二条の流れ星。

特異点の更なる向こう側へと墜落を開始した。

虚言弄す闇黒の遊技盤

この世界は、始まりのときより闇と共にある。
宇宙を満たすは、果てなき無明の秘奥。

闇には未知が潜んでいる。

誰も知らず、誰も理解できず、誰も全貌を把握することの出来ぬ闇の力が。

それはきつと、世界が終わりを迎えるまで変わることに無い不文律であろう。

ゆえに、本当の名など無い。

ハデス、ヘル、アンリ・マユ、エレシユキガル、伊邪那美、黒き神、カオス、無貌……

異名こそ数あれど、どれも好き勝手に名付けられたものでDという名も名無しでは不都合だから便宜上名乗っているに過ぎない。

ゆえに我は闇。

ゆえに私は混沌。

ゆえにDとは未知たる死そのものである。

宇宙を構成する過半数は闇であり、那由多や不可思議よりも重ねた年月が、闇の神髄である。

そして貴様ら、闇は悪だの穢れだの忌まわしいと語るのでしょうか？

ならば私もそうしよう。

闇の何たるかを知らぬ者には、冥府魔道にて踊り狂うだけで充分でしように。

——ならばこそ、最狂最悪の邪神に供物を寄越せ。

娯楽を寄越せ、感動を寄越せ、意義を寄越せ——世界の終焉まで私に愚かしい希望をくれよ。

闇とは、光在らねば闇たりえぬのだから。

そう、それこそが——

継ぎ目のない黒曜石のような床面と、果てのない闇の宇宙。

システム中枢から、空間と次元を何層も突破して辿り着いた深奥の領域。

その闇の特異点の中央に、些か不釣り合いな化学繊維と合皮の現代製品であるゲーミングチェアに腰掛け、玉座から見下ろす王のように坐すD。

妖しく怖気すら走る、人外の美貌。

射干玉ぬぼたまの髪を指で遊び、光を一切反射しない黒曜石の瞳が開かれる。

その彼女が一点を見詰めながら小気味良く拍手をし、来訪者を迎えた。

「ようこそ、深淵へ」

こつこつと二人分の足音が空寂に響く。

一つはしっかりと地を踏み締める硬いブーツの音、もう一つは重さを感じさせない軽い音。

共に無言で、けれど揺るぎなき何かを充溢した強い眼差しが、歪な玉座に座る冥王を見据えた。

「お待ちしていましたよ。翠コの乙女レそして叛逆蜘蛛アラクネ……いえ今は白恒織星ヘリオスですかね」

森羅万象全ての盤面を嘲りながら眺めていた、邪神の昏き双眸が白織と翠星を目に映した。

——芝居がかった仕草で口角を吊り上げ、大仰に両腕を広げるD。

三日月に歪んだ嗤いが印象深く、私たちを迎え入れた。

それは本来笑顔が持つべき友好や親愛の表明とはかけ離れた、侮蔑や嘲弄を示す傲慢な顔。

最悪の邪神らしい、闇色の笑みが浮かんでいた。

「まずは感謝を、とても満足できました。」

転生者による変革と活性化、引き起こされた数々の出来事、星を蝕む癌の打破、そして大厄災。どれも素晴らしい演目をあなた達と彼らは演じてくれました」

思わず面食らうほど、述べられる賛辞は心の底から素直な称賛を贈っているように見える。

どれほど評価しているのか、それを示すため今すぐ抱きしめたいと、歓喜の渦に打ち震えながら陶醉し喝采していた。

「そうかい」

「舞台装置にされたことに言いたいことはあるけれど……今は余計な文句を言うつもりは無いよ」

「続ける——言いたいことがあるのだろうか？」

射抜く視線にDは肩を竦めて、せつかちですねと戯ける。

なんとも嫌な感覚だが、あいつの思っていることが分かってしまう。

それはこの闇の特異点の性質であるからなのか、それとも空間跳躍するが如く神としての位階を駆け昇り、上位の階梯へと触れたからなのか。

もしくは——私があいつの、根源を同じくする身代わりだったからなのか。

遂に此処まで辿り着いた私たちと語りたいたいと、迸る喜びが瀑布のように横溢おういつしている。

物語の終わりには挑戦者と黒幕との問答があつて然るべきだろうと、無言で示していた。

「——とりあえずは、あの星に手を出すことはしないと約束しましょう。」

これ以上私がでしゃばって場を引つ掻き回しても、折角の煌めきに泥を塗るような行為です。

それを一つ目の褒美として贈ります。

予定としては、この特等席から見ていただけでしたが折角来たのです。このまま何もせずというのは不義理にあたるでしょう。次の褒美として何を望みますか？」

ならば改めて問おう――

「訊きたいことがある」

「なんででしょうか？」

「お前の目的……願いとは何だ」

娯楽だと、前に言ったな。

争っているのを見るのが好きなのか？ 絶望している様を見るの

が好きなのか？

愚かしく藻掻いて必死に血を流して、それを大上段から嘲笑うのが

好きだと言うのか？

あらゆる虚飾を取り払い、本音の部分を晒せ。

「私の願いですか？ それは娯楽目的というほか何もありません。で

すが敢えて言うならば……」

一瞬、言葉を探しあぐねている様子だったが、一つ間をおいて滔々とうとう

と語りだす。

Dにとっての世界とは何かを。

「退屈が神を殺す。ならば神を慰撫してくれるのは、人が魅せる輝き

に他なりません。

ですが闇そのものである私に、人の規格で廻る世界は狭すぎる。

態々若葉姫色という外装を被り能力の大半を制限してなお、私には

世界は小さく映ってしまう。

あなた達も、少しは思ったはずですよ――生きる世界が違うと。

当然です。人が鳥や魚の気持ちを理解できないように、単独で宇宙

と次元の狭間を行き来できる神の見え方など、そもそも視点が大きく

異なります。

星は寝床兼食事。環境や住む生き物など、寝心地の違いや彩りを加

える副菜でしかありません」

……暴論ではあるが、否定は出来まい。

私としても、惑星間での転移すら当然のように出来るようになって

から、今まで見えてた世界がなんて小さかったのだろうと思ったこと

は一度や二度ではない。

コケちゃん自身もいつの日か、魂に理解を深めていくにつれ世界に

寄り添う魂魄の世界が見えるようになってきたと言っていた。

いわゆる輪廻の環とか霊界冥界精神界などと呼ばれる、根源たる生命の坩堝。イノチの海。

そんなものを知覚している私たちは、普通の生物とは確かにズレてはいるんだろう。

だが——人の感性を宿してから至った私たちとは違い、Dの場合はそうではない。

「そうですね……目の前に蟻の巣が入ったケースがあると思いましたよ。愛らしくて愚かな、矮小で未熟な生き物の住む脆い箱庭です。

知恵も足りず、力も弱く、精神すら不完全で、自然を出来損ないの鋼で蹂躪し、飽きもせず同族で殺し合うような……そんな蟻たちの閉じた世界。

それ以外には何も無い。娯楽にも時間潰しにも使える物は何も無いんです。そして空腹も眠気も死すら無い。ならどうしますか？

——その蟻の巣で遊ぶほか、無いじゃないですか」
垂れ流される嘲弄の悪意は止まらない。

絶対者の思考は、弱者を斟酌せずに傲岸不遜に展開される。

数多の嘆きと絶望に涙しても、力が足りなければ決して神には逆らえないとでも言うように。

「素手で掻き回せば一瞬で駄目になると理解している以上、髪の毛先で突付くのが干渉出来る最大限度となりますね。

時折、力加減を誤って壊したりしてしまう弄くり回しの過程の中で、一部の蟻は思いもよらぬ行動で、私を楽しませてくれる事があります。その何と心躍ることか——」

期待しているような、嘆いているかのような。

上機嫌な言葉にありったけの嘲罵と皮肉を乗せ、最悪の祝福を喉の奥で転がす。

その蟻こそが、私たちか。

あの星という箱庭で足掻く、蟻の一匹でしかなかったと。

分かっていたさ、それは別に良い。

けれど——薄笑うDの姿が、自分自身さえも呪っているかのように

見えて。

とても儂くて、空虚で、哭いているようだと、そう思えてしまう。

「——もう、理解も及んだでしょう？」

故に眺めて、遊び倒したいのです。

勇気に、決意に、不屈の意思……根が悪意でも構いません、ようは輝きの絶対値です。

それらを慈しみ、尊ぶからこそ舞台を作り上げ、発揮できる機会を用意しよう。

私という死せる暗闇を晴らさんとする、生命が放つ最高の輝きこそが、私を退屈という死病から癒やしてくれる。

そして欲しているのです。私の遊びに抗いきるような、激烈たる閃光を放つ存在を。

そのためなら私は最低最悪の邪神として、嘲りと共に人々に世界に試練を与えましょう」

先程感じた気配は鳴りを潜め、再び嘲弄と喜悦を身に纏うD。

何度でも眺め、飽きもせずひたすらに。

それが全てだと、Dは闇の中で瞳を爛々とさせながらニタリと笑んで嘯いた。

「——最高の光^{キボウ}を、最悪の闇^{ワタシ}へと捧げて下さいな」

ああ……そうか、なるほど。

Dが常々暇つぶしだと言い、願っていたのはこういう事か。

こいつはただ無差別に悪意を振りまきたい訳じゃない。

本当は、とてもとても愛している。

世界も、人の世も、全てを包み込むほど莫大な期待を掛けている。自分を救ってくれるナニカを、常軌を逸するほどに求めて焦がれている。

諦観と期待、妄執と熱情、愚弄と親愛、絶望と希望——矛盾併せ持つ混沌の精神。

その歪んだ発露がこれであり、ゆえに邪神か。

——いいとも、魅せてやるよ。

——魅せつけてやろう、白ちゃん。

「そして最後は、こうするのが一番でしょうから——」

くぐもった笑みを喉で震わせながら立ち上がり、踵で軽く蹴ったゲーミングチェアが何処かへと消え失せた。

この瞬間を長年待ち焦がれていたというように、迸る歓喜が凄絶な笑みを形作る。

「ふふふ……さあっ!! 本当の本当に最終決戦です！」

あなた達の勝利条件は私を満足させてみせること。敗北条件はツマラナイ真似をした瞬間です」

両腕を広げ、喝采し、冥王神は高らかに哄笑する。

だからもつとだ——煌めきを魅せてくれ。

此処まで辿り着いた存在を、自らの目に直接焼き付けたいのだと。

「最後の敵は此処にいます！ この世界を仕組んだ邪神は新たな神によって討たれ新世界の幕開けを彩るのか、それとも邪神に挑んだ二人は道半ばで屈してしまうのかッ!!」

空間が震え、膨張していく特異点。

主であるD、そして白織と翠星が共鳴し合いながら、己が世界を塗り拡げていく。

虚無の果てまで終わりなき世界へと変貌し、神格同士の闘争に相応しい戦場を作り上げる。

「無欠の正当性を与えたぞ？ 立ち向かうべき目標を与えたぞ？ ならば、来いッ!!」

討つべき闇は此処にあるのです！ 光を携え煌めきを具象してみせろ！」

揺蕩う闇を閉じ込めたような瞳。

昏く、深く、底が知れない三日月の如く裂けた邪悪な微笑が浮かびあがる。

「闇黒の遊技盤を越えた先に、煌めく光を創成せよ。無限の宇宙の最果てに、無窮たる火を灯せ。誰も知らぬ冥界に、絢爛たる流れ星は遂に來たれり！」

ああ……このときが来るのを待ち焦がれていた。

長きにわたる遊びと試行のなかで、神格まで至れたのはごく僅か。それさえも、闇に怯え平服するか、抗おうとして力及ばずに潰えるかの二択。

深淵まで辿り着いたのは、誰もいない。

だからこそ。

「さあ唱え、訴えろ。激情を融解させ、叛逆の祈りを紡ぐのだ、白蜘蛛よ。

祝福とその愛で、暗闇の世界を癒やすのだ、翠の乙女よ。

全ては、■■■■を再誕させんが為に——」

清廉な祝詞を奏上するかの如く、敬虔な信徒のようにDは厳かに呟く。

しかし一転、気配も何もかもが反転して歪み——

「——私を楽しませて下さいね。白織、翠星」

来る、来る——闇が溢れる。

澱む暗黒を吐き出すように 沈殿した畏れが特異点に充溢を開始した。

「それでは——、あなた達の詠唱^{ウタ}を真似して、やってみますか」

誰もにも理解不能な己が法則を構築する独自言語から、敢えて翻訳して詠唱を紡ぎ出す。

その真意は何故なのかは分からぬが——

籠められた想いは宇宙規模に絶大で、只人には一滴で即死するに足る猛毒に他ならなかった。

では今こそ、闇黒の遊技盤を廻そう。

天よ翳ろ——闇のように死のように、遍く銀河^{セカイ}へ悲劇と試練を与えん。

「古の戦いにより、世界には三つの支配者が降誕する。

地を支配する我は、黒冥の果てへと墮とされ厭世^{えんせい}に縛られた。

「告げるは、覇者の宣誓。」

原初にして深淵の玉座に坐りつつ、それゆえに倦んだ冥界の瘴気が流れ出す。

「あらゆる死者は我が世界にあり、あらゆる魂魄は我が物である。

我が手にあるは、あらゆる生命の運命なれば。おお、我こそは最狂最悪の冥王神。」

それは、闇の底たる誰も知らぬ深淵の法則。

煌めく光への渴望が、それをより引き立てるための闇となって空間に充溢していく。

諧謔と邪悪、それらを滲ませて——嘲笑する冥王は血と絶望を塗り固めた盤面の支配者となる。

「悲鳴を上げろ、嘆きを謳え。

繰り返される怨嗟の声を聞かせておくれ。

悲しきかな冷たき我が身は、死者の血涙こそが渴きを満たす。

巡りめく激烈たる混沌の煌めきこそが、我が無聊を癒やすの

だ。」

世界を蝕み轟く絶望讃歌を味あわせてくれ。

殺意の奔流が、犠牲者の慟哭が愛おしい。

世界を歪め広がる英雄讃歌を謳わせてくれ。

決意の誓いが、勇者の咆哮が愚かしい。

まだまだ、許さぬ——もつと輝け。

私はまだ満足していない。

「ならば踊れよ、名も無き道化——我が素晴らしき、白紙の身代わり。」

闇とは、いと罪深き邪悪そのものなり。刈り入れろ死神よ。

「

だからこそ、この展開に狂喜する。

永き遊戯と倦怠の果て、ようやく冥界を照らせる太陽が現れた。

己の切れ端——それが此処まで成長し超越者に至ったことを、虚偽も衒いもなく寿ごう。

ゆえに己は闇を纏って、待ち受けるのみ。

指揮棒替わりの細剣を手に、冥王は世界の理を未知に墮とす。

「——未知たる冥界は此処にあり。」

ならばこれは、光を呑みこむ暗黒天体よりも恐ろしいモノ。

事象の彼方は誰も知らず、観測できず、理解できない。

そう、コレは——

エッセンティア
神髓

Dark Degenerated star
虚言弄す闇黒の遊技盤、

我こそ冥界支配せし邪神なり

顕現する、原初の闇黒。

未知という最果て。

プラスマイナス

正と負すらも、零も無限さえも越えた不確定の極致が、闇の果てより降臨した。

「まったく、面倒な奴ったらありやしないな」

「そうだね。でもだからこそ——伝えないと」

「分かっているよ」

身体中を撫でる暗闇を白光で弾き飛ばして、辟易しながら二人で顔を見合わす。

ああまったく、残念な神様なこと。

タチが悪くて見てられん。

だから——

「いこう、白ちゃん」

「当然だともッ！」

刹那——光と闇の星々は、激突する。

亜光速に届かんとする領域で、最果ての特異点に瞬く軌跡を描きだし。

白織と翠星、邪神D——三つの超神星が最後の決戦を開始した。

我こそ冥界支配せし邪神なり

「うおおおおおおお——ツ!!」

「はあああああああ——ツ!!」

「くふふふふ、アツハハハハアアア——ツツ!!」

——激突し合う、神々の流星。

想いを送らせながら、全てを裁断する光と未知を内包する闇とが特異点に吹き荒れる。

最初に語らった場合は、空気と共に初撃のぶつかり合いで既に消滅している。

私たちは宇宙空間に近い虚無を超速で飛翔しながら、宿す己の星を描いていく。

そのたびに余波が空間を激震させ、撒き散らされたエネルギーが閃光となって宙を彩る。

「集束、凝縮、臨界点突破——穿てえッ!」

纏う光の帯から、幾つもの白い糸がくゆるりながら束になり力を循環させる。

糸玉のようにくるくる丸まり、霧のようにゆっくり垂れ、嵐のように力強い動きで。

そして背後に公転する八つの光刃から、極光が大槍として放たれた。

密度を極限まで高めた死滅光が闇を切り開き、逆に光へと変換しながら増幅させて駆け抜ける。

アルビノである私には、致命的な悪影響しか及ぼさない光という存在。

肌を焼き、目を眩ます——他の人にとってはなんの事も無い光が劇物と化する。

その性質を極致まで至らせたのが、死滅光。

因果をも裁断する破壊と創造の光を、闇を漂わせるDへ雨霰と放ち続けた。

初手から常に全力。

私の心臓が生まれ変わって構築された陽恒炉は、私たちの魂と同期して莫大なエネルギーを全身へと休みなく供給している。

胸の鼓動が刻むたびに、陽恒炉は崩壊寸前そのまま出力を捻出し、限界を幾重も打ち砕いて上限を更新し続けていく。

まるで不滅の太陽のように。

瞬く間に、無から一を生み、一は十に、十は百に、百は千にと——増幅し続ける力の波濤。

それによって、あの絶対敵わないと思っていたDとも一応は戦闘の形になってはいるのだが——

「その程度ですか？」

Dが闇色の細剣を振るい、八条の光線を容易く消滅させる。

結果、一発で大陸一つ軽く蒸発させる光条弾雨は、袖の端さえも焦がすことなく消え去った。

これがもし、闇という反対属性で打ち消されたのなら、納得できるだろう。

相性が最悪の、光を滅ぼす死の闇。

そうであったのなら、どれだけ分かりやすいか。

だが、違う——これはそんな優しいものじゃない。

「ふむ……どうやら私の能力の一端について何となく理解している様子。上位神でも大抵は気付けないような代物なんですけどね」

すでに何度か、同じような攻撃を繰り返している。

けれどどれもD本人には届かず消滅させられるのだが、その消滅方法が毎回不可思議で不可解な現象で消されたのだと、相互作用操作の権能が知覚するのだ。

「では、これはどうです？」

瞬間、私たちが襲う謎の攻撃。

突如火球が至近距離で炸裂した、突如絶対零度が背後より忍び寄る、突如重力場が乱れて枷を嵌めようとする。

発生した原理も原因も不明のまま、惑星さえ破壊できるような超威力の現象が、認識よりも先に炸裂しているのだ。

「舐めないでっ」

コケちゃんの加護により、それらの攻撃は触れた瞬間に全て掌握して、性質を変化させ私自身のエネルギーにして取り込む。

熱量や力場、それを操り無害にする。

発動原理が不明でも、結果である現象にはそれらの物理法則が絡む以上、私の神髄はありとあらゆる攻撃を無効化させることが出来るのだ。

ゆえに持久戦には滅法強く、それでいて相互進化で基礎性能も際限なく向上していく。

「いやはや。白織、あなたの力も大概ですね。既存法則下で作用する攻撃が一切通用しませんよ。下手すれば千日手になるのではないのでしょうか」

「——ははっ！ 私も驚いているよ。こんなチートまがいの力が、神の最上位では当たり前だっけ事があるなあ！」

喝破と共に輝ける大鎌で放つ、極光斬撃。

最も出力を高く出せる大鎌は前方を埋め尽くす極大の斬閃になり、もはや津波のよう。

「ですから、その程度なんですか？ 白織、翠星？ それではこの未知を踏破できませんよ？」

また、訳の分からないまま消された。

今度も単純に見逃したとか、意識の外を突かれたとか、超速で消滅させたとかでは決して無い。

私たちは二人で一人。

思考は共有し合い、お互いに隙を補い単純な不意打ちなどは、まず受けないし見逃さない。

あなたに報いたいと想い合う報恩キズナの糸は、機転の一致や相互補助においても高度な面を見せる。

けれど——それでもなお理解不能な現象が気付いたら起きているのだ。

『少しだけ……うん、少しだけ理解できた』

『コケちゃん？』

『ごめん白ちゃん。私は解析に専念するから、援護は出来なくなる。』

もしかしたらこれは——』

『——なるほど了解。せいぜい一秒でも長く時間を稼いでみせるよ』

同調した意識下、加速する思考の中で言葉を交わす。

その議論は現実時間では刹那にて終わらせ、私はDと相対する。

「さあ、もつと愉しみましょう」

「別に構わないけどさ——、一発殴らせろやあぁッ！」

「出来るものならッ！」

爆発する意思と意地。

攻防は激しくなる一方、けれどもお互い真芯には届かない。

どちらも必中に等しい命中率を持ちながらも、防御を突破するには至っていないのだ。

閃撃はどれも光速で飛翔し、放たれた後の死滅光も増幅拡散思いのままに制御できる。

けれどDに近づけば謎の力で消し去られる。

Dの技は未だに不明だが、攻撃が接触してからようやく認識出来るという事実に変わりはない。

けれども手を抜いているのか、それとも長く愉しみたいからなのか、私たちの神髄の弱点であるとある陥穽を突いてこない。

未だ予想の域だけど——

私たちとDの神髄は、どちらも相性が良くて相性が悪いとも言える性質なのだから。

「有形無形自他問わずに、あらゆるエネルギーを操作する能力。言葉にすれば陳腐ですが、実際目にすれば出鱈目なものです。なにせ何をしても変換されてしまう、そういうことなんですから」

そう、それが私たちを支える力。

感謝は繋がり別の力へと変わるといふ、二人の願いが具象化した権能なのだから。

あらゆる力は私たちの手で紡ぎ直されて、新たな力へと昇華される。

けれど——

「でも、それはあくまで既存法則内での能力。そして——異次元の法

則や未知の力には弱い」

「づう、うおおお——ッ!!」

「くうう！」

この瞬間、初めて私たちに痛打が浴びせられた。

干渉できないナニカの力が混じった攻撃は、力の掌握と吸収の守りを突破して傷を刻む。

「まだまだ——ッ!!」

それらが致命傷となる前に、自分自身の表面を自爆させながら吹き飛ばす。

呼応して出力を更に三段ほど引き上げる、代償に内臓が燃えだすが無視。

それにより皮膚は実質的に反応装リアクティブアーマー甲となり、攻撃が接触すれば即刻打ち消して自身への破壊力は掌握して再吸収する。

私たちは存在そのものとして超密度のエネルギーだ。

だからこそこんな無茶が出来るし、損傷も内界から迸るエネルギーですぐに修復された。

「思考、試行、演算、観測、検証………コンプブリート解明完了っ！」

そこで、今まで見に徹していたコケちゃんが確信を得た声で叫んだ。

「行って、白ちゃん。適応したからっ」

「応ともっ」

何故とは聞かない。

繋がる意識で、Dの神髄が一体どういったものなのか真実理解したし、なにより彼女が行つてと告げただ、なら迷う必要などありはない！

「はあああああ——ッ!!」

「ッ、う——くっはははははははは!! 流石です！」

反撃の光刃が、今まで攻撃の通用しなかったDを斬り刻む。

あいつを守護していた未知なる鎧、それが遂に破られたのだ。

互いに一撃貫いあった関係。

Dも受けた傷はすぐに修復され外見上では何一つ無く、一見すると

振り出しに戻ったかのよう。

けれど——これにより今後の攻撃は、より熾烈さを増して生命を奪い合う領域に突入する。

「答え合わせです。私の神髄とは何でしょう？」

「未知の法則。ひいてはそれを理解していない奴に対する絶対的優位性」

「正解です」

Dの神髄——分かったは良いが、やはり最悪の代物だった。

未知という最果て。

プラスもマイナスすらも、零も無限さえも越えた不確定の極致。

未だに解明されていない宇宙を満たす謎の力、それがダークエネルギーである。

それゆえに全ての攻撃が通用せず、また向こうの攻撃を察知も出来なかったのだ。

未知の法則を纏わせた魔術や攻撃は、その未知を理解していなければ認識できないというのに、認識できないからこそ未知は未知のまま優位性を保ち続ける。

そしてD自身に攻撃を届かせるためにも、Dが今扱っている未知の法則を解き明かさないと攻撃が当たらないという無敵化の性質も持つ。

そういう、鶏が先か卵が先かという矛盾を突きつけたまま一方的に勝てるのがDの神髄だった。

正直言つて、普通はこんなどうやって攻略しろと思う性質だ。

これと対峙するにはまず、世界そのものを把握できるような知覚能力がなければ始まらない。

既存法則に混じる、謎の法則と力。

それを私たちは相互作用を支配するという権能で、Dの周囲と撃たれた攻撃に未知の法則があるのを読み取り逆算して解明することで、Dの絶対優位を突き崩したのだ。

■■■■の■■■■による■■■■現象。

■■と■■、■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■。

そうして再び始まる、流星の絢爛舞踏。

光崩壊させる閃光の雨霰が、闇を焼き尽くす。

見えない波打つ影や、聞こえない蠢く闇が、光を貪ろうと忍び寄る。

そして遠距離だけではなく、一步も引かずに大鎌と細剣が神速の剣戟を重ねていく。

「そういえば……この際ですし指摘しておきましょう。あなた達の罪について」

ほんの世間話のように、冥王は真実を鋭く突きつけた。

こと此処に至るまでの経緯を振り返り、覆い隠されてきた陰の部分を無遠慮に抉り始める。

「結果的にあなた達は星を再生させる、その最後のスイッチを押すだけのところにまで来ました。けれど……忘れてはいませんか？ それが出来たのは数多の生命を奪って、ようやく辿り着けたということ。を。」

その救いは正しいのですか？ あなた達のやっている事は、偽善では無いのですか？ 星を救うためと大層なお題目を掲げて、本当は殺す事を肯定的に容認してはいないのですか？

救いを作るから、未来を齎すからと、一見輝かしいだけのお題目に酔ってはいませんか？

涙を血を、怨みを嘆きを、それを磨り潰して生贄として捧げたのは紛れもない事実でしょうか？

あの先代の勇者のように——

あなた達が引き起こした人魔大戦で、どれだけの人間を塵殺した？

辺境でひっそりと暮らしていた神話級魔物も、魔物にしてはエネルギー量が多いからと虐殺しただろうか？ ひいてはザトナ平原での戦争に乱入したのだから、そういう事だろうと愉しげに嘯く。

「——言いたいことはそれだけか？」

「そんなこと、とつくの昔に分かりきっているよ」

火花を散らせながら、相手の目を見て言い返す。

そんな言葉で揺らぐほど脆い覚悟などしていないさ、私たち二人と

も。

「私は、そんなこと知った事かと一蹴して駆け抜けた」

「積み重ねた犠牲も、奪ってしまった生命の重さも、私はずっと前から向き合ってきた」

白織と翠星、私たち二人はそれぞれ違う考えを持って計画を実行してきた。

私は、脇目もふらずに光のように、己を曲げずに我が道を進んだ。彼女は、取りこぼしてきたモノを眺めながら、少しでも報いることを選んだ。

相反する罪への向き合い方、けれどどちらも正しくて、どちらも間違っているのだろう。

突き進まなければ成せないこともある、だけど見落とすかもしれない。

振り返らなければ間違いに気付けないときもある、けど足を止めてしまうかもしれない。

だから私たちは、共に同じ罪悪を背負いながら歩んでゆくとも。

「だけど、それも全て——世界あつての事だろう！」

そう——大前提を間違えてはならない。

星そのものが無くなれば、生命が生きるも死ぬも無いのだから。

贖罪や継承など、まずはみんなが立つべき場所があつてこそその至極単純な理だろうに。

「罪も背負うさ、罰だつて受け入れよう。けれどそれも生きる世界あつてこそ」

「託すものにも、それは私たちがやりきった先にある」

「必要なときなんだよ、この星に光がな」

「だから進む、それが私たちの始まりの誓い」

苦難が待っているからといって、あの星では現状維持では駄目なんだ。

それがどんなに痛い禁忌しんじつでも、甘い逃避は許されない。

後世に託したり保留で許されるようなライン、とつくに越えていたから夥しい罪を背負っても、あの星の救いを担うと、長い時間を掛け

て決意した。

常人では潰れてしまうような、その重い覚悟——見縊るなよ！

「だから容認しろと？ それはなんともまた傲慢な」

「それこそ、お前が言うなだろう？ システムの設計者さん？」

元はその星の人間の自業自得でも、あのような盤面を作ったのは——
—Dお前だろう。

それを棚に上げて囁ったところで、此方としては痛くも痒くもない。
い。

「此方からも指摘してやる——お前……結構人とか世界とか、そういうの好きなんじゃないのか」

「態々矮小で弱い方に基準を合わせ、自分を抑え込んでまで視点を合わせ細かく舞台を作って……そこまでするなんて人の営みが好きでなければ、とつくの昔に飽きて世界ごと壊してしまっている筈だよ」

それは若葉姫色という存在がいたことが証明している。

一時の娯楽として人間社会に紛れていたのだとしても、そもそも其処に価値があるのだと認めていなければ興味すら湧かないだろう。

そして——システムの仕様として組み込まれていた支配者スキル、神性領域拡張。

神へと至るとの文言。

「あれらシステムの遊びは、そういう事なんだろう？」

「神に至る存在が出ないかなと期待しながら、長いこと待っていた」

ようは、程々に虐めて奇跡も悲劇も促進されるような環境を作り、半放置の状態で輝きが生まれるのを楽しむ、育成ゲームな気分だったのだろうな。

愛や勇気が大好き、生命の輝かしさを愛している。

そして何よりそれに魅せられている、だから見たくて欲しくて堪らない。

——己に届きうる、そんな輝きを。

「それで、適当な蜘蛛を弄くり回して放り出すのは、どうかしてると思っ
うけどさ」

「巻き込まれた転生者側としては、本当に良い迷惑だったけどね」
「けどさ、お前本当は——」

「Dさん、あなたは——」
この瞬間だからこそ、理解できたもの。

それを微笑すら浮かべながら優しく告げた。

「ただ対等に遊べる友達が、欲しかったただじゃないのか？」

静謐に投げかけた問いに、Dは絶句している。

暴かれた真実に、それこそ有り得ないとお前たちは馬鹿ではないかと冷笑している。

「——はははっ、何を言うかと思えば、くだらない」

差し出された答えを、Dは乾いた嗤いで切り捨てる。

その嗤いの空虚さが、裏に隠されたモノを無言で絶叫していると気付かずに。

「実力だけで比較するのなら、あなた達の上はごまんと居て、私と同格と呼ばれる存在もこの宇宙には複数居ますよ。」

それに必死に耐えて喰らいつくだけのその程度の力量なくせに友達？ 友達ですって?? 私を笑い殺すにしても面白くない、面白くないですよ」

沸々と膨れ上がる、憎悪の念。

今しがた戯言を言った存在に、表情の抜け落ちた顔で昏い殺意を浴びせかけた。

「そんなツマラナイ冗談でしたら、遊びを止めて殺しますよ？」

「いいや、冗談でも何でも無い」

「そうだよ、さっきので更に確信したもの」

向けられる殺意にも臆さず、私たちは穏やかな声で語りかける。

あれほどの激闘と言葉の応酬をここまで交わして、気付かないというのは無理だろう。

「だから——何度でも向き合ってやるさ」

「自分で言っていたでしょう？ 楽しませろって。魅せてあげるとも何時までもっ」

「これが、私たちがお前に向ける、全ての因果だツ!!」

「これが、私たちがあなたにお返しする、祈りだからッ!!」

そして声を合わせて、この面倒くさい捻くれ者のボツチに言ってる。

「私たちの恩返しを舐めるなよ!」

「よくぞ抜かしたあアアッ!!」

——だからこそ、想いはすれ違ったまま激しく衝突しあう。

人の形をした星々は未知にして未曾有の局面へと突入し、魂を懸けて神髓を瞬かせる。

より攻防が苛烈になる怒濤の渦中で、争いは全身全霊の短期決戦へと移行していく。

これより先は、言葉はいらない。

たった一つのことを伝えるべく、最後の舞いへと私たちは飛翔する。

最終決戦 — 白恒織星・天廻翠星・未確法則 —

激突する神という名の天体と天体——

白光に翠を纏う恒星と、際限なき闇の暗黒天体は止まらない。

特異点が大質量同士之争いに悲鳴を上げ、次元ごと震撼している。

元が同じ闇よりいでし者である白織とDは異常な共鳴をみせ、世界を圧碎する魂の波動に空間のほうが耐えきれない状況だった。

行き着く果ては自壊か、それとも諸共消滅か。

漲る戦意と轟く殺意の大合奏が、最終決戦を奏であげた。

「そしてDさん——長々とお喋りしていた訳は、さっきの事を言いたかっただけじゃない！」

「くう、らああ、ええエエ——ツ!!」

ただ長話をしているだけとは、当然思っちゃいないよな？

私たちの性質上、時間を掛ければ掛けるほど強くなるのは此方の方なんだよ。

「理解したぞッ！」

「相互進化、量子多重並列演算——もつと速く、疾く！」

直に接触し、空間に干渉し、未知法則を理解することでDの攻撃を掌握していく。

こと、探知能力はどちらも卓越したものを持っている。

白織は空間という同一次元上の面から、翠星は魂という別次元の視点から。

感知の制限を取り払い、過剰に流れ込む情報を処理するために、さらに進化を重ねていく。

身体よりも脳の神経回路が融解しそうな超速演算をしながらの戦闘。

相互進化の成長率を頭脳面に集中させて、思考と反応速度は人間の域をとつくに凌駕し、光子が飛び交う思念伝達は擬似的な量子コンピュータ化して、未知を解き明かす。

燦然と輝く太陽のように、白金の光が闇を蒸発させていく。

もはや触れぬ影を持ち上げようとするような、虚しく空回りする攻

撃では決して無い。

光の流星雨が猛弾幕を張れば、それを濃い闇が尽く消滅させる。

瞬時に懐へ飛び込み、放つ大鎌の閃撃。

闇黒の守り全てを叩き斬るが、此方の動きを読んで仕掛けられていた細剣に防がれ、反撃の鋭い剣閃が表皮を撫でる。

離脱しては撃ち合い激突しては斬り合う、そんな攻防を幾度も繰り返している。

その中で、見えてくるものがあつた。

Dが一度に展開している未知法則は数種類程度までであり、それ以上を纏うことはしない。

手を抜いている訳では無いのだろう、それが上限なのかもしれない。

そして一度切り替えれば、再度変更まで幾ばくかの時間を空ける必要があるようだ。

未知なんていうからには、もしかしたらD自身にもあの神髄は完全には扱いきれてはいないのかもしれない。

未知は未知であるがゆえに性質上、理解しすぎれば性能が落ちてしまう。

その縛りからはD自身も逃れられず、展開上限数という形で影響を受けてしまうのだろう。

電子機器の内部構造を知らずとも扱えるように、何となく出来るから使っているのか？

それが付け入る隙となるかは——Dのことだ、甘く考えるのは愚考だろう。

それ以前に、あいつの総体としてのエネルギー量が桁違い過ぎて削り切るなんて不可能だ。

普通に正面から打倒し、討ち滅ぼすなんてことは絶対に出来そうにない。

だから——

「では、こんなのはいかがでしょうか」

Dの雰囲気が変わる——

遂に遊びではなく、本気の威力を籠めた魔技が繰り出されようとしている。

目を凝らせ。

あらゆる法則を瞬時に見抜き、刹那で対応してみせろ。

「消し潰れる、反粒子装填。——連鎖・対消滅収斂爆破ッ！」

私たちの全周囲を囲むように突如発生した、正負真逆の性質である反物質。

それが対消滅反応を起こしながら莫大な熱量を生み出し、中心点に向けて空間碎震を伴いながら圧縮して殺到する。

対消滅と原子核崩壊によるガンマ線の大嵐が、檻に囚えた獲物を焼き潰そうと迫りきた。

だが——攻撃の初動を認識できている！

今まで接触してから察知できていた攻撃が、出現した瞬間に空間異常や力場変調から一瞬で解析して、不明瞭だった攻撃の姿を正確に捉えることが出来ている。

それはつまり、Dが読み込み展開している未知法則に、追いついている証拠であった。

そして忘れていないか——エネルギーの操作は私たちの十八番であるとなッ！

未知法則を解き明かしていればそれはただの現象。

散った光に干渉し再増幅、集束させて敵対者を絶滅させる極光へ。相互作用の完全操作にて運動エネルギーを留めたまま、威力まるごと後背の光刃に充填させる。

「集束完了っ！」

「——お返したッ！」

束ねた八本の光刃を発振装置として共鳴させ、惑星すら裁断する閃光として解放させる。

対消滅の威力を何倍にもしながら、輝照する白焰の奔流をDへと薙ぎ払う。

「微温いです！」

闇色の細剣が閃けば、光の大瀑布も微塵に斬られて消滅させられ

る。

Dが纏う未知法則——それを突破しても、あの細剣には届かない。あれだけはDが周囲に展開している神髄とはまた別なのか、纏う未知を解明しているしていないにも関わらず、絶対に破壊できない。

解析不能、理解不能——無理に読み取ろうとすれば逆に此方が情報量の密度で死んでしまう。

無尽の未知という闇の結晶体。

それが、Dが持つ細剣というものについて分かる範囲での正体なのだろう。

一応、細剣は不可知にはならず目視で捉えられることが幸いか。

「年季が違うのですよ、年季が」

「はッ、そんなの知るか。拗らせババアめッ！」

「ちよつと、それは聞き捨てならないですよ——つと！」

だが、まだ此方の攻撃は終わりでは無い。

さらに重ねて一つ言わせて貰おう、出力勝負なら私たちが負けていないんだよ！

「いくよ——！」

「うん、合わせるよっ」

それに未知法則をバンバン晒しているってことは、それだけ私たちも異次元の知識を得ている。

ならば今まで出来そうもなかった事さえも、それらを用いて可能になるって事である。

「死滅光・恒星面爆発オオッ!!」

自身の全身を炉心と薬室に見立て、八本の光刃に煌めく大鎌を合わせて砲身とした、全開出力の指向性を持った白金に燃え盛る太陽フレア。

余波だけでエルロー大迷宮の最下層から地表までを吹き飛ばし、太陽系全域に電磁波障害を引き起こせる大火力は、文字通り宇宙を焼き穿つ絶光の彗星。

そして閃光が駆け抜けても残留する裁断光線。

蜘蛛の巣の如く張り巡らされた光熱線が、闇を切り裂き幾条にも枝

分かれし無数の軌跡を描く。

それは空間圧縮されて次元を歪めた域にある、太陽風の灼光。

空間に絡みつき侵蝕して、発動させた術者が解除しない限り残り続ける光子の蜘蛛糸だった。

このような周辺被害を気にしなくていい場所でなければ使えない技は、星さえ細切れにして削りさる一撃となつてDを欠片も残さず灰燼にするような光景だったが、しかし——

「このくらい最上位神の争いでは小手調べなんですよ！ 銀河まるまる一つ潰した戦争と比べれば種火にも等しい！」

闇黒の細剣で防ぎながら、Dは五指を此方へ向ける。

掌に集うのは完全な闇として、光全てを呑み込みながら重苦しい淀みを外側に垂れ流している。

「虚無の彼方に落ちるがいい。——未確法則・崩壊星創造！」

ダークエネルギー シュヴァルトシルトコラプサー

顕現した、無限大重力の底無し沼。

著しく歪んだ時空間が世界に孔を開けていた、そして無間の暗闇に吸い込まれる太陽活動。

入れば二度と戻れぬ虚無の空洞が、万象を超重力で絡め取り遍く光を深淵に沈めゆく。

「邪神かく在れかし。絶対的な悪、相容れぬ敵、ならそう在るのが全てでしょう！」

儂き子羊よ、暴威と悪意の試練に抗うがいい。この程度、容易く越えてみせろッ！」

崩壊星——つまりはブラックホール。

物質だけでなく光さえ脱出することができない闇の天体が、そこにはあった。

それは異界法則も混じっているのか、異常な発生原理を構築しながらあらゆるモノを事象地平線の向こうへと引きずり込もうとする。

光を轢殺しながら迫りくるそれは、まるで世界を暴食する怪物の口腔。

食い荒らし無慈悲なまでの滅びを齎す黒孔に、私たちは既に射程圏内へと収められている。

退避可能な束縛力ではないし、閃撃を撃ち込んでも重力に呑まれるだけ——なら。

「法則解明、制御開始——重力場掌握、次元歪曲と重力極点との接続完了」

「宇宙の底から、そのままひっくり返してやる——吹き飛ば！」

Dの回避不能絶対縛鎖の暗黒天体。

それに対し、力場への干渉から圧縮し続ける重力場の底を三次元上に繋ぎ直す。

全てを呑み込むブラックホールなら、事象の地平面に消えた質量を放出する孔もあるはずではと考えられた、数学的解釈の仮定上での架空現象——ホワイトホール。

それを超常の法則で実現させて、暗黒の向こう側へと消えた質量とエネルギーを撃ち返した。

取り込まれ保存された加速度が反転し、Dへと業火の如くに叩き込まれる。

得意分野なんだよ、私にとって空間操作は。

それを彼女の演算補助も合わせ、現象改変能力に秀でている神髄も行使すれば、こんな訳の分からない事だって不可能ではない。

ああまったく……自分自身でもやっている事がトンデモ過ぎて訳わからんよ。

しかし——

『扱う未知法則が高度になってきている』

『解析が追いつかなくなったら、それこそ終わりだよ』

私たちがDの技を見て強くなればなるほど、あいつが闇より引きずり出す未知法則が、より難解で複雑なものばかりへと切り替わっていく。

ただでさえ瞬時に解析しなければ封殺されるという状況で、頭脳には甚大な負担を掛けるのに、処理能力を越えられる法則を出されれば、致命的に対応が間に合わなくなる。

際限なく威力と規模が高まっていく戦闘に、先に限界が来るのは此方側だと明白だった。

『ならどうするか』

『そうだね、白ちゃん。それなら……』

『——ああいいとも、今度はこっちに任せて。やってやろう！』
もとより、すべき事はそれしかないんだ。

なら、とことん足掻き抜いて輝いて魅せるさ。

「だから——」

「ああ、まだまだ行けるともッー！」

奇跡だって幾らでも起こしてやる。

あいつの予想を遥かに超えた、最高のヒカリつてもものを示してやらねばならない。

私たち二人だからこそその煌めきを。

「反応制御、ニュークリアシンテシス恒星内元素合成——」

「そう簡単にやられるなんて思うなよ。——スーパーノヴァ超新星爆発アアツ!!」

反応条件の不足を空間制御の加圧と重力で賄い、炭素の核融合燃焼を暴走させて引き起こした、恒星の終わりに煌めく大爆発。

解き放たれた火力は一連の戦闘にて最大級を叩き出し、虚空に燦然と光り輝く。

しかしそれでも——最狂最悪の邪神であるDの前では、燭台の火のように消されてしまう。

決して届かぬ格の差が、何度も何度も如実に示される。

きつい、けれど——

——まだ、諦めてなるものか。

冥王は徐々に戦いの趨勢が傾き始めていることに気付いた。

それは——光が弱まり、闇に吞まれ始めているという無常な事実。

「まあ……こんなものですか」

僅かばかりに失望したような表情を覗かせ、Dは独りごちる。

こういう結果になると、最初から分かっていた。

むしろ良くここまで食らいついてきたと、称賛すらしている。

けれど、数十回程度の覚醒では埋められぬほどに——差がありすぎた。

地力が違う、技量が違う、経験が違う——圧倒的上位者であるDにとつて、宇宙戦争が如き先程までの争いも、彼女たちが何処まで跳べるかというテストに過ぎない。

ゆえに惜しい。

見惚れるほど眩しくて素晴らしかったが、だからこそこの結末は避けられない。

「結局、彼女たちも求める水準には届かないですか……」

ついに失速を始めた白織と翠星の様に、深い落胆を覚えてしまう。

D自身、せめて魂と引き換えに太陽系の一つや二つ跡形もなく消し飛ばせる程度の実力が欲しいと考えているあたり、基準点が可笑しいと自覚はしているが、それでも妥協は出来ないのだ。

ここで戦いを止め和解をしてから二人の囲い込みをし、時間を掛けて更に育てていくという案も無くはない。

実際もとの計画では、システムに取り込ませた翠星は限界寸前で引き揚げる予定だったし、白織もどのような結末であれ、捕獲してから自身のペットかメイドのどちらかをさせようと、そう考えてはいたのだ。

希少な神格、二人も増員できる機会など滅多にないのだから。

けれど、そうしてしまうと今発揮されている輝きの瞬間風速というものが失われてしまう。

絶望的な状況からの逆転劇を起こしたからこそ、魅せられている面もあるのだ。

そうでなければ、彼女たちもただの神の一柱にしか見えなくなってしまう。

有象無象と、何ら変わらない星屑に堕ちてしまうがゆえに——

「せめてもの手向けです。全霊の一撃で散ってください」

必死に足掻く、みつともない姿を見てしまうまえに思い出ししよう。

輝きを曇らせて最後は無様に這いずる光景など、この二人に対する侮辱とすら思えたから。

「読込、装填、搭載、充填——」

半分に砕け散る細剣。

滲み出るように黒い闇が、一点に滴り集う。

己が振るう未知法則の神髓が凝縮した存在である細剣を半分捧げ、止めの一撃を創造していく。

最硬の神と呼ばれる龍王神でも傷を負うほどの絶技は、白織と翠星の両名を一切痕跡残さず消滅させてくれるだろう。

なに、今回は諦めよう。

己には世界の終焉まで続く、長い永い時間があるのだから。

また似たような盤面から、二人のような煌めきが生まれるのを待てばいい。

だから——綺麗なまま逝ってください。

さようなら、白織、翠星。

「我が未知たる闇の狭間へ堕ちなさい。——未確法則縮退星・ハイパーノヴァ極神星爆発」

炸裂する、未知法則の極超新星。

夥しい未知を注ぎ込んで創星された、究極の暗黒天体。

原初の闇黒に白織と翠星は抵抗すら出来ずに——無限と虚無が混じり合い、正値も虚数も混沌とした不確定の極致へと、二人は溶けていくのだった。

「大丈夫」

「そうとも、まだ私たちは——」

生命芽吹け翠の星、天地紡ぎし再誕する楽園

そして――

何も無い、真の虚無。

されど遍く全てが満ちる、森羅万象の彼方。

最果てに侵食され溶けゆく身体を感じながら、意識さえもどんどん希釈されていく。

まるで水へと溶けてしまう砂糖のように、その果てへと混じり合う。

足先から分解され、残っているのは胸から上だけという有り様。

苦痛を感じることをさえ、もはや通り過ぎていく。

視界に映るのは銀河のような光の渦だけで、その中へとゆつくりと引き込まれる。

けれど――怖くはない。

虚無の中で唯一確かな、抱きしめたこの小さな身体の熱があるかぎり――私たちはまだ翔べる。

――再構築完了。

だから、さあ――魅せつけてやろうよ、コケちゃん。

――うん、勿論。お待たせ白ちゃん。

「だから、まだだ。私たちには伝えるべき感謝ことばが残っている。

それを伝えに行こう――全ては、そこから始まったのだから」
蜘蛛の巣で石を吊るような無謀でも、やってやらなきや届かないんだから。

越えてみせよう、思惑も予想も何もかも――あいつも含めてみんな
で。

――此処からは私の番。

白ちゃんが繋げてくれたバトン、必ずやり遂げてみせるから。

さあもう一度。

天に廻れ、私たちの星――あの捻くれた寂しがり屋さんに、この想

いを伝えにいこう。

「 暗闇の世界は移り変わり、再びあらゆる花々が色彩豊かに咲き乱れる時が来る。 」

告げるは、再誕の宣誓。

現在いまを紡いでゆくため、芽吹きを祈る詩が織られていく。

「 嘆きの季節は、春の陽射しで雪解けを迎えた。

実りは芽吹き、瑞々しき翠と綾なす花束で大地は覆われる。

」

それは、誰もが生を謳歌できるようにと希こいねがわれた翠の星。

生命を繋げていく、その当たり前を大切だと思うからこそ二人の星は姿を変える。

愛情と信じる想い——その受容の環には、闇さえも例外ではない。

「 遊び戯れ手を伸ばし、多彩な花々を愛でましょう。

クロッカス、アイリス、ヒヤシンス。薔薇の蕾に、百合の花

……、そして水仙。

花冠を贈ろう愛しき貴方へと。未来あすを照らす陽光よ、優しい空

で満たして欲しい。 」

この星には様々な花々おもいがある。

どれも華々しく綺麗で輝いており、そして陰では汚さや醜さだってあるのも理解している。

星を壊したのもそんな自分勝手や不条理であること、嫌いだけど認めよう。

でも決して、マイナスだけを見ていいものでは無いのだから。

そんな愚かさでも、この世界へと繋げ——今の世界なりの綾なす煌めきがあるのだから。

「 ならば愛しき、 ”真理” を教えてくれた翠の乙女よ——貴女を守る太陽ヒカリとなろう。

煌めく真実最高の未来を、みんなと共に織り上げて。

神々すらも憧れるような恩返しあしを、悠久の果てまで紡いでいきたいから。 」

だからこそ、守らせてくれ。

道理、理屈？ そんなものに推し量られてなるものか。

正しいだけの正論や、感情だけの否定も、どちらも望んでいない。私たちがそうしたいから、やる。

けれど、納得できる結末になるのなら幾らでも主義主張など曲げてやろう。

なぜなら――

「うん勿論、喜んで――私を照らす、白き陽だまり。

誰もが皆、心から愛した者へ。麗しき秘儀は森羅万象に花開く。」

だって、一人で生きていても寂しいじゃないですか。

どんな細い縁故や、間接的な関係でも、人は人と繋がっているからこそ楽しいのだろう。

語り合い、想いを共有するのは、大切だから。

理解や衝突もまた、他人がいるからこそ――だから闇にも私たちが伝えたい。

「――我らが星に祝福があらんことを。」

ゆえに今こそ、もう一つの星を描きだそう。

白き恒星は世界を照らして、闇さえ包む翠星が飛翔する。

そう、二人の願いは――

「エッセンティア 神髓――《エ生命芽吹レけウ翠シの星、ア天地紡ミぎし再誕テする楽園ア》」

想いを伝え合える、愛しき世界。

光も闇も抱きしめる天廻翠星が、夢幻の果てより感謝を告げるべく再誕する。

「……これ、は？」

冥王は己の身体を包んだ光に驚愕をあらわにする。

虚無へと集束していくはずの闇の縮退星が、止まっている。

それどころか——暗黒の天球へと翠が広がり数多の煌めく花々が闇と調和しながら、新たな星となっていた。

破壊の嵐は、もはや何処にもない。

昏い闇はやがて海となり、舞い散る花びらが銀河のように特異点へと広がっていく。

そして守護星のように星を背にして、白織と翠星両名とも五体無事の姿で佇んでいた。

いや、少し違う——互いの立ち位置を変えた状態で、翠星が両手を重ねて祈り、白織はその背後で両の手指に翠光を絡ませて静かに瞼を伏せている。

纏う光の色彩も、強烈な白光から全てを包み込むような翠緑の燐光へと様変わりしていた。

ただ穏やかで、暖かな世界。

二人が示した宇宙が、彼女たち全員を抱擁するのだった。

「あの一撃を、あなた達はいつたいていどうやって——」

確かに、白織と翠星の二人は闇の彼方へと消えたはず。

その感覚に間違いは無いというのに、今起きている光景は予想を遥かに超えた現象だった。

「——天廻翠星は再誕する」

二人は誇るでもなく小さく語る。

紡ぎ出した能力は、なんのことはない——白織の神髄と同質のものである。

しかし、特化した方向性が極端なものになっていた。

干渉性、解析能力のみに全特化。

今の二人はそれ以外の素質を全部捨て、代わりに万象への操作編纂に全ての力を集約していた。

これこそ、報恩譚の本当の姿。

恩返しという双方向の願いだからこそ適う、同一神髄のメインサブの切り替え。

結果生まれたのは事象の織り直し、世界を調和へと導く優しさの翠光だった。

「お前に勝てないのは、初めて出会ったときから分かりきっていた。だから、倒すという選択肢は最初から捨てていたよ」

「私と白ちゃんの神髄は表裏一体。気付きさえあれば戦闘中でも到達点を描き出せた。」

なら私たちがすべき事は、死なないこと——ううん、死ぬとしても一言告げる機会を作ること。だからこうして、この力を組み上げたんだよ」

白織の力が戦うためにあるならば、これは共に生きようと告げるための力だった。

——天使とは、世界が生み出した防衛機能だと言われている。

ならば僅かなりとも、進化によつて天使の因子を継承していた翠星は、世界そのものと接続する切符を有している事に他らない。

女神サリエルから天、カメラの血脈から龍。

元は人間であったことから人、魔物に生まれたことから怪物と植物。

そして白織は、太源たるDから魔と闇——そして蜘蛛という地で生きるモノ。

それらの断片を受け継いで混ざり合っていた、翠星と白織。

幅広き因子をその身に宿しているからこそ、二人は世界そのものへと昇華を果たしていた。

だからこそ存在を同一化する事で、世界が持つ力の一端を借り受けられる。

その力は、発現された世界の崩壊という現象を逆に塗り潰して、世界の再誕という概念で押し返すほどの修正力を発揮していた。

揺蕩う広大な翹翼。

それは生命溢れる星のように翠に蒼に白金が走って、穏和に煌めき

を魅せる。

「でも本来なら、それらは眠ったままの因子で、そんな事は出来なかった。けれど——」

「そこはほら——足りない部分は私が補ってあげて、欠けてる部分も増幅してあげれば良い」

二人はなんでも無いように言うが、それがどれほど埒外の行為であるのか——

永く生きて知っているからこそDは愕然とする。

「ですが、それでも世界を構成する最も重要な要素が不足して——まさか!？」

たとえ二人が生まれからして複数の因子を内包するキメラだとしても、それだけでは世界と合一するには到底足りえない。

なによりこの宇宙を代表するモノとは、神と相似であり真逆の存在ゆえ——

「今のコケちゃんはシステムから解放された状態だけど、接続は切っていない。つまり——」

「その繋がりからシステムを経由して、『星』とも共鳴しているのですっ——」

次元を隔てた向こう、星と密接に繋がるシステムは高らかに共鳴し唸りを上げる。

たとえ今は空席となっても、主となった者には肅々と意思に応える。

それにより、あの星に生きる全ての生物の因子が、二人と合一を果たす。

達成される、世界との共鳴と調和。

それを前にして、Dは完全に想定を越えられたのだと悟った。

「くは、はははは……あははははははははははははっ!! 有り得ないですよ、そんなの!」

髪をかきあげ、込み上がる歓喜が止まらない。

顔を片手で隠したままのDへと、二人は言葉が続ける。

「私たちが出会えたのは、色々思うところは有るけれどDさん、あなた

のお陰だから。

ねえDさん。あなたから貰った翠星って名前、実は結構気に入っているんですよ。

「だから、私たちとあなたで今度は——友達になって、みませんか？」
「あなたが輝きを見たいと言ったこと、まあ分かんなくてもない。」

そうしたものが素晴らしいというのも、短い蜘蛛生でも良く知っているし見せつけられた。

けれど——私には分かるんだよ。

あなたの真の願いとは、こんな己と対等にぶつかり合える誰かだった。ただ子供のように本気で遊び合えるような、そんな相手が欲しかった。

私からも言うぞ——、一緒に遊んでみないか、この悪友がよっ！」

翠星は、優しく柔和な微笑を湛え。

白織はニカッと茶目つ気じみた笑みを浮かべるのだった。

「はは、ははは………どうして私を友達などと？ 普通受け入れることなど出来ないはずでは。私はあなた達を地獄に叩き落とした張本人であるというのに」

曇りなき清心の言葉に、Dは戸惑いを隠せない。

なぜなら様々な因果は絡まっているものの、全ての中心点である諸悪の根源は己なのだから。

直接的に間接的に行った、他者の気持ちを考えない非道は数知れず。

代理の駒として転生者たちを用意したのも、ただ良い機会だっただけ。

それら全て、己の愉しみだけのために玩弄したことで——このような存在に、普通友達になろうと思えるはずが無いというのに。

「そんなの——」

「——たった一つの理由だからだよ」

犠牲者でありながら、友情を願う二人に迷いはない。

嘆きと傷を乗り越えて手を伸ばせる訳を、寂しがりやな冥王へ向けて語りだす。

——この世界に生まれ落ちたこと。

——苦楽を共にした旅と冒険をしたのも。

——自分たち二人が、翠白の報恩譚という悟りを得たのも。

——そう、全ては此処から始まったのだから。

「私たちを出会わせてくれて、ありがとう」

一片の曇りなき感謝が、冥王の胸を衝く。

運命によって紡ぎ逢えた絆は、あなたのお陰だったのだから。

「盛大に惚気おって……」

「お？ 羨ましいかい？ 独り身さん？」

「チツ——ええ、割りとガチで苛立ちました」

悪態をつくDに、やたら仲の良さを見せつけるようにして煽る白織。

それにますます苛立ちを募らせるが、きつと白織とDの関係性はこういうものなのだろう。

「はい、そこまで。白ちゃんも煽らない」

そこで仲裁に入る翠星。

ただ……仕方ないなあと微笑しながら白織を止めるせいで、余計に煽っているような気がするのは気の所為だろうか。

「ああ……これはもうお互い戦いなどという雰囲気ではありませんね

——ええ私の負けです」

どこか寂寥を滲ませながら、冥王は静かに呟く。

最後は、誰にも聞こえないように喉の奥で転がしながら。

「でも——決着はつけねばなりません。白織、最後に一つお相手願いましょう」

「ああ勿論。私も、あんたとは一度こうするべきだと思っていた」

折れた細剣と光の大鎌を構え合う、Dと白織。

けれど、それだけ。

魔術も神髄どれも使用する気配を見せずに、ただ相対する。

「いぎ——」

「これで——ッ」

共に惹かれ合うように、自らの脚で駆ける。

これが正真正銘、最後の激突とすべく——死闘の終わりが今決される。

——なあD。

あんたの孤独、狂おしいほどの虚しさが、今ならよく分かるよ。そして今、とつても楽しんでるってことも。

瞳にさ、ほんの少しだけ熱が灯っているの隠せてないぞ。

あんたが退屈になったら、また一緒に遊んでみよう。

ゲームだって、一人より三人のほうがきつと楽しいから。

だから——因縁はこれでおしまいだ。

細剣がDの手より弾かれ宙を舞う。

刃渡りが短くなったことで間合いがズレた斬撃は、いとも容易く大鎌に絡め取られた。

そして、白織は大鎌を放り捨てて拳を握り込む。

「あんたさあ——ッ」

懐深くまで踏み込んで振るわれた一撃。

鋭い風切り音を纏い、天へと昇る。

「ボッチ拗らせて、傍迷惑な事してんじゃねえ——よおッ！」

「——ガハッア!!」

戦闘の幕引きとなる、拳の一撃がDの真芯を捉えた。

魂を破壊する効果も、異界法則も乗っていない、ただの物理攻撃が炸裂する。

いつだってそうさ。

馬鹿やったり狂気に堕ちてる奴を正気に戻させるには、一発思いつきりぶん殴ってやらねばならないってこと。

そんな単純な理屈で此処まで来ただけなんだよ、私たちは。

万感の想いを籠めた拳が容赦なくDを吹き飛ばし——彼女たちの決着となるのであった。

天廻翠星は再誕する

——地上での戦いが終わって半日ほど。

深いエルロー大迷宮を下った先システム中枢の前に、大厄災に立ち向かった人たちが合流をして勢揃いとなっていた。

「いい？ あの場所で破壊行為は厳禁だからね」

扉の前、パペットタラテクトのアエルに背負われたアリエルが告げる。

その言葉にシュレインたち、ソフィアにユーゴーに、フィリメスとハイリンス、教皇ダステインやロナントらが頷く。

更に奥には疲れが見える様子のギユリエと、あいも変わらず無表情なサリエルの姿もあった。

エルロー大迷宮は、かつてないほど静謐に包まれている。

青息吐息の呼吸と靴音だけが響き、半日前の狂騒どころか生き物の気配すら何処にもない。

翠魔がいた痕跡を示す灰が床一面に広がるだけで、肌寒い空気が満ちるだけだった。

「それじゃあ、開けるよ。——リエル、サエル、ファイエル」

手の空いていたパペットタラテクトの三姉妹が、隙間の空いている扉を押す。

見た目は女兒の三人だが重厚な扉を苦もなく軽々と動かしていき、数秒経って数人並んで通れるほどの道が開かれた。

その様に、しかし驚くような者は誰もおらず、無言のまま彼らは歩みを進める

大厄災は終わった、けれど中枢での顛末はどうなったのか——

一人向かった白織は勝ったのか——

そして囚われた翠星を救い出せたのか——

彼らには何一つ分からないからこそ、慎重に進んでいく。

なにせ、ともに戦える者などほとんど居ない。

翠魔と戦った全員が反動で倒れる事態となり、半日は休息したもののダメージは以前重く彼らに押し掛かっている状態。

もし戦闘にでもなれば、全滅もありえる。けれど、確かめなければならぬ。

この戦いの結末を――

そして――扉の向こう側にいたのは。

「待ちくたびれたよ、アリエル」

「アリエルさん、みんな――ただいまっ」

穏やかに脈動する魔術陣の下で身体を寄せ合い佇む。

白織と翠星の二人が、皆へ微笑みを返した。

――少し時間を遡り。

白織と翠星、そしてDとの戦いに決着がついた直後のこと。

「――あいたたた。割り手加減抜きで思いつきり殴りましたね？」
殴られた顎付近を撫でさすりながら、起き上がったDさんは平然と話す。

指を一つ鳴らせば、裂けたり焼け焦げた服も元通りとなって、争いの痕跡は全て消えていた。

この位階の神格にとつては、物理的な損傷など些事ではか無いとでも示すように。

「仮にですけど、あのまま殺されていたらどうするつもりだったんです？」

一応良いもの観させてもらった礼として、星の再生は責任持って完遂させるつもりでしたけど」

そのように、Dさんは今思いついたといった様子で疑問を口にする。

それに私と白ちゃんは、やや気まずそうに遠くを見ながら喋りだした。

「……わりと考えてなかった」

「なんていうか、ノリで動いていた感じかも……」

二人して肩を落とすし、呻きを洩らしながら自省する。

システムは、自分たちがいなくても星の再生は始まるようには設定してきた。

自分たちが倒れたとしてもあの星が未来を歩めるように、成すべきことはしてあった。

けれど勢い任せだった点については、私たち二人とも否定はできないのだった。

「まだまだ未熟ですnee——ですが、それも良いでしょう」

——永く生きすぎると、そういった感覚も忘れてしまいかねないのですから。

そうDは思ったが、口にはしなかった。

擦れ果てた古き神々どものようになるより、こちらの純真すぎる有りようのほうが遥かに良いのだから。

忠告で水を差すのは、きつと今でなくとも構わない。

「さて、これを渡しておきましょう」

Dさんは掌に水晶で出来たような細長い鍵を召喚すると、それを私へ投げ渡した。

「システムの上位管理者用の鍵です。それがあればシステムを自由に出来るでしょう。

もうあの星に私が関与する必要もなさそうですし——あなた達に託します」

それを矯めつため眇めつすが、私は手中で確かめて。

白ちやんはどういつもりだとDさんを見据えた。

「良いのか？」

「ええ勿論。余計なお世話だと蹴つてもいいですが、あの星は体裁上私の傘下ということで、Dの名前を使っても構いませんよ。それで木っ端の神が喧嘩売りにくることなど無くなりますし。」

まあ、今のあなた達なら返り討ちにするのも簡単でしょうが」

「……とりあえず、まだ知らないことだらけなので保留でも良いですか？」

「………私ら冥界一派から教育係を派遣しましょう。まずはそこか

らですかね」

一旦考える時間が欲しいと呟けば、Dさんはあっさりと理解を示しトントン拍子で話が進む。

清算が済めば恨みっこなしとばかりに、壮絶な戦いの後であるにも関わらず三人の空気は気安いものだった。

「それと——そのままでは元の世界に戻るべきでは無いですね。力が強すぎて世界が壊れます」

「は？」

「え？」

——白織と翠星どちらも、最上位神格であるDとの戦闘で驚異的な成長を遂げた。

しかし、そのせいで素の状態では世界に掛けてしまう負荷が非常に重くなっており、ただ立っているだけで三次元上空間から追い出されてしまう存在となっていたのだ。

上位の神格が、世界に対してあまり直接的に干渉しないのはこのため。

より高次元に近い場所か固有の異空間でなければ、力を制限しないと世界に孔が空く。

ようは世界の防衛本能として、極まりすぎた神は特異点へと落としを排除してしまうのだ。

何も無い、虚無の次元へと放逐されてしまう。

システムという目印もあり空間能力に長けた白織もいれば、帰ってくることで自体は可能だろうがまたすぐに放逐されてしまうのが目に見える。

「ですから抑え方を教えます。私が若葉姫色として過ごしていた方法です。

とりあえず、見れば分かるでしょう——こうやるんです」

説明もそこそこに、実技を見せるDさん。

己の力を内界に封じて、人などに偽装する術式——というより生理的機能だろうか。

神が脆い世界の上で暮らすための本能的な技を、Dさんは私たちへ

と伝授した。

「理解は、したけれど……」

「これあれだな——着膨れするほど厚着しているのに等しい窮屈さを感じる」

原理としては、宇宙服でも着込んだようなもの。

ただし内のモノを外に出さないという意味で、保護する対象が逆ではあるが。

次瞬、神髄に覚醒してから私たちが常態で放散していた桁違いの圧力が弱まり、並外れた容貌を除けばギリギリ人の範疇らしい気配へと落ち着いていた。

「まあ、慣れですよ。じきにそれは神髄のオンオフという形で調整できるようになるでしょうし。」

——これで伝えるべきことは伝えました、後はあなた達次第。

どう生きるのも、どう選択するのも、あなた達の自由です。それが勝者の権利ですから」

Dさんが腕を振ると、亀裂が走り砕けだす闇の特異点。

役目を終えた舞台が、厳かに幕が閉じられていく。

「では、近い内また会いましょう。それまでどうかお元気で——私の友達よ」

Dの足元に魔術陣が広がり、その身体が霧散していく。

薄れゆくなか消え去る直前に、彼女は作り物ではない自然な笑みを浮かべ——

「あつ、そうそう。さつきまで神妙に語った台詞ですけれど——冗談に決まっているでしょう?」

その台詞に、私たちはキョトンとした顔となる。

「あはははっ。もっと私を楽しませたら、本音の一端を教えるのは吝かではありませんよ。」

またいつか——。今日はあなた達の「勝ち」なのですから」

微かな光を残しながら、友を得られた闇の冥王は満足げな表情で去っていったのだった。

「天邪鬼め」

「でも、いいんじゃない？ そんな素直じゃない友達が一人くらい居てもさ」

「——まあ、そうかもね」

そうして——

「終わったよ、みんなっ」

透き通った笑顔で、私たちの戦いの終わりを告げるのだった。手にあるのは小さな鍵。

私たちの勝利の証であり、紡いだ絆の証でもある。

それを指で輪郭をなぞりながら、私は思う。

Dさんという新たな友達は、捻くれてるし面倒くさい気質をしてるし、平気で人の傷口抉るような皮肉屋で、お世辞にも性格が良いとは言えないけれど——

そんな人でも真の望みについて理解しているのなら、なんだかんだ付き合えると思う。

この恩返しにの気持ちに嘘はない。

あなたも環に入っているのだから、応えてみせるよ。

そして——この鍵と私たちの力で、この星の病魔はついに晴らされる。

傷ついて弱々しい星の脈動が、今の私には良く分かってしまう。

こんな状態で、私たちを辛抱強く見守ってくれてありがとう。

その恩を、もうすぐ返すから。

だから、一秒でも早く星の再生を始めたいとは思いうけれど、万全を期すためにアリエルさん達を待っていた。

その理由は——

「ダスティン教皇、オカ先生、シユレインさん、カティアさん、ユーリ、アサカさん……

支配者スキルを獲得した皆へ問いかけます。

この場所この瞬間には、システムが稼働されてから一度たりとも成されなかつた支配者権限持ち全員が揃っています。——そう、システムの行き先を決められる資格を持った者たちが」

傲慢、強欲、暴食、嫉妬、憤怒、色欲、怠惰。

七大罪。

謙譲、救恤、節制、忍耐、慈悲、純血、勤勉。

七美德。

その全てが、今揃っているのだから。

「だから、聞かせて欲しいんです。

この魂を削り続ける輪廻を止め、傷だらけの星を癒やすことに賛同するかどうかを」

本当は、今手の中にある鍵を使えば、そのようなことを無視して実行できる。

もしくは私と白ちゃんが二人がかりでシステムに干渉すれば、強引にでも実行できるだろう。

けれど——どうしても聞くべきことだったから。

この星にて共に生きる生命の一つである、彼ら彼女らにも。

「私らはそのために集ったんじゃないのかい？　今更じゃないか、なああそうだろう？」

「そうね」

「うん、僕も同じさ」

「俺は途中参加だけだよ、んな水臭いこと言うなよな」

「お嬢様のお望みのままに……ですが、私個人としても信念を持って選択したことですのぞ」

アリエル、ソフィア、ラース、ユーゴー、メラゾフィス。

魔王の願いのもと、世界を敵に回す覚悟で歩んできた仲間たちが苦笑しながら言う。

「短い旅で怒濤の勢いで真相を知ったけれど、俺はこんな仕組みは間違っている、今も変わらずそう確信する。死を求められるなんて狂った世界に他ならないから」

「そうですね。わたくしとしましては、システムが無くなれば発生

するでしょう影響の予想図に頭が痛くなりそうですが」

「たしかに私も心配。だけど神言の、システムの本懐を遂げることのほうが、大事だと私は思う」

「あたしは……まあ、とくに言うこと無いけどさ。やっぱ変かもって、それだけ」

シユレイン、カティア、ユーリ、フェイ。

世界に選ばれた勇者として、苦難の渦中で目の当たりにした真実から導き出した彼らの答えは、システムを終わらせること。

それを告げる彼らは、今でも迷いこそあれ自らが正しいと思う道を、確かに選択していた。

「……これは、生徒のみんなが成し遂げたんです。だから先生は褒める事こそあれ、叱ったりなどしません」

「ユリウスの弟が選んだ道だ。応援してやるのが筋だろう」

フィリメス、ハイリンス。

転生者たちの先生として、二代渡つての勇者の仲間として、二人は背中を押すだけ。

ただ誇らしきだけが教導者たちの胸を占める。

「それって私もよね。なら答えはイエスよ。——クニヒコ、一つ我が儘を言ってもいいかしら」

「おう——……分かった、なんだ？」

「一緒に暮らさない？ 剣を置いて、どこか静かで争いのない田舎で」

「そっか、アサカお前は……なら俺の復讐も終わっちゃったのか。

……ああ勿論だ、俺、こんな奴だけどさ、一緒に生きていこうぜアサカ」

怠惰の支配者であるアサカは、真剣な声でクニヒコに秘めていた想いを告げる。

……そのようなスキルを獲得できる時点で、アサカの本質は分かっ
てしまう。

復讐に走り続ける馬鹿な男に、必死で追い縋っていたゆっくり歩き
たい女。

その彼女が、今男に対して足を止めようと告げていた。

初めて聞かされた本音に、クニヒコは瞠目する。

その言葉を隠された意味を深く噛み締めて、クニヒコは心の天秤が一方に傾いたのを悟った。

復讐の人生より、アサカの方に傾いた。

気付いたとたん、泣いているような笑っているような顔で旅路の終わりを理解し、彼は寂しげに返事をしたのだった。

「スー」

「……………」

「スー」

「……………兄様」

「俺は、スーの気持ちに応えられるとは言えない」

「ッ！」

「けどっ、もう一度やり直したいと思っている。その手を、伸ばしてくれないか？ スー」

「兄様は……………ずるいです」

戦いが終わって時間が経ち、躁状態から普段の不満げな顔に戻っていたスーレシアは、ひたすら無言を貫いていた。

だけど兄であるシュレインの幾度の呼び掛けに無視を決め込め続けるのは不可能で、返事をしたものの告げられたのは聞きたくない言葉。

それに激昂しそうになったが、続いた言葉で踏みとどまり、しぶしぶ了承して手を重ねた。

やり直したい——そう願っているのはスーレシアも同じだったから。

「——私の番ですかね」

「ダステイン教皇」

「教訓を、継承を、希望を残してくれると信頼しております。すでに私の役目は終わったのです。ならば未来に託してみるのも一興でしょう。——世界を、人を、よろしく願います」

「……………託されました」

見た目の老齢さよりも長く生き続けてきた殉教者は、ここが告解室

であるかのように己の内側に沈み込んでいた罪の中から、始まりの誓いを思い出していた。

微笑という仮面は剥がれ、快活な笑みが灯る。

誇りと信念を持って、人を導いてきた生粋の指導者たる自負。

その終わりは後進に道を譲って託すものなのだと、ダステインはようやく気付けたのだから。

「思えば、密度の濃い出会いだったな。白織、翠星よ——本当に感謝する」

「改めて感謝を、二人とも。あなた達のお陰で、見事なハッピーエンドとなりました」

ギユリエとサリエル。

その二人は、肩が触れ合いそうな距離で並んで立っており、白織と翠星へ慈愛の籠もった視線を向けていた。

文句など、何処にもない。

不条理だらけで諦めが滲んでいた現実には、風穴を開けてこの結末を掴み取ったことが喜ばしくて仕方がない。

辛い世界を見続けた者として、この幸福は得難く尊いものだと、深く知るのだから。

「……ありがとう、みんな」

「コケちゃん」

「うん、始めよう——みなさん、支配者権限の鍵を」

私は宣言する。

そして支配者スキルを持つ人たちが、その手に小さな結晶の鍵を生み出す。

それらは宙に浮かび、私と白ちゃんの周囲をゆっくり旋回します。

胸の中で鼓動をならす眷属の魂たちが、祝福を謳っていた。

大厄災が止まった瞬間、帰還していた私の家族。

その代表たる24の眷属たちは光の妖精となって現れ、悪戯めかして笑い円を組んで手を繋ぐ。

「システムの解体——いいえ、システムの完全再編を開始します。」

星はこれより再生される。

けれど、生命と社会と世界を守るため、ステータスやスキルはゆつくりと消えていくようにし、新たな秩序へとこの世界を移行させるために」

全ての鍵が集まり、起動しはじめる星の再生。

Dさんから貰った上位管理者権限を掲げ、それに十四の正規の支配者権限を結合して実行する。

「白光は天に在りて、世界を見守り」

「翠の大地は、これからも宙を廻つて続いていく」

紡いでいく言霊と共に、溢れ出す光。

翠白の星々が二人を包んで、天使の輪のようにクルクルと廻つてゆく。

私は白ちゃんと手をつなぎ、もう片方の手でシステムへと触れる。

白ちゃんも同じように触れて、私へ微笑んだ。

さあ、始めよう。

貴女と共に、果てなき悠久の宙で、一緒に暮らす為に。

今こそ黄泉還れ。

糸を靡かせ、天を廻る私たちの彗星よ。

翠白の報恩譚を、私達みんなで紡いでいこう――

天廻翠星は再誕する。

――システムをオーバーライド。

警告：権限が不足しています。

――上位管理者の権限、確認。

――支配者権限、14種全てを確認。

――掌握成功。

対象：翠星を、最上位管理者に設定。

対象：上位管理者Dの権限を剥奪。

対象：白織を上位管理者に登録、権限構築。

対象：管理者サリエルの権限を再設定。

対象：管理者ギユリエデイストデイエスの権限を再設定。

——対象：Dをゲスト登録。

システム再構成。

転生システムの終了処理。待機中の魂の解放成功。機能の完全解体。

ステータスシステムの停止処理を開始。

スキルシステムの停止処理を開始。

警告：ステータス・スキルの剥離時に魂が崩壊する危険性アリ。

停止処理を保留。待機状態へ移行。

星再生プログラムの起動開始。

割込処理：全システムオーバーライド。

アップデートを検証中です……………完了。

——システム再起動。

接続：外部動力として、翠星、白織を設定。

共鳴システム起動。陽恒炉、エネルギー供給開始。

新たな術式《生命芽吹け翠の星、天地紡ぎし再誕する楽園》を起動開始。

実行：星の再誕プログラム。

進行率1%……………4%……………進行中です。

実行：ワールドアナウンス：

《ワールドクエストクリア 世界は救われた》

実行：ワールドアナウンス：

《永きにわたる贖罪は終わった。傷付いた星は再誕し、生命の翠に覆われる始まりに祝福を》

奏でられる再誕の息吹が、星へと巡りだす。

輝き煌めく、翠白の光の帯。

優しい光がエルロー大迷宮より、この星全てへと苔むすように広がり包み込んだ。

この光を見ているあなた達へ、どうか気付いて欲しい。

私たちは、この素晴らしい星と共に生きているのだから。だから、少しだけでも自然に感謝をしよう。

そして身近な人に、恩返しをしよう。

そんな些細なことで、世界はきつとより良くなるのだから——私たちの旅路は、そんな繋がりによって始まり、これからも続いていく。

ずっと、ずっと、ずっと——悠久の果てまで紡がれる。

「白ちゃん」

「なに？ コケちゃん」

「一緒にいてくれて、ありがとう」

「これからも一緒だよ」

屈託ない想いを隣にいる愛しい人に告げれば、貴方は優しく答えてくれる。

それに私は、照れ笑いをしながら表情をほころばせた。

「……そうだねっ！」

「うん、だからさ」

大切な人よ、貴女のお陰で私は強くなれたんだ。

だから、この抑えきれない喜びを共に感じていききたいと強く思うから。

「ずっと、これからも——よろしくねっ」

キゅっ指を絡めながら、手を重ねる。

私たちは花が綻ぶような笑顔で、そう見つめ合うのだった。

エピローグ

時は変わらず流れ続ける。

昨日も、今日も、明日も——星は廻っていく。

闇に包まれながら、そして光に照らされて、私たちを乗せながら終わりなき旅路を続けていく。

ただ、自然の在るがままに。

健やかに生き生きと、星の鼓動は力強く巡っていた。

もうこの星は、星の半分が崩壊したままな死にかけの星では無くなった。

砕けた地殻は一つとなり、新たに生み出された大陸と海が、星の全面を覆っているのだから。

星はついに、再誕を遂げたのだ。

かつて小さな大陸二つにしか生存圏が許されなかつた姿を知る者としては、今の星はとても広大な新天地が手付かずのままとなっている。

そのほとんどが岩だらけで生き物がまだ居ない荒野だとしても、長い永い時間を掛ければ其処も生命の気配に満ちていくだろう。

可笑しな宿命や贖罪を課されることもなく、争いを強要されることも無い。

そのためにどれだけの生命が失われ、どれだけの魂が磨り減り、そして消滅したのか言うまでも無いこと。

余計なことは語らない。

なぜなら彼ら彼女らは、魂まで捧げた英雄達なのだから。

だから私は、ありがとうとだけ告げる。

あなた達のお陰で、このときを迎えられたことに感謝を捧げます。いつ崩壊するかも分からぬ、星の滅びとは無縁のままに。

当たり前生まれて、当たり前前に死ぬ。

きつと、生命本来の姿はそんなちっほけなことで良いのだから。

けれど、あの日から季節が一巡りしても、私たちの仕事はまだまだ終わっていない。

新米の神様で、こんなちんちくりんなのに地母神となったわたし苔森真理こと翠星は、今日も星の各地で奇跡をやり遂げた者として日々動いております。

この星の住人の一人として、私たちが勝ち取った未来と共に。

「よし、これで此処の分は完了」

腐葉土を山型に掛け戻しながら、軽く叩く。

その小さな山の頂点には、可愛らしい苗木が青々と枝葉を伸ばしていた。

周囲を見渡せば、これと同じような光景が幾つも作られてある。

様々な種類の樹木や草葉などが、荒廃したままの大地へと植えられていた。

「いつもの植樹？ 今日くらいは休んでもいいのに」

「まだまだ、此方側の大陸は生物が住むには厳しい環境だからね。少しずつ改善していかないと。それに転生してからは、やる暇がなかったけれど土いじりは趣味だったし。字面通りの大地造りテラリウムと思えばむしろ楽しんでるよ」

植物だけではなく、土と水も撒いていく。

微生物などもまだまだ充分とは言えないので、此方側の環境調整は凄まじく面倒。

だけど、とてもやり甲斐のある作業だった。

此処は、便宜上私たちが新大陸と呼んでいる場所。

外洋航海の技術も失われた今の人類では、あと数十年は到達するのに掛かりそうな、遠い距離の場所でもある。

海域は水龍の縄張りだったことから、造船技術も内陸や河川のみで使う小型中型だけに衰退しており、人類が海へと進出するだけでも、まだまだ先の事になりそうだ。

「しかしまあ——星を救って、はいめでたしとは行かないのが現実の世知辛さかな」

「そんなものだよ白ちゃん。物語はハッピーエンド後も登場人物に

とっては続きがあるのだから、私たちも続きを生きていくの。それに——個人的にも世界を変えた責任として、変えられる権利を握っている者として、少しでもこの星を良くしたいからね」

土や泥に汚れようとも嫌な顔せず、一つずつ一箇所ずつ丁寧に。

星と同期していれば、未だボロボロな状態が分かかってしまうからこそ、居ても立つても居られないから、だから私は今日も今日とて緑化活動に励んでいる。

「接続——座標■■■■の環境予測」

システムあらため惑星環境調整システム、エレウーシス天廻翠星。

ここ一年で不要な機能を取り払い、今の私たちのために改変した新たなシステムから、この土地が今の状態からどのような植生や気候となるのかを予測演算する。

それを確かめて、私は頷いた。

「……………うん、大丈夫そう。時間が経てば此処も翠に覆われるよ」

「コケちゃんの神髄でパパツと出来れば、こんなに苦労しないんだけどなあ」

「仕方ないよ。魂の籠もっていない無機物とかを変えるならともかく、生きているモノを書き換えてしまうのは色々問題になるから。生命力を増やし成長を早めてあげるくらいしか出来ないって」

実際、苗木がほんの数ヶ月で巨木に成長できる生命力がエレウーシス天廻翠星より常に供給している。

当然ある程度軌道に乗れば徐々に減らしていき、自然に環境が循環するようになるのが最終目標ではあるけれど、今はこうして地道に自然環境の復活を私たちは目指しているところだった。

それに、既に自然が出来上がっている場所もある。

環境調整が完了した地域では、移住させて来た魔物と動物の、大自らの楽園となっていた。

新たな土地で新たな生態系が築かれて。

その環境に適応した魔物や動物たちの営みが生き生きと紡がれ、生命と自然の流転は確かに回り始めていた。

「それよりコケちゃん。もうすぐ時間だよ」

「え、もう？ ……本当だ。教えに来てくれてありがとう、白ちゃん
確認してみれば、だいぶ時間が過ぎていた。

この後の予定を考えれば色々準備が必要なことから、もう戻らな
いと間に合わない時間。

土汚れを落として、着替えてと——皆を待たせる訳にはいかない
し。

「……………それじゃあ、また後で……………ね」

「ん、ああ…………」

少し頬が赤くなりながら私は転移で、今の家へと帰るのだった。

一人その場に残る白織は、周囲を見回す。

「まだまだ、これからか」

星も、私たちも——

万里眼でざっと世界を観察すると、自身も帰るか白織は転移を発
動させるのであった。

エレウシス
天廻翠星。

私とコケちゃんが中核となった新たなシステム。

それについて、太陽神などという分不相応な肩書きを得てしまった
私、白織は考える。

それは私たちの性質と能力が影響してなのか、少し変わった法則が
この星へと適応されるようになっていた。

これはステータスやスキルとは、まったくの別のモノであった。

なにせ、そちらは現在機能停止中だ。

最初の計画で予定していた強制回収こそしなかったものの、今ではステータスとスキルの機能は徐々に衰退していくだけの、過去の遺物になりかけていた。

既に取得しているものは変化しないけれど、新規での獲得や成長は出来なくなっている。

システムが今までのように魂を管理していないのだから、当然スキルなども順次剥がれていく。

残ったとしても、当人に適したスキルなどが一つか二つ、システム無しでも魂が覚えているから使える程度だろう。

百年後を目処に、魂に貼り付けられた術式は完全に消滅していく。

そして新たな法則はシンプルに言えば、恩返しをすると上手くいく世界と言える。

思い遣りや感謝など、他者愛に属する気持ちを抱くと、健康的になり能力や才能を発揮しやすくなるという、他を想う者ほど報われる世界。

これは人だけではなく動植物や魔物にも適応される、この星に住む全生命に与えられた祝福。

別に、そうなるように法則を弄った訳では断じて無い。

気がついたらそういう仕組みが組み込まれていて、天廻翠星エレウーシスの基幹フレームと一体となっている以上、私たちでも取り除いたり停止したり出来ない機能である。

……これがもし害あるものだったのなら再びシステム解体をしてでも停止させただろう。

けど、現状問題は起きていないし方向性もそう悪くないものだから、出力を制御するだけでそのままに留めていた。

じきに旧来のシステムは、こちらの法則に置き換わる。

まだまだ荒削りで微調整していく必要はあるだろうけど、今後はこの法則がこの星を満たすこととなるだろう。

そうなるのは確実だ。

実際——星にとっても人の世にとっても、この程度の些細な恩恵で

充分過ぎる。

殺し合うことが目的の血腥いシステムよりも。

逆に何でも願いたい事が叶ってしまう魔法のランプのような代物よりも。

そんな極端な世界だと、絶対歪なことになってしまふから。

感謝と恩返しので、みんなも自分も少しだけ良くなれる。

現実の厳しさはあるけれど、ちよつとだけ甘い樂園なんて——素晴らしいとは思わない？

「——とっ」

「ちよつとご主人様!? 主役が二人共いないなんてどうということよ

！」

「ごめんソフィア。世話を掛ける」

「——ッ……………はあ、調子狂うわホント。中身まで完璧になられたらますます立つ瀬が無くなるじゃない」

転移した先に居たのは、前は吸血っ子と内心で呼んでいたソフィア。

その彼女が普段よりやや着飾った格好で、唇を尖らせながら不満顔で睨んでくる。

——昔は他人のことをあだ名で呼んでいた私。

それは一種の無関心や、自他を線引きして無意識で見下していたがゆえの行いだった。

今でもその気質がないとは断言できないけれど、自覚したからには改善していかないと。

コケちゃんとの約束でもあるし、まずは名前からということ。

「それで？ 彼女は先に来たはずでは？」

「そつちは急ぎ準備中よ。いくら魔術で手早く出来るとしても、微調整やメイクには時間掛かるのだから一時間なんてあつという間よ。

……………ご主人様は、大丈夫そうね」

「そりゃあ、この一張羅をそのまま使うんだし、先に着替えて準備したもの」

白い軍服調の袖口を、もう片方の手で掴む。

大厄災でコケちゃんを助けにいった時の服装。

それがもはや私の正装としての格好となっており、私たちが出張らなければならぬ案件のときはいつもこの姿を着込むのだから。

——それに、想定はしていなかったけれど今回みたいなものにはピッタリな服でもあるし。

「それじゃあ、少し挨拶でもしてきなさい。ご主人様に話したい人が何人が居たわ」

「分かった。ソフィアもまた後で」

「ええ。実質身内だけなものだし、細かいことは気にせず楽にやればいいわ」

「それがいい」

普段より華美に仕立てられた純白の外套を翻し。

含み笑いを交わして、私とソフィアは別々の方向へと歩き始めたのだった。

此地は、システム中枢のあったエルロー大迷宮から星の正反対の地。

そこに出来たオーストラリア大陸のような巨大な島が、今の私たちの拠点である。

何故わざわざ昼夜逆転するほどの場所に居を構えたのかというと、この場所が星を管理するための要所だからである。

天廻翠星エレウシスの本体があるのは、エルロー大迷宮最下層。

その効果範囲を制御し効率良く循環させるためには、対となるもう一箇所が必要だった。

それで選ばれたのがこの島、エレウシス。

第二の中枢となるからと実に安直に、天廻翠星エレウシスと同じ発音を名付けた島こそが、私たちの家。

この島周辺は真っ先に環境を整えたので、今いる白亜の城みたいな

拠点の周囲には雄大な大自然が広がっていた。

野を犬系の魔物であるハウンドが駆け、森の樹木を勢い良く登るのは猫型魔獣の姿。

兎が軽やかに藪に潜り込めば、それを狙う狐が忍び寄る。

虫系魔物も、蟻とか蜂とか蠟螂なり蠍なり蟬だったり、繁殖力が強いぶん多種多様。

木々の隙間や暗がりでは、既に普通の虫となったタニシ虫とかワーム系の魔物とかが森の掃除屋を行っていた。

それとコケちゃんとは関係の無い普通の森に暮らしていたコケダマ達や、因果は不明だけど原種回帰した魔蛾などが伸び伸びと過ごしている。

私の眷属とも言える迷宮の悪夢らも希望者が一部移住して来ているので、暗影に白い残像を走らせたりすることも。

そして生態系の上位にはステータスなどを失っても尚、王者として君臨する龍らが居る。

ギユリエを介して募った、新大陸への移住希望者たちだ。

地下や洞窟では地龍が、海や水辺では水龍が、火山地帯では火龍が、空や地上にはそれ以外の龍が渡ってきており、その系譜から派生した新たな龍も生まれようとしていた。

ずんぐりむっくりとした二足歩行の龍、蛇のように身体の長い龍や、巨大な翼の龍など、進化の模索中で性質も形状も様々な龍達が、大地を踏み締め大海を泳ぎ、大空を翔ぶのであった。

この星で、もつとも生命力に溢れた場所であり、もつとも祝福された土地であり、もつとも神と近い聖域。

……などと、その神様本人が言うのも何だけどね。

まあ——そんな場所が今の家で、ソフィアの他にも同居人は何人か居るわけで。

未だきちんと完成しているのは居住区域だけの建築途中な我が家。

建物を管理している、コケちゃんの眷属が独立して一つの種族となった翅の生えた小人のような姿の魔精^{ミニファイ}たちと、軽い挨拶をしながら

進んでいると――

「お、白ちゃん」

「体調は平気？ アリエル」

少し歩いた先に、車椅子に乗ったアリエルを見つけた。

傍らには人形蜘蛛アエル・サエル・リエル・フイエル四姉妹の姿も。

「もちろんっ！ ……と言いたいけど、まあ少し辛いかな」

あの戦いが終わってからというもの、アリエルは急激に衰えだした。

老化しない体質だったけど、魂を酷使しすぎて限界を越えてしまったのだ。

刻一刻と筋力を失い、日が経つにつれ白髪も増えている。

終わりが近づいている光景を見るのは、やはり私も寂しく思う。

「でも今日だけは何としてでも出席するからね、約束なんだから！」

「ああ、約束――したからね」

だから、今日がある。

「うんうん。実に果報者な孫を持って、おばあちゃん嬉しいよ」

「……まだまだ、生きててほしいよ」

「無理言わない。アリエルの冒険は終わったの、これ以上は望まない。

それに、もし向こうで転生せずに報告を待っている家族がいたとしたら、教えにいかないかね」

「いると、いいな」

「うん。待ってるさ、きつと」

消えかけの蠟燭みたいな儂い笑みに、涙が出そうだったけれど堪えた。

今日は、その涙は似合わない。

「ほら、次いったいった」

「ちよッ」

「私はまだ大丈夫。あいつら千年近く待ってるんだから、数年なんて誤差だと笑ってるとも」

「アリエルっ、押さなくていい！ 車椅子乗ってるそっちの方が危ないだろう!?!」

アリエルから小突かれながら、私はその場から押し出された。じやれつくように、悪戯好きのフィエルや不思議ちゃんリエルらも纏わりつく。

それを苦笑して見守るアエルに、今も昔も変わらず慌てふためくサエル。

騒々しくも遠慮のいらぬ、私とアリエルたちとの関係。

なあアリエル——私はあなたに恩返し出来ましたか？

「——当然だろう。こちらこそありがとう白ちゃん」

「で、アリエルに追い出された先が我らか」

「お久しぶりですね、白織」

今度はギユリエとサリエルの二人だ。

「たしか、人道支援組織を立ち上げようとしているんだっけ？」

「そうだ。システム稼働前にも、サリエルはそうしていたからな」

「肯定。救いを求める人は絶えません。まして時代の転換期であれば特にです」

私たちが星そのものを見守るとするならば、この二人は人を見守るつもりらしい。

これから旧システムの影響が消えれば、その必要性は増々高まるだろう。

星を治さないといけないのに、人の世まで面倒みるなど、流石に私たちも手が回らない。

だから私たちとは担当分野が違うからこそ、こうして良好な共存関係を結んでいた。

「——んで、いつ告白すんのさ。ギユリエ」

「むッ!？」

そつとギユリエだけに聞こえるように耳打ち。

まだお酒も飲んでいないのに、ギユリエも場の雰囲気ちよつと浮かれている様子。

さつきからやたらサリエルに熱い視線を送っているのがバレバレだ。

「いや、そのだな……俺とサリエルとは、いまだ……すべきことが……」

「呼びましたか？ ギュリエティストデイエス？」

「いや！ なんでもないぞッ！」

「？ ……そうですか」

私も、女神があんなだなんて知らなかったわー。

あのタイプは、絶対自分からは自覚せんで。

だから、お前の方から行けと背中蹴っ飛ばしてやってるのに、こりやまだまだ掛かりそうだ。

ヘタレめ。

「ゴホン！ 向こうに連れてきた転生者が居る。会いに行つてやれ」
誤魔化すように咳払いをしながら、ギュリエは一方を指差した。

「ん？ 二人だけ？」

「シюнたちとユーゴーはそれぞれ自国で忙しくて来れないそうだよ。久しぶり白さん」

「お久しぶりです、白さん。真理ちゃんは元気ですか？」

そこに居たのはラースと、勇者パーティで聖女だったユーリの二人だけだった。

「うん、彼女は元気だよ。今日も精一杯土いじりつてね」

「ふふ。此方も大変だけど、そっちも大変みたいだね。星全てとなればそうなんでしょうけど」

コケちゃんの前世からの友達だというユーリ。

元聖女で、今はなんと私たちを祀る新宗教《翠星教》を立ち上げていた初代教皇様である。

……初めて聞いたときは意味が分からなくてコケちゃんと共に開いた口が塞がらなかったよ。

なんでも、神言教が崩壊するのに合わせて革命を起こして基盤を引き継ぎ、新たな神話をもとにした宗教を作り上げたらしい。

——大厄災は、我々不甲斐ない人類に下された最後の審判だった。女神は狂気に堕ちて、我々を裁く魔性を解き放ったのだ。

かつての人は自然への畏敬を忘れ星の悲鳴も顧みず、星より生命を奪い取った。

己の寿命のために、己に都合の良い世界のために、浅ましく欲した罪業を裁くために。

ゆえに勇者は立ち上がった。

兄より継いだ蒼銀の聖剣を携え、勇士たちと共に大いなる魔性に立ち向かったのだ。

そして勇者たちは想いを示し、狂気に曇った女神の目を醒まさせた。

さらに、女神の想い人である白き太陽が単身地の底まで降り、闇から女神を解放したのだ。

そして知つての通り、世界中の人々が新たな神話を目撃する。

星を覆った、翠の光。

それこそ、生まれ変わった女神が齎す慈愛の祝福に他ならない。

今や、我々は贖罪に囚われることは無い。

今や、この星は美しい姿を取り戻した。

今や、女神の愛は全てを包んでいる。

さあ新たな女神と自然へ感謝を捧げましょう——我々が生きる翠の星へ。

……というのが、翠星教の聖典第一節らしい。

サリエルとコケちゃんのが混同されているけれど、分かり易さ重視で混ざったらしい。

空恐ろしきは、友情と狂信者メンタルが融合しトリップした結果で
きあがったこの怪文書よ。

私たちの神名とか性質、話したことないのに何故か当たっている

の、本当に意味分かん。

コケちゃんも怒るべきか嘆くべきか言葉に出来ない、すつごい複雑な表情してたなあ……

けど、教義としては実に真つ当だから止めろとも言い難いのが、なんだかなあ。

「今日のこと、きちんと聖典に書き記さないと！ なにせ——」

「やめよ」

「あいたつ!?!」

狂信者もまた、物理的に止めねば。

変な方向に全力でブツ飛んでいく手合に、遠慮はいらん。

「なにを！」

「まあまあユーリさん。そういうのは当人に迷惑掛からないようにね」

「そっちはどう？ ラース」

「おかげさまで、シユンたちと居ると退屈しないよ」

ラーズは今、第四王子という身分を活かして各国を渡り歩き、国家間の関係改善に勤しんでいるシユレインの護衛をしている。

元勇者くんもまた、自分の立場だから出来る平和を一步步つ模索している途中なんだとか。

「シユンは、やろうとしている事が事だから敵も多い。けど、僕が襲撃者を止めるために振るつたなまくらより、暴走したカティアとスーレシアを制止するために落とした拳骨のほうが多いとか、いったい僕はどうすればいいんだろうね」

「私に聞かれても困るんだが……」

そう口では愚痴を言うが、ラーズ本人はそこまで困っている様子ではない。

むしろ昔日を懐かしむような、朗らかな苦笑を浮かべるのだった。

彼の女性関係については、私はノーコメントで。

いつ草食獣シユレインが肉食獣おとめどもにねちよられるかなーと期待なんかしてませんよ、ほんとほんと。

「先生は、シユンたちと同行しながら各地のハーフェルフ達に呼びか

けて、残されたエルフの里の復興を目指しているようだけど、まだまだ人手も賛同者も集まらないみたい」

「……私たちの手助けは必要ないって言っていたけれど、やっぱり心配だな」

かつて里からは排斥され人族からは長寿ゆえ疎まれて、ハーフエルフはどちらの社会からも浮いている存在。

ゆえに一部では迫害されていることもあるらしく、先生ことフィリメスはそうした人達の保護をしたり結束を呼び掛けているみたいだ。

先生のことはこっそり見守っているが……本当にどうしようもない時は手を貸すつもり。

前世の命の恩はこんなのでは返しきれないほどだが、余計なお世話との線引きも大事だから。

「それと……あつちで怪しげな黒ずくめとメイド服の人を見かけたんだけど」

「ああー、分かったあいつらだな。なら対応はこっちに任せて」

「それじゃあ白さん、また後で。ほらユーリさん、行きますよ」

「また後で」

「なんで居るのさ」

「おや？ あなたは実質私の子供のようなものですし、子供の晴れ舞台には親は必ず参列するものでしょう」

そうかもしれないけど、へんてこな仮面を被った私の色違いには言われたくない！

「ご安心を、この駄女神が何かやらかそうとしましたら、わたくしが責任を持って止めますので」

「今回ばかりは、真面目に祝福しに来てますのに……」

「信用というものを、ご理解していますか？」

黒い艶のあるドレスに身を包んでいるのは最狂最悪の邪神ことD本人だった。

そしてやたら棘のある言葉でDを掣肘せいちゆうしている、未だ名前を知らず冥土さんと呼んでいる楚々とした大和撫子のような女性がそこには居た。

「それにしても、この星なかなか良いですね。」

私の陣営に所属している神たちの、保養地にしてもいいですか？」
知らん。

せめてコケちゃんにも話を通せ。

一応神々の常識を学ぶために、教師役が来たときに再び冥土さんと顔合わせをした。

それから多少お世話になっている冥土さんならともかく、あんたが来ると大抵傍迷惑な大事件になるから簡単には領きたくないだよ。

「よよよ。あのとときの友達宣言は紙風船よりも軽かったのですね」

「来るなどは言っていない。面倒事起こすなって言いたいの！」

「私に呼吸するなと!」

「は っ た お す ぞ」

一応顔は笑顔のままだが、青筋が立っている気がする。

ほんとうもう、この捻くれ者は迷惑掛けまくらないと気が済まないのだろうか。

「うぐッ!」

「……すみません、白織」

「いえ、あなたもお疲れ様です」

「——分かってくれますか」

「ちよ、首が締まっていますッ」

黙らっしやい。

このDに対処できる存在が冥土さんくらいしかいなくて、毎回結構苦労してきたとか。

ちよっとした親近感——それと、この人も戦闘以外ポンコツらしく、そこにも共感が。

「では白織、また後で」

「ええ冥土さんもまた。——それとD、あんたはいつか必ずぶっ殺してやる」

「ふふふ、やれるものなら。楽しみにしてますよ」
冥土さんには会釈をし、Dには親指を下に突き立てながら。
私は冥界と地獄の神たちから去るのだった。

そして最後には――

「あつ」

「あら？」

ある部屋の扉から、一人の女性が出てきた。

肩口に切りそろえられた黒髪に黒目。

だけど、顔立ちと体格はとてもコケちゃんと良く似ている人。

そう――彼女は、コケちゃんの前世でのお母さん、苔森^{てる}照さん。

何故こちらの世界に居るのかについては、詳しく語ると長くなるけれど――

半年ほど前に地球へ行ったとき、照さんが自殺しそうになっていたから思わず助けて連れてきてしまったから。

今の心から幸せそうな様子からは考えつかないが、助けた当初はそれはもう酷い状態だった。

薬の過剰^{オーバー}摂取に栄養失調や不眠など、内も外もボロボロで見てもらえない有り様。

周章^{しゅうしょう}狼狽^{ろうたい}あつたものの、そうしてそのまま此方に連れてきて治療を施した。

違う星で照さんは目覚め、そして娘とどのような再会をしたのか――
――言うだけ野暮だろう。

娘と居られる生活こそが一番で、ずっと此処に居たいとコケちゃんに縋り付いていたのだから。

向こうの星を管理しているDからは色々文句を言われたが、知らん。

私は私のしたいようにするさ、今回の問題は問題あつたとしても間違いだとは思わない。

その後Dから——『仕方ないですね。ご褒美代わりと貸し一つで、手を打ちます』

と言われ、貸し一つつてのが怖いが母娘の感動の再会を行えたのなら、まあ安いものさ。

「ちようど良かった。さあ、どうぞ。準備は出来ていますので」
物腰柔らかかに微笑む照さん。

その様子はかつての不健康さは微塵もなく、血色の良い細い手で私を部屋へ誘った。

花の香りが鼻腔を擦った。
扉の隙間からは、細やかな意匠の調度品が目映る。

純白の部屋には色とりどりの花が生けられ、この部屋をまるで花畑のように見せている。

少しだけ緊張しながら一歩ずつ進み——その中には。

「——えへへ、どうかな白ちゃん。似合って、いるかな……？」

純白のふわりとした衣装に身を包み。

たくさんのフリルがあしらわれた清楚で可憐な花嫁が、そこには居た。

「良く似合っているよ。とても……とっても綺麗だよ」

気恥ずかしさを感じながら感想を口にする、嬉し恥ずかしといった顔で笑みを返した。

互いに少し赤くなりながら、そつと傍に寄り合う。

手が触れる距離に、紡ぎ出した愛と未来がある。

「やっぱりちよつと恥ずかしいかも。なんだか子供が憧れてウエディングドレス着ているような、微笑ましい感じとかじゃないかな？」

「そんなことないよ。もしそんな茶々入れる奴がいたら、直々に海のド真ん中に落としてやるさ」

「ふふふ——ありがとう」

何でもかんでも背負い込みがちで、いつも無理しすぎな。

だけど、とつても優しく、健気でひたむきな——私の大切な人。貴女の花が咲いたような無垢な笑顔が、なにより愛おしいから。

「こちらこそ、ありがとう。」

私と出会ってくれて、私と旅をしてくれて、私と一緒に未来を目指してくれて」

「ううん、私も白ちゃんと出会えて良かった」

「だからこれからも、ずっと傍にいてくれますか？」

「うん勿論、喜んで」

私も領きながら、花冠とベールから覗く髪を優しく梳く。

ふわふわとした柔らかい髪が指先へと絡まり、慰撫するかのようになり包み込んでいた。

「貴女を愛しています」

膝を付き、懐から取り出したのは小さな化粧箱。

それを上下に開けば、翠の石が嵌った白に輝く指輪が光を反射して煌めいた。

「はい……っ、私も貴方を愛しています……っ」

涙腺が緩み瞳を潤ませ、より愛おしくて可愛らしい笑顔が開く。

その最高の幸福を感じるだけで、心同士が確かな糸で繋がっているのだと間違いなく思える。

胸に湧き上がる、この暖かい感謝を抱きしめながら。

生きていこう、二人で。

生きていこう、この星で。

生きていこう、みんなと共に。

これからも続く、星の未来に包まれながら。

「さあ、一緒に行こう。どこまでもっ」

翠白の報恩譚は、悠久の果てまで紡がれ続けるのだから。

——うん？

この星の未来はどうなっているのか、だって？

それはさつきまでの説明で分かるはず——いや、そうだな。
それはきつと——
コケダマですが、なにか？　なんてね。

紡いでゆく、翠白の報恩譚／

Eleusis end.

あとがき

あとがきです——読了お疲れ様でした。
どうだったでしょうか？

これにて「コケダメですが、なにか？」 完結です。
原作が完結するより前に見てみたい結末を思いつき、約一年半も描き続けました。

それに付き合ってくれた読者の皆さん、此処まで読んでくださり本当にありがとうございます。

この結末は、書き始めた当初から考えていた展開でした。
様々な人物たちに全ての支配者スキルを取得させて、揃わせるのも。

コケちゃんが敵として立ちはだかり、全員で立ち向かうのも。
それらの象徴が、自然災害であり公害であったり、星の悲鳴を代弁するものであったり。

某シルヴァリオのように、詠唱させたり覚醒させるのも。（これが一番やりたかった）

公開ラブレターと、プロポーズ返し、やっぱり直球告白詠唱は、最高だなんて。

二人の神名と転生時の初期スキルが詠唱の中に含まれているのも、上手く噛み合うよう捩じ込むのになかなか頭を使いました。

二人の答えが、恩返しと感謝という真理であることも。
ラスボスがDであり、和解エンドも。

考えていたことを全てやりきれた感覚は、最高の達成感です。
しかし、それでも問題は幾らか見つかったりもしましたが。

やはり名前の呼び方など、シリアスな雰囲気中心ではすぐわなない感じがしたり。

人外転生モノの魅力を引き出しきれなかったり。（神化以降は人型メインでしたし）

けっこう原作を改変し過ぎたのではないのかなと、思わなかった

り。

原作がどちらかと言えばコミカルでギャグ混じりなのに対し——
こちらでは始めから本格的にシリアスやっていますし、ラストは
完全に厨二でしたし、作風が全然違うので。

オリジナルでやれ？ 今なら私もそう思います。

終盤なんて、名前とキャラだけ借りた独自展開でしたし。

けれど世界観が書きたいものと合致していたので『蜘蛛ですが、な
にか』の原作を使わせていただきました。

素晴らしい世界を考えてくれた原作者の馬場翁先生に、感謝を贈り
ます。

そして、ここまで読んでくださった読者の方々にも、改めて深い感
謝を。

本作の主人公でありラスボス系ヒロインである、コケちゃん。

人型時のキャラ外見設定は、原作キャラと誰とも被らず個性的な見
た目を演出するためにはと、この容姿となりました。

一番近いのが、フィリメス（先生）になります——

金髪だけどストリートヘアのショート。金から翠に変わるウェー
ブの超ロングといった差異。

白よりの活動的なレンジャー服に対し、黒よりのゆったりとした魔
女服といった、対比の印象を受ける服装に設定されています。

これは白との関係性にも当てはまるもので、白主体でフード付きの
聖女っぽい服に対し、黒主体の魔女服と三角帽子と、此方も色合いや
印象が真逆になるように服装を選びました。

性格面については、元は優しい気質だけどそれゆえに狂気に堕ちた
少女という感じです。

深い愛情を抱くからこそ、それが壊れたり反転したりすると発狂す
るという。

一歩間違えればヤンデレにも世界破滅系ラスボスにもなる、愛重た
い族です。

母子家庭と自身が生まれた経緯から彼女には男性嫌いになる要素

を加えていたので、ポティマスや改心前ユーゴーなどに殺意湧いていたのはそのため。——そして百合百合するための布石。

コケちゃんに絡む元ネタは、お察しの通りギリシア神話のコレー（ペルセポネ）です。

一部原典から細かな差異や変更点はあるものの……

冥王（D）によって冥界（異世界）に連れて行かれ、其処から神へと至り、そして誘拐劇を見ていた太陽神（白織）の手によって助けられて、なんやかんやあつて地上にコレー（翠星）として舞い戻るといふ感じですよ。

ペルセポネの神話の中には——ハデス（D）、ヘカテー（冥土さん）、デメテル（苔森照）、ヘルメス（アリエル）、ヘリオス（白織）、等々。原作を読んでいて——あれ？ これ色々ギリシア神話と親和性があるなと思いつき。

より神話要素を引き込んできたのが、本作となりました。

蜘蛛子には、変身物語の「ミネルヴァとアラクネー」それに太陽神としてヘリオス要素を詠唱に混ぜ込んで。

女神ミネルヴァ（アテナ）に傲慢に挑発して腕を競い合うことになり、その末怒りを受けて蜘蛛に変えられてしまうというお話から。

実際に蜘蛛と変えられそれでも尚と神（D）に抗うことを選択し、最終的に太陽となったという訳です。

この構想自体は迷宮編の中間あたりには決めていて、そしてエンディング自体は執筆する前から決めていた内容でした。

主人公が最後の敵となって、原作キャラ全員の見せ場を作る。

そして最後は、原作主人公（白織）によって本作主人公（コケちゃん）は救われて、誰もが納得するトゥルーエンドへ。

そして最後は——再誕した星で幸せな祝福を、です。

この作品には、幾つかのテーマを織り混ぜて書き上げました。まずは星。

人の罪業によって滅びを迎え、その清算を今も背負わされているこ

とへの問い。

そして人は、何が出来るのか、何を思えば良いのか。

その問いかけ。

そして恩返し。

このような運命を歩むことになったけれど、それで出会えた繋がりと世界を知れたこと。

絶望を押し付けられたことと、幸福を得られたこと、それを天秤にかけてどう答えるのか。

その問いかけ。

最後に。

主人公たちを真つ向から否定するようですが裏テーマとして、神の否定もです。

邪神の企みに抗って、人々を苦しめる神やシステムなど自分達には要らないと高らかに宣言するのが、人であるシュレインが到達した答えでした。

それらまだまだ描写不足な感じか、あるいは混ぜすぎて要点がぼやけた感じもありますが、答えは一応示せたような気がするので充分満足。

初めての長編完結、とても楽しかったです。

そして深い勉強となりました。

またいつか。

夢みた世界が交わる先で会いましょう。

*もしかしたら、アフターを執筆するかもしれません。

幾つか書いてみたい話もあるので、纏まったら載せておきたいです。

……後日談や、日常とか、桃色空間とか、ねっちよりぬぷぬぷした末路^{デキた}とか。

地球でのお話とか、性格反転などネタ次空などなど。

こんなのが見たい誰々の外伝が読みたいなど、希望が上手く合致す

れば書くかもしれないし。

それらは活動報告にでも投書していただければ。

改めてもう一度——此処まで読んでくださった方々に感謝を。

まだ行っていない方は感想・評価を残していただけると嬉しいです。

そして本当に良くて最高の作品だと思ってくれたのなら、推薦もぜひに。